

逃亡海兵のルフィとウ
タ 短編集

Nines star

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

某掲示板にて生まれた概念である、ルフィが海賊にならずウタと共に海兵になっていたら……というIFを元にしたSS集です。ここにはONE PIECE FILM REDのネタバレがあります。ご注意ください。

エレジアじゃなくフーシャ村に置いていかれたウタが、そのことについて捨てられたと思い込みシャンクスたちに恨みを募らせて育つて海兵となる。

何だかんだでルフィもガープに海軍に入れられて二人で周囲に可愛がられながら海軍生活を送るも、ある日運悪くチャルロスに遭遇。ウタの外見を気に入る妻になると

言って迫ってきたのをルフィがぶん殴ってしまい、そのまま二人で海に逃げ出してしまった世界。

逃亡前と逃亡後について、更なる概念が生まれまくる中で私の書いたものをここに載せます。

基本的に各話は独立しており、なんとなく繋がってるような繋がっていないようなというフワツとした感覚でお楽しみください。

一番新しく投稿したものについては、タイトルにNEWを入れています。

支援絵をいただきました！ ジェイス様ありがとうございます！

<https://www.pixiv.net/artworks/1027634>

33

とあるお話のワンシーンです、格好良い……!!

目次

逃亡前、海兵時代

あなたの“ウタ”は | 1

ある海兵たちの讃歌① | 11

ある海兵たちの讃歌② | 26

“背中” | 40

麦わら帽子のヒーロー | 60

新衣装 | 108

逃亡時代

あなたのパンケーキ | 119

英雄たちの凱旋、そして旅立ち

139

罪と罰 | 167

幸せだった? | 197

“ありがとう” | 209

義兄ルート

家族 | 215

家族② | 229

赤髪ルート

約束 前編 | 251

約束 後編 | 268

新時代ルート

人の生きるこの世界に | 287

“新時代” | 301

新たな世代の物語

旅立ち | 327

逃亡海兵ストロングワールド

- 逃亡海兵ストロングワールド① 355
逃亡海兵ストロングワールド② 364
逃亡海兵ストロングワールド③ 389
逃亡海兵ストロングワールド④ 410
逃亡海兵ストロングワールド⑤ 430
逃亡海兵ストロングワールド⑥ 445

逃亡海兵ストロングワールド⑦

- 逃亡海兵ストロングワールド⑦ 466
逃亡海兵ストロングワールド⑧ 480
逃亡海兵ストロングワールド⑨ 502
逃亡海兵ストロングワールド⑩ 523
逃亡海兵ストロングワールド⑪—1 549
逃亡海兵ストロングワールド⑪—2 574
逃亡海兵ストロングワールド⑫—1

751 逃亡海兵ストロングワールド⑮—1
730 逃亡海兵ストロングワールド⑭—2
706 逃亡海兵ストロングワールド⑭—1
673 逃亡海兵ストロングワールド⑬—2
658 逃亡海兵ストロングワールド⑬—1
619 逃亡海兵ストロングワールド⑫—2
596 逃亡海兵ストロングワールド⑫—2

893 逃亡海兵ストロングワールド☒
876 逃亡海兵ストロングワールド⑳
855 逃亡海兵ストロングワールド⑱
823 逃亡海兵ストロングワールド⑰
799 逃亡海兵ストロングワールド⑯
767 逃亡海兵ストロングワールド⑮—2
逃亡海兵ストロングワールド⑮—2

逃亡海兵ストロングワールド☒

逃亡海兵ストロングワールド エピ

ローグ①

| 1032

逃亡海兵ストロングワールド エピ

ローグ②

| 1058

逃亡海兵ストロングワールド エピ

ローグ③

| 1102

逃亡海兵ストロングワールド 後書き

| 1130

天竜人事件

きつとそれは、悪意ですらなく 前編

| きつとそれは、悪意ですらなく 後編

| 誰も望まなかった世界

"逃亡海兵"

| 1231

| 世界を敵に回す、ということ

| 堕ちていく

| 1291

| なればこそ、人は彼を"英雄"と呼ん

| だのだ

| 1312

| 賽は投げられた

"世界の灯火"①

| 1383

"世界の灯火"②

| 1414

"世界の灯火"③

| 1436

1949	逃亡海兵 W a t e r S e v e n ⑱	1922	逃亡海兵 W a t e r S e v e n ⑰	1895	逃亡海兵 W a t e r S e v e n ⑯	1875	逃亡海兵 W a t e r S e v e n ⑮	1848	逃亡海兵 W a t e r S e v e n ⑭	1824	逃亡海兵 W a t e r S e v e n ⑬		逃亡海兵 W a t e r S e v e n ⑫
------	-------------------------------------	------	-------------------------------------	------	-------------------------------------	------	-------------------------------------	------	-------------------------------------	------	-------------------------------------	--	-------------------------------------

2122	逃亡海兵 W a t e r S e v e n ☒	2092	逃亡海兵 W a t e r S e v e n ☒	2075	逃亡海兵 W a t e r S e v e n ☒	2059	逃亡海兵 W a t e r S e v e n ☒	2027	逃亡海兵 W a t e r S e v e n ⑳	2000	逃亡海兵 W a t e r S e v e n ⑲	1972	
------	-------------------------------------	------	-------------------------------------	------	-------------------------------------	------	-------------------------------------	------	-------------------------------------	------	-------------------------------------	------	--

逃亡海兵	(NEW)	逃亡海兵	2224	逃亡海兵	2208	逃亡海兵	2180	逃亡海兵	2156	逃亡海兵	2141	逃亡海兵
Water		Water		Water		Water		Water		Water		Water
Seven		Seven		Seven		Seven		Seven		Seven		Seven
☒		☒		☒		☒		☒		☒		☒
2244												

(NEW)	逃亡海兵	(NEW)
	Water	
	Seven	
2281	☒	2260

逃亡前、海兵時代

あなたの「ウタ」は

「いやー、今日も最高だった!」

「准将の歌声はもう、何というか言葉で表現することが失礼な気がしてきた」

「奇遇だな、おれもだ」

マリンフォードの一角を大勢の海兵たちが満面の笑顔で歩いている。いや、海兵だけではない。そこには老若男女問わずたくさんの人がいた。

共通しているのは、皆満足そうに笑っているということ。

それもそのはず。つい先程まで「海軍の歌姫」ことウタ准将のライブが行われていたのだ。不定期に開催されるそれは一般の市民たちも含めて大勢が詰めかける。

海兵たちに至ってはその日に休みを取ろうとして奪い合いの戦鬪が頻発したため、最終的に部隊ごとにくじ引きであったりジャンケンであったりと平和的な手段で出席者を決める用にと海軍本部元帥から直々に命令が出たくらいだ。

ちなみにその元帥は「海軍の英雄」と共に仕事を抜け出してほぼ100%ライブに

来ている。本人たちはこっそり来ているつもりだろうが、参加者全員にバレバレだった。

「しかも今日はサブライズで新曲発表もあったからな！ おれ、TD三つも買っちゃまったよ」

「なんで三つなんだ？」

「保存用、布教用、観賞用」

「布教用一つじゃ足りないだろ」

「いやだって金が……それに、おれ以外にも布教してるに違いないし……」

「まあそれはそうだな。ちなみに給料日まで半月あるが」

「……………明日から3食、いや2食M定食です」

M定食とは『もやし定食』。海軍食堂でぶっちぎりに安く、『何故か』ウタのライブが行われた直後に大人気になる定食だ。

周りの海兵たちが肩に手を置く。しかし、置かれた海兵はだが、と言葉を紡いだ。

「おれは今度の准将の慰問ライブに行く命令を受けた！ それだけで生きていける！」

「は!?! ふざけんなテメエ！ どうやった!?!」

こちらも不定期に行われる、巡回と併せての慰問ライブ。慰問と名がついているが、実質は世界に名を轟かせる彼女のツアーだ。世界政府、そして海軍にとって彼女の存在

はあまりにも大きく、彼女と常に共にいるとある海兵と併せて二人は日を追うごとの存在感を増していた。

その彼女のライブは巡回も含んでいる上、名の売れた彼女を狙う賊もいる。彼女自身も実力者であるが、万一のことを考えてそれなりの人員を複数名用意するのが通例だった。

その海兵は自慢気に胸を張ると、ふっ、と笑った。

「大佐に土下座したら良いって言ってくれた」

その言葉に、ああ、と全員が納得した。あの人なら言うだろうな、と。

「土下座しながら准将のファンであることを訴えまくったらめっちゃ笑顔で『お前良い奴だな！ じゃあ一緒にいこう！』って」

「いやそれお前もおかしいけど大佐も大概おかしいな」

「逆に言えばそこまでプライドを捨てれば行けるのか」

うむむ、とその場の者たちがプライドとライブの同行についてを天秤にかけ始める。

そんな中、ただ、と一人が言葉を紡いだ。

「ライブ中めっちゃ忙しいから正直曲聴いてる暇がな……」

「あー、やっぱりそうなんだ」

「大佐も流石にライブ中は周囲の警戒であんまり聴けないって言ってたし。まあ、だか

ら帰りの船でミニライブするようになったみたいだけど」

「あれ絶対大佐のためだよな」

「それ以外あんのか？」

「そもそも、と一人が言う。」

「今日の新曲のラブソング。……あれ、あの場で大佐以外全員が誰のことか一瞬で理解しただろ」

「ええと、嵐のようで、そよ風のようなキミ」

「いつもいつも、守ってくれる」

「眩しい笑顔で、いつも隣で……うん、まあ、そうだよな」

「大佐本人は全然気付かずにめっちゃ楽しんでるけどな……」

「逆に凄いわあの人。何で気付かないの？」

「つつても大佐の方からも准将に対してそういう感じはあるし、本当によくわからんよな」

「まあ、幼馴染って話だしな。……って、噂をすれば」

「わいわいと騒ぐ先。そこでは、大量の器材を運ぶ男の海兵と、先程のライブの主役が並んで歩いていていた。」



「今日も最高だったぞ！」

「うん、ありがとう」

笑顔と共に言ってくれる。それだけで、ウタの疲れも吹き飛びそうだ。

隣を歩く青年、モンキー・D・ルフィはいつも通りの笑顔で言葉を紡ぐ。

「やっぱり、おれは「ウタ」が好きだなー」

「へえっ!？」

変な声思わず漏れた。この幼馴染は、いきなり何を。

「聞いてて元気になる。皆も笑顔だし、良いことばっかりだ」

ああ、「ウタ」ではなく「歌」のことかと理解する。いや、わかっていたことだが。

だから。

「ふーん、ルフィは私の歌が好きなんだ？」

「当たり前だろ」

からかうように言った言葉が、即座に返された。思わず面食らってしまう。

「昔から、ずっと好きだからな」

当たり前という言葉の通り。

当然と、彼は言う。

いけないと、ウタは思った。思わず頬が緩んでしまう。

褒められたり、応援されたり、もっと聴きたいと言われたり。その言葉はいつも嬉しい。この歌声を届ける原動力になる。

けれど、やっぱり。

この幼馴染に好きだと言われることが、一番嬉しい。

「ふ、ふーん、ふーん、そっか、そっかあ」

頬が緩むのが抑えられない。だが、そんな自分に対して彼は。

「どうした変な顔して?」

「誰が変な顔って!?!」

思わずチョップしてしまった。覇気もおまけでプレゼントである。

「痛い!?!」

痛がる彼。全く、と呆れたところで表情が戻った。

そんな彼のコートから、何かが落ちた。見ると、今日の新曲が納められたTDだ。

「あれ、ルフィ。これ買ったの？」

「おう。これでいつでも聞けるしな」

器材を運んでいるせいで受け取れないルフィのポケットに、TDを入れてあげる。そうしながら、別に、とウタは言葉を紡いだ。

「ルフィが聴きたいなら、いつでも歌ってあげるよ？」

その言葉に、ルフィはんー、と少し悩んだ表情を浮かべてから。

「それはいいよ」

そう、言った。

冷や水を浴びせられたように、背筋が凍る。どうしてと思わず言葉を発する前に、彼は言葉を続けた。

「おれは、皆と一緒に聴きてえんだ」

それは、幼き頃に彼が言ってくれていたこと。

無邪気な笑顔で、もつと多くの人に聴いてもらいたいと、彼は言ってくれていた。

「だって、もつたいないじゃねえか」

折角の、〃ウタ〃なのに。

彼は、笑って帰れて。

「うん。……そうだね」

その笑顔には、こちらも笑顔を返すしかない。

ズルい幼馴染だ、本当に。

今日の歌詞だって、知恵熱が出るくらいに悩んで、必死になって考えたのに。きつと、この人は気付いていないだろう。

(いや、ズルいのは私だ)

彼に告げる勇気がなくて。

こんな、回りくどいことをして。

気付かないとわかってるから。

〃今〃が崩れるのが、怖いから。

(でも、ルフィ。いつか、いつかきつと)

一人ぼっちになってしまった私の側に、ずっといてくれた彼と。

これからの未来も、ずっと一緒にいたいから。

いつか。

いつかきつと。

私は、あなたへ。

「さ、行こうルフィ。今日は、何で勝負しよつか？」

「どんな勝負でもおれの勝ちだけだな！」

「む、私に決まってるじゃん！」

今は、こんな日々がただただ愛しい。

ただ、もつと。

そんな風に、思ってしまった。

この想いを届けるために。

私は、「ウタ」を。



海軍内では見慣れた光景だ。いつも通りのことである。いやもうほんとに、慣れてしまった。

ただ、まあ、なんというか。

「……食堂行こうぜ。コーヒー飲みたい。ブラックで」

「……奇遇だな。おれもだ」

「……おれも……あ、金が……」

「……今日は奢ってやるよ」

「……ありがとう」

普段、あまりにも苦すぎて不評な食堂のブラックコーヒーが。

この日、大幅な売り上げ増を記録した。

ある海兵たちの讃歌①

空島の冒険も終え、ルフィたちは海軍本部へと帰還していた。

説教はされたが、空島という非加盟国ではあるが独特の立ち位置を持つ国と良好な関係を築けたことは大きいとして、いつもよりは短かった。

もつとも、軍艦を事実上一隻廃船に追い込んだことについては流石に何かしらの罰を与えなければとセンゴク元帥が言い、謹慎という名の休暇をルフィとウタは部下とと共に与えられた。

実を言うと、ウタの報告した黄金の鐘にあった「歴史の本文」について海軍、ひいては世界政府は対応を考えなければならなかったため、当事者たちをとりあえず留め置いておくことにしたというのが真相だ。

ちなみに五老星は空島の事件の報告を受け、一斉に頭を抱えたという。一人は、

『あの二人は大人しくしておれんのか』

そんな風に、苦笑混じりに呟いていたという。

とはいえ、危険視する「歴史の本文」の位置を確認できたこと。その内容についても

現地民たちは理解できないこと、更に言えば外に出す意思もないという事実を確認できた意味は大きい。更には友好関係も築いている。大戦果と言つて良かった。

そして、空島へ到達し、新たな逸話を作つたルフィとウタの話で海軍本部は持ちきりであつた。連日、非番であるはずの二人の部下たちが触れ回つてることが大きな理由だ。二人の伝説に、新たな一ページが刻まれた瞬間だつた。

とはいえ。

当の本人たちは、そんなことを少しも気にしていない。ウタは時間ができたからと新曲の作成に入つており、ルフィは少々手持ち無沙汰になつてしまつた。

危うくガープから特訓をつけられそうになつたところから逃げてきた彼は、街に出てあてもなく歩いてきた。しかし、破天荒ではあるが、祖父のような伝説を次々と打ち立てていく彼はその人柄もあつて町の人気者だ。すぐに人に囲まれる。

「ルフィ大佐！」

「大佐、握手して〜！」

「すげー、めっちゃ伸びるー！」

特に彼は子供たちに大人気だ。ゴムの体で子供たちと遊んでおり、大人たちも笑顔でそれを見守つていた。

「よーし、行くぞー！」

子供たちを少し離し、道端に仰向けになる。

「『ゴムゴムの風船』!!」

大きく息を吸い込み、文字通り風船のように膨らむルフィ。その体をトランポリンのように扱い、子供たちが笑顔で跳ね回る。

海軍ともなると、屈強な人間が大半だ。彼ら自身は決して市民に対して害を及ぼすことはないが、その見た目と雰囲気はどうしても近寄り難くさせてしまう。

そんな中、子供たちにとって『ヒーロー』そのものであるルフィとウタの人気は凄まじい。彼とウタのコンビは、文字通りの憧れだ。

そして、そんな彼だからこそこんなことも起こる。

「大佐、ありがとうございます」

「ありがとう」

「ししし、いいよ！ おれも楽しかった！」

何度も頭を下げてくる父親と、笑顔で礼を言ってくる子供に笑って応じるルフィ。彼らだけではなく、周囲の者たちは皆ルフィを囲むようにして笑顔でいた。

いつだってそうだ。彼の周りには、笑顔が溢れている。

「そうだ、大佐。あの、福引をしませんか？」

「福引？」

「今、イベントでやっているんです」

そんな中、一人の市民がそう提案してきた。彼が示す方を見ると、巨大な抽選器が置かれたテーブルがあり、その奥にはたくさんの商品が置いてある。

「へー。面白そうだな」

「豪華賞品もありますよ！」

「お、何があるんだ？」

一覧を見る。『人をダメにするクッション』、『歌姫TD全集』、『海軍コートレプリカ』、『麦わら帽子レプリカ』、『ヘッドフォンレプリカ』……色々な物がある。後半二つはモデルが明らかだが、ルフィは特に気にしなかった。

ただ、彼の目に一つの項目が留まる。

「お、肉20kgなんてあんなのか！」

「それは三等ですね。青い球が出たら差し上げますよ」

「よーし！ 肉来いっ！」

自身にとって何よりも好きな肉の項目を見つけ、俄然やる気を出すルフィ。

子供たちも、頑張りー、と応援の声を上げる。

そして、出てきたのは。

「……………青じゃ、ねえな」

「これは」

出てきたのは、青ではなく金色の玉だった。ハズレか、とルフィが笑った瞬間。

「い、一等！ 大当たりです！」

「え？」

手に持ったベルを鳴らし、男性が叫ぶ。周囲からも拍手が飛んだ。

「二等はこちらのペアリングです！ いや流石は大佐！ 凄い強運ですね！」

「ペアリング？」

手渡されたのは、二つの指輪であった。揃ったデザインのそれは、内側に『c r i m i n』と彫り込まれている。

「人気ブランド、『クリミナル』の最新作なんです。特殊な金属を使っているとかで、指に併せてサイズが変わるんですよ」

「へえ……………おお、すげえ！」

一つを手に取り、指に嵌めると確かにサイズが変わった。親指だろうが小指だろうがピッタリである。

肉は手に入れられなかったが、面白いものは手に入った。ルフィはウタに見せてやろうと指輪を手を持ちながら帰路に着く。

その途中、彼の部下に出会った。どうやら謹慎だというのに訓練に出ていたらしい。汚れた訓練着で、ルフィを見つけると敬礼をしてきた。

「お疲れ様です大佐！」

「おう！」

ルフィも敬礼を返す。形式貼ったものが苦手な彼であるが、この敬礼だけは教育係であつた人物に徹底的に叩き込まれたのである。

「ん、大佐。手に持つてるのって」

「これか？ 凄えだろ、指に合わせて大きさが変わるんだ」

片方の指輪を自分の手につけて見せるルフィ。それを見て、部下の一人である女海兵がどこか上気した顔で言葉を紡いだ。

「も、もしかして准将へのプレゼントですか!？」

プレゼント、と言われ、ルフィは思い出す。そういえば、もうすぐウタの誕生日だ。

幼少期はあまり誕生日を祝う習慣のなかつたルフィとウタであるが、この海軍では習慣として部下の誰かが誕生日である日は祝うようにしている。元々はルフィの宴の口実であつたが、今ではすっかり定着していた。

「ああ、そうだな。うん。誕生日だもんな」

そうだ、ウタの誕生日。プレゼントにはちようどいいかもしれない。

見せるのはその時にしようと思い、ルフィは箱をポケットに仕舞った。

それを見て、女性海兵が他の海兵へと振り返り何か領きを交わし合っていた。そして。

「が、頑張ってください！ 応援してます！」

「？ おう！ ありがとう！」

よくわからなかったが、とりあえず頷いておいた。

この、ある種どうしようもないすれ違いとか勘違いとか行き違いが、後の大騒動の、始まりだった。



おかしい。

何かがおかしい。

謹慎という名の休暇である今、ウタは本部に詰めている。折角なので新曲の構想を

練っていたのだが、どうにも視線を感じるのだ。

元々目立つ立場である。視線を感じることもなど四六時中のことであつたが、今回はどうにもいつもと違う。

まず、女海兵だ。こちらを見て何か懂れるような、浮き足立った表情をしている。更
に、ルファイに対し。

「応援してます！」

何をだ。

「おう！　ありがとなー！」

そして何もわかつていないのにそう返す幼馴染。

一体、何が起こつているのか。うーん、と頭を捻ることしかできない。

空島のことだろうか？　いや、こう言つては何だが、ああいうのは今回が初めてではない。今更と言えば今更なのだ。

違和感を抱えたまま、いつも通り二人で並んで歩いていく。その向こうから、見覚えのある姿が歩いてきた。

「げえ、じいちゃん!？」

「げえとは何じゃ！」

ルファイの祖父であり、*“海軍の英雄”* ガープ。

この二人のいつも通りのやりとりだ。とはいえ、ウタもこの老人については割と酷い目に遭わされている。少なくとも年齢一桁の子供を猛獣しかいないジャングルに放り込むのはどうかしている。

二人していつでも逃げ出せるように重心を後ろに下げて相對する。最早これは条件反射であつた。

だが、この日のガープはいつもと違つた。いつもなら豪快に笑つて特訓じゃとでも言う彼が、どこか思い詰めたような表情をしている。

どうしたのだろう。そんなことを考えていると、ガープが言葉を紡いだ。

「お前ら……何故、わしに先に相談してくれんかつたんじや？」

「……えーつと、何を？」

言いつつ隣のルフィを見るが、彼も首を左右に振つてわからないと応じた。

ぞわり、と。

その瞬間、ウタの第六感が反応した。

ヤバイ。

この先を聞いたら、ダメな気がする。

しかし。

「結婚するなら、わしに一言あつても良いじゃろう!？」

時が、止まったような気がした。

「は、はあ!?! 何の話だよじいちゃん!？」

「け、結婚!?!」

周囲の視線が一齐にこちらを向いた。

考えたことがないと言ったら嘘になる。いやむしろ、何度も考えた。だが、何の話だ。まさか妄想が外に漏れた? いやそんな馬鹿な。

ぐるぐると混乱し、まとまらない思考。それでもウタが何かを言おうとした瞬間。

!!!
!!!

轟音と共に、ガープの頭が床に叩き込まれた。

その背後に立っていたのは、センゴクだ。彼は一仕事を終えたかのように額の汗を拭うと、一つ息を吐いていつもの真面目な表情でこちらを見る。

「今のガープの言葉は忘れてやれ」

「えーつと……」

「忘れてやれ」

圧力で押し切ると、センゴクはガープの足を掴んで彼を引きずっていった。英雄とは思えない扱いである。

ルフィと顔を見合わせる。二人とも、考えることは同じだった。

(見なかつたことにしよう)

視線だけで意思疎通ができている二人を見て、黄色い声援があがったとか何とか。

ちなみに。

「この馬鹿者が！ 貴様のせいで万一があつたらどうする!?」

「わしの孫じゃぞ?! 一言ぐらいあつても良いじゃろう!?!」

「やかましい！ 貴様が関わると碌なことにならないのだ！ 大人しくしておけ！」

元帥の執務室で、そんなやりとりがあつたとかかなかつたとか。



今日は何なんだろう。ウタはどこか遠い目で呟いた。隣の幼馴染はいつの間にか手に入れたらしいたこ焼きを食べている。

一つ欲しいと言ったら、食べさせてくれた。お礼にこちらも食べさせてあげる。熱くて美味しい。

「結婚、か」

小さく呟き、隣の幼馴染を見る。

もし、そんな未来があるのなら。

相手は、この。

「ビッグニュースの気配だ!」

「……………今日は、厄日なのかな?」

ウタらしくない、疲れ果てた声色。それもそのはず。いきなり現れたのは、アホウドリの姿をした男。ある意味、この世界で最も厄介な男だ。

「お、モルガンズ」

「久しぶりだなルフィの旦那! 何か面白いニュースはねえか!」

「んー、この間空島に行ったぞ」

「あ、それはもう知ってる」

テンションの乱降下の激しい鳥である。というか知ってるのか。空島の件を報告してから数日しか経ってはいないはずだが。

「今日は何の用？」

「素っ気無いな歌姫。今日はあんたのライブの宣伝について打ち合わせに来たんだ」

「ああ、来月の」

「そう、あんたの誕生日に合わせたビッグライブだ！ おれも楽しみにしてるぜ！」

「うん。それはありがとう」

この鳥の厄介だと思うところはここだ。この鳥はウタのファンである。しかし、それはそれ、これはこれと即座に切り替えられる精神をしているのだ。

世界中に情報をお届ける情報網を持つ男。人は彼を、*「新聞王」* モルガンズと呼ぶ。

「それで歌姫」

「何？」

「結婚すると聞いたが」

「ごん、という鈍い音を立てて近くの柱にウタが頭をぶつけた。頭を押さえてしやがみ込む彼女の側に屈み込み、ルファイがモルガンズに言葉を紡ぐ。

「そーいやそれ、じいちゃんにも言われたな」

「ほう！」

「ちよつ、ちよつとルフィ」

「なんか、何で相談してくれなかったとか。相談も何も」

「ほつほーう！」

「ルフィ!!」

この男の危険度を理解していないルフィを制止すると、ウタはモルガンズを睨みつけた。

「結婚の予定なんてないから！」

「なんだ、そうなのか」

残念だ。そうあっさりと引き下がるモルガンズ。彼はわざとらしく肩を竦めると、噂も当てにならねえな、と言葉を紡いだ。

「まあ、何か面白いネタがあれば教えてくれ」

「あればね」

早く帰れと言外に告げる。モルガンズは帽子を被り直すと、また来るぜ、と言つて飛び立って行った。

全く、とウタは息を吐く。

結婚。

大切な人と、一緒になること。
どうしよう、とウタは思った。
ルフィの顔が、見れない。

ただ、この時。モルガンズを野放しにしてしまったことを。
ウタは、凄まじい後悔と共にこう言った。
………焼き鳥にしておけばよかった、と。

ある海兵たちの讃歌②

元帥執務室。そこに、その部屋の主人であるセンゴク元帥と “三大将” である赤犬と黄猿がいた。

更にもう一人、准将の階級にある女将校、ウタの姿もある。

「……あの鳥には、我々も何度も困らされてきたが……」

重苦しい声色で、そう言ったのはセンゴクだ。彼の机の上には、一枚の新聞が広げられている。

その一面には、ウタとルフィがたこ焼きを食べさせ合っている写真がデカデカと掲載され、更にこんな見出しが踊っていた。

『海軍の新星と歌姫、熱愛発覚!! 結婚秒読みか!?!』

その新聞記事を改めて見て、「あの鳥……」とウタは小さく呟いた。あそこであっさり引いた時点で、あの鳥の頭にはもうこの絵が出来上がっていたのだろう。

「海軍内ではすでにこの話で持ちきりだ。……もう一度聞くんが、お前たちは本当にそう

「関係ではないのだな？」

「それは……はい」

ちくりと、胸が痛んだ。ふう、とセンゴクが息を吐く。

「人の噂も七十五日という。時間が経てば消えていく話ではあるだろうが……」

センゴクがそう言うが、彼は内心ではそのようなことは欠片も思っていないかった。ただの有名であるならともかく、この二人はただのどころではない有名人だ。

それに、この話は既に五老屋にまで伝わってしまった。それどころか、あの老人たちは喜んでいるくらいだ。

「来月のライブのこともある。どうすべきか」

「……申し訳ありません」

頭を下げる。すると、ずっと黙ってソファに座っていたサカズキが言葉を紡いだ。

「謝ることじゃなからう」

「そうだねえ」

黄猿も笑い、頷く。彼は珍しく、どこか楽しそうだ。

一方、サカズキは難しそうな表情をしていた。

「のう、お前はあの小僧をどう思っちゃよる」

「……それは」

「おい、サカズキ」

「センゴクさん。わしらもガキじゃないんじや。この二人の関係についてああだこうだと囃し立てるつもりはないが、だからといって煮え切らんままも困る」

サカズキが葉巻の煙を吐き出す。黄猿も頷いた。

「正直を言うなら、わっしは賛成だよ、ウタ准将。サカズキも、センゴクさんもね」

「……………え」

「ふん」

「まあ、そうだな」

二人とも、黄猿の言葉にそれぞれの態度で肯定の意思を見せる。センゴクが口を開いた。

「海軍として…………いや、世界政府としては、お前たちの結婚には大いに賛成だ。ルフイは

「英雄」ガープの孫であるが、あのドラゴンの息子でもある。そしてウタ、お前は「赤髪」の娘だ」

椅子に背を預け、座り直しながら言う。

「赤髪」の名に、ウタは無意識に拳を握り締めた。

「この大海賊時代において、大犯罪者の子供が海軍で名を上げる意味は大きい。お前たちの素性については今は隠蔽しているが、いずれ表には出る。その時、お前たちは希望

になる。その二人が結ばれるなら、これ以上ないプロパガンダだ」

ふん、と鼻を鳴らすセンゴク。

「クロコダイルのアラバスタ王国乗っ取り未遂に始まる、数々の不祥事。それを払拭する意味でも大きな話題だ。政治的に言うのであれば、むしろ結婚しろと命令してもいいくらいでさえある」

だが、と。

彼は、小さく微笑んだ。

「そんなことはな、どうでもいいんだ」

少なくとも、ここにいる我々はと。

センゴクは、そう言った。

「お前たちは散々、問題行動を起こしてきたが。しかし、それ以上に人を守り、救い、導いてきた。その背に負った『正義』に恥じないだけのことを、してくれた。お前たちは海軍の誇りだよ」

誇りというにはあまりにも破天荒だがと笑って。

「世間がなんと言おうと、我々はお前たちがしてきたことを、真実を、毎日を、努力を、苦悩を、喜びを知っている」

だから、とセンゴクは言う。

「幸せになれ。お前たちがそのために選択するのであれば。それがどんなものであろうと、我々はずっと味方だ」

ウタは、静かに頭を下げる。

目元から溢れる涙を、隠すために。

「……しかし、小僧はどうしちよる」

ウタの涙から目を逸らすように、サカズキが言った。

センゴクもウタから目を逸らし。

「さて、な。部屋にはいなかったようだ。……まあ、ここにいない奴がいる。そちらはそちらに任せよう」

しばらく、ウタは頭を上げられなかった。

温かなものが、溢れて溢れて止まらなかった。



「で、お前はここで何してる?」

葉巻の煙を振り撒きながら、スモーカーが問う。彼の視線の先には、うつ伏せで倒れ込むルフィの姿があった。

彼らは今、裏庭と呼ばれる場所にいる。主にとある人物のサボりに使われる場所だ。ルフィの表情は見えない。まあまあ、とこの主人と見做されている男が言った。

「いいじゃないの。悩めるつてのは贅沢なことだ」

大将、青雉がそんなことを言う。ふん、とスモーカーが息を吐いた。

「あのアホウドリには気を付けろと言ったはずだ。……アラバスタの件で借りがあるからここに来たが、何もしねえってんならおれは行くぞ」

「……わからねえ」

絞り出すような声。いつもの彼らしからぬ、迷いのある声だった。

「ウタが、どう思ってるのか。それが、わからねえ」

こいつ正気か、とスモーカーとクザンが顔を見合わせた。

重いため息を零すスモーカー。馬鹿野郎、と彼は言葉をついだ。

「向こうがどうこうじゃねえだろう。お前がどうなのかだ」

「ケムリン……」

「ケムリン言うんじゃねえよ。おれはお前の上官だぞ」

全く、と呆れたように言うスモーカー。なあ、とクザンがルフィと少し離れた場所で

仰向けに寝転がりながら言う。

「なあ、ルフィ。お前が一番隣にいて欲しいのは、誰だ？」

ルフィは答えない。

「答えがとつくに出てるのに、いつまで悩んでるつもりだ」

まあ、とクザンは苦笑した。

「しばらくここでだらけて、覚悟を決めろ。お前がどういう選択をしようが、おれは否定しねえよ」

「おれたちに限らず、誰も否定なんざしねえだろう」

呆れた話だ、とスモーカーは言いながら立ち上がった。

「いつだって無理矢理にでも前に進むのがお前だろう、*“麦わらのルフィ”*。だからあの時、アラバスタを救えたんだ」

らしくねえ真似してんじやねえ。

そう言い捨てて、スモーカーが立ち去っていく。

「ケムリン」

「何だ」

「……ありがとう」

ふん、と。

鼻を鳴らす音が、聞こえた。

「いいからとつと決めて来い。お前らが沈んでると、こつちもいい迷惑だ」
そして、今度こそ彼は立ち去っていく。

クザンは、もう何も言わなかった。

今までは、敵と決まった相手を全力でぶつ飛ばせばよかった。

そうすれば、守ることも、助けることもできた。

けれど、今度は。

今度だけは。



夜。誰もが寝静まった時間であっても、ウタは起きていた。

どうしよう。

どうしたら。

ずっと、そんな思考が彼女を支配していた。

ルフィのことは、好きだ。

いつからそう自覚したかはわからない。でも、もう。彼が隣にいないことは考えられないくらいになつてしまった。

だからこそ、怖い。

また、置いていかれるのが。

ただただ、怖い。

「ウタ」

不意に、声が聞こえた。

「起きてるか？」

その声は、ずっと聞きたくて。

でも、聞きたくない声。

「うん」

ドクン、と心臓が跳ねる音が聞こえた。

「入っても、いいか？」

うん、と応じる。

扉が軋む音を立て、ゆっくりと開いた。

そこに立っていたのは、いつになく真剣な表情のルフィ。

不覚にも、少し、ドキリとさせられた。

いや、今更だ。

私はずっと、彼に。

“麦わらのルフィ”に、恋をしている。

「あのさ、ウタ。色々、考えた。おれ、あんまり考えるの得意じゃねえんだけど」

「知ってる」

「だよな」

二人で笑う。随分、久し振りのような気がした。

「ウタ。これ」

そうやってルフィが取り出したのは、小さな箱。まさか、と思うと同時に、ルフィは箱を開ける。

そこに入っていたのは、銀色のペアリング。

「ルフィ、それは」

「これ、福引で当てたんだよ。本当は肉が欲しかったんだけどな。見てくれよこれ、指のサイズに合わせて形が変わるんだ」

ルフィが実演してくれる。彼が何を言いたいのかわからず困惑していると、ルフィは自身に付けた指輪を外し、それを見つめた。

「元々、ウタに渡すつもりだったんだ。誕生日だろ？ だからさ。……おれ、指輪に色んなサイズがあるなんて知らなかった」

なあ、と。

ルフィは、真剣な視線をこちらに向ける。

「おれ、ウタみたいに上手く歌うことができねえ」

「……うん」

「おれ、航海術も持ってねえ。いっつもウタと皆に任せっぱなしだ」

「……うん」

「剣術もできねえし、銃も駄目だ」

「……うん」

「料理だって作れねえ」

「……うん」

だけど、と。

彼は言った。

「ウタの敵をぶっ飛ばすことはできる」

うん、と。

もう一度、頷く。

「おれは、一人じゃ生きていけねえ自信がある」

だから、と。

「おれと一緒に、生きて欲しい」

彼は、そう言った。

涙が、止まらない。

「……カッコ悪い、プロポーズだ」

「今までウタには散々見せてるだろ」

頭を掻き、ルフィは言う。そんなことはない、ウタは言った。

「いつだってルフィは、カッコ良かったよ」

そうか、と問う彼に。

そうだよ、と笑って。

ようやく。

ようやく、この未来に。

……ねえ、ルフィ。

何だ？

指輪、付けてよ。

わかった。えっと。

左手の、この指に付けるの。もう、何も知らないんだから。

悪い。でも、教えてくれるんだろ？

ふふ、しようがないなあ。うん、ばっちり。

よし。覚えてたぞ。

ねえ、ルフィ。

うん？

これからも、ずっと一緒にいようね。

ああ。

当たり前だ。
ずっと……一緒だ。

“背中”

砂塵が舞い、血の匂いが立ち込める。

「“ゴムゴムの……”」

あまりにも激しい戦闘の末、周辺の景色が変わってしまった。

目の前の海賊の居城である館は粉碎され、彼の部下たちもその周囲で倒れている。

モンキー・D・ルフィとウタの部下もまた、何人も倒れた。だが、覚悟の差か、信念の差か。

勝者は、明白だ。

「“バズーカ”!!」

最後の一撃が、その男の意識を刈り取った。

懸賞金、一億五千二百万ベリー。ここ数年でいきなり名を上げた、超大物ルーキーだ。懸賞金とは政府から見た“危険度”を示す数字である。故にイコールでその戦闘能力を示すわけではないが、かといって全く結びつかないというわけではない。

目の前の海賊について言うのであれば、安いとさえウタは感じていたくらいだ。少な

くとも、海軍本部における中佐である自分と少佐であるルフィには荷が重いと通常でなら判断が下されるくらいには。

「……ルフィ……」

海楼石の錠により、能力を封じられた自分には見ていることしかできなかった。能力がなくとも戦う力があるが、この錠は能力のみならず力さえも封じてしまう。

「ウタを、返してもらおうぞ」

倒れた海賊の隣で、麦わら帽子を被り直しながらルフィが言う。

とある一つの葉…… “miracle” と名付けられたその調査から始まった事件は、ルフィたちが想像もしていないほどに大きな事件となった。当初は少人数での調査命令であったために戦力も不足する中で、どうにかこの結末に辿り着いた。

「ナミ、鍵を」

「ええ」

東の海のココヤシ村。海軍にとっては目を覆いたくなるとある兵たちの不祥事から起こった“アーロン一味”による暴虐。

彼らから彼女の愛する村を救い出した、ルフィたちに、彼女はついてきた。その彼女は幹部との戦いでウタの鍵を手に入れており、それを用以てウタの手錠を外す。

「ルフィ」

「無事でよかった」

こちらが何かを言う前に、抱き締められた。おずおずと、その体を抱き締め返す。その姿を見て、お熱いこと、とナミが顔を仰ぐ仕草をした。いつもなら否定するが、この時はできなかつた。

いつだって、そうだ。この幼馴染は、自分を助けてくれる。

こんなにも、ポロポロに。

傷だらけに、なつてでも。

「おいルフィ。ウタの無事を確認をしたんだからさっさと行くぞ」

「あんたねえ」

妙な縁ができた賞金稼ぎ、《海賊狩り》の異名を持つ男の言葉にナミが半目で睨む。

今回も、偶然居合わせた彼は成り行きで協力してくれた。命を懸ける理由などないはずだというのに、彼もまた傷だらけになって戦ってくれたのだ。

「ああ、そうだな。ししし、ありがとうゾロ！」

「まあ、いい修行になったよ」

笑うルフィに対して、肩を竦めるゾロ。

ルフィの体が離れたことに名残惜しさを感じつつ、ナミに視線を向ける。

「本部への連絡はついてる？ とにかく、できるだけ早く」

乾いた拍手の音が、響き渡る。

一瞬で空気の温度が下がったような感覚。全員が、強制的に意識の切り替えをさせられた。

いつの間に現れたのか、白い髪を角刈りにした男が立っている。その背後には、腰に刀を差した袴の男が控えるように立っていた。

いつの間に、とウタは驚愕と共に男たちを見る。武装色では負けるが、ウタの見聞色はルフィよりも上だ。中佐という階級であるが、その実力は将官クラスにはある。その自分が、ここまでの接近で一切気付けなかったとは。

「誰だ、じいさん」

「はっはっは。中々言いおるわ小童が。……ああ、いい、いい。子供の戯れだ」
背筋が、凍る。老人の背後にいる男が、こちらへ殺気を放ったのだ。

強いと、誰もが理解させられた。先程、ギリギリでルフィが倒した海賊よりも遙かに。自然、身構える。全員が戦闘態勢に移行していた。だが、老人は笑い続ける。

「いやしかし、本当に驚いたとも。そやつはうちの新人でな。どうしても言うから仕事を任せたが……ふむ、見込み違いであったか」

「……お、お……頭……」

ルフィによって倒された海賊が、息も絶え絶えに言う。

あの強さで、新人だと？ 一体、どういうことだ。

「……………」

ルフィがウタへ自身の麦わら帽子を被せた。それが、意味することは。

「うむ？ ふむ、まだ息があるか。これはいかなあ、小童。相手は海賊ぞ。息の根は止めねば」

そして、そのまま老人は懐から取り出した銃の引き金を引いた。

銃声。

一瞬の躊躇いさえもなく放たれた一撃は、海賊の胸元へと叩き込まれた。鈍い呻き声をあげ、海賊の手が地面に沈む。

「お前っ!!」

直後、ルフィが吹き飛ばのように突撃した。

“六式”の一つである“剃”。超高速の移動術。

だが。

「遅いー!」

一撃。

無造作に、踏み抜くようにしてルフィの頭部が地面へと叩き込まれる。

「消耗しておる状態で、このわしに勝てるわけなからう。無謀と勇氣は違うぞ小童」

「ルフィ！」

思わず声を上げる。ルフィは足掻き、抜けようとするが抜け出せない。

あのルフィが踏みつけられた状態から一切動けない。あの老人、あの見た目からは想像できない力を持っている。

「さて、交渉といこう。ああ、その前に二つほど。ウタ、といったかな？ キミの能力は我々には通用せんよ」

ウタの持つ能力は、破格だ。歌声を聴かせさえすれば、強制的に彼女の世界へと誘うことで催眠状態にできる。

だが、それは歌声が聞こえればの話だ。おそらくこの老人は、こちらが歌う前にねじ伏せてくる。

「そしてもう一つ。私の正体を告げておくべきだろう。ふむ、そうさな……「雀蜂」と言えばわかるかな？」

「「雀蜂」……!?!」

ウタとナミがその名に反応する。

それはここ二十年、表舞台に現れなかった名前。「海賊王」の時代に名を挙げた、伝

説の海賊の一角。

かつてその巨大な勢力で、「四皇」に最も近付いた大海賊だ。

「ほう、若い娘さんたちはよく知っているようだ。ならば話は早い」

鈍い音と共に、ルフィがこちらへと蹴り飛ばされる。慌てて受け止めると、後頭部を押さえて痛え、と彼は呟いた。

「単刀直入に言おう。海軍を辞め、わしの下に来ないかね？」

「断る！ おれたちは海兵だ！」

即座に答えたのはルフィだ。老人は笑う。

「はっはっは。即答か。ふむ、他の者も同意見のようだ。だが、ううむ、惜しい。どうにも惜しい」

だから、と。

老人は、壮絶な笑みを浮かべた。

「意見を変えてもらおう。何人の首を落とせば、理解するかね？」

直後。

ルフィが、ウタの体を後方のゾロの方へと投げ飛ばした。

「逃げろ！ こいつらはおれがぶっ飛ばす！」

「ルファイ！」

「急げ！」

こちらに背を向けるルファイ。その背に、ゾロに受け止められながらやめたと、そう言おうとして。

「……………ッ！ 総員、撤退!!」

「ウタ?!」

「急いで!!」

ナミの声に対し、怒鳴るように叫んだ。彼女もまた、何かを噛み締めるようにして頷くと、走り出す。他の部下たちも同じだ。倒れた者たちに肩をかし、必死に逃げようと動き出す。

「ルファイ！」

振り返る。

「待ってる！」

「おお！」

それが、どれだけ虚しい言葉か。

わかっていて、それでも。

それでも、彼なら。

「行かせると思つかね？」

老人が背後の男に指で合図を送る。男が頷き、動き出す。

それを止めようと、ルファイが構えた瞬間。

「よそ見厳禁だな」

轟音と共に、老人に蹴り飛ばされたルファイが近くの瓦礫へと叩き込まれた。

袴の男が迫る。刀の柄に手を当て、そして。

「先に行け!!」

ゾロが刀を構え、男の前に立ち塞がった。だが彼も既に満身創痍。状況は最悪だ。

どうする、どうしたら。

一か八かウタウタの力を……駄目だ、あの老人たちに対策があれば、不発に終わる。

その、瞬間。

ウタの見聞色が、その気配を捉えた。

「すまない。遅くなった」

刀同士の間で鈍い金属音を響かせながら、一つの影が男とゾロの間に割って入っ

た。

肩にかけた、正義のコートが風に舞う。

「海軍本部中将、モモンガ」

「海賊に知られていたところだな」

男の呟きにそう応じ、モモンガは刀を振るって距離を離す。

「ほう。これは」

老人が何かを言いかける。ウタの捉えた気配は一つではない。

もう一人、いる。

「ちよつとそこ、どいてくれるか」

周囲の温度が、文字通りに下がる。

「こいつらは、大事な部下たちなんぞな」

海軍本部大将、青雩。

海軍本部、最高戦力の姿がそこにあつた。



「大将に、中將とは。ちよつと豪勢が過ぎるんじゃないかね？」

突然現れた青雉に対し、老人が肩を竦める。青雉はポケットに手を入れたままその老人へ視線を向けた。

「海賊を捕らえるのに、豪勢も何もねえだろう？」

「それは道理だ。しかし、ふむ。……ここは分け、とすべきだろうなあ」

しょうがない、と老人は笑うと腕を組んだ。そして、青雉の背後にいるルフィに向かって言葉を紡ぐ。

「まあ、いい経験だろう小童。よく覚えておくといい。『ロジャー』や『白ひげ』に勝てなかった……ただそれだけで涙を呑んだ銀メダリストは、この海に大勢いる」

ルフィが拳を握る。それを一瞥すると、青雉が言葉を紡いだ。

「おいおい、何を勝手に終わろうとしてるんだ？」

「んん？ そりややり合うってことかい？ このわしと？」

「海軍が海賊を前に退くわけがねえだろう」

青雉の足元が凍り始める。老人が笑った。

「はっはっは！ これは痛いところを！ じゃあ何か、わしらを相手に逃げようとしたそいつらは海軍じゃなかったか！ これは失敬！」

ぐつ、とウタは唇を引き結んだ。海賊から逃げようとした己。それが部下たちの命を守るための選択とはいえ、それに何も思わなかったわけではない。

だが。

「こいつらはおれの部下だ。おれが退いてねえ限り、こいつらもまだ退いちやいねえ」
ふむ、と老人が頷く。

「だが、どうする？ 僅か二人の増援で、わしらを捕らえると？ まさか、ここに二人だけ来ていても思ってたわけではあるまい？」

老人が指を鳴らすと、多くの応じる声が上がった。

瓦礫の向こう。深い森の奥に、無数の気配がある。

「とはいえ、ここでお前さんとやり合うのもメリットがない。だから」
「必死だな」

青雉の言葉。老人の表情から、笑顔が消えた。

「どうしてもおれから逃げたいようだが、言ったはずだ。捕らえに来たと」
そして、青雉はため息を零すように言葉を紡ぐ。

「それに、数だと？ 海軍を相手に、よりによってそれを選ぶかね？」

無数の、足音。

それは、ウタたちの後方から響いてくる。

「援軍か……!!」

「海軍だからな。さて、年貢の納め時だ」

「舐めるなよ青二才が!」

老人が懐から銃を取り出し、吠える。

「わしはロジヤーの時代を生きた海賊!! この時代の軟弱な海賊とは違う!!」

直後、モモンガと向かい合っていた男も跳ね飛ばされたように青雉の所へ飛んだ。老人もまた、己の背後に控える部下たちへと声を張り上げる。

「所詮は一人!! 包んで潰せ!!」

その言葉に、青雉は。

「『氷河時代』」

たった一言。

絶対的な力で、応えただけだった。

青雉に対し、刀を振り下ろした男も。

老人も。

森の中に隠れていた部下たちも。

文字通り、世界ごと氷漬けになっていた。

「……凄え……」

思わず、ルフィは呟く。

相手にすらなっていないかった。自分が何もできなかった、あの老人が。

こんなにも、容易く。

「銀メダリスト、ね。……挑みすらしねえ奴は、失格って言われるんだよ」

青雉は呟くと、振り返る。

「よくやった。お手柄だ。後の事後処理はやっておいてやる。だから……今は休め」
そして、モモンガと共に増援の海兵たちへと指示を出し始める。

ルフィたちは最優先で軍艦へと運び込まれ、治療を受けた。

ただ。

ルフィとウタの表情は、ずっと優れないままであったという。



そのニュースは、瞬く間に世界へと放たれた。

最近巷を騒がせていたドラッグ、“miracle”の元締めであった海賊の討伐と、その実験体にされていた市民たちの救助。しかもそれを成したのは今世間で話題を集める二人の英雄だ。世間が賑わうのも当たり前であった。

更に、その黒幕であったロジャーの時代を生きる大海賊“雀蜂”。それを大将青雉が捕らえたのだ。しかもそれは、英雄たちの働きがあつたからこそとされている。

新たな時代の英雄たちに、人々は酔いしれる。

……当の本人たちの気持ちも、置き去りにして。

「辞退は認めん」

今回の手柄を受けて勲章と昇進が決まった英雄二人は、元帥の執務室に来ていた。そこでセンゴクから放たれたのが、この言葉だ。

「お前たちの考えることなどお見通しだ。……昇進も、勲章の授与も。拒否することは許さん」

「でも、おっちゃん！ おれたちは！」

「元帥と呼べ」

手に持っていた資料を机の上に置き、全く、とセンゴクは呟く。その彼に、ウタが言

葉を紡いだ。

「私たちは、敵前逃亡を」

拳を握るウタ。その彼女と同じように強く拳を握るルフィを見て、

「……気持ちわかる。だがな、二人とも。今回の件は大手柄ではあるが、はつきり言つて『雀蜂』捕縛の件よりもお前たちの働きのの方が大きいと私は思っている」

「えっ……?」

「無論、奴が黒幕であつたことは間違いない。それを捕らえたことは大きい。だが、それよりも市民にとつては危険な薬と、それで利益を得ていた海賊の撃破の方がより大きな意味を持つのだ」

考えてもみるといい、とセンゴクは言う。

「『雀蜂』など過去の伝説、それも脇役だ。市民にとつてはそんないるかどうかもわからない存在よりも、今目の前にある危険を排除することの方が何倍も嬉しいのだ。昇進も勲章も政府から送られるものであるが、それは市民の想いでもある」

受け取れ、とセンゴクは微笑んだ。

「お前たちは苦しんでいる市民を救い出した。それは、何よりも我々にとつて誇らしいことなのだから」

二人は、何も言えなかつた。

ただ、言われた言葉を考え続けていた。



あの後、あの海賊について簡単にセンゴクの知ることを教えてくれた。

大海賊時代の前にいた海賊。強大な勢力を誇っていたがしかし、彼はロジャーや白ひげといった四皇たちとやり合うことは終ぞなかったのだという。

彼の勢力を壊滅させたのは、「英雄」ガープだ。

元より、純粋な戦闘能力で生きてきた男ではないらしい。悪辣で、周到的な策を用いて時代を生きてきた。

銀メダリストと、彼は己をそう言った。

そんな彼を、失格だと青雉は断じた。

ただ、一つだけわかるのは。

今の自分達では、そんな『失格者』相手にさえ勝てないというだけ。

「なあ、ウタ」

「うん」

執務室を出て、屋上。人気のない場所で。

「おれ、強くなる」

ルフィは、誓いを立てる。

「今のままじゃ、何も守れねえ」

あの日、立てた誓いさえ。

今の己は、守れない。

ウタの隣にいることさえ、このままではできなくなる。

「うん。……私も、強くなる。もう、逃げなくてもいいように」

だけど、とウタはルフィを見た。

乾いた音が響く。ルフィの頬が、打たれた音だ。

「だけど、その前に」

ウタの瞳から、涙が溢れた。

「あんなこと、もう二度と言わないで」

溢れる涙が、止まらない。

「る、ルフィが、死、死んじやうかも、って、私」

「……すまねえ。けど、あの時は」

「信じてた！ 信じてたよ！」

いつだって、どんな時だって。

絶叫するように、ウタは言う。

「ルフィを信じてる！ だから！ だから私を置いて行かないで！ 一緒にいさせてよ！」

大粒の涙を流しながらのその叫びが、ルフィの胸を打つ。

父に置いて行かれた彼女は、誰かに置いて行かれることを何よりも恐れている。

ルフィもまた、置いて行かれた側だ。だが彼には父の記憶はない。

それに、彼には兄がいた。祖父がいた。

何より……ウタがいたのだ。

「……一人に、しないで……」

嗚咽を漏らす姿に、ごめん、とルフィは呟く。

そしてゆっくりと、彼女を抱き締める。

「ああ、わかった。……わかったよ」

腕の中で泣く彼女を感じながら、誓いを立てる。

あの、絶体的な背中。

遥か遠くの、高みにある背中。

「ずっと一緒だ」

この、大切な人を守るためには。
あの領域まで、至る必要がある。

強くなる。絶対に。

今日は、その誓いの日だ。

この数ヶ月後、アラバスタにて二人は更なる大事件の当事者となる。

新たな英雄譚に、人々は明日への希望を見た。

しかし。

たった一つの不幸と、傲慢と、この世界の歪みが。

この二人を、追い詰める。

これは、世界を敵に回した二人の物語。

二人が、世界がまだ、希望を抱けていた頃の物語。

麦わら帽子のヒーロー

海軍本部には、様々な人物がいる。

彼らはこの大航海時代にあつて市民を守る盾であり、力無き者を守護する矛先である。

そんな海軍において、先日、不祥事が起こつた。なんと、海軍が海賊に買収され市民の窮状を見て見ぬ振りしていたというのだ。

その主犯は海軍本部ではなく支部の大佐であるが、そんなことは市民には関係ない。『海軍が海賊に買収されていた』という事実が世間に与えた衝撃は凄まじいものであつた。

不幸中の幸いだったのは、それを暴いたのが本部の海兵であり、しかも最近話題の二人が中心であつたことだ。故郷への休暇中に複数の海賊を捕縛、或いは撃破していた二人は既にニュースになつていたところである。その彼らが休暇中における最後の事件

として起こしたのがこの一件である。ちなみに何人かが頭を抱え、何人かは爆笑していた。

この事件については最終的に動ける数名の部下が合流し、かつて偉大なる航路で名を上げた海賊アーロンの撃破と逮捕、そしてそのアーロンに買収されていた海軍支部の摘発を同時に行うことで収束を見た。

当初、海軍としては隠蔽も考えていた案件だ。海賊に海軍が買収、それも支部とはいえ大佐の階級にある者がとなれば海軍への信頼が失墜する。しかし、口止めをする前に“新聞王”の手によって全世界に報道されてしまったのだ。

そうなれば、海軍としては功労者たちを労う方向に進んだ方がまだ傷が浅い。幸いなことに、この事件を解決したのは同じ海軍の人間、それも新世代の二人だ。ならば、少しでも印象が良くなるようにと二人には勲章の授与と昇格を。合流し、協力した部下数名にも同じく勲章の授与と昇格の決定がすぐに決められた。

その場には何人かの民間協力者……賞金稼ぎや村民もおり、彼らにも勲章が贈られることとなった。しかし、勲章の授与が行われるマリンフォードは遠い。故に村民たち今回の件を受けて海兵となることを決めた一人の少女を代表として式典を行うことになったのだ。後に、海軍からは復興のための物資や資金が提供されることになってい

欺瞞ではある。八年間も苦しんだ者たちへ報いとすれば、あまりにも足りないものが多過ぎる。

だが、彼らはそれを受け入れた。自分たちを、彼らが信じた少女を救ってくれた英雄たちが榮譽を得るのであれば。

明日から、笑顔で過ごせるのであればと。

そして、今日。

月始めの入隊式に合わせて、件の表彰についても行われる予定となっていたマリンフォードはいつもより賑やかになっていた。

「ちよつとルフィ、まさかその格好で行くつもり？」

「ん、何かおかしいか？」

「あのね、今日は普段と違つて物凄く厳肅な場なの。いつもみたいにベストと短パンにコートを羽織っただけなんて、許されるわけないでしょ」

海軍本部の一室。今回の式典における主役の一人であるモンキー・D・ルフィは彼の幼馴染であるウタから注意を受けていた。

いつも通りの格好で今日の式に出ようとしたルフィを見に来てよかつたとウタは思う。世の中にはTPOというものがあるのだ。ウタ自身、今日はいつもの格好ではなく

正義のコートの下にはきっちりとしたスーツを着ている。

海軍においては伍長以上になれば私服を着ることが許される。だが、それにも当たり前だが限度というものがあるし、TPOを考えてか私服という名のスーツを着る海兵も非常に多い。

ルフィはいつもベストに短パンのスタイルだ。コートがなければ海軍とわからない彼のその服装についてはウタも奔放な彼らしくていいとは思っている。だが、それとこれとは別なのもまた事実である。

「えー、面倒くせえなあ」

「私たちの部下も四人、勲章と昇格があるんだよ？ ナミだって今日が入隊日なんだから。私たちがしつかりしないでどうするの」

全く、とウタは腰に手を当てる面倒臭がる幼馴染を嗜める。

無関係ならば……いやそれでも良くはないが、今回はアロンとの戦いにおいて駆けつけてくれた部下とココヤシ村で自分達を見て海軍に入ることを決めた少女、ナミの入隊式もあるのだ。ちゃんとした格好をするのも上司の役目である。センゴクもそう言っていた。

「ガープさんみたいな白いスーツがあるじゃない。ほら」

ルフィの部屋のクローゼットを開け、ウタは言う。これはガープがルフィが少尉とな

り、「海軍将校」と呼ばれる立場になった時に送ったものだ。『わしとお揃いじゃ』と言いながら、ウタにも渡している。

まあ、「海軍将校」となれば正義のコートの着用を許される立場だ。彼としても嬉しかったのだろう。その後、歴代記録に残る勢いで昇格しているので感覚が狂うが、本来正義のコートの着用が許される立場になるだけで大事件なのだ。

「じいちゃんと同じか……」

嫌い、というわけではないが正直思うところがあるのはウタが見ていてもわかる。愛情はあるのだ。出力の仕方がおかしいだけで。

……いや、強い海兵にするためと言ってジャングルに放り出すのはどうなのだ。ウタ自身も巻き込まれたし。

「でもそれ以外に礼服ないでしょ」

「うーん……しょうがねえか……」

諦めたように息を吐くと、着替え始める。

「じゃあ、私は先に行くから遅れないようにね」

流石に着替え中にまで部屋にはいけないだろう。もう二人とも子供じゃないのだ。

「おう、着替えたら行くよ」

「うん。だけど、いい?」

部屋を出る前に、ルフィに対して念を押ししておく。

「絶対に遅刻しないこと」

おう、とルフィは笑って応じる。

その姿に少し不安を覚えながらも、ウタは部屋を出た。

ただまあ、彼女は失念していた。

この幼馴染に、『予定通り』などという概念が存在しないことを。



スーツに着替え、コートを羽織ったルフィは部屋を出た。いつもと違う格好に違和感を覚えながら街へと出ていく。ここから、式のある場所まではそう遠くない。遅刻はなはずだ。

「うーん、やっぱりこの格好は息苦しいなア」

じいちゃんはよくこんな格好をいつもしてるなー、などと呟きながら麦わら帽子をかぶる。スーツに正義のコート。そこへ麦わら帽子というアンバランスな組み合わせだというのに、どうしてか随分と様になっていた。

マリンフォードは海軍本部がある場所なだけはある、市民も海兵の姿には慣れたものだ。加盟国だと正義のコートを着ていると威圧感があるのか遠巻きにされることもあるのだが、マリンフォードではそうならない。

往來の真ん中を歩いていくルフィ。その彼が、とあるものを見つけた。

泣いている、一人の少女だ。まだ五、六歳程度だろうか。道の端で目を多いながら泣いている。

その姿を見つげると、ルフィは何の躊躇もなく歩み寄った。少女の側にしゃがみ込むと、どうした、と声をかける。

「なんで泣いてるんだ？」

「……おかあ、さん、が……」

嗚咽を漏らしながら言う少女に、ルフィは逸れたのか、と問う。少女が頷いた。

「よし、じゃあおれが一緒に探すよ。もしかしたら本部のところに届が出てるかも知れねえし、近くにいろかもしれねえ」

な、と笑いかけると、少女はようやく顔を上げた。こくりと、小さく頷く。

その泣き腫らした姿に、ルフィは幼き頃の幼馴染の姿が重なって見えた。



海軍本部や支部では、月初めに辞令式を始めとした式典を行う。新規入隊の受け入れは随時行なっており、それは月の途中からも受け入れている。だが、随時行なっている効率が悪いため次の月の初めにまとめて行うのだ。昇格の辞令についても同じである。

これは支部でも同じで、一種の儀式とも呼べるものだ。都合上異動の辞令を異動先の支部の長から受けることも多いが、そもそも目的はこの儀式を経て自覚を持たせるためである。それを達成できれば多少のことは無視できる。

だが今回は、いつもとは事情が違った。入隊式及び辞令については基本的にそのタイミングで動ける中将の誰かが行うようになっていた。元帥が行えれば一番いいのだが、センゴク元帥は多忙だし三大将も同じく多忙である。だが今回は、海軍のイメージに関わること故にセンゴク元帥が辞令式に出てきていた。

「……中佐……大佐？ あ、少佐……中佐は？」

「二応、この式が終わるまでは昇格前の階級で大丈夫。……ルフィは……来る、はずなんだけど」

現在行われているのは入隊式だ。一人ずつ名前を呼ばれ、元帥の前に立つとマリノコードと制服を渡される。とはいえ、新規入隊の者たちは既に真新しい制服を着ている。故に、これは形式的な側面が大きい。

ウタと、今ウタに話しかけてきた彼女の部下である女性海兵は離れた場所に立つて式の経過を見守っていた。二人の出番はこの後だ。入隊式が終わった後に階級の低い方から順に勲章の授与と昇格が言い渡される。

ちなみにこの女性海兵は今回の昇格で少尉となるため、晴れて『海軍将校』である。そのため、正義のコートを受け取る立場でもあった。

「……一緒に来られなかったの？」

「ルフィがいつものベストと短パンで出ようとしてたから、着替えるように言ったんだけど……」

「ああ……」

アローンパークの一件で駆けつけてくれた、付き合いがそれなりに長い女性海兵はその言葉に納得した。彼女もルフィならそうするだろうな、と理解している。

「ゴホン」

近くに立っていた人物……海軍本部中将、モモンガが咳をしてこちらにジロリと視線を送つてくると、二人は慌てて姿勢を正した。ウタにしてみると、ルフィと一緒に指導を受けた相手だ。その経験からどうしても背筋が伸びてしまう。

そして、ウタは改めて入隊式の様子をみる。待機中のナミがチラリとこちらを見、笑顔を浮かべた。こちらにも笑顔を返す。

彼女はその後、ウタとルフィの部隊に配属されることになっている。また、今回の入隊者たちの代表として宣誓を行う役目も負っていた。

だがそれはそれとして、心配がある。

(ルフィ、何かトラブルに巻き込まれないといいけど)

あの男は良くも悪くも何かを呼び寄せる。妙なことに巻き込まれないといいが、とウタは思った。



「うーん、いねえなア」

しばらく少女の手を引いて歩いてきたルフィが、頭を掻きながらそんなことばやくようにして呟いた。声を上げて周囲を歩いてきたが、見つからないのだ。

向こうも探してんのかな、と呟くルフィ。行き違っているのかもしれない。

ちなみに少女はルフィが買い与えた綿飴を左手で持ち、ルフィの右手を持ちながら歩いている。綿飴を見てじっとルフィを見つめる少女に彼が買い与えたのだ。割と図太いな、と思つたとかいないとか。

「本部に預けた方がいいのか？」

ちなみに彼の頭からは完全に予定というか目的がすつぽ抜けている。

「しようがねえ。ちよつと歩くけど、向こうの建物まで行こう。もしかしたらそつちで待つてるかもしれないし」

「……うん」

少女が頷くのを見て、ルフィは歩き出す。その彼の耳に、怒鳴り声が届いた。

「金を出せ！」

少し離れた場所の店で、一人の男が銃を構えて露天の店主を脅している。あー、とルフィはその光景を見て息を吐いた。

「すまねえ、ちよつと待つててくれ」



「民衆がか弱いことは罪ではない。そのために我らがいる」

元帥の演説が響き、記者たちの写真撮影の音が響き渡る。

「強靱な悪が海にあるならば、我々が全力で駆逐せねばならん。最後に問おう。その覚悟はあるか？」

「はいー」

新兵たちの代表として元帥の前に立っていたナミが大声で応じ、海軍式の敬礼を返す。その瞬間、無数の撮影の音が鳴った。

今回の不祥事の被害者でもある彼女とその村は、しかし、海兵に救われたことで海軍への入隊を決めた。この事実は海軍のイメージの回復に非常に有効だ。ナミもそれはわかった上で、今回のこの宣誓の立場を受けた。

まあ、ちやつかりしているのはそれを交渉材料に自分をウタとルフイの部隊に配属することを認めさせたという点だ。これについては海軍側もメリツトの方が多いため受け入れられ、今に至る。

「諸君らの健闘が、市民を守る新たなる力となることを期待する」

センゴクが海軍式の敬礼と共にそう告げる。ナミの背後にいる大勢の新兵たちもまた、敬礼を返した。

そして、周囲の参加者から拍手が送られる。新兵たちの入隊式はこれで終わりだ。

(いくらなんでも遅過ぎる)

だが、麦わら帽子の彼は来ない。

刻一刻と、彼の出番は近付いている。



「……店も焼けてしまって、金もなくて……すみません……!」

ルファイが取り押さえた男は、正義のコートを着たルファイを見て観念したらしい。地面に正座し、頭を地面にこすりつけながら言う。

ルファイは被害者である店主と共にその光景を見ていた。なるほど、と言ったのは店主だ。

「そういえば、近くの島が海賊に襲われたとは聞いたな。海賊は海軍が捕縛したが、島にはそれなりの被害が出たと」

「はい……一時的にここに避難しているんですが、財産も何もかも、一緒に焼けてしまつて」

申し訳ない、と男は頭を下げ続ける。

「妻と、今年二歳になる息子がいて……！ 申し訳ありません……！」

「まあ、ここで強盗なんてしようとするぐらいだから相当追い詰められてたんだろうけどなア」

腕を組み、ルフィは言う。ちなみに少女は近くで綿飴を食べていた。かなり凶太い。

「一応、あー……何だっけ？ やる前の」

「未遂？」

「それだ！ それで捕まえないといけねえんだけど……」

店主の方を見る。彼は肩を竦めた。

「私に被害はないし、ちよつと絡まれたただだ。私としては何も」

「揉めただけ、つてことか？」

「私の視点からはすれば」

頷く店主。それを見ると、じゃあ、とルフィは笑った。

「おれの早とちりだな。いやー、すまねえ」

あつはつは、と笑うルフィ。男が顔を上げると、いいんですか、と彼は言った。

「私は、許されないことをしようとしたのに」

「いいよ、おつちゃんもそう言ってるしな。おれの勘違いだ」

笑うルフィ。その彼に、男はもう一度頭を下げた。

「ありがとうございます……！」

その姿に、しかし、と声を上げたのは店主だ。

「問題は解決していかないだろう。どうするつもりだ？」

「それは……」

言い淀む男。んー、とルフィは首を傾げた。

「店って、何の店をしてたんだ？」

「え、ええと、大衆食堂と言うべきでしょうか。安くて量の多い食事を提供して

……」

「おつさんコックだったのか！」

「そ、そんな大層なものでは」

両手を体の前で左右に振る男。その男を見て、そうだ、とルフィは声を上げた。

「じゃあよ、海軍に入らねえか？」

「か、海軍にですか？ いや、自分は戦うのは……」

「違う違う。食堂のおぼちゃんが人手不足って言ってたんだよ。……あのさ、電伝虫あるか？」

「あるにはあるが」

「ちよつと貸してくれ」

言いつつ、電伝虫を操作して番号を入力するルフィ。基本的に番号なんて覚えていない彼だが、海軍の食堂についてはいつも掛けるせいで覚えている数少ない番号だった。

数回の呼び出し音の後、相手が出る。

『はいはい、こちら海軍食堂』

「おぼちゃん。おれだ」

『あら、ルフィちゃんじゃないか。どうしたんだい？ まだ昼食には随分早いけど、何か

注文？』

それこそ入隊当時から彼を知る人物であるため、ルフィをちゃん付けで呼んでくる食堂の主がいつもの調子で言う。その彼女に対し、ルフィは言葉を続けた。

「昼飯は今日も食いに行くけど、そうじゃねえんだ。前に人手不足って言ってただろ？

今もそうか？」

『そりゃあもう、人手はいくらでも欲しいよ。とはいえ格式高いレストランでもないか

らね、中々来ないんだよ』

「じゃあ好都合だ。実はさ、働くところを探してるコックがいるんだ」

えつ、と成り行きを見守っていた男が声を上げた。電話の向こうにいる人物が、ふむ、と声を上げる。

『そのコックは何を作れるんだい?』

「おっさんは何が作れるんだ?」

笑顔のまま話を振るルフィ。男は即座に答えた。

「和洋中なんでもできます! やります! やつてみせます!」

必死の叫びだった。ルフィちゃん、と女性が言う。

『ちよつと代わつてもらえるかい?』

「おう。ほら、おっさん」

ルフィは何の躊躇もなく電伝虫の受話器を渡す。男はそれを受け取ると、ルフィに何度も頭を下げながら会話を始めた。

その背を見つめて笑顔を浮かべるルフィ。店主が驚いた様子で言葉を紡いだ。

「あんた、変わってるな」

「ししし、よく言われる」

「少なくともおれが知る海兵に、あんたのような奴はいない」

ふっ、と小さく笑顔を浮かべる店主。ルフィは言葉を紡いだ。

「もう一人いるぞ。多分、ウタも同じようにしたと思う」

「それが本当なら。……海軍も、思っている以上に捨てたもんでもないようだ」

含みのある言葉だった。ルフィが言葉を紡ごうとすると、ずつと黙っていた少女が突如叫び声を上げた。

「お母さん!」

「ああ、よかつた! 心配したのよ!」

見ると、息を切らしてこちらに若い女性が走り寄ってきた。その女性はそのまま少女を抱き上げると、力いっぱい抱き締める。

「あのお兄ちゃんに買ってもらった」

棒だけになった綿飴を見せ、少女は言う。母親はルフィを見ると、慌てた様子で言葉を紡いだ。

「申し訳ありません! あの、お代は……!」

「ししし、いいよ。良かった良かった」

少女に笑いかけるルフィ。少女もまた、ありがとう、と彼に言葉を紡いだ。

頷くルフィ。そういえば何かを忘れていたような、と思ったが、思い出せない。何だったかなーと首を傾げる彼に、不意に近くに来た青年が声をかけた。

「あの、海軍の方ですよね……？」

忘れ去られた目的は、彼が不在のままに進んでいる。



本気でまずい、とウタは思い始めた。何せ側のモモンガが『まだ来ないのか』とこちらに聞こえるように呟くくらいだ。厳格な彼がこんなことを言うくらいの異常事態ということである。

その問いに対しては、いやー、と視線を逸らして誤魔化すしかなかった。背中に嫌な汗が噴き出すように流れ出している。

今行われているのは勲章の授与だ。階級が低い者から順に行われているそれは勲章の授与が終わると、そのまま昇格の者がその場で辞令を受ける。ウタの部下である女性海兵も順番待ちの待機中だ。

ただ、今回は民間協力者として賞金稼ぎが三名参加している。先にそちらの勲章授与が先だ。

東の海であるの「鷹の目のミホーク」と戦い、敗れこそのたものの彼に認められた剣豪「海賊狩り」ロロノア・ゾロ。そして彼を慕う賞金稼ぎユニット、ヨサクとジヨニーである。

特にゾロはアールン一味の幹部を一人討ち取っている。アールンといえば「タイヨウの海賊団」の一員として一時は七千万を超える賞金を掛けられた海賊だ。その幹部を民間の一賞金稼ぎが討ち取り、しかもミホークに認められるほどだというのだから衝撃である。

「悪の討伐、その協力に感謝する」

三人へと勲章を手渡し、センゴクが海軍式の敬礼を返す。中心に立っていたゾロが、不敵な笑みを浮かべた。

「おれもそれで返した方がいいのか？」

勲章を手で弄びながら言うゾロ。海兵たちのピリつく気配が周囲に漂う。

だが手を下ろしたセンゴクが軽く手を振ってそれを制した。

「いや、キミらは民間人だ。これは私たちの流儀であるというだけに過ぎない。……この流儀に従う立場になると言うのであれば、大いに歓迎するが」

ざわめきが広がった。センゴク元帥、直々の勧誘である。ヒュウ、という口笛の音を響かせたのは会場の端にいるアホウドリ……モルガンズか。

「将来有望、そして実力のある若者は大歓迎だ」

「そう言ってくれるのは嬉しいがな。おれに宮仕えは無理だ」

「まあ、そうだろうな」

あつさり引き下がるセンゴク。その様子に逆にゾロが少し驚いていると、何、と彼は言葉を紡いだ。

「長年多くの人間を見てみると、何となくわかるのだ。キミは人の下につくような人間ではないのだろう。もしキミが従う者がいるとするなら……それは、どれほど雄大な器の持ち主なのだろうな」

一部の者は、彼が何を言いたいかを感じていた。

生まれついでたの才能、*「霸王色の覇気」*。海軍においてはセンゴクぐらいしか持たぬその力の片鱗を感じ取ったのだろう。

会場の視線がゾロに集中する。へっ、と彼は笑った。

「何、おれは海賊つてわけじゃねえ。そのうちまた、あんたたちに結果的にせよ協力する場面はあるさ」

「そうだな。敵対することにならないことを祈ろう。……ヨサクとジョニー、と言ったな。キミらはどうだ？」

話を振られた賞金稼ぎユニットは一度顔を見合わせた。その上で、苦笑する。

「あつしらをそこまで評価してもらえるのは嬉しいが……こう見えて、今の生活が気に入ってるもんで」

「紙一重の縁があれば、海兵になってたこともありえたでしょうが」

腕を組み、片方の手を顎に当てつつ言う二人。そうか、とセンゴクが頷いた。

「キミたちのような者がいるなら、我々もまた覚悟を新たにできる。……礼を言う。此度は、誠に感謝する」

改めて、センゴクが敬礼をした。それに合わせて、周囲の海兵たちも全員彼らに向かって敬礼を行う。

立ち会いの民間人たちからは、万雷の拍手が降り注いだ。

ウタも拍手をしながら、しかし、心は違うことを考えている。

(何やってるのルフィー！)

麦わら帽子は、まだ見えない。

ちなみに、余談であるが。

式典の後、『海軍に入れば私を含め海軍の剣士たちと訓練で刃を交える機会ができるぞ』とモモンガに言われ、本気で悩んだ様子のゾロがいたとかいなかったとか。



声をかけてきたのは、線の細い青年だった。どこか疲れた様子の子の彼に対し、ルフィはどうしたんだ、と声をかける。

「えっと、その、人を探しております」

「人探し？」

「兄ちゃん、海軍は行方不明者の搜索はするだろうが人探しは別だぞ」

店主が言うが、その通りである。事故や海賊の襲撃による被害者の搜索や救助といったことは海軍の役割だが、人探しは領分を外れている。

「いえ実は、姉が海軍に入隊していると聞きまして……」

「へえ、そうなのか」

「実は私、エレジアから来たのですが……姉は両親と音楽性の違いで大喧嘩をして飛び出してしまったんです。その後しばらくして海兵になったとだけ連絡があったのですが……」

疲れた様子の子の青年は、誰かに聞いて欲しかったのだろう。思わずと言った調子でそん

な風に話す。その話に反応したのは店主だ。

「エレジアとは、また遠いところから来たな」

「知ってるのかおっちゃん？」

「音楽の国として名高い国だ。てことは兄ちゃん、あんたも音楽家か？」

「はい。一応、楽器は一通り。得意なのはピアノですが」

その言葉に、へえ、とルフィは感心した声を上げる。

「ウタなら行ってみたって言いそうだな、音楽の国。おれも音楽は好きだし」

「ウタ、つてあの『歌姫』ですか？」

「おう。おれの幼馴染だよ。おれ、あいつの歌が好きなんだ」

ししし、と笑うルフィを見てしかし、周囲の者たちがギョツとする。かの『歌姫』の幼馴染であり、麦わら帽子の海兵……それは、『英雄』の孫にしていくつもの事件を解決している海軍のルーキーの名だ。

「あんた、とんでもない海兵だったんだな」

店主が驚いた様子で言う。つい最近も、東の海の一件で連日新聞に名前が載っていた海兵だ。そんな人物がこんなところで迷子を保護したり職探しの協力をしているなんて予想できるわけがない。

「そんなことねえよ。で、写真とかあるのか？」

「は、はい。えっと、二年前のものなんですが」

鞆を漁り、写真を探す青年。それを待っているルフィに、今度は先程の男が声をかけてきた。

「ありがとうございます！ この後面接して採用するかを決めると！ 本当にありがとうございます！」

何度も何度も、涙ぐみながら頭を下げる男性。ルフィは常のように笑顔だ。

「ししし、いいよ。食堂でいっぱい食べれたらそれでいい」

「はい！ 勿論です！ 採用してもらえたなら全力で働きます！」

「まあ、面接次第だが頑張りな兄ちゃん。嫁さんと子供もいるんだ」

「ありがとうございます！ 本当に、本当に……！」

「泣くのはまだだろうに」

呆れた店主の言葉に、ルフィも笑った。

そして、ようやく写真を見つけたらしい青年がそれを提示してくる。

「あの、この写真に写っているのが姉なのですが……」

「しかし兄ちゃん、海兵なんてとんでもない数があるんだぞ。流石に」

「うちの部隊にいる奴じゃねえか」

「えっ」

店主と青年が同時にルフィを見る。彼が手に持つている写真には、バイオリンを弾く女性の姿が写っている。服装もあつて雰囲気は違うが、彼女は確かにルフィの部隊にいる女性だ。しかも、それなりに長い付き合いである。

「本当ですか!？」

「おう。楽器を弾くのが上手くてな。ウタの曲の演奏もしてくれてるんだよ」

「姉は、音楽を、続けているんですか?」

何かを確認するように言う青年。おう、とルフィは笑った。

「おれは音楽の細かいことはわかんねえけどよ。他の奴らに教えたり、ウタと一緒に曲を考えたり楽しそうだぞ」

日常の光景を思い出し、微笑むように笑うルフィ。青年は、どこか安心したような表情を浮かべた。

「しかも今日、昇格するんだ。だから……今……」

そこで、ルフィの脳裏にようやく……ようやく、彼の今日の予定が思い出された。

「ヤベェ!! おれ今日辞令式に出るんだった!!」

「「ええっ!？」」

まずい、とルフィは叫ぶ。そして青年を見ると、その体に右手を巻きつけた。

「えっ、う、腕!!? 腕が!？」

「折角だし一緒に行くこう！　じゃあおれもう行くよ！」

そして左側の腕を伸ばし、遠くの建物の屋根を掴む。

「おれはゴムゴムの実を食べたゴム人間だからな！」

何の説明にもなっていない言葉を青年に告げると、ルフィが弾かれたように地面から宙へとその体を跳び上がらせた。

まるでロケットのように飛んでいくその姿を見て、残された者たちは啞然としていく。

お騒がせな英雄が、市内の空を駆けていく。



なんとというか、段々腹が立ってきた。

未だに姿を現さない幼馴染に対し、ウタはそんなことを思い始める。

「正義のコートに恥じぬよう、精進するように」

「はー」

今、勲章と共に正義のコートを受け取っているのは彼女の部下である女性海兵だ。彼女が終わると、いよいよウタとルフイの番になる。

だが、相変わらず彼の姿はない。

(もうなるようになるよね)

最早、諦めの境地へと突入したウタ。センゴクも何かを察したらしく、チラリとこちらに視線を送ってきたので頷いておいた。

微妙に青筋が浮かんでいるのは知らない。怒られるのはルフイだけだし。

そして、ウタとここにいないルフイの番になった瞬間。

「どいてくれえー!!」

轟音と共に、会場のど真ん中に何かを着弾した。そう、着弾としか言いようがない衝撃音が響き、会場に小さなクレーターができる。

いきなりの出来事に、海兵たちが反射的に武器に手をかけた。こういうところは流石である。

ただウタだけは、右手を額に当てて呆れたようなため息を零している。そして彼女は、そのままツカツカとクレーターに向かって歩いていく。

「いや、間に合ったかな？」

「間に合ってるわけじゃないでしょ！」

そしてそのままチョップを叩き込んだ。痛え、という声上がる。

「何すんだよウタ！」

「こつちの台詞！ 大遅刻どころか屋根突き破って落ちてくるなんて前代未聞よ！」

「しようがねえだろ色々あったんだから！」

「色々って何！」

いつも通りといえはいつも通りの光景である。無茶をするルフィを怒るウタ、という構図だ。普段なら本部でもスルーされる二人のやり取りであるが、今は状況が状況である。

「お二人とも、落ち着いてください！」

二人の部下の女性海兵が制止に入る。おつ、とルフィがその姿を見て笑った。

「いたいた。なあ、お前の弟が来てるんだよ」

「え、はっ、弟？」

「う、うくん……」

困惑する女性海兵に、ルフィは彼が連れてきた青年を指し示す。彼は数回頭を振ると、女性海兵を見て表情を変えた。

「姉さん！」

「え、ちよつ、嘘、なんで」

「姉さんを探しに来たんだよ！ 父さんもすまなかつたつて言ってる！」

「は、はあ!? 何を今更！」

姉と弟、感動の再会である。ししし、とルフィが笑った。

「やっぱりかく。いや人違いだったらどうしようかと」

「ルフィ、あの人は？」

「弟だつてよ。なんか、えれじあ？ ってどこから来たらしい」

「エレジア……へえ……」

音楽大国、エレジア。音楽に携わる者としては、興味のある国だ。いつか行きたい場所である。

「音楽の国なんだつてな。行つてみてえよな」

「そうだね、いつか行つてみたい」

「じゃあ一緒に行こうぜ！」

笑いながら言うルフィ。思わず、こちらも笑顔が溢れた。

「うん、約束だね。……で、あの人を連れてくるのに遅れたの？」

「いや？ その時はもう遅刻は確定してたな」

「おい」

思わず素でツツコミを入れてしまう。それがよ、とルフィは腕を組んで言葉を紡いだ。

「時間は余裕があるはずだったんだよ。あの後に着替えて、部屋を出てさ」

「ふむふむ」

「そしたらよ、迷子がいてな。一緒に探してたんだ」

「……ふむ」

「そうしてらうちに今度はなんか、この間近くの島で海賊の襲撃があつたんだろ？ あれで家と店を焼かれたつておっさんがいたから、食堂のおばちゃんに紹介してた」

「ふむ……」

嘘のように思えるが、ルフィである。まず間違はなく真実だ。

そうなると、とウタは思った。自分に彼を怒ることはできない。彼は式典よりも、市民のトラブルの解決を優先していたのだから。

「なるほど、話はわかった」

そこに、重い、腹の底に響くような声が響いた。

あ、ヤバイ。とウタが直感した瞬間。

「静粛に!!!」

大音量の、元帥による一喝が入った。その場の全員が、海兵も民間人も思わず背筋を伸ばす。ルフィとウタも反射的に海軍式の敬礼をしていた。

「まだ式は終わっておらん。その二名、前へ。……勲章を」

二名を招き寄せ、センゴクは補助の海兵から勲章を手取る。

「此度の働きは見事であった。勲章の授与と、ウタ中佐は大佐への昇格を。ルフィ少佐は中佐への昇格を決定する」

それを手渡された二人は、敬礼で返した。それに頷きを返すと、センゴクが宣言する。「今後も、己が正義を貫き、市民を守り、救うのだ」

そして、司会が終了を宣言する。会場の空気が、緊張から少しずつ解放されていく。

「いやー、終わった終わった」

そして、この幼馴染は敢えて背後から視線を逸らしながらそんなことを言う。

「なあ、ウタ。食堂に行こうぜ」

「うん。いいけど、その前に」

「そうだな、その前に私と話をしよう」

びくり、とルフィが身を震わせた。彼がゆっくりと振り返ると、憤怒の表情をしたセンゴクがいる。

ルフィは自然とその場に正座をしていた。すすつ、とウタは二人から距離を取る。縫るような目で見られたが、視線を逸らした。自業自得である。

「さて、何から説教するべきか」

「い、いや〜」

「まずは、遅刻についてだな」

はあ、とため息を零して言うセンゴク。既に式は終わったというのに、海兵たちも市民たちも彼ら二人を見守っていた。公開説教である。

割と本部内ではよく見る光景ではあるのだが、それはそれとして立ち去るのも……という感覚でここにいるのだ。ちなみにモルガンズは目を輝かせている。ルフィ着弾からずっとそうだった。

「あ、あの、すみません。僕が姉に会いたいと言ったせいで」

意を決した、という調子でルフィが連れてきた青年が声を上げる。センゴクはそんな

彼に対し、いや、と首を横に振った。

「あなたは何も悪くはない。家族が栄誉を受ける式典だ。むしろ出席して欲しいと思うくらいでさえある。我々は市民を守ることが役目であるが、それは非人間であれという意味ではない。家族を大切にする気持ちをも、海軍は蔑ろにはしない」

一息。

「あなたの姉は優秀な海兵だ。正義のコートを纏える立場であるということは、相応の責任が勿論あるがそれ以上に海軍という組織がその海兵の“正義”を認めたということでもある。細かな事情については承知しておらず申し訳ないが、あなたの姉は我々の誇りだ。そこだけは信じて欲しい」

誇り、という言葉を受けて、女性海兵が僅かに涙ぐんだ。単身で海軍本部の門戸を叩き、ここまで来たのだ。それをこうも真正面から称賛されれば、込み上げるものがあるのだろう。

「故に、その件については問題はない。迷子の親探しも、先日の海賊襲撃の被害者の手助けについてもだ。それはむしろ海兵としては実に正しい振る舞いである。我々はただの戦う集団ではないのだ。か弱き人々に寄り添い、共に在ることこそが大前提だ」

ただし、とセンゴクは言う。

「そこには、信頼がなくてはならぬ。時間というものはその最たるものだ。なあ、ルフィ

中佐。いつも遅刻を繰り返す海兵が、襲われる街から助けを求められたとして、『すぐに行く』と、そう応じたとして。……その言葉に、どれだけの信頼がある？」

「……………」

「約束の履行を積み重ねて、ようやく『信頼』は築かれる。お前が今回成し遂げたことによつて、お前に対する『信頼』が一つ、積み上がった。しかしそれは、一瞬で崩れ去る脆いものなのだ」

流石のルフィも、沈黙して話を聞いている。知らず、周囲の者たちもセンゴクの言葉に聞き入っていた。

「お前がすべきだったのは、他の海兵の手を借りることだった。一人で動く必要などない。我らは組織で、市民を想う気持ちは皆同じなのだから。……故に、遅刻については顛末書の提出だけにしておく」

顔を上げるルフィ。その彼に、ただし、と彼は言葉を続けた。

「天井の穴は別だ」

あ、ヤバイ。

ウタもそうであるが、この場の全員が確信し。

そつと、示し合わせたわけでもないのに全員が耳を塞いだ。

「来るなら扉から来いこの馬鹿者が!!!! あのと天井の修繕にも金がかかるとの件については貴様の給料から修繕費を天引きする!!!!」
 「!!!!」

建物が揺れるのではないかという程の怒声から、ルフィへの説教が始まる。その光景は、モルガンズによって次の日のニュースの一面写真に使われた。



説教を終えたルフィは、あはは、と笑いながら建物を後にしていた。全く堪えていない様子に、ウタは逆に安心する。

「いやー、怒られた。けどまあ、時間については気をつけるよ」

ただ、こうして意識改革が少しでもできたなら成功なのだろう。……どうせ彼のことだ。すぐに何か問題が起こるとそちらに向かっっていくのだから。

「とりあえず、腹減ったなー。食堂もおっさんがどうなったか気になるし、食いに行こうぜ」

「いいよ、じゃあ勝負する?」

「いいぞ、俺の517連勝目だな!」

「む、私の517連勝目でしょ!」

二人しての、いつものやりとり。当たり前の光景故に海兵たちは特に何も言わないが、この場には約一名、食いつく人間がいる。

「へいルフイの旦那! 今日も楽しませてもらったぜ!」

モルガンズだ。彼は翼で器用にサムズアップしながら、こちらへと歩いてくる。

「今日は遅刻したのは何でだ?」

「色々あったんだよ」

平然とルフイは受け答えしているが、ウタはこの鳥が苦手だ。ゴシップだろうと何だろうと、面白ければなんでも記事にする。一度ルフイとの熱愛スクープを流された時は大変な目にあつた。

何というか、そういうのはまだ、こう。

気持ちの整理が、ついていないのだ。

「ああ、いた!」

気持ちウタがモルガンズから距離を取ったところで、そんな声が聞こえた。見ると、若い女性と一人の少女がいる。少女の方は、その手に一輪の花を持っていた。

「あの、今日は本当にありがとうございました！」

女性が頭を下げる。ルフィはいいよいよいよ、と手を振った。

「会えたなら良かったんだ」

そんな彼に、少女が手に持っている一輪の花を差し出す。

「ありがとう」

「ししし、いよいよ」

その一輪の花を受け取り、ルフィは笑う。その親子は帰り際にもう一度礼を言うと、手を繋いで帰っていった。

その姿を見送って、モルガンズが問う。

「ありや、さつき言ってた迷子探しかい？ 中佐の立場になる海兵がすることじゃねえだろう？」

「階級は関係ねえさ。おれの手の届くところで泣いてたから、手を引いた。それだけだ」
伸びをしながら言うルフィ。彼はそのまま歩き出した。その背を追おうとしたウタに、モルガンズが問いかける。

「なあ『歌姫』。ありや、本気で言ってるのか？」

「ルフィが嘘を吐けると思う？」

そう言い切ると、ウタはルフィの背を追っていく。

モルガンズは、顎に手を当てて何かを考え込んでいた。



食堂は、いつも通り盛況だった。いや、いつも以上かもしれない。普段から常にキャパシテイオーバーな状態なところに、新たなコックが加わったことは非常に大きい。

「はい、お待ち！」

ルフィが紹介した男性は、額の汗を拭いながらも笑顔で働いている。その姿を見つけて、ルフィが声をかけた。

「おっさん、ここで働けるようになったんだな！」

「ルフィさん！ はい！ 採用していただいて……ありがとうございます！ 恩に着ます！」

「大袈裟だなア。まあいいか」

笑うルフィ。その彼に、厨房の責任者でありルフィがおばちゃんと呼ぶ人物が声をかけてきた。

「ルフイちゃん、いいのを紹介してくれてありがとうね！　言うだけあるよ！」
「ホントか！」

「ああ！　これは礼だよ、奢りだから一緒に持つて行きな！」

「おお、ありがとう！」

ルフイが注文した大量の肉の定食に、更に肉が大量に積まれた皿が追加される。男はそのトレイを持ちながら、ありがとうございます、ともう一度ルフイに感謝の言葉を述べてルフイへと手渡した。

その光景を隣で見ていたウタは、ルフイとは違って全体的にヘルシーな定食を手にしつつ、ねえ、とルフイに言葉を紡ぐ。

「あの人さつき言ってた人？」

「ああ、そうだ。コックだつて言うからおぼちゃんに連絡したんだよ。いやー美味そうだな！」

当然のように食堂の一角に座る二人。ルフイは既に目の前の食事に夢中だ。

(自分がどれだけあの人にとっての救いになったか、わかってないね)

隣で美味しそうに定食を食べるルフイは、おっさんやるなーなどと声を上げている。

住む場所を奪われ、明日さえも見えない中でルフイがやったことは救済そのものだ。

ルフイはそれを当たり前前だと言うだろう。彼はいつだつて、そう言つて誰かを救つてく

れるのだ。

(全く、人の気も知らないで)

ウタ自身も、彼に救われた一人だ。シャンクスに置き去りにされ、周囲に当たり散らし、荒れるだけだった自分の側に居てくれた人。

だから、ウタはルフィの隣に居ることを決めた。

いつか、彼がくれた救いを返したいから。

そうしてから、ずっと隣にいたいから。

「ん、どうしたウタ。おれの顔に何か付いてるか？」

「うん。ソースが付いてる。ちょっと待ってね」

おしぼりを手に取り、顔を拭いてあげる。世話が焼けるなり、とウタは笑った。

ルフィは嫌そうにしているが、抵抗はない。いつものことだ。

そんな、周囲の人間がブラックコーヒーを注文していくようなやりとりをしていた二人に、とある男女が歩み寄ってくる。

「あの、ルフィさん。今日はありがとうございました」

そう言ってきたのは、ルフィと共に会場へと突っ込むという罰ゲームを受けた青年だ。その隣には彼の姉であり、二人の部下である少尉の姿もある。

「いいよ、おれも行く途中のついでだったんだし」

「むしろ謝らないと……ごめんなさい」

ウタが頭を下げる。彼女はルフィに抱えられてあのふぎけた移動について慣れてい
るのだが、流石に一般人にあればキツいだろう。部下の中には……というか大多数が、
ルフィが運ぼうとすると走って行きますと拒否している。

ちなみに単純な拒否もあるが、ウタ以外が抱えられるのはちよつと……みたいな妙な
考えが二人の部隊にはあるので専らルフィ式ゴム移動はウタを抱えてのものにな
る。追いかける部下たちはそれだけでやたらと鍛えられていた。

「いえ、姉があなた方のような方の下で働いていると聞いて安心しました。父からは連
れ戻せとも言われましたが……」

ちらりと、青年は自身の姉を見た。彼女の肩には、正義のコートがかかっている。

「充実していて、音楽も続けているようなので。僕は帰ろうかと」

「まあ……たまに連絡はするから」

バツの悪そうな表情で言う少尉。そういえば、かつて父と喧嘩して海軍に入ったとウ
タは聞いたことがある。その時、ウタもまた父であるシャンクスに置き去りにされた過
去から自分も父と揉めていると言い、それがきっかけで仲も良くなった。

「お父さんと喧嘩した、って言うってだけど。何が理由だったの？」

「音楽性の違いです。その……私はロックとか、そういう流行りの曲が好きで。でも父

はクラシックこそが至高だっという頑固ジジイなもので」

頬を掻きながら言う少尉。まあ、ジャンルの好き嫌いで揉めるのは音楽関係者あるあるである。一家で音楽家、それもエレジアともなればそういうこともあるだろう。

「でも姉さん、流石にバイオリンでロックは行き過ぎだと思う」

「いやだつてロックは自由だし」

思った以上に少尉がロックだった。

「まあでも、ここで大佐と一緒に色んなライブをやったりして私も考えが変わったから。

……あ、そうだ」

ふと、思いついたように少尉が言う。食堂の奥に置かれたピアノを示し。

「久し振りにあんたのピアノ、聴かせてよ」

「え、いいけど。……どうせなら、歌も欲しいですね」

ちらりと、青年がウタを見る。おつ、とルフィが声を上げた。

「ウタの歌が聴けんのか？」

その声に、周囲の海兵たちが反応する。

「おい椅子どけろステージ作れ！」

「飯は急いで詰め込め！……ああいや味わいながら食え！　ただ急げ！」

「ピアノ動かすから手を貸してくれ！」

問いかけたはずの言葉は、一瞬にして真実になった。今更やらないなんて言えず、あー、とウタは声を上げる。

「ま、いつか。私とルフィも、少尉も昇進して。ナミの入隊式もあつたし、そのお祝いということで」

おおつ、と周囲から歓声が上がる。中には廊下に出て呼び込みを始める者もいる。

ウタのファンは非常に多い。それが食堂で、ゲリラライブをするのだ。ここぞとばかりに海兵たちが食堂内にステージを作成する。

「じゃあ、私はバイオリンで」

青年が持っている鞆を受け取り、少尉が中身を取り出す。使い込まれた楽器が現れた。

「姉さん、鈍ってないよね？」

ピアノの前に座りつつ言う青年。その彼に、少尉は不敵な笑みを返した。

「こちとら大佐と一緒にライブしてるんだから。それよりあんた、大佐の曲を弾けるの？ 楽譜は必要？」

「必要ないよ。エレジアでも『歌姫』の歌は評判だから。僕も何度も聞いた」

「えっ」

ステージに上がり、マイクの準備をするウタは青年の声に驚きを返す。青年は笑っ

て。

「エレジアは、あなたが来る日を待っています」

そう、言った。

世界でも有数の音楽の本場であるエレジア。その住民にここまで言わせる。その事実に、食堂の海兵たちも歓声を上げる。

ウタは微笑み。

「ええ、いつか必ず」

そして、彼女はマイクを手を取った。

ふと、視線がそちらを向く。

観客の一角に混じり、近くの海兵と肩を組んでいる幼馴染の姿。

ぱちん、と。

その幼馴染に、右目で一つウインクを飛ばして。

「さあ、いくよー！」

急遽、〃歌姫〃のライブが始まった。



元帥室。書類仕事にひと段落がついたため、センゴクは息を吐いた。その彼の視界に入るのは、今日の新聞だ。

『海軍のニューヒーロー“麦わらのルフィ”はお騒がせボーイ!』

そんな見出しと共に載せられている写真は、センゴクが正座するルフィを説教する写真だった。記事の中には、自分の説教の内容についても全て載せられている。

一見するとただルフィが遅刻して騒ぎを起こしただけのように見えるが、二面を読むとその印象がひっくり返る。

そこにはルフィに一輪の花を渡す少女の写真と、姉弟の再会を見守る彼の写真があり、式典に何故遅れたのかが書かれている。

全く、とセンゴクは呟いた。

「貴様の孫はどうなつとるんだ」

窓の外、雲一つない青空を見る。そこに、任務で本部を離れている同期の姿を幻視した。

煎餅を齧りながらサムズアップしている。満面の笑顔だ。死ね。

「だが、貴重な人材だ。……大佐がいるのであれば、まあ、ガープのようなことにはなら

んだろう」

あの「歌姫」も実はああ見えて中々ヤバい気質をしているが、今の所お互いが上手いことバランスをとっている。願わくば、それが続いて欲しいところだ。

そして、彼は一つの報告書を手に取る。それは、政府加盟国であるアラバスタについての報告書だ。

「反乱軍か……」

雨が降らず、国が荒れているとは聞いていた。だが、あの国の王はセンゴクも知っているが偉大な王である。それが、どうしてここまで。

自然現象が相手だということもあるだろう。だが、こうまで拗れるものか。

「一つ、調べてみるか」

丁度、アラバスタの周辺海域が不安定な状態だ。

派遣するのは誰に、と思ったところで、改めて新聞が目に入る。

「若過ぎる……が、そうだな。任せてみよう。あの二人とその部下なら、なんとかするだろう」

そう決めると、センゴクは命令書の作成に取り掛かる。

この決定が、後のアラバスタ王国の歴史に刻まれる大規模な事件に繋がることを。

誰もまだ、
気付いていなかった。

新衣装

「じゃーんー！」

海軍本部のとある一室。その中にそんな声が響き渡った。

声の主は海軍本部准将にして“歌姫”の異名を持つ女性、ウタだ。彼女は両手を広げ、満面の笑みを浮かべている。

「どう、どうっ？」

いつになく上機嫌なウタ。その視線の先にいるのは麦わら帽子を被った青年だ。

「おお、格好いいぞ！　今回は黒なんだな！」

その青年は上機嫌な少女の衣装を見て笑みを浮かべる。彼の言う通り、ウタの今回の衣装は黒を基調としたものだった。紅白のシャツの上に黒いジャケットを着ており、更に海軍本部の将校であることを示す正義のコート。その紅白の髪と合わさって非常に格好良く、そして可愛い姿になっている。

「うんうん、他には？」

「ん？ いやいつも通り似合ってるけど」

身を乗り出すウタに対してそんなことを言う青年——モンキー・D・ルフィ。彼もまた海軍本部において大佐という地位にあり、「麦わらのルフィ」という異名を持つ。ウタの幼馴染でもある彼はウタの新衣装ができることと立ち会うことが暗黙の了解となっていた。

「もつとない？ 美しいとか綺麗とかビューティフルとか」

「いやそれ全部同じじゃねえか？」

冷静なツツコミだった。だが更に身を乗り出すウタに対し、ルフィが顔を顔を逸らす。

「いや……うん、綺麗……だぞ？」

そんな彼の様子を見て、一歩引くウタ。ふふん、と彼女は上機嫌に微笑む。

「あつ、照れてる照れてる」

「照れてなんかねえよ！」

「出た！ 負け惜しみ〜♪」

楽しそうに笑うウタ。そしてそんなウタに噛み付くルフィ。

実に平和な光景であるが、この二人は「新時代の英雄」とまで渾名される海軍期待の

星である。同時にとんでもない問題児コンビであるのだが、それは今は置いておこう。

いつも通りのじやれあいだ。故に他の者たちもスルーしていたのだが、この場に居合わせた一人が声を上げる。

「いや確かにビューティフル！　今のあんたを前にしたら『海賊女帝』もたじろぐだろうな！」

声を上げたのは一羽……いや、一人のアホウドリだった。『新聞王』とも呼ばれるその男——モルガンズの言葉を聞き、ウタがルフィの方へと言葉を紡ぐ。

「ルフィもあれくらい言えるようになってよ」

「いや無理だろ。想像できるか？」

「お世辞を言うルフィ……」

想像する。

「今日もビューティフルだなウタ！　ハンコックなんて目じやねえよ！」

想像上のルフィは目がキラキラと輝いていた。誰だこいつ。

「ぶっ、あははははっ！」

「いや想像でそこまで笑うか？」

「ご、ごめんね。なんか、うん、凄かった」

思わず呼吸困難になるところだった。ウタは思わず目尻に浮かんだ涙を拭いつつ、

はー、と息を吐く。

「とりあえず、ああはならなくてもいいけど……もうちよつとルフィは褒め方を覚える
こと」

「えー」

「えーじゃない」

「いやあのお二人さん？ 無視しないで欲しいんだが」

再びモルガンズが片手を挙げて言葉を紡ぐ。ああ、とルフィが頷いた。

「何しに来たんだ？」

「いや今回はちゃんと仕事だけ旦那。ほれ許可証」

「今回はちゃんと……ねえ」

許可証を見せるモルガンズに対し、二人して胡散臭そうな視線を向ける。この男の出
す記事で何度か騒動をに巻き込まれている二人としてはどうしても疑ってしまうのだ。

「いやそんな顔するなよお二人さん！ 今回は『歌姫』のライブポスター撮影だろう！

うちにも派手に記事を載せる予定だからな！」

「んー……まあ、それはわかっているけど」

ウタが煮え切らない様子で言う。

この新衣装を着てのライブ。その告知文をモルガンズが社長を務める『世界経済新

聞社”が発行する新聞にポスターと併せて掲載の予定なのだが、どうにもこの男は信用できないのだ。

まあ、当たり前である。『ネタないから熱愛報道する』なんて言う奴を信用できるわけがない。

「お前なア……。おれはいいけど、ウタに迷惑かけたら今度こそぶつ飛ばすからな」

「あ、それは身に染みて理解したから大丈夫だ旦那」

「ならいいけどよ」

モルガンズの言葉に対し、ルフィが頭を掻きながら言う。

ちなみに一度世界新聞社の本社、その三分の一が吹き飛ぶ事件が起きたことがある。その加害者と被害者が丁度この場にいるのだが、二人の感情は非常に乾いたものであるから不思議である。

「まあとりあえず写真だ。何枚か取らせてもらうぜ 歌姫」

「ん、じゃあ行つてくるねルフィ」

「おうー！」

すぐそこであるというのにそんな会話を交わす幼馴染。その二人を見ながら、思わずといった調子でモルガンズが呟く。

「……………これ熱愛報道してるがおれ悪いのか？」

幸いというべきか、誰もその眩きには反応しなかった。

ウタが撮影の準備を進めていく。ポーズなど、カメラマンと確認しなければならないことはいくらでもある。

その光景を見守るルフィ。近くの椅子に彼が座ろうとしたところで、部屋のドアが開いた。

「おお、ここにいったか」

現れたのは一人の老人——いや、*“英雄”*。

ルフィの祖父であり、*“海軍の英雄”*とまで呼ばれる伝説の海兵ガープであった。多くの海兵が彼を見ると思わず姿勢を正す。実際部屋の中にいた広報部門の海兵たちは姿勢を正している。

だが、ルフィとウタは違う。

「げっ、じいちゃん」

「げっ、ガープさん」

全く同じリアクションだった。腰が引けている。共通のトラウマがそうさせたのだ。

「げっ、とはなんじゃげっ、とは。全く、折角荷物を持ってきたやつたというのに」

息を吐きながら言うガープ。その手には大きめの紙袋が下げられていた。その彼の言葉に対してルフィが首を傾げる。

「荷物？」

「お前の新しいスーツじゃ。この間駄目にしたじやろう」

「あー」

得心がいったというように頷くルフィ。視界の隅でモルガンズが顔を逸らしていた。そのスーツを駄目にした一件こそが彼の本社の三分の一壊滅事件である。

「しかも喜べ。今回はわしとお揃いにしてやったぞ」

「えー」

鈍い音が響いた。ルフィが頭を押さえて呻く。

「痛えー！」

「一応サイズは合っておるはずじゃが、確認しておけ。スーツはあの一着しか持つておらんかったじやろう」

「スーツあんま好きじゃねえんだよなア……。動き難いし」

「ガープか紙袋を受け取りながらそんな言葉を漏らすルフィ。そんな彼に言葉を紡いだのはウタだった。

「いいじゃん！ 着なよルフィ、一緒に写真撮ろ！」

その表情は期待に満ちていた。ルフィはそんなウタの表情を見て逃げられないと悟る。

「……わかったよ」

ウタの撮影であつたはずなのに、なんでこんなことに。彼にしては珍しく、ルフィはボヤいた。



正直、スーツというものがルフィは苦手だ。動き難いというのもあるが、どうこのネクタイというものが面倒なのである。

結局、幼馴染に頼ることになってしまう。

「あ、こら動かないで。形が崩れちゃう」

「……悪イ」

上手くネクタイを結べないルフィを見かねてウタがルフィのネクタイを結んでくれる。ルフィは顔を上に向け、できるだけ動かないようにしていた。

「しようがないんだから」

言いながらも、その声色は弾んでいた。そしてウタにネクタイを締められたルフィは

思わず首元に触れる。

「締めすぎじゃねえか？」

「そんなことないよ。うん、バッチリ！」

親指を立てるウタ。周囲を見ると、ガープも頷いていた。

「よく似合っておる」

満面の笑みだ。以前は黒のスーツであったが、今回着たのは白いスーツだ。それもガープと同じデザインのものである。

「こうして見ると、やっぱり血の繋がりを感ずるなあ」

「自慢の孫じゃからな」

モルガンスの言葉に対し、自慢気に言うガープ。そのまま彼はルフィへと問いかけた。

「サイズはどうじゃ？」

「うん、大丈夫みたいだ」

「前のよりは頑丈にしてくれと言ってある。まあ、多少は大丈夫じゃろう」

「そっか。ありがとうじいちゃん」

ルフィの礼。ええわい、とガープが手を振った。

「これぐらい安いもんじゃ」

その表情には優しさが宿っていた。そしてルフィに正義のコートをかけたウタが、そんなガープに向かって言葉を紡ぐ。

「じゃあガープさんもこっち来て。一緒に写真撮ろう！」

「む、いいのか？」

「え、なんで？」

「そのつもりで来たんじゃないのか？」

ある意味ガープらしくない、確認するような言葉に対してウタとルフィが逆に首を傾げる。

その時、一瞬。

ほんの一瞬だけ、ガープの瞳が潤んだ。

「いや……そうじゃな。よし、撮るか」

ウタのポスター撮影のはずが、何故か撮影大会になっている。

三人の写真も撮ったし、モルガンズや他のスタツフも交えた写真も撮られた。勿論ウタ単独のものも撮ったし、ルフィやガープだけの写真の撮影まで行われることになる。

確かだったのは、皆が笑顔であったということだ。

——そして、後日。

「見ろセンゴク！ わしの孫たちとの写真じゃ！」

同期の友人にこの日の写真を自慢する『海軍の英雄』の姿があったり。

「なんかポスターが私とルフィ、二人の写真になってるんだけど」

「本当だな。ウタのライブなのに」

ウタのライブの告知ポスターだというのに二人がポーズを決めたものが採用されていたり。

「いや……それよりも」

「いつの間に撮ったんだ？」

ルフィのネクタイを直すウタの写真。それと共に『熱愛発覚!!』の文字が踊る新聞が発行されていたりと。

「油断した……」

「飽きねえなア、あいつ」

今日も、世界は平和だった。

逃亡時代

あなたのパンケーキ

海軍とは世界政府の刃であり盾である。その力は市民を守るために振るわれるのであり、悪の進撃を阻むためにある。

そして軍である以上、一定の規律が存在する。

それは様々だ。この海において我が物顔で振る舞う海賊たちにさえ、自分達の中でルールを定めている。それは組織の崩壊を防ぐためには必須であり、ここを怠る海賊は例外なく自滅という悲惨な結末を迎えている。

そして海軍。彼らに求められる規律は、文字通り秩序のためのものだ。そこには厳しい罰を課せられるものもあるし、逆に自身の性根を定めるためのものもある。

だが、いくつか。

罰則はなく、何なら明文化もされていない。しかし、海軍において明確に誰もが守るルールがある。

それは、祝い。

『誕生日』という、その者が生まれ落ちた日を祝福することは、誰もが必ず行っていた。

「はい、ウタ！ 私からはこれ！」

「わ、ありがとうナミ！ 可愛い服！」

海軍本部の食堂。いつもなら混雑する昼食時を除けば、夕食まで人が少なくなるその場所に、大勢の海兵たちの姿があった。

その中心にいるのは、一人の女将校である。

“海軍の歌姫”こと、ウタ。まだ十代の若さでありながら彼女の幼なじみと共に数々の大事件を解決しており、その名は既に世界中に轟いていると言っても過言ではない。

一部では英雄とも称される彼女であるが、今その彼女の週には無数の花束とプレゼントの入った箱、手紙が置かれていた。

「それにしても、凄い贈り物の数ね」

ウタの周囲にある贈り物を見て、ナミが驚きを込めていう。

東の海において起こった、海軍の不祥事も含むとある事件。かつて偉大なる航路で暴れていた魚人……アーロンの事件をウタと彼女の幼馴染が解決してから、二人の力にな

りたいと海軍に入隊した彼女は、ウタの誕生日を祝うのは初めてのことだ。昔からの彼女部下や同僚にとつては見慣れた光景だが、やはりインパクトは大きい。

「まあ、私は広報の意味もあるから。人目につきやすいし」

「それだけじゃないと思うけどね」

言いつつ、ナミは机の上に広げられている無数の手紙のうちの一つへと視線を向ける。

一番多い言葉は、『ありがとう』だ。

元気が出た、ライブが良かった、歌が良かったという歌姫としての彼女への感謝の言葉は確かに多くあるし、それらが大多数を占めている。

だが、中には海兵としての彼女に救われた者も勿論おり、そう言った手紙も数多くある。

「あ、これビビからだ。ビビのお父さんも……わ、凄い。綺麗なネックレス」

知り合いの名を見て、ウタが笑顔になる。

アラバスタ王国。偶然からとある秘密結社に潜入していた彼の国の王女であるビビを救い、王国乗っ取りというとてもない野望の実行寸前まで行っていた。王下七武海の一角であるクロコダイルの存在を突き止め、それを阻止したのは記憶に新しい。

あの時、クロコダイルを当時海軍本部中佐であったウタの幼馴染が激戦の未倒すも、それでは戦いの狂気は収まらなかった。

「ね、見て見てナミ！ アラバスタの復興、順調だって！」

「良かった……大変そうだけど、皆、いい笑顔ね」

同封されていた写真では、アラバスタの民が満面の笑顔を浮かべていた。

あの日、あの戦いを止めたのはビビの想いだ。しかし、そこに至る切欠には戦場に響いた歌声が影響していたことは間違いない。

銃弾飛び交う戦場の中、ウタはその魂を込めて歌い続けた。

いつしか、武器に迷いが生まれ。そこに、王女の声が届いたのだ。

『『また来て欲しい』、だって。勿論行きたい！ ねえ、慰問ライブとかダメかな？』

「どうだろう……私も行きたいけど、ウタの遠征ライブって結構スケジュールいっぱいじゃない？」

「結構先まで詰まっていますね。あ、でも、立ち寄る形ならいけるかも」

部下の一人がスケジュールを確認しながら言う。いいね、とウタは笑った。

「上には私からお願いでおくから、みんなで行こう！」

「いいわね！ ビビにも会いたいし！」

ナミの言葉を受けて、周囲も盛り上がる。ウタの部下たちでこの場にいる者は、全員がああのアラバスタの戦いを知っている。思い入れも大きいのだ。

「あの宴会凄かったよな！ 大佐はもう、食うわ食うわで！」

「でかい戦いの後だといっつもそうなんだけど、アレ物理法則どうなってるんだ？」

「後で聞いたらあの宴会、本来かなり静かというか、厳粛なもんらしいぞ」

「え、それいつものノリでやって良かったのか？ 不敬罪とかにならない？」

「王女様笑ってたからセーフだセーフ」

「まあ、大佐に大人しく飯食えは無理だろうしな」

わいのわいのと盛り上がる。そこで出た単語に、ナミが思い出したように言葉を紡いだ。

「そういえば、ルフイは？」

「朝からいないの。さつき会った時、『何もねえぞ』ってバレバレの嘔吐してたから何かあるんだと思うけど」

何もねえぞ、と言った時にルフイの真似をするウタ。目を逸らし、下手くそな口笛を吹く様子にナミを含めて似てる、と周囲の者たちが笑った。

「大佐嘘下手だなあ」

「だからいいんじゃない。たまに本気で言ってるのかどうかそのせいで判断に迷う時あるけど」

「実は大佐って冗談あんま言わないから、割と本気なこと多いんだよね」

ちなみであるが、ウタの部隊は他の隊に比べて非常に空気が緩い。緊急時や任務中

は軍隊らしい動きをするのだが、普段はこの部隊のトップ2が敬語が嫌いなのもあって非常にアットホームである。

ちなみに上層部はそんな雰囲気肯定できないが結果を残しているので咎めるのは、と複雑な思いを抱いている。まあそんなものだ。

「まあ、ウタの誕生日だしね。流石に何かあるでしょ」

「去年は海王類を狩ってきてプレゼント、って言ってたけどね」

去年のことを思い出し、ウタは言う。かなり巨大な海王類を持って帰ってきた幼馴染は満面の笑顔だったため、何も言えなかった。

最終的にはウタを含めたその日が誕生日である海兵のための祝いの料理となったが、あれを女性の誕生日の贈り物にするのはどうかと思う。

ちなみに巨大な海王類を狩るのに無許可で軍艦を出すわ、狩ったら狩ったでそれを担いで街中を堂々と歩いているわで大騒ぎとなり、それに手を貸した関係者一同がセンゴクによってお説教を食らった。ルフィにはゲンコツが複数叩き込まれている。

余談であるが、『歌姫の誕生日祝い！ 海軍の英雄はプレゼントさえも桁違い！』なんてタイトルで一人で海王類を担ぐルフィの姿が新聞に掲載され、彼の人気がまた上がったらしい。センゴクは胃薬を飲んだ。

「今年は何かなー」

るんるんと楽しそうに笑いつつ、手紙やプレゼントを確認するのを進めるウタ。お熱いことで、とナミが笑ったところで、奥の厨房から声が聞こえてきた。

「よしできた！」

「魂を込めた逸品だ！」

「間に合ったあー！」

今日の祝い事のため、ウタの部下たち数人がケーキを用意すると朝から厨房を借りて籠っていたことは知っていた。ナミと顔を見合わせ、厨房の中へ入っていく。

「あ、ルフィ」

中を見ると、その隅の方に幼馴染の姿があった。彼はびくりと体を震わせると、何かを後ろ手に隠す。

何を、と言いかけたところで、ルフィは見るよ、とテーブルの上に置かれたケーキを指差した。

「物凄えケーキだぞー！」

それは確かに、物凄いケーキだった。

十段……いや、十一段か？ 高く積み重ねたケーキは白のクリームを基調とし、段ごとに様々な意匠が施されている。更に特徴的なのは、その格段に配置された砂糖菓子の人形だ。

メガネをかけた兵もいる、小太りの兵もいる、銃を構えた兵も、刀を構えた兵も、オレンジ髪の手兵も、魚人も、手長族も、足長族も……それは、ウタの部隊の者たちの特徴を示したものだつた。

「凄……い……」

思わず感嘆する。ケーキの頂点には、紅白の髪的女将校と麦わら帽子の海兵がいた。

「構想半年、制作時間準備含めて同じくらい……！ 間に合つて良かった……！」

やり遂げた男の顔で言うのは、手長族の海兵だ。偶然からルフィが助け、海軍に誘つたことから入隊した。元々コック、それもスイーツが得意であつたらしく、ウタを筆頭に部隊の女性陣は彼の作るお菓子のファンである。部隊外にもファンがおり、当初は遠巻きに見られていたのが嘘のようだ。

「まあ、そもそも最初は三段くらいで始めたんすけどね」

「気が付いたらこうなつてたね。……反省はしてる！ 後悔はない！」

笑つて言うのはイワシの魚人と、ミンク族の女性だ。前者は東の海で、それこそナミが海軍に入るきっかけとなつた事件で。後者はウタのライブに正体を隠して参加していたが、その際に起こつた海賊の襲撃事件の際に協力し、ウタが誘つたことで入隊した。

一部では『こつた煮』とも囁かれるウタの部隊は、トップの二人がその手の差別について一切気にしないし何ならルフィは面白いと思つたら次々と勧誘するせいで海軍で

も異色の部隊となっている。

根深い差別のあるこの世界では、魚人との友好の意味も持つとされるジンベエの七武海加入など、多民族間の関係良化には世界政府も色々と骨を折っている事柄である。実はこの部隊は、そういった方面でも非常に多くの期待を集めていた。

「かわいい！ 凄い！」

「だろ！ こいつらすげーんだ！」

部隊のトップ二人がそれを見て大はしやぎし、周囲の者たちも三人がかりの力作に目を輝かせていた。三人も満足そうに笑っている。

「これ、おれか？ こんなに太ってる？」

「むしろ人形の方が痩せてないか？ お前また太っただろ？」

「ねえこれナミだよね！ 凄い、そっくり！」

「ウタとルフィも格好いいじゃない！」

「麦わら帽子が凄えんだ！ ありがとうな！」

「いやしかし凄い特徴捉えてるなこれ。……あのさ、これもしかしておれ？ 格好良すぎない？」

「そんなことないわ」

口々に感想を言い合う部隊の者たち。よし、とウタは気合を入れ直すように声を上げ

た。

「ライブの後の楽しみが増えた！　ありがとう！」

どういたしまして、と三人も笑う。

ウタは「海軍の歌姫」とも呼ばれる立場だ。世界的にも人気の高い彼女の誕生日に、ライブを開かない理由が政府にはない。

そういう意味もあって、この後彼女の誕生日ライブをする予定だったのだ。部隊の者たちも、設備を含めてそのサポートにあたる。

うんうんと頷くウタ。その彼女は、それで、とルフィに向かい合った。

「何を隠したの、ルフィ？」

「えっ、いや、その」

「えいっ」

「うわっ！」

目を逸らした隙をつき、ウタはルフィの後ろに隠されていたものを手に掴んだ。

そこにあつたのは、一枚の皿と……歪な形の、焦げてしまった一つの物体だった。

「何それ？」

ナミが首を傾げる。ルフィは目を逸らしたままだ。ウタはその皿の上に乗ったものを見て、もしかして、と言葉を紡いだ。

「パンケーキ?」

びくりと、ルフィが体を震わせた。料理担当の三人が、それぞれ気まずそうに目を覆う。

「いや、その……去年は、怒られちゃったから。仏のおっさんに、何がいかって聞いたら、『彼女の好きなものを作ってやれ』って言われて……」

何人か……というかほぼ全員が、内心で『元帥グツジョブ!』と親指を立てていた。去年のあれはあれで楽しかったが、あれはあの後説教が待っていた。それは勘弁願いたいところである。

「ふーん」

「……すまねえ」

「大佐、不器用だからね。ライブ中に何とか完成させられれば、と思ったんだけど」

ミンク族の女性がフォローする。ウタはもう一度、皿の上に目を落とした。

黒焦げで、形も歪。多分、美味しくはない。ウタの好物は、ホイップまじまじのパンケーキだ。これは多分、その対極にある。

「えっ」

「えつと」

近くに視線を送る。そして、あつたあつた、という言葉と共にフォークを持つと、一

口サイズに切り取った。

えっ、とルファイが驚いた表情を浮かべる。だが彼が何かを言う前に、ウタは躊躇なくそれを口にした。

もぐもぐと、咀嚼する音が響く。周囲も、成り行きを見守っていた。

「うん、苦い！」

第一声がそれだった。だよな、とルファイが肩を落とす。

「中に火が通り過ぎてるし、外はザラザラで苦いし」

「……………すまねえ」

「でも、美味しいよ」

えっ、とルファイが顔を上げる。

「ルファイが私に作ってくれたんだもん。美味しいに決まってる」

ルファイが困惑していた。そんな彼の珍しい表情が面白くて、ウタは思わず笑ってしまった。

だが、何を困惑しているのか。あのルファイが作ってくれたのだ。ちゃんと自分の好きなものを覚えていて、それで。

嬉しくないわけが、ないではないか。

「ということ、次に期待！」

ぐつ、と親指を立てて言う。ルフィはああ、と笑った。
「任せとけ！」

その光景を見て、周囲の者たちも笑う。

その日のライブは、大盛況だった。その後は大宴会だ。
様々な者が出入りし、大いに盛り上がる。

それは、一つの儀式だ。

生まれてきたこと。

生きていること。

そういう、当たり前のことを当たり前として祝うための。

去年も、今年も、来年も。

こうして、祝うことができますように。

だから、こうして笑うのだ。



目を覚ますと、硬い感触があつた。ゆっくりと体を起こす。

懐かしい夢だった。もう、随分前になる。全然上達しないルフィのパンケーキを、何
度食べたかわからない。

ただ、美味しかった。

苦くても、見た目が悪くても。

彼が作ってくれたのだから、それだけでウタは嬉しかったのだ。

「……………ッ……………」

涙が溢れ、それを拭う。

みんなはどうしているだろう。逃げることに必死で、考える余裕もなかった。

ウタは、そこで初めて隣をみた。大切な人。自分を救ってくれた人。

たった一人の、味方が……………」

「……………ルフィ……………」

そこに、その人はいなかった。

背筋に悪寒が走る。やだ、という呟きが漏れた。

「……………(ぎゃ)……………」

嫌だ。やめて。置いていかないで。

「ルフィ」

あなたに置いていかれてしまったら。

私は、どうしたら。

「うっ」

這うようにしてその場を動こうとしたが、バランスを崩して倒れてしまった。

はは、と乾いた笑いが漏れる。

情けない。

どうして、こんなにも弱くなってしまったんだろう。

こんなに弱くなってしまったのだ。ルフィも、こんな女なんて。

「ウター！」

だが、落ちていく思考は聞こえてきた声でかき消された。

布に包んだ何かを持った彼が、こちらへ駆け寄ってくる。

「大丈夫か？」

「……………ッ」

こちらに彼が屈み込んで来た瞬間、その体を思わず抱き締めた。

自身の体の泥が、彼にも付いてしまう。だが、気にする余裕はなかった。目の前にい

るのが本物だということを、一秒でも早く確かめたかったのだ。

「……怖かった……怖かったよお……」

「すまねえ。ちよつと、探し物してて」

涙を流して縋り付く自分を、ルフィは優しく抱き締めてくれた。優しく、頭を撫でてくれる。

それだけで、胸が温かくなった。

やっぱり、ルフィは凄い。

この人は、こんなにも自分を満たしてくれる。

ルフィさえ、いてくれるなら。

きつと、私は。

「なあ、ウタ」

体を離し、ルフィが布に包んだ何かを手にする。名残惜しく感じながら、ウタはそちらに視線を向けた。

「今日、ウタの誕生日だろ？ すまねえ、あんまりいいのはなかったんだけど」

そう言つて彼が見せてくれたのは、いくつかの果物だった。それをルフィがこちらへと差し出してくる。

そして、彼は言ったのだ。

「おめでとう」

快活な笑顔だった。この絶望的な状況で、彼は笑ってくれた。涙が溢れる。何度も拭うが、止まらない。止められない。

「ごめん、ルフィ。ごめんね」

「何を謝るんだよ。誕生日は祝うもんだろ？」

彼は、笑っている。笑って、くれている。

差し出された果物を一つ、手に取った。

一口、齧る。

果物特有の酸っぱさと、甘さ。

「去年みたいには、いかねえけど」

もう、視界がぐちゃぐちゃで。

首を、左右に振ることしかできない。

逃げ出す前と比べれば、確かに貧相かもしれない。

だけど。

彼がくれたこの果物は、この瞬間、世界で一番の贈り物だった。

「今度はさ、パンケーキを食べたいよな」

こちらの頭を撫でながら、そんなことを言うルフィ。

その優しさが、嬉しくて。

同時にとても、苦しくて。

ごめんなさいと口にする、ウタは悪くねえだろ、と彼は言った。でも、彼の未来を奪ってしまったのだ。なのに、私は。

「……ルファイ」

「ん、どうした？」

涙交じりの声にも、彼は笑って応えてくれて。

その言葉は、漏れ出るように紡がれた。

「大好き」

嗚呼、とウタは思った。なんて身勝手に、なんて愚かで。

でも、駄目だ。

もう、溢れ出た言葉は、止まらない。

「ずっと、昔から」

こんなにも彼を、想ってしまふ。

どうしようもなく、愛してしまっている。

「大好き。ルファイが、大好きです」

みっともない言葉だった。言っではいけない言葉のはずだった。

彼の未来を奪ってしまった私が、こんなこと。

「愛してる。愛しています」

浅ましいと、そう思う。だけど、止まらなくて。

止められ、なくて。

「……なあ、ウタ」

ゆつくりと、彼がこちらを抱き締める。

「おれはさ、ウタに笑ってて欲しいんだ。……おれ、やっと見つけたんだ。おれにとっての『正義』を」

形がわからない、定まらない。

そう言っていた彼の、『正義』の形。

「おれにとつての正義は、ウタが笑っていられることだ。……そうだな、そう」

一度、嘸み締めるように。

「『大切な人が、笑える正義』」

だから、いいんだ。

ルフィは、優しい声でそう言った。

そして、ずっと泣き続ける私を。

こんな、弱い私を。

彼は、ずっと抱き締めていてくれた。

先の見えぬ絶望の中。

この想いと、彼の体温だけが真実だった。

英雄たちの凱旋、そして旅立ち

かつて、世界を驚愕させた一つの事件が起こった。

“王下七武海”が一角であり、砂の国アラバスタを拠点としていたクロコダイルが秘
密裏に計画し、実行を進めていた国家転覆、そして乗っ取り事件だ。

世界政府の関係各国も、海軍の上層部も欺かれていたその一件。最悪の事態まであと
僅かとなったその時でさえ、その真実を知る者は僅かだった。

しかし、その僅かこそがクロコダイルの予定を狂わせた。

“白猫のスモーカー”。

“海軍の歌姫ウタ”。

そして…… “麦わらのルフィ”。

彼らと、彼らが率いる勇気ある海兵たちが、正義を成した。

全ての真実が暴かれた時、この国の者たちは深い、深い後悔を抱くことになる。

だが、王は言った。

“生きてみせよ”

その、偉大なる王の言葉と共に。

後に、歴史に刻まれる戦いが終わった。

そして。

アラバスタ王国は、復興への道を順調に歩んでいく。その最中、一つの依頼が海軍本部へと届いた。

“かつて国を救ってくれた英雄たちへ”

“どうか、礼を言わせて欲しい”



アラバスタからの依頼を受けた海軍本部は、二つ返事で引き受けた。アラバスタの一件はクロコダイルを討ち取ったのがルフィであったこと、その悪事の証拠を掴み、白日の下に晒したのがスモーカーであったことが取り上げられるが、その本質は世界政府の不祥事によるものだ。

故に、ルフィたちに感謝を伝えるための式典を、という彼らの希望に対し、歌姫のライブを行うことを含めて了承を返した。少しでもイメージアップを図ろうという算段である。

だが、当事者たちはそこまで気にしていない。

何より、アラバスタにもう一度行けることにルフィたちは喜んだ。ライブのことに ついても、ウタは二つ返事で応じたのだ。

そして、様々な調整を経た、今日。海岸に着いた彼らは、万雷の拍手と歓声に迎えられた。

「ルフィ大佐〜!」

「歌姫〜!」

「スモーカーさん!」

「こつちを見てくれ〜!」

海岸に降り立つ前から凄まじい熱気が伝わっていたくらいだ。港に降り立つと、より一層その興奮のレベルが上がる。

「やつと着いたな！」

「ビビは元気かな？」

「ふん……騒がしい」

「スモーカーさん、あの、これは一応任務なので」

満面の笑顔を浮かべるルフィとウタの後ろで、いつもの不機嫌そうな表情を浮かべるスモーカーへたしぎが焦った様子で声をかける。だが、彼女の気にし過ぎである。民衆は彼の性格については聞き及んでいるし、気にした様子はない。

ルフィたちにつき、彼らの部下も船を降りてくる。スモーカーの部下たちは海兵の正装を身に纏い、ゆつくりと整列して降りてくる。その姿に、再び大きな歓声が上がった。

最も名が知られているのは階級も高い三人だが、その部下たちもまたこの国にとつては偉大な英雄なのだ。

そして。

「音楽？」

誰かが呟く。スモーカーたちの部下が降り立つと、不意に船内から音楽が聞こえてきたのだ。なんだ、と観衆が思う前にその姿が現れる。

先頭を歩くのは、指揮棒を持ったオレンジ髪の女海兵だ。彼女は楽しげに彼女の身長ほどはある棒を振りながら、後方を進んでくる兵たちを誘導する。

最初は、トランペットを鳴らす海兵たちだ。それに続き、様々な楽器を奏でながら海兵たちが船から次々と出てくる。観衆もサプライズの演奏に、歓声と拍手を送る。

そして最後に現れた姿に、驚きの声上がる。

魚人がいた。手長族がいた。足長族がいた。ミンク族がいた。

この国では見たことがない、異種族の海兵たち。二人の英雄が率いる部隊には、文字通りに人種の垣根などないのだ。

「ばっちりー」

指揮をとる海兵、ナミが笑うと、音楽隊の者たちも後から出てきた海兵たちも皆様にそれぞれが手に持ったものを掲げた。

ウタの役目の関係上、楽器を扱える者が部隊には多くいる。基本的に指揮系統としては准将であるウタが最高指揮官であるが、内実としては楽器を扱ってライブについて役割を持てるものが彼女の指揮に従い、ルフイが勧誘、もしくは戦闘を専門とする海兵たちは彼の指揮下で行動する。

サプライズの演出に、大歓声上がる。地面が揺れるのではないかという歓声の中、一人の女性が歩み寄ってきた。

「サプライズにしては、随分凄いわね」

「お、ビビ」

「ビビ、久し振りね」

現れた人物に、ルフィとウタが反応する。王女様だ、と周囲からも声が漏れた。彼女の隣には超カルガモのカルーもいる。かつて共に戦った仲間たちの再会が、ここに成った。

「せつかく呼んでくれたからな。やろうって皆で決めたんだ」

「どうだった？」

「驚いたわ。もしかして、アルバーナとレインベースでもやってくれるの？」

「ふっふっふ、もつと凄いのをやるよ！」

ねえ皆、とウタが声をかけると、応じる声が上がった。楽しみ、とビビが笑う。そこで、はっ、と何かに気付いたようにウタが声をあげた。

「どうしようルフィ。多分、ビビは王女様だから敬語使わないといけない。ルフィでき
るっ。」

「えっ、ホントか？ 敬語はあんまり……」

そんな二人のやり取りに、ふふ、とビビは笑った。

「構わないわ。あなたたちとは、仲間だもの。……でしょ？」

「もちろん！」

アラバスタを去る日に、彼女とは約束したのだ。
ずっと、仲間だと。

「ビビ！ 元気にしてた!?!」

「ビビ王女、また美しくなった」

「あの式典も良かったけど、今日の格好も綺麗！」

ナミを筆頭に、女性陣が彼女の元を集まっていく。ビビも笑顔でそれに応じる。

そして彼女は、一歩後ろへと下がった。

優雅に、一礼する。

「砂の国に、ようこそ」

その礼に対し、全員で海軍式の敬礼を返す。

歓迎は、大歓声によるものだった。



「久し振りだねルフィくん！」

「カラカラのおっさーん！」

王都であるアルバーナまでは、近くの川岸まで川を昇っていく形をとることになった。その途中で、川岸の町には都度立ち寄り、歓迎を受けている。

進む速度が遅くなるが、これも広報の一環だ。本人たちはかなり楽しんでるが。

そして、ユバの近くの川岸には懐かしい顔があった。かつて、砂嵐に何度も見舞われながらも諦めなかった男。ルフィたちに休息の場所を提供し、僅かではあるが水を分けてくれた人だ。

かつてとは違い、麦わら帽子を被った彼は少しだけ太ったようだ。肌の艶も良くなっている。

「おっさん、ユバはどうだ？ 水はどうなった？」

「順調だよ。キミたちのお陰だ」

「おれは何もしてねえよ。おっさんたちが頑張ったからじゃねえか」

ししし、と笑うルフィ。彼は、そうだ、と声を上げた。

「そうだ、またユバの水くれねえか？ アレのおかげで助かったんだ」

「勿論だ。ちゃんと用意してる。……おいコーザ！」

「大声出さなくても聞こえてるよ」

カラカラのおっさん……トトに呼ばれ、彼の息子が樽を担いでこちらへと歩いてくる。あ、とルフィとウタの二人は声を上げた。

「リーダーだ！」

「いや、あんたたちにそう呼ばれるのは……」

樽を下ろしながら言うのは、かつて反乱軍の総大将であったコーザだ。彼はビビの幼馴染でもあり、かつて彼女がリーダーと呼んでいた相手でもある。

実を言うと、反乱軍との直接の接触は終ぞなかったのだ。そのため、この二人はビビから伝え聞いた彼しか知らない。

「じゃあ、なんて呼べば？」

「呼ぶ必要がある間柄でもないと思うが……コーザと呼び捨てにでもしてくれ」

ウタの問いにそう応じるコーザ。そんな彼の近くでは、ルフィがユバの水の入った樽を担ぎ、部下たちの下へ運んでいた。すぐにでも飲むつもりだろう。

「ちよつとルフィ！ 私の分は飲んじやダメだよ!？」

「大丈夫だ！」

「あんまり信用できないんだけど……」

全く、と言うウタ。その彼女に、すまなかった、とコーザが告げた。

「本当は、おれたち自身で決着をつけなくてはならなかった」

「クロコダイルのことなら、私たちの落ち度だから」

「その通りだな。……海賊は所詮、どこまで行こうと海賊だ。むしろ、野放しにしたことを責められても不思議じゃねえ」

ずっと黙して騒いでいた自分たちを見守っていたスモーカーが言う。責めるわけがない、とコーザは言った。

「あんたたちがこの国を救ってくれたんだ。本当に、感謝してる。……もう少しで私たちは、何よりも大切なものを失うところだった」

この国の人々の争いは、たった一つの想いから起こっていた。

「アラバスタを守る」

そんな、純粋な想いをあの男は利用した。

「ありがとう」

コーザが頭を下げる。トトも、近くにいた他の住民たちも、皆一様に頭を下げてきた。そこには、あまりにも重い感情が乗っていた。

「役目を果たしたただけだ。……だが、礼は受け取っておく」

そんな彼らに対し、ふん、と鼻を鳴らして言うスモーカー。素直じゃないね、とたしぎに言う、彼女は苦笑した。

そして船は次の港へと進んでいく。そこで、ウタは一つ気になっていたことをこの移

動に付き添っているビビに質問した。

「そういえば、気になったんだけど」

「どうしたの？」

「見覚えのある麦わら帽子とヘッドフォンがあちこちにあるのはなんで？」

そう、実はアラバスタに着いた時から気になっていたのだ。

見覚えのある麦わら帽子と、ヘッドフォン。それを、町の人々が身につけているのだ。先程のトトは麦わら帽子を被っていたし、コーザも被ってはいなかったが背中には麦わら帽子があった。

また、ヘッドフォンをしている者も非常に多い。そのデザインはどう見ても、ウタが普段から使用しているものと同じであった。

「あ、やっぱり気付いた？」

楽しそうに笑うビビ。

「あれはね、ヒーローとヒロインの証なのよ。皆が欲しがっちゃって」

「ええ……そんなに？」

ウタはその立场上、グッズの販売もされている。だが、ここまでのものは経験がない。

「あの戦いは舞台にもなってるし本にもなってるわ。どれも大盛況だし、本もベストセラーよ」

「ビビがチラシと本を手に持ってそんなことを言う。流石にそれは予想外だった。」

「そんなに、よ。……皆、この国が好きなんだから。なのに、それを利用してこの国を壊されそうになった。誰も知らないうちに、失うところだった」

船内でアラバスタの国王軍の兵と一緒に騒ぐルフィたちを見る。

最初は恐縮していた国王軍の兵たちも、いつの間にか一緒に騒ぎ始めていた。……空の樽が寝転がっているスモーカーに直撃したが、彼は自然系の能力者である。見なかつたことにした。

「それを救ってくれたんだもの。あなたたちは、間違いなくこの国の英雄よ」

スモーカーがキレてルフィを追い回し始め、周りがやんややんやと囃し立てる。そのうちルフィの伸ばした体に何人かが巻き込まれ、大混乱になっていく。

「……懐かしい」

ビビが、そんな光景を見て眩く。

その言葉には、多くの想いが込められていた。

「ありがとう」

今日何度目の言葉だろう。嗚呼、とウタは思う。

その言葉をもらえるなら、自分達は間違っていないかった。

首都であるアルバーナでは、全員に対しアラバスタ王国からの感謝の意味を込めた勲章が贈られた。その後はかつて大騒ぎをしたあの会食の場所で再びの大宴会である。

ちなみにビビは麦わら帽子派で、国王であるコブラはヘッドフォン派のようだった。

次の日のライブも、大盛況だった。

ビビの式典の時のように、広場には大勢の大観衆。その前で、ウタは多くの歌を披露した。

幸せな時間だった。

自分達が守ったもの、救えたもの、助けることができたもの。

それは確かに、ここにあったのだから。

そして、大歓声と共に彼らは港から送り出された。

英雄たちの凱旋。そう題されて新聞に掲載された一面には、大勢のアラバスタの民と笑いあう英雄たちの姿が写っていた。

ある者は、その光景に平和の未来を夢見た。

ある者は、その光景に輝ける未来を願った。

それは、叶うはずだった。

叶う、はずだったのに。



世界を敵に回すという意味を、軽く考えていたわけではない。だが、実際の現実を叩きつけられると、どうしたって疲弊してしまう。

「……ルフィ、ゆっくりでいいから」

「……ああ、すまねえ」

追手からどうにか逃れた彼らは、近くに見えた島に逃げ込んでいた。連戦に次ぐ連戦のせい、ルフィにいつものような動きのキレがなくその腹に刃を突き立てられてし

まったのだ。

それでも気力で耐え、どうにか追手を蹴散らした。ウタがルフィを手当てしたが、応急処置でしかない。そもそも食料さえ満足には中々手に入られない状態だ。手当ていつても、本当に最低限のことしかできなかつた。

「……肉食つて寝れば、治るんだけどなア……」

ルフィらしからぬ、少し弱つた言葉。ごめんね、とウタの口から思わず声が漏れた。

「私が、戦えたら」

「謝んな」

ゆつくりと、二人で支え合いながら歩く二人。この島は砂漠の多い土地らしく、どうしても足が取られてしまう。

寄り添うその姿は、今にも消えてしまいそうなほどに儂い。

「ウタは、何も悪くねえんだ」

だから大丈夫だ、とルフィは言う。

そこからは、二人は無言だつた。

正体がバレないよう、別の街で善意の人からもらつた全身を覆うような服を着て、ゆつくりと歩いていく。

遠くに、街が見えた。普段であれば何の躊躇も無く入れる場所。だが、今は。

「ちよつと、休もつか」

「ああ。……そうだな」

二人で並んで、近くの木にもたれかかるようにして休む。

もう、二日は何も食べていない。まともに街にも入れないとなると、狩りや採取で食糧を集めるしかない。だが、ここ数日は追手から逃れることを優先していたせいでまともにかかを食べることもできなかつた。

「街があるから……何か、食べるものを」

小さな袋をとり出す。逃亡中に、節約に節約を重ねて使用してきた資金だ。

だが、突発的であつたこの逃避行。満足な資金はない。

「……一万ベリー……」

財布に残っていたのは、たったそれだけだつた。これでは、とてもじゃないが足りない。

絶望、という感覚がウタの背筋を這い上がってくる。どうしたら、と彼女が思ったところ。

「どうした、何かあつたのか？」

不意に、そんな声が聞こえた。

油断したと、二人は思った。疲労故か、周囲の警戒を怠っていた。

すぐに逃げようと、顔を上げたところで。

「……………え……………」

そこには、見覚えのある顔。

アラバスタ王国の王女。その幼馴染であり、かつて反乱を率いた男の姿があった。いつの間にか。

二人は、アラバスタまで来てしまっていたのだ。



「おいコーザ！ ルフィくんたちが」

「静かにしろ親父！ バレたらどうするんだ！」

物資の買い出しに来ていたらしいコーザは二人の顔を見て、色々と察したらしい。あの後、馬車の荷台に二人を押し込むと彼の宿に二人を運んだ。

それを聞きつけてか、彼の父であるトトが慌てて入ってくる。彼はこちらを見ると、おお、と目に涙を浮かべて歩み寄ってきた。

「ニュースは聞いたよ。良かった。無事で、良かった」

「……おっさん、おれたちは……」

「大丈夫だ、ちよつと待つててくれ。包帯と傷薬を取つてくる」

慌てて出ていくトト。そんな彼の姿を見送ると、コーザが机の上に何かを置いた。

それは、スープだった。その匂いに、二人の腹が思わず鳴る。

「酷い顔だぞ。……毒なんて入つてないから、飲んでくれ。いきなり食うと、体を壊す」

だが、二人は手を出せない。なんで、とウタが呟いた。

「私たちが、どういう立場か」

「わかつてる。だが、おれがあんたたちを売るわけがないだろう。あんたたちには、感謝

しかないんだ」

だから、と彼は言う。

ルフィが、ゆつくりとスープを口に含んだ。それを見て、ウタも一口、スープを口に

含む。

温かい、味だ。

涙が、溢れた。

「美味くはないと思う。……すまない」

首を左右に振ることしかできなかつた。

二人は、ゆっくりと、涙を拭いながらスープを飲んでいゝる。その姿を、コーザは険しい表情で見つめていた。

その後、ルフィはトトに治療してもらった。それはろくに道具もないウタがしたもののよりはマシ程度であったが、それでも十分だった。

そして、二人に食事を用意してくれた。その後は二人でトトたちの宿の一番奥の部屋で寝た。二人はベッドで寝ればいいと言ってくれたが、それはできなかった。あまりにも申し訳ないし、それに何より。

もう、ベッドで眠ることなどできないようになってしまっていた。

二人で寄り添うように、互いの存在を確かめるように部屋の隅で小さくなって眠る二人。その姿を見て、コーザが呟く。

「……………そ……………」

その声色には、深い苦悩が込められていた。



次の日。二人は食事を分けてもらい、口にした。ユバからこの港町へ買い出しに来ていただけのことらしく、そう長くは滞在しないとのこと。

「協力できることなら何でも言ってくれ」

食事を終えた四人が一室に集まる中、トトが言った。だが、二人は首を振る。

「十分だよ、ありがとう」

「少し振りに、温かいものを食べることができました」

ありがとう、とウタは言う。

その弱々しい笑顔に、トトは言葉を詰まらせた。その隣に座っているコーザが、一度目を閉じると、何かを絞り出すように言葉を紡ぐ。

「すまない。本当にすまない」

「おい、コーザ。何を」

トトをコーザが制し、更に言葉を紡ぐ。

「アラバスタから、出て行ってくれ」

それは、絞り出すような言葉だった。何を、とトトが呻く。

「コーザ！」

「アラバスタは!!」

あまりにも重い、感情の込められた叫び。

「アラバスタは……ようやく復興の終わりが見えてきたんだ。そこで、この二人がいたら。世界政府にバレたら。どうなると思うんだ」

その通りだ、とルフィもウタも思った。

元々、アラバスタに来たのは偶然だ。逃れた先が、ここだっただけ。

「ああ、そうだな。……この国に、迷惑はかけたたくねえ」

「ごめんなさい。そんなことを、言わせてしまつて」

だから、言われなくても出ていくつもりだったのだ。それを、コーザにこんなことを言わせてしまった。

助けて、くれたのに。

「出ていくよ。寝れたし、メシも食えた。ありがとう。おっさんに助けられるのは、二度目だな」

「何を言ってるんだ、ルフィくん。私は、私たちは」

「あの、一万ベリーしかないんだけど……少しでいいから、水を、分けてもらえたら」

「……なんで、そんな」

英雄二人の、あまりにも弱りきつた姿。

それでもなお恨み言一つ言わないその姿に、コーザが顔を抑える。

「金なんて必要ない。必要なものはおれが全部用意する」

絞り出すような言葉だった。すまない、と彼は言う。だが、ルフィもウタも首を左右に振るだけだ。

「ありがとう」

そして彼らは、こう言うのだ。

こう言えてしまうから、英雄なのだ。

再びの船旅のためにと、コーザは隠れて二人のために物資を集めた。二人が乗っている、ボロボロの小さな船に載せられるだけの食糧と水を用意した。

その期間の二日間を、トトが絶対に人目に触れさせないよう二人を匿ってくれた。

そんな二人に、ルフィとウタは何度も礼を言った。だが二人は、特にトトはその度ですまないと涙を溜めて謝罪をし、コーザは苦い表情で同じように謝るのだ。

そして、全ての準備が整った日の夜。二人は、闇夜に紛れて移動するために船に乗っていた。

「ありがとう」

周囲に人気はない。いるのは四人だけだ。

「礼なんて。……あんたたちに、救われておきながら。おれは」

「すまない。私たちは、キミたちに何も」

「ご飯をくれた」

自分自身を責め続ける彼に、ウタは言う。

「眠る場所と、安心して眠れる時間をくれた」

だから十分救われたのだと、彼女は言う。

「ありがとう」

そして、礼と共に二人の船が動き出した。

声を上げて送り出すことはできない。何が切欠で、バレるかわからない。

だから、無言の見送りだ。

かつて、大地が震えるほどの賞賛と共に送り出された英雄が、こんなにも寂しく。

コーザは、己の無力を噛み締めることしかできなかつた。

「……………」

宿に戻り、呟く。そこで、机の上に何かが置かれているのに気付いた。

なんだ、と思い広げてみる。

それは、一枚の手紙だった。その中には、何故か一万ベリーの札が挟まれている。

『ありがとう。ごめんなさい』

たったそれだけのことが、書かれていた。

「これしか、ない、って」

その一万ベリーを手に、彼は呆然と呟く。

声にならない、空気を震わせない絶叫が、室内に響く。

「コーザ」

そんな彼に、背後から声がかかった。振り返る。すると、そこには息を切らした様子
の男がいた。

アラバスタ王国最強の戦士の一角、チャカだ。

「すまん。お前に貧乏くじを押し付けた」

「……………ッ」

息を切らし、肩を上下させる彼の胸ぐらを掴む。彼の背後にいるのはトトだ。連絡を
入れたのは彼なのだろう。

「お前の選択は正しい。今のアラバスタでは、あの二人を助けられない」

「おれたちは！ おれたちは、あの、二人に……！ あの人たちに……！」

声が震えた。チャカもまた、声を震わせて言葉を紡ぐ。

「そうだ。我々は救われた」

「だつたら！」

「国王様とビビ様を信じろ！」

言い募るコーザへ、チャカは叫ぶように言った。

「あの二人が何もしないわけがない！ 我らとは違いあの方々は世界政府に対して声を上げるこゝろができる立場だ！」

「その間に何かがあつたら！」

「暴力による解決だけは選んではならん!!」

それだけは、と。

チャカが言う。

「私も、お前も。そうして間違えた。故に、それだけはしてはならん」

「……………ッ」

コーザが手を離す。信じるのだ、とチャカは言った。

「いつか必ず、大手を振って力になれる日が来る。だから、耐えるのだ」

それは、あまりにも辛い選択だ。

恩を返すことさえできないまま、ただ、ただ信じる。
ちくしょう、と。

どうしてだ、と呟く彼の言葉は。

この場の全員の想いを、代弁していた。



「……美味しかったね、ルフイ」

「ああ、美味かった」

夜の海を、背中合わせに二人は行く。

「頑張らないと」

「当たり前だ」

手が、重なる。

「味方、いたね」

「ああ」

瞳から、涙が溢れる。

「二人ぼっちじゃ、なかったね」

「ああ」

彼の手を、握り締める。

「嬉し、かった」

「……ああ」

かつてとは、大きく違う船出になった。

だが、あの時とはまた違うものを、手にできた。

この世界で、今、自分達は二人きりではない。世界の全てが敵なわけではない。成し遂げたことは、なかったことにはなっていない。

それを知ることができた。

ただ、それだけで。

少しだけ。

前を向けるような、気がした。

その後、一つのニユースが世界を走る。

アラバスタ国王コブラによる、英雄二人の扱いに対する抗議だ。それは神への反逆である。

だが、しかし。

そのニユースが、世界の流れを変えていくことになる。

罪と罰

人の死を見ることは、これが初めてではない。

海軍などという仕事は因果なもので、動き出すのは大抵ことが起こった後である。故に救えなかつた命はいくらでもあるし、その度に齒を食い縛つて繰り返さないことを誓い続けた。

人を殺すことは、これが初めてではない。

自分は海兵で、相手をするのは無法者たちである海賊だ。殺し合いの状況になることは日常茶飯事であり、力を持つ以上は先陣を切つて戦う役目を負う必要がある。その結果として、相手を殺めることは何度もあつた。

気分のいいものではないが、かといつて引きずるようなことではない。相手は殺す気でこちらに向かつて来ているのだし、最終的にそういう結果になるのであればそれは互いに覚悟を決めていたことだ。

だが、これは違う。

こんなものは、覚悟の外にあるものだ。

「……………くそ……………」

掠れた声が漏れる。雨の中、ルファイが膝をついた。

あの日、世界を敵に回した日から既に半年。逃げて、逃げて、逃げ続けて。追手もどうにか退けて。かつての戦友たちと、仲間たちと望まない戦いを続けて。

それでも、どうにかはなっていた。

何度も裏切られた。……優しくしてくれた若い夫婦は、こちらを売るために擦り寄ってきただけだった。

何度も助けられた。……優しくしてくれた老夫婦は、こちらの居場所を察知した海兵たちに最後までシラを切り通し、逃がしてくれた。

温かさ、冷たさと。

絶望と、希望と。

この半年で、随分と多くの経験をした。

「少将が……………」

「そんな、まさか」

声が聞こえる。ルファイの眼前には、一人の海兵が倒れていた。

海軍本部の少将。ルファイの階級と同等である大佐以下の追手ではどうにもならない

と判断した世界政府は、遂に将官クラスの派遣を決定したらしい。その一番槍としてここに来たのが、この海兵だ。

今は、もう。

心臓も、呼吸も止まってしまったが。

「…………おつちゃん…………なんて…………」

倒れ、完全に沈黙した少将を見つめ、何処か呆然とした様子でルファイが呟く。

任務を共にしたことはなかったが、ルファイは彼のことを知っていた。ウタのライブによく来ていた男で、ルファイとは肩を組んでウタに声援を送ったこともある。

何度も続けば顔見知りになる。本部で擦れ違うと、声をかけるくらいには。

『よう、元気が麦わら小僧』

『おつちゃん、いい加減名前で呼んでくれよ』

『わっはっは！ まあ、そうだなア。おれと同じ階級になったら呼んでやるよ。何なら昇進祝いに飯を奢ってやる』

そう言つて、彼は笑っていた。こんなやりとりも、日常だった。

彼は年齢的に退役が近付いており、これ以上の昇進はないだろうしするつもりもないと常から語っていた。故に、それがルファイの一先ずの目標だった。

『おれにも娘がいてなア。お前さんたちより年上…………というより、お前さんたちが若過

ぎるだけなんだが。まあ、おっさんは心配なんだよ。若えのが無茶するのはな』

そう言って、少将はいつも出会えば食事を一品奢ってくれた。これ以上は小遣いがないとなると言いながらも、そうしてこちらを氣遣ってくれた。

彼を慕う海兵は多かった。もう前線任務からは退き、後進の育成をする彼は過酷な訓練を受ける若い海兵のメンタルケアを担う役目を負っていたのだ。

セングクさんにはもつと厳しくしろって言われるんだけどなー、と笑いながら零すのが口癖だった。

なのに、どうしてだ。

どうして、こんなことに。

「こんな、形で」

血に染まった両手を見る。

強かった。何がもう前線は無理、だ。彼は間違いなく、海兵としての実力は超一流のそれだった。

しかし、だからこそセルフイに手加減などできなかった。

『お前たちを殺しにきた。行くぞ……』
『麦わらのルフィ』

いつもとは全く違う雰囲気の小将に、こちらも最早、言葉では止まらないと確信した。

彼が引き連れてきた部下には一切の手出しをさせず、一騎討ちが始まった。

壮絶な戦いだった。互いに何かを堪えるように、しかし、手加減など一切ない全力のぶつかり合い。

もしも、だ。

もしも、もう少しルファイが強かったら。

もしも、もう少し少将が弱かったら。

こんな結末には、ならなかったかもしれない。

「……………」

血に塗れた手で、少将の瞳を閉じさせる。そして、ゆらりと、まるで幽鬼のようにルファイが立ち上がった。

小さな悲鳴があちこちから上がる。

「て、撤退だー！」

階級を見るに、中佐か。一人の海兵が叫ぶように言った。その判断は正しい。実際のところ、ルファイは残っている面子が相手なら負ける未来は一切想像できなかった。

だが。

「おい」

ルファイが発した言葉に、空気が止まる。

「置いて行くんじゃないねえ」

言い捨てるようにそう言葉を吐くと、ルファイがゆっくりと海兵たちとは逆方向に歩いていく。

その背に対し、何かを言える者はいない。

彼の背に揺れる「正義」の文字が、あまりにも重かった。



戻ってきたルファイを、ウタが出迎える。

あの日から戦えなくなった自分。戦おうとした瞬間に体が動かなくなり、震えが止まらなくなるのだ。

そんな、どうしようもないほどの足手纏いになった自分をルファイは決して責めなかった。

情けないと思う。けれど、彼に縋るしかない。

それほどまでに、弱くなってしまった。

「ルフィ、血が」

「大丈夫だ、このくらい」

笑顔を浮かべるルフィ。だが、ウタは気付く。その表情に陰りがあることを。

しかし、それを問い詰めることはできない。これ以上、彼に負担をかけられない。

「……今日は、誰が来たの？」

「将官クラスが来るようになった。ただ、今日は……知らねえ、奴だった」

嘘だということは、すぐにわかった。

けれど、何も言わない。……言えるわけがない。

「そっか。……ね、こつち。手当てをしないと」

ルフィに手を伸ばす。その手を取ろうとした瞬間。

「……あ……」

びくりと体を震わせ、ルフィがこちらから逃れるようにして身を引いた。えっ、という眩きを漏らす。しかし、ルフィ自身が愕然とした表情をしていることに気付く。

ウタは少し強引に手を伸ばし、その手を取る。

ルフィは、今にも泣きそうな顔をしていた。



その日から、ルフィは時折『それ』を見るようになった。

「……取れねえ……」

夜、誰も使わなくなつて忘れ去られたのであろうボロボロの小屋の中で、ルフィは眩く。

小屋の隙間から入る月明かりに照らされた自身の両手が、血に塗れている。

右手で左手を何度も擦るが、その血は消えない。消えてくれない。

「……ルフィ……」

小さな、声が聞こえる。

彼に抱きつくように、或いは縋るようにして眠るウタだ。彼女はいつも、寝ている間はルフィの存在を確かめるようにこちらを抱き締めている。

この逃亡生活のせいで、彼女の綺麗な髪も随分とくたびれてしまった。紅白の美しい彼女の髪は、ルフィも好きな髪だ。それがこうもくたびれていることに、ちくりと胸が痛む。

そして髪だけでなくその表情も、疲れが滲んでいる。やはり、この生活は過酷なのだ。

「くそ」

自分が、もっと強ければ。そんなことを思うのは、何度目だろうか。

世界の広さは何度も感じた。初めての敗北を喫したアラバスタもそうであるし、その後も海軍本部大将の強さを見た日にはその背中の遠さを叩きつけられた。

だが、それで諦めたわけではない。いずれはという想いはずっとあった。

しかし、現実はそのような猶予を与えてくれない。

強さが必要だったのは、今だ。

「おれが、もっと強かったら」

この大切な人に、こんな想いをさせなくても済んだだろうか。

今でも彼女は、輝けるステージで歌っていただろうか。

手を伸ばし、その頭に触れようとする。自分がこうすると、彼女は少し安心した表情になるのだ。

しかし。

その、伸ばした手は。

「……………ッ」

血に塗れ、薄汚れていた。

彼女に触れることができず、手を戻す。

目に映る自分の両手は、真つ赤に染まっていた。



追撃が、より激しくなり始める。

海軍の強さ、その最大の強みは数にある。世界中に拠点を持ち、そこには数百、数千、或いは数万という海兵がいるのだ。偉大なる航路が後半の海、新世界にはそこに君臨する四人の皇帝がいるが純粋な数なら彼らでも勝負にさえならない。

そして数がいるということは、それだけの目があるということ。

逃亡者二人も人の子だ。どうしても生きて行く為には人の目の触れる場所に出ることになる。そこで正体に気付かれれば、すぐに海兵たちが現れるのだ。

先日の少将の件を受けてか、海軍はやり方を変えたいらしい。強い個をぶつけるのではなく、純粋な数でこちらを疲弊させる戦略だ。じわじわと、確実にこちらの神経を削るように包囲し、追い立てる。

こちらがどこかで耐えきれなくなり潰れるか、それとも自棄になるか。そのどちらで

あろうと、そうなった時が海軍の勝利だ。この悠長とも言える策は、孤立した二人には非常に有効だった。結局のところ二人しかいないのだ。しかも片方は戦えず、そして近くに海兵の姿があれば二人を助けようとする者も表立つては行えない。

なんとの確で、残酷で、効果的な戦術か。

そして、それだけではない。

モンキー・D・ルフィの調子が、ずっとおかしい。ウタを庇い、追手と戦う彼はしかし、当初と比べて動きが随分と悪くなっている。

疲労もある。それは精神的にも、肉体的にもだ。

ダメージはある。それもまた、精神的にも肉体的にもだ。

だが、それ以上に。

あの日、ウタに触れることに躊躇するようになった日から。

彼はずっと、苛まれ続けている。

全力で、何の手加減もしなければ。

殺すという選択肢を、選べれば。

何度も何度も、ルフィの頭をそんな言葉が駆け巡る。

「どけえ!!」

彼の伸びる腕の一撃が、取り囲む海兵たちの一角を吹き飛ばした。そのままウタを抱え、空いた穴から抜け出す。

今の一撃で、怪我を負った者はいるだろう。だが、死者はいないはずだ。

殺すという選択肢を取れば、きつと楽になる。殺さないように手加減しながら戦うことは神経を削り続けるし、精神を疲労させる。

だが、ルフィはそれができなかった。

その両手が血塗れていることは既にわかっている。しかし、ルフィは海兵なのだ。

海兵を殺すことは、最後の一線だった。

既にその手を汚していたとしても。

もう一度それを超えることは、できなかった。

「……………くそ……………」

目を擦る。両手が血に塗れている幻覚が、消えてくれない。

だが、それでも。

「……………ルフィ……………」

この、腕の中で必死にこちらにしがみつく人を。

大切な人を、守るのだ。

それだけは。

それだけは、譲れない。
譲っては、ならないから。



偉大なる航路は、あまりにも異常な海だ。その異常さ故に人が住めないようになった島がいくつもある。

その中でも、海軍内でいくつか近付くことを禁じられた島がある。

それは環境の異質さが理由であることもあれば、自生する植物が毒性の強いものばかりであるというような理由もある。また、原住民が排他的で危険であるという場合もあった。

二人が逃亡先に選んだのはそんな島の一つだった。そこは危険な猛獣が数多く生きている島であり、海軍本部の佐官クラスであつても生き残ることは難しいとされている島だ。

ルフイとウタは幼少期の経験から、ジャングルに対して耐性がある。鍛えるためと言

われ、ガープに何度もジャングルへと放り込まれたのだ。そこで生き残ってきた経験もあつて逃亡先を選んだのである。

立ち入りの禁止された島だ。ある程度の時間は稼げるはず。そして事実、丸三日は何も起こっていない。隠れるようにして気配を消し、周囲から木の実などを取って二人で過ごしている。

そして、夜。生い茂る草木に隠れて眠っていたウタが、目を覚ました。

「……………」

目を開けて最初に見るのは、大切な人の顔だ。彼がいるというその事実を確認するだけで、安心が心に広がっていく。

だが、その表情は険しい。

いつもなら、彼はあどけない表情で眠っている。寝相も悪く、起こしに行くときとんでもないことになっているのが日常だった。

しかし、今の彼は険しい表情であり、逃亡生活が始まってからはこちらを守るように抱き締めながら眠るようになった。それはこちらを安心させるためだということを、ウタはよくわかっている。

だが、少し前から彼はこちらを強く抱き締めることをしなくなった。

優しく、傷つけないように。そんな意思が伝わってくるのだ。触れる時も、何か迷う

ようになってしまっていた。

「ルフィ」

彼の髪を撫でる。彼の髪は、随分とくたびれていた。

何かがあつたのだということは、わかっている。

その内容についても、なんとなくではあるがわかっている。

だが、言えない。

言えるわけが、ないではないか。

「ごめんね」

こんなにもボロボロになりながら。

それでも、私の前では笑顔になろうとしてくれる彼に。

言えるわけが、ない。

どうして、こんなにも弱くなってしまうのだろうか。

かつては彼と勝負をして、肩を並べて。

命懸けの戦場を、いくつもいくつも超えてきたのに。

これからどうなるのだろうか。

どうしたらいいのだろうか。

そんな、未来への絶望と不安だけがある。

「……………」

ゆつくりとルフィの手から離れ、体を起こす。綺麗な月が、空には浮かんでいた。立ち上がり、茂みの中から出る。

人の住む領域とは違う、異質な世界。自分が異物であるという感覚。

懐かしい、とウタは思った。かつての幼き日々において、二人で身を寄せ合ってジャングルを過ごした日々。あの日から比べて随分強くなっただけなのに、結局自分は守られるだけだ。

自嘲する。なんて、弱い女だと。

こんなにも弱い女が、ルフィの隣になんて。

油断があった。

だから、気付くのが遅れた。

獣の咆哮が響く。

木々を薙ぎ倒す音を響かせて、『それ』が現れた。

ワニ、だろうか。かつてアラバスタで見たバナナワニ、あれに近い姿をしている。

だが決定的に違うのは、そのワニは完全に後ろ足の2本だけで立っていること。バナナワニより更に巨大であるということ。

そして、何より。

(まづい)

感じる気配が訴えている。

これは、捕食者だ。

「……………ッ」

目が、合った。

逃げるべきだ。だが、すぐ後ろにはルフイがいる。彼を抱えて逃げれるか？

かつての自分なら、きっとできた。

だが、今の自分は？

こんなにも弱くなった自分には、何が。

「……………動いて……………」

足が、動かない。

こんな時に。

体が動かない。

捕食者が、こちらを捉える。

動けど、動いてくれと、必死になって祈るように己の体を叱咤する。

「お願い……！」

捕食者がその巨大な口を開け、こちらに迫る。

逃げることをさえできず。

震える体を、抱くことしかできない。

そんな、あまりにも弱い獲物に。

捕食者の牙が、襲いかかった。

鈍い音が響き。

捕食者が、苦悶の叫びを上げた。

「……え……！」

ウタは、最初自分に何が起こったかわからなかった。だが、その場面を見ている者がいたら気付いただろう。

ウタへと襲いかかった捕食者は、何の躊躇もなく彼女を喰らおうとした。しかし、その牙が彼女の体に触れた瞬間、その牙が折れ、捕食者は弾かれたのだ。

それは、海軍が伝える武術「六式」が一つ、「鉄塊」。

己の体を鋼鉄の如く強化し、その身を守る技術だ。

「今、私」

自分の掌を見つめ、ウタは呟く。そんな彼女の脳裏に、この技術の基礎を教え込んだ人物の言葉が響いた。

“これは基礎の基礎じゃ。考えてから使うようでは不十分。無意識下でも、それこそ寝ている時でも使えるようですよやくスタートラインじゃ”

ルフィと共に教わった戦闘術。その指導をしてくれた、“海軍の英雄”の言葉。

辛く、苦しく、過酷な訓練であり鍛錬であった。だがそれでも、ルフィに置いて行かれないように、足手纏いにならないようにと必死だった。

でも、その理由は。

いつしか、誰かを助けるための力が欲しいという理由に変わっていた。

「……そっか。そう、だったんだ」

確かめるように掌を何度も開き、閉じることを繰り返す。

捕食者は落ち着きを取り戻すと、距離をとってこちらの様子を伺う。なるほど、頭がいい。おそらくこの島における食物連鎖の上位にいるのであろうその存在を視界に入れないから、ウタはゆっくりと歩き出す。

“ライブの時、観客の感情を感じ、理解できるような感覚になったことはないか？”

それが第一歩だ。見聞色の覇気とはそれを突き詰めたものを言う。”

いつの間にか忘れていたのは、戦いの指導をしてくれた元帥の言葉だ。自分たちに稽古をつけてくれた人は、そんな風に言っていた。

「ら、ら、ら」

発声。酷い声だ。今までで一番、聞き苦しい声かもしれない。

でも、心は少しずつつ弾んでいる。

捕食者が、咆哮と共にこちらへと突っ込んできた。

その姿を真つ直ぐに捉え、ウタは。

「紙絵」

ひらりと、その突撃を最小限の動きで避ける。捕食者はその勢いを余らせ、木々を薙ぎ倒してようやく止まった。

“芸術家は感受性が高いという。どうやら人の機微については敏感のようだ。見聞色については、ルフィよりも向いてるんじゃないか？”

海軍本部大将の言葉だ。“だらけきった正義”などというところでもない正義を掲げる彼はしかし、確かにこちらを見てくれた。

「剃」

こちらを向いた捕食者に対し、一気に距離を詰める。無意識のうちに、足がリズムを

刻み始めていた。

「『指銃』」

こちらを見失った捕食者、その右目に、通り抜けざまに指を叩き込む。

苦悶の咆哮が、轟いた。

『指銃は一点突破の武術じゃア。無駄な破壊を削ぎ落とし、必要最小限の力で貫く。派手な技なんぞなくとも、これ一つで十分な時は多い』

海賊嫌いである自分を認め、『徹底した正義』を掲げる彼はことあるごとにアドバイスをくれ、自分たちを気にかけてくれていた。

思い出す。そうだ、それでいい。新しい何かは必要ない。

積み上げてきた全ては、失われてなんかいない。

ちゃんと、『私』の中にあるのだから。

「『月歩』」

怒りのままにこちらへと突っ込んでくる捕食者を受け流すように、空へと上がる。

月明かりの下、一人の『歌姫』がまるで踊るように宙を舞う。

『どんな生物にとっても、空は死角だよ准将。面白いものでねえ、わつしが空を飛べることを誰もが知ってるっていうのに、敵対すれば空のわつしに対して反応が必ず遅れるんだ』

光の力を持つ、*“どっちつかずの正義”*を掲げる大将の言葉。指導を受けることは多くはなかったが、彼もまたこちらを導いてくれていた。

右目から血を流し、怒りのままに咆哮する捕食者はこちらを見失っているらしい。周囲を破壊しながら暴れ狂っている。

「さあ、行こう」

それは、誰に対する呼びかけか。

その口から、歌が溢れる。

観客は、敵対者ただ一人。

それで十分だ。十分過ぎる。

だって、そうじゃないか。

“ウタが歌つてるところが好きだぞ、おれは！ 楽しい気持ちになる！”

今ここにいる*“歌姫”*の始まりは、たった一人の少年だったのだから。

さあ、歌おう。

さあ、紡ごう。

随分と休んだ。随分と時間をかけた。

けれどそれ以上に、積み上げてきた。

世界の全てを敵に回した。

残ったのは、大切なただ一人だけだった。
怖かった。

失うことが。

恐れた。

踏み出すことを。

けれど、それも今日までだ。

「嵐脚”!!」

全力で振り抜いた足が、大気を切り裂く。

血飛沫が舞い、それを背景に一人の海兵が地面へと降り立った。

これは狼煙。

世界に対する、”歌姫”復活の宣言だ。

「アンコールをご希望かな？」

不敵に笑う。血走った左目でこちらを睨む捕食者が、ゆっくりと体を起こした。

「いいよ、いくらでも聴かせてあげる。私も全然、歌い足りないから」

そこにいるのは、逃亡生活の中で守られるだけの女性ではない。

かつて「麦わらのルフィ」と共に海軍本部准将として戦場に立っていた、新時代の英雄がそこにいた。

「海軍本部准将、ウタ。アンコールにお応えして、次の一曲を歌わせて頂きます。……曲名は」

だが、それは考えてみれば当たり前のことなのだ。

たとえ、その称号が失われようとも。

たとえ、積み上げた勲章全てを剥奪されようとも。

海兵として戦い続けた日々は、決して嘘ではなく。

苦しみながら続けてきた鍛錬は、ちゃんと彼女に残っている。

大好きな「歌」は、彼が愛するこの「歌」は、彼女の中で輝いているのだから。

「『新時代』!!」

その日、誰も知らぬ月明かりの下で。

英雄が、復活の狼煙を上げた。



夜明けの光で、目を覚ました。

そして、すぐに気付く。

「ウタ！」

隣に、大切な人がいない。

弾かれたように隠れていた茂みの中から出るルフィ。そして彼は、その光景を目にした。

「おはよう、ルフィ」

朝焼けの中、逆光を浴びて微笑むその姿に。

思わず、見惚れてしまった。

「今まで、ごめんね」

昨日までの彼女とは、全く違う雰囲気だ。

何があったのか。その答えは、彼女の後ろにあった。

巨大な、怪物が横たわっている。全身の切り傷から血を流し、沈黙している。

これを、ウタがやったのか。

「ウタ、これ」

「うん、ちよつとね」

何かを言いかける彼女。その瞬間、倒れていた怪物が動いた。

「ツ、まだ」

「『ゴムゴムの銃』！」

ウタが反応する前に、ルファイが一撃を叩き込んだ。今度こそ、その怪物が完全沈黙する。

「……カッコ悪いなあ、私」

その光景を見て、苦笑するウタ。彼女はルファイの側に歩み寄ってくると、彼の右手を両手で包むようにして持った。

「優しい手だね」

血に塗れた手を、彼女が包んでいる。

「私を、何度も何度も守ってくれた手」
けれど。

「ありがとう、ルファイ」

この手の、色が。

「今度からは、私も戦うよ」

「ウタ」

「戦いたい」

制止の言葉は、否定される。

「ルフィだけに、背負わせない」

そして、彼女が手を離れた。そのまま彼女は、自分たちが隠れていた茂みの方へと歩いて行く。

その背を追っていくと、彼女はとあるものを手にとっていた。

それは、*“正義”*のコート。

ルフィの背中に、ずっと宿り続けた覚悟と誓いの証。

「ね、ルフィ。こっちに來て」

呼び寄せられるままに近付くと、ウタが抱きつくようにして両手を広げた。そのまま、彼女はコートをルフィの肩に掛けてくれる。

かつて、初めてこのコートを背負った日に。

同じことを、してくれたのだ。

「やっぱり、カッコ良いね」

世界一だと、ウタは笑った。

ルフィは、そうか、と眩く。

今なら、言える気がして。

「……ウタ、おれは」

「大丈夫」

大丈夫だよと、彼女は言い。

優しく、この体を抱き締めてくる。

「ルフィが、私の罪を一緒に背負ってくれたように。私も、ルフィと一緒に背負うから」
その体を、ゆっくりと抱き締め返す。

その手はもう、血に塗れてはいなかった。

「なあ、ウタ」

「なあに？」

「歌って、欲しい」

この逃亡生活の中で。

ずっと、聞けなかったから。

「うん。……じゃあ、そのリクエストに応えようかな」

手を離し、ウタは笑う。その姿を見つめながら、ルフィは思う。

忘れてはいけない。背負い続けなければならない。

だが、それでも。

この笑顔のために、戦うと決めたことは。

決して、嘘じゃなかったから。

間違いで、なかつたから。
すまねえ。

おれは、進むよ。

ウタにさえ聞こえないように。

彼は、呟いた。

「よし、いくよー！」

「おうー！」

その歌声は、いつものような豪華な音楽はない。

たった一人の観客。

しかしそれは、彼女の始まりそのものへと向けられた歌だ。

やっぱりいいな、とルフィは笑う。

彼女の歌う姿を、彼は愛している。

笑う彼女を、想っている。

たった一人のために、世界を敵に回しても。

それでも彼に、後悔はないのだ。

今、大切な人と共にいて。

大切な人が、笑っている。

ただ、それだけでいい。
それだけが、真実だった。

幸せだった？

もう、駄目なのだと思った。

戦い続けた。

逃げ続けた。

傷ついた。

傷つけられた。

どうしようもなく……限界だった。

故にこそ、ここに至った。継るようにして。

歌声の果てにある——世界へ。

「ねえ、ルフィ。覚えてる？ この場所でのこのマークをルフィが描いたの」

「ああ、覚えてる」

薄汚れて、ボロボロの姿で。傷だらけの身体で。

身を寄せ合うようにして二人はその場所にいた。

それは思い出の世界。過ぎ去った過去の世界。

「あの時、なにこれって言われたんだよな」

「だって下手だったし」

言いつつ、ウタは自身の左腕にあるマークに撫でるようにして触れた。

全ての始まり。共に誓った『新時代』はここから始まったのだ。

「随分遠くまで来ちゃったね」

「十年だからなア」

互いの顔を見ることができなかった。並び立つようにして二人はいる。

「シャンクスに置いて行かれて。ガープさんには無茶ばかりさせられて」

「ジャングルに放置された時は大変だったなア……ウタが猛獣を眠らせて、その間にお

れがウタを抱えて逃げて」

「ダダンに預けられてからはエースとサボに出会って」

「今思えばあの時のエース怖かったよなー」

「今では優しいお兄ちゃんの記憶しかないけどね」

「サボもいい兄ちゃんだったぞ」

「うん。……そうだね」

二人で思い出の場所を……フーシャ村を歩いていく。人の姿はない。ここは二人だけの世界だ。全てを終わらせるための。

「」

風が吹いた。直後、何かが宙を舞う。

麦わら帽子だ。ルフィの大切な帽子。シャンクスの……帽子。

「……子供？」

麦わら帽子が飛んだ先。そこに、一人の少年がいた。その少年は足元に落ちた麦わら帽子を拾う。

自分とルフィ以外にいない世界。そのはずなのに、そこにいる一人の少年。その少年をウタは知っていた。

「——ルフィ」

幼き頃の、出会った時の姿のままのルフィがそこにいた。



風に飛ばされた麦わら帽子。それを拾ったのはウタであった。だがその姿は今の彼女の姿ではない。

あの日の……出会った頃の姿だ。

「……ウタ」

麦わら帽子を拾った彼女へと声をかける。そこでルフィは気付いた。いつの間にか自分の体も小さくなっている。

あの日。シャンクスの船に乗ってウタが現れた日。あの頃と同じ姿だ。

「ねえ、ルフィ」

麦わら帽子を被りながら、幼いウタが言葉を紡ぐ。

「——幸せだった？」

麦わら帽子に隠されていて、表情は伺えない。

「海賊になる夢を諦めて。私なんかと一緒に海軍に入つて。拳銃にこんなことになつて」

あなたは、幸せだったの？

幼き少女は問いかける。

「フーシャ村を出て、よかつたの？」

この場所で、ずっと穏やかに過ごしていれば。

そうすれば、もっと。

「幸せに、なれたんじゃないの？」

風が吹く。

二人は、いつしか触れ合うほどに近付いていた。



麦わら帽子をルファイが被る。そのせいで表情が読めなくなった。

そこでウタは気付く。自分の体も小さくなっている。あの日、ルファイと初めて出会った日と同じ姿に。

「なあ、ウタ」

少年は問う。

「——幸せだったか？」

その言葉から、感情は読み取れない。

「辛い思いはたくさんしたはずだ。痛くて、怖くて、どうしようもなくて泣いた日もあったはずだ」

お前は、幸せだったのか？

幼き少年が問いかける。

「フーシャ村を出て、よかったのか？」

そうすれば、こんな辛い思いなんてしなくてもよかつたんじゃないか。

今のお前みたいに、泣かなくてもよかつたんじゃないか。

お前は、もつと。

「幸せに、なれたんじゃないのか？」

風が吹く。

二人は、いつしか触れ合うほどに近付いていた。



幼き最愛の人からの問いかけ。それはきつと、ずっと心のうちにあつたこと。だから、二人は答えたのだ。

「幸せだった」

「幸せだった」

ルフィも、ウタも。

「いや、今も幸せだな。ウタと……一緒にいられる」

「今も私は幸せ。ルフィと……一緒にだから」

それが最大の幸福であつたから。

「おれの夢はウタと一緒にいることだからな。色々あつたけど、まあ、済んだことだ」

「泣いたことは何度もあるけど。いつだってルフィが側にいてくれたから。だから大丈夫だった」

決して平坦な旅路ではなかったけれど。

それでも、後悔はない。

それだけは、していない。

だから――

「フーシャ村を出たことに、後悔はない」

その果てが今であつても。

あの始まりは、否定できない。

「今はまあ、色々としんどいことも多いけどな。ウタが一緒なら大丈夫だ」

「今は辛いことばかりだけど。でも、ルフィが一緒なら大丈夫だから」

息を吐く。

こんなことも、忘れていたのか。

私たちは——二人で最強だ。

今がどんなに辛くても。

——ウタがいるなら。

——ルフィがいるなら。

どこまでだって、歩んでいける。

「おれは」

「私は」

だから、きつと。

「幸せなんだ」

麦わら帽子を受け取る。目の前にいる幼き大切な人は。
小さく、微笑んで。

「頑張れ」

そう、言葉をくれた。

「頑張るよ」

二人の声が重なる。

——また、風が吹いた。

一度閉じた目を開けると、そこにいたのは大切な人。

ずっと一緒に歩いてきた人。

「はい、帽子」

「おう、ありがとう」

その帽子を被せるその瞬間に。

二人の唇が、重なった。

「行くこう」

どちらがそう言ったのか。

もう、どちらでもよかった。

光が見える。その先に待つのには過酷な現実。

けれど、二人なら。

——きつと。

淡い光の中で。

こちらに手を振る、幼き少年少女の姿が見えた。

“ありがとう”

「“神への大逆人”とはまた大層なことですねえ」

「はい。見覚えは？」

吐息一つの音にさえも気を使いながら、ルフイとウタはその会話を聞いていた。二人がいるのは狭く、小さな空間だ。本来ならば食料の貯蔵庫としても使われるその場所は本来人が入るような場所ではない。だが隠れる場所はそこしかなかつたのだ。

二人が訪れたのは小さな村だった。かつて訪れたこともあるその島に逃亡の末辿り着いたのだが、当初はすぐに移動するつもりだったのだ。だがそこで見覚えのある男性に声をかけられ、更に自分達を追ってきたのであろう海軍の姿を見たこともあつて半ば強引にこの貯蔵庫へと押し込まれている。

「いやいや、あるわけないですよ。こんな凶悪犯見たことない」

「……そうですか」

二人は密着し、互いの心音と息遣いさえも聞こえる状態だ。だが共に無言のまま、上

で繰り広げられている会話に耳を傾けている。

「もし見かけましたら連絡をお願いします」

「ああ、勿論。海兵さんに協力は惜しまないですよ。この村はね、昔海兵さんに助けてもらったことがあるんです」

「そうでしたか」

「ええ。ですから他の者も協力的だと思えますよ」

心臓の音がうるさい、と思った。思わずウタがルフィの服を掴む。ルフィもまた、不自由な体勢のまま彼女の服を握り締める。

万が一の時は、とルフィは覚悟を決めている。この手の中にいる人を、何を捨てても守らなければならないのだ。

「確かに他の方も協力的でしたが、そういうことでしたか。……夕食の準備中に失礼しました」

「いやア、いいですよ。今日はカレーなんだが作り過ぎたんです。食べていきますか？」
「折角ですが……我々もすぐに発たねばなりません。この村にいないということは別の場所にいるということでしょうし」

「お疲れ様ですなえ」

扉が閉まる音が響き、同時に複数の気配が遠ざかっていくのを感じる。それから少し

の時間が経つてから、二人の頭上が空いた。

「すまない。狭い家だね。こんな場所しか隠れることのできる場所がないんだ」

そこでは申し訳なさそうな表情をしたこの家の主人の男がいた。その男が差し出す手を一瞬ためらいながらもウタが取り、そのまま貯蔵庫から出る。それに続き、ルフィもまた貯蔵庫から出た。

まだ周囲に海兵がいるのではないかとルフィは周囲の気配を探る。だが気配はない。本当に立ち去つたようだ。

「いやはや、夕食前に珍しい来客だ。こんな村に海兵が来るなんてあの時以来かねえ」
言いつつ、カレーの準備を始める男。座つて座つて、という男の促しに従い、二人は席に着く。

しばらくは無言だった。疲労もあつたし、追つ手が立ち去つたことの安堵もあつただろう。二人はぼんやりと夕食の準備を進める男の背中を見つめていた。

不意に小さな音が鳴った。ウタのお腹の音だ。

「……………あ」

慌ててお腹を押さえるウタ。ここ数日、まともに食べれていなかったのだ。そこに美味しそうなカレーの匂いを嗅いでしまったせいで体が反応したのだろう。

次いでルフィのお腹の音も鳴る。控え目なウタとは違い、豪快な音だった。

「体は正直でね。どんなに苦しくても、しんどくても、泣きたくてもお腹は空くんのだ。むしろそういう時こそ食べなくちやいけない」

笑顔と共に言う男は二人の前にカレーの盛られた皿を置いた。次いで自分の分も用意し、席に着く。

「ちよつと予定外の来客があつたけど——」

「おっちゃん」

遮るように言ったのはルフィだ。彼は未だ疑いを捨て切れぬ自分自身に対して嫌悪を感じながら、それでも言葉紡ぐ。

裏切られたことは何度もあつた。

助けられたことも何度もあつた。

この人は——どちらだ？

「なんで」

「なんでも何も。聞いていただろう？——海兵さんに協力は惜しまない」

カレーを一口食べながら男は言う。なんでもないことのように。

「それは市民の義務だろう。ここは辺境ではあるし貧しい村だが、一応加盟国の一部ではあるんだから」

「だったら。おれたちを助けたりなんかしたら」

「僕たちにとつての『海兵さん』はキミたちだよ」

男は微笑んでいた。

何を今更とでもいうように。

「ここは貧しい村だし、人も少ない。海軍は勿論、国も守ってくれないような場所だ。……正直ね。あの時、僕らは死を覚悟した。奪うものなんてないこの村を襲った海賊は腹いせに僕らを殺すんだろうって。そう思ってたんだ」

かつての記憶。

多くの偶然が重なって、ルフイとウタはこの村を襲った海賊たちを討ち取ったのだ。それはまだ二人の名が世に知れ渡る前の出来事。数年前の話である。

「でもそれをキミたちは助けてくれた。何も無い、国にさえも見放されたこの村をなんの見返りも求めずに。——『当たり前だ』って、そう言つて」

ポタリと、一つの雫が机に落ちた。

「だから今度は僕たちの番じゃないか。それが——『当たり前だ』」

溢れる涙が、机を濡らす。

「ありがとう、ごさいます」

絞り出すように、ウタは言った。

その一言を紡ぐだけで、精一杯だった。

「こちらの台詞だよ」

苦笑して。

その人は、やはり言うのだ。

それが、「当たり前」であるかのように。

「あの時、助けてくれて。——ありがとう」

ゆつくりと、カレーを二人は口に含む。

久しぶりのまともな食事で。

温かい……食事で。

「……ッ、ぐ……」

「……ああ、ッ……」

押し殺したような涙声が響いている。

それをその人は——かつて彼らが救った人は、優しく見ている。

何もなかったなんて、なかった。

何もかもを失ってなんて、いなかった。

二人が積み上げてきたものは、確かにここに残っている。

義兄ルート

家族

毎日が、輝いていた。

大変なことも多くて、傷だらけになることばかりだったけど。
それでも、あの日々は輝いていた。

皆が、笑顔だった。

いつも隣にいる大切な人も、笑顔だった。

いつか。

いつかきつと。

未来を、何度も思い描いた。

……こんな未来は、考えたことはなかった。

「わらわのところへ来い！ ルフィ、ウタ！」

人の住まぬ無人島。かつては文明があつたが、いつしか人が去り、そしてその後文明が築かれなかつた島に。

“海賊女帝”の、どこか祈るような声が響いた。

「わらわが治める女ヶ島は風の海域の中にある！ そなたらを追う者も容易く手出しはできぬ！ いや、わらわがさせぬ！」

説得の言葉を続ける女性、ボア・ハンコックの背後には彼女の姉妹二人が憂いを帯びた目で視線の先の二人を見ている。また、ハンコックと肩を並べるようにしてジンベエも眉間に皺を寄せていた。

そんな四人の視線の先にいるのは、二人の男女。

過酷な逃亡生活で汚れた衣服を纏い、二人で支え合うようにして立っている……海軍の、希望であつたはずの二人。

「だから！」

「……ありがとう」

そう言葉を紡いだのは、ウタだった。彼女は、静かに首を振る。

「本気で言ってくれてるのはわかっている。でも、駄目。あなたのところに行くことはで

きがない」

「それはわしらが海賊だからか？」

ジンベエが、腕を組みながら言う。

「お前さんが海賊嫌いなのは知っておる。しかし、この状況では」

「違うよ」

違う。

そうじゃない。

ウタは、ジンベエの言葉を否定した。

「二人のことは好きだよ。もちろん、サンダーソニアもマリーゴールドも。女ヶ島の皆のことも。……ハンコックについては、今でも言いたいことがいくらでもあるけど」

「それはお互い様じゃ」

ハンコックが応じる。今、ウタの隣にいる人を巡って顔を合わせる度に何かと衝突していたが、だからこそ彼女の人となりは知っている。

色々と唯我独尊というか無茶苦茶なところはあがるが、それでもこの場でこちらを騙そうとするような人ではないことは。

「けど、だから駄目」

「ハンコック。おれたちの敵は、天竜人だ」

サンダーソニアが、眩くように言う。

「二人は、正しいはずなのに」

かつて、天竜人の暴虐に晒された彼女たちだからこそ。

この場に、危険を冒して来てくれた。

けれど、だからこそ。

この人たちを、巻き込めない。

「すまねえ」

ルフィの、その言葉は。

説得の無意味さを、この場にいる四人に理解させるだけの重さを持っていた。

どうしたら、と。

そんな沈黙が広がる中で。

「大変です!」

周囲の警戒をしていた九蛇の戦士の一人が大声と共に駆け込んできた。

かつて色々な事故の重なった結果、ルフィが最初に仲良くなつた女戦士マーガレットだ。彼女は息を切らし、ハンコックに告げる。

「海賊船です!」 白ひげ「海賊団です!」

「何じゃと!?!」

予想外の名に、ハンコックも驚きの表情を見せる。
四皇が一角、〃白ひげ〃。

世界を滅ぼすとまで謳われる大海賊が、何故。

「まさかジンベエ、貴様!」

ハンコックがジンベエを睨む。彼が白ひげと親しいことは知られた事実だ。だが彼は目を伏せると、わしは、と言葉を紡ぐ。

「オヤジさんには何も言うておらん。ルフィの家族に、伝えただけじゃ」

「……家族……」

呟いたのは、ウタだ。白ひげ、そして家族という言葉。

その二つが合わさった時に浮かび上がる人物は、一人しかない。

「間に合ったようで何よりだよ」

鳥の羽ばたくような音と共に、空に一人の男が現れる。

この海を生きる者で、彼の名を知らぬ者はいないだろう。

白ひげ海賊団一番隊長、〃不死鳥マルコ〃。

かの白ひげが全幅の信頼を置く男だ。

「何をしにきた!?!」

「おれはただの立会人だよ。用があるのは、こいつの方だ」

ハンコックの言葉に、マルコは肩を竦めて応じる。それと同時に、マルコの足に掴まっていた一人の男が地面へと降り立つ。

背に白ひげのマークを背負った、そばかすが特徴的な男。

よう、と。

その男は、かつての彼らが知る表情とは大きく違う。

重苦しい表情のまま、言葉を紡いだ。

「久し振りだな。ルフィ、ウタ」

白ひげ海賊団二番隊長、〃火拳のエース〃。

二人にとって、義理の兄とも呼べる男がそこにいた。



〃火拳のエース〃。

その名は、この大海賊時代においても畏怖と共に語られる名だ。通常、ルーキーと呼ばれる年齢より更に若い年齢で名をあげた男である。

七武海への勧誘をも断り。

生き急ぐように海を駆け抜け、彼の白ひげの二番隊隊長にまで上り詰めた。

「遅くなつてすまねえ。もつと早くに来るつもりだったんだが」

その男がルフィとウタの義兄弟であることは、一部の彼らと親しい者は知っている。この場にいる者たちは、その「親しい者」に含まれていた。

「詳しい話は後だ。とりあえず、お前らには絶対に手出しをさせねえ。だから」

「駄目だ、エース」

きっと、彼自身も焦っているのだろう。口早に告げる彼に対し、ルフィが首を振った。会えて嬉しい。けど、駄目だ。エースの助けは借りられねえよ」

エースが、愕然とした表情を浮かべた。どうしてだ、とエースは言う。

「白ひげが……オヤジが信用できねえのか？　ならおれを信じてくれ。絶対に、おれは」
「エースは、海賊だろ」

その、言葉で。

初めて、エースは己と二人の間の認識に深い、あまりにも深い隔たりがあると理解した。

拳を握る。そんな彼に、ルフィは言った。

「おれたちは、海兵だから。だから、エースの敵なんだ」

嗚呼、とエースは思った。

その言葉は、こんな。

こんな状態で。

こんな状況で。

聞きたい言葉じゃ、なかったのに。

「馬鹿野郎」

絞り出すような、声だった。

「馬鹿野郎！ その海軍から追われてるんだろうが！ だったらどうするつもりだ!？」

ジンベエの！ “海賊女帝”の手も振り払ったんだろ!？ その上おれの手も振り払っ

て！ お前らはどうするつもりだ!？」

「戦うよ。ウタを守るって、そう決めたんだ」

かつての、泣き虫だった弟は。

静かに、そう言った。

ふざけんな、とエースは怒鳴るように叫んだ。

それは、彼らに対してか。

それとも、世界に対してか。

「おれが気付かねえとでも思ったのか!? お前らはもう、二人だけじゃねえんだぞ!!」

その言葉に、ウタが反射的に両手を彼女のお腹へと添えた。見聞色の覇気がこちらに伝えてきている。そこには、確かに命が宿っている。

ハンコックも苦い表情をし、ジンベエも息を吐く。

「何を置いてでも守るべきもんがあるだろ! おれにとつて、今のお前らがそうなんだよ! 何が海兵だ! その海兵が! 世界政府が!! お前らを殺そうとしてるんだぞ

!!!」

認めるかよ、とエースは言った。

「おれはお前らの兄貴なんだ! だから来たんだ!」

「ここでエースの手を取ったら!! 何もかもを否定することになるだろうが!!」

たまらず、といった調子で、ルフィが叫ぶ。

「あの日! 海兵になるって決めた日に! おれはずっとウタの隣で海兵であり続けることを決めたんだ!」

だから、とルフィは言う。

「エースの、海賊の手は借りられねえんだ!!」

それは、この逃亡者二人の最後の誇りであったのだろう。

海兵であることを、その日々を、彼らは誇りに思っていた。

いつか捕まえてやると、エースに彼らが言ったこともある。

今ここでエースの手を取れば、おそらく助かるかもしれない。

だが。

その時、その瞬間に海兵としての二人は死ぬ。

そうしたらもう、後には何も残らない。

「この、馬鹿が……」

エースは、二人の服を見る。

ボロボロで、薄汚れて、血に塗れて。

ルフィが肩にかけて正義のコートは、血と汚れでその文字が侵されつつある。

「私は、海賊が嫌い」

ウタが、呟くように言う。

「でも、エースは好きだよ」

けれど、と。

彼女は、微笑んだ。

「私は、あの時私を助けてくれたルフィを」

それは、かつての幼き日の、無邪気な笑顔ではなく。

・ 壮絶な、悲壮なまでの覚悟の込められた笑顔。

「私の愛する人を、信じてる」

この、馬鹿どもがと。

エースは、あらん限りに拳を握り締め。

わかったと。

覚悟を込めて、言葉を紡いだ。

「そうだ。おれは海賊だ。お前らとは、あの日、道を違えた」

あの日。

ルフィとウタが、弟と妹が。

大切な家族が、海兵になると告げた日に。

「この背のマークは、おれの誇りだ。おれは、海兵であることを後悔していないお前らと同じように、海賊であるおれに後悔していない」

あの時、思い描いた未来は。

決して、こんな形ではなかったのに。

「だからここからは、海賊としての流儀で行く」

その体から、噴き出すように炎が溢れる。

彼の持つ炎の力。それは、幼き日にはなかった力だ。

「お前らを倒して、連れて行く」

周囲の者たちが息を呑んだ。ルフィは頷くと、ウタから手を離し、歩み出る。

「来いよ」

兄が、吠える。

「海軍本部大佐!!」
「麦わらのルフィ!!!」

そして、弟も。

「行くぞ」

拳を握り。

汚れた正義のコートを背負って。

「海賊!!」
「火拳のエース!!!」

かつて。エースも、ルフィも、ウタも。

こうなる未来を、思い描いたことがある。

捕まえようとする海兵と。

それを迎え撃つ、海賊で。

そうやって、ぶつかり合うことを。

覚悟はあった。

互いが選んだのは、そういう未来だ。

けれど、それは。

こんなにも、切なく。

絶望的な未来では、なかったはずだった。

だった、のに。

一体、何を。

何を、間違えたのだろうか。

家族②

かつての幼き日。『麦わらのルフィ』と今は呼ばれる青年は、彼の兄に勝つことができなかつた。

年齢の差もあつただろう。経験の差もあつただろう。

ただ、一度も勝てぬままに兄が旅立ったことも事実だ。

そしてその後、二人が再び拳を交えることはなかつた。

片方は海賊で、片方は海兵だ。出会えば必然、戦うしかない。ただ、一度だけ再会を果たした時とはとてもそれどころではなく、お互いに見ないふりをした。

そして、今。

ぶつかり合う必要のなくなつたはずの二人が、拳を交えている。

「……これが、エースの弟かよい」

エースの弟と妹の保護を、彼の船長に願つた。

文字通り甲板に額を擦り付け、何もかもを投げ捨てるようにして。

それに対し、大海賊「白ひげ」は言った。

『オメエの弟と妹つてんなら、手を貸すことを断る理由はねえ』

誰よりも家族を大切にする「白ひげ」であるからこそ、エースのその想いに応えようとしてくれたのだ。

しかし、二人を刺激しないようにと立会人は一人と指示し、更にその立会人である自分に対して彼はこうも言っていた。

『エースの弟と妹だ。しかも、妹の方とはかく弟の方はガープの野郎の孫でもある。

……間違いなく、素直にエースの手は取らねえだろう』

そしてその読みは見事に的中していた。今、兄弟のぶつかり合いが始まっている。

その戦いは一方的なものになるとマルコは思っていた。色々と大事件を起こしている「麦わらのルフィ」だが、それでもエースの強さには届かないと。

しかし。

「どうしたルフィ。一発でグロッキーか」

無数の攻防。その果てによりやくエースが叩き込んだ蹴りの一撃で地面へと叩きつけられたルフィが、膝をついていた。だが、たった一撃だ。あのエースが、この一撃を入れるのにあまりにも時間をかけ過ぎている。

迷いもあるだろう。しかし、それ以上に二人の戦闘力に思っていたよりも開きがない。

(海軍から逃げ回れる理由がこれかよい)

納得がいった。「七武海」の一角を落としたこの男は、単純な戦闘能力だけなら海軍本部長、その上位にある。

これで大佐を名乗るのだから、詐欺もいいところだ。

だが、それでも差はある。

今のままでは、「麦わらのルフィ」に勝機はない。

エースは、白ひげ海賊団二番隊長だ。その実力は、間違いなく本物であるのだから。

「……やっぱり、エースは強えなあ」

小さな笑みを含んだ言葉。

どこか誇らしげな雰囲気を感じつつ、ルフィが立ち上がる。

「けど、おれはもう負けられねえんだ」

腰を落とし、両手を太腿に。

「『青雉』の強さを見た。世界の広さを見た。ウタと一緒に、いつか超えてやるって

……どつちが先かって、勝負を始めた」

ルフィの足が、まるでポンプのように蠢き始める。

「けど、いつかじや駄目だ。今強くならなきや、おれはウタを守れねえ」
ドクン、という鈍く、重い音が響く。

心臓の音だと気付くのに、少しだけ時間がかかった。

「おれにとつての『正義』は、それだけだから」

蒸気。

ルフィの体から、白い煙が噴き出す。

「……ルフィ。お前は」

「いくぞエース。おれの技はみんな、一段階進化する」

噴き出す蒸気は、何かが起きていることを明確に示している。だが、その正体は未だ不明だ。

「『ギア、2』」

ギア、と言ったルフィに、周囲の者たちが注視する。普段なら突拍子のないことをする男であるが、ここでふざけるような男ではない。

何が来る、とエースが見定めるようにルフィを真っ直ぐに捉えた。その彼に対し、ルフィは狙い撃ちの構え。

体を半身に、拳を引いて。まるで狙いを定めるように左手を前に出す。

「ゴムゴムの」

避けて、カウンター。エースの思考はマルコにも読めた。この男は、ただ倒すだけでは駄目だ。力の差を見せ、心を折らねば。

そうしなければ、きつと死ぬまで戦ってしまう。
だが。

次の瞬間に目に入った光景は、周囲の全員を驚愕させた。

「JET銃!!!!」

轟音と共に、エースの顔面へと拳が叩き込まれた。

マルコも、エースも、七武海の二人も、ウタも。

突然の、先程までとは文字通り次元の違う速度の一撃に驚愕する。

「……ぐっ」

「スタンプ!!」

起き上がるエースに追撃。だがそれは、エースが身を屈めて避けた。

更なる追撃。海軍で戦いの訓練を受け、優秀な多くの師に恵まれたルフィは六式も体

得している。

高速の移動術「剃」による、接近。ほぼゼロ距離で、二人の拳が激突した。

「ぬぐっ!!」

一瞬、互いに堪えるが衝撃で互いに後方へ吹き飛ばされる。

共に、無言で立ち上がる。そして、再び戦闘態勢。

最早、言葉は必要なかった。



二人の「家族」の激突から、ウタは決して目を逸らすまいと視線を向け続けた。

油断をすれば涙が溢れそうになる。だが、駄目だ。それは許されない。

あの日から、戦えなくなった自分。恐怖で体が震え、動けなくなってしまった自分。

ルフィは、そんな自分の代わりに戦い続けている。

ならば、せめて。

せめて、目を逸らすことだけはしてはいけない。

「……目を閉じようものなら、引っ叩いてやったところじゃが」

そんなウタを見て、ハンコックが呟く。彼女の視線の先には、二人の兄弟の戦い。

それは最早、この世の戦いとは思えなかった。

激突する度に周囲に甚大な影響を与え、しかし、その当事者たちは止まらずに動き続ける。

轟音が繰り返し響く中、しかし、戦いの趨勢は傾きつつあった。

それは、残酷なまでの地力の差。

徐々に、しかし、確実に。

ルフィが、押されている。

「ルフィ」

だが、ウタは目を逸らさない。

信じているのだ。

信じると思ったのだ。

彼を、信じると。



それが決着の一撃であるということとは、直感で理解した。

互いの視線が交錯する。エースは無意識のうちに笑みを浮かべたいた。

(あのルフイが、こんなに強くなってるとはな)

かつて彼が語った、『いつかエースだって捕まえてやる』という言葉。それはもしかしたら、本当にあり得た未来だったかもしれない。

だから、悔しい。

こんな自分とは違い、光の道を歩めたはずの二人が。

誰よりも幸せになって欲しかった二人が。

こんなことになっている事実が。

「来い、ルフイ!!」

「『ゴムゴムの』!!」

拳に炎を集中させる。

この技は、己に与えられた二つ名そのもの。

エースの代名詞とも呼べる技。

「JETバズーカ!!」

放たれた超高速の一撃。

「火拳!!」

しかし、ルファイの一撃は。

駆け抜けた炎が、呑み込んだ。

周囲に炎が燃え移り、煙が舞う。

「馬鹿野郎」

眩くように、エースは言う。

それは、誰に対しての言葉であったのか。

「ルファイ!」

ウタがルファイの名を呼ぶ。無駄だ、とエースは思った。

完璧に入った一撃だ。立てるはずがない。

だと、いうのに。

「……………」

ゆらりと、白煙の中をルファイが立ち上がった。上等だ、とエースは眩く。

「いくらでも相手をしてやる」

だが、彼が構える前にウタがルファイの元に走り寄った。何を、と言いかけたところで、

ようやく気付く。

意識が、ない。

「麦わらのルフィ」の意識は、もう既に消えていた。

「……そうまでして、通す意地かよ……！」

拳を握り、思わず唸る。

ウタの嗚咽が聞こえる。意識を失ってなお構えをとる彼の手を握り締め、ゆっくりと下げさせる。

「いい弟だよい」

「ああ、そうだな。……自慢の、弟だ」

「噛み締めるように言うと、エースはウタへと声を張り上げる。

「先に言った通りだ！ おれはお前たちを連れて行く！」

涙を零す瞳でウタがこちらを睨む。そして、震える手で構えた。

「ああ、そうだな。それが、お前らの誇りだったな」

ルフィを庇うように立つウタの姿に、思うところはあつた。だが、ここで退くことはない。それでは、何の意味もない。

思わず、左頬に触れた。ルフィに殴られた場所が、まだ痛い。

「……世話の焼ける弟と、妹だ」



エースの弟と妹。ルフィとウタの二人を医務室に運び込むと、白ひげ海賊団は出港した。その直前、“海賊女帝”と“火拳”の間に一悶着はあったが。

『この二人に万一があつた時は、わらわが貴様らを皆殺しにしてやる!!』

その言葉を笑うことはできなかつた。エースは帽子を被り直し、こう応じた。

『大事な家族だ。……絶対に守るさ。今度こそ』

失つてしまった、もう一人の家族の顔が浮かぶ。

もう、二度と失わない。

そのために、ここに来たのだから。

二人の治療は既に始まっている。エースもまた別室で治療を受けた後、少し一人になりたいとして部屋に引っ込んでいた。

目的は果たし、海を行く白ひげ海賊団。だが、その甲板。海賊“白ひげ”が君臨する

場所に、奇妙な来客が来ていた。

「おれは海賊だ。『革命軍』なんぞがおれのところに来る理由があるとは思えねえが」

「今日は私用だ。立場は利用させてもらったけどな」

白ひげの前にいるのは、海賊船に似つかわしくないきちんとした衣装の男だ。その男は船に乗り込む際に持つてきた巨大な酒の入った樽を前に押し出すと、白ひげたちに告げる。

「『赤髪』から、あんたは酒が好きだと聞いた。急な乗船の礼だ。飲んでくれ」

「……あのハナツタレはどうしてる」

僅かに、白ひげの声が低くなった。海軍本部准将、『海軍の歌姫』ウタ。彼女がかの大海賊『赤髪』の娘であることは、彼とそれなりに深い繋がりがある者はよく知っていた。

家族を置き去りにし、拳句この状況だ。事情があることは察しているが、かといって何よりも家族を大切にする白ひげに許せるものではなかった。

だが、目の前の男は笑みを浮かべ、拳を握る。

「ぶん殴っておいた」

その言葉に、流石の白ひげも一瞬言葉を失った。そしてその直後、大いに楽しそうに笑う。

「グララララララララ！ やるじゃねえか！ おい、盃を用意しろ！」
後に、船員の一人は語る。

オヤジがあんなにも楽しそうなのは、久し振りであつたと。



注がれた酒を口に含むと、白ひげは怪訝な表情を浮かべた。

「上等な酒じゃねえな」

「昔、おれたちが義兄弟の契りを交わした時の酒だ。……この場に来るなら、それが一番だと思つた」

サボ、と名乗つた男が言う。白ひげはその言葉を聞くと、一気に酒を飲み干した。

「あア……悪くねえ」

言いながら、彼は目の前の男の話したことについて考える。

かつて、義兄弟の契りを交わした四人の子供。しかし、そのうちの一人は天竜人にとって船を砲撃され、命を落とした。

その後、兄は海賊に。

弟と妹は、海軍に。

記憶を無くした兄は、革命軍に拾われた。

そして先日。あの二人の起こした大事件のニュースがきつかけで、記憶を取り戻したのだという。

「信じてもらえねえのはわかってる。けど、おれは」

「にわかには信じ難い話ではある。だが………単身ここに乗り込んでくる奴が、そんな嘘を吐きにきたってのも現実味がねえ」

それに、と。

空になった盃を見て、白ひげは言う。

「いい酒をくれた礼だ。信じてやる。……おい、ティーチ。案内してやれ」

「ゼハハハハ！ いいのかオヤジ！」

「構わねえ。嘘であったところで、エースがこいつを殺すだけだ」

エースの家族を騙るつてのはそういうことだと、白ひげは言う。

「ありがとう」

そんな白ひげへサボが頭を下げ、ティーチの案内に従って船内に入っていく。それを見送り、白ひげは呟いた。

「……一体、どうなってやがる」

四人の義兄弟。その全員が、この世界に大きな影響を及ぼし得る立場にある。

こんな偶然があるのだろうか？

(ロジャー……お前が待っていたのは、あの四人か?)

かつて彼が語っていた、世界をひっくり返す存在。

それは、彼らのことなのだろうか。

時代が変わるかもしれない。

白ひげは、空を見上げながらそう呟いた。



自分の部屋で座り込みながら、エースは二人のことを考えていた。

ルフィの攻撃を受けた場所が、まだ痛む。

二人の確保はできた。だが、これからどうするか。あの二人を守りたい。しかし、ずっとこの船に乗せておくことはきつとできない。

もう二度と、失いたくない。失わせない。

だが、どうやって？

どうやって、守ればいい？

答えが出ない問いの中。不意に、ノックの音が響いた。

「エース隊長。客だぜ」

「……誰だ」

相手は答えず、入ってくる。

「何の用だ？」

「随分とルフィの奴にやられたな、エース」

その声に、エースは弾かれたように顔を上げた。

視線の先。そこにいたのは一人の青年。

だが、わかる。わかるのだ。

この青年は、この男は。

「サボ。なんで」

掠れた声を上げながら、エースが立ち上がる。サボは帽子をとると、頷いた。

「遅くなってすまねえ。事情は後から説明する」

「後からって」

「それよりもだ、エース」

エースの肩を掴み。

「ありがとう」

サボは、そう言った。

「二人を助けてくれて、ありがとう」

「……馬鹿野郎。当たり前だ」

礼を言われることじゃない。そう言いながらしかし、エースは胸の支えが取れたような気がした。

自分にとつての家族でも、白ひげ海賊団にとつてはそうではない。しかも元海軍で、天竜人から追われる立場。どうしても、負い目があった。

けれど。

サボなら。

己と同じ、あの二人の家族なら。

そんな負い目もなく、わかってくれる。

「今、おれは革命軍に厄介になつてる。おかげでここにも来れた」

「革命軍だと？　じゃアルフィの」

「ああ、ドラゴンさんの下で色々やつてるんだ。……ああ、そうそう」

エースの肩から手を離し、サボは笑う。

『合わせる顔がない』なんて言ってたから、一発ぶん殴っておいた」

その言葉に、エースは笑った。

サボだ。この、一番冷静でありながらしかし、家族想いなこの男は間違いなくサボであつた。

二人して笑う。そしてひとしきり笑った後、サボが真剣な表情で言葉を紡いだ。

「エース。これまでの話よりも、これからの話だ。あの二人の置かれてる立場は、相当厄介だぞ」

「……ああ、わかっている」

「いや、わかっているえ」

「いいか、とサボは言葉を紡いだ。

「『英雄』ガープの孫であるルフィは、アラバスタの件を筆頭に海軍の新時代の英雄として認知されてる。ウタも『海軍の歌姫』なんて呼ばれて、ルフィと同じく英雄扱いだ。二人で揃って活躍してるせいで、二人で一つみたいになってるが」

「昔からそうだったな」

エースは頷く。あの二人はいつも一緒だった。気がつけば二人で何やら勝負を始め、その勝敗でいつも揉めて。

それを見て笑うのも、この兄二人の日常だった。

「懐かしいな。……まあそれは置いておいて。そんな二人が、天竜人なんていう理不尽のせいで一気に転落人生だ。海軍は今、相当内部が混乱してる」

「そうなのか？」

「離脱者も続々と出てる上に、派閥同士の争いまで起こってるそうだ。元々溜まっていた天竜人への不満が今回のことを切欠に表に出てきた、つてのもあるだろうが」

元々、歪んだシステムだ。何かを切欠にこうなることは予想できた。

「そんな中で、天竜人をぶん殴ったルフィと、そのルフィと共に逃げるウタは一種の崇拜を受け始めてる。……当たり前前だな。多分、誰もがやろうとしてできなかったことをあいつらはやってるんだ」

理不尽に泣かされた者は、多くいる。

苦しみを味わった者も、多くいる。

その者たちにとって、たった一人のために世界の神に真正面から抗い、そして今もなお逃避行を続けている二人はある種の希望でもあるのだ。

「だからこそ厄介だ。影響力つてのは得難い才能でもある。あの二人を手に入れられれば、あの二人に希望を持つ連中を丸ごと自分の陣営に引き込める。そうなると、ありとあらゆる組織があいつらを狙ってくる」

「……海軍以外にも狙われるのか」

「世間的には、白ひげ海賊団が先んじて動いたって印象だろうな。おれたちとの関係が表に出れば風向きは変わるだろうが、余計な火種にもなる。四皇幹部と、革命軍幹部の兄がいるんだぞ？」 たった二人引き込むだけで一気にパワーバランスが崩れる」

民衆からの支持と、周辺の人間関係。表沙汰になつていない関係図を考えると、あの二人は最早一種の特異点だ。

海軍にも、海賊にも、革命軍にも。

あの二人は、本人の意図せぬところで深く関わっている。

「だとしたら、ますます下ろすわけにはいかねえな。あの二人を守らねえと」

「ああ。だが、それじゃジリ貧だ。だから、エース」

サボがエースを見つめる。その表情は、真剣だ。

「おれは天竜人のシステムを破壊する。あいつらを神から人間に引きずり落とす」

そのための革命軍だ、とサボは言い。

だから、とエースに対して言葉を紡いだ。

「エースは、『海賊王』になれ」

何を、とエースは言った。その彼に対し、サボは言葉を続ける。

「『海賊王』は言った。『この世の全てをそこに置いてきた』と。世界そのものをひっくり返さねえ限り、あの二人は救えねえんだ」

エースは、一度目を閉じた。

一度、二度、と大きく深呼吸をする。

そしてゆつくりと、言葉を紡いだ。

「……迷惑な話だな。おれも、ルフィも、ウタも。世界的大犯罪者の血を引いてる」

『海賊王』、『世界最悪の犯罪者』、『四皇』。

その血を引く彼らは、生まれ落ちたその時からあまりにも重い業を背負っている。

「おれはこの道を選んだが、あの二人は違う。海軍に入って、ちゃんと真つ当に生きてたんだ。……ありえねえ話だが、あの二人に逮捕されて監獄にぶち込まれるんなら、おれは納得したと思う」

生まれにおける業に、抗いきれなかった自分とは違って。

あの二人は、光の道を進んでいたはずだ。

「幸せに、なるべきだった」

なつて、欲しかった。

なのに。

この、世界は。

「やるぞ、サボ」

世界を変える。

エースが、そう宣言した。

「このふざけた世界を、ひっくり返してやる」

かつて、『海賊王』は時代を変えた。

ならば、エースは。

その血に翻弄され続けてきたエースは、世界を変える。

そうして、大切なものを守るのだ。

後の歴史において、未だ答えが出ない後の大事件の始まり。

それは、たった二人の決意から始まったのだ。

赤髪ルート

約束 前編

あの時に、あの拳を繰り出したことをモンキー・D・ルフィは微塵も後悔していない。追ってきた海兵たちやCP……かつての仲間であり、戦友たちが相手でも。

自分達の部下であった者たちが、涙と共に無抵抗に殴られようとする姿を前にしても。

それでも、大切な人を守るために。

そうやって、駆け抜けてきた。

だが。

この世には、拳だけではどうにもならないことがある。

「ウタ、大丈夫か!?! くそつ、熱が……!」

焦燥が募り、滝のように汗が流れる。あの日、逃亡者となった日。これからの未来への不安と、一つの覚悟を持ってルフィは彼女の指に草でできた指輪を作った。

それは、本来なら輝く銀の指輪であったはずのもの。
数多の祝福の中で渡すはずだったもの。

だが、非情な運命が、それを許さなかった。

「……………ル……………ファイ……………」

か細い声と、小さな力でこちらの手を握る大切な人。そのお腹は、大きく膨れていた。
逃亡者となった日に、彼女に夫婦になろうと告げて。

ずっと一緒にいようと約束して。そうして、彼女と一つになった。

それが、間違いだったのか？

あの日、不安と焦燥と、見て見ぬ振りをした絶望の中。その日だけは笑顔になれたその喜びは、間違いだったのか？

「大丈夫だ、ウター！ ウタも子供たちもおれがなんとかするから！」

何とかとは、何だ。どんな方法だ。

悪を殴り、数多の人を救い出した。感謝の握手を求められたことは数えきれず、涙を流して喜ばれたこと無数にあつて。

街に出れば、子供たちからヒーローと呼ばれて。

一部では「英雄の再来」だと、「海賊時代の救世主」とまで呼ばれたのに。

なのに、この腕は。

「下がれ……！　下がってくれ、頼む、頼むよ……！　目を開けてくれよウタ……！」

この拳は、熱に侵され、苦しむ大切な人さえ救えない。

救う術を、ルフィは…… “新時代の英雄” は、知らない。

「……………ッ」

そして、悪いことというものは重なるもの。常に畳み掛けるように、こちらへと襲いかかってくる。

この逃亡生活で、更に研ぎ澄まされた見聞色の覇気。それが……いや、そうでなくとも、このプレッシャーが相手では気付いただろう。

「ウタ。ごめん。少しだけ、離れる」

「……………ル………ファイ……………」

「大丈夫だ。必ず、戻るから」

精一杯の笑顔を浮かべ、優しく彼女の頭を撫でた。笑えているか、自信がなかった。

「……………行っ……………ちや……………だめ……………」

その言葉は、聞こえない振りをした。彼女に、逃亡生活の中隠れて市民の一人が譲ってくれた毛布を掛け、その額の布を取り替えて。

その文字がくすみ始めた正義のコートを身に纏い、洞窟の外へ出た。

「……………」

冷たい雨が、体を打つ。

視線の先には、無数の海兵と。

海軍本部、最高戦力の姿。

「……………出てきて、しまったか」

その男……………大将青雉ことクザンは、重苦しいため息と共に呟いた。

「遂に、大将まで出てきたのか」

周囲を囲む海兵の数は、おそらく千を超えている。だが、ここにいる人間のことを考えればおそらく後方にもっと多くの兵がいるだろう。

「当たり前だ。この十ヶ月で中将を五人も病院送りにすれば次はもう、俺たちしかないな
ら」

「マグマのおっさんが来ると思ってた」

「そりゃ、酷だろう」

誰にだ、と視線で問いかけるとクザンは周囲の兵士を手で制しながら言葉を紡いだ。

「両方にとつてだよ。……………おれたちにとつて、お前ら二人は本当に……………本当に、大切な後輩だったんだよ」

何でかね、とクザンは言う。

「迷惑ばかりかけられたが、あれが今は恋しい」

「おっさんに迷惑かけた覚えはねえぞ」

「そりやそうだな。一番迷惑かけられてたのはサカズキだ」

小さく、苦笑。

「さて……話し合いはここまでだ。単刀直入に言う。投降しろ。悪いようにはしない」

「信じられるかよー！」

ルフィの一喝。そして彼は、ゆつくりと構えをとる。

クザンは、そうか、と呟くと一度目を閉じ、何かを覚悟するように息を吐いた。

「そりやあ、そうだな。ここで説得に応じることができればなら、最初のモモンガの時に投降しているはずだ」

お前の教育係だったからなという、クザンの言葉。その言葉に、ルフィは拳を握る力を強めた。

ルフィの脳裏に、あの日のモモンガの表情が浮かぶ。こちらを説得しようとした彼は、悪いようにはしないと告げた。しかし、ルフィは彼ほどに厳格な海兵をそうは知らない。だからこそ、信用できなかつた。

彼はどうしようもなく海兵であつて。

その姿を、ルフィは間違いなく尊敬していたから。

だから、無抵抗にこちらの拳を受け入れた彼が眩いた、「すまない」という言葉は、モンキー・D・ルフィとウタにとって、呪いとなった。

彼が決して、意図しない形で。

海軍を、絶対に信用できない理由として。

決して拭えぬ、呪いとなってしまった。

「おれたちは、天竜人に逆らうことができない」

「……………」

「何でおれほどの力があって、と思うか？ まあ、確かにおれたちは人間離れた力を持っている。だが、それだけだ。この世には、人間一人じゃどうにもならねえことはいくらでもある」

そして、と、彼は言った。

「海軍の力は個々の力ではなく、『数』だ。おれを含めたこの数を、一人で倒せるか？」
その言葉に、ルフィは一度息を吐き。

そして、その瞳から。

「うあ」

「おお」

「うぐっ」

霸王の証が、放たれた。

「……………やはり、持ってたか」

クザンを除く周囲の海兵全員が、ルフィの覇気で沈黙している。

その覇気の名は、「霸王色の覇気」。

人を従える資質を持つ者のみが宿す、天賦の才。

「ますます、お前が失われることが惜しく思う。だがそれと同時に、だからこそ見逃すことができねえ」

安心しろ、とクザンは告げた。

「生かして捕らえるつもりはねえよ。あのゴミ共に、お前らを好きにさせはしない」

それは、絶望の宣告。

それでも、ルフィは退けない。

彼の背後には、三つの守らなければならぬ命がある。



戦いは、一方的であったと言える。

最早、全身で傷がないところがないほどに満身創痕のルフィに対し、あちらは傷一つない万全の状態。

更に、逃亡生活のせいで満足な休みさえ取れていないのだ。ただでさえ海兵時代から絶対に勝てなかった相手である。それをこの悪条件で、勝てる道理がない。

いやそもそも、形だけでも戦いになったのが奇跡だ。

「……フーツ……フーツ……！」

左腕の、肘から先。右足の、太腿から膝。

右肩、そして顔の一部。

それが、ルフィの体の凍った場所だ。

「……苦しいだろうな」

覇気を纏えば、ある程度はガードできる。だが、そもそもの地力の差が違う。徐々に押し込まれ、こんな状態になっていた。

「二つ、教えてくれ。今その状態から、勝てる算段はあるか？」

ルフィは、クザンを睨みつける。その顔を見て、成る程、と告げた。

「大した心の強さだ。……なあ、ルフィ。何故、正義のコートを着続けている？」

パキパキと、周辺が凍る音が聞こえる。

「お前はそれを煩わしがっていたはずだ。『掲げる正義の形がわからない』と、そう言っていたな？」

そう、その通りだ。海軍時代のルフィは、正義のコートを煩わしく思っていた。

別に嫌いとか、鬱陶しいとかいうわけではない。いや確かに多少面倒臭いと思う部分もあったが、それよりも自分の中の正義の形がわからなくて、周囲に対して少し思うところがあつたというのが正しい。

だから、クザンはコートなど既に捨てていると思っていた。だが、この逃避行の中、ルフィが戦う時は必ず正義のコートを着ていたという。

故に、ここに来た。

これがとんでもない貧乏くじであることはわかっている、その真意を確かめるために。

「おれの正義は、今、ここにあるからだ」

息を切らしながら。

それでも、声に覇気を纏わせて。

「それは、何だ」

くすんだ正義の文字の書かれたコート。それをルフィは、無事な右手で掴み。

「大切な人が、笑える正義」

何かを、確かめるように。

そのコートを、握り締める。

「……その、言葉を」

クザンは、苦虫を噛み潰したような表情で、しかし、僅かに……ほんの僅かに、その中に喜びを浮かべて。

「もっと早く、聞きたかった」

その言葉に込められた想いは、どれほどのものであっただろう。

絶望と、希望と、悲嘆と、歓喜と……そして何より、深い、あまりにも深い……後悔が。

そこには、込められていて。

「恨むなよ」

クザンが、こちらへ歩み寄ってくる。ルフィは、迎え撃つために力を振り絞ろうとして。

天を揺らす『覇気』が、島の全てに響き渡った。

島中の獣たちが大騒ぎを始める。まるで巨大な爆弾でも落とされたかのように、一気に島中が騒がしくなる。

「……遅えよ」

呟いたクザンのその言葉は。

懐かしい顔が思い浮かんだルフイには、幸か不幸か届かなかった。

「……………シャン、クス……………」

そして、その声に応じるように。

海賊の一団が、こちらへと歩み寄ってくる。

「その二人に……いや、四人に手を出すな」

それは、かつて憧れた男。

道は違えたが、それでも、尊敬していた人。

四皇、『赤髪のシャンクス』。

「流石に、『四皇』と戦う予定はねえよ。……おら、さつさと起きろ」

一瞬、鋭い視線でシャンクスを睨みつけた後、クザンは近くの兵たちを起こしにかかる。そして目を覚ました兵士が、シャンクスたちの姿を見て驚愕する。

「あ、『赤髪』!? 大将、こ、これは!」

「見ての通りだ。邪魔されちまった。……まあ、『赤髪』の横槍が入ったってんなら言い訳も立つだろ。ほら、さっさと他を起こして撤収だ」

「は、はい!」

そして起こされた海兵が周辺の海兵たちを起こし始め、驚愕の中慌てて撤収を始める。気絶して、起きたら『四皇』だ。それも仕方がないと言えるが。

そして慌ただしく動く海兵たちにシャンクスたちは一切手を出さず、その姿を見送る。クザンは長いため息を吐くと、ルフィに背を向けた。

「悪かったな。こんなこと、やりたくなかった。……それだけは、信じてくれ」

呆然としているルフィにそう告げ、クザンは歩き出す。そしてシャンクスと擦れ違う時、舌打ちと共に言葉を紡いだ。

「俺たちじゃあ、あいつらを救えねえ。任せていいんだな?」

「おれの娘と、おれの親友だ」

「そりゃ安心だ」

そして、クザンたちが立ち去っていく。

雨がまだ降り続ける中。

両者が、再会する。

その形は、決してかつて望んだ形ではなかったが……。



ルフィの頭は、正直言つて混乱していた。

シャンクス。かつての憧れ。友達。ウタの父親。でもウタは恨んでる。

約束。

ふと、そんな言葉が浮かんだ。

あれは、シャンクスと……

「ルフィ、ウタはどこだ。急いでー」

シャンクスの声には焦燥がこもっていた。しかし、それをルフィは。

「来るんじゃない!!」

何故、自分の口からこんな言葉が出たのかわからない。

覇気を纏つた……あまりにも弱い、しかし、確固たる意志のこもつたその言葉に、赤髪海賊団の足が止まる。

まさしくその姿は、手負いの獣。

全身に抽く巻かれた包帯からは血が滲み、一部は凍らされて。

それでも、彼が掲げた「正義」のために。

大切な人のために、彼は己の全てを懸けている。

「……ルフィ……」

かつての子供が、こんな姿に。

その姿に、悲痛な眩きを漏らしたのは誰だったか。

いや、きっと誰もがそうだった。

幼き日の彼を見知つた者であれば、例外なく。

「おい、ルウー！」

そんな中、駆け出したのはラッキー・ルウだった。制止も待たず、いつも手に持つている肉も持たず。

かつてフーシャ村でルフィと共に騒いでいた男が、ルフィの元に駆け寄る。

「馬鹿野郎！ おれたちは味方だ！ お前を！ ウタを！ 助けに来たんだ！」

「でもー！」

「でもじゃねえ!!」

凍らされず、無事な左肩を掴んで。

ルウは、涙さえ混じった声で叫ぶ。

「遅くなったのはいくらでも詫びる!! おれたち全員をぶん殴ってもいい!! だから頼む!! 助けさせてくれ!! 頼むルフィ!!」

それは、赤髪海賊団全員の想いの代弁であった。

特に、あのフーシャ村で過ごした者にとっては何よりも強い想い。

「っ、う……ぐっ……」

ルフィの瞳から、大粒の涙が溢れた。

それはきつと、この逃亡生活が始まってから初めてのことで。

「ウタを……助けてくれ……!! 熱が、下がらなくて……!! 苦しそう、で……!! おれ、おれ、何にも……できなくて……!!」

「ああ!! ああ!! おい船医!! 何してる!? 早く行けよ!!」

ルウの怒鳴るような声に、複数人が弾かれたように駆け出した。

ルフィは、無事に動く右腕でルウの腕を掴む。

「おれ、おれは……どうなってもいいから……っ!!」

「馬鹿野郎!!!」

ルウの、今日一番の叫びが響く。

「お前も助けるに決まってるだろ!! おれたちは友達だろうが!!」

それが、ルフィの最後の緊張の糸を解いたのだろう。

か細い声で。

かつてのあの快活な少年とは思えぬ声で。

「……たすけて……」

そう、口にした。

「ああ!! 船長!!」

シャンクスへ、背中越しにルウが呼びかける。

彼が頷いたのが、伝わってきた。

「当たり前だ!!!」

モンキー・D・ルフィという男は、一体何度、その言葉を口にしてきたことだろうか。苦しむ人々は、幾度となく彼に対して救いを求めた。

縋るように。

祈るように。

その時、いつだって彼はこう返答したのだ。

“当たり前だ”

その言葉の通り、それは彼にとっては当たり前のことだった。

けれど。

きつと。

この言葉を彼自身が貰ったのは、初めてだった。

約束 後編

緊急で、出産の用意が整えられた。

臨月であつたことに加え、体調の不良と過度なストレス。様々なものが重なり、緊急で出産という運びとなつたのだ。

最初男たちは慌てるだけだったが、船医たちの的確な指示でその動きも収まつた。正確に言えば「邪魔だから消えろ」とほとんどの船員たちが言われ、遠巻きに急遽出産部屋となつた医務室の扉を眺めている。ちなみにシャンクスが一番遠くに追いやられていた。

天下に轟く四皇の海賊団、その男衆がその両手で祈りの形を作っている。世界に知らぬ者なき力を持つ彼らでさえ、こんな時は無力だ。

そして、部屋の中では。

「あんたの水も溶かさないとダメなんだよ！　ここは任せてくれ！」

「いやだ！ 絶対に離れねえ！」

意識も朦朧としたウタの隣で、ルフィはその手を握っていた。だが、彼自身も体の一部が凍らされている。早く治療しないと、重大な後遺症が残る恐れがあった。

船医はウタの様子を見ると、その手はがっちりとルフィの手を握っている。朦朧とする意識の中でも、何度も彼の名を呼んでいた。

「……ル……フィ……」

「大丈夫だ！ ここにいる！ ウタも子供も大丈夫だ！」

その姿を見て、頭を何度もかいた女性の船医は、扉の外へ声をかけた。

「おい役立たず共！ 水をもつてきな！ 何人かはそれを使って小僧の体の氷を溶かすんだよ！」

「わ、わかった！」

「おれがやる！」

「お、おれが！」

扉の外が騒がしくなる。それを見届け、ルフィは言った。

「ウタは大丈夫か？」

「この子も、お腹の子供も絶対に助ける。私の命に代えてでもね」

そのために来たんだ、と医者はいふ。

「だから、あんたもそんな顔をしちや駄目だ」
だって、と医者は言う。

「父親に、なるんだらう？」

その言葉に、ああ、とルフィは頷いた。

長い、長い戦いだっただ。

ルフィの体の氷が完全に溶かされて。

男たちが追い出されて。

それでも、まだ時間がかかった。

誰もが、祈りを捧げた。

そんなものにししか、縋れなかった。

そして。

赤ん坊の、泣き声。

「「「やったーっ」」」
「「「！！！！！！」」」

船を揺らすような、爆発的な大歓声。
数多の祝福の中で、双子が誕生した。
やかましい、と。

医者に全員が説教されたのは、ご愛嬌か。



そして、深夜。

ウタは体力を使い果たしたのか、深い眠りについている。双子の赤ん坊についても同じだ。ルフィは自身の体の治療を施され、同じ部屋にいるが眠れずにいた。

そこへ、ノックの音が響く。

「起きているか？」

見聞色の覇気でよくわかっているだろうに、わざわざそんなことを聞いてくる。ああ、と応じると、一度ウタたちの方を見てからルフィは部屋の外へ出た。

そこにいたのは、赤髪海賊団の頭目。

ウタの父であり、ルファイがかつて憧れた男。

そして、自分達を救ってくれた人。

ルファイが、礼を言おうと口を開きかけた瞬間。

「ありがとう……!!!」

シャンクスが、その両膝をつき、頭を下げた。

ルファイは慌ててシャンクスに駆け寄る。

「礼を言うのはおれの方だろ」

「違う！ お前はウタを守ってくれた！ ウタを、救ってくれた！」

頭を上げぬまま、シャンクスは言う。

「ありがとうルファイ……!! 約束を、守ってくれて……!!」

約束。その言葉を受けて、ルファイの脳裏に記憶が蘇った。

幼き日。まだウタを置いてシャンクスが出ていく前。

彼は、いつになく真剣な表情で言っていた。

「ウタを、守ってくれ」

ああ、とルファイは小さく笑う。

そんなことも、あったなど。

「いいよ、シャンクス。むしろ、すまねえ。おれ、その約束を忘れてた」

シャンクスが顔を上げる。ルフィは笑って。

「だから、これまでのことは全部おれ自身の意志だ。むしろ、おれの方が礼を言わなきゃな」

そして、ルフィは頭を下げる。

「ウタと子供を助けてくれて……ありがとう」

「それはこちらの」

「じゃあ、お互い様だ」

そう返すと、シャンクスは呆気に取られて。

ようやく、笑った。

「お前がウタの隣にいてくれて、本当によかったよ」

「じゃあ、シャンクス公認だな」

「当たり前だ」

何を今更、というシャンクス。そんな彼に、少し離れた場所で様子を見ていたベックマンが声をかけてきた。

「いいのか、船長？ 昔ウタが結婚相手を連れてきたら、娘さんをください」と言わせる、って言っただろう」

その言葉に、おお、とシャンクスが思い出したように頷く。

「しまった忘れてた。よしルフィ、今からやるぞ」

「いやなんでだよ!? さつき公認って言ったじゃねえか!」

「頼む! 割と本気で懂れてたんだ!」

「意味わかんねえよ!?!」

深夜の中、ギャーギャーと喚く二人。その姿は、かつてのフーシヤ村の一幕のようだとベックマンが微笑む。

結局、やかましいと夜番に怒鳴られるまで二人の戯れ合いは続いた。



そして、次の日。

久し振りの柔らかいベッドの上で寝ていたウタは、見知らぬ天井に気付いて跳ね起きた。

「(こ)は……!?! あの子たちは!」

「お、起きたか。もう少し寝ても良いのに」

聞き慣れた声に、弾かれたように隣を見る。そこでは、ルフィが器用に赤子を二人、抱いてあやしていた。

その姿に、ホッと息をつくウタ。だが、ルフィの背後。扉の側にいる人物を見て一気に警戒心を上げる。

「ベックマン……!?!? もしかしてここは、『赤髪』の!」

「お、落ち着け落ち着け! 大丈夫だウタ! ベックマンたちはおれたちを助けてくれたんだ!」

慌ててルフィがこちらを制止する。釈然とせぬまま、ウタはここ数日のことを聞いた。

大将青雉の率いる海軍の襲撃。最早限界だと流石のルフィも覚悟を決めた所に現れた、シャンクスたち赤髪海賊団。

そして彼らのおかげで、自分たちが助けられたこと。

「すまねえ、ウタ。おれ、ウタを……守り、切れなくて」

「ううん。違うよ。ルフィは、守ってくれた」

ルフィの肩に額を預け、ウタは言う。

「私を呼ぶ声が、何度も聞こえたよ。……ありがとう」

「ああ。……ウタも、抱けよ」

「うん」

ルフィの手から双子の片方を受け取り、微笑む。

ああ、よかったと。

最悪の未来さえ考えたあの時を乗り越えて、こんな未来を掴めるなんて。

「あー……ゴホン」

わざとらしく咳払いする声。ベックマンが、気まずそうに視線を逸らす。

「席を外そうか？」

「そうするなら、お願いがあるの」

ウタが真剣な表情でベックマンに告げる。

「シャンクスを、呼んできて」

その、覚悟のこもった声に対してはルフィも何も言えなかった。ベックマンは頷くと、部屋を出ようとする。その彼に。

「あ、待って。その前に」

ウタは、彼を呼び止めた。



重い、あまりにも重い空気が漂っていた。

それは最早、船全体に波及している。誰もが手を止めて、ゆっくりと歩く彼らの船長を視線で追いかけていた。

扉の前で、大きく息を吐き。

海の支配者の一人が、部屋に入った。

そして。

「すまなかった」

いきなり、その場で頭を下げた。

部屋の中に、重い、重い沈黙が降りる。シャンクスが頭を上げられない中、静かに、ゆっくりとその女性が言葉を紡いだ。

「私は、私を置いて行ったシャンクスを許さない」

「……ああ」

「それは多分、生涯変わらない」

「……ああ」

あまりにも重い空気に、ルフィも何も言えず努めて気配を消している。ウタとシャンクスの間を、何度も視線が行き来していた。

「だけど」

ふう、と息を吐いて。

ウタが言う。

「この子たちのおじいちゃんであることは、間違いないから」

「それは」

「それにね」

顔を上げた大海賊に、ウタは自身の抱く赤ん坊に視線を向けながら言った。

「この子たちが生まれた時、凄く大きな声が、祝福の音が聞こえた。その時に思ったの。ああ、この子たちは、こんなにも愛されて、祝福されて生まれてきたんだって」

生まれてきてもよかつたんだ、って。

喜んでくれる人が、私たち以外にもいたんだ、って。

ウタは、静かにそう言った。

「抱いてあげて」

その言葉に、よろよると、とても大海賊とは思えない頼りない足取りでこちらへと歩み寄ってくる。

そして、優しく。

決して、取り落とさないように。

その大海賊は、己の孫をその手に抱いた。

「……………ッ」

大粒の涙が、シャンクスの瞳から溢れてくる。

「ありがとう」

彼は、何度も何度もそう繰り返した。

二人は、微笑みと共にそれを眺めていた。

そんな空気の中。

「「うおわあ!?!」」

重量に耐えられなくなった扉を倒しながら、赤髪海賊団が部屋に雪崩れ込んできた。お前ら、とシャンクスは呆れた声を出す。

「何をしているんだ」

「い、いやあ、その」

「お頭とウタちゃんの様子が気になってだな」

「……すみません」

シヤンクスはため息を漏らすと、まあいい、と言葉を紡いだ。

「扉はすぐに直せ。あと、進路を」

「う、ウタ！ おれたちにも抱かせてくれ！」

「おい」

船長を無視して、海賊たちが駆け寄ってくる。その姿を見て、うーん、とウタは手を顎に当てて首を傾げた。

「頼むよ！ おれたちにとつても孫みたいなものなんだ！」

「……じゃあ、いくつか条件」

悪戯を思いついた子供のような表情で、ウタは笑った。

「一日一回、一人だけ。あと、お風呂に入った後の人だけね」

その言葉に、即座に海賊団が動き出す。

「よしお前らア！ 速攻で風呂入るぞ！」

「はい！ その前に今日の順番を決めるべきかと！」

「その通りだ！ よし何で決める!? 殺し合うか!？」

「そんなものを認めるか、落ち着け」

シャンクスが赤子を抱きながら呆れたように言う。そんな彼に、うるせえ、と周囲から怒鳴り声飛んだ。

「あんたはもう抱いてるからそんなことが言えるんだ!」

「お頭に発言権はねえよ!」

「おれは船長でこの子たちの祖父だぞ!？」

「知るかア!」

「これだけは船長命令でも聞けねえなア!」

「あの、一日二人は無理でしょうか……?」

病室だというのに、しっちゃんかめつちやかである。そんな中、ルフィの腕の中で眠っている妹とシャンクスの腕の中で寝ている兄は物凄い大物かもしれない。

「あれ、副船長はいいんですか?」

そんな中、喧騒に加わっていないベックマンに気付いた一人が声をかける。ああ、と彼は頷いた。

「おれはさつき抱かせてもらった」

「「はア!?!」」

視線が一斉にウタの方に向く。ウタはにひひ、と笑顔を浮かべた。

「がくり、とシャンクスが膝を折った。子供に全く揺れを与えていないところが無駄に高等技術である。」

「おれが……最初じゃ……」

「割と凶々しいなお頭」

「めっちゃ嫌われてるの自覚してたのに」

「目エ覚ますまで人殺す勢いで悩んでた癖に」

「……ぞとばかりにシャンクスに攻撃が飛ぶ。シャンクスはよろよろと立ち上がると、ルフィに赤子を返した。そして。」

「よし決めたぞ。全員甲板に出ろ。……おれの覇気に耐えられたら抱く権利を与える」

「横暴だー!」

「ふざけんなー!」

ブーイングが飛ぶ。安心しろ、とシャンクスは言った。

「全員本気で相手してやる」

大騒ぎが始まる船内。その光景を眺めて。

「あはは」

ウタが、笑っていた。

それは、ずっと彼女がしていた無理のある笑顔ではなく、心からのものだった。

「よかった」

小さく、誰にも聞こえぬように。

ルフィは、そう呟いた。



しばらくの間、安定するまで四人はシャンクスの船で過ごした。

しかし、いつまでもこうしてはいられない。シャンクスも一応、自分達に加わる選択肢を提示したが二人はそれを受け入れなかった。

「おれたちは、海兵だったから」

そう、二人は言ったのだ。

わかつてはいたと笑ったシャンクスはどこか寂しそうだったと、船員たちは証言している。

そして、偉大なる航路。とある、海賊「白ひげ」の縄張りである非加盟国に赤髪の船の姿があった。

本来なら大事件であるが、今回ばかりはそうではない。

「色々ありがとう」

「礼を言うのはこちらだ」

船から降り、仮住まいとなる家のところまで四人を送り届けたシャンクスが言う。周囲にいるのは幹部たちばかりで、大部分の船員は船で待機だ。

全員が全員、ここまで来たがったがシャンクスがそれを止めた。大人数で動くが目立つし、わざわざ自分達じゃないところの縄張りに来た意味がない。

「おれたちが接触したことは青雉を通して既に伝わっているはずだ。おれたちの縄張りだと、早晚バレる可能性がある。白ひげのところなら、海軍も迂闊には手を出せないだろう」

それが今回の場所を決めた理由であった。これなら、ある程度の時間が稼げる。「じゃあな、二人とも。……幸せにな」

もう会うことは、と続けようとしたシャンクスに、ねえ、とウタが声をかける。

「私は、今でも海賊が嫌い」

「……ああ」

「その切っ掛けはシャンクスだけど、色んな海賊を見て、それでもやっぱり好きにはなれない」

シャンクスがこちらを見る。何かを言おうとした彼に、だけど、とウタは続けた。

「海賊『赤髪』じゃなくて。……この子たちの、ただのおじいちゃんとしてなら」

シャンクスが目を見開いた。いいのか、と彼は言う。

「もう一度、ここに来ても」

「一度なんて言つてないでしょ」

視線を逸らし、ウタが言う。ルフィも笑っていた。

「ありがとう」

こちらに背を向け、シャンクスは言う。涙なんて今更なのに、とウタは苦笑した。

「お、おれたちは!？」

「海賊としてじゃなければ」

「やったー!」

ルウが喜びの声を上げる。そして立ち去ろうとするシャンクスへ、ルフィが声をかけた。

「そっだシャンクス! この麦わら帽子!」

「ん、ああ。そっだな。もう」

そこでシャンクスは言葉を止めた。そして、笑みを浮かべて言う。

「今のウタと同じくらいに、その子たちが大きくなったら返しに來い」

そして、立ち去っていくシャンクスたち。ちよつと、とウタが声を上げた。

「シャンクスに育てられた覚えはないんだけど!？」

笑っているのが、伝わってきた。

もう、とウタは頬を膨らませる。

「やっぱりシャンクス嫌い!」

そんな彼女の手を握り。

ルフィは、笑う。

ウタもまた、笑った。

彼が掲げた“正義”は。

確かに、そこにあったのだ。

新時代ルート

人の生きるこの世界に

加盟国の人間が選ぶ職業において、『海軍』という選択肢は決して珍しくない。

特に今は大航海時代。世界は荒れ、その影響を受けない場所など存在しないと言って
もいらいらだ。

自分の生まれ育った砂の国でもそれは変わらない。

海兵になるということについて、きつと深くは考えていなかった。ただ周りよりも身
体が大きくて、少しだけ運動に自信があつて。

だから……掲げる『正義』なんてなかった。

あの人たちに、出会うまで。



湿った空気が頬を撫でる。普段考えることがないそんなことをいちいち考えるのは、これからやろうとしていることに緊張しているからだろうか。

当たり前だ、と自重する。

目標もなく、ただ生きていくための糧を得るために海軍に入つて。その中身はただの情けない弱虫で。

だけど、あの人たちはそんな自分と共に笑ってくれたのだ。

「おい、あんた」

「ん？」

声をかけられた。見ると、どこか心配そうな表情でこちらを見る男性がいる。

「大丈夫か？ 今にも死にそうな顔してるが」

「ああ……大丈夫です。ちよつと疲れが溜まってて」

「そうか。まあ、色々あつて大変だからな。……天竜人が出歩いてるかもしれない。あんまりぼーつとしない方がいいぞ」

天竜人、という単語を聞いた瞬間、心がざわめいた。だが、それを顔には出さないように努めて冷静を装う。

「ありがとうございます。……なんで、こんなことに
「本当にな」

視線を向ける。その先にあるのは、一本の巨大な樹。『70』という数字が刻まれたそれを眺めながら、見知らぬ男と思いを共にする。

きつと、彼も同じことを考えている。

ここは、二人の英雄が世界を敵に回した場所なのだ。



始まりは、本当に些細なことというか、しょーもないことだった。

特別な才能もなく、少しは自信があつた運動についても海軍では下の下。訓練ではないつもビリ。幸い、書類仕事は向いていたようだがそれも及第点レベル。どうにか役立てるよう航海術を習得したり船の雑務全般をこなせるように仕事を覚えたりの日々。

そんな、代わりなどいくらでもいる立場の自分が、偶然あの人たちに関わることになった。

『うおっ！ 悪い！』

『す、すみませんすみません！』

大量の書類を運んでいる時、あの人と……ルフィさんとぶつかった。周囲に大量の書類が散らばってしまう。

『すみません！ すぐに片付けます！』

相手は大佐だ。こちらは最近、上等兵になれたばかり。雲の上の存在を相手に粗相をしてしまった事実冷や汗をかきながら、必死でルフィの書類を優先してかき集める。

相手は海軍の英雄の孫であり、10代の若さで大佐の地位にいるばかりか将来的には大将の地位さえもほぼ確実と見られている存在。こんな、代わりなどいくらでもいる木端の上等兵とは生きている世界が違う。

『そんなに急がなくてもいいぞ。どうせ期限過ぎてるやつだし』

だが、彼はそんなことを全く感じさせない様子でしゃがみ込む。肩にかけた『正義』のコートが床について汚れることも厭わず、嫌そうに書類を拾う。

『ウタに怒られちまってさー。よくわかんねえことも多いし、誰かに聞こうと思っただけど聞けそうなのがいなくてな。マグマのおっちゃんに言ったらまた説教されそうだし』

肩を竦めるルフィ。その態度は、とても気さくで。

自分の想像していた姿とは、全く違ったものだった。

『報告書と、申請書と……これは、請求書……?』

見ると、確かに提出期限の過ぎたものばかりである。報告書に至っては何枚か『再提出!』とデカデカと書かれたものである。見間違いでなければ多分、『ぶっ飛ばした』としか書いていない。

お騒がせな人物であるとは噂で聞いていたが、それはあくまで英雄ガープのような功績の部分だと思っていた。まさか、書類一つでこの有様とは。

『そうだ、手伝ってくれねえか?』

そして、彼はそう提案してきた。

ただ、大佐という立場の人間からのそれは実質命令だ。頷くと、その人は満面の笑みを浮かべた。

『ありがとう!』

その時から、きつと。

僕の運命は、変わったのだと思う。



『それで、バラティエって海上レストランにサンジってコックがいたんだけどな』

ピークの時間も過ぎ、食堂で書類を片付ける傍ら、彼はその冒険譚と呼ぶべき出来事について色々と話をしてくれた。……書類については結局こちらがそのほとんどを処理しているが、冒険譚の料金と考えると安いものである。

しかし、驚くのはその功績だ。その若さで大佐の地位にあるだけのものを、彼は確かに残している。海軍の新時代という呼び名は、偽りではない。

実を言うと、彼とは同い年だ。だが、こうまで違いがあると比べると比べる気すら起きない。単純な身長ではこちらの方が上なのに、明らかに相手の方が大きく見えた。

『ちよつとルフィ！ 書類は終わったの!?!』

書類をあらかた片付けたところで、女性の声が響いた。ウタ、とルフィが応じる。

『おう、もうすぐ終わるぞ!』

『えっ、嘘。あの量は二日は……って、あなたの字じゃないじゃない!』

『い、いやー、それは……』

ルフィが目を逸らす。その姿を見て、反射的に立ち上がってしまった。

『申し訳ありません准将！ 大佐に協力を要請されたもので、自分が!』

『あ、違う違う！ あなたは悪くないの。悪いのはルフィ。……でも、凄いな。あの量を終わらせるなんて』

『いや凄えぞこいつ！ しかも航海士の資格もあるんだってよ！』

『い、いえその……自分は、戦闘が苦手で。こう言うことしか』

『ふうん』

その時、海軍の歌姫と名高きウタ准将は何かを考え込むように顎に手を当てていた。そんな彼女に、ルフィが声をかける。

『それより、書類も終わったし出しにいかねえと』

『まあ、センゴク元帥からのお説教は確実ね』

『いやそこはオメー、そうならねえようにだな……頼む』

『しようがないわね』

手を合わせて言うルフィににこにここと微笑みながら応じるウタ。こちらとしては、元帥の名前が出ている時点で最早雲の上過ぎてついていけない。

そしてルフィは書類を束ねると、満面の笑顔で立ち上がる。

『ありがとうな！ 今度お礼はするからよ！』

そう言つて、彼はウタと共に立ち去った。

……彼の部下になるよう異動を命じられたのは、次の日のことだった。



「色々、あつたなあ……」

彼らにしてみればほぼ非戦闘員と言つてもいい自分を引き入れただけ。そしてそれは、きつと気まぐれのようなもの。

しかしそれは、己にとってはあまりにも大きなことで。その偶然と気まぐれが、こんな自分を彼らの冒険譚に関わらせてくれた。

故郷の国が七武海に乗っ取られかけていたのを、ボロボロになつても救つてくれた。空島では、神を名乗る怪物に苦しめられている人々を救い出した。

あらゆる場所で、海賊に苦しめられている人々を片っ端から救い出した。

多くの歓迎と、感謝と、笑顔にいつも包まれていた。

その姿は……あまりにも眩しくて。

憧れだった。

崇拜していた。

希望だった。

救いだった。

だがこの世界は、そんな彼らを否定した。

だから。

だから。

「ルフィさん、ウタさん。……どうか」

目標の姿が見えた。

故郷に伝わる禁忌の水を、口にする。

もう、後戻りはできない。……しよとは、思わない。

走り出す。

走る。

駆ける。

駆け抜ける。

「っ、止まれ！」

「待て！」

人々が首を垂れ、嵐が過ぎるのを待つ中を。

全力で、駆け抜ける。

銃声が響いた。

鈍い痛みを感じた。

しかし。

しかしだ。

あの二人は、こんな傷よりも。

もつと。

ずつと。

「うあああああああああああああつつつ！」

鈍い、感触。

握りしめた刃は、確実に目標を。

“神”を、貫いた。

「動くなア!!!」

こちらに銃口が向けられている。
だから何だ。この命は、既に。

「何が神！ 何が王！」

握り締めた刃を、深く、深く。

己の全てを込めて天竜人にと突き立てる。

「人の生きるこの世界に!! あの人たちが生きる世界に!!」

銃声が響いた。

体を、何かが貫いた。

視界が、赤い。

「神などいない!!!!!!」

そして、最後の引き金を引く。

閃光が、周囲を駆け抜けた。
音はもう、聞こえなかった。

……かつて、神を名乗る怪物がいた島で。

一人の騎士が、言ったのだ。

神など、この世界にいないのだと。

だから、これはその証明。

この日の事件は、『最悪』の名と共に語られることになる。

天竜人が、殺された日。

それは、均衡を失いつつある世界に一つの事実を叩きつける。

即ち……神殺しが可能であるという、事実を。



とある島の、とある洞窟。

二人の逃亡者が、モルガンズから彼の発行する新聞を渡され、それを見ていた。いつもならやかましく騒ぐ彼が、今日この瞬間だけは大人しい。

「馬鹿野郎」

小さく、青年は呟いた。

握りしめられた新聞の記事には、こう書かれている。

『天竜人、白昼堂々暗殺』と。

「馬鹿野郎が！」

その怒りは、果たして誰に対してのものなのか。

命を捨てて己らと変わらぬ大犯罪者となった、かつての部下に対してか。

……否だ。

「う、あ、ああ、あああ……っ」

大粒の涙を流し、ごめんなさいと、女性は嗚咽と共に何度も何度も繰り返す。

決して、才ある人間ではなかった。

部下の中では一番弱かったし、戦闘では頼りになることはなかった。

けれど彼はいつだって真摯で、真面目で。

航海術も、書類仕事も、努力で身につけて。

二人がやらかすと、他の部下と一緒に助けてくれて。そうやって、皆と一緒に支えてくれた。

大切な、仲間だった。

「これはあんたの部下による証明だ、ルフイの旦那」

アホウドリの、世界の情報網を牛耳る男が言う。

「神は殺せる。その証明のために、あんたの部下は命を懸けたんだ」

世界は変わると、彼は言う。

ただでさえ崩れかけていた均衡。その中で、一人の男が命を懸けてそれを成し遂げた。その意味は、あまりにも大きい。

それは即ち。

虐げられていたものが、才なきものが、力などないものが、命を懸ければ。神へと、その刃を届かせようということなのだから。

神の死は、更に多くの死を呼ぶだろう。

その先には、何があるのだろうか。

“新時代”

五老星が鎮座するその場所は、表向き世界で最も高貴な場所である。

世界最高権力と評されるその立場と在り方故に、その場所は常に緊張を孕んでいる。だが今、その場所は常とは別の重苦しい雰囲気か漂っていた。

「……あれから、一ヶ月か」

誰ともなく呟いた言葉。あれ、という言葉の意味を確認する必要はない。

上等兵による、白昼堂々の天竜人暗殺。ただでさえ混乱する世界を更なる混乱に導いたあの事件からもうそんな時間が経っていた。

それを長いと取るべきか、それとも短いと取るべきか。最早、彼らにもわからなくなっていた。

「この一ヶ月で、暗殺未遂が十四件。幸い、その全てが失敗に終わっている。……実行犯のその場での殺害も含めてな」

「幸い、幸いか。……そうだな、これのせいで出歩く天竜人が減ったことは幸いかもしれ

ん」

自嘲する。そう、あの事件の後、僅か一ヶ月でそれだけの数の天竜人への襲撃が起こった。

その襲撃はどれも稚拙で、銃、ナイフ、刀、爆弾……それらを抱えて突撃するということだけのもの。暗殺事件より護衛の強化された天竜人には、一度もその刃が届かなかった。

事件の隠蔽をしようとしたが、あの新聞王モルガンズは完全にこちらのコントロールを外れてしまっている。この状況では、下手に情報操作をしようとする方がより混乱を招きかねない状態となっていた。

「昨日もあつたようだが、危機感のない話だ。……あろうことか、護衛の海兵を解任すると言いつ出している。襲撃者を殺害したことが原因のようだ」

「罰を与えるから生かして捕らえろ、か。どこまでも愚かな」

言葉を交わすが、どこまでも白々しくなってしまう。彼らを神とし、そういう風になるようにしてきたのには五老星にも原因があるのだから。

今回の襲撃者は、たったの二人。それもまだ十代前半の少年たちだったという。彼らは、叫んでいた。

“お父さんを返せ”

“お母さんを返せ”

今調べさせているが、おそらく世界政府の闇の犠牲者だ。これまでに起こった件でもそうだった。

誰もが、口々に天竜人への憎悪を抱き、行動していた。

「しかし……例の上等兵は、そういう意味では見事だった」

「おい」

一人が発した言葉に、咎めるような声が飛ぶ。事実だろう、と禿頭の老人は言う。

「徹底的に護衛の状況や徘徊のルート調べ、入念に準備を整えた。誰にも知られることなく、勘付かれることもなく。そうして、たった一度の襲撃を成功させた」

あの暗殺については、調べれば調べるほどそこに込められた狂気を感じるようになった。

たった一度の襲撃を成功させるために、あの海兵はありとあらゆる努力と執念を注ぎ込んだのだ。

襲撃の場所も。

護衛の存在も。

時間も。

手段も。

足りぬ己の力を補うための、命を捨てる水さえも用意して、生きて帰ることなき死兵として、あの場所にいたのだ。

「こんなことを言うべきではないのだろうか……せめて、あそこで死んだのが」
「よせ。……それは、口にするべきではない」

その名が出る前に止める。それはここに居る者にとつての共通事項であつたが、それでも決して口にしてはならぬことだつた。

何故ならば。

その選択をしなかつたのが、あの時の五老星だ。

「しかし、皮肉なものだ」

流れかけた沈黙を打ち切るように、一人の五老星が口にする。

「例の海兵の狂気と執念。それを最も理解しているのが、奴を祭り上げる者たちではなく我々とはな」

あれ以来、一度も成功しない襲撃。その理由は単純だ。

誰もが、ナイフと自爆という手札だけでかの海兵がことを成したと思つている。故に、その表面だけを模倣し、失敗しているのだ。

あれほどの狂気と執念を持つてさえ、分の悪い博打であつたことが読み取れる。だといふのに、その本質を理解せぬまま上手くいくはずがないのだ。

だが、それでも襲撃は続くだろう。何故なら、彼は成功させた。

その過程がどうあれ、爆発でその遺体さえ残らなかつた彼自身の結末がどうあれ。

それでも彼は、成功させたのだ。それは、絶望的な希望となつてしまった。

「それは世の常だ。憧れは、理解から最も遠い感情であるという。味方よりも、敵の方がよく理解できることがある」

「まさしく、あの海兵のようだな」

また、自嘲するように笑う。

誰よりも憎い相手であるからこそ、あの海兵はあの結果を導いたのだ。

「……あの二人が海軍で問題を起こす度に、頭を抱えたものだが」

ポツリと、眩きが漏れる。

「どうして、こんなことに」

それは、この場にいる誰もが考えていて。

そして、どうにもできないことだった。



「……何のつもりじゃア？」

葉巻の煙を揺らしながら、赤犬が机を挟んだ向こう側の男を見る。そこに立つ男は、己が背負った正義のコートを丁寧に畳み、赤犬の机の上に差し出したのだ。

「襲撃の件については、むしろようやちよる。護衛対象の安全が最優先じゃア。ガタガタ抜かすようなら、わしが五老星に殴り込むけえ」

とんでもない言い草だが、執務室のソファに座る黄猿はこれは本気だと感じた。元より、五老星とはぶつかることがあった赤犬だ。最近の情勢では、それがより顕著になっている。

だが、赤犬の前に立つ人物は首を横に振る。

「あんな奴らのことはどうでもいいんです」

この場に他の者がいたら、ギョツとしただろうか。あんな奴ら、という言い回しは、決して許されるものではない。

「……その言葉は聞かんかったことにしちゃる。その上で、これは何じゃ」

「自分は、自分の『正義』を裏切りました」

真つ直ぐに、男は……少佐の肩書きを持つ男は言う。

「自分の正義は、『守る正義』です。私は、守れなかった」

「何を言うちよる。任務は」

「自分はこの手で、子供を二人殺しました」

赤犬が、言葉を止める。

「守るべき市民を手にかけて海兵など、最早海兵ではありません」

その言葉に込められていた感情は、一体、どれほどの。

どれだけの絶望と、悲嘆と……屈辱が、あつたのか。

「失礼します」

そして、少佐が立ち去っていく。

その背を制止する事さえ、今の赤犬にはできない。

そうするだけの理由が、見つけれなかった。

「……これで何人目だい、サカズキイ〜？」

「ふん、もう数えとりやせんわ」

黄猿の言葉に、吐き捨てるように赤犬が答える。

そして、机の上に置かれた正義のコートを見つめる。そして、呟くように言葉を漏らした。

「……優秀な海兵じゃった。だから、あの小僧の下に異動させた。真面目な男じゃア、あの小僧も影響されて多少は落ち着くと思つちよつたんじゃがの」
逆効果じゃ、と赤犬は呟く。

「少佐の方が、小僧に影響されちよつた。……人として、立派に」
それ以上、赤犬は何も言わなくなつた。

「どうして、こんなことになつたんだらうね〜？」

呟くような黄猿の言葉にも、赤犬は答ええない。

答えなんて、分かりきつていた。



はあ、というため息が漏れた。もう何度目かもわからない。向かい側に座る同僚が、まただね、と疲れた表情で言った。

「そんなにため息をついてちゃ、怒られるよ?」

「ああ、そうだな。……大佐は、怒るな」

苦笑する。もういない上官。あの日、世界を敵に回した二人を思い浮かべる。

あの二人なら、こんな風に落ち込んでいたら何と言っただろうか。

「准将も、多分ね」

向かい合う同僚も、そう言つて苦笑する。

海軍の歌姫と、英雄の後継者。その二人が指揮する部隊にいたのはほんの少し前のはずなのに、今や遠い昔のように感じる。

あの日々は、本当に騒がしくて、無茶苦茶で、けれど、輝いていた。

なのに。

それなのに。

「どうしてだよ」

か細く呟くその声は。

誰に向けられたものか。

「……どうしてだろうな」

不意に、そんな声が聞こえた。顔を上げると、自分たちの上官がいる。

だが、おかしい。彼がいつも背負っている正義のコートがない。

「少佐！」

「ああ、いいいい。座つててくれ。おれはもう、少佐じゃない」

立ち上がって挨拶をしようとする自分達を制止し、そんなことを少佐は言う。えつ、という言葉を漏らす自分達に構わず、少佐が椅子に腰掛ける。

「任務でな。……子供を二人、殺してしまった」

だからもう、無理だ。

そう、少佐は告げた。

先日にあつた襲撃事件。人手不足の中、少佐が天竜人の護衛に派遣された中で起こつたことは知っていた。

そして、その結末も。

「あの二人によ。顔向けが、できねえ」

声は震えていた。騒がしい食堂であることが、幸いだつた。

「なあ、本当に、さ。楽し、かつたよな」

「……はい」

「あの二人さ、いつも無茶苦茶だよ。おれ、何回巻き添えで始末書出したか覚えてねえよ」

「少佐も、船壊したことあるじゃないですか」

声は、震えていた。少佐の声も、こちらの声も。

湿つたものが、混じっている。

「あんなもん、あの二人に比べりや誤差だろ」

「確かに。でも少佐、楽しかったですよ。空島なんて、行けると思いませんでした」

「大佐がロマンを追う連中と意気投合してな。あいつら海賊なのに、何でか協力してよ」

「准将も、最初は渋ってたのに……最後は、一番ノリノリでしたよね」

「後で聞いたたら、あの海流で上がるのは正規ルートじゃねえらしいぞ」

「そんな無茶をさせられたんですか私たち？」

「まあ無茶はいつものことですけど」

鼻をすすする音と、涙を拭う音。

「アラバスタも凄かった。大佐がやられたって聞いて……今だから言うけどな。おれ、

心折れかけたよ」

「僕らもですよ。でも、准将が」

「『ルフィが負けるわけない』って」

「それで、あの王宮前でよ」

「あんな大規模な戦闘の中で、確かに聞こえました。……聞こえたん、です。本当に、夢

を見てるのかって」

「准将の歌で反乱を鎮めるきっかけを作って」

「私たちが、そんな准将を必死で守って。……大佐が、『クロコダイルはぶっ飛ばすから

「ここは任せた』って」

「アラバスタ国王の演説は痺れたよ。……あいつの、故郷だったな」

そして、言葉が切れる。

向かい側の同僚の瞳からは、最早滝のような涙が流れていた。

なあ、と。

戦友であり、上官であり。

同じ光に導かれ、そして、正義さえも失った人が言う。

「どうして、こんなことになっちゃったんだろうな」

その答えを口にすることは。

最後まで、できなかった。

そして今日。

また一人、あの人たちと共に歩んだ海兵が……立ち去った。



とある島の、とある放棄されたボロボロの家。

本来なら人気のないその場所に、複数の人間がいた。

「しつげえぞお前」

「そう邪険にしないでくれよ旦那あ、今日もこうして食糧と情報を持ってきてるじゃねえか」

「食料は貰う。けど、協力はしねえ。……ウタ、食べられそうか？」

「……うん」

相変わらずどうやってかこちらの居場所を掴んでくるモルガンズに対処しながら、ウタを抱き上げ、モルガンズの食糧を渡す。

ウタの調子は、あの日から随分と悪くなってきた。かつての部下がしたこと。そして、そこに続く無謀な襲撃と失敗。己が引き起こしたことなのだ、彼女は自分を責め続けている。

「いやあ、美しい！ 逃避行の絵として素晴らしい！ できれば一面にして特集記事を組みたい！」

「……ぶつ飛ばされてえのか？」

「いやいや冗談だ、冗談」

睨みつけるが、このアホウドリは両手を振って距離を取る。食えない鳥である。この

男に助けられている部分もあるため、こちらが完全に拒絶できないことをわかっているのだ。

だがそれはそれとして、ムカつくので本気で一回ぶっ飛ばしてもいいのではないかと
思い始めている。

「ウタ、無理すんなよ」

「うん、大丈夫」

自身の腕の中で、ゆっくりと食事をとるウタ。その弱々しい姿に、知らず、抱きしめる腕に力がこもった。

「それで、今日は何だよ。ここのところは天竜人の襲撃で忙しいんじゃないのか？」

「そうそう、それだよ旦那。まあ、これを見てくれ。これから出す新聞なんだが」

モルガンズが差し出してきた新聞を手にとる。そこには、また、と言つてもいい襲撃の記事が載っていた。

何度目だよ、と思いつつ新聞を見る。だが、そこに書かれている事実ルフィは目を見開いた。

「……ルフィ？」

異変を感じたウタが、彼を呼ぶ。ルフィはその体を抱き寄せながら、モルガンズを睨み付ける。

「これは事実か？」

「事実だとも」

何が面白いのか、モルガンズは両手を広げて演説する。

「旦那のかつての部下が天竜人の襲撃の護衛をし、襲撃者であつた子供二人を殺害！それを苦にして海軍を去つた！ ああ、悲劇だ！ 再び海軍の信頼が揺らぐだろう！」

大声で笑い続けるモルガンズ。ルフィの拳に力がこもる。ウタもまた、目を見開いて驚愕している。

「しかし、そこには隠された真実があつた！ 罰を与えるから生かして引き渡せと、天竜人はこの海兵に命じていた！ もし生きて捕まれば、何が起こるかなど幼児でもわかる！ だからこれは慈悲だ！ 旦那の部下は、死という慈悲を与えたんだ！」

たまらねえな、とモルガンズは言う。これは記事が飛ぶように売れると。

「黙れ！」

ルフィはウタから手を離し、モルガンズの胸ぐらを掴む。

「何がしてえんだ、お前は！」

「決まつてる！ おれは新聞王モルガンズ！ 時には嘘で人を踊らせる活字のDJ！だが今は！ 真実が人を踊らせる！ その邪魔は旦那にもできねえぞ！」

「お前えっ！」

思わず拳が出かけるルフィ。しかし、その手はモルガンズには向かうことはなかった。ウタが、その手を掴んだのだ。

かつて競い合っていた頃とは比べ物にならないくらいに弱い力。その事実には、ルフィは強く、強く拳を握り締める。

どうしてだ。

どうして、こんなことに。

「ダメよ、ルフィ。こいつを殴っても、状況はよくなるらない」

「けどー！ あいつらはー！」

その先の、言葉が出ない。

「おれの、おれたちの、仲間は………！」

何もかも、あの日の出来事が。

己の行動に、後悔はなくても。

それでも、その結果としてそれで傷つく人がいる。

「……重い………！」

最早この背にはかかっている、*“正義”*の文字が。

あまりにも、重かった。

「なあ、旦那。一つ、教えてくれ」

服を整えながら、モルガンズは言う。

「そういえば、聞いたことがなかった。旦那の背負った『正義』は、何だったんだ？」

純粋な興味であるということが、何となく伝わってきた。気分のいいものではないが、それなりに付き合いが続いている相手だ。こちらを煽る時とそうでない時の違いがわかるようになってしまった。

「海軍時代を調べたが、見当たらねえ。どうだ？」

「……海軍にいた時は、わからなかった」

知らず、ウタを抱く手に力がこもる。

「ほう、そりや珍しい。正義を持たねえ海兵はいくらでも見てきたが、定まってねえとは」

「それでどうにかなってたからな。……けど、あの日。正義のコートを捨てた日に、おれの『正義』は形になった」

それは、とモルガンズが問う。

ルフィは一度、ウタを見て。

「『大切な人が、笑える正義』」

ウタが息を呑み。

モルガンズは、口笛を鳴らした。

「なるほど……なるほどなるほどなるほどお〜！ ようやく、ようやくだぜ旦那！ あんたの信念が見えてきた！ こりやビッグニユースだ！ たった一人のために世界を敵に回した英雄の信念！ それがこんなにも美しく、悲劇的とは！ おおっと邪魔するなよ旦那！ こればっかりは記事にさせてもらうぜ！」

「好きにしろよ。誰に知られても関係ねえ。俺はウタが笑えるように戦うだけだ」
「……ルフィ……」

ウタの瞳から、涙が溢れる。それを拭って、ルフィは笑った。

「泣くなよ。泣き虫だな」

「違う、もん」

一瞬だけ、意地を張ったウタ。しかし、すぐに膝を折り、泣き崩れる。

そんな彼女を、ルフィは優しく抱きしめる。

「美しい！ いやあ素晴らしい！ 名残惜しいがここから先は次回だな！ あばよ旦那

！ また来るぜ！」

「いや来るんじゃないよ！」

大笑いするモルガンズ。だが、去り際に彼は一つ、言葉を残した。

「でもよ、旦那。旦那にとつての大切な人つてのは……歌姫だけなのか？」

答える前に、モルガンズは飛び去った。ルフィは強く握り締めていた拳を解き、呟いた。

「……わかつてる」

わかつているのだ。

後は、そう。

覚悟、だけで。



雨音が、響いている。

隙間風が吹き込む小屋の中で、二人は肩を寄せ合っている。

互いの存在を確かめるように。その手を握り、決して離さぬように。

モルガンズが帰ってから、二人は言葉を交わさなかった。言葉なんてなくても、大丈夫

夫だった。

「なあ、ウタ」

「何、ルフィ」

だから、言葉にするのは。

最後の覚悟を、決めるため。

「このままじゃ、駄目だ」

「……うん」

「このままじゃ、もっと酷いことになる」

「……うん」

だから、とルフィは言った。

大切な人の。

ウタの笑顔を、もう一度取り戻すために。

「『ワンピース』を、手に入れる」

ウタが息を呑んだ。周囲の温度が、下がった感覚。

それは、と、震える声でウタが言う。

「海賊に、なるってこと？」

「海賊にはならねえ。海賊にならなくても、『ワンピース』を探すことはできるだろ？」

「でも！ でも、許可のない航海は、違法で……」

「元からお尋ね者だろ、俺たち。……海賊王は、確かに言ったんだ。一度は憧れたから覚えてる。ウタは、処刑台でゴールド・ロジャーが言ったことを知ってるか？」

言う。

「この世の全てを、そこに置いてきた」

かの海賊王は、確かにそう言った。だから。

「世界をひっくり返そう。だから、ウタ」

ルフィが立ち上がり、手を差し伸べる。

「一緒に、戦おう」

ウタは、一度目を閉じて。

そして、何かを振り切るように。

「世界を、変えよう！」

彼の手を、握り締めた。

そして、二人は口にする。

かつて掲げた、二人だけのあの誓いを。

「『新時代』を！」

その時、ルフィは。

ようやく。

ようやく、己の掲げた『正義』の終着点が見えた気がした。

今だから元気でいい、痩せ我慢でもいい。

この大切な人の笑顔を、今度こそ。

何の憂いもない中で、見るために。



「旦那あ、昨日ぶりー！」

性懲りもなくやってきたモルガンズ。その姿に呆れながら、ルフィとウタは苦笑する。だが、いつもとは違うその様子に、モルガンズは首を傾げた。

「何か、昨日と雰囲気が違うようだが」

「ああ。色々あったからな」

「ええ。ねえ、モルガンズ。とっておきの情報をあげる。だから今後、私たちを全面的に援助して」

昨日までの弱々しい姿はどこへやら。かつての歌姫の時のように堂々とウタが告げる。ただならぬ様子に、顎に手を当ててモルガンズは真剣な表情を浮かべた。

「情報次第だ」

一気に雰囲気が変わった。こういうところは、流石というべきか。

ルフィとウタは一度目を合わせると、互いの手を握った。どちらかが言い出すまでもなく、自然とそうしていたのだ。

そして、ルフィは告げる。

「俺たちは、ワンピースを手に入れる」

その言葉に、顎が外れるのではないかというくらいに口を開けるモルガンズ。

「……………は？」

新聞王のこんな表情を見た二人は、悪戯が成功した子供のように笑顔を浮かべた。

「いや、旦那。冗談、だろう？」

「冗談なんかじゃねえよ。ああ、海賊にはならねえぞ」

「いやいやいやいやいやいやいや！ 待て待て待て待て待て待て待て待て！ 意味がわからねえ！ 何でそうなる!? 言ってる意味がわかってんのか!?!」

「わかってる。でも、この状況を変えるにはもう、世界を変えるしかないの」

天竜人という絶対的な存在がいる以上、逃亡生活が続いてしまう。ならば、世界を変える何かが必要だ。

「どつかの『四皇』を頼るなり革命軍を頼ればいいんじゃないのか?」

「海賊にはならねえ」

「言ってる場合かよ!?!」

あのモルガンズが振り回されまくっているというこの状況。社員が見れば驚愕するに違いない。

「革命軍もそう。私たちは海兵だもの」

「ええー……賞金首なのに……」

「だからそれをひっくり返すんじゃないかねえか」

最早ツッコミマシーンと化したモルガンズ。面白いネタを提供してくれると期待していたが、流石の彼でもこれは予想外である。

「いやさア、そのうちやらかすと思ってたけどさア。……こんな予想外じゃん」

ええー、と何故かゲンナリしているモルガンズ。そんな彼に、ルフィが言う。

「喜べよ。お前の言うビッグニュースだろ」

「ビッグ過ぎて胃もたれするわア！」

再びのツツコミ。だがまあ、とモルガンズは笑った。

「旦那の言う通り、こりや間違ひなくビッグニュースだ。だが、いいの？ これをニュースにするってことは、旦那たちは世界に宣戦布告すると同義だぜ？」

「既に敵じゃねえか。今更だろ」

即答だった。ハッ、そうだなとモルガンズは言う。

「いいだろう。このモルガンズ、あんたたちを全面的に支援するぜ。ただあんたらがヤバイ時は容赦なく切り捨てるぞ？」

「それはお互い様。私たちも、いざとなればあなたを売るから」

ウタのその言葉に、モルガンズは大笑いする。

「いいぜ！ 最高だ！ 見出しはどうするか……『海軍の英雄復活』か！ いやありきたりだ！ 『世界を変える』！ いや駄目だ、インパクトに欠ける！」

楽しそうに笑うモルガンズ。その彼に、二人は一つの提案をする。

「なあ、モルガンズ。記事のタイトルは」

数日後、世界に激震が走る。

あの日、天竜人を殴り、逃亡生活を続けていたかつての英雄と歌姫。その二人の、一つの宣言。

『“ワンピース”を、手に入れる』

それは、世界への宣戦布告。

ありとあらゆる勢力から逃げるのではなく、立ち向かうという宣言だった。飛ぶように売れた新聞の一面には、並び立つ二人の姿と。

“新時代”の文字が、描かれていた。

新たな世代の物語

旅立ち

騒がしい店内を、一人の少女が駆け回っている。赤い髪に、黒の混じった独特の髪色。あどけなさが残るその面影にはしかし、活気が満ちており、白い手袋と併せて快活な雰囲気漂わせていた。

「おーい、こっちにも酒を頼むー！」

「はーいー！」

騒がしい店内に響く声に応じ、少女がパタパタと駆けていく。店主であるマキノからお酒を受け取り、お客さんへと手渡す。

「はい、どうぞ！」

「おつ、きたきた。なあ、折角だから一緒に飲もうぜ？」

「お仕事中心」

「こちらに手を伸ばしてきた男の手を軽くはたき、拒否する。舌を出し、軽くウインク

して。

こんなのは、いつものことだ。

「ぎやはは！ フラれたな！」

「ちえつ、残念。じゃあよ、いつもみたいに歌ってくれよ」

「何がじゃあなんだか」

言われた少女は腰に手を当て、息を吐く。振り返り、マキノへと送ると彼女は微笑んだ。

「ん、マキノさんの許可も出だし、歌うよ。何がいい？」

「そりゃあもちろん」

「あの曲だろ！」

あの曲、と言われると、一つしかない。

母が大好きだった歌。今や歴史上類を見ない大罪人の一人が愛し、世界中に届けた歌だ。

一度は消されそうになったその歌は、それを愛する人々によって今も語られている。

歌に、音楽に。罪はないのだ。

「お、歌が聴けるのか!？」

「いいぞいいぞ！」

「これを聴きにきてんだ俺はー」

他のテーブルからも声が上がると。それを少し照れくさく感じながら、ステージに立った。

母譲りの赤に、少し黒の混じった長髪を束ねて。

酒場に設置された、自分のためのステージに立つ。

「じゃあ、いくよー」

酒場内から歓声が上がる。かつて母は、この数倍、数十倍、数百倍の相手の前で歌っていたという。

その時は、どんな気持ちだったのだろうか。

案外、今の自分と同じかもしれない。

自分の歌で喜んで欲しい。そんな、気持ち。

「……………♪」

リズムをとり、心を集中させる。

歌う曲の名は…… “新世代”。

両親がかつて掲げたという、約束だ。



「ぶわっはっはっ！ 流石は我がひ孫！ 歌は世界一じゃな！」

店を閉める時間になり、ほとんどの客が帰宅した後。唯一残っていた老人が煎餅を齧りながら笑っていた。

「もう、ひいおじいちゃん！ 片付けてるんだから煎餅のかすを溢さないで！」

「ぶわっはっは！ すまんすまん！」

「口だけじゃん！」

口では言うが煎餅を食べ続けるその老人に、もー、と呆れながら言う少女。奥の方では、マキノが楽しそうに笑っていた。

「でもいいの、ひいおじいちゃん？ お仕事忙しいんじゃないの？」

机の掃除をしながら少女は問う。

こうして見ると引退した煎餅を齧る老人だが、彼は「伝説」と謳われる海兵である。流石に歳で前線からは退いているが、今は後進の育成に携わっていてそれなりに多忙のはずだ。

ちなみにひ孫である少女自身はこの老人の実力とかふぎけた力について知って

いるが、白髪アフロの老人曰く全盛期の半分以下、下手すれば十分の一以下らしい。大岩に酔って拳で風穴を空ける力でそれとはどういうことだ。

「何、最近は何もそれなりに増えてきた。一時期のことを考えると、わしの仕事は減っておる」

「へー、そうなんだ」

「まあ、どいつもこいつもまだまだひよっこじゃがの！」

笑いながら言う老人。そして彼は、それにじや、と言葉を続けた。

「明日は大事なひ孫の誕生日じや。祝いたい」

「いいよ、照れ臭い」

「わしが祝いたいんじゃない」

手を振ると、老人はそう言った。

「……わしは、孫にそれをしてやれなんだからな」

それこそを、一番にするべきだったのに。

その後悔を滲ませた台詞は、あまりにも重い感情を抱いていた。少女はそれを努めて気にせぬように振る舞い、言葉を紡ぐ。

「じゃあ、何かプレゼントをくれるの？」

「うむ。色々考えておったんじゃないかな、コビーを覚えておるか？」

「コビーさん、元気なの？」

色々世話になった人だ。一時期、憧れていた人でもある。

「今や海軍本部大將として大忙しじゃが、元気ではあるようじゃぞ。この間も億越えの海賊を一団ごと単独で捻り潰してきおった」

「相変わらずコビーさんのやることは色々とおかしい」

この老人の周りには変なのしかいないのだろうか。コビー自身が物凄く優しい、物腰柔らかかな常識人のせいでやることの違和感が凄い。

「で、そのコビーさんが何て？」

「あやつ、わしの用意しようとしたプレゼントを全部却下しおった。全く、生意気じゃー！」

「で、何をくれるつもりだったの？」

「そりやもちろん、わしが普段指導で使っておる鍛錬用具の一式じゃ」

「いらない」

即答した。十六になる少女へのプレゼントとして、あまりにも不適切が過ぎる。

「何故じゃ!?! 自分の身を守るためには鍛える必要があるじゃろ!?!」

「身を守るって、大袈裟な。大体、ここはコビーさんの部下の人たちが駐屯してるじゃな

い」

ちなみに先程、仕事中と一緒に飲もうと誘ってきたのがここに駐屯する海兵である。それでいいのか海軍。

「うーむ。まあ、それもそうなんじゃが。わしやあひ孫に変なのが寄り付かんか心配で心配で」

「気にし過ぎだよ」

「ふふつ、大丈夫よガーブさん。ここの人たちはいい人ばかりだもの」

マキノが微笑みながらガーブへと熱いお茶を出す。それを受け取りながら、わかつておる、とガーブは言った。

「ここは今の世界から見たら信じられんほどに平和で、優しい場所じゃ。……本当に、世界は変わってしまったからの」

自分が生まれる前後、そして生まれた後。両親が起こしたという数々の大事件が切っ掛けで、世界は大きく変わったのだという。生憎、その変わる前を知らない自分にとっては違いがわからないが。

双子の兄曰く、おかしいのは世界ということであるが……未だ、自分にはわからない。まだまだ。

「それで、それじゃあ何が欲しいんじや？ 大体のものならなんとかするぞ」

「本当に？」

「うむ！ ひいじいちゃんに任せろ！」

どんと胸を張るガープ。その彼に、それじゃあ、と少女は告げた。

「船が欲しいな」

その言葉にガープも、マキノも固まった。

それは、とガープが慎重に言葉を紡ぐ。

「どこか、行きたいところがあるのか？ だったらわしが連れて行ってやろう。何度か行ったようにの。護衛も用意する」

「ううん。行きたいところがあるわけじゃないの。……探したいの」
何を、とは二人は聞かなかった。

だから、少女は告げる。

「お父さんとお母さんを、探したいの」

マキノは息を呑み、ガープは唸るような声を上げた。

「……二人は、もう」

「生きてる！」

ガープが告げようとした言葉を遮るように、言葉を重ねた。

「生きてるよ！　だって、約束したもん！　お父さんもお母さんも、約束を破るような人じゃないって！　ひいおじいちゃんも言ってたじゃない！」

「……………ッ」

最悪の犯罪者と呼ばれながら、それでもあの二人について知る人たちは悪くは言わなかった。言っていたとしても、それは親しみを込めた言い方だった。

両親について覚えていることはもう、多くはない。

とても綺麗な母の歌声と、広くて優しい父の背中。

兄と共に笑っていたことばかり。

辛いことも多かったけれど。むしろ、そんなことばかりだったけれど。それでも、両親は自分達を愛してくれていたのだ。

「もう、十年じゃ」

絞り出すような声で、ガープは言う。

「あの二人の名を聞かなくなつて、それだけの時間が経つてしもうた」

後悔の滲んだ言葉。少女は知っている。ガープが酒に酔うと、必ずと言っていいほどに誰かに謝るのだ。

すまん、と。

それは自分に対してであり。

双子の兄に対してであり。

両親に対してであった。

彼がそうしている姿を、影から何度も見てきた。

何度も、何度も。

涙を流し、一人謝罪を続ける姿を。

「そんなの、何の根拠にもならない！」

だから、と続けようとした言葉を、ガーブが遮る。

「ならん！」

「どうして!?!」

「お前は知らんのじゃ！ お前の両親が成したことによって、世界は大きく荒れた！

世界会議ささえこ数十数年開催できぬほどに混乱しておる！」

“神への大逆人”。

それが、両親に刻まれた忌み名だ。その意味がわからぬほど、世界を知らぬわけではない。

けれど、それでも。

それでも、伝え聞く時の両親の存在は力強く、気高くて。

「力もない小娘が！ 今のこの世界で何かを成せるわけがなからう！」

「力ならある！ 私だって戦える！」

「この鼻垂れが！ 兄と同じようなことを言いおつて！」

びくりと、体が思わず震えた。ガープの迫力もだが、それよりも兄のことだ。

「お兄ちゃん……？」

「ツ、そうじゃ。……もう、四年も前か。お前の兄もまた、同じようなことを言つてここを旅立ちおつた」

じゃが、とガープは言う。

「あやつは、お前とは違う。あやつはどうしようもないほどに世界を憎んでおつた。何もかもを壊すと、この世界を否定すると言つて。……わたしには、あやつを止められなんだ。殴つてでも止めねばならなかった。しかし、できなかつた」

キツク拳を握り締め、ガープは言う。その彼に、少女が告げた。

「この上、お前まで行かせることはできん」

彼の後悔が滲んだ言葉。だが、こちらの決意は固い。

「いいよ。ひいおじいちゃんが何を言おうと私は行く」

「ツ、このー！」

それはきつと、咄嗟のことだった。

思わずといった調子で、ガープの張り手がこちらへ飛んできたのだ。

衰えたとはいえ、それでも海軍の英雄の一撃。放ったガープ自身も愕然とした表情の中。

「お前、何故」

黒く染まった少女の右腕が、その一撃を受け止めていた。

「武装色の、覇気。そんなもの、いつの間に」

「見て覚えた。ここにはコビーさんの部下とひいおじいちゃんのおえんがたくさんいるから。誰も教えてくれないし、一人で」

言つて、少女は手袋を外す。そして現れた右手にマキノは思わず口元に手をやり、ガープは苦虫を噛み潰したような顔をした。

そこにあつたのは、無数の傷が刻まれたポロポロの手。

少なくとも、ガープの記憶ではこの少女はある時からずっと手袋をするようになっていた。お洒落だと本人は言い張っていたし、そういうものかと受け入れていた。

綺麗な手だった。あの二人が守り抜いたものであつたのに。

「力なら、あるよ」

そう告げる少女の表情は、固い決意を宿していて。

止めるのは無理だと、ガープは理解した。

「……よかろう」

「え、い、いいの？ やった、あり」

「じゃが！」

驚きから笑顔に変わった少女へ、ガープが言葉を遮りながら告げる。

「すぐには認めん。一年じゃ。一年、わしが全てを懸けてお前を鍛える。その間に合法的に世界を回る手段を何としてでも用意する」

重い、覚悟と責任の込められた言葉。

「無論、この一年を耐えられんようであれば旅立つことは認めん。良いな？」

「うん、うん！ もちろんだよ！ ありがとうひいおじいちゃん！ 大好き！」

思わず少女はガープへと抱きつく。その頭を撫でながら、しかし、とガープは言った。

「わしの指導は厳しいぞ。耐えられるか？」

「十年耐えたんだよ？ どうってことないよ！」

十年。それは、あの二人の名を聞くことがなくなつてからの時間。

思わず、少女を抱きしめる手に力がこもる。

「ちよつ、痛いよ」

「バカもん。これぐらい……耐えんか」

ガープは、すぐには手を離せなかった。
今離せば、泣き顔を見られてしまいうだろうから。



食器の片付けのために店の奥に引っ込んだ少女を見送り、ガープは呟く。

「のう、マキノ。……わしゃア、あの子だけでも平穩に暮らして欲しかったんじやがのう……」

愛する人と結婚して、子を産んで。

そんな、当たり前の人生を。

「ええ、私も。でも……あの二人の、子供だから」

ああ、そうかと納得してしまった。

あの二人も、息子も。結局、自ら波乱に飛び込んでいく人生を歩んでいる。

これも自分の業か、とガープは自嘲した。

「しかし、見様見真似で覇気を使うか。やはり、あの二人の子であの兄の妹じやな」

「ふふつ、おかしいことを言うんですね」

マキノが笑う。何がじゃ、と問うと、だって、と彼女は告げた。

「あの子は、ガープさんのひ孫でしょう？」

その言葉を聞いて、ああ、と頷いた。

「わしのひ孫じゃ。……天才であることは、道理であつたのう」

そう笑うガープの表情は、寂しそうで。

しかし、どこか誇らしげだった。



そして、一年。少女はコピーの部下たちと共に訓練を受けつつガープからの徹底的な特訓を受けた。

それは周囲も心配するほどに容赦のないものであつたが、それが旅立つ己のひ孫を想う気持ちからくるものであることは誰もが痛いほどわかつていたし、受ける側の少女の覚悟もまた固く、月日が流れていく。

そして遂に。少女は訓練を終え、旅立つ日を迎えたのだ。その港にて。

「寂しい〜!」

メソメソと、少女よりも年上の海兵たちが泣いていた。出港の準備の傍ら、少女は光景に苦笑する。

「たった二年だよ? 世界会議が終わったら帰って来るんだから」

そう、ガープが言った合法的な方法。それは、世界会議を開くためというものであった。

あの日、英雄二人が海軍を追われた日から世界は混乱し、革命や反乱、海軍自身も辞職者が相次ぎ、しかし海賊もまた混乱に便乗して海賊同士が衝突するなど地獄のような様相となっていた。

そんな状況では世界会議を行うことさえ難しく、ここ16年……それこそ少女が生まれてからは一度も開催できないでいたのだ。

それを改めて開催するため、使節団を派遣することになった。少女はその中の一つとして、「英雄ガープのひ孫」の肩書きと共に加盟国を回る役目を担うことになった。

「でもさあ、二年だぜ?」

「長いよ〜!」

「明日には帰ってきてよ〜!」

「明日ってもうそれ旅行以下じゃない」

もう、と酒場の常連たちに対して腰に手を当て苦笑する。すると、何じや、という言葉と共に男たちの後ろからガープが現れた。

「お前らも行きたいのか？」

「「いいんですか!?!」」

「許すわけなからう馬鹿共」

鈍い音が複数響く。ひ孫に悪い虫をつけるわけなからう、と伸びている海兵たちに告げると、少女へと声をかけた。

「出航前に確認がある。こちらへ来い」

「うん」

頷き、ガープの後を追う。案内されたのは、一つの小さな小屋だった。

中に入ると、二人の男女がいる。年齢は……四十代くらいだろうか。その二人に、少女は見覚えがあった。

今回の旅において施設団の長は名義上少女であるが、訓練を受けたとはいえ実務を取り仕切るのは流石に厳しい。そのため、経験豊富な人員を用意するとして紹介された二人だ。

男性の方が副団長、女性の方が航海士長としてサポートしてくれる。

「あ、進路の確認ですか？」

「うむ。それもあるが……この二人には、お前の目的を教えてある」

目的。その言葉に、思わず二人を見た。二人はそれぞれが被っていた帽子をとると、少女に告げる。

「我々は、ご両親の海兵時代の部下でした」

「……………」

思わずガープを見る。彼は頷き、言葉を紡いだ。

「実を言うと、お前が言い出す前からあの二人の搜索はしておったのだ。あの二人の持つ力と立場はあまりにも影響力があり過ぎた。当時はお前とお前の兄も含めてお前たち家族は争奪戦でな」

それについては、兄と共にガープから教えられたことがある。あの日、両親が自分達をフーシャ村に置いて行く決断をしたのは、ガープという存在で自分達の子供を守るためだったのだと。

そして実際、今日という日まで自分は守られている。

両親の子ではなく。

「英雄」ガープのひ孫として生きてきたのだ。

「だが、それでも見つからん。今あやつらを探しとるのはもう、わしのような奴だけ

じゃ。……もう一度、最後に聞く。それでも、生きていると思うか？」
「当たり前でしょ」

即答した。

「だから会いに行くの。二人にもう一度、抱き締めてもらうために。後一発、ぶん殴るつもりだけど」

それを聞き、ぶつ、と目の前の二人とガープは吹き出した。

「ぶわっはっは！ 流石は我がひ孫！」

「ええ、まさしくあのお二人の娘さんです」

「ああ、懐かしい」

そして、眼前の二人のうち、男性の方が手を差し出してきた。

「我々も、あの二人が生きていることを信じています。必ず、見つけましょう」

「はいー」

頼りになる仲間が、ここにできた。

両親を探す旅が、ここから始まる。



新世界の、とある海の上。

世界で最も過酷な海を、その海賊船が進んでいた。

「お頭ア！ 面白いニュースがありますぜ！」

「ああ？ 何だよ？」

部下の一人の声に、不機嫌そうに応じる一人の男。まだ少年と呼ぶべき姿をしているが、纏っている剣呑な雰囲気は間違いなく危険人物であることを告げている。

黒の短髪に、ところどころ赤い髪が混じっている。それがより一層、人目を惹きつける気配を醸し出していた。

「まず一つ！ 遂にお頭の懸賞金が十億を超えました！」

「イエーイ！」

「やっぱこの間の海軍皆殺しが原因か!？」

「俺は!?! 俺は上がってないか!?!」

騒ぐ部下たちに、はっ、と小さく笑いを返す。

「いちいちそんなんで騒ぐなよ。で、面白いってのはそれか？」

「それもそうですが、それよりもこっち！ 何でも世界会議を開くそうですぜ！」

「……………何だど？」

部下の持つ新聞を受け取り、中身を見る。すると、そこには『世界会議開催のため、使節団派遣』と書かれていた。

世界中のいくつかの国から施設団を派遣し、各国の参加を募るようだ。

「いやこれは楽しみですよお頭！ 世界をぶっ壊す目標に近付きましたね！」

この海賊団に所属する者は、ほぼ例外なく一つの過去を持つている。

それは、世界に拒絶されたこと。

否定されたこと。

苦しめられたこと。

そして、それによる憎悪を抱いたこと。

故に、彼らは世界を壊すために戦う。

非加盟国には手を出さず。

加盟国を荒らし、海軍には積極的に攻撃を仕掛けて。

そうして、血と暴虐を振り撒くのだ。

「ああ、そうだな。一つとところに集まってくれんなら、これ以上都合のいいことはねえ」

思い出すのは、苦しんでいた両親の姿だ。

暖かな両腕に抱かれて。

広い背中に背負われて。

しかし、いつも両親は傷だらけだった。笑顔はいつも、無理があった。

「世界会議を破壊すりゃあ、この世界もぶつ壊れるだろうなあ」

愛してくれた。

大切に想つてくれた。

優しかった。

そして何より、両親のしたことは正しかった。

なのに……この世界は、あの二人を否定した。

くだらない「神」とやらを、あんなゴミを、肯定した。

だから。

だから、壊すのだ。

「お頭ア！ 二時の方角に船が！」

暗い思考に侵されかけていた頭に、そんな声が届く。所属は、と部下へと問いかけた。

海賊船なら、向こうが向かって来ないなら見逃すところだが。

「海軍です！ 数は三隻！」

「見逃す道理はねえな」

ああ、とどこか楽しそうに少年は笑った。その笑みは、歪んでいて。

部下である者たちですら、背筋が震えた。

「野郎共、敵だ。やるぞ」

「戦闘ですか!？」

最近立ち寄った非加盟国で加わった新入りが言う。行く場所がないと、妹が天竜人に撃たれて殺されたのだと言った男だ。

その憎悪が本物であると感じたから、受け入れた。

「おい新入り。うちじゃそれは不適切だ」

なあ船長。そんな風に笑うのは、最も古株の男。

あの日。海兵に殺された息子を抱えて慟哭していた、元海兵だ。

その笑みはもう、憎悪と憤怒で狂ってしまっている。

「ああ、そうだ。いい機会だ、覚えとけ」

野郎共、と少年が告げる。

「戦闘じゃねえ。これは戦いじゃねえんだよ」

少年は武器を用いない。

皮肉にも、父と同じ、己が肉体のみで戦うのが彼のやり方。

「これは……殺戮だ」

数日後、新聞に再びその名が載る。

“殺戮者”の名を持つ、海賊の名が。



帆を貼り、風を受け。

ゆっくりと、使節団が海を進んでいく。まずは東の海の加盟国から順に周り、そして偉大なる航路へと進むのだ。

「うーん、いい天気！」

船首に座って風を全身に受け、少女は笑う。

その脳裏には、旅立つ直前のガープの言葉が浮かんでいた。

『兄を見かけたら、絶対に近付くな』

『……………』

『あやつはもう、わしらの知つとるあやつではないんじや』

そう語るガープの表情は、どうしようもない後悔を抱えていた。

だから、言ったのだ。

『それは無理だよ。お兄ちゃんは多分、使節団を見つけたら絶対に向かってくる』
『ッ、それは』

『でもね、それなら望むところ』

拳を握り、ガープに言う。

『お父さんとお母さんだけじゃないの。私を置いて行つたお兄ちゃんも、ぶん殴つてやるんだから!』

それを聞いて、ガープは笑つた。

目の端に浮かんだ涙には、気付かない振りをした。

『だから、待つてね』

大好きなひいおじいちゃんへ、そう告げて。

少女は、船へと乗り込んだのだ。

「まるでお父さんのようですよ、団長」

えっ、という言葉と共に振り返ると、副団長が笑っていた。

「あなたのお父さんも……大佐も、そうやって船首にいつも陣取っていました」

「そうなんですか……」

思わず、自身の足下の船首を見る。

「ええ。そこが居場所なのだと言って」

「ふふ、お父さんらしいです」

「ええ。そしてその近くに、あなたのお母さんも……准将も、いつも立っていて。いつも何か勝負事をどちらかが持ちかけて。我々は、それを見てどつちが勝つかで賭け事をして……そうしている毎日が、幸せでした」

何かを思い出すように、男は海の方を見る。少女は、だったら、と言葉を紡いだ。

「もう一度見ましよう。私も見たいです、その姿。だから、絶対に」

「ええ。……はい。絶対、に」

最後の声に涙が混じっていたことは、気付かなかったことにした。

どうにも、自分の周りにいる男たちは涙脆い。

その空気を打ち切るように、少女は言う。

「お父さんとお母さんの話、聞かせてください。あんまり、聞く機会がなくて」

「勿論です。いくらでも、何時間でも、何日でも。あの二人の旅路は、今でも鮮明に覚えて
います」

「時間はたつぷりありますからね」

笑うと、男もまた笑った。

「いやいや、二年ぼつちじゃ足りないかもしれませんよ？」

そんな風に笑う、姿を見て。

ああ、と少女は思う。

己の両親は、やっぱり。

この胸に、誇るべき人たちなのだ。
だから。

(絶対に、見つけ出す)

そして、抱き締めてもらうのだ。いや、その前に一発殴った方がいいかもしれない。父の方は覇気で殴らないといけないとひいおじいちゃんから聞いた。渾身の一撃を叩き込んでやる。

そして、その後。

泣くのだ。

いっばい、泣くのだ。

慰めて、もらうのだ。

だって、十年以上耐えたのだ。

待ち続けたのだ。

それぐらい、していいだろうから。

「さあ、行くうー！」

手袋をした拳を掲げ、振り返る。

船員たちもまた、大きな声で応じてくれた。

この旅が、世界を変える波乱の幕開けとなることを。
まだ誰も、知らなかった。

逃亡海兵ストロングワールド

逃亡海兵ストロングワールド①

プロローグ

この世の全てを手に入れたとされる「海賊王」ゴールド・ロジャー。

かの伝説が処刑の間際に残した言葉により、大海賊時代が幕を上げた。それは狂乱の時代であり、弱き者が虐げられる時代でもある。

この時代において、海軍とはそんな弱者を守る盾であり刃であった。

しかし、彼らとて万能でもなければ無敵でもない。海賊たちに虐げられる市民たちを救うことがいつもできるわけではないし、事実、犠牲は増える一方だ。

だが、そんな最中にある民衆の希望となる二人の新時代の海兵がいた。

「麦わらのルフィ」

「海軍の歌姫ウタ」

ここ数年の間に民衆たちから「英雄」と呼ばれるようになった二人だ。この二人が

動くと言われるほどに紙面を賑わせる二人については、一部では懐疑的な目で見られる向きもあった。

伝説の海兵、〃海軍の英雄〃ガープ。その孫であるモンキー・D・ルフィと、〃歌姫〃として広報の側面が強いウタは名前だけが先行して実際の実力が疑問視されていたのだ。

だがその評価はとある一つの事件によつて覆ることになる。

アラバスタ事件。

世界政府公認の海賊、〃王下七武海〃の一角であるクロコダイルが引き起こしたアラバスタ王国乗っ取り計画と、それに伴う内乱。あまりにも狡猾なその事件を察知したのはアラバスタの一部の人間と、この二人を中心とする海兵たちだった。

「流石だなア、ウタの歌は」

「ええ。こういう時、ウタウタの能力は便利」

とある港町が海賊に襲われた。その場に居合わせた二人の率いる軍艦は海賊に対する応戦を開始。しかし、そこで海賊たちは人質を取るといふ作戦をとった。

住民たちを人質に取り、降伏を要求する海賊たち。彼らは勝利を確信した。

だが、そこには彼女がいる。

戦場に、*「歌」*が響いたのだ。

それは、絶対の調べ。

彼女の歌に聞き惚れた者は、ただ一人の例外なく彼女の世界に誘われる。

「ウタの歌が聞こえないのは残念だけどな」

「後でいくらでも聞かせてあげるから」

言いながら、彼女の歌声を遮断するイヤーマフラーを外すルフィ。他の部下たちもまたイヤーマフラーを外し、眠っている海賊たちを捕縛する。

そうして捕縛を終えると、ウタはルフィに告げた。

「ごめん、ちよつと眠るね。……後、お願い」

「ああ、任せとけ」

ウタの瞳が落ちる。それと同時に眠っていた者たちが目を覚ました。

海賊も、市民もだ。

「な、なんだこれは!?!」

捕縛されている自分達を見て海賊が吠える。ウタを抱き抱える……それこそいわゆるお姫様抱っこの体勢で抱えるルフィは、海賊たちに宣言する。

「いい夢が見れただろ? 次にお前らが行くのは、監獄だ」



『海軍に新時代到来!! またまたお手柄はこの二人!!』

新聞にデカデカと踊る見出しと、二人の海兵の写真。今度は一億近い懸賞金が懸けられた海賊の捕縛、しかも民間人の被害がほぼ無しという大戦果だ。

写真に写っているのは、眠る「海軍の歌姫」ウタを両手で抱える「麦わらのルフィ」の姿だ。その二人の周辺には彼らを支える海兵たちがおり、そんな彼らを民衆が両手を挙げて称賛している。

いい写真だ。そう呟くのは海軍本部元帥センゴクである。

「しかし、「新時代」とはな。我々はもう旧時代か」

その言葉に込められた想いは、一体どんなものであつただろう。

まだ「海賊王」が「海賊王」ではなかつた時代から戦い続ける彼らは、新たな時代に押し流されようとしている。

「あの時代の海を知る者も随分少なくなつた。あやつらは自慢の孫とその嫁じゃ」

センゴクの正面に座っているのは「海軍の英雄」ガープだ。彼は茶をすすりながら

嬉しそうに笑っている。

「孫はともかく、嫁はまだ先の話だろう」

「先だろうがいずれそうなるじやろ。いやー、ひ孫が楽しみじゃー！」

ぶわっはっは、と笑うガープ。その彼に呆れた表情を向けながら、センゴクは新聞に書かれているもう一つの記事のページを開く。

「こちらについてはどう思う？」

「……東の海の、襲撃事件か」

そこに写っているのは凄惨な現場の写真だった。最近東の海の島々で突如起こっている襲撃事件である。巨大で凶暴な獣たちが突然空から現れ、島を襲っているのだ。現在は一休か、多くて二休程度であるためなんとかなっているが、これが更に増えるとなるとどうなるかわからない。

最悪なのは下手人が不明であるということだ。その意図も含めて。

「空から現れる怪物か。……こんなことをできる奴は、わしは一人しか知らんが」

「奇遇だなガープ。同意見だ」

「だが『奴』はこの二十年、姿を消しておる。あの史上唯一のインペルダウン脱獄事件以来、完全にな。……レイリーのように隠居でもしておるかと思っていたが」

海賊王の右腕、『冥王』シルバース・レイリーがシャボンディ諸島にいるのは海軍上

層部では周知の事実だ。しかし彼を捕らえるととなると海軍としても多くの覚悟を決めなければならず、また、彼自身が今は隠居状態ということもあつて海軍は手出しをしないでいる。

「レイリーは単独で過ごしているようだが、『奴』は元より狡猾で強大な組織力を持つ海賊だ。かつてはロジャーをギリギリまで追い詰めたと聞いている」

「そういえばロジャーの奴がそんなことを言つておつたのう」

ガープが懐かしむように言う。彼はかのロジャーと幾度となく渡り合つた『伝説』そのものだ。センゴクもそうだが、幾度となく殺し合ううちにわかりあうことはないが理解し合う部分が誕生していた。

そして、だからこそ二人は理解している。この二人が『奴』と呼ぶ海賊は狡猾で、残忍で、そして周到だ。その彼が沈黙し続けた二十年。それは、彼が隠居していたからか？

「海軍の『新時代』が現れているこの時に、今更過去の残滓が何をするつもりじゃ」
呟くガープ。センゴクは立ち上がった。

「今、秘密裏に情報を集めている。金が動き、人が動くのであれば必ずそこには跡が残る。もし本当に『奴』であるならば早々にその芽を摘まねばならん」

「ああ、そうじゃな。……もし本当に『奴』なら、それがわしらの最後の役目かもしれん

のう」

新たな時代が押し寄せ中。

古き時代を葬り去るのは、彼らの最後の役目だ。

「ふん。次の時代を任せるには、あの二人はまだまだ未熟だ」

「それもそうじゃ」

笑うセンゴクとガープ。しかし、彼らには確かに見えていたのだ。

新たな時代を作る、平和な時代を作る英雄たち。その先頭に立つ、あの二人の姿が。

ならば。

その道筋を作るのは、旧時代の人間の役割だ。



船、と呼ぶべきかはわからない巨大な物体。空を行くそれは、まさしく島船と呼ぶべき存在であった。

それがたった一人の“能力”によってなされていると言われたところで、どれだけの

人間が納得するだろう。だが、それが現実なのだ。

かつて「四皇」の座に君臨した大海賊。伝説そのものたるその海賊は、その手に持った新聞を見て笑い声を上げる。

「ジハハハハ！ ガープの孫だと!? あの野郎の孫は、随分と活きが良いみたいじゃねエか！」

心底愉快そうに笑う海賊。その年は既に老境に入っているというのに、その身に纏う覇気は周囲を萎縮させるほどに鋭い。

「だが、今はそれよりもこっちだ。なるほど、「ウタウタの実」……海軍はとんでもねえもんを隠し球に持ってやがる」

ガープの孫と一緒に写真に写る女性、ウタ。彼女の能力については海軍内部でさえも機密となつている。あまりにも強力なその力はしかし、彼女の体力の急激な消耗という明確な弱点を抱えている。そのため、その扱いは慎重に行わなければならないのだ。

使い方次第では「四皇」さえも一方的に沈める可能性さえある力。なるほど、と海賊は頷いた。

「こいつは計画の邪魔だ。だが……その力を消すのも勿体無い」

ならば、やることは一つである。

彼は海賊だ。欲しいものも、必要なものも全て手に入れてきた。計画の邪魔になるの

であれば潰すし、利用価値があるなら奪って使う。それが海賊だ。
「さあ、始めようか」

二十年を掛けた計画。その実現のために。

長き沈黙を破り、“伝説”が表舞台に現れた。

逃亡海兵ストロングワールド②

第一話 強襲

のどかな海を、一隻の軍艦が行く。偉大なる航路は油断できない航路であるが、四六時中問題が起きているわけではない。穏やかな時間もあるのだ。

その軍艦にはメインマストに描かれた海軍のマークの他に、見張り台に麦わら帽子を被った音符が描かれている。その旗を掲げる軍艦は、海軍内に一つしかない。

“麦わらのルフィ”

“海軍の歌姫ウタ”

つい先日、億越えの海賊をただ一人の犠牲者も出さずに捕らえた二人の英雄が率いる部隊だ。捕らえた海賊の引き渡しという大仕事を終えた彼らは、緊張から解き放たれて緩い空気の中にあつた。

「先日もお手柄でしたね！」

笑顔でそう言うのは、二人の部下である一人の女性海兵だ。正義のコートを羽織る彼女は先日のアラバスタの一件で中尉に昇格したばかりの若手である。

それでも二人よりは年上なのだが、ルフィとウタの二人を心から慕っている。ウタにとつては部下でもあるが数少ない友人でもある女性だ。

その女性海兵——オリンは新聞を両手で広げ、甲板にいる者たちに見せている。

『海軍に新時代到来!! またまたお手柄はこの二人!!』

新聞にはデカデカとそう書かれ、お姫様抱っこするルフィとされているウタの写真がある。二人の周辺には笑顔の部下たちがおり、更に大喜びする観衆の姿もあった。

いい写真だ、と口々に言う海兵たち。だが約一名、この写真に抗議する者がいる。

「ちよつ、ちよつとなにこの写真!! わ、私がルフィにお、お姫様抱っこ……!」

ウタだ。彼女は顔を真っ赤にして叫んでいる。

何を今更、と部下一同は思う。彼女が能力を使って眠ったあと、ルフィはよくそうして彼女を運んでいる。大切そうに、守るように。

だがまあ、言われてみれば彼女が知らないのも当たり前だ。ウタウタの能力の使用後は結構な長時間を彼女は眠る。効果範囲が広ければ広いほど、相手が多ければ多いほどに。そういう意味で、彼女には驚きの新事実だったのかもしれない。

「ちよつとルフィ! どういうこと!」

「いや、お前が任せるって言ったんじゃねえか」

何を今更、という調子で言うルフィ。まあごもつともである。

「だ、ただどあんな」

「じゃあこれからはやめた方がいいか？」

その言葉に、ウタが静止する。

「いや、それは……その……」

彼女は顔を赤くしながら、うんうんと唸り続ける。そして葛藤の後。

「……これまで通りでいいです」

「なんだよわけわかんねえ奴だな」

テンションで位置の変わるウタの髪がへたり込む。もう、とウタが叫んだ。

「ちよつと休む！」

「いや元々休憩中だろ」

ツツコミを入れるがスルーされる。何だよあいつ、とルフィは首を傾げた。

ズンズンと歩いて行くウタ。その彼女へとオリンが声を掛けた。

「大佐は相変わらずですね」

「今更ルフィに乙女心をわかれとは言わないけど……」

あの男にそんなことを期待する方が無茶だというのは長い付き合いでわかっている。

だが、それでもウタとしては少しくらい、と思つてしまふのだ。

「でも、大佐は准将を絶対に誰にも任せようとしなんでしょう？ 見てて羨ましいと思つてしまうくらいに」

「う、うゝ……もう、からかわないで！」

「すみません。でも、お二人が仲良くしているのは見ている私も嬉しいですから」

顔を真っ赤にするウタへと笑いかけるオリン。

「お二人は、私にとって恩人ですから」

何度も聞いたことだ、とウタは思う。音楽一家に育ち、音楽を至上として生きてきたという彼女。ある日父に反発し、単身海軍の門を叩いた。

厳しい訓練と任務の中で音楽に触れることがなくなつた彼女は、ある日ウタとルフィの二人と共に任務を共にする。そこで音楽に再び触れ……楽しさを、始まりを思い出したと彼女は言うのだ。

ただ、ウタとしては大したことをした記憶がない。彼女の奏でる音楽を聴いて、共に歌つただけだ。

「お二人は確か、東の海の出身なんですよね？」

「うん。フーシャ村っていう、小さな村で育つたの」

いい場所だよ、とウタは笑う。

「争いもなくて、自由で、静かで。……時々来るガープさんだけはちよつと遠慮して欲しいかったけど」

あの男が来ると酷いことになった記憶しかない。今考えても幼児二人をジャングルに何のサポートもなしに放り込むとかどうなってるんだと思う。

「ガープ中將は昔から破天荒なようで」

「あれで衰えてるっていうんだから相当だよな」

全盛期は一体どれほどの怪物だったのだ。いや真面目に。

「何でも、〃ロックス〃とかいう海賊団を壊滅させたとか何とか」

「〃ロックス〃？」

聞き覚えのない名前だ。首を傾げると、オリンが私も聞いただけなんですけど、と言葉を紡ぐ。

「お酒の席でモモンガ中將から聞いたんです。何でも今の〃四皇〃である〃白ひげ〃、

〃ビッグ・ママ〃、〃カイドウ〃も所属していた海賊団で、他にも〃金獅子〃とか〃王直〃とか、それこそ伝説の海賊が集まったとか」

「ええ……何その海賊ドリームチーム。最悪なだけど」

海軍にとつてはまさしく悪夢である。

「それをガープ中將が壊滅させたとか。それで〃海軍の英雄〃と呼ばれてるそうです

よ」

「それが本当なら無茶苦茶だね……。そもそもやろうとするところからおかしい」

ウタは海賊が嫌いだ。だが、流石にその面子を相手に正面から挑みたくはない。

しかし、色々ぶつ飛んでいるし、やらかしても許される背景にはそんなことがあるのかとも妙に納得した。

「でも、だとしたら心配ですね」

「ん、どうしたの？」

新聞を広げるオリンの側にウタが寄つていく。先程は一面に掲載された自分達のことの話しかしていなかったが、別のページにはそれ以外の事件が掲載されていたのだ。

「東の海の街が、一夜にして壊滅……!?!」

そこに掲載されていたのは、そんなニュースだった。しかも一件だけではない。複数の街が壊滅しているとの内容だった。

生き残った被害者によると、突如現れた「何か」によって街が壊滅させられたらしい。

「海軍も詳細を調査しているようですが、未だ原因は不明のようですね」

オリンのその言葉を聞き、故郷は、これまで東の海で関わった皆は大丈夫だろうか？ ウタは思う。ライブで訪れた場所も、（主にルフィが原因で）巻き込まれたトラブルで助

けたり、世話になつた多くの町も。

「心配だね。……皆は大丈夫かな」

温かさに触れ続けた。その故郷で今、異変が起こっている。

何かできないだろうかと思うウタの肩を、中尉が優しく叩く。

「大丈夫です。東の海にも海軍はいますから。彼らがきつと、何とかしてくれるはず
す」

「うん。……そうだね」

頷く。そうだ、自分達は海軍なのだ。頼れる味方は世界中にいる。彼らを信じればい
いのだ。

「でも一応、大佐にも伝えたほうがいいですよね」

「あ、それはそうだね。ルフィは帰るとか言い出しかねないけど」

苦笑する。何を言い出すかが手に取るようにわかるのだ。

そして二人で船首に寝そべるルフィのところへ行こうとしたところで。

「おい！　島が空を飛んでるぞ！」

海兵の一人が空を指差してそう叫んだ。全員が一斉に空を見上げる。

そこには確かに、一隻の巨大な島が浮かんでいた。

空島か、と誰かが叫ぶ。ルフィたちの部隊はとある縁から空島へと至ったことがある。そこで「神」を名乗る男とその男が率いる神兵たちと戦い、空島の国であるスカイピアを救った過去があるのだ。

だが、アレは空島ではない。

「船よ！ 海賊船！ 照合急いで！ 総員戦闘配置！」

信じ難いことに、島の先頭に『艦首』があるのだ。しかも、遠目ではあるが見える旗……そこには確かに『海賊旗』がある。

だが、空飛ぶ島、さらにそれを船とするような海賊など聞いたことがない。

「うおーっ！ 凄え！ 何で飛んでんだあの島!？」

慌ただしく海兵たちが動き回る中、大興奮するアホが一人。ウタが声を張り上げた。

「ルフィ！ 相手は海賊よ！ しかも原理も何もわからない空飛ぶ島！ すぐに救援を要請するけど、多分待つてはくれない！」

海賊旗を掲げる船が、海軍の旗を掲げる軍艦に迫ってくる。その意味がわからないほど、この軍艦の海兵たちは世間知らずではない。

「ああ、わかってる」

ゆつくりとルフィが起き上がり、麦わら帽子と正義のコートを羽織り直す。

「何が来ようと、ぶっ飛ばすだけだ」

いつもの笑みを浮かべる、「麦わらのルフィ」。

その笑顔がこの部隊の海兵たちを安心させる。いつだってそうだ。この笑顔を浮かべる彼は、どんな過酷な戦いをも乗り越えてきた。

数多の海賊たちを敵に回しても。

どれだけの絶望を相手にしても。

あの「王下七武海」が一角、「サー・クロコダイル」を敵に回しても。

空島の「神」、人智を超えた力を使用するエネルを前にしても。

いつだって彼は、その全てを打ち破ってきたのだ。

「よし！ 大佐がいるなら何が来ようと大丈夫だ！ 総員、気合入れろオ！」

「「おう！！」」

一人の海兵の叫びを受けて、士気を上げる声が響く。

しかし。

そこへ、「絶望」が降り立った。

「ジハハハハ！！ 良い気合の乗った海兵どもじゃねエか！！」

現れたのは、二人。

まるで獅子の如き金色の長髪を持ち、何故か頭に操舵輪が突き刺さった男と。

その獅子の後方に立つ、氷のように冷たい目をした灰色の髪的美女だ。

男の方は袴と呼ばれる衣類に近い服装をしており、両足が刃になっっている。口元には葉巻を咥えており、どこか威圧的な覇気を纏っていた。

女性がかつてアラバスタで見た踊り子のような格好をしている。ただ、口元は長いマフラーが巻かれており、表情が読みにくい。それがより一層、その冷たい瞳を印象付けた。

「う、浮いてる!?!」

海兵の一人から驚きの声上がる。そう、現れた二人は空中にまさしく『浮いて』いたのだ。

いや、正確には違う。女性の方は浮かんだ平らな岩の上に立っており、何もなく浮いているのは男だけだ。

「軟弱な海賊が増え、軟弱な海兵が増えたと思っていたが……中々どうして。海兵にしとくにや惜しい人材だ。なあ」

直後。

即座に拳を放っていたルフィの一撃を、男が避ける。

「ガープの孫オ！」

男はルフイの伸びた腕を掴むと、そのまま振り回した。

「うおっ!？」

「大佐！」

甲板へ叩きつけられるルフイ。おいおい、と男が言葉を紡いだ。

「降伏勧告はしねエのか？」

「意味のないことに時間を割くほど、暇じゃないの」

言い捨てるのはウタだ。なるほどなあ、と起き上がるルフイを見ながら男は頷く。

「良いな、お前ら。海賊つてもんをよくわかっている。だが、世間を知らねえようだ」

両足が刀剣となっている男がゆっくりと降りてくる。金属の音が響き渡った。

女性もまた岩から降りてくるが変わらず無言だ。ただその冷たい視線が周囲を威圧

する。

そこへ、一人の海兵が走ってきた。

「照合出ました！ “金獅子”です！ 海賊、 “金獅子のシキ”です!!」

ざわりと、周囲の海兵の間にざわめきが広がる。

かつて “四皇”の一角であった伝説的の海賊。あのマリントポードでガープ、センゴク

を相手取って戦い、半壊させた怪物だ。

最早「伝説」とされているその大海賊が、葉巻の煙を周囲に撒きながら言葉紡ぐ。

「力の差がわからねエほど未熟とも思えんが」

「関係ねえよ」

立ち上がり、ルフィが言う。

「お前が海賊なら、捕まえるだけだ」

「ジハハハハ！ 言うじやねエか！ だが、身の丈に合わねエ言動は身を滅ぼすぞ？」

「合うかどうかは、お前が確かめてみる！」

直後、大気が揺れた。海軍の誇る武術、六式が一角「剃」による高速移動でルフィがシキに迫る。

「『ゴムゴムの銃弾オ』!!」

至近距離から顔面へと叩き込む一撃。しかし、その一撃は容易くシキの右掌が受け止める。

「うんにやろ！」

だが、ルフィは即座に掴まれた腕を支点にして体を捻ると、そのまま左足でシキに蹴りを放つ。

「『ゴムゴムの鎌』っ！」

「遅い！」

だが、その一撃が届く前にシキの頭突きによってルフィの体が弾き飛ばされた。覇気を纏うその一撃で、ルフィの額から血が飛び散る。

「大佐！」

「大丈夫だ！」

呼びかけに応じ、立ち上がるルフィ。血を拭う彼にシキが笑いながら応じる。

「筋は悪くねエが、あの野郎の孫にしちやあ物足りねエなア」

「じいちゃんは関係ねえよ」

「あるさ。おれはあの野郎とも散々やり合ったからな。今のこの軟弱な時代とは違う、本物の海賊たちだけの時代でなア」

何がおかしいのか、笑うシキ。

「お前程度の力じゃア、あの時代じゃすぐに殺されて海の藻屑だ。力も、速度も、何もかもが足りん。今の時代に感謝するんだな、『新時代の英雄』」

「じゃあ、試してみるか？」

ルフィが構えをとる。ドクン、と重い心臓の音が響いた。

おおつ、と周囲の海兵たちからも声上がる。彼らは知っているのだ。今からルフィが見せる力は、『麦わらのルフィ』の全力であることを。

かつて、力不足を痛感した彼が。

大切な人を守るために編み出した、戦い方。

「ギア、2」

体から蒸気が噴き出す。その姿を見て、シキも笑みを消した。

「……親分」

ずっと沈黙していた女性が呟く。シキはいい、と言葉を返した。

「お前は役目に集中しろ、カガシヤ。あの程度の小僧、わけもねエ」

その会話が終わると共に、ルフイが構えた。

「〴〵ゴムゴムの〴〵」

左手を前に出し、まるで狙いを定めるように。

「〴〵JET銃〴〵!!」

直撃の轟音が響いた。シキの足が僅かに後退りする。

部隊の海兵たちでも、そのほとんどが視認できない超高速のルフイの一撃。それをし
かし、シキは両腕で受け止めていた。

「おれに両手を使わせるたア、やるじゃねエか」

「〴〵JET銃〴〵!!」

高速移動術、〴〵剃〴〵により空中、シキから見て右上に飛んだルフイが再び一撃を放つ。

だが、シキはそれを空中に浮かぶことで避けた。

「だが、一度出した手は引つ込められねエぞ」

「上等だ！」

「嵐脚！」

ルフィに向かおうとしていたシキ目掛けて、斬撃が飛ぶ。ウタだ。彼女はシキを見据えながら、船員たちに指示を出す。

「シキは私とルフィが倒す！ 他の全員でその女の捕縛を！」

「准将！ 援護は!？」

「必要ない！ 私たちでなんとかする！」

無意味だから、とは言わなかった。ウタの持つ「見聞色の覇気」が伝えてきているのだ。

（次元が違う……!）

あの女はまだ理解の及ぶ範囲だ。しかし、この男。

伝説の大海賊、「金獅子のシキ」の気配はあまりにも強大だ。

そう。

まるで、かつてのシャンクスたちのような……。

（何を馬鹿なことか）

気合を入れ直す。そして、ルフィへと呼びかけた。

「ルフィ！ 援護する！ あいつをぶっ飛ばして！」

「おう！ 任せろ！」

そんな二人を見て、シキが笑う。

「威勢はいいが……果たして、実力が伴うか？」

そして、激突する。

海軍の、新時代の英雄と。

海賊の、旧時代の怪物が。



三人の戦闘は激戦となっていた。正面から挑むルフィと、それを援護するように周囲を飛び回るウタ。共に「月歩」を習得している身だ。空中戦だつて領域である。

しかし、シキは二人のように空中を蹴っているわけではないのに自在に動き回る。今はどうにか拮抗しているが、危うい綱渡りの中にあつた。

「二人は大丈夫。私たちは准将の指示通り、この女を捕らえます」

そう宣言するのはオリンだ。現在のこの軍艦内では彼女が二人の次点の立場にある。銃を構え、踊り子のような衣装に身を包む女性を取り囲む。

普通に考えれば多勢に無勢だ。しかし、オリンは背筋に嫌な汗が伝うのを感じた。

(普通の海賊じゃない……!)

こんな威圧感を感じるのは、そう。あのクロコダイルを目にした時以来か。

シキもそうだが、今のこの戦力で相手取っていいような海賊ではない。

(だからなんだ!)

ウタは任せてくれたのだ。であれば、その信頼に応えなければ。

緊張した空気が漂う。上空の戦闘音が響く中、一人の海兵が声を上げた。

「カガシャ……もしかして、『毒蛇のカガシャ』!?’」

「知っているの?’」

「『新世界』の海賊です! 懸賞金三億を超える大物海賊です!’」

「なっ……!?’」

ざわめきが広がる。

懸賞金とはイコールで強さを表しているわけではなく、政府に対しての危険度を表している。だが、三億を超えたとなれば個人としての戦闘能力も別次元だ。

女……カガシャは、声を上げた海兵を一瞥した。貫くような視線に、こちらに向けら

れたわけではないというのに背筋に悪寒が走る。

「ふう」

一息。その瞬間に、血飛沫が舞った。

音は、ない。

誰も反応できないうちに、いつの間にか声を上げた海兵の懐に飛び込んでいたカガシヤが、どこからか取り出したナイフでその海兵を貫いたのだ。

海兵が倒れる。しかし、音はない。

彼の上げた悲鳴も、倒れる音も、血が地面に落ちる音さえもしなかった。

「『静音暗殺』」

静かに告げるカガシヤ。血の滴るナイフを、くるりと一度、彼女は回した。

周囲に血が舞う。そこでようやく、オリンは己の体を動かさせた。

「貴様ツ!!」

「口を慎め」

鈍い痛みが、脇腹に走る。

いつの間にか背後に回っていたカガシヤが、こちらの脇腹をナイフで貫いていた。そして、そのままナイフを引き抜きながらこちらへ蹴りを叩き込む。

痛みと、衝撃。オリンの体は吹き飛ばされ、壁に激突した。

しかし、変わらず音はない。

「中尉!! 貴様ア!!」

「口を慎め、と。……うるさいのは、嫌いじゃ」

右手のナイフを回転させながら、鬱陶しそうに呟くカガシヤ。その瞳は変わらず冷たく、こちらを心底見下しているような色を宿していた。

銃を構える海兵たち。そこで、む、とカガシヤは空を見上げた。

「……何じゃ、時間か」

心底つまらなさそうに言う彼女につられて、海兵たちが空を見る。彼らの表情に驚愕が浮かんだ。

「なんだあれは!?!」

そこにあつたのは、無数に浮かぶ島だった。そう、島だ。文字通り巨大な島がいくつも空に浮かんでいる。

空島とは違う。あれは空にあるが、雲の海があつた。あくまで海に浮かぶ島だったのだ。

しかし、あの島々は。

どう見ても、単独で空に浮かんでいる。

何が起こっているんだと、海兵たちは戦慄することしかできない。

ただ、わかるのは。

とてつもない何かが、始まっているということだけ。



高速で移動するルフイに合わせ、ウタは援護の“嵐脚”を放つ。

だが、シキはその全てを笑みさえ浮かべて避ける、あるいは両足の剣で受けてしまう。実力の差は歴然だった。これが伝説の海賊かと、ウタの背を嫌な汗が伝う。

全滅、という単語が浮かんだ。手が震え、足が止まる。

それが、致命の隙になった。

「戦場で考え事とは余裕だなア！」

シキがその足の刀を振り被り、こちらに叩きつけてくる。咄嗟に武装色の覇気を纏った。

やられる、とその覚悟をした瞬間。

「ウタ！」

ルフィが間に割って入った。そのまま彼は踵落としの要領で振り下ろされた刃を両腕で受ける。

拮抗は一瞬だ。堪えきれず、ルフィはウタと共に甲板へと叩きつけられた。

「おいおい、どうした。おれはまだ一発も貰っちゃいねエぞ？」

新しい葉巻に火を点けながらシキは言う。そう、二人はこの一連の戦闘でたったの一撃も入れることができなかった。

これが、かつて「四皇」に数えられた大海賊。

伝説と共に語られる、「金獅子のシキ」か。

「くそっ……！」

「ッ……！」

二人でよろよろと起き上がる。このままでは全滅だ。

「ルフィ」

呼びかける。それだけで幼馴染は何をするかを理解してくれた。

息を吸う。この状況を変えるには、最早この力を。

「……………！」

声が、出ない。いや、違う。ウタが出そうとする音が、何一つ形にならない。

「おい、ウタ！」

ルフィが声をかけてくる。だが、駄目だ。声を出そうとしても、音が出ない。胸の奥から絶望が這い上がってきた。

歌は、この声は、ウタという女性にとつての全てだ。それを失ってしまったら、何もかもを失ってしまう。

目の前の、大切な人さえも。

「海軍つてのは因果なもんだ。どうしたつて情報は外に出る。お前の持つ『ウタウタの実』の能力、その真骨頂は初見殺しにある。その歌声に聴き入ることがなければ聞かぬエようだが、『歌姫』の歌を無視できる奴がいるはずもねエ」

「お前ウタに何をした！」

「ただの対策だ。音さえ聞かなければウタウタの力は発動しない。我が親愛なる部下であるカガシヤの食った悪魔の実は『ナギナギの実』。音を消す力だ。つまり『歌姫』……お前の天敵だ」

両手を広げて言うシキの側に、カガシヤと呼ばれた女性が歩み寄る。ルフィは正体に気付かなかつたが、それが『毒蛇』と呼ばれる彼女の暗殺術、その理由であった。

暗殺対象の音も、暗殺者の音さえも消したサイレント・キル。気付いた時にはまるで毒で一人死んだように見えるが故の『毒蛇』だ。

関わることは、死。

その畏怖が、彼女を三億を超える賞金首に押し上げた。
「くそっ！」

ルフィが動く。だが、それよりも先にシキ動いていた。

「そしておれの力がこれだ!!」

軍艦が揺れた。

いや、違う。

軍艦が、浮き上がっている。

「総員、船にしがみつけ!!」

ルフィが指示を飛ばし、周囲に視線を送る。空中を踊るように舞うウタの姿が見えた。

まるで錐揉みしているかのように、無茶苦茶な回転で空へと上がっていく軍艦。その最中、ルフィはウタへと手を伸ばす。

もう少して手が届く、その瞬間。

「悪いな、ガープの孫」

ウタの体を、シキが掴んだ。

「この女の能力はお前たち海軍よりも、おれの方が上手く使える」

「ウタ!!」

ルフィが叫ぶ。ウタも何かを言おうと口を開いているが、その言葉は音にならない。

その瞳から、涙が溢れていた。

手は、届かない。

音も、届かない。

決して離れないと誓った二人が、引き裂かれる。

後に、ウタは語る。

この戦いが、私とルフィの、海兵としての最後の戦いだつたと。

「ウタ~~~~~」

!!!!!!

英雄の絶叫が、轟く中。

伝説の海賊が、嘲笑う。

後に、戦争として語られる戦いは。

こうして——始まったのだ。

逃亡海兵ストロングワールド③

第二話 陰謀

その島の名は、メルヴィユと言う。

強き者のみが生き残るその島には凶悪にして強力な獣が無数に存在する。それは巨大なカバのような生物であり、蛇であり、蝮であり、蠍螂であり、ゴリラである。

とある者たちの陰謀により通常よりも遥かに凶悪になっている獣たちは、日夜争いを続けている。

まさに弱肉強食の世界。弱き者はただ死に行くしかないその島に、その青年はいた。「ウタ」

その青年は、眩くように彼にとつて大切な少女の名を呼んだ。いつも、いつも隣にいた少女。笑っていてくれた彼女。

奥歯が砕けてしまうのではないかと思うほどに、強く、強く青年は歯を食い縛る。

あの時、伸ばした手は届かなかった。

それが、青年……モンキー・D・ルフィにとって何よりも自分を許せない理由となる。

“なあ、ルフィ。……ウタを、守ってやって欲しい”

麦わら帽子に触れ、あの日の言葉を思い出す。

憧れた男との約束。それがルフィにとつての始まりだった。

だが、今は。

そんな、約束よりも。

「ちくしょう」

手も足も、出なかった。

ただの一撃さえも、届かなかった。

絶叫のような、慟哭のような声が響く。

それは周囲の獣に位置を知らせる愚行だ。しかし、彼を襲う獣は一体たりとも存在しない。

今の彼に近付くことが自殺行為であることを、獣たちは本能で理解しているのだ。

弱肉強食の島を、青年は行く。

それは、まるで。

爆発寸前の、火山のようであった。



獣たちをやり過ぎし、女性海兵……オリンが息を吐く。彼女は痛む脇腹をさすると、同じように隠れていた海兵三人へと視線を向けた。

「どうやら、今のところは私たちだけみたいね」

「はい。もっと遠くに飛ばされている可能性もありますが……」

「応じるのは上等兵の海兵だ。多少の医術も習得していた彼は、脇腹を貫かれたオリンの応急手当てをしてくれた。」

「海に落ちたのも相当数いると思います。シキとの遭遇時に本部へは緊急通信を行なっていたので、そちらは大丈夫だと信じたいところですが」

「まあ、殺したって死なない連中です。信じましょう」

「努めて笑顔を浮かべる海兵に、オリンもまた笑みを返す。そして彼女は、電伝虫を弄り続ける海兵に声をかけた。」

「どう？・繋がりそう？」

「もう少しなんですけど……もつと開けたところに出たほうがいいのかもしれない」

彼らが所属する部隊は通常とは違い、広報の役割を担う事も多い。そのため通信機器には約一名を除いて一定以上の知識を持っていた。

そして、持っていた電伝虫でどうか海軍本部、或いは支部に連絡を取ろうとしているが上手くいかない。ここが森の中であることも影響しているかもしれない。

「じゃあ、移動しましょう」

銃を手に持ち、オリンは立ち上がる。脇腹に走る痛み思わず顔を顰めた。

「しかし中尉、この島は異常です。どうみても通常とは思えない進化を遂げた生物が大量におり、その……我々では、あの怪物を倒すことは」

「わかっている。だから迂回して、広いところを探すの。どの道、ここでジツとしても状況は改善されない」

わかってるでしょと、オリンは言う。

「あの二人の下にいるんだもの。諦めの悪さについては、十分に学んでる」

その言葉を聞き、他の三人も笑った。そうだ、いつだってこの部隊はそうやってきたのだ。

「何より、大佐を一人にしておくとなにをしかすかわかったもんじゃないし。さっさと見つけないと、勝てる戦いも勝てなくなる」

オリンは信じている。あの男が、「麦わらのルフィ」が諦めることはない。敗北し続けることはない。

だって、いつだってあの二人はそうだったのだ。

絶望的な戦況を、状況を、敵を。いつだって覆ってきたのだから。

「まだ、私たちは負けてない」

強い意思の籠った瞳でオリンは言う。そうだな、と海兵たちも頷く。

「とりあえず、急ぎましょう。夜になつちまうと森は危険だ」

「人はいるのかな？」

「わからん。ただ、ここがあいつらの拠点の一つだってんなら何かしらの人工物はあるはずだぞ」

たくましい男三人の言葉に、オリンは小さく微笑む。

「さあ、行くよ。……大佐はまあ、多分、一番騒がしいところにいるでしょうし」
それだけは、三人ともが同意していた。



腹が減つては戦ができない。

その言葉がこの人以上に似合う人を、オリンたちは知らなかった。

「遅れて申し訳ありません大佐！」

「ん、いいよ。それより、お前らも食え」

こちらに背を向けたまま、バクバクと食事を続けるのはルフィだ。その彼の側には、オリンたちが逃げるしかなかった蠍の怪物が転がっている。

相変わらずの強さである。これであのシキにいいようにされてたと言うのだから、あの海賊の強さはどれほどのものなのか。

「大佐、おそらくこの島には我々だけのようです。他の海兵たちは、おそらく海に振り落とされたのかと」

「……そつか。大丈夫かな」

手を止めて呟くルフィ。煙が上がっている方向へ来るため、オリンたちは約五日間も歩いていた。道中、電伝虫を使つて本部への連絡を試みるために何度か立ち止まつており、通常よりも時間をかけている。それでもこの場にルフィしかないということは、この島に辿り着いたのが彼を含めて五人だけと言うことだろう。

「あの空飛ぶ島船とでも呼ぶべき存在を感知した時、すぐに緊急の信号は送っています。

おそらくですが、救助されているものと」

「なら、よかった」

立ち上がり、ルフィは言う。

「じゃあ、腹捲え済んだら行くぞ」

えっ、とオリンたちは声を上げた。ルフィは帽子を被り直しつつ、コートを羽織る。麦わら帽子でその目元は見えない。

「行くって」

「ウタを助けにだ。シキの奴はこの島のどこかにいる。だからあいつらは、あの時突然戦闘をやめたんだ」

冷静に告げるルフィ。待つてください、とオリンは言った。

「我々はたったの五人です」

「そうだな」

「無謀です」

はつきりと言い切った。ギロリとルフィがオリンを睨む。その覇気に身が竦むのを感じながら、オリンは言った。

「応援を呼びましょう。電伝虫があります。だから」

自分のポケットから電伝虫を取り出しながらオリンは言う。その間に、とルフィが言

葉を紡いだ。

「ウタに何かあつたら!」

「根拠はあります! 准将をシキは利用すると言っていました!」

足がガクガクと震えている。いつもは気さくで、頼りになる「麦わらのルフィ」。その本気の殺意が、これほどまでに恐ろしいとは。

だが、言わねばならない。弱い自分達とは違い、この人は希望なのだ。

「シキは『何か』をするつもりなんです! それに准将が必要なのかどうかはわからない! けれど准将には利用価値があるから連れ去ったんです!」

だからまだ時間はある、とオリンは告げた。

「私はカガシヤに何もできませんでした! けれど大佐は違う! あなたが無駄に散つたら、誰が准将を助けるんですか!」

涙の訴えだった。悔しさと、情けなさが溢れ出してくる。

ルフィは一度、何かを堪えるように俯いた。そして。

「すまねえ」

そう、呟いた。

「はい。方法を、考えましょう。……どこか、人がいる場所があるはずですよ。そこを探しましょう。そこがシキの本拠地だったとしても、情報を得られます」

「そうだな。……よし、じゃあ食べ」

いつもの笑顔に戻ったルフィが言う。だが、その笑顔に無理があることをこの場の全員が理解していた。

ただ、それはそれとして。

「これを……食べるんですか?」

どうみても化け物としか思えない生物の身である。美味いぞ、とルフィは言う。

「どつちにしろ移動するなら食わなきゃダメだろ」

それはその通りだ。四人は顔を合わせると、意を決してそれを口にする。

一言で言うところ。

ちよつと変な味のする蟹だった。



少女が、逃げている。

この島は島の内部で場所ごとに環境がガラリと変わる。少女が今走っているのは、雪

の降るエリアだった。

「ゴオオオオ!!」

唸り声を響かせながら少女に迫るのは、トナカイのようなツノが生えたテイラノサウルスとも言うべき生物だ。ただその体色は寒色であり、背と首周りに大量の毛が生えているという、形以外ではとてもじゃないがテイラノサウルスとは呼べないものであったが。

まあ、この場にいる者に生物学者などいないし、認識なんて何でもいいのだが。

少女が足をもつれさせ、倒れた。ひっ、という小さな悲鳴をあげる。だが彼女は両手に持った大切なものだけは手放さない。

捕食者が迫る。少女は、キツく目を閉じて。

「ゴムゴムの銃!!」

しかし、その時は訪れなかった。

轟音を響かせ、そのテイラノサウルスが倒れ伏す。

「大丈夫?」

声をかけてくれたのは、白いコートを着た女性だった。その後ろには四人の男性がいる。

「あ、あの」

「とりあえず、立てる?」

言われ、女性に起こされる。少女はようやくやくそこで状況を理解した。

「あ、ありがとう!」

「私は何も。あれを倒したのは、あの人よ」

女性と同じコートを着た青年を示しながら彼女は言う。彼に対して少女が改めて礼を言うと、青年は笑った。

「あの、私はオリンって言うの。あなたは?」

「わたし、シヤオ」

「そう、シヤオ。もしかして、近くに住んでる場所があるの?」

「うん。歩けば行けるよ」

そこで女性が青年へと視線を送った。青年が頷きを返す。それを受けて、女性は言葉を紡いだ。

「よかったら案内してくれないかしら?」

「うん、もちろん!」

乾いた音が、室内に響いた。

「あれ程ダフトグリーンの外に出ちやいけないって言ってるのに！」

シャオの家だというところに案内されると、彼女の母親に礼を言われた。しかしその後、彼女はシャオの頬を叩いたのだ。

「だって……」

涙を溜め、大事に抱えた一輪の花を抱えながら少女は言う。

「どうしてもおばあちゃんを助けたかったから……！」

「ッ」

母親がハツとした表情になる。すると、奥でゆつくりと体を起こす女性がいた。

「シャオ、私のために無理をしないでおくれ……」

「だって、このままじゃおばあちゃんが」

目に涙をいっぱい貯めて言うシャオ。あの、とオリンは言葉を紡いだ。

「具合が悪いのですか……？」

「ああ、すまない。ありがとうね、あんたたち。……ダフト、っていう病気でね。緑色の痣の部分が硬直していつて動かなくなる病気なのさ」

「ダフト、ですか。あまり聞き覚えのない病ですな」

「そうだろうね。ダフトグリーンの粒子を大量に吸い込むとそうなってしまうんだ。外に、緑色の大きな植物があったらどう？ あれの匂いがこの島の動物たちは嫌いだね。

それで私たちを守ってくれてるのさ」

「なるほど……」

道理でこの村が襲われていないわけだ。あの植物が全てを防護していたということだろう。

だが、メリットだけというわけでもないということだ。

「唯一治せる薬は『IQ』っていう植物から作られるんだけど、一輪だけじゃね」

「それで……あんなところに」

思わずシャオを見る。彼女は泣きながら母親に縋りついた。

「ごめんなさい！」

「お前が悪いんじゃない。悪いのは『IQ』を独占しちまったシキの奴さ」

「シキか」

ずっと黙っていたルフイが静かにその名を呼んだ。そうさ、と女性は言う。

「二十年前までは人と植物、そしてあの動物たちとも上手く共存してたんだ。それをあいつが、全部ぶっ壊しちまった……！」

「早く行っちゃえばいいのに、『計略の海』に……！」

「『計略の海』？」

オリンが問いかける。ああ、と女性は答えた。

「東の海を滅ぼすと、シキはそう言ってるのさ。この島をそのために利用するって」
その場の全員が息を呑んだ。ルフィだけが深く麦わら帽子を被り直す。

「あれを見な」

女性が窓を指し示す。視線を向けると、少し離れたところに巨大な電伝虫がいた。

「うお、なんだあのデカイ電伝虫」

「あんなの初めて見るぞ」

「『自走式映像電伝虫』さ。あの電伝虫で映した映像は全て王宮へそのまま送られてる。私たちはいつだって見張られてるんだ。少しでもシキに楯突くような動きを見せたら、すぐ見せしめに殺せるように……!」

酷いことを、とオリンと他の海兵たちが言う。ルフィはまだ、無言のままだ。

「ああ、だが東の海に行きさえすれば用済みになり解放される。この村には男も若い娘もいないだろう? 全員、連れてかれてるのさ」

狡猾で残忍。それが『金獅子』の評価だ。なるほど、二十年もここで力を蓄えていたのか。

最近起こっていた東の海の件と言い、ようやく色々なものが繋がってきた。
伝えなければ。

この陰謀を、海軍本部に。



鎖を揺らす音が響く。ここはシキの王宮の地下牢、その一角だ。

ただ、音がする場所は柵に覆われてはいない。一人の女性が海楼石の錠で繋がれているのだ。手錠からは鎖が伸びており、後方の壁と繋がれている。ある程度の距離の移動はできるが、決して抜け出せない。

そこへ、不意に音楽が鳴る。聞き覚えのある音楽に女性……ウタは眉を顰めた。軽快なリズムと共に現れるのは四つの影だ。

一人は、大海賊「金獅子のシキ」。刃となった足で地面を踏み鳴らし、中心で軽快に踊っている。

ウタから見て右隣にいるのは、青い髪の白衣を着た男だ。左隣には、何故かゴリラ。そして背後。そこには、一人の道化師がいた。

黒い仮面と白い衣装。その人物は紙吹雪を撒きつつ、軽快な音楽を奏でている。だが、その見た目で油断してはならない。彼は非常に凶悪な海賊だ。

海賊、〃返り血のブルチネラ〃。

犠牲者の返り血でその衣装を真っ赤に染めながら笑う道化だ。懸賞金は五億に迫る、
〃新世界〃の海賊である。

(カガシヤだけでなく、こんな奴まで)

かつては〃四皇〃とまで呼ばれた大海賊。その影響力はこれほどまでに高いのか。

道化が軽快な音楽を終えると、四人で決めポーズをとる。そして道化ことブルチネラは全力で拍手をした。

「いよつ、シキ親分今日もキレツキレですな！ いやー、日に日に動きが軽快になってお
りますぞー！」

「ジハハハハ！ 見え透いた世辞はよせ、ブルチネラ」

「いえいえ私めは道化なれば……いや本当に、シキ親分の盃を受けられてもう幸せで幸
せで！ 毎日楽しい！ 最高！」

腰に手を当て、軽快なリズムをとりながらくるくと回る道化。ウタが眉を顰める
中、青い髪の男……Drインディゴがそれに乗るようにステップを刻む。

妙な音がする靴でステップを踏むインディゴ。それを見てゴリラとブルチネラが拍
手をしているが、シキが声を張り上げた。

「テメエの足音はどうかなんねえのか！」

そして足を止めるインディゴはしかし、今度は身振り手振りで何かを訴え始めた。

「何が言いてエんだ！」

「そういえばお見せしたいものが」

「いや喋れるんかい！」

ツツコミを入れるのはブルチネラだ。その光景を見て笑うゴリラことスカールレット。

シキは彼に視線を向けると、ハツとした表情を浮かべた。

「お母さん!？」

「ゴリラだろどう見ても！」

「「はいつ!!」」

四人でポーズをとる男ども。何を見せられているのだろう、とウタはテンションをど
うすべきか真剣に迷った。

「で、見せてエもんつてのは？」

「新しい進化の形が出現しました、ご覧ください！」

インディゴの指示でその籠を運んできたのはブルチネラだ。籠のような檻の中に一
羽の……巨大なアヒル、のような鳥がいた。

(あ、かわいい)

致命的に狂った空気のせいか、ウタはそんなことを思った。その姿を見て。

「え、ギター!？」

「鳥だろどう見ても!」

「はいつ!!!」

ポーズを決める四人。あ、とウタは声を漏らした。

扉が開き、鳥が出てきたのだ。直後。

「ギャー!!!」

突如鳥から放たれた電撃が、四人を襲う。

何を見せられているのだろう、とウタが再び心を無にした瞬間。

「こん、ちくしょうが!」

シキが、その鳥をこちらへ投げ飛ばした。思わず声を上げる。

「ちよつと!」

鈍い音を響かせて床に倒れた鳥の側に、鎖を引き摺って駆け寄る。

クオツ、と小さく鳥が鳴いた。

「これが新しい進化の形だど?」

「はい……電撃技が特化したタイプでして」

「進化?」

思わず口にする。ほう、とシキがこちらに向かつて笑みを浮かべた。

「知りてエカ？ 前々から言ってるように、おれたちの仲間になるならそれも教えてやるぞ！」

「お断りよ。海賊になるくらいなら死ぬ方を選ぶ」

「ジハハハハ！ なるほど、『歌姫』の海賊嫌いは噂通り……いや、噂以上か！」

シキが笑う。その後ろではブルチネラがインディゴに問いかけていた。

「で、実際進化って？」

「この島には見たこともない進化をした動物たちがウヨウヨいたんだよ。そして、その原因をこの私が『IQ』という植物であると突き止めた」

「……『IQ』」

思わず呟く。何つ、とインディゴが声を上げた。

「どこでその名を!？」

「いやあんたが言ったんだよ！」

「「ハイツ!!」」

今回のツツコミはブルチネラだった。

「ジハハハハ！ まあいい、時間はいくらでもある。それに、いずれ理解するさ。敵ならば話も聞かぬエが、仲間なら聞いてやれることもある」

「私はあなたたちの仲間にはならない」

「気の強い女は好きだぜ！ おれの孫娘もお前のファンなんだ！」

「おれもファンだぞ！」

ブルチネラが言う。ウタはそれには何も答えなかった。

「錠については諦める。お前の力はそれだけのものがある。仲間になりたくなくなったらいつでも言えよ、ベイビーちゃん」

そして、ブルチネラが奏でる軽快な音楽と共に四人が立ち去っていく。

近くで縮こまっている鳥を撫でる。海楼石の錠のせいで満足に力が入らない。抜け出すことは自力では不可能だ。

ルフィが助けに来てくれるのは間違いない。だが、その時までには何もしないでいるわけにもいかない。

「どうしよう」

そう、眩いた時だった。

ウタの視線の先。

空間に、扉が開いた。

突然のことにフリーズするウタ。更に、その扉……そう、扉としか言いようがない物の中から、二人の男が現れる。

「声を出すな。おれたちはCP9。世界政府の命により、お前を助けにきた」

肩に鳩を乗せた男と、牛の角のような男。
世界政府の力の一端が、ウタへと手を差し伸べたのだ。

逃亡海兵ストロングワールド④

第三話 予兆

海軍本部は凄まじい喧騒に包まれていた。

「七武海」にも応援を要請しろ！ 付近の海兵で集まれる者は至急マリノフォードへ！ 揃い次第編成を組む！ 住民たちへも避難準備を急がせるんだ！」

元帥室でセンゴクが矢継ぎ早に指示を出す。CP9よりもたらされた情報にはそれほどほどの意味があった。

この二十年、姿を消していた大海賊「金獅子のシキ」。それは隠居していたわけではなく、二十年を掛けた壮大な計画を準備していたのだ。

最近の東の海で起こっている事件の首謀者も、もうここまでくれば確実だ。

（奴は東の海に執着を持っている。滅ぼすというのも決してブラフではないのだろう）

あの時代を生きた男だ。その執念は決して侮れない。

「しかし、「七武海」のうち何人が応じてくれるか」

「応じなくともいい！ 説得の時間もない！ あちら側につく最悪の事態さえなければそれでいい！」

次々と上がってくる報告を聞きながら、センゴクは指示を出し続ける。CP9の長官が恩着せがましく寄越してきた情報が事実であれば、これは海軍史上最大規模の戦争になる。

ただでさえ自分とガープの二人でマリンスフォードの半壊と引き換えに捕らえることに成功した“金獅子のシキ”がいるというのに、その下に数多の海賊団の船長が集まりつつあるという。その総数は既に五千を超えていた。

そして、その配下の海賊たちを束ねる連中も問題だ。“七武海”を模して作られたという“七宝剣”なる集団。そこには三億を超える懸賞金を懸けられた“新世界”の海賊たちが集っているのだ。

「ガープたちは上手くいっただのか……!? ベガパンクに急ぐように伝えろ！」
時間が何もかも足りない。いつだって海軍は後手だ。

だが、それでも守らなければならない。それが彼らの掲げた“正義”が故に。

「元帥！」

「今度は何だ!?!」

駆け込んでくる若い海兵の顔が青ざめていた。その表情を見てただならぬ気配を察

知する。

「『金獅子』です……!」

「何だと……!?!」

今この瞬間、海軍にとって最大の脅威たる海賊の名が告げられた。

センゴクは一度息を吐くと、その電伝虫を手を取った。海兵に下がるように言い、言葉を紡ぐ。

「……私だ」

『ジハハハハ！ 懐かしいじゃねエか！』

それは確かに、かつて聞いたあの男の声だった。センゴクは言葉を紡ぐ。

「何故この番号を」

『『情報』だセンゴク。この二十年で、時代は変わったのさ。ウタウタについてもそうだ。獣たちを強化する薬についてもそうだ。時代は常に変化する』

「時代に執着する貴様が何をいうか」

吐き捨てるように言うセンゴク。シキが笑った。

『その通りだ。だが、適応しねエわけじゃねエ』

「東の海を滅ぼすというのは、本気なのか」

口笛を吹く音が、受話器から響く。

『流石だなアセンゴク。秘密裏の計画だったはずだが』

「海軍を舐めるなよ、シキ」

『舐めちやアいねエキ。お前はあの時代を生きた海兵だ。おれはこう見えてお前とガープ、そしておつるのことは尊敬してるんだぜ?』

「貴様に尊敬されたとて、何の自慢にもならん」

また、笑い声。

「貴様が東の海を狙うというのであれば、海軍は全戦力を持って貴様を討伐する」

『やってみせるセンゴク。だが、全戦力か。果たして可能かな?』

「何?」

センゴクが眉を顰める。それは勿論、海兵全員を招集することはできない。だが、一定以上の海兵たちを集めることはできる。それを相手取る算段があるとしてもいいのか。いくらかつて四皇と呼ばれた男といえど、海軍と正面切って戦うことなど。

しかし、そこに一報が入る。

「報告します!」

センゴクの勤が告げている。

これは、悪い知らせだ。

「『百獣のカイドウ』が、本隊を率いて拠点を発つたとのことです!」

後半の海、*“新世界”*を我が物顔で闊歩する*“四皇”*が一角*“百獣のカイドウ”*。地上最強生物とまで呼ばれるあの男が動いたというのか。

「シキ、貴様まさか」

『お前の表情が見れないのが残念だ、センゴク。これもまた*“情報”*だ。あの小僧とは昔に縁があつてなア。話を持ちかけたらすぐに動き出した』

「世界大戦でもするつもりか!？」

『そのつもりだ』

シキが笑う。

ただただ、伝説の海賊が笑う。

『おれはこの海の支配者になる。それに抗おうつてんなら、いくらでも相手をしてやるぜっ。』

そして、電話が切れる。センゴクはしばらく考え込んだ後、海兵を呼んだ。

「三大将をここへ。兵の招集については、できるだけ急ぐよう改めて伝えてくれ」

「はっ!」

敬礼を返してきた海兵の表情に違和感を感じ取る。センゴクは彼を呼び止めると、言葉を紡いだ。

「何かあるのか?」

「は、いえその……招集は、本当にマリソフオードでよろしいのですか？　それも、一週間という期限内で」

「ああ、構わん。ここに集まればいい」

先程までシキと繋がっていた電伝虫を見つめながら、センゴクは言う。

「奴の言葉を借りるなら、『情報』だ」



最初、ルフィはその光景が信じられなかった。

外部へと中々繋がらない電伝虫。繋がっても不安定ですぐに切れてしまう。

どうにかウタが連れ去られたこととこちらは僅かしかいないことは伝えたが、それ以降の連絡も向こうからの指示がない。

焦りだけが募る中。突然、それが現れた。

空間に開いたドア。そうとしか表現しようがないそこから、ウタが現れたのだ。

「あ、ルフィ——」

「ウタ!!」

彼女がこちらに気付いた瞬間、ルフィは彼女に向かつて一目散に抱き着いていた。わあ、とオリンが目を輝かせていたが、ルフィは気付かない。

ちなみに空中のドアからは更に二人の男と鳥が現れているのだが、ルフィの視界には入っていない。

「ちよつ、ルフィ。苦しい」

「す、すまねえ。怪我とかないか? 何もされなかつたか?」

「大丈夫。勧誘はされたけど、断ってきたし。それよりルフィ、私がいなくて寂しかったでしょ?」

にひひ、と笑うウタ。ルフィはああ、と即答した。

ウタが固まる。

「無事でよかつた」

そして、脱力したように座り込むルフィ。ウタはえーつと、と視線を彷徨わせる。視線の合ったオリンは微笑みながら頷いた。

そして、ルフィはそこでようやく後ろの二人と鳥に気付く。

「うおっ!! いつの間に!」

「最初からいたが。……歌姫」しか目に入っていなかつたようだな」

呆れた、という様子で言うのは牛の角のような髪型をした男、ブルーノだ。彼ともう一人、鳩を肩に乗せている男はジツ、とルフィを見つめている。

ルフィはその男に見覚えがある気がした。誰だっけ、と思ったところで思い出す。

まだ将校ですらなく、正義のコートを着ることさえできなかった時代。教えてもらったばかりの「六式」の習得に苦労していた時に、その男と出会ったのだ。

「あつ、お前まさか!」

「……なんだ、覚えていたのか」

あの時、気まぐれと言いつつ「六式」について教えてくれた男。彼のおかげでルフィは周囲も驚愕する速度で「六式」を習得するに至ったのだ。

「お礼言おうと思つて随分探したのにいなくてよ! あの時はありがとう!」

「ただの気まぐれだ」

鳩を肩に乗せた男——ロブ・ルッチが肩を竦める。あのね、とウタがルフィの肩を叩いた。

「あの二人が助けてくれたの。ドアドアの実の能力なんだつて」

「「エアドア」という。体力の消費が激しいため多用はできませんが、我々のような諜報員には最適だ」

「本来の任務を中断し、ここでシキについて調査を行っていたら「歌姫」を救出しろと

いう別命が下された。その命令に従ったに過ぎん」

二人は言う。任務だから当然なのだ。

だが、ルフィは二人に対して頭を下げた。

「ありがとう！」

それは純粹な礼だった。何の含みもない。

海軍とCPは伝統的に縄張り争いというか、仲が悪い傾向にある。そのため協力関係を結ぶことが難しいのだが、ルフィにそんなことは関係ない。

ウタを救い出してくれた。ただそれだけで、彼の中でこの二人はもう「良い奴」なのだから。

「まあ、礼を言われて嫌な気分にはならんな」

そんな風に僅かに微笑むブルーノと、帽子を被り直すルッチ。

ルフィの中で張り詰めていた糸が解れていく感覚がある。息を吐く彼に、ウタが言葉を紡いだ。

「それでね、ルフィ。シキの目的についての話があるの」

そして、彼らは聞く。

伝説の大海賊、『金獅子のシキ』の目的を。



大海賊「金色のシキ」の旗艦にある司令室には様々な計器がある。彼の能力の弱点の一つであるサイクロンを避けるためであり、更に言えば「情報」を彼がとても大切にしているからだ。

かつて大嵐によつて後の「海賊王」ゴールド・ロジャーを逃し、己自身も大怪我を負うことになった。その時に痛感したのが「情報」の重要性だ。

気象だけではない。ありとあらゆる情報を集め、彼はこの島を支配し、計画を積み重ねてきた。

そして今日も、新たな情報がここに来る。

「あの、シキ様」

「ん、どうしたベイビーちゃん。いつもみたいにお爺さま、つて呼んでくれて良いんだぜ？」

シキと同じ金髪のロングヘアの女性に対し、シキが笑いかける。いえ、と女性——イ
ルは首を横に振った。

「仕事中ですし、その……ラウンド様もおられるので」

腰に二本の刀を差したその女性が、チラリと部屋の奥を見る。そこには一人の巨漢の男性がいた。

その男の名は、ラウンド。『大地の王』と異名をとる海賊であり、懸賞金は四億を超える怪物だ。シキが集めた海賊の中では特に寡黙である代わりに忠実で、シキの孫娘を気に入ったのか随分気にかけている。

「私のことは気にしないで欲しい」

そう言って黙り込んでしまい、イルが焦った表情を見せる。シキはそんな孫娘に対し、いいじゃねエか、と言葉を紡いだ。

「本人が気にするなって言ってるんだから、気にするなよベイビーちゃん。それで、どうしたんだ？」

「は、はい。その、電伝虫の発信を探知しました。北東の村からようです」

「ほう、相手は？」

「海軍本部です」

言い切るイル。なるほど、とシキは笑った。

どうやったのか、ウタが逃げ出したのはすぐに彼にも知らされた。だが、ここは遙か上空の島だ。そのうち見つかるとして尻尾を出すのを待っていたのだ。

そして案の定、出てきたということだ。

「よし、じゃあ行ってくる」

「よろしいのですか？ わざわざその、お爺さまが行かなくても」

「いいさ。計画開始までのちよつとした余興だ」

笑うシキ。その彼へ部屋の奥から歩み寄る影がある。

「シキ殿。例のウタウタの使い手のところへ参られるのか？」

「おお、アルキデイクスカ。お前も来るか？」

「計画まで鍛錬以外にすることがなく。是非に」

アルキデイクス——『海災』アルキデイクス。大王イカの人魚であり、世界政府の分類状は海賊となっているがどちらかというとならず者と呼ぶのが正しい人物だ。三億近い懸賞金も懸けられており、政府からしても危険人物と認知される男である。

人魚差別の激しいこの世界で生きてきただけあってそれなりの体験をしているようだが、本人曰く全て腕つぶしで黙らせてきたため思うところはないらしい。シキのところに来たのも、戦場を用意してくれるからだ。

「よし、じゃあ行くか。イル、ここは任せる」

「はい、行つてらっしゃいませ」

長いスカートをつまむように両手で持ち、一礼するイル。かつての経験が抜けきらな

い彼女の癖だ。

部屋を出ようとするシキ。彼はそこであることに気付く。

「おい、その電子音は何だ？」

モニターの一つから電子音が響いていたのだ。その近くにあったスタツフが、すみません、と頭を下げる。

「どうも『自走式映像伝電虫』の発信を誤認しているようでして。成長し、電波が少し変わると登録外のものとして認識してしまうんです。通話もないですし」

島の情報を外へ漏らさぬようにするため、自分たち以外の電伝虫が通話をした時は通知が入るようになっていた。だがこの島の生物は異常な進化を遂げており、その進化も終わったわけではなく未だに日々起こっている。そのため、成長した『自走式映像伝電虫』の電波が未確認のものとして扱われることは稀にあることだった。

「機械つてのは、融通が利かなくていけねエな」

便利であるが、どうにも杓子定規だ。シキは肩を竦める。時代の変化には対応してきつつもりだが、どうにも疲れてしまう。

とはいえ、利用しなければならぬ。『情報』というのは、何よりも重要な概念なのだから。



その日は、朝から村が騒がしかった。

いつも思い詰めた表情をし、俯くように生きていた住人たち。彼らはやってきた一人の男性のところに集まっている。

「おばあちゃん、お母さん！ 大ニユースだよ！ シュウちゃんのお父さんが帰ってきたの！ 他のみんなもすぐ帰ってくるって！」

「本当かい!?!」

喜んだ様子で室内に飛び込んできたシャオの言葉を聞き、母親が驚愕の表情を浮かべる。

「ほんとだよ！ お父さんとお姉ちゃんにもまた会える！ シキがここを出ていくんだって！ 動物たちも連れて “計略の海” へ！ “東の海” へ！」

その名を聞き、部屋の隅で仮眠を取っていたウタは眉を顰めた。

『そうか、“東の海” はベイビーちゃんの故郷か。まあ、おれの目的はすぐにわかるさ』

あの地下牢で、何度も聞かされた言葉が脳裏に蘇る。

『何度でも言うが、ベイビーちゃん。必ず、自らおれの仲間になりたいと懇願することになるぞ。仲間なら聞いてやれることつてのもあるもんだ』

シキは心からこちらを屈服させ、支配しようとしていた。そういう男なのだろう。そんな男が一体何をするつもりか。

彼の計画は「東の海」の壊滅、そして支配だ。更にその事実を持つて世界政府を降伏させると語っていた。C P 9の二人が調査した結果も同じだったらしい。

「……東の海……」

それはウタの故郷の名だ。正確に言えば彼女の生まれた場所ではない。彼女はシャクスの船で育てられた。

だが、あの日。シャクスたちに置き去りにされたあの日から、彼女にとっての居場所はある少年の隣であり。故郷はフーシャ村になった。

この島の凶悪な動物たち。それを利用し、シキはとてつもない計画を実行しようとしている。本部には連絡が取れたが、間に合うかどうかはわからない。

「ルフィ」

待っている時間をもどかしい。ウタは立ち上がると、外で休んでいるはずの彼の下へと向かおうと家を出る。

だが、家の前で休んでいるはずの彼と他の者たちは誰もいなかった。

周囲を見回しながら、ウタは歩き出す。そして、とある家の影から出た瞬間。

「ウター！ 来るんじゃないか！」

ルフィの声が響いた。そこで気付く。ルフィを中心に、オリンたち自分の部下たち。そしてCP9の二人。その全員が完全に臨戦体勢に入っている。

視線の先にいるのは。

「見つけたぜ、ベイビーちゃん」

この島の支配者、*“金獅子のシキ”* だった。



とある海の海上にその軍艦はあった。特徴的な艦首をしたその軍艦は、海賊たちが最も恐れる軍艦の一つだ。

海軍が誇る生きる伝説、*“伝説の海兵”* を謳われるガープの船。

その甲板に複数の海兵が集まっていた。彼らは皆一様に空を見上げている。そこには複数の島が浮かんでいた。

「これを全部、一人の能力者がやってるってのか……？」

呟くように言うのはスモーカーだ。今回の作戦の話聞き、センゴクに部下のたしぎと共に直訴してまで参加を願った人物である。

「冗談で『伝説』と呼ばれとるわけじゃないからのう。あの男を捕らえたのはわしとセンゴクじゃが、それはあの男が正面切つてマリソフオードに攻め込んできたからじゃ。本気で逃げられれば、追撃は難しい」

「あそこまでは、流石に我々の手は届きませんね」

眼鏡の位置を直しながら、驚愕の混じった声で言うのはたしぎだ。

「そうじゃな。かつての時代であれば手を届かせる術がなかった。じゃが、時代は進んだ。少々荒技であるが、海軍の手は奴のところへ届く」

「少々というには、あまりにも突拍子がないというか」

近くにあるとある物体を見て言うのはモモンガである。彼もまた志願した身であるが、それでも目に入る物体については思うところがある。

そこにあるのは、ベガパンクが今回の作戦のために急遽作成した新兵器だ。流線形の形をしたそれは細長い形状をしており、天に向かって屹立している。その兵器の名をベガパンクは『試作七号強襲型ロケット』と名付けた。

「あの、ガープ中将！ やはり自分も！」

海兵たちの中から一人、声を上げた者がいる。コビーだ。かつてルフィに救われた過去がある彼は、今回の作戦についても参加したいと希望していた。だが、それをガープが押し留めていたのだ。

「何度も言うがな、コビー。これは先遣隊じゃ。敵の本拠地に少数戦力で乗り込む以上、生存率は高くない。本番はこの後でもある。お前はそこで戦うんじゃない」

そう言われ、引き下がるコビー。悔しそうだが彼は聡明だ。自分の実力が足りないことをよくわかっている。

「そういう意味では、お前らについても残れと言いたいところじゃが」

今回の作戦に志願した三人に対し、どこか呆れた調子でガープは言う。モモンガが頷いた。

「私のはあの二人の教育係でしたので。情もあります」

モモンガはその厳格な性格もあって当初からかなり奔放というか自由であった二人の指導係に抜擢された過去がある。……押し付けられたとか言っただけじゃない。

ただ、彼の軍艦に乗ったり指導を受けた経験はかなり二人にとっては重要なものであったようで、ウタは勿論のこと、あのルフィでさえも当初に比べれば多少は海兵としての在り方を考えるようになったのだ。

ちなみにその事実が偉業として一部では語り継がれている。モモンガが今でもたま

に海兵の指導を兼ねた兵の受け入れをしているが、それはあの二人の指導の実績からであつたりする。センゴクたち上層部からの厚い信頼だ。

「おれはあいつらに借りがある。あのアラバスタで、あいつらがいたからこそクロコダイルの逮捕に辿り着けた。これはいい機会だ」

「はい。私も同じ気持ちです」

アラバスタの事件において、二人と並ぶ英雄と評されたスモーカー准将とたしぎ少尉だ。海軍はクロコダイルの不正、その証拠を掴んだスモーカーとあの反乱の場において戦い、市民たちを救ったたしぎを英雄として認知している。だが、この二人にとっては思うところがあるのだろう。

「全く、海兵が情に惑わされおつて」

呆れたように言うガープ。その彼にモモンガが苦笑しながら言った。

「あなたもでしょう、ガープ中将」

「わしはいいんじゃない。あやつらは大事な大事な孫であるしの。ひ孫の顔も見せてもらわにゃならん」

後半は大分気が早いとも思うが、誰もツツコミを入れなかった。正直、時間の問題だという共通認識さえある。

しかし、とガープは上空の島を見つめながら言う。

「まあ、わしとて普段なら手出しはせん。それはあの二人への侮辱であるからの。だが……今回は違う。あの男との戦争になるならば、それはもう海兵個人でどうにかできる次元を超えておる」

そろそろ行こうか、とガープは告げた。

「お前たちは予定通り島の監視を続け、本部に連絡を密に。わしらの方は、状況次第で連絡を入れる」

そして、ロケットへと乗り込んでいく四人。最後にガープが入ろうとしたところで、残る海兵たちが一斉に敬礼をした。

「「武運を!!」」

「ああ、互いになー」

海軍本部。海の守護者たち。

その戦いが、始まるのだ。

逃亡海兵ストロングワールド⑤

第四話 別離

現れた大海賊は一人の人魚の男を連れていた。その男には、何人かが覚えがある。

「『海災』 アルキデイクスか」

「ふむ、貴殿らは私を知っているのか。光栄だ」

「人魚のならず者ともなれば、知らない者はいないだろう」

そう言葉を吐くのはブルーノだ。ははは、とアルキデイクスが笑った。

「ならず者か。それも致し方なからう。この海において、世界において。我ら人魚が何者かに『成る』ことなど不可能だ。なあ、世界政府？」

「だからシキについたのか」

ブルーノは問う。この世界において、人魚や魚人に対する差別は根深い上に過酷だ。その恨みのためにシキの下に降ったということか。

「いいや？」

だが、それをその人魚は否定する。

「私は降りかかる火の粉を払い続けたただけだ。オトヒメ王妃が何かを喚き、ジンベエが『七武海』に入って橋渡しをしようと考えていようが関係ない。私が振り払った火の粉の中にお前たちがいて、私は戦える場が欲しいから今ここにいる」

なるほど、ならず者。

この男の論理はあまりにもシンプルで、そして世界とは折り合えない。

だから政府は、彼を賞金首とした。

「だがまあ、この場の主役は私ではない。すまぬシキ殿。私を知っていると聞いて少し嬉しくなって話し込んでしまった」

「ジハハハハ！ いいさ、面白エ話が聞いた。それに、アルキデイクス。おめエはおれが戦場を用意している限りこちら側だってことだろう？」

「無論だ。私とて眠らねばならず、飯を食わねばならん。その両方を満たした上で戦場があるというのだから、私にとってシキ殿の旗下は天国に近い」

無茶苦茶な論理である。だが、無法者とはこういうものだ。

己の我をどこまでも貫き通し、それによって生じる影響については一切省みることがしない。そして己にとつて最も都合のいい場所に身を置く。

どうしようもない男だ、とブルーノが呟いた。だが、その言葉はこの場の全員の意見

でもある。

「さて、面白エ話も聞けたところで本題に入ろうじゃねエか。なあ、ベイビーちゃん」
シキの視線がウタを向く。それに対し、ウタが口を開いた瞬間。

「おっと、それを使われちゃたまらねエな」

シキとアルキデイクスが、イヤーマフラーを取り出して装着した。海楼石を仕込んだそれは、ウタウタの力を無効化する。

海軍内で、彼女と作戦を共にする海兵が標準装備とする道具だ。何故それを、とウタは驚愕の表情で二人を見つめる。

「『情報』だベイビーちゃん。今の世は時代が変わった。海軍ってのは因果なもんだ。どうしたって人目に触れ続ける。そして、お前たちは一枚岩じゃあねエ。こんな時代だ、金で転ぶ奴なんざいくらでもいる」

お前たちはよく知ってるだろう、と揶揄するようにシキは言う。ルフィも、ウタも。英雄と呼ばれる影でそういう不正をいくつも暴いてきた。故に、海軍の中の全てが正義であると思っているわけではない。

だが、状況は悪くなった。ウタウタの実は届きさえすればどんな格上、それこそ「四皇」さえも喰らうことも可能な力だ。しかし、通じなくなつた瞬間にウタは一海兵となつてしまう。

「さあ、戻って来いベイビーちゃん。状況がわからねエほど頭が悪いようには見えねエが?」

「おい」

ずっと黙っていたルフィが、声を上げる。

「ウタに手を出して、無事に済むと思うなよ」

「ジハハハハ! それほどの利用価値のある女、手を出すと言う方が無理だ! 守りてエンならしつかり守れ!」

まあ、とシキは嘲笑うような表情でルフィを見る。

「それができなかつた奴が何を吠えようが、負け犬の遠吠えだ」

それが海戦の合図になった。一気にフルスロットル、ギアを上げたルフィは体から溢れる蒸気を身に纏いながら、シキへと突っ込んでいく。

「手は?」

「おめエには悪いが、出す必要はねエ」

アルキデイクスとの短い会話。ルフィの放った拳は、直前までシキのいた宙を叩く。隣を通った拳が放つ空気に、ほう、とアルキデイクスが楽しそうに笑った。

「鬱陶しいガキだ。力の差は教えたはずだが」

「嵐脚・凱鳥」

空へと飛んでルフィの拳を避けたシキ。そこへ、巨大な鳥の形をした斬撃が迫る。軍艦の分厚い鉄にさえ切れ込みを入れるその斬撃をしかし、シキはその右脚の剣で弾いた。

放つたのはルツチだ。チツ、と彼は小さく舌打ちを零す。

「ほう。中々」

「お前からウタを頼む！　　『ゴムゴムの』！」

ルフィが自身の部下へ指示を飛ばしながら両腕を伸ばし、シキの服を掴む。

「あん？」

「『丸鋸』！」

自身の体を回転させ、シキへ体当たり。だが、直撃はシキの腕によるガードで防がれた。

「前よりは気合が入ってるようだな、ガードの孫。だが、まだ足りん」

「くつ、うおつ！」

ルフィの肩を掴むと、力任せにシキは地面へ彼を叩きつけるように投げ飛ばした。轟音が響き、小さなクレーターができる。

くそつ、と眩きながらルフィが立ち上がる。シキの視界に、オリンたち海兵がウタを逃そうとする光景が目に入る。

「おいおい、そりゃ興醒めだろう」

右手を中空へ出し、何かを握ねるように動かす。その瞬間、彼らの行く手に地面から迫り上がる巨大な壁が立ち上がった。

彼の持つ悪魔の实の能力だ。

「こつちへ！」

オリンが指示を出し、別のルートを行こうとする。その姿を見て、ブルーノが動いた。

「おれがフォローする」

「ああ、任せる」

CP9の二人のやり取り。ルッチはルフィへと声をかけた。

「おれも協力する。『歌姫』の確保が最優先任務だ」

「気が合うな！」

そんな二人を見て、ふむ、とシキは頷く。そして、ようやく合点がいったというように手を叩いた。

「おめエ、ロブ・ルッチだな。なるほど、そりゃあベイビーちゃんを助け出せたのもわかるぜ。政府も大した男を送り込んできたもんだ。どうやらおれを相当恐れているらしい」

ルッチは応えず、上着を脱いだ。

二人の男がシキへと迫る。

「飛ぶ指銃、〃撥〃！」

ルツチから放たれる飛ぶ斬撃。それをルツチはシキに迫りながら連発する。

それをシキは両足の剣を蹴り技の要領で回し、防ぎ切る。そこへ、彼の背後からル
ファイが迫った。

「〃JET銃〃!!」

「おうっ！」

背中に拳が入る。だが、大きなダメージはない。感触でわかる。

「即席にしちやあいい連携だ」

シキはルツチの追撃を更に高く飛ぶことで避け、二人を見下す。

「〃新時代の英雄〃と〃殺戮兵器〃とは豪華なボディガードだ。まあ、ベイビーちゃんの利用価値を考えれば当然とも言えるが」

「ウタは道具じゃねエ！」

「そうだ、道具じゃねエ。おれの大事な仲間になる女だ」

笑うシキ。だが不意に、おいおい、とため息を零した。

「興が削がれるじゃねエか」

その言葉に、二人もシキの視線の先へと視線を送る。そして、驚愕の表情を浮かべた。

「牛のおっさん！ お前らー！」

その視線の先では、ウタがアルキディクスに取り押さえられるように地面に押し付けられていた。その周囲にはオリンたちルフィの部下とブルーノが倒れている。

「すまぬシキ殿。出過ぎた真似であったか？」

「いや、目的を考えれば熱くなつたおれが悪い。礼を言うぜ、アルキディクス。……ただまあ、興が削がれたのも事実だ。ここでお開きとしよう」

はあ、とため息を吐くシキ。その彼に、ルフィが吠える。

「お前が勝手に決めるんじゃないやねえ！」

「決めれるのさ。いつだって決定権つてのは強者が持つ。——『獅子威し』」

シキが右手で、何かを掴む動作をする。

同時、地面が揺れた。ルフィとルッチ、二人の周囲の地面が揺れている。

「なんだ」

ルフィが言うと同時に、巨大な土砂の壁が二人を取り囲むように地面から噴き出した。

「まさか、この質量を」

流石のルッチも表情を険しくする。だが、すでに二人の周囲には脱出不可能な規模の土の壁が雪崩の如く押し寄せてきている。

徐々にその土の雪崩が形を変え、何かを形作り始める。それは、無数の獅子の頭を

持っていた。

「『地巻き』!!」

そして、二人を大質量の土砂が飲み込んだ。

「ルファイ!!」

ウタの悲痛な叫びが響く。シキの笑い声が響いた。

「ジハハハハ！ しばらく土の中で眠ってもらうぜ！」

巨大な、渦を巻いた山。二人の姿は見えない。

そんな、と眩くウタの近くにシキが降りてくる。

「勘違い野郎には困ったもんだ。さて、ベイビーちゃん。自分の置かれている状況を理

解したか？」

「……………ッ」

取り押さえられた状態のウタがシキを睨む。だが、その瞳の力は以前よりは弱まっている。

「いい目だ。おれは気の強エ女は好きだぜベイビーちゃん」

直後。

「おおおおッ！」

土砂の山を突き破り、ルファイが飛び出してきた。見れば、その奥に小さな空間があり、そこにルッチが座り込んでいる。

おそらく、二人であの質量の圧の中で安全地帯を作ったのだ。大したもんだとシキが思うが、しかし。

「シキイイイイツ!!」

いい加減鬱陶しいと、彼は断じる。

鈍い、肉を貫く音が響いた。

「しつけエ男は嫌われるぜ、ガープの孫」

シキの右足の剣が、彼を正面から貫いていた。

「ルファイ!!!」

ウタが彼の名を呼ぶ。だが彼に、それに応じる力はない。

彼が背負った「正義」をも貫く刃。シキは無造作に足を振るい、彼を地面へと投げ捨てた。

「なア、ガープの孫。この世にはどうにもならねエことなんざいくらでもある。呪うな

ら、自分の無力を呪うんだな」

うつ伏せに倒れるルフィの体から、血が溢れる。身を振るウタはしかし、アルキデイクスの手から逃れられない。

「離してやれ」

その彼に、シキがそう言葉を紡いだ。アルキデイクスは逡巡するが、ウタから手を離す。

「ルフィ!! しつかりして、血を止めるから!!」

彼の体を抱き起こし、彼女は自身が羽織っている正義のコートを体に巻き付けるとにかく血を止めなければ。

自身も血に塗れながら、ウタはルフィの傷を塞ごうと手を尽くそうとする。布を押し当て、少しでもと。

そんな、彼女の手を。

震える手で、彼は掴む。

「……………ウタ、は……………渡さ……………ねえ……………」

「……………ルフィ……………」

もう、意識もほとんどないだろうに。

彼は、確かにそう言った。

泣くな、とウタは己に命じた。泣いちやダメだ。ここで泣いたら、誰も。誰も助けられない。

「執念だけは大了もんだ。そんなに死にてエンなら」

「待って！」

こちらへ歩み寄ろうとしたシキを、ウタが止める。

「待って、ください」

ルフィを抱く手に力が籠る。

涙が溢れるのを、必死で堪えた。

「私が仲間になれば、これ以上誰も傷つけませんか？」

「そうだな、そいつらは見逃してやる。だがまあ、誰もつてのは無理だ。ベイビーちゃんも知ってるだろう？ おれは東の海を滅ぼす。それはもう、決定事項だ」

ギリ、とウタは奥歯を強く噛み締めた。

様々な思い出が、彼女の中に蘇る。死にかけてことは何度もある。辛いことも、苦しむことも、泣いたことだって数えきれない。

「ただ、いつだって。」

「この人が。」

この幼馴染が、側にいてくれた。

「東の海に、手を出さないでください」

「それをおれに頼むなら、その前にするべきことがある。前にも言っただろう？ 敵なら話を聞くことさえしねエが、仲間なら聞いてやれることもあると」

その言葉に、ウタは一度目を閉じた。何かを堪えるように、俯いて。

そして、自身の手を握ってくれた彼の手を、ゆつくりと解いていく。

ごめんね、と。

そんな、言葉と共に。

「私を」

ルフィの体を地面に優しく下ろし。

ウタが、シキへと頭を下げる。

「仲間に、入れてください」

それは、屈辱だった。

力が足りぬ己のせいで、大切な人たちが傷ついたという事実。

憎悪さえ抱く海賊に、頭を下げなければならぬ事実。

その全てが、ウタの心を砕いていく。

「ジハハハハ！ ようやくその気になったか！」

大いに笑うシキ。そのまま彼は、ウタへと音貝を投げ渡した。

「おれも薄情じゃねエ。海賊にも通すべき筋つてもんがある。別れの言葉を残してやれ」

それを両手に持ち、ウタは。

静かに、言葉を紡いだ。

それは決して長い言葉ではない。だが、全てを語り終えたシキが笑う。

「いい挨拶だ。……最後の慈悲だ。ガープの孫にも挨拶してやれ、赤髪の娘」

この男はどこまで知っているのか、とウタは思った。だが、その前に。

ウタは倒れ伏し、意識のないルフィの側に座り込む。

「ねえ、ルフィ。今まで、本当にありがとう」

泣くな。泣くんじやない。

「私、あなたのが好きだった。……大好き、だった」

彼を助けるためには、みんなを守るためには、こうするしかないのだ。

だけど、もし。

もしも、許されるなら。

「さよなら」

音貝を、彼の側に置く。そして、そんな彼の耳元で。

「

小さく、彼以外の誰にも聞こえないように呟いた。

そして、倒れる彼の麦わら帽子を手に取り、被る。

「行きましょう」

「ジハハハハ、麦わら帽子を持っていくのか。まあいい」

楽しそうに笑うシキから視線を逸らすウタ。彼女は、彼女を守ろうと倒れた者たちを振り返り。

「ごめんなさい」

小さく、呟いた。

逃亡海兵ストロングワールド⑥

第五話 宣言

海の上をメルヴィユが往く。

大海賊「金獅子」の野望を乗せ、船と呼ぶにはあまりにも巨大なそれは往くのだ。

「お爺さま。海賊船の船長たちが揃いました」

司令室に座るシキへ彼の孫娘であるイルが告げる。そうか、とシキは笑みを浮かべた。

「では予定通りのデモンストレーションだ。イル、「歌姫」にも見せておいてやれ。おれの仲間になるんだ。秘密はねエほうがいい」

「わかりました」

スカートの裾を掴み、一礼。その女性が映像電伝虫を手に部屋を出て行く。

その背を見送ると、シキは近くにいるDrインディゴともう一人、白衣を着た壮年の男へと声をかけた。

「計画を開始しろ」

「了解です！」

「フランケン部隊を動かせばいいんだな、旦那」

頷くインデイゴ。そしてもう一人——「墓荒らしのレムナント」が確認するようにシキに問う。元政府の科学者であったがそのあまりにも倫理観が欠落した研究故に追放され、シキに拾われた人物だ。

彼の言う『フランケン』とは死体を改造し、機械化して作られたサイボーグ兵器だ。そこに意思はなく、彼の命令通りに動く文字通りの操り人形である。

政府に隠れて行った数々の墓荒らし、他国の研究の情報を得るための情報漏洩、挙句自身の研究のために最高機密たるペガパンクの研究データまで持ち出そうとしたため政府に追われることとなり、賞金首となったレムナント。

抱える情報故に懸賞金は高いが、個人としての戦闘能力は然程ではない。ただ、インデイゴと共にこの島の生物の研究を行ったり、文字通り使い捨ての便利なフランケン部隊などシキとしては非常に重宝する人物である。

「ああ。おめエのフランケン部隊ならダフトグリーンの影響を受けねエ。あの樹の毒は厄介だからな」

大量に吸い込むと体の一部に痣が現れ、そこが徐々に硬直化していきやがては死に至

る病……『ダフト』。元々が死体であり、そもそもサイボーグであるフランケン部隊であれば呼吸をしないため影響が少ない。たとえ吸い込んだとしても所詮は死体だ。使い捨てにできる。

「あの樹の対策は、結局対処療法だけですからねえ」

「ガスマスクを着けるか、それでもかかっちゃまったら“IQ”から作った薬で治すか。強力過ぎるつてのも厄介だよなあ。ガスマスクも結局、絶対ではないし」

肩を竦める科学者二人。科学者であるからこそ、この二人はあの樹の持つ力の危険性とそれに対処する難しさを知っている。

だが、シキはそれを笑って流す。

「構わねエき。その強さのおかげでここにおれたたちが作った怪物共も近付かねエんだ。それで十分と言っても良い。あの樹の毒で毒ガスを作るより、怪物共を放つ方が万倍効果がある。それは東の海で実証済みだ」

ニュースにもなっている東の海の街の壊滅事件。あれは実験であると共にデモンス・トレーションだ。事実、アレを見た海賊たちが彼の下に集まっている。

「毒といやア、シーザーの野郎は元気かねえ」

準備をしながら、レムナントがぼやくように言う。シーザー、とインディゴが問うとレムナントが頷いた。

「まず、おれは自分をクズだと自覚してるんだが」

「まあクズだな」

「正面から言われると傷つく……」

インデイゴに言われ、シクシクと泣き真似をするレムナント。彼はすぐに立ち直ると、まあ、と言葉を紡いだ。

「元はおれと同じで政府の研究者だったんだよ。あいつは自分をクズだと自覚してねえ上におれ以上のクズだった」

「それはもう人としてどうなんだ？ お前以上となると相当だろう」

シキに言われ、傷ついたフリをするレムナント。話が進まねえ、とシキに言われた彼は言葉が続けた。

「クズだが、無茶苦茶優秀だった。特に毒関連についてはもう天才だ。あいつならダフトグリーンの対策も考えれたかもな」

「へえ……」

「インデイゴの旦那も凄いやと思うぜ？ “IQ”の研究と、“S. I. Q.”の開発はあんたじゃなきゃ無理だ。ただ毒に関しては、あいつの方が上だと思う」

どうしてんのかねえ、とぼやくレムナント。まあどうせクズなりにやってんだらうけど、と彼が言うとしキが笑った。

「ジハハハハ！　そこまで言うクズつてのも興味がある。探してみるか？　そいつがおれの下に付くような野郎なら、勧誘するが」

「わかりやすいクズだから、金さえ渡せば旦那の下にはつくと思うぜ」

「そいつはいいな。ついでに探そう。……まあ、それよりも先にこれだ。おい、船長共への映像中継準備は？」

「終わっております！　いつでもいけます！」

よし、とシキは頷く。

「結束を強めるためだ。派手に行こうじゃねエか！」



シキの旗下に入りたいとしてこの地に来た海賊たちは、雪の降る外に集められていた。全員がドレスコードを守るとしてスーツを纏っており、待っている。

五千を超え、下手をすれば方に届くのではないかという海賊たち。その彼らは、巨大な電伝虫が画面に映そうとする映像を待っている。

「寒い中ご苦労だ海賊共！ お前らがシキ親分の盃を受けに来たのはよくわかつてる！」

その巨大な電伝虫の傍らで、一人の海賊が声を上げていた。その男の姿に、周囲の海賊たちが声を擧げて言葉を交わす。

「おい、あいつ…… 蹴撃のドリーマー」か？」

「おいおい、『新世界』の大物じゃねえか」

「あんな奴までシキは傘下にしてんのか」

懸賞金も三億を超える男、ドリーマー。彼もまたシキが『七武海』を模して組織した『七宝剣』の一角である。

既に『七宝剣』はシキと盃を交わしており、今いる海賊たちとは別格の扱いを受けていた。とはいえ、彼らの悪名と実力は同業者である海賊こそ一番よく知っている。故に、むしろ彼らが味方であるということは歓迎する要素しかない。

「シキ親分の盃を受けることについて、条件は一つ。『裏切らない』、ただこれだけだ。裏切りは即座に粛清される」

だが、とドリーマーは言葉を続ける。

「親分は慈悲深く、誠実な方だ。お前らは東の海を滅ぼすという話を既に聞いているだろうが、こいつも思っているはずだ。『その方法は？』とな」

その言葉には、海賊たちも内心で同意した。東の海の街が壊滅するニュースは知っているが、具体的な話を知らない。

「おれにしてみれば、盃の後でいいと思うんだがな。ただ親分はお前たちに証拠を見せ、その後に受けるかどうかを決めればいいと仰った」

そこで、映像が繋がる。丁度良い、とドリーマーが笑った。

「見るがいい海賊共！　これが親分が語る東の海壊滅の根拠だ！」

そこに映されていたのは、狂乱だった。

この島に住む異常な生物たちの存在を、海賊たちは既に知っている。だが、彼らはあくまで遠目に見ただけだ。シキの居城が彼らの嫌うダフトグリーンに囲まれているため、怪物たちと彼らが直に触れ合うことはない。

故に、それが初めてだった。怪物たちの脅威を直に見るのは。

この島の原住民たちが住む村。それを、多くの怪物たちが蹂躪していく。

「凄え！　怪物共が村を呑み込んでるぞ！」

「流石親分！　やる事が違うぜ！」

「これが東の海の街を壊滅させた原因か！」

逃げ惑う原住民たちと、村を飲み込む勢いで破壊する怪物たちを見て海賊たちが大興奮の声を上げる。

だが、しばらくその光景が映し出されていたのだが、突如その映像が途切れた。

「あん？」

ドリーマーが眉を顰める。そして、近くの人間に声をかけた。

「おい、映像が切れたぞ。どういうことだ？」

「お、おそらく、映像を送っている『自走式映像電伝虫』が怪物に襲われたものと……」
ドリーマーに凄まれた男が怯えながら言う。その言葉を聞き、ぷつ、とドリーマーは噴き出した。

「あつはつはつは！ 聞いたかお前ら！ 怪物共、勢い余つて電伝虫を殺しちゃったらしい！ とんだハプニングだ！」

ドリーマーのその言葉を受け、海賊たちからも笑い声上がる。さて、とドリーマーが両手を広げて言う。

「最後はハプニングだが、それはしようがねえ。そして改めて聞くぞ、海賊共。親分の旗下に入るか？」

大地を揺らすような大歓声が上がった。誰もが興奮した様子で叫んでいる。

結構、とドリーマーが頷く。

「準備が整い次第、親分はお前らと呼ぶと言ってる。船長共は盃を受ける準備をし、その部下共は近くの部屋で待機してもらおう。いいな？」

「おおつ、という応じる声上がる。ドリーマーは頷くと、その場から離れて歩き出す。ただ、彼は誰にも見えないところで苛立ちを隠せない顔をしていた。」



最初に捕らえられていた場所と同じ地下牢に、ウタは再び繋がれていた。

イル、と名乗った少女はこの場所に映像電伝虫を持ち込み、彼女にその光景を見せたのだ。そう、彼女が数日であるが過ごした村に起きた惨劇を。

映像が途切れ、何も映らなくなる。俯いた彼女に、イルが電伝虫を操作しながら言葉を紡いだ。

「おそらく、電伝虫が怪物に襲われたのでしよう。これ以上の映像はありませんが、あの村については……」

最後は言葉を濁すイル。その彼女に、ウタが俯いたまま言葉を紡いだ。

「あれが、東の海の事件の真相ね」

「はい。その時には多くて三匹ですが、結果は見ての通りです。東の海のような軟弱な海の島であれば、例外なく滅ぼせると」

ギリ、とウタは歯を食い縛る。

「あなたは、あなたたちは東の海に何の恨みがあるの!？」

「わかりません」

怒鳴るようなウタの問いに、イルは首を左右に振る。

「これはお爺さまが二十年をかけた計画であるということしか、私は知りません。ただ、お爺さまが望むのであれば私はそれに従います。……これを」

言うのと、少女は黒いドレスを床に置いた。

「この後、お爺さまの旗下に入ることを希望する海賊たちと盃を交わすとのことです。その際、ウタ様も正装して参加するようにと」

「……………」

「従うべきです。あなたはそういう約束で、彼らを生かしたのですから」

再び、歯を食いしばるウタ。

悔しい。何もできない己が、こんなところで嘆くしかない己が。

黙り込んでしまったウタ。そんな彼女に、イルは周囲に視線を彷徨させた後、意を決

したように言葉を紡いだ。

「ウタ様。実は、私はあなたのファンです」

「……そういうえば、シキもそんなことを言ってたね。何、サインでも欲しい?」

吐き捨てるように言うウタ。いえ、とイルは首を横に振った。

「あなたの歌が、私にとつての希望であり救いでした。それは事実です。地獄のような日々の中、時折聞こえてくるあなたの歌だけが、私にとつて唯一の幸福でした」

けれど、と。

イルは言う。

「私を地獄から連れ出してくださいましたのは、お爺さまです」

だから、あの人のために命を懸けると彼女は言う。

「私はあなたを傷つけたくありません。従ってください」

ウタは、言葉を発しないという方法でしか抵抗ができなかった。

かつて笑顔周囲に振り撒き、多くを笑顔にしてきたその顔は。

どうしようもないほどの悔しさに、染まっていた。



映像が途切れるトラブルはあったが、デモンストレーションが上手くいった。後は、最後の仕上げだ。

「イル、目的地は？」

「後一日と経たずに到着します」

ウタを正装に着替えさせたと言ったイルは、シキの私室に訪れて報告を行っていた。新たな葉巻に火を点けながら、シキは問う。

「進路のことは、ちゃんと秘密にしてあるな？」

「はい。私を含め、司令室でも一部の者のみです。『七宝剣』も知りません」
ならばいい、とシキは言った。そして、イルに外に出るように言う。

「少し、話す相手がいる。外で待機している」

「承知いたしました」

スカートを両手でつまみ、一礼して出ていく孫娘。中々癖が抜けねえなあ、とぼやきながらシキは電伝虫を操作する。

しばらく続く呼び出し音。シキが煙を揺らしながら待っていると、相手が出た。

『私だ』

「今回は直接出たか、センゴク」

「楽しそうに笑うシキ。何の用だ、と問うセンゴクに、シキが言葉を紡いだ。

「最後の警告だ。東の海をおれは滅ぼし、世界を支配する。降伏するなら今だぞ？」

この電話はただの嫌がらせだ。センゴクやガープ、そしておつるには散々煮湯を飲まされた。その意趣返しである。

だが、相手の反応は思うものとは違った。

『シキ。お前は我々を舐め過ぎだ』

「何だと？」

先日の電話の時とは違い、センゴクの言葉には余裕がある。

「どういう意味だ？」

『東の海を滅ぼすと言ったな？ 未だに偉大なる航路にいる貴様が、どうやってだ？』

こいつ、とシキは思った。

もしや、計画が漏れている？

『貴様が今いる場所から東の島の島へ行くには、その速度では最短でも十日はかかる。貴様の口振りからは、今にも滅ぼしに行くかのように聞こえるが』

「ほう。知ったように言うじゃねエか」

『知っているからな。貴様が二人の部隊を襲撃したあの日から、貴様らの居場所と移動

速度については既に把握済みだ』

ピクリ、とシキの額の血管が動いた。

『貴様の言う“情報”だ。あの部隊の海兵たちを、軟弱と呼んだようだな？ はつきり言おう。彼らは勇気を持ち、正義を持つ海兵だ。我らの誇りである。彼らは彼らの任務を果たしてみせた』

「電伝虫の連絡は、一度しかなかったはずだが。その内容についても把握してる」

あの時、ウタの居場所を把握した時に彼らは海軍本部へと連絡していた。その通信内容についても把握している。

あの海兵たちはウタやCP9からの情報を海軍本部に伝えていた。ここでは狙いが東の海であること、ウタを自分が狙っていることしか伝わっていないはずだ。

『技術の進歩というのは我々老人には辛いな、シキ』

小さな笑み。

『彼らはそのメルヴィユという島に着き、何度もこちらに連絡を取ろうとした』

そうだ、シキもそれは知っている。それはウタが逃げ出した後もすぐには繋がらず、数日の時間を要した。

まあ、繋がったからこそシキは場所を察知したわけだが。

『まだわからんか？ 彼らはウタ准将の部隊に所属している。故に、広報部隊として通

常任務中に使う子電伝虫とは別に広範囲へ連絡を取れる電伝虫を持つている』

「それがどうした？ この島は遥か上空にある。特別な電伝虫であろうと、奴らが連絡を取れたのは一度だけのはずだ」

『電伝虫で伝えられる“情報”は、何も声だけではない』

ふと、シキの頭にとある会話が浮かんだ。

あの時、島に潜伏していた者たちが海軍へ連絡を取った時、司令室の技術員が言っていたのだ。

“おそらく、自走式映像伝電虫”の発信を誤認しているようでして。成長し、電波が少し変わると登録外のものと認識してしまうんです。通話もないですし”

その時、自分は融通が利かないと切り捨てた。

だが、あれは誤作動ではなく。

正しく、こちらの登録外の連絡だったというのか。

『彼らは島を移動する際、彼らの持つ電伝虫を各地に設置した。彼らはそこから通信ではなく、信号を送るよう設定した』

ギリ、とシキの握り締めた手から音がする。

『彼らが集めた情報では、確かに貴様は東の海を標的としていた。だが貴様らの進路は、それとは全く違う方向へ進んでいる』

言つてやろうか、とセンゴクは告げる。

『貴様の狙いは、このマリリンフォードだ!!』

シキは、即座に答えられなかった。

二十年を掛けた計画。それをまさか、ここに来て。

『東の海の壊滅はブラフ！ 東の海に戦力を向かわせ、手薄になったこのマリリンフォードを攻め落とすことこそが貴様の計画だ!』

シキは、一度大きく葉巻の煙を吸い込み、吐き出した。

東の海の壊滅。そして、世界の海の支配。それがシキの目的であることは事実だ。だがこの計画を練る途中で、彼は一つの考えに至る。

——東の海を攻撃して、海軍と戦争になったとして。

そうなれば、確実な勝利の保証はない。

海軍という組織、世界政府という存在の強大さを知る彼だからこそ、正面から勝つことの難しさを知っていた。

だから、策を練った。

東の海に戦力を散らせ、カイドウの対応のため最高戦力を引き剥がし。

そうして、手薄になった海軍本部を制圧する。そうなれば、後は混乱する海軍を潰しながら東の海を破壊し、その事実を持って世界政府に降伏を迫る。

(なるほど、確かに舐めてたかもしれないねエナア)

思い出すのは、アルキデイクスに制圧されたあの木端のような海兵たち。あいつらが情報を海軍に伝え、シキの計画を露見させたのだ。

だが、とシキは思う。一度息を吐くと、彼の冷静な頭脳が回り始める。

「なるほどなア……これは確かに、一本取られた。お前の言う海兵どもは、確かに任務を果たしたんだろう」

だが、だからなんだ。

シキは、電話の向こうの男を嘲笑う。

「カイドウの小僧を相手に、三大将全員が出払ったと聞いているぞ？ 確かに最大限の効

果はなかったが、全くねエわけじゃアねエ。十分だ」

『ならば、貴様の言葉通りだな』

覚悟のこもった声。幾度となく、聞いた声だ。

ああ、とシキも頷く。

——全面戦争だ。

それを最後に通話は切れた。受話器を置き、シキは椅子に深く沈み込む。

一度、大きく深呼吸。そして、外にいる孫娘に声をかけた。
「イル！ 計画変更を伝える！」

慌てた様子で入ってくるイル。彼女に対し、シキが指示を出した。

「『七宝剣』をここに呼べ！ その後、海賊どもと盃を交わす！」

「は、はい」

その指示を聞き、いつもの礼をして出ていく孫娘。その姿を見送り、シキはふん、と鼻を鳴らした。

「結局、どこで戦うかの違いでしかねえ」

それに、と彼は呟く。

「マリルフォードも気に食わねエ場所だ。今度はあの島を、おれの拠点にしてやる」

そして、彼が集めた『七宝剣』が集まるまで。

ずっと、彼は無言だった。



惨劇の村の中、一羽の鳥の声が響く。

「クオツ、クオツ、クオツ」

その鳥は、進化の新たな形としてウタの前に出てきたアヒルのような姿をした黄色い体躯の鳥だった。

“お前ビリビリするから、ビリーな！”

自分が興奮すると発してしまう電撃を受けて怯みもしなかった人間は、名前をくれた。

“人懐っこいですね”

“うん。でも、悪い気はしないよね。可愛いし”

自分を一緒に連れ出すように言い、そして外へ出してくれた人間は、優しく自分を撫でてくれた。

「クオツ、クオツ……い！」

その瞳からは、涙が溢れている。

惨劇の起こる村の中、ビリーは倒れ伏した人間たちを一人ずつ、建物の影に運んでいった。

何もできなかった。

自分を優しく撫でてくれた人間が、連れ去られるのに。

名付けてくれた人間が、倒れ伏しているのに。

「クオツ……！」

最後の一人、自分に名前をくれた人間を運び終えるビリー。しかしそこで、巨大な怪物と彼の目が合った。

カプトムシのような、しかし、そのサイズはそれこそ軍艦並だ。

「クオツ!!」

両の翼を広げ、立ち塞がるビリー。その体は震えていた。

その怪物は、あまりにも矮小な存在を前に笑う。それでもと、ビリーが踏ん張った瞬間。

「ぬんツ!!」

そんな裂帛の気合いと共に、轟音が響いた。

怪物の脇腹。そこへ拳を叩き込んだ者がおり、しかもその怪物の体が文字通り村の外より更に遠くに一瞬で吹き飛ばされたことなど、ビリーにはわからなかった。

あまりの衝撃にビリーの体さえもよろける。だが、気合いで堪えた。

「わしはこのままこの村の怪物共を全て殴り飛ばす。お前らは村民の救助を」

「了解しました、私はこちらの方へ」

「たしぎ、お前はその鳥とその後ろの連中につけ。おれはモモンガ中将の反対側に回る」

「はい、了解しました！」

現れた人影は、四つ。

そのうちの一つ、メガネをかけた人間が言う。

「私たちは味方です。後ろの人たちを、助けに来ました」

戦争開始まで、後、わずか。

逃亡海兵ストロングワールド⑦

第六話 覚悟

ルフィが目を覚ました時、そこには予想外の人物がいた。

「じいちゃん!？」

「ようやく起きたか」

ルフィが体を起こすと、少し離れた場所に立っていたガープが鼻を鳴らした。ただ、彼の雰囲気はいつもと違う。

周囲を見渡すと、見覚えのある顔がいくつかあった。思わず声を上げる。

「モモンガのおつちゃん、ケムリン、たしぎじゃねえか！」

「貴様にそう呼ばれるのは久々だな……」

「ケムリン呼ぶんじゃないやねえ。……腹に風穴空いてる割には元気だな」

「あ、あはは」

呼ばれた三人がそれぞれ反応する。ルフィはスモーカーに言われた言葉で、自分の体を見た。

見れば、体には包帯が巻かれている。自分の体の感触からして、どうやら傷は縫ってもらっているようだ。

ちなみにたしぎだけちゃんと名前を呼んでいるのは彼女がウタと仲がよく、顔を合わせる機会が多かったからである。

「すみません大佐。私の応急処置ですが」

ルフィの部下の一人である海兵が申し訳なきそうに言う。いや、とルフィは頷いた。

「ありがとう。助かった。で、じいちゃん何しに来たんだ？」

「無理に空元気を出すな、馬鹿者」

ガープのその言葉に、ルフィは動きを止めた。

そして、ゆっくりと彼は近くの岩へと座り込む。それを確認してからたしぎが前へと歩み出た。

「ルフィ大佐。皆さん。今から政府の見解及び海軍の動きについて説明します」

そこで語られた事実には、全員が静かに耳を傾けていた。

二十年の沈黙を破り現れた“金獅子のシキ”。その目的は東の海の壊滅と、それによ

る世界政府の降伏。そして支配だ。

最近起こっていた東の海で起きていた街の壊滅事件はシキによる実験の側面が強いのではないか、というのが政府の見解である。

そんな中、動き出したシキの下には五千を超え、万に迫る勢いの海賊が集まっている。彼らとこの島の凶暴な生物を使って東の海を壊滅させるのが目的だ。

しかし、そこには裏があつた。

このメルヴィユと呼ばれる島の進路は、東の海へ向かつていない。ルフィの部下たちが仕掛けた電伝虫の信号により進路と速度を割り出した政府と海軍は、その目的がマリンフォードであると確信。センゴクの指示の下、現在海兵がマリンフォードに集められている。

だが、シキは更なる手を打っていた。この状況を「四皇」の一角である「百獣のカイドウ」へと伝え、それを聞いたカイドウが動き出したというのだ。

それを止めるため、苦渋の決断としてセンゴクは最高戦力たる大将の出撃を決定。「七武海」への協力も要請しているが、応じてくれるかは未知数だ。

そして、この島がマリンフォードに到着するまで予想では一日を切っている。戦争の始まりは、最早目前であつた。

「シキに気付かれないよう、我々は外縁に降りたのだ。それもあつてここまで来るのに三日という時間がかかってしまった。すまない」

そう言つて頭を下げるのはモモンガだ。謝ることではないじやろう、と言うのはガープだ。

「そもそも負けたお前が悪い。あの子はどうせ、お前たちを守るためにシキの所へ行つたのじやろう？」 違うか、ルフィ」

「……違わねえよ」

そんな言い方、とルフィの部下であるオリンが言おうとするのをルフィが手で制した。そもそも、とガープが語る。

「お前とあの子が一つの部隊を率いておる現状は異例じや。それはひとえに、ウタウタの実際の能力を持つあの子の存在があまりにも海軍にとつても海賊にとつても、何なら世界政府にとつても重要であるからじや」

「そんなんですか？」

「考えてみるといい。ウタウタはその歌を“聴かせる”ことさえできれば問答無用で相手を眠りに誘い、制圧することのできる能力じや。デメリットは持続時間の短さじやが、それは周囲を固めればどうにでもなる。だからこそ、あの子をよく知るお前があの子の側で守れるようにとこの異例の部隊構成をしておる」

ただでさえ強力な力である上に、彼女自身も「歌姫」として絶大な人気を誇っている。その身に降りかかる火の粉は通常よりも遥かに多い。ここでは敢えてガープは言わなかったが、「赤髪のシャンクス」の娘であるという点も大きい。利用価値などいくらでもある。

ちなみにこれはガープも知らず、世界政府でも最上位の者しか知らないことであるが、「ゴムゴムの実」もまた政府にとつて非常に重要な存在だ。そのため、この二人をまとめて管理できるようにという考えもあった。

「ウタウタは聞くところによると、音痴だと全く意味のない能力らしいがの。あの子の歌を聴いて、それを切り捨てることのできる者はまずおらん。まず間違いなくあの子は天才じゃ。それも、血の滲むような努力ができるタイプの」

それについては、この場の全員が納得することだ。

ウタに贈られた「歌姫」という称号は決して虚飾ではない。彼女の歌は確かに人々の力になっている。なることのできるだけの力を持ってしまっている。

「だというのに」

ふう、とガープは息を吐く。

「奪われてどうする、この馬鹿孫が」

「取り返すよ」

「どうやってじゃ?」

ガーブが鋭い視線をルフィに向ける。

「いいか、ルフィ。わしとセンゴクは二十年前にシキを捕らえた。それは確かじゃ。しかしそれは、あやつが正面切つてマリンスフォードに突っ込んできたからじゃ。その時まで、わしらはあやつを捕まえることはできなんだ」

故に伝説。

ガーブは、そう言った。

「お前のような未熟者が、どうやって勝つつもりじゃ?」

「どうやって何もねえよ」

ルフィは言う。

「ウタが隣にいなくなつて、初めて思った。……いなくなつて欲しくない、隣にいて欲しい、って」

全員が、黙してルフィの言葉を聞いている。

「帰つてきてくれて、そつちの鳩の奴と牛のおっさんがウタを取り戻してくれて……本当に、嬉しかったんだ。良かった、ってそう思った。けど、また奪われた」

約束したんだよ、と。

ルフィは、言う。

「海兵になる時に、ウタの隣にずっといる」って。シキが強いのはわかってる。けど、それはそれだ。おれはどんな方法を使っても、ウタを取り返しに行く」

その言葉に、ガーブは一度瞑目し。

大きな、大きなため息を吐いた。

「この頑固者め。一体、誰に似たんじや」

「じいちゃんだろ」

「馬鹿者、わしはもうちよつと弁えとる」

自覚はあったのか、とか、ちよつとなのか、と周囲の人間は色々ツツコミたいのを堪えた。

「まあ、いい。わしの言葉で止まるようなら気絶させてでも置いていくつもりじゃったが、そこまで強い意志があるなら構わんじやろう」

「何だよ、試したのかじいちゃん？」

眉を顰めるルフィ。違うわい、とガーブは言った。

「ただの確認じゃ。……とはいえ、今のままではあやつには届かん。よつてルフィ、道中に策を考えるぞ」

「策って？」

「悪魔の身の能力は、その工夫次第で非常に強力になる。わし自身は能力者ではないが、

この数十年で数え切れんほどの能力者と戦ってきた。その経験を可能な限りお前に伝える」

後はお前次第じゃ、と言うガーブ。ルフィは頷いた。

「ありがとう、じいちゃん」

「孫のためじゃ。ついでに言うとおひ孫の」

「は？」

ルフィが首を傾げるが、何でもないわい、とガーブは手を振った。

「……話は纏まったようですが、それでどうするつもりですか？ もう時間もあまりありません」

声を上げたのはモモンガだ。何を言う、とガーブは言う。

「こういう時は正面から乗り込むと相場が決まっておる」

「……まあ、悠長にはしてられません」

「全部で……九人か。ふん、決死隊だな」

微かに笑うスモーカー。その彼に、異議を唱える声が上がった。

「十一人だ」

言ったのはルッチだ。いいのか、とスモーカーが問う。

「おれたちと行動を共にしても。CPは政府機関だろう」

「『歌姫』の奪還はおれたちの任務だ。それに
鋭い視線をスモーカーに向け、ルツチは言う。

「(一)で、悪に屈するわけにはいかん」

それを聞き、了解した、とスモーカーは頷いた。

あとは具体的な策を、とたしぎが言いかけたところで、遠慮がちな声がかかる。

「あの、助けてもらってありがとうございます」

声の主はシャオの母親だった。服装には汚れが目立つが、怪我はないらしい。その背には老人が背負われており、隣にはシャオもいる。

「気にしないでください。我々は当然のことをしただけです」

そう言うのはたしぎだが、その意志は全員が同じだ。力なき者を守るのが、彼らの任務である。

「ありがとう。……でも、今の話。東の海があんたたちの故郷っていうのは、本当なのか
いっ」

たしぎの話を聞いていたのだろう。ああ、とルフィが頷く。

「全員じゃねえけど、おれとじいちゃん、それでウタは東の海が故郷だ」

「……私は、なんてことを」

唇を噛み、女性と言う。

「あの子の前で、シキが早く東の海に行つてしまえばいいなんて……！」

「ごめんなさい！ 私も、私も喜んじやつた……！」

シヤオが泣きながら言う。その彼女が持っているものに、ルフィが気付いた。

「シヤオ、お前それ」

「うん、そこで拾つて……」

「ちよつと見せてくれ」

シヤオから彼女の持つてているものを受け取る。やはり、音貝だ。

「お前ら、凄えなあ」

ルフィは、涙を流すシヤオの頭を撫でる。

「自分の村が無茶苦茶にされてるのに、ウタを氣遣つてくれてよ。こんなに心の優しい奴ら、見たことねえ。お前らは良い奴らだよ」

そして、彼は言う。

「何もかも、悪いのはシキの奴だ。——おれがあいつを、ぶっ飛ばしてやるからよ」

それは、自身にも言い聞かせるような言葉だった。

「だから、元氣だせ」

その言葉も、果たして彼女たちだけに向けられたものなのか。

その場の者たちは、判断ができなかつた。

「じいちゃん」

「うん？」

そして、ルフィはその音貝を投げ渡す。受け取ったガープは、おい、と言葉を紡いだ。
「聞かんのか？」

「いいよ。おれはもう、聞いたから」

そして、ルフィが離れていく。彼の脳裏に浮かぶのは、薄れゆく意識の中で聞いた彼女の言葉だ。

“ねえ、ルフィ。今まで、本当にありがとう”

涙を堪えた声で。

“私、あなたのことが好きだった。……大好き、だった”

彼女は、覚悟と共にそう言っていた。

“さよなら”

けれど、彼女は。

最後に、その言葉を。

「ふぎけんな」

呟くように、彼は言う。

まだ何も、返していない。

言いたいことも、やりたいこともたくさんあるのに。

だから、取り戻す。

絶対に。

彼女を、取り戻すのだ。



ルフィが離れたのを見て、ガープが息を吐く。ようわからん奴じやとぼやくと、彼は音貝を起動した。

そこに残されていたのは、*“歌姫”*の言葉。

『ごめんなさい。私は、海賊に……シキの、仲間になります』

涙を堪えるような声だった。痛いほどに、その気持ち伝わってくる。

『今まで、こんな私を……こんな、弱い私を助けてくれて、ありがとう』

拳を握る音が響く。それは一体、誰からのものだったのか。

『さようなら』

音貝に記録されていたのは、ここまでだった。
しばらく、無言。

最初に口を開いたのは、スモーカーだった。

「言葉だけを聞けば、裏切りだが。……たしぎ、どう思う？ お前は『歌姫』とは仲が良かったはずだが」

「それを私に聞きますか、スモーカーさん」

両手で手に持った刀を強く、強く握り締めるたしぎ。ガープ中将、とモモンガが言葉を紡いだ。

「行きましょう。彼女は、准将は一人で戦っている」

「ああ、その通りじゃ。……下手くそな嘘を」

腕を組み、何かを堪えるように呟くガープ。彼は少し離れた場所にいるルフィに声をかける。

「ルフィ！ もう時間の猶予はない！ 急ぐぞ！」

「——ああ」

血に染まった、己が羽織る正義のコートを握る。

これは、「彼女」の正義だ。彼女はこれを、自分に託した。
この「正義」を背負って。
彼は、往くのだ。

逃亡海兵ストロングワールド⑧

第七話 “信じてる”

シキの居城、その大広間。畳が敷き詰められ、金色の襖で仕切られた部屋にその者たちは集まっていた。

一番奥に居るのは、今回の発起人である伝説の海賊、“金獅子のシキ”。彼は一人玉座とも呼ぶべき椅子に座っており、その眼前には、数多くの席が用意されている。盃が置かれた台のあるその場所に、続々と船長たちが現れては着席していく。

配置としては、シキの前に道があり、それを挟むようにして座る形だ。そして席に着いた海賊たちの盃へ、順にイルが酒を注いでいく。

「ええつとお〜」

「おい、ブルチネラ。お前はこっちだ。何を新人どもの末席に座ろうとしてやがる」

黒い仮面に白い道化服の大男。“返り血のブルチネラ”が室内の端の席に座ろうとするのを見咎めて、シキが言う。

シキの側には、七人分の席が別に用意してあった。彼が「七武海」を模して作った高額の賞金首で構成される「七宝剣」のための席だ。彼らは既に盃を交わしているため、その席に盃は置かれていない。

「おめエが遅いせいで端だがな。さっさと座れ」

「いやもう、シキ親分の旗下に入れただけで十分でございますれば！ いやー、申し訳ない遅れてしまつて！」

そう言うと、彼はコミカルな動きで前へと歩いていく。他の海賊たちから小さな笑いが溢れた。

彼がシキの側の席に座ることで、「七宝剣」がこれで六人揃うことになる。

「毒蛇のカガシヤ」

「墓荒らしのレムナント」

「返り血のブルチネラ」

「大地の王」ラウンド

「蹴撃のドリーマー」

「海災」アルキデイクス

皆一様に、この場でシキが新入りと呼ぶ海賊たちより遥か格上の海賊だ。その光景を前に、海賊たちは自分たちがとつてもない男の下につこうとしているのだと改めて理解

する。

ただ、七つ用意された席のうち一つが空いていた。それを一瞥すると、シキは酒を注いで回っているイルへと声をかける。

「イル。あいつはどうした？」

「はい。お伝えはしたのですが、その後は応じて頂けず」

「相変わらず、こういう場が嫌いか」

はあ、とため息を零すシキ。まあいい、と彼は頷いた。

「長エ付き合いだ。今更でもある。——おい、イル。ゲストを呼びに行け」

「はい。しかし、お酒は」

「私が代わりましょう！」

勢いよく立ち上がったのはブルチネラだ。イルが困惑した表情でシキを見るが、彼は構わんと頷いた。

ブルチネラはイルから酒を受け取ると、室内に現れる海賊たちに順に酒を注いでいく。五億に迫る懸賞金を懸けられた道化のその振る舞いに、海賊たちは皆一様に驚愕している。

そして、予定通りの人間が集まったのを確認すると、シキは全体をゆつくりと見回した。その覇気を受け、海賊たちが姿勢を正す。

「さて、よく集まってくれた。先に告げた通り、おれはこの世界を、海を支配する」

海賊たちは、黙してシキの告げる言葉を聞いている。

「ルールは一つだ。『裏切り者は殺す』。これからおれの配下に収まってもらうための契りの盃を交わしてもらうが……その前に一つ、お前らに謝らなければならぬエことがある」

ざわりと、海賊たちに動揺が走った。何事かと思う彼らの前で、シキは腕を組み、悩ましげに頭を振る。

「おれは非常に寛大かつ、慈悲深い親分でありたいと考えている。当たり前だが、これから盃を交わすおめエたちは大事な、それはもう大事な仲間だ」

シキの言いたいことがわからず、困惑する海賊たち。それに構わず、シキは言葉を続ける。

「だから仲間の願いつてもんは出来うる限り聞いてやりてエ。無論、できぬエことはあるが、おれが聞いてやれる願いについては耳を傾けようと思っている」

「——お連れしました」

そこで、イルがとある女性を連れて入ってきた。海楼石の錠を付けられた、紅白の髪を持つ女。

胸で麦わら帽子を抱える黒いドレスの女性の登場に、海賊たちがざわめく。

「グッドタイミングだぜ、ベイビーちゃん」

小さく呟くシキ。彼は手を叩くと、騒ぐな騒ぐな、と彼としては気さくな雰囲気と言葉を紡ぐ。

「お前らもよく知ってるだろうこの『歌姫』は、おれの配下に加わった」

どよめきが広がる。『歌姫』の海賊嫌いは非常に有名なことだ。彼女の相棒である麦わらの男はともかく、『歌姫』は海賊に容赦をしないことで有名である。

そんな女が、海賊に？

「お前らが疑うのも無理はねエ。だが、おれが『歌姫』の願いを聞く代わりにおれの配下になることになったんだ」

「願いとは？」

ずっと黙し、状況を見守っていたアルキデイクスが言葉を紡ぐ。

(演技が上手エじゃねエか)

シキは内心の笑みを押し隠し、彼の問いに応じる。

「ああ、一つはこの『歌姫』の仲間を……まあ、元仲間だな。そいつらを見逃すこと。そしてもう一つは、東の海を狙うというおれの目的を止めることだ」

再びざわめきが広がる。しようがねエだろう、とシキは肩を竦めた。

「おれは寛大で慈悲深い親分を目指してる。東の海の壊滅はおれの悲願だが、どうして

もと願われちゃしようがねエ」

「おいおいおい。おいおいおいおい親分！ 話が違う！」

勢いよく立ち上がるブルチネラ。この茶番劇に、シキは笑いを堪えなければならなかった。

「おれはあんたに憧れてた！ 今も憧れは変わらねエ！ だが何だその結論は！ 金獅子のシキ” っつのは、女一人の懇願で自分の信念を曲げんのか!?”

巨漢の道化が、大仰な身振り手振りで語るその様に、その場の全員が黙して状況の推移を身守るしかない。

流石だ、とシキは思った。道化とはこうでなくてはならない。観客の視線を一手に惹きつけ、そして最後にそれを全てひっくり返すのだ。

「嬉しいねエ、ブルチネラ。おれに憧れてくれんのか」

「当たり前だ！ だが今は失望しそうだ！」

よくもまあ、抜け抜けと。

シキと“七宝剣”の者たち、そしてイルというこの脚本の筋書きを知る者たちは内心で思う。

この男の目的は、ただただ“血”だけであるくせに。

「ブルチネラの言い分は大袈裟だが、おれも同意見だな」

「……右に同じく」

両手を頭の後ろで組み、そんなことを口にするのはレムナントだ。その隣に座るラウ
ンドも、小さく頷いている。

状況を飲み込めていない「歌姫」、ウタは眉を寄せて成り行きを見守っていた。その
姿が可笑しく、笑いそうになるのを堪える。

「ああ、おめエらの言い分も尤もだ。だから標的を変えることにした」
「標的だあ？」

眉を顰めるのはドリーマーである。こいつは演技が下手だな、とシキは思った。棒読
み過ぎる。

「ああ、そうだ。おれは」

そして、その大海賊は宣言した。

彼の、本当の目的を。

「——マリンフォードを滅ぼす!!」



その言葉を聞いたウタは、思わず叫びそうになった。しかし、気付く。声が出ない。否、正確には音が空気を震わせない。

（「毒蛇のカガシヤ」……！）

これを味わうのは二度目だ。その元凶である氷のような女を睨むと、彼女は人差し指を自身の唇に当て、小声で告げる。

「口を慎め。親分の言葉であるぞ」

ぎり、と歯を食い縛るウタ。そんな彼女のことなど歯牙にも掛けず、シキは言葉を続ける。

「どちらにせよ、海軍との激突は避けられねえんだ。だったらこつちから攻め込むのも悪くねえ」

今度こそ、海賊たちに大きな動揺が広がった。マリンプォードは海軍の本拠地だ。

ここにいる者たちは、幾度となく海軍との戦闘を経験している。だがそれはあくまでも戦闘だ。その本拠地に攻め込むなど、正気の沙汰ではない。

「親分。勝算は？」

「あるさ、カガシヤ。——イル！」

呼ばれた彼の孫娘が前に出る。彼女はスカートの裾を摘んでいつもの一礼をすると、そのまま言葉を紡いだ。

「先日、一つの事件が起きました。『百獣のカイドウ』が、本拠地を出港しマリルフォードに向かってしていると」

「何!?!」

「どういふことだ!?!」

世界最強の生物と名高き、『四皇』が一角『百獣のカイドウ』。それほどの海賊が何故、わざわざ海軍の本拠地を攻めるのだ。

そんな海賊たちの疑問に、イルが頷きと共に回答する。

「全て、シキ様の謀です」

「あの小僧とは昔馴染みでなア。東の海を滅ぼすから手を組まねエかと声をかけたら、手は組まねエがこれを機にマリルフォードに攻め込むと言いつ出した」

笑いながら言うシキに、海賊たちは言葉を失う。

「そしてカイドウを迎え撃つため、三大将が精鋭を率いて出撃したとの情報もあります」
「世界政府の最高戦力が、これで消えたわけだ」

「そして『七武海』についても、普段彼らはそれぞれの拠点にいます。間に合う可能性は限りなく低いでしょう」

「そもそもあいつらは協力なんてできるような連中じゃねエ。考える必要はねエだろうな」

シキとその孫娘から語られる、マリンプォード襲撃における勝算。その言葉を聞いているうちに、海賊たちにももしかして、という気持ち湧いてくる。

「そして、その全てをひっくり返しかねない鬼札はここにいる！ ジハハハハ！ この戦はもう、貰ったようなもんだ！」

シキが指し示すのは、ウタだ。おおつ、と海賊たちから声上がる。

ウタの力について、全員が知っているわけではないだろう。だが、彼女が成し遂げってきたことについては広く知れ渡っている。

海軍の、『新時代の英雄』がこちらにいる。その意味は、ウタ自身が思っているよりも海賊たちにとっては大きな意味を持つ。

「それにおめエらも見ただろう！ あの怪物どもを放てばマリンプォードは焦土と化する！ それに考えてみる、このメルヴィユにどうやって海軍が乗り込むってんだ！」

なんてことを。

そんなウタの言葉は、音にならない。

「戦なんてのは、一方的に勝てるならそれが最上に決まっている！ ジハハハハ！ もうあと数時間でこのメルヴィユはマリンプォードに着く！ おれたちはただ高みから

マリolfォードが滅ぶ様を見ていればいいだけだ！」

そしてシキは、自身の前に置かれた盃を掲げた。

「さア、おれと共に世界の支配を望むか!？」

「最高だ、最高だよ親分！」

大仰な身振り手振りで、興奮を表現するブルチネラ。

その道化の口元の笑みが、ウタはただただ悔しかった。

「よう、ブルチネラ。血を望む道化よ。おれは、おめエの親分に相応しいか？」

「当たり前だ！ そうだろうお前ら！」

「「おおっ!!」」

全てが予定調和であつた。しかし、それを知らないウタはただ、怒りに体を震わせるしかない。

嘘だったのだ。東の海の壊滅は。奴の目的は、初めからマリolfォード。

ウタにとって、第二の故郷とも呼べる場所。

「さあ、前祝いだ！」

そして、シキと海賊たちが盃を干す。

彼らの契約は、ここに成つたのだ。

そこで、ウタは自分の声が出るようになっていくことに気付く。

「シキ!!」

そして、ウタは弾かれたようにシキに掴みかかった。周囲の者たちが反応するが、シキはそれを手で制する。

「おいおい、どうしたんだベイビーちゃん？ 随分怖い顔をしてるじゃねエか」

「黙れ！ 私を騙したのね！ 初めから」

「おいおい、人聞きが悪いことを言うんじゃないやねエよベイビーちゃん」

言葉を最後まで告げることはできなかった。シキに顔を掴まれ、口を塞がれたのだ。

「おれがいつ、約束を破った？」

そのまま、シキによって投げ飛ばされる。ろくに受身すら取れず、床へと叩きつけられた。

衝撃で、呼吸が一瞬止まる。

「なア、ベイビーちゃん。おめエの願いは二つだった。あいつらを見逃すこと、そして東の海に手を出さないこと。おれはちゃんと願いを聞いたぞ？」

「黙れ！ あの村を襲わせたくせに！」

「おれは見逃したが？」

畜生のすることなど知るか——そう言つて笑うシキ。他の海賊たちも笑つた。
(なんで、なんで、なんでつ……！)

ウタの瞳から、涙が溢れる。

わかつていたはずではないか。海賊とはこういう奴らだ。シャンクスだつてそう
だつたんだ。自分を置き去りにして、振り返りもしなかつた。

憎かつたのに。

わかつていたのに。

それでも、継るしかなかつた。

そんな己の弱さに、涙が出る。

「親分親分！　いくいことを考えた！」

「おう、どうしたブルチネラ」

はいはい、と手を挙げながらブルチネラがシキに声をかける。シキが新しい葉巻に火
を点けながら先を促した。

「おれたち、金獅子海賊団の門出を『歌姫』に歌つてもらおう！」

えつ、とウタの口から声が漏れた。シキが笑う。

「いい案だ！　おうベイビーちゃん、一曲頼むぜ！　ジハハハハ！」

嘲笑う声。周囲の海賊たちも、囁し立てるように声を上げた。

「ふざ、けないで」

ゆつくりと立ち上がり、シキを睨みつけるウタ。おいおい、とシキが玉座で肩を竦めた。

「そりやねエぞベイビーちゃん。おれはお前の願いを聞いたんだ。じゃあ逆に、こつちの願いも聞いてもらわねエとな」

「お前たちのために歌うなんて、死んでもゴメンよ」

直後、衝撃と共にウタの体が宙を浮いた。

ブルチネラの拳が、ウタの顔を殴り飛ばしたのだ。

奥の襖の方へ向かって、転がるウタ。悲鳴ではなく、空気が吐き出される音が喉から漏れた。

意識が揺れる。ただでさえ海楼石で弱っている体に、その男の拳はあまりにも重過ぎたのだ。

「さつきから聞いてりや、随分我儘が過ぎるなア 歌姫」

苛立ちを滲ませた声で、こちらへと歩み寄ってくる道化。だが、ウタの視界にブルチネラの姿は入っていない。あるのは。

(……帽子……)

ルフィの、大切な帽子。

……シャンクスの、帽子。

「躡が必要か、あア？」

蹴り上げられ、宙に浮いた体が一瞬の浮遊感の後に再び床へ叩きつけられる。

(……帽子……)

あつた。あんなところに。

あれは、駄目だ。あれだけは、離しちゃいけないのに。

「おいおい、壊すなよ。まだ利用価値があるんだ」

「大丈夫ですよお、親分」

定まらない意識の中、そんな声が響いて。

「……………」

「逃げようとしてんじゃねえよ」

髪を掴まれ、投げつけられた。

手入れを欠かしていない髪。ルファイが誉めてくれた髪。

(帽子)

だが、ウタの目にはもう、たった一つしか映っていない。

まるで芋虫のように床を這いながら、そこを目指す。幸いだったのは、投げ飛ばされた先の側にそれがあつたこと。

「おいおい、なんだその汚ねえ麦わら帽子は？」

「『歌姫』の恋人の遺品だ」

「そいつはスキヤンダルじゃねえか！」

ブルチネラが笑う。だが、ウタにはもう聞こえていない。

麦わら帽子を手に、抱えるようにして、庇うようにして彼女は蹲る。

これは、大切なものなのだ。

だから、守るのだ。

(ごめんなさい)

あの時、この帽子を手にしたのは。

勇気が、欲しかったから。

たった一人で行くことが怖くて、縋ろうとしたから。

(ルフィ)

彼は、無事だろうか。

……助けて、くれるだろうか？

「……なんか、興奮めなんだが親分。こんな無様なもんなのか？」

「見苦しいなア、『歌姫』」

シキが嘲笑う。それに対し、悔しいと思うことさえウタはもう、できない。

彼女の心は、抱え込んだ大切なものだけに向けられている。

「まあ、余興としちやア十分だ。眠らせて地下牢にでも放り込んでおけ」
シキの言葉を受け、巨漢の道化がウタに迫る。

彼女は、ただ、耐えようと身を固くして。

轟音が、響き渡る。

閉じられた襖。そこが、爆撃でも受けたかのように弾け飛んだのだ。

「なんだア?」

ブルチネラの訝しむような声。ウタは、ゆっくりと顔を上げた。

涙と血で濡れた視界。襖の向こうから、複数の足跡が響く。

「……ガープ」

眩くのは、シキだ。

最初に現れたのは、ウタもよく知る老人だった。だが、彼女がよく見る笑みを浮かべたいいつもの表情ではなく、その表情は憤怒に染まっている。

続いて、複数の人影。

現れるのは、海軍本部中将モモンガ。そしてその後ろからスモーカーとたしぎ、そし

てオリンたちウタの部下が現れる。

「おいおい、何の真似だガープ？」

玉座からシキが問いかけるが、彼は応じない。腕を組んで黙しながら、射殺さんばかりの目で周囲を睨みつけている。

そして。

最後に。

「……………あ……………」

滲む視界の中で。

ウタは、確かに見た。

「……………ルフィ……………」

彼女にとって、この世で一番大切な人の姿を。

「何だ小僧、生きて」

「おい」

底冷えのする声だった。

純白のスーツと、血に染まった正義のコートを身に纏い。

「どうして、ウタが泣いてるんだ」

一歩ずつ、彼は歩を進める。

「お前が、やったのか」

そして彼は、ウタに近付こうとしていた道化の前で立ち止まった。

道化は笑う。

「ただの躰だ」

「そうか」

その、瞬間。

絶大なる殺意と憤怒が、周囲へと伝播した。

その気に当てられ、その場にいた全員が動きを止める。中には、気を失う者さえいた。それは、覇王の資質。

名を、〃霸王色の覇気〃。

「……やはり、持つて生まれたか」

老人の眩きは、宙に消えていく。

道化は動けなかった。不意の覇気を受け、反応が遅れ。

「ヴォゲアアツ」

!!!???

振り抜かれたのは、渾身の力を込めた拳。轟音と共にその巨体が吹き飛ぶ。

あまりの威力にその巨漢は数人の海賊を巻き込みながらもなお止まらず、隣室へ突っ込んだところでようやく止まった。

「すまねえ、ウタ」

隣に立った彼は、言う。

「もう少しだけ、待つててくれ」

泣くなど、彼女は己に言い聞かせた。

泣いていたら、彼の姿が見えないのだから。

「あいつを、ぶっ飛ばしてくるから」

静かな彼の言葉が、その恐ろしいまでの怒りを伝えてくる。

だが、いいのだ。

彼は、来てくれた。抱え込むようにして持った麦わら帽子の感触が伝えてくれる。

この帽子を被ったあの人の、大きな背中が好きだった。

この帽子を被ったあなたの、笑う顔が好きになった。

だから、持ってきたのだ。

これは、彼女にとって何よりも、誰よりも信じられる人たちの大切な宝物だから。

勇気を。

ほんの少しでも、勇気をもらうために。

「……………うん……………」

あの時、彼を救うために離れた時。

彼女は、彼に告げた。

それは今更のことだった。しかし、だからこそ言葉にしたのだ。

あの時、彼にだけ聞こえるように言った、言葉とは。

たったの、一言だ。

——“信じてる”

逃亡海兵ストロングワールド⑨

第八話 開戦

その襲撃者たちを前に、誰もが次の動きをとれないでいた。

言動こそコミカルで道化そのものであるが、ブルチネラの力は決して偽りではない。五億近い懸賞金を懸けられている海賊が、弱いはずがないのだ。

だがその男は、一人の青年に一撃によって沈黙している。周囲には彼の海賊団の部下たちが集まっているが、気を失っているらしく起き上がる気配がない。

「……あの小僧は」

呟くのは、『海災』アルキデイクスだ。彼はシキと共に、その青年の姿を見ている。筋のいい若者であると、彼は思っていた。だが、シキに完膚なきまでに敗北したはずだ。それが、この短時間で。

一体何があったのか。いや、単純な話かとアルキデイクスは思う。

人はいっただって、その身に秘めた意志一つで強くも弱くもなるのだから。

「しかし、面白い顔ぶれだ」

「『海軍の英雄』を筆頭に、海軍中將とアラバスタの英雄共か」

つまらなさそうにアルキデイクスの言葉に続くのは、『墓荒らしのレムナント』だ。彼の言うように、この場には今の海軍において有名人とも呼べる者たちが集まっている。

「スモーカー、ルフィ、たしぎ。今をときめく海軍のヒーローに、その部下。更にはガープにモモンガとなア。豪華なメンバーじゃねえか」

立ち上がり、笑いながら言う『蹴撃のドリマー』。この場にいるのは、『新世界』を生き抜いている海賊である。『情報』と言うものの重要性を極限まで理解しているし、その彼らが海軍の重要人物を知らないはずがない。

アラバスタ事件において活躍し、『七武海』の一角を落とした者たちと、シキもかつて所属していた『ロックス海賊団』を壊滅させた『英雄』。そして新時代の英雄を育てたとされる海軍本部中將。彼が言うように、あまりにも豪華過ぎるメンバーだった。

「しかし、無謀じゃ」

呟くのは、『毒蛇のカガシャ』だ。それを合図にしたかのように部屋の両側の襖が開く。そこには、無数の海賊たちがいた。

「カガシヤの言う通りだ。……なア、ガープ。お前とは長い付き合い、古い馴染みだ。だからわからねエ。おめエはとんでもねエ大馬鹿野郎だが、勝算のねエことに平気で突っ込むような野郎じゃねエはずだ」

ガープは無言。腕を組み、黙している。シキが眉を顰める中、彼らの後ろにいた女性海兵が動いた。

「准将、手当を」

「……あ……」

「痛むでしょうが、我慢してください」

周囲の海賊も、自分達のことにも気にした様子もなく、シキへ背を向けてウタの傷の手当を始める女性海兵。

ほう、とアルキディクスが楽しそうに笑うとシキが彼をジロリと睨んだ。その後、シキは改めてガープを見据える。

「おめエがいくら強かろうが、たった九人で何ができる?」

「関係ねえよ」

応じたのはガープではなく、一人の青年だった。

その青年を、世界は「麦わらのルフィ」と呼ぶ。

「お前らがどれだけの数だろうが、どれほど強かろうが。おれはお前をぶっ飛ばす。そ

のためにここに来たんだ」

ヒュウ、と口笛を鳴らしたのはドリーマーだ。いい度胸してやがる、と彼は笑う。シキは息を吐くと、おいガープ、とあくまでガープの方へと視線を向ける。

「孫の教育くらいはしっかりしろ。おれのようにな」

「お前の目は節穴だな、シキ。昔と変わらん」

そこでようやく、ガープが口を開いた。

「わしの孫は、わしの自慢の孫じゃ。お前は勝てん」

「二度負けた小僧が、おれに勝てるって？ 馬鹿馬鹿しい」

そして、もういい、と彼は言った。

「敵同士だ。わかり合うことはねエ。お前もあの時代を生きた男だ、名残惜しいが……」

「——しかし、お前も衰えたようじゃな」

互いに歳じゃ、と言うガープの言葉に、シキが言葉を止める。

「疑問に思わんのか？ 何故、わしらがここにおるのか」

それについてはこの場のほぼ全員が確かに疑問に思っていた。メルヴィユはシキの能力により、遙か上空にある。そこへ辿り着く手段など、そうは多くないはずだ。それこそ招かれでもない限り。

シキの思考が目の前の、かつての宿敵の一人のその言葉によって回り始める。だが、

彼が結論を出す前に答えが来た。

「報告します！」

息を切らし、一人の男がこちらへと走り込んできたのだ。その男は司令室にいるはずのシキの部下の一人である。

「取り込み中だ」

駆け込んできた男にそう告げるが、彼は退かなかつた。

「至急お耳に入りたいことが！」

「……言ってみろ」

促す。そして、彼が告げた言葉にシキを含めてこの場の全員が驚愕することになる。

「突如複数の照明弾が打ち上げられ、時を同じくして無数の飛行物体がこちらへ飛来！」

電伝虫の映像を確認したところ、メルヴィユに着弾したその飛行物体より多数の海兵が現れております！」

ざわりと、周囲の海賊たちを含めて動揺が広がる。当たり前だ。このメルヴィユに、海軍は到達する手段がないと思っていたのだから。

「時代の変化というのはわしらのような老人には辛いもう、シキ」

「貴様が脱獄した二十年前から、海軍は対策を考え続けていた。かつての貴様へ我々は手が届かなかったが、今の我らの手は貴様に届く」

モモンガが宣言するように言う。わしは知らなかったが、とガープがボソリと呟いたが、幸いにもそれは誰にも届かなかった。

そう、海軍は空への対抗手段を模索し続けていたのだ。それはシキの能力がその凶悪さ故に猛威を振るったからであり、そこから連想されるいつか来るかもしれない空の脅威への対抗手段のためであった。

尤も、未だ完成には遠く現時点の成果も一人の天才の存在による部分があまりにも大きいのだが、それをこの場で敢えて言う必要はない。

「戦争をするんだらう、『金獅子のシキ』？ お前の望み通りの展開だ」

煽るように言うのはスモーカーである。その言葉を聞いて、周囲に動揺が伝播した。

先程の話では、高みの見物で終わるはずだったのだ。それがいきなり、海兵たちの上陸を許すなど。

「狼狽えるんじゃないエ!!」

だが、海賊たちの動揺をシキはその一喝で鎮めてみせる。

「予定が多少変わったただけだ！ 元々戦争の予定だっただろう！」

そしてそのまま、シキは彼の周囲にいる人間に言葉を紡ぐ。

「インデイゴ、スカーレット！ 予定通り怪物共を解き放て！ マリンフォードを蹂躪しろ！ ドリーマー、アルキデイクス！ おめえらは乗り込んで来た海兵共を返り討ちにしろ！」

恐れることはねえ、とシキは言う。

「どんな手段を使ったか知らねえが、この場にいるのはたったの九人だ！ 本当にこのメルヴィユに正面切つて乗り込めるつてんならここにそれだけしかいねえなんてことはありえねえ！」

限界があるんだよ、とシキは笑う。

「だからこいつらはこの場にたつた九人で乗り込んできた！ 本当に海軍の本隊が乗り込めるつてんなら、もつと大軍でここへ乗り込んでくるはずだ！ こいつらを皆殺しにし、数で潰せばそれで済む！」

冷静な判断だった。シキは確かに、現状の海軍の状況を冷徹に見据えている。

彼の言う通りなのだ。ガープたちがやってきた試作機は定員は最大でも六名程度であるし、その後に完成品として作られたものについても一度に送れる数はそう多くはない。

結局のところ、攻め込む側としての海軍は数の上で劣勢だ。

「二十年をかけた計略だ。多少の予定変更は織り込み済み。——おめエらも、ただ見るだけは退屈だったろう！ 向こうがわざわざここちの本拠地に乗り込んできてるんだ！ 迎え討つてやりやアいい！」

「「おおっ！」」

流石に、かつて「四皇」に名を連ねた大海賊である。彼の檄で、動揺は一瞬で霧散した。

指示を受けた幹部たちが立ち上がる。その中でもアルキデイクスは、与えられた指示にぼやくように言った。

「『海軍の英雄』と拳を交える機会を失うのは、少々残念であるが」

「文句あるのか？」

「いいや、ないとも。シキ殿は約束を果たしてくれた。ならば、今度はこちらの番である」

そう言うと、ドリーマーと共に彼は部屋を出て行った。インディゴとスカーレットもそれに続くように右側の扉から海賊たちを掻き分けて部屋を出ていく。

「ようやく始まるぞ」

「ウホッ」

彼らの表情も態度も、余裕そのものだ。シキの計略に信を置いて以上、動揺する理由はない。

「おい、お前ら。——ウタを頼む」

「はい。准将、私たちが護衛します。増援部隊と合流を」

振り返らずに言うルフィに、オリンが応じる。そのまま彼女はウタへと肩を貸し、シキたちに背を向ける。

「行かせると思うのか？」

「追わせると思うのか？」

シキの問いに応じたのはルフィだ。彼はそのまま、弾かれたように前に出る。

くだらねエ、とシキは吐き捨てた。彼は既にルフィの動きを見切っている。やはり注意するべきはガープ、そう判断を下す彼の前で。

「ギア、3」

不意に、その青年が自らの親指を咥えた。なんだ、と思う瞬間。

「『骨風船』！」

「何？」

突如、青年の右腕が大きく膨らんだ。そして、その膨らみが体を伝って左腕へと伝播する。

「『ゴムゴムの』!!」

シキが両腕を前に出す。彼の鍛えた見聞色、そして長き戦いの経験がその行動を取らせたのだ。

そして。

開戦の狼煙を上げる一撃が、放たれる。

「『巨人の銃』!!!」

轟音と共に、その一撃が炸裂し。

それが、戦争開始の合図となった。



背後の玉座、そして周囲の柱、更には奥の扉を破壊しながら後方へと吹き飛ばされるシキ。それを追おうとするルフイに、彼の祖父が声をかける。

「お前に任せる」

頷き、走り出すルフィ。その彼の背に、*“歌姫”*の聲が飛ぶ。

「ルフィ!! 勝って!!」

「当たり前だ!!」

そのまま、彼は奥へと突っ込んでいく。その姿を見て、ようやく海賊たちは衝撃から立ち直った。

「お、追え!」

「親分を援護しろ!」

浮き足立つ海賊たち。しかし、突如彼らの周囲に白煙が立ち込める。

「ホワイト・アウト!!」

海軍本部准将、スモーカー。彼の持つ悪魔の実の力は、*“モクモクの実”*。己の体を煙に変える力だ。

煙であるが故に、海賊は煙を掴めない。しかし逆に、煙は海賊を掴んでいる。そんな摩訶不思議な状況に置かれて混乱する彼らを、スモーカーは雑ぎ払うように投げ飛ばす。

「行けお前ら! 増援と合流しろ!」

「はい!」

怒鳴るように言うスモーカーに応じたのはオリンだ。彼女はウタに肩を貸したまま、この場を離れるために走り出す。

ウタの力は非常に強力だ。彼女を確保することは、海軍にとって最優先事項の一つである。彼女の力一つで戦況が傾いてしまうほどに。

「たしぎ！ お前も行け！」

「はい！ スモーカーさんも武運を！」

故に、この状況は初めから想定されていることだった。可能であればルフィがシキを抑え、ガープ、モモンガ、スモーカーの三人がオリンたちがウタを確保して撤退する時間を稼ぐ。

当初の予定では退きながらのウタ防衛戦が想定されていたが、やはりというべきかルフィが飛び出して行ってしまった。ただまあ、想定内だ。

たしぎが走り出したのを見送り、十手を構えながらスモーカーは言う。

「退きながら戦うと言ったはずだがあの馬鹿……！」

「ルフィに作戦通りという概念はないだろう」

呆れた調子で言うモモンガは、刀を抜くと共に数人の海賊を斬り飛ばした。その斬撃の速度に、動揺が走る。

「ぶわっはっは！ 久し振りじゃのう、この感覚！ さあかかってこい小僧共！」

そして腕を組み、周囲に対して睨みを利かせるガープ。海賊たちが、そんな彼らに尻込む中。

「私が追います」

シキの孫娘、イルが動いた。腰に差した二本の刀の柄に手をかけ、走り出す。その姿に反応したのはスモーカーだ。

「行かせるか！」

「——通してもらおう」

しかし、スモーカーが立ち塞がろうとしたそこへ、イルの右肩の上を通って長大な槍が突き出された。咄嗟に十手で弾くが、想定以上の力に後方へと弾かれる。

「失礼します」

その際に、イルはスモーカーを大きく飛び越え、オリンたちを追って部屋を出ようとする。待て、という言葉が出ると同時に、金属音が鳴り響いた。

横薙ぎに振るわれた槍を、スモーカーの十手が防いだのだ。

「追わせると思ふのか？」

「下手くそなユーモアだ……！」

わざわざ先程のルフィの言葉を口にするのは、大柄な大男。 “大地の王” の異名をとるラウンドだ。

更にもう一人、ナイフを片手に迫る女。

「毒蛇のカガシヤ」か」

「だからなんじや、海軍」

鈍い金属音。モモンガの刀と、カガシヤのナイフ。共に武装色の覇気で強化された二つが幾度となくぶつかり合う。

「親分の言った通りだ！ 数で潰せ！」

叫ぶのは、「墓荒らしのレムナント」。彼は周囲の海賊たちに檄を飛ばす。

「何が伝説だ！ そんなもんカビの生えた過去の栄光に過ぎねえ！」

「なら試してみるがいい、海賊共」

ガープの言葉、それが合図だ。

僅か三人の殿の、決死の戦いが始まる。



メルヴィユ外縁部。そこに複数の巨大な物体があつた。

サイズだけで言えば、小型の船舶くらいはある。だがその形は流線形であり、敢えて表現するならば二つの船をくつつけたような形をしている。

開発者は『第十九式強襲型ロケット』と呼ぶその物体から、複数の海兵たちが降りてくる。何人かは足がふらついており、過酷な旅であったことが窺えた。

まあ当たり前と言えば当たり前だ。『突き上げる海流』で打ち上げられたようなものであり、これで平然としている方が本来ならおかしいのだ。

とはいえ、今回送られた者たちは精鋭である。割と平気そうなのも多いあたり海軍もどうかしている。

「おうブラザー、中々にスリリングな旅だったな」

「全くだ、だが無事に着いた」

「——踊るか?」

「やめなさい」

馬鹿な部下二人を、いつものように一人の女性将校が嗜める。

シキが看破した通り、送り出された第一陣は精々が三百人程度だ。それは事前に情報のあつた怪物たちが跋扈し、大量の海賊たちがいるメルヴィユを攻略することを考えるとあまりにも頼りない数である。

故にこそ、精鋭が選ばれた。本部が厳選した高い戦闘能力と生存能力を持つ部隊の長

を中心ここにこへ送られることになったのだ。

第二陣、第三陣と増援は予定されている。その上で第一陣を任された彼らの役目はいくつもあるが、その中でも最も重要なのは「歌姫」の確保である。

「予定より大分着地地点がバラけたみたいだけど……時間が無い。二人とも、スモーカーくんたちとの合流を急ぐわ。出撃準備を」

「了解！」

第一陣に組み込まれた海兵の一人である、海軍本部大佐「黒檻のヒナ」。彼女は部下二人に指示を出すと、遠くに見えるシキの居城を見据える。

ここから向かうとして、どれだけの時間がかかるだろうか。その間、彼らは無事だろうか。

いや、大丈夫だ。今必要なのは信じること。

「準備が整いました！ 予定よりも少ないですが出撃可能です！」

ヒナの部下の一人が報告してくる。よし、と彼女は頷いた。

「予定通り、複数地点から同時に侵攻を開始します。——戦闘用意」
手袋を咥え、彼女がそう宣言した瞬間だった。

大地が揺れる。

まるで、世界そのものが崩壊するかのような音が響き渡った。



アルキデイクスとドリーマーが、シキの居城の廊下を歩いている。

「しかし、あんた正気かよ？ あのガープに挑みたかったのか？」

「うむ。実に惜しい。……が、海軍にはまだ多くの強者がいる。特にこんな場所まで攻め込んでくるような連中ならば、十分よ」

ドリーマーの問いに対し、そう言い切るアルキデイクス。ドリーマーは肩を竦めた。

「戦闘狂つてのは理解できねえ」

「貴殿は戦いは好きではないのか？」

「蹂躪するのは好きだ。だがな、おれは海賊だ。勝つことが重要なんであって、苦しみなから戦いたいとは思わねえ。だからシキの下についたんだ」

鼻で笑いながら言うドリーマー。なるほど、とアルキデイクスは頷いた。

「実に無法者らしい」

「同じ無法者に言われたくねえな。見下してんのか?」

「いや? 哲学は人それぞれである。私はただ、戦いにのみ己が生を懸けることこそを我が哲学としてきた。貴殿は違う。ただそれだけの話だ」

本当に何一つ蔑む様子もなく言い切るアルキデイクス。ドリーマーはけつ、と面白くなさそうに不満を漏らす。

「あんた、やつぱり海賊じゃねえな。シキの言う通り、『ならず者』だ」

「そうだな。何にも成れていない私は、そう呼ばれるのが相応しいだろう」

そこで、不意にアルキデイクスが足を止めた。なんだよ、と眉を顰めるドリーマーに彼は廊下の向こうの暗闇を見据えながら言葉を紡ぐ。

「すまぬ、ドリーマー殿。海軍への対処は貴殿に頼みたい」

「はあ? 何だいきなり」

「元々私は無頼の独り者だ。貴殿と違い、海賊たちの指揮などできん」

そして、彼は笑みを浮かべた。

その笑みは、『新世界』を生きる海賊であるドリーマーすら一瞬、寒気を覚えた。

「それに、奴を野放しにする方が危険だろう」

そして暗闇の中、一人の男が現れた。

肩に鳩を乗せた、スーツの男。

——『殺戮兵器』ロブ・ルツチ。

「ブルーノが世話になったな」

「誰のことかはわからんが、其奴が貴殿との戦の理由になるなら恩人だな。感謝しよう」
笑うアルキデイクス。

狂つてるぜ、とドリーマーは呟いた。

ロブ・ルツチといえは世界政府の切り札のうちの一人だ。闇の世界に生きる中である程度の深さにある者で彼の名を知らぬ者はいないし、関わるべきではない存在であることは常識である。

だというのに、この人魚のならず者はむしろ歓迎している。

そんな彼を見て、どうしようもねえ、とドリーマーが呟いた瞬間だった。

大地が、大きく揺れた。

まるで、世界の終わりのような音が響く中で。

周囲の音などまるで気にならぬ様子で、『海災』と『殺戮兵器』が向かい合う。

共に、その顔に笑みを浮かべながら。



シキを追いかけていたルフィは、突如揺れた地面にバランスを崩しそうになるのを堪えた。見上げた先、城の中庭、その中空に浮かぶ姿を見つけて彼は叫ぶ。

「シキー！」

「焦るんじゃないエガープの孫。じきに終わる。その後には相手をしてやる」

そして彼は、広げた両手でゆつくりと動かし始める。それに合わせるように、地面が大きく揺れ始める。

ルフィはその揺れに立っていられず、思わず屈んだ。

揺れはどんどん大きくなり、凄まじい音が響き渡る。そんな中、シキの哄笑が響き渡る。

「ジハハハハ!! 見るがいい!! これがおれのだ!!」

その光景をマリノンフォードで見ていた海兵たちは、世界の終わりかと思ったと後に語る。

空を飛ぶ島。それだけでも驚愕だというのに、中心に浮かぶ島——メルヴィユの周囲にいくつも浮かんでいた島々が、突如急降下を始めたのだ。

空より飛来する、大質量の島々。それらはマリンフォードの前面、軍艦の配置された場所を目掛けて落ちてくる。

衝撃と、破壊。

衝撃は大波を作り、大地を削る。無数の軍艦が粉碎され、混乱が引き起こされる。

そして、混乱する海軍を、世界政府を嘲笑うかのように。

怪物たちの咆哮が、夜の闇に響き渡る。

それが、開戦の合図となった。

「さて、ガープの孫。いい加減鬱陶しい。——殺すが、構わねエな？」

大海賊の宣告。それに対し。

「やってみろ！ 勝つのはおれだ!!」

若き海兵は、力強く応じた。

——戦争が、始まる。

逃亡海兵ストロングワールド⑩

第九話 “正義”

とある、“新世界”の島の一つ。

人の住まぬ無人島であるその島は、動物たちの楽園だった。多くの獣たちが住まうその島では常に多くの鳴き声が響いており、彼らはその生を謳歌していたのだ。

だがこの日、彼らの声の全てが途絶えていた。

小動物たちは勿論のこと、普段は我が物顔でこの島を闊歩する食物連鎖の頂点たる動物たちでさえ隠れるようにして己の巣穴に潜り込んでいた。

彼らは獣だ。しかし、それ故に理解している。

今この島にいる人間たちは、彼らが近寄ることさえ許されないバケモノであるのだと。

「随分と大袈裟じゃのう、カイドウ！」

「そいつはお互い様だ！ 大将二人に中将六人！ 随分と豪華じゃねえか！」

「それはこつちの台詞だよオ、カイドウ」

向かい合うは、海軍本部最高戦力の二人と地上最強生物。それぞれの後方には、彼らが率いる無数の兵がいる。

海軍本部と四皇。その二つが向かい合うこの状況ははつきり言つて異常であつた。双方共に強大な力を誇つており、ぶつかり合えばただでは済まない。そうなれば、残る勢力にその隙を狙われる。

故に、綱渡りの均衡が今までは成立していたのだ。しかし、とある過去の残滓がその均衡を崩した。

「しかしお前が『金獅子』の下に付くとはのう！」

「あのジジイとは昔からの馴染みだ！ だが赤犬、おれは下についた覚えはねえ！ あのジジイは言つたのさ！」

海軍本部大将、赤犬の言葉に地上最強の生物と謳われる四皇が一角、『百獣のカイドウ』が応じる。

「——『戦争をする。おめエも来るか？』」

その言葉に、赤犬と黄猿が眉を顰める。

「さあ、御託はここまでだ！ 始めようじゃねえか！」
彼の得物である金棒を担ぎ、最強が吠える。

「戦争を!!」

放たれるのは、*“霸王色の覇気”*。地上最強の生物のそれに耐えられぬ者は、戦場に立つ資格はない。

経験浅き、或いは実力不足の海兵たちが倒れていく。
だが、その正面に立つ男は。

「総員、戦闘準備じゃー！」

最前線に立つ *“正義”* は、揺らがない。

もう一つの *“戦争”* が、*“新世界”* で幕を上げた。



夜の闇の中、獣たちの咆哮が響き渡る。

落下した浮島から、奴らがやってくるのだ。

「報告します！ 大将赤犬と黄猿率いる部隊がカイドウと戦闘を開始！」

マリルフォード正面。即席で用意された高台に立つセンゴクへ、海兵が報告する。それに頷きを返すと、センゴクは拡声器を手に声を張り上げた。

「総員、すぐに体勢を立て直せ！ 上空のメルヴィユでは我らの仲間が既に戦っている！ ！ここに『正義』を示せ！ 海賊の！ 悪の進撃を許すな！！」

「『おおおっ！』」

浮島の落下という衝撃により混乱していた海軍が、センゴクの一喝により落ち着きを取り戻し始める。

秩序側にありながら『霸王』の資質を持つ男。かつてシキを捕らえた男が宣言する。

「迎え撃て!!」

獣の咆哮が、その宣言に重なる。

地響きを響かせ、無数の怪物たちがこちらへと突進してくる。

「……あれが、報告にあった怪物共か」

ルフィとウタの部下たちによる報告で、怪物たちのことは聞いていた。その強さは一兵卒では対処は難しく、油断すれば左官クラスの手兵でも一方的に殺されかねない。

その報告により、一夜にして東の海を滅ぼした元凶であるという確信を海軍本部は得た。更に言えば、シキのこの戦争における自信の原因でもあると。

「なるほど、相応の圧はある。海軍に対し、人の数では勝てん。故に人ではない存在を利用したか」

彼の「海賊王」がいた時代であっても、今の大海賊時代であっても、その遥か以前から。

この海の、弱き者を守ってきたのはいつだって海軍だ。

その誇りと事実こそが、彼らの「正義」だ。

「だが、貴様の野望もここまでだ。——砲撃用意!!」

海軍本部から、或いはその周辺の建物全てから無数の砲台が顔を覗かせる。

時間は決して多くはなかった。だが、それでもこの地の海兵たちは、集った勇者たちは己の出来ることをしてくれたのだ。

故に、敗北はない。

この地に、「正義」は屹立している。

「砲撃開始!!」

直後、轟音と衝撃、そして爆炎が視界を覆った。

矢継ぎ早に放たれる砲弾が炸裂し、怪物たちを吹き飛ばす。稀に数頭、抜け出てくるものがあるが――

「曲がった太刀筋大嫌い。――直角飛鳥、〴〵ボーン大鳥〴〵!!」

鳥の形をした、飛ぶ斬撃。それが、抜け出てきた虎のような猪のような姿をした怪物を斬り捨てる。

やったのは、〴〵船切り〴〵の異名を持つTボーン大佐だ。彼だけではない。怪物たちが突撃してくる最前線には、中佐以上の精鋭たちが配置されている。

「流石です大佐!」

「よし!、いけるぞ!」

その光景に歓声が上がる。そして逆に足が止まるのは怪物たちだ。

彼らにとって、人間とは弱い生き物だ。当たり前といえど当たり前である。シキたち彼らを強化し、実験してきた者たちは直接の対峙をせず、彼らが見てきたのは彼らが嫌う植物に隠れて暮らす者たちだけなのだから。

故に、彼らは知らないのだ。

この世界には、彼らの想像を遥かに超える強者がいることを。

「足が止まったな。……哀れだが、見逃すわけにもいかん」

呟くセンゴク。彼らもまた被害者だ。しかし、だからと言って捨て置くことはできない。

そして、追撃の砲撃の指示を出そうとしたところで。

「ウホホホホ!! ウホホホホホホホ!!」

まるでゴリラのドラミングのような音と共に、雄叫びのような声が響き渡った。なんだ、と海兵たちが思うと同時に、状況の変化が訪れる。

——!!

怪物たちの咆哮が、夜の闇の中に轟く。

原始的な、死に対する恐怖で動けなくなっていたはずの怪物たち。彼らが再び侵攻を開始する。

「砲撃開始だ!」

指示を出すセンゴク。爆炎と轟音、そして咆哮が木霊する。

その最中、センゴクは電伝虫を手を取った。

「別働隊。やはり司令塔がいるようだ。——見つけ出せ」
『了解しました!』

応じる声はガープの部下たちのものだ。彼が鍛えた精鋭たちを、彼は単身出撃する際にセンゴクに預けたのだ。

「任せただ」

言い切ると、センゴクはふう、と息を吐いた。彼があのもるヴイユに行くと言いつ出した時のことを思い出す。

“わしが行く。頼むセンゴク、一生の願いじや”

“何度目だ、貴様の一生は。……相手がシキである以上、お前は”

“頼む”

強い意志の込められた目であった。散々迷惑をかけられてきたが、この目をした時の彼が起こす奇跡をセンゴクは何度も見届けてきたのも事実である。

だからこそ、思ったのだ。

(ああ、そうだな。……貴様の、家族だ)

思い出すのは、あの日失った一人の海兵だ。

息子のように思っていた。大切だった。生きていて……欲しかった。

だから、認めただ。

それが、海兵として——元帥と中將という立場からすれば切り捨てなければならぬ情である。知りながら。

「そちらは任せただ、ガープ」

空に浮かぶ島を見つめ、センゴクは言う。

かつて、彼はガープと共にこのマリンフォードでシキを迎え撃つことになった。その時の勝利は英雄的偉業として語られている。

だが、とセンゴクは思う。確かに勝利はしたし、シキは個人の戦闘能力としても異常な力を持つ怪物だ。故にこそシキはかつて「四皇」の座にあった。

しかし、あの日のあの男は。

「おれがロジャーを殺してやる!!」

ロジャーの処刑の話聞き、完全に頭に血が昇っていたのだ。

シキの凶悪さ、その一つにその頭脳がある。あの男が言う「計略」とは悪辣で、残酷で、どうしようもないほどに緻密。故に海軍は長きに渡って捕らえることができず、脱獄後もその足取りを追うことができなかった。

だから、センゴクの胸には未だ疑念が残り続けている。

(何を企んでいる)

二十年をかけた、あの男は言っていた。ならば、これで全てではないはずだ。

メルヴィユを睨むようにして見据えるセンゴク。この戦争は、まだ始まったばかりなのだ。



マリソフォードにおける怪物たちによる侵攻。それと時を同じくして、メルヴィユでも怪物たちとの戦闘が始まる。

当初は三百人を三部隊に分けての同時攻撃の予定であったが、当初とは着弾地点が大きくズレてしまったため五つの部隊になってしまった。

合流している時間はない。子電伝虫で連携を取りつつ、進むのだ。

「無駄な戦闘は極力避け、侵攻を開始する！ 怪物共については極力戦闘を避ける！」

今回の第一陣における最高指揮官として派遣されたドーベルマン中將が指示を出す。五部隊はそれぞれ彼と少將が一人、大佐三人が率いることになったが、全体の指揮官は変わらず彼だ。

その彼は一刻も早いシキの居城への進軍を即座に決定した。兎にも角にも “歌姫”

の確保は急務だ。彼女が敵側に従うことはありえないだろうと人となりを知る者なら誰もが思っているが、この世には「悪魔の実」と呼ばれる力がある。彼女の意思とは違うところで「ウタウタ」の力が発動する可能性は否定できない。

「ドーベルマン中將！ 本部より入電！ 「新世界」で大将赤犬、黄猿両名が率いる部隊が「百獣海賊団」との戦闘を開始したとのことです！」

「始まったか……！」

かつての「四皇」と現代の「四皇」。その両方が動き出すという尋常ならざる事態。それが、この戦いがどれほどの異常事態であるかを示している。

どれほどの犠牲が出るのか、そしてその果てにどんな結末が訪れるのか。

だが――

「オリン中尉より入電がありました！ ウタ准将を確保！ 城を脱出するために移動中のことですよ！」

「何、本当か!？」

ドーベルマン中將だけではない、彼が率いる海兵たち、そして少し遅れて伝達される他の部隊の海兵たちからも歓声が上がります。

彼女の確保については先に述べた通り最優先事項である。あの力一つでこの戦争を終わらせる可能性さえあるのだ。それを少数の先遣隊である彼らが確保した事実はある。

まりにも大きい。

「我らも負けてられんな。急ぐぞ！ 中の状況は？」

「は、ガープ中将、モモンガ中将、スモーカー准将がその場に残り殿を務めているのとこのです！」

「ならば准将のところはルフィ大佐が一緒か！」

遠くから、獣の咆哮が轟いた。ドーベルマンは手で部隊に警戒体勢を取るよう指示を出す。

報告にあつた、尋常ならざる進化を遂げた怪物たち。一体どれほどのものか。

「いえ、それが！」

「なんだ!？」

「モンキー・D・ルフィ大佐は『金獅子のシキ』と単独で戦闘状態に入ったとのことです！」

他の海兵たちの間で、驚愕の宿ったざわめきが広がる。ドーベルマンもまた驚いたが、同時にそうだろうなという妙な納得も覚えた。

アラバスタの一件から、『麦わらのルフィ』の名は『新時代の英雄』という称号と共に世界に轟いた。確かに凄まじい功績であるし、それをドーベルマンは否定しない。

だが、彼は同時に海軍本部における問題児の一人でもあるのだ。彼が功績を上げる時

は、大体問題行動とイコールである。……実を言うと、勲章の授与やら昇進の辞令式でさえ何事もなく終わったことはない。入隊初日で始末書はレコード記録である。

いつも愚痴を吐いていたのは大将赤犬ことサカズキだ。一度ドーベルマンは、海賊の拿捕と街の半壊を同時にやってのけた時に頭を抱える彼を見たことがある。

“見ろ、ドーベルマン。……あんの馬鹿者”

“これは……しかし、六千万の賞金首であれば大手柄では？ 彼はまだ十代の若者でしよう”

“問題はそこじゃアない。よう見ろ、街を半壊させたと書かれちよる”

“……ああ”

“この復興でまた金がかかる。……街の住民からは感謝されちよるのが、せめてもの救いじゃが。帰ってきたら説教じゃア”

だが、その時の赤犬の表情は穏やかであった。仕方のない奴らじゃ、という彼の言葉はドーベルマンだけではなく赤犬と直接接触したことのある海兵なら誰もが一度は聞いたことのある愚痴である。

その時から、ドーベルマンも少し気にするようになったのだ。あの破天荒で、真っ直ぐで、しかし、一本の筋の通った若者を。

そしてだからこそ、納得してしまった。彼ならそうするだろう、と。

「海軍本部の大佐が、元とはいえ『四皇』に単独で挑むか。——負けてはいられんな」
今回の戦争の仕掛け人、『金獅子のシキ』といえは伝説の大海賊だ。その悪名を聞けば、海軍本部の中将クラスでさえ一瞬躊躇する。

だが、とドーベルマンは思う。あの若者は一切の躊躇もなく向かっていったのだろうか、と。

だから彼は、クロコダイル討伐という偉業を当時中佐という地位で成し遂げたのだ。長きに渡り砂の国アラバスタに君臨し続けた『七武海』の謀を暴き、あの国を救ってみせた。

「中将！ 前方より何かがある——何だあの生き物!?!」
「見えている」

直後、ドーベルマンが飛ぶように前に出た。地面を砕くような威力の脚力で前に出た彼は、そのまま刀の柄に手をかける。

眼前から迫り来るのは、巨大な熊だった。だがその両腕は通常のそれと比べて極端に巨大であると共に長い。

その熊は一切の減速も見せず、目の前に迫ってきた獲物を狙う。

「一刀居合」

激突する。

ドーベルマンを見守る部下たちがそう思った瞬間だった。

「『断割』!!」

下から上、或いは上から下。どちらの方向へ降り抜かれたのかを、彼の部下たちは理解できなかった。

ただ目の前に広がるのは巨大な怪物が真正面から斬り裂かれ、倒れる姿だ。

「臆するな!」

刀を鞘に収め、海軍本部中將が吠える。

「我らの『正義』に敗北はない! 悪が栄えた試しはないのだ!」

海兵たちの声が、夜の闇、怪物たちの棲家へと轟く。

戦争はまだ、始まったばかりだ。



ここへ乗り込んできた第一陣への連絡を終え、オリンは後ろを三人の部下に囲まれる形で走るウタへと声をかける。

「准将！ ドーベルマン中将と連絡が取れました！ 第一陣三百名がこちらへ向かっています！ 合流を急ぎましょう！」

「中将が」

ドーベルマン中将についてはウタもよく知っている。少々苛烈なところはあるが、それはひとえに海賊という「悪」から市民を守るためだ。その目的についてはウタも大いに賛成できる部分であるし、尊敬もしている人物だ。

「中将が来てくれてるんですか！」

ウタの部下の一人である海兵も喜ぶ。敵地のど真ん中でこの人数という、絶望的な状況で光が見えたのだ。当たり前といえど当たり前だ。

「ルツチさんたちの予想通り、シキがあの場合に海賊たちを集めていたのが有利に働いていますね。警備が少ない」

先頭を走るたしぎが言う。その通りだ。決戦前、シキが結束を固める意味でも行つた盃を交わすという行為。そこを突くべきだと提案したのはルツチである。諜報員でもある彼はシキがやろうとしていたことをきつちりと把握していたのだ。

そこを襲撃し、ウタの奪還を行う。色々と予定が崩れた、というカルフィが単独でシキとの戦闘状態に入ったのは作戦外であるが他は概ね予定通りである。

「でもおれ、大佐がああピエロぶん殴った時嬉しかったですよ」

「ああ、スツキリした。その後も含めてな」

「やっぱ大佐だよ。大佐なら、シキにだって勝つさ」

ルフィは既に二度、シキに敗北している。だが、彼らはルフィの勝利を疑わない。ルフィとウタという、とんでもないトラブルにはかり巻き込まれる二人の部下である彼らは通常の海兵たちよりも遥かに過酷な戦場を潜り抜けている。

一体この海兵が、“七武海”が裏で率いる秘密結社と正面から戦い、命懸けで戦うなどという経験をするというのか。更には空島では“神”を名乗る化け物と、それが率いる兵たちとの劣勢の中での戦争である。彼らの肝の据わり具合は下手な将校よりも上だ。

「ええ。私たちはその大佐に准将を任された。なら——」

オリンが言いかけたところで、廊下の曲がり角から足音が響いた。直後、オリンが銃を構え、前に出る。

「いたぞー！」

「殺せー！」

現れたのは三人。刀が一人、銃が二人だ。

だが、その姿見えた瞬間に、オリンが引き金を既に引いている。

「うー！」

「うあつ!？」

「がつ!」

それぞれが武器を持っていた手。そこに、銃弾が一発ずつ叩き込まれたのだ。そのまま彼女が姿勢を屈め、足を止めた背後からたしぎが走り込む。

「失礼します!」

腕を撃たれ、武器を取り落とすという致命的な隙を晒した彼らに対応することなどできなかつた。そのまま彼女が振るう刀の一撃により、三人の海賊が倒れ伏す。

「……おれらの周辺の女海兵はヤバいのしかないのか」

「なんやかんや中尉、BWのナンバーエージェント一人倒してるからな……おれらやられたのに……」

「上二人がバケモンなだけだしな……」

その言葉を、ウタもオリンもたしぎもスルーした。そもそも強くなければウタは准将などという地位にいないし、オリンは二人の部下の中の筆頭にいない。たしぎもまた、スモーカーの副官という地位にいないのだ。

「ごめんなさい、この錠さえなければ」

前の二人に対し、ウタが悔しそうに言う。海楼石の錠は悪魔の実の能力者の力を封じるだけではない。その発する海の力により、錠をかけられた者の力そのものを弱体化さ

せる。人によつては動けなくなることさえあるのだ。

それでも他の者たちと共に走れるのは、流石に准将の立場にあるだけのことはある。だが、そんな自分が足手纏いであることに誰よりも彼女自身が歯痒い思いをしていた。

「大丈夫です、准将」

たしぎと共に先導するオリンが、そんな彼女に対してそう言葉を紡ぐ。

「いつも助けられてばかりなんです。たまには力に」

「その通りですよ！」

「大佐に任されてるんです！ 大船に乗ったつもりで！」

「必ず守りますから！」

オリンに続いて、笑顔で言う部下たち。ありがとう、とウタは頷いた。

「ウタさんの力はこの後に確実に必要になります。あなたの歌は、この戦争を終わらせる力を持っている」

たしぎが言う。その言葉に、ウタは頷いた。

ここに来る途中、この少数での襲撃の意図については説明されている。まずは何を置いてもウタの確保を最優先すると海軍は決定を下し、そのために動くようにという指示が出ているのだ。

この戦争を終わらせる力を持つ存在。それこそが“歌姫”なのだから。

「しかし、鍵はどこにあるんでしょう？」

「流石にそれを探している時間はないから、場合によっては本部から増援を貰わないと」
領き、オリンが曲がり角の先に誰もいないことを確認した瞬間だった。

「黙ってそうさせるとでも？」

直後、彼女たちの上に何かが飛んだ。

「下がって！」

たしきが指示を出し、全員で後方へと飛び退く。紙一重で天井から落ちてきた瓦礫に押し潰されることから逃れることができた。

振り返る。そこにいたのは、長いロングスカートの女性だ。

「あなたは……！」

ウタはその人物に見覚えがある。シキに付き従い、彼の孫娘と呼ばれる女だ。

「ウタ様、お戻りください」

「戻るわけないでしょ」

静かに言う女性——イルに、ウタが応じる。おい、と彼女の側の海兵が小声で呟くように言った。

「あの女、刀しか持っていないよな？」

「ああ、二本の刀だけだな」

じゃあよ、と彼は言う。

「どうやって天井を落としたりしたんだ？ あの女は何をした？」

「斬撃を飛ばしただけです」

そうでしょう、と言うのはたしぎだ。その隣では、オリンも銃を構え直している。

嘘だろ、と言ったのはウタを庇うようにして立つ海兵だ。

「Tポーン大佐のそれなら見たことあります。けど、まさか」

「シキの下にいるのはそういう手練れだということですよ」

油断なくイルを見据えながら言うたしぎ。イルは腰の刀、その柄に静かに触れる。

「もう一度言います。ウタ様、こちらへ」

「問答は無駄よ」

もう一度、拒絶の言葉。イルは一度目を閉じた。

そして、一息。

「二刀流」

それは、「六式」が一つである「剃」の動きであった。一瞬、文字通り消えたかのよう
うにその姿が見えなくなる。

反応できたのは、三人だけだった。

「春雨」

金属音が響き渡る。前に出たたしきが、振るわれた刀を弾いたのだ。

しかし、完全には防ぎ切れていない。その右肩から血が噴き出す。

「のー」

それに応じたのはオリンだった。たしぎの眼前、刀をぶつけ合ったために動きの止
まった一瞬を狙い、引き金を引く。

イルはそんな彼女を一瞥、後方へステップを踏むように下がると、二刀を十字に構え
た。

「彼岸時化」

「花時雨」！

その構えから繰り出される連続攻撃に、たしぎが応じる。

金属音が鳴り響き、拮抗する両者。しかしそれも一瞬だ。

「ッ、くっ！」

「——では、無理矢理にでも連れて行きます」

たしぎの刀が上へと弾かれる。手放すことはなかったが、胴が空いた。

「たしぎさん！」

ウタが叫ぶ。そのまま彼女は「嵐脚」を放とうとするが、海楼石で弱った彼女にはそれができない。

そこに、刃が迫ったところで。

「『エアドア』」

突如、空間に扉が開いた。そこから出現した大男が、拳を振るう。

鈍く、重い音。イルが刃ではなく、通常のそれより長い柄の部分で拳を受け止めたのだ。

滑るようにして横へと移動するイル。空気のドアから、ゆっくりと牛の角のような髪型をした男——ブルーノが現れる。

「今のを防ぐか」

「ブルーノさん！」

声を上げたのはオリンだ。彼は頷くと、構えを取る。

「準備は終わった。後は『歌姫』の奪取という任務を果たすだけだ」

強力な援軍が現れた。イルが息を吐く。

「CP9。お爺さまの言葉によれば、『闇の正義』とか。……何が、闇か」

そして、彼女が再び動き出す。『剃』による高速移動。正面から突っ込んだと思った瞬間、いつの間にか彼女が側面に回り込んでいた。

高速移動術である『剃』だけでなく、『月歩』をも使いこなしている。横薙ぎに振るわれる二本の刀。それを見て。

「『鉄塊』」

ブルーノがその一撃をその身で受け止める。金属音が響くが、その刃はその身体に届いていない。

それを見て眉を顰めるイル。彼女は一度後方へと飛び退くと、刀を二本とも鞘に収めた。

「二刀流」

ピクリと、ブルーノの眉が歪む。同時、彼は自身の肉体に力を入れた。

「『天気雨』！」

「『鉄塊・剛』！」

金属音と、肉を斬る音が響く。

ブルーノの左肩。そこから血が流れる。

「……思ったよりも硬いですね」

「まさか斬られるとは」

互いに、表情は静かだ。

そして。

「心外だ」

眩きと共に、ブルーノが飛んだ。最短距離をいき、右足を振り抜く。だがそれを、イルは屈んで避ける。

そのまま刀を振るおうとした彼女を見てか、ブルーノは空へと飛んだ。見上げる者と見下ろす者。その視線の交錯は一瞬だ。

「嵐脚」

放たれる蹴り技の斬撃。それを後方へ飛んで避けるイル。だが、その着地を狙い、銃声が響いた。

オリンの放った銃弾。しかし、その弾丸はイルの刀、その鏢の部分で防がれてしまう。どんな身体能力と動体視力だ、と思うオリンを他所に、イルの眼前からたしぎが迫る。

「はあっ！」

「……………ッ」

振るわれた刀を右手の刀で受けるイル。そのたしぎの上から、ブルーノが迫る。

「鉄塊・砕！」

「ぐっ！」

左手の刀で受けるイル。だが、*“鉄塊”*で強化された上に上空から*“月歩”*で速度の上がつた一撃を受け切れる状況ではない。

吹き飛び、後方へと拭き飛ばされるイル。そのまま彼女は、彼女自身が天井から斬り落とした瓦礫へと突っ込んでいった。

土煙が上がる。だが、ここにそれで終わったなどと思う者はいない。

「……己の未熟を、恥じるばかりです」

立ち上がり、ロングスカートの埃を払いながら女性が言う。

「お爺さまの孫娘を名乗り、あのお方の弟子を名乗る以上。敗北は、許されません」

しかし、と彼女は言う。

「私は未熟者故に、皆様を殺すことでしか勝利できません。——よろしいでしょうか、」

世界政府“」

返答は、無言。

戦闘、開始。

逃亡海兵ストロングワールド⑪——1

第十話 旧時代と新時代

メルヴィユでも、マリソフオードでも戦鬪が始まった。こうなればもう、どちらかが勝者になるしか決着はない。

そして海賊側の総大将は、空の上からこの状況を見据えている。

「なア、ガープの孫。おめエは大した男だと思っぜ？」

眼前、自身の居城の屋根からこちらを見上げる青年を見据えながらシキが言う。

「流石はあの野郎の孫だ。海軍本部大佐って肩書きは飾りじゃねエ。その歳でそれを背負ってるってんだからやるもんだ。しかもクロコダイルの小僧を討ち取ったんだらう？ 大したもんだぜ」

元「七武海」サー・クロコダイル。ルフィとウタの名が世界に轟いた切欠であり、世界政府の汚点でもある事件において当時中佐であったルフィは彼を討伐した。

それはギリギリの戦いであつたが、それでも勝利した。

ルフィは無言のままシキを睨みつけている。シキはそんな彼に對し、だが、と言葉を紡いだ。

「もしおれをあの小僧と同じだと思ってるんなら、今すぐその認識を改めろ。あの小僧とおれでは格が違う。海賊としての格がな」

「どのみち海賊だろ」

直後、ルフィが屋根を蹴り飛ばして空へと駆け上がった。その身からは蒸気が噴き出しており、彼がすでに全力であることが窺える。

「『月歩』か。大した技術だが、それではおれは捉えられん」

「『J E T 銃』!!」

超高速の拳が放たれる。しかしその一撃は、虚しく宙を打つだけだ。

文字通り、自由自在に空を飛ぶシキ。あくまで空中を蹴って移動するルフィでは、どうしようもなく分が悪い。

「おれと相対するってんだ。『月歩』は最低限の技術だろうが、それだかじゃア足りねエ。おめエがどれだけ空を蹴って飛ばうと、空を舞う自由には程遠い」

「知るか!」

「威勢はいいな。だが足りねエ」

シキが右手の指を動かす。直後、突き上げるようにして無数の槍の形になった岩が地

面から飛来してくる。

「うおっ!」

勢いよく迫るそれを避けるため、ルフィが更に上へと飛んでいく。

しかし。

「おいおい、目を離すなよ」

先回りしていたシキが、その右脚を振り下ろした。咄嗟にガードしたが、そのまま地面に向かって吹き飛ばされる。

「ブルチネラをぶん殴ったまでは良かったがな、ガープの孫。所詮はこんなもんだ」

自身の居城、その一角に叩きつけられたルフィを見下ろしながら言うシキ。ルフィは瓦礫を押し退けながらクソオ、と息を吐く。

「動きに追いつけねえ。どうすっかな」

何度かこうして殴りかかっているが、状況が好転しない。やるうちに冷静にはなってきたが、打開策が浮かばなかった。

「余裕だなア、ガープの孫。おれを自由にさせるってことの意味をわかってねエようだ」
どうするかについて考えて立ち止まるルフィに、そんな風に告げるシキ。直後、彼はその両手を広げた。

彼のその動きを見て、待て、とルフィが叫ぶ。

「やめろ！」

「おめエの言葉を聞く義理なんざねエだろう」

そして、大地が揺れる。

メルヴィユの大地が隆起し、無数の巨大な岩を生成する。

それらが浮かぶのは島の外縁だ。それはつまり、狙いがルファイではなく。

下の、マリルフォードということだ。

「質量、そして速度。その強さつてのは古今東西変わらねエ原始的な強さだ」

そして、星が降る。

一度、空に浮かぶメルヴィユよりも更に空へと浮かんだ岩が、大地に向かって降り注ぐのだ。

灼熱の熱気を伴い、落下する無数の岩。それは隕石と呼ばれるものに近い。

無数の隕石が、マリルフォードとその周辺に降り注ぐ。

ルファイにはマリルフォードの状況は見えない。だが、何が起こったかだけは理解し

た。

「何を怒る？ おめエがおれを倒せねエからこうなるんだ」

そんな彼に対し、シキの嘲笑が届く。

「どうした、『新時代の英雄』？ おれをぶっ飛ばすんじゃねエのか？」

「当たり前だ！」

だが、と内心でルフィは思う。とにかく、シキの自由な動きについて行けるようにならないと状況が変わらない。

何かないか、と思う彼の見聞色が、とある気配を捉える。

それは、彼が名付けた一羽の鳥。

「ビリー！！」

「クオツ！！」

凄まじい速度で、電気を纏いながらその鳥は飛来した。シキの居城、その周辺にはダフトグリーンの樹が植えられている。故に本来、彼は近付くことを躊躇うはずだ。

だが、彼はその壁を意志で突き抜けてきたのだ。彼に名をくれた人間のために、優しく撫でてくれた人間のために。

「あいつは……」

シキが呟くように言う。そういえばあんなのもいたな、と興味もなさそうに。

だが。

「ビリー！ 力を貸せ！」

「クオツ！」

その鳥の背中に、ルファイが飛び乗った。ほう、と彼は笑う。

「この島の怪物を手懐けたのか。おれに勝てねエから力を借りるってか？」

「そうだ！」

なんの臆面もなく、ルファイは応じる。

「おれの役目はお前をぶっ飛ばすことだ！ そのためなら力だっていくらでも借りてやる！ ビリーはおれの仲間だ！」

「上等だ。ならかかってこい、ガープの孫。飽きるまでは遊んでやる」

いけ、という言葉と共にビリーが速度を上げて空を行く。それはルファイの“月歩”の速度より遙かに速い。

しかし、シキの能力もまた異質。

この無限の如く広がる空において、彼の自由度は遙かに高い。

——一体、何の皮肉だろうか。

この大空を自由に舞う力を持つ男が望むのは、“支配”だ。それはまさしく、“自由”とは対極にあるというのに。



多勢に無勢、という言葉がある。

基本的に、数というものは多い方が有利だ。どれほどの力を持つ個人であっても、飯を食う必要もあれば寝る必要だってある。それこそ海軍大将や四皇といった怪物でさえ、文字通り昼夜問わず攻められることになつたら耐えられない。

故に、たった三人で耐え切れるはずがないのだ。しかし、現実として。

「次は誰じゃ、海賊共」

たった一人の「伝説」に、シキの下についた海賊たちは勝てないでいる。

文字通り、順番に。向かってきた海賊をその拳の一撃で黙らせる様は正に「伝説」に謳われた怪物の姿だ。

スモーカーと対峙する「大地の王」ラウンド、そしてモモンガと対峙する「毒蛇の力ガシャ」もその光景には目を見張っている。

「……これが、「伝説の海兵」か」

「親分が警戒するわけじゃ」

懸賞金が億を超え、*「新世界」*で名を轟かせる海賊でさえもその男の力については驚愕するしかない。

海賊たちは皆、二の足を踏んでいた。当たり前だ。目の前で向かっていった海賊たちが一人ずつ倒されているのである。行けば倒されるといふ事実を何十回と見せられて、突き進めるような者はそう多くない。

チツ、という舌打ちの音が響いた。この場に集う海賊たちを束ねる立場である*「七宝剣」*の一角、*「墓荒らしのレムナント」*だ。

「何をビビってやがる！ たった三人だぞ！ さっさと殺せよ！」

だが、その言葉を聞いても海賊たちは動けない。ほう、と声を上げながら*「伝説」*——*「ガープがレムナントを見据える。」*

「次はお前か？」

「ぐっ……！」

その気迫に後退りするレムナント。

場に緊張が満ちる。彼に対抗できる海賊二人も、今日の前にいる海兵に背を向ける余裕がない。

たった一人、たった一人だ。その海兵を前に、海賊たちは動けない。

これが、あの時代を生きた海兵の強さだというのか。

「来ないのであれば、こちらから行くが」

そして、ガープが踏み出そうとした時。

「相変わらずでござるなあ、ガープ」

どこか気の抜けた、笑いを含んだ声が響く。

声がしたのは一番奥からだ。そちらへ視線を送ったガープは、そこから現れた人物に表情を険しくする。

見覚えのある顔だ。かつて幾度となくぶつかり合い、そして、終ぞ捕らえることはできなかつた男。

「おお、あんたか！」

「すまぬでござる。部屋で一人酒をしておつたらいつの間にか寝ておつた。ウハハハハ、シキに怒られてしまうでござるなあ」

レムナントの言葉に、笑いながら応じる声。

片手に酒の入っているのである。瓢箪を下げて現れたのは、一人の白髪の男だ。着流しから見える浅黒い肌。その顔の皺が彼の歳を現しているが、見えている肉体は文字通

り鋼の如く鍛え上げられている。

「シキの計画じゃ。いるとは思っておったが」

「隠居のつもりでござったが、手を貸せと言われると断れんでござるよ。それに、お主とも戦えると聞いたならば余計にな」

その男は、かつて「金獅子のシキ」の片腕として活躍した男。

大艦隊を率いた彼の下、その力一つで戦闘員を取りまとめる立場にあつた怪物。

純粹な戦闘能力であれば、ロジャーの片腕たるレイリーとも渡り合つたバケモノだ。

「おい、あいつは」

「『金獅子』の鬼札か」

スモーカーとモモンガも表情を固くする。

その男に与えられた二つ名はいくつもある。

曰く、『酒呑』。曰く、『国呑』。曰く、『アラストウルの悲劇』。

だが世界政府は、最終的に彼にこの忌み名を与えた。

——『殺人鬼』、ジユウゾウ。

そんな、あまりにも単純で残酷な名を。

「しかし、随分暴れてくれたようでござるな。……どうやら、盃も交わし終えた後とみえる」

「あ、ああそうだ！ 頼むよ！ 旦那の子分がやられてんだ！」

「ふむ、承知した。しかし、肝心のシキはどこでござるか？ 司令室にでも？」

レムナントの言葉に、右手の瓢箪の酒を煽りながらジュウゾウは応じる。その問いにレムナントは何度も頷きながら答えた。

「旦那は今外だ！ 海兵が旦那を追ってるのを迎え撃ってる！ だから旦那は——」

「それはまずいでござるな」

レムナントの言葉を手で制し、ジュウゾウは言った。

「最高司令官が直接の戦闘など、どんな事故が起こるかわからぬでござる。故に某はシキのところへ行こう」

「——待て」

直後、凄まじい轟音と衝撃が轟いた。

ガープが振り抜いた拳。それをジュウゾウが瓢箪を盾にして防いだのだ。瓢箪が砕けて中身の酒が撒き散らされるが、ガープの拳は手で受け止められている。

「衰えたでござるか、ガープ？」

「わしも歳じゃ」

「ウハハハハ、そいつはいかんでござるな。若さの秘訣でも教えようか？」

「間に合っておるわ」

そして、再びの衝撃。

ガープもジユウゾウも互いに左拳を衝突させ、その衝撃で二人は少し後方へと退く。

「しかしガープ、ちと待って欲しいでござる。某としてはシキが戦っているのであれば、援護をせねばならのでござるよ」

「行かせんよ。シキと戦っておるのはわしの孫じゃ」

油断なく構えるガープ。その姿を見て、おお、とジユウゾウは笑う。

「お主の孫でござるか。それはさぞいい面構えをしているのでござろうなあ」

「そうじゃな。ルフィは強い海兵になった。これから更に強くなるじやろう」

「それは素晴らしいでござる」

笑うジユウゾウ。そこで、む、と何か思い当たるような顔をした。

「ルフィ……お主の孫ということは、モンキー・D・ルフィとなるのでござろう？ 聞いた覚えが」

だが、ジユウゾウの言葉は最後まで紡がれなかった。

その言葉を遮るようにして、一人の道化が立ち上がったのだ。

「ああ、痛え!! あのカソガキ殺してやる!!」

殴られた頬を押さえながら、巨漢の道化がゆつくりと立ち上がる。そして彼は周囲を見回した。

「許さねえぞクソガキ!! あの女もだ!! 徹底的に痛めつけて殺してやる!!」

その光景に、スモーカーとモモンガが舌打ちを零す。あの一撃で倒し切れたとは二人とも思っていなかったが、思ったよりも目覚めるのが早い。

この状況であの道化の相手もするのか、と身構えた二人。ガープは冷めた目で道化を見つめている。

「ウハハハハ。どうした道化、殴られたのでござるか?」

だが、激昂する道化——「返り血のブルチネラ」にジユウゾウが声をかける。彼はそちらを睨んだが、すぐに表情が変わった。

「あんたは……!」

「いや、少々遅刻してしまっただでござる。とりあえずどういう状況かがわからぬのでござるが……:そういうえば、イルはどこでござるか?」

周囲を見回し、「歌姫」を追って行った女性の名を出すジユウゾウ。それに答えたのはラウンドだった。

「少数で乗り込んできた奴らのうち、数人に『歌姫』は奪還された。イルはそれを追っている」

「ほう、流星でござるな我が弟子は。して、何人で向かっている? まさかあの子一人ということはないでござろう?」

周囲に問いかけるジウゾウ。だが、彼らは答えなかった。

この場に釘付けにされ、彼女を追うことができている者はいないのだ。場内には警備の兵もいるため、完全な孤軍であることはないだろうが。

その反応に何かを察したのか、ジウゾウは髪を掻くとふう、と息を吐いた。

——殺意が、周囲に伝播する。

先程の青年が放った、*「霸王色の覇気」*ではない。ただただ純粋な殺気だ。

かつて十億を超える懸賞金をかけられた男の、本気の殺意。

「揃いも揃って、小娘一人以下とは。情けなくて泣けてくるでござるなあ、現代の海賊共」

指示を出す、とジウゾウは告げる。

「ガープは某が抑える。道化、ラウンド。お主らは残り、その二人を抑えろ。カガシャとレムナントは他の連中を率いてあの子を追え」

静かな言葉だった。同時、ガープが踏み込んで放った拳に対してジウゾウが右足の蹴りで応じる。

ぶつかり合った衝撃で風が吹き、床に亀裂が入った。

「これは命令であり、決定でござる」

「……行かせるとで思っておるのか？」

「止められるとも思っているでござるか？」

それが行動開始の合図だった。道化が床を蹴り、モモンガに迫る。振り下ろされた拳をモモンガが避けるが、その避けた拳は床を砕いた。

「くっ……！」

「直接殺せねえのは残念だが!! 命令とあっちゃしようがねえなア!! お前で我慢してやるよ海軍中将!!」

そしてそんな彼の後ろを通ろうとするカガシヤ。その前に十手を突き出そうとしたスモーカーが、横薙ぎの槍でそれを妨害される。

「よそ見とは」

「クソツ……！」

ラウンドに見据えられ、悪態を吐くスモーカー。彼らだけで逃したのは、ここでガープ達が大部分の海賊を抑えるという前提あつてのものだ。増援もこちらに迫っているが、合流できるまではかなり時間がかかる。

策はあるが、現状では諸刃の剣だ。予定の作戦は、ウタと増援部隊が合流してから行われなければならない。

どうする、とモモンガとスモーカーが焦りを浮かべた瞬間。

「ぬうううううツツツ……!!」

ガープが突如、床へとその両手を突っ込んだのだ。何を、と二人が問いかけるとほぼ同時に、彼の行動が結実する。

「ぬうりやアアア!!!」

文字通り力づくで床を持ち上げると、力任せに薙ぎ払うように振り回したのだ。それは文字通り、建物を個人で破壊するかのような荒技である。

引き抜かれた床はもちろん、壁もまた吹き飛ばされ、更に柱も薙ぎ払われる。

そして、最後に。

「ふんっ!!!」

渾身の一撃を、建物へと叩きつけた。

シキが今回、盃を交わすために用意した部屋は最上階のから一つ下の部屋であり、さらに言えば彼の居城は彼自身の趣味もあって中庭がある。

ガープが力任せに振るった床は、そんな居城の一角を文字通り粉碎した。

轟音が響き、その部屋にいた者たち全員が落ちていく。そんな中で。

「肉体はともかく、精神は健在のようでごきぎるなガープ！」

「やかましいわ！ 面倒な真似をしておくれおつて！」

落下しながら、この二人は戦っていた。拳と蹴りがぶつかり合い、その衝撃で落下する海賊たちは更に吹き飛んでいく。

一階に着地する頃には、二人以外はどこかへ行つてしまっていた。

それは二人の放つ激突の衝撃で吹き飛ばされたのか、それとも逃げたのか。或いは両方か。

「ああ、そうそう。あの『歌姫』の錠の鍵であれば、某が持つておるでござるよ」

そう言つて、懐から鍵を取り出して見せてくるジユウゾウ。どういうつもりじゃ、とガープが問うと、何、と彼は鍵をしまいながら言葉を紡いだ。

「こうしておけば、お主は某と殺し合うしかないでござらう？」

凶星であつた。ガープは一度大きく深呼吸をする。

（すまん、ルフィ。加勢するつもりじゃつたが）

目の前の男は、シキと並ぶほどの怪物だ。急いで片付ける、などということは不可能である。

他の者たちがどうなったのか、戦況はどうなっているのか。気になることは無数にあるが、それを気にしながら戦える相手ではない。

「いやあ、二十年ぶりでごさるな！ 実に嬉しい！」

「くだらん」

任せたと、ガープは彼に告げたのだ。

ならば彼がするべきは、一つだけ。

「互いに古い時代の残滓。ここで時代に決着をつけるには丁度いいじやろう」

「時代に決着、良いでござるなその言い回し」

ジュウゾウが笑う。

伝説同士の戦いが、幕を上げた。



今日何度目の、世界の終わりだろうか。

そんな風に思った海兵は、一人ではない。

空に浮かぶ巨大な島、メルヴィユ。その島が不自然に揺れたのが始まりだった。

島の上部、その一部が隆起すると共に無数の岩球体を作り出す。それらは時を追うごとに増えていくと、ゆっくりと上昇した。

何が起こるのかについて、想像するのは容易い。故に。

「総員、総力を持って迎撃しろ!!」

セングクのその号令がかかる前に、海兵たちは動き出していた。

無数の怪物たちの数はあまりにも多く、第一次防衛線は既に突破されている。今は第二次防衛線で精鋭たちの迎撃と無数の銃火器による迎撃中だった。

そこへ現れたのが、空からの第二射。しかも第一射はあくまで怪物たちを送り届けるためであったため、マリソフォードの岸に接続するような形で攻撃だった。しかし、今度は違う。

「これが、伝説の海賊……!!」

呻くような若き海兵の言葉は、この場にいる全ての海兵たちの想いを代弁している。

偉大なる航路その後半部分である“新世界”を支配する海賊たち、“四皇”。その中でも彼の“海賊王”と渡り合った“白ひげ”は世界を滅ぼす力を持っていると謳われている。

冗談だと、誰もが思っていた。だが、その考えは今日改められるだろう。

——伝説とは、正しく世界を滅ぼす力を有している。

「オニグモ中将！」

「ヤマカジ中将も！」

最初の一発目が着弾しようとした時、その隕石に突撃したのは二人の海軍中将だった。彼らは刀を構えると、全力でそれを受け止める。

「まさか受け止める気か!？」

「いや違う！ あれは！」

大きさでいえば、三階建ての家屋くらいのサイズはある。ここに落ちてくるまでに摩擦熱で随分と縮んだようだが、その質量を失った代わりに尋常ならざる速度を持って迫ってきているのだ。

普段ならば、そのサイズの岩石であれば中将の二人は余裕で持ち上げるだろう。しかし今は、それどころではない。

灼熱の隕石。それを受け止めた中将二人は。

「ぬうつ!!」

その軌道を、横へと弾くようにはずらした。

第二次防衛戦に直撃するはずだったその隕石は横へと逸れ、怪物たちの集団へと叩き込まれる。

大歓声が上がった。だが、まだ隕石は落下してくる。

「おれたちに任せろ!!」

続いて現れたのは、巨人部隊だ。彼らは複数人で巨大な盾を一つ構えると、衝撃に備える。

轟音が響き、衝撃が空を迸った。

だが、巨人たちはその隕石を受け止めたのだ。

更なる歓声が上がる。そして。

「撃ち落とせ!」

「叩き落とせ!」

隕石へと叩きこまれる無数の砲弾。そんな中、一人の剣士が前に出た。

「そこをどけ」

まるで鷹のような鋭い目をした男。今回の招集に応じた“七武海”の一人。海兵たちが道を空ける。彼——“鷹の目のミホーク”はその、“世界最強”を謳われる黒刀を抜いた。

一閃。

まるで無造作に振り抜かれたようにしか見えない一撃で、降り注ぐ隕石たちが両断された。

だが、あまりにもその一撃は鋭過ぎたのだ。隕石の速度は落ちず、そのまま突っ込んでくる。

再び黒刀を構えるミホーク。だがその背後より、一人の巨漢が歩み出た。

「おれがやろう。——『熊の衝撃』」

背後から現れたのは、『七武海』が一角バーソロミュー・くまだ。彼の能力によって圧縮された空気、その解放された衝撃で、隕石の軌道が変わる。

降り注ぐ隕石はしかし、まだ終わらない。

「……キリがないな」

ミホークが呟く眼前、獣たちの進撃が始まる。

空と大地。止まらぬ波状攻撃が海軍本部を襲い続ける。

こちらを休ませる気などないのだろう。流星に元『四皇』。これが狙いだ。

「うわっ！ 怪物共が！」

「くそっ！ 隕石で手いっぱいなのになー！」

空の隕石に気を取られ、下の防衛ラインが侵食され始める。純粋な数による圧殺が、海軍を追い詰めていく。

しかし、そんな中。

「道を空けよ」

一人の女性が、最前線へと飛び降りた。

迫り来る獣たち。彼らが迫る中を、その女性——「海賊女帝」ボア・ハンコックが駆け抜ける。

「芳香脚」

並の海兵では相手にすらならぬ怪物たちも、彼女の手にかければ赤子も同然だ。

彼女の食べた悪魔の実である「メロメロの実」は老若男女問わず、見惚れた相手を石化する能力を持つ。だが、それとは別に物理攻撃にも相手を石化させる力を付与できる。

ハンコックの一撃を受け、体の一部が石化していく怪物たち。そして彼女から少し離れた地点では。

「『唐草瓦正拳』!!」

一人の魚人——「七武海」が一角、「海峡のジンベエ」が空中に拳を放った。身構える怪物たち。だが、彼らは一瞬の後。

——空中を伝う衝撃により、吹き飛ばされる。

「うおお！ 味方になれば頼もしいな『七武海』！」

「怪物共が怯えて止まってるぞ！」

海兵たちから幾度目かの歓声が上がリ、竦みかけていた士気が戻る。

突如最前線に現れた化け物二人。その強さを本能で理解した怪物たちの動きが止まった。それを見据えながら、ハンコックが自分と共に降りて来た男へと声をかけた。

「……ジンベエ」

「お前さんがここに来るとはのう」

「ルフィとウタが戦っておるといっただけで、わらわが来る理由としては十分過ぎる」

本来ならば男嫌いとして知られるハンコック。だが、奇妙な縁がルフィとウタ、その二人との縁を繋いだ。

そしてジンベエもまた、彼らに大きな恩義がある。

「わしらがここを請け負った！ 空は任せる！」

後方の海兵たちに告げ、ジンベエたちは眼前の怪物たちを見据える。周囲には、彼らに薙ぎ倒された海兵たちも多く倒れていた。

既に相当な数の犠牲者が出ている。最悪なのは、こちらに攻め入る手段があまりにも少ないことだ。

だが、耐えなければならない。あの浮島で戦う者たちを、信じなければ。

まるで世界の終わりのような光景の中。
戦争が、更に激化する。

逃亡海兵ストロングワールド⑪—2

第十一話 海災 VS 殺戮兵器

その戦いの始まりは、静かだった。

無言のまま、構える二人。互いに無手。信じるのは鍛え上げた己の肉体のみ。

「嵐脚」

開幕の合図はそれだった。初手は「殺戮兵器」ロブ・ルツチ。相手の出方、そして実力を測るための一撃。

しかし、並の海賊ならば視認さえできぬまま真つ二つになるその斬撃を、「海災」アルキデイクスは正面から受ける構え。

金属音。

彼がアツパー気味に放った拳が、その斬撃を弾いたのだ。

「いい音だ。——次は私の番である」

そして、大王イカの魚人である彼は足を振るつた。しかしそれはルツチの放つた“嵐脚”のような振り抜く一撃ではなく、爪先で虚空を突くような動き。

彼の足から、槍のような斬撃が放たれた。

「“鉄塊”」

また、金属音。

ルツチの放つた横薙ぎの斬撃とは違う、貫くような一撃。だが、今の技は間違いなく“嵐脚”だ。

「世界中で殴り殴られ、殺し合いを続けておると色々な武術を見ることが出来る。今は貴殿らが言う“六式”を我流にアレンジしたものだ」

「その割には様になっていたが」

「何度も見たのでな。見たら後は鍛錬で習得するのみよ」

笑いながら言うアルキデイクスに、なるほど、とルツチは納得のようなものを覚えた。この男の思想には善も悪もないのだろう。あるのは闘争本能のみ。

たまに在るのだ、こういう手合いは。生まれながらにして社会に適合できない、どうしようもない生物が。

「さて、殺し合おう」

構えるアルキデイクス。右半身の、前に出した右足の踵を上げた状態。その両手は僅

かに開かれており、どんな状況にも対応できるようにした構えだ。

対し、ルツチも構えた。同じく右半身。

しかし。

次の瞬間には、ルツチはその場からアルキデイクス目掛けて移動を開始している。

彼が収めた体術、“嵐脚”と“剃”の合わせ技。不規則な軌道で宙を行き、アルキ

デイクスに迫る。

「『指銃』」

側面、沈み込むような体勢からの突き上げるような一撃。人体を容易く貫く技だ。

しかし、ルツチの右手で放たれたそれをアルキデイクスは上に飛び上がって避けた。

宙を貫くルツチの一撃。そこへ、空中で回転させた自身の体の勢いを乗せてアルキデ

イクスが踵落としをこちらへと叩き込んでくる。

避けるか、受けるか。選択は一瞬だ。ルツチは右腕を戻しながら左腕を上に出し、腰

を落とす。

轟音。

アルキデイクスの踵落としを受けた衝撃で、ルツチの足元の床に亀裂が走る。だがそ

のようなことに意識を向ける暇もなく、ルツチは受けた足を右手で掴んだ。

「ぬうっ！」

掴んだ瞬間、アルキデイクスがもう一方の左足を動かす。ルッチは即座に全身を捻りながらアルキデイクスを投げ飛ばした。

廊下の側面の壁に叩きつけられるアルキデイクス。そこへ追撃の一撃。

「嵐脚」

振り抜いた一撃が、廊下の壁を完全に吹き飛ばした。

天井にまで切り込みを入れたその一撃により、瓦礫が降ってくる。だが。

「魚人空手」

瓦礫が上げた白煙の中から、その男が飛び出してきた。ルッチも前に出る。

「四千枚瓦正拳」!!

拳と拳の衝突。拮抗は一瞬だ。

周囲に衝撃を撒き散らし、二人は後方へと吹き飛ばされる。

共に、その口元には笑みが浮かんでいた。



居城が大きく揺れた。断続的に続く揺れとはまた違う、建物そのものの揺れ。

島が断続的に揺れているのは、シキが何かをしているからだだろう。だが、建物は。

「どうやら、誰かが大暴れしているようだ。貴殿の仲間か？」

「おれは世界政府の直轄だ。奴らとは偶然居合わせただけ、たまたま目的が近かつただけに過ぎない」

ルツチの返答に、ほう、とアルキデイクスは応じる。

「組織というのは複雑なものだな。だがまあ、私としてはそこまで興味があることでもない」

正直なことを言うと、と彼は続ける。

「シキ殿の目的についてもどうでもいいのだ、私は。東の海にシキ殿は大層な思い入れがあるようだが、私は行ったこともない。まあ、*“最弱の海”*になど興味はないな。*“英雄”*と拳を交える機会があるならばともかく」

パンパンと乾いた音を鳴らしながらズボンの埃を払うアルキデイクス。

「*“最弱の海”*か。故に必要ないど？」

「うむ。私の目的は強者との殺し合いのみ。かつて*“海賊王”*を産んだ海であり、*“英雄”*を産んだ場所であるが……結局のところ、彼らとて偉大なる航路で名を上げた。故に私はここにいます」

遠くから、何かが崩れる音が響く。

「そういう意味では、シキ殿のマリンフォード襲撃は実に心躍る。海軍にはまだ見ぬ強者が無数にいるのであろう？ 貴殿と拳を交えて確信した。——世界は広い！ 貴殿もそう思うだろう!？」

どこか興奮した様子で語るアルキデイクス。ルッチは一度、息を吐いた。

ロブ・ルッチは冷徹な人間とされており、それは彼自身も自覚している。彼の『任務』の邪魔をするのであれば、たとえ味方であろうとも殺戮する。そうして彼は、いつしか『殺戮兵器』とまで呼ばれるに至った。

「見解の相違だな」

戦闘が好きであり、殺人に興じることに喜びを覚えるという部分についても自覚がある。

だが、それだけではない。

余人には理解されにくいのが、彼には彼なりの『正義』がある。

「東の海は『平和の象徴』だ」

「——ほう?」

力なき者、弱きは罪。それがルッチの考え方だ。それ故に海賊に人質に取られたとある王国の兵士たちを皆殺しにし、海賊たちをも皆殺しにすることで一件を収めたことか

らも窺える。そしてその事実から、彼は味方である世界政府からも恐れられてしまっている。

しかし、そこからは一つの事実が抜け落ちていく。

彼が殺戮したのは兵士だ。力なき者を守るべき者たちがその役目を果たせないのであれば生きていく価値はない。だが、そうでない者は？

「お前たちのような無法者が少ない海。それをおれたちは『平和の象徴』としている」
「……なるほど、確かに見解の相違だ」

アルキディクスが笑う。ルツチは上着を脱ぎ捨てた。

「ならば争うしかないな。理由がまた増えた」

「元々、こちら側の目的は一つだけだ」

力を持つ者がその責任を果たすことは義務である。だが『力』とは何も、戦う力だけを示すわけではない。

世界は何も、戦いだけで成り立っているわけではないのだから。

「ほう、それは何だ？」

笑みを浮かべて問うアルキディクス——『ならず者』。

それに応じるは、世界政府の『殺戮兵器』。

「『正義』」

あまりにも単純、しかし絶対的な目的。

その言葉に、アルキデイクスが大いに笑う。

「いいな……！ それはとてもいい！ 羨ましいほどに！」

「ならばお前もこちらに来るか？」

「それは不可能だろう 『世界政府』！」

彼もまた上着を脱ぎ捨てた。その上半身には、夥しいほどの傷跡が刻まれている。

「私は人魚だ！ 貴殿らがかつて魚類と分類し、未だ差別を続ける存在！ それが光の

道を歩けるとしても！」

さあ始めようとアルキデイクスは言う。

「何かが違えば、私も 『正義』 を背負っていたかもしれない。だがこれが現実だ。もしもはない。そんな都合のいい話はないのだよ、 『殺戮兵器』」

ルッチは無言。

そして、二人が激突する。

開幕はアルキデイクスの、先程の貫くような 『嵐脚』 だった。それをルッチは 『紙絵』 で避ける。

だが、避けた先に既にアルキデイクスが移動している。

貫くような正拳突きを、ルッチは蹴りによって迎え撃つ。轟音が響く中、しかし両者一步も引かない。

幾度となく拳と拳がぶつかり合う。重い打撃の音が幾度も重なるが、互いに有効打はない。

至近距離における乱打戦の均衡。それを崩したのはルッチだ。

突き出されたアルキデイクスの拳を左手で弾くように逸らす。そして空いた胴に右の連撃を叩き込んだ。

「『指銃・黄蓮』！」

片腕での、『指銃』による連続の打撃。普通なら肉体に無数の風穴が開くところだが。

「ぬうっ！」

アルキデイクスは『武装色の覇気』によってそれを堪える。

鮮血が舞う。連打のうちの一発が、彼の左脇腹を貫いていたのだ。

「ッ、ミスだな。……こちらの押し負けか」

直後、ルッチの左頬が浅く避けた。彼が弾いたと思っていた拳が僅かに掠めていたのだ。

その血を右手の親指で拭うルツチの口元には、笑みが浮かんでいる。

「さて、続きだ」

構え直すアルキデイクス。

もし第三者が見ていけば、この戦いを見てどう思っただろうか。

恐ろしいほどに鍛えられた基礎能力、体術、それを裏付ける精神。この戦争における頂上の戦いの一つが、確かにここでは起こっている。

浮かべるのは、互いに笑み。

信念も、所属も、理由も、所属さえも違う二人はしかし、この戦闘を楽しんでいる。この二人の精神性は、どこか似通っているのだ。

一体、この二人の現在の在り方は。

何が、違ったが故なのだろうか。



この男の実力について、ある程度は把握できてきたとルツチは思う。腹立たしいこと

であるが、その実力はこちらが全力を出さねば打倒が難しいほどに極まっている。単独の存在でありながらあれだけの懸賞金が懸けられているのは伊達ではない。

魚人空手をベースに、おそらくアルキデイクスが言う通り戦いの中で数多の技術を習得してきたのだろう。その中には「六式」も含まれているようだ。かなり荒いが、きつちりこちらの速度にはついて来ている。

このままこの状態で戦闘を続けても消耗戦だ。この後のこともある。故にルッチは手札の一つを見せる決断をした。

「ほう、なるほど。これが貴殿の切り札か」

「ネコネコの実モデル『豹』。ただの手札だ。……だが」
構える。

「先程までとは何もかもが違う。——『荊』」

高速の歩法。『動物系』の悪魔の実は、文字通り能力者の身体能力を強化する。先程までと比べて数段階上がった速度に、アルキデイクスが驚愕する。

「おおう!!?」

放たれた蹴りにより、アルキデイクスが大きく吹き飛ばされた。壁の奥へと吹き飛ばされるアルキデイクス。だが彼は即座に反応してくる。

飛んできたのは先程の貫く『嵐脚』。それをこちらにも『嵐脚』で応じたところで、眼

前にその男が迫ってきた。

「魚人空手」

先程までとは段違いの速度の「剃」。それで踏み込んできた男が、その拳を振り抜く。

「『四千枚瓦正拳』!!」

凄まじい衝撃が、ルツチの腹部へと叩き込まれた。背後の壁や床を砕きながら、その身はようやく止まる。

「はっはっは。切り札を隠しているのは貴殿だけではない。……まあ、私のそれはただの本気だが。驚いてもらえたか？」

「ああ……面白い」

直後、再びの激突が始まった。

「『嵐脚・豹尾』!」

渦を描くようにして回転する「嵐脚」。ルツチの下に踏み込もうとしたアルキディクスが踏み留まり、後方へと下がる。

そこへ先回りしていたルツチが側面から攻撃を加える。

「『指銃』!」

「ぬうっ!」

肉体を貫くには届かなかったが、肩口に掠める形で入った。裂けたアルキデイクスの肩から鮮血が舞う。

しかし、彼はそれで止まらない。ルツチの顎をカウンターで蹴り上げた。

「ぐ……！」

「どうした世界政府！ このならず者を止めてみよ！」

そして再びの正拳突き。それをルツチは「鉄塊」で受けるが、叩き込まれた右胸に重い衝撃が走る。

「安心しろ……！ 貴様らは全員消してやる！」

僅かに離れた距離。だが、それはすぐに縮まる。

互いの拳が互いの腹にほぼ同時に直撃した。共に空気を吐くような動作を見せる中、先に動いたのはルツチだ。

「『指銃・斑』！」

先程の片手の連打ではなく、両腕による「指銃」の連打。アルキデイクスはそれを真つ向から受けて立つ。

「ぬああああっ!!」

文字通りの拳と拳の激突だ。ぶつかる度に互いの体の芯に衝撃が走る。その最中、互いの一撃が体に何度も叩き込まれる。

体に複数の風穴が空けられたアルキデイクスと、複数の芯に響く打撃を叩き込まれたルッチ。見た目ではアルキデイクスの方がダメージが大きい、実際はそう変わらない。

「いいな、楽しい。実に楽しい！」

口元から血を零し、息を切らしながらアルキデイクスは言う。

「やはり間違っていないかった！ あの時の選択を何一つ！ 何がフィッシャータイガーだ！ 何がオトヒメだ！ 所詮ただの死者だ！ 敗北者だ！」

「……………」

ルッチも構えながら立ち上がる。何が楽しいのか、アルキデイクスは笑ったままだ。

「所詮この世で信用できるのは己のみ！ 誰かのために何かをしようとした者は皆裏切られ命を落とす！」

「……………」高説は結構だが

笑う。『海災』に対し、『殺戮兵器』の表情は静かだ。

「おれにその手の話をしたところで意味はない」

「これは失礼した。……………」

言いかけたアルキデイクスの口元から血が溢れる。むう、と彼は不満そうに口元の血を拭った。

「まだまだ殺し合いたいところであるが、未熟故にここらが幕のようだ」
「おれもこの後がある」

「ならば丁度いい」

言うのと、アルキデイクスが静かに構えた。最初の構えと同じ、右半身。

「貴殿の強さに敬意を表する。故に我が奥義で終幕と致そう」

雰囲気が変わった。ルツチもまた集中力を高める。

「魚人空手奥義」

姿が消えた。〃刺〃だ。だが動きは見えている——右。

右方向へと薙ぐような蹴りを放つ。同時に放たれた〃嵐脚〃により、周囲の壁が割れた。

だが、と思う。まるで倒れる寸前。身を屈め、その凄まじい体幹で床スレスレに身を屈めていたアルキデイクスが、こちらにその渾身の一撃を放った。

「〃武頼貫〃!!」

今までの中で、最も凄まじい轟音が響き渡った。

全身を貫き、突き抜けるような衝撃。ルツチの膝が床につき、その身が倒れ込む。

「……紙一重、であった。少なくとも、私が戦った敵の中で貴殿は最強だ」

息を切らしながら言うアルキディクス。この奥義を受けて立ち上がった者はいない。文字通りの奥義であり、最後の切り札なのだ。

「む、しかし……血を、流し過ぎたか。この後を楽しむためにも、治療を……」

「……なるほど、大した力だ」

ゆらりと、その男は立ち上がる。

振り返る。すると、息を切らしながら「殺戮兵器」がこちらを見ていた。

「く、なるほど、流石だ」

構えるアルキディクス。その彼に、だが、と「闇の正義」が告げる。

「この世に悪は栄えない」

そして彼が地面を蹴った。その彼に、アルキディクスが吠える。

「何が『悪』か！ それは貴殿らの都合であらう！」

「その通りだ」

迎撃の正拳突き。それを「紙絵」で避けたルッチは、両手の拳をアルキディクスに当てる。

それは、〃六式〃の体術を極めたものにのみ許される奥義。肉体の内部を破壊する、防御不可の一撃。

「〃六・王・銃〃!!」

凄まじい衝撃が、アルキデイクスの体を貫いた。彼は一瞬、ほんの一瞬だけ意識をルツチの方へ向け。

小さく、笑った。

床へと倒れ伏す〃海災〃アルキデイクス。その姿を眺め、ルツチが息を吐く。

「世界政府がお前を〃悪〃と定めた。……この結末は当然だ」



かつて、一人の人魚がいた。

その人魚は真面目な人間で、困っている者がいれば手助けを惜しまない好青年だ。

同世代の子供たちと比べると体格が大きかったその人魚は、魚人空手を学ぶようになる。いつか彼の住む島、魚人島の軍隊に入るために。

力をつけ、軍人になった後もその生真面目さは変わらなかった。その時はまだ大航海時代が訪れる前のこと。魚人島も平穏だった。

しかし、事件が起こる。

些細なトラブルだった。彼の知る人魚の女性がとある人間の男に絡まれたのだ。激昂する男を彼は制圧した。

だが、その人間は世界政府の人間で。

彼は、罪人と呼ばれることになる。

庇った女性さえも、彼を助けることをしなかった。全てに見捨てられた彼は、己のみを信じると決めて世界へ出た。

幾度も、幾度も戦った。

いつしか彼は、海で出会う災害——“海災”と呼ばれるようになる。

故郷に戻ることもできず、誰も信用できず。残ったのは、鍛えた己の肉体のみ。

そんな人魚が、かつて生きていた。

今もどこかで、生きています。

きつと生きているのだと、とある人魚が魚人島の片隅で語っている。

子電伝虫を起動し、ルッチとはある人物に連絡を入れる。

『どうした』

「研究資料は手に入れたか？」

上着を拾い、改めて着ながらルッチは問う。電話の向こうにいるのはルッチと同じC P9に所属する男——ジャブラだ。

『おお、場所は見つけたが量が多いな。運び出すには時間がかかる』

「なら急げ。じきに海兵が乗り込んでくるぞ」

『命令するんじゃないよ！』

電話の向こうで騒ぐジャブラ。その反応にルッチは息を吐いた。

「世界政府の命令だ。おれはもう少し掃除をしていく」

『……チツ、しようがねえな。しかし政府はこんなもんどうするつもりだ？ 何が書いてあるかさっぱりだぞ』

「中身の詮索は任務外だ。……まあ、どうせあの男の依頼だろう」

あの男、とルッチが言うのは世界最高の頭脳を持つとされる、生きる世界政府最高機密だ。数百年先をいく科学力とされる男がこの島の研究に興味を持たない理由はない。

『しかし、こっちはともかくブルーノの野郎との連絡がつかん。何か知ってるか?』

「ブルーノには『歌姫』の確保を任せている。仕込みも終わった。お前の任務が済み次第、『歌姫』を増援部隊に引き渡しておれたちは撤退する」

『了解だ。しかし大丈夫なのか? 外の木を吹き飛ばせば怪物共がここに入ってくるんだらう?』

ジャブラの問い。それが狙いだ、とルッチは告げた。

「これは海軍との策でもある。この島に上陸したとして、精鋭でも流石に数が足りん。怪物たちを利用し、混乱を起こす。それが策だ」

それがここへ討ち入る前に立てられた作戦だった。何よりもまず、『歌姫』の確保が最優先事項であることは世界政府からもルッチたちは命令されている。だが、それを容易くさせてくれるような者たちではない。

故に、怪物たちを利用するという策を練った。ルッチたちは別行動し、彼らが討ち入りを行っている間にこの居城を守る木々に爆弾を仕掛けたのだ。

準備も終わり、後はタイミングを見計らって起爆するだけである。ちなみにそのタイミングはこちらに任せられており、ルッチはどうしたものかと内心で考えていた。

(モモンガとスモーカー。あの二人はこちらをあまり信用はしていないようだが)

ルッチは思う。この作戦で行くと決まった時、モモンガとスモーカーの二人は起爆の

タイミングをルツチたちCP9に任せることについて難色を示したのだ。

まあ、当然といえば当然である。CPと海軍では管轄が違おうし理念も違うのだ。縄張り争いのようになることも頻繁にある。

だが、あの祖父と孫は。

「いいじゃろ別に。こやつらがあの子を助け出したんじやる？ しかもそれが任務とやうとる。悪いことにはなりやせんわい」

「じいちゃんの言う通りだな。おれがシキをぶつ飛ばすから、ウタのことは頼む」

あの二人はこちらに全幅の信頼を置いていた。あそこまで邪気がない反応をされるのは久しぶりだ。

「……調子が狂う」

『どうした？』

「何でもない。とにかく、急げ」

電伝虫を切る。歩き出そうとしたルツチはふと足を止めると、倒れているアルキディクスの方を振り返った。

「何が違えば、私も『正義』を背負っていたかもしれん」

あの時、一瞬だけ見えたこの男の心。その言葉に込められた意味は。

「……くだらん」

眩き、ルツチは歩き出す。

彼の背に海軍将校のような「正義」を掲げるコートはない。だが、それでも確かにその背には、「正義」があつた。

四階「鳳の間」前廊下、「殺戮兵器」ロブ・ルツチVS「海災」アルキデイクス。
勝者——ロブ・ルツチ。

逃亡海兵ストロングワールド⑫—1

第十二話 浮島の戦い

メルヴィユを進む海兵たちは、怪物たちによって足止めされていた。

その気になれば数体で街一つを壊滅させる化け物たちである。鍛え上げられた本部の海兵でも油断すれば即死もあり得る相手だ。しかも怪物たちは無数と言ってもいいほどの数があり、キリがない。

「ちくしょう、どうなってるんだ！」

「怪物共の動きが急に変わったぞ！」

兵士たちから声が漏れる。先程までは怪物たちはこちらを見つけると襲ってくるという状態だった。それこそ文字通りの野生の獣であったのだ。

ただ、この島が今異常事態にあることは怪物たちも理解しているらしく非常に警戒心

が強くなっている。それもあつて幾度となく止むを得ない戦闘が発生していたが、避けられた戦闘もそれなりにあつたのだ。

だが、氣候が陽気な春のエリアから雪の降る冬のエリアに変わり、シキの居城が見えて始めた時から怪物たちの動きが変わつた。

身を隠すこちらを確実に見つけ出し、更に連携まで取り出したのだ。

「どう思う、ブラザー？」

「どうもこうもねえ……い。あれだ！」

青い色をしたティラノサウルスのような怪物を倒した二人——フルボデイとジャンゴが背中合わせになりながら言葉交わす。

その拳が示す先には、とある海賊がいた。

「ペトトトト！……いぞお前ら！……全員殺してしまえ！」

丘の上、こちらを見下ろす位置で声を張り上げる一人の男。右手に鞭を持ち、片目モノクルをしたその男の指示を受け、怪物たちが暴れている。

「見たことあるか？」

「いや、ねえな」

「だがここにいてるってことは」

「そう海賊だ。……最低だな」

「お前も元海賊だろ」

「そうだった！」

怪物たちの攻撃をいなしながらいつも通りの漫才を繰り広げる二人。割と余裕である。

だが、周囲の者たちはそうはいかない。ただでさえ部隊が予定よりバラけた状態で、指向性を持った怪物たちの攻撃だ。流石に堪える。

「ヒナ嬢！　ここは退くべきでは!？」

「流石にこりやキツい！」

二人の部下の言葉に、怪物をその能力で拘束する海軍本部大佐、*『黒檻のヒナ』*は首を横に振る。

「いいえ、あいつはここで倒すわ」

そして、そう宣言した。

ええ、と驚く二人と周囲の者たちに対し、ヒナが冷静に告げる。

「ここで退いたところで拠点に戻れるわけじゃない。ここは敵の本拠地よ。倒せる者は倒さない」と

そう、ここは敵の本拠地なのだ。厄介な敵を避けたところで、それはただの後回しになるだけ。最悪なのは挟み撃ちにされることだ。

故に、倒せる敵は倒す。『歌姫』の奪還の後には撤退戦も待っているのだ。敵は減らせるだけ減らさなければ。

「しかしヒナ嬢！ 敵が何故怪物を操れるのかがわからなければ！」

「二人とも、状況の整理」

鈍い金属音。同時、こちらへ突っ込んできた角を持つ馬が四本の足をそれぞれ二本ずつ鋼鉄の檻に囚われ、転倒する。彼女の持つ能力は、こういう単純な動きの相手には実に効果的だ。

そして話を振られたジャンゴとフルボデイは顔を見合わせ、言葉を交わし合う。

「状況の整理？……よくわからんが、何故か怪物共はあの野郎の指示に従ってる」

「そう、指示だ。どう見ても人の言葉をこの怪物共は聞いてる」

「高いところにいるのは全体を見渡すためか？」

「だが妙だ。自在に操れるんならわざわざ姿を表す必要はねえ」

「てことは、それが条件か？」

「敵に姿を見られることが？ 違うだろ。——そうか、わかった」

「声だ!!」

二人がヒナの方を見る。ヒナは小さく笑みを浮かべた。

「合格」

その笑みに心臓を撃ち抜かれたようになって倒れ込む馬鹿二人。相変わらず戦場だ。というのに割と余裕である。目立った傷がないあたり、間違いなく精鋭なのだ。馬鹿でアホだが。

「総員、状況は理解したはずよ」

倒れている馬鹿二人を無視し、ヒナが周囲に指示を出す。

「最速、最短であの海賊を叩きます。——状況開始」



シキの居城、その正門前。雪の降るその場所に、大勢の海賊たちがいた。

彼らは備え付けられた大砲の側に立って待機しており、遠くに見えるダフトグリーンとその奥の森から来るであろう侵入者を待っている。

遠目にはあるが、既に戦闘が起きていることはわかっている。ただ、ここに辿り着くにはまだ時間がかかりそうだが。

「船長、ラッキーでしたね」

侵入者たちを迎撃するために配置された海賊たち。その最後方の位置にいる海賊、蹴撃のドリーマー”と呼ばれる“新世界”の海賊に彼の部下が声をかける。

退屈そうに椅子の背もたれに背を預けていた彼は、何がだ、と問いかける。

「この状況のどこがラッキーだったんだ」

一見するとチンピラのような風体の男だが、その実力は首にかけられた三億を超える懸賞金が示している。

事実、彼の部下以外の海賊たちは緊張した面持ちだ。その風体に違わず気性の荒さで有名な男である。目をつげられないようにと考えれば、それは緊張もするだろうが。

「寒いわ面倒だわウゼエわでやってられるかよ」

「けど船長、あそこに残るよかマシでしょ？」

「……ああ？」

部下が示す先を見る。それは背後にある巨大な城だ。そこからは戦闘の音は断続的に続き、時折凄まじい轟音も響いている。

僅か九人で乗り込んできた奴らが暴れている音だろう。確かにな、と彼は呟く。

ちなみにものであるが、ドリーマーの背後には出て来る者を迎撃する用の人員も配置されている。元々警備のための人員もいたのだが、連中に全員黙らされてしまった。

「まあ、シキの野郎は“七宝剣”とやらの中で一番おれを信用してねえだろうからな」

「ありや、いいの船長。親分って呼ばなくて」

「他の幹部がいる前ならともかく、いねえ場所で呼びたくもねえ呼び方するかよ」

「でもおれたち以外の海賊もいるよ?」

「大丈夫だろ」

ジロリと、周囲の海賊たちを睨みつけるドリーマー。彼は身を起こすと、大体、と言葉を紡いだ。

「そんなことをシキにチクってどうなるってんだ。あの野郎は笑うだけだ。そしてそいつをおれが蹴り殺す。ほれみろ、チクった奴が死ぬだけだ」

「確かに」

あはは、とドリーマーの部下は笑う。全く、と煙草に火を点けながらドリーマーはボヤク。

「おれはよ、別に『海賊王』も『四皇』もどうでもよかつたんだ。略奪して楽しんで生きてればよかつた。だつてのに、あの日に」

「いきなり襲撃されたもんねー」

「運がなかつた、つてことだろうな。そういうこともある。まあ、命繋いでんだからまだ終わっちゃいねえが」

厄介だぜ、とドリーマーは呟く。

彼自身はこの時代において、夢を見て海賊になったわけではない。奪い、殺し、破壊することに喜びを見出したからこそ海賊になった。毎日汗水垂らして生きるなど馬鹿らしい。その日を楽しく生きられればそれでいいのだ。

故に、こんなところで海軍に正面から戦争を挑んでいる現状など本意極まりない。だが、シキに逆らう力があるわけがない。あの男がどれほどの怪物であるのかを彼はその身でよく理解している。

「見ろよ、あの光景を」

ドリーマーが指で示す先。そこには、この世の終わりのような光景が広がっている。次々と空に向かって打ち上げられたかのように昇っていく岩石群。それは一定以上の高度に達すると、そのまま急降下していく。

あの大質量が降り注ぐ先はマリソフォードだ。下がどんな地獄になっているかは想像に難くない。

「あれをたつた一人の能力者がやってのけてるってんだぜ？ 〃四皇〃 っていうのはどうもこいつもバケモンだというが、それすら評価としちゃ生温い。あれに逆らうのは馬鹿のすることだ」

従うのは利口な生き方だ——そう言って肩を竦めるドリーマー。けどさ、と彼の部下が言葉を紡ぐ。

「さっきの奴は躊躇なく向かっていったね」

「アラバスタの英雄様だからな、世界の怖さを知らねえのさ。それに海軍だ。おれたちのようにシキの野郎に従うなんて選択肢が取れるはずもねえ。……まあ、いい度胸はしてる。海兵やってんのが惜しいくらいにはな」

もし海賊であつたとしても、*「麦わらのルフィ」*の名はそれなりに通つた名になつたであろうと思わせるだけの氣迫を持つていた。まあ、ただの妄想だが。

いずれにせよ、とドリーマーは言う。

「あの英雄様はシキに殺される。ガープが戦うつてんならともかく、あれじゃダメだ。甘く見積もつておれたちと同格程度で勝てる相手じゃねえ」

「あの若さでそれなら十分凄いと思うけどな」

「『若い』ことを待つてくれるような慈悲深い相手じゃねえだろうよ。おれたちは海賊なんだからな」

海賊の世界にも、通すべき筋はある。それこそ人によつては若き才能を見逃すこともあるだろう。だがそれは、あくまで同業者に対するものだ。海軍にかける情けはない。「後ろの連中もおれたちがここに陣取つてる限り合流は出来ねえ。犠牲が何人出るかは知らねえが、結局数には勝てねえよ」

肩を竦めるドリーマー。その彼の耳に、奥の建物から誰が走り込んでくる音が聞こえ

た。

「逃げ込んできたか?——構えろ」

立ち上がり、指示を出すドリーマー。周囲の者たちが銃を構え、出てくるものを待ち構える。

その姿を確認した瞬間に蜂の巣だ——そう思い、指示を出そうとした手は。

「んん?」

しかし、降ろされなかった。走り出てきたのは見知った顔だからだ。

「何やってんだレムナント」

そう、そこから出てきたのは白衣の男、「墓荒らしのレムナント」だった。彼は扉から完全に顔を出すと、一度背後を振り返った。そして、ふー、と大きく息を吐く。

「よし、追って来てないな」

「いや何に追われてんだよ」

「お、ドリーマー。いやさあ、あのジジイがエグい命令すんのなんのつて」

言うのと、レムナントは階段に腰掛けた。ドリーマーは銃を下ろすようにと指示を出すと、改めて椅子に座り直す。

「で、ジジイつーと」

「ジュウゾウのジジイだよ。おれとカガシャで小娘を追って『歌姫』を確保しろなんて

言いやがって」

小娘、というのはいルのことだ。彼女の戦闘能力は高いが、それでも幹部と比べると劣っている。年齢もあって下に見える者は多い。シキの孫娘であるというのに雑用ばかりしているのは一体何なのかとドリーマーなどは思っている。

ちなみにレムナントの生身と比べれば天と地ほどの戦闘能力の差がある。多分一秒持たない。

「野郎の孫が追ってつたのか。ラウンドはどうした？」

「『白猫』とやり合ってるぜ」

「土と煙とはまたなんとも目障りな組み合わせだな」

巻き込まれなくてよかったぜ、と呟くドリーマー。そもそもだ、とそんな彼に対してレムナントが言う。

「おれは頭脳労働担当だ！ 小娘の後を追うなんておれが怪我したらどうする！」

「いやお前、戦場だぞここは」

「知るか！ おれが死ぬのは損失だぞ！ 小娘が追ってんなら任せときゃいいのにあのジジイ！ いきなりキレやがって！」

全く、と腕を組んで憤慨するレムナント。大概クズだなこいつ、とドリーマーは思った。

まあ、だからこそ幹部の中でドリーマーが一番親しい相手でもある。互いに自分のことしか考えていないし、それを互いにわかっているんで遠慮がないのだ。

「つつてもお前、どうやってここに来たんだ？ カガシャと一緒に追えって言われてんならあの女から逃げたってことだろ？」

「それだよ聞いてくれドリーマー！ ジジイがキレた後、今度はガープがキレたんだ！ 床ひつpegがして力任せに振り回してもう部屋は無茶苦茶だ！ 床まで抜けたんだぞ！」

「……マジか」

その光景を想像し、ドリーマーもゾツとした。ジュウゾウとガープという「伝説」が同時にキレるとかどんな地獄だ。

「で、お前はなんで無事なんだ？」

レムナントの肉体は貧弱だ。とある手段によって戦うことはできるしその際の強さは間違いないが、普段の彼はそれこそドリーマーが軽く蹴るだけで死にかねないほどに弱い。

あの部屋は最上階の一つ下の部屋だ。そこでガープが暴れたということは、相応の目に遭っているはずだが。

「落ちた先に雪が積もっててクッションになったんだよ。……腰は痛いけどな」

「相変わらず貧弱だな。少しは鍛えろよ」

「嫌だね。それはおれの理念の敗北だ」

笑みを浮かべて言うレムナント。ドリーマーは肩を竦める。

「まあ、なんでもいいが。ここにいるんなら働けレムナント。スーツ持ってこい。後フランケン部隊もだ」

「ああ？ 働くってなんだよ？」

「あのダフトグリーンの方こうに海軍の増援部隊がいる。それと『歌姫』が合流されたら厄介だ。ここで迎え撃つ」

ダフトグリーンの方こうを示すドリーマー。そこでは複数の爆発音や声、怪物たちの咆哮が響いている。

「ブリード、つつったか？ ジュウゾウのジジイが連れて来た奴が先走ってるがまあ放つとけ。あのダフトグリーンを防衛ラインにしてここで戦うぞ」

「はあ!? あの女から逃げた先でも戦闘かよ!? 嫌だよ怪我したくねえ！」

「ここは戦場だぞ馬鹿が。ここには後ろに戻って戦うか、それともここで戦うかの違いしかねえが……どうする？」

チラリと、レムナントが背後を振り返る。

——その瞬間、まるで見計らったようなタイミングで凄まじい轟音が響いた。衝撃も

ここまで伝わってくる。

その衝撃を肌で受け、口笛を吹くのはドリーマーだ。

「このレベルの衝撃となると、ジユウゾウとガープか？ 城が吹き飛びそうだな」

笑いながら言う彼に、レムナントが振り返る。

「よしわかったここで働こう」

「物わかりよくて何よりだ」

「ただ」

頷くドリーマーに、レムナントが言う。

「倉庫に行くまでおれを守れ」

「はあ？」

思わずそんな反応が出たが、しかし、それは当然かともドリーマーは判断する。

レムナントの本質は科学者だ。その肉体の強さで生き残る自分達海賊とは本質が違う。彼は身一つで戦うことはできず、戦うために道具を必要とする。

普段ならともかく、今の状況でレムナントを生身でいさせる意味はない。故に戦う手段が彼には必要なのだが、それを取りに行く際に何かに巻き込まれたらそのまま死にかねない。彼の要求も妥当であるのだ。

「……しようがねえな。おれが行ってやるよ」

「え、船長。でも」

ドリーマーの部下が声を上げる。しようがねえ、と彼は面倒臭そうに言葉を紡ぐ。

「それにわざわざ指揮を執るほどの状況でもねえだろ。ダフトグリーンから顔出したら銃火器で殺す。それ以外何かあんのか？」

「まあ、それはそうだけどさー」

「それにこいつを他の奴と行かせたら間違いなく逃げるぞ」

親指で指し示しながら言うと、びくりとレムナントは体を振るわせた。状況を見守っていた者たちほぼ全員が、『マジかこいつ』という表情を浮かべる。

「子電伝虫は持つとけ。そう時間はかからねえだろうが、何かあったら知らせろ」

そう指示を出すと、ドリーマーはレムナントと共に走り出す。だが、レムナントは元来運動能力が絶無の男だ。すぐに体力が限界を迎え、足が止まってしまった。

「ちよ、ちよつ、待って」

息を切らして情けない声で言うレムナント。どうしようもないくらいに脆弱だった。「……しようがねえな」

呆れた様子で言うと、ドリーマーはレムナントを担ぎ上げた。それこそ米俵でも持つような体勢だ。

「おお、こりや楽だ。恩にきるぜ」

「調子のいい野郎だ。だがまあ、丁度いい。——お前に一つ、提案がある」
「あん？」

レムナントが疑問符を浮かべる。難しい話じゃねえ、とドリーマーが言った。
「お前が隠れて用意してる脱出艇、おれたちにも囁ませろ」



その海賊の名は、ブリードという。
かつては彼も、一つの家賊団を率いる船長であった。しかし、彼はかつての部下たちに裏切られ、捨てられることになる。

「お前みたいな仲間の気持ちわかろうとしない奴に、誰がついて行くか!!」
そう、彼らには言い捨てられた。

その日から、人間を信じることを止めた。手にした能力を用い、動物たちと生きていた。

だが、あの日。運命が現れる。

“ウハハハハ、某を狙ったのが運の尽きでござるなあゴロツキ”

最早、海賊ときえ呼んでもらえぬほどに落ちぶれた自分。その自分に、あの男は。

“いい目でござるなあ。そして、いい能力も持っている。ふむ、どうでござるか？
こちらに来るのは？”

人を信じることは、止めた。

だからこれは信じたわけでも、縋ったわけでもない。

もう一度立ち上がるための選択だ。

だった、のに。

「やっぱり声だったみてえだな」

「よく見ると、怪物共の首に首輪みてえなのがついてるな」

こちらを見下ろす、人間がいる。

体は、動かない。体を拘束する鋼鉄の檻が、動くことを許さない。

声もダメだ。鋼鉄の猿轡が、声を出すことを許さない。

「周りに仲間はいないのかしら？」

うつ伏せに倒された自分の背中を踏む女将校の問いかけ。仲間などいるはずがない。
いるわけがない。

自分にいるのは、いつだって。

——何故だ。

怪物たちが、海兵たちを襲うことなくこちらを見下ろしている。その目に宿るのは……憤怒と、憎悪。

何故、そんな目を。

おれは、おれさまは。

お前たちを。

「背中を守ってくれる仲間の一人もいないなんて。……ヒナ同情」

直後、強い衝撃が脳を揺らし。

その意識は、刈り取られた。

先程まで自分達を襲っていた怪物たちが、急に大人しくなった。おいおい、とジャンゴが困惑した表情で言葉を紡ぐ。

「どういうことだこりゃあ?」

「おれたちをじつと見てるな」

隣のフルボデイも困惑した表情だ。なるほど、と足蹴にして沈黙させた海賊を見下ろし、ヒナは言う。

「この子たちは無理矢理操られてたみたいね。怒りが伝わってくる」

そして彼女は子電伝虫を取り出した。通信の相手はこの増援部隊の総大将だ。
「ドーベルマン中将。——作戦を第二段階へ進めます」

言い切ると、彼女は周囲の海兵たちに指示を出す。

打ち上げられたのは無数の照明弾だった。夜空を照らす、幾つもの光だ。
そして。

応じるように、無数の爆発音が響き渡った。



廊下を走る激しい音が響く。その音の主は、後方へと大声で叫んだ。

「さっさと来い！ 逃げたら殺すぞ！」

「わ、わかつてる！」

よし、と頷くと男——ドリーマーが速度を上げた。その二つ名になるほどに凄まじい彼の蹴り技を生み出す彼の脚力は、最早常識の外にある。

「中だけじゃなく外で爆発だと……!? 何があった!？」

正面玄関へと辿り着くドリーマー。そこで彼が見た光景は、あまりにも衝撃的なものだった。

「船長！ ダフトグリーンが吹き飛んだ！ 怪物共が！」

「見りやわかる！」

部下が張り上げる声に対し、ドリーマーが応じる。そう、そこに広がっていたのは怪物避けであるはずのダフトグリーンが全て吹き飛ばされ、更にこちらへと侵攻してくる怪物たちの姿だった。

ダフトグリーンから城までは距離がある。故に今は砲撃で押し留めている状態だ。

ドリーマーは舌打ちを一つ零すと、声を張り上げる。

「砲撃を続けろ！ 怪物共を中に入れるな！ おれも前に出る！」

言うのと、ドリーマーは走り出した。内心で何度も舌打ちを零す。

（やりやがったのは誰だ？ 海軍か？ だとしたら討ち入りの連中だろうが、あんな人数でこの規模の爆発を起こせるのか？）

城を守るためのダフトグリーンが半分以上吹き飛ばされている状態だ。正面は完全に素通し状態であり、これでは怪物共は入り放題である。なんとかしなければ被害拡大は避けられない。

だが今は、とにかく目の前の怪物たちだ。

「ゴオオオツツ!!」

唸り声を上げて突っ込んでくるのは、巨大な猪のような怪物。ただその牙はまるで剣山のようになっており、正面から当たれば文字通り引き裂かれることは間違いない。

だが、その猪の真正面にドリーマーは走り込む。

「獣が凶に乗るなよ」

眩きと共に、彼は右足を構えた。その足に、覇気が込められる。

そして。

「ぶち抜くぜ! 貫通蹴撃!!」

貫くような蹴りが、猪の牙を粉碎しながらその脳天を貫いた。

悲鳴すら上げられず倒れ込む猪。煙草を取り出し、ドリーマーは火を点ける。

「砲撃を続ける」

おお、という歓声が響いた。対照的に、怪物たちが彼の姿を見て一步下がる。

彼我の力の差を理解したのだろう。獣であるからこそ、本気で理解したのだ。

この人間は、化け物だと。

「酷い事をするのね」

そんな中、一人の女性将校がこちらへと歩いてきた。スーツを着た美女だ。ほう、と

ドリーマーは笑みを浮かべる。

「ようやく到着か、海軍本部。お前らはいつも遅いな」

「……………」

相手は無言。手袋を着け直し、一息を吐く。

そして。

響き渡るような金属音が、戦闘開始の合図となった。

「総員！……こいつは私が相手をする！ 入り口をこじ開けなさい！」

蹴りと拳。それが衝突したとは思えない音を響かせながら、女性将校——ヒナが後方の部隊に指示を出す。

応じる声が上がリ、続々と海兵たちが走り出てくる。

はっ、とドリーマーはその光景を前に笑った。

「ここに来るだけで随分お疲れのようだけぞ野郎共！ 近寄らせんなよぶつ潰せ！」

海賊たちからも応じる声上がる。そんな中。

「……先に行きなさいと、言っただけでいいぞ」

「おいおいヒナ嬢。そりゃあ野暮つてもんだ」

「あんたの前で戦うのがおれたちだけ」

ヒナの腹心の二人が、彼女の指示に従わずにドリーマーの前に出て来たのだ。はあ、と彼女は息を吐く。

「勝手にしなさい。ただし、相手は三億の首よ。油断はしないように」
その言葉に、えっ、という言葉を二人が零し。
振り抜かれたドリーマーの蹴りが、空を裂く。

シキの居城、その正門前。

状況、開始。

逃亡海兵ストロングワールド⑫—2

第十三話 とある海兵の想い

あの二人との縁の始まりについては、奇妙というか、唐突な形によるものだった。

海兵としてのキャリアもそれなりに長くなってきたと感じ始めた頃、突然元帥であるセングクから呼び出されたのだ。

ただ、今は「大海賊時代」である。緊急事態など常のことであり、相応の立場を得た自分が呼び出されるのも当然のことだった。

「入ります」

「ああ、楽にしてくれ。……先に祝いの言葉を述べておこう。少将への昇格おめでと

う”

“ありがとうございます”

海軍本部元帥センゴクのその言葉に、海軍式の礼で応じる。彼に促されて席に座ると、早速という風に彼は言葉を紡いだ。

“実は頼みがあつてな。とある新兵二人を部隊に入れて欲しい”

“新兵を、ですか”

その言葉には正直困惑した。先日少将に昇格した自分の部隊はその肩書きに応じて危険な役目を担うことになる。それこそ強力な力を持つ海賊の捕縛というのは常だ。

そこに新兵を入れるというのはあまりにも危険な話である。右も左もわからぬ新人では命を落としかねない。

だが、センゴクは大丈夫だ、と言葉を紡ぐ。

“新兵ではあるが、既に二人とも伍長に昇格している。将校になるのもすぐだろう。戦闘能力という点では間違いはない”

“伍長に、ですか。それはまた随分と早い。スカウト組ですか?”

新兵の入隊から数ヶ月と経っていないはずだ。それでその地位を与えられるというのは、尋常じゃない出世スピードである。

ただ、海軍には通常とは違いスカウトで入る者もいる。元賞金稼ぎや国家の軍隊、備

兵などが多いのだが彼らはその実力を買われて海軍に入るため出世スピードも早いのだ。

“いや、正規の手続きを経た新兵だ。出身は東の海”

“東の海ですか”

かつて“海賊王”が生まれ、そのライバルたる“英雄”が生まれた海だ。しかし、この大航海時代においてその海は別の名で呼ばれている。

曰く、“最弱の海”。

名を上げる海賊の多くが小粒であり、他の海と比べると平和な海だ。そんなところからそこまで突出した人間が出て来るのか。

“男女の二人で幼馴染だそうだ。フーシャ村という東の海の辺境で育っている”

言いながら、センゴクは一枚の写真を取り出した。新兵たちの集合写真だ。数十人という中で、中心にいる二人を示す。

一人は、満面の笑みを浮かべた少年だ。麦わら帽子を背中に回し、海軍帽を被って少し不恰な敬礼をしている。その隣にいるのは、鮮やかな紅白の髪をした少女。こちらは緊張した面持ちで、しかし、少年と比べるときつちりとした敬礼をしている。

“少女の方はともかく、こちらの麦わら帽子を持っている方が問題だな”

“問題とは?”

“名をモンキー・D・ルフィ。……ガープの孫だ”

その言葉に衝撃を受けた。ガープといえれば世界中の海賊が恐れる“海軍の英雄”だ。その孫ともなればどうしても期待がかかる。

“私が懸念することと、お前たちの抱く『期待』の本質は同じだ”
 “こちらを見つめながら、センゴクは言う。”

“ガープの孫であり、既にこの短期間で伍長に昇進するほどの才覚を示していると言ふ事実はあまりにも大きい。……誰も彼もが、この少年を『ガープの孫』としか見なくなってしまうほどに”

その言葉を受け、思わずハツとなった。自分がまさしくそうだったのだ。

改めて写真を見る。笑顔の彼はあまりにも若い。十五になっているかどうかというぐらいに見える。

彼の“海賊王”が引き起こした“大海賊時代”において、海軍は変革を迫られた。平時であれば後進の育成にも余裕があったが、今の時代においてそんな余裕は少ない。実力があればすぐにでも昇格し、危険な任務につく。

才能ある若い海兵が、その才能が開花する前に命を落とす姿を何度も見てきた。それでもこの少年の見た目からする年齢を考えれば猶予はある。……彼の出自が、通常のものであるならば。

“才能ある若者、ガープの孫。この二つが揃えば不幸な未来はいくらでも想像できてしまう。……だからこそ、任せたい”

“何故、私なのでしょうか”

“人格と実績に対する信頼だ”

こうまで言い切られてしまうと何も言えない。

まあ、元より断る権利もないのだ。了承を返すと、海軍の総指揮官は露骨にホツとした表情をした。

“そうか。まあ、苦勞するだろうがよろしく頼むよ”

そう言つて、彼はこちらの肩を叩いた。まるで重い荷物を下ろしたかのような、清々しい笑顔だ。

……その表情の意味を理解するのに、長い時間は必要なかった。



無数の銃口が向けられている。数はおよそ三十。

どれほど肉体を鍛えようとも、銃弾によつて人は死ぬ。銃という武器は生物を殺すために生まれた道具であることを考えれば当たり前だ。

そしてそれは、銃口の先にいる海兵——モモンガも例外ではない。

「卑怯だなんて言うなよ〜？ テメエらが普段からやつてることなんだからよ〜？」

こちらを煽るような声。視線を向けると、そこにいたのは巨漢の道化だ。

黒い仮面に白い道化服。その海賊の名は、*“返り血のブルチネラ”*。かつてシキの右腕として恐怖と共に伝説となつた*“殺人鬼”*を除けば、シキの今の配下では一番の大物だ。

「それにしても、まさかこんな機会を手に入れられるなんてなア」

笑いながら言う彼の周囲、モモンガを囲むようにして立っているのはブルチネラの率いる海賊団の者たちだ。全員が彼と同じ黒い仮面を着けている。その全員が口元に笑みを浮かべていた。

ガープの大暴れから退避したモモンガはブルチネラを逃すべきではないと判断し、追うことにしたのだ。そして辿り着いた広間で向かい合う二人を囲むようにこの道化の部下たちが姿を見せ、今に至る。

「モモンガといやアあの小僧と小娘を育てた海兵だ。あの小僧に殴られた恨み、テメエで晴らしてやるぜ」

笑みと共に言う道化。その言葉に、ふつ、とモモンガは小さく笑った。

「何がおかしいんだテメエ？」

「いや……育てた、というのには誇張だ。私はただ新兵だったあの二人を預かり、当たり前
のことを教えたに過ぎない」

「あア？」

「むしろ……私の方が教えられてばかりだ」

モモンガは腰の刀の柄に手をかける。それを見て、構えろ、とブルチネラが怒鳴るよ
うに叫んだ。

「妙なことをする前に撃ち殺せ！」

「遅い」

超高速の移動術、〃剃〃。まるで姿が消えたかのように錯覚するほどの移動術。相応
の実力者でなければ目で追うことは不可能だ。

しかし、ここにいる〃返り血のブルチネラ〃——懸賞金が五億に迫るほどの〃新世界
〃の海賊たちに弱卒などいない。

「遅いのはテメエだ！」

ブルチネラの言葉の通り、彼の部下たちはモモンガの動きを捉えていた。空中へ飛ん
だ彼に、銃口が向けられる。

なるほど、と呟いたモモンガは空中を蹴った。空を駆ける技術、*“月歩”*だ。

銃弾が空を駆けるのと、彼がその場から離れたのは文字通り紙一重の差である。いくつもの銃声が轟いた。

「上手く逃げたな！」

「撃て撃て！」

「蜂の巣にしちまえ！」

海賊たちが床に着地したモモンガへと照準を合わせる。一度引き金を引いてしまえば後はもう躊躇はない。元より海賊と海兵。あるはずもないが。

故に彼らは何の疑いもなく引き金を引いた。ただ、一人だけ。

「待て！」

この場を仕切る男だけがそれに気付いたが……遅い。

——鮮血が舞い。

「うあ……！」

「ぐっ！」

「ぎゃあああつ！」

いくつもの悲鳴が響き渡った。放たれた銃弾は標的には当たらず、海賊たちを貫いたのだ。

考えてみれば当たり前だ。取り囲むような状態で銃弾を放ち、それが標的に当たらなければ向かい合う者同士で撃ち合う形になる。

「馬鹿どもが！」

ブルチネラが怒鳴ると共に、海賊たちが複数人倒れる。残った者たちが慌ててモモンガに照準を合わせようとするが、大人しく止まっている彼ではない。

鼻が床につくのではないかというくらいにギリギリまで身を屈めた彼は、そのまま滑り込むようにして自身を囲む一団のうち、ブルチネラのいる方とは反対側へと斬り込んだ。

鮮血と悲鳴。銃声が遅れて響くが、目標の海兵のものではない。

「テメェ!!」

怒鳴るような声と共に、ブルチネラが踏み込んだ。モモンガはそんな彼から距離を取るために後方へと飛ぶと、倒れた海賊の銃を手取る。

銃声が響く。ブルチネラの部下の一人が、モモンガによって撃ち抜かれたのだ。

「銃は海兵の嗜みだ。……物騒な上に、約一名どうしてもできなかった者がいるが」

自分のパンチは銃より強いと言っていた青年を思い出す。事実、その肉体で戦い続けているのだから大したものだ。

「チツ、テメェら武器を変えろ！」

ブルチネラが怒鳴るように指示を出す。その指示を受けて海賊たちが武器を変えようとしますが、その前にモモンガが動いた。

彼が懐から取り出したのは、いくつもの爆弾。栓を抜けば数秒後に起爆するそれを彼は部屋へとばら撒く。

「敵の本拠地に少数で乗り込むというのに、”こういった方法”を考えなかつたとても？」

呆れたものだという、彼の眩きは。

閃光と爆音に掻き消された。

「……………」

煙が晴れ、爆発前の一瞬で部屋の天井近くへと退避していたモモンガが着地する。彼は眉間に皺を寄せた表情で前方を見つめていた。

「……部下を盾にするのか」

「ああ？ 海兵一人殺せねえ役立たず共だ。このぐらいいは役に立つてもらわねえとなア」

応じたブルチネラは、その両手で自身の部下の頭を掴んで盾にしていた。虫の息の彼らを、投げ捨てるようにして放り出す。

「所詮は海賊か。仲間意識がない」

「利益のために集まってんだ。切り捨てられるのも想定内だろ」

「醜いな」

「この世界で最も醜い連中の御用聞きがほぎくんじゃねえよ」

笑うブルチネラと、睨むモモンガ。既に彼ら以外、立っている者はいない。

「まあいい。こいつらはおれの強さに寄ってきた蠅みたいなものだ。いなくなるが知ったことじゃねえ」

言うのと、ブルチネラは近くに倒れている自身の部下を蹴り飛ばした。二人が向かい合う、小さな空間が出来上がる。

「お前らがおれの首に懸けた金は五億近く。お前を殺せばまた上がるだろうなア」

「できるものならな」

「できるからこうしてんだよ海軍本部！」

巨漢の道化が、その剛腕を振るった。刀でそれを受け止めたモモンガの腕が、衝撃によつて痺れる。

そのふざけた衣装や言動、立ち振る舞いで誤認しやすいが五億近い懸賞金を懸けられた海賊が弱いわけではない。それほどの大金がその首に懸けられているということは、世界政府がそれだけの危険をこの海賊に感じているということでもある。

「テメエら海軍が何度おれを捕らえようと向かってきた!? その悉くが失敗に終わってん

だよ！ いい加減理解したらどうだ!？」

「ならば今日が最後の日だな」

弾くように刀を振るい、その脳天に対して返す刀で振り下ろす。だが、その一撃はクロスした腕でガードされた。

拮抗する力。その中で、二つの意志がぶつかり合う。

「貴様の悪行もここで終わる」

「ほざいたな海軍本部！」

戦闘、開始。



センゴクのあの表情の意味を理解するのに必要な時間は、三日だった。

配属の決まった二人、ルフィとウタという新兵をモモンガの部下は喜んで受け入れた。共にまだ十代の若さで、隊員たち全員にとって弟や妹のような年齢だ。どうしても庇護の感情は出てくる。

海兵になる者には故郷に家族のいる者も多い。いやむしろ、そういった者が大半だ。この時代において人を守るために戦いの道を選ぶのだから、その背景に家族を始めとする大切な誰かがいる場合は多い。

そんな彼らにとつて、故郷にいる家族の姿と重なる部分もあるのだろう。二人はすぐに馴染んだ。特にルフィについてはその天性の明るさから初日には仲良く宴会をしているくらいだ。

これなら大丈夫だろうか、とモモンガは思った。『英雄』ガープの孫ということ、複雑な何かを抱えている可能性を懸念したがその辺りは気にしていないらしい。

ウタの方は当初少し人見知りをしていたが、それもルフィに引つ張られるようにすぐ馴染むようになる。女性海兵たちからは妹のように可愛がられていた。

大きな問題はないと、そう思っていたのだ。……最初の騒動が起きるまでは。

『言い訳はあるか?』

ずぶ濡れの状態でもモンガの正面に正座するのは、ルフィとウタの二人だ。ついでに言うとその後ろにも大量の海兵たちが正座しており、そのうちの数名はずぶ濡れである。

ことの起こりはこうだ。本部と連絡を取り、受けた任務についてモモンガを筆頭としたこの艦の指揮官たちで話し合っていたところ一人の海兵が飛び込んできたのだ。

——二人が海に落ちました！ 艦の停止を！

モモンガはすぐに停止の指示を出し、甲板に出た。そこでは海から引き揚げられ、倒れている姿があつたのだ。共に悪魔の実の能力者である。海に落ちれば何もできず、死は免れない。

何があつたのかを聞いたモモンガは、躊躇いがちにされた報告に彼としては怒る前に頭を抱えるという初めての経験をする。

“報告によれば、海で樽レースなるものをして海王類と遭遇。戦闘になり、その余波で海に落ちたと聞いたが？”

凄まじい威圧感を纏いながら放たれるその台詞に、この幼馴染たちは揃って顔を逸らした。ついでに言うのと彼らを助けたり様子を見ていた海兵たちも気まずそうにしていく。

ことの発端は単純だ。休憩の時間、この二人が『勝負』を始めたらしい。どうも幼い頃からの習慣らしく、聞けばこの三日でも幾度となく行われていたのだとか。その際に行われた勝負では互いに納得する決着とならず、新たな勝負を始めたらしい。それが樽を船に見立てての競争、樽レースということだ。

“休憩の時間内だ。何をしようがこちらから干渉する気はないが、節度というものがある”

“……すみません……”

怒鳴らないのが余計に怖い。二人が頭を下げるが、その動きがやたらと流暢というか慣れた動きであつたため、初めてでないなとモモンガ察する。

これは思ったよりも大変なのを任されたかもしれん、と彼は内心でため息を吐いた。

“ま、まあまあ二人とも初の長期航海で少し緩んだんでしよう”

そんな彼に、一人の海兵がそうフォローを入れた。その彼をジロリとモモンガは睨むようにして見据えると、改めて二人の方を見る。

“先に言つたように、休憩時間に何をしようが干渉する気はない。しかし、その結果周囲に迷惑をかけたのであれば罰を与えねばならん。それは風紀と節度を乱す行為だ。

——よつて二名は一週間の甲板掃除を命じる。併せて二人で懲罰室に入れ。交代の時間まで謹慎だ”

言い渡された罰に対し、二人が頭を下げる。全く、とモモンガは息を吐いた。

“コミュニケーションは大事だ。だが、やり方を考えるように”

先が思いやられる。

それが、この二人に対するモモンガの最初の感情だつた。



懸賞金とは危険度である。戦闘能力とイコールで紐付けされるわけではなく、例えば絶大な強さを誇っているようが他者に対して危害を及ぼさない人物であればそもそも懸賞金がかかることはない。

逆に民間人や世界政府に対して積極的に危害を加える者は懸賞金も高く設定される。億を超えるような者は基本的に近寄ることさえ危険な存在だ。

そんな中、五億に迫る懸賞金が懸けられた道化——「返り血のブルチネラ」は掛け値なしの危険人物である。白い道化服が血で染まるような暴れ方をするその男が犯した罪の数は最早数えきれないほどで、とある王国の国軍が半壊に追い込まれたこともあるほどだ。

これほどの危険人物だ。海軍も何度も捕まえようとはした。しかし、その悉くを彼は逃げ切っている。平気で人質をとり、味方さえも切り捨てる残虐性と狡猾さでこの海を渡ってきたのだ。

彼の海賊団は入れ替わりが激しく、船長であるブルチネラ以外に名のある海賊はいない。はつきり言って木端の海賊たちだ。しかし、それを凶悪な一団としているのがブル

チネラの存在である。

故に、油断はできない。モモンガは刀を握る手に力を込める。

「——ふっ」

一息と共に、モモンガは刀を大きく振り上げた。そのまま身を捻り、突きへと動きを変える。だが、ブルチネラはそれを大きく後方へと飛び退くことで避けた。

その巨漢からは想像できないほどの俊敏さだ。その仮面の下の目が怪しく光る。

「道化つてのはサーカスにおいて最も重要な存在だ。何でもできなきやならねえ」

言いつつ、ブルチネラはどこからか複数の棍棒を取り出した。取り出した数は十一本。それらで器用にジャグリングを始める。

「何が道化だ。貴様はただの海賊だ」

「ああそうだ。テメエの言う通りだよモモンガ。おれはただの海賊だ」

ただジャグリングをするだけでなく、途中で様々な動きを加えている。ここがサーカスのテントの中であれば、モモンガも拍手の一つでも送っていたかもしれない。

「だが人間、過去は消せねえのさ。そして消せねえなら利用する。——それがおれのやり方だ！」

「ジャグリング・ボムッ！」

直後、ブルチネラが棍棒をこちらへと投げつけた。モモンガはそれを刀で弾こうとし、何か嫌な気配を感じてその場を飛び退く。

「いくい判断だ！」

その飛び退いた先に、すでにブルチネラが先回りしていた。その手には指に挟んだ左右三本ずつのナイフがある。

「『ナイフ・コンタクト』！」

ナイフを握った拳による振り下ろすような攻撃。それをモモンガは受け流すようにして捌く。

単純な体格差が大きいのだ。力でも負けるつもりはないが、わざわざ正面から受ける意味はない。

そうして一撃目を受け流した瞬間、床に落ちた棍棒が爆発を起こした。床に倒れていた海賊たちがその爆発に巻き込まれ、吹き飛ばされる。

「どこまでも外道だな」

「だから海賊なんだろうがよお！」

数度の金属音。モモンガが踏み込もうとした瞬間、それを察知したようにブルチネラが身を横へ逃した。

その際、牽制のためかナイフを全て投げつけてくる。それをモモンガが弾いたところで、ブルチネラは次の小道具を手にしていた。

「『バルーン・クラフト』！」

いくつもの風船を取り出すブルチネラ。それらは様々な動物の形をしており、色鮮やかなそれらが投げつけられ、モモンガの元へと殺到する。

だが所詮は風船。切り拓いて突き進むとモモンガは判断。

「おっと、言い忘れてたがおれの風船は特製でな」

モモンガが刀を振り、風船を斬る。その瞬間。

「釘入りだ」

弾けた風船から、無数の釘が飛び散った。モモンガの体に鉄釘がいくつも突き刺さり、或いは傷が入る。

その痛みにより、一瞬ブルチネラから目を離してしまった。それが致命の隙となる。

「グランド・ファイナーレ!!」

一瞬で距離を詰めた巨漢がその渾身の拳を振り抜いた。側面からまともにその一撃を受けたモモンガは吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「ああ、言い忘れてたな海軍。道化つてのは体が資本だ。おれの拳は人ぐらい簡単に壊せるぜえ?」

嘲笑うように言うブルチネラ。だが、直後。

「一刀居合」

その笑みが、消えた。

「断割!!」

一瞬でブルチネラの眼前へと移動したモモンガによる居合の一撃。その刃が、ブルチネラの左肩から袈裟斬りに叩き込まれた。

たたらを踏むブルチネラ。その白い道化服が自身の血で赤く染まった。

「生憎だが」

ブルチネラの眼前、英雄を育てた男は告げる。

「貴様の芸は見飽きた」

それに対し、道化が笑う。

「そう言うなよ！ 本番はここからだ！」



新たに入った二人は、あれからも功績上げると同時に問題を次々と起こしていた。

聞けばガープから直々に幼少期から鍛えられていたらしく、その戦闘能力は年齢を考えると破格だった。真っ先に最前線へと突入する二人に続けとばかりに他の海兵たち

も突撃するための士気も高く、海賊との戦闘においては非常にいい影響を与えてくれる。

だが逆に問題もある。一つは民間人への被害だ。その戦闘の規模の大きさから、民間人の家屋などの財産へも被害が行っているのだ。今のところ救われたことによる感謝が大きいため問題視はされていないが、もう少し周囲に気を配れるようにしなければ。後はまあ、悪いことではないのだが民間人との接触が多過ぎる。そしてトラブルを呼び込み、その解決に奔走するというパターンだ。やっていることは間違いではない。なののだが、どうしても時間は取られてしまうのだ。

“……苦勞をする、か”

センゴクの言葉を思い出し、モモンガは報告書を書き上げながら呟いた。立ち寄った先で話を聞き取り、それに対応する。それが巡回時の彼らの役目であるが、場所によっては警戒や遠慮、更には事情もあつて本心をこちらへと示してくれないことも多い。今報告書を書いている国についてもそうだった。

元々は海賊の被害を受けているという通報の元で訪れたのだが、その港町の町長はその事実を否定した。聞き込みをしても同じだったのだ。

誤報か、悪戯か。問題ないならと立ち去ろうとした彼らに、町の子供たちと仲良くなった二人がその情報を仕入れてきた。

“モモンガのおっちゃん。なんかさ、海賊つてこの子たちの家族なんだつて”
“どうやら事情があるようです”

上官には敬語を使えとルフィに軽く説教した後、二人が子供、そしてその保護者たちから聞いた情報を取りまとめた。

つまり、状況はこうだ。ここ数年、この近辺では農作物が満足に採れない状態が続いており、この国の民の間に不満が溜まっていた。その窮状をこの国を治める王に訴えたが、その後の対処がない。そこに痺れを切らし、国が集めた物資を奪うために周囲の町や村の若者が集まって海賊を名乗り始めた。

彼らが奪った物資は飢えに苦しむ者たちへと配られているらしい。それで通報とそれに対する町長の否定の意味を理解した。

通報したのは国で、否定したのは国民だ。何とも厄介な話である。

“どうしたい?”

“助けたいです”

即答したのはウタの方だった。その強い意志を込めた瞳と、その隣のルフィの表情を見てモモンガは大きいため息を零した。ここで何かしらの指針を示さなければ、今にも飛び出しそうな勢いである。

故に彼は、この二人に告げたのだ。

“お前たちは引き続き情報を集めろ。私が何とかする”

そう言つて、モモンガは彼の部下たちを集めた。海賊との戦闘は究極的にいえば戦つて勝てばそれでいい。単純な話で済む。だがこれは気候という自然の問題と、国家の運営という二つの問題が重なっているのだ。

悪い奴をぶつ飛ばせば済む問題ではない。だからこそ解決は難しい。

だが、彼はやると決めた。若き海兵の想いを無駄にしないために。

——結果として、彼がやったことは非常に地味なことだった。

元々加盟国であり、大国ではないが相応の格と歴史がある国だ。異常気象に対して人ができることなど多くない。故に彼は自身の地位と海軍という背景を使い、近隣諸国へと使いを出した。それと同時にこの国の王へと提案を行ったのだ。

海軍、ひいては世界政府を仲介人として周辺諸国からの借金と援助を取り付けたのだ。この時代だ、窮状に喘ぐ国が一方的に助けを求めても足元を見られる。故にモモンガはそこに第三者を挟むことで不当な要求が起らないようにと手配した。

とはいえ、国家同士のやり取りだ。様々な思惑があり、事情がある。はいそうですかと話がまとまることはなく、月単位での時間を要した。

だがそれでも、彼は粘り強く話を続けた。

“助けたい”

若き海兵がそう言ったのだ。そして海軍に入った時の彼の想いもまた『それ』だった。誰かを助けたいと願い、その想いを共有して。その方法が難しくとも手段があるとわかったならば、彼と彼の部隊にはそれがどれほど大変だろうとやらないという選択肢はない。

“まさか海兵であるあなた方にここまでしていただけるとは”

“我々の目的は平和であり、市民を守ることです。戦うだけが全てではありません。必要であれば武器を置き、言葉を持って交渉でも何でもします”

全ての交渉を終えた後、モモンガは国王から直接礼を言われた。穏やかで優しそうな老人だった。だからこそ苦悩していたことが見て取れる。

その言葉を聞き、国王は息を吐いた。そして、彼は意を決したように言葉を紡ぐ。

“海賊の、件だが”

“誤報と聞きました”

モモンガは言う。国王の周囲の者たちが、驚いたような表情を浮かべていた。

“たまにあることです。ただ、その誤報のお陰で力になることができました”

国王もまた、呆然とした表情をしていた。そして彼は、一言。

“ありがとう。私はこの恩を決して忘れない”

頭を下げる国王。周囲が止めるが、その老人は手でそれらを制する。

“素直に助けを求めることさえできぬ我々を、この国を、民を助けてくれたのだ。今頭を私が下げずして、どうして報いられる。何一つ返すものも持たぬというのに”

そこに込められた言葉の意味は、如何程のものであったか。

“礼については、私の部下たちへ。とある若い海兵二人が市民の声を聞いた。だから私は動きました”

他の者たちも、モモンガへと頭を下げる。それが決着であった。

——そして、彼らはこの国からの出発を万雷の拍手と歓声に送られながら行うことになる。その甲板で、二人の新兵はモモンガに対して敬礼をしていた。

“ありがとうございます！ モモンガ少将！”

いつものどこかぎこちない敬礼ではない、きつちりとした敬礼をしながらそう言ったのはルフィだ。今回は戦いではなく、経験も知識も足りない彼らは情報収集をしながら市民と交流することを主な任務としていた。故に何もできなかったという思いが強いのだろう。

“お前が敬語を使うと違和感があるな”

息を吐き、手を下ろせ、とモモンガが言う。

“礼は必要ない。お前たちが『助けて欲しい』という声なき声を拾い上げたからできたことだ。後は適材適所の問題に過ぎん。海軍は軍隊だ。個人でできることを積み重

ねることこそが強きなのだから”

お前たちはよくやった——そうモモンガは言う。これは本心だ。大変ではあったが、市民の力になることができたのだ。その切欠は間違はなくこの二人だったのだから。

だが、二人は敬礼をしたままだ。故に、モモンガは続きの言葉を紡いだ。周囲の海兵たちもそんな三人を見守っている。

“お前たちはまだ若い。これから多くを見、学び、知ればいい。私もお前たちと同じ年齢でこんなことはできなかつた。……強くなることは必要だ。だが、刃を交えることだけが戦いではない”

だから、とモモンガは言った。

“いずれ同じ戦いをするようになる日は必ず来る。その時に戦うことができればそれでいいのだから”

若き、海軍の未来へ向けて。

モモンガは、そう激励を送った。



道化を名乗るだけのことはあり、ブルチネラは非常に器用な男だった。

棍棒型の爆弾や釘を仕込んだ風船などの多様な武器をどこからともなく取り出すと、それらを用いてトリツキーな動きでこちらを翻弄する。

そして本人が弱いかというところと全くそんなことはない。むしろその凶悪なフィジカルこそが真骨頂だ。

「どうした海軍！ その程度かア!？」

「貴様こそ同じ芸ばかりだろう!」

大道芸を模した様々な道具を用いるブルチネラと、刀一本でそれに応じるモモンガ。対照的な二人の戦闘は拮抗しているといえた。

互いに戦況を変える一手を常に探している状態だ。多い手札を持つ海賊か、それとも一点を極めた海兵か。

その均衡を破るのは、やはり道化の側。

「こいつは山場の芸だからな。—— グクラウン・ギャララー!」

無数のブルチネラが被る仮面と同じ仮面が出現した。なんだ、と思う彼の前でブルチネラが笑う。

「客つてのは派手であれば派手であるほど喜ぶのさ。おれは道化、客の感情を読み取る

なんざ朝飯前よ。——その意識の隙間もな！」

「……………」

まるでこちらを取り囲むようにして放たれた無数の仮面。だがそれだけのはずがない。

周囲を見る。一箇所、隙間があつた。

モモンガから見て左側。ブルチネラから見て右側。そこに一人分なら通れる隙間がある。

地面を蹴り、その穴を抜けようとするモモンガ。しかし、甘かつた。

「おいおい、まだ演目は終了してないぜ」

高速の移動術、*“剃”*。地面を十回以上同時に蹴ることであるで瞬間移動でもしたかのように移動するその技術はしかし、一つだけ致命的な弱点がある。

それは、地面を蹴るその瞬間のみはその場に停止するということ。

通常ならば突けるような弱点ではない。だが、目の前にいる道化はモモンガのその行動を誘導したのだ。

「*“グランド・ファイナーレ”*!!」

こちらが地面を蹴るその瞬間、振り下ろすような右拳の一撃がモモンガを打ち据えた。

とてつもない重量の鋼鉄で殴られたかのような衝撃に、意識が揺れる。

「こんだけやり合えばテメエの動きぐらいは掴める。それがおれの本職だからな」

床に倒れ伏すモモンガ。その彼に、ブルチネラは思い出すようにして告げた。

「ちなみにテメエの予想の通りだぜえ？——この仮面は爆弾だ」

道化がモモンガが抜けようとした場所から抜け出すのと同時に。

凄まじい爆発が、部屋を包んだ。

「ぎゃくつはつはつはつはつは!! これこそ終幕にや相応しい!! おれは道化だ!! 客の感情を読み、誰よりも相手を読めなきやならねえ!! やり合えば大抵の奴の動きが読めちまうんだよ!!」

白き道化の笑い声が響き渡る。彼自身も決して無傷ではないが、それでもこの場での決着はここで着いたと彼は確信していた。

読む能力としての「見聞色の覇気」に彼が目覚めたのは、彼がかつて所属していたサーカス団にいた頃だ。客の空気を読み、周囲の者たちの空気を読むことを日常としていた彼はその才能もあつていつしかその力を手にしていた。

その力は海賊となつてからも十二分に発揮された。擦り寄ってくる海賊の本心はある程度交流を持てば読めたし、部下が不満を持てばすぐに察知して適当な理由をつけて殺す。海軍や賞金稼ぎに狙われてもその思考を読んで戦い抜いてきた。

海賊、〃返り血のブルチネラ〃。

その真骨頂は、ステージの道化の如く場の空気を読み切つて利用する能力にこそあるのだ。

「海軍つてのはテメエみたいな堅物が多くて読みやすいから助かるぜ」

爆発の中心。爆炎が燃え移ることによつて火が出始めた場所に向かい、笑みと共に告げる。

「しかしまあ、中将つて圧はあつたなあ。褒めてやるよ。えく……あく、悪い。名前は忘れた」

笑う道化。そうして彼は背を向ける。

だが、彼は気付いていない。爆発の中心。

そこに、立ち上がった男がいることに。



それに気付いたのは、ある日の夜だった。

どうにも目が覚めたモモンガは、風に当たろうと甲板に出たのだ。すると、何やら音が聞こえる。

“なんだ?”

見張りが何かをしているのかと思い、甲板に行くとそこでは新兵二人が鍛錬を行なっていた。

“……5001……5002……”

その時にやっていたのは腕立て伏せだ。滝のような汗を流し、ルフィがその鍛錬を続けている。

“……もつと速く……鋭く……”

その近くでは、ウタが舞踊と見紛うような動きの形稽古をしていた。彼女もまた、滝のような汗を流している。

共に、その表情と目は真剣だった。日中に見せる明るい姿ではなく、鬼気迫る雰囲気纏っている。二人を受け入れてから、戦闘の時さえも見たことがない姿だった。

“ここのところ毎日、ああしてますよ”

それを眺めていた自分に気付いた見張り番の海兵がそう話しかけてくる。

“毎日だと?”

“はい。休める時に休んだ方がいいとも言ったのですが”

そう言うのと、見張りの海兵も二人へと視線を戻す。

改めて二人を見る。年齢に違わぬ戦闘能力であるとは思っていた。その裏付けはガーブによる英才教育であると。

だが、これはそれだけではない。

この凄まじいまでの想いが、この若さであれほどの強さを身に付けさせたのだろう。

“二人とも”

声をかけると、二人が驚いた表情を浮かべた。敬礼をしようとする彼らに対し、モモンガは何故、という問いかけをしようとして口に出す前に止めた。理由などわかりきっている。

強くなりたいから鍛錬をするのだ。それ以外に理由などない。

だから、モモンガはこう告げた。

“私が相手をしよう。その方が鍛練になる”

その日から、この二人の相手が彼の日課に加わった。

強くなりたいから鍛錬をする。それは当たり前のことだ。モモンガも、海兵になったばかりの頃は遙か遠くに見えた先達の背中に追いつくためにがむしやりに刀を振るい続けた過去がある。

だが、いつからだろう。

鍛錬はしている。しかし、それが惰性のようになってしまったのは。

“二人まとめて相手をしよう”

躊躇はなかった。こういう思い切りの良さは素質もあるだろう。だがそれよりも、強さを求める確固たる意志があるからだ。

そして、そんなことを続けるうちに。

“もつとこう頭使おうぜ。せつかく二人で挑んでんだし”

“お前からコンビネーションはいいんだからさ”

“少将！ 二人の前に自分が挑んでもいいですか！”

夜の甲板に上がってくる人数が、随分と多くなつた。

二人にアドバイスを送りながら、基礎鍛錬を積む者。

二人と同じように、挑んでくる者。

合間合間でこちらへとアドバイスを求める者。

たつた二人の鍛錬が、部隊全員をいつの間にか巻き込んでいる。

“いや、モモンガのおっちゃんは強えなア”

“全然、歯が立ちません”

息も切れ切れに、二人はいつもそう言つて笑つていた。当たり前だと、そう返した記憶がある。年季が違うのだと。

けれど。

彼らは、言うのだ。

“絶対、おっちゃんより強くなるからな！”

“必ず超えてみせます！”

何度甲板に叩きつけようと、完膚なきまでに制圧しよう。

彼らの目は、死ななかつた。

“私とて今よりも強くなる。そう容易くはいかん”

その言葉が自分自身の口から出たことに、モモンガ自身が一番驚いたのを覚えてい
る。

——期待している。お前たちなら超えられるだろう。

そんな言葉を口にするつもりだったのに。

何故か、出てきたのは真逆の言葉だった。

その理由を、ずっと探している。……いや、わかつてはいるのだ。今更、忘れかけて
いたそれを思い出すのが恥ずかしいだけで。

二人が船を降り、部隊が変わり、中將になつてからも。

彼が続けていることが一つある。

あの日、がむしやらに刀を振り続けた若き日の自分自身。かつての自分に、負けないために。

——月明かりの下で、彼は刀を振るい続けている。



霞む視界と、痛む体。口の中に広がる鉄の味。

最早、立っているのが不思議なくらいの満身創痍だ。だが、彼は立ち上がった。

(刀は、ある)

あの爆発の中でも、これだけは手放さなかった。これだけをずっと振り続けたのだ。そしてこの手が動くのであれば、まだ負けてはいない。

「テメエ」

声が届こえた。道化の声だ。

——そこに、いるのか。

「頑丈な野郎だ！ だったらその頭蓋を叩き潰してやるよ！ それで終いだ！」

揺れる視界の中で、道化がその右腕に“武装色の覇氣”を纏うのが見える。更にその右腕の筋肉も膨れ上がるようにして大きくなっており、文字通り渾身の一撃を放とうとしているのが窺えた。

あれを貰ってしまえば、文字通り終わりだろう。だが、避ける体力はない。残っているのは、刀を一度振る力くらいか。

「……生憎、だが……」

こちらへと向かってくる巨漢の道化。それを刀に手をかけ、待ち受ける。

口から血が溢れた。喋ることはやめた方がいい。

「幕引き後の更なる追撃だ!! くだばれ海兵!!」

器用な男であると、そう思う。その確固たる武力を持ちながら、大道芸の如き戦術も習得しているのだ。

これが器用さを競う戦いであるならば、自分は完全に負けていただろう。

だが、これは戦闘だ。手札の多さは勝利を引き寄せるが、イコールではない。

——一刀居合。

自分の動きは、目で見えていない。だが、大丈夫だ。これは彼がずっと続けてきたことだ。

ただただ、愚直に。

何度も、何度も。

不器用な自分には、一つを極めることさえ遙かに遠い。

「『カーテン・コール』!!」

振り抜かれた拳。人など容易く破壊できる一撃。

だが、その拳は。

「——『断割』!!」

終ぞ、一人の海兵に届くことはなかった。

道化の右腕が宙を舞い。更にその奥にあった肉体にも、深い一撃が叩き込まれた。

声はない。

その一撃で、『返り血のブルチネラ』はその意識を刈り取られたのだ。

「……任務に、私情を……挟みたくはないが……」

倒れ伏す巨漢。その姿を見つめ。

「——准将を殴ったのは、その右腕だろうか？」

あの場において、怒っていたのは一人だけではない。

己の後輩をああも傷つけられ、踏み躪られ。それで怒りを覚えずにいられるほど、彼

はまだ己を律することはできなかつた。

近くの壁に、寄りかかるようにして座り込む。流石に限界だ。敵地のど真ん中ではあるが、少し回復するまで待たなければ。

(そういえば、聞きそびれたな)

いつか聞こうと思つていたこと。

何故、海兵になつたのか。あの二人に、そういえば聞けずじまいだ。

(私の理由を聞いたら、何と言うかな)

あの若き日に、ここにいる男はこう言つて門戸を叩いた。

“助けを求める、全ての人を助けたい”

何と傲慢で、世間知らずで、そして愚直か。

しかも救い難いのは、一度は忘れていたその愚かな始まりをもう一度掲げていることだ。

(だが、聞いてみたいな)

薄れゆく意識の中。

若き海兵たちに、この戦場で共に戦う二人へと想いを向ける。

(お前たちの“正義”は、何だ?)

あれほどの強い意志を抱く理由を。

あの二人の「正義」を知りたい。

(この戦いが終わったら、聞いてみようか)

あの二人が降りてから、教育係としてセンゴクに目をつけられたのだろう。そう言う役目を負うことが増えた。

だが、悪くはない日々だった。苦労はあつたが、あの二人に比べたらかわいいものだ。

——この戦いが、終わったら。

眩きと共に、その海兵の瞼が落ちた。

シキの居城三階、『日鷹の間』。

海軍本部長将モモンガVS「返り血のブルチネラ」。

勝者——モモンガ。

逃亡海兵ストロングワールド⑬——1

第十四話 “声”

大海賊 “金獅子のシキ” による攻撃は収まる気配がない。降り注ぐ大質量の隕石はそれだけで脅威だ。

現在は海兵たちや “七武海” の手でどうか被害を最小限に抑え込めてはいる。しかし、全ては防ぎ切れない。直撃した場所は文字通り粉碎され、その光景を見た海兵たちの恐怖を煽る。

（効果的な攻撃方法だ。上と下の両方からこうも攻撃を繰り返されれば、どうしても精神的な疲労が溜まる）

これが正面からの軍隊同士の激突であればまた状況が違ふ。犠牲は出るし味方の倒れる姿で出足が鈍ることにもなるだろうが、しかし、同時にそこには敵の倒れた姿もあるのだ。成果が上がれば、人の心は保てる。

だが現状、降り注ぐ隕石に際限はなく、それをいくら防いだところでただの現状への対処にしかならないのだ。その先にある状況の変化がなければ、どこかで破綻する。

しかし、その変化を起こすための海兵たちは未だシキの居城の内部に辿り着けてはいない。

「元帥殿！　どうか内部へ！」

「ここで私が退いてどうなる」

近くの海兵の促しに対し、センゴクはそう言葉を返す。直後、防ぎ切れなかった隕石が要塞の上層へと直撃した。

その衝撃に思わず目を細める。センゴクが立つ場所、その眼下にいる海兵たちから弱気な声が漏れた。

「そんな、本部が」

「この海をずっと守ってきた象徴が」

既に要塞には幾度となく隕石が着弾し、相当なダメージを負った状態になっている。

要塞がこんな状態になるのはそれこそ今この惨劇を引き起こしている男の襲撃以来だな、とセンゴクは思った。

「——要塞など、後でいくらでも建て直せばいい」

拡声器を手に持ち、センゴクはそう言葉を紡いだ。

「重要なのはここに我々がいるということだ。我々が、海軍本部がこの地にあり続けるということこそが弱き人々にとって何よりも重要であると自覚せよ」

轟音が鳴り響き、多くの兵が倒れ、血が流れて。

そんな地獄のような戦場の中に、センゴクの言葉が響く。

「今、我々の仲間が、同志が、世界の平和を願う者たちがあの浮島で戦っている。我らは共に『正義』を背負い、悪を倒すという目的の下にこの場にいる。諦めるな。我らが仲間を、友を信じろ」

空より、一つの隕石が飛来する。センゴクの立つ場所に向かってくるそれを、センゴクは己の能力を持って迎え撃った。

ヒトヒトの実幻獣種、モデル『大仏』。

まるで巨人族の如き大きさになった彼は、その拳で隕石を叩き落とす。

歓声が上がった。センゴクは次に飛来する隕石を見据えながら、拡声器を使わず己の声のみで戦場の兵士たちへ声を届ける。

「シキは我々を恐れている！ だからこそここを滅ぼすなどと口にしたのだ！ 総員奮起せよ！」

応じる声が上がリ、更なる隕石の飛来と怪物たちの咆哮とぶつかり合う。

だが、声を上げたセンゴクもこのままではジリ貧であることはわかっていた。

(第二陣はどうか送り出せたが、この隕石のせいでの次の増援が送れん)

あの浮島へ送る海兵のうち、第二陣は送ることに成功した。しかし、その次を送る前にあの隕石による攻撃が始まり、次の出発ができないでいる。

だが、時間をかければ発射台自体が隕石で破壊される可能性もある。

(信じるとは言ったが)

シキがこちらに割いている余裕が減れば隕石による攻撃の頻度も減るはずだ。故に状況の変化については浮島で戦う彼らを信じるしかない。

だが、向こうは敵の本拠地だ。ここに海賊たちがほとんど来ていない以上、あの場所にはシキ本来の配下がいる。既に「新世界」の海賊についても何人も確認されており、苦戦は必至であった。

数を送ることは難しい。ならば強力な個を送るべきなのだろうが、どれほどの実力者であっても単独であそこへ辿り着くのは難しい。

「おい、隕石の軌道が変わったぞ！」

声が聞こえ、センゴクは思考を打ち切った。つい先程まで無差別と思えるような落下の仕方をしていた隕石が、その軌道を変えたのだ。

何だ、という疑問に対する答えが出るまで時間はかからなかった。

「まさか、海に」

眩いたのは誰だったのか。無数の隕石はマリソフオードの周囲の海に凄まじい勢いで着弾した。一つ二つではない。数十という数だ。

水の上に石を落とせば、波紋が広がる。そんなことは子供でも知っていることだ。その勢いが強ければ、より強い波紋が起きることも。

ならば。

巨大な隕石を複数束ね、凄まじいまでの速度で海へと叩き込んだら。

起こるのは——巨大な津波だ。

「津波だー！」

「こんなことまでできんのかよー！」

「逃げ場なんてねえぞー！」

海兵たちの間に動揺が走る。このマリソフオードで戦っているのは海兵と怪物たちだ。シキにしてみれば怪物たちが死んだところで大した問題でもないのだろう。

迫り来る津波。だが、センゴクは冷静だ。

「ようやく出番か」

眩くような声と共に、要塞の一角から飛び出したのは一人の海兵。

海軍本部における、最高戦力。

「『氷河時代』!!」

その男——海軍本部大将、青雉の力によつて津波の動きが止まった。氷になるといふ形で。

その凄まじい光景に、海兵だけではなく怪物たちですらも動きを止める。

人の領域を隔絶した力。故に彼は海軍本部における最高戦力なのだ。

「流石だな、青雉」

センゴクは呟く。当初の予定ではマリソフオード上での決戦となつた時の切り札として青雉を待機させていたが、この状況では出し惜しみの意味はない。

シキは三大将全員がカイドウの対処に出ていると考えているはずだ。その隙をつくための手札であつたが、そもそもあの男がこの状況下で素直に降りてくるかどうかもししい。

青雉の登場で、海兵たちの士気は上がった。この士気が挫けないうちに状況を変える何かがなければジリ貧だ。

「元帥殿」

そんな中、一人の海兵がセンゴクへと声をかけてきた。どうした、とその海兵へとセンゴクが問いかける。

その人物は、この戦争において個人としての戦闘能力も彼が率いる海兵たちの能力についても期待されている海兵だつた。部下たちは少々どころかかなり癖が強いが、それ

でも実力は確かだ。

何せ、彼らはあの『新世界』の支部で戦う海兵なのだから。

「許可を頂きたく」

「許可とは？」

「『彼』との協力についてです」

彼、とその海兵が振り返った先には一人の海賊がいた。思わずセンゴクの眉間に皺が寄る。

「……海兵としては歯痒いですが、あの場所に到達するには彼の力が必要です」

サングラスをかけたその海兵もまた、本意ではないという調子でそう告げた。

「大丈夫なのか？」

センゴクその問いに応じたのは海兵ではなく、後ろの海賊だ。

「手厳しいなセンゴク。お前たちが招集したんだらう？」

「信頼はできませんが、信用はあります。私一人だけでもあの島へ」

海兵が示すのはシキの本拠地たるメルヴィユだ。センゴクは一度目を閉じると、現在の状況と彼の提案についてのメリット、デメリットについて考える。

「——了解した。ただし、妙なことをすれば」

「はい。承知しています」

信用がねえなア、と笑う海賊——“七武海”の一角たるドフラミンゴを無視し、センゴクは眼前の海兵へと指示を出す。

「実力については信頼している。任せよう。——ヴェルゴ中將」



「おいどうしたコビー!?!」

奇妙な縁を繋いで同時に海軍に入ることとなった友人であり同僚、そしてライバルでもある青年に対し、ヘルメツポが声をかける。だが、それに応じる余裕が相手にはない。

「……“声”が……オエツ……響いて……!」

吐き気をも抱くほどの頭痛が止まらず、コビーは呻くように言葉を紡ぐ。

元々はセンゴクの指示によりコビーたちガープの部下はこの怪物たちを指揮する存在の搜索を命じられ、怪物たちの中へと飛び込んだのだ。

危険な任務だ。一体を相手にするだけでも一苦勞、場合によっては死さえも覚悟しなければならぬ怪物の集団に突撃し、戦うのだから。

コビーとヘルメツポは身を隠しながら怪物たちのやってくる方向へと突入した。当初は十人単位で動いていたのだが、途中で怪物たちの攻撃などにより別れてしまうことになる。

そんな中でも二人でどうにか怪物たちをやり過ごしてきたのだが、そこで突然コビーに異常が発生した。

「くそ、大丈夫かよコビー!? 同じところいつまでも止まってられねえぞ!」

周囲を警戒しながらヘルメツポは言う。だがコビーは膝を突き、呻き声のような声を上げるだけだ。

「……悲しい……! 声[〃]が、消えて……! 消えてくんた……!」

「どういふことだ!」

「……わかんない……!」

要領を得ない相棒の言葉。ヘルメツポは困惑するが、今二人が身を隠しているのは瓦礫の影だ。いつ怪物たちに見つかかわからないこの状況で、いつまでも止まってはいるられない。

「しょうがねえな……! 少しでも動けるかコビー!? 一度退くぞ! 衛生兵を探す!」

「……でも……任務は……!」

「馬鹿野郎！」

蹲るコビーの肩を掴み、ヘルメツポは怒鳴るように言う。

「おれにとつちや友達の方が大事なんだ！ お前はとうしようもなかったおれを見捨てないでいてくれたんだ！ 苦しんでのに無視できるかよ！」

今のヘルメツポにしてみれば、黒歴史としか言いようがない過去。権力と暴力、そして恐怖で街を支配していたモーガンの息子であった彼はやはりというべきか、コビーと共に海軍に入った後も当初は居心地の悪い日々だった。

これも報いだと思っていた彼にしかし、コビーは普通に接してくれた。——それが、どれほどの救いになっていったか。いつしか彼は普通の雑用として扱われるようになり、大変ではあったが……その「当たり前」も、特別なことだった。

ガープの下に行くことになり、地獄のような特訓の日々もコビーがいたから乗り越えられたのだ。照れ臭くて決して言えやしないが、彼にとってコビーは大恩人なのである。

「動けねえんなら担いでやる！ 退くぞ！」

コビーに手を伸ばすヘルメツポ。その手を押しとどめるようにコビーがその手を掴んだ。

「……力を、貸してほしい……ヘルメツポさん……！」

どう見ても本調子からは程遠い表情で、コビーは言う。だが、その瞳は強い力を宿している。

付き合いの長い相手だ。こうなった時のコビーの頑固さはよく知っている。ヘルメツポは逡巡するが、やはりというか折れたのは彼だ。

「何をしたらいい？ 地獄だろうと付き合うぜ」

「……声〃が、する。多分、この声の元にいるんだ」

頷くと、コビーを担いでヘルメツポが走り出す。

「だがコビー！ 怪物共と遭遇すりや終わりだ！ そうなったら全力で逃げるぞー」

「……大丈夫……うぐ、位置は、わかるんだ……」

その後のことは、ヘルメツポも驚愕の連続だった。コビーの示す方には常に怪物たちがおり、そのお陰で全てをやり過ぎることができた。

どういふことだ、とヘルメツポは困惑する。

コビーの言う〃声〃の方向に、確かに怪物たちはいた。更に言えば、その向かう方向さえも彼は読み取っている。

「……もう少し奥から、強い〃声〃が聞こえる……」

その彼を担ぎながら走るヘルメツポは困惑しつばなしだ。一体コビーに何が起こっているのか。

——二人は知らないが、これは「見聞色の覇氣」と呼ばれるものだ。いずれガープも教えるつもりであった力であるが、この修羅場で目覚めたのである。

もつとも、その規模は通常想定されているものを大きく超えているようであるが。

「おい、コビー。……あいつらか？」

幾度となく身を隠しながら、しかし、一度の戦闘も経験しないままに到達した場所。マリルフォードの近くに着地した島の淵に、その二つの影があった。

「……多分、そう」

コビーを下ろし、物陰に隠れながらヘルメツポはその二人を見る。いや、片方は人と言つてもいいのだろうか。

一人は、白衣を着た青い髪の男だ。どこか楽しそうに海賊たちの侵攻を見守つている。

もう一人はゴリラだ。……そう、ゴリラである。そのゴリラは時折大きな声で吠えており、おそらく指示を出しているのだろう。コビーの言う「声」を信じるのであればだが。

「電伝虫で連絡はしたが、多分すぐには来れないだろうな」

二人がいるのは戦場の中でも随分と奥だ。同じガープ旗下の海兵たちやセンゴクに指示を受けた者たちも動いているが、怪物たちの対処や隕石による攻撃でどこもギリギ

りだろう。

どうする、とヘルメツポは考える。おそらくだがあそこにいるのは木端の海賊ではない。怪物共を操る立場ともなればシキの傘下でも幹部クラスだろう。そうになると、自分の実力では届くかどうか。

“基本的に海賊というのは単純じゃ。自分より弱い奴の下につくことはない。だから船長というのはその一団において最も強いことがほとんどじゃ。一部例外もおるが、まあ警戒して損はないじやろうな”

ガープの教えを思い出す。怪物と海賊は違うだろうが、むしろ本能に忠実であるからこそ力の上下関係によって従っていると考えるのが自然だろう。

「……ちよつと、落ち着いてきた」

そんな中、コビーが立ち上がった。頭を振りながらも、彼の瞳には強い意志が宿っている。

「無理して立つなよコビー」

「今この戦場で無理してない人なんていないよヘルメツポさん」

息を切らし、足元もふらついた状態で言うコビー。その姿を見て、ヘルメツポも覚悟を決める。

「行くんだな？」

「うん」

即答だった。ヘルメツポは自身の武器であるククリ刀の柄を握ると、よし、と覚悟を決めるように頷く。

相手は幹部。おそらく敵わない。

だが、それを退く理由にはいけないのだ。いつかきつとという言葉は、もう、過去に置いてきたのだから。

「おれも付き合うぜ。……あの二人も、ここで退かねえだろう」

ヘルメツポの人生を大きく変えたあの二人。複雑な感情があるが、その在り方については彼も尊敬をしていた。

相棒のその言葉を聞き、コビーは笑う。

「追いつくためにはこれぐらい超えないと」

「遠いもんだ。嫌になる」

軽口を叩き合うのは、恐怖を誤魔化すためか。

ただ、そうだな、と二人は内心で納得する。

あの二人は、敵わないからといって逃げるような人たちではない。

だから——憧れた。

「いぐぞコビー」

「うん、ヘルメツポさん」

これを人は蛮勇と呼ぶだろう。愚かだと蔑むだろう。けれど、きつと。

あの二人は、この判断をした自分達を笑って認めてくれる。そんな、気がするのだ。

逃亡海兵ストロングワールド⑬—2

第十五話 “きつと私は”

一番古い記憶は、痛いという気持ち。その感覚を“痛い”と呼ぶことを知ったのは、ずつと後。

次に古い記憶は、怖いという気持ち。その感情を“恐怖”と呼ぶことを知ったのは、ずつとずつと後。

“このクズが！”

ごめんなさい、という言葉さえも最初は知らなかった。だから蹲り、耐えることしかできなかった。

ごめんなさい、すみません、申し訳ありません——その言葉を知ったのは、いつも自分を殴る人の話し相手がいつも口にしていたから。そういえば、私の飼い主であった人はとりあえず話を聞こうとするのだと学んだ。

けれど、それだって絶対じゃない。声が枯れて、喉から血が出るほどにそれらの言葉を口にしても許されないことも多かった。

耐えるしかなかった。耐える、我慢する……そんな言葉さえも、私は知らなかったけれど。

“おい”

“お前”

“クズ”

それが、最初の呼び名だった。名前というものがあることはなんとなく知っていたけれど、それが誰にだってあることは知らなかった。

名前がある人は、特別な人で。

それがない自分は、だから人ですらないのだと思っていた。

人、という定義さえ……知らなかったけれど。



その戦闘は、一瞬の気を抜く暇もないほどに激しいものであった。

この戦争を一手で終局へと持っていける可能性を持つ「歌姫」の奪い合い。それはある意味でこの戦場において最も重要な戦いだ。

「援護にも入れねえ」

相手はたった一人。だというのに、海軍本部の中尉と少尉。アラバスタの英雄たちとCP9という世界政府の特記戦力が押し切れない。

流石に数の有利はある。ウタを守るように命じられた彼女の部下三人の目にはわずかにこちらが優勢のように映っていた。

だが、それでも僅かだ。

この女性の名を、この場の全員が知らなかった。唯一ウタが知っていたが、それは彼女が囚われていた際に聞いただけだ。

完全無名の女剣士。それがこれほどの実力を有しているという事実には、この場の者たちの背筋が凍る。

「『鉄塊・砕』！」

牛の角のような髪型の男、ブルーノが振り抜いた拳は女性——イルには当たらず、後方に飛んで避けられる。地面を砕くほどの一撃も、当たらなければ意味はない。

銃声が響いた。ウタの部下であるオリン中尉の銃撃だ。しかし、彼女が狙いを定めて引き金を引いた時には既に相手は移動している。

彼女の銃の腕は確かだ。ただ単純に相手の動きが速すぎるのだ。

「夏時雨」！

しかし、女性剣士が移動した先にはスモーカーの部下であるたしぎ少尉が待ち構えていた。緩急をつけた刀による連撃。一定のリズムでないそれは、相手のガードを崩してその身へ刀を届かせる技だ。

「白雨」

だが、女性剣士は左逆手で持った刀でそれを全て捌いてみせた。更に右手の刀で逆にカウンターの突きを放つ。

「……………ッ！」

たしぎが身を捻るが、右肩を切り裂かれた。鮮血が舞う。更なる追撃を放とうとした剣士はしかし、大きく身を翻して左手側に飛ぶ。

数瞬の後、大きく踏み潰すようにしてブルーノがそこへ踏み込んだ。彼は更に身を捻り、退いた剣士を追い詰める。

「鉄塊・輪」！

自身の体を鋼鉄の如く硬くする体技、
「鉄塊」。それを発動した状態で開脚し、更に

身を回転させる。

轟音を響かせながら、その蹴りで剣士を追い詰めるブルーノ。だが剣士もただ追い詰められるわけではない。一度足を止めると、身を屈めて二本の刀を鞘に収めた。

その構えを見、ブルーノも足を止めた。直後。

「“天気雨”！」

「“鉄塊・剛”！」

響き渡るような金属音。今度はブルーノが防ぎ切った。

だが、息を吐く暇はない。そのまま拳と刀で二人が渡り合う。

その実力面においてもブルーノがこちらの要だ。故にその援護のためにたしぎとオリンも攻撃を加えるが、一向に通用しない。

響くのは金属音と銃声、そしてそれぞれの声だけだ。その音が止む瞬間は、この戦いが始まってから一度もない。

「全く止まる気配がねえ」

「いや多分そういう作戦だ。あの女を休ませないための」

ウタを守る海兵たちの言葉だ。彼らはこの休みの一切ない銭湯について、ブルーノたちの作戦だと受け取っている。数で優っているのだから、休ませず体力を削り取るのだと。

だが、ウタは逆の感想を抱いていた。

(息一つ乱してない)

たしぎもオリンも肩で息をし、血を流していることもあつて辛そうだ。ブルーノでさえも僅かに肩が上下しているというのに、動きつばなしのあの剣士は未だ息一つ乱さずに刀を振るい続けている。

(この状況を作っているのはこちら側じゃなく、あつちだ)

シキの孫娘を名乗る女性剣士、イル。その剣技や身体能力に目を奪われるが、その本質はおそらくあの継戦能力だ。

おそらくあの三人も気付いてはいるはずだ。しかし、それでも乗るしかないのだ。息を入れればその方が相手にとって有利になる。

ここは敵の本拠地。時間をかければかけるほど状況は悪くなっていく。悠長に相手はしてられないというのに、よりによって多数を相手に粘れるタイプの敵だとは。

いや……だからこそ彼女はここに来たのか？

(どうにかして均衡を崩さないと)

海楼石の錠さえなければ、あの戦闘に加わることができないのに。

拳を握り締めるウタの目線の先では、戦いが止まらぬままに続いている。

(それに、変だ)

あの剣士、イルから感じる感情があまりにも異質だ。

通常、戦闘になれば殺気のぶつかり合いになる。ルフィよりも鋭敏な感覚を持つウタの「見聞色の覇気」はそういった殺気を読み取ることで相手の動きを読むのだ。

しかし、彼女からはその殺気をほとんど感じない。

焦燥と、戸惑いと、義務感と、使命感と。

おおよその状況からは遠いものだけが伝わってくる。

(どうしようかと?)

初めて会った時からそうだった。あの剣士はその行動と伝わってくる感情がちぐはぐなのだ。

もしかしたら、と思う。

——そこが、付け入る隙なのかもしれない。



読み書きと計算。そんな当たり前のことを知るまでに、随分と長い時間がかかった。

教えてくれた老人は、優しい目で私を見ていた。不憫だ、という言葉が彼の口癖だったのを覚えている。

不憫、という言葉の意味は教わった。けれど、実感はない。

記憶の始まりでは既にこの場所にいたし、こうしていたのだ。だから彼が語る外の世界、その全てが空想の絵物語にしか思えなかった。

“わしは悪いことをしたからな。これは報いよ。因果応報、この間教えたらろう？”

老人ははそう言つて笑つていた。だけど知つている。いつも彼が隠れて泣いていたことを。

その老人は病を抱えていた。働けなくなった彼は、海へと捨てられた。

“お前も働けなくなればあなる”

飼い主である人は、そう言った。はい、と頷くことしかできなかった。

彼がいなくなつて、胸に穴が空いたような感覚が残る。彼が残してくれたのは、この世界で生きる者であれば当たり前に持っているはずの『知識』と呼ばれるものだった。この財産だけが、私の持ち物だ。

けれど、それを知られてはいけなかった。私はクズで、ノロマで、間抜けで、愚かでないければならない。余計なことを言つて『処分』された自分と同じ奴隷を何人も、何人も見てきたから。

自由なんて、考えたこともなかった。

そんなものがあるなんて、知らなかった。

——その「歌」を初めて聞いたのは、そんな頃だった。

微かに聞こえてくる歌声。はつきりとは聞こえないのに、それはとても美しい声だった。

聞こえてくる話し声で、声の主は「歌姫」と呼ばれる人物であると知る。

誰もが賞賛する美しい声。——掠れた私の声とは全く違う。

陽の当たる場所で輝く存在。——薄暗い船の奥が全ての私とは全く違う。

多くに愛される人柄。——蔑まれ、虐げられる私とは全く違う。

船の片隅、誰もいない場所で静かに漏れ聞こえるその歌声を聞くことが、私にとつての全てになった。

空想の絵物語。彼女はその物語における、私にとつての「ヒーロー」だった。

どんな人なのだろう。

どんな顔をしているのだろう。

どんな風に笑うんだろう。

どんな風に生きてきたんだろう。

そんなことを、思うようになる。

——それが“憧れ”なのだと思ったのは、ずっとずっと後だった。



違和感が確信に変わったのは、幾度目かの刃を受けた時だった。

(まだだ……！)

こちらの足を掠めるようにして女剣士——イルの刀が通り過ぎ、痛みが走るのを感じながらたしぎは思う。

今の自分は完全に無防備だった。その気になればもつと深く足を斬り裂けたはず。そうなれば脱落だったはず。

「どういうつもりですか！」

斬りかかりながらたしぎは怒鳴るように叫ぶ。たしぎだけではない。ブルーノはともかく、オリンも何度も致命の一撃を貰うタイミングはあったのだ。だというのに、この剣士はその全てをスルーしてきた。

一度や二度なら偶然もあるかもしれない。しかし、そうじゃない。

——手加減されている。

焦りと苛立ちが、たしぎの刃を鈍らせる。

「空梅雨」

叩き込むようにして振り下ろした刀を右手の刀で受けると同時に、手首を返して巻き込むような動作をイルが行う。

受けた瞬間はイルの刀が下側だった。だが、次の瞬間には上下が入れ替わり、更に左の刀でたしぎの刀の先端をかち上げるようにして叩いてくる。

てこの原理だ。そのままたしぎは刀を手放してしまう。

ガラ空きの胴。やられると思った瞬間、しかし、そこに叩き込まれたのは右足の蹴りだった。

「うぐ……!?!」

重い鈍器で思い切り殴られたかのような衝撃だった。吹き飛ばされるたしぎ。少し離れた場所に彼女の愛刀である「時雨」が突き刺さる。

「たしぎさん!」

ウタの声だ。だが、たしぎにはそれよりも目の前の剣士のことが重要だった。

ブルーノとオリンが挟み込むような位置取りで攻撃を仕掛けるが、イルは前方に踏み込むとブルーノの背後に周り込むようにして滑り込む。無論、それでブルーノの背後は

取れないがオリンの銃撃の射線はそれで切られてしまった。

あの一瞬であの動きをできるような剣士が、何故。

どうして——誰も殺せていない？

「馬鹿にするのもいい加減にしなさい！」

頼りない足取りで立ち上がりながら、たしぎが怒鳴る。彼女のその言葉の意味を理解できないのはウタの周囲の海兵たちだけだ。

ブルーノも、オリンも、ウタも理解している。

——この女は、こちらを斬ろうとしていない。

「どういふつもりだ？」

上から押さえつけるようにして組んだ手を振り下ろすブルーノ。それを両の刀で受けるイルはやはり、何も答えない。

足が止まったと見て、オリンが引き金を引く。だがそれを横目で見たイルは右足でブルーノの脇腹を蹴り、その身を浮かせた。銃弾はやはり、空を切る。

咄嗟に「鉄塊」で防御の構えをとったブルーノだが、僅かにその防御が崩れる。だが即座に拳を振るうと、イルはそれを右足で防御した。

後方へと弾かれるイル。この戦いが始まって初めて間が生まれる。

「普通の足ではないようだ」

「元の足は、腱を削ぎ落とされていたのよ」

イルが弾かれた瞬間に見えた右足は、鈍い光沢を放っていた。しかし彼女の言葉の意味を考える前に、再びイルがブルーノ目掛けて走り出す。

この場における最高戦力を最優先に。そんな思考によるものだろう。迎え撃つ体勢のブルーノはしかし、眼前に現れた人物に動きを止める。

「止まりなさい！」

ブルーノとイル。その間に、錠をかけられたウタが割って入った。



その人たちが現れたのは、突然だった。

海賊という存在は知っていたし、何度か襲撃を経験している。しかし、この船には護衛のための人間が乗っているし逃げ足も早い船だ。大事になったことはない。

まあ、その後は大抵腹いせで殴られた。だから正直、いい印象はなかった。

“……その首輪、奴隷か？”

船の奥。隠れるようにして膝を抱えていた自分を見た人は、こちらに向かつてそんなことを言った。その服が血で汚れていたが、気にならなかった。

殺されるのだろうか、と漠然と思った。海賊とはそういう者たちだと聞いている。お前なんか真つ先に殺されるだろうと、いつもこの船の者たちは笑っていたのだ。

しかし、その男は首輪を外すという予想外の行動に出た。

いつ振り——いや、初めてかもしれない。一番古い記憶の中では、すでに私はこの首輪を付けられていた。

男に立つように促され、よろけてしまう。逃げないようにと幼い頃に右足の臄を削ぎ落とされたせいですぐには立てないのだ。

申し訳ありません、とそう頭を下げた。だが男は怒るところか不思議な力で杖を作り、こちらに手渡してきた。土で作った杖だと男は語る。

困惑しかなかった。何かを貰うことなど初めてだ。ボロボロになった服を繕う為の布さえ頭を床に擦り付けるようにしてようやく渡されるのに。

“ほう、奴隷か。……権力者の純粹さと、おれたち悪党の悪意。どっちがマシかわからねエな”

連れて行かれた先には、衝撃の光景が広がっていた。

この船の所有者であり、私の所有者でもある人を始めとした人員。その全ての首が床

に転がっていた。

“まだ秘密裏の活動中だ。目撃者は消さなきゃならねエ。ラウンド、わかってるな？”

“

“……選ばせるべきと”

首輪を外してくれた男は、ラウンドというらしい。その人物の言葉を受け、何故か頭に舵輪が刺さった状態の男はこちらへ視線を向けた。

“まあ、人手はあつて困るもんじゃねエが。……名前は？”

“……イル、という名を頂きました”

ほう、と男は頷いた。その彼に対し、言葉を続ける。

“いつも端に『居る』から、イルと”

その言葉に、二人の男が息を呑んだ。だが、その感情の意味がわからない。

気が付いた時にはこの船で首輪に繋がれていた。そんな私に所有者である男がそう言つて名をくれたのだ。酒に酔うと、いつもこの話をあの人はしていた。

“そうか。それ以外は？”

質問の意味も意図もよくわからなかったが、首を左右に振ることで応じた。自分の持ち物と言えるものは知識を除けばこの名前だけだったから。

“……親分”

“あア、そうだな。突然で悪いがな、イルよ。おめエ、おれたちと来るか？”
“どういふことか、理解ができなかつた。”

“ここで死にてエンなら殺してやる。苦しみもねエ、一瞬だ。……ただ、もし。まだ何かやりたいことがあるなら、言ってみろ”
“やりたいこと。”

そんなことは考えたこともなかつた。やらなければならぬこと、してはならないことだけで精一杯だったから。

嗚呼、でも。

もしも。

たつた、一つだけ。

一つだけ、望んでもいいのなら。

“歌を”

あの人の、歌を。

もう一度、だけでも。

“あの人の歌を、聴きたいです”



その手が止まったのは自分の意志か、それとも違う何かのせいか。ただ現実として、この手は止まっていた。

「そこを退いてください」

「退かない」

強い瞳と、強い返答だった。かけられた錠によって満足に動けないはずなのに。

その「歌姫」は、殺し合いの最前線に割り込んできていた。

「殺されたいのですか？」

「できもしないくせに」

その言葉で、思わず体が震えた。脳裏に蘇るのは、自分に戦う術を教えてくださいました人の言葉。

「正直、才能はないでござるな。身体能力であるとか、技術であるとか。そういう肉
体面の問題ではないでござるよ？ ただただ純粹に、精神の問題でござる。」

——いつか必ず、どこかで破綻する。

あの人は、人を殺すことと息をすることは同じと言い切った人は、そう言っていた。

理解ができない思想だった。……決して口にはしなかったが。

「私が、あなたを殺せないとでも？」

「自分を殺そうとする相手を斬れないあなたが、ろくに抵抗もできない私を斬れるの？」
きつと、その時点で致命的に間違えていたのだろう。

でも、刀を持ったのは自分自身の判断だ。

「あなたの行動は矛盾してる。心が悲鳴を上げてる」

眼前にいるのは、力を押さえ込まれた一人の女だ。

——斬りたくない。

たったの一振りですんでしまうような、か弱い存在だ。

——傷つけたくない。

それなのに。

「痛いじゃ、ないですか」

漏れ出すようにして紡がれたのは、そんな言葉だった。

「殴られたら、痛いんです。斬られたら、痛いんです」

体が震える。数年という月日が経っても、長い年月の中で受け続けたあの感覚は消え

ない。

それを誰かに与えることが……怖い。

だって、痛いのだ。

だって、苦しいのだ。

それを私は、誰よりも知っている。

目の前の人も、周囲の者たちもイルのその言葉に困惑した表情を浮かべていた。だが、彼女自身にそれを考える余裕がない。

“ほう、あの大馬鹿鹿野郎から剣術を教わってんのか。やるじゃねエか”

ふと、あの人の顔が、言葉が浮かんだ。

“無理をする必要はねエが、期待はしてるぜ。頼れる奴ってのは何人いてもいいもんだ”

期待は、初めてだった。

信頼も、初めてだった。

——必要とされたいと、願ってしまった。

「あ」

右手の刀が、「憧れ」を貫いていた。
何かが壊れるような、音がした。



何もかもが、初めてだった。

空を飛ぶ船も、その甲板で風を受けることも。

つぎはぎだらけの汚れた服じゃない、綺麗な服を着ることも。

強い風で上手く立てない私を怒鳴ることをせず、気遣うように支えてもらったことも。

——命令されることなく、「自由にしろ」と言われることも。

“何を、したらいですか？”

この船において一番偉い人に、頭を下げながら問う。膝をつこうとしたが、首輪を外してくれた人に止められた。

“何ができる？”

葉巻の煙を揺らしながら、その人は問いかけてきた。

“何でもします。できなくても、できるようにになります”

即答した。そうしなければ、“痛み”が待っているのを知っていたから。

ただ、その人は顎に手を当てて考え込む仕事をした。そして。

“なら、できることをしてもらおうじゃねエか”

命じられたのは、本当にできることだった。

掃除に洗濯に料理。やり方が違うところは丁寧に教えてもらえた。右足が上手く動かないことも咎められることはなく、むしろ心配さえされてしまう始末。

戸惑いが、ずっとあった。

……“痛い”と感じることが、なくなっていた。

“おめエはよく働くなア”

私を拾った人は、そう言って笑っていた。

……正直、助かっている。船の雰囲気も随分と変わった”

首輪を外し、杖をくれた人はそう言ってくれた。どういう意味かがわからなかった。

“素直じゃないのう”

彼の言葉の意味を感謝と呼ぶのだと、口元をマフラーで隠した女性は教えてくれた。

“のう、イルよ。酒はどこでござるか?”

「今日の飯は肉にしてくれねエか？」

「イルよすまぬ。掃除を頼みたいのじゃが」

誰も、「命令」をしなかった。

やってくれないかと、こちらに頼むのだ。

——戸惑いが、ずっと続いている。



体の内側から焼かれたような感覚が広がった。右脇腹の異物感。遅れたように痛みが走る。

「ウタ准将！」

叫んだのはオリンだ。後方の彼女へ大丈夫だと伝えたいが、その前にこの現状をどうにかすることが最優先。

「——ッ！」

ウタの両腕を拘束する海楼石の錠は鎖で繋がっており、ある程度の余裕がある。ウタ

はその鎖を自身の腹を貫く刀へ巻きつけた。

そのまま、痛みを堪えて引っこ抜くようにして後方へ飛ぶ。抵抗があると考えていたが、何の抵抗もなくイルは刀を手放した。

勢いがあまり、ウタは背中から床へと倒れ込む。衝撃で激痛が走るが、悲鳴を上げるのは堪えた。

「准将をお願い！」

そして、ウタを庇うようにオリンが前に出た。そのまま彼女は銃を構え、引き金を引こうとする。

だが、その前にオリンの銃は半ばから切断された。

辛うじてウタは目で追えた。だが、先程までとは明らかに速度が違う。

「……………」

ボソリと、何かをイルが呟く。しかし、何と言ったのかはわからぬまま、彼女はオリンに向かって刀を振り下ろす。

ウタを刺したのは左の刀だ。故にオリンの銃を切断したのは右の刀。イルは振り上げたそれを、そのまま振り下ろす。

先程までの、何故か致命傷にはしないようにしていた攻撃とは全く違う。容赦のない、殺すための一振り。

「鉄塊」

だが、その刃がオリンを切り裂く前にブルーノが割って入った。

鋭い金属音が響く。飛び退くようにしてオリンが横へと移動すると、立ちはだかるようにブルーノがイルの正面に立った。

「先程までとは随分と違う太刀筋だな」

しかし、彼の言葉にもイルは応じない。ブツブツと、何かを呟き続けたまま下を向いている。

ウタの腹に刺さった刀を、彼女の部下が引き抜いた。布を当て、止血を行う。痛みで揺れる意識の中、ウタの耳はしかし、イルの呟きを捉えていた。

——ごめんなさい。

何度も、何度も。

その剣士は、言葉を呟き続ける。

しかし。

「くっ……!!?」

再び、鋭い金属音。動こうとしたブルーノへ、イルが刀による連撃を叩き込んだのだ。更に彼女は無手となった左手で腰の鞘を掴む。

右手の刀に、左手の鞘。当たり前のようにイルはその二つで構えをとる。

「鉄塊・剛」!

凄まじい金属音と打撃音が連続して響いた。全てを受け切ったブルーノはしかし、僅かに体をぐらつかせる。

恐ろしいまでの剣術だった。先程までの彼女の剣が兇戯であるかのように。

だが、それでも伝わってくる感情に殺意はない。

(今度は……何? 何も、感じない?)

その剣には感情が乗っているはずなのに、今の彼女は何かしらの感情を発露しているはずなのに。

今の彼女からは、何の感情も伝わってこない。

ぞくりと、ウタの背筋に悪寒が走る。先程まではまだ理解できた。殺意とは違う感情が伝わってきたことに戸惑いと疑問はあったが、それでも伝わってはきたのだ。

なのに、今のこの剣士は。

何の感情も抱いていないのではないかというくらいに、何一つ感情がわからなくなっている。

(そんな人がいるの?)

戦いにおいて感情を抑えるのは当たり前のことだ。昂る感情は判断を鈍らせるし、冷静になることは基本中の基本である。

しかし、冷静であることと感情がないことは全くの別だ。どれほど感情を制御しようとしても、敵意や殺意といった感情を完全に消すことは不可能である。そうでなければ、そもそも目の前の相手と向かい合うことができないはずだ。
なのに、今。

眼前の「敵」からは、何の感情も感じない。

「……役に、立ちますから」

呟く言葉と共に、イルが踏み込んだ。応じるようなブルーノの拳を鞘で受け、右手の刀で突きを繰り出す。

金属音が響くが、同時に鮮血も舞った。心臓という急所を狙った一撃は彼の「鉄塊」を僅かに突き破り、その肉体へと刃を届かせたのだ。

浅い傷だ。だが、狙ったのが心臓という事実はこの場の全員が理解する。

——何もかもが、先程までとは違う。

「ごめんなさい」

左手、鞘を持つ側からたしぎが斬り込んだ。身を低くし、切り上げるような一撃。だがそれを、一瞥さえせずイルは鞘で受け止める。

受け止めたのは鞘だというのに斬ることができない。「武装色の覇気」ではなかった。イルは受ける瞬間に角度を変え、斬れないようにしたのだ。

「すみません」

振り下ろしの左拳を、イルは後方へ下がつて受ける。直後、銃声が響いた。オリンが持っていた短銃による銃撃だ。普段の長銃とは違い射程距離は短いし威力も低い、更には精度も低いがこの距離ならば、問題ない。

だが、イルはオリンと自身の射線上にブルーノが入る位置へと移動した。そのままブルーノへと斬りかかる。

「申し訳ありません」

再び、金属音が何度も響き渡る。後方へ下がりながらしかし、ウタは見た。

——息が上がっている。

先程までの、息一つ乱していなかった時とは違う。

彼女もまた、無理をしている。

「『片時雨』！」

それを察知したのはウタだけではない。たしぎが再びイルの左側から斬り込んだ。それを先程と同じように鞘で受けようとするがしかし、たしぎの太刀筋が接触の瞬間にまるで撓むようにしてズレた。

下から切り上げるような一撃だったそれはしかし、次の瞬間には叩きつけるような軌道になっていた。手首を返し、軌道を強引に反対にしたのだ。

予想と違う軌道の一撃により、イルの鞆が断ち切られる。その直後、彼女の脇腹へとたしぎの刃が到達した。

鮮血が舞う。左脇腹に深い斬撃が入った。だが、止まらない。

「
彼女が何と言ったのかはわからなかった。口から血を溢れさせながら、しかし、右手の刀でブルーノへと突きを放つ。

再び「鉄塊」で受けると誰もが思った。だが、しかし。

「——貫ったぞ」

その突きは、彼の体を深々と貫いていた。

「「鉄塊」！」

貫いたのは心臓よりも少し下。急所からは紙一重で外れた場所を通過した刃を、彼は自身の体を硬化することで完全に固めてしまう。

刀を引き戻そうとイルが力を込めるが動かない。その一瞬が致命的な隙だ。

「「碎」!!」

骨が碎ける音が響いた。咄嗟にガードした左腕はしかし、ブルーノの渾身の一撃を受

け切れずその骨が砕けたのだ。

衝撃によって吹き飛ばされるイル。床を転がる彼女はしかし、それでも右手を床につき、立ち上がった。

凄まじいまでの執念だ。既に致命傷に近い傷であるはずなのに。

——銃声。

「……………あ」

しかし、それが最後だった。

オリンの短銃から放たれた銃弾が彼女を貫く。崩れ落ちるようにして、シキの孫娘を名乗る剣士は倒れ込んだ。

「……………」

誰も、何も言えなかった。ブルーノが自身の体から刀を引き抜き、投げ捨てる音だけが響く。

「……………行こう」

誰かが、呟いた。

反対する者は誰もいない。当たり前だ。ここは敵地で目的は脱出である。その障害を排除したのだから移動しなければならぬ。

しかし、この場の全員は優れない。

この、何もかもがちぐはぐな剣士のことをどうしても考えてしまう。互いに肩を貸し合い、前方を警戒しながら先へと進んでいく。

——戦争はまだ、終わっていない。



“……何でもいいと言ったが、本当にそんなものでいいのか？ 遠慮はいらねエぞ

？”

“はい。ありがとうございます”

手に持っているのは、一つの音貝だ。

欲しいものはないかと問われ、願ったもの。

——私の、初めての持ち物。

“そんなもん、この世にはいくらでも溢れてるつてのになア。欲のねエことだ”

その人は呆れたように言うが、そのいくらでもが自分にはなかったのだ。

ありがとうございます、ともう一度告げる。

“まあ、いい歌声だとは思うがな。そいつは海兵だ。おめエの経験した地獄を肯定する側の人間だぞ”

紫煙を揺らしながら、その人は言った。

それはその通りだろう。この船に来て、多くのことを教えてもらった。自分の置かれていた立場も、状況も、何もかもをようやく知った。

ただ、それでも。

“もう一度、聴きたかったのです”

あの地獄の中で、この歌が光であつたことは。

紛れもない、真実だったから。

“おめエがいいってんなら、構わねエがなア”

煮え切らない表情のその人に、改めて礼を言った。

何度も、何度も。

——そして、その日から。

寝る前に、その歌を聴くことが日課になった。

……きつと、私は。

あなたの、歌を。



凄まじい戦闘があつたのだと、一目でわかる惨状だった。

通路の中心で倒れる友と呼ぶべき女性の近くまで、その海賊は歩み寄る。

「治療を」

周囲の者たちに指示を出す。意識を完全に失っているようだが、命は繋がっているようだ。運がいいのか……いや、違うな。運が悪いからこそまで生き残っているのだ。

「……愚かじやな」

口元をマフラーで隠し、踊り子のような衣装を着た海賊——「毒蛇のカガシヤ」は彼女の友人に対して語りかけるように言葉を紡ぐ。

「足を切り落とした時も、刀を手にした時も、親分は何も言わなかった。……あれほどまでに「支配」に拘る男が、「自由」にさせ続けた」

——本当に、愚かじや。

彼女は、憐れむようにそう言った。

「親分は身内に随分と甘い男じや。だからお主に「孫娘」などと名乗らせた。馬鹿な海

賊どもから身を守らせるために。大海賊、
 「金獅子のシキ」ともあろう男が本当に甘
 い」

カガシヤが右手を上げた。彼女の背後に、
 十数人の彼女と似たような格好をした女性
 たちが音もなく現れる。

海賊、「毒蛇のカガシヤ」の部下たちだ。
 その得意分野は戦闘というよりも暗殺にあ
 る。

「近くにいるはずじゃ、追え。必要とあれば殺して構わぬ」

その指示を受け、やはり音もなく部下たちが移動する。
 カガシヤもまた、マフラーを
 整えると部下二人にイルを守るようにと指示を出した。

「まだお主の敗北ではない。お主には悪いが、皆殺しで決着とする」

彼女の「懂れ」について、カガシヤは知っている。だが、敵だ。それに容赦をするだ
 けの理由を持ち得ない。

「さて」

音もなく歩き出す、暗殺者。

その標的は、ただ一人だ。

「————」がお主の死に場所じゃ、「歌姫」

逃亡海兵ストロングワールド⑭—1

第十六話 正門前の戦い 前編

基本的に海賊というものは自ら海軍へと戦鬪を挑むことはない。

当たり前の話だ。組織としての規模が違うし、海軍に対して完全に勝利するのであればそれはイコールで世界政府に勝利することである。それを目的とする組織に「革命軍」があるが、彼らも海軍を滅ぼそうとしているわけではない。

故に海賊と海軍の戦いは基本的に局地的なものばかりになる。そもそも海賊は数において絶対に勝てないのだ。故に局地的な勝利を得たとしても海賊の多くはその場から立ち去る。

故に、今回のようなケースは非常に珍しい。

多数の海賊たちが防衛側で、少数の海軍が攻城を行う。数も含めて逆の立場になるこ

とはあるが、今回のような状況はほとんど例がない。

故に、苦戦は必然であったと言える。

「陣形を崩すな！　こちらは数で劣っているのだ！　戦術さえ覚束なくなれば待つているのは敗北だぞ！」

怒鳴るようにして指示を出すのはドーベルマン中将だ。彼自身最前線に立つて指示を叫んでいるが、その息は上がっている。体も負傷しており、万全からは程遠い状態だ。当たり前である。この異常な島を突き進んできたのだ。誰一人の脱落者も出さずに怪物たちの中を抜けてきたことは間違いない称賛に値する。そういう意味では、間違はなくこの場にいる海兵たちは精鋭なのだ。

「元氣だな中将さんよ」

そのドーベルマンの下に海賊が迫る。『蹴撃のドリマー』と呼ばれる『新世界』の海賊だ。そのチンピラじみた風体からは想像もできないほどの実力を有している。

第一陣の総指揮をとるのはドーベルマンだ。その首を狙うのは自然なこと。迎え撃つ体勢に入るドーベルマン。しかし、一人の女性海兵が割って入る。

「あら、私との戦いはもう飽きたの？」

「なんだまだ粘るのか」

立ち塞がるのはヒナだ。口調こそ余裕であるが、今の彼女は頭から血を流し、更に脇

腹を抑えている。

対し、ドリーマーに目立った傷はない。その海賊は走る速度を緩めず、その足による一撃を叩き込む。

「おれの蹴りを受けれんのか!？」

「——ッ！」

振り抜かれた蹴りをヒナは身を屈めてギリギリで避けた。ほう、とドリーマーが小さく笑み。

彼が振り抜いたのは右脚だ。それを避けたことによつて背中が空く。そこへヒナが右の拳を叩き込んだ。

衝突音。その凄まじいまでの身体能力で、ドリーマーは右足を振り抜いた勢いそのままに左足で後ろ回し蹴りを放つたのだ。ヒナの拳とぶつかり合い、互いの動きが一瞬止まる。

拮抗は一瞬だけ。拳から伝わる突き抜けるような衝撃を感じながら、ヒナは空中にあるドリーマーの両足へと視線を向ける。

「食らいなさい！」

彼女の持つ悪魔の実の能力、〃オリオリの実〃の力は彼女の体を擦り抜けた相手を鉄の錠によつて拘束する力だ。身を捻り、左腕をドリーマーの両足に叩きつける形で通過

させる。

鈍い金属音と共に、その両足が鉄の錠によって拘束された。ヒナが後方へと飛び退く。直後、横手より別の海兵が走り込んできた。

「よくやったぞ大佐！」

走り込んできたのはメイナード少将だ。今回の第一陣に選ばれた、実力は確かな人物である。

彼が拳を握り締め、ドリーマーへと迫る。異名になるほどの蹴り技を持つ男も、その両足が拘束されれば満足に迎撃はできないはずだ。

——そう、通常ならば。

「なめんなよ」

笑みと共に、ドリーマーはそう言った。そのまま彼は両腕を地面に向ける。

指を地面に突き刺し、掴むようにして持つ。そのまま彼は腕力だけで体を持ち上げ、更にメイナードに向かって体を捻った。

メイナードの拳とドリーマーの足に付けられた鉄の檻が衝突した。鈍い音が響くと共に、互いが弾かれるように後退する。

「貴様！」

「やるねえ」

一手、ドリーマーの方が早かった。

その場で堪えようとしたメイナードと、弾かれた反動を利用してそのまま地面を掴んだ腕を支点に自身の身体を独楽のように回転させたドリーマー。回転の勢いが乗った一撃がメイナードへと迫る。

鈍い、硬いものを思い切り殴ったような音。メイナードが吹き飛ばされ、彼に叩きつけた衝撃でドリーマーの銃も砕け散る。

「いやー、これはこれでいいもんだな。感謝するぜ海兵」

自由になった足を揺らしながら笑うドリーマー。ヒナはそんな彼に対して表情を歪めることしかできない。

ヒナの能力は強力だ。その気になればどんな相手でも拘束が可能な能力であるが、それを利用される危険性もある。

「……………」

チラリと、ヒナは自身の後ろを見る。階級こそ低いが彼女が信頼する二人の海兵が倒れ、他の海兵たちから手当てを受けていた。

決して弱くはないあの二人を、この男はたったの一撃で黙らせたのだ。

「貴様ア!!」

血を流す頭を押さえながら、メイナードが再びドリーマーへと迫る。海賊は笑みを浮

かべ、口笛を吹いた。

「いいねえ。そういう根性ある奴は好きだぜ、おれは」

「黙れ海賊風情が！」

「まあお前らはそうだろうな」

直後、ドリーマーの姿が変わった。あの二人を一撃で沈めた姿だ。

トリトリの実古代種、モデル「ディアトリマ」。

ドリーマーは「新世界」でも名を挙げている海賊であるが故にその能力についても海軍は把握している。動物系の中でも古代種は特に純粹な力と耐久力が桁違いに強力になることで知られており、更にそのモデルとなる動物が最悪だった。

「『徹甲蹴撃』!!」

人獣型となったドリーマーが、メイナードの拳ごと彼を蹴り飛ばした。その技の名の通り、爆発するような衝撃を受けてメイナードが吹き飛ばされる。

そこにいるのは、異常に発達した足を持つ鳥人間だった。ディアトリマ——絶滅したその鳥は、恐竜の時代の後に食物連鎖の頂点に立っていたとされる動物だ。その特徴は何と言ってもその脚力にある。飛ぶことができない代わりに、その鳥は誰よりも早く地上を駆け、その脚力で獲物を仕留めていた。

「なんて蹴りだ」

「少将が、一撃で」

その光景を見ていた一部の海兵たちからも声が漏れる。飛ぶ機能のない翼が現れた両腕を広げ、ドリーマーが周囲を威圧しながら言葉紡ぐ。

「どうした？ 来いよ海兵ども。おれを捕まえんのがお前らの仕事じゃねえのか？」

煽る台詞には確かな自信が込められている。

元より蹴り技が得意であった男がその実を食べたのか、或いはその実を食べたからこそ蹴り技を主体としたのか。いずれにせよ、最悪の組み合わせであった。

能力なしの人の姿で少将クラスを圧倒する男が、更にその能力を十全以上に活かせる能力を持っている。悪夢以外の何だというのか。

「ええ、そうよ。あなたの言う通り」

手袋を着け直し。

海軍本部の大佐が、海賊と向かい合う。

「私たちの任務は、あなたたちを捕まえることよ」

「いいねえ。気の強い女は好みだぜ」

「ヒナ心外」

直後、互いの拳と蹴りが激突した。しかし、拮抗はしない。ヒナの方が力負けし、後方へ吹き飛ばされる。

骨が軋む感触がした。能力ですり抜けさせることも選択肢にあるが、相手もそれはわかっている。下手に錠を掛ければこの男はそれを利用してくるのだ。故に不用意に能力を使えない。

「怪物共も正直だな。よくわかっている」

笑みと共に、ドリーマーが語る。

砲撃と銃声の音が響く戦場の中心に、ぽつかりと穴が空いたように人のいない場所ができていた。

海賊たちも砲撃や銃撃だけをしているわけではない。武器を持ち、直接海兵を討ち取ろうと出てきてはいる。それを迎え撃つ海兵もいるし、更にダフトグリーンが吹き飛ばされたことによつて怪物たちも戦場へと雪崩れ込んできているのだ。この戦場は最早激戦区と言つて差し支えない。

だというのに、その中心にだけは穴が空いている。その中央にいる男を、この戦場の者たちは恐れているのだ。

「人間つてのは馬鹿な生き物だよなア。勝てねえつてわかつてんのに挑むしかねえ」

嘲笑うように言うドリーマー。その彼の後方、シキの居城の正面玄関から巨大な影が現れた。

『お前とはよく意見が合うなアドリーマー！』

拡声器を通した声が戦場に響いた。現れた姿に、ヒナを含む海兵たちが息を呑む。

「巨人だと……!?」

そう、現れたのは一人の巨人だった。分厚い鎧を身に纏ったその巨人は、ぐるりと周囲を見回すように顔を巡らせる。

だが、何人かは気付いた。動きが不自然だ。どこか機械的な印象を受ける。

「遅かったなレムナント。お前のことだ、どうせ状況が有利になるまで隠れてたんだろ？」

『そんなことはないぞドリーマー。ちよつとフランケン部隊の起動に手間取っただけだ』

「どうだか」

肩を竦めるドリーマー。まあいい、と彼は改めてヒナの方へ視線を向けた。

「ここがおれたちの本拠地だって忘れてねえか？ 兵力はまだ増える。勝ち目はねえぞ」

「脅しのつもり？」

立ち上がり、ドリーマーを見据えるヒナ。いいや、と海賊は肩を竦めた。

「ただの確認だ。これぐらいで折れてもらっちゃあ——」

ドリーマーが地面を蹴る。まるで「刺」のような速度で動くそれはしかし、かの体技

とは根本的に原理が違う。

ただの純粹な脚力だけで、彼はその超高速の移動を可能にしている。

「——つまんねえだろうが!!」

地面を割るような踵落としによる一撃を、ヒナがギリギリで避ける。

口笛の音。だがすぐさま放たれる追撃の回し蹴りは避けきれず、ヒナはその両腕でガードした。

まるで鈍器で殴ったかのような音が響く。骨が軋む感触。

(これ以上は折られる!)

判断は即座だ。相手の力を利用し、後方へと飛び退く。鈍い痛みが両腕に走り、痺れが両腕全体に広がっていた。

「逃がすかよ」

腕が上手く動かない彼女のところへドリーマーが迫る。ヒナは舌打ちを一つ。迎え撃つ体勢に入る。

だが、彼女にドリーマーが到達する前に二つの影が割って入った。

「させるか!」

「よくもやってくれやがったな!」

ジャンゴとフルボデイだ。あなたたち、とヒナが驚くと同時に、ドリーマーが標的を

切り替える。

「雑魚が。退いてろよ。——どうせやるんなら、美女の方がいいんでな」

「させねえよバーカ！」

直後、ジャンゴが前に出た。振り抜かれるドリーマーの足をしかし、彼はその根本から押さえ込みにかかる。

その足が振り抜かれた場合の威力は、並の人間なら容易く死に至らしめるほどの凶悪な力だ。事実そうしてこの海賊は多くの人間を殺めてきた。故の賞金首であり、故の海賊であり、故の無法者。

だが、だからこそジャンゴは前に出た。

——振り抜かれれば人を殺せる蹴りも、振り抜かれる前ならば受け止められる。

「あア？」

全身を貫くような衝撃に耐えながら、それでも胴体でドリーマーの太ももの部分を受けたジャンゴ。その姿にドリーマーが眉を顰める。

だが、彼の行動はそこで終わらない。そのまま彼はドリーマーの足を抱え込むようにして拘束する。

「ツ、ゲホ、今だ！」

「任せろ相棒！」

そして、ジャンゴの背後に控えていたフルボデイがその鉄拳を振り抜いた。

鈍い音が響く。初めてドリーマーへとまともな一撃が入った。

「まだまだア!!」

そのまま、フルボデイはドリーマーの顔面に連打を叩き込んだ。『鉄拳』の異名を持つ男の渾身の連打だ。並の海賊なら簡単にノックアウトできるその連打も、しかし、『新世界』を生き残ってきた海賊を倒すには足りない。

「——調子に乗んなよ、三下ア」

足を抱えられた状態で、サンドバックの如く連打を受けたドリーマー。しかし彼は即座にフルボデイの拳をその手で掴んだ。

ミシリ、とフルボデイの拳が軋む音が響く。痛みで彼の表情が歪んだ。だが。

「ヒナ嬢!」

「ええ。——『裕羽檻』!」

二人の背後、両手を広げたヒナがその能力を展開し、鉄の錠を広げたのだ。ドリーマーとその至近にいるジャンゴとフルボデイを取り囲むようにして囲いが展開される。そして、その円が閉じられた。中にいた三人が鋼鉄の錠により、嚴重に拘束される。

「くっ、テメエ!」

「随分と好き勝手してくれたわね。不快よ。——ヒナ不快」

先程までの一箇所だけの拘束とは違う。両手足に胴体。複数箇所の拘束ともなればドリーマーも流石に即座に動くことはできない。

「ッ、この」

言葉は最後まで紡げなかった。ヒナが拘束され、うつ伏せに倒れる彼の腹部を全力で蹴り上げたのだ。

肺から空気を吐き出し、言葉を止めるドリーマー。浮き上がった海賊の体。そこへ、ヒナが渾身の拳を叩き込む。

ドリーマーと同じように拘束されている二人が思わず真顔になるような一撃だった。地面を何度もバウンドし、拘束されているせいで受け身も取れずにドリーマーが転がる。

こつそり、ジャンゴとフルボディはヒナを絶対に怒らせないようにしようと心に誓った。

「二人とも」

そんな二人に対し、ヒナがタバコを啜えながら言葉を紡ぐ。

「よくやったわね」

美しい笑顔だった。即座に二人はハイッ、と大声で応じる。元氣一杯だ。

だが、その二人とは逆に殴り飛ばされた海賊は不愉快そうに表情を歪めている。

『おいおい、大丈夫かドリーマー？』

「うるせえよ」

巨人から響いてくる笑い声に対し、不機嫌に応じるドリーマー。そして、彼の姿が変化する。

動物系の悪魔の実際の能力者が持つ変身能力。見せていなかった最後の一つである獣型の姿——陸上を走る鳥の姿となった彼は、その巨大化した体によって自身を拘束していた錠を破壊した。

大きくなっただけで壊せるほど柔じやないのだけど、とヒナが息を吐く。ドリーマーは再び人獣型に戻ると、ヒナとジャンゴ、そしてフルボディを睨みつけた。

「上等だよ。殺してやる」

その殺意を受け、ヒナは数歩後ろに下がった。そのままジャンゴとフルボディの高速を外す。

そして視線をドリーマーから外さぬまま、二人へ告げた。

「気合を入れなさい」

「了解！」

二人もふざける余裕はない。構えをとり、ドリーマーを見据える。

『手を貸すか?』

「いらねえよ。他を殺しとけ」

『あいよお』

巨人も動き出す。それを受け、ドーベルマン中將がヒナへと声を張り上げた。

「加勢は!?!」

「必要ありません」

覚悟の込められた返答だった。数で劣っている状況、指揮官であるドーベルマンや他の有力な海兵をドリーマーだけに何人も割くわけにはいかない。ヒナが受け持ち、彼を倒すことが最善だった。

その意図を汲み取ったのだろう。野郎ども、とドリーマーが怒鳴るように叫ぶ。

「こいつらはおれが殺す! 他は任せるぞ!」

おおつ、という声が上がった。それを背に受け、ドリーマーが足に力を込めた瞬間。

——轟音と共に、二人の男が落下してきた。

シキの居城、その上層階の壁を突き破るようにして二人の能力者が飛来する。

「スモーカーくん!?!」

「ラウンド!?!」

ヒナとドリーマーがその人影を見てそれぞれ驚愕と共に叫んだ。

——状況は、ますます混沌と化していく。



——少し前。シキの居城、そのとある広間。

ガープの大暴れによって弾かれるようにして飛ばされたスモーカーは、そんな自分を追ってきたラウンドと向かい合っていた。

かつてとある無法者たちの国を治めていたとされる海賊、ラウンド。長い旅路の果て、その海賊は“大地の王”と呼ばれるに至った。

だが、その生死についてはここ数年不明となっていた海賊だ。何故なら、彼が治めた国である『アラストウル』は既に滅んでいるが故に。

後にとある海賊の異名の一つに数えられた事件である“アラストウルの悲劇”。その当事者であるはずの彼はその場で死んだとされていたが、その島が地図の上から消えたことも併せて生死が不明であったのだ。

「最初は目を疑ったが、どうやら本物のようだな」

十手を構え、スモーカーは言う。眼前の巨漢は無言で簡素な槍を右手に持ち、彼を見据えている。

「テメエの国を滅ぼした野郎と仲良く肩を並べるなんざ、プライドもねえようだ」
「国を滅ぼした、か」

息を吐くラウンド。彼が突き出した槍を十手で弾くと、スモーカーはその拳をラウンドに向ける。

「『ホワイト・ブロー』！」

煙に変化させた腕を高速で相手へと叩き込む。だが、その拳がラウンドに到達する前に彼の持つ土でできた槍で防がれた。

だが直後、周囲に煙が満ちる。

「『ホワイト・アウト』！」

ラウンドを取り囲むようにして展開される煙。本来ならこの煙によつて対象を捕縛する技だ。その気になれば数十人単位で捕らえることさえ可能とする。

「『山風・舞』」

だが、その煙が完全に到達する前にラウンドの体に変化した。彼の全身から無数の槍が飛び出すようにして出現し、更に彼は自身の体を回転させることで煙を散らせてしまったのだ。

チツ、とスモーカーは舌打ちを零す。共に自然系の能力者。通常の手段では傷すらつかない。

ラウンドは視線だけを巡らせながら、スモーカーに相対する。

「理解してもらおうつもりもない。敵同士だ」

「その通りだな！」

十手と槍が激突する。だが、スモーカーが僅かに押し負けた。

自身の体を煙とし、背後に回り込もうとするスモーカー。その彼に対し、鋭い槍の一突きが襲い掛かった。

「くっ……！」

覇気を纏ったその一撃はまともに食らえば自然系であるスモーカーでも傷を負う。相手が相手である以上、たったの一撃で命を落としかねない。

距離を取るスモーカー。そこへ、何本もの槍が飛来した。

「『山風・穿』」

自身の体から生み出した土で形作られた槍だ。

悪魔の実の一つである、自然系「ツチツチの実」を食べた土人間。それがこの男の能力だ。かつてスモーカーは「スナスナの実」を食べた砂人間であるクロコダイルを見たことがあるが、この両者は似ているようで全く違う能力であると理解する。

彼の能力者は砂の能力の真髄は『渴き』と言っていた。それに対し、この男の持つ土の力は。

「……場所が悪いな」

ポツリと、呟くように言うラウンド。マズい、とスモーカーの勘がそう告げた。

直後。

「『山津波』」

それは、土石流であった。

槍を床へと突き刺したラウンドがその槍の形を変化させる。同時、彼の体から溢れ出すようにして大量の土がまるで津波のように溢れ出る。

土の本質。それはこの質量にあるとスモーカーは理解した。ただただ純粋な、圧倒的な体積と重量。人が寄って立つ大地を操る男の能力、その本質。

「く……い！」

後方へと跳躍するスモーカー。目を凝らし、どこかに穴はないかと探す。

「無駄だ」

呟くような声。直後、スモーカーの眼前に槍を持った男が現れる。

土石流と同化していたラウンドがスモーカーの体を貫こうと槍を突き出した。辛うじて受け止めるが、そのまま押し込まれる。

直後。

壁を突き破り、二人の体が空へと投げ出された。



戦場に現れたのは、更なる二人の能力者。共に強力な力を持つ存在だ。

「スモーカーくん！」

「ヒナか。……なるほど、ここで足止めされてるんだな」

同期の言葉に対し、スモーカーは即座に周囲の状況を把握する。スモーカー准将、とドーベルマンがこちらに駆け寄りながら言葉を紡いだ。

「中の状況は!?!」

「ルファイがシキとやり合ってる！ ウタはたしぎとあいつらの部下が護衛しながらこっちに向かつてるはずだ！」

直後、飛来した土の槍をスモーカーとドーベルマンがそれぞれ弾いた。やはりと言わべきか、ラウンドの攻撃だ。彼はこちらを見据え、新たな槍を生み出している。

「ガープ中將とモモンガ中將は？」

「おれが最後に見たのは幹部と向かい合ってる姿だ。おれが最後に見たのはガープ中將はジュウゾウと、モモンガ中將はブルチネラと向かい合っていたところだな」

ぶつきらばうな回答であるが、この状況でそれを咎める者はいない。スモーカーの口から出た名前に、一部の海兵たちの中でざわめきが広がる。

「ルフィ、って麦わらくんのこと？ 一人で『金獅子』とやり合ってるの？」

「あいつはそういう奴だ」

ヒナの言葉に応じるスモーカー。彼は自身の体から噴き出すようにして白煙を展開する。

「どういうつもりか知らねえが、ここをこじ開けねえと状況はよくならねえ。最速で叩き潰す」

「無論だな」

ドーベルマンが頷きを返す。その視線の先、向こう側の陣営に加わったラウンドも他の幹部たちから声をかけられていた。

「何してんだ？ アラバスタの英雄様だろうがあんたなら余裕で殺せるだろ」

「外の方が都合がいい」

『ああ、旦那の能力なら……睨むなよお。あのお嬢ちゃんのところにはカガシヤが向かってるし、おれはこっちで海軍迎え討ってる方が適任なんだよお』

何故か器用に巨人が泣き真似をしている。なんとなく力関係が見えた気がした。

「……まあ、いい」

呟くラウンド。彼から視線を外された巨人が露骨に胸を撫で下ろした。人間的な動きだというのに、どうにも違和感があるのが妙な巨人だ。

そしてラウンドは改めてスモーカーたちへと視線を向けた。だがその視線はスモーカーではなく、彼の隣に立つドーベルマンに向けられている。

「懐かしい顔だ」

「……やはり生きていたか」

互いの会話はそれだけだった。地面を蹴るラウンド。その手に持った槍がドーベルマンを狙う。

彼もまた刀で応じる構え。しかし、その間にスモーカーが割って入った。

「テメエの相手はおれだろう！」

「確かに順番は大事だ」

槍と十手で渡り合う二人。気をつけろ、とドーベルマンはスモーカーに告げる。

「その男はかつて千人以上の海兵を一人で返り討ちにした男だ！」

「二つ、事実が抜けているぞ。——『山嵐』」

ラウンドが後方へと下がって距離を取った。そのまま彼は地面へと手を当てる。

直後、目を疑うような光景が出現した。

無数の土で作られた槍が、この戦場に突如出現したのだ。

「うあー！」

海兵のうちの数名が槍に貫かれる。更に怪物たちもまた、土の槍でその身を貫かれた。

「『死山血河』!!」

阿鼻叫喚の地獄絵図だ。反応できた者は避けるか槍を防ぐことができたが、誰もがその対応をできるわけではない。

スモーカーが地面を蹴り、ラウンドに迫る。だが、その横手から鋭い蹴りが飛んだ。辛うじて体を白煙にすることで避けるスモーカー。おいおい、と蹴りの主が笑う。

「これは決闘じゃねえんだぜ英雄様」

「その通りね」

スモーカーと共に走り出していたヒナの声だ。彼女は走る速度を乗せた拳を振るう。だが、ドリーマーの横手から振るわれた拳をラウンドが展開した土の壁が防いだ。

「……余計だったか？」

「いや、ありがとうよ」

海賊たちの短いやりとりの間にスモーカーとヒナは距離を取る。

「おれたちで倒すぞ」

「ええ。了解」

同期の海兵たちのやり取り。対し、海賊たちも。

「上から潰す方が早いかねえ」

「……指揮官を潰すのが定石ではあるが」

正面から、その言葉を受け止める。

戦争が、更に激化する。

逃亡海兵ストロングワールド⑭—2

第十六話 正門前の戦い 後編

俗に言う非加盟国というのは、いくつかの種類に分けられる。

一つは、世間一般が想像する通りの国だ。世界政府に納める天上金のない貧乏国家。この手の国は犯罪の温床となりやすく、特に今の時代であれば海賊に荒らされ、略奪の標的となることも少なくない。そして加盟国ではない以上誰も助けてはくれない。故にこの手の国はただただ荒れ果てていく国であることが多い。

一つは、戦争を繰り返す中で国家としての統治機能を失った国。その戦争が他国に対してのものであれ、内戦であれ。常に血を流し続ける国は荒れていくしかなく、そうなれば天上金など支払う余裕はない。最悪なパターンは代理戦争の舞台となっている場合だ。世界政府の加盟国でない以上、調停に入る者もない。そうになると、いつか国家

そのものが消滅することさえもありうる。

一つは、そもそも加盟国になることを考えていない国だ。戦力であったり技術であったり立地であったりといった要因によって容易く干渉できない立場にあり、そして国そのものも単体で運営できている国。前者二つと比べると非常に真つ当な国家と言える。ただこの手の国は鎖国状態にあることも多く、海外の情報をあまり仕入れられないため思わぬところでトラブルに巻き込まれることもあるのだが。

ただ、これらに属しないタイプの非加盟国も存在する。当たり前の話だ。人の生き方が人それぞれであるように、国家のあり方も様々なのだから。

しかし、この国の在り方についてはその中でもあまりにも特殊であった。

“やはり、無理か”

“すまない。彼にも感謝と謝意を伝えて欲しい”

その国の名は、アラストウル。

かつて国が栄えたものの戦争によって滅び、そしてとある海賊が無法者を集めて建国した国だった。その国ができたのは約十年前。知る者さえほとんどいない国だ。

決して大きな国ではない。だが、その国の住民たちは苦勞は多い中でも確かに生きてきた。

“残念だ。こちらに来る意志はあるのだろうか？”

若い国である上に、そのできた経緯もあってこの国の王には居城はない。小さな一軒家の一室で、その王は来客と会談している。

王も巨漢と言える体格をしていたが、来客者はそれ以上の体格であった。少し広めに造られた部屋が狭く感じるくらいに。

“順番の問題だ。お前たちと先に出会っていたら、おそらく肩を並べて戦うこともしただろう。……シキの計画が終わり、私の役目を終えた後にまだ席があるのであれば”

“いつでも用意している”

即答だった。王はその解答の速さに苦笑する。

“過大評価だ。ただの海賊、それも傘下のいない男に対するものではない”

“お前が優秀な男であるのはこの国を見れば一目瞭然だ。世界政府の誘いもあっただろう?”

“おそらくその選択が一番賢かったのだろうが、それについては無理だ。……そのせいで皆には苦勞をさせてしまうが”

チラリと、王は外を見た。そこでは目の前の来客が連れてきた者たちと共に国を出る準備を進める島の住民たちの姿がある。

“残念だ。もしかしたら共に戦えたかもしれない”

“勧誘があったのは随分前の話だ。能力不足として追放されていたかもしれない”

静かな会話であった。共に海賊として世界に名を響かせる立場であるというのに、非常に穏やかな空気だ。

“私もそう裕福ではない。彼らを任せる礼としては少ないだろうが、用意できる精一杯を用意したつもりだ”

“十分だ。しかし、お前は どうするつもりだ”

“私は世界政府の言うところの無法者国家の王だ。……王が逃げて滅びる国など、笑話にもならない”

再びの苦笑。勝算はあるのか、と来客者は問う。

“政府はバスターコールさえも視野に入れている”

“私一人ではどうにもならないだろうな。だが、何人かは残ると言ってくれている。それに”

窓の外へと視線を向ける王。そこには、一人だけ異質な服装である着流しの男がいた。

“ウハハハハ、すまぬでござるな酒を貰ってしまった。ん、金品？ そんなものいくらでも持つていくでござるよ。お主らの今後の生活のためでござる”

去りゆく者たちへと声をかける男は酒を飲みながら上機嫌だった。その姿を見て、常に冷静である来客も少し言葉に呆れた様子が混じる。

“あれが勝算か？”

“勝つのは不可能だろう。相手は世界政府だ。私たちはそれをよく知っているはず”

王が肩を竦める。そうか、と来客は頷いた。

“……そろそろ我々が出る。武運を祈っておこう”

“面倒をかける。すまない。——くま”

来客——バーソロミュー・くまへと王はそう声をかけた。いや、と彼は首を振る。その彼に対し、王は言葉が続けた。

“帰る場所がない者というのは存在する。……ここが、彼らにとっての居場所になればと思ったが”

“世界政府にとってこの島はあまりにも目障りなのだろう。——フィツシャー・タイガーが逃した奴隷たちが造った国など”

その言葉に、王はつまらなさそうに頷いた。

“そうなのだろうな”

決して外に向かってその事実を公表したわけではない。だが、人はどうしても気に入らないのが目につくようだ。

おそらくこの国は存在しなかったことにされる。元々できたばかりの対外的に国を

名乗っていただけの小さな集落のような国だ。世界政府がその気になれば容易く消すことができる。

“最後に、聞かせてくれ”

立ち上がったくまが、この奴隷たちが造った国の王に問う。

“この国の名の由来はあるのか？”

“……あまり声高に言うものではないが、お前になら教えてもいい”

言うのと、王は自身の手を眺めた。そこには随分と古びた指輪が嵌められている。

“私の過去そのものだ。私が救えなかった、奴隷として生きていた女の名だ”

この王が、この国を造った理由。

行き場のない奴隷たちを抱え込み、人として生きられる場所を造った理由だった。

“……すまない”

“構わない。この名前を覚えていてくれれば”

そして来客を見送るため、王も立ち上がる。その彼に対し、“暴君”と呼ばれた海賊は言葉を紡いだ。

“改めて、武運を。——ラウンド”

“ああ。——友よ”

その数日後、とある非加盟国が消滅した。

当初はニュースとなるはずのなかったその事件はしかし、とある海賊の蛮行によって世界中へ衝撃として伝わることになる。

事件の中心にいたのは、“殺人鬼”と後に呼ばれることになる海賊。

千人を超える海兵を殺戮したその海賊は、その死体を槍に突き刺した上で晒し者にした。更にその場所にあつた国さえも破壊したという。

故の、“国呑”。

故の、“アラストウルの悲劇”。

かつて“酒呑”と呼ばれた海賊が起こした事件に、世界中が戦慄した。

——ただ。

王と呼ばれた海賊の名は、不思議とニュースにならなかつた。



その賞金首は、“墓荒らしのレムナント”と呼ばれている。

かつては世界政府の研究機関に籍を置いていた男だ。そのトップである世界最高の頭脳の倫理観のこともあり、研究において大抵のことは許される。だが、彼のそれは常軌を逸していた。

表向きは彼の二つ名の行いである墓荒らしによって追放された。だが実際は違う。決して表立っては言わないだろうが、『その程度』で優秀な人間を追放するような愚を世界政府は犯さない。

故に、本当の理由は別だ。この男は世界政府における最高の頭脳の研究を盗み出そうとしたがために追放された。

そのことについて、まあしやーない、とは本人の談である。少々自分の研究が行き詰っていたためにリスク承知で手を出したのだ。そして賭けには負けた。だからこうなっている。

この辺りを自覚しているので本人は自分はまだマシと思っている。周囲からすればどنگりの背比べだが。

「さて、状況の整理だ」

戦場の様子を眺めながら、レムナントは呟く。

頭脳労働が本職というだけあり、本人の体力は絶無と言っているほどにない。百メートル走るだけで限界を迎えるレベルのもやしである。

故に彼は、『外付けの力』を利用することにしたのだ。それが今彼が着込んでいる『スーツ』であり、彼が生み出した『フランケン部隊』である。

「海兵どもはこの城の門を突破しに来てる。まあ当たり前だわな。で、ドリーマーがその防衛の指揮を任されているが、あそこでラウンドの野郎と一緒に向こうの主力とぶつかつてるときだ。……いや強いなあ海兵ども。普通にやり合つてるだけでバケモンだろ」

自分自身が相手を倒すだけの力を持たぬが故に、レムナントは相手の実力を押し量る能力については優れている。かつての同僚たちからも評価されていた部分だ。彼が将来有望な海兵だと思つた人物は、そのほとんどが時を置かず活躍している。

弱いからこそ慢心せず、自分にとつての危険を嗅ぎ分けるといふ本能。この時代、この世界においてある意味最も重要な能力かもしれない。

「で、数はこつちが上だが怪物共が乱入してきた混乱もあつて互いに動きにくい状況と。……ふむ、じゃあおれの役目はあいつだな」

視線の先にいるのは海兵たちの指揮をとる男、ドーベルマン中將だ。世界政府に所属していた時に何度か見たことがある。

海兵というのにはどうにも真面目な奴が多いとレムナントは思う。まあこのクソみたいな世界で『正義』なんて掲げようとするアホだから当たり前なんだろうが、とも。

「巨人が動いたぞー！」

海兵のうちの一人が声を上げた。こちらに向かつて複数の弾丸が放たれる。だが、その悉くが弾かれてしまう。

「無駄だ馬鹿共め！」

分厚い鎧を着込んだ巨人。死体を改造して作られた彼の『スーツ』は生身の生物とは根本的な出力が違うように作られている。追放されるきつかけとなつた『パシフィスタ』なるサイボーグの初期構想のうち、利用できる部分を注ぎ込んでいたためだ。

通常であれば、いくら巨人族でも重みで動きを阻害されてしまうほどに分厚く、重い鎧。それも死体であり、体の中身を徹底的に改造されていれば何の問題もない。

「吹き飛ばへ海兵共オー！」

複数の弾丸と砲撃を受けても、その巨人はびくともしない。取り出した巨大な剣を力任せに振り下ろす。

轟音と共に地面が割れた。太刀筋には何の技術もない。ただただ純粋な出力だけで彼の技術はそれを成し遂げる。

「テメエが指揮官だな！」

ドーベルマン中將へと刃を向けるレムナント。それを周囲の海兵たちが止めようとするが、レムナントの操るスーツの背後から新たに人影が現れる。

それは鎧を着た集団だった。鎧の胸元にはシキの海賊旗のマークが刻まれているのだが、その集団はまるで軍隊のように規則正しく行進をしている。

いや、或いは正式な軍隊である海軍のそれよりも足並みが揃ったものかもしれない。

「増援か!？」

「お前たちはそいつらの相手をしろ! 　『墓荒らしのレムナント』は私が相手をする

!」

部下に指示を出すドーベルマンは刀を抜くと、彼自身もレムナントに向かって切り込んでいく。対し、レムナントも受ける構え。

「不合理だなア海軍! この力に勝てるか!？」

「ぐっ!？」

一度めの激突は、振り下ろされた刃をドーベルマンが受け止める形になった。その衝撃で彼の足が地面に減り込む。

「中将殿がわざわざ相手してくれるなんて光栄だねえ!」

「く、この出鱈目な動き……!」

レムナントが何度も刃を振り下ろす。それはやはり戦う技術を持つ者の動きではないが、その破壊力だけで十分脅威だ。

対し、ドーベルマンは正面から受けるのではなく受け流す形での対処に方針を変え

る。

金属音が幾度となく鳴り響く。レムナントの攻撃は重いが、素人の剣術だ。それで簡単に殺せるほど海軍本部中将という肩書きは甘くない。

「流石だな海軍本部……!」

呷くレムナント。だが想定内だ。故に彼は一つの機能を発動する。

巨人の右腕、その鎧の一部が開いた。そこから突如白煙が噴き出す。

視界を奪う煙。ドーベルマンが声を上げた。

「毒ガスか!」

「あのクズならそうしたんだろうがな。残念、ただの煙幕だ」

視界が奪われるが、ドーベルマンは「見聞色の覇気」によってレムナントの位置を捉えようとす。だがその焦りが、彼の背後から迫る影に気付かせなかった。

「なんだ!」

突如、複数の鎧を着た者たちがドーベルマンに飛びついてきた。人間と比べてあまりにも気配の薄いその存在に、ドーベルマンの反応が遅れる。

振り払おうと力を込めるが、見た目以上に力があるためかすぐに振り払うことができない。そしてその隙を、レムナントは見逃さない。

「吹き飛びなア!!」

直後、巨人の兜が開いた。そこにあつたのは顔ではなく、巨大な砲門を持つ大砲だ。そして、砲撃。

「ドーベルマン中将！」

「中将殿?!」

連続して砲撃がドーベルマンへと叩き込まれた。彼を抑え込んでいる鎧を着た者たち——『フランケン』も巻き込む攻撃だ。

吹き飛ぶ鎧とフランケンたち。その中心にいたドーベルマンがどうなったかなど、想像に難くない。

「卑怯とは言うなよオ?!」

レムナントの笑い声が響く。

シキの居城、その正門前。その戦場の状況がまた変化する。



状況の変化に、背中合わせで戦う海兵二人も意識を向ける。

「なんだあの鎧兵は!？」

「フランケン部隊っていうらしいぜ、アラバスタの英雄様?。」

ドリーマーが笑う。彼の蹴りを、スモーカーは自身の体を煙にすることで避けた。

「あのもやし野郎が作ったサイボーグ兵器だそうだ。あいつと親分の指示を忠実に聞く死体兵士なんだと。所詮死体だからな。そりゃ捨て駒にくらいする」

「死体兵士だと? テメエらの倫理観はどうなつてやがる!。」

「おいおい英雄様、その言葉はそのままお前らに降り掛かるだろ」

地面から突き出してきた土の槍を見て、二人が互いに距離を取る。そちらに槍を出した男であるラウンドは横手から放たれたヒナの拳を槍で受け止めた。

「同感だ。世界政府の犬に倫理を説かれたくはない」

「海賊に説教される謂れはないわ」

槍を掴み、体ごと捻るようにして投げようとするヒナ。だがラウンドは槍を手放すと、その腹の部分から複数の槍を出現させてヒナを狙った。

転がるようにして横に飛び、それを避けるヒナ。その彼女に対し、新たな槍を手に持ったラウンドが容赦なく突きを入れる。

だが、その槍はスモーカーが展開した白煙が彼女を掬い上げるようにして彼の側に引き寄せたため空を切り、地面を突き刺した。

「つまりはお互い様ってことだろ、世界政府?」

並び立つ二人に対し、肩を竦めるドリーマー。ほぎげ、とスモーカーがそんな彼に対して十手を突き出す。

「私利私欲で好き放題してるテメエらが何を語る!」

「理由があれば何をしてても許されるってか?! 随分立派な『正義』だな英雄様よオ!」
「掲げる信念さえない男に何かを言う権利はないわ」

突き出された十手をドリーマーは避けた。だが、十手が突き出されたと同時にヒナが動き出している。十手の下を滑り込むようにして走り込む彼女は、そのまま突き上げるような拳を放った。

鈍い音と共に、その腹部へと右拳が叩き込まれた。更に身を捻り、ヒナが左足でドリーマーの顎を狙った蹴りを放つ。

だが、それは後方へと身を逸らしてドリーマーは紙一重で避けた。小さく笑みを浮かべる彼はしかし、次の瞬間には表情を変える。

「『ホワイト・ブロー』!」

スモーカーが放った渾身の一撃で顔面を殴られ、後方へと吹き飛ばすドリーマー。その彼を、ラウンドが土で作ったネットで受け止める。

「……無事か?」

呟くように問うラウンド。それに対し、口元の血を拭いながらドリーマーが応じる。

「チツ、今のは効いたぜ。だがテメエ、何を傍観してやがる?」

「すまないな。私が手を出せばお前を巻き込むと思った」

特に感情も乗せずにラウンドは言う。チツ、とドリーマーは舌打ちを零した。

「おれがテメエの一撃を避けられねえとでも? 軟弱なテメエの部下と一緒にするんじゃないよ」

「生憎だが私に部下がいたことはない」

「ああ? どこぞの国の王だったんだろ?」

ドリーマーが眉を顰める。昔の話だ、とラウンドは目を伏せた。

「私は常に個人で戦ってきた。友人はいたが部下はいない」

「……過去について詮索する気はねえが、テメエの役目は果たしな。言った通りだ。テメエの横槍程度、いくらでも捌いてやる。あいつらを潰すのが先だ」

「承知した」

頷くラウンド。彼が足で地面を叩くと、嘖き出すようにして複数の槍が出現した。

まるで彼とドリーマー、そして相對する海兵二人を取り囲むようにして出現するそれらを見て、スモーカーが鼻を鳴らす。

「どういふつもりだ?」

「私なりの敬意だ。——お前たち二人はここで殺す。生きて出られると思うな」
ラウンドが宣告する。上等だ、とスモーカーが吠えた。

「お前ら海賊は全員この場で逮捕する！」

そして、彼の同期でもある女将校ヒナも静かに応じた。

「覚悟するのはあなたたちよ」

その二人の言葉を聞き、「新世界」の海賊も笑う。

「いいねえ！ そうじゃねえと張り合いがねえよ！」

シキの居城、正門前。

億超えの「新世界」の海賊と、二人の海軍将校が激突する。



至近距離からの連続した砲撃を受けてなお、ドーベルマンの意識は途絶えていなかった。

(状況を……！)

視界が歪み、意識が揺れる中で彼はそれでも己自身を叱咤する。彼の後輩でもあるスモーカーとヒナがあゝの怪物と相対しているのだ。ならばこの場で先に自分が倒れるわけにはいかない。

彼はかつて、幾度となく「大地の王」とまで呼ばれた海賊と戦った経験がある。最後の戦いだと思っていたあの場にもいた。

故に知っているのだ。あの怪物がどれほどの力を持っているのかを。

(屈してなるものか……！)

油断した、不覚をとった——そんな後悔だけが何度も脳裏に浮かぶ。

甘く見ていたわけではない。海賊との戦闘において卑怯も汚いもない。奴らはなんだってやってくる。ましてや相手はその崩壊した倫理観故に世界政府を追われた男なのだ。

『流石だな！ フランケン共は吹き飛んだつてのによ！』

「おのれ、貴様……！」

刀を杖代わりにし、立ち上がる。直後、横なぎに振るわれた巨大な剣がドーベルマンを襲った。

咄嗟に刀でガードできたのは訓練の賜物だろう。だが堪えきれず、弾かれるようにして吹き飛ばされる。

「ドーベルマン中將！」

声が聞こえるが、応じる余裕はない。こちらへと歩み寄る巨人を見据えるしかない。

『まあ、とりあえずあれだ。——お疲れさんだな、中將殿』

嘲笑うようなレムナントの言葉。それを迎え撃つために立ち上がるうとしたところで、ドーベルマンの「見聞色の覇氣」がそれを捉えた。

「一斉掃射だらア!!」

聞き覚えのある同僚の声と共に、無数の銃声と砲撃音が響き渡った。ほぼ同時に、巨人の体に無数の弾丸と砲弾が着弾する。巨人は身に纏う鋼鉄の鎧はしかし、傷こそつくがダメージはほとんどないようだ。しかし、衝撃によって少し後退する。

ドーベルマンが振り返る。すると、スカーフで口を隠したぶかぶかの帽子を被った海兵が走り寄ってきた。

「到着が遅れて申し訳ありません。第二陣到着しました」

そう言った彼の背後では、先ほどの一斉掃射を指示した人物——バスティーユ中將を筆頭とした海兵たちが続々と現れていた。見れば自走式の大砲などといった兵器にいても持ち込んでいるらしい。

「これより、我々も戦闘に加わります」

その言葉を聞いて、ドーベルマンは小さく笑った。体に気合いを入れ、立ち上がる。中将殿、と制止の意図が込められた言葉で呼びかけられるが、ここで立たずしていつ立てばいいというのか。

「総員、奮起せよ!!」

絞り出すような声だった。数で劣り、待ち構えられている状況での戦闘。更にフランケン部隊などという正体不明の鎧兵たちの出現。どうしても海兵たちの士気は下がっていく。つつあった。

だがそれも、援軍の到着によって潮目が変わった。ならばここで流れを掴まなければ。だがそれも、援軍の到着によって潮目が変わった。ならばここで流れを掴まなければ。

「海賊という『悪』の進撃はここで止めるのだ! 我らの『正義』は決して負けん!」

おお、と彼と共にこの場に送り込まれた第一陣の海兵たちからも声上がる。

援軍と、自分達の指揮官の健在。それを示すことができれば、この場の海兵たちの心は折れない。折れるような者はいない。

指揮官の最大の役目は兵の士気を保つこと。故に彼は倒れてはならない。

——彼が憧れた「先生」は、いつだってそうだったから。
『やってみろよ偽善者共が!』

対し、かつて世界政府の側にいた男が吠える。

銃声と砲撃音が重なり、戦闘が激化する。

『ぶつ殺せ! 数ではこつちが上だ!』

「海賊という「悪」を許すな!」

決して相入れない二つの勢力の激突。

この戦争の状況を左右する戦いは、より加熱していく。

逃亡海兵ストロングワールド⑮—1

第十七話 憧れの向こう側

元々、D r i n デイゴは戦闘要員ではない。彼の役職は科学者だ。シキの計画において彼の研究による動植物の強制進化は非常に重要であり、長い付き合いであることもあつて重用されている。

だが、シキの言う『かつての時代』を漫然と生き残ってきたわけではない。それなりの戦闘能力はあるし、だからこそ最前線とも言えるマリolfordに怪物共を指揮できるスカーレットと共に降りてきたのだ。

そこには知的好奇心が大いに含まれてはいるが、同時に自分の腕に対する自信も込められている。

「ピロピロピロピロ！ 誰が来るか楽しみだ！」

「ウホ？」

こちらの笑い声に対し、ゴリラ——スカーレットが首を傾げる。その彼に対し、インデイゴは肩を竦めた。

「まあ、お前の言う通りだ。ここまで来るだけで何人死ぬか。よっぽどの奴じゃなけりや辿り着くことさえできねえだろうなア」

怪物たちはただ愚直に本部へと向かっているわけではない。一定の数の怪物たちはこの周囲を守るようにして配置されているし、種類によっては集団で襲いかかるようにという指示も出している。

個体によつては海軍本部の左官クラスでも容易く命を落としかねない怪物たちだ。人同士の戦いとは違うということもあり、海兵たちは相当苦戦しているはず。

しばらくは退屈だな、とそんな風に思うインデイゴ。その彼の視界が、一つの影を捉えた。

——直後。

「へえ」

インデイゴの右側斜め後ろ。人体の構造、目の位置の関係上どうしても死角となる場所から放たれた蹴りを彼は屈んで避けた。

「随分と若いのが来たみたいだな！」

そのまま彼は振り抜かれた相手の足——随分と若い海兵の足を掴もうと手を伸ばす。

しかし、その背後から影が差した。

空を斬る音が響いた。二本のククリ刀を持つ、サングラスをした海兵がこちらへ向けて手に持った得物を振るつたのだ。思わず口笛を鳴らす。

「二段構えか。それにしては足りないもんが多過ぎるな」

大柄な男であるインデイゴが持つても見劣りしない大剣の柄に手をかけながら、彼は言う。彼を挟み込むようにして立つ二人の若い海兵は一拍の間を置くと即座に動いた。

まず動いたのは、桃色の髪の子兵衛だ。「六式」の一つである「剃」で距離を詰め、こちらへと拳を叩き込もうとしてくる。

外見から窺える年齢からすれば、この歳で「六式」を扱えるのは大したものだとインデイゴは思う。だが、駄目だ。

——この場所に来るには、あまりにも弱過ぎる。

「遅い」

つまらなさそうに呟くと、インデイゴは左腕で若き海兵を殴り飛ばした。

呆気なく、堪える様子もなく吹き飛ばされる海兵。だが、彼は血が混じった声で叫ぶ。

「ヘルメツポさん！」

「おうよー！」

そして、それに応じる声。インデイゴは息を吐くと、背後から振り下ろされた二本の

ククリ刀を大剣で簡単に受け止めた。

鈍い金属音が響く。インデイゴの視線の先には、齒を食いしぼるサングラスをした海兵の姿。

その彼に対し、インデイゴが言う。

「二対二だ」

「ウホッ！」

直後、背後からククリ刀を持った海兵が殴り飛ばされた。スカーレットの剛腕をまともに受け、ヘルメツポと呼ばれた海兵が吹き飛ぶ。

ククリ刀が宙を舞う中、先ほどインデイゴが殴り飛ばした海兵が彼を受け止めた。大した反射神経と速度だ。

だが、それだけである。

「燃え尽きちまいな」

最後までつまらなさそうな表情のまま、インデイゴは薬品を投げつけた。着弾すれば即座に爆発する危険な薬品だ。それを一つ、わざわざ一塊になつてくれた海兵へと投げつけた。

退屈だと、インデイゴは思う。

どこぞの狂人のように強者と殺し合いたいわけではない。どちらかというとな戦闘は

管轄外だ。だが、ここまで手応えがないと流石に興醒めである。

着弾の直前に視線を切るインデイゴ。故に彼は気付かなかつた。

——直撃の瞬間に、一つの影が割って入ったことに。



絶望の前に現れたのは、「正義」の文字だった。

何度も見続けてきた背中だ。ヘルメツポと自分を鍛えてくれている上官の一人。

「無事か?」

正義のコートををはためかせながら、ガープの部下でありコビーの上官である剣士——ボガードはそう問いかけてきた。振り返らないままの彼に対し、コビーはすみません、と言葉を紡ぐ。

「僕は、何も……!」

「すみません……!」

ヘルメツポもまた、同じように言葉を紡ぐ。

蛮勇だった。軽率だった。愚かだった。

敵わないとわかっていたのに。あの人たちのようにやれると、そんな風に思い上がった。

だが、そんな二人に対して何を謝る、とボガードは言葉を紡いだ。

「敵の指揮官を見つけただろう。十分な戦果だ」

爆発によって発生した煙が晴れていく。その向こうで、インディゴが笑った。

「人材不足のようだなア、海軍も」

「貴様らと一緒にするな」

切り捨てるようにして言い放つボガード。そうか、とインディゴは特に気にした様子もなく頷く。

「だがまあ、一人増えたからってなんだってんだ？——『ケミカル・ジャグリング』！」

すると、彼の右掌から無数の火の玉のような薬品が出現した。彼が言うジャグリングのように自在にそれを操る彼は、そのままこちらを見据える。

「燃え尽きなア!!」

連続して放たれる薬品。それが着弾する瞬間、ボガードはその手に持った刀でそれを順に全て斬り落としていく。

「中々やるな！ だが逃げられもしない状態でどこまで耐えられる!？」

薬品の供給速度と射出の速度が上がった。だが、ボガードは退かない。いや、退けないのだ。

背後にいるコビーとヘルメツポ。その二人を守るため、彼は退けない。

(何をしてるんだ、僕は)

思わず拳を握り締める。向こう見ずに突っ込んで、一蹴されて。

拳句、上官の足を引っ張っている。

(どうにか)

ボガードが動ける状況を作らなければ。そう思い、足に力を入れた瞬間。

「動くな!!」

一喝により、動きを止めさせられた。直後、ボガードが捌き切れずに直撃を貰う。

複数の爆発が彼を包んだ。インデイゴの笑い声が響く。

「ピロピロピロピロ! 馬鹿な野郎だ! 足手纏いなんて放っておけばいいものを

!」

「……見捨てるものか」

声が響く。

爆炎の中心。そこでは爆発によって傷つきながら、しかし、確かに両の足で立つボガードの姿があった。

その背に宿る『正義』には、微塵の揺らぎもない。

「彼らは大切な私の部下だ」

「随分甘つちよろいな海軍！ だったらその部下と一緒に消えちまいな！」

両手を広げるインディゴ。その両手から、先ほどの数倍の数の薬品が出現する。それらは彼の頭上に集まり、巨大な塊となった。

マズい、とコビーは思う。一発だけでもその見た目からは想像できない威力を持つのだ。それをあの大ききともなれば、とれほどの威力になるのか。

「『マスジャグリン』!!」

笑みと共にそれをこちらへと放とうとするインディゴ。思わず身構えるコビーとヘルメツポに、背を向けたままボガードが告げた。

「安心しろ」

その声色には、怯えも、躊躇も、何一つない。

あるのは。

「私は防御役だ」

——信頼。

「跡形もなく燃え尽きちまいなア！」

必殺の一撃が放たれる。その瞬間。

「悪いね兄ちゃん。そいつはいけねえや」

この場に似つかわしくない、そんな声が響くと共に。

インデイゴの眼前に、突然男が一人、現れた。

「なんだ——」

「——ほらよ」

その人が何をしたのか、コビーにはわからなかった。

ただ、気付いた時にはインデイゴが頭から地面に叩きつけられていて。

「あーあ」

それを成したのであろう男は、一瞬でボガードの近くにまで移動していた。

爆発。

インデイゴ自身が用意した薬品による爆発が彼を襲う。頭から地面に叩きつけられ、状況もわからないままに自分自身の必殺の一撃を受けたインデイゴが呻き声を上げる。

「因果応報だねえ」

笑うその人物を、コビーは知っている。いや、海軍内で知らない者の方が少ないだろう。

名を、トキカケ。

通り名として「茶豚」の名を持つ海軍本部中将だ。

通常とは違う、白生地茶色格子柄の描かれたデザインのコートを着たその人物は海軍内では誰もが知る実力者である。

「……すか……れっ……何、して……」

倒れ込み、朦朧とした意識の中で近くにいるはずのゴリラの名を呼ぶインディゴ。よう兄ちゃん、とトキカケがそんな彼の下に歩み寄りながら言葉を紡いだ。

「そいつはもしかして、あいつのことかい？」

しやがみ込み、親指である方向を指し示すトキカケ。その先では、一人の美女が巨大なゴリラ——スカーレットを音もなく切り伏せていた。

ゆっくりと仰向けに倒れていくスカーレット。その体が地面に倒れる音が切欠か。インディゴの意識もまた、そこで途切れる。

「おいおいお姉ちゃん、容赦がなさ過ぎねえかい？」

「女の扱いをわかっていないようだったもの」

肩を竦める美女は、そう言って刀を鞘に収めた。

その人物もまた、コビーは知っている。

名を、ギオン。

通り名として『桃兎』の名を持つ海兵であり、あの大参謀つるの妹分としても知られる人物だ。

「ありがとうございます」

刀を鞘に収めつつ、ボガードが二人へと礼を言った。いやいや、とトキカケが笑う。「礼を言うのはこつちもだよ。なかなか見つからねえから苦労してたんだ」

「ええ。見つけたのはそちらの二人？ 確か、ガープちゃんのところの子よね？」

海軍本部中将。実働部隊における最高位たる二人の視線がコビーとヘルメツポに向く。いえ、とコビーは首を横に振った。

「見つけた、だけです。僕は、何も」

「……コビー」

ヘルメツポがこちらを見、呟く。だが、その言葉にも悔しさが滲んでいた。

憧れがあった。夢があった。願いがあった。……自惚れ、ていた。

あの二人のようになりたいと願って。その結果が、この様だ。

(なんて、弱さ)

何が、認めてくれるだ。

何が、あの二人は逃げないだ。

自分は、触れることさえできなかつた。

「お前たちは多くを望み過ぎだ」

悔しきで拳を握る二人に対し、ボガードが言葉を紡ぐ。

「お前たちの成長速度は十分脅威的と言っていいほどだ。それ以上は望み過ぎだぞ」

「……はい」

わかっている。わかっているのだ、そんなことは。

聞けば、あの二人は幼少の頃より過酷な環境で生きてきたのだとガープから教えられた。憧れるだけで何もしてこなかった自分がたった数ヶ月訓練しただけで追いつくなんてあまりにも傲慢な話だ。

でも、それでも。

憧れたから。

願ったから。

夢を、見てしまったから。

——いつか、あの人たちの隣に胸を張って立てる日を。

「……コビー、ヘルメツポ。お前たちはあの日、あの二人に何と宣言した？」

えっ、と声が漏れた。

ガープに拾われ、訓練を経て。 “新時代の英雄” と呼ばれるまでになった二人と、コ

ビーとヘルメツポは再会した。

あの時、自分は何を誓った？

「あれは、その」

「この程度で挫けるような想いか？」

ボガードの問い。その言葉にすぐに反応したのはコビーではなく、ヘルメツポだ。

「違う！——違い、ます。おれは、おれたちは」

あの時、あまりにも無謀な夢を。

この友達は、何と言って受け止めてくれた？

“奇遇だなコビー。おれの目標も同じだ”

それはきつと、虚勢だったのだと思う。

自分と同じで、どんどんと先へ行ってしまう二人に対して彼もまた焦りがあったのだ。

“いいねえ。じゃあ、お前らとも勝負だな”

けれどあの人は、こんな夢想を笑わなかった。

“私たちも勝負してるの。今は私が一番先頭だね”

あの人は、認めてくれた。

そして、彼らは言ったのだ。

——それでも勝つのは自分だ、と。

侮りではない。

嘲りでは決してない。

ただ彼らは、真つ直ぐに自分達を見てそう言ってくれた。

「僕は」

あの日の誓いは、きつとその場の勢いで口にした言葉だ。

けれど。

嘘ではない。

「僕は、 〃大将〃 になります!!」

その夢は、嘘なんかじゃない。

「おれだって!!」

叫ぶような言葉だった。何かを確認するような、そんな気持ちが込められている。

——いいねえ、と。

海軍本部長が、笑みを浮かべる。

「楽しみだ」

「ええ。期待してる」

その笑みは、嘲笑ではない。何か、遠い過去を思い出しているかのような笑み。

「笑わないんですか？」

「何を笑うってんだい？」

しやがみ込み、座り込むこちらに目線を合わせながら。

海軍本部 “大将” に最も近い海兵の一人が、そう言葉を紡ぐ。

「おれだって、昔は無謀なだけの若造だったんだ」

その言葉は非常にあっさりしたものであった。だが、確かに二人は感じた。

あまりにも重い、背負ってきたものを。

そうね、とギオンが頷く。

「あのガープちゃんだって、ただの若者だった時代があるんだから」

「……いやア、どうかねえ」

「水を差さない」

ギオンにピシヤリと頭を叩かれるトキカケ。その二人を見て、改めて思う。

——憧れは、遥かに遠い。どうしようもないほどに遠くて、心が折れそうだ。

けれど、諦めない。

諦めたくない。

「頑張ります」

今は、そう眩くことが精一杯だ。

でも、いつか。

いつか、必ず。

“先に大将になるのはおれだ！”

麦わら帽子の、あの人に。

——いいえ、僕です。

そう、胸を張って言えるように。

だから、今日の悔しさを忘れない。

忘れない。——絶対に。

逃亡海兵ストロングワールド⑮—2

第十八話 老兵の想い

その男には、大層な何かはない。

あれをやろう、これをやろう。

あれが欲しい、これが欲しい。

そんな欲求を持っているだけの男だ。ただその欲求の叶え方が世間一般で言うところの“常識”から外れていて。

そして、それを通せるだけの力を持ってしまっていたというだけの。

——故に、怪物。故の、化生。

とある国に伝わる“鬼”の名を異名としたその男は、己を指してこう笑う。

“どうしようもない存在というのは、確かにいるのでござるよ”

その真意はわからない。だが世界政府は、罪なき市民は、確かにその被害を受け続けた。

だからこそ、その怪物は恐れられている。

あまりに身勝手。

あまりに最悪。

数多の憎悪を受けてなお笑うその姿は、まさしく「鬼」であつたという。



長い海兵としての人生の中で後悔がなかったと言えば嘘になる。

ああすればよかった、こうしていればよかったなどというのは常のことで。救えなかった、守れなかった命に対しての謝罪など何度繰り返したかわからない程だ。

だが、この後悔はそれとは異なる意味がある。

「貴様を野放しにし続けた事実を、わしにとつての後悔じゃ」

人を殺す鬼。故に「殺人鬼」。そう呼ばれた男と向かい合いながら、ガープは言う。

「手厳しいでござるな」

相對する鬼——ジュウゾウは笑うだけだ。

「しかしまあ、某としても捕まるのはごめん被るのもまた事実。逃げる方がいいなら逃げるのは当然でござるよ」

「その割にはわしから逃げず、むしろ戦う気のようにやが」

ウタの海楼石の錠の鍵まで見せておいて逃げる気などないだろう。ガープのその言葉を聞き、ジユウゾウは笑みを浮かべたまま頷く。

「強者との戦いを望むのもまた事実でござるよ。酒も飲んだことでござるし、飲酒後の運動は死にかけるほどの殺し合いが一番でござる」

そこには何の嘘もない。ただの事実を話しているだけであることがよくわかった。

（相変わらず不気味な男じゃ）

内心でガープは呟く。その言動に嘘がないというのに、どうにも理解ができない。

彼は海賊というものに対して複雑な感情を抱いている。大体が碌でもない奴らばかりであるが、それこそロジャーのように最後まで敵同士ではあったが妙な信頼を抱くようなこともあった。

だが、目の前の男については。

そもそも、理解ができない。

「しかし、因果なものでござるな。某としては酒と食事があればある程度は満足するの
でござるが」

「ならば隠居しておれ」

「そうはいかんでござるよガープ。某が酒を飲みたいと思い、店に行つて頼んでも貰えぬことがある。ならば奪うしかなかるう？　後腐れもないようになれば、まあ、殺すしかないのでござる」

肩を竦めるジユウゾウ。やはり、とガープは思った。

(この男の論理が理解できん)

言葉は通じる。会話のキャッチボールもできる。だが、相互理解に至らない。

無法者であつても彼らなりの信念や思考が必ず存在している。故にガープはそういった部分で図らずも相互理解に至ることはあつた。それこそシキとさえも互いの思想や在り方については一定の納得を得たのだ。その上でぶつかるしかないだけで。

だが、この男は違う。

この「鬼」の論理を、ガープは理解できた試しがない。

「その果てに……どれほど殺してきた」

「覚えているわけがないでござろう。お主としてそうであろう？　今まで殺した生物の数をいちいち覚えてなどおらぬであらうに」

お主らの悪いところでござるよ、とジユウゾウは告げる。

「人だけが特別ということはないでござる。皆生物は平等。その死に等しく価値はない

のでござる。人の死を特別に扱うのは少々驕りが過ぎるのでござるよ」

その言葉に、ふん、とガーブが鼻を鳴らす。

「シキにでも教わったか？」

「ふむ、流石に乱せぬようでござるな」

あつさりとジユウゾウは持論を引つ込めた。肩を竦め、言葉が続ける。

「若い海兵であれば動揺することもあるのでござるが。……ただ、ガーブ。某にはどうしても理解できぬことがあるのでござるよ」

なんじゃ、とガーブは視線で問いかけた。眼前の狂人は笑みと共に言葉を紡ぐ。

「法とは、なんでござるか？」

わからぬのでござるよ、とジユウゾウは続ける。

「人を殺すと罪であり、罰を受けるべきであるというが。それはお主ら世界政府が勝手に決めたルールでござろうか？ 某はそれをはいそうですかと受け入れた記憶がないのでござる」

反論するのは容易い。だが無駄だ、とガーブは理解している。

ジユウゾウとしてシキの片腕として生き残ってきた海賊だ。その彼が法というルールについて知らないはずがないし、社会における規範というものがわからないはずがない。

ただ、理解はできても納得ができていない。だからこそこの「鬼」はそれを軽視する。

「シキが投獄されたのはつまりその行いが罪であり、故に罰を受けたという事でござろう？ お主らに敗北して投獄されるという罰。故にこそマリolford襲撃は罪であつたと」

論理が逆転している、とガープは思った。因果関係が逆だ。

法とは、ルールとは罰ありきではない。人が共同体の中で生きる上で守るべきルールを定めたことが始まりだ。その過程で共同体を破壊しかねないような行いには罰を設け、ルールに強制力を作った。

故に、法とは人が人と共に生きていくために必要なものなのだ。……この「鬼」にそれが理解できることはないのだろうか。

「ガープ。海軍の英雄。某にはわからぬことが一つあるのでござる」
一息。

「——某は、一度も罰を受けておらぬでござる」
故に己に罪はない。

この狂人は、そう言い切った。

(その辺のゴロツキなら詭弁と一蹴するが)

内心で息を吐く。この男の論理は破綻している。だが彼に罰を与えることができた者がいないのもまた事実。

故に、ガープは告げる。

「安心せい」

これは、ガープの罪で。

同時に、彼の負うべき罰でもある。

この「鬼」を野放しにし続けた、「英雄」と呼ばれる男の。

「——わしが、貴様への「罰」そのものじゃ」

その言葉に、「鬼」は笑った。

「ウハハハハ！ そうでござるか！ そうか、それはつまり！」

腕を解き、構える狂人。

「お主を殺せば！ 某に罪はないということか！」

どこまでも身勝手だ。

そして、最悪。

「随分多くを殺し、長くを生きてきたでござる！ 丁度いいでござるな！ お主の言っ

た通りでござる！ 時代に決着をつけるでござるよ！」

返答は拳だった。

轟音と共に、二つの力が衝突する。



欲しいものがあつた。

——だから頼んだ。

金があると言われた。

——金などなかった。

無理だと言われた。

——どうしても欲しかった。

だから奪つた。喚くので、喋れないようにした。

大勢の人間がこちらを責め立てた。罪人だと、罰を受けろと。

その全てを黙らせた。この両手に奴らの言うところの罰の象徴である錠がかけられ

ることは、終ぞないままに時が過ぎる。

奪い、殺め、壊し、生きた。

いつしか、奪う前に差し出されるようになる。

悪くはない気分だった。そもそも欲しいから奪ったのだ。奪う前から渡されるのであれば、それで満足していた。

国から出ていけと、そう言われた。

出る理由が、見つからなかった。

いつしか、誰もが遠巻きに己を見るようになっていた。

相変わらず、己を罰することのできる者は現れない。

外の世界には、もっと多くがあると知った。

故に出ることに決めた。

波に揺られ、風に吹かれて。

外の世界は広く、しかし、それでも罰はなかった。

罪人と呼ばれながら。

それでも、誰も己を罰することはできないままだ。

様々な人間に出会った。あの男に会ったのは偶然だ。おそらく向こうは違うのだから。

“ジハハハハ！ おれと共に来い！”

酒を片手に、そう言われた。

生きていることが、楽になった。

彼の下にいれば、わざわざ取りに行かなくても食事ができた。

己が罪人であることはわかつている。

だが、未だ実感はない。

罪も、罰も。

敗者の戯言ではないのか？

“おれはこの海を支配する！”

かつて共に来いと言った男は、そう宣言した。

丁度いい、とそんな風に思った。

この海を、彼が支配できるのならば。

この世界には罪などなく。

それは人が生み出した妄想なのだ。

そう、証明ができる気がした。



ただの海賊が、その数十年において一度も捕まらないということなどあり得ない。その海賊は正しく「伝説」であり、怪物であるのだ。

——ヒトヒトの実幻獣種、モデル「鬼」。

現時点において長き歴史においても一例しか確認されぬ、妖の能力。故にその男は、今日この時まで生きてきている。

「お主相手に手加減できると思うほど、某は自惚れておらぬでござる」
筋肉が肥大化し、その体が巨大化する。肌の色も浅黒くなり、額には二本の角が出現した。

その姿は、まさしく伝承における「鬼」そのもの。

普通ならばその姿に対して恐怖を覚えるか、或いは対抗するために身構えるか。何かしらの動きを見せるものであるがガープにそんな気配はない。

「刀はどうした？」

「ああ、どうにも肌に合わぬので弟子に渡したでござる。レイリーの強さを知ろうと思つたのでござるが、どうにも上手くいかぬものでござるなあ」

まるで世間話でもするかのような会話。だが、直後。

互いの右拳が、衝突した。

「それにまあ、なんとというか。——結局某は素手の時が一番強いじゃないか」
「ふん」

拳同士がぶつかる音の中、しかし、互いの表情には余裕がある。

衝撃によって周囲の瓦礫が吹き飛ぶが、その中心の二人には欠片のダメージすらもないのではないかと思わせるほどにその動きには揺らぎがない。

右拳。

左拳。

右足。

左拳。

そして——右拳。

まるで示し合わせたような攻防。互いの一撃は並の海賊、或いは海賊ならば耐えることさえ許されないほどの力を持つ。

互いに、*「伝説」*。

流れた年月の果て、全盛期の力と比べれば衰えは確かにある。だがそれでも、ここにいるのは間違いなく世界の頂点で戦い続けてきた者たちだった。

「罅が明かぬでござるな」

眩くと、ジユウゾウが後ろへ飛んだ。距離を空ける。

「某としてはさつきとシキのところへ行かねばならぬのでござるが」

「貴様に忠誠心などというものがあるとはおう」

「忠誠とは違うでござるな。これはただの……お主らの言葉でいうところの契約関係で
「イヤネ」

ジユウゾウが両手を広げた。掌を上に向け、何かを始めようとする。

彼が何をしようとしているのかをガープは知っている。その上で受けて立つと決めた。

「奴がおらぬ時は某が指揮をとる。昔からの契約であり、約束でござるよ」

そして、ジユウゾウが動いた。その両手を中心として、幾つもの青白い炎が出現する。

「『鬼火』」

古来より、強大な力を持つ鬼は様々な自然現象を操るとも謳われている。そしてジユウゾウが操るのは人類の文明における根源たる存在、『火』だ。

それは人の文明を進化させてきた力であると同時に、最も恐怖された概念でもある。

故に『鬼』はそれを操るのだ。

彼らは畏れそのものであるが故に。

「征伐」

数にして二十ぐらいか。拳大——それでも彼の拳のサイズを考えれば巨大な炎がガーブを目掛けて放たれる。

地を這うようにして飛来する炎。それを冷静に見極め、ガーブは前に出た。一発も掠ることさえない。

ガーブに当たらなかつた炎が彼の背後に着弾した。爆発はない。しかし、着弾した場所が一気に燃え上がる。

しかし、その炎は持続しない。一瞬で燃やし尽くし、元が無くなれば青い炎は消えてしまう。

「隙ありでござる」

炎のことなど互いに既に思考の外だ。元より当たらないとは思っていた攻撃によってガーブの進行方向を限定していたジュウゾウが、その先で待ち構えている。

だが、その程度のことはガーブも織り込み済みだ。

叩きつけるような踵落としを、ガーブは左腕で受け止めた。鈍い音と共にガーブの体が床に沈む。

だが、彼はそのまま右拳を振り抜いた。打ち上げるような一撃をしかし、ジュウゾウが肘で受ける。

視線の交錯は一瞬だ。ジュウゾウが受け止められた右足を支点に空へと跳ね上がる。そのまま彼は空中を蹴った。『月歩』の技術など、このレベルになれば実戦の中で必要に応じて習得している。

空中を蹴り飛ばし、凄まじい速度で突撃するジュウゾウ。それを迎え撃つガープ。

交錯は一瞬だった。しかし、その瞬間に互いの接触はない。

音が遅れて響く。地面を叩き割ったジュウゾウの一撃を、紙一重でガープは避けた。

「ぬんー」

ジュウゾウが地面を割ったのは左腕だ。彼の左側に回ったガープが人の身を捻り、左腕の裏拳を叩き込む。だがそれを右掌でジュウゾウは受け止めた。

接触から周囲に音が響くまでに間がある。それほどまでに、二人の攻防の密度が高いのだ。

そして、次の一撃も同時だった。

ガープの右拳の振り下ろしと、ジュウゾウの左拳のアッパー。交錯するそれらはぶつかることなく、互いの頭部を捉えた。

衝撃と、轟音。

二人の体が吹き飛び、瓦礫へと叩き込まれる。

「いやあ、楽しいでいやる」

「ほげけ」

共に、ダメージは軽微。

すぐに立ち上がると、互いの敵を見据えて構えをとる。

今の攻防を、どれだけの人間が追うことができるのだろうか。

周囲には誰もいないその戦場で、*“伝説”*は殺し合っている。



——決して誰にも言えないことがある。

“お前は強い海兵になるんじや！”

自身の孫に対し、ガーブはそう言い続けてきた。だが、その言葉を口にしながらも心のどこかでそうならない未来を確信していたのだ。

息子がそうであった。この世界に疑問を抱き、今や革命軍のリーダーになっている。

自分で選んだ道だ。後悔のないように生きれば良いと思う。そもそも言つて聞くよ

うな人間でもない。

誰に似たのかとボヤけば、いつも同期の男に鏡を渡されていた。

——だから、衝撃だったのだ。

“じいちゃん。……海兵になるには、どうしたらいいんだ？”

いつになく真剣な顔でそんなことを言った孫。その姿に、最初は言葉が出なかった。

“海賊になるんじゃないのか？”

思わず、といった調子で口からそんな言葉が出てしまった。言った後にしまったと思ってしまうくらいにあの時の自分は動揺していたのだろう。

だが自身の孫は、見たことがないほどに真剣な顔で言ったのだ。

“海賊は……もう、いいよ”

衝撃だった。忌々しいと思っていた赤髪海賊団の影響を受け、海賊を志していたはずの孫がこんなことを言うとは。

……思い当たることは、一つしかない。

少しだけ、嫉妬した。この子にとって、あの少女はそれほどまでに重く、大切な存在なのか。

自分の言葉を受けても何一つ曲げなかったこの子が、あの子のために。

“確かに、海兵になれと言っておったのはわしじや。……手続きについては、わしが

やろう。海軍は年中人手不足じゃ。特に問題もなからう”

言うのと、孫は首を横に振った。

“おれだけじゃねえんだ、じいちゃん”

“……あの子もか”

やはり、と思つた。

いや、だからこそ、か。

“頼みがあるんだ、じいちゃん”

そして、少年は言う。

自分にこんな真剣な頼み事など、一度もしたことがなかったのに。

“一緒にいたいんだ”

彼の願いは、ただそれだけだった。

——ああ、そうかと。

世界中から“英雄”と呼ばれる男は、その一言で全てを察した。

小さいと、幼いと、守らなければならぬと思つていたこの子は。

いつの間にか、一人の“男”になっていた。

嬉しくもあり、寂しくもあり。

複雑ではあつたが……誇りに思える、ことではあつた。

“わかった。しかしそのためには力が必要じゃ。お前は勿論のこと、あの子もな。……今まで以上に厳しくするが、耐えられるか？”

“うっ……だ、大丈夫だ！”

その言葉に、そうか、と頷いた。

あの時、自分はどんな表情を孫に見せていたのだろうか。

“しかしそれも明日からとしよう。……マキノのところへ行くぞ、ルフイ。今日は好きなものを食べてやろう。あの子も呼ぶといい”

“え、本当かいいちゃん!?”

“わしが嘘をついたことはないじゃろう?……なんじゃその顔は”

全く、と疑わしげな表情をする孫に対して呆れを向けながら。

しかし、この時“英雄”と呼ばれた男は確かに誓ったのだ。

たとえ、何があっても。

この二人だけは、絶対に。

絶対に——幸せに。



ガープの強さはただただシンプルな強さだ。

頑強な肉体、それを支える精神、そして長い人生において培われた経験。

その全てが常人のそれを遥かに凌駕しているからこそ、彼は「英雄」と呼ばれている。

「流石でござるなガープ。余力など望むべきではないでござるか」

「当たり前じゃ。貴様はここでわしが叩き潰す」

繰り返された攻防における天秤は、ガープの方へと傾いていた。僅かずつではあるが、ジユウゾウの方が押されている。

(本当にふぎけた強さでござるな)

ジユウゾウは内心で呆れを零す。彼の食べた悪魔の實の真骨頂は鬼火を操れることなどでは決していない。あれはあくまでオマケのようなものだ。それだけで人を殺害するくらいなら容易い炎であるが、この海兵には通用しない。

動物系ヒトヒトの実幻獣種、モデル「鬼」。

その真骨頂は純然たる肉体の強化にある。ただでさえ誰一人止めることの叶わなかったジユウゾウの暴力を更に高めたのがこの悪魔の實だ。頑強な肉体は更に硬く、凶

悪なまでの筋力は更に強大に。

そこらの海兵であれば拳で風穴を空けることさえ可能なジユウゾウの力と、この海兵は正面から己の肉体のみで渡り合っているのだ。

「シキのところに行つておるのはお主の孫でござろう？　これはますます、加勢にいかねばならんでござるな」

この化け物の孫だ。未だ直接見たことはないが、おそらく相応の力を有している。そうでなければガープがシキのところを孫を一人で行かせないだろう。

「そうじゃな。あやつは強い海兵になりおつた。あやつはシキを倒すじやろう」

ふと、ジユウゾウは違和感を覚えた。今のガープの言葉には、かつての彼から感じたことのある感情とは全く違うものを感じたのだ。

喜びでも、怒りでも、哀しみでも、楽しみでもない。もつと別の『何か』。

——彼は知らない。

人はそれを、〃誇り〃と呼ぶのだということ。

それを誰からも学べなかつた怪物が、知るはずもない。

「……羨ましいでござるなあ」

ガープがここまで言う男。いや、違う。

ここまで言うことができる者がいるという事実が、羨ましかつた。

「『鬼』が何を嘆く」

ガープの言葉は冷たい。ジュウゾウは小さく笑った。

「そうでごござるな。——では鬼らしくいくとすることでござる」

彼の周囲に無数の鬼火が出現した。それらは踊るように宙を舞う。

ようやく本気か、とガープが言う。

それに対し、違うでごござるよ、とジュウゾウは応じた。

「これは『必死』でごござる」

ガープがこの二十年で得たのは今シキと戦っているという孫だろう。羨ましいことだ。そういう存在を手にできたということが。

ジュウゾウにもきつとそういう存在はいるかもしれない。そういう関係を持ったこともある。だが、情を持たたかというとなしだろ。そういう関係を持ったこと

人は己に向けられた感情以外の感情を理解できないのだという。ならば、ジュウゾウに理解できる感情に親子の親愛というものはない。

それがあつたら、『鬼』になどなっていない。

「『鬼火纏』」

周囲の炎がジュウゾウの体に収束していく。

文字通り、青き炎を『鬼』は纏う。

——ただ、一つだけ。

ジユウゾウがかつてガープと殺し合った頃と違い、学んだことがある。

己の足を切り落としてでも、戦う力を求めた少女がいた。

その少女の瞳に宿っていたのは、「必死」という感情。

文字通りに命を賭け金とする在り方。

「お主を殺すともなれば、こうでもせねば届かんでござろう。後のことは……まあ、その時考えるでござるよ」

「なるほど、確かに違うようじゃ」

そして、今度はガープが踏み込んだ。

全身に青い炎を纏う「鬼」の姿はある種幻想的であり、見る者に根源的な恐怖を抱かせる。しかし、「英雄」は畏れない。

放たれたのは右の正拳突き。空を裂くような鋭い音ともに放たれたそれをジユウゾウは左腕で受ける。

直撃の轟音と、ガープの拳が焼ける感触。だが彼は止まらない。そのまま右足の蹴り。それをジユウゾウは左足で受け、更に右足で地面を蹴った。

「『鬼火纏・神楽舞』！」

身を捻り、回転を乗せた右拳を叩き込む。それをガープは左腕で防ぐが、直撃の瞬間、

炎が彼の眼前に広がった。

「く……！」

視界が奪われる。次の瞬間、彼の右脇腹へジュウゾウの蹴りが直撃した。

堪えきれず吹き飛ばされるガープ。瓦礫へと突っ込んでいった彼に対し、ジュウゾウが炎を展開する。

「『鬼火・征伐』！」

追撃の炎。しかしそれを突き破るようにして瓦礫が飛来する。

「『拳骨隕石』！」

ただの腕力で砲弾を投げるガープの得意技だ。……技と言ってもいいのかわからないが、普通に砲撃するよりも遥かに高い速度と威力で突っ込んでくるそれは、砲弾ではなく瓦礫であっても脅威である。

身を屈めてそれを避けるジュウゾウ。その眼前にガープが迫る。瓦礫を投げることで直線コースの障害を排除したのだ。そのまま加速を乗せた拳がジュウゾウに迫る。

——しかし。

「焦ったでござるな」

その拳は、虚しく宙を——否、炎の幻影を貫いている。

「『鬼火・泡沫』」

炎による分身を作る技だ。 “見聞色の覇氣” を使えば——否、目を凝らせば気付けるレベルの分身ではあるが、一瞬の密度があまりにも高い二人の攻防内であればこそ有効に作用する。

吹き飛び、一度ガーブが姿を見失った時点で仕込みは終わっていたのだ。炎の幻影の背後。身を縮めていたジウゾウがガーブの懐に潜り込む。

避けることも、防ぐこともできない。隙だらけだ。

「“鬼火纏・金色夜叉”!!」

拳ではなく、貫手。その絶大なる膂力を込めた炎を纏う一撃が、ガーブを深々と貫いた。

◇◇◇

本当のことを言えば、ルフィに行かせるつもりはなかった。

大海賊にしかつての四皇 “金獅子のシキ”。その強さと厄介さをガーブはよく知っている。故にシキとは自分が戦うつもりだった。

だが、あの時。

あの道化を殴り飛ばし、シキと相對する背中を見て。

——任せよう。

自然と、そう思った。思わせてくれた。

それほどまでに、自らの孫は成長していたのだ。

ならば己のすべきことは、そこに横槍を入れさせないこと。

ルフィは勝つだろう。あまりにも未熟で、手段についても思いは及ばないが。

それでもきつと。

孫は、勝つはずだ。

“一緒にいたいんだ”

あの日、そう願って。

そして、その通りに生きてきた男を。

そのために命を懸け続けてきた男を。

——信じぬ理由が、どこにある？

(一瞬、意識が飛んでおったか)

深々と貫かれた肉体。貫通はしていないようだが、体の内側を焼かれている感覚が

あった。

どんな強者でも内臓までは鍛えられない。そこはいつだって人体の急所だ。

だが、「英雄」は止まらない。

「いい、一撃じゃ」

絞り出すような声と共に、ガープは自身を貫く腕を掴んだ。掴んだ左腕が炎で焼かれる。

自身の体から腕を抜くためか？——否だ。

逃さないために、掴んだのだ。

「ぬ、この」

「ぬうエイ!!」

全力の、何もかもを貫くような拳が放たれた。ジユウゾウの顔を貫いた一撃は、確かに彼の脳天を貫くような衝撃を与えた。

顔を仰け反らせ、そして衝撃によって後退するジユウゾウ。それにより、ガープの体を貫いていた腕も抜けた。

「まだ、まだ……!」

頭が吹き飛んでいてもおかしくない渾身の一撃を受けてなお、ジユウゾウは倒れなかった。身を戻し、ガープを見据える。

青き炎が、その感情を映すかのように燃え上がる。

「『鬼火纏・祭囃子』!!」

それは拳の連打であった。しかもいくつかの拳は炎によって形作られたものであり、それを受け止めれば恐らく身は焼かれ、燃え尽きる。

だが、彼は退かない。

「——!!」

喉元まで迫り上がってきた血を吐きながら、『海軍の英雄』は吠えた。

放たれる拳と炎の全てを、真つ向からガープは受けてたつ。

轟音と、炎を裂く音と。

まるで久遠のように長い時間、双方の間に幾度も衝突が起こった。だが、徐々に。本当に、少しずつ。

「ぬ、う、あ、ああっ!!」

ガープが、押し始める。

ジウウゾウには理解できない。普通の拳と炎の拳。手数ではこちらが上。渾身の一撃こそ貰ったが、それでも体を貫かれ、内部を焼かれた男よりは軽傷だ。

更に、ガープは打ち合えば打ち合うほどにその身が炎に焼かれていく。

なのに。

拳が、「鬼」へと迫る。

「ぬ、あ」

一撃が、ジウウゾウの腹部へと炸裂した。

そう、炸裂。まるで爆発でもしたかのような衝撃が彼を襲い、一瞬、動きを止める。
「が、は」

そしてそうなればもう、その拳を止める手段はない。

それを拳による一撃と呼んでもいいのか。まるで爆弾の炸裂——いや、それ以上か。ジウウゾウの膝が折れる。その顔面に、叩きつけるような一撃が放たれた。

「「拳骨」」

静かな、しかし、絶望の宣告だった。

地面が割れ、砕けるような衝撃。

大地が揺れるのではないかと思えるほどの渾身の一撃を受け、「鬼」が倒れる。何かの言葉を発することさえも許されなかった。

——立っているのは、火傷まみれの「英雄」だけ。

「言ったじやろう」

倒れ伏した「鬼」を見下ろし、彼は言った。

「わしが、お前の「罰」じやと」

シキの居城一階、
“海軍の英雄” ガープ VS “殺人鬼” ジュウゾウ。
勝者——ガープ。



“ほう、拳骨でござるか。それが罰であつたと?”

“私の両親は争いを嫌う人でありましたが。……私が悪さをすると、拳骨を落とされ
ました”

いつかの記憶。とある酒の席での見知らぬ男との会話。

“しかしそうか、拳骨とは”

そういう罰もあるのかと、男は笑った。

“某はそういうった経験がないでござるからなあ”

酒を煽りながら、男は笑う。

笑って、いた。

それは最早、遠い記憶の彼方。

その「鬼」にその「罰」が届くのは……ずっとずっと、先の未来。



ジユウゾウの懐から鍵を取り出したガープは、思わずその場に膝をついた。思った以上にダメーシは深刻だ。少し休まなければならぬだろう。

衰えた、そう思う。かつての己であれば、こんな深手を負うことはなかっただろうに。

「時代に決着を、か。……そうじゃな、頃合いかもしれない」

この戦争の結末によっては、一つの決断をする必要もあるかもしれない。

(何、心配なからう)

この戦争が勝利で終わるのであれば。

きっと、未来は明るい。

「……ん、おお」

気配を感じ、振り返る。そこには、あの子を助け出してくれたCPの男がいた。

「あの子の錠の鍵じゃ」

投げ渡すと、それを男は右手で受け取った。

「……いいので？」

「わしはちと休む。流石に歳じゃ」

ふう、と息を吐くガープ。すまんな、と彼は男——ロブ・ルツチに言葉を紡いだ。

「お前さんも随分疲れておるじゃろうに」

「この程度」

言い切ると、失礼します、という言葉と共にルツチが移動する。

見事なもんじゃ、とガープは小さく笑った。

そして、一息。

かつてならば見えた“未来”も、衰えと共に見れなくなった。だが、いい。

見えなくなったなら、信じれば。

「ルフィ。お前は、強い海兵になった」

なって、くれた。

だから、それだけでいい。

あとはもう、信じるだけで。

逃亡海兵ストロングワールド⑩

第十九話 それぞれの理由

海賊とはロクデナシの無法者。海軍でそれなりの期間を過ごせば、ほとんどの海兵たちがそういう感情を抱くことになる。

当たり前といえば当たり前なのだ。彼らが見るのは死であり、破壊であり、悲劇であり、涙である。それを何度も何度も見せつけられて何も感じないような人間はそもそも海兵になどならないだろう。

この大海賊時代において、数多の悲劇を知りながらその「悪」と戦おうとする彼らはずっと、優しい人間なのだから。

そして、だからこそ背負う「正義」は重い。

「おらアー！」

貫くような蹴り。最短距離を最速で叩くそれを放つ。『蹴撃のドリーマー』の一撃を、スモーカーは自分の体を白煙に変えて避ける。

ドリーマーは、『新世界』で名を上げる海賊だ。正しく訓練を受けたわけではないためか練度が歪であるが、『覇気』を扱える。それ故にその攻防はタイミングが全てだ。

「チツ、煙たい野郎だ！」

「お前らにとつておれたちはそういうもんだろう」

苛立った様子のドリーマーに対し、白煙化したその勢いそのまま背後に回るスモーカー。そのまま彼は左腕でドリーマーの首を背後から掴んだ。

そして間を置かず、押し倒すようにして前へと倒す。鈍い音を立て、顔面からドリーマーが地面に叩きつけられた。すかさず右手の十手を叩き込もうとするが、その前に突き上げるような後ろ蹴りがスモーカーの胸を叩く。

白煙化が遅れた。僅かに後退するスモーカーはしかし、そのまま自身の体の前面かいくつもの白煙で形作った拳を放つ。

「当たるかよー！」

その拳の軌道を見切り、スモーカーの懐へと踏み込むドリーマー。だが、見切ったのは彼だけではない。

スモーカーの拳の隙間を縫うようにして、ヒナが踏み込んだ。そのまま彼女はドリー

マを自身の能力で拘束しようとする。

前面のスモーカー。背後のヒナ。どちらにどう対処するかをドリーマーは思考する暇もない。ただ本能と経験によって彼は体を動かす。

だが、彼の本能も次の行動は想定外だった。

「ヒナ！」

スモーカーの呼びかけと共に、彼の白煙によって彼女の体が空へと押し上げられた。

ドリーマーの蹴りが白煙を裂く。まずはスモーカーと判断した彼は彼に向かって蹴りを放っていたのだ。だがそれは回避された。

何故、という疑問をドリーマーが抱く前に答えがきた。先程までヒナがいた場所、その地面からいくつもの槍が出現したのだ。

「ぐっ!?!」

咄嗟に蹴りでその槍を薙ぎ払うドリーマー。だがその行動は致命的な隙だ。

ヒナを抱え上げた白煙が形を変え、足場を形作る。逆さになった状態のヒナはその足場を蹴り、速度を上げた。

「隙あり」

そして、渾身の蹴りがドリーマーへと叩き込まれた。

吹き飛ばされたドリーマーは受け身を取ると、地面を削りながら止まった。ジロリ

と、反対側にいる男を睨む。

「……何だ」

「いや」

相手——「大地の王」ラウンドの問いに対し、短く応じる。そのまま彼は地面を蹴り、ヒナの方へと突撃した。

それに応じるように、無数の白煙が周囲の覆う。視界を奪うようなそれはしかし、再び地面から出現した槍によって引き裂かれ、乱された。

「く………」

「『徹甲蹴撃』！」

標的を変更。スモーカーに変え、その腹へと必殺の一撃を叩き込んだ。文字通り炸裂するような一撃である。普通なら骨が砕け、動けなくなるはずだ。

だが、眼前の海兵は耐えた。こちらの胸ぐらを掴み返してくる。

「根性あるじゃねえか」

「——生憎だが」

思わず出た言葉に、「白猫」の異名を持つ海兵はその十手をこちらに向けながら応じた。その言葉には血が混じっている。

「そういう男を見てきてるんでない!!」

喉元へ叩き込まれた十手。そのまま渾身の力を込め、スモーカーはドリマーを地面へ叩きつけた。

海楼石の仕込まれた十手により、力を奪われた状態だ。タフさについては破格の力を持つ動物系古代種の能力者でも、この状態で重い一撃を喰らえば芯に響く。

咽せる声と共に意識が揺れるドリマー。そこへ追撃を加えようとしたスモーカーへ、ヒナが声をかける。

「スモーカーくん！」

ヒナの声に振り返る。そこでスモーカーは衝撃の光景を目にした。

「『山津波・穿』」

土石流。それも、先程のようなただの土石流ではない。

まるで剣山の如く無数の槍が前面に押し出されたそれが、こちらへと追ってくる。

「ヒナ、来い！」

「ええ！」

手を伸ばし、彼女が伸ばした手を掴む。

凄まじい土石流が、『大地の王』が作った戦場を包み込んだ。



海賊になった理由など単純だ。その方が好きに生きられる。ただそれだけの。

幼い頃は、海賊とはただの怖い無法者集団だった。誰もが海賊には嫌悪感を持っていて、海軍はそんな悪い奴らを倒す“ヒーロー”だった。

なりたいとは思わなかったが、街の子どもたちの中には憧れる奴は多かった。両親も海軍は自分達を守ってくれる正義の味方だと教えてくれた。

しかし、その全てはあの日に反転する。

“この世の全てをそこに置いてきた!!”

あの処刑台で、“海賊王”が言ったあの言葉で。

平和なんてものは、この世界から消え去った。

涙を見た。

死を見た。

悲劇を見た。

慎ましく暮らしていた全てが、焼き払われた。

——くだらねえ。

両親の仕事を引き継ぎようとして、農園で汗水垂らして働いて。素朴な、どこにでもいるような女と少し良い雰囲気になって。

そんな当たり前の人生を送るのだろうと、そんな風に思っていた。

——くだらねえ。

積み上げたものは、焼き払われた。

泣きながらやめてくれと懇願する両親は、海賊に嘲笑われながら殺された。

——くだらねえ。

だったらもう、好きに生きるしかないじゃないか。

無法者が幸せを掴める世界だ。そういう時代だ。

そんな風にしたのが“海賊王”で。

それを止められなかったのが“世界政府”だ。

——悪くねえ。

奪うことは楽だった。壊すことも楽だった。

汗水垂らして働くよりも、遥かに効率的だ。

これは、確かに。

海賊も増えるはずだ。

——悪くねえ。

無法者になり、追われるようになった。

だがどうやら才能があつたらしい。生き延びてきた。

楽しい日々だつた。

好き勝手……いい言葉じゃねえか。

——良いじゃねえか。

このくだらねえ世界で、正しく生きてどうするつてんだ。



……捨てたものを思い出した。ドリーマーはそんな自分に苛立ちを覚える。

迫り来る土石流をギリギリのところで跳躍することで彼は避けた。数秒遅れていれば串刺しになり、更に押し潰されていただろう。

着地したドリーマーは土石流の中から姿を現した男を睨みつける。

「殺す気かテメエ」

「……そうしろと言ったのはお前だろう」

問いかげに対して静かに返すラウンド。うるせえ、と苛立った様子でドリーマーは応じた。

「合わせられねえなら邪魔するんじゃねえよ。黙って見てろ」

「いいのか？」

「邪魔すんならテメエから殺すぞ」

相当に苛立った様子で言うドリーマー。ラウンドは息を吐いた。

「そこまで言うのであれば、黙っていよう」

言つて、下がつていくラウンド。彼は彼自身が作った土の槍の戦場の隅へと向かつて歩いていく。

チツ、と舌打ちを一つするとドリーマーは前を向いた。そこへ拳が飛来する。

スモーカーの攻撃だ。それを蹴りで迎撃すると、ドリーマーはこちらへ迫る二人の海兵を睨みつける。

「今虫の居所が悪イんだよ海兵ども！ 楽に死ぬると思うなよ！」

「こちらの台詞だ！」

拳に追いついてきたスモーカーが十手を突き出す。それを仰反る形で避けると、そのままドリーマーは両手を地面についた。

頭側が地面に向いた状態で手をつき、足を折りたたむ。そのまま両足を叩き込んだ。

「吹き飛ばべ！」

両足の蹴り。武装色を纏ったそれを、スモーカーは正面から受けて立った。渾身の左拳を合わせてくる。

鈍く、重い音が響いた。左拳一つと両足。しかも蹴り技を主体とする相手となれば、スモーカーの方が不利なのは当たり前だ。

骨が軋み、折れる音が響いた。

小さく、ドリーマーが笑みを浮かべる。

——しかし。

「ヒナー！」

「ええ、禁縛！」

スモーカーの腕が弾かれる直前、ヒナが飛び込んできた。彼女は自身の腕で掬い上げるようにしてドリーマーの両足を拘束する。

直後、スモーカーの左腕が弾かれた。

「小賢しいぞ海兵！」

「禁縛！」

更に、両腕を足払いするような動きの蹴りで拘束された。しかし、だからなんだとドリーマーは思う。少々手間だが、獣型になればそのサイズで強引に破壊できることは実

証済み。

だが、それは止められた。海楼石の仕込まれた十手で胸を突かれる。

「ぐ、テメエ！」

「ヒナ！」

「——人使いの荒い男」

眩きと共に、ヒナがドリーマーの後頭部を蹴り上げた。強制的に上体が起き上がり、それに合わせてスモーカーは十手の切っ先を上へ。

空へと、向ける。

「動物系の古代種ってのは随分とタフと聞く」

折れた左腕を右腕に添えて。拘束された能力者と共に、スモーカーは空へと上がった。

まるでジェット噴射の如く白煙を撒き散らし、空へと上がるスモーカー。ドリーマーはそこでようやく彼の意図を理解する。

「テメエまさか!？」

「——この高さから落ちてでも耐えられるか？」

上空。戦場の誰も見上げる先。

白煙の先に、二人の姿。

「やめろ！　この！」

「無駄だ。あいつの檻はそう簡単に破れやしねえよ」

上空で二人の上下が入れ替わる。変わらず海楼石の効果で力の入らないドリーマーは、遙か上空に上がった自分と海兵を見る。

数ある悪魔の実の能力において、純粹な身体能力の向上という点では動物系が随一だ。その中でも古代種と呼ばれるようなものはただただひたすらに肉体が強力であることで知られている。

ドリーマー自身の才能もあるが、彼自身が生き残ってこれたのはこの部分による影響も大きい。単純に倒れないというのはそれほどまでに脅威なのだ。

「年貢の納め時だ。海賊——蹴撃のドリーマー！」

直後、落下速度が上がった。白煙を撒き散らしながら、まるで流星のように二人が落下していく。

動けない。檻も破れない。打開策がない。

それ以上に、彼の本能が、勘が、経験が告げていた。

これは……「詰み」だ。

「くそつたれ」

諦めの言葉は、思ったよりもすんなりと口に出た。

悪事ばかりを繰り返してきたのだ。この世界に神も悪魔も仏もいやしいとは思っているが、同時に悪人が奇麗な最期を迎えられるとも思っていない。

その内野垂れ死ぬのが関の山。そういう意味では、まだ上等な最後の可能性さえある。

ただ、終わりを覚悟したその時に。

(綺麗な空だ)

見上げた空は、美しかった。

当たり前の空が、ただ。

——最後に見上げたのは、いつだったか。

「『ホワイト・メテオ』!!」

凄まじい轟音が響き、衝撃が周囲に響いた。

白煙と土煙が立ち込める中、一人の男が立ち上がる。

「……なんだ、最後の顔は」

海軍本部准将、『白狐のスモーカー』。

それが、勝者の名であった。

正門前の戦い。

脱落者——“蹴撃のドリーマー”。



「おいおいおい、マジか」

上空から地面へ叩きつけられるという凄まじい方法によって沈黙させられたドリーマーを見て、自身の特製のスーツの中で“墓荒らしのレムナント”は大いに動揺していた。

最強とは言わないが、ドリーマーは強力な海賊だ。容易く遅れをとるような男ではない。だから提案にも乗ったのに。

（くそ、どうすんだよ。あいつが護衛するっていうから脱出の提案も飲んだつてのに）
そもそもレムナントは戦闘を目的にしている人間だ。追放され、犯罪者となるしかなかったからそうしているだけ。それはそれでシキというスポンサーを手に入れたの

で彼自身は普段言葉にするほどの感情を持っていない。

だが、そういう「弱者」の側であるからか。或いは、科学者というリスクについて常に考え、そして実際にそのリスクによつて失敗した経験があるからか。彼は常に逃げ道を確認してから動くようにしている。

どこからかドリーマーが嗅ぎつけてきた脱出艇についてもそうだ。万一の時のことを考え……というか、シキに不要として消される可能性を考えて用意していた。

(おれのフランケン共は究極、おれ以外でも作ろうと思えば作れるからな)

死体を改造したサイボーグ。このメルヴィユにおいてそれを理解できているのは現時点ではレムナントだけであるが、彼のアシスタントとして活動している者たちもいずれば理解するだろう。そうなれば、レムナントの必要性が下がるのは明白だ。

この辺り、実は彼は自己評価が少し低い部分がある。世界最高の頭脳を間近で見たことがあるせいとか、『おれにできるってことはそのうち誰かもやれるだろ』という思考があるのだ。事実それは正しいが、そうなるまでの時間とコスト、そして成果が確実に出るわけではないということを考えてと彼の有用性は非常に高い。

こういう変なところで謙虚というか自己評価が低いところが生き残れた理由の一つでもあるのかもしれない。

(さてどうする? 隙見て逃げるか? いやだがしかし、まだ趨勢は決してない。ここ

でシキの奴が勝つとしたらおれは殺される。あいつは裏切りを許さない)

人間、命の危機ともなると思考がよく回るようになる。特にこの小市民はそれが顕著だ。自分が損しない方向への思考速度については他の追隨を許さない。

(あいつはおつかない。スポンサーになつてくれてる間は最高の後ろ盾だが、敵に回せば死ぬ。痛いのは嫌だ。多分あいつは楽には死なせてくれない)

勢いとノリと雰囲気が一割、高額賞金首であるために「七宝剣」へと加えられたレムナントはだからこそその恐ろしさを知っている。大体、シキの近くにはあの「殺人鬼」までいるのだ。おそらく裏切り——敵前逃亡がバレたら即殺される。

レムナントは見たのだ。酔った勢いでイルに手を出そうとした海賊が、シキの命令を受けたジュウゾウの手によって文字通り頭を握り潰された姿を。あんな目に遭うのはごめんだ。

(となると、現状維持が最適解か。うん。どっちに転んでも即動けるようにしよう)

常に天秤は水平に。それがレムナントにとつての生き残るための知恵だった。

思考がまとまり、改めて動こうとするレムナント。その声が響いたのはその直後だった。

「——狼狽えるな」

決して大声ではないというのに、その声は戦場の全てへと到達した。

銃声も砲撃音も剣戟の音も。何もかもを無視して届く声。

「私がいる」

直後、大地が動く。

ドリーマーを討つた二人目掛けて、山津波が襲い掛かった。

「——はっは、そうだ！ あいつがいるじゃねえか！」

たった一人で偉大なる航路を渡り歩き、一度は“七武海”加入の誘いすらもあつたほどの怪物。国一つを治め、沈める力を持つとされるバケモノ。

あの男がいるのだ。ならばまだ天秤を傾けるのは早い。

「野郎共！ やつちまえ！」

号令をかける。周囲が頑張ってくれば負担が減る。そういう思考だ。

勢いに乗じて前が出る。その瞬間だった。

「——なるほど、キミが指揮官か」

ふと、眼前から声が聞こえた。見れば、そこにいるのはサングラスをかけた坊主頭の海兵だ。

見覚えのない姿である。この戦場における有力な海兵は大体把握していたはずだ。

つまり、大した地位のない男ということだろう。

「なんだテメエ!？」

手にした巨大な剣を振り下ろす。巨人族の筋力に加え、サイボーグ化によって更に強化された一撃は巨大な獣さえも一撃で粉碎する。人間などともに食らえば跡形も残らない。

対し、その海兵は何か小さな棒のような物を取り出した。

(竹竿?)

それは何の変哲もない竹竿だった。まさかと思うが、そんなもので受けようというのか。

こいつ馬鹿だな。小さな笑みがレムナントの口元に浮かぶ。

「……………は？」

だが、振り下ろした大剣はその竹竿によって防がれた。更にその海兵が軽く振るった竹竿により、容易くこちらの大剣が横へと弾かれる。

意味がわからない。何が起こった。状況が整理できないレムナントの視界の中で、その海兵がその竹竿を回転させる。そして。

「『鬼・竹』!!」

凄まじい衝撃が、レムナントを貫いた。

サイボーグ化したことにより、素体となった巨人の重量から換算してこのスーツは数倍の重量となっている。更に乗り込むレムナントが自分自身を守るために分厚い装甲を纏っているのだ。

だというのにその正面の鎧を砕かれ、更に内部に衝撃を通された。その巨体が吹き飛び、周囲の海賊たちは勿論、海兵たちまでもが驚愕の表情を浮かべる。

「!?!」

痛みにより、悲鳴さえも上げられなかった。レムナントの名を呼びながら周囲の海賊たちが駆け寄ってくる。

「ぐおお……っ！ 何だあいつは……!?!」

痛みを堪えながら動く。涙が溢れた。痛いのが嫌だから装甲については徹底的に強化してあるというのに、たった一撃で超えてくるとは。

だが、あの姿に見覚えがない。何者だよ、と思う彼のスーツが海兵たちの声を捉える。

「ヴェルゴ中将……!?! どうやってここへ」

「とある男に送ってもらった。気は進まなかったが」

ヴェルゴ、という名が聞こえた。何となく聞き覚えがあるような、と思うレムナントの近くにいた海賊が、まさか、と声を上げる。

「G-5 支部基地長のヴェルゴか……!?! “新世界” の海兵が何でこんなところにいるん

だよ！」

偉大なる航路の前半と後半ではその危険度も海賊のレベルも文字通り桁が違う。特に後半の海である。『新世界』には『四皇』が君臨している。半端な海兵では即座に命を落とす。

そんな中で、ヴェルゴという海兵は一部の海賊の間では名の通った男である。『どちらが海賊かわからない』とまで言われるG-5支部において唯一と言つてもいいほどの紳士であり、誠実な男として知られている。更に戦いともなればその力は圧倒的。その実力と人柄によつて市民からの信頼も厚い男だ。

「よくわからねえが……強えつてことか」

「頑丈だな」

スーツで起き上がるレムナントに対し、ヴェルゴが言う。痛みはあるが、逃げられない。まだ天秤は傾いていない。

ならば粘らなければ。天秤が傾くその瞬間までは。

「お手柔らかに頼むぜ、海兵さんよ」

「それは保証できない」

何故ならば、とヴェルゴが告げる。

「——キミ一人に時間を割けるだけの余裕がない」

直後、再び竹竿が唸った。

轟音が響く。だが、今度はその巨人は倒れなかった。今度は咄嗟に両腕をクロスさせてガードしたのだ。ヴェルゴの一撃に戦闘が本職ではないレムナントがついていくことができたのは、その生存本能がなせる技か。

だが、凄まじい衝撃によりその左腕の装甲が割れた。何重にもなっている装甲全てではないが、それでも凄まじい威力だ。

「フランケン部隊！」

怒鳴るようにしてレムナントが指示を出す。直後、周囲の鎧兵たちがヴェルゴへと殺到した。レムナントは後方へと下がる。

周囲の鎧兵とレムナントを一瞥すると、ヴェルゴは周囲の鎧兵たちの排除を優先するべきと判断。至近に近付いてきた鎧兵の頭部へと「武装色の覇気」で強化した竹竿を叩きつける。

鈍い音が響き、何かが宙を舞った。——首だ。

「何？」

流石にヴェルゴもそれには驚いた。彼の竹竿による一撃は強力だが、首が飛ぶほどの威力では殴ったつもりがなかったのだろう。

宙を舞う兜を着けた首。だが、不思議と出血はなかった。代わりに首がなくなっただけ

ずの体が動き、ヴェルゴを掴む。

「何を」

「吹き飛ばせ!!」

首のなくなつた状態でヴェルゴを掴んだ鎧兵。その光景に驚愕を覚えたその瞬間、その鎧兵が爆ぜた。

一体だけではない。彼の周囲に迫っていた鎧兵たちも一斉に爆発する。

凄まじい爆発だった。中心にいたヴェルゴは勿論のこと、周囲の海兵や本来味方であるはずの海賊までもが巻き込まれる。

「レムナントさん! どういうつもりだ!?!」

仲間を巻き込まれた海賊が彼に向かって吠える。黙れ、とレムナントが一括した。

「じゃあテメエらがあの海兵どうにかできるのかよ!?!」

「だがそれは……!?!」

「あんなバケモンとは聞いてないぞクソが!」

悪態をつくレムナント。その彼の視界、センサーがその姿を捉えた。

「驚いた」

爆発の中心。そこには爆発の衝撃でその服こそ焼き焦がしながらも、健在な状態のヴェルゴが立っていた。

「……嘘だろ」

「何をしやがった」

思わず周囲の海賊たちから声が漏れる。倒れている海兵や海賊たちは余波によるものだ。余波でそれだというのに、中心の男が健在というのはどういふことだ。

「見ろよ。バケモンだろうが」

舌打ちを溢すレムナント。彼の視線の先でヴェルゴが爆発によつて破れた服を脱ぎ捨てた。

思わず息を呑むほどに鍛え上げられた肉体がそこにあつた。彼は竹竿を構えると、さて、と言葉を紡ぐ。

「あまり時間はかけられないのだが」

「クソが！ やつてやろうじゃねえか！」

正門前に新たに現れた戦力と、*“七宝剣”*が衝突する。

戦争は、佳境へ。



正門前の戦い。そこを眺めることのできる背の高い木の天辺に、一人の海賊がいる。

「フツフツフツ……ヴェルゴの奴は随分はしやいでいるな」

異例尽くしの海賊とも呼ばれる「七武海」が一角であるドフラミンゴ。彼は自身が連れてきた男の戦鬪を眺めながらただ笑う。

「戦争つてのは最前線で見物してこそだ。だがまあ、やはり一番重要なのはあそこか？」
ドフラミンゴの視線の先。遙か上空には、二人の男が向かい合っている。

一人は、「伝説」。彼の「海賊王」と同じ時代を生きた大海賊。

一人は、「新時代の英雄」。その若さからは想像できないほどの事件を引き起こす海兵。

どちらが倒れようと、明日の世界は荒れるだろう。

「精々楽しませてくれよ」

笑い声が響き渡る。

戦争は、佳境へ。

逃亡海兵ストロングワールド⑰

第二十話 背負った想い

激しい戦闘の音が響く。

シキの居城からの脱出を目指すウタたちははしかし、激しい攻撃に晒されていた。先程の少女、イルとの戦闘から時を置かず追手が現れ始めたのだ。

「鉄塊！」

殿を務めるブルーノが自身の体を硬化させ、後方から迫る銃弾を受け止める。だがその「鉄塊」には揺らぎがあった。僅かに受け切れず、血が流れる。

「ブルーノさん！」

ウタが思わず声を上げる。だがCP9の「六式使い」は倒れない。

「ナメるな。——嵐脚！」

振るわれた足から二つの斬撃が飛んだ。それは廊下の左右の壁を割り、瓦礫を落と

す。それにより、少しの時間稼ぎができた。

「こつちへ！」

先頭に行くオリンが銃を構えながら指示を出す。シキの居城は広い。真つ直ぐに抜ければいいが、こうも次から次へと追撃をされてはどうしても時間がかかってしまう。

イルを倒した後から相手側に指揮官でも現れたのか、出会い頭の戦いばかりだったのが待ち伏せや追撃を受けるようになった。こちら側は全員が既に傷を負っている。どうしてもその移動は遅くなっていた。

「大丈夫ですか？」

「心配の必要はない。我々の任務は『歌姫』の確保だ」

ウタの部下の海兵の呼びかけに対し、ブルーノがそう応じる。この場の者たちの中で最も傷が深いはずなのに、誰よりも体を張っている彼はウタの方へ視線を向ける。

「いいか『歌姫』。シキは二十年近い時間をかけて今回の計画を進めている。その時点でありとあらゆる可能性を考慮したはずだ。今の海軍の戦力、世界情勢、自身の勢力、その全てを。……おそらく、お前を手中にしようとしたことは計画外のことだ」

ウタが海兵になつてからは数年の時間が経っているが、彼女とルフィが本格的に名を挙げたのはここ一年程だ。更に言えば、世界中に名が轟いたアラバスタ事件におけるク

ロコダイル討伐からはそう時は経っていない。

広報役としての「歌姫」ならばともかく、対海賊としての「歌姫」の名について知られ始めたのは最近なのだ。

「計画外？」

「そうだ。わざわざ軍艦で移動中、万全の状態のお前たちを襲撃して自分の存在を表に出すリスクまで負ってシキはお前を攫った。それはつまり、それだけのリスクを犯すだけの理由があつたということだ」

銃声が響く。オリンが両手にそれぞれ持った短銃の音だ。待ち構えていた海賊たちの武器をそれで弾き、そこに彼女の部下たちが銃撃を間髪入れずに叩き込む。

「「斬時雨」！」

そして、そこへ走り込んだたしぎが海賊たちを斬り伏せた。彼女は息を切らしながらこちらを振り返る。

「つまり、ウタ准将にシキはそれだけの価値を見出しているということですか？」

「そういうことだ。世界政府としても「歌姫」の力についてはそれだけの価値を見出している。そうでなければ事情を知る「麦わらのルフィ」と同じ部隊になどしないだろう。あの男はあの男で本来部隊を別に率いるところを二人の指揮官という特殊な状態にしている」

それについてはウタも理解していたことだ。通常、准将と大佐が同じ部隊を率いることなど大規模な作戦でもなければあり得ない。既に二人が合わせて知名度を上げていたこともあるが、それ以外に自分のウタウタの実の能力が関係していることはわかっていたのだ。

海軍本部大佐「麦わらのルフィ」は、ウタを守るために彼女と同じ部隊を率いている。

(私は、本当にダメだ)

夢を諦めさせ、側にいて欲しいと我儘を言つて。そして今、自身を守るために同じ部隊にいて。

それを……喜んでしまっている。

これほどまでに彼を縛り付けているのに。浅ましいと、そう思ってしまう。

「いやでも、ルフィ大佐に部隊率いるとかできんのかな?」

「率いるのはできるだろ。あの人の部隊に入れって言われたら喜ぶ奴多いし。今もううちの部隊って志願者馬鹿みたいに多いんだろ?」

「そりゃ准将と大佐の下だぞ? 異動しろって言われたらおれはブチギレて元帥のところに殴り込むね」

そんなウタの胸中など知らず、彼女の部下三人は好き勝手に言い始める。きつちりと

前を行くオリンとたしぎの援護をしている辺りは流石に優秀だ。

「でも大佐の下だと戦闘時は誰も指示をしてくれないわよ?」

先頭を走るオリンが苦笑と共に言う。ああ、とウタも含めて全員が納得した。

「戦闘が始まったらまず突っ込むからなあの人」

「指揮官が囧とかいうわけがわからねえことになるよな毎回」

「准将がため息吐いたら戦闘開始みたいなどこある」

うんうんと頷く部下たち。ウタも小さく笑った。作戦を説明しても——というかほとんど聞くことさえないが——基本勝手に突っ込んでいく。その姿にウタがため息を吐き、そして彼女が指揮を執るのだ。それが彼女の部隊の日常だった。

「……まあ、お前たちの部隊の事情はわからんが」

ブルーノが流れを変えるように言葉を紡ぐ。いずれにせよ、と彼は言葉を続けた。

「『歌姫』、お前の確保は絶対だ。——そのためには絶対に立ち止まるな。この場の誰がどうなってもだ」

その言葉に反射的に反論しようとするが、しかし、ウタはギリギリで踏み止まった。感情だけで言葉を吐けるような立場でないことを彼女も理解している。

手にかけられた錠を見る。これさえなければ、と唇を噛み締めた。

「ブルーノさん!」

そこに、オリンの声が飛んだ。背後、複数の海賊たちがこちらへ銃を向けている。「おれの後ろに回れ！」

振り返り、両手を広げるブルーノ。だが、直後。

「——ガフツ」

大きな血の塊を吐き、彼が膝を折った。当然といえば当然だ。急所こそ外したが体の中心を刀が貫通した傷を始め、幾つもの深手を負っている。更にイルとの戦闘の後も彼は殿としてその体を張り続けていた。限界が来たのだ。

「ブルーノさん！」

「くそ！ 大丈夫か!？」

「く……」

周囲の声に対しても受け答えができない。それでも彼は力を込めて「鉄塊」を発動しようとする。

そして、海賊たちの引き金が絞られる瞬間。

「『飛ぶ指銃・撥』」

声と共に、無数の斬撃が飛来した。背後から貫かれ、海賊たちが倒れ伏す。

「……ルツチ……」

「不覚を取ったか、ブルーノ」

その海賊たちの背後から現れたのは、肩に鳩を乗せた男だった。

——世界政府の鬼札、〃殺戮兵器〃 ロブ・ルツチ。

「……すまない……」

「いや十分だ。よくやった。——これを」

ルツチが何か小さなものをこちらへと投げってくる。それを慌ててウタの近くにいた海兵が受け取った。

「鍵？」

「〃歌姫〃の錠の鍵だ」

「マジか!？」

驚きの声を上げる海兵たち。思わずウタがルツチを見ると、彼は息を吐いた。

「ガープ中將が手に入れた鍵だ」

「准將、錠を外します！」

慌てて錠を外そうとする部下たちに小さく頭を下げ、錠のかけられた両手を差し出すウタ。しかし、視線はルツチを向いている。

「ガープさんは無事なの？」

「『疲れた』だそうだ。……こちらが心配するような男ではないだろう」

その言葉に、ほつとウタは息を吐いた。ルツチの言う通り心配することが失礼になるような人物であるが、それでもウタにとっては幼い頃から知っている身内だ。……思うところは色々あるが。ジャングルとか風船とか谷とか。

そんなことを話しているうちに、音を立てて錠が外れた。直後、いきなり軽くなった体がふらつく。

「准将！」

近くに来ていたオリンが支えてくれた。ありがとう、と言葉を返す。

「これでようやく、私も戦える」

拳を握る。周囲の者たちが傷つく中、足手纏いになり続けていたのだ。どうしても思う部分はある。

だが、そんなウタに制止をかけたのはルツチだ。

「悪いが自由になった以上すぐにでも離脱してもらおう。誰がどうなろうとお前を外の海軍と合流させることが最優先だ」

ルツチと視線がぶつかる。何か、と問う彼に対し、ウタは告げた。

「私は外の海軍とは合流しない」

ピクリと、ルツチの額の血管が動いた。オリンも声を上げる。

「どういうことですか？ 早急に合流し、准将の力を」

「その方法の問題なの」

彼女に対してそう返すと、いい、とウタはこの場の者たち全員に対して言葉を紡ぐ。
「今外の海軍と合流しても私の能力が届く範囲は僅かだけ。それじゃこの戦争は終わらない」

周囲に視線を巡らせながらウタは言った。その中でこの場で最も説得が難しい男であろうルッチを改めて見据える。その視線に気付いたのだろう。ルッチが口を開いた。

「ならばどうする？」

「この城の司令室を制圧する」

えっ、という声が部下たちから漏れた。ルッチの眉もピクリと反応する。

「シキはここであの怪物たちの実験をしてたんでしょ？……確認はないけど、司令室にはそれを管理するための設備が整っているはず」

「それを利用するということか？」

「そのつもり」

ルッチの問いに対してそう応じる。確認はないと言ったがほとんど確信に近いものはあった。住民の監視のためにあるとあの巨大な電伝虫についてあの村の者たちは認識していたが、おそらくそれはついでだ。その本来の目的は実験を施した怪物たちの監

視と管理がその主目的であるはず。

「私の能力は私が歌を『聴かせる』ことさえできれば、相手を問答無用で眠らせることができる。司令室の設備を使ってマリソフオードとも繋ぐことができれば、島とマリソフオード全てに同時に歌を届かせることができるはず」

そうなればこの戦争も決着だ。長時間は持たないが、動きを止めてしまえば後はどうとでもなる。

「……確かにそれができれば最善だが」

ルツチが言いつつ周囲の者たちを見た。皆傷だらけで満身創痍だ。司令室ともなれば相応の戦力があるはず。この戦力で突破できるのか。

それを理解したのだろう。ウタはルツチから視線を外すと、ごめんなさい、と周囲に言葉を紡ぐ。

「命を懸けて貰うことになるかもしれない」

いや、かもしれないなどということはない。この少数で敵の本拠を制圧するというのだ。容易くいくはずもないのだから。

そんなウタの言葉に、最初に頷いたのはオリンだ。

「今更でしよう?」

他の部下たちもそうだな、と頷いた。

「命懸けなんていつものことですよ」

「大佐がいらないのはちよつと不安だけど」

「まあでも、なんとかなるでしょ。いつだってそうだった」

散々無茶に付き合わせてきた部下たちは、何を今更というように肯定の返事を返してきた。その姿に苦笑を返す。

「私も付き合います」

たしぎも頷きを返してきた。ありがとう、と彼女に告げると、ゆつくりとしゃがみ込んでいた男が立ち上がる。その人物の名をウタが呼ぶ。

「ブルーノさん」

「……おれも付き合おう。おそらくそれが最善だ」

その姿を見て、ルツチが息を吐いた。

「……そういえば、お前は店で……いや」

小声でルツチが何かを呟いていたが、それは届かなかつた。彼は一度大きな息を吐くと、確認だ、と言葉を紡ぐ。

「お前の歌は怪物共にも届くのか？」

「届く」

即答した。

「ううん、届かせる」

それが、彼女の信念であり「正義」なのだ。

あの男の子が愛し続けてくれているこの歌を、ここにいる「歌姫」は絶対に疑わない。

「相手は獣だ」

「関係ない。……音楽にそういう垣根はないの。性別も、年齢も、人種も、文化も、人であつてもなくても。私の歌は届く。届けてみせる」

だから、と彼女は言った。

「この戦争は、私たちが終わらせる」

その『たち』には多くの意味が含まれていた。無論、彼女と向かい合っている男も含まれている。この場の全員も含まれている。

この戦争で明日の「平和」を願って戦う『全て』が含まれているのだ。そして無論、あの麦わら帽子の少年も。

「——最後の質問だ」

ルツチがウタを真つ直ぐに見据えた。殺気さえも纏った視線に、反射的にウタの周囲の者たちが身構える。

だが、それを正面から受け止める「歌姫」は微動だにしない。

「お前の背負う『正義』はなんだ？」

今のウタはシキの用意した黒いドレスを着ており、正義のコートを着ていない。だがそれはあくまで視覚的な問題だ。彼女の背に『正義』は宿っている。

彼女は一度目を伏せた。そして、信念と共に告げる。

「——『平和を届ける正義』」

歌声と共に。

彼女は、この世界に平和を届けるのだ。

それこそが彼女が背負う『正義』の形。

「……………」

ルッチはしばらくウタを正面から見据えていた。そして、一度息を吐く。

「承知した。確かにその方が効率的だ」

そんな彼の言葉に対し、ありがとう、とウタが礼を言った。ルッチはウタに背を向けながら言葉を紡ぐ。

「礼など必要ない。…………この戦争を終わらせたいのは我々も同じだ」

そして、『歌姫』たちは動き出す。

この戦争を終わらせるために。



獣たちの咆哮と、空から降り注ぐ隕石。銃声に砲撃音、そして剣戟の音。悲鳴、怒号、そして悲嘆と歓喜。

まるで地獄だな、とこの状況を作り出した大海賊——“金獅子のシキ”は他人事のよ
うに思った。

「“ゴムゴムのオ”!!」

「骨がある奴だ」

鳥の背中から高速で移動した海兵の声を聞き、小さく呟く。高速移動ということはあるの巨大化ではない——そう思ったシキの視界に、その光景が映る。

「“巨人の銃”！」

「何?」

巨大化した腕がシキに迫り来る。シキは即座に飛び上がると、それをギリギリで避け

た。

「くそっ!」

「クオツ……!」

外したことに悪態をつく海兵——「麦わらのルフィ」に視線を向ける。墜落するよ
うに落下する彼を、彼がビリーと呼ぶ鳥が背中で受け止めた。

ビリーの方も続く戦闘で大分体力の限界が近いらしく、息を切らしている。その背中
に着地したルフィはそんなビリーを労わるように頭を撫でた。

「もうちよつとなんだけどな」

眩くルフィ。その姿を見てシキは思う。

(さっきまで同時にはできてなかったよなア……?)

これだけ見せられると、あの海兵がしていることの原理についても理解が及ぶ。麦
わらのルフィ”については素性も含めて色々調べさせた。

ガープの孫、つまりあの革命家ドラゴンの実子という事実。ゴムゴムの実を食べた悪
魔の実の能力者であり、先のアラバスタ事件でクロコダイルを討伐した「新時代の英雄
”。

”クロコダイルを海軍本部の中佐が? んなわけねエだろう。どこのどいつだ?”

”それがどうもあのガープの孫と”

“……ほう、あの野郎のか”

あの報道を聞いた時、それで納得した。あの“英雄”の孫というのなら、相応の才覚があつても違和感はない。

そしてそれはこの戦いで確信に変わった。この男の才能はかつてのガープのそれを思わせる。

ギア2と名付けられた技——自分の体がゴムであるということを利用して、ポンプのような機能を付与して血流の速度を上げる。それにより身体機能の限界を底上げしており、並の人間ならその速度を目で追うことさえも不可能なほどの戦闘能力を得る。

ギア3と名付けられた技——どういう原理か空気を吹き込むことで自分の体を巨大化させ、更に硬度まで獲得している。その代わり、巨大化した弊害か速度がかなり落ちる。

バランスの悪い戦闘能力だな、とシキは思っていた。その両方が同時に使えれば一気に戦闘能力が上がるのに、とも。

だがそのバランスの悪さを、この男は徐々に改善し始めている。

(大したセンスだ)

この軟弱な時代に生きる海兵にしては。

「おい、ガープの孫。——オメエ、おれの下につかねえか？」

そんなことを思ったからかもしれない。つい、そんな言葉が口から出てきた。

言った後から、案外悪くないかもしれないと思う。あのガープの孫だ。鍛えればどれだけ強くなるのか。

「ふざけんな！」

だが、やはりというべきか即座にそう返答が返ってきた。シキは笑う。

「ジハハハハ、そう言うなよガープの孫。ベイビーちゃんと一緒に来ればいい。おれの支配する海で相応の地位を与えてやるぞ？」

「おれは海兵だ！」

「なるほど、海兵か。だがマリンスフォードは滅びるぞ。おれが滅ぼす。そして東の海を滅ぼし、世界の海を支配する」

両手を広げ、シキが笑う。

「その時にはもう海兵なんて肩書きに意味はねえ。それでもか？」

「何が支配だ！ 海軍は負けねえ！ 東の海にも行かせねえ！」

「——ああ、そうか。ガープの孫ってことはオメエも東の海の出か。なんというか、数奇な運命だなア。ロジャーといい、ガープといい。おれの前にはいつもあの海の出の奴が立ち塞がってきやがる」

嫌な話だぜ、と肩を竦めるシキ。そしてふと、ルフィの姿があつた男に重なつた。

あの、どこまでも“自由”であり続けた男と。

“おれは支配には興味ねえんだよ!!”

幾度となく殺し合い、しかし、終ぞ互いの信念が交わることのなかった男。

後に“海賊王”となり、そして大海賊時代などという爆弾を残して逝った男。

——ロジャーよ。これはおれにとってはお前との決闘なんだ。

シキには誰にも明かしていないことが一つある。“支配”こそが彼の信念だ。だがそれはロジャーが死に、大海賊時代が始まった時点で捨て去つてもいいものでもあった。最早その世界に、彼が“支配”したかった——勝ちたかった男はいないのだから。

しかし、全てを捨てることもできなかつた。だからこそ計画を再び始めたのだ。一度は潰えた計画を、もう一度。

「ガープの孫。海賊つてのは海の支配者だ。この海全てを“支配”する存在こそが——

“海賊王”だ」

「“海賊王”……?」

史上唯一“海賊王”の称号を得た男もその最期は処刑だった。故にその男を超えるには、世界政府そのものを支配する他ない。

故にこそその戦争だ。奴の“自由”では勝てなかつた世界政府を“支配”することで、あの男に勝利する。

「おれは海兵だからな。海賊つてのがどういふものかはよく知らねえ」

海軍の「新時代の英雄」が、そう言葉を紡ぐ。

「ろくでもねえ奴をたくさん見てきた。どうしようもねえ奴も大勢いた。けどな、おれが知ってる一番偉大な海賊は……「自由」だった」

「どこかの馬鹿のようなことを言うなア、グループの孫。だが、この海で最も「自由」だった男はオメエら世界政府に処刑された。その代わりに大海賊時代なんてふざけたもんを残していきやがったが」

見下ろす側のシキと、見上げる側のルフィ。その光景が交わらない二つの考えを表しているようにも思えた。

「しかし妙な話だ。海兵のオメエが「自由」を語るなんざ。そもそもオメエはどうして海兵なんてやってるんだ？ あのベイビーちゃん親は「赤髪」だろう？ その幼馴染だつてんだから海賊になるもんだと思うが」

「……どこでそれを」

僅かにルフィが動揺した。向かい合ってから初めての表情に、シキも笑みを浮かべる。

「ジハハハハ！ ただの「情報」だ。海軍は隠してるみてエだが人の口に戸は建てられねえもんさ。一度表に出ちまった以上、どこからは絶対に漏れる」

そこまで言つたところでシキは気付いた。彼が言う「自由」な海賊とは、つまり。

「つてことは、オメエの言う偉大な海賊つてのはあの『赤髪』の小僧か。なるほど、目の付け所は悪くねエ。あいつはあの時代の海を知る海賊だ」

何せロジャーの船で見習いをしてきた男だ。かつての海についてはよく知っているだろう。今や「四皇」とまで呼ばれていることも勿論知っている。シキとしてはあの小僧が偉くなったもんだと思うと同時に、あのロジャーのところに行ったから当たり前だとも思っているが。

「だが、ますますわからねエな。あの小僧を知ってる上に娘と幼馴染つてんならさつきも言つたように海賊になりそうなもんだが。……まさか、その背中の『正義』が理由なんて言うんじゃないやねエだろうな？」

表情が険しくなったの自分でもわかつた。正直、シキの見立てではルフィは海軍側——というより、秩序側の人間ではないように思える。

正直ガープも大概だと思うがアレはアレで様々なものを呑み込んで秩序側にいる男だ。だからこそ余計にわからない。この若さでどんな「正義」を背負うのか。

「おれの理由はそんなに立派なもんじゃねえよ」

「ほう」

「ただそれをお前に言う理由もねえ」

それもそうだ、とシキは肩を竦めた。そしてまあいい、と彼は言う。

「おれの下につきたくなったら言え、ガープの孫。ベイビーちゃんも含めて歓迎してやるぜ？」

「誰が！」

「ジハハハハ！ 威勢がいいのは嫌いじゃねえ！」

笑う。状況は未だシキの想定内だ。最悪、『最後の切り札』も残っている。

メルヴィユの上空で、「金獅子」が笑う。世界を支配しようとする海賊。それと向かい合うのは、未だ齡17の若き海兵だ。

大海賊「金獅子のシキ」には、誰にも言っていない秘密がある。

それは、理由。

海賊は海の支配者という信念を実行に移した理由。

かの「海賊王」ゴール・D・ロジャーが始めた大海賊時代。

その海を支配することで、奴の「自由」に「支配」で勝利する。

そんな身勝手であり、未練。

この本心だけは、彼は誰にも告げていない。

——だが、彼は気付いていない。

己の内側だけに秘めた理由でこれほどの戦争を計画し、それを引き起こした身勝手

さ。それは悪辣ではあるが、それを人は“自由”と呼ぶのではないだろうか。何も“自由”とは、善なることだけではないのだから。



世界政府の“殺戮兵器” ロブ・ルツチ。その戦闘能力は噂以上であった。

司令室の場所をCP9である二人はきつちりと調査済であったらしい。先導すると言つたルツチが現れる海賊たちを次々と瞬殺していく。援護する暇さえない。

「……強い」

思わずウタも呟いてしまう。何よりも動きに無駄がないのだ。“六式”をここまで完璧に、そして見事に使いこなしている者を彼女は知らない。

どうしても“六式”はその性質上得意不得意が出てしまう。特に“鉄塊”と“紙絵”などは顕著だ。両方の性質が逆方向であるため、片方は上手くできるがもう片方は……という者は多い。ちなみにウタは“紙絵”が得意で“鉄塊”は苦手である。ルフィはルフィだ。

だが、ロブ・ルツチにそういったものはないように思える。いや本当はあるのかもしれないが、そんなものは一切感じさせない練度だ。

「どけ。——『嵐脚』」

振り抜かれたその一撃で、待ち構えていた海賊たちが薙ぎ払われた。ブルーノも十二分に超人と呼べるだけの実力を有していたが、ルツチの場合はその更に数段上の次元の実力を有している。

ただ、とウタは思った。彼女の優秀な観察眼。ライブを始めとして人を観察する機会に多く恵まれた彼女は、普通の人間よりも他者の状態や調子に対して鋭敏な観察眼を有している。

その観察眼が伝えてくるのだ。ロブ・ルツチは体を庇いながら動いている。最小限の動きも洗練されているということもあるが彼自身の状態もあつて負担をかけないようにしているのだ。

(やっぱりみんなどこか無理してる)

この案を出したのは自分とはいえ、やはりリスクは大きいと改めてウタは思う。ウタ自身も腹を刀で貫かれた傷は応急処置しかしていないし、いつ開くかもわからない。

だが、だからこそ前に進むのだ。ルフィだって頑張っている。ここで自分が引くことはできない。

「止まれ。……あれだ」

廊下の影からルツチが示す方向を見る。すると、二名の海賊が巨大な扉の前に立っていた。思わず眉を顰める。

「二人だけ？」

「お前たちが乗り込んだ時、奴らは盃を交わすために主要な人間をあの場合に集めていた。その後すぐにこの状況だ。シキがああして『麦わら』と相対している以上、あの場合から司令室に戻った人間はいない可能性がある」

ウタの疑問に答えたのはブルーノだ。なるほど、とオリンが頷く。

「そうであれば中の制圧も簡単でしょうか？」

「事前の調査では元々司令室には非戦闘員が多いようだったが……この状況だ。おそろしく最低限の守りはある」

「最低限で済むのであれば何の問題もないが。今のところ一人だけ動向が把握できない幹部がいる」

ブルーノの言葉を引き継いだルツチが言う。一人とは、とオリンが問うとルツチが頷いた。

「『毒蛇のカガシャ』だ」

「……カガシャ」

その名を聞き、思わずウタも呟く。あの日、シキの襲撃を受けた時に現れた女海賊だ。ウタの能力を考えると天敵ともいえる相手である。

「シキは『七宝剣』という高額賞金首による幹部集団を組織している。その中でもカガシヤは古参だ。ただ、奴らは少々特殊な海賊でもある」

言葉を引き継ぐブルーノ。彼は更に言葉を続ける。

「元々は非加盟国に長く存在し続けてきた暗殺者集団が母体だ。様々な事情により海に出ることになったようだが、長く蓄積されてきた暗殺者としての技術は決して軽視できない」

「この状況で暗殺者というのはゾツとしませんね」

たしぎが言う。ただでさえ少数、そして敵の本拠地その中核。そんな場所にそんな暗殺者たちがいるというのか。

「中の状況もここからでは流石に読めん。こちらは少数だ。電撃戦しかないが」

「――17人」

ウタが呟くように告げた。右手で軽く頭を押さえながら、彼女は言葉を続ける。

「外の二人と合わせて19人。強い気配は感じない」

「……わかるのか？」

ルツチの問いかけに対して頷きを返す。あの壁の向こうにいる気配を確かにウタは

感じ取っている。

ウタの「見聞色の覇気」はルフイのそれよりも強力だ。それこそ絶好調の時のライブでは観客全体の気配の把握さえ可能である。

だが、この距離で扉の奥の気配を把握できるような状態になっているのは初めてだ。「どちらにせよ行くしかないだろう。強い気配がないならこちらにとつてありがたい話だ」

ブルーノのその言葉に全員が頷いた。ルッチが改めて扉の方へと視線を向ける。

「時間もない。……おれがああ扉を破壊する。一気に雪崩れ込み、制圧しろ」
言うのと、ルッチがその姿を変えた。

動物系悪魔の実、ネコネコの実モデル「豹」。人獣型に姿を変えた彼を見て、他の者たちが驚愕の表情浮かべる。

「くぐぐ」

だが、彼らに対してルッチは何も説明することなく廊下から飛び出した。

見張りの海賊二人がそんな彼の姿を見て反応する。だが既にルッチの行動は終わっている。

「嵐脚・乱」

一瞬で放たれた複数の飛ぶ斬撃。それにより見張りの海賊たちが倒れ、更に背後の扉

も切り裂かれる。

扉の奥には驚愕した様子の白衣を着た者たちがいた。ルツチは速度を緩めることなく中への突撃を敢行する。

彼は決して油断などしていないかった。むしろ気を張っていたといってもいい。

——故にそれは、その“二人”が異常であつたのだ。

「危ない!!」

響いたのはウタの声であり、同時に金属音だつた。

ルツチの頭上。そこから音もなく気配もなく彼を狙つた暗殺者の一撃を、ウタが弾いたのだ。

「中はお願ひ!」

誰かが何かを言う前に、ウタがその暗殺者の前に立ち塞がる。

そこにいたのは、踊り子のような衣装とマフラーを身につけた女。

——“毒蛇のカガシャ”。

海軍の誇る“歌姫”にとって天敵が、そこにいた。



た。 どういうことだ、とルツチはその光景を前にして彼としては非常に珍しく動揺していた。

油断はなかつたし、慢心もなかつた。 “毒蛇のカガシヤ” については海賊というよりも暗殺者としての性質が強いこともあつて特別警戒していたのだ。しかしそれをあの暗殺者は超えてきた。今でも注視しなければならぬほどに気配が薄い。

先程の死闘——“海災” アルキデイクスとの戦いの影響は確かにある。誤魔化してはいるが、内部を貫かれたダメージはすぐに抜けるものではない。だがそれを加味してもカガシヤの動きは見事であつた。

(なるほど、暗殺者としては一定のものがあるらしい)

対面してなお捉えきれないほどに薄い気配。これがあの女の本領ということだろう。

だが、なればこそわからない。ウタはその存在を捉えていた。彼女の“見聞色の覇気”の能力の一端は見せられたが、それであの気配を捉えることができるのか？

だが、思考する暇はない。ここに来たのはカガシヤ一人ではないのだ。

「ブルーノ、中を制圧しろ。おれはこいつらの相手をする」

ウタとカガシヤが向かい合う脇を抜けてこちらへと走り込んでくるブルーノへ告げ

る。

「『飛ぶ指銃・撥』」

ばら撒くようにして弾丸になった『指銃』が放たれた。直後、それを受け切る金属音が響く。

いつの間にここに現れたのか。取り囲むようにしてカガシヤと 同じような格好をした集団がいた。

「奴らを殺せ。『歌姫』は私が殺す」

静かに指示を出すカガシヤ。ルツチはふん、と鼻を鳴らした。

「舐められたものだ……!」

まずはカガシヤを殺す。そう決めたルツチはしかし、直後の光景で方針を変えることになる。

「させないよ。お前は私が倒す」

正面の海賊に対し、『歌姫』が言い切った。直後、カガシヤが動く。

両手に持ったナイフを振り、床へと斬撃を走らせたのだ。応じるように前に出たウタの拳を受け止め、更に床へ斬撃を走らせる。

何をする気なのかをルツチはすぐに悟った。同時、二人の立っている場所の床が抜け、階下へと落ちていく。

「……方針を変えるしかない」

こちらへと迫り来るカガシヤの配下たち。それらを迎え撃つ構えをとりながら、ルツチは呟く。

最速でこの暗殺者たちを殲滅し、“歌姫”のところへ向かう。それが最適解だ。

司令室前の廊下と、司令室内部。

激戦、開始。



階下へと落下したウタは一度上を見上げた。落ちたのは一階分だけだ。

眼前にいるのは“毒蛇のカガシヤ”。三億を超える賞金首に対し、ウタは言葉を紡ぐ。

「お前だけは、私が倒さなくちゃいけないって思ってた」

周囲に視線を向ける。何人か倒れた海賊がいた。歩み寄り、倒れている海賊から刀と長銃を失敬する。

基本的にウタの戦闘は幼馴染と同じ素手によるものであるが、武器を使えないわけではない。海軍式の基本戦闘技術はちゃんと収めている。

「奇遇じゃな。お主だけはこの手で殺そうとつい先程決めたところじゃ」

対し、両手のナイフを構えるカガシャ。彼女はしかし、とウタの姿を見て言葉を紡ぐ。

「何とも無様な姿じゃ。親分の与えたドレスはボロボロ。更にはみずぼらしい麦わら帽子。それがあの子の憧れた『姫』の姿とは」

吐き捨てるように言うカガシャ。そんな彼女に対し、ウタは小さく笑う。

「そんな格好をしている割にセンスがないんだね」

背中に戻していた麦わら帽子を被りながら、ウタは言う。

——ごめん、ルフィ。

ちよつとだけ、力を貸して。

今も別の場所でシキと戦う彼へと告げる。

いつだってそうだった。この帽子を被るあなたの背中を、私は。

「この帽子は、世界で一番格好良い男の子の帽子なんだけど？」

ピクリと、カガシャの眉が跳ねた。直後、ウタの音が消える。

カガシャの持つナギナギの実の能力だ。こうなってしまった以上、彼女を倒さない限りウタの声はどこにも届かない。

故に倒すと決めていたのだ。襲撃を受けたあの時から。

「口を慎め。——その言葉が、お主の今生最期の言葉じゃ」

それに対し、音のなさない言葉をウタはぶつける。

——やってみなよ。

海軍本部准将、 “海軍の歌姫” ウタVS “毒蛇のカガシヤ”。

戦闘、開始。

逃亡海兵ストロングワールド⑱

第二十一話 “負けるわけがない” 前編

ブルーノやたしぎ、そして同僚の海兵たちと司令室へ踏み込んだオリンが見たのは確かに十数人の非戦闘員と思しき者たちだった。ほぼ全員が白衣を着ており、ルツチが吹き飛ばした扉を見て驚愕している。

「動くな！」

最初に踏み込んだ海兵が銃を構えると共に大声を張り上げた。背後では階下へと落とされたウタと追手との戦闘を始めているルツチの姿がある。

オリンは室内を見渡した。広い部屋だ。更に向かつて左側には大きなガラス張りの扉があり、今は閉じられているがその向こうには広いテラスが見える。

(使い方もよくわからないような装置ばかり)

予想していたことだが、オリンはその事実には歯噛みする。この状況で悠長に装置について調べる余裕はない。

(無理矢理にでもやるしかない)

彼女の判断は早い。元々彼女はどちらかというが無鉄砲というか無謀というか、動いてから決めるタイプの人間だ。ただ彼女よりも遥かに動き出しが早いのが上官であるからブレーキ役をやっているだけである。

故に次に起こりそうなことについて彼女は既に思考を巡らせていた。理由は単純だ。自分ならそうする。それだけの理由。

「両手を上げてこっちに来い！ 妙な真似をすれば——」

「——緊急です！ 司令室に襲撃者あり！ 至急応援を！」

指示を出していた海兵の一人が視線を外した一瞬の間に、白衣を着た男が近くの電伝虫に対してそう叫んだ。その瞬間、オリンは反射的に引き金を引く。

銃声が響き、男の肩が撃ち抜かれた。飛びつくようにして倒れた男の胴へと足を乗せ、オリンは銃口を男へと向ける。

「撃つなら撃ちやがれ！ お前らは終わりだ！ 今にこの城の海賊が集まってくる！」

「貴様ツ！」

指示を出していた海兵が激昂した声を上げる。そのまま言葉を続けようとした彼を

遮るようにして、オリンは男の顔面を掬い上げるようにして蹴り飛ばした。

「だから？」

もう意識がない男に対し、冷たい声を向けるオリン。彼女は周囲に視線を向けると、両手を挙げて状況を見守っていた他の者たちへと言葉を紡いだ。

「ウタ准将はカガシャに勝つ。そしてこの島とマリolfオードにウタ准将の歌が響いた瞬間にこつちの勝ちよ。私たちはそれをできるように準備するのが役目であり、永遠に耐える必要なんてない」

一瞬向こう側へと傾きかけた空気を、文字通り薙ぎ払うような言葉だった。ぶつりという音が響く。おそらく緊急放送が途切れたのだろう。

好都合だ、とオリンは思った。この先は流星にちよつと外に聞かせるには過激に過ぎる。

「終わりののはあなたたちよ。死にたくないなら余計なことをしないでよ」

オリンに蹴り飛ばされ、意識を失っている男から足を離すと彼女は近くにいる男に歩み寄る。

「……そのあなた。聞きたいことがいくつかあるから答えなさい」

「誰が答えるか」

「そう」

直後、銃声が響いた。彼女の短銃に左肩を撃ち抜かれ、男が悲鳴を上げてのたうち回る。その男を踏みつけながらオリンは続ける。

「勘違いしないように。これは命令よ」

ヒツ、という声が周囲から漏れた。

そもそも、である。

ルフィとウタ。その功績こそ比類なき二人であるが、同時に問題児そのものでもあるこのコンビの下に次点の指揮官として配属されている女が大人しいわけがない。大体、親と喧嘩をしたという理由で単身海軍に入った挙句将校になるような人物である。割と大概な人間だ。

「……おつかねえ」

「……場合によっちゃ二人に説教する人だしな」

「……あの人がいないと多分色々グダグダだからなうちの部隊」

ヒソヒソと何事かを囁き合う海兵たち。あなたたち、と振り返らないままオリンが言葉を紡いだ。

「無駄口を叩く暇があるなら動きなさい」

怒鳴るような口調ではなかったが、底冷えするような声だった。了解、と声を張り上げた海兵たちの指示に、シキの配下の者たちも素直に従う。この場にいた非戦闘員と思

しき彼らを一箇所に集めていく彼らを一瞥すると、足元で肩を押さえる男に言葉を紡ぐ。

「質問がいくつもあります。答えなさい。……この島全体に声を届かせる手段は？」

「……………ッ」

男は歯を食い縛り、答えるのを拒否しようとする。しかしオリンがその顔面に銃口を向けると観念したように言葉を紡いだ。

「……緊急時に広範囲に連絡するため、『自走式映像転送電伝虫』を介して声を届けることができるようにしてある。この島には凶悪な怪物が多いからな。事故が起こった時
用だ」

「あの大きな電伝虫ね」

監視のためにある電伝虫とこの島の住民たちは言っていたが、送信限定ではないということだろう。緊急時にこちらから音声と映像を伝えることができるようにするというのは理にかなっている。

「あいつらは住民だけじゃなく怪物共の監視も兼ねて島中にいる。全域とはいかねえだろうが大体はカバーできるはずだ」

「そう。ありがとう」

言うのと、オリンは銃口を下げた。そのままポケットから応急処置用の布を取り出す

と、彼女が撃った男の肩を包むようにして巻く。応急処置だ。

「悪いけど、準備も手伝わってもらわよ」

「……チツ」

舌打ちを零す男。だが従う意思はあるようだ。頷くオリンだが、そんな彼女にブルーノが声をかけてきた。

「おれは部屋の防衛に回る」

「お願いします。私はこの後の準備を。たしぎさん、手を貸してください」

「は、はいー」

オリンの容赦のない動きに若干引いていたたしぎも再起動する。ブルーノはすぐさま「剃」によって移動すると、部屋の前に出た。

それを一瞥し、あなたたち、とオリンは海兵たちへと声をかける。

「監視のための一人を残して二人は準備を進めて。ありつたけの電伝虫をかき集めると、一人は本部へ連絡を繋いで。あつちにも声が届かないと何の意味もない。私はこの男から外の電伝虫との接続方法を聞くから。急ぐわよ」

オリンの指示を受け、皆が動き始める。その側で男がよろよろと立ち上がった。

「……勝てるよ、思ってるのか？ 相手は『金獅子のシキ』とその腹心だぞ」

「当たり前。私の上官たちはね、一度どころじゃない。何度何度も色んな国と人を救っ

てきたの」

頭を抱えることも多いし、悩むことも呆れることもしよっちゅうだけど。

それでもオリンは、あの人たちを誰よりも信頼している。

——故に。

「負けるわけがない。そんなことを考えるだけ時間の無駄よ」



『ウタ准将はカガシヤに勝つ。そしてこの島とマリソフオードにウタ准将の歌が響いた瞬間にこっちの勝ちよ。私たちはそれをできるように準備するのが役目であり、永遠に耐える必要なんてない』

緊急の放送は正門前にも届いていた。おそらく海兵なのであろう女性の声を聞き、ふん、とラウンドが鼻を鳴らす。

「随分と教育が行き届いているようだな」

「お褒めに預かり光栄ね」

応じたのはヒナだ。ラウンドと向かい合うのは彼女とスモーカー。少し離れた場所ではフランケン部隊を差し向け、スーツに内蔵された銃火器で距離を取りながらヴェルゴと戦うレムナントがいる。

更には海兵たちの白兵戦と互いの銃火器による火力戦。人数で押している海賊側が有利であるはずなのだが、士気の差か練度の差か、或いは違う何かか。状況は互角に見えた。

（ドリーマーの敗北が思ったよりも響いているのか）

チラリとラウンドは倒れ伏している海賊を見る。チンピラのような男であったがその実力は確かであった。それが落とされたとなれば動揺するのも致し方ないかもしれない。

（流れを変えるか）

戦場における『流れ』というものは決して軽視していいものではない。それを軽視した結果総崩れになった者たちをラウンドは旅の中で幾度となく見ている。

「——今より私はこの戦場を分断する。向こう側になった者はすぐに司令室へ向かえ」

大声ではないというのによく通る声だった。直後、いかん、と指揮をとっていたドーベルマンが吠える。

「ラウンドを止めろ！」

「遅い」

何かをすると悟ったのだろう。スモーカーとヒナがダブルベルマンの声とほぼ同時に動いていたが、それでもラウンドの方が速かった。

「『山津波・絶』」

ずるりと、地面の中へと溶け込むようにして沈み込むラウンド。数瞬の後、スモーカーとヒナのそれぞれの攻撃が空を切る。

——そして、大地が爆ぜた。

文字通り爆発したかのように揺れる大地。その数秒後、何かが地面から噴き出すようにして出現する。

「……ふざけた能力だ」

思わずといった様子でぼやくスモーカー。彼がそう言ってしまうほどに、出現したものは凄まじいものであった。

それは、文字通りの絶壁。ラウンドの立つすぐ背後を境界線とするように戦場を分断する巨大な土の壁が出現していた。

『おいラウンド！ テメエ何をしてやがる?!』

自身の退路が断たれたということもあり、レムナントが吠えた。そんな彼に対し、ラ

ウンドは一瞥を返す。

「状況を考えた上でのことだ。文句でも？」

『ぬううう……！』

「幹部の立場であるならば腹を括れ」

土でできた槍を出現させ、それを手に取るとラウンドは改めて前を見た。彼が壁を作ったのは一人の海兵もまだ踏み込めていない場所を境界線とした。その関係か、海賊たちの大部分——特に援護を行っていた者たちの多くが向こう側へと分断されている。援護のための銃火器も同様だ。

故にここから先、海兵側にいる海賊たちは援護なしの白兵戦で海兵たちと相對することになる。その事実に対し、いきなりの状況の変化も相まって何人かの海賊たちも海兵たちと同じように動揺していた。

だが、それもすぐに消える。

「——ここは通さん」

シキの集めた高額の賞金首集団、“七宝剣”。その一角であると共にジュウゾウを除けば最古参の海賊。

部下を持たず、たった一人で“新世界”の海すらも渡っていた男のその言葉で海賊たちも落ち着きを取り戻す。

「侮るなよ。その男はたった一人で我々から逃れ続けた男だ」

そう言ったのは、この場における最高指揮官たるドーベルマン中将だ。ラウンドがそちらへと一瞥を返す。

「よくわかっているなドーベルマン」

「お前を捕らえられなかったことは私の失態だ」

「ものは言いようだな」

——常に迷っていた癖に。

その言葉は彼の名誉のために口には出さなかった。ラウンドとて海賊と呼ばれ、高額賞金首になっていような男である。許されないことはしてきたし、この手を血に染めてきた。今更自分が善などと名乗るつもりは彼にはない。

最初は世界を見るためだった。大切な人を失い、それを許容する世界とはどういうものかを知ろうとした。その果てがこれだ。

「ドーベルマン。長い付き合いだ。改めて言っておこう」

彼とは敵同士として長い付き合いだ。生い立ちも趣味も好き嫌いも人間関係も何一つ知らないが、その戦闘方法と信念だけは互いによく知っている。

「——私は世界政府を許容しない」

故の海賊。故の大罪人。

その血塗られた両手と在り方は、最早後戻りを許さない。

「不器用な男だ」

「お互い様だ」

言葉を返す。すると、ドーベルマンが自身の刀を構えながら言葉を紡いだ。

「貴様の言う世界政府はか弱き人々の明日を守るためにある。貴様の見てきたものについては理解もするが、海賊を我々は許容できない」

海軍本部大将、赤犬が掲げる「徹底した正義」。ドーベルマンは彼の派閥の人間だ。故にその在り方に過激さはあれど厳格である。その彼がここまで言うのかと一部の海兵たちが驚きの表情を浮かべる。

対し、ラウンドは笑みと共に頷いた。

「知っていると」

それが開戦の合図だった。槍を持つ右手をラウンドが上げた瞬間、状況を見守っていたスモーカーが彼の拳を飛ばし、動きを牽制する。それを槍の柄で弾く音が響くと共に、海賊たちの叫びが上がる。それはバラバラな声であったが、確かな戦意が宿っていた。

「総員奮起せよ！ あの城では我らが戦友たちが戦っている！ 遅れをとるな！」

ドーベルマンの号令に対し、海兵たちも応じる声を上げる。

戦争は、終わりに近づいている。
どちらが勝とうが、負けようが。



その暗殺者たちがいつから存在していたのかについては、最早本人たちでさえわからない。

ただ気付けば彼らは存在していた。そしてその存在をその国の権力者たちは利用し続けてきた。

彼らについての呼び名はいくつもある。

曰く、*“闇夜に巢食う者”*。

曰く、*“音なき死”*。

曰く、*“暗闇の住民たち”*。

暗い夜の向こうより現れる者たちとされる彼らはしかし、何も闇夜にのみ暗殺を決行

するわけではない。必要とあれば白昼堂々暗殺を行うこともある。

とある王国では護衛部隊に囲まれた王を護衛部隊を含めた51人、全員白昼堂々皆殺してみせたことさえ記録に残されている。下手人は僅か三人。その時に暗殺者たちもまた命を落としたが、その死体からは何の情報も得られなかった。

何処の出身か、目的は何か、依頼者がいるのであれば誰か。

その存在は噂でのみ語られるというのに、その成果という名の死だけが積み上がっていく。本拠が存在するとされる、とある非加盟国の権力者たちは彼らの存在を笑って否定するだけだった。いるのかいないのかそれさえわからない。

寝物語の脅し文句にも使われる彼らの運命が変わったのは、とある王が誕生したからだ。

非常に好戦的で、そして狡猾な王であった。彼は自国の闇そのものである暗殺集団を徹底的に利用して周辺国の有力者を次々と暗殺。混乱に見舞われる国々に間を置かず侵攻を開始し、次々と併合していく。

その攻め落とした国の中には加盟国も存在していた。故に世界政府も動くが、その王は既に手を打っていたのだ。

“我々是一个の国家として世界政府に加わる”

彼は既にいくつかの有力な加盟国に対してそう根回しを行っていたのだ。

世界政府とは何も一枚岩の組織ではない。1770を超える加盟国によって成り立つ組織だ。そこには様々な思惑があり、より強大な力を持つその国が加盟国に加わるならばと納得する者もいた。無論、その逆も。

世界政府の意見も割れることはなかったが、その間にもその国は周辺の国々を飲み込んでいく。最終的に世界政府は彼らの加入を認めたが、一つの条件が提示された。

——伝説の暗殺者集団の殲滅。

世間においてはおとぎ話であったその存在を世界政府は把握していたのだ。王は悩んだが、受け入れることを決める。

切れ過ぎる刃物は、いつか自分自身さえも傷つける。王はそれをよくわかっていた。故に目標としていた最後の国を攻め落とした後、暗殺者たちを消すことを決める。

彼らの本拠についてはこの国の有力者たちでも知る者は限られていたが、王は知っていた。砂嵐が止むことなき砂漠の中。巨大な岩の立ち並ぶその場所に彼らは住んでいる。

そこへ攻め込むと決め、一部の事情を知る者たちへと指示を出す王。しかし、それが彼の生きている最後の姿となった。

翌日。出発の日。

玉座とその周囲には、今回の件における裏を知る者たち全員の首が並べられていたの

だ。

強力な王を失い、有力な貴族や軍人を一夜にして失った国は荒れていくことになる。併合した国々も再び独立を宣言し、彼らは今なお戦争を続けている。

——故に、知らない。

暴虐なる王が暗殺されたその日に、海へと出た複数の船があつたことを。

そこに、後に「毒蛇」と呼ばれる暗殺者がいたことを。

『ウタ准将はカガシヤに勝つ。そしてこの島とマリソフオードにウタ准将の歌が響いた瞬間にこっちの勝ちよ。私たちはそれをできるように準備するのが役目であり、永遠に耐える必要なんてない』

その声は二人がいる場所にも届いた。眼前の海賊が呆れたように言う。

「随分と教育が行き届いておるようじゃ」

左右それぞれにナイフを持つ踊り子のような格好をした海賊、「毒蛇のカガシヤ」。周囲には彼女以外には倒れた海賊しかいない。

右手に銃。そして左手に刀を構えつつ、ウタは思考を巡らせる。今の彼女は周囲に音を届けることができない。何をするにしてもカガシヤの打倒は絶対条件だ。そもそもこの女がいる限り、ウタの能力は完全に封じ込められてしまう。

『自慢の部下だからね』

音にならないことはわかっていたが、それでもウタはそう言葉を紡いだ。どうもカガシヤは読唇術を習得しているらしく、この状況でも言葉は伝わる。

それにしても、とウタは思った。対面しているというのにこの海賊はその気配がとてつもなく薄い。視界の外に移動した瞬間に見失ってしまうのではないかというくらいに。

(能力か技術のどつちかなんだろうけど。……多分技術かな?)

何となくだが、悪魔の実の能力ではない気がする。だが、だからこそウタはわからない。

あの一瞬。ルツチの頭上から彼女が来た時、ウタの「見聞色の覇気」は彼女の存在を見落としていた。それはルツチもそうであったのだろう。直後の反応を見ればわかる。

しかし、ウタには見えた。

——ルツチの頭上に迫る刃。その光景が確かに見えたのだ。

見えた時には反射的に行動していた。その結果が今だ。

(一瞬見えたアレは何?)

わからない。だが、今はそれを考えている暇はない。

眼前、カガシヤが息を吐いた。どこか呆れたように。

「難儀じゃな。つまりこういうことであろう？　ここでお主が勝ち、司令室を数人で守り切り、マリンフォードと連絡をとり、更にはあの小僧が親分に勝つ。一体幾つのハードルを越える気じゃ」

『越えるよ』

即答した。音にならぬとはわかっていても、それでも彼女は口にした。

『負けるわけがない』

そのためにここにいるのだから。

「若く、無謀。……お主のような小娘を見ると苛立ちが募る」

『随分饒舌だね』

銃口をカガシャに向ける。ここで時間をかけるわけにはいかないのだ。可能な限りの最速でこの海賊を倒し、合流しなければ。

そのためか、ウタは敢えて挑発の言葉を口にする。

『本当は怖いんじゃない？　負けるのが』

「——口を慎め」

直後、カガシャが動いた。『剃』と思しき移動術による一瞬の移動。しかし音はなく、響くのは彼女の声だけだ。

ウタは冷静に待ち構える体勢をとる。そして、刀を自身の左側に突き立てた。

刀に何かがぶつかる感覚。薙ぐようにして振るわれたカガシヤのナイフを受け止めたのだ。しかし変わらなず無音。互いの戦闘行為によって出る音が一切ない。

受け止めたのはカガシヤの右手のナイフだ。カガシヤは左手のナイフを手の中で回転させて持ち替えると、それを突き出してきた。それを紙一重で頭を下げた避けると、同時に右手の銃をカガシヤに向ける。

銃声は響かなかつたが、銃弾は吐き出された。しかしそれはギリギリで避けられてしまふ。

「ふっ」

ウタの側に音が出せない以上、その息継ぎはカガシヤのものだ。彼女は更に蹴りを放ってくるが、ウタはそれを冷静に見極める。

『紙絵』

まるで空を舞う紙のようにカガシヤの攻撃を躲すウタ。そのままウタは左逆手で刀を振り抜いた。

だがそれは二本のナイフによって受け止められる。その衝撃を利用して後方へと下がったカガシヤが息を吐いた。

「歌姫」らしく踊りはそれなりにこなせるようじゃな」

『お陰様でね』

広報役として、「歌姫」としての立場のイメージが強いウタはどうしてもその戦闘能力の部分で侮られることが多い。彼女の隣には常に「麦わらのルフィ」という怪物がいるのもまたその根拠となっていた。彼女を守るためにモンキー・D・ルフィがいるのだと。

だがそれは事実であるが真実ではない。そもそもその「麦わらのルフィ」と共に厳しい訓練を積み、また、彼と共にあるために修練を続けたのがウタという海兵だ。

——海軍本部准将。

それはただ歌って踊れるだけの「歌姫」に与えられる肩書きではない。「正義」を背負い、「悪」を倒す者だからこそ許される肩書きであり地位なのだ。

「非礼を詫びよう。お主を侮った」

カガシヤがナイフを手の中で回転させ、逆手に構え直す。

「我が名、我が誇りにかけて。——お主はここで「暗殺」する」

静謐な殺意であった。確実にこちらを殺そうという意思が伝わってくるのに、しかし、その気配は変わらず薄い。

『悪いけど』

足でリズムを取りながらウタは応じる。変わらず音はしないが、しかし、意味のない行動ではない。

音がなくても、体が、心が、魂が覚えている。

刻みつけた音楽が、彼女の戦いを支えているのだ。

『この帽子を被っておいて、負けるわけにはいかない』

誰よりも強い、私の英雄。

あの人の誇りを汚すわけにはいかないから。

隣に立ち続けると、そう決めたのだから。

逃亡海兵ストロングワールド⑬

第二十二話

“負けるわけがない”

後編

防衛戦はロブ・ルッチやブルーノにとっては専門外である。

彼らは存在しないはずの世界政府の闇、CP9の諜報員だ。その本領は諜報活動であり情報戦。CP9の場合は必要に応じた『暗殺』という汚れ仕事も負うことになるが、基本的に彼らの任務は闇の中で行われるものである。

故に本来、今回のような状況は例外中の例外だった。海賊たちとの戦争に参戦し、挙句戦争終結のために最前線で戦うなど。

「嵐脚・乱」

ルッチが足を振るい、前方の海賊たちへと斬撃を放つ。だが、続々と集まってくる海賊たちは一定以上の距離をとっているせいで届くまでに間がある。

「身を伏せろ！」

「距離をとって撃ち続けろ！」

「相手は二人だ！」

人獣型になっていているルツチの「嵐脚」は威力も速度も凄まじいものである。それこそまともに当たれば軍艦さえも切断するほどだ。

しかし、距離があれば避けることも可能である。現に今も、海賊たちは身を伏せたり距離を取ることによって直撃を避けている。何人かには当たったが、それ以上の数が次々とこちらには迫ってきていた。

「鉄塊！」

一斉に放たれる銃火器による攻撃を、ルツチの前に出たブルーノが受けた。銃弾に混じって砲弾も放たれ、ブルーノが爆発に巻き込まれる。

だが、彼も満身創痕とはいえCP9の一角。容易くは倒れない。しかし、永遠に立ち続けることができるわけではない。

「指銃！」

ブルーノの背後から飛び上がったルツチは、こちらへと飛び込んできた暗殺者たちへ応じるための攻撃を放った。当たれば絶命は不可避の一撃も、暗殺者たちは即座に引き下がることでルツチの攻撃圏内から離れる。

舌打ちを零し、ルツチは着地した。カガシヤの部下であろう彼ら暗殺者はこうして隙があればルツチとブルーノの壁を抜けようとしている。狙いは二人ではなくその奥なのだろう。

司令室の前、廊下の半ばで二人が陣取っているのには理由がいくつもある。一つはあまりに扉に近いとオリンやたしぎたちを狙われてしまうことだ。彼女たちはこの後の準備がある。危険に晒すわけにはいかない。

もう一つは二人の背後、少し離れた場所に空いた穴である。その穴はカガシヤが空けたものであり、その下ではウタとカガシヤが戦闘中だ。音がなく、また、ウタはともかくカガシヤの気配が捉え辛いせいで戦況は不明。ただわかっているのはそこに乱入者など入れてはならないということ。

「……ままらんな」

思わずルツチが呟く。すると、貫かれた腹の傷が開いたのだろう。そこを押さえているブルーノが言葉を紡いだ。

「慣れないことはするものじゃないと身に染みている」

「それを言えるならまだ大丈夫そうだな」

今回の任務は特殊だ。緊急の案件として二人ともう一人がここへと回された。二人は本来、別の任務中である。そこで慣れないことをしているブルーノがこんな言葉を吐

けるのであればまだ大丈夫だ。

(二人一人は雑魚だ。だが、思ったよりもあの人魚との戦いが響いている)

勝利はした。だが無傷とはいかなかったというのが実情だ。

様々な要素がルツチの動きを鈍らせている。

(前に出るか? いや、取り逃せばそこで終わりかねない)

状況は明らかにこちらが不利であり、この場所における戦いの趨勢は向こう側に傾きつつある。

何か、一手。状況を変える何かがあれば。

だが既にこちらの手札は出尽くしている。あるとすれば正門前の海兵たちがここに到達するくらいだが、それを望むには時間がかかり過ぎる。

一か八か。賭けに出るか——そう決断しようとしたルツチの耳に、その声が届いた。

「嵐脚・群狼連星!!」

突如、海賊たちの背後から狼の形をした嵐脚が出現した。それらは文字通り食い破るようにして海賊たちを貫いていく。

「ギョッ!」

「一刀居合——『断割』!!」

文字通りの、閃光の一撃。数人の海賊が倒れ伏す。

放ったのは海軍本部中將——モモンガだ。彼もまた満身創痕と言つてもいい状態だが、その一撃の威力は凄まじい。

「——私が相手だ海賊共」

周囲を睨みつけるモモンガ。その身は既にポロポロだというのに、その眼光と気迫に衰えは微塵もなかった。周囲の海賊たちがその身を竦ませ、後ずさる。

だが、彼らもまた『金獅子のシキ』の傘下に入った海賊たちである。おそらく一海賊団の船長なのであろう男が声を張り上げた。

「怯むな！ 海軍本部の中將だろうがこの数に勝てるわけがねえ！ それに見ろ！ 今にも死にそうなくらいポロポロじゃねえか！」

その言葉を受け、海賊たちの士気が僅かに戻る。

だが、もう一人。それを打ち砕くような老兵がいた。

「ぬうェい!!」

ただの拳。されどそれは英雄の一撃。

運悪くその拳を受けた海賊は周囲の海賊を十人近く巻き込みながら吹き飛ばされた。モモンガとは反対側に現れたその海兵の姿を見、海賊たちも驚愕する。

「『英雄』 ガープ……!?!」

口々に皆その老兵の名を呼んだ。ふふん、とその『英雄』は笑う。

「すまん。危うく遅れるところじゃった。この城ごと吹き飛ばすのも考えたのじゃが」

「いやそれすると全部後破産だろ」

「ぶわっはっは！ その通りじゃ！ いや助かったぞー！」

一見すれば腹から血を流した老兵だ。しかし、その気配には些かの衰えもない。老境に差し掛かり、全盛期は遠い過去であろうとも。その存在と力は間違いなく『伝説』である。

海賊たちが無意識に後退りする。だが、一部の海賊はその恐慌を打ち消すために怒鳴り声をあげた。

「名前に踊らされるな！ 所詮ただの老兵だ！ 討ち取つて名をあげろオ!!」

二十年近く表舞台から姿を消していたシキは、その計画を実行するために傘下の海賊を集めた。だがそれは誰でもよかったわけではない。『七宝剣』を筆頭とした海賊た

ちは相応の実力を持つ者たちだ。

なればこそマリノンフォード襲撃という大事件において逃げる者がいなかった。そんな彼らにとつてガープという存在は畏怖を抱く相手ではあるが何もせずに膝を折るような相手でもない。

「思う存分相手をしてやるぞ。——小僧共」

指を鳴らしながら言うガープ。海賊たちの応じるような咆哮の如き声が響き渡る。

——だが、どこまでいこうと援軍はたったの三人だ。

その三人は確かに一騎当千、強力な力を持つ猛者である。しかし個人で無限に戦うことが出来る者などこの世に存在しないし、この場で海賊たちと戦うのは援軍たる三人を含めても僅かに五人。あまりにも少ない数だ。

更に言えば満身創痍である者がほとんど。長くは持たない。海賊たちも状況については理解しているし、全力で司令室の奪還を目指している。

故にここから先は消耗戦だ。どこまで耐えられるかという、先の見えないマラソンである。

(急げ、歌姫)

ルッチは内心で呟く。この三人がこの場に来た以上、最早更なる援軍など望めない。ならばもう、たった五人で背後の司令室を守り切るしかないのだ。

そして司令室を守り切っても「歌姫」が敗北し、殺害されればそれで終了。この場の者たちはいずれすり潰されることになる。

分の悪い賭けだ。普段のルツチなら絶対にしないことである。だが、やるしかない。そこに乗ったのが自分の選択だ。

「消されたい奴から消してやる」

応答は銃声だった。

司令室、廊下前。

——僅か五人の防衛戦が、始まった。



マリンフォードに用意された司令室。前線で姿を晒す海軍本部元帥センゴクに代わって後方での情報処理と状況把握、それに伴う指揮を執るのは海軍本部中将つるだ。

大参謀とも呼ばれる彼女の肉体は既に全盛期を過ぎているが、それでもその名は今もなお海賊たちに恐れられている。

彼女が責任者として指示を出している部屋は多くの海兵が走り回り、血が流れないだけの戦場と化していた。彼女もまた矢継ぎ早に送られてくる連絡を前に思考を巡らせている。

（攻撃方法については想定内だけど、その規模が想定を上回ってるね。元とはいえ、四皇”は伊達ではないと”）

怪物たちの存在については事前に報告を受けていた。想定よりも凶悪な怪物たちであるが、対処し切れない相手ではない。隕石についてもだ。元々”金獅子のシキ”の操る力の規模は凄まじいものであった。セングクとガープという二人の怪物を相手に回してマリnfオードを壊滅させたのは純粹な力によるものだ。

問題なのは想定よりも規模が大きいことと、何よりもその持続性だ。隕石と共に現れる怪物たちはその司令官とも思しき者たちを討ち取ったことで統率の取れた動きはしなくなつたが、その凶暴性が収まったわけではない。むしろ戦場の空気に当てられたのか手当たり次第に暴れ回るようになっていた。

このままでは危険だ、とつるは思っていた。海兵たちは疲弊する。今は抑え込んでいるが、どこかが崩れた瞬間に雪崩の如く全てが崩壊するのが見えている。

（しかしこちら側からの状況打開は難しい。ガープの奴はどうしてるのか）

孫があそこで戦っているからという理由であの最前線へ乗り込んでいった”海軍の

英雄”のことを思う。私情が混ざっていることは確かであるが、その判断自体はつるも正しいと思っている。相手はあのシキだ。生半可な戦力で勝てるような相手ではない。

それに、と歴戦の老兵は思う。

(予想が正しければ、シキには『最後の切り札』がある)

いやむしろ、この状況下でそれを想定していない方がおかしい。他の者たちはあの大海賊の能力の規模の大きさや状況の変化に圧倒されてそこまで思考が回っていない者が大半のようなのであるが、冷静に考えれば気付くはずだ。

故にそうなる前に決着をつけなければならない。そしてそれができるのはガーブだけだとつるは思っていた。

……ただ、伝え聞く状況は予想から大きく外れた状況となっているようだが。

「大参謀！ 緊急の電伝虫です！」

「誰からだい？」

「メルヴィユからです！ 相手側はたしぎ少尉！ 敵陣の中心からこちらへ通信を繋いだ模様です！」

その報告でつるは思考を高速で回転させ始めた。指で合図を送り、こちらの机に電伝虫を持って来させる。

「こちら海軍本部中将、つる。……状況の説明を」

『は、はい！ こちら海軍本部少尉たしぎです！ 現在我々はシキの居城の司令室にいます！ お願います！ 本部の電伝虫をありつたけ繋いでください！』

「たしぎ……スモーカーのところの子だね。少し落ち着きな」

一息。コツコツと指で机を叩きながらつるは言葉を紡ぐ。

「司令室つてことは敵の中樞だね？ しかも後ろから聞こえる音から察するに籠城に近い状態と見える。どういうつもりだい？ お前たちはそちらに乗り込んでる部隊との合流が最優先事項のはずだろう？」

『この戦争を終わらせるためです！』

言ったのはたしぎではなかった。少し声が遠いところから察するに、離れた場所からの声だろう。

ガープを筆頭とした先遣隊の名を思い浮かべる。女性は囚われの身であったウタを除けば二人。つまり、あの二人の部下である女性海兵——オリンか。

色々と噂は聞いている。その気の強さやあの二人の陰に隠れた問題児だということ等、色々と。

「なるほど。どうやって？」

『今この島全域に声を届ける準備をしています！ ウタ准将の歌声でこの戦争を終わらせます！ だからマリンスフォードも！』

その言葉を受け、一度つるは目を閉じた。そしてゆっくりと言葉を紡ぐ。

「冷静に。……その准将は今どうしてる？」

『敵幹部と戦闘中です』

「相手は？」

『カガシヤです。海賊、 “毒蛇のカガシヤ” です』

そう答えたのはたしぎだった。彼女の後ろでは微かにオリンが何かの指示を出している声が聞こえている。

—— “毒蛇のカガシヤ”。その名を聞き、なるほどとつるは思った。

その海賊だけは確かに倒しておかなければならない存在だ。そいつがいる限り、 “歌姫” の能力は発揮できない。

「一人でかい？」

『はい。……中は任せると、准将は』

あの子らしいね、とつるは内心で思った。ガープの孫もそうだが、どうしても自分が前線に立たなければ気が済まない性質をしている。

“おつるさーん！”

ふと、こちらに笑顔で駆け寄ってくる彼女の姿を幻視した。深い憎悪を抱えながら、それでも “歌姫” として平和を願う彼女をつるは孫娘のように可愛がっている。

「司令室にいたと言ったね?」

『はい。現在外ではガープ中将たちが海賊たちを迎え撃つてくれています。相手にもこちらの狙いがバレたようで、続々と援軍が』

「……ガープが?」

カガシャと相對するのではなく、司令室の防衛にガープが回っている。その男は別の場所にいるからこそカガシャとウタが相對しているのだと理解していたつるは一瞬思考が止まった。

スモーカーが派遣された部隊と合流したことにより、先遣隊が相對した海賊たちについての情報も届いていた。それによるとガープはシキを自身の孫に任せ、あの「殺人鬼」と相對していたという。司令室近くにいるということはあの「鬼」を討伐したということだろうが、その後にかガシャと相對するウタ、或いはシキと相對する自身の孫のところのどちらにも行かないということとは。

(ガープ。これはつまり、そういうことだね?)

おそらく向こうの状況はこちらの想像以上に切羽詰まっているのだろう。故にガープが司令室の防衛戦に参加するような状況になり、「新時代の英雄」二人はそれぞれ単独で怪物と相對する形になっている。

だが、それでも介入しようと思えばあの男ならできるはずだ。それをしていないとい

うことは、つまり。

——賭けたのか。

未だ十代の若き新世代に。この戦争の趨勢を。

(馬鹿な男だとは思っていたが……まあ、いい)

つるは一度息を吐いた。この状況から推察できるのは、“海軍の英雄”が一つの賭けに出ているということ。

その根拠はわからない。もしかしたらどうしようもなかったのかもかもしれない。何も考えていない可能性も大いにある。

だが、現実として彼は二人の戦いに介入していない。

——その賭け、乗ってやろうじゃないかガープ。

長い付き合いだ。この鉄火場で勝算のないようなことをする男ではないことはよく知っている。

彼は——“海軍の英雄”は、信じたのだ。

新たな時代を担う者たちの——勝利を。

「状況は理解した。こちらでも即座に動く。この通信は繋いだままに。——話は聞こえたね？　すぐに通信部に動くように指示を」

近くにいた海兵たちに指示を出す。彼らがバタバタと動き出したのを見届けると、つ

るは向こうに対して言葉を紡いだ。

「これは賭けだ。それはわかっているね？」

『賭けではありません』

言い切ったのはオリンだった。彼女の言葉には強い意志が込められている。

『准将も大佐も負けません』

思わず笑みが溢れた。これほどまでにあの二人は己の部下に信じられているのか。信じさせるだけのことをしてきたのか。

その事実には、小さく笑みが溢れた。

「なら私も信じてみようかねえ」

どの道こうするしかない、とつるは思った。

こちらの想定通りの『切り札』をシキが持っているとな仮定した場合、時間はもうほとんどないといってもいい。あの地で戦う者たちが敗北した瞬間、このマリolfordは終わる。

「センゴクに連絡を」

指示を出しながら、つるは思う。

あのガープが、新たな世代に任せるといふ選択をした。あの男にそう思わせるだけのことがあったのだ。

——時代が、変わるのかもしれない。
そんな、ことを。

戦争は、最終局面へ。

逃亡海兵ストロングワールド②

第二十三話 〃フリーシャ村のウタ〃

ポートガス・D・エースの船出の日。ルフィとウタはコルボ山の山賊たちと一緒に彼を見送った。

その場にはフリーシャ村の村長とマキノも来ていた。共に三人と、そしてあと一人が世話になった二人である。

〃頑張れよエース!〃

船に乗り込むエースへとルフィが声を欠ける。帽子を被りながらエースは頷いた。

〃待つてろ。すぐに名を上げてやる〃

おう、と満面の笑みで応じるルフィ。そんな彼の隣でウタは複雑な胸中を隠しながらも笑顔で手を振っていた。

ウタは海賊が嫌いだ。だがエースは義兄。一人ぼっちになってしまった自分に寄り

添ってくれたルフィの義兄であり、彼もまたウタを支えてくれた一人である。

彼が海賊になると決めたことについて、ウタは何かを言えるような立場ではない。彼の感情もわかるのだ。だからこそ否定はできなかつたし、こうして見送りに来ている。

——そう、否定できなかつた。

彼らが抱く想いを否定できるだけのものを持っていなかつたのだ。

“……………”

チラリと、ウタは隣の幼馴染に視線を向ける。幼い頃から海賊になると言っていた少年。彼もまたこうして旅立つのだろう。

その時、自分はどうしているのだろう。

どう、したいのだろう。

(……………あれ?)

ふと、気付いた。

記憶の中にある幼馴染の『海賊になる』という言葉の声が随分と幼い。そういえば、最近その言葉を聞いていないような気がする。

最後に聞いたのは、いつだつたか。

“ウタ”

思考の海に沈みそうになっていたウタを呼び戻したのはエースだつた。慌てて返答

を返す。

“う、うん、どうしたの？”

“一応言つところと思つてな。……お前がどんな道を進もうがおれはお前の兄貴だ。それだけは覚えておいてくれ”

何を当然のことを、とウタは思った。だがエースはどこか優しげに微笑むと、ルフィの方へと視線を向ける。

“ルフィ。お前もだ。おれはお前の兄貴だつてことを忘れるなよ”

“……いきなりどうしたんだ？”

“あの時は悪かつたな。少し動揺しちまつたんだ。……だが、まあ。考えてみりやお前はそうするだろうとも納得した”

一瞬だけウタの方へ視線を送りながらエースは言う。それで何かを察したらしく、ルフィが麦わら帽子を被り直した。

“悪い、エース”

“謝ることじゃねえだろう。……お前らは優しいからな。心配ではあるが、まあ、お前なら何とかなるだろうとも思う”

ただな、とエースはルフィを真つ直ぐに見つめながら言葉を紡ぐ。

“男が決めたんだ。絶対に曲げるなよルフィ”

“——ああ、わかってる”

それに対し、真剣な表情で頷くルフィ。そんなルフィの様子を見て、そうか、と彼は笑った。

“兄つてのはどうしても弟と妹が心配になるもんなんだ”

帆を張り、船を進めるエース。彼は最後に満面の笑顔で振り返った。

“頑張れよ”

彼らしい応援の言葉だったのだとわかるのは、少し後のこと。

エースは姿が見えなくなるまで手を振り続けていた。それを全員で見送った後、ルフィが笑顔で言う。

“いやー、ずっと手を振ってたなエースの奴”

“うん。でもこれはあくまでエースにとってのスタートライン。予感だけど、エースはきっと凄い海賊になると思う”

隣の幼馴染に対するものほどではないが、エースが何かを成す可能性についてはずっと感じていた。……もうこの世にはいない、もう一人の兄も。

また一人、家族がウタの前から立ち去った。思わず、右掌を強く握りしめる。

“……ごめん、ルフィ。私ちよつと部屋で休んでるね”

幼馴染に対し、絞り出したような言葉でそう告げると、ウタはその場から立ち去った。

そして彼女が紆余曲折を経て預けられたダダンのアジトへと一人で戻っていく。

彼女にとっては母のような存在である山賊のダダンはエースの見送りには来なかった。兄二人に弟一人の男たちには手厳しいが、ウタに対しては三人に比べると優しくかつたし女性としての色々なことを教えてくれた人物である。

そのダダンは壁に寄りかかるようにして酒を煽っていた。その背中がどことなく憂いを帯びていると感じるのは気のせいではないだろう。

“エースは出発したよ”

“ふん。結局ガープに怒られんのはあつたよ。クソガキが”

憎まれ口を叩くダダン。その彼女に対し、ダダンが見送りに来ないと知ったエースに頼まれていた伝言を伝える。

“ダダン。エースから伝言”

“何を？ 最後の最後まで文句でもあんのかい？”

“そんなことエースは言わないよ。えつと。——『世話になった。ありがとう』だつて”

こちらを振り返っていたダダンの瞳から涙が溢れた。それを隠すようにこちらにダダンは背を向ける。

“ふざけんじゃねえよバカが！”

言葉だけを聞くと厳しいが、その声は涙に濡れていた。素直じゃないなあ二人とも、とウタは小さく笑う。

そのまま彼女のために用意された部屋へと戻ろうと奥へと進んでいく。その彼女に對し、ダダンが声をかけてきた。

“ウタ。お前は どうするつもりだ？”

“……………”

涙の拭い切れていない声で発されたその問いに對し、ウタは答えることができなかつた。後ろ手に扉を閉め、自室のベッドに倒れ込む。

掛け布団の中に埋まるようにして入り込み、ウタは思考の海に沈んでいく。

(ルフィは、やっぱり海賊になるんだろうな)

彼の幼い頃からの目標であり、夢だった。それを覆すはずがない。

その時、ここにいる自分は どうする？ …… どうしたらいい？

何もせずに見送るのか？

“…………… やだよ……………”

大切な幼馴染が、こちらに背を向けて旅立つ姿を幻視する。それはどうしようもないほどの絶望だった。

“…………… 置いて行かないで……………”

涙が混じる。体が震える。

あの日の絶望が、何もかも色が消えた瞬間を思い出す。

“……行つちややだ……やだよ……”

海賊は嫌いだ。

私は、シャンクスが、赤髪海賊団が……嫌いだ。

振り返りもしなかったあいつらが、大嫌いだ。

“——行かないで、ルフィ”

絞り出すような言葉は、紛れもない心からの願いで。

だけど、決して口にできない言葉だった。

誰よりも“自由”の似合う人に、こんなことは絶対に言つてはいけないのだ。

溢れる涙を拭いながら、声を殺して少女は泣く。

“ウタ、ちよつといいか?”

どれぐらいそうしていたのだろうか。ルフィの声が聞こえた。扉の向こうにいる彼

に対し、涙を拭いながら言葉を返す。

“ごめん。ちよつと一人にして”

“入るぞ”

しかし、幼馴染は強引に入ってきた。ちよつと、と抗議の声を上げながら布団から顔

を出す。いつもそうだ。この幼馴染は人の話を聞かない。

こんな自分を見せたくないのに——いくつも浮かんだ文句は、視界に入った彼の姿で全て吹き飛んだ。

“……ルフィ、その格好”

“この間届いたんだよ。どうだ、似合うか？”

そこにいたのは、海軍の制服を着た幼馴染だった。ウタの分もあるぞ、と彼は包みを見せてくる。

“どういう、こと”

状況が受け入れられなかった。ああ、とルフィは常の笑顔で言葉を紡ぐ。

“おれ海軍に入ることにしたんだ。それでよ、ウタも一緒に——”

“海賊は!?”

思わず怒鳴るような声を出してしまった。バタバタとこちらへと人が集まってくる足音が聞こえる。

だが、最早そんなことはどうでもよかった。

“海賊になる、つて”

“ああ。海賊はもういいんだ。……もう、いいんだよ”

苦笑いという、彼が普段決してしない表情。ただでさえ不安定な感情の中でそんなも

のを見せられたウタはベッドから降り、ルフィの側に詰め寄る。

“もういいってどういうこと？ あんなに……あんなに、夢だつて……シャンクス、を……超えるって……”

シャンクス、という言葉をお口にすることで随分と力が必要だった。そんな自分の肩を、優しくルフィが掴んでくる。

労わるような、優しい手だった。

“昔はそうだったけどな。今は違う。それに、超えるつても何も海賊じゃないと駄目なわけじゃねえ”

“でも、海軍なんて”

“じいちゃんにはいつつも海兵になれつて言われてたしよー。まあ、そういうのもいいかかって”

ルフィは軽い調子で言っているがこれはそんな簡単な話ではない。あのルフィが“夢”を諦めようとしているなんて。

“ウタは海賊嫌いだろ？ 海軍なら一緒にいられるじゃねえか”

その言葉で、全てを悟ってしまった。

シャンクスたちに置いて行かれたと理解し、荒れに荒れていた日々。いつそのこと死

んでしまうことさえ考えるほどにどうしようもなくなっていた自分は、嵐の中を彷徨っていた。

まだどこかで赤髪海賊団を待っていたのかもかもしれない。死にかけるような目に遭えば助けに来てくれるのではないかと、そんな風に考えて。

そして嵐の中、崖下へと落下して。けれど、彼らは来なくて。

——助けてくれたのは、年下の男の子だった。

その時、身勝手にも願ってしまったのだ。

“どこにも行かないで。ずっと一緒にいて”

幼い体で自分を助けようとしてくれた少年に。

愚かな子供であった自分は、そんな言葉を吐いたのだ。

もう誰も、いなくなつて欲しくなかつたから。

“ルフイ、もしかして。あの日の、こと”

幼き日の呪いを、この幼馴染は。

ずっと、背負っていたというのか。

背負わせて、しまったのか。

“何言つてんだ。おれはウタと一緒にいたいから海兵になろうつて思っただけだ”

様子を見にきていた山賊たちの間で、小さな声が上がった。だが、ウタはそんなことに欠片も意識を向けていない。

嘘だ、と思った。確かにルフィは寂しがり屋で、一人ぼっちは痛いより辛いとまで言っている。けれどそれは“夢”を諦めるほどのことではないはずだ。

しかし、こんなことで冗談を言うような人間ではないことはわかっている。だから余計にこの幼馴染の行動が読めなかった。

“なあ、ウタ。——シヤンクスを、捕まえよう”

呆然とするウタに対し、ルフィは言った。

“おれたち二人で、赤髪海賊団を捕まえるんだ”

そこにあつたのは、大切な幼馴染の笑顔。

——嗚呼、本当に。

この人は、一体どれだけ。

どれだけ——私の心を救ってくれるのだろう。

ウタは一度、顔を俯かせた。そしてルフィの持っている包みを手に取ると乱暴にその包みを開ける。そこにはルフィと同じ海軍の制服が入っていた。

それを体の正面に当て、ルフィに問う。

“どう？ 似合うかな？”

ちやんと笑えているかはわからなかった。だがその人は、満面の笑みで。

“似合ってるぞ!”

そう、言ってくれた。

似合うぞ、と山賊たちからも声上がる。そんな彼らにウタは苦笑を返す。

“海兵になつたら皆を捕まえなくちやいけないんだけど?”

“げっ、そういうさうか?”

“勘弁してくれよ!”

“でもガープさん見逃してくれてんだしいんじやねえの?”

わいのわいのと言いだめる山賊たち。……家族たち。

その姿を眺めている自分が自然と笑みを浮かべていることにウタは気付いた。そして、目の前で山賊たちの姿を見て笑っている幼馴染に声をかける。

“ね、ルフィ!”

“うん?”

“ありがとう!”

この時、ウタは決めたのだ。

この大切な人の隣にいたいと願ったのは自分で。そして、彼はそれに応えてくれたのだから。

未来に、何があっても。

——私は、ウタは、彼のために生きよう。

彼の隣で、歩き続けよう。

そんな風に、決めたのだ。

これは、後に世界そのものを変えることになる二人の英雄、その始まりの物語。それを知っているのは、何の因果か二人と山奥の無法者たちだけである。



無音の戦闘というのは想像よりも遥かにやりにくいものである。

人は五感を常に働かせながら生きている。視覚による情報が八割を占めるといいますが、それは他の感覚がなくてもいいというわけではない。特に戦闘ともなれば五感を研ぎ澄ませて行う必要があるし、その中で『音』というものは非常に重要な位置にある。

歴戦の強者は誰もが視界だけに頼った戦闘をしない。海兵ともなれば尚更だ。海賊

との戦闘に卑怯も汚いもない。そこで視界だけに頼れば待っているのは死だ。

故に経験を積んだ海兵たちは五感をフルに活用した戦闘を自然と覚えていく。訓練でも指導されることではあるが、やはり実戦における経験に勝るものはないというのも事実。

そういう点において、ウタとルフィの二人は入隊当時からそれらの技術を身につけていた。世間的には「英雄」と呼ばれる人物にジャンルに置き去りにされたり風船に括り付けて飛ばされたり千尋の谷に突き落とされたりした二人は身を寄せ合い、そして生き残るためにありとあらゆる技術を身につけたのだ。

入隊直後の訓練でサバイバル訓練があった時、あまりの手際の良さに当時の教官がドン引きしたのが二人の海兵生活の始まりである。

……このことについて感謝はしていない。したくない。絶対にしないとウタは決めているが、それはそれとして身につけた技術は役に立っているから複雑である。

だが——だからこそ、この戦闘はあまりにも特殊に過ぎた。

『「嵐脚」』

右足を振るい、ウタは斬撃を飛ばす。当たるとは思っていない。相手の進路を制限するのが狙いだ。

右か左か。どちらかに避けるか。そこを読み、銃弾を叩き込むのが狙い。

普段であれば「見聞色の覇氣」と合わせて『音』という彼女独特の感覚で相手の動きを捉えるのがウタの戦闘方法だ。「見聞色の覇氣」についての才能はルフィ以上と謳われる彼女は相手の動きを読み、訓練で培った手札の多さで戦う。自分の悪魔の実の能力を徹底的に伸ばしたルフィとは真逆だ。

その戦闘スタイルから考えてもカガシヤは非常にやりにくい相手であった。

いや、そもそも彼女と戦うことが楽だという者がいるのかという話でもあるのだが。
(読めない)

右か左か。カガシヤの次の動きがウタには読めない。音がないというだけでこれほどまでに戦いにくくなるのか。

人間に限らず生物とは音の塊である。心臓の音は生物の基礎だ。ウタはそれらを捉え、場合によってはこちらに合わせることもさえもやってのける。そうして相手を「読む」のだ。

しかし、カガシヤにはその音がない。正確にはあるのだが、ウタには届かない。必然視界に頼る比重が大きくなり、どうしても精神を疲労させていく。

『——ッ』

視界から消えた一瞬の後、ギリギリでウタの「見聞色の覇氣」がカガシヤを捉えた。右でも左でもなく上。「嵐脚」の斬撃を飛び越えてきたのだ。

振り下ろされたナイフを左手の刀で弾き、それによって捻った身の勢いそのままに右足の回し蹴りを放つ。だがそれは振り下ろされたナイフとは逆側、左手のナイフで防がれた。『覇氣』を纏うが故に刺さらなかったが、かといって相手にダメージが通る訳でもない。

「ふっ」

呼吸音。カガシャが蹴られた勢いそのままに身を捻った。眼前で体を文字通り一回転させ、勢いを乗せたナイフの一撃でこちらの喉元を狙ってくる。

体を屈め、それを避ける。そのまま相手の足を薙ぐように刀を振った。それをカガシャは後方へと跳躍して回避する。

互いの距離が開き、間ができる。相変わらず何の音もウタには届かない。

——奇妙な感覚だ。何の音もしない世界。考えてみれば、そんなものは初めての経験だ。

物心がついた時には船の上にいた。波の音を子守唄にして過ごし、騒がしい海賊の日常が彼女にとっての原風景である。

その日常を失った後にはいたのは、いつも騒がしい幼馴染との日常だった。前向きで、ひたむきで、いつだってどんな時だって信じられる大切な人。その人と過ごした日々。彼の兄であり、ウタの兄でもある人たちとの日々。山賊なのに妙に憎めない家族との

日々。

海軍に入ってからもうそうだ。彼のために歌っていたところを見出され、世界に歌声を届けようと言われて。多くの人に囲まれて、そんな時でも彼は隣にいた。どんな時でも隣で、彼は笑ってくれていたのだ。

大好きなああの笑顔で、いつも。

(そっか。いつも……ルフィが)

騒がしい日常には、いつも彼がいた。

だからこそウタという人間は、“寂しい”なんて思うことがなかったのだ。

悲しいと思うことはあっても。

苦しいと思うことはあっても。

切ないと思うことはあっても。

それでも、彼がいたから寂しくはなかった。彼女はいつも、彼の“音”と共に在ったのだ。

(妙な感覚)

自分自身の音さえも聞こえず、感じられるのは目の前にいるのに霞のように存在感のない佇まいをする暗殺者だけ。

まるで世界に取り残されたかのような感覚。

貫かれた腹に痛みが走った。それが今、自分が生きているということを教えてくれる。

(いつもと違う)

状況が普通ではないということもある。だがそれ以上に、いつもの自分とは違う『何か』がある。

世界に自分が溶け込んでいるかのような感覚。

目の前の敵だけを考える感覚。

——それは、彼女の才能の発露。

積み上げてきた全てが、ここにきて一つの形を成そうとしている。

「

変わらず、聞こえるのは呼吸音だけ。カガシヤが地面を蹴る音さえも響かない。

相手は三億を超える賞金をかけられた海賊だ。その全力は今までウタが相對してきた『敵』の中で誰よりも強い。

霞のように捉え所のない気配を“見聞色の覇氣”で捉え続ける。それには集中力が必要だが、余計な何かがないこの状況であれば逆に捉え切れる。

右手のナイフ。

突き。

そのまま手首を返しての振り下ろし。

刀で受ける。

眼前にナイフ。

しかしそれよりこちらの銃口が向く方が早い。

回避。右だ。

距離を取る。逆側へ。

死角に入られた。だが捉えている。

——振り向き様、こちらの左脇腹を狙うカガシヤを撃つ。

『ツ』

そこで、致命的なミスに気付く。

彼女の「見聞色の覇気」が、その未来を捉えた。

——カガシヤの狙いは、こちらの右脇腹だ。

数瞬の後。

鮮血が、音もなく宙を舞った。



その呼び出しは唐突なものだった。

海軍に入隊してから毎日のように話題の中心になる二人、ウタとルフィ。この二人は年齢こそ非常に若いがあるがその実力と実績により凄まじい勢いで出世の道を歩んでいた。

聞けば、三等兵から正義のコートを着ることが許されるところまでの出世スピードでは歴代トップ5に入るらしい。

二人にとっては出世スピードなどどうでもいいことではある。しかし、一つの区切りではあった。だがその辞令式の直前、彼らとはある会議室に呼び出しを受けたのだ。

元々問題児コンビ扱いされている二人である。呼び出しはある意味日常茶飯事であつたのだが、今回ばかりは心当たりがなかった。

“ちよつとルフィ、今度は何したの？”

呼び出し先の会議室に向かいながら、ウタは隣の幼馴染に言葉を紡ぐ。だがルフィは首を横に振った。

“何もしてねえよ”

“ホントに？”

“寝る時以外このところずっと一緒だったんだからわかるだろ？”

“それはそうだけど”

ここ最近、二人はなんだかんだですつと一緒に行動していた。それこそ寝る時以外はずつと一緒だ。その間には確かに問題は起こしていない。

流石のルフィも寝ている間に問題を起こすようなことはないだろう。そうなる、本当に心当たりがない。

“まあ怒られてもいつものことだろ？”

“それに慣れちゃいけない気がする”

言っているウタもルフィとの勝負の結果騒ぎを起こして怒られることに慣れつつある。人間はどんなことにも慣れるものなんだなー、と他人事のように思っているぐらいだ。問題児コンビと言われる所以であった。

“とりあえず怒られたら即謝罪でいくよ。いつも通りに”

“おう、いつも通りだな”

会議室の前でうんうんと互いに頷きを返す。初手謝罪は重要だ。経験で学んだ。

“失礼します”

ノックをすると共に部屋に入る。

——そして、そこにいた人物に二人揃って驚愕した。

“おお、来よったか”

海軍本部、最高戦力。

大将、赤犬。

今の二人にとっては雲の上ともいふべき立場の人間が、そこにいた。

“……………”

二人して流石に無言になる。

ウタは彼を遠目にしか見たことがない。入隊式の時に参列していたり、重要な式典の時に遠目に見たことがあるだけだ。非常に厳しい人間であり、掲げる正義は“徹底した正義”。実を言うと、今のウタにとっては共感できる信念であつたりするが……あまりにも立場が違い過ぎる。

ルフィの祖父であるガープの存在もあり、“大参謀”と謳われる海軍本部中将つるやガープを慕う海軍本部大将青雉との面識を始め、所謂『お偉いさん』と呼ばれる者たちとの交流が二人にはある。だがそれはガープを通じたプライベートルームなもので、職務上で関わるような立場ではない。

“楽に……は難しいかもしれないが、気を張らんでもええ。聞きたいことがあるだけじゃからのう”

凄まじい威圧感であった。敵と相対しているわけではないのに、足が震える。

同じ人間だとは思えないほどの、絶大なる存在感を放ちながら海軍本部大将が言う。

“順番に……まずはお前じやのう、ルフイ”

“すみませんでした”

“……何故お前は謝つちよるんじや”

若干ではあるが、その会話で空気が和らいだ。ウタは何度もゆっくりと深呼吸をし、気持ちを落ち着ける。少しだけ足の震えが収まった。

“聞きたいことは一つ。……お前はあのドラゴンの息子だそうじやのう”

“ドラゴン?”

赤犬の言葉に首を傾げるルフイ。赤犬を前にこの余裕の態度、大物なのか馬鹿なのか。多分両方だ。

本気でわかっていない様子の幼馴染に対し、ウタは小声で隣のルフイに言葉を紡ぐ。

“……ガープさんに教えてもらったでしょ。あんたのお父さん”

“おお！ 父ちゃんか！”

“まるで他人事のようにじやのう”

ジロリと、赤犬がルフイをまるで見定めるかのように見据える。こちらに視線が向いているわけではないのに、ウタの背筋を冷たい汗が伝った。

“いやだつて会つたことねえし……よくわかんねえ”

“本当か?”

“嘘じやねえよ。爺ちゃんにも聞いてくれ。……そういや顔も知らねえや”

腕を組み、彼にしては珍しく困つたような表情で言うルフィ。赤犬はしばらくそんなルフィを見据えていたが、納得したのか葉巻の煙をゆつくりと吐き出した。

“嘘ではなさそうじゃのう。まあ、薄々わかつていたことじゃア。ただ顔ぐらゐは知つておけ。奴は世界政府最大の敵、世界最悪の犯罪者。知らんで済む相手じやないけえのう”

“うん。わかつた”

頷くルフィ。その彼を何とも言えない表情で赤犬は眺めていたが、まあええ、とルフィから視線を外した。

そして、ウタへと彼の鋭い視線が向く。

“話の流れは理解しちよると思うが。……あの“赤髪”の娘だそうじゃのう?”

“……………ツ”

遂に来たという思いと、できるならば蓋をしておいておきたかつたという思い。その二つが同時にウタの胸中に溢れ出す。

ルフィとは違つて即座の返答がない彼女に対し、赤犬が言葉を続ける。

“そのドラゴンの息子はともかく、お前はそれなりの期間船に乗っておったと聞いておる。それが何故海軍におるんじや？”

“おっさん！ ウタは——”

“——黙れ”

声を上げたルフィを、赤犬はその一言で黙らせた。あのルフィが気圧され、言葉を詰まらせてしまう。

“お前には聞いちよらん。わしが話をしとるのは“赤髪”の娘じや”

凄まじい威圧感であった。赤犬は言葉が続ける。

“海賊は狡猾な連中ばかりというのは知っちよるな？ 特に“四皇”などと呼ばれる連中はあらゆる手段を使つてきよる。……奴らなら海軍にスパイを送り込もうと考えてもおかしくはないのう”

“私は！”

慟哭のような声が響いた。

そこに込められた感情は、あまりにも複雑で。

あの赤犬ですら、言葉を止めてしまう。

“私は海賊なんかじゃありません！”

かつてはそうだった。赤髪海賊団の音楽家——それが彼女にとっての誇りであり、全

てであつた。

大好きだつた。大切だつた。あの日々は、何よりも輝いていた。

——だけど。

その全ては、偽りだつたのだ。

“ほう。ならば何故船を降りた”

こちらを睨み据える赤犬。普段なら怯むそれもしかし、心の奥から溢れ出した感情が押し返す。

“あの男は！ あいつらは私を置いて行つた！ 必要なくなつたから捨てていった！ 振り返りもしなかつた！”

涙が溢れた。何もかもが嘘だつたのだと、偽りだつたのだと叩きつけられた日。

あの人たちは——振り返りもしなかつたのだ。

——麦わら帽子を被つたあの人の、大きな背中が好きだつた。

けれど、今は。

“ウタ”

優しい声。こちらの手を、彼が優しく握つてくれた。

温もりを感じる。自分にただ一つだけ残つた、大切な人。

夢さえも……捨てさせてしまつた人。

“私は。だから、私が”

あの日、彼がくれた理由。

それが、今の私にとっての道標。

“赤髪海賊団は、私が捕らえます”

それが、海兵になった理由。

そうしなければ、前に進めないと思ったから。

“……ならば、今のお前は何者だというんじゃ？”

今の私。

ここにいる、この女は。

“私は、フーシャ村のウタです。……それ以上でも、それ以下でもありません”
幼馴染の手を握る力が強くなった。それを彼は、しっかりと握り返してくれて。

——挫けそうになる心を、支えてくれている。

“違うのう”

だが、赤犬はそれを否定した。

彼は葉巻を手に持ち、真剣な表情でこちらを見据える。

“お前は海兵じやろう。間違えるな”

想定外の言葉に、一瞬呆気にと取られて。

しかしすぐに、はい、とウタは頷いた。

“用は終わりじゃ。……時間を取らせたのう”

二人で一礼し、会議室から出ていく。

赤犬との最初の会話は、そんな風にして終わった。

だがこれが縁となり、海軍の最高戦力と二人は妙な交流を持つことになる。



気配を感知する “見聞色の覇気” というものは万能ではない。むしろこの世に万能の力などないと、そんな風に “毒蛇” の異名を持つ海賊は思う。

気配とは人が発する 『生きている証拠』 とでもいうべきものだ。カガシヤたち暗殺者集団はそういった 『生きている』 という感覚を消すことについての研鑽を重ねてきた。

それは日常での暗殺という形で絶大な力を発揮した。想像してみるといい。多くの

人間が行き交う中、いるのかわからないのかわからないほどの薄い気配の人間が一人。それが近づいて来たとして、警戒などするだろうか。おそらく無意識のうちにぶつからないように避けようと思うだけで終わりだ。

そしてその擦れ違う瞬間にはもう、暗殺は終わっている。

対象を一撃の元に暗殺し、後は当たり前のようにその場から立ち去る。カガシャの都合そこに『音を消す』という力まで加わる。悲鳴さえあげることができなければ、助けも遅れる。そしてその遅れが致命傷だ。

故の「毒蛇」。

突然の死を見舞う、日常に潜む音なき暗殺者。

「――溺れる者は藁をも掴む」

脇腹を切り裂いたことよって付着した血を拭いながら、カガシャは言った。彼女の視線の先には血を流して倒れ伏すウタの姿がある。

「強者というのは、強者であることが弱点じゃ」

背を向ける。相変わらずウタの周囲、そして彼女自身からは音が出ないようしてある。後はもう、何も言わずに死んでいくだろう。

ウタを沈めたのは、カガシャの切り札の一つだ。

一言でいうならフェイントである。本来のそれは打つとみせかけるといふものであ

るが、カガシヤのそれはもう一段深い。

音もなく、気配も薄い敵対者を前にした者はまずカガシヤの存在を捉え続けることに全身全霊の力を注ぐ。それができなければ死ぬだけであるし、実際カガシヤに何もできないまま死んでいった敵対者は非常に多い。

だが、今回のウタのように“見聞色の覇氣”を一定以上の練度で使いこなす相手ならばカガシヤを見失わずに戦うことができる。そうなると集中力と体力の持久力勝負だ。カガシヤの持つナギナギの実際の能力は強力ではあるが直接的な攻撃力を持たない。故にもう一手、そういった強者のための技術があつた。

——それが、フエイント。

こちらを捉えようと集中している相手に対し、少しだけ気配を強くする。それは文字通りのフエイクであるが、それによつて相手の動きを誘導するのだ。少しだけというのがポイントである。あまりに強くし過ぎると相手も違和感を持つ。

攻防の最中、相手はようやくこちらを捉えたと錯覚する。次に来る一手を読み切つたと。だがそれは“死”への道標だ。

捉えたと思つたそこにカガシヤはおらず、その結果として隙を晒せば。その瞬間、彼女は相手の命を刈り取つている。

——“溺れる者は藁をも掴む”。

彼女自身はこの技の名など付けていない。ただの技術であり、そこに名前など必要なかったからだ。だが彼女の部下の一人がそのように評し、それを彼女の中でだけ技の名とした。

普段とは全く違う環境下での戦闘。ストレスが過剰になるその戦いの中で目の前に垂らされた一縷の望み。『相手を捉えた』という感覚に縋る者を、この暗殺者は容赦なく殺戮してみせる。

己の力に対して信を置き、そして実際にその力を持つ者ほど彼女のこの技術を前にすす術なく倒れてしまう。

強者というのは強者であることこそが弱点だ。故にこそこういう結果になる。

弱者の天敵は強者であるが、強者の天敵もまた弱者——よく言ったものだ。

(お主らの希望はここで終わりじゃ)

上にいる者たちの気配を確認しようとするカガシヤ。後は上にいる者たちを擦り潰し、それで終いだ。だが彼女の「見聞色の覇気」がそれを捉えた。

「……浅かったか？」

振り返る。音もなく、「歌姫」が立ち上がっていた。

確かに手応えは完璧ではなかったようには感じていた。踏み込みが甘かったか——いや、そんなことはない。あの一瞬で身を捻り、致命傷を避けたのだろう。

大した反射神経だと思う。『麦わら』の方がかりがその戦闘能力について話題になるが、こちらも大概なのではないだろうか。

「苦しませているのは暗殺者としての落ち度じゃな。——次はきつちり殺してやろう」直後、カガシャ地面を蹴った。無音の移動術。心得がない者であれば捉えることさえもできない歩法術。

対し、ウタは刀を手放していた。銃を支えのようにして立ち上がっている。音は聞こえないが、その呼吸は荒い。

——喉を裂く。

それが一番確実だとカガシャは思った。命を絶つという意味でも、『歌姫』の存在を終わらせるという意味でも。

喉を目掛けて振るわれるナイフ。しかし、それは空を切った。

『紙絵』

文字通りの紙一重。正しく最小限の動きで、ウタはナイフを避けた。ピクリとカガシャの眉が跳ねる。ナイフを何度か振るうが、その全てを最小限の動きで避けられた。

動きが読まれているような感覚に、カガシャが違和感を覚える。目の前にいるのは死にかかけの半死人のはずなのに。

一度距離を取ろうと後方へと飛ぼうとするカガシャ。彼女が地面を蹴ったその瞬間、

狙い澄ましたように一筋の斬撃が放たれた。

『嵐脚』

それは先程までの薙ぐような一撃ではなく、威力も範囲も狭い一撃だった。

しかし——避けられない。

「……………ッ」

弾くが、僅かに足を掠めた。薄く血が流れる。

ダメージは軽微だ。だが、理解ができない。まるでこちらが何をするかを完全に読んでいたかのような一撃だった。だから避けきれなかった。

——何が起こっている？

（偶然か？ いやどちらにせよ同じじや）

先程と同じ方法で確実に殺す。それで終わりだ。

ナイフを構え、一息。直後、その姿が消えた。

「『静音暗殺』」

音もなく、気配もなく。最速の速度を持って移動する技術だ。かつてシキと共にウタの軍艦を襲撃した際にも見せた技。

言ってしまうばただの歩法術であり、移動技術だ。『剃』とも似ているがあちらと違って速度よりも相手の虚をつくことを最優先としている。

狙うは喉。やり方は同じだ。

——「溺れる者は藁をも掴む」。

気配の虚像を放ち、その隙を穿つ技。この絶技でその命を断ち切る。

『……………』

ウタが銃を持ち上げた。変わらず音はないままに、しかし、荒い息を吐いている彼女は、その肩を上下させている。

既に体力は限界のはず。いやそもそも立てたことがおかしいのだ。

腹を貫かれた傷と、致命傷は避けたとはいえ切り裂かれた脇腹。さらに海楼石の錠に繋がれながらの逃亡劇。ここまで命を繋いでいることを評価するべきでさえある。

だが油断はしない。虚像で釣り、確実にその喉を裂く。

フェイクの虚像は左脇腹を狙うもの。そこに気を取られた一瞬の隙に踏み込もうとカガシヤが地面を蹴った。

ウタの銃を持つ手が動く。だが、その手は。

「!?!」

何の迷いもなく、ウタの喉元を狙うカガシヤを捉えていた。

まるで——そこに来ることがわかっていたかのように。

銃声は響かない。

しかし、弾丸は吐き出される。

カガシヤの左肩を、凄まじい衝撃が貫いた。



ぼんやりと月が浮かぶその闇夜に、小さな歌声が響いていた。

時間は既に深夜。穏やかなその歌声はまるで子守唄のようで、その歌声以外には風の音しかない。

歌声が響くのは訓練場だった。ほんのつい先程まで色々な者たちが集まり、一つの戦場と化していた場所だ。それを見渡せるベンチの上で一人の「歌姫」が歌っている。

”—————”

誰かに聴かせるための歌ではない。強いていうなら膝の上で眠っている幼馴染に聴かせるためのものだ。片付けやら何やらを終えた後、電池が切れたように眠ってしまった彼。その寝顔は非常に穏やかだ。

変わらないなあ、とそんな風に歌声の主——ウタは思う。彼にとって大切な、ウタに

とつても大切だった麦わら帽子を被る彼女は膝の上で眠る幼馴染の髪を撫でる。

その間も、静かに歌声が響いていた。深夜とはいえ屋外だ。周囲に小動物の類がいるはずであるが、彼らの声は聞こえない。彼らもまた聴き入っているのだ。

かつて、とある島で教えられたことがある。

“男女も、年齢も、人種も、思想も、信念も、罪悪も、貧富も、文化も……或いは、言葉さえも違つても。キミの歌は届く。そこには平和と平等がある。それができるからこそ我々は『音楽』と呼ぶんだ”

それはウタの根幹にあるものだった。

この歌声を届ける。それだけじゃない。歌声と共に、平和も。

だからこそこの——“平和を届ける正義”なのだ。

“……………”

子守唄のようなその歌が、終わりを迎えた。優しく幼馴染の髪を撫でる。相変わらずの穏やかな顔だ。ほんの少し前、あのクロコダイルと戦った後などは文字通り死んだように眠っていたのに。

“はよう寝ておかんと明日に響くぞ”

見計らつたように——実際に見計らつていたのでろう——そんな声が響いた。振り返ると、そこにいたのは海軍本部大将、赤犬だった。だが彼はいつものスーツも正義の

コートも着ておらず、ラフな格好である。確か……甚平、とかいっただろうか。

“お疲れ様です”

“ああ。……まあ、今のわしは見ての通りプライベートじゃからのう。楽にせい”

言うのと、赤犬は少し離れた場所のベンチに座った。ウタの膝の上で眠るルフィを見て息を吐く。

“呑気な顔じゃのう。……これがあのクロコダイルを討ち取ったとは”

“ルフィはいつもこんな感じですよ”

“どこまでが本気かわからん男じゃのう、そいつも。まあ、全てが本気なのかもしれんがなア”

ルフィとウタ。そして赤犬の最初の出会いこそ互いにいい印象ではないものであったが、様々な事件によって互いの認識が正されていったように思う。

ただまあ、ルフィに対しての認識は一貫している気もするが。

“しかし、随分荒れとるのう”

眼前に広がる訓練場を見て赤犬は言う。道具は片付けたし、地面の整備もしたが規模が規模だったせいであちこちに巨大なクレーターができてしまっていた。こちらについてはどうしようもないため、後日業者による整備の申請を出している。

“明日がオフなので、久し振りにしっかりと訓練しようってルフィと決めたんです。そ

したら私の部下が集まってきて、そこから人が増えて……”

いつものことといえばいつものことである。自分の部下は勿論、知り合いの将校も来たし何なら将官クラスの海兵まできたぐらいだ。

数百人単位で訓練ができるこの場所が少し手狭になりそうなくらい、入れ替わり立ち替わりで人が集まっていた。

“最終的にガーブさんが『わしが全員の稽古をつけてやる』って出てきて”

“何しちよるんじやあの人は”

流石の赤犬も呆れた様子だ。そもそもガーブは書類仕事を放り出してここに来たらしく、片付けの後に連行されていた。本当に何をしているのか。

ちなみであるが、現在救護室は戦争状態である。いい機会として挑んだ若手が軒並み救護室送りにされたためだ。

ため息を零す赤犬。そして彼はウタの方へと視線を送った。

“その割には軽傷じゃなア”

“ルフィが守ってくれたので”

そう、ガーブは久々の稽古として真つ先にルフィとウタを狙ったのだ。相変わらず理不尽な戦闘能力をしていたが、ルフィとの連携で切り抜けた。

ちなみにウタは守られたと言っているが、どちらかというとガーブがそもそもルフィ

をメインに狙っていたというのが大きい。終始ガーブはいい笑顔だった。ルフィとは対照的に。

“……その辺りは流石というべきかもしれないが”

“はい。どんどん先に行ってしまうので、置いて行かれないように必死です”

ルフィの顔を見る。彼の隣に在り続けると決めてから死に物狂いで鍛錬してきた。この幼馴染は誰よりも強いから。だからこそ必死だった。

幼い頃は肩を並べて歩いていたのに。いつの間にか彼の背中を見るばかりになってしまった。

“わしにやあそうは見えんがのう”

“え?”

“いや。……お前は、”見聞色の覇気“の先を知っちよるか?”

突然の問いかけだった。いえ、とウタが首を振ると赤犬が言葉が続ける。

“相手の気配を感知し、相手を読む力。その力の先には『未来』がある”

“未来、ですか?”

“十年後、二十年後の未来など誰にもわからんじやろう。しかし僅か数秒先であれば『視る』ことは可能。それが”見聞色の覇気“が行き着く先”

未来を視る力。それこそが”見聞色の覇気“が辿り着く果てなのだという。

“あの日わしに対して切った啖呵は今も覚えちよるぞ。もしその目的が変わっておらんと言うのなら、それは必要な力じゃ。……わしからすりゃあ、どちらもまだまだひよつ子。焦る必要はないじやろう”

赤犬が立ち上がる。

“邪魔をしたのう”

そして立ち去ろうとする彼はしかし、ふと思いついたように言葉を紡いだ。

“今のお前は間違いなく海兵じゃア。しかし、いつか戻れるとええのう”

——フーシャ村の、ウタとルフィに。

それがきつと、平和の果てじゃ。

呟くように言い残して、赤犬は立ち去っていく。その背を眺めながら、ウタは思う。

あの時に口にした、“フーシャ村のウタ”という言葉。きつとあれは、間違いなく本心で。

“フーシャ村の、ウタとルフィ”

いつか、そう……いつか。

そんな未来が来たらしいと、そんな風に思った。



痛い、という感覚と体が焼けるような感覚。だが音はしない。
いや——一つだけ、音がある。

——ドクン、という心臓の音が響いている。
自分の音ではない。ならばこれは。

きつと、あの海賊の心音。

(この感覚は覚えがある)

死の一步手前。ギリギリの戦いの中で一度だけこんなことがあった。

世界が静かになり、自分の存在と敵の存在だけがやけに強く感じられる。

(だけど)

それだけではない。あの時、彼女には確かに見えたのだ。

——“未来”が。

僅か数秒後に起こる光景が、確かに。

(これが、“見聞色の覇気”の先の領域)

数秒後の未来を視る力。

積み上げてきた努力により磨き上げられた才能が、ここにきて開花する。

「……………ッ、お主」

絞り出すような声が聞こえてきた。見れば、左肩を撃ち抜かれたカガシヤがその肩を押さえている。

その表情には、先程までであった氷のような冷徹さはもう宿っていない。憤怒と困惑。しかしそれを制御しようとする冷静さ。

手に取るようにしてわかる。彼女の音が伝えてくれる。

『ようやく表情が変わったね』

銃を構える。この銃の取り扱いだって、必死になって覚えた。刀もそうだ。体術もそうだ。

ウタはいつだって、必死に努力をし続けた。

——彼女の才能と修練は、既にその領域へ手を届かせる領域に至っていたのだ。

だが、切欠がなかった。しかし奇しくもこの戦争で彼女が置かれた状況がその切欠を作ることになる。

能力者の力を封じる海楼石の錠。非力な能力者であれば満足に動くことさえできないくなるはずの状態でありながらも、彼女は常に“見聞色の覇氣”を使い続けた。枷がある状態でありながらも近場の敵の位置の把握をし、この逃亡劇を乗り切ってきたのだ。

その錠が外された時、蓋をされていた力が解放された。更には死の間際という極限状態であるが故にこそ、その才覚が花開いたのだ。

「……何が起こったかはわからぬが。所詮は半死人」

直後、カガシヤが跳ねるようにして飛んだ。一直線にこちらを狙ってくる。どこを走ってくるのかも、何もかもが「視えて」いた。

——口から、血が溢れ出す。

だが、視えていたところでこの体が限界寸前であるのも事実であった。おそらく長くは動けない。

(ここで決着だね)

そして気付く。視えた未来では弾切れになつていた。故に銃を投げ捨てる。

カガシヤの眉が跳ねた。しかし彼女も止まらない。動かぬ左腕を無視し、最短距離でウタに迫る。

だが大丈夫だ。銃も、刀もなくても。

——彼と同じ、拳がある。

暗殺者の刃が『何か』を貫き。

鮮血が、宙を舞う。

その刃はしかし、*“歌姫”*の喉ではなく。

左掌を、貫いていた。

『捕まえた』

最早追うだけの体力もない。ウタは身を捻り、右の拳を作る。

その動きは、彼女にとって誰よりも大切な人と同じもの。

“相変わらず銃が下手だねルフィ。私の勝ち”

“うるせえ！ いいんだよ俺のパンチは銃よりも強えんだから！”

“出た、負け惜しみ”

それは、とある日常の記憶。

彼の強さを、私は誰よりも知っている。信じている。だけど。

『!!』

それは、音にならぬ絶叫であり絶唱。

渾身の右拳が、カガシヤの顔を捉え。

——地面へと、暗殺者は叩きつけられた。

その瞬間の音はなかった。だが、しかし。

「……ッ、ああッ、ぐ……！」

左掌を貫いていたナイフを抜く。思わず漏れた悲鳴が、音が戻ったことを教えてくれた。

倒れ伏し、完全に沈黙しているカガシヤ。その姿を一瞥し、ウタは倒れた際に落ちてしまった麦わら帽子を拾い上げる。

「言ってなかったね」

大切な麦わら帽子を被り直しながら、ウタは倒れ伏す暗殺者へと静かに告げた。

「——私のパンチも、銃より強いって」

シキの居城、司令室階下。

海軍本部准将 “歌姫” ウタVS “毒蛇のカガシヤ”。

勝者——ウタ。

逃亡海兵ストロングワールド☒

第二十四話 彼女の正義

マリ胤フオードには海軍本部の海兵たちとその家族が暮らす居住地がある。基本的には世界で最も安全な場所という認識であるが、今回ばかりは違った。

表向きは伏せられている「金獅子のシキ」によるマリ胤フオード襲撃。そこから海兵の家族を避難させる先として選ばれたのがシャボンディ諸島であった。マリ胤フオードで戦う海兵たちは襲撃者について知っているが、この件については緘口令が敷かれている。そのため避難者たちは詳しい事情の説明もないままに避難させられ、更にそれを聞きつけた記者たちが集まってくるという状態になっていた。

「マリ胤フオードはどうなってるんですか!?!」

「主人がいるんです! 教えてください!」

「海軍本部への襲撃があるというのは本当ですか!？」

とある海兵に詰め寄るようにして複数の市民や記者たちが集まっている。両手を前に出しながら、詰め寄られている海兵は何度繰り返し返したかもわからない解答を口にした。

「落ち着いてください。こちらにも連絡はないのです。何かしらの進展があり次第、こちらの電伝虫が起動して皆様に状況をお知らせしますので」

彼がいるのは避難者たちように貸し切られたホテル前の広場だ。巨大な電伝虫がスクリーン前に設置されているのだが、現在は沈黙している。

それぞれの家族に割り当てられているのだが、ほぼ全員が広場に出てきていた。彼らは一応事情を知らないはずだ。だが人の口に戸は立てられないし、状況証拠もある。マリンフォードで大規模な戦い——それこそ戦争と呼ぶべきものが起こっているのは明らかであったのだ。

ただ、相手は不明だし現在の状況も不明である。故にこそこうして彼らは集まっている。

「本部からの連絡はないんですか!？」

声上がる。見ると、手にメモ帳を持った男だった。

「いえ、ですの——」

「確認しろ！」

「何も教えずにいつまで待たせる気だ！」

再び静止しようとした海兵に市民たちが声を張り上げる。彼らの不満は既に爆発寸前だった。

だが、ここにいる海兵たちも本当に何も知らないのだ。開戦の連絡こそ彼らには行われたが、その後は決着の後にセンゴク元帥がこの一連の戦いについて説明する手筈となっており、それまで一切の連絡がないことになっている。

むしろ海兵たちも心配であるくらいなのだ。間違いなく戦場となっている場所で戦う戦友たちがどうなっているのかが。

「少佐殿！ 流石に限界です！」

部下の一人が言う。だがこの場の責任者である男は首を左右に振った。

「しかし、我々さえも状況は理解できていないんだ。むしろ知りたいくらいで」

不満だけが溜まっていくが、この場の者たちではどうしようもない。そもそも彼らは本当に何も知らないのだからどうかできようはずもないのである。

どうにもならない停滞感だけがこの場を支配していく。そんな時だった。

——突如、電伝虫が起動したのは。

眠るようにして俯いていた巨大な電伝虫が起き上がり、スクリーンに映像を映し始める。思わずこの場の責任者である少佐は電伝虫の近くに居る部下に声をかけた。

「おい、どうした?」

「わ、わかりません、突然動いて」

海兵たちの間にも困惑が広がる。事前の話では映像を映す際は事前に連絡が入り、それを受けてから避難者たちを集める予定だったのだ。そこでセンゴクから今回の件で開示できる部分を発表する予定だった。

何かトラブルだろうかと思案中、逆に市民や記者たちは電伝虫が起動したことによって何かが始まるという期待を抱く。

しかし、映し出された人物を見て困惑が広がった。

「あれって、ウタだよな?」

「『歌姫』がなんで……?」

「なにか様子がおかしくない?」

電伝虫によって映し出された映像の中心にいたのは、『歌姫』と呼ばれる人物だった。海軍の中でも屈指の知名度と人気を持つ彼女を知る者は多い。いやむしろいつも隣にいる麦わら帽子の青年と合わせて知らない者の方が少ないくらいだろう。

だが、その“歌姫”の様子がおかしかった。普段の彼女はどちらかというと白を基調とした服装であることが多い。しかし画面に映る彼女は黒いドレスを着ており、更に何故か麦わら帽子を被っている。その背には正義のコートを着ているが、そのコートは明らかに血とわかるものでまだらに染まっていた。

「怪我してない？」

「血塗れじゃないか……？」

「何があつたんだ……？」

眩きが伝播し、困惑が周囲へと拡大していく。

顔こそ綺麗にしているが何箇所も包帯が巻かれており、更にドレスの上から腹部に巻かれた包帯からは見てわかるほどに血が滲んでいる。出血が止まり切っていないのだとすぐにわかるほどだ。

満身創痍。一目でそうとわかる状態だった。

普段の彼女を知る者——それこそライブを行う際の彼女を知る彼らにしてみれば、その表情も見たことがないものだった。いつだって笑顔で楽しく歌うのがウタという“歌姫”だ。だからこそ愛されているのだし、人々は彼女を応援する。

しかし、画面の中にいる彼女の表情は真剣そのもの。思わず気圧されてしまうほどの意志をその表情と瞳に宿している。

「おい、本部からの連絡は!」

「何もありません! それどころか繋がらないんです!」

「何だと……!?!? 何が起こってる!?!」

少佐も部下たちも状況がわからず困惑している。何が起こるのか、起ころうとしているのか。それがわかる者はこの場には誰もいなかった。

『——オリン。始めるよ』

『はい』

何の説明もないままに、画面の中のウタがそう言った。彼女の背後から応じる声。見ると、正義のコートを羽織った女性海兵がギターを手に立っている。

彼女が誰かわかる者は何人かいた。いつもウタのライブで楽器を演奏している海兵だ。どんな楽器でもこなす彼女はウタの部下でもあると共に演奏者として常にライブにいたため、実はそれなりにファンがいる。

しかし、彼女もまたボロボロの状態だった。服装には血が滲み、包帯を巻いた状態で立っている。だが彼女もまた強い意志をその表情と瞳に宿していた。

状況も何もわからない中、“歌姫”がゆっくりと口を開く。

そして、市民たちは耳にする。

——世界にその名を轟かせる“歌姫”、その魂を懸けた歌声を。



まるで全身が焼かれているかのようだった。気を抜けばその場に倒れ込んでしまいうまくないに意識が揺れている。

(倒れるのは、もうちよつと我慢)

血を流す腹部を押しえながらウタは内心で呟いた。上を見上げる。そこにはカガシヤが空けた穴があり、その向こうからは戦闘の音と気配が伝わってきていた。

行かなければ、と思ったウタは一度大きく深呼吸をした。それだけで苦痛に顔を歪めてしまう。

だが、駄目だ。

——耐えろ。

己に言い聞かせる。そのための訓練だ。そのための日々だ。そのために死に物狂いで生きてきたのだ。

それに。

ここで倒れたら、*「彼」*の隣に立つ資格なんてない。

「……………ッ！」

歯を食い縛り、床を蹴ってウタは上へと飛んだ。衝撃で痛みが走るがそれを堪えて宙を蹴り、上階へと駆け上がる。

六式の一つ *「月歩」*だ。そうして階下から姿を現した彼女を見て海賊たちが驚愕する。

「嘘だろ」

「カガシヤ様が……………!?!」

カガシヤの配下でない海賊も彼女の配下であった海賊も等しく驚愕していた。

三億を超える賞金首であり、音に聞こえた暗殺者にして海賊。その彼女が一对一の戦いで敗れたという事実には海賊たちに動揺が走る。

だが、誰もが止まっているわけではない。

「撃て！ 奴は手負いだ！」

声を張り上げたのはカガシヤと同じような格好をした女海賊であった。おそらく彼女の部下なのであろうその海賊の号令を受け、慌てて海賊たちが銃を構える。

(来る)

誰が撃つのか、銃弾がどこへ飛んでくるのか。今のウタにはその *「未来」*が視えてい

た。だが。

「……………う」

動こうとした瞬間、思わず膝を折った。まずい、と思うと同時に銃声が響く。

「“鉄塊”!!」

だが、それは巨大な狼によつて防がれた。何者かはわからない。だがウタを庇うようにして立ったその狼の体に当たった弾丸は、金属音を響かせながら床へと落ちていく。

その大きな体でウタを庇った狼は、ゆつくりと構えをとった。前方に対して睨みを効かせながらこちらへと声をかける。

「無事か?」

「あ、ありがとうございます。えっと」

「無事ならいい」

背中越しの問いかけに対して礼を言うのと、狼は素つ気なく答えた。そのままその狼が動こうとした瞬間、凄まじい怒声が響き渡る。

「貴様らア!! 今誰に向かって銃を撃ちおつた!」

それは“海軍の英雄”の声だった。その声の主は近くにいた海賊の頭を掴むと、渾身

の力で投げ飛ばす。

投げ飛ばされた海賊はウタに向かって銃を撃った者たちのいたところに着弾した。そう、着弾である。最早人間が飛んだとは思えない速度で投げられた海賊は十人単位で他の海賊を巻き込み沈黙している。

「……今飛んでつたのはボールじゃねえよな？」

「……人間、ですね」

「……だよな」

狼とウタの間に妙な会話が交わされた。だがそんなことはお構いなしに、その老兵が海賊たちの集団の向こう側から声を張り上げる。

「勝ったんじゃない?」

それは確認の言葉だった。ウタは自身の体に気合を入れ、立ち上がる。

「——はい」

大声は出せなかったが、確かにそう答えることができた。笑い声が届く。

「見事じゃ。——強くなったなウター!」

それは、間違いない心の中の底からの賞賛だった。

幼少期から自分を知る人だ。ルフィと共に散々酷い目に遭わされたし、今でも少し苦手意識がある。だがそれでもこの人の実力は本物で。そして、ずっと自分達を見てくれ

ていた人が言う『強くなった』という言葉の意味はあまりに大きい。

「ここはむしろに任せろ！」

「——そうだな。適材適所だ」

空を駆けるようにして海賊たちの集団から移動し、近くに降り立ったのはモモンガだ。既に彼もボロボロだが、その口元には珍しく小さな笑みが浮かんでいる。

「カガシヤを単独で討ち取ったか。……見事だ。教育係として誇りに思う」

「……モモンガ中將」

ウタがルフイと共に海軍で最も世話になった人物の言葉に、何か体が奥から溢れてくる。

「早く行け『歌姫』。お前の役目はここからが本番だ」

「悪いが急いでくれ」

言ったのはルツチとブルーノだ。その二人に領きを返すと、ウタは司令室へ向かって走り出す。

不思議だと思った。今にも死にそうなほどに苦しかったのに、彼らの言葉を聞いてから体に力が溢れている。

(今ならできる)

体調は最悪。機材だってない。準備なんて何一つしていない。

でも、それでも。

——今までで一番の歌声を届けられる。

そんな確信が、胸にあつた。

「准将！ やはりご無事でしたか！」

司令室に入ると真つ先にオリンがそんな風に声をかけてくれた。中を見回すと、他の部下たちもこちらに親指を立てて笑みを浮かべている。

この修羅場にありながら頼もしいものだ、とウタは思う。

「やはり、つて。……信じてくれてたんだ？」

「当たり前です」

即答されてしまった。随分信頼されているな、と少しだけ苦笑する。

けれど、また一つ覚悟が定まった。彼らの想いに報いなければ。

「あそこのテラスに場所は用意しました。いつでもいけます」

指し示された場所を見ると、幾つもの電伝虫がテラスには設置されていた。オリンが言うのであれば大丈夫なのだろう。彼女のことも他の部下たちのこともウタは全面的に信頼している。

後はそう、自分自身の歌がどこまで届くかだ。

頷き、テラスに向かおうとするウタ。だがそれをオリンが制止する。

「ただその前に準備します。人前に出るのに顔が血塗れなのはアウトです。後そのお腹の傷と左手も。……応急処置しかできませんけど」

言いつつオリンが簡易な応急処置の道具を取り出し、ウタの傷の手当てを始めた。その様子を見て、ポツリとウタは呟く。

「……お母さんみたい」

「せめて姉って言いませんか？」

こちらの腹に止血用の布を当て、包帯を巻きながら言うオリン。年齢的には数歳違いだ。流石に母親というのはおかしいか。

だが、どうにもこういうところがあの人に重なるのだ。山賊のくせに妙に世話焼きだったあのの人に。

「うーん。あんまり姉ってというのがよくわからなくて。母親ならちよつとはわかるんだけど」

実の母親というものをウタは知らない。だから彼女にとっての母親像はどうしてもあの山賊になる。

「なんかちよつと似てるんだよね、オリン。その人に。お世話焼きなところとか」

「准将と大佐を見てると放っておけないんですよ。放つておいても死にはしないんでしょうけど、色々心配にはなります」

呆れた調子で言うオリンは一枚の布を取り出した。それをこちらに手渡してくる。「顔を拭いてください。あと痛むので我慢を」

渡された布で顔を拭いながら治療によつて走る痛みをウタは堪える。だが手際のいいその応急処置で血は止まった。

自分の体を見下ろす。随分と傷だらけだ。

(こんなんじゃルフィのこと怒れないなあ)

いつもいつも無茶ばかりする幼馴染を怒るのは日常の光景だ。しかし、自分がこんな有様では彼のことをとやかく言えない気がする。……いや、やっぱり言おう。それはそれ、これはこれだ。

改めて視線を立ち上がったオリンへ向ける。そこでふと、ウタはとあることを思い出した。

「オリン、私のコートは？」

ルフィがシキによつて貫かれた際、彼の血を止めるために巻き付けてそのまま放置していたウタの正義のコート。オリンのそれが目に入り、そのことを思い出したのだ。

この黒のドレスと麦わら帽子で歌うのも悪くはないが、正義のコートがあるならそれを着たい。そこにはウタの「正義」が込められている。

だが、オリンは申し訳なさそうに首を左右に振った。

「すみません。准将のコートはその、大佐が」

「……そうなんだ」

言いつつ、やっぱり、とウタは思った。あの場所に殴り込んできた時に見た背中。血に塗れたコートはしかし、*“正義”*の文字が貫かれていなかった。ルフィのそれは確かにあの時シキに貫かれていたから引つかかかってはいたのだ。

ルフィがどういうつもりで自分のコートを着ているのかはわからない。時々、あの幼馴染はよくわからないことをする。

しかしそこで、あることに思い至る。

「じゃあオリン、ルフィのコートはある？」

「え、あ、はい。あります。ありますが……その」

言いつつ、オリンがその布を取り出した。それを見て彼女が言い淀んだ理由をウタは理解する。

ルフィが着ているウタのそれよりも更に血に塗れたコートであった。更に背中*“正義”*の文字を貫くようにして一筋の切れ目が入っており、とてもじゃないがこれを正義のコートだと——海軍将校の誇りであるとは言えない状態だ。

「准将。もし必要であれば私のコートを」

「オリンのは借りられないよ。それはオリンの*“正義”*でしょ？……これでいい。うう

ん、これがいい」

背負われるのも、背負うのも。

私にとっては、*「彼」*のものだけでいい。

「海軍の歌姫」が歌うのに、正義のコートもなしじゃ格好つかないしね」

コートを広げ、そのまま羽織る。少し大きい。

……そういえば、とウタは思う。

ルフィとの最初の勝負は『身長』だった。あの時は自分の方が背が高かったが、今では逆転している。

(いつの間にか抜かされちゃったなあ)

こうして彼のコートを着ると実感する。あの日々から随分と時間が過ぎたものだ。

「……准将？」

「なんでもないよ。——じゃあ、始めよう」

黒いドレスの上に血塗れの正義のコートを羽織り、麦わら帽子を被って。

海軍が誇る「歌姫」が、ステージに向かう。その後をついてくるオリンに対し、様子を見ていた部下の一人が声をかける。

「中尉！ これを！」

「……ギター？」

彼女に渡されたのはギターだった。持ってきた海兵が頷く。

「電伝虫探してたら奥の倉庫で見つけたんです。准将の歌に何の伴奏もないとか、うちの部隊の恥でしょ。電伝虫の操作は自分がやりますんで」

「……そうね。うん、確かに。私たちは准将の部下なんだから」

ウタの部隊に所属する者のうち、半数以上が何かしらの楽器の演奏ができる。その中でもオリンはほぼ毎回ウタのライブでは楽器演奏を務めてきているのだ。得意なのはバイオリンであるが、楽器類全般ができる彼女は指導役もしている。

そんな部隊の中心である「歌姫」が戦場で歌うのだ。そこに何の楽器演奏もないというのは彼らのプライドが許さない。

「オリンが演奏してくれるなら安心だね」

ウタが悪戯っぽく笑う。戦争を終わらせるための歌——周りから見れば滑稽な、まるで夢物語のような話。だがそれをここに「歌姫」は実現しようとしている。

——「平和を届ける正義」。

かつて彼女が背負うと決めたその「正義」を、この場所で成すために。

「プレッシャーですね」

オリンが微笑んだ。だがその言葉に反し、その表情には自信がある。

そんな彼女にウタが頷きを返すと二人はテラスへ出た。この妙な気候の島において、

シキの居城が建てられているのは雪の降るエリアだ。気温も低く、刺すような感覚が肌を貫く。

だが、丁度いいとウタは思った。これぐらいの方が気合が入る。大きく深呼吸をする。冷たい空気が肺を満たし、思わず身震いする。

(ルフィ)

ふと、彼のことを思った。どこかでシキと戦っているはずの彼。世界で一番大切な人。

この歌声を誰よりも愛してくれているあの人の力になれたらいいと、そんな風に思った。

「――准将、元帥からです」

即席のステージを用意していた部下が電伝虫を持ちながらこちらへと歩み寄ってきた。彼に対して頷きを返し、受話器を持つ。

この歌声は島の中だけでなく、この戦場全てに届けなければならない。故に本部との連携は絶対条件だ。

「すみません」

第一声をどうするかばかりと考えが、相手のことを考えるとこれが一番だとウタは思った。何かしらの騒動を起こす度にセンゴクに呼び出しを受けていた彼女たちはま

ず謝罪から入るといふ習慣を身につけている。この場で説教されることなどないだろうが、だからこそこの一言が相応しいと思つたのだ。

ちなみにルフィの場合は赤犬と会つた時の第一声も謝罪である。ファーストコンタクトがそうであつたせいで習慣化したらしい。ただまあ赤犬がルフィのところへ来る時は大体が説教なので間違つていない対応ではあるのだが。

そして案の定、向こう側からは苦笑する気配が伝わつてきた。

『無事なようで何よりだ。状況については既に報告を受けている。その上でまず一つ。

——歌えるんだな?』

「はい」

即答した。それに対し、了解した、とセンゴクは応じる。

センゴクのことだ。こちらが満身創痍であることぐらい察しているはず。それでもその言葉を返してくれたのは、確かな信頼があるからだと思う。

『お前が歌えるというのであれば信頼する。それだけのことをお前は成し遂げてきているからだ。だがその上でもう一つ。——できるか?』

問いかけの意味について、わざわざ確認する必要はない。わかり切つたことだ。

「はい」

だからそう応じた。今まではできなかつたこと。でも、今ならできる。いや違う。や

らなければならぬ。

そうでなければ、この「正義」を背負うと決めた意味がない。

『ならば任せよう。何、心配するな』

小さな笑み。

『——責任は私が取る』

そして通話が切れた。電伝虫を部下へと渡すウタの背中へ、オリンが声をかける。

「曲は？」

その問いかけに対し、決まってるでしょ、とウタは微笑む。

それだけで彼女には伝わった。きつと互いに同じことを考えている。それだけの信頼を抱くだけの時間をちゃんと過ごしてきているのだ。

「繋がります！」

部下の一人が電伝虫を繋いだ。心臓が一度、大きく跳ねる。

ライブの時はいつも緊張する。だがそれはどこか心地よいものだ。しかし今日は違う。

「——オリン。始めるよ」

「はい」

両手を広げ、空を見上げる。

背負ったものの重さに押し潰されそうになりながら、それでも「歌姫」は歌うのだ。

……そういえば。

あの日も、こんな空だった。

この背の「正義」を決めた日。あの時も、こんな風に空を見上げていた。

「ねえルフィ。私、決めた」

そうして、彼に告げたのだ。

己の背負う、「正義」の形を。

全ては偶然だった。いつも通り無茶をする幼馴染を追いかけ、部隊から逸れて。ある意味いつも通りと二人で流れ着いた島を探索して。

——辿り着いたのは、貧しい村だった。

今日食べることが精一杯。そんな小さな村。だけど。

「ウタだ！」

「歌姫だ！」

「何でいるの!？」

その村の子共たちは、自分のことを知ってくれていて。

“大変でしたなあ。あまりもてなしはできませんが”

“我々は直接聞きには行けませんけど……あなたのファンなんです”

“偶然でもこうしてお会いできて嬉しいです”

大人たちははなけなしの蓄えを、分けてくれて。

——だから、歌った。

それぐらいいしかできなかつたから。持っていないから。

だけど、私の歌声を彼らは笑顔で聞いてくれた。涙さえ流して。

“一生の宝物です”

そんな風に言う人までいた。

わからなかつた。何故、どうして。

ただの歌に、こんなにも。

“ウタの歌はよ、聴いてると元気になるんだ。力が貰える。——昔からそうだった”

困惑する私に、幼馴染はそう言って笑ってくれた。

“ウタの歌はみんなを幸せにできるんだ”

誰よりもこの歌声を愛してくれている人の言葉。

そこで、ようやく見つけたのだ。

“——私は、この歌声と一緒に平和を届ける。それができる海兵になる”

背負う“正義”の形。それは、あの時に決まったのだ。

幼馴染の彼は、それを聞いて頷いてくれた。

“おれも手伝う。ウタの歌はできるだけ大勢に聴いて欲しいからな”

あの時、何と答えたのだろう。

ただ、嬉しかったことだけは覚えている。

戦場に、その歌声が響き渡る。

それは正しく、彼女の“正義”の形。

——平和を告げる、一筋の光だ。



通信を終えたセンゴクは息を吐いた。ここから先は賭けだ。いくつもいくつも越えなければならぬ壁がある。

まず第一に、ウタの歌声を正しく届けることができるかどうか。ありつたけの手段を用いて繋いでいるが、どんな不測の事態が起きるかわからない。

第二に、彼女の歌をどこまで『聴かせる』ことができるか。センゴクは彼女の歌を好ましく思っているが、今回の相手は殺気立つ怪物たちと海賊だ。その耳にどこまでその歌声が届くか。

第三に、能力の制御がどこまでできるのか。万全のコンディションと状況さえ整えばウタは彼女の能力の適用対象を制御できる。狙った相手だけを眠らせ、彼女の世界へと誘うことができるのだ。しかし戦場においてはそこまでの精緻なコントロールはできない。どうしても味方を巻き込むことがあり、海楼石を利用したイヤーマフラーはその対策のために彼女の部隊の部下は常備している。ある程度は制御できるようだが、戦闘という状況では完璧な制御とはいかないらしい。

(だが今から海兵たち全員で対策をする余裕はない)

センゴクはイヤーマフラーを装着しているが、海兵たち全員に今からそれを徹底させ、その後からウタが歌うというのは現実的ではない。可能な限り対策はしたが最後は彼女の能力の制御次第。

最悪の場合怪物たちに歌声が届かず、海兵たちが沈黙するという事態もありうる。故にこそセンゴクは問うたのだ。

——できるか、と。

そして彼女はそれに対してできると答えた。ならば後は信頼するだけだ。

(何、大丈夫だ)

普通に考えれば分の悪い賭けである。しかし彼は勝利を確信していた。

彼女の背負う「正義」は「平和を届ける正義」。それを背負い、事実それを成し遂げてきた者を信頼しない理由はない。

「任せるぞ」

上空、浮かぶ島を見上げる。「歌姫」はそこにいる。彼が信頼する海兵たちもまた。

「元帥殿！ 繋がりました！」

報告に対して頷きを返す。マリンフォードの各地に設置されている電伝虫が起動し、その歌声を届けようとしていた。

センゴクの近くに設置された映像電伝虫からも「歌姫」の映像が映し出された。随分とボロボロだ。だが、と思う。だからこそ信頼できる。

この戦争の最前線で戦い抜き、そして歌うからこそ。

彼女の歌声は、きつと全てに届くのだ。

——平和を届ける歌声が、響き渡る。

何度も何度も聞いた歌声だ。相変わらず——いや、いつも以上に力のある、誰もが聞き入ってしまう歌声。

戦場に響くにはあまりにも場違いな歌声に、センゴクの周囲の海兵たちも思わず動きを止める。

(音が止んだ?)

ふと、センゴクは気付く。

あれほどまでにうるさかった戦場の音が止んでいる。まるでこの歌声の邪魔をしたくないとでもいうかのように。

海兵たちは手を止めて、まるで仰ぎ見るように天を見上げた。

怪物たちはゆつくりと地面に横たわり、夢の世界へと誘われる。

いつしか。

戦場に響くのは、歌声だけになっていた。

あれだけ降り注いでいた隕石も止んでいる。

ただ、わかるのは。

——彼女の歌は、確かに届いているということだけだった。



島中に——戦場に響く歌声。 “大地の王” と呼ばれる海賊は、己の意識が閉じつつある事実に気付いた。

事前の話によれば、ウタウタの能力は『聴かされる』ことで取り込まれるという。つまり聞こえなかったりそもそもその歌を何とも思わなければ取り込まれることはないのだ。

だから万が一の時があっても大丈夫だと、その男——ラウンドは思っていたのだ。

(政府側の人間の歌を、私は)

どれだけ素晴らしい歌であろうが “歌姫” は世界政府の側の人間である。その歌を受け入れるはずなどないと、そう思っていたのに。

彼女の歌声で、心を動かされた。どこまで……浅ましいのか。

世界政府を認めないと宣っておきながら、何と無様な。

「……どこまでも、私は。政府側の人間の歌などで」

眩き、膝をつくラウンド。その彼に対して声をかけたのはドーベルマンだった。幾度となく戦った宿敵とも呼べる男は、真剣な表情で言葉を紡ぐ。

「——それを、本物の『音楽』というのだそうだ」

刀を下げ、そんな風に言うドーベルマン。彼に似つかわしくない言葉であるが、だからこそ本気なのだ。ラウンドには伝わった。

「だから……恥じる必要はない」

チラリとラウンドは周囲を見た。一人、また一人と海賊たちが倒れ込んでいく。だがその表情は安らかで、苦しみはない。

荒くれの、自分のことしか考えていないような。他人を慮るようなことなど決してないような。そんな者たちでさえ「歌姫」の歌声に心を揺らされているのだ。

「こんな感情は……忘れたと、思っていたが」

——奴隷として生きたあの娘が、この歌声を愛した理由。

それを、ここでようやくラウンドは理解した。

「安心して眠れ。起きた頃には全部終わっている」

ドーベルマンのその言葉が切欠となったわけではないが、ラウンドが地面へと倒れ込んだ。瞼が落ちていく。

だが、完全に落ち切るその刹那。
彼は、その姿を見た。

“ラウンド様。私は奴隷なのです。……だから、あなたと共に生きられません”
遠い記憶の彼方。最大の後悔にして、彼の理由そのもの。
嗚呼、とラウンドは吐息を零した。

——何故、私は。

あの時、そんなことは関係ないと……たったそれだけを、言えなかったのだ。

そして、彼は“歌姫”の世界へと誘われた。

その表情はしかし、どこか安らかであったという。



ドーベルマンの正面で倒れたラウンドを見て、スモーカーが息を吐く。この戦場における最大の脅威はここで倒れた。凄まじい能力だ、と改めて思う。

(こいつの言う通り歌声に心を動かされなけりや無意味というが。……まあ無理だろうな)

その辺の人間ではなく、“歌姫”の歌声だ。伊達や酔狂で名乗れる異名ではないし、その力が偽りであるならそもそも彼女は今こうして歌っていない。

問答無用で相手の心を揺さぶる歌声。故にこそ彼女は“歌姫”なのだから。

(海賊共も眠った。後は)

歌声に聞き入り、思わず動きを止めている海兵が多い中スモーカーは冷静に思考を働かせる。こういうところは彼の真面目さが表れていた。

だが、そんな彼の耳にその声が届く。

『クソが！ どいつもこいつも！』

巨人の中から声が聞こえた。そちらへ視線を向ける。

鎧のほとんどを砕かれ、内部の機械の一部を露出させながらも未だ動く趣味の悪い巨人。その巨体がゆっくりと足を踏み出すところだった。

『このスーツには海楼石を使ってんだ！ 歌声なんか聴いてられるかよ！ 行けフラン

ケン部隊！ お前らは死体だ！ 歌声なんざ聴きやしねえだろ！」

かつては世界政府に所属し、しかし追放された賞金首「墓荒らしのレムナント」。彼のその言葉を聞き、舌打ちと共に十手を握り直すスモーカー。死体を改造するという倫理観の欠片もない外道行為をするその男が最後の敵だ。

「待つてスモーカーくん」

だが、そんな彼にヒナが声をかけた。見て、と彼女が視線で示す先。そこには。

『お、おい!?! どうした!?!』

レムナントの焦る声。それもそのはずだ。彼の操るフランケン部隊——死体によって構成される兵士たちが全て沈黙しているからだ。

つい先程まで自爆を命じられようと忠実に動いていた兵士たち。だからこそ厄介であつたそれらはしかし、今は一步も動かずに静止している。

「……何らかの『奇跡』を想像してしまうわね。ヒナ感傷」

彼女の言葉に対し、スモーカーは何も言えなかつた。焦つた様子のレムナントの声。そこへ一人の海兵が歩み寄る。

「——ようやく空いたようだ」

ヒツ、という小さな悲鳴。その直後に。

——何もかもを貫くような、破壊するような衝撃音が響き渡つた。

レムナントは粉碎されたスーツから吐き出されるようにして放り出されると、そのまま地面へと叩きつけられる。既に意識はなかった。

「……やり過ぎたか？　だが、仕方ない」

たった一本の竹竿でそれを成した男は、土の壁の向こう側を見つめて呟く。

「この歌声を聴きたいのに……耳障りだ」



誰もが声を出せずに、ただただ無言で聞き入っていた。

海兵たちも、海賊たちも、怪物たちも。

その歌声の前には全てが平等であった。

「……何度聴いても、いい歌声じゃ」

呟くのは「英雄」だ。彼としては珍しいほどに小さな声。思わず溢れてしまったようなその呟きは、彼自身が何度も彼女の歌声を聴いてきたからだろうか。

その場にいる他の者たちも同じ感想を抱いている。それでも誰一人として言葉を発

さないのは、自分の声でこの歌声の邪魔をしたくなかったからだ。

拍手の音も声援もない。ただただ、その歌声だけが響いている。

数多の無法者たちと戦い続け、臆することなく声を上げ続けてきた「正義」を背負う者たちはしかし、たった一人の「歌姫」によって動きを止めていた。

(なるほど、平和か)

彼女が背負う「正義」について、ガーブはちゃんと知っている。それは美しいものではあるが理想論だ。血さえ流れなければ平和だとガーブは思っているが、それは彼なりの妥協点でもある。

この大海賊時代において——いや、時代は関係ないだろう。あまりにも多くの人が生きるこの世界において、正しい意味での「平和」も「平等」も存在しないのだから。

その上で思う。彼女の掲げる正義にはきつと妥協がない。それを若さ故、世界を知らぬが故と断じるのは簡単だ。

しかし、とも思う。

この歌声を聴いていると、その果てには真の意味での「平和」があるのではないかと。

そう思わせるような『何か』が、彼女の歌声にはあるのだ。

(見事じゃ)

——一人、また一人と海賊たちが倒れていく。
だが、そこには苦痛はない。あるのは安らぎだ。
戦争が終わろうとしている。
残る敵は、後一人だけ。



一体、どれだけの数の歌を紡いできたのだろう。

最早思い出せない。古い始まりの記憶では既にもう、この口は歌を奏でていた。
波に揺られ、麦わら帽子のあの人の——海賊の下で。

“なあウタ。この世界に平和や平等なんて存在しない”
ふと、その言葉が蘇った。

“だけどお前の歌声だけは、世界中の全ての人を幸せにすることができる”
あの人の言葉を、なんで今更。

……いいや、わかってる。わかっているのだ。

全ての原点は、あの人で。

ウタという人間は、そこから始まったのだから、
だけど。

「——私は、この歌声と一緒に平和を届ける。それができる海兵になる」
そう決めたのは自分自身で。

「どう？ 似合うかな？」

彼と共に在る未来を願ったのもまた、自分自身。

だからこそ歌うのだ。

この歌声で。彼が愛してくれているこの歌で。

——世界に、平和を。

全てに届けと、祈るようにして歌うのだ。

歌が終わる。拍手も歓声もない。賞賛の言葉もない。

だが、知っている。この沈黙こそが何よりの誉れであるのだと。

静寂の中、ウタの口から漏れた白い吐息が宙に溶けていく。

——そこで、彼女は「視た」。

「〃獅子威し・御所地巻き〃!!」

響き渡る声と同時。城の周囲に降り積もった雪が突如動き出し、獅子の形を作った。それらはまるで咆哮のような地響きの音を立て、ウタとオリンのところへ迫ってくる。声を上げようとするオリン。それをウタが手で制する。

「大丈夫」

「——〃ゴムゴムの〃!」

二人の言葉は同時だった。地上から突き破るようにして上昇する一筋の軌跡。そこから一人の海兵が空へと飛び出した。

「〃JET銃乱打〃!!」

ウタたちへと襲いかかる雪の獅子たちを、無数の拳が打ち砕いていく。

獅子を形作っていた雪が砕け、宙を舞う。幻想的な光景の中、その海兵は一羽の鳥を抱えながらこちらへと後退してきた。

「ありがたいなビリー。お前のおかげで何とかかなりそうだ」

「……クオ……ッ」

優しくテラスへと降ろされるのは、黄色い翼を持つ鳥だった。ビリー、と彼——ルフィが名付けたその鳥のそばに歩み寄ると、その体をウタは優しく撫でる。小さくビリーが鳴き声を上げた。

「悪い、ウタ。ビリーを頼む」

「うん、わかった」

振り返らないままに言うルフィに対し、頷きながら言葉を返す。そして何かを言おうとしたウタを遮るように、空から声が届いた。

「大した歌だなベイビーちゃん。思わずおれも聴き入っちゃった」

「どうもありがとう。そのイヤーマフラーがなければもつと聴きやすいと思うけど？」

「ジハハハハ！ そいつはできねエ相談だな！」

笑うのは「金獅子のシキ」。この戦争の元凶だ。

既に彼の陣営はほぼ沈黙している。残るは彼一人だけだと言うのに、随分と余裕だ。

まだ何かあるのか——そう思うウタの視線の先で、シキが笑みと共に言葉を紡ぐ。

「しかし、本当に凄まじい能力だ。——なあ、ベイビーちゃん。もう一度改めて言うぜ？

おれの仲間になれ。その力は世界さえも支配できる力だ。この海を、世界を支配できる力を海軍なんざに置いておくのは勿体ねエ」

冗談のようである、冗談ではない台詞だった。誰が、とウタが言いかけたところで、静かな声が響く。

「——本当に何もわかってねえんだな」

感情のこもっていない、あまりにも淡々とした言葉だった。ウタでさえルフィのこんな口調はほとんど聞いた記憶がない。

ルフィは感情表現については非常にストレートだ。その彼がここまで無感情な言葉を吐くのはほとんど記憶にない。

——ただ。

その僅かしかない記憶の中の彼は、誰よりも。

「わかってねエだと?」

「ウタは平和のために歌ってるんだ。支配のためじゃねえ」

それは彼女の背負う『正義』だ。しかしシキは一瞬驚いた表情を見せるが、すぐに笑い声をあげる。

「ジハハハハ! 言うに事欠いて『平和』だと!? くだらねエ! そんなもんこの世界にあるわけがねエだろう!」

大声で笑うシキ。そのまま彼は言葉を続ける。

「この大海賊時代に『平和』なんてありはしねエ！ ロジャーの馬鹿が始めたこの時代！ そんなもんは消え去った！ そしてお前ら世界政府はそれを防げなかつた能無し共だ！」

彼の『海賊王』の処刑より始まったこの大海賊時代。それにより『平和』という概念がいかに脆く、そして儂いものであるかを世界は知った。そして未だ世界政府はこの時代を終わらせることができないでいる。

「……いや、待てよ。考えようによつてはおれの支配する世界は『平和』だぞ？ おれという絶対者の下でなら全員が平等で平和だ」

響き渡る笑い声。一步、ルフィが前に入る。

「そのどこが平和だ」

「なら平和なんてものはどこにもねエなア」

肩を竦めるシキ。いいや、とルフィは言った。

チラリと、ウタの方を振り返り。

「——（ハハ）にある」

そう、宣言した。

ほう、とシキは笑みを深くする。

「高説は結構だが。ここでおれに勝てねエようなら結局同じだ」

言うのと、シキはその両手を広げて何かを掴むような動作をした。

直後、世界が揺れる。

凄まじい轟音が響く中、思わずよろけたウタをルフイが支える。

「まさか」

揺れる地面。シキの能力。そして彼らが今いる場所。

それが指し示すのは。

「ベイビーちゃんは気付いたようだなア」

空に浮かぶ『伝説』の大海賊。その規格外の能力が牙を剥く。

「そうだ、このメルヴィユをマリolfordへと落とす。残念ながらおれの部下たちは

全滅しちまったようだからなア。これはもう、最後の手段に出るしかねエ」

どうした、とシキは笑みと共に首を傾げる。

「その歌声でおれを止めればいいじゃねエか」

「……………ッ」

思わず拳を握り締めるウタ。しかし、その彼女の頭を麦わら帽子の上から優しく押さ

える手があった。

ルフィだ。彼はシキを見据えながら言葉を紡ぐ。

「それはおれの役目だ」

「しつげエなア、ガープの孫。散々遊んでやったんだ。それが無理なことはわかったんじゃないか?」

呆れた様子の子のシキ。ルフィはそんな彼には答えず、オリンの方へと振り返った。

「オリン。ウタを頼む」

「は、はい」

「ルフィ?」

ウタの問いかけに、ルフィは小さな笑みを持つて回答とする。

「ビリーのおかげだ。ようやくじいちゃんと言う戦い方を形にできる」

激しく揺れる地面。その中でウタは目撃する。

最大の信頼を置く彼の、更なる姿を。

「——ギア、4」



“人間というのはある日突然強くなることなどない。いきなり強くなったように見えても、それは元々持っておった力を発揮しただけに過ぎん”

己の祖父からの言葉を思い出す。この場所に来るまでの短い時間で教えられたのはシンプルなことだけだった。

“ギアといったな？ 無茶な戦法じゃが有効ではある。しかしそれでは届かんじやろう。奴も歳じや。衰えてはおるじやろうがそれでも今のお前では届かんじや。じゃあどうすりやいいんだ。”

その問いに対し、祖父はため息と共に言葉を紡いだ。

“全てを同時にこなせ。それでようやく勝負の場に立てる”

無茶な話ではあつた。ただでさえ負担が凄まじいギアを同時になど。

“勘違いしておるようじやがな。ギアだけではない。お前が今まで積み上げてきた全てを同時に出世とわしは言っておるんじや”

積み上げてきた全て。これまでの戦いで培った全てを。

だが、頷いた。そうしなければ勝てないとこの祖父が言うならきつとそうなのだろう。

——それに。

どんな手を使つてでも、彼女を取り戻すと決めていた。命を懸けるくらいは前提条件だ。

“以上が海兵としての意見じゃ。……家族としては、そうじゃな”

一瞬、ほんの一瞬だけ。

迷うような表情を見せた彼はしかし、こう言った。

“取り戻せ”

その言葉に。

当たり前だ、と応じた。

「ギア、4」

必要だったのは、どうやって安定させるか。

身体能力を極限まで上げるギア2と体を肥大化させて攻撃力を上げるギア3。それの同時使用は凄まじい負担を体に掛けることになるが、それはこの際どうでもいいことだ。問題はその持続方法である。

ギア2はともかく、ギア3が問題だった。元々瞬間的な威力増加のための戦術だ。長時間の持続を考えていない戦術なのである。空気が抜けてしまうのだ。

それを持続させる手段を、シキと戦いながら色々と考えた。そしてその結論がこれだ。

——それは、異形と言つてもいい姿であつた。

巨大な腕と脚。それに対し、胴体は元のまま。彼が「巨人」と命名したその腕と脚は「武装色の覇氣」を纏い、黒く染まつている。それだけではない。部分的に六式の一つである「鉄塊」を用い、萎むことを堪えている。

「ぐ、ゲホ」

苦しい。保つだけで相当な精神力と体力を消耗するそれを見て、シキが僅かに表情を変えた。

「まるでバケモノだなア、ガーブの孫。随分苦しそうだ」

その言葉に答えることはせず、ルフィは床を蹴る。

「『ゴムゴムのオ』——」

凄まじい移動速度であつた。一瞬でその場の者たちの視界から消えたその異形は、いつの間にかシキの正面。空へと上がっている。

そこは射程圏内だ。——互いにとっての。

「『斬波』！」

それは反射的な行動であつた。両足の刀を振るうことによつて放たれる飛ぶ斬撃。

二筋の刃がその異形を指して宙を飛ぶ。

対し、異形——ルフィはその右拳を臆せずに放つ。

「——JET巨人の銃!!」

まるで空を吹き飛ばすような一撃だった。シキの放った斬撃を容易く蹴散らし、その拳が対象へと直撃する。

鈍く、重い音。吹き飛ばされたシキが宙を舞う中、ルフィもまた再びテラスへと戻ってくる。

「クソツ……ふんー!」

萎みかけた体にもう一度力を入れ、ルフィはその形を保つ。空ではシキが体勢を立て直し、ルフィの方へと視線を向けた。

口元の血を拭うその表情は真剣だ。先程までの侮りなど微塵もない。

「効いたぜ、ガープの孫。だが随分と苦しそうだ。一体何分……いや、何秒保てる?」
問いかけ。それは確認するような言葉だった。

——お前はおれの敵として相応しいのか。そんな問い。

「お前に勝つまで!」

そして、「新時代の英雄」は叫んだ。

それは、彼自身が定めた覚悟。

「上等だ」

シキが両手を構えた。名乗れ、と重い覇気の込められた言葉をシキが放つ。

「この『金獅子のシキ』が！ お前の名を覚えてやる！ 名乗れ！ ガープの孫！！ い

や——『新時代の英雄』！！」

一度、大きな深呼吸。

その青年は、真つ直ぐにシキを見据えて名乗りを上げる。

「おれは海軍本部大佐！ モンキー・D・ルフィ！ お前を超えて——」

その名乗りを、覚悟を。全ての者たちが見たという。

背負った『正義』と共に。新たな世代の『英雄』は宣言する。

「——平和を届ける男だ！！」

彼が今背負っているのは、彼にとって最も大切な人の『正義』。

踏み躪られそうになった、彼女の誇り。

「この島がマリントフォードに落ちるまでそう時間はかからねエ！ 決着といこうじゃ

ねエか海軍！ モンキー・D・ルフィ！！ おれはこの戦争に勝ち！！ ロジャーを超え！！
世界を支配する！！」

大海賊、〃金獅子のシキ〃。その堂々たる宣言。

「させねえ！！ マリンフォードも！！ 東の海もおれたちが守る！！ 勝つのはおれだ！！」
対し、〃麦わらのルフィ〃も臆さない。

マリンフォード上空、メルヴィユ。

そこで、世界の命運を懸けた戦いが始まった。

逃亡海兵ストロングワールド☒

最終話 〃麦わらのルフィ〃

〃ごめんさい〃

〃とりあえず謝っておけばいいと思っていないか?〃

廊下で偶然出会った青年——ルフィに対し、センゴクは呆れた調子で言葉を紡いだ。珍しく一人で歩いていたルフィであるが、彼はセンゴクと会うととりあえず謝罪から入ることを習慣にしている。全く、とセンゴクは息を吐いた。

〃今日は何をやらかした?〃

〃いや何もしてねえ〃

だったら最初の謝罪は何だったんだと思うが、センゴクはスルーした。ルフィの祖父とは随分長い付き合いだが、とても残念なことにこの青年はその祖父に随分と似てきている。問題ばかり起こすところが特に。こういう手合いは考えるだけ無駄だ。

ちなみに余談であるが、この後ルフィが祖父と共に訓練場を半壊させたと報告を受け

て改めて呼び出すことになる。つまりちゃんとやらかしていたし謝罪の意味はあった。セングクの怒鳴り声が響くのも日常である。

“まあとりあえず信じよう。……しかし一人とは珍しいな。あの子はどうした？”

“いやそれがウタと訓練場で勝負してたらじいちゃんに来てよ。逃げてきた”
“ああ、うん。なるほど”

何をしとるんだあの男は、とセングクは呆れた表情を浮かべた。『孫が嫁を連れて海軍に入ったんじゃ』と満面の笑顔で語った友人はことあるごとにその二人に絡もうとする。そしてその手段に鍛錬を選ばせいで逃げられるを繰り返しているのだが、そろそろ本気で説教した方がいいかもしれない。

“そんでよ仏のおっちゃん。逃げてるうちに逸れちまったんだけど、ウタを見てねえか？”

“いや見てないな”

“そっかー。どこ行つたんだ？ 大声出すとじいちゃんに見つかるとしな”

腕を組み、うーんと唸るルフイ。ちなみに現在、ウタはルフイを囚にして女子寮に逃げ込んでいた。流石のガープも女子寮には入らない。というか入った日には張り倒された上で洗濯される。同期の女性中將に。

“まあ、ほどほどにしておけ”

この一族に付き合うと胃にダメージが入る。悪い人間ではないのだが、それが余計に性質が悪い気がする。

と、そこでセンゴクはとあることを思い出した。

“そういうえば、あの子の正義について話を聞いたぞ”

“え、誰からだ?”

“ガープが嬉々として喋っていたが”

“あー……”

なんともいえない表情をするルフィ。孫にこんな表情をさせる祖父もどうなのだと
思う。

“まあ別に隠すようなもんじゃねえだろうし、いいか”

“その辺りは人それぞれだろうな。……あの子は立場もあってどうしても注目を浴
びる立場にある。わざわざ私が言うまでもないと思うが”

“大丈夫。わかつてる”

言い切る前にそう返された。そうだな、とセンゴクも微笑む。彼に対してこんなこと
を言うのは本当に今更のことだ。

自分が知るよりも遙か以前より二人は一緒にいるのだ。そこに口を出す必要もない。
故にセンゴクはもう一つ気になっていたことを口にする。

“お前の方は見つかったのか？”

“……正直、わかんねえ”

彼にしては珍しく、考え込むような表情だった。

一部では“新時代の英雄”とまで呼ばれる彼はしかし、明確な“正義”の形を決めることができないでいた。つい先日にも彼の幼馴染がそれを定めたということもあり、気になつていたので。

“まあ、焦つて決めるようなものでもない。じっくり探せばいいと思うが”

セングクはあくまで“正義”とは“価値観”であり、個人の思想による部分が大きいと考えている。模範となるべき——というより規範となるべき概念はあるが、それが正解というわけでもないのだ。

その出世スピードと実績のせいで混乱するがまだ十七歳の青年である。すぐに決められるようなものでもないだろう。

“ヒーローつてのもなんか違うしなア……”

頭を捻り続けるルフィ。そんな彼に対し、ならば、とセングクは言葉を紡いだ。

“目標はないのか？”

“目標？”

“ああ。海兵として何がしたいか、という根本的な部分だ。あの子は“赤髪”を捕ら

えることが目標だろう？ お前にはないのか？”

今や“四皇”の一角たる大海賊、“赤髪のシャンクス”。それを捕らえるというのは目標としてはあまりにも大きな話であるが、彼女の背景を考えると否定もできない。

その彼女を誰よりも身近で見ているのがルフィだ。最初は彼の目標も同じだと思っていたが、どうにも違うとセンゴクは感じていた。

“あれはウタの目標だ。協力はするつもりだけど、おれの目標かっていうとそれは違う”

“ふむ、であれば……夢、と言い換えようか”

目標と夢。そこに含まれるニュアンスには僅かであるが確かな違いがある。

“夢かア……”

“大海賊時代を終わらせるとか、大将になるでないとか”

“大将についてはどっちが先になるかでウタと勝負中だけど、それが夢かっていうと違う気がする”

彼がここまで悩むのも珍しいな、とセンゴクは思う。祖父に似て動いてから考えることが基本の彼は悩む姿を見せることが少ない。もうちよつと落ち着けと思うが、その辺りは幼馴染の彼女がカバーしているのでもいいのだろう。多分。きつと。あの子もあの子で割と暴走気質なのでセンゴクはちよつと自信がなくなってきた。

“子供の頃の夢はどうだったんだ？”

“んー、海賊王になることが夢だった”

センゴク以外の者がいたらギョツとする発言であった。彼の祖父から『孫が海賊になりたいなどと言っておる。けしからん』と毎日のように聞かされていたせいではあるが、それがなかつたら彼も驚いていただろう。

海軍が誇る“新時代の英雄”にして“麦わらのルフィ”とまで呼ばれる海兵。その男の夢が“海賊王”になることだったとは。モルガンズ辺りが聞けばスクープにしそうである。

“その夢は諦めたのか？”

“諦めたんじゃなくて変わったんだ”

被っている麦わら帽子を手取るルフィ。その表情には様々な感情が込められていた。

変わった——つまり、“夢”そのものはあるということだ。しかし、容易に踏み込むべきでないのだろう。故にセンゴクは彼が話さないならそれでもいいと思つた。

“話したくないならいいが”

“いいよ。仏のおっちゃんなら”

そして、その青年は笑みと共にその答えを口にする。

“おれの夢は、ウタと一緒にいることだ”

それはあまりにも純粋で、ささやかで、しかし……切実だった。

齡17の青年とは思えぬほどの覚悟が込められた——“夢”。

“おれの夢は……半分叶ってるんだ”

麦わら帽子を被り直しながら言うルフィ。その彼に対し、そうか、と小さな笑みと共にセングクは頷いた。

“大変だぞ”

“知ってる”

いい笑顔だった。そんな彼に更に言葉を重ねようとしたセングクの耳に聞き慣れた声が響く。

“——見つけたぞルフィ!”

“げっじいちゃん!?”

“げっ、とは何じゃ!”

向こう側から突き進んでくる“海軍の英雄”。彼の姿を見ると他の海兵たちもすぐに道を空ける。慣れた様子だった。

そしてルフィが反対側へと駆け出していく。全く、とセンゴクは息を吐いた。その彼の側をガープが一目散に駆けて行く。

“もうちよつと上手くやれんのか”

相変わらずの友人に対し、そんなことを呟く。

——今日も、海軍本部は平和だった。



マリルフォードへとゆつくりと移動を開始するメルヴィユ。側から見る速度は決して速くはないが、それでも質量が質量である。その島は凄まじい揺れに見舞われている。

だが、空にはその揺れは関係ない。浮島の上空には二つの影があった。

一人は、“麦わらのルフィ”と呼ばれる“新時代の英雄”。両腕と両足が巨大化し、更に“武装色の覇気”を纏う姿は歪であり異形。

一人は、“金獅子のシキ”と呼ばれるかつての“四皇”が一角。その両足はかつて脱

獄する際に切り落とし、己の愛刀を脚としている。かつて「海賊王」とも渡り合った伝説だ。

この戦争における最終決戦。最早その戦いに介入できる戦力を互いに用意することはできず、この戦いが戦争の決着となっていた。

「どうしたルフィ!? さっさとおれを倒さねエとマリルフォードが滅びるぞー!」

「言われなくても!」

自由自在に空を飛ぶシキに対し、モンキー・D・ルフィは跳ねるようにして宙を舞う。六式の一つである「月歩」を使つての空中移動にゴムの弾力を加えることで速度を上げているが、それでもシキに比べると自由度が低い。

「『ゴムゴムのオ』!!」

文字通りの全身全霊。今のルフィにとってその一撃全てが魂をかけた一撃だ。

「『JET巨人の回転弾』!!」

拳に回転を加え、威力を上げた一撃。その一撃をシキは受けて立つ構え。

「いい覇気だ。だが——まだ足りねエぞ!!」

シキの両足の刀、「桜十」と「木枯し」。武装色の覇気を纏ったそれが、黒刀に至る。

そしてシキは自分自身の体を横向きにし、薙ぎ払うようにして両足を振る。

「——ッ!!」

衝突の直後、轟音が響いた。大気が揺れる衝突は一瞬だけ拮抗するが、すぐに天秤が傾く。

「ぐッ!?!」

押し負けたのはルフィの側だった。その巨大な黒腕から血が流れる。

深い傷ではない。だが、重要なのはそこではない。互いに「武装色の覇気」を纏った渾身の衝突。そこでルフィが押し負けたという事実が重要だ。

そしてその事実を受け、「金獅子」が吠える。

「どうしたモンキー・D・ルフィ!? おれに勝つんじゃねエのか!?!」

「『ゴムゴムのオ』!!」

ルフィは言葉で応じない。その一撃を持って解答とする。

「『JET巨人のスタンプ』!!」

正面に蹴り飛ばすような足裏の一撃。それをシキは両腕を前に出し、「武装色の覇気」を纏って受け止める。

再びの轟音。骨が軋むような音がシキの腕から響く。

こちらにもまた、拮抗は一瞬。堪えきれず後方へ吹き飛ぶシキはしかし、自身の能力によつて体勢を立て直す。

「やるじゃねエか……！ つくづく海兵にしとくのが惜しい男だ!!」
「うるせエ!! おれは海兵だ!!」

空中を蹴り、こちらへと迫ってくるルフイを待ち構えるシキ。両手を広げ、彼はメルヴィユの大地から己の武器を作り出す。

「知ってるさ……！ だから惜しいと言ってるんだ!!」

シキの周囲に浮遊する無数の岩が形を変え、その姿を形作る。

「ここで殺すのがなア!!」

現れたのは無数の獅子の頭であった。数は最早わからない。次から次へと出現する岩の獅子はまるで咆哮するかのように地鳴りのような音を上げる。

「〴〵獅子威し・万雷〴〵!!」

そして、その獅子たちが一斉にルフイへと襲いかかった。まるで空を埋め尽くすかのような岩でできた獅子の群れ。対し、ルフイは退かない。

ここで退けば待っているのは敗北であると、彼の本能が告げていた。

「J E T 巨人の銃乱打!!」

獅子と拳の激突。轟音が響く中で獅子たちが打ち落とされていく。

容易く壊せるような獅子たちではない。それを拳の一撃で粉碎するのは見事であるが、しかし、純粹に手数足りない。

「——惜しいなあ、ルフィ」

シキの呟き。その直後。

無数の獅子が、*“麦わらのルフィ”*を飲み込んだ。



その戦いの光景はマリolfォード中に——そして、シャボンディ諸島にも届けられていた。先程まではウタの姿を映していた映像電伝虫の視点が変わり、メルヴィユの上空で行われる戦いを映しているのだ。

それをマリolfォードに用意した高台から見つめるセンゴクはただ無言で腕を組んでいた。彼の周囲では——いや、マリolfォード中で海兵たちが息を呑んでその戦いを見守っている。

この戦いの結末によってこの戦争の勝敗が決まるのだ。見ないでいられるわけがない。

「元帥殿。どうやらシャボンディ諸島の避難民の方にも映像が。止めさせますか？」

腕を組み、黙して見守っていたセンゴクにそう声をかけてきたのはブランニューだ。その彼に対し、いや、とセンゴクは言葉を紡ぐ。

「必要ない。……見ておくべきだ。この戦いの結末がどうなるうと」

——いずれにせよ、明日の世界は変わる。

そう呟くと、センゴクは拡声器を手にとった。彼は既に覚悟を決めている。だがそれは他の海兵たちに強制するようなことではない。

「見ての通りだ」

誰もが海軍本部大佐、*「麦わらのルフィ」*の戦いを見つめる中。海軍本部元帥の言葉が響く。

「シキはあの浮島——メルヴィユをこのマリルフォードに落とすつもりだ。それを止めるためにあの場で戦っているのがルフィ大佐であり、現在の我々にあの島が落ちる前にあの場所へ送れる戦力はない」

時間さえあれば戦力を送ることはできる。だがそれはシキもわかっている。だからこそこの強硬手段だ。

「私はこの戦争の責任者としてこの場に残る。だが皆にそれを強制するつもりはない。……よく戦ってくれた。戦争は我々の勝利だ。しかし、シキは最後の悪足掻きでそれをひっくり返そうとしているだけに過ぎない」

あの島はシキの計画にとっても重要な存在であるはずだ。それをマリンプォードに落とすことは考慮はしていただろうが文字通り最後の手段であったはずだ。

その言動で大物ぶっているが、追い詰められているのは向こうの方だ。だがその足掻きを馬鹿にはできない。

「それを止めるために戦っている我々の戦友を……私は、信じたいと思う」

——信じるぞ、ガープ。

お前ではなくルフィをあの場合に立たせ、シキと相對させた。そこに賭けたお前の意志を私も信じる。

「まあ、あいつなら大丈夫でしょ」

センゴクの持つ拡声器によって響く声に割って入ったのは、どこか緩い調子のそんな声だった。センゴクが振り返ると、そこには海軍本部最高戦力の一角である大将「青雉」の姿がある。

「クザン。お前も残る気か？」

「逃げるのは性に合わないもんで」

肩を竦める彼はそのままその場に座り込んだ。何の緊張感もない様子で、しかし、確かな信頼を込めた言葉を紡ぐ。

「なんだかんだでいつも勝ってきた男だ。あの場にいた奴らがルフィに任せる判断をし

た以上、こつちがドタバタするもんじやないでしょ」

いつも通りの彼の口調に、センゴクも小さく笑う。

海兵たちは動かない。ただ黙し、その映像に映る自分達の戦友の戦いを見守っている。

——声が上がった。

それはまるで伝播するように他の者たちへと伝わっていく。

押し潰されるようにして獅子たちに喰らい付かれた青年が、そこから姿を現したのだ。

(信じるぞ)

散々手を焼かされた問題児だ。だが同時に多くの功績を上げた期待の星でもある。

誰が最初に呼んだのか。『新時代の英雄』という名は決して冗談で与えられた名前ではないのだから。



獅子たちによる濁流とでも呼ぶべき攻撃を受けたルフィの姿を見て、揺れる大地に立つオリンが息を呑んだ。部下として長い付き合いだ。いつだって奇跡のような勝利を掴んできたルフィの強さを彼女はよく知っている。

砂の国を乗っ取るうとした「七武海」が一角、サー・クロコダイル。

天国に最も近い場所を地獄にしようとした男、神・エネル。

金こそこの世の全てと叫び、何もかもを支配しようとした「怪物」テゾーロ。

それだけではない。いつも命懸けでモンキー・D・ルフィは戦い抜いていた。

だから信じなければならぬ。信じたい。なのに。

「……ルフィ大佐……」

今ルフィと戦っている大海賊、「金獅子」の力は圧倒的だ。その能力の規模がそもそもあまりにも強大に過ぎる。島一つを動かす、更にあれだけの規模の攻撃手段を持っているとは。

これが、「伝説」。

かつて世界の頂点たる領域に君臨していた化け物の力。

「そんな顔しない」

こちらに背を向けているウタがそんな言葉を紡いだ。思わず視線を向けると、振り返らないままに彼女は言う。

「ルフィがシキに勝つて言ったなら、それはもう決まった『未来』。……むしろこの後の方が大変かな。戦った後のルフィはよく食べるし」

呑気な口調と台詞であった。一瞬強がりかと思っただが、すぐにそうではないと気付く。

その横顔には笑みが浮かんでいた。そこにあつたのは全幅の信頼だ。

「……強いですね」

「それはそうでしょ」

ウタが振り返る。直後。

「ウオオオオオツツツ!!」

轟音と共に、獅子たちを吹き飛ばしてルフィが姿を現した。だがウタはその姿を確認しない。まるで当たり前だと——確認など必要ないともいうかのように。

「私は海軍本部准将、ウタ。そしてルフィの幼馴染で、オリンたちの上官で」

一息。

「——平和を届ける女だよ?」

揺れる島の上にありながら、必死に立っているこちらと違い余裕の表情を浮かべるウ

夕。そのまま彼女は振り返ると、麦わら帽子を押さえながら声を張り上げた。

「ルフィ!! あんまり時間がない!! 急いで!!」

「おう!! わかつてる!!」

島が動いているこの状況、凄まじい轟音が響いている中で二人の声はやけに響く。

どこまでも頼もしい。何度目かもわからない感覚をオリンが覚える中、“金獅子”の笑みが響く。

「ジハハハハ! やつぱりいい女だなベイビーちゃん! 今からでも遅くはねエ! おれのところに来い!」

「お断り。それよりいいの? 前見なくて」

ルフィに対するそれとは違い、冷たい声色でウタが言葉を返す。直後、凄まじい衝突音が空気を揺らした。

思わず身震いしてしまったオリンとは違い、ウタは麦わら帽子を押さえこそしているがそれだけだ。視線の先ではルフィの拳をシキがその右足の刀で受け止めている。

「ウタは渡さねえ!!」

「前にも言ったがな、ルフィ。こんな女に手エ出さなつて方が無理だ」

互いが相手を弾くようにして距離を取る。シキがその両手を広げて宣言した。

「守りてエンなら守つてみやがれ!! ベイビーちゃんも!! マリンフォードも!! 東の

海も!! この世界さえもだ!!」

対し、〃麦わらのルフィ〃が吠える。

「全部守る!! そのためにここにいるんだ!!」



海軍内におけるモンキー・D・ルフィの評価は様々だ。

優秀である、問題児、ガープそっくり、目を離すな、人気者、頼りになる、食い過ぎ、超自由、マイペース……色々な意見が出るが、誰も彼も最後には『しょうがない奴だ』と言いたげになるのは彼の才能であるのだろう。

だが一つ、まず意見が一致することがある。

〃戦闘におけるセンスについては抜群じやな〃

そう言ったのは彼の祖父であり、〃海軍の英雄〃とまで呼ばれる人物だ。それを聞いた者は全員が同意したという。

緻密に考えて戦うタイプではない。かといって何も考えていないわけではないが、ど

ちらかというとは本能で戦うタイプだ。しかしそのセンスがずば抜けている。

何をすべきか、どうしたらいいのか。本能で彼はその最適解に辿り着く。その彼が辿り着いた結論、その一つ目がこれだった。

「あの刀が邪魔だな」

その言葉には多くの意味が込められている。純粹に斬撃がゴムの体のルフィと相性が悪いこともあるし、「武装色の覇氣」で黒刀となった刀の威力の危険さを先程身を以て理解したところだ。

そして何より。

あの刀が纏う「覇氣」を上回らなければ、シキには勝てない。

「おれの半生を支えた愛刀たちだ。容易く折れると思うんじゃない」

シキがその足を振るう。ルフィは受けるか避けるか、判断は一瞬だ。

「『獅子・千切谷』!!」

放たれたのは無数の斬撃であった。宙を舞うそれに晒され、ルフィの体に無数の傷が走る。鮮血が舞った。

受け切れない。そう判断し、ルフィは行動に移る。

「っ、っのー」

ルフィは上空へ飛び上がった。やはり「覇氣」、そして相性が問題だ。

見下ろす側と見上げる側。互いの視線が交錯する。

「おれの愛刀たちが鬱陶しいようだな。——だったらそれで貫いてやる」

シキの体の上下が反転した。更に両足を合わせ、その切っ先を上空のルフィに向ける。

対し、ルフィも構えた。右拳を引き、打ち下ろしの構え。

「おいおめエ。その構え」

シキが何かに気付いた。だが、ルフィは応じない。

「まあいい。——『獅子・地獄独楽』!!」

シキは自身の体を高速で回転させながら空へと突き進む。自身の回転と黒刀と化した両足の刀。更に最大速度で突き進むそれをまともに受ければ体が消し飛ぶ。

「『ゴムゴムのオ』——」

しかしルフィは避けない。ここでシキの『覇気』を上回ると覚悟を決める。

その脳裏に浮かぶのは、祖父との会話。

『まあ、最後は根性と気合いじゃ』

『そうなのか?』

『今から鍛える時間もない以上、精神の話しかなかろう。何、大丈夫じゃ。負けなけ

れば負けん。そういうのは得意じゃろう？

“まあ得意だけだよ”

無茶苦茶な理論である。だがそれがしつくり来る辺り、似たような思考回路なのだ。

——そう、気合い。そして根性。

何もかもを込めた渾身の拳を、ルフイは放つ。

それは、奇しくも。

彼の祖父と同じ構えの一撃。

「——『拳・骨・弾』!!!」

先程までとは大きく違う、天を揺るがすような衝突だった。

その衝撃で大気が震え、島にさえも影響を及ぼす。

大海賊時代が始まってから生まれた男と。

大海賊時代より前の時代を生きた男。

二つの意地がぶつかり合い、拮抗する。

「——!!!」

最早、そこには外聞も何もない。互いにあらんばかりの咆哮を上げ、激突し。そして。

——砕けたのは、“金獅子”の“誇り”であつた。
金属の砕ける音が響く。

長き時を“金獅子”と共に駆け抜けた二振りの名刀が、その生涯の幕を閉じる。

「お、

そして、そのままルフィの拳はシキへ到達し。

——その体が、遙か上空から地面へと叩きつけられた。

「……………ゼエ……………ゼエ……………」

拳を振り下ろした体勢のままに、ルフィが荒い息を吐く。

やはりその構えは、彼の祖父とそっくりだった。

そんな彼の脳裏に、幼い頃の記憶が蘇る。

“じいちゃん。なんで“拳骨”なんだ？”

“何じやいきなり。知らんわ。わしが自分から名乗ったわけでもないしの”

“ふーん”

“しかしまあ、悪いことをすれば“拳骨”と決まっておる。そう考えれば格好いい名

前じやろう?……何じやその顔は”

ああ、そうだなじいちゃん。あの時は言えなかったけど。

——格好良いよ。



「大佐く!! うおー!!」

「勝ったー!!」

「やっぱ大佐だぜ!!」

司令室ではルフィの部下である三人の海兵が全身で喜びを表現していた。彼らもポロポロであるはずだが、目の前の光景がそれを忘れさせている。

「……シキの“覇気”を上回ったのか」

そしてそんな彼らの後ろでは、モモンガが驚愕の表情を浮かべていた。彼自身が“覇気”を支えるからこそわかる。かつて“四皇”に名を連ねた男の“覇気”を、ルフィは

上回ったのだ。

その意味がどれだけの意味を持つのか。

「ガーブ中將。あなたのお孫さんは凄まじいですね」

「ぶわっはっは、お前の教え子じやろう。誰の子供であろうが孫であろうが関係ないわい」

モモンガが声をかけると、ガーブは笑いながらそう言った。そもそも、と彼は言葉を紡ぐ。

「まだまだ未熟じゃ。……まあ、よくやっておるが」

呟くような言葉に込められた感情は、どれほどのものだったのか。

「凄えな。あれが17の若造がやることかよ」

「伊達や酔狂で『新時代の英雄』とは呼ばれんということだろう」

若干引いているジャブラの言葉に応じるのはブルーノだ。そう言っているブルーノ自身も若干引いている。

当たり前といえは当たり前だ。下手をすれば新兵になる前、雑用にすらなる前もありうるような年齢の青年が、文字通りの『伝説』を相手にここまでの戦果を上げるなど。

「——揺れが収まらん」

呟いたのはルツチだ。えっ、と海兵たちが声を上げる。

「まさかシキを倒しても駄目だったのか!？」

「そうではない」

言葉を紡いだのはガーブだ。彼は腕を組み、司令室の外を真っ直ぐに見据えている。

「ここで終わるような男であれば、『伝説』などと呼ばれておらん」

そして、その言葉に応じるように。

一際、巨大な揺れが島を襲った。



「ぐ、ぬ」

抜けそうになる力を必死で抑え込む。本能が理解していた。この『ギア4』、力が抜けた瞬間が終わりだ。次はない。

既にその体は随分と歪になっていた。両腕も両足もサイズが不揃いで、非常に不安定な状態だ。限界に近いことは誰にでもわかる。

だが、まだだ。

「——声が消えねえ」

彼の「見聞色の覇気」が伝えてくる。

まだ、「金獅子」は落ちていない。

「悪かったな、ルフィ」

メルヴィユの大地が大きく揺れた。直後、その地面から巨大な獅子が生えるようにして現れる。

今度は頭部だけではない。文字通りの獅子だ。

「まだどこかでおめエを侮っていたらしい。今のは効いたぜ。だが」

その巨大な獅子がゆっくりと上空のルフィの方を向く。その背には「金獅子」の姿があった。

対し、ルフィは一度大きく深呼吸。改めて構え直す。

「勝つのはおれだ!!」

「上等だ!!」

そして、二つの力が激突する。

「『ゴムゴムの』!!」

「獅子威し!!」

互いに最短距離を突き進み、その力が激突する。

「JET巨人のバズーカ!!」

「金獅子!!」

互いに最大の力を振り絞る一撃だった。

ぶつかり合う力。拮抗する力。

そこには純粹な力以外にも、互いの意地がかかっている。

その光景を、誰もが息を呑んで見守っていた。

祈りを捧げる者さえいる。

声を上げることさえできずに、人々はその激突を見守っていた。

——そして。

訪れた結末は、相打ち。

ルフィの一撃はシキには届かず。

シキが生み出した獅子は、ルフィに届かなかった。

「チイツ……!」

だが、動くのはシキが早かった。砕けた獅子、そのうちのいくつかを操作し、鋭利な槍を形作る。

「終わりだ!!」

そして、その槍がルフィに殺到する。

いくつもの槍が、彼の体を押し潰すようにして殺到する。轟音と衝撃音。鮮血が舞う。

しかし、彼の腕は伸びたまま。僅かに届かなかった位置で――

「なっ……!?!」

だが、ルフィの伸ばした腕が。

ギリギリで、シキの服を掴んでいった。

「『ゴムゴムの』――」

その事実にはシキが気付く。だが間に合わない。

ルフィの両腕、そして両足が萎んでいく。しかし、噴き出すような蒸気の向こう側からその一撃が飛来した。

「――鐘!!」

鈍く、重い音。

真正面からの渾身の頭突きを受け、シキの体が大きく仰反る。

「まだまだア!!」

既にその体が萎みつつある。しかしルフィはその最後の力を振り絞り、シキの下に自らの体を引き寄せる。

その顔も、体も血に染まっていた。文字通りの満身創痍。あの押し潰すような槍の殺到を、ただただ彼は耐えたのだ。

「ツイン・JET銃!!」

「おぐっ!?!」

仰け反っていたシキの腹部に渾身の一撃。その体がくの字に折れ曲がる。

——ここで仕留める。

それができなければ、負けるのは自分だ。

「ゴムゴムの火山!!」

「ぐお!?!」

その体を上空へと蹴り上げる。シキが体を動かして応じようとするが、その前に空へと上がったルフィの方が早かった。

既にその身は萎み切っており、武装色の覇気も消えかけていた。本来ならとつくに意識を失ついてもおかしくない。それでも動いているのは正しく意地。

「ゴムゴムの——」

最後の技であつた。それはルフィ自身が自覚している。

——ここで終わらせる。

それができなければ、おれの負けだ。

そして、その技が放たれる。

それはかつて、砂漠の国で「悪」を討つた技。

「——『暴風雨』!!」

空にいる敵に向かって何十、何百という拳を叩き込む大技。

「ああああああああツツツ!!」

文字通りに体力が尽きるまで。

その拳が、幾度となく「金獅子」の肉体を叩き。

「——」

限界と共に、その拳が止まる。シキがその身を傾け、落下していく。

そしてルフィもまた、落ちていく。

——未だ、メルヴィユは止まらない。



朦朧とする意識の中、“金獅子”と呼ばれた海賊はその過去を回顧する。

それは防衛本能からくる走馬灯だったのかもしれない。命の危機から脱するため。

“よう、ロジャー。いい加減おれと手を組もうぜ”

“支配なんざつまらねえと言ってるだろう。気に入らねえなら殺し合えばいい。それも自由だ”

“そりやおめエはそれでいいだろうがな。……いや待てそれ認めたらおめエの“自由”を認めることになるじゃねえか!”

“バレたか!”

結局、手を組むことは一度もなかった。どうしてもその思想と在り方が相容れなかったのだ。仕方がない。

だが、あれ以上の男がいなくても思っていた。骨のある奴とは何人も出会ったが、それでもロジャー以上の男には終ぞ出会うことはなかったのだ。

“ウハハ、見るでござるよ。あの男遂に“海賊王”なんてものになったようでござる

”

“ケツ、くだらねエ。何が『海賊王』だ。散々人の支配を否定しておいて”

“そう言う割には嬉しそうでござるなア、シキ。やはりライバルが出世すると嬉しいものなのでござるか?”

“誰がライバルだ! あれは敵だ!……だが考えようによつちやいいかもしれねエな。あの野郎に勝てば頂点だ”

“ウハハ、いいでござるなア。某もレイリーと久々に殺し合いたいでござる。いい酒も手に入ったでござるし”

“……一応言っておくが。遊びに行くんじゃねエぞ”

あの男が史上初の世界一周を果たし、『海賊王』と呼ばれるに至った時は納得もした。あの男以外に自分の先に行く奴はいないと思つたからだ。

だから、ロジャーの処刑と聞いた時は信じられなかった。

“ふざけんじゃねエ!! ロジャーが捕まつただと!? ありえねエ!!”

“そうは言うでござるが。『東の海のローグタウンで処刑する』と書かれておるでござるよ。流石に嘘ではないでござろう”

“よりによつて最弱の海……!! ふざけやがつて!!”

“どこに行くのでござるか?”

“マリンフォードだ!! あ の 野 郎 が 死 ぬ 気 だ っ て ん なら こ の お れ が ぶ ち 殺 して や る

!!

“ 冷 静 に な る で ご ざ る よ 。 そ ん な 馬 鹿 な 話 に 某 は 付 き 合 え ぬ で ご ざ る ”

“ 構 わ ね エ !! お れ は 行 く !! ”

“ …… ま あ 、 シ キ が 何 を し よ う と あ の 男 の 言 っ て い た よ う に “ 自 由 ” で ご ざ る が ”

そ し て イ ン ペ ル ダ ウ ン で ロ ジ ャ ー の 処 刑 が 行 わ れ 、 そ し て 後 に “ 大 海 賊 時 代 ” な ど と 呼 ば れ る 時 代 の 引 き 金 を 引 い た こ と を 知 っ た 。

そ こ に あ っ た の は 、 虚 し さ と —— 怒 り 。

“ 生 き て い た で ご ざ る か 。 で 、 ど う す る つ も り で ご ざ る か ? ”

“ —— こ の 世 界 を 支 配 す る ”

相 変 わ ら ず 好 き 勝 手 し て い た “ 鬼 札 ” を 前 面 に 押 し 出 し つ つ 、 裏 で 計 画 を 進 め た 。

こ れ は ロ ジ ャ ー と の 決 闘 だ 。 あ の 男 は “ 海 賊 王 ” と 呼 ば れ 、 新 た な 時 代 を も た ら し た 。 そ の 命 の 終 わ る 瞬 間 に 時 代 を 変 え た 。

な ら ば 、 こ の 時 代 を 終 わ ら せ よ う 。

奴 を 殺 し た 世 界 政 府 を 屈 服 さ せ よ う 。

“ 力 を 集 め ろ 。 —— 世 界 を 支 配 す る ”

二 十 年 。 そ う 、 二 十 年 の 時 間 が か か っ た 。

——お前を超えるのに、それだけの時間が必要だったんだ。
ふざけるなよ。

何を勝手に死んでやがる。

おれに……勝つて、おいて。

「……負けられ、ねエ……んだ……」

揺れる意識の中、その言葉を絞り出す。

「——ロジャー以外の男に……おれは負けられねんだよ!!」

既に体は限界だった。肉体も随分衰え、両足を失い、更に事故によつて大きな後遺症もある。その上であの攻撃の数々を受けてしまった。

随分と効かされた。本来なら意識などとづくに手放していて然るべきだ。

しかし、意地があるのは彼も同じ。

負けられない。負けたくない。

そんな意地だけが、彼を動かす。

「〃獅子威し〃!!」

最早自分の体については今の位置を保つのが精一杯。振り絞った気力の全てをその

一撃へと注ぎ込む。

メルヴィユが揺れた。そこからまるで砲弾のように一つの岩が高速で飛来する。

——それは、彼にとつて始まりの技であった。

今のように自在に能力を扱えぬ頃。岩を撃ち出すのが精一杯だった頃の、未熟であったあの日の技。

「『磔』!!」

鋭利な形をした岩が、空に浮かぶ『新時代の英雄』へと向かっていく。

——衝撃音が響き。

鮮血が、宙を舞った。



避けることはできなかつた。右脇腹を削り取るような一撃を受け、弾かれるようにしてルフィは宙を舞う。

「……………」

声を上げることさえできない。痛みも……いや、最早何が何だかもわからない。ただ、一つだけ。

——負けたのか。

そんな風に思う自分がいた。

まだだ、とも思う。だが現実として体が動かない。

“まあ、最後は根性と気合いじゃ”

駄目だ、じいちゃん。

体が……動かねえ。

諦めたくない。諦めない。

守ると決めたのだ。そのために海兵になったのだ。

——だって、おれの夢は。

“どこにも行かないで。ずっと一緒にいて”

嵐の日。倒れていた幼馴染。

必死に背負った背中であいた言葉。

あの日、モンキー・D・ルフィは決めたのだ。

この先、どんなことがあるうとも。

この先、どんな未来が待っているうとも。

“おれの夢は、ウタと一緒にいることだ”
それだけを誓って。

そのために生きてきた。

「……………あ……………あッ……………！」

絞り出すような声。軋む肉体。

“この帽子をお前に預ける。…………ウタを、守ってやってほしい”

かつて憧れたあの人の表情は、とても寂しそうだった。

彼女も知らぬ約束は、そこで交わされたのだ。

約束したんだ。

守るって決めたんだ。

なのにおれは。

ウタを——泣かせてしまった。

一人で行かせて。

傷つけた。

「……………動、け……………！」

何かが致命的に壊れていく感覚。
だが構うものか。ここで動けなければ何もかもが終わるのだ。

——ドラムの音が、聞こえた気がした。

「ゴム、ゴムの——」

シキの表情が目に入った。そこには驚愕と、呆れと——しかし、満足があった。

“ねえルフィ。私、決めた”

その歌声を、好きになった。

“——私は、この歌声と一緒に平和を届ける。それができる海兵になる”

その笑顔を、守りたいと思った。

“ありがとう”

ずっと一緒にいたって、思ったんだ。

“——信じてる”

ああ、信じてくれ。

ウタが信じてくれるなら。

おれは、絶対——

「――銃!!」

それは、始まりの拳。

モンキー・D・ルフィにとっての、原点。

「――!!」

最後の力を込めた拳が、シキを捉えた。

抵抗はない。最後の一撃を受けたシキの意識が途絶え、そのまま彼は落下していく。

「――勝った」

眩くと共に、ルフィもまた全身から力を抜いた。

その脳裏に、とある日常の記憶が蘇る。

「相変わらず銃が下手だねルフィ。私の勝ち」

「うるせえ! いいんだよ俺のパンチは銃よりも強えんだから!」

「出た、負け惜しみ」

「ぬぐ……って、どうした?」

“ 所谓いえば私、ルフィのパンチ受けたことないなって。組手とかでも絶対当てないよぬルフィ。……何その顔？”

“ あのなら、おれのパンチは銃より強いんだぞ。……ウタに当てるわけねえだろ”
その先の言葉は口にしなかった。

このパンチの存在理由なんて、ずっと昔から一つだけだったから。だから今更だったのだ。

だって、そうだろう？

—— おれのパンチは、ウタの敵をぶっ飛ばすためにあるんだから。



共に落ちる二人。だが、ウタの “ 見聞色の覇気 ” がその決着を伝えてくる。

「——ルフィが勝った」

えっ、とオリンが声を上げた。その彼女に頷きを返す。

「シキの “ 声 ” が消えて、ルフィの “ 声 ” は小さいけど聞こえる。ルフィが……勝った」

オリンの瞳から一筋の涙が溢れた。彼女はそれを拭うと、近くの電伝虫の受話器を手に取る。

「——本部!! 聞こえますか本部!?!」

涙の混じった声だった。彼女は何度も涙を拭いながら言葉を紡ぐ。

「勝利です!! ルファイ大佐が勝利しました!!」

その時、ウタは凄まじい大歓声が聞こえた気がした。それは幻聴ではあるけれど、きつとマリルフォードでは歓声が上がっているはずだ。

だが今は、それよりも。

「ごめんオリン。ちよつと行ってくる。——ビリー、力を貸して」

「クオツ」

少し休んで元気になったビリーに声をかける。その背に跨ると、ウタは空へと飛び出した。

目指す先は決まっている。凄まじいまでの轟音の中、頼りにするのは「声」だ。

「ビリー! もう少し右!」

彼の「声」をウタが間違えるわけがない。

いつだって、どんな時だって。一緒にいてくれた人なのだ。

「——ルファイ!!」

落下しているその体を受け止める。随分とボロボロだ。

「ッ、ルファイ！」

思わずその心臓の音を確認した。弱々しくあるが、心臓の音はきちんと響いている。そこにホツと胸を撫で下ろすと共に改めてその体を見た。全身が傷だらけで、特に右脇腹が酷い。ウタはルファイの肩にかかった正義のコートを手に取ると、抱き締めるようにして傷口へと巻き付ける。

既に傷がない場所がないといつてもいいほどにボロボロの体。思わずその頬を撫でる。すると、薄らとルファイの瞳が開いた。

「……ウタ……」

呟くようにウタを呼ぶルファイ。ウタは頷くと、彼へと声をかける。

「ルファイ、もうちょっと待っててね。すぐに——」

最後まで言い切ることとはできなかった。ルファイの左腕に引き寄せられたからだ。

頬同士が触れ合うほどの至近距離でルファイが言葉を紡ぐ。

「もう二度とあんなことするんじゃないやねえ」

「あんなこと、つて」

「おれを置いて行こうとしただろうが」

言われ、気付く。ルファイたちを守るためにシキについていった時のことを言っている

のだ。

あれは、とウタは反論する。

「ああしないと皆が。だから信じてる、って」

「お前が……置いて行こうとするなよ」

彼にしては珍しい言葉だった。こちらを彼の元に引き寄せている左腕に更なる力が込められる。まるで絶対に離さないともいうかのように。

——ああ、でも。

そうだ、彼の言う通りだ。

「……ごめん」

かつて、彼に置いて行かないでと言ったのはウタだ。

そんな自分が彼を置いていくなんて、それは確かに許されないことだろう。

「そうだね。置いていかれる辛さを……私はよく、知ってるのに」

理由があった。事情があった。どうしようもなかった。そんなことは言い訳にしかならないのだ。

（逆の立場だったら、私は怒る）

そう考えると、彼の言葉も納得だ。

ルフィの左腕の力が抜けた。それを受けてウタが体を起こす。

「わかったならいいよ。……ああ、腹減った」

呑気な言葉だ。ウタはそんな彼の頭を自分の膝に乗せた。なんとなくであるが、こう
したかったのだ。

「これも返さないかね」

麦わら帽子をウタは手に取る。それをじっと眺めた後、ルフィの顔を見た。彼が目を
細める。

「どうした?」

改めて彼の体を見る。傷だらけだ。こんな風になつてまで、戦つてくれたのか。

(……自惚れても、いいのかな)

彼は優しいから。もしかしたら特別じゃないかもしれない。

——でも、私にとっては誰よりも特別。

この想いは、ずっと抱えている想いは——

「ううん。……ごめん。ちよつとだけ目を瞑つてくれない?」

「いっけど」

ルフィが目を閉じる。その顔をウタは優しく撫でて。

——唇に、柔らかい感触。

触れ合った時間は僅かだ。だけど、ここまで来るのに随分と時間がかかったように思

う。

彼が目を開けた。その目は驚愕に染まっている。珍しい顔だと、そんなことを他人事のように思った。

「え、ウタ、お前——」

「ね、ルファイ」

彼の言葉を遮るように。

己の照れ臭さを隠すように。

彼の顔を、麦わら帽子で覆い隠して。

抱く想いを口にする。

世界で一番大切な、この人へ。

「——大好き——」

逃亡海兵ストロングワールド エピローグ①

史上類を見ない戦争として歴史に刻まれる戦いは終わりを迎えた。

かつて「海賊王」とも渡り合った伝説の大海賊、「金獅子のシキ」。それを討つたのは「新時代の英雄」とも呼ばれる若き海兵、「麦わらのルフィ」。

その決着は一つの象徴となるだろう。時代が変わる。世界が変わる。

この戦いの目撃者は——否、伝え聞くことになる者たちでさえもそれを確信することになる。

だが、しかし。

——当事者たちにとっては、未来よりも今だ。

「うおおおおっ!?!」

「めっちゃ揺れる! やばいやばい!」

「これ島落ちてるまんまじゃねえのか!?!」

島の揺れは収まっていない。ルフィがシキに勝利し、シキの意識が失われたことでコ

ントロールは失われた。だがそれはこの島が止まることを意味するわけではないのだ。慌てる海兵たちに対し、指揮官クラスの者たちとCP9の三名は冷静だ。その中の一人であるモモンガが鞘に収めた刀で床を軽く叩きながら言葉を紡ぐ。

「おそらくマリolfォードへの直撃は免れたのだろう。感覚ではあるが、先程までとは違ってこの島の動く方向が真下になっている」

「……つまり?」

問いかけ。それに対してモモンガは冷静に告げた。

「海に落下するだろうな」

「やべーじゃないですか!?!」

「マリolfォードに直撃しないのは良かったけどもー!」

「おれらはどうなるんすか!?!」

騒ぎまくる海兵たち。元気じゃのう、とガープが呆れた声を漏らす。

「根性で耐えればいいじゃろう」

「あんたと一緒にすんなよ!?!」

「おれら人間なんだよ!」

「折角大佐が勝ったのに〜!」

なおも騒ぎ続ける海兵たち。そこへテラスの方からオリンが走り寄ってきた。

「落ち着きなさい！ 外の部隊と合流すれば脱出方法はあるはず！ 二人はビリーと一緒にいるから私たちは私たちで脱出する！ はい準備！」

「は、はい！」

オリンの指示を受けてバタバタと動き出す海兵たち。その姿を見てガープが笑う。

「ぶわっはっは！ 流石はあの二人の部下じやのう！」

「何が流石かはわかりませんが……お二人も急いでください」

「ああ。……海賊共については准将の能力で移動させてもらうしかないな。数が多過ぎる」

司令室や廊下で眠っているシキ配下の海賊たちを一瞥するモモンガ。できれば逮捕したいところであるが、現状では自分達の命が最優先だ。

ウタへと連絡しようと再びテラスへと視線を向けるオリン。だが彼女が動き出す前に彼らが動いた。

「——我々の役目はここまでだな」

そんな言葉を口にしたのはロブ・ルッチだ。彼は帽子を被り直すと、その背後に同じ諜報員二人を従えるようにして言葉を紡ぐ。

「『歌姫』の確保が我々の任務だ。この戦争が終わり、その無事が確信できた以上長居の必要はない」

「なんじや、茶ぐらい出すつもりだったというのに」

腕を組みながら息を吐くのはガーブだ。その彼に対し、ジャブラが言葉を紡ぐ。

「誘いは嬉しいがなア……。おれたちはCP9。存在しないはずの諜報員だ。表舞台に出る気はねえのよ」

「正直なことを言えば今回のこともギリギリの判断だ。本来我々は表の戦争に関わるべきではない」

ジャブラの言葉に続き、ブルーノもそう言葉を紡ぐ。

「この戦争において我々は存在しなかったことになる。……この島に我々はいなかった。それだけのことだ」

頷きと共に言うブルーノ。そんな彼の側までオリンが歩み寄った。そして右手を差し出す。

「——私たちは覚えていきます」

共に血を流した戦友たちへ。それが最大限の敬意であった。

「あなたたちの戦いを。共に戦ったことを……。絶対に、忘れません」

たとえ歴史に名を刻むことはなくとも。

この戦争において存在しなかったことになっても。

それでも、命懸けで戦ってくれたことは事実であるのだから。

「……本来ならば、忘れてくれと言うべきなのだろうが」

ブルーノがルッチとジャブラへと視線を向ける。ルッチは息を吐き、ジャブラは笑っていた。

そんな二人の姿を見て、ブルーノも小さく笑う。

「それを報酬とさせてもらおう」

二人が握手を交わす。海兵たちも駆け寄ってきた。

「本当にありがとうな！」

「あんたがいなかったら死んでたよ！」

「もう海軍に入れよ一緒にやろうぜ！」

ブルーノは特にウタを守るために彼らと行動を共にしていた。更にそこで一番体を張っていたのも彼である。オリンたちにしてみると既に頼れる仲間なのだ。

「すまないが……今の立場も気に入っているんだ」

彼の言葉に対し、残念です、とオリンは苦笑した。何度も助けられたのだ。どうしたって情は移る。

二人が互いの手を離す。そこで海兵の一人がとあることに気付いた。

「あれ？ たしぎさんは？」

ブルーノと共にウタを守ってこの城の中を駆け抜けた戦友の姿がない。そういや、と

一人が声を上げる。

「准将の歌で海賊が眠った後にどっか行ったような」

「どこ行ったんだ？」

海兵たちが周囲を見回す。ブルーノとオリンも思わず周囲を見回した。

ウタを守るため、共に戦った剣士がいない。どこへ行ったのか。

「やべーよ。早く逃げないとなのに」

一人がそう言った時だった。

「——皆さん!!」

廊下の奥からたしぎが息を切らして走り込んできた。どうした、とモモンガが問うと彼女は息を切らしたままに言葉を紡ぐ。

「外の部隊との連絡が取れました！ 急いで脱出しましょう！ 建物内は危険です！」

「まさか脱出ルートを確認してくれてたんですか？」

オリンが問う。はい、とたしぎは頷いた。

「必要になると思います。急ぎましょう——きやつ!」

たしぎが思わず悲鳴を上げる。一際大きな揺れが城を襲ったのだ。

ガープとモモンガ。そしてC9の三人でさえも少し体勢を崩すほどの揺れだった。彼らほどの体幹を持たぬ他の者たちには立つことさえ厳しい状況である。

「た、立ってられねえ……!」

「これ脱出できるのか……!?!」

思わず弱音を吐く海兵たち。そんな彼らに対してガーブが言葉を紡いだ。

「階段が無理なら飛び降りるしかなかるう」

「何階だと思ってるんすか!?!」

「おいこの人目が本気だぞ!」

当然ように言うガーブに対して海兵たちがツッコミを入れる。それをスルーしてガーブが周囲へ視線を向けると、ルッチが言葉を紡いだ。

「我々については気にしないでくれ。勝手にどうにかする」

「そうか。改めて礼を言うぞ。——助かった」

その言葉に、彼らは言葉では応じなかった。ただ一つの頷きを返し、その場から立ち去っていく。

それを見送ると、さて、とガーブは仕切り直すように言葉を紡いだ。

「降りるか」

「いや話聞いてました!?!」

「おれやつと大佐と准将の気持ちがちよつとわかった気がする!」

「話通じてないぞこの人!?!」

海兵たちのツツコミが入る。だが実際、階下へ降りられないのであればどうしようもない。

どうするべきか。そんな風に考える彼らの耳に、その言葉が届いた。

「——私たちに任せてください」



顔が熱い。勢いに身を任せ過ぎたとウタは思う。

でもしようがないじゃないか。こんなにも……格好良かったのだから。

「お、おいウタ！ 今のは——むぐ」

ルフィの顔を麦わら帽子で押さえ込め込む。正直今は顔をみる余裕がなかった。

膝の上に顔を乗せている彼はろくに抵抗しない。それはそうだろう。文字通り全身全霊、寿命を削るようにして戦ったのだ。意識があるのがおかしいくらいだ。

「ごめんルフィ。ちょっと待って」

「い、いやお前」

「お願い。ちゃんと……その、うん。後で話すから」

ここにきてヘタレ全開であった。麦わら帽子の影から見えるルフィの口元が様々な形を作る。

だが結局、彼は口を閉じた。

優しいな、と思う。ただ思うのは。

(嫌がられては……なかつたよね?)

驚いてはいたが、嫌がってはいなかつたように思う。それが……嬉しい。

ずっと一緒にいた。いてくれた。それがウタにとって、何よりも。

「……ルフィ?」

そこでウタは気付いた。ルフィの動きが止まっている。麦わら帽子を取ると、ルフィは目を閉じて眠りに落ちていた。

本当に限界だったのだろう。その頬を優しく撫で、ウタは呟く。

「ありがとう」

彼にこの言葉を向けるのは、一体何度目なのだろう。

貰ってばかりだと、そんなことを思う。いつだって彼に支えられて、救われて、助け

られて。

「ね、ルフィ。私は——」

言いかけた言葉は、轟音によって遮られる。見れば、島の一部に大きな亀裂が入っていた。

シキのコントロールを離れた島が徐々に落下していく。だがただ落下するだけではない。一人の能力で浮かんでいたという状態であったこの島はおそらく、幾つもの島を統合することで今の形を作っていたのだろう。それらを繋ぎ止める力が失われたことにより、巨大な亀裂が至る所に走っている。

「——まずい」

思わずそんな声が漏れた。ビリーと共に空にいる自分たちは大丈夫だが、地上にいる仲間たちは危険な状態だ。屋外にいる者たちはまだマシ。まずいのは城の中にいる者たちだ。

この揺れに加え、落下する島。落ちる先は海だろう。だがしかし、その衝撃は凄まじい。その衝撃を受けたあの城はおそらく崩壊する。

「ビリー！ 城に向かって！」

「く、クオツ!?!」

「早く！」

危険だと言いたげに声を上げるビリー。そんな彼に改めて指示を出そうとしたウタはその光景を見た。

「……………え？」

それは、あり得ない光景だった。

空に浮かぶ無数の影。最初は鳥かと思つたが違う。あれは人間だ。

「——お姉ちゃん!!」

その先頭を飛ぶ少女にウタは見覚えがあつた。この島に住む心優しき少女。

「シャオ!」

シキの支配の中を生きていた少女が、空を飛びながらこちらへと手を振っている。

「夢でも見てる…………？」

思わず呟くが、傷を負つた自身の肉体の痛みがこれを現実だと主張していた。

…………不思議だとは思っていたのだ。この島の人々は皆、何故か腕に羽が生えていた。

そういうものなのだろうと思つていたのだが、まさか。

「ありがとう!」

驚愕で何も言えないでいるウタに対し、シャオが声を張り上げる。

「シキを倒してくれて！ 本当ありがとうございます!!」

シヤオだけではない。他の者たちもまたこちらへと手を振っている。「みんなは任せて!」

その幻想的とも言える光景に対して何も言えないウタの視線の先で、数人の者たちが城の中へと飛び込むように入っていく。

それを呆然と見守りながら、ウタは吐息を零した。

——ああ、これが。

あの海賊が支配していた人たち。それは誰よりも——

大海賊、 “金獅子のシキ” が支配した島——メルヴェイユ。

二十年の長き支配から解放された彼らは、 “自由” に空を舞う。

支配が解かれ、自由が空を覆っている。

それが、この戦争の結末だった。



偉大なる航路後半の海、*“新世界”*のとある島。

マリンフォードが半壊するほどの戦争が起こっているのと同時に、その場所でも戦争と呼ぶべき戦いが起こっていた。

「*“冥狗”*!!」

「*“雷鳴八卦”*!!」

片や海軍本部最高戦力、大将赤犬。

片や百獣海賊団総督、*“地上最強の生物”*カイドウ。

共に個人としては世界最高峰の力を持つ怪物たちだ。だが徐々に。そう、徐々に片方に天秤が傾きつつある。

「ウオロロロロロロ! 楽しいなア赤犬!」

「ほざけ!」

金棒を担いで笑うカイドウに対し、険しい表情の赤犬。*“地上最強の生物”*——その意味を赤犬は理解させられていた。

(ふざけた力じゃア……!)

ウオウオの実幻獣種、モデル*“青龍”*。広く知られたカイドウの能力はしかし、その強さの核にあるわけではない。確かに凶悪な力ではある。だがカイドウの強さの本質

はその「覇気」にあるのだ。

ただただ強い。故にこそその最強であり、怪物。

「おつかしいねえ〜?」

赤犬の近くに降りてきた黄猿が首を傾げる。彼の視線の先にいるのは空を飛ぶ一頭の恐竜だ。大きな翼を広げて飛ぶその恐竜は百獣海賊団最高幹部「大看板」が一角、火災のキングだ。

「どうしたボルサリーノ」

「何かカラクリがあるねえ? こっちの攻撃が通つてないみたいだよオ」

黄猿——海軍本部大将をしてここまで言わしめる怪物。赤犬が表情を険しくする。

「面倒じゃのう、百獣海賊団……!」

吐き捨てるように言葉を紡ぐ。状況は決して良くはなかった。大将二人がそれぞれ敵の最高指揮官二人にかかりきりとなっており、しかも優位に立てているとは言い難い状態。更には相手が『ギフターズ』と呼ぶ体の一部に動物の力を宿す者たちを相手に、海兵たちも決して優位に立てているとが言い難い。

残る二人の「大看板」がいないのは海軍側にとつては有利な条件であるが、結局のところ総大将であるカイドウを討ち取らなければこの戦いの勝利はない。

「報告!! 報告です!!」

拳を握り、カイドウに向かつて一撃を放とうとしていた赤犬の耳にそんな言葉が届いた。

「なんじゃア！」

「マリルフォードより伝令!! “金獅子のシキ”を討ち取ったとのことです!!」

その報告を受けて動きを止めたのは赤犬だけではなかった。カイドウも、黄猿も、キングも、この戦場の全ての者が一時動きを止めたのだ。

「さ、さらに!!」

報告はそれだけではない。伝令役の海兵が声を張り上げる。

「“金獅子のシキ”を討ち取ったのはモンキー・D・ルフィ大佐です!! 一騎討ちの未討ち取ったとのことですよ!!」

その場の全員が、それを理解するのに数秒の時間を要した。

誰もが思っていたのだ。“金獅子”を打倒するともなればそれこそ“海軍の英雄”“ガープか”“仏のセンゴク”、或いは大将の中で唯一マリルフォードに残った青雉。その誰かだと思っていた。

それがまさか、“新時代の英雄”などと呼ばれていても未だ未熟な若き海兵が討ち取るなど。

「……そうか。あの小僧が」

思わず呟く。何度叱ったかなど最早覚えていない。頭を抱えることなど日常茶飯事。目を離せば大体トラブルに巻き込まれているか起こしているか。

だが、それでも彼は市民の味方で。

彼女と共に、新たな世代の旗手であったのも確かである。

「これは負けていられないねえ、サカズキイ〜?」

黄猿が言う。その口調には確かに喜びが混じっていた。彼もまた青年をよく知る男だ。この報告に思うところがあるのだろう。

彼に対し頷きを返す。同時、赤犬の体から爆発するようにマグマが噴き出した。

「気合を入れ直せ!!」

猛る言葉とマグマ。その言葉が戦場の全てに伝播する。

「海の向こうでは17の若造が旧時代の『悪』を討ち取った!! その『正義』をわしらが踏み躪るわけにはいかん!!」

眼前、『地上最強の生物』を視界に捉える赤犬。

その口元には笑みが浮かんでいる。

(負けられんのか)

あの日、初めて見たあの二人を赤犬は疑いの気持ちで見ている。大犯罪者の息子と娘。何か裏があると思っていたのだ。

だからずっと目を光らせていた。しかし、それが無意味と悟ったのはいつのことだったか。

いつの間にか、あの二人を信頼できる海兵であると——後輩たちであると。自分達の後継者になれると、そんな風に。

「この戦争の勝利は!! 明日の平和の礎と理解しろ!!」

あの日、赤犬は彼女に言ったのだ。

「お前は海兵じゃろう」

その言葉を口にした時点で、きっと彼女のことを認めていたのだろうと思う。ならばここにいる自分が、自分自身の「正義」を違えるわけにはいかない。

「——海賊という『悪』を許すな!!」

彼が掲げる信念——「徹底した正義」。それは時にその苛烈さ故に恐れられることもある。

だがこの大海賊時代において。弱者が虐げられるこの時代において、その苛烈さこそが救いになることもあるのだ。

「そうだ! 怯むな!」

「『正義』は我らにある！」

いくつもの声上がる。それらは己を鼓舞するという意味も含んでいた。

赤犬はわかっている。己は万人には受け入れられないことを。

だからこそ、あの二人に期待をかけた。

この時代が始まった後に生まれた二人であるからこそ、二人はこの世界と時代に答えを示せる。力なき市民たちの光になれる。

——そして。

きつと、いつか……きつと。

この大海賊時代が終わる時、その平和な世界で。

あの二人は——

「ウオロロロロロ！ 流石だな赤犬！ そうだ、それでいい！」

赤犬の言葉によって士気を上げる海軍。それらに最前線で相對する『四皇』はしかし、怯まない。

「お前の『正義』を見せてみる!!」

金棒を担ぐようにして持ち、身を捻るカイドウ。対し、赤犬もその右拳に凄まじい熱量を纏う。

その二人の放つ圧力に、周囲の者たちも一步後ずさる。文字通りの全身全霊、渾身の

一撃。

——ぶつかる。

誰もがそれを確信した瞬間。

——天を揺らすが如き「覇気」が、戦場に轟いた。

赤犬とカイドウも動きを止める。反射的にその「覇気」の放たれた元へと視線を向けた。

「おい……………」

「なんでだ……………!?!」

ざわめきが両陣営に広がる。彼らの視線の先、海の上に一隻の大きな海賊船があった。

その海賊船が掲げる旗を知らない者はいないだろう。その側は「四皇」のものだ。

「何故ここに「赤髪」が……………!?!」

思わず声を上げたのは海兵だ。赤犬はこちらへと歩いてくる男を睨みつけるようにして見据える。

「何のつもりじゃア?」

そしてカイドウもまた、金棒を肩に乗せながら現れた人物——「赤髪のシャンクス」を見据える。

「何をしに来た『赤髪』？」

海軍本部最高戦力。そして「四皇」の一角にして「地上最強の生物」。その二つから敵意を向けられながらも、その男に臆する様子はない。

「この戦争を——終わらせにきた」

彼に続くようにして赤髪海賊団の主力メンバーたちが現れる。それに反応したのはカイドウだ。

「ウオロロロロロ！ それを聞く義理があるか『赤髪』！」

「ないな。だが、この消耗した状態でおれたちを相手にできるのか？」

視線が交錯する。直後。

——凄まじい衝撃が、周囲を駆け抜けた。

カイドウが振り下ろした金棒をシャンクスがその愛刀で受け止める。ただそれだけ

のことははずだ。

しかし、現れた結果はともそうは思えない程に凄まじい。

「おい、見ろー！」

「空が……!?!」

口にしたのはカイドウの部下たちであるが、一部を除いた全員が同じことを思っただろう。

何故か『触れていない』二人の激突。その余波により、天が割れたのだ。

それは、『霸王色』の衝突。

この海の頂点たる二人の激突は、ただそれだけで世界に影響を及ぼすのだ。

「衰えてはねえようだなア『赤髪』！」

金棒を下げ、笑うカイドウ。それに対してシャンクスは真剣な表情のまま言葉を紡ぐ。

「暴れ足りないのであれば相手になるぞカイドウ。——赤犬、お前たちもだ」

周囲に沈黙が降りる。誰もがこの後の展開について思考を回していた。

カイドウ率いる百獣海賊団と赤犬、黄猿率いる海軍との衝突が始まって相応の時間が経過している。既に多くの負傷者が出ている状態だ。この状態で更に赤髪海賊団を相手に回すのはリスクが大きい。

その号令を受け、百獣海賊団が撤退を始める。その光景を一瞥し、シャンクスは続いて赤犬へと視線を向ける。

そんなシャンクスの姿を見据え、赤犬が言葉を紡ぐ。

「海賊を前にして、むしろに退けというんか？」

「そう言っているつもりだ」

「海軍に命令するとは……随分と偉うなったのう、*“赤髪”*」

二人の視線がぶつかり合う。次の瞬間にはどちらかがその一撃を放つのではないかというほどに張り詰めた空気が

だがその空気も、シャンクスが口にした一言で変化する。

「——あの二人の勝利で終わったこの戦争に、これ以上の犠牲は必要ない」

赤犬の眉が僅かに跳ねた。彼は一度目を閉じると、声を張り上げる。

「撤退じゃア!!」

その言葉を受け、海兵たちの間に動揺が走った。黄猿が赤犬へと声をかける。

「いいのかい、サカズキィ〜?」

「士気を挫かれたのはこちらと同じじゃア。……腹の立つ話じゃが、今からこいつらを相手取る余裕などありはせんわ」

言い切ると、何をしとる、と近くの海兵たちへと赤犬が声を張り上げた。

「負傷者の手当を急げ！ マリンフォードへ帰還する！」

「は、はい！」

慌てて動き出す海兵たち。黄猿も肩を竦めると、指揮のためにこの場を離れた。

残された赤犬はシャンクスと向かい合う。ふん、と鼻を鳴らしてその男を見据えた。

「随分と過保護じやのう」

「あの二人のためじゃない。おれにはおれの考えがある。……それに赤犬、お前はわかっているはずだ。あいつらはもう……立派な海兵だ」

「言われんでもわかっちゃよる」

赤犬がシャンクスへと背を向けた。そして振り返らぬまま言葉を紡ぐ。

「——『赤髪のシャンクスは、私が捕らえる』」

赤犬が歩き出す。そのまま彼は振り返らない。

「あの娘はそう言うちよったぞ」

その背に対して、『赤髪』は応じた。

「ああ。——望むところだ」

その時の彼の表情は、どんなものであったのか。

振り返らなかった赤犬には、最後までわからなかった。



海へと落ちていく浮島、メルヴィユ。そこから無数の人影が空を飛んでいく。空を飛ぶ人と、落ちていく島。なんとも幻想的な光景だ。

そんな光景を見守っていたセンゴク。その彼の元に海兵が走り寄ってきた。

「元帥殿！ 大将赤犬より連絡です！ カイドウとの戦闘中に『赤髪』が介入！ それを受けて撤退を決定したとのことですよ！」

「『赤髪』が？」

思わず呟く。穏健派の『四皇』たる『赤髪』による仲裁。なるほどありうる話であるが、どこからこの戦争の情報を仕入れたのか。

(……まあ、いい)

いずれにせよ戦争は終わりだ。ならば残る彼の役目は一つだけ。

拡声器を手に持ち、センゴクはマリンスフォードを見回した。責任者というものはこの最後の務めを果たすことも含めての責任者である。

「負傷者の手当を急げ！ 動ける者はメルヴィユが海に落下次第島に乗り込み海賊を拘

束しろ！」

海軍の役目とは海賊を倒してそれで終わりではない。彼らを捕らえ、牢に入れてこそようやくその役目が終わるのだ。

「この戦争は——我々の勝利だ!!」

センゴクの宣言。それを受け、大地を揺らすような大歓声上がる。

戦いは終わりを告げた。その事実が海を越え、世界へと伝播する。

そして世界に二人の「英雄」の名が轟くことになる。

文字通りの歌声で戦争を終わらせた「歌姫」であるウタ。

旧時代の「四皇」を打ち破り、新時代の到来を告げた「麦わらのルフィ」。

人々は歓喜した。この大海賊時代において涙を流し、傷ついた多くの弱き人々は英雄たちに希望を見る。光を見る。明日を夢見る。

いつか、そう、いつか。

この苦しい時代は終わる。無法者たちの時代が終わるのだと。

英雄たちが終わらせてくれるのだと。

——人々は、「新時代」の到来を確かに信じたのだ。

逃亡海兵ストロングワールド エピローグ②

偉大なる航路のとある島。そこに辿り着いた青年はその島の雰囲気にも首を傾げた。

(随分と賑やかだな)

何かの祭の日なのだろうか。そんな風に思いながら街の中に入る。騒がしいのは嫌いじゃない。いつも騒がしかった弟とその弟と張り合っていた妹のおかげだろうか。

最近はずっと一人の船旅だったことも影響しているかもしれない。毎日が賑やかで、騒がしかったから。

「見てただろエース！ おれの勝ちだよな!?!」

「見てたでしょエース！ 私の勝ちだよね!?!」

飽きもせず毎日毎日『勝負』と言って競っていた二人。それを笑いながら見ていたのが彼の——エースの楽しい思い出だ。

世話の焼ける二人であった。自分と同年のもう一人の長男がいなくなつてから、余計にあの二人のことが心配になつて。

あの弟が……ルフィが海兵になるなどと言い出した時は、本当に驚いたが。

「……元気にしてるのかね」

思わず呟く。どうせ大丈夫だろうとは思うが、どうしても心配だ。アラバスタで久しぶりに再会した時は相変わらずであったが、今はどうしているだろうか。

少しは大人になったのだろうか、と思う。想像もできないが。

エースは帽子を被り直し、ローブを纏うと街へと入っていく。裕福そうではないが、かといって極端に貧しいわけでもなさそうな村だ。ただ最初に島を見た時に感じた通り、やたらと賑やかである。

「なあ、何かあったのか？」

「ん、何かあって……知らないのかい？」

近くにいた男性に声をかけると首を傾げられた。エースはああ、と頷きを返す。

「ここのとこ海の上にいたもんでね」

「そうなのかい？　ならこれを知らないのか？」

そう言って男性が差し出してきたのは一枚の新聞だった。それを手に取ったエースは、その一面に掲載されている見覚えのある顔に思わず笑みを浮かべる。

「へえ……あいつら」

そこには、この島が歓喜に包まれている理由が載っていたのだ。

『新時代の英雄』が旧時代の『四皇』を打ち破る!!』

シンプルであるが、全てを表現した見出しであった。今や『伝説』となつた大海賊『金獅子のシキ』。それを若き海兵が一騎討ちの末討ち取り、更に『歌姫』と呼ばれる英雄はその歌声で文字通りに戦争を終わらせて見せたという。

笑みが溢れる。アラバスタでの再会からそう時間も経っていないというのに、随分と早い成長だ。

「凄いだろう！　しかもこの二人はこの街にも縁があるんだ！」

男性が興奮した様子で言う。そうなのか、とエースが問いかけると嬉しそうな笑みを浮かべて男性は続けた。

「もう何年も前の話なんだがね。二人がその新聞にも載つてるモモンガ中将の部下だった時にこの街に来てくれたんだ。当時はひどい状態でね」

男性が語ってくれたのは、エースが知らない二人の活躍。

農作物の不作に悩まされ、荒れていたこの国を助けてくれた切欠が二人の若き海兵だったのだという。小さな子供の訴えを無碍にせず、真剣に受け止めた上で対処を考えってくれた。

「モモンガ中将にも勿論感謝している。その彼も活躍したっていうじゃないか。この国はもうお祭り騒ぎだよ」

そして動いたのが当時の二人の上官であるモモンガだ。彼は刃ではなく、言葉という手段を用いてこの国の力になってくれたのだという。

「彼らの力でこの街は——国は、救われたんだ」

そう告げた男性の表情は本当に嬉しそうだ。エースの表情も思わず緩む。

(問題児だなんだと言われているみたいだが、ちゃんと海兵をやってるようだ)

あの二人のうち、ウタはともかくルフィに海兵は無理だと思っていた。正直、彼は自分と同じで秩序側の人間ではないと思っていたから。

だがそれはこちらの思い違いであつたらしい。立派に海兵をしてるじゃないか、と思う。

「おっと」

「ご、ごめんなさい」

不意にエースの足に麦わら帽子を被った小さな男の子がぶつかつた。思わず尻餅をつきながら謝る子供に対し、エースは視線を合わせるためにしゃがみ込む。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫」

男の子が頷き、立ち上がる。その男の子に対してエースは言葉を紡いだ。

「いい帽子だな」

「うん！ これはヒーローの帽子なんだ！」

男の子が笑う。その男の子から少し離れた場所にいた女の子——おそらく一緒に走っていたのだろう——に視線を向けると、エースはそちらへも声をかけた。

「いいヘッドフォンだな」

「……うん」

女の子は男の子とは違い、小声で頷いた。だがその表情は嬉しそうだ。

麦わら帽子とヘッドフォン。その二つにエースは見覚えがある。

「……ヒーローの帽子とヘッドフォンか」

「あの二つは子供たちだけじゃなく大人にも人気だよ」

微笑みと共に言う男性。その言葉を聞きながら、駆けて行く子供たちの背中を見る。エースはかつての記憶を思い出した。

それはエースが出航する数日前。突然ルフィに告げられた時のこと。

「おれ、海軍に入る。海兵になるんだ」

最初は意味がわからなかった。ガープのジジイに何を吹き込まれた、と問い詰めたのを覚えている。

だが、弟は。

「ウタと一緒にいたいんだ」

ただそれだけを、口にした。

口論になった。約束はどうするんだ、誓いはどうするんだ、お前の夢はどうするんだ——そんな風に。

しかし、血の繋がりはなくても弟だ。一度決めたなら絶対に曲げないことくらいよく知っている。

だからこそ、最後は応援の言葉を口にしたので。

「男が決めたんだ。絶対に曲げるなよルフイ」

そして、弟は確かに曲げなかった。

弟も、妹も。自分と同じで世界的な大犯罪者の子供だ。普通の人間よりも過酷な人生を歩むことになるのはわかりきっている。

苦労はあつたはずだ。涙したこともあつたはずだ。嘆いたこともあつたはずだ。

しかし、それでも。

今あの二人は——

「——『ヒーロー』か」

その手でその称号を勝ち取った。

それがただただ、誇らしい。

「それに今日、もう一ついいニュースが入ってきてね」

自身の家族に対して思いを馳せるエースに対し、男性が告げる。そのまま彼は別の新聞を渡してきた。

その一面に載っているのはやはりエースもよく知る二人だ。ただ、その見出しが。「……………うん？」

思わず声が漏れる。見出しにはこう書かれていた。

——『『新時代の英雄』、結婚秒読み!』と。



水の都、ウォーターセブン。

偉大なる航路に存在する島であり、造船業が盛んであることで有名だ。世にも珍しい『海列車』という海の上を走る汽車、その始まりの地としても有名である。

世界政府御用達でもあるこの島には『ガレーラカンパニー』と呼ばれる巨大な造船会社がある。彼らは島の住民たちの誇りであり、広く尊敬を集めている大会社だ。その社長であるとともに市長でもある人物によって統治されるこの島は常に活気に満ちてい

る。

だが、その日はいつも以上に活気に満ちていた。

「おお、帰ってきたかルッチ！」

額にゴーグルをつけたツナギを着た男が少々長い休暇から戻った男——ロブ・ルッチに声をかける。ルッチが頷くと、彼の肩に乗る相棒たる鳩のハットリが器用に翼を動かした。

『クルッポー。思ったよりも長くなってしまった』

まるでハットリが喋っているかのように見える光景は初見の者なら驚くだろうが、この島では見慣れたものだ。故にルッチに声をかけた男——パウリーも気にした様子はない。

「まあそれはしようがねえだろ。本部であんなことがおこってたらそりや帰りも遅れる。海列車もしばらくダイヤが乱れたしな」

先日終息を迎えたばかりのとある戦争。大海賊「金獅子のシキ」が引き起こした戦いの結末は既に世界中に広まっている。それはここウオーターセブンも例外ではない。

特にウオーターセブンは世界政府が造船を数多く依頼していることや、海列車で政府所有の島であるエニエスロビーへ直接行けることなどからスタンスとしては完全に政府寄りだ。海賊たちからの依頼を受けることもあるが、この時代だ。その辺りは世界政

府も目を瞑っている。

そしてそんな島であるならば、海軍の勝利を喜ばないはずがない。

「けどグッドタイミングだぜルッチ。アイスバーグさんが集まれば号令かけてんだ」
『アイスバーグさんが？』

確認するようにルッチが問う。すると、答えたのはパウリーではなく別の男だった。

「むしろ職長は勿論のこと、職人全員でできる限り集まるようにと指示があつたんじゃ。……休暇については無事に『完了』したのか？」

現れたのは四角い長い鼻の青年だった。まだ若いというのに年寄り言葉を使う人物である。

名をカクというその男の問いに対し、ルッチは頷きと共に応じる。

『クルツポー。少し予定外のことではあつたが、無事に終わった』

「旅行に予定外はつきものじゃろう。何にせよ無事に帰ってきたことが何よりじゃ」

肩を疎めるカク。それだけで彼らの間だけで通じる連絡は終わった。そこでルッチは先程から流れている音楽に気付く。視線を動かすと、ドックの一角に人だかりができていた。

聞き覚えのある音楽——いや、*“歌”*だ。これはあの時、あの*“歌姫”*がその魂を込め、命を燃やして歌つたのと同じもの。

「ん、ああ。タイムストーンとルルが流してるんだ」

共にルツチやカク、パウリーと並ぶ一番ドツクの職長たちだ。彼らはTDを拡声器に繋ぎ、皆で聞きながら盛り上がっている。

「いい歌だよな。あいつらほどじゃねえが、おれも好きだぜ。歌姫」の歌は。……お前はそうでもなかったか？」

『いや』

ルツチは首を左右に振る。彼の脳裏に浮かぶのは、あの戦場で「歌姫」が堂々と告げた彼女の正義だ。

「——平和を届ける正義」

なんて甘い「正義」かとルツチは思った。平和などこの世界のどこにも存在しない。しかしあの瞳は本気だった。だからこそ見守ろうと思ったのだ。

そして、その結果として。実際にあの「歌姫」はその信念を証明してみせた。

(歌など、と思っていたが)

ロブ・ルツチは冷徹な人間だと自分でも思っている。そうでなければ暗殺者などできないし、今も生きてはいないだろう。そんな彼は歌というものに興味がなかった。自分の生活に関係ない事柄だと思っていたのだ。

だが、この歌声は。

あの「歌姫」の歌については。

『いい歌だポツポ』』

「明日は雨か……いや、槍が降るかもしれないのう」

カクが驚いた表情を浮かべる。それを一瞥するも、ルッチは何も言わなかった。

ロブ・ルッチは冷酷な「殺戮兵器」だ。だが彼は信念を貫く人間を評価する。そしてあの「歌姫」は己の信念を貫いてみせたのだ。ならばそれをルッチは認めるだけである。

「ンマー、随分と賑やかだな」

不意にそんな声が響いた。現れたのは一人の男性だ。

ウォーターセブン市長にしてガレーラカンパニー社長、アイスバーグだ。彼の登場で職人たちが騒ぎ始める。

「アイスバーグさん！ 後で塗装見てください！」

「こつちもお願います！」

次々と職人がアイスバーグの元に駆け寄っていく。それらに応じつつ、まあ、とアイスバーグが言葉を紡いだ。

「とりあえずお前たちに連絡をしてからだ」

「あ、じゃあ曲止めますね」

職員の一人が言う。別にいいぞ、とアイスバーグは言葉を紡いだ。

「“歌姫”の歌はおれも好きだからな。——さて、一つ連絡がある。先日のマリノフオードで起こった戦争の件については聞いているはずだ。結果は海軍の勝利となつたわけだが、それに関連して世界政府からおれたちに依頼が来た」

カリファ、と自身の背後に控えている女性秘書へと声をかけるアイスバーグ。彼女は眼鏡の位置を直すと手に持った資料を読み上げる。

「現時点では打診の段階ですが、軍艦を複数建造してほしいようです。それ以外にも各種艦船用の装備についても問い合わせがありますね」

「聞いている通りだ。どうやら世界政府は戦力増強のためにまずは足場を整えるつもりらしい」

職人たちがアイスバーグへと視線を向ける。彼は頷きと共に言葉を紡いだ。

「ガレーラの総力を上げて取り組むぞ!!」

彼の言葉に対し、応じる声がいくつも上がる。アイスバーグは満足そうに頷きを返すと、ルッチの方に視線を向けた。

「すまないなルッチ。帰ってきたばかりだったのに早速大仕事だ」

『いえ』

頷いて応じる。そうか、とアイスバーグは笑った。そして彼が他の現場に行くのを見

届けると、ルツチもその場から移動する。

活気を増すガレーラカンパニー。その最中でルツチは思う。

(「麦わらのルファイ」か)

あの若さで「金獅子のシキ」を打ち破った男。その強さにどうしても興味が湧く。

惜しむべきは互いがぶつかり合う理由がないことか。それを残念に思いつつ、彼は自分の任務に従事する。

先の未来で。

この二人が激突するのはまた、別のお話。



「取材させてくださいよ!」

「市民は「英雄」の言葉を求めてるんです!」

「一言だけでも!」

海軍本部。その正門前に数十人の記者と数百人の市民が集まっていた。世界最大の新聞社たる『世経』は勿論のこと、小さな地方紙からも記者が集まっている。

「おれ海軍に入隊します！」

「人手不足じゃないですか!?! 戦うことはできませんけど雑用でも何でも！」

「力になりたいんです！」

そして記者以外にも数百人近い市民が集まってきていた。戦争が終わって数日が過ぎたが、連日この戦いについては報道が繰り返されている。それほどまでに世界にとつては大きな出来事であったのだ。

大海賊時代が始まってから多くの市民たちがその被害に遭った。平和な日常が突然破壊され、奪われ、涙することなど日常になっていつてしまった。

誌面に躍るニュースはいっただつて暴れ回る海賊たちのことばかり。それを見聞きした市民たちは常に恐怖を覚える。

「海軍も悪いけど……一番悪いのは海賊だ」

それは誰が口にした言葉だったのだろう。だが、それは現状の本質をついている。

海軍が頑張っていないわけではない。彼らは彼らにできる限りのことをしている。そんなことは皆わかっているのだ。だがそれでも間に合わないことが多く、故に「悪い

”と形容されてしまう。

しかしその海軍が一つの結果を世界に示した。

——完全勝利。

かつての「四皇」の一角を齡17の「英雄」が討ち取った。更に戦争そのものを齡19の「歌姫」がその歌声で終わらせてみせた。

その事実は万の言葉よりも大きな説得力を持つ。

「落ちていくください！ 現在今回の戦争に関わった将兵たちの多くは療養中です！」
正門前でそれらに対応するのは広報部門の海兵たちだ。彼らは連日詰めかける人々に対し、どうにか対応を続けている。

「入隊、協力の申し出についても感謝します！ しかし現在、マリンフォードの復興を始め状況は混乱しており——」

何度繰り返したのかわからない言葉をその海兵は繰り返す。納得してもらえないことなどわかつているのだが、それでもこれが彼の役目だ。

進展のない押し問答。そこにその人物が現れた。

「マリンフォード復興の協力、そして入隊の受付については別の場所に窓口を開設した。今は少しでも人手が欲しい。協力していただけるならありがたい」

門が僅かに開くと共に現れた人物を見て、周囲にざわめきが広がった。当たり前である。そこにいたのは今回の戦争において最も戦果を上げた「10人の英雄」のうちの一人だったのだから。

海軍本部中将、モモンガ。

最も大きく名前が報道されたのは「新時代の英雄」と呼ばれる二人であるが、敵の本拠地に少数で乗り込み、そして戦い抜いた彼もまた「英雄」として称えられている。

「モモンガ中将?! お体は大丈夫なのですか?!」

「完治まではまだかかる。刀は振れんな。だが今このマリンプォードに無理をしない者などいないだろう。私のような怪我人でも人員の誘導くらいはできる」

広報の海兵が驚いた声を上げるのに対し、冷静に返すモモンガ。彼の服装はいつものスーツであるが左腕は分厚い包帯が巻かれているし、更には見える肌の部分のほとんども包帯に覆われていた。

どう見ても満身創痍である。事実、完治までは月単位でかかるとも告げられている状態だ。しかし彼はじっとしていることができずにこうして出てきたのである。

そのまま彼が応対しようとした瞬間、爆発的な歓声が周囲から上がった。何だ、と思わず眩くと、詰め寄るようにして記者たちが集まってくる。

「モモンガ中将ですね!?! お話を!」

「世界はあなたたちの声を待っているんです！」

「む……」

モモンガは元々あまりメディア対応というものが得意ではない。故に隣にいる広報担当の海兵へと視線を向けたのだが。

「ありがとうございます！モモンガ中将！では市民の皆さん！協力していただける方はこちらへ！誘導します！」

「……ああ」

手早くこの場の責任者である海兵は市民たちの誘導を始めた。思ったよりも切り替えが早い。

モモンガは一度息を吐く。そのまま彼は記者たちの方へと向き直った。

「機密もあるため答えられない部分もあるが、答えられるところは答えよう」

「ありがとうございます！では早速ですが——」

マリノフオード正面でモモンガの口から語れる今回の戦争、その一部始終。無論彼が何もかも話したわけではない。だが彼の語った事柄はニュースとなり、世界へと伝わることになる。

人々は伝え聞くのだ。

この世界の「正義」は、確かにここにあるのだと。



巨大な黄色い体を持ち、更に強力な電撃を発する力を持つ鳥。ルフィによつてビリーと名付けられたその鳥は海軍本部の食堂で嬉しそうに声を上げていた。

「クオツ、クオツ」

「こうして見ると本当に大きいですね」

「あの島の生物の中だと小さい方だっというんだから、どうなってるんだか」

嬉しそうに食事をするビリーを眺めながら、そんな会話を交わしているのはたしぎとオリンである。戦争が終わってから数日。未だ完治はしていないが動けるようになって二人はこうしてルフィとウタに懐いたビリーの面倒を見ているのだ。

「あの島は色んな生き物がいたから。ビリーみたいなのは初めて見るけど」

そのビリーの側でしゃがみ込みつつ言うのはメルヴィユの住民である少女——シャオだ。最初にルフィたちに接触したということもあつてか、彼女は海兵を怖がる様子はない。

「私たちは共存とは言いつつも基本的にダフトグリーンの中にいたからねえ。あまりあの島の動物については知らないんだ」

シャオの付き添いという形でこの場にいる彼女の母親は恐縮したように言う。いやいや、とたしぎが言葉を紡いだ。

「シキが色々やってたみたいですし、しようがないですよ。それにあの島の生き物たちは何というか、無茶苦茶な力を持っていましたし」

「私たちも一対一だと辛い生物が多いですからね……」

言いつつオリンが視線を向けると、食事を終えたビリーはシャオと戯れあっている。最初の頃は興奮して電撃を撒き散らすので危険だったが、ある程度コントロールできるようになったらしい。今のところ、シャオが電撃を浴びるような事態にはなっていない。

ちなみにオリンとたしぎは一撃ずつ貰ったし今はここにいない部下三名は五、六発貰っている。そこでコントロールを覚えたようだ。

「でも、本当にいいのかい？ 私たちがここに住んでも。その……色々聞いたんだけど、私たちは『非加盟国民』ってやつなんだろう？」

空に浮かぶ島。更にはシキの支配下にあつたということもあり、メルヴィユの住民たちは世情というものに非常に疎い状態だった。とはいえメルヴィユがマリソフオード

の近くに落ち、そしてそこに人が住んでいる以上何もしいわけにはいかないのも事実だ。

そんな状況において海軍本部元帥たるセンゴクの動きは早かった。彼は島の住民たちと接触したオリンたちを中心に彼らとの対話の場を設けたのだ。世界政府としても無用な争いを望みたくはなかったし、海兵たちを落ちる島から助けてくれた姿も知られている。

「そもそも『国』という括りではないですから。細かな話は今後色々センゴク元帥がしてくれると思いますけど、大丈夫です。悪いことにはなりませんよ」

「そりゃあの人たちのお仲間さんが言うんだ。信じてるけどね」

言いつつ、チラリとシヤオの母親が食堂の奥に視線を向けた。そこではとある青年が無言でひたすら食事を続けている。

実を言うと、オリンがこの場にいるのはあの青年を見ておく役が必要だからである。普段は彼の幼馴染でありオリンの上官でもある女性がその役目を負っているのだが、今彼女は深い眠りにについている。既に目を覚まさないままに数日が経過していた。

(この二人は本当に……頭が下がる)

深い傷を負いながらの魂をかけた絶唱。それを普段以上の長時間維持し、更に帰還した後にはマリルフォードの怪物たちをメルヴィユへとその能力を持って送り返した。

歌姫”。メルヴィユに海賊たちの捕縛のための部隊が乗り込んだのを確認してからようやくやく彼女は眠りについたのだ。とてつもない消耗であったのだろう。

あの“金獅子のシキ”を単独で討ち取った青年も実を言うと目を覚ましていない状態ではあるのだが、こちらは多分心配ない。動いてはいるし。

「いたいた！ 中尉！」

「聞いてくださいよ中尉！」

「おつシヤオちゃん。体は大丈夫か？ 何かいるもんがあつたら言えよ？」

「うん！ ありがとう！」

のんびりとした空気の中、走り込んできたのはオリンと同じ部隊の海兵たちである。トップの指揮官二人が眠っている今、オリンがその指揮を執る立場にあるのだがマリルフォードの復興中である今はその指揮権も別のところに預けられている。

「どうしたの？ あなたたち、軽傷だから作業に行くって言ってたじゃない」

入ってきた部下たちへとオリンが問いかける。オリンとたしぎは現在安静を言い渡されているが、部下たち三人は動けるなら動くと言って現場に出て行ったのだ。ちなみにこの三人以外の部隊の者たちも同様に現場に出ている。戦争ではマリルフォードで迎撃に加わっていたとのこと。

実際、今の彼らの格好は海兵としての制服ではなく作業着であった。随分と汚れてい

るが、その表情は笑顔である。

「いやちよつと休憩で。そしたらさつき聞いたんですけどね」

「おれら昇格するんすよ！」

「おれら三人は全員少尉に！ おれらもコート着れるんです！」

えつ、と思わずオリンは声を上げた。この三人は全員が海軍将校と呼ばれる階級にはなく、それ故にオリンのように正義のコートを着ることが許されていなかったのだ。

ただ、昇格は喜ばしいことだ。オリンが笑顔になる横ではたしぎも笑顔を浮かべている。

「おめでどう」

色々と言葉を探したが、それが一番だと思った。はい、と彼らは応じる。少し涙目の者もいるほどだ。

「おれ、正直コート着れるなんて思ってたなくて」

「大佐と准将の強さ見てるとな……」

うんうんと頷きながら言う海兵たち。強さが全てではないが、この時代においては強さこそが基準になるのもまた事実である。

「まあ、気持ちにはわかるけど」

オリンは苦笑する。トップ二人の強さは最早別次元だ。だからこそ命を懸ける価値

があるとも言えるのだが。

「てか他人事じゃないですよ。中尉とたしぎさんも昇格って聞きました」

「そうなの？」

「そうなんですか？」

二人して驚く。そんな話はまだ何も聞いていないのだが。

「おれらも正式発表じゃないんですよ。さつきそこで聞いて」

「誰から？」

問いかける。この手の話はそれなりに地位のある人間でないとできないと思うのだが。

今回の最前線にいた中で一番階級が上のはガープとモモンガだ。だが前者はともかく後者がこの手の話を正式決定前に話すと思えない。

「——話したのはおれだ」

じゃあガープ中將か——そんな風に思ったところで、食堂に一人の男が入ってきた。非常に背の高いその男は、海軍で知らない者がいない。

「青雩さん」

「お疲れ様ツス」

「中尉、クザンさんですよおれらに教えてくれたの」

思わず立ち上がったオリンとは違い、海兵たちはその男に対して非常に軽い調子だ。

海軍本部最高戦力、*“大将”* 青雩。

立場でいうなら雲の上の人間だ。なので本来ここまで気安く接するべきではないのだが、この部隊の指揮官である青年と青雩の関係性もあつて特に男衆からのクザンに対する扱いは非常に気安い。

「お前らなア……少しは自分の上官を見習え。ちゃんと立ち上がって一礼してるぞ」

「むしろ上官の態度を見習うからこそですよ」

「大佐とクザンさんのやりとり見てるとなー」

「毎回うちの部隊のところでサボってるじゃないツスカ。それ見るとどうも」

海兵たちの言葉を聞き、まあいい、と青雩は言う。

「楽にしろ。……で、昇格の件だが。正式には外に出てる大将二人が戻ってからになる。ただお前らの昇格は確定だ」

「そうなんですか？ でもこういったことは色々手続きだったりがあるのでは？」

青雩に手で座るように指示をされ、オリンとたしぎが座り込む。青雩もまた近くの椅子に座ると言葉を続けた。

「普通ならそうだがな。今回は特例だ。シキの本拠地に乗り込んだお前ら10人への勲章授与については今日か明日の新聞に載る。これは*“政治”*としての判断だ」

「10人？」

「そうだ。この場にいる5人……いや、6人だな。それとガープさんにモモンガ、スモーカー、それでウタだ」

既に世間では先陣を切って乗り込んだ英雄たちとして話題になっている10人である。

そしてやはりというべきか、あの3人はそこに含まれていないらしい。

わかっていたことではあるが、少し寂しいと思う。彼らがいなければ自分達は死んでいただろう。それぐらい助けられた。

「他にも島に乗り込んだ奴らを含めて勲章だの昇格だのはあるが。……世間が欲しいのはまず、目に見えた英雄たちへの褒賞だ。いい気分じゃねえだろうが受け取っておけ」
いえ、とオリンは首を横に振る。そこで彼女はとあることに気付いた。

「では、お二人も昇格ですか？」

上官である二人のことについて青雫は何も言っていない。それについてだが、と青雫は言い難そうに言葉を紡ぐ。

「現時点では何とも言えん。保留だ」

「保留？」

オリンは思わず首を傾げる。自分達が昇格するのに、あの二人がないというのはどう

いうことだ。

「何故ですか？」

たしきも疑問の声を上げる。青雩が頷いた。

「これも『政治』だ。あいつらはまだ若い。階級が上がることは責任が増えるし重くなるってことでもある。時期尚早ではないかという意見もあるんだ」

「でもクザンさん。何もなしは流石に」

「だからセンゴクさんも困ってるんだ。別に二人に嫌がらせしたいってわけじゃねえよ。むしろ逆だ。今なら若さ故のミスがあつても守つてやれる。だがこれから先に進むとそれも難しくなってくる。……出世スピードが早過ぎるつてのも良し悪しだ」

はあ、とため息を吐く青雩。そんな彼にオリンが言葉を紡ぐ。

「ですが先ほど仰られた『政治』でいうなら、それこそ昇格なしは世間が納得しないのでは？」

「だから困ってる。そもそもだ。歌声で戦争を終わらせた奴とかつてとはいえ『四皇』を単独で討ち取った奴の昇格を一階級で済ませてもいいのか、という話もある。やつてることの功績を考えたら中将クラスよりも上だぞ」

「え、てことは大将ツスカ？」

「流石にそれは早過ぎる」

海兵の言葉に対して肩を竦める青雩。そんな彼の言葉を聞いて皆も理解をした。

「うちの総大将も中々面倒な立場ですな〜」

軽い調子で言う海兵はその視線を食堂の奥に向ける。青雩もまた同じ方向へ視線を向けると、で、と彼は言葉を紡いだ。

「あいつは何をしてるんだ。話を聞かずに飯食ってるみたいだが」

食堂の奥。そこでは一心不乱に食事を続ける青年の姿があった。痛々しいほど身体は包帯まみれだというのに、食事の速度は凄まじい。

その青年こそが今回の戦争における最大の功労者の一人であるモンキー・D・ルフィだ。

「話を聞いてないのはいつものことだが」

「ああいえ、あれはいつもとは違います。……寝てるんです」

「……………はっ」

青雩にしては珍しい、間の抜けた表情であった。そのまま彼は立ち上がると青年のところへと歩み寄っていく。

「……………マジか」

思わず彼は呟く。食事を続けている青年は確かに眠っていたのだ。だが食事は凄まじい勢いで進んでいる。

「どうなつてんだこれは……?」

「大佐、大きい戦いの後だと結構長く眠るんですが。どうもその間にご飯を食べそびれるのは嫌らしく」

「アラバスタの時にはしてなかったですよ……?」

「あの時の悔しさのせいじゃないですかね?」

「意味わからんよな」

「何があれつて起きてからも食うとこだよ」

「お兄ちゃん凄いい！」

「外の世界の人はああいうことができるんだねえ」

約一名、誤解が生まれている。青雉は訂正しようとしたところで同じ一族の男のことを思い出した。あの人も確か同じことをしていた気がする。

——多分これは本人の気質もあるが、血だな。

どこかの革命軍のリーダーに流れ弾が直撃したが、青雉にそれを慮る義理はない。

「まあいい。……とりあえず、お前たちの名前は世界に発信されるんだ。色々と声も届くだろう。覚悟はしておけ」

言いつつ、立ち去っていく青雉。その背を見送ると、作業着の海兵たちも立ち上がった。

「じゃ、おれらも戻ります」

「どつちかが目を覚ましたら教えてくださいよ中尉」

「ええ。もちろん」

手を振って応じるオリン。その時、思い出したように海兵の一人が言った。

「そういや、やつぱり見つからないみたいツスよ」

「……らしいわね」

オリンが頷きを返す。見つからない——それは、オリンたちが相対したシキの孫娘を名乗る女性のことだ。

島が落下した後、海軍は海賊たちの捕縛に動いた。幹部を含めほとんどは逮捕できたのだが、全員ではないと聞いている。逃げた者もいるだろうが、おそらくは落下の際に海に落ちてそのまま行方不明になった可能性が高いのだ。

敵であつた相手だ。情があるわけではない。だが、少し思う部分はある。

「ヒナさんたちが海賊をインペルダウンに護送中ですが、やつぱり数は合わないようです。そういうことなのでしょう」

「あの島の落下に巻き込まれたんだもの。全員無事とはいかないのはまあ、しょうがないとは思うんだけど」

たしぎの言葉に応じる。凄まじい使い手であつた。ただ瀕死の重症でもあつたはず。

おそらく命はないのだろう。

戦争だ。こういうこともある。

「じゃあ」

海兵たちが立ち去っていく。それを見送りながらオリンは思う。

(ままならない)

戦いに勝つてそれでošimaiというわけではなくて。

この後にもまた、多くの戦いがあるだろう。

——願わくば。

次の戦いの後にも、こんな風に。

穏やかに過ごす時間があればいいと、そう思う。



「イル。この計画が終わったら世界を見て回れ」

己を救い出し、居場所をくれた人が不意にそんなことを言った。近くにいた自分の事

情を知る男女二名も頷いている。

ただ、自分にはどういう意味かわからなかった。

“私は……必要、ないと”

思わずそんな言葉が漏れた。それに気付いて慌てて謝罪を口にしようとするが、その前に相手が言葉を紡いだ。

“逆だ。ラウンドもカガシヤもよく知つてることだが、上に立つつてのは広い知見が必要だ。おれの支配は一日二日で終わるような者じゃねエ。支配つてのは何十年と時間をかけて行い続ける事業だ。その未来にイル、オメエは必要だ”

その知謀と影響力、そして純然たる暴力で“海賊王”とも渡り合つた男は言う。

“支配つてのはその日で終わつちや意味がねエ。まずは一年、そして十年。更に二十年。そうやつて定着させるもんだ”

“そのためには人手はいくらあつても足りんのじゃ、イル。信用できる者は多ければ多いほうがいい”

こちらへと視線を向けて言うのはカガシヤだ。その言葉に頷き、シキは続ける。

“おれも若い頃から世界中を見て回つて今がある。無駄にはらなねエさ”

それは、未来の話だった。

戦争に勝利した後を訪れたはずの未来。

しかし、その未来は——……

「……………う」

目を開けた瞬間、思わず呻き声のようなものが漏れた。頭がぼうつとする。

(ハハ)は……………

最後に残っている記憶はカガシヤの部下に手当てをしてもらったことだ。少しだけ意識が戻ったが、すぐにまた気を失ってしまった。

だが、体のことなどどうでもいい。問題はあの戦いの結末だ。

あの後どうなったのか。シキは、恩人はその本懐を遂げられたのか。

「あ、気がついたね」

満足に動かない体を動かそうとしているとそんな声が届いた。視線を向けると、そこには帽子を被った女性がいる。

「動かない方がいいよ。麻酔もまだ効いてるし、凄いボロボロだったんだから」

その女性の言う通り、起き上がることさえできそうになかった。思考が少しぼんやりしているのは彼女が言う通り麻酔が効いているのだろう。

「……………ハハ、は……………」

せめて状況を掴もうと思考を巡らせる。もしかしたらシキ傘下の海賊かもしれない

と思つたが、どうも違う。雰囲気が海賊のそれではない。

「——おれたちは革命軍だ」

不意に別の声が聞こえてきた。現れたのは帽子を被つた男だ。

どこかで見たことがあるとイルは思う。そうだ、あれはラウンドが見ていた新聞に載つていた——

「おれはサボ。こつちはコアラだ。いきなりで色々と整理はついてねえだろうが、まずはこつちの要件を言わせてもらおうぞ」

「サボくん。相手は病人だよ？」

「何も説明されないままより、何故自分がここにいいのかを先に知っておいた方がいい。わからねえつてのはどうしたつて不安になる。おれなりの誠意だ」

抗議する女性——コアラに対し、肩を竦めて言う男性。そこで思い出した。あの青年は『世界最悪の犯罪者』、その片腕だ。

革命軍参謀総長、サボ。確かラウンドがジツとその青年の掲載されていた新聞を眺めていたのを見かけて、知り合いなのかを問うたのだ。彼が革命軍に誘いを受けたことがあると聞いたことがあつたためである。

その時は確か、彼は首を横に振つたのだ。

『知らない顔だ。……だが、それでいい。私の知らない人間。世界の知らない人間。』

そういう人間が革命軍の思想に共感し、結果を示している。それが大切だ”

彼の語ることの意味はわからなかった。ただ、“大地の王”とまで呼ばれた人物が確かに評価していた人物であることは確かである。

「まず結論から言うが、“金獅子のシキ”は敗北した”

体が震えた。だがサボは構わず言葉を続ける。

「あんたはボロボロの状態で海を漂ってたんだけだ。……あんたには色々聞きたいことがある」

「ちよつとサボくん。言い方」

「こう言った方が受け入れ易いだろ。まあ、時間はある。話はもうちよつと傷が治ってからだ」

言い切ると、サボは部屋から出ていった。その背中に向かってコアラが文句を口にす

る。

「もう、要件人間なんだから」

そして彼女はごめんね、とイルに向かって言葉を紡ぐ。

「ああ見えて、あなたを見つけて真っ先に飛び込んだだけだね」

「そう、なんですか？」

「昔、同じような状況から助けてもらったんだって」

言いつつ、コアラは近くにあった引き出しから何かを取り出した。それは一つの音具だ。

見覚えがある——あるに決まっている。だってそれは、私にとって唯一の持ち物。

「これ、あなたの?」

「——はい」

手渡されたそれを右手で受け取る。よかった、という言葉が思わず漏れた。

シキから——祖父から貰ったもの。大切なものだったから。

そんなイルに対し、コアラが言う。

「ごめんね。ちよつとだけ聴いたんだけど……ファンなの?」

「はい」

即答した。コアラは笑顔を浮かべる。

「やっぱり! 私もファンなの! どの曲が好き? 私はね——」

笑顔で言う彼女に少し面食らいながらも、イルは領きを返す。

ただ、思うのは。

(……お爺様)

あの人の野望は潰えたのだろう。

力になりたかった。あの場所から救い出してくれた、あの人の力に。

けれどその力が足りなかった。どうしようもない奴だと、そんなことを思う。

“まだ何かやりたいことがあるなら、言ってみろ”

ふと、その言葉を思い出した。

あの人は初めて会った時にそう言っ

(やりたい、こと)

て。歌が聴きたいと言った。

力になりたいと願った。

ここにいたいと——いつの間にか、そう思うようになった。

ならば、今は？

これからの私は、どうしたらいいのだろう。

——今までは、道を示してくれる人がいた。

それがどんな道であったとしても。どんな手段であったとしても。何をすればいい

かは誰かが示してくれていた。

けれどももう、それをしてくれる人はいないのだ。

(世界を)

あの人の、最後の命令。

“世界を見て回れ”

その果てに何があるのだろうか。

生まれ落ちた時より枷に繋がれ、
“支配”を受け続けた少女。

その少女は“支配”を掲げる海賊に拾われる。

しかし、彼女に対してその海賊が望んだものは。

……ただ、一つだけわかっていることがある。

おそらくあの人は死を望まない。だから。

(私は、もう少しだけ)

この世界で。

生きてみようと、思います。



ウォーターセブン。いつも通り賑やかなその街の一角にその酒場はある。いつも繁盛しているのだが今日は特別だった。しばらく店は閉まっていたということもあり、常連たちが詰めかけている。

「アウツ！ 久し振りじゃねえかブルーノ！」

「へへっ、元気そうで」

ポーズを決めながら入店してくる海パン一丁の男とその両脇の女性たち。中心の男——フランキーに対し、ブルーノは接客用の笑顔で応じた。

「いやー、それでもねえのよ今週のおれは最悪だ。さつきもヤガラブルレースに負けちまってなア」

「そういう日もあるさ」

フランキー用にコーラを用意しつつブルーノは言う。そのフランキーの両隣へと女性二人——キウイとモズが座る。

「しかし運がないわいなー、ブルーノ」

「仕入れ中に事故に遭ったって聞いたわいな」

「たまにはそんなこともある」

苦笑と共に言うブルーノ。世間的にはそういうことになっているのだ。まさか今世間を賑わせている戦争の最前線に立っていたなどと言えるわけがない。

日常に溶け込み、情報を集める。現在も彼はとある任務の途中だ。そのためには表舞台に姿を晒すわけにはいかない。

「お、これ『歌姫』の曲だわいな」

店内に流れる曲に気付き、キウイの方が声を上げる。ええ、とブルーノは笑った。

「丁度手に入ったんだ。元々人気ではあったが」

「この歌好きだわいな」

「いい歌だよなア。『歌姫』つてのも大したもんだ」

コーラを飲みながら言うフランキー。だが彼はジョッキのコーラを飲み干すと、勢いよく立ち上がった。

「だがおれも負けてねえ！ 盛り上がるぜ野郎ども！」

「『おおー!!』」

待つてましたと言わんばかりに店内の客が盛り上がる。フランキーが店に来るといふことはこう言うことだ。

その光景を笑みを浮かべてブルーノは見守る。

当たり前の日々。そこに潜むことが己の任務だ。だが、同時にこうも思う。

(不謹慎ではあるが。……楽しくはあった)

ギリギリの命のやり取り。鍛えた己の力を存分に発揮し、それでもなお死の危険が常にある戦場。久しく感じなかつた感覚だった。

同僚のことを言えんなど言いながら、ブルーノは店の奥の机に置かれた新聞へと視線を向ける。

そこに彼の名が載ることはない。だが共に戦った者たちの名前は載る。

あの時の握手の感覚と、その事実こそが報酬だと。

——闇の諜報員は、小さく笑った。



マリンフォード元帥室。大量の書類が運び込まれては元帥たるセンゴクの決裁を経て運び出されるを繰り返すその場所に、三つの人影があつた。

「一応言っておくが、お前たち。断る権利はないぞ」

呼び出した相手二人に対し、センゴクは開口一番そう告げた。告げられた二人は机を挟んだソファに座っているのだが共に慥然とした表情をしている。片方に至つては音を立てて煎餅を齧っていた。

「……元々断るつもりはないですが」

だが、片方の予想外の回答に煎餅を齧る音も途絶えた。ほう、という驚きを含んだ声と共にセンゴクはその人物——スモーカーへと視線を向ける。

「アラバスタの時から心境に変化があつたか？」

「……立場、つてもん的重要性を理解しました」

言いつつスモーカーは対面で煎餅を持っている人物を見る。おい、とセンゴクは言葉を紡いだ。

「それは参考にするな」

「それとはなんじゃそれとは」

「参考にならん生き方をしてる貴様が悪い」

それ扱いされた老兵——ガープに対し、センゴクは呆れと共に言う。ガープも自覚はあるのか、言い返さずに再び煎餅を齧り始めた。

「説得の必要がなくなったのはありがたいが。まさか本当に『それ』を指摘すとは言わんだらうな？」

「……いや、目指してなれるもんでは」

「……ああ、うん。私が悪かった」

二人の間で意見の一致を見た。スモーカーは話を切り替えるように言葉を紡ぐ。

「ただ、海軍は組織でしょう？　そこで我を通したきや立場が必要になります。肩書きって言い方でもいいですが」

「その組織のトップに堂々と言い切るのはどうなんだ」

「すみませんね」

肩を竦めるスモーカー。そんな彼の姿を見て笑ったのはガープだ。

「ぶわっはっは！ いやー、ルフィの友人なだけはあるのう！」

「いや、友人では……」

「ん？ あいつはそう言っておったぞ」

スモーカーの表情がいくつかの変遷を辿る。最終的に彼は葉巻を咥えて火を点けた。沈黙が彼の選択である。

「笑っている場合かガープ。お前も出る」

「面倒じゃのう」

嫌そうな顔をするガープ。だがセンゴクは知っている。こういう顔をしているが、彼はなんだかんだ式典には出席するのだ。

——その式典に遅刻するだけで。この辺は祖父と孫、どっちにも共通することだ。

「まあいい。その辺はどの道あの二人が目覚ましてからだ」

一人は何やら眠りながら飯を食うという血を感じさせる行動をしているらしいが、もう一人はずっと眠ったままだ。あの過酷な戦いの最前線にいたのである。当然といえば当然だが、早く元気になってほしいものだと思おう。

ちなみに腹を貫かれた“伝説の海兵”は一番早く復帰した。長い付き合いであるが、たまにこの男が人間であることを忘れそうになる。

「まあ大丈夫じゃろう」

人間であるかどうかを友人から疑われているなどは夢にも思わないガープが言う。

「あの二人はわしが思っていたよりもずっと強くなっておった。……大丈夫じゃ」

「……ああ、そうだな」

その彼に対し、互いに老いたな、とは言わなかった。

だが、かつて同じ時代を生きた海賊が今の時代に生まれた若者によって倒されたという事実に感じることはある。

——時代が、変わろうとしている。

この大海賊時代。その大きなうねりの中で。

二つの希望が、この時代を切り開こうとしているのだ。

「なあ、ガープ。相談だが——」

言いかけたところでドアをノックする音が響いた。なんだ、とセンゴクが問いかけると、入ってきた海兵が声を上げる。

「ルフィ大佐が目を覚ましました！」

「……随分な寝坊じやったのう」

その報告を聞いて最初に笑ったのはガープだ。見ればスモーカーも小さく息を吐いている。

そしてセンゴクもまた、己の口元が緩んでいるのを自覚していた。

「そうか。……それは何よりだ」

言いつつ、センゴクは海兵に指示を出す。そんな彼に煎餅を齧りながらガープは言った。

「何を言いかけたんじや？」

「大したことじゃない。……我々も負けてられんというだけだ」

言いかけた言葉は一度飲み込んだ。これを口にするにはまだ早い。

だが、もう少し先の未来。そこでようやく、本当にようやく。

——肩の荷が降ろせるのかもしれないと、そんな風に思った。

半壊した守護の砦にして本拠地、マリンスフォード。

しかし偶然か、或いは必然か。そこに刻まれた“正義”の文字に翳りはない。

人々はその短い言葉に希望を抱く。

いつか、そう、いつか。

彼らが掲げる“正義”が、この時代を終わらせてくれるのだと——……

逃亡海兵ストロングワールド エピローグ③

見覚えのある風景だった。

時間というものは何よりも平等な概念だ。どんな時だって流れる早さに変化はない。違うと感じるならばそれはその個人の主観に過ぎないのだから。

だがそれをわかっていてもなお、その場所の時間はゆっくり流れているように思えた。

その場所は、彼女にとっても思い出深い場所。

今や故郷とも言えるその場所の名は——フーシャ村。

(……穏やかだね)

肌を撫でる風さえも優しく感じる。

黒いドレスに血で汚れた正義のコート。そして頭には麦わら帽子。あの戦いを終わらせるために歌った時の格好で彼女——ウタはその場所にいた。

何故この格好でこの場所にいるのかはわからない。だが不思議と不安はなかった。

「……歌声……?」

小さな歌声が聞こえてきた。風に乗ってこちらへと届くその声は穏やかで。どこか……懐かしい。

「——」

自然と声の元へと足が向いていた。懐かしい風景の中を一人で歩いていく。

フーシャ村には海軍に入った後も何度か帰ってきたことがある。少しずつ変わる村の様子にその度に驚いていたものだ。

だが、今ここにあるのは今ではない。かつての、あの日々の風景だ。

——彼と出会った、あの頃の。

「——やっぱり」

声を頼りに辿り着いたのは、ウタがこの村で最も世話になった人の経営する酒場だった。その入り口近く。そこに座る少女と、その少女の膝に頭を乗せて眠る少年。

歌声は少女のものだった。その少女はこちらに気付くと歌うことを止め、顔を上げる。

「こんにちは、私」

その少女はかつての自分であった。幼き日の姿そのままにこちらを見ている。

口元に浮かんでいるのは小さな笑みだ。

「あなたは誰？」

問いかける。すると少女は膝の上で眠る少年の頭を撫でながら言葉を紡いだ。

「知ってるでしょ？——私は赤髪海賊団の音楽家、ウタ。『新時代』を作る女よ」

当然のように言う「わたし」。そっか、とウタは頷いた。

それに対し、相手が問う。

「あなたは？」

一瞬だけ答えに迷った。だがすぐに思い直す。

今の自分は彼の帽子を被り、彼のコートを着ている。ならば答えは一つだ。

「私は海軍本部准将、ウタ。平和を届ける女だよ」

その言葉に対し、「わたし」は興味深そうに頷いた。

「海軍かあ……。何があったらそんなことになるの？」

あの頃の自分からしたら当然の疑問だろう。そんなことはそもそも選択肢の中にさ

えなかったのだから。

「何があつたんだと思う、「わたし」？」

「——シャンクスに捨てられた、とか？」

幼き少女の表情は小さな笑みを浮かべたままだ。だがその言葉で理解した。

——この「わたし」は、確かに「私」だ。

ただこれは未練と呼ばれるもの。あの日々に対する心残りが形になった存在だ。

「凶星かな、私”?”」

その言葉に対し、そうだね、と頷く。

「……想像もしてなかった」

あの日々がずっと続くと思っていた。いつかルフィも同じ船に乗って、冒険して、世界を見て回って——そんな日々を想像していたのだ。

少なくともこの頃の自分は、こんな未来を想像さえもしていなかった。

「今も向こうで楽しそうにしてるのに」

振り返りながら「わたし」が言う。マキノの酒場の入り口。その向こう側はモヤがかかったように見えない。

「相変わらず賑やかな笑い声だね」

目を細め、微笑む「わたし」。だが彼女とは違い、「私」にはその声は聞こえない。かつては毎日のように聞いていた声。自分も共に笑っていたあの日々を、今の「私」はもう思い出すことができなくなってしまった。

「——人はまず、声から思い出せなくなっていく」

えっ、と「わたし」が声を上げた。入り口から視線を外すと、「私」は「わたし」へと向き直る。

「全てが黄金によつて支配された場所。そこで聞いた言葉なんだけどね。……ねえ、わたくし」。十年はさ、長いよ」

あまりにも長過ぎると、呟くようにそう言った。

「私はシャンクスを憎んだ。赤髪海賊団を憎み続けた。どうして置いていつたの、どうして何も言つてくれなかつたの、どうして私を——そんなことばかり、考えて」

「……答えはあつたの？」

「ないよ。会えてないからね」

十年という月日の間で、彼らの——赤髪海賊団の名前を聞いたことは何度もあつた。だが結局、彼らと自分の道が変わることは終ぞなかつたのだ。

この先の未来はわからない。だが少なくともこの十年でそれは成せなかつた。

何故だろう。方法は——あつたはずなのに。

「会いに行こうとしなかつたの？」

「できないよ。ただでさえ私のせいでルフィの夢を諦めさせてここにいるのに。……それに色んな人に迷惑がかかるってわかつて、そんなことはできない」

「ふーん。つまり、逃げたんだ？」

「——」

返す言葉を口にできなかつた。だが当たり前前だと思ふ。

目の前にいる「わたし」は、間違いなく「私」なのだから。

「……怖いに決まってるでしょ」

だからこそ、吐き出す。

ルフィにさえ言えなかつた——言えずにいた言葉を。

「本当に私を利用するためだつたつて言われたら。シャンクスの娘であつた時間はなんだつたの？ 理由があつたつてわかつたら。止むを得ない事情があつたんだつてわかつたとしたら。私の十年は何だつたの？」

今ここにいる自分。

ウタという存在、その根幹が崩れてしまう。

「私一人ならいい。ただただ私が馬鹿だつただけ。でも、私は。私は——ルフィを巻き込んだ」

眼前、幼き日の姿で眠る彼を見つめながら言葉を紡いだ。

「「わたし」は知ってるでしょ？ ルフィの夢について」

「「海賊王」でしょ？」

そうだ。彼はシャンクスに憧れていた。いつか彼のような海賊になるとそう誓つていたのだ。

そんな彼を見て、いつか必ず何か大きなことを成し遂げるのだろうとウタは確信に近

い想いを抱いていた。

だが彼のその『夢』は潰えてしまう。

——あの人の未来を、私は奪ったのだ。

「私はルフィと一緒にいたい。それだけでいい。それだけでいいの」
けれど。

あの人は。

太陽のように笑うあの人は、どうなのだろう。

「ルフィの隣に立つたために、一緒にいるために私はいつだって必死だった」

目を離せば一瞬で遙か遠くに行ってしまう背中。それを追い続けている毎日だ。

彼の隣で肩を並べて。

彼の正面で向かい合って。

そんなささやかなことさえ、必死だった。

「十年だよ?」

もう、それだけの時間が経っている。

「私は、ずっとルフィと一緒にいたい。でも私はそれだけの時間を奪ってしまった」
吐き出した本音と共に瞳から一筋の涙が零れ落ちる。

彼のことを想う気持ちは嘘ではない。

彼が私を少なからず想ってくれていることも、自惚れではないはずだ。けれど、だからこそ。

「十年は……長いよ」

ここから先へ踏み込む勇気がない。

もし、彼に拒絶されてしまったら。

夢を諦めさせたことを、恨まれていたら。

「情けないでしょ？ 私はいつも逃げてばかりで」

彼がいなくなってしまうたら。

私にはもう、何も残らない。

「……十年で随分変わったね、私」

目の前の少女は微笑む。

「ルフイはいつも私の方に寄ってくるの。勝負だー、って。さっきも二人で勝負してたくらい。今は違うの？」

「それは……」

思う。幼き頃の彼はいつもこちらへと話しかけてきて。それを待っている自分がない。

そんな日々だった。それが、今は。

「なあウタ、これ見ろよ！ 凄えぞ！」

何かを見つけたる度に、彼は楽しそうにこちらの名前を呼ぶ。

「勝負だウタ！ 今日もおれが勝つからな！」

あの頃のように、こちらへ勝負を持ちかける彼がいて。

「お前が……置いて行こうとするなよ」

そしてあの時、彼はこちらを抱き締めながらそう言った。

その言葉の……意味は。

「変わってないよ。ううん、少しだけ変わってはいるんだと思う。もうシャンクスと過ごした時間以上に一緒にいるんだもの。変わらないわけがない」

けれど、と。

微笑む「わたし」は言葉を紡ぐ。

「この想いだけは何も変わってない。それは多分、ルフィも一緒だよ」

そんな「わたし」に対し、「私」は苦笑と共に言葉を返す。

「そこは断定してくれないんだね」

「だって「わたし」は「私」だもん。ルフィの気持ちはわからないよ。……でもまあ、大丈夫だよきつと。それにさ、一度で諦めるのもらしくないし。いざとなったら、そうね」

そうやって、〃あの日〃の音楽家は笑う。

「わたしは海賊だからね。欲しいものは力づくで奪うの」
対し、〃今〃の海兵も笑う。

「今の私は海兵だよ？ そんな無法なことはできないの」

「じゃあ海賊になればよかつたのに」

「そうだね。……でも、残念」

景色の色が変わっていく。この世界も閉じようとしているのだ。

「今の私も案外、気に入ってるの」

歩んできた道。それは決して平坦な道ではなかつたけれど。

彼が隣にいてくれて。

色んな人たちに支えられて。

そうしてようやく、ここまで来れたから。

「なんだ、思ったより楽しそうだね。——じゃあ、いいかな」

呟く言葉と共に、世界が崩れていく。眠るルフィの頭を撫でる〃わたし〃に対し、最後に言葉を紡いだ。

「じゃあね、〃わたし〃」

「またね、〃私〃」

世界が閉じていく。

その最中、確かに耳にしたのだ。

——穏やかな、子守唄を。



目を覚ました時には既に深夜だった。ゆつくりと体を起こす。窓から差し込んでくる月明かりをぼんやりと眺める。

どれぐらい眠っていたのだろう。体が重い。身体中に巻かれた包帯が自分の状態を伝えてくれる。

「……………ん」

小さな声が聞こえた。声が出た方を見る。

「——ルフィ」

やはりというべきか、そこにいたのは幼馴染であった。彼は椅子に座り込んだ状態で眠り込んでいる。

呑気な表情だ。だが彼がそこにいる意味がわからないほどにここにいる女性——ウタは馬鹿ではない。

「……お互い、ボロボロだね」

ルフィの体は包帯塗れだった。自分もそうだが、毎回二人して大きな戦いではボロボロな気がする。

だがそれでも、今回はその中でも最も過酷な戦いであつただろう。かつての“伝説”を相手に、文字通り何もかもを投げ捨てるような戦い方をしてようやく勝利をもぎ取つたのだから。

「ねえ、ルフィ」

ベッドを降りる。体の感覚が少し鈍っており、思わず倒れそうになるのを堪えた。

ルフィの元に歩み寄り、しゃがみ込む。膝をつくとき彼を見上げるような体勢になつた。

「ありがとう」

その頬に右手を当てる。

何度目だろうか、この言葉は。

「一体私は、何度——」

ゆつくりとウタは顔を近付ける。ほとんど無意識の行動だった。だが、次の瞬間。

「……………んん？」

ルフィがゆつくりと目を開けた。

「あ——」

その瞬間、ウタは慌てて離れようと体を後ろに引く。

——鈍い音。

反射的に体を後ろに引いたウタの後頭部が、ベッドの枠に激突したのだ。

「……………!?!」

声も出せずに後頭部を押さえて蹲るウタ。そんなウタを見て目を覚ましたルフィが慌てた様子で側に寄って来る。

「大丈夫かウタ!?!」

「……………だ、大丈夫……………」

「ちよつと見せてみる!」

抱きしめるように体を引き寄せられる。ウタの体がすっぽりとルフィの腕の中に収まった。

「……………あ……………」

思わず、吐息のような声が漏れる。

彼の身体が自分よりも大きくなったのは、いつからだっただろう。

「んー……大丈夫そうだな」

安心した様子で声を漏らすルフィ。その彼に対し、ウタは言った。

「ね、ルフィ。お願いがあるの」

「なんだ？」

「うん。……髪を結んで欲しいの」

ルフィは一度首を傾げたが、いいぞ、と頷く。そして離れた彼の体を名残惜しく思いながらも、ウタは彼へと背を向けた。

眠っていたウタは髪を解いた状態だ。互いに床へ座り込んだまま、二人きりの病室で二人にとっては当たり前の日常を行う。

「ルフィも上手くなったね」

「いつものやつは無理だけどな」

手慣れた手つきで髪を結んでいくルフィ。彼が今やってくれているのは三つ編みだ。

切欠が何だったかはもう忘れてしまった。ただ二人で街に出る時にルフィがウタの髪を三つ編みにするのが二人の間の日常になっていたのだ。

最初はぐちゃぐちゃで下手くそだった。でも繰り返し返すうち、三つ編みだけは上手く

なつていったのだ。

思わずウタの口から笑みが溢れる。

「ふふ、なんだろうね」

「あ、こら動くなよ。……どうした？」

「うん。なんかルフィにこうして髪を結んでもらつてると、帰ってきたな、つて気がして」

これは互いに海兵であるという立場を休む時にやる一種の儀式だ。準備を終えた後、こうして髪を結んでもらつてから外に出る。

それが当たり前だったからこそ、帰ってきたのだと実感できるのだ。

「そうかもな。……よし、できたぞ」

「うん。ばっちり」

三つ編みになった自分の髪に触れながらウタが微笑む。その姿を見てルフィが立ち上がった。

「とりあえず誰か呼んでくる」

「あ、ちよつと待って」

言いつつウタは右手を差し出した。その手をルフィが右手で掴むと、そのまま彼女を引っ張り上げる。

どうして欲しいのかをわざわざ口にする必要はない。それぐらいの時間を共にしてきている。

「おつ、と」

「大丈夫か」

立ち上がると共にウタの足元がふらついた。それをルファイが肩を掴んで支える。

「ありがとう。……ちよつと寝過ぎたかも」

「もう少し寝てたらどうだ？」

「うーん。ちよつと今は外を見たいんだよね」

言いつつ、右手をもう一度ウタは差し出す。ルファイはそれを見て、彼の左手でその手を握った。

「倒れそうになったら支えてね？」

「当たり前だろ」

互いに戦いの傷は癒えていない。故にこそ、この二人は寄り添うように歩き出す。

深夜の海軍本部。普段であれば深夜であつてもそれなりに人が多いのだが、復興作業中でもある今は日中に人員を集中させているためか人の姿がない。

二人の足音だけが、静かに響く。

まるでそれは、この世界に二人きりであるかのようにだった。



外の風景は二人の知る姿と比べて随分と様変わりしていた。

戦場となった要塞の正面部分は荒れ果てており、無数のクレーターがある。瓦礫の撤去の途中であるのか、あちこちに小さな山が作られていた。

人の姿はない。いや、あるにはあるが見張りが数人いる程度だ。

「……改めて、凄い戦いだっただね」

「こつちも凄かったらしいからなア」

手を繋いだまま、二人はその光景を眺めていた。戦いには勝利した。だが勝利したからそれで終わりというわけではない。その後始末が待っている。それは今まで二人が関わってきた事件でもそうだった。

アラバスタの復興は順調ではあるがまだ時間がかかる。

空島も島が一つ消えたのだ。その復興には時間がかかるだろう。

この二つだけではない。今まで関わった多くの場所でそういった『その後』に関わつ

てきた。

元に戻る、というのは大変だ。だがここはマリンプォード。海軍の中心だ。そこが正しく屹立していないと、『正義』が揺らぐ。

「ま、大丈夫だろ。頼りになる奴はいっぱいいるし」

「そうだね。……私たちも早く傷を治さないと」

「だなー」

笑うルフィに対し、ウタも小さく笑う。あれだけの戦いを経験しておきながら平然と笑えるこの幼馴染は本当にどうなっているのか。

そして空を見上げたところで。

「……………ん？ あ、新聞？」

夜だというのに、新聞を届けるカモメ——ニュース・クーが上からこちらに近寄ってきた。そのまま一部、そのカモメは新聞を渡してくる。

その新聞をウタが受け取ると、ニュース・クーはそのまま飛び去っていった。それを見送り、ウタはルフィと繋いでいた手を離して新聞を広げる。

「お、新聞か？」

「うん。多分この間の戦いのこと……だと……」

そこでウタの動きが止まる。その新聞の一面に書かれていたことと、載せられている

写真を見てフリーズしたのだ。

載せられていた一枚の写真には、今や世界中の話題になっている二人の「新時代の英雄」が写し出されていた。それはいい。なんだかんだでこの二人が新聞のトップに載ることは珍しいことではない。

だから問題はその写真そのものだ。

「……あー……」

あのルフィでさえも微妙な声を出すに留まっているというある種異常事態。そこに写っていたのは、シキを撃破したルフィをウタがビリーと共に助けに行つた時のものだ。

それも丁度ルフィに抱き寄せられている時の写真である。この写真の写り方だとまるで抱き合っているかのように見えた。

そして何より。

『「新時代の英雄」、結婚秒読み!?!』

そんな見出しがデカデカと表記されていた。

元々注目度が高い上に常に一緒にいる二人だ。その功績もあつて新聞に載ることは多いし、どこかのアホウドリは嬉々としてニュースにする。何度か熱愛報道もあつた。いつもならあのアホウドリめ、の一言で終わることだ。しかしこの写真の後で起こつ

たことを考えると――

「……………あう……………」

顔が熱くなっているのがわかる。考えないようにしていたのに、あの時のことを思い出してしまった。

あの感触も、あの時の感情も。

どちらも鮮明に残っていて。

「……………」

チラリと、ウタはルフィへと視線を向けた。彼は麦わら帽子を目深に被り、視線を逸らしている。

どう思っているのだろう。

どんなふうに感じているのだろう。

「……………え……………つと……………」

あの瞬間を。

あの、時を。

私の……………想いを。

「あ、あのよ」

ルフィが何かを言おうとする。だが彼は視線を何度も彷徨わせると、何かを言おうと

して口を閉じるを繰り返す。

沈黙が流れる。ウタは拳を小さく握った。

(勇気を)

踏み出す勇気を。

祈るように自分へと訴えかける。

だけど同時に、怖いのだ。

——そんなことを願う権利があるの？

弱い私がこう言うのだ。

——ルフィの『夢』を諦めさせておいて。

身勝手だと。愚かだと。

そんなことを。

「……………ッ」

何度も紡ごうとした言葉が、どうしても紡げない。

こんなにも弱かったのか。

こんなにも情けなかったのか。

私は、こんなにも。

「――月が綺麗だ」

聞こえてきたのは、そんな言葉だった。

思わず弾かれたように顔を上げる。月を見上げる横顔は、とても……格好良くて。そこにいたのは、私の大切な人で。

――世界で一番、好きな人だった。

「わ、私」

絞り出すように言葉を紡いだ。足が震える。

「し、死んでも……いい、かも」

それでも、その言葉を口にした。言い切ることができた。

かつて読んだことのある本にあったやりとり。ロマンチックだと、そんな風に思ったのだ。

あの登場人物たちのように、私たちも。

「なあ、ウタ」

……ただ、忘れていた。

「そんなこと言うなよ」

相手がルフィだということを。

「えっ？ な、何が？」

「死んでもいいとかよ。そんなこと言うな」

真剣な表情だった。どこか必死ささえ感じるほどに。

その表情を見てしまうと、ウタは頷くしかない。

「……うん。ごめん」

「ウタに死なれたらおれはどうすりやいいんだ」

先程までの致命的な空気は見事に霧散していた。はあ、とウタは息を吐く。

そう、あれは本に書かれたものだった。ルフィが知っているはずがないのだ。彼があ
の手の本を読むはずがない。

ルフィは悪くない。敢えて言うなら言葉のチョイスが悪いのだろうが、それは多分偶
然だ。

「……寝るから連れてって」

「……なんか急にやる気なくなつたな」

しよーがないでしよー、とウタは気怠げに言う。いや本当になんだったんだあの葛藤
と覚悟は。色んな覚悟を決めたのに。

……いや、結局何も言えなかったけど。

(あれ? いやあ私が駄目だったってこと?)

思いつつ、これ以上考えるのはやめた。多分泥沼になる。

「しよーがねえな」

ルフィも息を吐くと、手を取ってくれた。その顔には苦笑が浮かんでいる。

「あつ、何その顔?」

「いやなんでもねえよ」

「何でもないってことはないでしょ」

「本当になんでもねえよ。……そういや、ウタが一番最後だぞ。他の奴らは皆起きてる」

「え、ホント?」

「おう。それとな、皆昇格だったよ。おれたちはまだ保留らしいんだけどな——」

他愛もない言葉を交わし合う。その日常が今は愛しい。

部屋の前に着いた。手を離し、ウタはルフィに背を向ける。

「じゃあ、また明日。あ、もう今日かな。起きたら——」

言葉は最後まで紡げなかった。

背後からルフィに抱き締められたのだ。

「……ルフィ?」

名を呼んだところで気付く。こちらを抱き締める手が、小さく震えていた。

「——よかった」

彼は、それだけを口にした。

その言葉に込められていた想いが伝わってきて。

彼の手を、抱くようにして両手で包む。

「うん」

多分、それだけでよかった。

それだけで全てが伝わると信じた。

月明かりのみが差し込む廊下で。

二つの影が、一つに重なり。

囁くように、二つの声が響いている。

「……あの時」の逆だね。あの時はルフィが私を背負ってくれた」

「必死だったんだんぞ」

「うん、ありがとう。……何度も助けられてるね、私」

「お互い様だろ。おれも何度も助けられてる」

互いの表情は見えない。ただ背後から包み込むようにして抱き締めるその腕からは、決して手の内にあるものを手放したくないという気持ちが感じ取れた。

「ウタ」

「うん」

「——どこにも行くな。ずっと一緒にいてくれ」

呼吸が止まった。

それはあの日、ウタが口にした言葉だ。

あの時、彼は。

「当たり前でしょ」

“当たり前だろ”

十年という月日が流れても。

「私は、どこにも行かない」

“おれは、どこにも行かねえ”

決して変わらないものがある。

「私はルフィと、ずっと一緒にいる」

“おれはウタと、ずっと一緒にいる”

この想いだけは。

ずっと、変わらないから。

「ね、約束しよう」

幼き頃。こんな未来など想像できなかった頃に一つの約束をした。誓いを立てた。

その誓いは今も抱いている。誰にも由来を明かさないマークがそれだ。このマークだけは二人だけの秘密である。

だが、それとは別に。

今日ここで、新たな約束を。

「未来への約束を」

こちらを抱き締める腕、その小指にこちらの小指を合わせる。

あの時は拳を合わせる約束だった。

だけど、今度の約束は指切りだ。

「……………」

ただ互いに、強く、強く小指に力を込める。

あの日より随分と大きくなった手で。

変わらない想いを抱いて。

言葉は必要なかった。口にする必要などないと信じた。

十年の時を経て結ばれる、新しい約束。

それは、たった一つの誓い。
——ずっと一緒に。

逃亡海兵ストロングワールド 後書き

逃亡海兵ストロングワールド 後書き

今回、某掲示板の方で出てきた様々なアイデアを取り込みつつ書き上げました『逃亡海兵ストロングワールド』は如何だったでしょうか。楽しんでいただけただけなら幸いです。

ここに書くのはあくまでキャラクター設定であったりコンセプトであったり部分なので、読み飛ばして頂いて大丈夫です。できる限り作中で読み取れるようにはしましたが、どうしても作者である私自身の未熟で描けなかったことがあるので……。

書いている間は悩みつつも楽しかったです。見切り発車でしたが。

・ストーリーについて

割とシンプルというか、わかりやすいです。原作通りといえば原作通り。メンツが違うのと、そもそもシキ自身が最初からマリンフォードを標的にしていたという違いがあるくらいですね。

ちなみにですがシキは計画開始の最終段階くらいでウタの危険性に気付き、できるのであれば味方に引き込む、できなければ排除のための襲撃でした。実際最終盤で見せた力を考えると正しい判断です。

最終的なエンディングは当初、宴エンドを考えていました。CP9組やエース、イルなどの宴に参加できないメンバーを最初に描写し、宴の中でそれぞれの後日談を書く形です。ただやっぱり二人の物語であることを考えて今回の形になりました。

◎ルフィとウタについて

今回は両方が主人公のつもりで書いています。二人の海兵としての最後の大きな戦いであるということからして、何をピックアップするかについては考えながら書いていました。その中でウタの正義である「平和を届ける正義」というドンピシャなものが出てきたのでそれを全面的に前に出しました。二人の過去も盛り込んだれ、精神でいっています。

ちなみに現時点でエレジアの悲劇があったかどうか、そこにルフィが関与していたかどうかはどちらとも取れるようにしています。そこは本題ではないのと個々人によって解釈が違おうと思ったのでばかしてます。

・ルフィ

行動原理は終始一貫しています。ウタを取り戻す。そして二度と連れて行かれないようにシキを倒す。そしてマリolfordも東の海も守る。実にシンプル。それでこそです。

彼の正義は逃亡後に決まるといふ概念があるので、じゃあこの時の彼は何を背負っているのか？ そこに自分にとつて一番大切な人の「正義」がありました。だからこそ彼は自分自身の血で染まったウタの正義のコートを背負い、平和を届けると宣言します。

ウタの心情に比べてルフィのウタに対する心情が少ないのですが、これについては逃亡後に彼の本音というか心の底が見えるようになるのだらうなという考えからです。というか十分出てるだけでも行動が重い気はしますが。

ちなみに彼の決戦服はガープとお揃いの白スーツです。そこにウタの正義のコートを羽織るといふ格好。私の趣味全開ですね。

戦闘面に関しては色々と考えましたが、最終的にあの形になりました。この世界線だとガープさんはちゃんと不器用ながら師匠してるだらうし、ルフィも怖がつてはいるけどちゃんと尊敬はしてるんだらうな。だからこそそのじいちゃんオマージュです。

未完成ギア4についてはこの後ちゃんと修行すれば完成できたはず。ちゃんとできれば、ですが。

シキとの決着は最初から決めていました。一つの章の終わりと考えるのであれば、あまりの技で締めるべきと。

・ウタ

今回の彼女について浮かんできた最初のフレーズが「ブーシャ村のウタ」という、「赤髪海賊団の音楽家」ではなくなったことを示すものでした。ただ完全に吹っ切れてはいなくて、憎んでもいて、でも声が思い出せなくなっているくらい前の話で、とその感情は複雑です。

彼女のルフィに対する想いはそれはもうかなりのものではありませんが、しかし「ルフィに夢を諦めさせてしまった」という負い目がずっとあります。本人は気にしてないのに。

彼女の正義については今回全面的に出しました。この後の事件でそれを掲げることに迷いが生まれ、何なら戦うことさえできなくなるということを考えてとここでそれを見せておくべきだろうと。その正義をルフィもまた背負うというのがいいですね。

戦闘面については「ルフィよりウタの方が見聞色は得意なのは？」という概念より未来視に到達しました。しかしこの時点では原作アラバスタのゾロのようにギリギリの状況下での覚醒なのでいつでも自在に使えるわけではありません。彼女もちゃんと

鍛錬できれば習得できたでしょう。できれば、ですが。

麦わら帽子と黒ドレス。これも趣味全開ですが、ルフィと並んだ時に白スーツのルフィと対になっていいんじゃないかなと思ったり。凄く素敵な絵を頂いて感謝です。

彼女とカガシヤの決着はあれしかないのかなー、と。本人は必死だと言っています。が、ちゃんとルフィと肩を並べるくらい力はあるんですね。

◎味方陣営の皆さん

●討ち入り組

・ガープ

正直想定以上に強過ぎました。相手の格は年齢で衰えているとはいえ四皇最高幹部クラスだというのに結果を見れば完勝に近い。それなりに深手を負ってはいますが、それで済むのがおかし。

この世界線だとちゃんとルフィの師匠をしつつ、でも不器用なのでやつぱり怖がられてはいるのがガープさんです。ルフィが海兵になると言った時にその理由を悟り、ならばちゃんと強くしなければと思ったかもしれません。方法はともかく。とはいえ二人に怖がられてはいても嫌われてはいないので、多分いいおじいちゃんはしています。

今回は家族として海兵としてルフィを導いてくれている人のイメージでした。ちゃ

んとルフィも彼を格好いいとは思っています。それ以上に怖いだけで。

この後で曇ることが確定している人。多分相当キツイ。

・モモンガ

二人のかつての教育係であると共に海兵という生き方を教えた人という立ち位置。敵しい人ではありませんが、二人からはかなり慕われています。拳以外の戦い方があることを教えたのも地味にポイント。

とことん実直な人というイメージで書きました。同時に二人に対して大分情がありますし、逆に二人からも尊敬されています。二人にとつての正しい意味での「海兵」のイメージは多分この人なんじゃないかなー、と。

ブルチネラとの戦いは「多芸を使いこなす者」と「一を徹底的に追求した者」という側面があります。勝手な設定ですが、「断割」は居合術としては基本中の基本の技であり、だからこそ使い手の実力が反映されます。それで五億近い賞金首の覇気を超えて叩き斬るわけですからその練度は凄まじい。

二人の活躍と騒動を聞く度に小さく微笑んだり頭を抱えたりしてほしい人ですね。

ちなみにあの問題児二人に海兵としての基礎を教えたことを評価され、教育係として名前が知られています。怖がられてもいるが慕われてもおり、別部隊へ移ることになった若手には個別に声をかけたりしてるかもしれない。意外とかなりの影響力が

ある人かも。

この後大分辛いことになる人です。

・スモーカー

地味にウタと同階級、ルファイからは友達扱い。

実はかなりマッチングが変わりまくった人です。当初の予定では最初からドリーマーと戦う予定でしたがラウンドとの戦いとなり、最終的にヒナと組んでドリーマーを討ち取ることに。これについては同期コンビのタッグ戦が書きたかったのと、長年正しい訓練を積んできた海兵とあくまでその場のみの即席コンビの差を出したかったというのがあります。

ちなみに裏設定としてルファイとウタの部下たちからは第二の上官くらいに思われているという設定があります。一緒の任務の際に二人が突っ走った時は大体オリンを筆頭に二人の部下たちが「指示をください」と当たり前のように言います。そしてその度に頭痛を堪えるような表情をするのがお約束。

割と面倒見がいいので二人の部下からも慕われていますし二人からの信頼も厚い。ケムリンとも言われて怒るのもお約束。

この後でどうするのか実は意外と読めない人。

・たしぎ

今回いぶし銀の活躍を見せてくれた人。イルとの戦いでも決定打とも言える一撃を入れましたし、その後についても脱出ルートの捜索など細かな気配りのできる人です。勝手な設定ですがウタやオリンとは仲が良く、ヒナも含めて女性陣でよくお茶会という名の女子会を開いています。互いに対する信頼はこの辺から。

彼女もまたアラバスタの騒動で英雄の一人に数えられましたし、スモーカーとのコンビはルフィとウタほどではないにしても知名度は高いはず。

この後物凄く苦悩する人のうちの一人。

・ルッチ

完全に味方という非常に珍しい状況。こういうのがあるからこの概念面白いですね。

元々CP全体としてシキのこと自体は追っていました。とある鬼の行動とその鬼に勧誘されている海賊たちの動きから何かが動いていることを察知して世界政府は動いていたわけです。その過程でCP9の三名がようやく突き止めたメルヴィユに極秘に潜入したタイムミングでウタの誘拐があり、そこで現れました。

何気に一番最初に幹部を撃破した人。まあ強いですね、シンプルに。何気にあそこで単独で動き回れる駒であるアルキデイクスを討ち取っていたのは大きいです。

誰も知らない場所で誰も知らぬうちに敵幹部を仕留めた。その辺りは海兵ではなく諜報員らしい動きなのかな、と。

ちなみに逃亡編でルフィと激突し、結果としては引き分けに近い形になって互いに「次は勝つ」と思うなんて概念があります。案が纏まったら書いてみたい。

多分事件のこと聞いてもそこまで何も思わないのではないのでしょうか。「馬鹿なことを」くらいに留まりそうです。

・ブルノ

潜入捜査とか暗殺とかするならとてつもなく便利な能力ですよ。REDでも大活躍でしたし。

一対一の戦闘こそありませんでしたが、海楼石の錠をかけられたウタを庇いつつ最前線で体を張りまくるといふ過酷な状況を戦い抜きました。その後も司令室の防衛戦となるのでまあ、かなり負担は大きかったですね。多分彼がいなければ何人か死んでたはず。

彼の中で今回の討ち入り組に対しては少し情のようなものが湧いてしまっている気がします。

この人も多分、事件のことを聞いてもショックを受けるとかはない気がします。ただ少しだけ心配はするのかな、というくらいで。

偶然W7に行つてブルノの酒場で彼を見て何とも言えない感じになるたしぎ&オリンとか見てみたい気がします。

・オリン

味方陣営では名前ありの唯一のオリジナルキャラです。ルフィとウタの階級とか立場を考えると、彼女のような副官は絶対いるはずですし、てくれた方が話がスムーズなので登場させました。いや本当にありがたかったです色々。

元ネタというかイメージとしては私の書いている短編「麦わら帽子のヒーロー」に出てる女性海兵からです。とかほぼ同一人物ですが、短編ではエレジア事件がなかった想定、今回のSW編はあつた想定なので彼女の出身は短編のそれとは違います。

音楽一家出身で厳しい指導を受けていた上に彼女自身も楽器の扱いについては天才的なため、大抵の楽器はこなせます。一番得意なのはヴァイオリン。ロック派の彼女とクラシック派の父親の間で大喧嘩になり、飛び出した勢いで海兵になったというロックな人。

本編でも片鱗を見せていましたが割と問題児です。単純に口より先に手が出るタイプなのですが、それ以上に動きが早い二人のお陰で冷静に動いているように見えるだけという。

ちなみに恋愛小説好きでウタにも貸し出したりしてるので、エピローグの月が綺麗云々はこの人のせい。本人も恋人欲しいなと二人を見て思っています、ルフィを見ているせいで男性に対するハードルが無自覚に上がっているのに気付いていません。こ

の辺はちよつと喜劇。

この後盛大に曇ることが確定している人。

・部下三人組

シキによつてメルヴィユに飛ばされて戦争の最前線へと叩き込まれた部下三人組。固有の名前はないですが、三人とも将校ではないので正義のコートは持っていません。

基本的には愉快な三人組とか部隊全体がこんな感じではあるイメージです。嗜めるのはオリンのお仕事。ウタは多分乗るし、そもそもルフィは発案者の可能性が高い。そして一応嗜めた後にオリンも最終的には乗つかるので最終的にセンゴク元帥やら大将赤犬やらに怒られます。やはり問題児部隊です。

日常で言うところルフィたちが立ち寄つた島で宴をしようと言ひ出したりライブをしようと言ひ出すと既に準備を進めてるみたいな連携の良さを見せます。多分本当に楽しい日々だったはず。それはそれとしてよく説教はされますが。

ただ戦争の最前線に将校でもないのに討ち入りメンバーに入つても躊躇はしない辺り大分覚悟決まっています。その辺りはやはりトップ二人の姿を見ていたからこそでしょう。

彼らのみならず部下全員盛大に曇ることが決まっているようなものです。

●討ち入り組以外の味方陣営

海軍のネームドについては出せるだけ出した感あります。総力戦であるということもありますし、何よりここに出てきた人たちがそのまま敵になるというのがこの概念の面白いところでもあると思うのでちよい役であつても色々出てきてます。

・センゴク

シキとのやり取りを始め、基本的に裏方ではありましたがだからこそ海兵たちが奮闘できた気もします。なんだかんだ友人であるガープのことは信頼しているし、問題児ですが二人のこともちゃんと評価していますね。

きつちりシキの思惑も見抜いている辺り、やはりかつての時代を生きてきた人です。この後引退も考えることになるわけですが……。

・三大将

カイドウを止めるために赤犬と黄猿が外に出ており、青雉だけが残るといふ策略。シキは全員が出払っていると判断しましたが、青雉を控えさせていたのはセンゴクの作戦です。マリルフォードの上の決戦となった場合の切り札とするためですね。

今回一番株が上がったのが赤犬ことサカズキであるように思います。ウタの海兵としての師という立場であるとともにその信念の強さも見せてくれました。まあだからこそこの後盛大にダメージを受けるわけですが……。

勝手なイメージですが、一番仲がいいというかコミュニケーションを取れているのが

青雉、厳しくしながらも海兵として尊敬されているのが赤犬、そして二人に対して一番上官としての適切な距離感を保っているのが黄猿というイメージです。

・ヒナ

乗り込む際の精鋭部隊の一人として、そしてスモーカーとの同期タッグをして欲しかったと言うのもあつて出てきました。

二人と階級も近い上に同期であるスモーカーと二人に交流があるので、この人とも絡みがあるといいなあと思ったり。ウタにとつては頼れる先輩兼お姉ちゃんポジションだったりするかもしれない。

ちなみに彼女とスモーカーとラウンド、ドリーマーのタッグ戦は明確に連携の差が出ています。この辺りは正規の訓練を受けた人とそうではない人の違いでしょうか。

・ジャブラ

実は大分当初の展開と比べて影が薄くなつてしまいました。

彼はシキの研究成果の確保と脱出のための手段（レムナントが隠れて用意していたやつ）の確保を人目に触れずにやりきつていたので、諜報員としてはとてつもなく優秀です。むしろ本来はこういうのが諜報員の役目では……？

ちなみに当初の予定では研究成果を集める際にD r. インディゴと戦闘、或いは逃げ出そうとしたレムナントとの戦闘を想定していたんですが、前者は降りてしまったし後

者は小市民過ぎて自分だけで逃げなかつたので実現せず。

ちなみにですが彼は最後まで人獣型を解除していないので海軍側への顔バレもしていません。優秀ですね。

・七武海

ハンコック、ジンベエは何やかんやあつて二人に協力的だから。くまは普通に指示に従った。ミホークは偶然近くにいるの暇潰し。ドフラミンゴは口では面白そうと言いつつ、「ジョーカー」として最前線で生の情報を手に入れるためにここにいます。モリアは来ていませんね。強制参加ではないので、むしろここまで集まったこと自体が異常なのではないでしょうか？

◎シキ陣営

海兵としての二人、その最後の戦い。第一部の総決算であるということで盛り盛つたれの精神でいきましました。なんかかんやでオリジナル敵が8人、アイデアもいただいて形になりました。ありがとうございます。

・シキ

元四皇であり「伝説の海賊」であり「金獅子のシキ」と呼ばれる男。ルフィにとつては海兵時代のラスボスということで原作よりも盛られてはいますが、それでも老いを

始めとする衰えはどうしても誤魔化しきれっていません。一番顕著というか大きい衰えは多分タフさの部分なのかな、と思ったり。

ここのシキはロジャーに対して物凄い複雑な感情を抱いています。彼が「海賊王」になったことには口では憎まれ口を叩きつつ「あいつならやるだろう」くらいには思っていたし、「海賊王」になった後も何度か小競り合いのようなことを繰り返しつつ、「先を越されたが目標が明確になっていい」くらいには思っていました。

しかしそこでロジャーの処刑。二度と戦うことさえできなくなつた。そこで計画したのが今回の計画であり、結果だけを見ればロジャーを処刑した「世界政府」を倒すことでロジャーに勝とうとしたわけです。最後の一撃、その直前の独白がきくと彼の全てです。処刑される前に満足いくまでロジャーと殴り合いができてたらこうはならなかつたんじゃないでしょうか。

東の海の出身であり、かつてロジャーが被っていた麦わら帽子を被り、そしてロジャーが始めた大海賊時代に生まれ、かつて自分ともやり合った男であるガープの孫。「新時代」そのものとも言えるルフィに負けたのは区切りになつたんじゃないでしょうか。

多分インペルダウンからの脱獄はしないんじゃないでしょうか。二人の事件について聞いても「おれに勝つたんだ。捕まるわけねエ」って小さく笑っているかもしれない

ん。

●シキ配下における幹部集団“七宝剣”

億越えの賞金首によって構成される七人の幹部。七武海を模して作られた集団であり、彼らのスカウトについてはシキが直々に行なっている。こういった象徴の存在の重要性をよく理解しているシキが海賊団の結束を高めるために作った集団ですね。

アイデアを頂いて生まれました、ありがとうございます。

ちなみに加入した順番は

ジユウゾウ（元々シキ配下）、ラウンド、カガシャ、レムナント、アルキデイクス、ブルチネラ、ドリーマーです。

戦闘能力については、

ジユウゾウ、ラウンド、ブルチネラ、アルキデイクス、カガシャ、ドリーマー、レムナントのイメージですが、相性もあるので一概には言えないと思います。実際にぶつかり合うと割と勝敗はわからない気がします。

各キャラについては登場順で

・カガシャ

“毒蛇のカガシャ”の異名を持つ暗殺者であり海賊。ナギナギの実の能力者ということで、アイデアを頂いた時点でウタの敵であることはほぼ確定したみたいなおもの

す。その戦闘も「見聞色の覇氣」を得意とするウタにとつて天敵に近いものです。ただ暗殺者でありあくまで一方的な殺人が本領であるため、打たれ弱いのが弱点。

その戦闘技術は『正面から不意打ち』という矛盾した論理によるものです。「見聞色の覇氣」を鍛えた者ほど彼女の「溺れる者は藁をも掴む」を避けられません。そこをウタは未来を視るという手段で突破しました。

身内と決めた相手には相応の情は見せませんが、基本的に暗殺者ということもあつて非常にドライです。「口を慎め」と言いつつナギナギの力で黙らせるのは殺す側と殺される側という立場を自覚しろという傲慢さからくるんでしょう。

彼女の背景については作中にあつた通りです。とある国の暗殺者集団の当代における頭領であり、自身を裏切つた国王を暗殺して国を出ました。そのため彼女が率いる海賊団はその暗殺者たちのうち彼女についていくことを決めた者たちによつて構成されているため、海賊というより暗殺者集団としての側面が強いです。カガシャという名前も実は本名ではなく、頭領が受け継ぐ名前ですね。本名は捨てたため最早知っている人間はほとんどいません。

シキの配下に加わつたのは結局のところ彼女を含めて彼ら暗殺者は「誰かの指示を聞く」ということに慣れ過ぎて自由であることが逆に不自由であつたからです。かといつて誰でもいいわけではなく、相応の格がある相手を探していたらシキから勧誘されて加

わることになりました。割と本人たちは満足していた模様。

インペルダウンへと収監されることになりましたが、脱獄イベントがあつた場合バギーの下につくかは微妙なところです。やかましいのが嫌いなので。ビジネスライクに接してくれるであろうクロコダイルなんかとは相性いいかもしれません。

幹部組の中ではラウンドとイルの二名と主に交流があります。共に物静かなので彼女の好みに合うし、特に後者は自分と同じ『生まれた瞬間から役割を決められていた人間』であつたこともあつて気にしていた模様。

逆に苦手なのはブルチネラとDr.インディゴ。やかましいので。

・ブルチネラ

通称、〃返り血のブルチネラ〃。相手の返り血で自身の衣装を赤く染めることからこんな異名がついた危険人物。バギーとはまた違ったタイプのピエロであり、バギーのような華美な道化服ではなく白を基調としたシンプルな道化服と黒い仮面が特徴の巨漢です。最初のコンセプトはクソ強ピエロ。

その戦闘方法は様々な〃芸〃を用いたトリッキーなものです。その本領は頑強な肉体による肉弾戦です。そういうところでも相手を欺こうとするのがこのピエロですね。

多分〃七宝剣〃の中では一番残酷ですし容赦もない。悪い海賊としてのイメージそのものではないでしょうか。割と好き勝手してる割に空気は読めるので実は一番タチ

悪いタイプかもしれない。『道化』であるためその行動全てが本心であると共に偽りでもあるという男。表に出ている感情の裏で冷静に頭が回っているタイプです。

彼の背景は作中でも少し出ていましたが、元々はとあるサーカス団の道化として活躍していました。観客を含めて周囲の空気を読むことが得意で、無自覚のうちに『見聞色の覇氣』を覚醒させてもいた。彼自身も人氣はありましたが花形の役者たちよりは人氣が劣り、それに対して少しずつ不満を蓄積していき最終的にサーカス団の人間を殺して出奔。生来の大きな体と人の機微を読み取る能力で海を渡ってきました。異名の通りの危険人物のため『七宝剣』ではジユウゾウを除いて一番懸賞金が高いです。

脱獄イベントがあるなら多分画面端で「うおお！ キャプテン・バギー！」と躊躇なくやってるタイプ。その後の流れで多分普通に傘下に入る。恩は恩としてちゃんと感じつつ、それはそれで逃げる算段も裏でつけてるタイプですね。

幹部組だと一番他のメンバーと会話が多いですが、仲がいい相手というのはいません。相手の裏と本音を読もうとすることが癖になっている彼が他人を信用することはありません。ただスカーレットはゴリラであり正直者なので彼にとつては一番気を許せる相手だったのかもしれませんが。ちなみにジユウゾウはどこまでが本気でどこまでが冗談なのかの本気でわからない上にその強さも理解しているので大分苦手です。他の者たちについてはそもそもあまり興味がない。あるように見せているだけです。

・ラウンド

“大地の王”の異名を持つ男。様々な義理であったり思想であったり信念であったりといったことによつて雁字搦めになっている男。ツチツチの実を食べた能力者。この後の逃亡編の世界観の片鱗を見せつつ、けれど彼に主人公二人は最後まで関わらないといったコンセプトで考えました。

ツチツチの本領である大質量で押し潰す戦術と、生来の真面目さで生まれ育つた国の正規の槍術を収めているので戦闘能力は純粹に高いです。ただ他者との連携がどうしようもなく苦手。ずっと一人で生きてきた弊害でしょう。人を背負うことはあつても並び立つことは数えるほどしかなかつたのです。

寡黙な人物であると共に本質的な部分で一匹狼であり、集団で生きることが苦手。海賊として高額懸賞金を懸けられているが彼の認識では海賊を名乗つたことは一度もなく、また誰かを率いてそれらを差配した記憶もありません。シキの傘下に収まつた海賊たちに指示を出すことはあるがそれはあくまで彼の下ではなくシキの下という認識と態度で行つていきます。

どちらかといえば『無法者』という表現が正しいのであろう彼は当初は賞金稼ぎであり、最初から無法者であつたわけではありません。ドーベルマン中將とはまだ彼が海軍将校となる前後くらいの時期からの顔見知り、賞金稼ぎ時代にはなし崩しで共闘した

こともあります。以下ラウンドの略歴。

元々は加盟国の裕福な一家に生まれ、そこでは使用人として奴隷を所有していました。虐げるようなことはなかったが両親は明確な線を引いており、しかし彼はそれに対して幼少期から疑問を抱くと共に数歳年上の奴隷の女性アラストウルに恋をします。しかし彼女は奴隷を理由に彼の求愛を断り、その後程なくして病でこの世を去りました。その後彼は世界を見て回るとして賞金稼ぎになり、その過程で非加盟国の側に立つて戦ったことから賞金首となつてしまします。その後単独で海を渡る中でフィッツシャータイガーに救われた元奴隷たちの一団と出会い、彼らを故郷に送り返すことにしました。その理由には奴隷であつた、彼が生涯で唯一恋焦がれた人のことがあつたのかもしれない。だが全員が帰れるわけではないし、帰る場所などない者もいました。そこで彼はそんな者たちと共に『アラストウル』という国を立ち上げます。そこに援助をしたのが旅の過程で出会つたジユウゾウを通じて接触してきたシキであり、だからこそその恩を返すために傘下に入りました。その後は作中で語られた通りです。順番としては革命軍からの誘いを断り、アラストウルはバスターコールによつて滅び、彼は「七宝剣」の一人としてこの戦いに赴きました。

幹部組だと私情を基本的に挟まないカガシャとは気が合う部分があり、同じ一匹狼気質なアルキディクスとも仲は良好です。ジユウゾウとも付き合ひが長いいため彼の酒に

付き合うことも多かった模様。また、自分が見つけたということと元奴隷という境遇からかなりイルのことは気にかけていました。

ちなみに彼自身は苦手に思う相手はいないがブルチネラのことは警戒していた様子。

・アルキデイクス

大王イカの人魚であり、「海災」の通り名で知られる『ならず者』。『ならず』とは『不成』であり、作中で彼自身が語ったように『何者にも成っていない』男です。

その通り名が示すように海で出会う災いそのものとして恐れられる彼が海に出た理由は作中で語られた通りですが、少し特殊なのは彼は差別であったり迫害であったりといった種族として受けてきた歴史についてあまり気にしていないところです。昔はそうでもなかったのですが、故郷を捨てた時点でその辺りは全て一度切り捨ててしまいました。彼自身も海に出てから差別や迫害を受けますがそれは無法者に対するそれに入魚に対する差別意識が乗ったものであり、そして彼はそれを持ち前の暴力で全て黙らせてきました。それもあって彼は「こちらを攻撃してくるのであれば反撃すればいい」というシンプルな論理で生きています。ただフィッシャータイガーやオトヒメのような誰かのために戦う人間を尊敬する部分もあり、だからこそわざわざ言葉にして否定していたりするという人間臭い部分も。

言動や佇まいは落ち着いていますが、その本質は暴力を解放する先を探している無法

者なので割と危険人物です。

その戦闘方法は至極シンプルな魚人空手を用いたものです。その練度は凄まじいものであり、実戦のみを繰り返してきた彼の魚人空手は通常のそれよりも更に殺意が高くなっています。

脱獄イベントがあるなら素直に出てきそうな人。ついでに言うところの世界線で立ち上がるかはわかりませんがバギーの海賊派遣業は割とこの人にとって天職かもしれない。飯食えて戦えるならそれでいい人なので。

ルッチとはその根本にある部分が違う、どこか似た者同士での戦いでした。ルッチの中には「正義」が確かにあるのですが、彼にはそういった「芯」の部分がありません。かつてはあったはずなのですがいつの間にか無くしてしまっていて、残ったのは自分自身の「力」だけでした。

年の功というか、年齢的には「七宝剣」の中ではジュウゾウに次ぐ二番目なので周囲との関係は良好です。

・レムナント

元世界政府の科学者であり、今は「墓荒らしのレムナント」と呼ばれる無法者。「フランケン部隊」という死体を改造した兵士たちを統べる男であり、これまた死体を改造した「スーツ」と呼ばれるものを着込む形で彼自身は戦闘を行います。生身はもやし

です。

本体は弱いですがスーツの力そのものは強力です。ただ相手が悪かった。

作中でも触れましたが基本的に小心者であり小市民です。元々はプライドもあり自身の能力にも自信を持っていましたが、“世界最高の頭脳”と出会って自分の才能の限界を痛感しました。ただそれでも優秀な人間ではあるので世界政府も重宝していたのですが、根本的にその倫理観がズレているのでフランケンを作成するきっかけとなる“パシフィスタ”の初期設計図を見たこととその素材調達のための墓荒らしが原因で追われることに。ちなみに死体を使うのはそれが効率的だからという理由です。一から体を作るより元々から人の体として形になっているものを使ったほうがいいという判断なわけですが、まあ倫理観はおかしいです。

世界政府を追放された後にシキからその経歴を買われて傘下に入りました。彼としてはうるさく倫理やらルールやらを強制されたいし資金も出してくれるので居心地は良かったようです。ただ逆にその居心地の良さとシキの強さと「裏切りを許さない」というシキのルールに縛られ逃げるタイムミングを失いました。

幹部組だとドリーマーとは気が合ったようです。どちらも実利主義な部分があるので、そういうところが良かったでしょう。

脱獄イベントがあるなら普通に出てきますし、何なら継りついてでも出ようとするタ

イブです。割と生き汚いので。

・ドリーマー

“蹴撃のドリーマー”と呼ばれる“新世界”の海賊。トリトリの実古代種、モデル“ディアトリマ”の能力を持つ、蹴り技を得意とする武闘派。性格的にはチンピラですが実力は確かな男。彼の技は爆弾を模したものとなっています。

平和な日常を生きていた彼が海賊になるに至った流れは残念ながらこの世界ではありふれたものでしょう。その経緯もあつてか少々投げやりな部分もあります。とはいえ海賊になったことに後悔はなく、その所業についても反省はありません。そういう意味では同情はできるかもしれませんが間違いなく犯罪者であり海賊。裁かれるべき人間ではありません。

才能も運もあつて“新世界”へ至り、本人も言うように『好き勝手に』生きてきました。たがそこでシキと遭遇してしまったことが運の尽き。絶対的な力の差を見せつけられ傘下に降りました。それ故に忠誠心などはありません。かといって裏切るだけの力もない。彼もまたレムナントと同じである意味逃げるタイミングを失った人間なのかもしれないですね。

ロマンを求めて海賊になったわけではないということもあつてか、表向きの言動に反して割と実利主義というかりアリストな部分があります。海賊稼業を楽しみつつもど

こか冷めている。そんな彼はレムナントやアルキデイクスと気が合っていたようです。ある意味『真面目な海賊』でした。

最後に空を見上げた時に感じたものはきつと、彼が置き去りにしてしまったものです。

ちなみに空気読めるし恩は恩として感じるタイプなので脱獄イベントがあるなら素直に出てきます。多分。

・ジユウゾウ

“金獅子”の右腕であると共に鬼札。戦闘という一点において彼から絶対的な信頼を寄せられている老人。シキと組む前は“酒呑”、組んだ後に引き起こした事件によって“国呑”と呼ばれるようになり、最終的に“アラストウルの悲劇”、或いは“殺人鬼”と呼ばれるようになった怪物。要するに四皇最高幹部なので純然たる化け物です。ヒトヒトの実幻獣種、モデル“鬼”……純粋な身体能力の向上と『鬼火』という炎を操る能力を持ちますがその本質は結局不明です。モデル間違っているんじゃないかという説あり。

戦闘面に関してはその身体能力と天性の才覚による本能をそのままぶつけるような戦い方をします。刀も一時期手にしていましたがそれはレイリーの戦闘を理解するためであり、向いていないとして諦めました。後に彼の刀はイルへと渡されます。

普段はお酒好きの困った人でもあり、ふらつと出歩いては見知らぬ土地で酒を呑んでいます。ちなみにお金を払う意思はあるのですが、持ち合わせがない時もあります。そういう時は頼み込んで酒を貰うのですが、断られると奪います。その際の被害が凄まじく、それ故の“国呑”です。逆に無償で酒を渡すと機嫌よく何もせず帰るので、もはやそういう妖怪とかそういう類の存在。そのある意味派手な行動がシキの計画の目眩しにもなっていました。そして酒を飲むついでにシキの代理として動くのもまた彼の役目でした。

彼の語る『罰を受けたことがない』というのが彼の在り方の原点です。自らの生き方が間違っていることは彼もわかっています。それが腹落ちしていません。理解はしていますが納得していない。だからこそ彼は自分を曲げませんでした。その果てに『罪』とは何なのかという漠然とした考えを抱くに至り、そして結局その答えは得られないまま。ただガープという彼に『罰』を与えた存在は彼にとって救いだっただのかもしれない。

ちなみに気まぐれで弟子にしたイルや共に酒を飲むことの多かったラウンド、アルキデイクスとの交流が多かったようです。他の者たちに対しても友好的ではあるのですが、恐れられている部分の方が大きかったようです。

おそらく脱獄はしないでしょう。ようやく受けた『罰』である以上、彼はそれをちや

んと受けようとしています。

●別枠幹部

・イル

奴隷の両親より生まれ、その生を受けた時から奴隷として生きてきた女性。年齢的にはウタとそう変わりません。“シキの孫娘”を名乗りますが、これはシキが彼女の立場の保証をするためという彼としては非常に甘い対応によるものです。

二刀流の剣士であり、その剣術はジユウゾウより教わったもの。ただジユウゾウの剣術は我流であり、彼が見てきた剣士の技術を見様見真似で再現したものです。更にいえば技術による再現ではなくその身体能力による強引な再現であるため、彼女がその剣術を習得したのは彼女の執念による部分が大きく、事実上彼女が開祖のようなものです。ちなみに刀はジユウゾウから貰ったものですが無銘の刀です。イルはとても大切にしています。

その生い立ち故か自己主張というものをほとんどしませんが、常に何かしら働いていないと落ち着かないという難儀な性格をしています。彼女の主な仕事はシキの補佐であり、実は彼の計画の全貌を知る数少ない人間でもありました。そんな彼女が執着するのはかつての奴隷時代に救いであつたウタの歌声であり、自分を救い出してくれたシキとラウンドに対する恩返しという感情です。自分のことを消耗品か何かだと思ってい

るので自身の生存や安全といったものの優先度はとてつもなく低いです。健を削がれた右足を自ら切り落とし、義足をつけた際も何の躊躇もなく行いました。足手纏いにならず、恩返しのために戦うためです。そんな彼女を見てシキは何を思ったのでしょうか。唯一インペルダウンに収監されず革命軍の下に流れつくことになった彼女は、初めてここで選択というものをすることになります。その果てに何を思うのか。

個人的にはいつか世界を見たことをシキへ報告してほしいところです。

天竜人事件

きっとそれは、悪意ですらなく 前編

シヤボンデイ諸島。島と呼ばれているがその実態は『ヤルキマンマングローブ』と呼ばれる。木によつて形成された島である。更にいえば“世界貴族”が住むマリージョアの近くでもあり、海軍本部マリンフォードの近くでもある。

そして何よりも重要なのはこの場所が偉大なる航路の前半、その終着点とも呼べる場所であるということだ。正規のルートであろうと魚人島を経由しようと、一度はここに立ち寄ることになる関係かこの場所は非常に人が多い。

今は大航海時代だ。特にその手の無法者が多く訪れているため普段の治安は決していいとは言えない。海軍本部のお膝元であるというのにだ。

しかしこの日——いやここ数日はそうではなかった。

普段数多く訪れる無法者たちは出来うる限り気配を消し、むしろ一般の庶民たちがこのシヤボンデイ諸島に集結している。中には王侯貴族まで混じっている有様だ。

どうしてそんなことになっているのか。その原因はとある二人なのだが――

「いいですか。絶対です。絶対に騒ぎは起こしてはいけません」

本来なら部下の立ち位置であるはずの女性海兵――オリンが自身の上官二人へと言い含めるように告げる。半分くらい無駄じゃないかと彼女自身は思っているのだが、言わないわけにはいかない。

「ここはシャボンディ諸島。いつもとは少々事情が違うのだ。

「よしわかった。騒ぎを起こさなきゃいいんだな」

「うん、わかった。騒ぎを起こさなきゃいいんだね」

そして彼女の上官二人はうんうんと頷く。なんか似たような光景を何度も見たような、とオリンは内心で呟いた。

(デジャヴ?)

いや実際にあつた出来事である。しかも何度も過去に同じやり取りをしている。

基本的にトラブルメーカーと思われる二人であるが、本質は少し違う。意外と本人発信のトラブルは少ないのだ。単純に第三者の『何か』を目撃し、手を出し、そして騒ぎが大きくなるというのがお約束である。

それは美德ではあるのだ。そうして彼らに救われた人は大勢いる。だがそれはそれ。

これはこれである。

「まあお二人は今日は半分オフですからね。あまり口うるさく言いたくはないんですが、明日のこともあります。お願いなので騒ぎは起こさないようにしてください」

この場の三人は小型の船——それでもそれなりにしっかりした船ではあるのだが——でマリンスポーツからここシャボンディ諸島に来ていた。その目的としては明日行われるイベントの事前準備のためである。

だが二人が必要になるは今から数時間後であり、それまでは暇だ。そのため空き時間をオフにしたいという二人の希望もあつて早めにシャボンディ諸島に来ている。

ちなみにオリンは仕事である。二人のお目付役とも言う。

「前にも言ったけど、オリンってお母さんみたい」

「前にも言いましたけど、せめて姉って言いません？」

二人のうち女性の方——ウタの言葉に対し、オリンはそう言葉を返す。まだ母という年齢ではない。この二人とは数歳差しかないのだから。

ちなみに今のウタの衣装は普段の『仕事着』とは全く違う格好だ。装飾の少ないブルカの大きなパーカーを羽織り、短いスカートを着た楽な格好。オリンたち部隊の女性隊員でいくつかが用意した普段着の一つだ。ウタ自身が選んだ私服は……うん、なんという個性的呢。

更に今は髪型も普段とは違い三つ編みにしている。これはオフの時、彼女の隣にいる青年がやっていることだ。一つのお約束である。

「ダダンとはまた違う感じだよな、オリン」

「ダダンは肝つ玉母さんって感じだもん。オリンは何だろ、世話焼きお母さん？」

笑いながら言う青年に対し、顎に人差し指を当てつつ言うウタ。二人の言うダダンという人物については何度か聞いたことがある。この二人にとっては文字通り母親代わりというか、母親そのものであった人物とのことだ。

ちなみに青年——ルフィの格好も『仕事着』とは違うが、ウタほどの変化はない。赤いベストに青のズボン、そしてトレードマークの麦わら帽子。最近は『仕事着』としてスーツを着ることも増えた彼が昔からしていた格好だ。オリンにしてみると割と見慣れた格好である。

邪気のない笑顔のルフィとウタ。その二人を半目で見ながらオリンは言葉を紡ぐ。

「大佐まで……私は母親ではありません。お二人と違って予定がないので」「いや私も予定はないよ!?!」

ウタが即座に反論してくるがその顔はほんのり赤い。ルフィも少し視線を逸らしている。

大海賊「金獅子のシキ」——今や「伝説」と共に語られるその男が引き起こした大

戦争。あの後にも色々騒動はあったのだが、あの直後くらいから二人の雰囲気が変わったのをオリンは察している。

正直オリンにしてみるとようやくか、という想いはある。なんだかんだで数年近い付き合いなのだ。嬉しくもあるし、羨ましいとも思う。

「まあ照れ隠しは置いておいて」

「え、酷くない？」

「今更です。……何度でも言いますが、絶対に騒ぎは起こさないようにしてください。

お二人にはこの後、シャボンディ諸島での前日挨拶もあるんですから」

言い切ると、オリンはまあ、と笑みを浮かべた。

「楽しんで来てください。遊園地もありますし、今は賑わってもいます。これからのお二人は忙しいでしょうし」

「それはお互い様でしょ。——オリン大尉」

微笑みと共に言うウタ。そうですね、とオリンも微笑んだ。

今の彼女は正義のコートを纏った『仕事着』だ。二人をここに送り届けた後、舟番をしながら色々書類の確認をする予定がある。実質的に二人のマネージャーのような役目まで負わされている彼女は常に仕事如山積みだ。

だがそれを苦に思ったことはない。この二人は彼女にとって間違いなく“光”であ

るのだから。

「では楽しんできてください。——ウタ中将、ルフイ中将」

海軍式の敬礼で二人を送り出す。対し、二人も笑みと共に海軍式の敬礼を返した。

「ありがとう」

その笑顔に、オリンは見覚えがあつた。

二人の部隊に所属することが決まって少しした頃。突発的な貧しい村でのウタのラ
イブ。そこで半ば封印していた楽器の演奏をした彼女に対し、二人が向けてくれた笑
顔。

（変わってない）

この二人は、あの日からずっと変わらないままに真つ直ぐで。
だからこそ、信じられる。

——未来を。



未だ完全復興とはいかないが、マリンプォードはその機能を取り戻しつつある。特に明日のために海兵たちや多くの職人たちが働いており、今日も賑やかだ。

その海軍本部における最高責任者である海軍本部元帥、センゴク。彼の部屋には今日も今日とて凄まじい量の書類が集まり山積みとなっているのだが、今の彼は書類には目を通さずこの部屋の来客四人と相対していた。

そこにいたのは今の海軍における最高戦力たちだ。

海軍本部大將たる赤犬、青雉、黄猿の三人と。

海軍本部中將、“海軍の英雄”ガープ。

そこに“仏のセンゴク”と呼ばれる男を含めた五人が集まるなど尋常な事態ではない。場合によっては世界を揺るがす何かが起こっているのではないかと邪推するような状況であるが、この五人の雰囲気は和やかだ。

「——そうか、わかった」

こちらへと告げられた電伝虫の報告に対してそう頷くと、センゴクは受話器を置いた。連絡の相手は二人の部下であるオリンだ。本来なら大尉である彼女とセンゴクが直接連絡を取ることはないのだが、今回は別。あの二人のマネージャー役というかお目付役をセンゴク直々に命じられているためにこうして連絡を取っているのだ。

そのお目付役の報告によると、二人は無事にシャボンディ諸島に到着したらしい。

「二人は無事に73番GRに到着したようだ。……二人だけで出歩いているのは不安ではあるが、まあ大丈夫だろう」

「心配性ですねエ、センゴクさん。あの二人も流石にこの短時間で騒ぎは起こさんでしよう」

言ったのは黄猿だ。その彼に対し、いや、と反応するのは赤犬である。

「ボルサリーノ、わかっちゃらんのう。……あいつらは目を離せば何をしでかすかわからん。わしらの想定の方斜め上を行きよる」

「あれで問題起こすつもりはないってんだからどうなってるんだか」

呆れた様子で言うのは青雉だ。その視線は茶を飲んでいる「英雄」に向けられている。だがその人物は意に介した様子がない。

そんな空気の中、センゴクが言葉を紡ぐ。

「ウタの方はまだ大丈夫だ。一人ならそう問題は起こささん。ルフィと一緒にだ……まあ、あれだが、ストッパーになってくれることはある」

「じゃあ問題はあの子ですねエ？」

麦わら帽子の「新時代の英雄」の姿が同時に映る。年齢17にして既に比類なき功績を打ち立てた青年であるが、同時に海軍史上においても有数の問題児でもあるのだ。この場の全員が——一名怪しいが——何かしらの後始末の役目を負わされたことがある。

悪いことをしているわけではないし、するつもりもないからこそ厄介なのだ。やりた
いこともやろうとしていていることもわかるし、それは確かに市民を救う行為である。しか
し手段がおかしいことがあまりにも多過ぎる。

大体彼に対する説教はその手段が原因なのはそれが理由だ。

「ルフィも17じゃ。そろそろ落ち着くと思うんじゃないがのう」

他人事のように言うガープ。その言葉に全員の心が一つになる。

「「いやあんたが言うな」」

三大将、見事なハモリであつた。ガープがセンゴクへと視線を向けるが、ふん、とセ
ンゴクは鼻を鳴らす。

「貴様に一番迷惑をかけられたのは誰だと思つている？」

味方がいないことに気付き、ガープは煎餅を黙して齧り始めた。そんな彼を何とも言
えない表情で見ていたセンゴクは気を取り直すように咳を一つすると、今回の本題に
入つた。

「話がかかり逸れたが、本題に入ろう。まずは今日この後の前日挨拶だが、60番GRの
準備はほぼ完了だ。映像通信のテストが終われば後は時間通りにやるだけだな」

そう——今日はシャボンデイ諸島で明日のイベント、その前日挨拶が行われるのだ。
その準備などですつと休みもなかった二人を数時間だけでもと自由にさせたのはセン

ゴクの判断である。

大海賊「金獅子のシキ」と海軍の間で起こった戦争より数ヶ月。その戦の功労者たちは既に勲章を授与されたり昇格したりとその功績を讃えられていた。だがこの戦争において最大の戦功を挙げた二人は勲章の授与こそあれ、昇格は公式では発表されていない。

これについては一時物議を醸したか今は収まっている。理由は単純だ。その件について一つの噂が流れているからである。

「今日の前日挨拶はモモンガ中将が現場責任者だ。多少の混乱はあるだろうが彼なら問題はないだろう。問題は明日だ。このマリルフォードでのイベント——それもあの二人を中心としたものである以上、想定内には収まらない。イベントは明日だというのに既に来ている者も大勢いるしな」

腕を組んで言うセンゴク。そう、今日と明日はあの英雄二人が再び世界に対してその姿を見せるイベントの開催が予定されていた。

主なイベントはウタのライブだ。彼女の戦争を終わらせた歌声はシャボンディ諸島にも映像と共に届いており、戦争の終結の後彼女のライブを希望する声は非常に多かった。だがウタ自身が重症であったしマリルフォードの被害も大きくすぐにはできなかった。

だがウタの傷も癒え、マリソフオードの復興にも目処がついた頃。世界に英雄が健在であること、マリソフオードが——海軍本部の「正義」が屹立していることを示すべきだという意見が内部から出始めた。そこで計画されたのが今回のイベントだ。

準備にも相応の時間がかかったが、幸い全体的にモチベーションも高く順調に行っている。

「事前の噂という形でのリークはしているが。……あの二人は中将へ昇進する」

改めて、といった調子で言うセンゴク。既にその事実はこの場の全員に伝えられている。小さく笑うのはガープだ。

「わしと同階級か。……早いほう」

「早過ぎる」

ガープの言う早いとは別の意味で早いと断じたのは赤犬だ。その彼に対し、センゴクは肩を竦める。

「そうだな。私もそう思う。だがあの二人の功績と影響力を考えるとここが妥協点だ。

……世界政府の中には大将に推す者もいるくらいだぞ」

「そいつは更に早過ぎる。重過ぎる責任はあいつらを潰すだけでしよう」

言うのは青雫だ。そうだねエ、と黄猿が頷く。

「ただ上の方針もわからんでもないのが苦しいねエ、センゴクさん」

「……この大海賊時代には象徴が必要だ。『正義』の象徴が。それを十代の若者に背負わせるというのは酷ではあるがな」

一度センゴクは息を吐く。そして、だが、と彼は言葉を続けた。

「それほどまでに……世界は病んでいるのかもしれない」

二十年も生きていないような若者たちに、世界の『正義』と『希望』を背負わせなければならぬほどに。

この世界はもう、どうしようもなく病んでいるのかもしれない。かつた。

沈黙が降りる。その中で言葉を紡いだのは青雉だ。

「それだけじゃないでしょう？ あのと二人に背負わせるのは」

「そうだな。私もまた業が深い。……ガープ、いいな」

「いいも何もありませんわい」

煎餅を食べる手を止め、ガープは言う。その表情には強い決意のようなものが宿っていた。

「あやつらがそれでいいと言ったのであれば。わしはそれを受け入れるだけじゃ」

強い言葉だった。そこに込められていたのは、純粋な家族への想い。

大切な二人への、確かな気持ち。

センゴクはそんな彼に頷きを返す。そして一度目を閉じると、決意と共に言葉を紡い

だ。

「二人の出自について。明日のイベントが終わり次第世界中に公表する手筈になっている」

それは既にこの場の全員には内々で伝わっていた話であった。だが全員がそれぞれにあの二人に対する情を抱いている。はいそうですかと飲み込める話ではなかった。

だが今は何も言わない。センゴクの言葉を待っている。

「『海軍の英雄』 ガープの孫。……だが同時にそれは『世界最悪の犯罪者』 ドラゴンの息子であるということでもある」

何という数奇な人生を歩む一族であるのかとセンゴクは思う。モンキー・D・ルフィという存在は一種の奇跡だ。その人生の歩み方、価値観によつて彼はどちら側にも転び得た。

今の彼は海兵だが、海賊でも革命軍でもそのどちらでもない無法者になることもあり得たのだ。その未来を考えると肝が冷える。あれだけの影響力と才能を持つ者が秩序の敵となった時、何が起こるのか。想像もできなかった。

「そして『四皇』の——『赤髪のシャンクス』の娘であるという事実。共に大犯罪者の子供であるというその事実が世界へと発信される」

室内に重い空気が漂う。それは事実の羅列だ。あの二人は生まれた時からそれほど

の業を背負つてきている。

「あの二人は希望になる。海賊になるしかなかった者、罪を犯すしかなかった者、生きる上で『悪』となるしかなかった者たちにとつての。——そうではないと。こういう生き方もできるのだと。『そうするしかなかった』などということはないのだと」

綺麗事だ。おそらく多くの非難があるだろう。掌を返すように二人の出自を責める者もいるかもしれない。

だがそれでも。

出自によつて『悪』にならなければならないなどということはないのだと。

少しでも、そう伝われば。

「あの二人は今以上に多くの世界の声に晒される。……すまないが、支えて欲しい」

「……可愛い後輩だ。当たり前でしょ」

そう言ったのは青雉だ。彼は同僚の二人へも同意の視線を送る。

「当たり前じゃア」

「そうだねエ」

二人がそれを既に了承していることもこの場の全員が知っている。本人たちが覚悟を決めているのであれば、他の者がどうこう言う資格はないのだ。

「ありがとう。そしてもう一つだが。……あの二人に限らず、そろそろ世代交代を考え

なければならぬと思つてな」

その言葉に三大将が眉を跳ね上げた。センゴクは微笑を浮かべ、言葉を続ける。

「『正義』とは価値観だ。世代は超えられない。……私とガープは引退の準備を進めている」

「シキも倒れた今、古い時代はもう終わろうとしておる。丁度いい頃合いじゃ」

海軍を常に引つ張り続けてきた二人の引退。それは世界中にとつともない衝撃をもたらすだろう。この二人は存在するだけで抑止力となるだけの力を持っている。

いや——だからこそか、とこの場の大将たちは理解した。

最早自分達の時代は終わったのだと。その次に来る者たちの姿がこの二人には見えていたのだ。

「……『新時代』か」

呟くのは赤犬だ。それには応じることなく、センゴクは立ち上がる。

「私の後任については完全に白紙の状態だ。故にこれはただの老兵の宣言だと思つてくれ」

その時のセンゴク表情は晴れやかだった。まるでようやく……本当にようやく、背負っていた重い荷物を降ろしたかのような。

「酷いねエ、センゴクさん」

そんなセンゴクに対し、黄猿が笑みと共に言う。

「わっしらにあの子たちの世話を任せようってんでしよう？」

「はは、そうだな。あの二人は中将になるんだ。二人の面倒を見るのは元帥の仕事になる」

大変だぞ、と笑うセンゴク。その言葉に顔を見合わせる三大将。その中で最初に声を上げたのは黄猿であった。

「キミがやりなよオ、サカズキイ」

「ボルサリーノ……わしに面倒を押し付けようとしちやらんか？」

「あの二人に一番もの言えるのはお前だろうしな」

「一番関係が良好なのはお前じやろうがクザン」

「つまり二人のどっちかということかどうかねエ」

「一番あの二人に対して中立って意味ならそっちだろ。逃げんな」

海軍本部最高位の押し付け合い——というより問題児二人の世話役を押し付け合う海軍本部最高戦力たち。そのやりとりを笑って見ていたセンゴクだが、彼は安心しろ、と言葉を紡いだ。その指でガープを示しつつ。

「この男に比べれば遙かにマシだ」

「む、聞き捨てならんのうセンゴク。いつわしが世話をかけた」

「ほぼ毎日だな」

「そりやお互い様じゃ」

「それこそ聞き捨てならんが？」

同期二人の言い合いが始まる。その光景を見る三人は呆れるか笑うか我関せずか。だがこの時、確かに“未来”はあつたのだ。

「大体貴様はな！ 入隊初日から騒動を——」

「お前こそ最初の訓練で——」

時代を築いた英雄たちが去ることを決めた。ならば残された者たちの役目は一つ。引き継ぐこと。この世界に“正義”があることを示し続けること。

差し当たっては。

間違いない忙しい今日と明日を乗り切ることだ。



「んー！ 美味しかった！」

満面の笑顔を浮かべ、満足そうに言うのは紅白の髪の女性——ウタだ。最初は被つていた大きなフードも外し、ご満悦の様子である。

「いやー！ 食つた食つた！」

その隣の青年——ルフィも笑顔だ。つい先程まで二人は明日と今日のイベントを控えていくつも開かれている出店で食べ歩きをしており、お腹いっぱいの状態だった。

ウタは主に甘いものを中心に食べており、つい先程にはソフトクリームを食べていた。ルフィはそれこそ手当たり次第といった様子であるが、特に肉類に関しての食いきがよい。

有名人である二人だ。最初は正体を隠していたのだがそのうち気にしなくなっていた。最悪騒ぎになつても『後で謝ればいいや』の精神である。彼らの上官たちの苦勞が偲ばれる。

だが実際、二人に気を払っている者は少なかった。皆数時間後に行われるイベントの方に意識が向いているし、普段なら目立つトレードマークの麦わら帽子とヘッドフォンも着けていない者がいないくらいには誰もが身につけているせいで目立たない。

「話には聞いてたけど、凄いなー」

ルフィの左側を歩くウタが周囲を見てそう言葉を紡ぐ。麦わら帽子とヘッドフォン。それが市民の間で大流行しているとは聞いていたが、まさかここまでとは。

「アラバスタでも似たようなことになってたな」

いつの間に手に入れてきたのかたこ焼きを食べながら言うルフィ。彼の言う通り、アラバスタ王国でも事件の後は麦わら帽子とヘッドフォンがヒーローの証として流行していた。事件後にライブのために訪れた際は照れ臭く思ったものだ。

「あ、ルフィ。いつの間にかたこ焼きなんて」

「お前も食うか？」

「うん。あー」

「ほい」

口を開けるとルフィがたこ焼きを一つ放り込んでくる。熱々でとても美味しい。

それを食べ終わると、ウタはルフィの口元にソースがついていることに気付いた。ウタはハンカチを取り出し、手を伸ばす。

「ちよつとじつとしててルフィ」

「ん、おう」

こういう時は素直だなと思いつつ、その口元を拭う。ルフィはされるがまだ。

周りから見るとバカップルと言ってもいいような光景なのだが本人たちにその自覚がない。これが当たり前だと思っているためだ。

……彼らの周囲の者たちの苦勞が偲ばれる。

「次どこ行こつか？」

「そりや遊園地だろ！」

腹ごしらえも済んだし、というところで二人は次の目的地について話し始める。目を輝かせてルファイが言う遊園地とは『シャボンディパーク』のことだ。

ここシャボンディ諸島には有名な観光地でもある。偉大なる航路を前半と後半に分ける「赤い土の大陸」の前半側にあるこの島から正規のルートで後半の海である「新世界」へと行く場合、新たな船を購入して大陸を横断するという方法が取られる。そのためというべきかここには多くのホテルがあるし娯楽がある。近くに海軍本部マリンスポーツがあることも大きいだろう。そこに住む海兵の家族が訪れることも多いのだ。

人が集まる場所には金が集まる。金が集まるということは物資が集まり、更に様々なサービスが増えていく。世の真理であつた。

そしてその上で最上位の娯楽施設。それがシャボンディパークである。

「遊園地か……よし、行こう！」

「ししし、楽しみだなア！」

ルファイの提案に即答で応じるウタ。実を言うとこの二人はシャボンディ諸島を訪れたことがほとんどない。訪れても僅かな時間だけであり、今日のように自由に動き回ることは少なかったのだ。

なんだかんだで忙しい二人である。仕方ないことなのかもしれない。

「ええと、シャボンディパークはどっちだっけ」

「あっちの方だろ」

「うんつまりそっちじゃないね」

ルフィが凄い顔をしていた。その頭を軽く撫でるようにして二、三度叩き、やはりルフィが言った方とは逆方向をウタは示す。

「こつちだね」

「……いやわかってたぞ?」

「出た、負け惜しみイ」

両手を頭の近くにかけてのいつものポーズ。ぐぬぬ、とルフィが唸る。そして彼はすぐに答えた。

「よしじゃあ勝負だウタ!」

「いいよ。内容は?」

「どっちが先に遊園地に着くかだ!」

「却下」

いつもならウタはルフィの勝負にすぐ乗るのだが、今回ばかりは却下した。それは勝負にならない。

「なんでだよ！」

「ルフイ一人で無事に辿り着けるわけないでしょ」

「そんなことねえよ！」

「さつき間違えてたじゃん」

ウタのその言葉に言葉に詰まるルフイ。そんな彼に対し、はい、とウタは右手を差し出した。

「勝負は遊園地でしょ？ 今は一緒に歩きたいし」

「……まあ、いいけどよ」

差し出された手を当然のように左手で握るルフイ。そうして二人は並んで歩き出す。

そうしてから、当たり前のように言葉を交わすのだ。

幸せだった。

間違いなく、幸せだった。

こんな日々が、いつまでも続くと思っていた。

それを疑うことさえしていなかった。

するはずが、なかったのだ。

あんなことが起こる可能性など。

——誰一人、想像さえもしていなかった。



「悪い、ちよつと行つてくる！」

「行つてらっしゃい」

遊園地——シャボンディパークで遊び始めてから数時間。ウタはパークの外で地面から生えているヤルキマンマングローブの小さな根に腰掛けていた。

イベントの時間が近いことに気付いた二人は後ろ髪を引かれる思いを抱きながらもここを出ることにした。今はルフィがトイレに向かつていったところだ。

「……………ふふ」

思わず、といった調子でウタは笑みを溢す。時間が近いとして切り上げた時、ルフィが言ったのだ。

“今度は時間なんて気にしなくてもいい時に来よう！ 絶対だ！”

それにはウタも賛成した。彼と一緒にまたこのシャボンディパークに来る。その約

東が嬉しい。

彼自身は自覚がないかもしれない。だがその約束は。

「……デート、だよね」

自分達の関係をなんと表現するべきかを、ウタは知らない。

幼馴染、親友、義姉弟、家族……どれも正しいようでいて、しかし、少し違う。

ルフィとウタ。

ウタとルフィ。

互いの想いをどう表現するべきなのかがわからない。

「……………」

左腕のアームカバー。そこに描かれたマークを見る。かつて幼き頃にルフィがくれたマーク。

二人の誓い。誰にも明かささない、ウタにとつての“新時代”そのもの。

(もう、一歩だけ)

勇気があればと、ウタは思う。

いくつもの形容ができる互いの関係。しかしそこに、ウタが本当に望む関係は含まれていない。

いつからそう思うようになったのか。

或いは最初からだったのか。

始まりはもう、わかからないけれど。

「……最近、同じことで悩んでばかりだなあ」

今の関係では満足できない。でも壊したくもない。

だから停滞している。

——勇気を。

ほんの少しの、勇気を。

「」

祈るようにしてマークへと触れる。幼き日々。自分にとっての全てに。

……どれぐらいそうしていたのか。

ウタの耳に、不意にその声が聞こえた。

「おい、天竜人だぞ」

「膝をつけ。近くの奴にも声をかけろ」

囁くような声であったが、ウタの耳には確かに届いた。思わず眉顰めるが、ウタは木の根から降りると他の者たちと同じように地面に膝をつく。

首を垂れる体勢をとる途中で、彼女は確かに見た。

——人に跨り、首をつけた人間を連れ歩くその人物を。

この世界において、“神”と呼ばれるモノの姿を。



およそ800年前に世界政府を創造した20人の王たち。その末裔たる“世界貴族

”——“天竜人”。

絶大なる権力を持つその存在を前にしては、この世界の人間は首を垂れるしかない。

世界政府はあくまで加盟国によって形成される組織だ。故に本来ならば彼らの影響
力も加盟国にのみ作用するのが道理である。しかし現実はそのはいかない。

加盟国であろうと、非加盟国であろうと。

物心つく頃には教え込まれる。

——“天竜人には逆らうな”。

それは常識よりも先にある絶対のルールだ。その背景にある圧倒的なまでの力に逆

らうことなど、個人には許されない。

「……………」

首を垂れながらウタはそれが通り過ぎるのを待つ。幼き頃、何も知らない頃ならいざ知らず。絶対的な存在に逆らうことがどれほど愚かなのかを知っていた。

今の彼女は海軍本部准将という強い『公』の立場を持っている。よくセツトで扱われる幼馴染と騒動を起こす問題児扱いをされているが、それでも二人とも自分の中に『一線』は持つているのだ。それが世間のそれとは違う位置にあるだけで。

そんな彼女にとって『天竜人に逆らう』という行為は決して超えてはならない一線であつた。

誰もが無言で首を垂れ、その存在が通り過ぎるのを待つ。

——だが。

「んんん？」

不意に、ウタの前で人に乗っていたその“天竜人”が声を上げた。

ビクリ、とウタの体が震える。

「お前、見たことあるえ〜！」

嬉しそうな——それでいて、どこか粘つくような声。

ウタの背筋に冷たい汗が伝う。

「顔を上げろ、その女」

言葉を紡いだのはその「天竜人」の斜め後ろに控えるように立っていた黒服の男であつた。サングラスをかけたその男の言葉に従い、ウタは顔を上げる。

妙な格好だ、というのがその「天竜人」に対するウタの最初の感想であつた。服装もそうだが、わざわざ顔をシャボンで覆っているのがよくわからない。どういう意味があるのだろうか。

そんなウタの感想になど微塵も気付かぬまま、その「天竜人」は笑みを浮かべる。

「やっぱりだえ〜！ お前の歌は下々の民のくせに上手いと評判だえ〜！」

「あ、ありがとうございます」

精一杯の愛想笑いを返す。とにかく今は問題を起こさないようにやり過ぎすしかなかつた。

だが、しかし。

そもその話として。

——「天竜人」という存在は、興味があれば話をしない。

そして彼らにとって、「天竜人」以外の存在はただの自由にできる「モノ」に過ぎない。

い。

「決めたえ！ お前、わちしの妻にしてやるえ〜！」

その時、ウタは何も言えなかった。

言われたことを理解できなかつたのだ。いや、したくなかつたのかもしれない。だがやはりその「天竜人」はウタのことなど何も気にしないままに言葉を紡ぐ。

「毎日わちしのために子守唄を歌うんだえ〜！」

楽しそうに笑う「天竜人」。対し、ウタは吐き気さえも覚えた。

——ふざけるな。

この歌は。この歌声は。お前なんかの——

「では早速手続きを行います、チャルロス聖。光榮に思うといい、女」
黒服の言葉。こちらに歩み寄ってくる男に対し、ウタは言葉を紡ぐ。

「……嫌……です」

だが、その返答はあまりにも弱々しかった。いつもの快活な彼女からは想像できないほどに弱い言葉。

もしも彼女が世界を知らぬ生き方をしていたならば、おそらく違う返答をしていたの

だろう。堂々と『否』と言えたのかもしれない。

だが彼女は秩序側の人間としてこの十年を生きてきた。故にこそ知っているし、理解しているのだ。

——“天竜人”という存在。その絶対性を。

「んんん?」

だが、ウタの返答は確かに届いたらしい。不愉快そうに眉を顰める “天竜人” ——
チャルロス聖。

まずい、とウタは思った。そこからの行動は早い。息を吸い、その能力を行使しようとする。

しかし、彼女は気付いていなかった。

チャルロス聖の後ろに控えていた黒服の男とは別のもう一人。白いスーツの男がいることに。

「——妙な真似をするな」

一瞬だった。

組み伏せられ、地面へと抑えつけられるウタ。直後、乾いた音が響いた。

「——ッ!?!」

右の太ももに激痛が走る。同時に体から力が抜けていく。

何が起こった、と思うと同時に腕の関節を極められた。動きを完全に封じられてしま
う。

「海楼石の弾丸だ。力が入らないだろう?……しかし、流石だ。この至近距離で銃弾を
打ち込まれて悲鳴を上げないとは」

こちらにしか聞こえないような声量で言う白いスーツの男。そこでウタは思い出し
た。「天竜人」直轄、「世界最強の諜報機関」——CP0。

特徴として白いスーツを着ており、「世界貴族」の直属として動いている存在だ。更
に仮面をしている者たちは別格の力を持つという。

今ウタを抑え込んでいる男は仮面をしていない。だがその力は強く、海楼石の弾丸に
よって力を奪われた状態では抜け出すことはできなかつた。できるのは歯を食い縛つ
て耐えることだけだ。

「おいお前! 勝手なことをするんじゃないえ!」

「申し訳ありませんチャルロス聖。しかしこの女、貴方様に危害を加えようとしてしました
ので」

「何イ〜!?!」

鈍い音が響く。チャルロス聖が抑え込まれたウタの頭を踏みつけたのだ。

「生意気だえ! わちしの妻にしてやろうというのに!」

何度も、何度も。

踏みつけて、蹴りつけて。

怒りのままにチャルロス聖はウタを傷つける。

「……………ッ」

ウタは悲鳴を上げなかった。それだけはしたくなかった。

たとえ悲鳴であっても。

——こんな奴に、僅かであっても声を聞かせたくはなかったのだ。

「なんだえ!? その目は!」

何度も蹴られ、顔が血に染まったウタ。しかしそれでも目が死なないウタにチャルロス聖は怒りを募らせる。

逆らわれることなど決してない立場と人生。それが“天竜人”という存在だ。だとも屈していない。この目の前の人間は拒否の意思を示し、そして今も抵抗できない状態でありながらも屈していない。

屈した人間ばかりを見てきたからこそチャルロス聖にはそれがわかる。それが彼の神経を逆撫でした。

「驥をしてやるえ!」

そして彼が取り出したのは、一丁の銃。

たった一発で容易く人を殺せる武器。
その照準を、彼がウタに合わせたところで。

「——おい」

例外など、なかった。

たった一言。たったの一言だ。

それだけで——誰もが動きを止めた。

「——ッ!?!」

悲鳴は上がらなかった。

ウタに理解できたのは、自分を抑えつけていた力が消えたこと。

チャルロス聖や黒服、周囲の状況を見ていたものが見たのは——白いスーツのCPO
が地面へと叩きつけられた姿だった。

世に「世界最強の諜報機関」と謳われる存在——CPO。

そのメンバーの一人が、渾身の拳一つで沈黙していた。

「……………あ……………」

その姿を見て。

思わず、眩くような声をウタは漏らす。

(だめ)

赤いベストに、麦わら帽子。

あの時とは違う格好ではあるけれど。

それでも、あの時と同じように。

「……………ル……………ファイ……………」

その背中に安心感を覚えながらも。

それでも、ウタはその背を止めようとする。

あの日とは違う。 “金獅子のシキ” という海賊と目の前の “世界貴族” は違うのだ。

——私は大丈夫。

——だから退いて。

そんな言葉が思い浮かぶ。だってそうだ、当たり前だ。

ただでさえ、私は彼の “夢” を奪ったのに。

彼の “未来” までも奪うなんて。

だが、それでも。

その口から紡がれた言葉は。

「……………たすけて……………」

た。

「……すまねえ」

一言、ルフイは呟くように言う。それに対してウタは首を振るしかない。何故、彼が謝るのだ。

謝るべきなのは——こちらの方なのに。

「……なんてことを」

こちらへと手を伸ばそうとしたルフイ。その彼に対し、黒服の男が言う。

「誰を殴ったのかわかっているのか……？ 覚悟はできているんだろうな!？」

その言葉を受け、黒服の男を睨みつけるルフイ。ひつ、と小さく黒服の男は悲鳴を上げた。

だがルフイは黒服の男には何も言わない。ウタに手を伸ばし、後悔を滲ませた言葉を紡ぐ。

「……すまねえ」

呟くと共に、ウタへと触れるルフイ。その手は優しく、温かかった。

どうして、とウタは思った。

「いめん」

自分のせいだ。

「ごめん、ルフィ」

どれだけ傷つけられようとも悲鳴一つ上げず、涙一つ流さなかつたウタ。

「私の、せいで」

しかしその瞳からは大粒の涙が溢れ。その口からは弱々しい声が漏れている。

だが、ルフィは言うのだ。

「ウタは何も悪くねえだろ」

いつも通りの口調で。当たり前のように。

そして、確かな決意を込めて。

その青年は——「麦わらのルフィ」は、積み上げてきた全てを捨てる言葉を口にした。

「——逃げよう」

きつとそれは、悪意ですらなく 後編

あまりにも予想外のことが起こった時、人は動きを止めてしまう。目の前の状況を把握するというところに自身の処理能力を全てつぎ込んでしまうためだ。

だが、それが永遠に続くことはない。徐々に状況を理解し、動き出せるようになった者たちが現れ始める。

「……大変だ」

最初に誰かが叫び出した。そしてそれがすぐに周囲へと伝播していく。

「『天竜人』が殴られた!」

「海軍大将が来るぞ! 避難しろ!」

「あいつは誰なんだ!?!」

爆発するような叫びがいくつも響く。その中心にいるルフィはしかし、そんなことは気にもしない。

今の彼にとつての関心は、目の前の大切な人にも向いているのだから。

「馬鹿、知らねえのか!?」 麦わらのルフィ「だ! 海軍の英雄だよ!」

「何で海兵が『天竜人』を殴ったんだ!？」

「お前見てなかったのかよ!？」

「ごめん、と何度も何度も呟くウタ。その彼女にしゃがみ込みながらルフィは背を向ける。

その背に、震えながらウタは手を伸ばした。彼女を背負い、ルフィはその場から離脱する。

「『麦わらのルフィ』は『歌姫』を守ったんだよ!!」

世界にも広く知られたゴムの力。その弾力を利用し、モンキー・D・ルフィはその場から離脱する。

「掴まっつてろよ」

一言。彼は背負う人に向かってそう言葉を紡いだ。
最後まで、彼の耳に周囲の声は届いていなかった。



その報告の意味が、最初はわからなかった。

報告を受けたセンゴクだけではない。その場にいた三大将も、ガープも、全員がすぐに次の言葉を紡げなかった。

「もう一度、報告してくれ」

それでもその言葉をセンゴクが紡げたのは、彼が海軍本部におけるトップにいるからこそだろう。背負ってきた責任が彼を踏み留まらせたのだ。

いや、もしかしたら期待したのかもしれない。

それが何かの聞き間違いであることを。

『モンキー・D・ルフィ大佐が天竜人を暴行しました！ こちらは混乱しています！』

電伝虫でこちらに連絡をしてきている海兵もまた混乱しているのがわかる。それほどまでに衝撃的で、そしてどうしようもない状況だった。

世界政府における象徴でもある存在、*“天竜人”*。その存在に手を出すということは、世界政府への宣戦布告と同義である。

—— *“天竜人には逆らうな”*。

これは世界の絶対的なルールだ。それを保証するのが今この場にいる3人の海軍本

部大将である。

「……………何が、あつた」

絞り出すような声だった。モンキー・D・ルフィはセンゴクにとつての友人と同様、破天荒な青年だ。常識破りの問題ばかりを次々と起こすし、それによつてセンゴクを含め多くの者が頭を抱え、胃を痛めた経験がある。

だがそれでも彼の行動には理由がある。無意味な行動をするような男ではないのだ。当初は理解できずとも、後から事情を聞けば理解はできることは多い。

だからこれにも理由があるはずだ。こんなことをしでかしただけの理由が。

「……………」

動揺が広がる中、無言で立ち上がったのはガープだった。つい先程までの笑顔ではなく、思い詰めたような表情をしている。彼がするにしてはあまりにも珍しい表情。しかし同時に尋常ならざる雰囲気纏う彼に対し、三大将も何も言えない。

「待てガープ」

だが、この男だけはそんな彼に対しても声をかけることができる。それだけの年月の付き合いがあり、信頼があるのだから。

「なんじゃ」

「貴様は待機だ」

三大将。海軍本部の最高戦力たちでさえも思わず身構えるほどの気配だった。

これは——ただただ純粹な、怒気。

「ルフィは馬鹿じゃが、考えなしの馬鹿ではない」

その言葉一つ一つから凄まじい圧を感じる。改めてこの場の者たちは理解した。

かつて世界最悪の「悪」を討伐した「伝説の海兵」。その歩んできた人生、そして積み上げてきた力を。ありとあらゆる海賊が恐れる存在の意味を。

「わしと同じであのクズどもを嫌ってはおるじゃろうが、だからといって気分で危害を加えるような奴ではない。何か理由がある」

「……何だというんだ」

「それはわからん」

言い切るが、ガープには心当たりがあった。おそらくは『あの子』だろうという確信に近い思いがあったのだ。

シャボンディ諸島で「天竜人」相手に事件を起こしたという事実。嫌な想像などいくらでもできる。

「いずれにせよ現場に行かねばならん。それがわしの」

「駄目だ」

遮るようにセンゴクは言った。

「これは貴様の管轄ではない」

「そうじゃな。だからこれは一個人の我儘じゃ」

「今の貴様は海軍本部の中將だ。軽率な行いは認めん」

「それは命令か、センゴク」

「そうだ」

即答だった。

強い意志を込め、センゴクは言う。

「——私は、海軍本部元帥だ」

その言葉には、とてつもない重さが宿っていた。

言葉から滲んでくる覚悟が周囲に伝わってくる。ガープは振り返ると、正面からセンゴクを見据えた。

海軍における『伝説』二人。互いに譲らぬ視線のぶつかり合い。

今にも二人が激突しそうな空気の中で。

「——わっしが行きましょう」

響いたのは、そんな言葉だった。

ゆつくりと立ち上がるのは黄猿だ。ボルサリーノ、とガープがジロリと黄猿を睨む。そのガープに対し、黄猿は苦笑を浮かべた。

「落ち着いて欲しいですねエ、ガープさん。『天竜人』への暴行は大罪。それは子供でも知ってることでしょう?」

「……………」

「わっしらは秩序側の人間です。それがルールを破つたら示しにならんでしよう」

それに、と黄猿は言葉を紡いだ。自身の同僚である大将二人へと視線を送り。

「わっし以外の全員が『理由』を探してるでしょう?」

その言葉に赤犬と青雉が小さく拳を握った。黄猿の言葉は凶星だったのだ。

皆無意識のうちに『理由』を探していた。何かがあつたのだろうか。だからこそこんなことが起こっているのだと。

そう思ってしまうくらいには、あの二人を知り過ぎていた。

「どんな事情があろうと罪は罪。情状酌量つてもものがあるとしても、それはわっしらの仕事じゃないでしょう?」

「……………そうだな。我々は定められた法に基づいて動く組織だ」

センゴクが応じる。その言葉に頷くと、黄猿がそのまま部屋を出ていこうとする。しかし、出ていく前に彼は小さな笑みと共に言葉を紡いだ。

「誤報、つて線もあるかもしれないねエ。……それこそ、海賊に襲われた『天竜人』を守ろうとした流れ弾であつたとか」

黄猿が出て行く。残された四人のうち、最初に眩きを零したのは青雉だつた。

「……下手な冗談だ」

「誤報、か」

応じるように眩くのは赤犬である。そこには祈るような感情が込められている。だがわかつている。そんなことはか細い希望であることなど。わかっているのだ。

「……………」

その場に座り込み、右手で顔を押しさえるガープ。彼は呻くように言葉を紡いだ。

「——海兵になれ、と」

何も言えなかつた。

ただ黙して、『英雄』の独白をその場の者たちは聞いている。

「わしが……そう言つたんじゃ」

その、あまりにも重い言葉だけが。

室内に、やけに響いた。



60番GRは混乱に包まれていた。

あと一時間もすれば明日のイベントの事前挨拶が行われる予定であり、現場の総責任者でもあるモモンガは常に忙しく動き回っていたのだ。

件の二人はまだ到着しておらず、そろそろお目付役に連絡を入れようとしていたところであった。

——「麦わらのルフィ」が「天竜人」を殴り飛ばした。

突然入ってきたその報告に、普段落ち着いているモモンガも一瞬思考が止まったくらいだ。

何故、どうして、何が。

どんな理由が。

そこまで思考したところで、二人の挨拶を待っていた市民たちの間にもざわめきが広がり始めたことに気付く。

(止まっている場合ではない)

それは最早、本能的な感覚であった。

ここで動かなければ——動けなければ。一生後悔することになる。自分自身の直感がそう告げていることにモモンガは気付いていた。

電伝虫を取り出し、二人の『お目付役』へと繋ぐ。数度のコールの後、相手が出た。

『はい。こちらオリンです』

「モモンガだ。落ち着いて聞いてくれ。——ルフィ大佐が “天童人” を殴り飛ばした」

『——』

絶句する気配が伝わってきた。当たり前前だ。こんなこと、モモンガも信じたくはなかったのだから。

「起こったのはジャボンディパークの近くだ。おそらくは既に移動を始めていると思うが……そちらに連絡はないか？」

『いい、いえ。何もありません。まだ時間もあるので私も気にしておらず』

「そうか。……まあ、そうだろうな」

二人の部下である彼女が悪い部分はないとモモンガは思う。彼女の役目はお目付役ではあるが、それは遅刻しないようにという程度のものだ。まさかこんなことの責任を彼女に問うわけにもいかないだろう。

「二人がどうするかはわからないがそちらへ戻る可能性もある。大尉、確認だ。どこに船はある？」

『……79番GRです。ホテル街でもあるので人の出入りも多いですから……その、紛れるにはいいと』

「承知した。大尉はそこで待機するように。——すぐに向かう」

言い切ると、モモンガは周囲に視線を向ける。すると、こちらに駆け込んでくる人物が見えた。

その人物はモモンガの直下として彼の部隊の副官を務める人物だった。彼は焦った様子で言葉を紡ぐ。

「大変ですモモンガ中将！」

「ああ。聞いている。本部は？」

「大将黄猿がこちらへ向かっていると連絡が！」

その言葉に、そうか、とモモンガは頷いた。海軍本部の大将が動く——つまり、天竜人がが害されたことは事実であるということだ。

誤報ではないのだろうか、とモモンガは思った。ならば動かなければ。

今の自分は——海軍本部中将だ。

「指示を出す。部隊を三つに分けるんだ」

「三つ、ですか」

頷く。やるべきことは三つだ。

「一つはこの場に残す部隊だ。既にこの件の情報が流れ、市民たちに動揺が広がっている。それを止める役目が必要だ」

「なるほど……」

「荒事の必要はない。経験の少ない新兵を中心に組み立てろ。そしてもう二つだが、一つはシャボンディパークに向かう部隊。もう一つは79番GRに向かう部隊だ。こちらの目的は言う必要はないだろう」

「急げ、とモモンガは言った。すぐに、と副官は応じる。そんな彼に対してモモンガは背を向けた。」

「私は79番GRに先行する。大将黄猿にはそう伝えてくれ」

「普段の彼からすると非常に珍しい、焦りすら混じった言葉。そのまま副官の言葉を待たず、モモンガは地面を蹴った。」

二人の「英雄」を待っていた市民たちの中にははっきりと動揺が広がりがつつある。それだけではない。前代未聞とも言える大事件を察知したこのシャボンディ諸島そのものが混乱しつつあるように思えた。

「……79番GRか」

混乱の中を駆け抜けながら、モモンガは呟く。

「——いい部下を持ったな」



モンキー・D・ルフィはかつてないほどに全速力で駆け抜けていた。

自分自身が起こした事件による混乱が伝播し、真つ直ぐに進むことは難しい。だが泣き言は言っていない。

「ごめん」

何度も何度も自分の背中で謝り続ける大切な人を守るためには、今は走るしかないのだ。

「謝るんじゃない。ウタは何も悪くねえだろうが」

それは心からの本心だった。彼女は何も悪くない。悪いはずがないのだ。

ルフィはよく周囲から破天荒と言われる。騒ぎを起こすことは毎度のことであるし、説教や始末書などは最早日常だ。

しかし、そんな問題児である彼はそれでも秩序側の人間だ。

だから自分がしたことの意味はわかっている。個人の好悪は関係ない。世界のルー

ルにおいて、彼は許されなかったのだ。

「悪いってんなら、それはおれだ」

積み上げてきたもの。

背負ってきた人と共に歩み、成し遂げてきたこと。

その全てを捨て去る行為をした彼は言う。

「だから気にすんな」

——だから、笑っていてくれ。

いつだって、ウタには笑っていて欲しいから。

それを彼が口にするとはなかった。だがそれでも長い付き合いだ。彼女にも伝わっていると思じた。

「……ルフィ……」

こちらを背中から抱く腕の力が、少しだけ強くなった。

大丈夫だ、ともう一度ルフィは呟く。

どんな相手が来ようとも、守ってみせる。

——覚悟なんて、十年前に終わっているのだから。

「……オリン」

息を切らし、汗を流しながら辿り着いた場所。

73番GR——そこにいたのは、二人にとって信頼できる部下であるオリンだった。正義のコートを纏い、右手には彼女の獲物である長銃を下げている。

「何があつたかは、聞いています」

声は震えていた。いつもの彼女からは想像もできないような、聞いたことない声だ。

「言いたいことも聞きたいこともたくさんあります。でも多分、大佐がそうしたつていうことは……そうするしかなかつたんだ、つてことなんだと思います」

「……言い訳をするつもりはねえ。時間もねえしな」

ルフィのその言葉に、服を掴むウタの手の力が強くなつた。

「オリン。おれたちは——」

「行つてください！」

ルフィの言葉を遮るように、オリンが叫んだ。背後の小舟を——ここに来る時に使用した、本当に最低限の機能のみを有した船を示しながら。

「あまり、持ち合わせがなくて」

その瞳から、大粒の涙がいくつも流れ出る。

「本当に最低限しか……それ以下しか、用意できませんでした。でも、集められるものは詰め込みました」

だから、という彼女の言葉に頷き、ルフィはオリンの横を通り過ぎる。

その時、すれ違い様に。

「ありがとう」

「ごめん」

二人はそう、小さく呟いた。

一度顔を俯かせるオリン。そして彼女は涙を拭くと、船に乗り込む二人を追いかける。

「本当に最低限のものしかありません。だから——」

言いかけた彼女の言葉が止まった。オリンが持っていた子電伝虫が鳴ったのだ。

船の上にウタを降ろしたルフィがオリンの方を見る。ウタもまた、怯えたような目でオリンの方を見ていた。

「……はい」

オリンは人差し指を口元に当てると、そのまま呼び出しに応じた。

相手は誰だ、とルフィは思う。その答えはすぐに来た。

『モモンガだ。……そちらにはまだ、二人は来ていないか?』

「はい。まだ来ていません」

何の澱みもなく言い切るオリン。そうか、とモモンガは応じた。

『私が先行してそちらに向かっている。もう一度確認するが、79番GRで間違い無い

んだな?』

「はい」

79番GRという言葉に、思わずルフイは自分達がいる場所を見た。近くにある木には『73』という数字が書かれている。

『……承知した。私が着く前に二人が来た場合、足止めを』

僅かな沈黙の後、モモンガがその言葉と共に通話を切った。オリン、とルフイが彼女の名を呼ぶと、苦笑と共にその部下は言う。

「私のことは気にせず。まあ……この混乱ですから。報告を誤ったとか、お二人に出会わなかったとか。言い訳並べて何とかします。大丈夫ですよ」

行つてください、とオリンは言った。ごめんなさい、とか細かい声でウタが言う。

何度も、何度も。

「いいんです。私は——」

そんなウタへ、オリンが言葉を紡ごうとしたところで。

「——いい部下を持ったな」

響いたのは、そんな言葉だった。

その場の全員がそちらを見る。そこにいたのは、一人の海兵。息を切らしながら、大量の汗を掻きながら。

それでも、その鋭い気迫に衰えはない。

「行かせるわけにはいかん」

海軍本部長、モモンガ。

二人にとって、恩師とも呼べる人物がそこにいた。



その人物は、ルフィとウタにとっては恩人とも呼べる人物であった。

海兵としての振る舞いをまだ知らぬ頃。彼の船に乗り、多くのことを学んだ。拳では解決できないこともあるし、そしてそれならばそれで戦い方があるのだということを知ってくれた人だ。

尊敬している。信じてもいる。

だが、だからこそ。

今ここで、この状況で。最も相対したくない人物のうちの一人だった。「どうして」

呟いたのはオリンだ。そんな彼女に対し、息を一つ吐いてモモンガは応じる。

「昨日の夜。簡単に当日の動きを確認しただろう。73番GRに船を停めるつもりだとその時に言っていたことを忘れたか？」

刀の鞘で地面を軽く叩くモモンガ。そうだ、とルフィも思った。確かに昨日の夜に確認したのだ。

「明日は遅刻だけはするなよ」

「わかってるっておっちゃん」

「はい。大丈夫です」

「信用できんな……前科があり過ぎる」

「あはは……一応、私が連絡役をしますので。73番GRですし、60番GRも近いですから」

それは当たり前前の確認であったのだ。だがそれが、こんなところで。

「“天竜人”に危害を加えることは重罪だ。知っているな？」

小さな金属音を立てながら、モモンガが刀の柄に手を添えた。直後、動いたのはオリンだ。

「行つてください!!」

「オリン!？」

彼女の名を呼んだのはウタだ。悲鳴のような声を上げてオリンの名を呼ぶその声を背に、その女性海兵は突き進む。

銃口を向ける先にいるのは、自分と同じ海兵。しかし遥かに高い地位にいる相手。叶うはずのない存在だ。

しかし彼女に躊躇いはない。

「……本当に、いい部下を持ったな。いや」

呟き。長銃を構えて迫るオリンにも届かぬほどの音量。

そんなモモンガに対し、オリンが引き金を引こうとして。

「友人と、いべきか」

しかし、その引き金が引かれることはなかった。

一瞬だ。十歩以上はあった距離を一瞬で詰め、刀の柄をオリンの腹部へとモモンガは叩き込んだのだ。

崩れ落ちるようにして倒れ込むオリン。思わずといった様子でルフイが叫ぶ。

「オリン!」

「ただの当て身だ」

こちらを見据えながら言うモモンガ。そのまま彼は、鋭い視線を二人に向ける。

「理由については察している。姿を見れば一目瞭然だ。……言いたくはないが、『そういう場面』を見たことは何度もある」

「……おつちゃん。おれは」

「だからこそ見逃せない」

腰だめに刀を構えるモモンガ。そのまま彼は言葉が続ける。

「それを『正義』だと飲み込んで。それでもか弱き人々を守るのだと。そう誓ったから私はここに立っているんだ」

血を吐くような言葉だった。

だが、だからこそわかる。モモンガも退けないのだということが。

「悪いようにはしない。私がさせない。だから頼む」

まるで絞り出すかのような言葉だった。

それもまた彼の本心だということにはわかった。だが同時に、だからこそルフィはそれに頷くことはできない。

「駄目だおつちゃん」

足元にある正義のコートをルフィは拾う。

見慣れたはずの『正義』の文字が、今はとてつもなく重く感じた。

「——それじゃあ、ウタが笑えねえ」

息を呑む心配が伝わってきた。それは隣に座り込んでいる幼馴染からであり。目の前の、師とも呼べる人からでもあつて。

「それが……お前の『正義』か。モンキー・D・ルフィ大佐」
「そうだな」

船を降り、ルフィは言う。

「気付いてなかったただけだ。おれの『正義』は、ずっと昔からここにあつた」

そして彼は正義のコートをその身に纏う。

それは、彼の誓い。

それは、彼の覚悟。

彼が掲げる、『正義』の形。

「『大切な人が、笑える正義』」

今この瞬間に。

ようやく、モンキー・D・ルフィは背負う『正義』の形を見つけたのだ。

「退いてくれ。おつちゃんとは戦いたくねえ」

「我儘を言うな。……嫌なことなど、この先いくらでもあるんだ」

この先、という言葉でルフィは察した。彼は一度顔を俯けると、そのまま右の拳を地面へと突き立てるようになして振り下ろす。

それは彼の戦闘における構え。その構えを見てモモンガも頷く。

「私をここで退けられないようでは、結局逃げることなど不可能だ。……できれば、こんな形で聞きたくなかった。もっと、そうだな。それこそ——……」

しかし、その先の言葉をモモンガは紡がなかった。

そして、その二人が向かい合う。

「ギア、2」

「『一刀居合』」

かつては二人がかりでも手も足も出なかった。

強く、厳格で、誇り高い。

モモンガという海兵は、ルフィとウタにとってはいつかは超えたいと願った存在で。

何よりも。

——『海兵』という生き方を、その背中で教えてくれた人だ。

言葉はなく。

二人の海兵が、全力で地面を蹴る。

共にその背に宿るは“正義”の文字。

一度は交わり、そして別の場所で戦うことになっても。

それでも、互いに信じていたもの。

“私とて今よりも強くなる。そう容易くはいかん”

思い出すのは、あの日のモモンガの言葉。

いつか超えてみせるとそう言ったあの日から、随分と時間が経ったような気がする。

拳と刀。その二つのぶつかり合い。

それを見守るのはたった一人だ。涙で視界を滲ませながらも、それでも彼女は決して目を逸らさなかった。

「うわあああああああ!!」

若き海兵の叫びには、あまりにも多くの感情が込められていて。

その先達は何も言わず——しかし、終ぞ。

——その刀が、抜かれることがなかった。

鈍い音と共に、左の頬を殴られたモモンガが吹き飛ばされる。

姿が見えなくなった。拳を振り抜いたルフィは、噛み締めるように呟く。

「……痛え」

ズキズキと、右の拳に走る痛み。

嫌なこと。

苦しいこと。

辛いこと。

その全ての始まりがこの痛みであったのだと。

後に彼は、大いに痛感することになる。

「オリン。大丈夫か」

数秒の間そうしていたルフィだが、すぐに思考を強引に切り替えた。今ここで立ち止まっている暇はないのだ。

倒れていた部下の体を揺する。薄くその瞳が開いた。

「ッ、ッほ……行って、ください」

身を起こし、咳き込みながら言うオリン。

「自分のことは自分で何とかします！ だから行つてください！」

彼女の言葉にもまた、強い覚悟が宿っていた。

それを無碍にすることはできない。故にルフィは立ち上がり、船に飛び乗る。帆を張り、風を受けてゆつくりと船が動き出す。

その最中で、ルフィもウタもこちらを見つめる部下へと視線を向けた。

「誇りです!!」

涙の混じった声。

いつだって、「英雄」たちの船出は万雷の拍手と歓声と共にあった。

多くの幸せと共に、「新時代の英雄」は歩んできたのだ。

「お二人の部下であれたことは!! 私の生涯の誇りです!!」

だが今、二人を送り出すのはたった一人だ。

そこには笑顔も歓喜も——幸福もない。

「ありがとう」

どちらが呟いた言葉であつたのか。

その言葉を残し、二人の「英雄」は海へと漕ぎ出した。

かつて、モンキー・D・ルフィは自由な冒険というものに憧れた。海賊という存在に憧れていた。

しかし、海賊に対する憧れは捨て去ることになった。そこに未練はない。だが「冒険」というものに対して未練がないのかという嘘になる。未知なるものへの好奇心はいつだって彼の中にあつたのだから。

だが、この時は違つた。

未来が何もわからない。行く先もわからない。それはかつて憧れたものであつたはずなのに。

その「未知」にはただ、底知れぬ「闇」が待っていた。



「……逃げられたようだねエ」

現場に着いた黄猿が部隊を率いて向かつた79番GR——そこにいた二人に対する第一声はそれであつた。

今日行われるイベントの責任者でもあつたモモンガと。

この事件を引き起こした大罪人の部下であるオリン。

この場所にその二人しかいないということが、その結果を示している。

「申し訳ありません」

頭を下げるのはモモンガだ。黄猿は肩を竦める。

「聞けばCPOも倒されたつていうんだから……いやア、あの子供が強くなったもんだねエ」

その口調と態度からは真意が読み取れない。黄猿はサングラスの位置を直すと、後ろに控えている部下たちへと声をかける。

「軍艦の用意を。さっさと追うよオ」

「は、はい！」

その言葉に慌てて動き出す海兵たち。その光景を一瞥すると、彼もまた移動を開始する。

「……79番GR、ねエ」

呟く声はモモンガとオリンにのみ届いた。こちらに背を向けた海軍本部最高戦力は、そのままこの場を立ち去っていく。

残されたのは二人だ。思わず息を吐くオリンに、モモンガが言う。

「凶悪犯を取り逃した」

思わずモモンガの顔を見るオリン。彼は自身の刀を見つめながら言葉を紡ぐ。

「……それが我々に対する評価だ」

「しかしモモンガ中將。私は」

「大佐を……ルフィを私は斬れなかった」

遮る言葉を紡いだその表情は、苦悩に満ちていた。

「そして貴様もまた、あの二人を足止めできなかった」

それが全てだと、モモンガは語る。

「海兵は私情を挟むべきではない。だからこれが最後だ」

まるで自分自身に言い聞かせるような言葉だった。その言葉に頷き、オリンは空を見上げる。

既に日が落ち始めている。忙しくなる一日だと思っていた。駆けずり回ってくたきたくなって、明日も頑張ろうとそう言って。

そんな、風に。

「あのね、オリン。サプライズがしたいの」

「サプライズ？」

ふと、数日前のことを思い出す。

今日はあくまで前日挨拶だった。短い時間だけの本当に顔見せで、明日のイベントの告知が目的であったのだ。

“うん。挨拶だけっていうのは折角来てくれてる人に申し訳ないなって”

“……歌う気ですか？”

“うん”

“当日の責任者はモモンガ中将ですよ？”

“わかってる”

しかし、折角来てくれたのだから礼をしたいとウタは言ったのだ。

“お願い”

両手を合わせてそう言われてしまつては、どうしようもなかった。

だから部隊全員を巻き込んだ。怒られるなら全員でと。秘密裏に準備して、そして今

日そのサプライズを行うはずで。

そうなる……はずだったのに。

「……二人は、どうなるのでしょうか」

「そこらの海賊とは訳が違う。……あまりいいイメージはできんな」

世界のルール。子供でも知っていること。

——この世界の支配者たる“天竜人”に、逆らつてはならない。

「信じたくはある。だが……」

モモンガはそれ以上の言葉を紡げなかった。オリンは空を見上げたままに思う。

この世界の「神」によって、あの二人は積み上げてきた全てを奪われた。ならば、誰でもいい。何でもいい。

悪魔でも、魔王でも、どんな存在であつてもいい。

(どうか)

あの人たちを。

あの優しい人たちを。

——助けてください。



こちら抱き締めながら肩を掴む強い力を感じながら、ルフィはその作業を行つていった。

「もうちよつとだ」

「……………ッ！」

布を噛むウタが苦痛に表情を歪ませながらも小さく頷く。その太ももに打ち込まれ

た海楼石の弾丸。それをルフィが救急用の道具で取り出そうとしているのだ。

麻酔などという気の利いたものはない。本当に最低限のものしかない以上、傷口にピンセットを突っ込む形になる。傷口を抉るような行為だ。痛くないはずがないのだ。

真剣な表情でその作業を行うルフィ。久遠のように長く感じられた作業の後、ようやくその弾丸を取り出すことができた。

「頑張ったな」

「……うん」

小さく頷くウタ。その彼女の足ヘルフィが包帯を巻いていく。

医療行為は得意ではないが、最低限の手当ての仕方は彼も身につけている。彼自身のためというよりは目の前の彼女のためのものだ。

無駄じゃなかったと思いつつ簡単な手当を終えるルフィ。彼は努めて明るい調子で言葉を紡いだ。

「なあウタ。おれ航海術なんて持ってねえからよ。頼んでもいいか?」

いつも通りの口調であった。その彼を見て、再びウタの瞳から涙が溢れる。

「ごめん」

何度目かもわからない、謝罪の言葉。

今日一日で何度も聞いただろうかと、そんなことを思った。

「ウタ。右手を出してくれ」

俯く彼女に対し、ルフイは自分の手を差し出しながら言う。

おずおずと、ウタが右手を差し出した。その手の小指にルフイは自分の右手の小指を絡ませる。

「約束しただろ」

あの日。誓いを立てた。約束をした。

だから良いのだと、ルフイは言う。

「——ずっと一緒に」

ウタの瞳から、大粒の涙が流れ出す。

それは二人だけの約束だった。

あの夜に誓った、二人だけの。

「だからもう気にすんな」

いつも通りの笑顔を浮かべるルフイ。その胸へと飛び込むようにウタは縋り付く。

「……ッ、う、あ、あああ……！」

何かが決壊したかのように声を上げて泣き始めるウタ。その彼女を優しくルフイは

抱き締める。

安心させるように。

ありとあらゆる全てから彼女を守ると、そう伝えるかのように。

「……………」

だが、抱き締める手とは違ってその表情は険しい。

夜の闇の向こう。姿も見えぬそれを睨みつけるように。

世界そのものを見据えるかのように、彼はその視線を外へと向ける。

覚悟は、ずっと前からあったのだ。

世界を敵に回すことになろうとも。

この手の中の、大切な人を守るのだと。

——世に「英雄」と呼ばれる青年は、ずっとそれだけを決めていたのだ。

二人の「英雄」が堕ちた日。

その絶望のニュースは瞬く間に海を渡り、世界へと伝播する。

世界は荒れるだろう。

人々は嘆くだろう。

いつか、いつかきつと。

この苦しい時代は終わるのだと信じた人々の「希望」は、悪意ですらない「何か」によつて奪われた。

——その「何か」とは、何なのか。

人は自分自身に問いかけることになる。

この世界そのものに、疑問を抱くこととなる。

ただ、わかるのは。

かつて「新時代の英雄」と呼ばれた二人は。

積み上げてきた全てを、たった一日で失うことになった。

後の世において歴史を変えた事件と謳われるその一日は。

悪意ですらない、一つの意思によつて起こつたのだ。

誰も望まなかった世界

かつて「海賊王」と呼ばれた伝説の海賊、ゴールド・ロジャー。

その男が処刑間際に残した言葉により、時代が変わった。

「この世の全てをそこに置いてきた!!」

たったの一言だ。死を前にした男のその言葉によって、時代は変わった。

人はこの時代を、「大海賊時代」と呼ぶ。

夢を追うといえば聞こえはいい。だがその実態は力を持つものが「自由」の名の下にか弱き人々へ暴威を振るう時代だ。

か弱き人々は涙を流し、嘆き、祈り、そして打ちのめされてきた。

いつしか……奪われることに慣れてしまうほどに。

——だが、そこに希望が生まれたのだ。

かつての時代。「海賊王」が始めた「大海賊時代」より前の時代を生き、数多の「伝説」を残した大海賊。その海賊が二十年の時を超えて動き出したのだ。

しかし、その野望は英雄たちによって打ち砕かれた。

人々は歓喜した。この世界にはまだ「正義」があるのだと。

特にその名を高めたのは、世に「新時代の英雄」と呼ばれる二人。

共にこの「大海賊時代」が始まってから生まれた若き英雄たち。一人はその歌声でその戦争を終わらせ、もう一人は一騎討ちの末「伝説」を正面から打倒した。

か弱き人々が夢を奪われるこの時代において。

彼らはその英雄たちに「夢」を見た。

この苦しい時代は終わる。

いつかきつと、あの英雄たちが終わらせてくれるのだと。

——その事件が起こるまで。

本当に、信じていたのだ。



その事件を隠蔽することは不可能だった。

ただでさえ多数の目撃者がいた上にタイミングも最悪だったのだ。その日は次の日に行われる予定であったイベントの前日挨拶があり、多くの記者がシャボンディ諸島に来ていた。それら全てを止めることは不可能だった。

英雄から一転、「神への叛逆者」という大罪人へ。

その衝撃は時間が経つても薄れる気配はない。いや、薄れさせないようにしている者たちがいるというべきか。

「凄い勢いで印刷機が動いてますね」

「そりゃ刷れば刷るほど売れるからな」

激しい音を立てながら動く機械と、そこから吐き出される新聞の仕分け作業を行う男たちの間でそんな会話が交わされている。

世界で最も多くの者たちが手に取る新聞を発行する会社——『世界経済新聞社』。

率いるのは「新聞王」モルガンズ。その圧倒的な情報力故に表と裏を問わず影響力を持つ彼らは常に多忙だ。しかしとある事件以来、それに輪をかけて忙しさが増している。

——当たり前といえば当たり前だ。世界を賑わせる二人の英雄。それがたった一日で世界そのものを敵に回したという衝撃の事実は驚くほどの速度で世界中へと広まった。そしてその事件を知った者たちは皆思うのだ。『詳しい情報を知りたい』と。

ならばそれに応えるのが新聞社の役割である。ここ最近、社長であるモルガンズはかつて見たことがないくらいに上機嫌である。

「でもわかんないんですよ。なんで情報を小分けにするんですか？」

まだ年若い青年が新聞を折り畳みながら言う。既に事件からは数日が経っているのだが、彼ら『世経』の人間と一般の庶民が知っている情報には大きな乖離がある。今彼らがニュース・クーに運ばせるために折り畳んでいる新聞に書かれている情報などはその最たるものだ。

青年はまだここで働くようになってから日が浅い。会社の方針に逆らうつもりもないが、それでも疑問は生まれるのだ。

「ん、どういふことだ？」

その青年の指導役である中年の男が問いかける。彼は記者ではなく技師だ。新人はまず新聞が客へと届くまでの流れを知ることがここでのルールであり、だからこそ青年は指導を受けている。

互いに手を止めることはしていない。ただルーチンワークであるが故に余裕があるのだ。

「読者は多分いち早く情報を知りたいはずですよね？　だったら最初に情報全部一気に出した方がいいんじゃないですか？」

「ああそういうことか。おれは記事のことまではよく知らんが——」

「クワハハハハハハハ！ 中々に面白い話題だ！」

青年の疑問に指導役の男が答えようとするが、その前に上機嫌な笑い声が響き渡った。二人がそちらに視線を向けると、そこにいたのは彼らの雇い主であるモルガンズだ。

「お疲れ様です社長」

「上機嫌ですぬ社長」

新人とベテラン、それぞれが雇い主に対して挨拶を口にする。世界の情報を牛耳るとまで言われる男は上機嫌のまま応じた。

「まだまだ休みはないが頑張ってくれ！ そして上機嫌なものも当たり前だ！ あの『金獅子』の事件から間を置かずこの大事件！ 素晴らしい！」

世間からは『新聞王』と呼ばれるその男——モルガンズは楽しそうだ。そのまま彼はビシツ、と青年の方へと指先を向ける。

「それはそれとして、だ。面白い話をしていたみたいだな！」

「あ、す、すみません。雑談でした」

「謝る必要はない！ 疑問を持つことはジャーナリストの第一歩だ！ 確か最近入ったばかりの新人だったな？」

「は、はい」

頷く青年に対してモルガンズは楽しげな笑みを浮かべている。そのまま彼は丁度いい、と言葉を紡いだ。

「新人研修だ。これから忙しくなるからな。記者は何人いてもいい。——さて、先程の話題についてだが。情報は一気に出した方がいい、と。何故そう思う？」

「え、いやその……小出しにすると先を越されたりとかがあると思つて。前に情報は鮮度が大事つて聞いたので」

「素晴らしい！ よく勉強しているな！ その通り、情報は鮮度が第一だ！ 塩漬けにしたら腐ちまう！」

パチパチと手を叩きながら言うモルガンズ。羽の形をした手で器用なものだとうでもいいことを二人は思つた。

「だが鮮度つてのはイコールで『今すぐ』つてわけじゃあない。食べ物と一緒にだ。賞味期限、消費期限。限界点は決まつてる」

「腐りかけが一番美味いとか言いますね」

「情報の腐りかけは不味いなんてもんじゃねエがな！」

男の言葉に対してクワハハハ、と笑うモルガンズ。そのまま彼は青年へと言葉を紡ぐ。

「では問おうか。今回の一連の事件の情報をおれは三段階に分けて報道した。その区分はわかるな？」

「えつと……第一報が事件そのものの報道ですよ。『麦わらのルフィ』が『天竜人』のチャロス聖を殴ったっていう事実の報道と、あの時点では一応未確定ではありましたがその後に予定されていたイベントの中止についての」

「その通り！　これについては号外として金は取らずに世界中にばら撒いた！　この情報については即効性が大事だったからだ！」

イベントが行われる直前であったということもあり、モルガンズ自身があの時シャボンディ諸島にいた。そのまま彼は号外の新聞の作成を即座に指示し、そしてそれを世界中にばら撒いた。利益や売上という面で見ればこの時点では大赤字であったのだが、この後の新聞でその赤字は一瞬で帳消しになる。

「あの場にはおれたち以外の新聞社も大勢いたからな。どこよりも先に情報を広めることが最優先だった。お陰で世間はこう思ったわけだ。——『情報は世界経済新聞社から出る』とな」

器用に羽の一部を人差し指を立てるように上げるモルガンズ。そのまま彼は言葉を続ける。

「……で重要なのは事実の報道だ。事件の原因については後回しでいい」

「何故ですか？ 理由についてもすぐに新聞を作成したのに」
「前提条件の問題だ」

世界中の情報を操り、活字で人を踊らせると豪語する男は言う。

「重要なのは情報そのもの以外にもう一つある。それは受け手——即ち、*“読者”*だ」
「読者、ですか」

「時に聞くが。新聞を読む時はどうしている？」

問いかけ。それに対し、どうって、と青年は答える。

「隅々まで読みますが……」

「ジャーナリストの鑑だな！ 素晴らしい！ だが覚えておくといい！——新聞の情報
全てを読む読者なんてのは、全体の1割もいやしねエのさ！」



偉大なる航路のとある島。

補給のために立ち寄ったその島で、トラファルガー・ローは新聞によってその情報を

手に入れた。

「見てキャプテン！ これってあいっらだよね!？」

白熊のミンク族であり自身の仲間であるベポが手に持った新聞を掲げながら言う。彼だけではない。他の仲間たちもその情報に驚愕していた。

「……ああ」

ロー自身もまたその情報を前に顎に手を当てて考え込む。

この世界における絶対的な権力者であり、“神”とも呼ばれる存在——“天竜人”。彼らに逆らってはならないというのはこの世界における絶対のルールだ。嫌悪もある、憎悪もある、世界中の多くが彼らの存在には眉を顰めるだろう。

だが、逆らえない。

長き歴史の中、その存在への反逆に成功した者はいないのだ。

(Dは嵐を呼ぶ)

かつて自分を救ってくれた人物の言葉を思い出す。

自分も持つ“D”の意味。“神の天敵”とまで呼ばれる存在の意味を。

「大丈夫かな……?」

「あいっらは敵だぞ」

全く、とローは新聞を折り畳みつつ息を吐く。あの二人の率いる部隊とはローたちは

何度か交戦している。特に「歌姫」は海賊嫌いということもあって容赦がない。

だが「麦わらのルフィ」についてはローは判断しかねる部分があった。なし崩しで彼と共闘のようなことになってしまったこともあったりで、妙な顔見知りのようになっている。

特にペポは「歌姫」のファンでもあるのだ。どうしたって肩入れしてしまうのだろう。

肩を落とす彼に対し、ローは帽子を押さええながら言葉を紡ぐ。

「そう簡単にくたばるような奴らじゃねエ。なんとかするだろう」

あの破天荒な海兵のことを思い出す。無茶苦茶で、自分勝手に、それでいていつも笑顔で。

どこか、そう、どこか。

あの優しい海兵に――

「だが……気になることがある」

その思考を切り捨てるようにローは言葉を紡いだ。ペポが首を傾げる。

「気になること？」

「何故今だ？」

友人というわけではない。敵だ。海賊と海軍。向かい合えば戦うしかない間柄であ

る。

しかし、だからこそ見える部分もある。

あの青年の性質を考えると事件そのものが起こったことには納得できるのだ。あの麦わら帽子の海兵はきつと、「天竜人」という存在に對していい感情は抱かない。

「『金獅子のシキ』の討伐から時間が経ち、あの二人がようやく姿を見せる公式のイベント……それを控えたこの時にどうしてこんなことが起こる?」

海軍にとつて今やあの二人は象徴のような存在だ。先日、「世界徴兵」と称して新たな戦力を募る知らせも出ていた。

——『大海賊時代を終わらせる』。

それがその知らせを載せた新聞に書かれていた言葉である。その旗印となるのは間違はなくあの二人であったはず。

何故、このタイミングで。

「何か理由があるはずだ。……ただ、そうだな」
呟く。

「世界は間違いなく……荒れるだろうな」

望んだのは、誰だったのだろうか。

それこそが——『D』の意志だともいうのだろうか。

終わるかもしれないと思った時代は、
より大きなうねりを纏い世界を覆っていく。



モルガンズの言葉に対し、どういふことですか、と青年が問いを發した。

「難しい言葉はできるだけ使わないようにしてる、つて聞きましたし實際読みやすいですよねうちの新聞。それを読めないつていふのは……」

「ここで言う読めねエつてのはそれとは意味が少し違う。『文章を読む』つて行為と『文字を読む』つて行為には大きな違いがある」

問題だ、と言いながらモルガンズは新聞を手を取った。そうして彼が示したのは一面だ。大きな写真と文字が躍る新聞において一番重要な面である。

「この一面全部を読む読者は全体の何割だと思う？」

「え……みんな読むものなんじゃ」

「三割もいりやいい方だ」

クワハハハ、と笑うモルガンズ。彼は新聞を元に戻すと更に言葉が続ける。

「大抵の読者は一面の一番大きく書かれてる文字だけを讀んでそこで終わるのさ。新聞を隅々まで読むなんてのはまあ趣味の領域だな」

「そう、なんですか？ でもちゃんと読まないと理解なんて」

「理解なんて必要ねエのさ。読者にとって必要なのは納得だ」

モルガンズは笑みを浮かべたままだ。その表情はいつも通りなのだが、青年にはどこか恐ろしく感じた。

「おれたちは書くのが仕事だ。だが同時に読むことも聞くことも仕事であるし、ジャーナリストってのはそうやって集めた情報を理解して飲み込んでその上で文章を書く。その意味がわかるか？」

「……えつと、いえ、すみません」

「では新人研修第一だ。——ジャーナリストは新聞に慣れ過ぎているぞ」
覚えとけ、とモルガンズは言う。

「おれたちは文章を読むことに抵抗はねエ。当たり前だ。活字アレルギーのジャーナリストなんざ存在しねエからな。だが読者ってのは文字を読むことに慣れてねエのが大半だ」

「文字を読むことに慣れていない、ですか」

「その通り。おれたちは集めた情報を全て知った上で新聞に出力する。だが読者は違う。——読者は何も『知らねエ』のさ」

水と一緒だ、とモルガンズは言う。

「植木に水をやるのは当たり前だが、やり過ぎると腐つちまう。情報もそうでな。受け手側が飲み込める以上の情報つてのは何も伝わらねエのさ」

モルガンズは近くにあつた新聞を手取る。それは少し前に出した、今回の事件の経過について——事件の『理由』が書かれたものであつた。

「ここを起こした『麦わらのルフィ』つてのは世間ではヒーローだ。その人柄も広く知られてる。だからこそニュースバリユがあるわけだが……そこで疑問が生まれる。『何故?』とな」

今回の事件における中心人物であるモンキー・D・ルフィの知名度は非常に高い。その破天荒な行動と積み上げてきた功績によつていつも隣にいる『歌姫』と合わせて『新時代の英雄』とまで呼ばれるほどだ。

特にまだ記憶に新しい『金獅子のシキ』との戦いは早くも現代の英雄譚として語られ始めていたくらいだ。『世経』でも連日特集を組み、世界に広く発信した。

「あの旦那は無茶苦茶な男ではあるが一定の常識は弁えてる。まあ秩序側にいるつてんだから当たり前だ。だがその男がよりにもよつて『天竜人』なんて存在に手を出し

たんだ。そこには何か理由があると考えるのが人情だ」

「それで翌日に記事を出したんですね」

「目撃者も大勢いたからな。遅くなると衝撃が薄れる。だが前情報なしにそれを合わせて報道しても受け手側の意識がとっ散らかるだけだ」

「意識が……う？」

「そうだ。『“天竜人”を殴った事実』と『“天竜人”を殴った理由』ってのは地続きではあるがその本質が違う。そうなると受け手側もどちらに重きを置いて受け止めればいいかわからなくなるのさ。前者は間違いなく大犯罪だ。だが後者は——」

そこに書かれているのは、『麦わらのルフィ』が『堕ちた理由』だ。

「——純愛だ。世間つてのはこういう話が大好きだろう？」

その一面には、大きくこう書かれている。

“愛する人を守るため、英雄は神へと反逆した”



その男は、手に持った新聞の記事を見て思わず搔きむしるように頭を抱えた。

「ああ、くそ……！」

世界中に凄まじい衝撃をもたらしたニュースから一日。その青年——「火拳のエース」と呼ばれる海賊は普段の彼からは想像もできないほどに表情を歪め、言葉を紡ぐ。

「そうだなルフィ……！ お前はそういう奴だ……！」

その新聞に載っていたのは、英雄が堕ちた理由。

この世界の「神」へ「新時代の英雄」がその拳を振るつた理由だ。

曰く、「歌姫」に「天竜人」が目をつけた。

曰く、彼女を守るために一切の躊躇もなく「麦わらのルフィ」は拳を振るい。

積み上げ、築き上げてきた全てを二人はその瞬間に投げ捨ててしまったのだと。

「ウタを狙われて……我慢できる訳がねエ……！」

その新聞には多くの目撃者たちから得た情報も載せられている。だがどれも結局は同じだ。

この時代を終わらせる可能性を持つとされた「新時代の英雄」は、民衆の希望であつたはずの英雄たちは。

世界そのものを、敵に回したのだと。

「男が決めたんだ。絶対に曲げるなよルフィ」

あの日、別れ際に告げた言葉を思い出す。

海賊になるという夢よりも、たった一人の幼馴染を選んだ弟。その覚悟を問う言葉であつたのだ。

だが、ルフィは。あの弟は。

——曲げなかった。曲げるはずがなかった。

きつとあの時にはもう覚悟を終えていたのだ。いや、もしかしたら。

エースがああ二人と出会うよりも前から。

モンキー・D・ルフィはその覚悟をしていたのかもしれない。

「……『家族』……」

その出生にあまりにも重い業を背負うエースにとって、その言葉の意味はあまりにも大きい。白ひげ海賊団の一員となって彼らに「家族」と呼ばれるようになってから、余計にその言葉の重みは増した。

だからこそ「黒ひげ」を追うことを決めたのだ。大切な「家族」を殺したあの男を許せなかった。

だが、今。

道を違えようとも、エースにとつては何よりも大切な「家族」が苦境に立っている。

「どうしたらいい」

海兵と海賊。かつては共に生きたこともあれど、その道は大きく違えてしまった。

それでいいと思っていた。いつか向かい合う時があつても、それが敵同士であつても。その果てにこちらが勝とうがあちらが勝とうがその結果には満足できると思っていたのだ。

だが、これは違う。

こんなのは、思い描いていた「未来」じゃない。

——あの二人の掲げた、「新時代」じゃない。

「サボ。……お前ならどうした？」

この世にいないもう一人の「家族」のことを想う。

長男二人と妹と弟がそれぞれ一人。もう一人の長男であつた彼ならば。

「自由になろう!!」

彼の声が、聞こえた気がした。

ああ、と思わず吐息のような声が溢れる。

(……そうだな、サボ。おれは……海賊だ)

この世界で誰よりも「自由」に。それこそがあの日の誓いであり。そしてだからこそ、できることがある。

「おれたちの妹と弟だ。よろしく頼む」

エースしか知らない、サボが残した手紙の言葉。

それは今は亡き「家族」との、最後の約束だ。

「すまねエ」

それは誰に対する言葉であったのか。

海賊は呟くと、決意を宿した瞳で前を見据える。

白ひげ海賊団二番隊長、「火拳のエース」。

世に名を轟かせるその海賊の選択が、世界の運命を大きく変えることになる。



「事件とその原因を分けて報道した理由はわかりました」

モルガンズの言葉に頷きながら青年は言う。要は情報というものは受け取る側にどうしても依存するということだ。

事件が起こった、その原因はこうだという情報の伝え方。

事件が起こった。その原因は実はこうだったのだという情報の伝え方。

どちらの方が優れているかという話ではない。どちらの方が適しているのかという話である。

「通常なら事件と原因を伝えた方がいいですよ。片手落ちだと思われますし。ただ今回はその『事件』の規模と影響が大き過ぎた」

「その通りだ！ 飲み込みがいいな！」

モルガンズが楽しそうに言う。そう、今回は事件そのもののニュース性があまりにも大き過ぎたのだ。普通ならば事件の原因に目が向くところが今回はそこに目が向くこととはなく、その事件という「事実」に釘付けにされてしまう。

「まあ冷静にする時間は必要だった。この情報はあまりにも劇薬過ぎる」

「それで一晩を置いたと」

「隣人と事件が起こったことについて話をするには一晩あればいい。そしてそうすれば必ず原因に思考が向く。そこで記事を出せば食いつくのは当たり前だ」

——「活字のDJ」。

それは「新聞王」とも呼ばれるモルガンズが自称する名であり、彼の信念でもある在り方だ。故に彼はその情報をただ出すということをしなない。彼はその情報を用い、人々を踊らせるのだ。

「そして案の定、英雄たちに対する同情と共感が集まっている。美しい恋物語だ。愛する者を守るために「神」へと反逆し、全てを捨てて逃げ出した。実に——美しい！」

これ以上ないくらいに全身で喜びを表現するモルガンズ。なんとなくであるが、青年はこの「新聞王」のことがわかってきた。

楽しいのだ。本当に。

おそらく、ただそれだけが彼の根本だ。

「だがそれも今日でひっくり返る。同情と共感、そして胸の内に秘めた賞賛。その全てが反転するだろう。——「英雄」が「大犯罪者」となったように」

モルガンズが示すのは今日発行される新聞だ。その一面には衝撃の情報が書かれている。

だが、と青年は思った。そう簡単にいくのだろうか。

「その情報は衝撃ですけど……でも、そう簡単に掌を返すようなことをするでしょうか？ その出生がどうであれ、あの二人は確かに『英雄』ですし」

「全員とはいかぬエ。だがそれでいい。全ての人間が同じ考えなんてつまらぬエ。……何なら一番掌を返さぬエのは海軍だろう。あの二人を直接知っている人間はこの情報で今更見方を変えるようなことはしぬエだろうさ」

「なら、そこまで大きな混乱は起きないのでは？」

「あの二人は今や世界で一番有名と言つてもいい。では問おうか。——世界で一番有名な人間を、世間は何で知つた？」

青年は思わずハツとなつた。そうだ、とモルガンズは笑う。

「新聞であり伝聞であり噂だ！ この世界で誰もがあの『英雄』たちを知っている！ 希望を抱いた！ 夢を見た！ 救世主だと!!」

いつかこの苦しい時代を終わらせてくれる英雄。

自分達を助けてくれるヒーロー。

いつしかその存在は直接見たことのない者さえも惹きつけていたのだ。

「だがその真実が暴かれた！ その出生の秘密が！ 生まれながらの業が白日の下に晒された！ その時民衆は何を思う!! 決まってる！」

勝手に期待をした。

勝手に希望を抱いた。
身勝手に——夢を見た。

「——失望するのさ!!」

期待が大きいからこそ。

信じていたからこそ。

その抱いた感情が大きいほどに、反転した感情もまた大きくなる。

「このニュースを聞いた民衆はこう思うだろう! 『所詮犯罪者の子は犯罪者か』と!

見事な掌返しだ! だが民衆なんてそんなもんさ! だからこそ踊ってくれる!」

モルガンズの手の新新聞が揺れる。そこに書かれているのは、「英雄」たちの抱える背景。

その、出生の秘密。

新聞の一面の見出しにはこう書かれている。

「海軍が隠し続けた英雄の秘密!!」

世に「世界最悪の犯罪者」と呼ばれる革命家、ドラゴン。

世に「四皇」と呼ばれる大海賊の一角、「赤髪のシャンクス」。

共に世間からは恐れられる存在であるその二人はしかし、その日を生きる市民たちからすると縁遠い存在だ。あまりにも強大過ぎる「悪」を人は想像できない。

だがこの日世界へと伝えられたニュースにより、その認識は改められることになる。

海軍本部大佐、*「麦わらのルフィ」*はドラゴンの息子であり。

海軍本部准将、*「海軍の歌姫」*ウタはシャンクスの娘であった。

この新聞は、それを世界に伝えるものだ。

「クワハハハ！ 面白エなこの世界は!!」

この世界を変えてくれるだろうと信じた英雄は堕ちてしまった。

ならばこの世界は、人は。

——一体何を、信じればいいのか。



「——お頭。出航の準備はできたぞ」

とある*「新世界」*の島。そこに彼らはいた。

世界に名を轟かせる「四皇」が一角、「赤髪のシャンクス」が率いる赤髪海賊団は一人の男の言葉を待っている。

「ああ」

大海賊、「赤髪のシャンクス」が頷きを返す。

普段の彼は「四皇」としてのカリスマと威厳を持ちながらも陽気で親しみ易い雰囲気宿している。故にこそ新入りも彼に対しては尊敬の念を抱きつつも必要以上に怖がることはない。

だが今の彼は違う。

「野郎共」

たった一言。それだけで気の弱い者であれば意識を失いかねないほどの「覇気」。まだ「四皇」に数えられる前から彼を知る古参の者たちでさえも気を抜けば倒れてしまいそうだ。

「——出航だ」

シャンクスの言葉に、応じる声上がる。

だがそれは張り詰めたような重さを纏う声だった。

笑顔の者など誰もいない。誰もが厳しい表情のままだ。

そんな彼らの中央を歩く男もまた、何かを覚悟したような表情を浮かべている。

後日、一つのニュースが世界を巡る。

——“四皇”が一角、“赤髪のシャンクス”が動く。

そのニュースがもたらす意味は大きい。それは即ち、先日の報道が事実であるということを示すものであるからだ。

そして強大な力が動くなら、それは周囲に影響を及ぼさずにはいられない。

大海賊時代は未だに終わらず。

世界は更なる混迷へと落ちていく。

その中心にいる二人は。

寄り添うようにして、逃げ続けている。

“逃亡海兵”

世界を敵に回す、ということ

覚悟はしていた。

この世界のルールそのものに牙を剥いたのだ。追われるのは当たり前のことであるし、それに文句を言うつもりもない。

それこそが定められていた“法”であり。

破ってしまった自分達はもう、“無法者”になっってしまったのだから。

「……ごめん」

彼にとつての幼馴染の言葉。俯く彼女の頭を優しく撫でる。

「もう謝るなよ」

このやりとりは何度目だろうか、そんなことを青年——ルフィは思う。

「ウタは何も悪くねえだろ。殴ったのはおれだ」

その言葉に、違う、とウタは言う。

何度も、何度も。

「私は、また。また、ルフィの未来を——」

「何度だって言うぞ」

その体を抱き寄せ、それ以上の言葉を口にさせないようにする。すつぽりとルフィの腕の中に収まるウタ。その体が小さく震えた。

「……ずっと一緒だ」

何かを噛み締めるような音が響き。

そして、押し殺すような嗚咽が聞こえてきた。

優しく、その体をルフィは抱き締め続ける。

……彼女の涙が、止まるまで。

実を言うと、この時は楽観的に思っていた。

なんとかなる。

二人で一緒ならなんとでもなると……そんな風に。

——けれど。

その考えの甘さをすぐに後悔することになる。

自分達は本当に世界を敵に回したのだと。

そう、理解することになってしまったのだ。



「私はあなたたちの味方です」

訪れた島で出会った人はそう告げてきた。穏やかな雰囲気を纏う女性であり、その夫であるという恰幅のいい男性も彼女のその言葉に頷いていた。

今から思えば無防備であったし軽率だったと思う。しかしどうしようもなかったのも確かだ。

ルフィが「天竜人」を殴ったあの日から二人はずっと船を前へと進ませ続けた。途中でいくつかの島には立ち寄ったがそこでは人のいる場所には近付かないようにし、目に隠れて食料の補給を済ませるとすぐに出港することを繰り返してきたのだ。

とにかくシャボンディ諸島から離れなければならぬというのが共通認識であった。だからこそ今日までまともに気の休まることもないままここまで来たのだ。しかしどうしても必要なものはある。だから一か八かで人のいる場所に来たのだが――

「ここは宿でもあります。とにかく体を休ませてください」

こちらを気遣うように言うその女性の言葉に二人で小さく頷く。

どうしようもなく疲れていたし、張り詰めていたものが解けていくような感覚を覚えた。そして案内されるままにその夫婦が経営しているという小さな宿の一番奥の部屋に通される。

「……………」

二人とも、無言だった。

壁に背を預け、寄り添うようにして座り込む。

「……………ルフィ」

「……………ウタ」

互いの存在を確かめるように、小さく互いの名前を呼ぶ。お互いの名前を呼ぶことが、その存在の証明だった。

落ちていく暇。その最中で思う。

これからどうしたらいいのだろう。

この先はどうなっていくのだろう。

未来への漠然とした不安。考えないようにしていたことだが、落ち着けるようになったためにどうしても考えてしまう。

「いめん」

彼女のその言葉は何度目だろうか。その言葉に対し、ルフィの答えは決まっている。「気にすんな。……なんとかなる」

その体を抱き寄せるようにしながらルフィは言う。

かつては先の見えない未来に憧れていた。無法者である“海賊”になり、この世界を冒険するのだと。そんな風に思っていたのだ。

しかし今のルフィにはかつてのような憧れはない。あるのは漠然とした不安だけ。だがそれでも言うしかないのだ。

——なんとかなる、と。

「……少し寝よう、ウタ」

「……うん」

ゆっくりと、瞼が落ちていく。

ズキリと、頭に鈍い痛みが走った。

——目が覚めたのは、その気配を感じ取ったからだ。

どれぐらい眠っていたのか。数時間くらいだろうか。ルフィは思う。ゆっくりと目

を開けた彼の服の裾をウタが握った。彼女もこの気配を感じ取ったのだろう。

「ウタ」

「……うん」

それだけでお互いの言いたいことが伝わった。ルフィは立ち上がり、窓の外へと視線を向ける。

感じるのはいくつもの気配。息を殺しているが、彼の「見聞色の覇気」はそれをしっかりと捉えていた。

統率の取れた動きだ。この建物を取り囲む気配はセオリーに従った動きをしている。それはつまり、海賊や賞金稼ぎといった集団とは違う存在であるということだ。

そうなれば答えは一つしかない。——海軍だ。

偶然ではないだろう。誰かが呼んだのだ。そしてその誰かがわからないほどに二人はものを知らないわけではない。

最初からか、或いは途中からか。いずれにせよこの状況が全てを物語っている。

「……ウタ。掴まってる」

その判断をしてみれば後は早い。ルフィはウタを抱き上げ、ウタはそんなルフィの首へと腕を回してしがみつくように体を密着させる。

出来るだけ音を立てないようにしつつ廊下へと向かう。周囲の気配は数が多いが建

物内にはまだ入ってきていない。そしてその強さにもばらつきがある。一つだけ一際強い気配を感じる方向とは逆方向へとルフィは歩いていく。

意図的にそうしているのだろう。周囲の気配からは声が聞こえず、微かな移動音が聞こえるだけだ。おそらくやり取りは全てハンドサインで行っているのだろう。ルフィもウタもその手の訓練は受けているからよくわかる。

「……………ッ」

ウタがルフィの服を掴む力が強くなった。もしかしたら、と少しだけ期待していたのだ。

周囲にいるのは海軍ではなくて。

何か。そう、別の何かだと。

だが二人の経験と記憶がそれを否定する。この統率の取れた動きには覚えがあるのだ。これは建物内に立て籠った犯罪者に対しての動きであり、そして今この建物内にいるのは自分達だけなのだから。

強い気配がある方向とは逆方向。その先にあるのは夜の森だ。

「離すなよ」

腕の中でウタが小さく頷く。それを合図に、ルフィは眼前の扉を蹴り抜いた。

本来なら誰もが寝静まる夜に似つかわしくない音が響き渡る。同時、幾つもの光が一

齊に周囲を照らした。

「いたぞー！」

聞こえた声の方へとルフィは視線を向ける。そこにいたのは。

「……くそ」

思わず、小さな声が漏れた。

見慣れた制服を纏う大勢の海兵たち。そちらがこちらへと視線を向けていた。かつて、ルフィとウタは彼らを背負うようにして戦っていた。

しかし、今は。

その背を追い立てるように、彼らはこちらへ銃を向ける。

——それが現実なのだ、そこでようやく思い知った。



響き渡る鈍い音を聞き、その海兵——ヴェルゴはそちらへと視線を向けた。指揮を執る自分とは真逆の場所から出てきたのだろう。彼の中では想定範囲内だ。

「出てきたー！」

「追えー！」

「見失うなよー！」

つい先程までは声を殺し、足音さえも消すようにしていた海兵たちが次々と声を上げる。その声色は葛藤のようなものが滲んでいた。おそらくだが、声に出さないと彼らは動くことさえできないのだろう。だから必要以上の声を出し、自分がすべき行動を確認するように叫んでいるのだ。

仕方がないとヴェルゴは思う。海兵というのは大なり小なり正義感が強い人間ばかりである。どうしたって納得できないこの任務、進んで志願した自分を含む数名を除けば迷いが生じるのは当然なのだ。

(たった二人に海軍がこうも振り回されているとは)

海軍とは世界政府が持つ最大の戦力だ。その力の根柢は圧倒的な『数』によるものである。世界中の海から人を集め、世界中の海の治安を守る。この『大海賊時代』においては時に多くの非難を浴びる海軍であるが、それでも一定の秩序を保っているのは海軍の存在故であることも確かだ。

故に本来なら海兵二名が問題を起こしたくらいで揺らぐような組織ではないはずなのだ。実際海軍を抜けて海賊になった例もあるし、それなりに大きな不祥事が起こった

としても海軍という組織そのものが大きく揺らぐようなことはなかった。

しかし、今回の二人はあまりにもその影響力が大き過ぎる。

たつた二人の海兵が、民衆にとつての海軍という「正義」の「象徴」となってしまうていたほどに。

（世界政府さえも動揺している状況だ。致し方ないのだろうか……）

事件だけならば混乱で済んだだろう。だがその後、世界中にばら撒かれた情報が厄介だった。あの二人がどれほどの功績を挙げようと『大犯罪者の子供』という事実には悪感を示す者は一定数いる。そしてそれを否定する者もだ。

このように二つの対立する意見が出る状況というのは実に厄介である。それはいつしか同意見を持つ者同士で集団を作り、そして派閥となっていく。そして異なる意見を持つ派閥同士ではどうしても争うようになるのだ。

今の所海軍内では二人を否定する者は少ない。しかし民衆は既に割れ始めているという。そうなるとその影響は世界政府に及び、そして海軍にも及ぶことになるだろう。更にはこの状況を好機と見たか動き出した勢力もあるのだ。たつた二人が起点となった事件が随分と大事になったものである。

「通報してやったんだ！ 報奨金を寄越しな！」

思考の海に沈みかけていたヴェルゴをその声が引き上げた。見れば、あの二人がこの場所にいることを通報してきた夫妻が近くの海兵に対して声を荒げている。

その光景を見咎めたヴェルゴはその夫妻の下へと歩み寄ると声をかけた。

「失礼。今回の協力者の方でしょうか」

「ええ。通報するだけでも報奨金を出すって聞いたもの」

女性の方が当然のようにそう言った。その側では男性の方も腕組みをして頷いている。夫婦に詰め寄られていた海兵はそんな夫婦の姿を見て苦虫を噛み潰したような表情をしていた。

現役 of 海兵が「天竜人」を暴行するという大事件。その首謀者が逃げたという事実を受け、世界政府はあの二人を指名手配するという判断を下した。前代未聞とも言えるこの事件は既に世界中に伝わっており、何かしらの判断を下さないわけにはいかなかったのだ。

「無論です。しかし少し手続きが必要でして。……すまないが、このお二人の手続きを」
「はっ。——どうぞこちらへ」

近くにいた別の海兵へと声をかけると、その海兵がその夫婦をこの場から別の場所へ誘導し始める。とりあえずこれでこの場は治まった。

「……気に入らないか？」

その夫婦の姿が遠くなったところで最初に詰め寄られていた海兵へとヴェルゴが声をかけた。その海兵は慌てた様子でいえ、と首を振る。

「申し訳ありません」

「謝ることじゃない。……この任務が辛いなら外れてもいい。強制はしない」

「そんな。……いえ、大丈夫です」

首を振る海兵。構わんさ、とその海兵へとヴェルゴは告げた。

「この任務に乗り気な海兵などいないだろう。相手が相手なんだ。……おれ自身も乗り気にはなれん」

「そうなんですか？　しかし中将殿はその、志願されたと」

「そうだな」

海兵に対して頷きを返す。彼の言う通りである。ヴェルゴはこの任務——二人の追撃という任務に自ら志願したのだ。

その理由は様々だ。だがこの場でこの海兵を納得させるには一言でいい。

「誰かがやらなければならぬ。理由はそれだけだ」

言い切ると、ヴェルゴは指示を出す、と言葉を紡いだ。

「当初の予定通り五人ずつで編成を組んで搜索を。夜の森だ。大型の獣はいないという

話だが十分気をつけるように」

「は………はっ！ 了解しました！」

慌てた様子で海兵が動き出す。それを見送りヴェルゴもまた歩き出した。

目指す先は夜の森だ。結局のところあの二人と正面から相対できる海兵はこの場においてヴェルゴしかない。数で押せば削れはするだろうがそれは下策だ。

「……………」

森へと分け入る最中、ヴェルゴの視界にそれが映る。

それは町外れにある廃棄物の集積所であった。そこにはいくつものゴミが固めて集められていたが、その中に見覚えのあるものを見つける。

——麦わら帽子と、ヘッドフォン。

かつてヒーローの象徴であったはずのものが、無数に打ち捨てられていた。



一際強い気配が迫ってきていることをルフィは感じていた。

振り返ればみえるいくつもの光。あれは海兵たちがこちらを追ってきている姿だろう。だが彼らについてはあくまで一海兵だ。数名強い気配を纏った海兵はいるが、それでもルフィからすれば確実に倒せる相手。

だが一つ。光源を持たずに真つ直ぐにこちらへと向かってきている気配がある。

「……強エな」

ルフィは思わず呟く。他の海兵たちが文字通り少しずつ周辺を探しているのに対し、その気配だけが真つ直ぐにこちらを指して迫ってきている。おそらくは「見聞色の覇気」によるものだろう。

逃げ切ることは難しいかもしれないとルフィは思った。一直線に船を隠した場所へと向かっているが、相手の速度とこちらの速度を考えた場合船の準備をする間に追いつかれてしまいそうなのだ。

だが現状で打てる手はない。とにかく逃げるしかないのだ。

森の中、道なき道をウタを抱えながらルフィは行く。幼少期に放り込まれたジャングルに比べたら随分と走り易い森だ。あの経験がこんな形で役に立つとは。

何うように時々背後を振り返りつつ前へと進む。海兵たちの明かりは相変わらず遠いが、件の強い気配だけは変わらず追ってきている。

「抜けたぞ」

「——うん」

森を抜け、海岸に出た。ルフィはウタを降ろし、二人で視線の先にある小舟とその向こうの海を見る。

偉大なる航路を渡るにはあまりにも頼りない小舟。闇に閉ざされ、一寸先も見えない海。

それはまるで、自分たちの未来そのものであるかのようである。

「……行こう」

ふと、どちらかが呟いた。そうだ、行かなければ。

それが選んだ選択なのだから。

しかし。

「——この海を渡るには、あまりにも頼りない船だ」

響いたのは二人以外の声だった。弾かれたように振り返ると、そこには一人の海兵がいた。

サングラスで目を隠した精悍な顔つきの男だ。ルフィはウタを庇うようにして前に出る。だが男は構えを取らないままだ。

二人は表情に出さないままに困惑する。強い気配を感じる相手だ。しかし敵意を感じない。まるで立ち話でもするかのような雰囲気。その男はそこに立っているのだ。

「おれはヴェルゴという。階級は中将だ」

「……………」

聞き覚えのない名前だ、とルフィは思った。海軍本部の中将ともなればルフィは大体の相手と面識がある。名前はともかく誰であるかはわかると思うのだが。

しかしルフィとは違い、ウタの方には心当たりがあつたらしい。まさか、と声を上げる。

「『新世界』の海軍基地の……………」

「知っただけでもらえて光栄だ」

ヴェルゴが頷く。誰だ、とルフィが問いかけるとウタが応じた。

「海軍本部はシャボンディ諸島の近くにあるけど、海賊は『新世界』にもいるでしょ。だから『新世界』の方にはいくつかの基地がある。…………ヴェルゴ中将は『新世界』の海軍基地の一つを預かる基地長よ」

言い切ると、確認するようにウタがヴェルゴに視線を向けた。ヴェルゴが肯定の頷きを返す。

「キミたちの活躍については聞いていた。一度会ってみたいと思っていたが…………こんな

形になるとは」

残念だ、と首を振るヴェルゴ。そんな彼にウタが問いかける。

「『新世界』の基地長が……どうしてここに」

「自ら志願した。理由は……まあ、そうだな。本部の彼らにこの任務はあまりにも酷だろう。——見るといい」

言うのと、ヴェルゴが懐から何かを取り出した。思わず身構えるルフィだが、その眼前に落ちたものを見て眉を顰める。

それは新聞だった。ルフィは警戒を込めた視線をヴェルゴに向けたままだ。故にウタがその新聞を拾い上げる。

——そしてその一面を見た瞬間、その目が見開かれた。

「これって……!」

「本当に残念だ」

驚愕の声を漏らすウタに対し、ヴェルゴは言う。ルフィは構えを崩さないままウタに声をかける。

「何が書いてあるんだ?」

「……指名、手配って……」

誰を、などとは聞く必要はなかった。そうだ、とヴェルゴが告げる。

「——“天竜人”への暴行事件。それを世界政府は“神への反逆”と認定した」



わかつていたことではあった。そうなるのだろうかとうと理解もしていた。だが、どこか。心のどこかで。

——もしかしたら。

もしかしたらそうならないかもしれないという期待もあったのも……確かだ。

「“革命軍”がその筆頭ではあるが……“天竜人”へ危害を加えた、或いは加えようとした犯罪者の例はそれなりにある。だが現役の海兵、それも大佐の地位にある者がそれをやったというのは前例にない出来事だ」

肩を竦めるヴェルゴ。彼は淡々と言葉を続ける。

「“天竜人”とは世界政府が定めた絶対的な存在。それに反逆するということは世界政府そのものへの反逆と同義だ。……その理由がどんなものであろうと」

その言葉で理解した。……理解を、させられた。

かつて自分たちが所属していた組織はもう、敵になったのだと。なつて、しまったのだと。

「正直気は進まない。基地の部下たちがファンでね。……だが、先程言ったように誰かがやらなければならぬ役目だ」

さて、と切り替えるようにヴェルゴが構えを取った。ルフィと同じ徒手空拳の構えだ。

「一応言っておこう。——降伏を」

「無理だ」

それは互いにとってわかりきっていた問答だった。しかし、必要なこともある。

残念だ、ともう一度ヴェルゴが首を振った。そして互いの視線が交錯し。

——ルフィが一度、大きく深呼吸をした。

直後。

「ギア、2」

先手を打ったのはルフィだった。常人では目で追うことさえも困難な速度でヴェルゴに迫る。

鈍く、そして重い音が響いた。

二つの拳が激突し、二人はその衝撃で互いに地面を削りながら後退する。

「流石だ」

次に動いたのはヴェルゴだった。『剃』により一瞬でルフィとの距離を詰め、その拳——否、『指銃』を放つ。

通常であればゴムの体である『指銃』はルフィには通用しない。だがヴェルゴは海軍本部長の地位にいる海兵だ。『武装色の覇気』は当然のように習得しているし、その圧力はルフィの目から見ても危険なものだった。

「む」

故にルフィは受けるのではなく避けるのを選択。それも左右や上ではなく、身を低くすることによって避けた。

ルフィの頭上を掠めるようにしてヴェルゴの『指銃』が通り抜けた。風を裂くような音が響く中、ルフィは眼前の腹部に向かって全力で拳を叩き込む。

硬い感触。反射的に『鉄塊』によってガードしたのだろう。だがルフィはそのまま止まることなく拳を振り抜いた。

轟音と共に、ヴェルゴの体が森へと叩き込まれた。ルフィは一度自分の拳を見つめると、何かを確認するように一度開き、もう一度握り締める。

「——逃げよう」

それはかつて、『天竜人』を殴り飛ばすという大事件を引き起こした時と同じ言葉で

あった。

ウタが小さく頷く。そのままルフィはヴェルゴが吹き飛んだ方向に背を向けると船に乗り込んだ。

帆を張り、夜の闇の中へとその小さな船は漕ぎ出していく。

その最中で思うのは、あの日モモンガに言われた言葉だ。

“我儘を言うな”

……ああ、本当にそうだ。

おっちゃんのこと……言う通りだった。

“嫌なことなど、この先いくらでもあるんだ”

覚悟はしていた。していたつもりだった。

ルフィはあのヴェルゴという人物を知らない。だがいつかは知っていたのかもしれないのだ。そして肩を並べて戦っていたのかもしれない。

「……………」

だが、そんな未来はもう訪れない。

海軍という組織は二人にとつての敵となり。

——二人の呼び名は“犯罪者”であり“賞金首”となってしまったのだから。



ゆつくりとヴェルゴはその身を起こした。その動きには僅かの乱れもなく、服の埃を払い始める。

ついうっかり寝てしまった——誰にするわけでもない言い訳を口にする。その彼の耳にいくつもの足音が届いた。

「中将殿！」

「すまない。取り逃した」

先頭に立っていた海兵の言葉に対してそう応じる。そのままヴェルゴは指示を出した。

「軍艦を回して追跡の準備を」

「はっ！ 急げ！ 搜索中の海兵たちにも指示を出せ！」

今回の任務においてヴェルゴの副官の立場にいる海兵が応じると、バタバタと他の海兵たちも動き出す。それを見送る中、中将殿、と副官が言葉を紡いだ。

「お身体の方は」

「問題ない。少し油断した。……流石にそう簡単な相手ではないな」

「それは……そう、でしょう」

言い難そうにしながら頷く副官。その言葉の裏にあるものを感じ取り、ヴェルゴは言葉が続ける。

「君も志願したと聞いているが……どうしてだ？」

「どうして、とは」

「この任務ははつきり言つて貧乏くじだ。世間の意見が割れているとはいえそれも冷静になればある程度は落ち着く。よりにもよつて世界でも指折りの犯罪者である二人の子供であつたという事実が混乱させているだけだ」

更に言えば、それが公になつていない隠されていた真実であつた点も大きいのだろうとヴェルゴは思う。だが難しい問題でもあるのだ。実績がないうちにその事実が公になればどうしても色眼鏡で見られるし、その出生を利用しようとする者は必ず現れるだろう。

実際、ルフィの方は『ガープの孫』という事実のせいで当初は彼個人としての人格と実力に目が向き難い状態になつていたという。それを全て覆ってきたからこそその「新時代の英雄」なのだろうが。

「事件単体で言えば潜在的には同情心を持つ者の方が圧倒的に多いだろう。彼の行動が

間違っていたのかと言えば間違っていたと言える。その行動はルールに反することだからだ。しかし人はルールにおける審判だけで納得はしないものでね」

厄介な話だ、とヴェルゴは言う。理性と論理だけで人間は生きていけない。どうしたって“感情”を無視することはできないのだ。

「後輩が……あの二人の部隊に所属してしまして」

「……後輩が、か」

「はい。入隊の年齢下限ギリギリの時に入って来た奴で。見習いの時は自分が指導役でした。正式に海兵になってからすぐにあの二人の部隊に異動になって。毎回傷だらけになりながらあの二人の下で戦っていたんです。でも楽しそうで。毎日……楽しそうでした」

何かを堪えるような声だった。ヴェルゴが頷きを返す。

「見てられないんです。最初志願兵がいらないならあの部隊の人間を追撃部隊にするなんて話もあつたんでしょう？ 責任を取らせるなんて言つて。そんなのあんまりだ」

「だから志願したのか」

「はい。……中将殿は」

「似たようなものだ。……おれはあの二人と接点がほとんどない。“金獅子のシキ”との戦いではおれも戦場に立っていたが、決着後にあの二人が目覚ます前に戻らざるを

得なかつた」

だからあの二人を直接知らない、とヴェルゴは言う。

「見知った相手ではどうしても情が湧くだろう。そういう海兵がこの任務に就いても状況の悪化にしかない」

「だから志願されたと」

「誰かがやらなければならぬ話だ。そうだろうか？」

苦笑するヴェルゴ。そんな彼に対し、副官は帽子を被り直しながら言う。

「こんなことを言うとな怒られるかもしれませんが……私はあの二人を尊敬してました。いつかこの『大海賊時代』を終わらせてくれるのだと。そんな……ことを」

「怒るようなことではない。多くの海兵が君と同じ想いを抱いていたはずだ」

「ツ、何故、こんな」

そこで副官は言葉を切った。そんな彼に対してヴェルゴは言葉を紡ぐ。

「その答えを口にできないのが海軍だ」

その言葉を受け、副官が小さく唸るような声を漏らした。ヴェルゴはその姿を一瞥すると、夜の海へと視線を向ける。

（これで自分たちの置かれた状況は理解したはずだ。これからどうする？）

荒れ狂う時代、その中心にいる二人へと。

自らこの任務へと志願したもう一つの理由を思い浮かべながらヴェルゴは思う。

（お前たちの動き次第で我々も立ち回りを考えなければならぬ。……そう簡単に潰れて貰っては困るところだが）

戦闘能力という点については問題ないとヴェルゴは思っている。あの「金獅子のシキ」との戦いを彼は戦場の最前線で見っていたのだ。あの力を上回れる猛者はそういない。

だがその環境が問題だ。あの二人はここから先、孤立した状態でこの偉大なる航路で逃避行を続けることになる。

その先に見出すのが何であるのか。或いは何も見出せずに潰れてしまうのか。今はまだ……誰も知らないことであつた。



ヴェルゴによつて渡された新聞に書かれていた情報は、二人の予想よりも大きなものであつた。

一面には先程見た情報が載せられている。世界政府が二人を指名手配し、賞金首としたという情報だ。罪状は「天竜人への反逆」。派手な見出しの下にある文章には世界政府が二人を賞金首とした理由が淡々と書かれていた。

——曰く、「この世界で最も貴き存在への反逆」。

——曰く、「捕らえようとした海兵への暴行」。

——曰く……

物は言いようであるし、あの「天竜人」がウタに対して行つた行為については一切が書かれていない。それが世界政府にとつての『公式見解』ということであろう。

「……ッ、こんな、なんで」

呻くような声が漏れる。

そこに書かれていた文章は二人を徹底的に「犯罪者」として扱うものであった。そこには敬意もなければ情もない。ただただこの世界における絶対的なルールを破つた二人を責め立てるような言葉が並んでいる。

——どうして。

私たちがやってきたことは……何だつたんだ。

その言葉は声にならなかつた。溢れ出る涙をウタは拭う。成し遂げてきたこと、積み上げてきたこと、ルフイと共に歩んできたこと。多くの海軍の仲間たちと共にあつたこ

と。その全てがウタにとってには誇りだった。人生だった。全てだった。なのにな、こんな。

そんなものは——二人で歩んできた道には、積み上げた全てには何の価値もなかったかのような。

「……何か落ちたぞ」

新聞の間から落ちた紙を対面に座っていたルフィが拾い上げる。その一枚の紙に視線をやると、ルフィの眉間に皺が寄った。

「手配書だ」

こちらが問う前にルフィが言った。彼はそのままその一枚の紙を足元に置く。

手配書が出ているというその事実に対しては衝撃はなかった。世界政府の発表としてこうも徹底的にこちらを否定したのだ。ないほうがおかしいくらいである。

新興の海賊や無法者が名を挙げる時は大体こういう形で手配書が出る。如何にその存在が「悪」であるかを徹底的に糾弾するのだ。そうすることによってその存在が「悪」であると民衆へと教え込むのである。

だがまさか、それを自分たちで体験することになるとは。

(ああ、そっか)

もしかしたら、という希望をウタは心のどこかで持っていた。理性では無理だとわ

かっけていても、それでもあの日々を信じたかったのだ。

大切な人の隣でずっと笑っていた日々。

頼りになる仲間や友人たちと共に過ごす日々。

背中を預け合い、助け合い、そうやって「信頼」を築いてきた日々を。

「ありがとう」

その声は誰の言葉であつたのだろうか。

いつかの記憶。いつもの記憶。その言葉を無数にウタは貰ってきた。

——当たり前。

笑顔と共にそう返すのが、彼と私にとっての——

「大丈夫か？」

「……うん、平気。大丈夫。大丈夫だから……」

俯いている自分の肩に触れるルフイに対し、ウタはそう言葉を返す。

心が軋んでいた。悲鳴を上げていた。今すぐに叫び出したかった。何もかもを放り

出してしまいたい気持ちだった。

(耐えろ)

でも、駄目だ。

目の前の人を——世界で一番大切な人を巻き込んだのは私だ。それが勝手に折れて

はいけない。泣き言なんて言っではいけない。

耐えるのだ。堪えるのだ。大丈夫、まだ大丈夫だ。だから。

「少しでも今は情報が欲しいから。だから」

——そこで新聞をめくってしまつたことは。

きつと、避けられないことだつたのだろう。

「……嘘……」

呆然とした声が自分のものであることを、ウタは最初自覚できなかった。

そこに書かれていた見出し。それを見てルフィも息を呑んだ気配が伝わる。

——「堕ちた英雄の秘密!! この結末は必然であつたのか!?!」。

読者を煽るようなその見出しの下に書かれていたのは、二人の出生の秘密。

ウタの父親が「赤髪のシャンクス」であるということと。

ルフィの父親が「世界最悪の犯罪者」ドラゴンであるということ。

その生まれからしてあまりにも深い業を背負う二人がこうなつたのは必然であるというふうな記事で。

それはウタにとつては、何よりも許せないことで。

——何かが、折れる音がした。

「シャンクスは関係ない!!」

絶叫のような声が響いた。視界が滲む。思わず頭を抱えてしまった。

これは駄目だ。これだけは認められない。

「何で!?! どうして!?! 私を置いて行つたくせに!! 振り返りもしなかつたくせに!! 忘れたいのに!! 忘れたかったのに!! もう関係なんてないのに!!」

——力強い腕が、ウタを包んだ。

ルフィがウタを抱き寄せたのだ。

「——」

何も言わずにこちらを胸の内へと抱き締めるルフィ。その服を涙で濡らしながら、縫り付くようにウタは絶叫する。

「どうして苦しめるの!?! シャンクスの娘!?! あいつは私を捨てたのに!! どうしてこんなところまで追ってくるの!?! ずっと!! ずっと……必死に、私、ずっと……!! どうしてっ……!!」

あの事件が起きなければ予定されていたイベント。その後はこの事実が公表されることは決まっていた。だがそれはウタにとっては「決別」の意味があったのだ。

もうウタにとって「赤髪のシャンクス」も「赤髪海賊団」もただの敵であるのだと。「正義」を背負うウタにはもう、あの人たちは関係ないのだと。そんな風に割り切るために。

かつての、「赤髪海賊団の音楽家」を過去のものにするために。だから。だから公表することも受け入れたのに。

なのに、これでは――

「大丈夫だ」

「何が……大丈夫なの？」

ルフィの言葉に、彼を見上げるようにして顔を上げる。涙で滲んだ視界では、彼の表情はわからなかった。

「ルフィだって……顔を見たこともないような。そんな人の息子だって理由だけで。それだけでこんな風に書かれてるのに」

「……前にも言ったけどな」

優しく彼はこちらの涙を拭ってくれた。トレードマークの麦わら帽子をこちらに預けるように被せながら、彼は言葉が続ける。

「父ちゃんは会った記憶もねエから別にいいんだよ。忘れてたくらいだ。……ウタはよ、シャンクスと一緒にいた時間も長いからな。でも大丈夫だ」

その人は笑顔だった。無理をした笑顔なのはすぐにわかる。それだけの長い時間を共にいたのだ。

……けれど、甘えてしまった。

「なんとかなる」

その優しさに縋ってしまおうしかないほどに。

嫌なことから目を背けるしかないほどに。

「……いや、違うな」

もう、心が折れていた。

「おれが——なんとかするから」

全てを吐き出すような叫びが、夜の海に響き渡る。

……きつとこの日、“歌姫”は一度死んだのだ。

積み上げてきたもの。築き上げてきたもの。今までの人生。その全てを否定されたような気持ちになってしまった。

何もかもを、失ってしまつて。

立ち上がるための“何か”が、見つからなくなった。

「……ルフィ……」

もう、この人しか残っていない。

私にはもう、ルフィしか。

——唇に、柔らかい感触。

二度目のキスは、涙の味がした。

泣き続ける “歌姫” を、その青年は優しく抱き締め続ける。

ただ、その青年がどんな表情をしているのか。どんな想いを抱いているのか。それは誰も知らないことで。

夜の闇を、“堕ちた英雄” は往く。

その孤独な戦いは、まだ始まったばかりであった。

堕ちていく

その海賊団は西の海で結成された。

海賊となった理由はありきたりなものだ。 “大海賊時代” という時代に生まれたこと。生まれ育った故郷が貧しかったこと。何かを育むよりも奪う方が楽だったこと。

喜ぶべきか、どうなのか。彼らには “海賊” としての才能があったらしい。その才能とは “強さ” ではない。 “嗅覚” だ。

自分よりも強い相手、或いは危険な場所。そういうったものを嗅ぎ分ける嗅覚を持っていたのだ。

特殊な能力というわけではない。本能と経験によるものだ。おそらくはこの海賊たちの本質が “臆病” であつたが故にできたことなのだろう。本人たちさえも理解していないその感覚のお陰で、今日まで勝手気ままに彼らは海を生きていた。

「船長！ 見てくれ！」

「あん？ どうした？」

だが、いつまでもそんなことが続くはずはない。

「小舟です！ 旗はなし！」

「ほう。どっかの島の買い出し船か何か？ 運のねエ奴だ」

笑みを浮かべる。運が良い、カモが現れた。

島から島への連絡船というのは通常は複数の船による船団を形成して行われる。海の上というのはただでさえ何が起こるかわからないほどに危険な場所である上にこの大海賊時代だ。島から島へと渡る途中に海賊に襲われることは珍しくない。

故に通常は商会が複数で手を組んだ上で護衛を雇って船団を形成するか、国が陣頭に立って船団を形成するのが普通だ。加盟国であればタイミング次第で海軍による護衛がつくこともある。

そういった船団を襲うことは海賊にとつても当然リスクが高い。襲われる可能性を考慮した上で数を揃えているのだから当然だ。しかし今視線の先にあるような単独で海を渡る船であれば話は別。ああいうのはカモだ。

「ここ最近は天候も安定してたよな？」

「ええ。昨日雨が降ったくらいで」

「てことは嵐で逸れたってわけでもねエようだな。……じゃあ何か？ 近くの島にちよつと買い出しにって奴か？」

何度か見かけたパターンだな、と船長は言う。たまにいるのだ。それこそ数日もかか

らないような距離の島同士であれば大丈夫だろう——そんな風に考える奴が。

そして実際、数日程度の船旅で海賊に遭遇することはほとんどない。特に近い島同士の間を渡るといっているのであれば尚更だ。加盟国の近くであれば海軍が巡回している可能性もあるのだから。

しかし運が悪い者というのは存在する。それがあの船だ。

「買い出し船ってんならそのための金を積んでるはずだ。終わった後なら積荷がある。どっちにしても美味しい獲物だ。——大砲を用意しろ。わかってるな？ 当てるなよ？」

「へいー！」

バタバタと一部の海賊たちが動き出す。まずは一発だ。あの船は十分射程圏内にある。だが当ててはいけない。それで沈んでもらうては何の利益にもならないのだ。

「船長！ 船が反転しました！」

「今更逃げる気か？ 遅エな。一発近くにぶち込んでやれば止まる。——撃て!!」

船長の指示を受け、大砲の玉が吐き出された。だがその軌道を見、船長は声を荒げる。

「馬鹿野郎！ 直撃コースじゃねエか下手くそ！」

「すみません！」

その砲弾は真つ直ぐにその船へと向かっていく。本来なら直撃させることは褒める

べきことなのだが、今回は違う。

勿体ねエ、と船長は呟いた。当たり所が悪ければすぐにも沈むだろう。どうにか積んでいるものを奪える程度の損傷になつてくれ、と小さく祈る。

(しかし運のねエ船だ)

単独で海を渡る中で海賊に見つかり、更に威嚇のための砲弾は吸い込まれるように船に向かつていつている。こうも悪い目ばかりを引き当てるとは。

(乗つてる奴は相当に運が悪い)

ふん、と鼻を鳴らす船長。砲弾が船へと吸い込まれるように直撃する——その瞬間。

「——は?」

巨大な『何か』が突如出現し、砲弾を受け止めた。

何が——と思つたのも数秒だ。直後、彼らの海賊船に砲弾が叩き込まれる。

轟音と衝撃が海賊船を揺らした。

「うおっ!」

「敵襲か!」

「何だ何だ!」

いきなりの光景に海賊船内がパニックになる。当たり前だ。攻撃を受けることなど誰一人想定もしていなかったのだから。

だが偉大なる航路にまで来た海賊団だ。それを束ねる船長には相応の格がある。

「落ち着け野郎共!! 被害状況を確認しろ!!」

叩きつけるようなその声が海賊たちの動揺を鎮めた。応じる声と共に慌てて動き出す。

「周辺に船影は!?!」

「ありません! あの小舟だけです!」

「見間違いじゃねエってことだな……!」

別の船による攻撃ではないことはこれで確実だ。つまり先程の『何か』は見間違いではなく、こちらが受けた砲撃もあの『何か』がやったということだ。

何が起こっている、と船長は思考をフル回転させる。偉大なる航路とは何が起きても不思議ではない場所だ。それは嫌というほど理解している。だが理屈のないことは起こらない。それがどれほど荒唐無稽なものであろうと、そこには必ず『理由』がある。

「警戒しろ! あの手船に『何か』が——」

船長が言い切る前に、『それ』が看板へと着弾した。

誰もが思わず動きを止めた。海賊たちの視線の先。『何か』が着弾したその場所に、ゆらりと一つの人影が立ち上がる。

「……………」

危険な存在を嗅ぎ取る「嗅覚」が、この海賊団を今日まで生き残らせてきた。

関わってはならない相手。背を向けなければならぬ相手。そういうものを感じ取ったからこそ今日まで生きてこれたのだ。

そしてそんな彼らの「嗅覚」が告げている。

——「これ」は、絶対に関わってはならないものだ。

「……ッ、野郎共！」

それでも声を張り上げた船長は立派だった。この場の誰よりも危険を察知する「嗅覚」を持つ彼は現れた男を前に悟っていたのだ。

自分たちはもう、ここで終わるのだと。

「おい」

その場の全員の体が震えた。まだ年若い青年だ。だが自分たちより一回り以上若いように見えるその青年を前に、海賊たちは何も言えないでいた。

青年が右手に持ったコートに身を纏った。それは見覚えのあるものだ。

——背に刻まれた、「正義」の文字。

それは海賊たちの「天敵」が纏うものである。

「覚悟、できてんだろうな」

背に回していた麦わら帽子を被りながらの言葉。それだけで数人の海賊が尻餅をついた。

彼のことをこの場の海賊たちは何も知らない。だというのに理解させられたのだ。

——勝てない、と。

「野郎共!!」

それでも彼らは海賊だった。何もせずに逃げることはできない。

いや、逃げられない。

「たったの一人だ!! やっちまえ!!」

だからそれは意地だった。海賊としての最後の矜持。

応じる声が上がリ、海賊たちが青年へと殺到する。

しかし、その最中。最後まで冷静に思考を動かしていた船長は思う。

——嗚呼、そうかよ。

運が悪かったのは……おれたちか。



普段とは少し動きに違和感があった。だが問題はないとルフィは断じる。

戦闘そのものは一瞬だったと言える。襲いかかつてきた海賊たちは偉大なる航路に到達するだけの実力はあつたが、ルフィにとつては敵ではない。

海賊たちはほとんどが意識を失つて倒れていた。たつた一人を除いて。

「……………黒髪に、麦わら帽子……………」

うつ伏せに倒れ、這いつくばるような体勢で唸るような声を上げる一人の男。おそらくはこの海賊船の船長だろう。一人だけそれなりの圧があつたし、実際に一人だけこうして意識を残している。

「そうか……………テメエが『麦わらのルフィ』か……………!」

「……………だつたら何だよ」

見下ろすように視線を向ける。くくつ、と海賊は笑つた。

「運が悪イな……………。よりによつて『天竜人』をぶん殴つた大犯罪者サマかよ……………」

「……………」

ルフィはその言葉に対して何も言わなかつた。その海賊はゆつくりと身を起こすと、その場に座り込む。

何がおかしいのか、海賊はずっと小さく笑みを浮かべていた。

「おれたちも殺すのか……?」

「……そのつもりはねエ」

「お優しいね、『英雄』サマってのは」

再び笑う海賊。そして、なあ、とその海賊は言葉を紡いだ。

「——海賊になれよ」

顔こそ笑っていたが、その言葉が本気であることをルフィは理解した。無言でその海賊の方を見つめる。

「あの小さな船には『歌姫』が乗ってるんだろ? お互いお尋ね者だ。……その気ならあんたに船長を譲ってもいい。あんたの子分になるなら不足はねエしな」

「海賊にはならねエ」

即答だった。海賊は笑う。

「強がるなよ。海軍がどれだけ厄介かなんてあんたが一番よく知ってるだろ?」

その言葉にルフィは何も言わなかった。海賊は言葉を続ける。

「あんたたちがただ強かろうが、いつまでも逃げられるわけがねエ。海兵が海賊に

なるなんて珍しい話でもねエだろう？」

確かにその通りである。実際、ルフィがその名を世界に届けた最初の強敵はまさしくそういう男だった。ガスパーデという、悪辣な元海兵だ。

あの日から随分と遠いところに来たように思う。あの頃にはこんな未来は想像もしていなかった。

「海賊の世界も悪くねエぞ？　堅苦しい宮仕えとは大違いだ。命は懸かるが……まあ、あんたたちには今更だろ？」

どうだ、と海賊は言う。

「どうせあんたたちもお尋ね者なんだ。はみ出し者同士、手を組もうぜ？」

「何度でも言うけどな」

麦わら帽子を被り直し、ルフィは言う。

「海賊にはならねエ。絶対にだ」

「頑固者だなア」

海賊は笑い、ルフィはそんな海賊の元へとゆつくりと歩み寄る。必要以上に傷付けるつもりはなかったが、意識を残したままにしておくつもりもなかった。

それに気付いたのだろう。海賊は小さく息を吐いた。そして。

「ああ、最後に一つ言わせてくれ。……おれも“天竜人”は嫌いだよ」

ルフィが表情を険しくした。海賊は更に言葉を続ける。

「正直、スカツとしたぜ？」

鈍い音。そして間を置かず人に人が倒れる音が響く。

偉大なる航路にまで到達した海その賊団は、この瞬間事実上壊滅した。

ルフィの拳によつて沈黙した海賊。その姿を一瞥すると、ルフィは海の方を見た。近くに寄つて来た小舟の甲板にはウタの姿がある。

——あの日から、ウタは笑わなくなった。

味方と言つた人たちに裏切られた日。現実を突きつけられたその日から笑うことがなくなったのだ。

元々海に出た時から不安定ではあつた。だがそれでもまだ大丈夫だとルフィは思つていたので。しかしそれがあの日から変わってしまった。

表情としての笑顔はある。だがそれはかつての彼女の笑顔ではなくて。

ルフィが何よりも守りたかつたものではなくて。

“大切な人が笑える正義”

ルフィがようやく見つけた、自分自身の“正義”。ウタの笑顔。彼女が笑つていられる世界を、場所を、時間を。

だが、今の彼にはどうしたらいいのかわからない。

あの日、ルフィは見てしまったのだ。

——「歌姫」の心が折れた、その瞬間を。

「……くそ」

どうしたらいいのだろう。どうすべきなのだろう。

彼女の笑顔を取り戻すには何をすべきなのだろう。

ズキリと、ルフィの頭に痛みが走った。

それを振り払うように歩を進める。

——折れてはならない。

それだけはしてはならない。

だって、そうだろう？

彼女を海兵にしたのは、他ならぬモンキー・D・ルフィだ。

だから、絶対に守らなければならない。

彼女を罪人にしたのは、ここにいる愚か者なのだから。



海賊船と遭遇したことは結果として幸運であったように思う。

食料や飲水の補給のために訪れた島では通報されて満足に補給もできなかったし、実を言うと結構状況はギリギリだったのだ。

海賊たちについてはあの後、縛った上で電伝虫で救難信号を出しておいた。近くにはルフィとウタを追って来ている部隊がいるはずであるし、場合によつては近くを巡回しているだろう海軍によつて発見されるはずだ。

かつてであれば自分達で連行して近くの基地への引き渡しを行なつていた。だが今の二人にはそんなことはできない。基地に近付くことさえもできないのだ。

今までやってきたこと、やるべきであったことができなくなったという事実。その現実がまた、二人を追い詰めていく。

「……無人島、かな？」

辿り着いた島に上陸しながら呟いたのはウタだ。ああ、とルフィも頷く。

「灯りもねエしな」

「そう、だよね。……うん」

その声色には安心のようなものが籠っていた。それを感じ取つたルフィに気付いた

のだろう。ウタが首を左右に振る。

「よくないってわかってるんだけど。……人がいないなら、通報されることもないかなって」

右手で左手を抱えるようにしながら言うウタ。その言葉は弱々しく、いつもの彼女からは程遠いものだった。

隠し切れない不安。身を小さくするようにしている彼女の姿は、あまりにも儂くて。

「……そうだな」

様々な言葉を飲み込みながらルフィは頷く。否定できる言葉をルフィは持っていないかった。

ルフィは周囲へと視線を送る。彼らが船を停めたのは無数の岩が海面から突き出した場所だった。少し離れた場所には砂浜もあったのだが、上陸しやすい場所というのは目につきやすい場所ということでもある。小舟ということもあり、岩礁を避けつつ船を隠せる場所を選んだ結果だった。

追われている立場なのだ。海軍時代のように島に堂々と上陸するということはできなかった。

「もう夜だ。……今日は船で休もう。島の探索は明日だな」

「そうだね。夜のジャングルは危ないから」

視線の先、ジャングルの入り口とも言える場所をルフイは示しながら言う。夜のジャングルは危険だ。二人とも大抵の猛獣であればどうにでもできるが、わざわざ視界が悪く中でリスクを負う必要はない。

保存食を口にし、最低限の食事を済ませてから船室に入る。いくつかこちらを見つめる気配を感じたが、襲ってくる様子はない。獣も馬鹿ではないのだ。絶対に敵わない存在に喧嘩を売ることはいらない。

故にこれはただの威嚇だ。自分達の領域に來た招かれざる來客に対するもの。

「……………」

船室に入る際、ルフイはジャングルを一瞥する。その鋭い視線に気圧されたのか、獸たちの気配が少し遠ざかった。

ズキリ、とルフイの頭に痛みが走る。

思わず眉間に皺を寄せる。最近何度も感じる痛みであった。

何だろうかとルフイが思う前に手を引かれる。ウタが不安そうな表情をしていた。

「…………大丈夫?」

こちらを伺うような表情だった。そこにはこちらへの心配と不安が宿っていて。

「大丈夫だ」

だからこそ、ルフイは笑顔を浮かべた。

少しでもその不安を拭うことができればと、そう思いながらその手を握り返す。

——弱い力だ。

ウタがこちらを握る力は、どうしようもないほどに弱々しい。

ただ、今のルフィには。

その手を優しく握り返すことしか……できなかつた。



——目が覚めた。

一瞬にして臨戦体勢に入るルフィ。周囲の気配を「見聞色の覇気」で探る。

そして察知した。外にいる大きな力を持つ存在を。

今の自分達は招かれざる客だ。こういう対応も当たり前なのだろう。

ルフィは自分の膝の上に頭を乗せて眠る幼馴染へと視線を向ける。寄り添うようにして壁に背を預けて寝ていたのだが、いつの間にか膝枕のような状態になっていた。

その彼女へ手を伸ばそうとして。

“ごめんなさい”

ふと、彼女の言葉が脳裏に浮かんだ。

ウタは何度もその言葉を口にし、その度にルフィはそれを否定してきた。それは彼女を慰めるためのものではない。ルフィは彼女に非があるとは一切考えていないのだから当然だ。

——そうだ、ウタは何も悪くはない。

彼女は、巻き込まれただけで。

巻き込んだのは、ここにいる男だ。

「ちよつと……行ってくる」

呟くと共に彼女の頭を優しく撫で、優しくその頭を下ろす。毛布をかけ直すと、ルフィはできるだけ音を立てないように外に出た。

静かな夜だとルフィは思った。聞こえるのは波の音だけだ。風もほとんどない。

そんな、月明かりだけが世界を照らすその場所に——『それ』はいた。

「……………」

僅かに聞こえる程度の唸り声を上げながらこちらを見据える、一匹の獣。白い体躯を持つ巨大な虎のような猛獣であった。

一目でルフィは理解する。彼こそがこの島の「王」であるのだと。「……謝るのはおれの方だ」

しかし、その正面に歩み寄りながらもルフィは別のことを考えていた。

この逃亡の始まりについて。今の自分達について。ずっとルフィは考え続けていた。そしていつも同じ結論に至るのだ。

「海兵になろう」

あの日、彼女にそう言ったのはルフィだ。

「ジャンクスを、捕まえよう」

そう言つて彼女に手を差し出した。そして二人で海兵になったのだ。

「どこにも行かないで。ずっと一緒にいて」

あの日、震える声でそう言った彼女の言葉を覚えている。

——寂しいのは、痛いよりもずっと辛い。

ルフィはそれを何よりも知っている。だからこそ側にいると決めたのだ。同情ではない。憐憫でもない。憐れみでもない。

ただモンキー・D・ルフィという少年がそうしたいと思っただけだ。

一緒にいたいと思っただけだ。

隣にいたいと思っただけだ。

だって、彼女は。

「……おれが、ウタを」

その先の言葉を紡ぐことはできなかった。だがどうしても考えてしまう。

あの日、海兵になると決めた時にルフィはウタを誘った。共に行こうと。

——それは本当に正しかったのか？

こんなことになるなら。

ウタはずっと、あの場所で。

“ルフィ”

自分の名前を呼ぶ彼女の姿を幻視した。

守りたいと思つた笑顔。

大切だと想う人。

もう随分、彼女の笑顔を見ていない。

「おれのせいだ」

あの日の慟哭を思い出す。彼女の心が折れた瞬間を。

——二度目だと、ルフィは思う。

あの時も何もできなかった。あの時よりも力を手にしたはずだというのに、結局何もできないでいる。

多くの戦いを経験した。何度も死にかけた。何度も傷ついた。それでも立ち上がった。そうして強くなったはずで。

今の自分は、あの幼き日よりもずっと強くなったはずで。

だと、いうのに。

今の自分は。

大切な人の笑顔一つさえ、満足に守れていない。

「……………」

眼前、こちらを伺うように見据える「王」へと視線を向ける。

招かれざる客を見据えるその瞳。それは「王」としては当たり前前の行動だった。己

の縄張りに現れた強大な力を持つ存在を前に何もしないわけにはいかないだろう。

そうだ、それは当たり前前のことであるはずだ。

なのに、思ってしまった。

——人でなくても、自分達を拒絶するのか。

拳を握る。応じるように「王」が動いた。

「——！」

鈍く、重い音が響く。

決着は僅か一発。沈黙した「王」を見下ろしながら、幼き日の記憶をルフイは思い出

す。

ウタと共にジャングルで生き抜いた時の記憶。あの時、巨大な獣を前に逃げるしかなかった。二人で手を繋いで全力で背を向けて逃げ出したのだ。

今日の前で倒れているのは、あの頃に逃げるしかなかった獣よりも遥かに巨大で強い力を持つ存在だ。今のルフイはそんな怪物さえもこうも容易く打倒できる。

だが……それだけだ。

この拳だけでは、ウタの心を救えない。

「……ウタ……」

まるで祈るようにその名を呼ぶ。

確かめるように。

縫るように。

月明かりが照らす夜の中。

かつて「英雄」と呼ばれた青年の心もまた……少しずつ、蝕まれていく。

なればこそ、人は彼を “英雄” と呼んだのだ

かつての記憶。それは任務から帰還し、部隊全員が一日の休暇を与えられた日の記憶だ。

ルフィとウタ。世界に名を轟かせる二人の部隊に所属する海兵たちは全体的に年齢が若い。完全に新設された部隊であり、前身の部隊がなかったことも影響しているのだろう。

故に休日には好き勝手に過ごしている者が多い。まあ指揮官二人が一番自由なのでそれに倣った結果だろう。

だが、その日は珍しく部隊の者たちのほとんどが一つところに集まっていた。

「……なあ、これ壊れてんじゃねエか？」

部隊員たち全員が入ってもなお余裕のあるその一室。そこでそんなことを言っているのは麦わら帽子を被った青年——ルフィだった。彼の手には縦笛が握られており、それを周囲の者たち数人が見守っている。皆笑顔だった。

「吹き方があるんですよ、大佐。力任せに息を吹けばいいわけじゃないんです」

微笑を浮かべながら言うと、ルフィの持つている縦笛と同じものを手に持った女性海兵——オリンがその縦笛で音楽を奏でる。美しい音色が奏でられた。

その短い演奏が終わると、おおー、とその光景を見守っていたウタが拍手をする。他の者たちもだ。

「流石だねオリン」

「いえいえ」

ウタの言葉に微笑を返すオリン。二人の部隊における副官の位置にいるオリンは楽器演奏に関して抜群の才能を誇る人物だ。故に指導役も担っているのだが、その彼女でもルフィの指導は中々上手くないかない。

「いけると思ってたんだけどなア……」

「いや何を見てそう思ったの?」

頭を掻きながら言うルフィにウタがツツコミを入れる。周囲からも笑いが漏れた。

彼らがいるのは訓練室だ。だがそれは肉体を鍛えるための部屋ではなく、楽器の演奏のための部屋である。防音もしっかりとしているこの部屋は広報任務で楽器演奏の役目を追う者たちがその練習をするために使う場所の一つであった。

一日の休日をごまかすか考えながらルフィとウタは二人で本部内を歩いていたの

だが、その中で漏れ聞こえる楽器の音を聞いたのだ。そして部屋に入るとオリンを中心として何人かが自主練習をしており、そこへ二人が入ってきた格好だ。

元々偶然集まった者たちでのんびりと練習していただけだったらしいのだが、時間を追うごとに部隊の者たちが続々と集まってきて今やほとんどが室内にいる。いくつかのグループが形成されており、自由に練習したり雑談に興じていた。

そんな中でルフィが楽器に興味を持ったため、まずは近くにあつた縦笛を試したのだが……結果は案の定である。

「だってよ、皆凄エ簡単そうに音出してるだろ？」

「まあ、気持ちにはわかるけど」

言いながらウタは周囲に視線を走らせた。彼女はこの場の者たちの演奏技術について誰よりも知っている。何せ海軍が誇る「歌姫」を支える演奏部隊だ。その技術水準はかなりのものである。

「演奏できたら楽しそうなんだけどなあ」

うーん、と首を捻るルフィ。そんな彼に対し、全体的に若い者が多いこの部隊の中でも更に若い——ルフィと同じ年齢の海兵が右手を上げた。

「大佐、これとかどうツスか？」

そう言つて彼が差し出したのはハーモニカだった。それを受け取りながらルフィが

言う。

「小せエな」

「それがハーモニカの利点ツス。持ち運びが楽なんでどこでも練習できるツスよ」

「へー」

頷くルフィ。それを右手で弄びながら彼はその海兵へと問いかける。

「これ練習したらウタの曲も演奏できるのか？」

「勿論ツス！」

グツ、と親指を立てて言う海兵。そっか、とルフィは頷いた。そして演奏しようとするのだが。

「……そもそもどうやって持つんだ？」

「両手で持つんスよ。向きもありますんで……ええと、右手はこう、少し隙間を」

「こうか？」

「そうツスそうツス」

小さな楽器を相手に四苦八苦するルフィ。そんな彼の姿を見つめながらウタは微笑を浮かべていた。

そして彼女は、ねえ、と問いかける。

「私の曲を演奏できるようにになりたいの？」

「ん？ おう」

「どうして？」

純粋な疑問だった。それは勿論、ルフィが自分の曲を演奏できるようになってくれたら嬉しい。だが演奏ともなると相応の時間をかけた練習が必要だ。ルフィはウタたちの練習する姿をずっと見ている。簡単ではないことはわかっているはずだ。

ルフィが音楽を好むことは知っている。だが今までは自分から歌うことはあっても楽器の演奏をすることはなかったと思うのだが。

「理由は色々あるけどよ。まあ、楽しそうだったしな」

周囲へ視線を送りながらルフィは言う。

「ライブの度に思ってたんだ。だからやってみたくなった」

「ふーん」

ルフィらしいな、とウタは思った。楽しそうだから——それは入り口としては珍しくない動機であるし、ルフィらしい理由である。

納得を覚えたウタ。そんな彼女の様子を見てとつてか、ルフィは再びハーモニカの扱いについて教わり始める。

その光景を見守るウタもまた、立ち上がると歌の練習を始める。

穏やかだった。当たり前のように過ぎていく日々だった。

ずっと、ずっと。

こんな風に過ごせたらと。

誰もがきつと、願っていた。

願って、いたのだ——……



彷徨うようにして辿り着いた島は、穏やかな気候の小さな島であった。

どこかフーシャ村に似ているとそんなことをウタは思った。海岸の側に集落があり、いくつもの漁船が港には並んでいるが大型の船はない。どれも小型のものばかりで、それがこの島の経済力を示しているように見えた。

そんな集落の奥には耕作のためと思いき開けた場所があるが、そこから島の中心に向かつては深い森に覆われた山となっている。

いずれにせよ、選択肢は一つだった。人のいる場所に近付けばどうなるかをウタもルフィも最初に訪れた島で理解していたのだ。

故にその集落がある場所からは離れた場所に船を停めた。そして二人は寄り添うようにして島の中へと入っていく。

「……………」

共に無言であった。疲労が溜まりつつあったということもあるし、何を話せばいいのかわからなかったのもある。

あの日からそれなりの時間が経ったように思う。だが状況の変化はない。二人は今も逃亡を続けている。

どうするのだろうか。

どうしたらいいのだろうか。

そんなことばかりを考えながら、しかしどちらもそれを言えないでいた。

「…………山の中はあまり人の手が入ってないみたいだね」

地面に落ちた枝を踏んだことによる乾いた音を響かせながらウタは言った。山中には道らしい道がない。つまりは整備がされていないということだ。

この島を遠目から見た時、港近く以外に特に建造物の姿を確認できなかった。集落の背後には切り開いて作ったのであろう農地があった。おそらくであるが、この島の住民たちの生活は漁業と農業がメインで山から得られる糧はそこまで比重が大きいのだろうか。

だがそうであるなら二人にとっては好都合であった。島の住民とは出会わない方がいい。正直な話、現状ではあまりいい未来が想像できなかった。

「フーシャ村に似てるな。……あつちは山賊がいたけど」

やはりルフィもまた故郷のことを思い出していたらしい。

忘れられたように存在する場所——フーシャ村。この二人が幼少期から育った場所であり、二人にとつては大切な故郷だ。

何度か里帰りをしたこともあるその場所はしかし、大切な場所であるからこそ今の二人は立ち寄ることができない。

それをわかっているからなのだろうか。あの村のことを思い出したのは。

「……ダダンたちは元氣かな」

「元氣に決まってる」

小さくルフィが笑った。大切な「家族」たち。彼らは今どうしているだろう。

「事件のことも……知ったかな」

「……知っただろうな」

どんな風に思っただろうか。何と言っただろうか。

……見限られて、いないだろうか。

「——遂にやりやがったか」

普段の彼らしくない口調。誰かの——否、ウタもよく知る人物の口調を真似してル
ファイが言った。

「ダダンならそう言うんじゃないか？」

「そう、だね」

精一杯の笑顔を浮かべたルファイに対して、ウタもまた必死で笑顔を浮かべた。

……ちゃんと笑えているだろうか。

わからない。わからなくなってしまった。

(私は、どうやって笑ってた?)

どうやって、生きてきた?

どうやって、戦っていた?

わからない。わからなくなってしまった。

何よりも、だ。

——私は、どうやって歌っていた?

自分にとつての誇り。大切なもの。大切な人が愛してくれたもの。

それを見失ってしまった。

あの日からウタは一度も歌うことをしていない。できる余裕がなかったのも勿論ある。状況が許さなかったのも事実だ。

だがそれ以上に、「歌う」という行為そのものを見失ってしまった。

（私が、「歌姫」なんて呼ばれてたから）

何度も考えたことだ。この状況の発端はウタが「天竜人」の目を付けられたことによつて始まった。そしてあの時に「天竜人」は言ったのだ。

「毎日わちしのために子守唄を歌うんだえ〜！」

思い出すだけで身が震える。人間の全てを奪おうとする存在。何もかもを台無しにしてしまえるだけの力を持つ絶対者。

積み上げた全ても、築き上げてきたものも無意味なのだと思解させられた。

——あの時、ルフィが助けてくれなかったら。

きっと、自分は——

「何だあれ？」

震える体を抑え込むようにして両腕で自身の体を抱き締めていたウタは、少しだけ前にいたルフィのそんな言葉で強制的に意識を切り替えた。

思い出す。そんな行為だけで全身から汗が噴き出していた。

頭を振つて強引に思考を打ち切る。そして顔を上げたウタもまた、視界に映つたもの

に困惑した。

「……倉庫？」

視線の先にあつたのは、そうとしか表現できないものであつた。少しだけ開けた場所に、木々に隠されるようにして無骨な建物が並んでいたのだ。だが数は多くない。全部で五つしかない。

ただ大きさはかなりのものであつた。だからこそウタは倉庫であるのかと考えたのだが。

「人の気配はねエけど」

「家、つていうには大きいし……少し不自然な気がするけど……」

周囲を警戒しながら二人は開けた場所に出る。それは石で作られており、窓も小さなものがいくつもあるだけという家というには不自然なものだった。それこそウタの言う通り倉庫という方がイメージに近い。

だが倉庫であるならば妙だとも二人は思う。二人はできるだけ人里には近付かないようにしていた。そのため海岸近くの集落からこの場所はかなりの距離があるのだ。倉庫というにはあまりにも距離があり過ぎる。

「放棄された場所、つていうわけでもなさそうなんだけど……」

「……どつちにしても離れた方がいいかもな」

どういふものであるかは不明であるが、人が建てたものであるということは間違いない。ならばここには人が来る可能性があるということだ。

ルフィの言葉に頷きを返すウタ。だが彼らが動く前に声が響いた。

「そこにいるのは誰ツスカー？」

緊張感のない声だった。それこそ顔見知りにも声を欠けるような調子であった。

思わず身構える二人。すぐさまルフィがウタを庇うような位置に立った。逃げないと——そう思つて行動する前に、建物の影からその人物が現れる。

「山には熊も出るツス。危ないから——」

現れたのは若い男だった。どこかで見たような麦わら帽子を被り、首にはタオルを巻いていた。両手には軍手をしているその男はどこからどう見てもこの島の住民だ。

普通ならすぐに何かしらの行動を起こしただろう。だがルフィもウタも固まってしまった。

「——え」

その青年と目が合う。相手の方も驚愕で目を見開いた。おそろくだがこちらも似たような表情をしているだろう。

そこにいたのは、二人もよく知る人物。

「え、ちよ……見間違ひ……じゃない、ツスよね……？」

幾度となく共に戦場を駆け、修羅場を越え、笑い合つた大切な仲間。

「なんで」

思わずウタの口からも声が漏れる。

——かつて部下であつた青年が、そこにいた。



二人の率いていた部隊はトップ二人が若いこともあるが、全体的に若い海兵によつて構成されている。今日の前にいる青年はその中でもかなり若い海兵であり、ルフィと同年の青年である。見習い期間を経てから最初に配属されたのが二人の部隊であり、明るい人柄ですぐに馴染むことになった。

騒ぎというかトラブルを持ち込むのは大体がルフィとウタの二人なのだが、それを大きくするのが彼らの部隊の若い衆である。そして最終的にオリンを中心とした比較的

年上のメンバーが謝罪行脚する。……まあ、年上メンバーも騒いではいるので共犯ではあるのだが。

「良かったツス……！ お二人のことは機密だつて言つて何も教えて貰えなくて……！」

今にも泣き出しそうな表情でその青年は言った。それに対し、二人は小さく頷く。

現在、三人は開けた場所に向かい合うようにして座り込んでいた。ルフィとウタは寄り添うようにしており、青年はその対面に座り込んでいる体勢だ。

やはりというべきか青年からは邪気を感じなかった。だがかつての部下に対してもそうして探りを入れてしまう事実に気付き、二人は奥歯を噛み締める。

「無事、とは言えないのかもしれないツスけど……」

そんな二人の内心には気付かないまま、言葉を選ぶように言う青年。二人の姿を見てどういふ逃避行を辿つてきたのかを察したのだろう。

薄汚れた衣服に、隠しきれない疲労の滲んだ顔。大きな傷こそないが無事とはとても言えない姿であつた。

続きの言葉を探すように右手を空中で彷徨わせる青年。たまに見る彼の癖だ。

懐かしい、とそんなことを思つたのはウタだ。前にそれを見たのは随分と昔のことにように感じながら、彼女は言葉を紡ぐ。

「……あの後、部隊の皆はどうなったの？」

それはずっと気になっていたことだった。あの事件において罪人として指名手配されたのは二人だけだ。あの時ヴェルゴ中将が寄越してきた新聞にもそう書かれていたし、それは間違いないことだと思っている。

二人の部下たちは事件とは関係ない。副官でもあつたオリンは二人を逃したこともあつて咎められる可能性を考えていたが、それは記事にはなかつた。だが指揮官である二人がこんなことになつたのだ。部隊にも何かしらの動きがあつたはず。

「そう、ツスね。色々あつたツスけど——」

青年が言いかけたその瞬間だった。

——
!!

響き渡る鐘の音。甲高い金属音はそれが尋常でない状況であることを伝えてくる。

なんだ、と二人が腰を浮かせようとするがそれよりも先に青年が反応していた。勢いよく立ち上がった彼は険しい表情を浮かべ、二人の方へと言葉を紡ぐ。

「ここには島の者が来ます。お二人は身を隠しててください」

そしてそのまま青年は走り出した。未だ鐘の音が鳴り響く中、二人は視線を交わし合

う。

「……………」

動いたのはルフィだった。腕を伸ばし、ウタを抱えた状態で近くの建物の上へと上がる。

そこで気付いた。建物の上からであれば、この島で集落が存在する海岸の辺りを一望できる。

「ルフィ、あれ」

ウタがある方向を指差す。集落の存在する海岸の更に向こう。そこに見えるのは二隻の船。

海軍の船でもなければ、商船でもない。その船が掲げる帆には罽褸が掲げられている。

「——海賊か」

かつて「英雄」と呼ばれた男が呟くその言葉には。

一体、どんな感情が込められていたのだろうか。



青年が集落に辿り着いた時もまだ鐘の音は鳴り響いていた。これは緊急事態を告げるための鐘だ。そして今の時代における緊急事態など一つしかない。

住民たちは互いに声を掛け合いながら山へと向かって逃げ出している。その動きに逆らうように青年は一直線に自宅へと向かうと、自室から海兵の帽子と長銃を持ち出した。そのまま家を出る瞬間、壁近くに置かれた写真へと一瞬だけ視線を送る。

そこに写っているのは赤ん坊を抱く男女の姿だ。その写真に対して何かを誓うように頷きを向けると、彼は外で声を張り上げた。

「早く山へ逃げるッス！ 荷物は捨てて！」

そんな風に声を張り上げる青年をこの島の住民たちは皆知っている。小さな島であり集落だ。誰もが顔見知りである。

幼き頃から知る彼が海兵になり、更に彼が“新時代の英雄”の部下となったことはこの島の者たちにとって誇りでもあったのだ。故に彼の言葉に住民たちは素直に従う。

声を張り上げながら青年は麦わら帽子を背中に回し、海兵帽を被った。見える海賊船は二隻。

ここは小さな島だ。大人もそれなりにはいるが、海賊と戦えるような戦闘訓練を受け

た者など青年くらいだろう。

「通報は!？」

「何度もした! すぐに向かうとは言ってたが……!」

「間に合うはずがないツスね」

海岸近くにいた男性へと声をかけた青年は返答に対してその言葉を紡ぐ。ここは加盟国に属した島ではあるが辺境だ。国からの軍であろうが海軍であろうが、ここに到着するには相応の時間がかかる。

(仕方がないツスね)

今日の前にある現実を改めて理解すると、青年は内心だけで覚悟を決めた。

あの破天荒な上官たちと共に青年も相応の死線を潜ってきている。そこで学んだ大切なことは状況の理解であり冷静な思考力だ。上官たちのような人間離れた実力を持たないならば、それを別の何かで補うしかない。

それは本来なら人数であり戦術であり手段である。だが今はその全てがない。しかし、だからなんだというのか。

海兵帽を被り直す。これを被ると決めた理由はこの島にあるのだ。ならばやることは決まっている。

「時間は稼ぐツス。皆と一緒に山へ」

「お前は どうするんだ! まさか戦う気か!」

焦った様子で言う、青年のそれと同じような麦わら帽子を被る中年の男性。そんな彼に対し、右手に持った長銃を少し持ち上げながら青年は言った。

「自分は海兵ツスよ?」

青年が海兵になったことを、あの英雄たちの部下として戦っていたことをこの島の住民たちは誇りに思っていた。故に迷いを見せながらも男性は青年を残して走っていく。

海の方へと視線を送る。既に海賊船はかなり近い場所にまで寄ってきていた。上陸まで時間はかからないだろう。

——この集落は荒らされる。

それはもう確定した現実だった。後は被害をどこまで減らせるか。

「急いで誘導を——」

指示を出そうとした青年の耳に、小さな悲鳴が届いた。弾かれたように顔を上げ、声のした方へと走っていく。海賊船からはいくつもの小船が出ており、海賊たちは声を上げてこちらへと迫ってきていた。

それを横目に見ながら青年は声の元へと辿り着いた。そこでは一人の幼い少女が座り込んでいる。何かを抱え込むような格好のその少女は目に涙を一杯に溜めており、今

にも泣き出しそうだった。

「何をしてるツスカ!？」

思わず声を上げて少女の下へと走り寄る。見知った少女だった。どちらかというの内気な子で、人見知りの激しい子。外で遊び回るよりも本を読んだりする方が好きなのだ。

こういった緊急事態において子供は最優先で親か周囲の者たちが連れ出すのがルールである。だというのにどうして。

「……………これ……………」

腰が抜けたのか、立ち上がれない様子の少女は涙を零しながら抱え込んだものへ視線を向ける。

——それは、ヘッドフォン。

とある人物のそれを模したもの。少女にとって——否、島の者たちにとって「ヒーロー」であった者の象徴であった。

そんなもの、と青年は言えなかった。言えるはずがなかった。だって彼も同じなのだ。彼もまた麦わら帽子を持っている。

あの二人を——「新時代の英雄」を、青年もまた信じているのだから。

「……………大事に持つてるんすよ。失くさないように」

だからこそ、彼はそう言葉を紡いだ。そして青年は少女を抱え上げる。誰かにこの子を預けなければ。

しかし、そんな時間はなかった。

——
!!

響き渡るのは荒くれ者たちの声。海賊たちが上陸したのだ。

くそ、と青年は呟きを漏らした。とにかくこの子を——

「おいおい、こんなところに海兵かよ」

咄嗟に避けることができたのは偶然か、それとも彼が越えてきた数多の戦いの経験がそうさせたのか。

轟音と共に地面が割れた。青年と少女の眼前、地面を割ったのは巨大な鉄の塊だった。

「……………ッ！」

「きゃあっ！」

青年はその場から飛び退くようにして大きく後退し、抱え込まれていた少女は大きな悲鳴を上げる。

現れたのは巨大な体躯を持つ海賊だった。武器と呼ぶにはあまりにも無骨。鉄の塊のような棍棒を担ぐ海賊が青年たちを見下ろしている。

「休暇、つてどこか？ 運のねエ奴だ。いや逆か？」

「……………」

青年は海賊から目を離さないままにジリジリと距離を取る。あのふざけた破壊力の棍棒を易々と振り回せる脅力。それだけで理解した。

——勝てない。

おそらくこの海賊は、自分とはレベルの違う相手だ。

「まあどうでもいい話か。……………ん？」

海賊が何かに気付いた。その視線は海兵が抱える少女に向けられている。そしてその視線は青年にも向けられ——そして、その海賊は笑った。

「くっ、ははっ！ なんだそりゃ!? おいおいおい何だこの島は!? まさかあの英雄がサマが助けてくれるとでも思ってたのか!？」

大声で笑う海賊。その声に釣られたのか、周囲の海賊たちも集まってきた。

ジリジリと後ろに下がりながら少女を下ろす青年。彼女を背中に隠すように庇いながら長銃を手に取った。

「どうしました船長?」

「どうもこうもねエ！ 見ろよこいつら！」

集まつてきた海賊の問いかけに対し、笑い声と共に言う海賊。彼は海兵帽を被る青年とその青年が庇う少女を指差しながら笑っている。

背後の少女が青年の服の裾を握り締めたのを感じた。おそらく逆の手ではヘッドフォンを抱え込んでいるのだろう。震えているのがこちらにも伝わってきた。

「よりによってあの大犯罪者の麦わら帽子とヘッドフォン！ 笑わせるなよ海兵！ あいつらに比べりゃ海賊なんて可愛いもんじゃねエか！」

「素晴らしいやさつき逃げてた連中も麦わら帽子持ってたな」

「おいおい、この島は犯罪者の島かア？」

船長と呼ばれた棍棒を持つ海賊。その言葉に続くように海賊たちが笑い声を上げる。青年は長銃を握る手に力を込めながら、小声で少女へと言葉を紡いだ。

「……合図をしたら全力で山に走るツスよ。振り返っちゃダメツス」

ビクリ、と少女の体が震えた。青年は長銃を構える。

その、瞬間だった。

——鈍く、重い音。

衝撃が頭を貫き、青年の体が倒れ込む。

少女の悲鳴が響き渡る。

「危ねエだろ？ 銃は人に向けちゃいけません、って親から学ばなかったのか？」

見えなかった。あの棍棒で頭を殴られたのだと、青年は遅れてきた激痛で理解する。
「船長はいいのかよ」

「おれのは棍棒だろ。ついでに言うとな銃じゃねエ」

「屁理屈」

笑い声が響く。荒い息を吐きながら、青年は近くに転がった銃へと手を伸ばそうとした。
「おいおい、そりゃ駄目だ」

「……………」

だが、頭を掴まれて持ち上げられたせいで銃には手を届かなかった。視界の端にいる少女は座り込み、ガタガタと震えている。

周囲からはいくつもの悲鳴と海賊たちの声が聞こえてきている。くそ、と呟いた青年の口からはしかし、声ではなく血が溢れた。

「いやしかし、根性あるな海兵。おれの棍棒を受けて意識残してるのは大したもんだ」
言うのと、ふむ、と海賊は頷く。

「おれは根性ある奴は好きでな。どうだ海兵？ 海賊にならねエか？ そうすりやお前の命は助けてやるぜ？」

海賊は笑う。周囲の海賊たちからは船長の悪い癖が出たよ、という声が上がった。

「海賊は良いぜ？　好きなように生きられる。今はそういう時代だ。……ああ、そういうどこぞの『英雄サマ』も『新時代』なんて言ってたな」

ピクリ、と青年の指が動いた。その瞳が自分の顔を掴む海賊を捉える。

意識は朦朧としていた。だがその言葉は。あの人たちの『信念』は。

「……ふざ、ける……な……」

震える右手で、海賊の手を掴む。

「ああ？」

「誰が、海賊、なん——」

「——そうかい」

言い切る前に青年はまるでゴミでも捨てるかのように投げられた。近くに積まれていた荷物にぶつかり、その衝撃で彼は呻き声を上げる。

「そりゃ残念だ。……おい、このガキは連れて行け。売れば金になるだろ。他の連中もだぞ。抵抗するなら殺していいが」

海賊が周囲の者たちに指示を出す。だが彼らが行動に移る前にその青年が立ち上がった。

「させ、るか」

「頑張るねエ」

その言葉には呆れも混じっていた。だが青年の意識は既に朦朧としている。頭部からは大量の血が流れており、その体は震えていた。

だが、譲れないのだ。

それだけは。

あの人たちの——「信念」だけは。

「……………」

だが、青年の口からは言葉を紡げなかった。代わりに溢れたのは血液で。

膝を折る青年。その視界の中にはこちらに歩み寄ってくる海賊の姿がある。自分へ

のトドメと少女を連れ去るためだろう。

やめろ、という声さえ出なかった。

その青年に、棍棒が振り下ろされようとして。

——しかし、その棍棒が地面に到達することはなかった。

「……………あ……………」

視界の中に入ったのは、麦わら帽子。

その背に負うのは「正義」の文字。そのコートは薄汚れ、「正義」の文字も燻んでいった。だが青年は知っている。そこに陰りなどないことを。

その男を、世界は信じた。

その男を、「悪」は恐れた。

旧時代の伝説さえも打ち破った海兵。新たなる時代の旗手であった男。

「……悪イ。遅くなった」

棍棒を片手で受け止めたその男は、呟くように言葉を紡ぐ。

「……大佐、自分は……」

涙も混じった声で青年は言う。その青年へと背を向ける彼はしかし、小さく首を振った。

「お前は……」

呻くような海賊の言葉に対し、その人は——モンキー・D・ルフィは何も言わなかった。ただ彼はこちらに背を向けたままに言葉を紡ぐ。

「いつも通りだ」

その口調は、かつてのそれと変わらないもので。

「——後ろは任せた」

はい、と掠れた声で応じた。

嗚呼、そうだ。そうなのだ。

この人の背中に夢を見た。

この人の背中に憧れた。

正しくそれは、「希望」であつたのだ。

海賊という「悪」に蹂躪される場所に現れた、「正義」を背負う者。

力無き者、弱き者、この時代に苦しむ者。

その者たちにとつてその存在は希望であつた。未来であつた。明日であつた。救いであつた。

いつか、いつかきつと。

この時代を終わらせてくれるのだと。

世界はそう、信じていた。

——なればこそ。

人は、彼を「英雄」と呼んだのだ。

海賊たちがその存在を前に気圧される。当たり前だ。彼は「伝説」をも討ち取つた男である。こんな田舎の島を襲うしかないような海賊たちにどうにかできるような相

手ではないのだから。

「ビビんじゃねエ!!」

だが、一つの手賊団の長を務める男だけはそこで意地を通した。

「何が『英雄』だ!! たった一人——」

己を奮い立たせるようなその言葉はしかし、最後まで紡がれることはなかった。

瞬き程の一瞬。その一瞬で海賊との距離を詰めたルフィがその顔面へと拳を叩き込んだのだ。確か『ゴムゴムの銃弾』と彼が言っていた技だと青年は思う。

その一撃によって悲鳴さえも上げられないままその海賊は吹き飛び、倒れ込む。

「せ、船長!？」

「ひ、ひいっ!」

「逃げるバケモンだ!」

悲鳴を上げ、すぐに背を向けて走り出す海賊たち。彼らは倒れた船長をも見捨てて一直線に逃げ出した。

周囲からはまだ悲鳴と声が聞こえる。ルフィは振り返らないまま言葉を紡いだ。

「行ってくる。……後は頼んだ」

そしてそのままルフィはその場から飛び出していく。そんな彼と入れ替わるように、青年の側に別の影がしやがみ込んできた。

「立てる?」

「……准将……」

現れたのはウタだった。だが彼女は正義のコートを纏うルフィとは違い、上で会った時のような全身を覆うようなローブを身につけている。

青年が頷くと、ウタは近くで声も出せずに震えて座り込んでいる少女へと視線を向けた。そのまま少女の下へと歩み寄りながら声をかける。

「もう大丈夫。……悪い奴はあの人があつてくれるから」

「——ッ」

少女の瞳がウタを捉えた。その表情が歪む。そして。

「う、あ、うああ——」

少女はようやく大きく大声で泣き出した。慰めるようにその頭を撫でるウタはそこで少女が継るように抱え込んでいたものに気付く。

それは見覚えのあるヘッドフォンだった。彼女が着けているヘッドフォンを模したもの。

「……………」

少女を撫でる手とは逆の手でウタは自分のヘッドフォンに触れる。

世界を敵に回した二人。その二人を象徴する麦わら帽子とヘッドフォンは相応の扱

いを受けたはずだ。下手をすれば「悪」の象徴とすらなかったのかもしれない。

だがこの少女はそれを抱え込み、継るようにして泣いている。それはどうしてなのか。

——今のウタには、答えを出せなかった。



海賊たちは「麦わらのルフィ」によって殲滅された。負傷者は出たが奇跡的に死者は出ず、船長であった海賊を含めて複数人の海賊たちは縛られて砂浜で監視されている。この後国から来る人間に引き渡すとのことだ。

ルフィが現れたことよって海賊たちは仲間も捨てて二隻の船で逃げ出した。それらについては既に海軍に連絡が入っており、こちらへ向かう途中で捜索を行うとのことだ。

人命は失われなかった。だが家はいくつも壊されたし燃やされた。この島の建物は通常イメージする家とは違い、テントに似た形状をしている。それが文化なのかもしれない。

ないが、壊れやすいものではあつたのだ。

守れなかつた——そう考えていたルフィとウタだが、この島の住民たちは深刻に考えていないようだった。

「屋根の布を持つてきたぞ！ 組み木を手伝つてくれ！」

「種粃も無事だ！ 手の空いてる奴は運ぶから来てくれ！」

「時期的に備蓄を増やしてたのが不幸中の幸いだつたな！」

集落を襲われたというのに、住民たちには活気があつた。その光景には流石のルフィとウタも驚いている。

二人は海兵だ。その生活の中で多くの場所を訪れた。海賊に荒らされた集落などいくらでも見てきたし、無力感を抱いたことも幾度となくある。だがこの島の住民たちはそんな彼らが知る者とは大きく違つたのだ。

「この辺りは定期的に大きな嵐が来るツスからね。こういうのは慣れたもんですよ」

集落の復興のため、集落の広場に住民たちは集まつていた。そこでは負傷者の治療を行ふ者や復興のための段取りなどが行われている。入れ替わり立ち替わり人が来ては動いている状態だ。

そんな場所の隅にルフィとウタは青年と共にいた。最初は手伝いをしようとしたのだが、ミイラ男のように頭に包帯を巻かれた青年と共に休んでいるように言われたの

だ。

「お二人も見たツスよね？ 山の中にある建物つて元々避難所なんス。ただ最近は海賊から逃げるための場所でもあるんスけど」

「逃げるための……」

ウタが呟く。青年は頷いた。

「命が何より大切ツスからね。奪われるだけで済むならそれで済ませようつて考えッス」

それは弱き者にとつての知恵である。取り返しのつくものを奪われることを許容し、再建を目指す。それを諦めではない。

戦わない、という在り方。それは一つの戦い方だ。

二人は広場から集落を見る。テントに近い構造の建物とはいえ、既にいくつかの家は再建されつつあった。

たくましいものだと思う。人というのはこうも強いのかと、そんな風に思った。

「……アラバスタみたいだな」

ポツリとルフィが呟いた。クロコダイルという海賊の陰謀によって荒らされた国。あの国の民もまた強い人たちだった。

そんな中、ウタは柱の影からこちらを伺う少女に気付く。ヘッドフォンを着けたその

少女はあの時、青年が庇っていた少女だ。

「ん、どうしたツスカ？ そんなところに隠れてないで——」

青年が言い切る前に少女は走って行ってしまった。あー、とぼつが悪そうに彼は頬をかく。

「人見知りする子でして……」

「それはいいけど……」

チラリとウタは周囲を見る。この島の住民たちは二人に対して悪意も害意も持っていない。助けたという事実のお陰かとも最初は思ったが、どうやら違う。先程の少女もそうだが、この島の住民たちは麦わら帽子とヘッドフォンを着けている者が非常に多いのだ。

麦わら帽子だけならおかしくはないと思う。そう珍しいものではないからだ。だがそこにヘッドフォンがあると話が違う。

麦わら帽子とヘッドフォン。

それはかつての「ヒーロー」の象徴であり、しかし今は「罪人」の象徴であるはずだ。それをどうしてこの島の住民たちは身に着けているのか。

「流石にマリンフードで着けるとなると色々言われると思うツスけど、ここは田舎の島ですし。……なんというか、この島の皆は思ってるんですよ」

二人の視線に気付いたのか、青年はそう言った。その上で彼は断言する。
「——お二人は間違つてない」

何を、と聞く必要はなかった。言葉を探す二人に対し、青年は続ける。

「いやまあ、堂々とは言えないツスよ？ でもそれが答えツス。……それだけツスよ」

それ以上青年は何も言わなかった。ウタは何度も言葉を紡ごうとして、しかし声にならずに口を閉じるということを繰り返す。ルフィもまた何も言えなかった。

——彼らの想いを、どう受け取つたらいいのだろう。

二人は罪人だ。それを堂々とこの青年は肯定した。それ自体は嬉しく思う。だけどそれは許されないことでもあつて。

「間違つてないつてのは、本気で言つてんのか」

思わずといった調子でルフィが言った。語気が強いのは彼もまた動揺しているからだろうとウタは思う。

だが青年は躊躇しなかった。頷きを返して来る。

「誰の下にいたと思つてます？」

なんでもないことのように、青年はそう言い切つた。何を今更というように。

——いつの間にか、二人は心を閉じようとしていた。

最早信じられる人などいないのだと。この終わりになき逃亡を二人だけで乗り切らな

ければならないのだと。

絶望の闇の中を生きていくしかないのだと。
だけど。

(全部じゃ、ない……?)

もしかしたら。

まだ、自分達には。

「……………あ、あの」

不意に聞こえてきた声でウタは思考を一度閉じた。見ると先程走って行ってしまった少女がこちらへと歩み寄ってきている。

「あ、ありがとう」

そして、少女はそう言った。

礼なんて——そう思わず口にしようとして、ウタは止めた。代わりに別の言葉を紡ぐ。

「どう、いたしました」

少女の表情に笑顔が宿った。花が咲くような——そんな笑顔。

戸惑いのようなものがウタの中に芽生えた。だが少女はそんなウタに対して次の言葉を紡いでくる。

「あ、あの……歌、を」

「え……」

予想外の言葉だった。少女は顔を赤くしながら服を握りしめている。その言葉を口にするのにとつもない勇気を必要としたようだった。

そんな少女の姿を見つめながら、ウタは思う。

(……歌……)

最後に歌ったのはいつだっただろう。随分と前の気がする。

歌。大切なもの。好きなもの。私の誇り。

—— だけど、そのせいで。

この歌声のせいで、私は——

「ウタ」

ルフィがこちらの手を握ってくれたことで、思考が途切れた。額に汗が浮いているのがわかる。胸の奥に何か重いものがあつた。早鐘のように心臓が鳴っている。

俯いてしまうウタ。そんな彼女に対し、青年が言葉を紡ぐ。

「実はこの子、あの日にマリッジフォードにいたんです」

「マリッジフォードに？」

青年の言葉にはルフィが応じる。ウタの視線の先では心配そうな少女の顔が見えた。

「そうッス。この子だけじゃなくて何人かで。まあ自分のコネとかそういうので招待したんスよ。……この状況でこんなこと言うのは良くないかもしれないッスけど。この島の皆はお二人のファンなんですよ」

胸に、何かが灯る。

「お二人は“ヒーロー”なんです。今もそれは変わってない」

その言葉は、今の二人にとってはあまりにも重い言葉であった。

——“ヒーロー”。或いは“英雄”。

二人は多くの者からそう呼ばれた。だがそれはあの日に全て反転し、犯罪者となり今は逃亡者だ。蔑まれるような立場になってしまった。

だが青年は言うのだ。反転などしていないと。

今でも——“ヒーロー”なのだ。

「だから、その」

それ以上は青年も何も言えないようだった。ルフィがこちらを握る手の力が強くなる。

ウタは一度大きく深呼吸をした。一度ではない。二度、三度と繰り返す。

……少しだけ、心臓の鼓動が落ち着いた気がした。

「好きな曲は……ある？」

色々な言葉を探した挙句、出てきたのはそんな問いであつた。少女は恥ずかしそうに俯きつつも。

「……『風のゆくえ』」

確かに、その言葉を紡いだ。

「そつか。……うん、そつか」

真摯で純粋な言葉であつた。幼き少女のその言葉が、じわりとウタの中に染み込んでいく。

——嗚呼、そうか。

「ありがとう」

何もかもなんてことは、なかつたんだ。

今目の前に、私の歌を愛してくれる人がいる。

こんな風になつた自分に、それでも歌を望んでくれる人がいるのだ。

「ライブみたいにはいかないけど」

呟くように言うと、ウタは立ち上がった。少女の顔が笑顔になる。

対し、ウタ、とルフィが彼女の名を呼んだ。その表情にはこちらを案じるものが宿っている。

「大丈夫」

そう言葉を返した。そうだ、大丈夫だ。

——願われた。望まれた。

それはきつと、ウタにとつては始まりの理由。

この歌を望んでくれる人がいるのなら。私は、何度でも。

」

リズムを刻む。久し振りだがちゃんと体は覚えていた。

なんだなんだと、周囲の者たちが集まってくる。それを見てか、青年がルフィへ声をかけた。

「大佐、いいんすか？」

「ウタがそうしたいってんならいいさ。……それに」

歌い始めるその瞬間に。

ウタはルフィのその言葉を耳にする。

「ウタの歌はおれも好きだからな」

その言葉を聞いて、ウタは内心で吐息を溢した。

変わらないものが、一つある。

彼がこの歌声を愛してくれていることは、あの日からずっと変わらぬこと。

だからこそその誇りで。

だからこそ——歌だ。

この人が隣にいてくれるのなら。

私は、まだ——……



響き渡る拍手の音。そんなものはいつ以来なのだろうとルフィは思う。

いつもそうだった。彼女のライブが終わると空を割るような拍手が鳴り響いていたのだ。

ルフィはその音が好きだった。彼自身も愛するあの歌声が届いたことの証明であり、大勢の人を幸せにしたその証明でもあったから。

“平和を届ける正義”

ウタが掲げると決めた、背負うと決めた正義。未だ己の正義が定まらないルフィは彼女の正義を守ろうと決めた。そうしようと誓ったのだ。

故にこそ、それを踏み躪ろうとする者たちと戦ってきた。 “平和” が遠いこの時代

で。ずっとずっと。

「……よかった」

彼が愛する「歌姫」が、その本領を發揮している。

彼女の周囲には笑顔が溢れていた。それはきつと彼女が求めていたもの。望んだもの。愛するもの。何よりの願い。

きつと、彼女の心はまだ傷付いている。その傷はすぐに癒えるようなものではない。

だけど、今は。

今だけは。

「」

ふと、目が合った。一瞬のことだ。だがそれで十分である。その一瞬で伝わったのだから。

その瞳は、とても綺麗で。

理想とは違うけれど。

それでも、きつと。

きつと、ここから未来へ進んでいけると。

その輝きが、そう思わせてくれた。

握り締めた拳は、新たな誓い。

たった一人。だが誰よりも大切な人のため、青年は世界を敵に回した。後悔などない。あろうはずもない。

覚悟はある。鈍るはずもない。

だから、どうか。

どうか、笑っていて欲しいと青年は思う。

——それこそが、彼の「正義」であるのだから。

.....。

.....。

.....。

人の口に戸は立てられない。

片田舎の集落が海賊を撃退したというだけのことだ。わざわざニュースにするようなことでもないし、埋もれて消える日常であるような出来事だった。

しかし、誰かが願ったのだ。

その「英雄」たちの生き様を。

知って欲しいと、そう願った誰かがいた。

「——クワハハハ!! たまらねエな!! それでこそだ!!」

願う者がいるならば、それを届ける者もいる。

それは、世界を渡る「ビッグ・ニュース」。

——「英雄、健在」。

賽は投げられた

朝起きることが辛くなったのは、いつからだろう。

元々朝は強い方だ。起きて、顔を洗って、身支度をして。その後に寝坊助な部隊の者たちを起こしていくのが海の上での彼女の役目であった。

当たり前のようなその日々が、何よりも大切だったのだ。

しかし、その役目を失ってから時間が過ぎた。だからこれは喪失感と——恐怖。

「……………」

自室の机。そこに置かれた小さな箱の中にペンダントがあった。

カチリという音を立てて開くそれは本来、小さな写真を入れるためのものだ。だがそのペンダントの中に入っているのは二枚の何も書かれていない小さな紙である。

その女性——オリンは小さく吐息を零した。そこには安堵が滲んでいる。

これを見ることが毎日の日課であった。祈るようにしてこのペンダントを開き、中身を確認する。そして。

「祈るのだ。ただただ真摯に、手が白くなるほどに強くペンダントを握り締めて。祈る相手は『神』ではない。そんなものに祈りはしない。故にこれは祈る相手さえも定まらぬもの。」

「情けないと彼女は思う。祈ることしかできない。信じることしかできない。」

「——もしも、力があつたなら。」

「何かができたのだろうか。」

「……………」

服を着替え、意識を切り替える。部屋を出る瞬間、部屋の隅にかけられたコートが目に入った。

背に『正義』の文字が刻まれたそれは海兵にとっての誇りである。しかし今の彼女はそれを羽織ることはできなかつた。

（何が『正義』）

何度目かもわからない眩きを内心で零し、オリンは部屋を出た。廊下を歩き、出て行く先はある集落だ。

見渡すと、腕に羽の生えた者たちがいる。そうでない者もいるし、海兵の制服を着た者もいる。

ここはメルヴィユ。かの「金獅子のシキ」との戦いでマリンプオードの近くに落下した島だ。今は世界政府直轄の土地となっており、海軍本部が管理をしている。オリンが出てきたのはこの島にいくつか造られた宿舎だ。現在は主に世界政府や海軍本部から派遣された者たちが使用している。

「クオツ！」

朝日が眩しい——そんなことを思ったところで、聞き覚えのある鳴き声が聞こえた。見ると、黄色い体躯を持つ鳥がこちらへと飛来してきた。

まるで飛びつくようなそれを受け止めるオリン。最初の頃は勢いが良過ぎて吹き飛ばされたが、最近ようやくこの鳥——ビリーも加減を覚えたらしい。ぶつかりこそするがこちらを吹き飛ばすようなことはしない。

「おはようビリー」

「クオツ！」

嬉しそうにビリーが鳴いたその瞬間、オリンは手を離して少し距離を取った。直後、空間を電撃が叩く。

ビリーが持つ特殊な力だ。曰く『生態』とのことであるが、オリンには生物学のそういった詳しい部分にはわからない。ただ単純に彼が興奮すると危険だということだけは認識している。

「もうちよつとコントロールを覚えないとね」

「クオツ……」

苦笑して言う、しよんぼりした様子で肩を落とすビリー。その彼を撫でていると、こちらに走り寄ってくる少女の姿があつた。

「おはようお姉ちゃん！」

「おはようシャオ」

走り寄つてきたのは一人の少女であつた。名をシャオ。彼の戦いでオリンの上官であるルフイとウタとも交流を持ち、その後においても世界政府とメルヴィユの住民の橋渡し役にもなつた少女だ。

シャオがビリーの羽を撫でると、嬉しそうにビリーが鳴いた。シャオもまたそんな姿を見て笑う。

微笑ましい光景だと思う。だがどうしてもオリンの心は晴れない。

(メルヴィユの管理者といえは聞こえはいいけど)

今の彼女はこの場所の管理者の一人として名を連ねている。最高責任者は別にいるが、現場における実質的な責任者は彼女だ。その任務内容は原住民たちとの関係作りや島の開拓など多岐に渡る。

重要な役割であることは彼女自身もわかっている。長い間“金獅子のシキ”の管理

下に置かれていた彼らは世情に疎い。最初の接触者の一人であるオリンを前面に出すことは彼らの警戒を和らげる意味でも効果はある。だがそれは建前。丁度いい役目があつたからここに押し込まれただけだ。

「一から十まで説明する必要はないだろう？……あの二人の副官として、お前もまた名が知られている」

この任務の指示を出した人物——センゴク元帥は酷く疲れた様子でそう言った。同時に部隊の事実上の解散も告げられ、かつて「新時代の英雄」と呼ばれた部隊に所属していた者たちは全員が他の部隊へと異動になったのだ。

オリンだけは元帥直下の機関として新たに創設されたここメルヴィユ管理の責任者とされた。他の責任者たちが将官、左官クラスの人間ばかりの中で大尉の階級である彼女が配属されたということはそういうことだ。

——即ち、左遷と監視。

「大丈夫？」

シヤオにもわかるくらいに沈んだ表情をしていたのだろう。首を振って、何でもないと言葉紡いだ。

ふと、空を見上げる。憎らしいほどに青い空だ。

——この空の下はどこかで。

あの人たちは――

「あ、カモメさんだ」

「クオツ」

オリンが気付くのと同時に、一人と一羽もまたそれに気付いた。空からこちらへと降りてくるのは一羽のカモメだ。

ニュース・クー。この世界で最も広い範囲へと情報を届けるカモメだ。そのカモメはこちらへ一直線に近付いてくる。

「ありがとう」

そのままニュース・クーが差し出してきた新聞を受け取る。同族……と言っているのかわからないが、ビリーがニュース・クーを覗き込むようにして近寄ってきた。自分の数倍以上のサイズのビリーを見てニュース・クーも少し警戒している。

「ダメだよビリー」

「クオツ」

そしてそんな彼をシャオが嗜める。その光景を横目に見ながらオリンは新聞を広げた。届けられたのは『世界経済新聞社』だ。『新聞王』とまで謳われる男が発行する、世界で最も広い範囲へ情報を届けている新聞社である。

あの『事件』以来、海賊を筆頭に様々な動きが世界中で始まっている。加盟国同士で

も緊張状態にある国までであるという始末だ。今日は一体どんな憂鬱なニュースが載っているのか。

そう、思ったところに。

「……ああ」

思わず、声が漏れた。

一面に大きく載せられた写真。それと共に書かれた言葉。

「どうしたのお姉ちゃん？……あ、お兄ちゃんとお姉ちゃんだ！」

「クオツ！」

新聞を覗き込んだシャオが声を上げ、ピリーも嬉しそうな声を上げた。

「大佐、准将」

喘ぐような声が漏れる。その瞳が文字を追う。

『海賊に襲われた集落を救ったのは、二人の『堕ちた英雄』。』

だが彼らの魂は、信念は、その在り方は損なわれていなかった』

その新聞の一面に書かれた言葉。

それは、彼らを信じる者たちへの希望たる言葉であった。

——『英雄、健在』。



世界で最も多くの者に読まれる新聞を発行する新聞社である世界経済新聞社。その内部は戦争でも起こっているかのようによくの者たちが動き回り、声を上げていた。

「クワハハハ！ どんどん情報を集めろ！ 本番はここからだぞ！」

その中心にいる男——「新聞王」モルガンズは上機嫌で社員たちに発破をかけている。彼自身もまた机に大量の資料を積み、更に社員たちが上げてくる情報や原稿に目を通している。

情報というものは集めればいいというものではない。まずはその裏取りが必要であり、その上で紙面に上げるべき情報の取捨選択が必要だ。更に言えばその上げ方も考える必要があるのだ。順番、見せ方、表現方法……それ一つで読者側の受け取り方が変わってしまう。

だからこそモルガンズは楽しみながらそれをなす。活字で人を、世界を踊らせる。それができる立場なのだから面白くないわけがない。

「すみません社長」

手に資料を持った若い青年がこちらへ走り寄ってきた。新入りの記者の一人だ。先日モルガンズが色々と教えを授けた相手でもある。

本来なら新人には相応の研修期間を設けるのだが、今はとにかく人手が必要。彼の場合はすぐにそれなりに動けると判断したため一端の記者として動き回っている。実際、既にいくつか記事の草案も書き上げているくらいだ。

「おお！ いいところに来たな！」

丁度その青年の書いた文章を確認していたこともあり、モルガンズは彼を手招きする。そして彼に紙を渡すと簡単に説明を始めた。

「実に丁寧な文章だ。素晴らしい。これは教養のある人間しか書けねエ代物だ」

「あ、ありがとうございます」

いきなり褒められて恐縮する青年。その彼に対し、しかし、とモルガンズは器用に羽を立てて言葉を続けた。

「今回の特集記事には不向きな文章だ。事実も真実も揺るぎはねエが、伝え方は無数にある。その文章じゃ読者には受けねエ」

「えつと……どのあたりでしょうか。その、情報は自分なりに取捨選択したのですが」

手元の紙を見つめながら青年が問う。モルガンズは頷いた。

「先日に出した件の二人が健在であることを示した報道。今回はその反響を受けての特

集記事だ。それはわかるな？」

「はい。だから例の海賊の詳細もできるだけ載せよう——」

「それが間違いだ。読者はあの二人がぶっ飛ばした海賊がどんな奴であるかなんぞ興味はねエ。そんなもんは一行でいい。これが『四皇』の傘下なり億越えの有名な奴だつてんなら話は変わるだろうがな」

打ち倒された海賊は事件の肝ではない、とモルガンズは言う。今回の海賊自体は懸賞金から見ても片田舎の集落を襲ったところからしても小物だ。故に重要なのはあの二人がやったことである。

「今世界が欲しているのは『英雄』の情報だ。それ以外は極力削ればいいのさ」

それで十分だとモルガンズは言う。必要なのは受け手側の求めているものをしっかりと見定めること。そうすれば自ずと何を載せるべきかは決まってくる。

「なるほど……わかりました」

青年が頷く。そこでモルガンズはとあることを思い出した。そもそもこの青年は何かを伝えるにここに来ていたのだ。

「それで用件はなんだつたんだ？」

「あ、それなんですが」

「——私よ」

青年の後ろからそんな女性の言葉が届いた。聞き覚えのある声だ。モルガンズの表情が一瞬だけ——それこそほとんどの者が気付かないほどの一瞬だけ険しいものになった。

だがすぐに笑顔を浮かべると、モルガンズは両手を広げて立ち上がる。

「これは随分と珍しい来客だ！」

「偶然近くに用事があったものだから」

現れたのは一人の金髪の美しい女性だった。しかしただの女性ではない。そもそもただの人間がこの移動する本社に乗り込めるわけがないのだ。

名をステューシー。『歓楽街の女王』の異名を持つ人物であり、闇の世界の顔役の一人である。モルガンズとはその立場上それなりの付き合いがある相手だ。

「折角だから情報提供もしてあげようと思って」

「ほう、情報！」

小さな笑みと共に言うステューシーに対し、大袈裟なりアクションで応じるモルガンズ。そのまま彼は周囲を見回すと、近くにあった椅子を置いた。

その椅子に腰掛けるステューシー。その対面に座りつつ、モルガンズは言葉を紡ぐ。

「その見返りは？」

この女が情報を無料で寄越すはずがない。故の問いかけだったのだが、ステューシー

は肩を竦める。

「私の商売にも影響が出そうなもの。情報交換が見返りでどう？」

「商売ねエ……」

どちらのことだ、とは口にしなかった。それを口にするメリットはない。

互いに腹の読ませない者同士の対峙。周囲の社員たちは自然と距離を取っていた。

「それで情報つてのはなんだ？」

「——『白ひげ』が動き出したわ」

モルガンズの眉が動く。彼が少し離れた場所にいる社員に視線を送ると、視線を向けられた社員は急いで駆け出した。情報の裏取りのためだ。

「目的はあの二人か？」

「さあ？　でもタイミングを考えればその可能性は高いでしょうね」

ふむ、と顎に手を当てながら考え込むモルガンズ。どう、とステューシーは彼に問いかけた。

「情報としては悪くないと思うけど」

「成程、確かに。……それで、何を聞きたい？」

「今後の世界について。あなたの見解を聞きたいわ」

ジツ、とモルガンズは目の前の女の腹の中を読もうとその瞳を見据える。だが何も読

めない。

この手の戦いでは不利だ——そう判断すると、モルガンズは言葉を紡いだ。

「まだ賽が投げられただけに過ぎねエな。だが中心にいるのは——」

机の上に転がっていたチエスの駒を手に取り、机に並べる。

キングとクイーン。それが誰を暗示しているかなどわかり切っている。

「——あの二人だ」



偉大なる航路における、とある島。

非加盟国でもあるその島に、その笑い声が響いていた。

「ゼハハハハ！ こいつは面白エー！」

声を上げて笑っているのは「黒ひげ」マーシャル・D・ティーチだ。彼は新聞に書かれた記事を見て楽しそうに笑っている。

そこに書かれているのは二人の「堕ちた英雄」の活躍だ。海軍も国救援も間に合わ

ぬ状況、現れた二人が海賊を撃退した。世界のルールに真つ向から反してなお、彼らは人を助けたのだ。

「海軍の面目も丸潰れだ」

そんなことを言うのは巨大な長銃を持つ男——ヴァン・オーガーだ。彼の言う通り今回の件は海軍の面目が立たない話である。

世界政府の象徴であり絶対的な存在たる「天竜人」。その存在に対して正面から「否」を叩きつけた「新時代の英雄」。当然そんな存在を許容できるはずもなく、つい昨日までは「英雄」として持て囃されていた二人は大罪人となつてしまった。

しかしその二人はそれでもなお海賊に襲われる集落を守つた。その事実は大きい。

「ああそうだ。しかも見ろ。どうやらこいつらは一度通報されて海軍の追撃も受けてるみてエだ。それでも市民を守るってんだから大した「正義」だ」

ティーチの口調には馬鹿にした様子はない。つい昨日まで自分達を「英雄」と呼び、継つていた者たち。その者たちから通報されるという経験をしてなお彼らは弱者を守つたのだ。

本当に大したものだとティーチは思う。故の「健在」であるのだとも。

「折れてねエならそりゃ「健在」だ。「復活」じゃねエ。海軍にすりやたまつたもんじゃねエだろうがな」

「……ああ……ゴホツ、そりや……そうだ……」

咳き込みながら同意するのはドクQだ。

「民衆にしてみれば……奴らは『理想』だ……ゴホツ」

そう、『理想』。まさしくドクQの言う通りなのである。

世界政府も海軍もこの海の秩序を守る存在であるが、『天竜人』というある種の矛盾を抱えてもいる。その横暴は明らかに度が過ぎているが誰もそれを咎めることはしな
いしできなかつた。だからこそ、『革命軍』という存在が生まれたと言える。

しかしその『革命軍』がならば理想なのかというところでそうではない。彼らは現状では
どうしても秩序を破壊する側であるし、そもそも組織規模では世界政府には及ばない。
結局世界政府が倒れたら誰が秩序を守るのかという問題が残ってしまうのだ。

しかし、そこへこの二人だ。

真つ向から『天竜人』に対して『否』を突きつけ、それでいて民衆を守るという『正
義』を捨てていない。その守るべき民衆に背後から刺されようとも彼らは民衆を守つ
たのだ。

その在り方は正しく、人々が掲げる『理想』であろう。

「それがわかつてるからこの手配書だ。共に億越え——『金獅子』を討ち取ったことを
考えりや随分安いがな」

世界政府がその首に懸けた懸賞金。それは二人を“罪人”だと定義したということである。しかし今回のこの報道を見て民衆は思うだろう。

——これが“罪人”なのか？

無論、“天竜人”という絶対的な存在への反逆は大罪だ。だがそれ以外の部分において彼らはむしろ民衆の側に立っている。故に厄介なのだ。ただただ罪を犯したと切り捨てるにはその影響力が大き過ぎる。

全ての人間がそう思うわけではないだろう。意見は様々だ。しかしそういう形で『意見が割れる』という事実そのものが海軍にとつても世界政府にとつても厄介なのである。

「それでどうするんだ船長？ 場所は近いぜ」

問うてきたのはジーザス・バージエスだ。彼に対してはラフィットが言葉を紡ぐ。

「近付かないほうがいいでしょう。追撃部隊も出てるようですから」

「だが億越えの首を探してたじやねエか。丁度いいだろ」

「ホホホ、お馬鹿さんですね。そんなことをしたら無用な敵を作ることになります」

見なさい、トラフィットは自身の持つている新聞をバージエスに渡す。示された場所を見、バージエスが眉を蹙めた。

その彼に対し、ティーチが酒を煽りながら言葉を紡いだ。

「赤髪が動いてやがる。それだけじゃねエ。海軍内部でも離脱者が始めてるらしい。——ゼハハハハ！ 随分と愛されてやがる！ 羨ましいことだぜ！」

海の皇帝「四皇」が一角たる「赤髪」が動いたことは比較的早くに世界に広がった情報だ。故にこそ「歌姫」が「赤髪」の娘であることを世界が確信したわけでもあるのだが、それはつまり手を出すと「四皇」と事を構えることになるということの意味している。

そして海軍もだ。今回の件を受けてそれなりの数の離脱者が出ており、組織内もかなり荒れているとのことだ。それだけの影響力をあの二人が保持していたということであり、裏を返せば下手に手を出すとそれらが一気にこちらへ向かってくるということでもある。

故に手を出すべきではないと判断した。向こうから来るのであればともかく、目に見えている爆弾へ突っ込んでいく意味はない。

「だがこの状況、おれたちにとっては追い風かもしれないねエ」

呟くティーチ。彼の頭の中には既に計画が練られ始めている。

ここから世界は荒れていくだろう。そうなれば名を上げるチャンスはいくらでも増える。

「どういふことだよ船長？」

「『赤髪』が動いたってことは他も動き出す。そうなりや海軍は戦力が必要になるが、『七武海』の穴は空いたままだ。そこへ強力な戦力が加入を求めればどうする?」

「——そういうことか」

問いかけてきていたバージエスも得心が行ったらしい。ティーチは高らかに宣言した。

「ギア成り上がってやるぜ!!」

世界政府も海軍も今は戦力を欲している。クロコダイルの穴は未だ埋まっていない。ならばそこに食い込む隙はいくらでもあるのだ。

その先の『計画』のため、海賊『黒ひげ』が動き出す。

——世界を揺るがす大事件が起こるのはまだ、もう少し先の話。



「今回の事件で決定的な流れを作ったのは『赤髪』だ」

モルガンズはそう切り出した。海の皇帝たる『四皇』が一角、『赤髪』のシャンクス

“。彼が動き出したことは既に世界中に知れ渡っている。

だが対面のステューシーはそんなモルガンズの言葉に疑問を投げかける。

「あらどうして？ あくまで主導権は世界政府だと思っただけ」

「罪人として糾弾したのは世界政府だが、それだけだと弱エのさ。結局のところ “天竜人” をぶん殴ったという事実以外にあの二人がやらかしたことはねエからな。それだけじゃ市民感情は追いつかねエ」

「その市民感情を後押ししたのが二人のバックボーンでしょう？」

「それが真実って保証がどこにある？ 噂にすらもなつてねエような出生の真実だぞ？」

作り話と捉える奴の方が多いに決まってる」

そう、本来はそうなるはずだったのだ。 “天竜人” を暴行するという前代未聞の事件。だがそれだけでは実を言うとは市民感情は付いてこなかっただろうとモルガンズは思う。それはルールを破る行為ではあるが、 “悪” と市民が捉えるには弱い出来事だからだ。

故にこそ “犯罪者の子供” という情報が意味を持つ。『だから』罪を犯した——そう納得させるためだ。しかしそれも本来なら意見も割れたはずである。事件を起こした直後にその情報が出たとしてもあまりに都合が良過ぎるのだ。偽の情報だと疑う者も多いはずである。

だがそれを真実とする出来事が起こった。

——“赤髪のシャンクス”、動く。

穏健派とも知られるはずの彼が動き出した——それが世界に与えた衝撃は大きく、そしてその動きはあの情報が真実であることを世界に確信させた。

「事件直後に動きを見せた“赤髪海賊団”。あそこまで露骨だと“赤髪の娘”って情報が真実であることは間違いないエ」

実を言うとモルガンズも半信半疑であつたのだ。“歌姫”のバックボーンは謎が多いがそれでも彼女は“海賊嫌い”として知られていたし実際の振る舞いもそうであつた。少なくとも“赤髪”との接点はモルガンズも世界政府から情報を貰うまで知らなかつたのだ。

故にこそ“赤髪の娘”という情報をモルガンズは『世界政府からの情報』という形で新聞に載せた。確信がなかつたが故である。

だが、それが真実であるということ了他ならぬ“赤髪”がその行動で証明した。

「穏健派だと言われているが“赤髪”も海賊だ。無関係な相手なら捨て置くだろう。しかしそうしなかつた。いや、できなかつたのかもしれないエが」

「できなかつた、か」

「そうだ。それはつまり“歌姫”が“赤髪”にとって重要な存在であることを意味して

いる。そしてそうなればそこに利を見る奴が現れる」

小さな音を立て、モルガンズは机の上にチェスの駒を並べた。最初に置いた二つを取り囲むようにしていくつも駒が並べられていく。

「今の盤面だ。まずは中心にいる二人。それを追うのが海軍であり世界政府だ」

白いキングとクイーンの駒に対し、相対するように白と黒のルークの駒をモルガンズが置く。それぞれが海軍と世界政府なのだろう。

それは同一の組織ではあるが、しかしその方針や在り方が違う機関である。

「そして動き出した『赤髪』。まず間違いなく目的は件の二人だ」

今度は黒いビショップの駒を別の位置に置くモルガンズ。それはまるで白いキングとクイーンを見守るような位置だった。

「その傘下が既に動き出してるって情報もある。『白ひげ』も動くってんなら残る『四皇』も必ず動くだろう」

そして残る白と黒のビショップを等間隔に配置する。四つのビショップが『四皇』を示しているのだろう。

「だが『四皇』に好き勝手させる程海軍も毫碌しちやいねエ。元々『新世界』が奴らの本拠地。『楽園』での分は海軍にある」

「まずこちら側に来るだけで一苦労でしようね」

「互いの牽制もあるだろうからなア。——そこで動き出すのが『樂園』にいる海賊と非加盟国だ」

いくつもの白と黒のポーンを並べるモルガンズ。彼はキングとクイーンを取り囲むようにしてポーンを配置していく。

だが彼のそんな言葉を聞いてステューシーが問いかける。

「加盟国は動かないと？」

「現状ただの貧乏くじだ。関わるメリットがねエ」

世間的には『大罪人』であり賞金首。だがその本質はかつて世界に愛され、信じられていた『英雄』だ。それを討伐したとして得られるメリットは多少の金と表向きの名誉だけ。それ以上に無用な恨みを買いかねない。

「だが海賊と非加盟国は違う。できるかどうかはともかく、この二人の身柄を抑えられれば『赤髪』相手に交渉ができる。後者については『赤髪』じゃなくてもいい。世界政府にも交渉を仕掛けられるだろう」

「四面楚歌ね」

取り囲まれたキングとクイーンの駒を見つめながらステューシーが言う。つい先日報道では彼らは海賊に襲われる民間人を救うという行動をした。だが本来、誰よりも助けを求めているのは彼らであるはずなのだ。

しかし現実には周囲全てを敵に囲まれたに等しい状況。個人レベルであれば協力者はいるだろう。しかしそれが組織になると難しくなる。

「そして革命軍だ。これも動き出したと聞いている。……これに関しては当たり前だ。ここで動かねえようだとその理念が瓦解する」

そして盤面のどの駒からとも一定の距離を置いた位置へナイトの駒をモルガンズが設置する。

革命軍があゝの二人の身柄を抑えに動くのは既定路線だ。そもそも世界政府、そして“天竜人”と正面から敵対しているのが革命軍である。その彼らが正面から“天竜人”に逆らい、世界を敵に回しながらそれでも弱者を救った二人を見捨ててしまえばその存在意義に関わる。

モルガンズは両手を広げ、眼前の来訪者に告げる。

「これが現状だ」

「成程、興味深いお話だったわ」

ステューシーが立ち上がる。彼女は身なりを整えると、それで、と言葉を紡いだ。

「あなたは盤面のどこにいるの？」

「——おれはジャーナリストだ」

立ち上がりながら“新聞王”はそう告げた。数秒、二人の視線が交錯し。

「この先もそうであつて欲しいわね」

ステューシーはそう告げると、靴の音を響かせながら立ち去つていく。それを見送り、彼は小さく呟いた。

「……釘を刺しに来たか」

えつ、とこちらに近付いてきた社員が疑問の声を上げた。その彼に対して首を左右に振ると、なんでもないとしように声を上げた。

「さあこれからが大忙しだ！　どんどん情報を仕入れろ！」

そうして社員たちを激励しながら、改めてモルガンズは思う。

——盤面が揃つただけだ。

しかもこの盤面はいつ新たな何かが割り込んでくるかわからない不安定なものである。その中心にいる二人が何をするかによつても大きく変わる。

モルガンズはジャーナリストだ。だが同時に彼はエンターテイナーでもある。

故にどこにも属さない。だがどうせなら面白い方がいい。そういう意味ではやはり中心にいる二人へとどうしても期待してしまう。

何が起こるのか。何を成し遂げるのか。

ただただ、楽しみである。



世界は動き始めている。しかしその中心にいる二人はその激動を知らないままだ。

「……上手くなったね、ルフイ」

彼が奏でるハーモニカの音に対し、そんな言葉を口にするのはウタだ。まだその演奏は未熟であり、滑らかではなくつつかえる部分も多い。

だがそれでもそのハーモニカは正しく音楽を奏でていた。

「ししし、練習したからな」

笑顔と共に言うルフイ。今の二人は海の上にいる。再びの逃避行である。

二人の元部下がいたあの集落の者たちは親切にしてくれたが、だからこそずっとは留まることはできなかつた。彼らが良いと言ってくれても世界がそれを許さない。

故にこそ再び当てのない逃亡へと戻ったのだ。しかし少し前までと比べると心に少し余裕がある。

「いつか……うん、いつか。ルフイの伴奏で歌いたいな」

ルフイが持っているハーモニカを見つめながら、所謂体育座りの体勢のウタは言う。

あのハーモニカはあの集落で元部下の青年がくれたものだ。いつかの記憶、なんでもない日の思い出。それを彼もまた覚えていた。

全てを失ったと思っていた。今目の前にいる人以外の全てを。だがそうではないと知ることができた。

だが、それでも。

それでもまだこの体は動かない。いつも震えが先に来る。恐怖が心を覆うのだ。

「おう、待ってろ」

けれど、目の前の人は笑顔でそう言うのだ。

戦うことのできない女。足手纏いな女。人生を奪った女。

そんな存在へ、彼は笑いかけてくれる。

——どうして？

そんな一言さえ聞けない自分が嫌になる。

「

再び、ルフィがハーモニカの演奏を始めた。そのメロディに誘われるように、呟くような言葉がウタの口から零れ落ちる。

たった二人の演奏会。会場で行われるそれは、目の前の人に捧げるために。

音楽とは届けるもの。それはかつて「歌姫」が「正義」と共に掲げたものでもあつ

た。

だからこそ、二人は音楽を奏でている。

——目の前の大切な人へ、届くように。

海を往くは孤独な船。

その前途は未だ見えず——……

“世界の灯火” ①

聖地マリージョア。そこはこの世界における “神” —— “天竜人” が住まう場所。赤い大陸の上にあるその地には世界最高の権力を持つとされる者たちがいる。

絶対的な存在たる “天竜人” の中でも更に上位。 “五老星” と呼ばれる者たちだ。彼らは広々とした部屋の中で言葉を交わし合っている。

「……彼らには何度も頭を悩ませてきたが」

ため息と共にそんなことを口にする一人の視線の先にあるのは新聞だ。そこには白昼堂々 “天竜人” を殴り飛ばすという前代未聞の事件を起こした者の写真が載っている。

愛された “英雄” たちであった。だが同時に彼らにとつてはとんでもない問題児であつたことも確かだ。

何故そうなる——そう言いたくなるようなトラブルを引き寄せたかと思えば、本人たちを起点に問題を起こしてしまう。何度頭を抱えることになつたかはわからない。それ

でいてきつちり成果は上げてくるのが性質が悪かった。

世界政府という秩序を守る側として頭を悩ませたのは、英雄的な活躍をする裏で世界政府の恥部とも言える部分を暴くといったことを繰り返していたことだ。東の海での海軍による汚職を暴くことに始まり、最終的には「七武海」の一角さえも崩してしまつた。「五老星」は報告を受ける際に皆一度深呼吸するのが通例になつていたほどだ。

「そうだな。……だが、いつの間にか楽しみにしている自分がいたのもまた確かだ」

またか、と言いながら頭を抱えるようになったのが当たり前になつたのはいつからだったのだろうか。彼らが海兵として生きていた時間は実は数年程度だ。そう考えると彼らより長く生きる「五老星」にとつても実に濃密な時間であつたと言える。

しかしそんな日常は失われた。今は対処をしなければならぬ存在だ。

「何もせず、人の口の端に上がらぬようになるのであれば捨て置くことも考えたが……」

「これも「D」の意志か」

「それだけではない。娘の方はあの「赤髪」の娘だ」

「悪魔の实のこともある。……よくもここまでたつた二人に因果が集つたものだ」

上げ始めればキリがないほどにあの二人は多くのものを抱え込んでいる。本人たちが無自覚であることがより厄介だ。

まるで特異点。全ての因果と業がたつた二人に収束しているかのようだ。

「あの事件の日が全てだった。あそこで身柄を抑えることができなければ……なんとも、できたのだが」

この世界において「天竜人」は絶対的な存在であると共にルールだ。しかしそれだけで世界が動かないことを「五老星」は知っている。

あの事件が起きた日に二人を捕らえ、その処分をこちらで握ることができていけば、きつとどうにでもできた。それこそこれまでの功績を鑑みて——と、そんな風に落とし所を用意できたのだ。

しかし今となつては最早手遅れ。立ち塞がった海軍本部の中将を退け、追撃部隊から逃げ切つた。今や彼らは明確に『逃亡』という選択肢を選んでいる。捨て置くことはできない。

「過ぎたことを悔やんでも仕方がない。……今や彼らは明確に「敵」となりつつある」
ただ逃げていてるだけであれば良かったのだ。人の記憶など移ろうもの。話題に上がらなければ消えていく。そうしていつしか忘れ去られるならそれで良かったのだ。

だが彼らはその誇りを失つていなかった。追われる身でありながら、一度は市民から裏切られていながら。それでも弱き者たちを救うために戦つた。

あの二人の名はそれこそかつてのように入々の口の端に上つている。

——「英雄、健在」。

それは人々の間で徐々に一つの“思想”を形作ろうとしていた。

「早急な対応が必要だ。世界の均衡が崩れる」

あの二人の報道を受け、世界の反応は大きく分けて三つに分かれた。

一つ目。それは純粹に喜ぶ者。“英雄”を信じる者たちだ。おそらく最も数が多く、そして“五老星”が危惧している者たちである。彼らは世界政府ではなく“英雄”に希望を見出しつつあるのだ。それはあまりにも危険な兆候であった。

二つ目。それでもなお糾弾する者たち。そこにはその出生の背景があり、或いは嫉妬や逆恨みと呼ばれる感情もある。純粹な金目的もあるだろう。彼らにとっては“敵”と言える存在かもしれない。

最後の一つ。それは利害を見る者たちだ。感情ではなく利害によって自分の動きを考える。状況に応じて立ち回ることを考える強かな在り方である。

そして一番厄介なのが一つ目だ。

「この件が流れてから数日。既にいくつかの国では騒ぎが起こっていると聞く」
「たつた二人にこうも世界が振り回されるか」

二人を旗印とした“革命”の声がいくつかの国や地域で起こっていることは報告に上がつていた。どれも小規模なものであるが、状況次第では更に拡大していくだろう。

それは世界の均衡の逆を行く流れだ。何としても止めなければならぬ。

「故にこそ決断すべきだ」

一人が告げたその言葉には、他の者たちにもそれぞれの形で同意を示した。対応は早い方がいい。だが手段をどうするか。

「やはり海兵ではどうしても情が出る。ならば『アレ』を使うしかないだろう」

「……機械であれば情もないか」

「問題はどこまでの性能を発揮できるかだが」

相手は衰えたとはいえ元“四皇”を討ち取った今代の“英雄”である。未だ試作品であるあの兵器でどこまでやれるか。

「後は数で押ししかない。……悲しいが、どれほどの強者でも数には勝てないものだ」

反対の意見はない。結局のところたつた二人なのだ。数の暴力の前にはどうしようもないだろう。

そうして一つの決定が下された。かつて“英雄”と呼ばれた者たちを討ち取る。それが今、ここで改めて言葉にされた。

世界政府。

この世界において“秩序”を守る力が、“堕ちた英雄”へと襲いかかる。



ルフイとウタ。その二人が次に目指したのは一度訪れたことのある国であった。いくつかの島が集まることで構成される国であり、お世辞にも豊かとは言えないが温かな国であったと二人は記憶している。

ちなみに二人の元部下がいたあの小さな集落のある島は今日目指している国の隣国所屬だ。だがかつて二人が過ごした故郷でもあるフーシャ村と同じように片隅の田舎という扱いであり、ある種忘れ去られつつある場所でもあるというとのことだ。

少し懐かしい感じがしたのはそういうことかと納得した二人は住民たちから多くのものを受け取り、再び海を渡っている。そして今日目指している国についてだが。

「ご存知だと思いうツスけど、気を付けてください。あそこは支部が近いんで」

島を出る際、彼らの元部下である青年はそう忠告してきた。それについては二人もよく覚えている。むしろ一度訪れた理由がそれであったのだ。

その国がいくつもの島が集まって形成されている国であることは先に述べた通りである。その島の中の一つ、最も外側にある無人島に海軍は支部を建てたのだ。その理由はいくつかあるのだが、それは良いだろう。

かつての二人は巡回の途中に遭遇した海賊たちを引き渡すためにその支部を訪れ、続きと補給の合間にその国を訪れた。最初はただの時間潰しを兼ねた短い休暇であったのだが、最終的にゲリラライブに至ってセンゴクに怒られたのはいい思い出である。

——そう、いい思い出。

今はもう、戻らぬ日々の記憶である。

「顔は隠した方が良いだろうな」

「……そうだね。多分すぐにバレちゃう」

時間は夜。遠くに島の影とそこから発せられている光が見え始めたところで二人はそんな風に言葉を交わしていた。海兵時代は自覚が薄かったことではあるが、やはりこの二人の知名度は圧倒的なのだ。

海兵であれ海賊であれ、或いは偉人であれ。有名な者は大勢いる。だがこの場にいる二人はその実際の姿を知る者が非常に多いのだ。広報としての役目を負っていたということもあるし、人前に出る場面が多かったということもある。何より海軍と世界政府自身がこの二人を“象徴”としていたことが一番だろう。

噂が噂を呼び、実際とは違う風体を想像されることは多い。しかしこの二人はその実際の姿が様々な媒体を通じて世界へ届けられている。故にこそ初めて訪れる場所でもすぐに気付かれたし、そしてそういつた目で見える実際の姿は人々にとって“希望”で

もあつたのだ。目に見える「象徴」。この「大海賊時代」においてその存在はどれほどの重さを持っていたか。

——しかし、今やその知名度が二人に大きいのしかかっている。

かつては違った。初めて訪れた場所であつても「麦わら」と「歌姫」とわかれば多くが好意的に接してくれものであつたが、今は逆。その知名度故にそこに「大罪人」がいるとすぐに気付かれてしまう。

「できるだけ人にいるところには行きたくないけど……」

ウタが呟く。隠れることの難しさについてはこの短い間でも十二分に理解した。最初の島ではすぐにバレて通報されたし、次に訪れた島では元部下であつた青年以外の者もすぐに二人の正体に気付いたのだ。

それは一つの証明であつた。この二人がどれだけ世界に愛されていたのか。どれだけの人に知られていたのか。その証明であつて。

——同時に、呪いでもあつた。

「……仕方ねえよ」

ルフィが呟く。そう、仕方がないのだ。

目指す先も何もわからないこの逃避行。しかしだからこそ情報と食糧を中心とした物資は重要だ。終わりが見えない以上知っておくべきことと持っておくべきものは多

い
の
だ
か
ら
。

いっそのこと、と思わなかったと言えば嘘になる。

人のいない場所、どこかの無人島にでも引きこもって全てを閉ざすという選択肢。何もかもから逃げるのだと。

だが今の二人はそれを選ばなかった。それは苦しい現状であつたとしても絶望まではしていないからだろう。

まだ、大丈夫。

どこかでそう思っていたのだ。

「……夜のうちに上陸しよう」

確認するようなその言葉はどちらのものか。

夜の闇の中を行く光を頼りに、しかしいくつもの光の集まる場所からは離れた場所へ。

かつては正面から堂々と訪れた国へ、今度は隠れて上陸する。それが今の二人の立場を何よりも示していた。



夜のうちに辿り着いた海岸では人の気配はなく、また普段から使われているような形跡もなかった。それを入念に確認し、二人は眠りにつく。

寄り添うようにして眠る二人はしかし、どうしても眠りが浅くなってしまう。周囲を常に警戒しながらの睡眠はどうしても神経を擦り減らしてしまうのだ。

「……………」

目を覚ます。疲労は消えていなかった。頭に鈍い痛みのようなものも感じる。

海軍時代は恵まれていたのだと改めてウタは思った。警戒を解いてはいけない状況は多かったが、しかし二人だけということはなかったから分担ということができたのだ。互いが互いを支え合う——それは海軍という組織だからこそその力だろう。

今の二人は頼れる存在というものがない。お互いの存在だけが頼りだ。

「起きたか」

身じろぎをすると、ルフィが囁くようにそう言った。

「うん」

ウタが頷きを返す。そしてしばらくの沈黙。寄り添うようにして二人はただ黙して船の中で時を過す。

触れ合う場所を通じて感じる体温だけが、互いの存在を確かめさせてくれた。

「……行くう」

どれぐらいそうしていたのだろうか。眩くようにルフィが言い、立ち上がる。その彼が差し出した手を取り、ウタも立ち上がった。

ローブを羽織り、顔を隠す。互いのそんな姿を確認すると二人は船を降りた。

かつてこの国を訪れた時に行った場所はこの群島の中心よりやや北にあるこの国の首都だ。故に今二人がいるこの島は初めて訪れる。外から見た感じではそれなりに大きな街があった。石造りの家屋が立ち並ぶその街は外から見るとそれなりに繁栄しているようだ。

人が多いということは見つかりやすくなるが、人に紛れることができるということでもある。活気があり人の往来が多いのであればそこに紛れることはできるだろう。

「……ルフィ、確認」

「おう」

街へと向かう途中、そんな言葉を交わす。手を握り、寄り添うようにして歩きながら。「とりあえず必要なのは水。……ありがたいことにお金は貰ったし」

「助けられたよな」

元部下のいた集落から出る際に食料や水を貰ったが、更にある程度の纏まった金も

貰ったのだ。最初は固辞したのだが、『ルフィが倒した海賊の懸賞金も入るのだから』と押し切られた。

実際助かったのだ。お金というのは非常に重要なものだ。特に今の二人はできるだけ問題を起こしたくない立場にあるし、不必要に目立ちたくもない。金で解決できることはそうしたかった。

助けられたと彼らは言っていた。だがそれはこちらもだ。彼らの力を借りることができたから、今こうしてまだ二人は立っている。

「うん。……だから」

その先の言葉を、ウタは紡げなかった。

だから——何だ？

逃げるのか？

生きるのか？

この先をどうするのだ？

(まただ)

何度も何度も考えてしまう。この先の未来はどうなるのだろうか。どうすべきなのだろう。そんなことを繰り返し返して。

かつての戦い。あのメルヴィユでの戦いでウタの“見聞色の覇気”は“未来を視る

“領域に至った。しかしそれは数秒先のものであり、これからの二人の未来を見ることができようなものではない。更に言えば今の彼女は一度は至ったその領域にもう一度踏み込むことができなくなっている。

自分達を追ってきた海兵、ヴェルゴとの戦闘もそうだった。

訪れた島が海賊に襲われた時もそうだった。

今のウタは戦うことができない。足が竦み、踏み出せなくなる。かつてのように前に出ることができなくなってしまうていた。

何のために戦っていたのか。

何のために歩んできたのか。

何のために——生きていたのか。

もう何も、わからなくなっていて。

「……変だ」

沈んでいく思考はルフイのそんな眩きによつて中断された。そしてウタも顔を上げるが、彼女もまた周囲の光景に眉を擡める。

二人がいるのは街の入り口を窺える場所だ。申し訳程度の門があるが開かれており、入ることは難しくない。しかし妙なのはそこではない。

「誰もいない……？」

そう、人の気配がないのである。

夜に灯っていた灯りから察するにそれなりに栄えている街であるはずだ。この国は島が集まって形成されている国であるが、それぞれの島一つ一つも それなりの大きさがある。その大きさからしても島一つに街一つというわけではないだろう。そうであれば街同士での行き交いもあるはずであり、入り口にはそういった交易のための人員がいて然るべきだ。

何 かがあつたのだろうか。そう思いながら二人は街へと足を踏み入れる。

「建物は別に荒れてないけど……」

「海賊にやられたってわけじゃなさそうだな」

街の建物に荒れた様子はなく、人がいないという状況以外におかしなところは見受けられない。一部古い建物はあるが異常というようなものではない。

日常の風景でありながら、人のいない街。それがこの街に対して感じた印象であった。

「——声？」

ふと風に乗ってくるそれに二人は気付いた。離れた場所から微かに声が聞こえてくる。

二人は顔を見合わせると頷き合い、周囲を警戒しながら歩き出した。声が出したのは街

の中心と思しき場所だ。二人は周囲を警戒しながらその場所へと歩いていく。

……ドクン、と。

一度、ウタの心臓が大きく鳴った。思わずルフィと手を繋いでいる右手とは逆の左手を胸元へと持ってきてしまう。

(何か)

それは「見聞色の覇気」によるものか。

或いは、「本能」と呼ばれるものか。

(この先には)

何が彼女へ囁いたのかはわからない。ただ、一つ。

この先へ進むべきではないと、何か彼女に告げていた。

「……大勢いるな」

だが、その足は止まらないまま進んでいく。

この逃亡の日々が始まったあの日のように。ウタはルフィに手を引かれるままに進んで。

「——今こそ立ち上がるべきだ!!」

その光景を、目撃した。

辿り着いたのは広い場所。大勢の人間がそこには集まっている。

「日々の暮らしは苦しくなる一方だ！ 日々食べるものさえも国は我々から奪っていく！」

おそらく、普段は人々の憩いの場であるのだろう。もしかしたら定期市が開かれているのかもしれない。の広場は正しくこの街の中心であることが窺えた。

街の中心たる広場。更に中央に組み立てられた簡単なお立ち台。その上で言葉を紡いでいるのは一人の中年の男性だった。衣服はくたびれており、その表情にも疲れが見える。

「それは何故だ!? そうだ天上金だ！ 加盟国であるための義務だ！」

その男性だけではなかった。その周囲にいる者たちもくたびれた服を着た者ばかりであり、疲れたような表情をしている。

熱意がある言葉は彼らにも熱を宿す。しかし同時に、どうしようもないほどの悲壮感も纏っていた。

「我々から全てを奪おうとする存在!! “天竜人” が全ての元凶だ!!」

紡がれたその言葉に、二人の体が反射的に震えた。

この世界における絶対者、“天竜人”。それはこの二人からその積み上げてきたもの

を奪った存在である。その存在が持つ権力は絶大であるが好かれているわけではない。しかし声高にその存在を糾弾することは罪となる。

だがそんなことなどお構いなしとでもいうかのように男性は告げる。

「耐えるだけでは何も変わりはない!! 今こそ立ち上がるのだ!! あの方々のように!!」

宣言するような言葉と共に、男性が手に持ったものを高く掲げた。

それは使い込まれた農具。しかしその先端に何かが付付けられている。

「あれ、って」

呆然とした声がウタの口から溢れた。ルフイの表情は見えない。

——掲げられていたのは、麦わら帽子。

それは「英雄」の持ち物。

世界のか弱き人々にとって、ヒーローの証であった。

「

おそらく無意識なのだろう。ローブの中に隠した麦わら帽子ヘルフイが手を伸ばした。ウタは彼の表情が見えない。何を思っているのかがわからなかった。

「抗う道もあるのだと!! 彼らが教えてくれたのだから!!」

爆発するような歓声が響き渡った。武器を持っているわけではない。その場を集つ

た者たちは中心にいる男性と同じようにそれぞれの仕事道具を持ち、或いは何も持たずにその場にいる。

だがその熱気は凄まじいものであった。そこにあったのは怒りであり、悲嘆であり。痛いほどの感情。それをウタは感じてしまう。

(これは、なに)

だがウタの中には困惑しかない。彼らは何を言っているのだ。何をしようとしているのだ。

どうしてあそこに……麦わら帽子が。

「誰？」

その後継に気を取られ過ぎたのか。二人は背後から近付いてきた気配に気付かなかった。

「——ッ」

だが反応は速い。ルフィはすぐさま振り向くとウタの肩を掴み、彼の背後へと庇うようにしてその身を引き寄せた。

しかしその咄嗟の動きのせいでウタのフード外れた。紅白の髪が頭になる。

「あなたは、まさか」

声をかけてきたのは女性であった。くたびれた服を着て、疲れた表情をした女性だ。目の下の隈を見るに決して楽な生活をしているわけではないことがわかる。

慌ててフードを被り直そうとするウタ。しかしその前にその女性が崩れ落ちるように地面に膝をついた。

「嗚呼……天よ……!」

その声には涙が混じっていた。膝をつき、手を合わせ。祈るようにしてその女性は言葉も溢す。

彼女が「神」という言葉を使わなかったのは、その存在こそが彼女たちにとっての「敵」であるが故か。

「我らが救世主様……!!」

何も言えずにいる二人の前で、その女性が首を垂れて手を合わせる。

——それは、まるで。

あの「天竜人」に対して行うような所作で。

ルフィも、ウタも。ただその大切なもののために在っただけだ。この二人に「思想」などなかった。「想い」があっただけだ。譲れないものがあっただけに過ぎなかったのだ。

故にこそこの「逃亡」だ。世界を変えるだとか、政府を変えるだとか、そんなことは欠片も考えていなかった。互いのことだけで精一杯だったのだから。

だが最早、世界はそれでは許してはくれないのだと。

この国の戦いにおいて。——二人は思い知ることになる。



「申し訳ありません……!」

ルフィとウタの二人が訪れている国の近くにある海軍基地。そのドックにそんな声が響いた。もう何度目かもわからない言葉である。

頭を下げているのは数人の若い海兵だった。その先には一人の海兵がいる。

「謝るようなことじゃない。……むしろ今までよくついてきてくれた」

「ヴェルゴ中将……! 自分は、自分はッ……!」

「気持ち痛いほどわかる。……我々は兵士であるが、人間でもあるんだ。恥じることはない」

涙を必死で堪えて言う若き海兵の肩を、その海兵——ヴェルゴが優しく叩く。その海兵だけではなく、頭を下げていた海兵たちが感極まったように呻き声を漏らした。

「すまないがキミたちを送つてやることはできない。だが帰還の手配はしておくので安心して欲しい」

「ッ、申し訳ありません……！」

海兵たちが顔を上げる。その海兵たちは一斉に敬礼をすると、ヴェルゴに向かつて心からの言葉を向けた。

「〔武運を！〕」

それに対し、ヴェルゴもまた敬礼を返す。

「ああ。短い間だったが、キミたちと共に戦えて光栄だった」

そして若い海兵たちが立ち去つて行く。それを見送ると、ヴェルゴは近くにいた人物の方へと向き直りながら言葉を紡いだ。

「すまないな。見苦しいところを」

「……いや」

ドックに用意されたソファに座っていたのはスモーカーであった。メルヴィユの功績によつて少将の地位に昇格した彼は自身の部隊を率い、活発になつた海賊たちへの対処に動いていた。実際に成果も上げており、“白狼のスモーカー”の名は今まで以上に

広く知られつつある。

その彼は補給のためにこの支部を訪れていた。そこで偶然にもルフィとウタの追撃任務を遂行中のヴェルゴ率いる部隊とこうして居合わせたのだ。

「あれは部隊から？」

ヴェルゴが見送った海兵たちへと視線を送りつつスモーカーが問う。ああ、と彼の正面のソファに座りながらヴェルゴは頷いた。

「迷いがあるまま戦うと碌なことにならない。……あの記事がトドメだったようだ」

あの記事、というの一つしかない。『英雄、健在』——その見出しと共に世界中へ届けられた情報だ。それは今や海軍の敵となった二人がそれでもなおその在り方を見失っていないことを示していた。

「あの海賊を引き受けたのは我々だ。流石に堪えるだろう」

二人が救った集落で捕らえられた海賊。それを引き取ったのはヴェルゴの部隊だ。つまり彼らは直接目にしたということである。

自分達海軍が間に合わなかったという現実と。

自分達が罪人として追っている者たちが人を救ったという事実。

そしてそこにあの記事である。折れる者が出ては仕方がない。そして実際、三分の一にも上る海兵がこの任務から降りることを希望し、ヴェルゴはそれを受け入れることに

した。

「……それで、これからは？」

「海軍……と言うより世界政府か。『アレ』の使用についての指示が出た。ここでその到着を待つ」

ヴェルゴが言う『アレ』とは海軍における新たな戦力だ。一定以上の階級にある者はその存在を知らされており、スモーカーも知っている。

あの二人に対してどこまでの効果があるかは疑問ではあるが、下手な海兵よりも単純な戦力で言えば頼りになる兵器だ。スモーカーは葉巻の煙を吐き出しながら言葉を続ける。

「二人の足取りは？」

「おそらくはそう遠くない場所にいるだろうが……情報を待つしかない」

二人の追撃を任務としているヴェルゴの部隊であるが、相手が小舟であることも考えるところとそう距離が離れているとも考え難い。だがやはり二人きりというのが厄介だった。その居所に確信が持てないのである。

故におそらく近辺にいるという場所で探しつつ情報を待つことが基本方針だった。実際最初の接触はそうして補足した結果だ。

「まあこの国もかなりきな臭いことになっているようだ。時間がかかるようならそちら

に手を入れてもいい」

加盟国ではあるが、最近は何々と噂を聞く国でもある。政情が不安定なのであれば介入の必要もあるかもしれない。まあそれも上からの指示次第ではあるが。

いずれにせよヴェルゴたちはしばらくここで足止めである。そして彼はスモーカーの方へと視線を向けた。

「キミたちはどうする？」

その問いかけに対し、スモーカーは即答できなかつた。普段から眉間に皺を寄せた表情をすることの多い彼だが、この時は普段以上に深い皺が刻まれている。

ヴェルゴも回答を急ぐようなことはしなかつた。そして数分、互いに無言の時間が過ぎる。

何かを言おうとするスモーカー。だがその前にヴェルゴの副官が駆け寄ってきた。

「報告します」

「どうした？」

問いかける。すると敬礼しながらその副官が言葉を続けた。

「CPより連絡がありました。件の二人の姿を確認したと」

スモーカーの眉が跳ねた。対し、ヴェルゴは冷静に頷きを返す。

「進路を考えるとそうなると踏んでいたが……」

「現地民と接触したようです。その、例の件で監視していたところに到着したようで」
「……よくもここまで巻き込まれるものだ」

ポツリと呟くヴェルゴ。その彼に対し副官が問いかける。

「すぐに向かいますか？」

「……いや、『アレ』の到着を待つ。彼らがすぐに出るようなら追うが、そうでないのであればこちらも体勢を整えるべきだ」

ヴェルゴの言葉に承知しました、と副官が応じ走り出す。それを見送ると、やれやれ、とヴェルゴが肩を竦めた。

「人手が足りない時に限ってこうなる」

そして立ち上がるうとする彼に対し、スモーカーが言葉を紡いだ。

「ならそれをおれたちが補おう」

ヴェルゴがスモーカーへと視線を向ける。いいのか、と彼は言葉を紡いだ。

「キミたちにはキミたちの任務があるはずだ」

「目の前に賞金首がいるのなら、見過ごすわけにはいかねエ」

その言葉に未だ迷いがあることにヴェルゴは気付いた。だが本人がこう言うのだ。ならばそれを無碍にしないほうがいいと彼は判断する。

「感謝する。だが先程言ったように少し準備が必要だ。数日内に届くと聞いているが」

「部下には言っておく」

立ち上がるスモーカー。そのまま彼はこの場を立ち去っていく。その背を見送りつつ、ヴェルゴは腕を組んで考え込む。

そして彼は何かを思いついたのか、その場を離れて歩き出す。その彼に対し、近くにいた海兵が声をかけた。

「中将殿。その、今朝は目玉焼きを……？」

「む、そうだが。何故わかった？」

「その、頬に」

言いにくそうにその海兵が指摘する。

……ヴェルゴの頬には、目玉焼きが張り付いていた。



今や台風の日となった二人の“堕ちた英雄”。多くの勢力がその身柄を狙う中、世界中が動くと確信している勢力がある。

——“革命軍”。

弱者の味方たる彼らは“天竜人”を否定し、そして世界政府をも打ち倒そうとしている者たちだ。その彼らにとってみれば今や世界の中心となりつつある二人の存在は絶對に失えない存在である。

革命軍を率いる男、モンキー・D・ドラゴン。渦中の“麦わらのルフィ”が彼の息子であるということも勿論ある。だがそれ以上にその行動と在り方が革命軍にとっては無視できないのだ。

神たる存在“天竜人”に正面から“否”を叩きつけた。世界を敵に回し、民衆からも糾弾され。それでもなお弱者のために拳を振るった。その在り方は革命軍の理念に正面から合致する。

だが実際のところ、革命軍と彼ら二人はトップとの血縁以外に関係はない。そのトップについても親子としての触れ合いをほとんど経験しておらず、繋がりはないと云ってもいい。何なら海軍という組織に所属していた時代においては敵同士だ。

しかし民衆にとってそんな背景などどうでもいいことだ。二人に対しての民衆の考えは割れている。だが“天竜人”に逆らったという事実だけは揺るぎない真実だ。そんな二人に万が一のことがあった時、革命軍の支持は揺らぐ。“天竜人”に反旗を翻し、自身も苦境にありながら民衆を救った者を見捨てた——その事実だけが残った時、

革命軍はその土台から崩れてしまふ可能性さえも孕んでいた。

故に何としてもその身柄を確保しなければならぬ。だが彼らもまた海軍や他の勢力と同じで二人の居場所を特定できていないのが現状だ。故にこれは競争でもある。

そして厄介なのは、彼らはそれだけに注力できるわけではないということだ。『大海賊時代』というこの荒れた時代において彼らを求めるか弱き声は無数にある。それに応えるのもまた大切な役目なのだ。

「しかしサボ。お前がわざわざ動くほどのことなのか」

海を往く船の中、そんなことを言ったのは魚人の男性——ハックだ。腕を組んだ彼の視線の先にはゴーグル付きのシルクハットを被った青年がいる。

左目の辺りに火傷の傷痕を持つその青年の名はサボ。『革命軍総参謀長』という肩書きを持つ、『世界最悪の犯罪者』ドラゴンの右腕だ。

「万が一のためだ。元々注意はしてた国だが……」

新聞を机の上に置き、サボは言う。彼は情に厚い青年であるが、それだけで総参謀長などという立場に立てるわけがない。

冷静に、冷徹に。そういう思考を回すこともできるからこそその革命軍No. 2である。

「以前は随分と豊かな国であったと聞いているが」

「栄枯盛衰だ。……無限に続く繁栄なんてねエからな」

彼らが向かっているのはとある国だ。いくつもの島が集まって形成される国であり、かつては加盟国の中でも有数の豊かな国であった。しかし十年ほど前から状況が変わり、どんどんその立場と状況が悪くなっている。

そんな国のある人物から革命軍へと連絡が来たのだ。連絡を寄越してきたのは王国の兵士、しかも兵を束ねる將軍の地位にある者であった。

「將軍ともなれば王の側近。それが見限るほどに状況は悪いか」

「もしくは罨か」

今向かっている国はすぐ側に海軍支部の基地がある。罨の可能性も十分にあった。

だからこそ精銳を率い、サボが指揮を執って向かっているのだ。彼が言う『万が一』とはそういうことである。

「それに例の二人についてもだ。素直に進むならこの国に行き着く」

新聞に載った写真を見つめながらサボは言う。ズキリ、と彼の頭に痛みが走った。

「もし接触できたとして素直に応じるか？」

「どうだろうな。どっちも頑固者だ」

息を吐きながら言うサボ。その彼に対し、ハックが怪訝そうな表情を浮かべた。

「まるで知り合いであるかのように言うのだな」

「ん？……いや、会ったことはねエ。ない、はずだ」

サボ自身もハックに言われて気付いた。思わず口から零れ落ちたのだ。

伝え聞く情報ならばある。その人となりも。だが会ったことはない。……ない、はずなのに。

違和感。まるで何かを失くしてしまっているかのような、そんな感覚。

サボはそれを振り払うように首を一度振ると、切り替えるように言葉を紡いだ。

「到着まではまだ数日かかる。あの辺りは海軍の領域だ。警戒は怠らないでくれ」

「わかつている」

頷くと、ハックは部屋を出て行った。それを見送り、サボは再び机の上の新聞へと視線を向ける。

そこに写る二人について、彼は幾度となくその動向についての情報に触れてきた。革命軍は海軍を滅ぼそうとしているわけではないが、ぶつかるとはある。そこに在籍する実力者については知っておいた方がいいに決まっている。

だが、何故か。

彼らの名前を聞く度に、何か言葉では言い表せない感覚に襲われるのだ。

それが一体何なのか。わからないまま今日まで来ている。

「……何なんだろうな」

その眩きに対する答えは、どこにもない。

彼自身が気付くまで。それは己の内にあるのだから。

とある一つの国。その盤面に役者が揃いつつある。

誰もが己の目的のために生きているだけだ。そこにそれ以上の意図などない。だがまるで導かれるようにして集う彼らが引き起こすことを、世界はきつとこう呼ぶのだろう。

—— “運命”、と。

『世界の灯火』 ②

その光景を前にして、どうしたらいいのかがルフィにはわからなかった。

皆が首を垂れている。敬うように、縋るように。

——それは、まるで。

あの、『天竜人』に対してしなければならぬ所作のようで。

「……………」

ルフィの口からはしかし、言葉が出なかった。

かつての彼であればその光景に眉を顰めただろう。「窮屈」とでも言つて彼らに立ち上がるように言つたかもしれない。

だが、今の彼にはそうできなかった。

自身の影に隠れるように——いや、隠すようにしているウタもまた動けずにいる。

ただ、彼女の体は震えていた。それはあの日を思い出したからであろうか。

「皆、そこまでに。困っておられるようだ」

そんな風に二人が言葉を探す中に声が響く。言葉を紡いだのは台の上で言葉を発していた中年の男性であった。足が悪いのか麦わら帽子を括り付けた農具を杖代わりにしてこちらへと歩み寄ってくる。

「先生」

近くの女性がその男性を見て声を上げる。彼は頷くと、促すように手を差し出した。

「私も同じ気持ちではあるが、それで困らせては元も子もない。……申し訳ありません。お会いできて感極まったのです」

そう言うと「先生」と呼ばれた男性がこちらへと頭を下げた。反射的にウタも頭を下げたのを感じる。

綺麗な所作であった。着ている服はくたびれてこそいるが、みずぼらしい印象はない。

「いきなりで困惑しておいででしょう。どうぞこちらへ」

言いながら「先生」が二人を先導するように歩き出す。それを見、二人は顔を見合わせた。

悪意は感じない。「先生」と呼ばれる男もそうだし、周囲の者たちからもだ。むしろ

好意的な感情さえも感じる。

——行こう、と。

言葉を発さないまま二人は意見を一致させた。万一の場合は全力で逃げればよい。今は下手なことはいらない方がいいと判断したのだ。

「……………」

先導する「先生」の背を追いながら、ルフィは一度周囲を見る。首を垂れていた者たちは「先生」の促しを受けて立ち上がっていた。だが向けられている感情に変化はない。

そこには希望と、期待と、憧れと。

継るような「祈り」が込められている。

「……………ルフィ」

小さな声でウタがこちらの名を呼び、握る手に力を込めた。応じるようにルフィもまたその手を握り返す。

わからない。わからないことだらけだ。

否定の感情を、最初に訪れた島で向けられた。

肯定の感情を、次に訪れた島で向けられた。

しかし、この場所で向けられているものはその二つとも違う気がするのだ。否定では

ないし、肯定ではある。しかしそれだけで済ましていいものではないように思うのだ。
「狭い家ですが」

歩いた距離はそう長くはなかった。広場から少し歩いた先の集合住宅、その一室だ。扉を開ける。『先生』の後をついていき、部屋に入る。

生活感がありながらも整頓された部屋であった。隅にある本棚とそこに収められたいくつかの本以外は必要最低限のものしかない。

思わず部屋の中を見回してしまふ二人。だが『先生』はそんな二人に対し、突然床に膝をついて頭を下げ始める。

「――申し訳ありません……！」

そこには強い感情が込められていた。心の底からの謝罪であることはすぐにわかった。

「え……」

困惑の言葉が漏れた。『先生』は所謂土下座の体勢のまま言葉が続ける。

「お二人の名を勝手に騙り……！ 真に申し訳なく……！」

しかし、と『先生』は言う。

「どうかお見逃しを……！ 我々には縫う物が必要なのです……！」

「……どうということだ？」

ルフィが問う。すると、「先生」が顔を上げた。

その顔には強い覚悟のようなものが宿っている。今の彼のような顔を二人は何度も見たことがあった。

それは部隊を預かる指揮官の顔であり。

国を預かる王の顔であり。

即ち——人の命を預かる者がしていた顔だ。

「今日を……明日を生きたためなのです」

ルフィもウタも自然と膝を折っていた。その二人に対し、「先生」は言葉を紡ぐ。

「この国を変えなければならぬ。そうでなければ、彼らは。あの者たちは国に殺されてしまう」

だからどうか、と「先生」は言った。

「お二方の名を使うことを、どうか許してください」

まるで縋るような、祈るような言葉。

自分達の倍以上は生きているであろう男のそんな言葉に対し、二人はすぐに言葉を紡ぐことができなかつた。

「身勝手なことを申し上げているのは重々承知です。しかしどうか。皆の背を押すために」

その言葉と共に必死で頭を下げる「先生」。その感情に偽りがないことは嫌というほど伝わってきた。

かつての二人であればこの時点で手を差し伸べていただろう。そうして多くを巻き込み、しかし救ってきたからこそその「英雄」だ。しかし今の彼らはすぐにそうすることができなかつた。

仲間がいた。信じられる味方がいた。だからこそ誰かを救うことができたのだ。けれど今は。たつたの二人ぼつち。

軽々しく誰かに手を差し伸べる余裕などない。自分達のことと精一杯である。

「話を」

そうであつた、はずなのに。

「話を、聞かせてください」

かつて「歌姫」と呼ばれたその「英雄」は、それでも目の前の男へとその手を差し伸べた。

……きつと、わかっていたのだ。心のどこか、奥底で。

ここで手を差し伸べないことを選んでしまつたら。そこで何か壊れることを。

「……………」

ルフィはそんなウタの手を握り締める。

何があつても。何を賭すことになるうとも。

——ウタだけは、絶対に守る。

己自身へ、そんな誓いを立てるように。

彼はただ、彼女の手を握るのだ。



男性——“先生”と呼ばれていた人物に促され、二人は席に着いた。使い込まれた円形の机と椅子。三人分のそれはつまり、この部屋の主人である彼が三人家族であるということなのだろうか。

「かつてこの国は非常に裕福な国でした。……今はもう見る影もありませんが」
ポツリ、ポツリと。まるで零れ落ちる雫のような言葉が響く。

「ご存知かもしれませんが、この国にはとても大きな鉱山があります。主に採れるものは銀と銅。それによってこの国は栄えました。いえ、それによってというと語弊がありますね。銀と銅が採れる島であるからこそこの島々に人は集まり、王国ができました」

彼が語ったのはこの国の成り立ちであつた。

曰く、銀と銅が大量に採れる鉱山がある島をとある者たちが見つけたことが始まりだという。その冒険家ともいふべき者たちが島を開拓し、その噂を聞きつけて多くの人間が集まつた。銀と銅という資源は国に多くの富をもたらすことになる。

富——即ち金が集まるということは人が集まるということ。人が増えれば周囲の島の開拓も行ふことができるし、人は人を呼ぶ。そうしてこの国は栄えてきた。

だが金が集まれば危険も増す。そこで世界政府に働きかけ、近くに海軍基地の設置も認めさせた。世界政府としても貴重な資源と富を持つ国だ。両者の利害は一致していた。

「しかしその栄華は永遠が約束されたものではありません。栄枯盛衰、盛者必衰。……いつしか鉱山からはかつてのような銀も銅も採れなくなりました」

それがわかつたのはここ数年の話だという。先代の王が病によつて亡くなり、その息子が跡を継いだ直後から状況は急激に悪化した。

「しかし資源が採れなくなつたからといって世界政府は待つてなどくれません。『天上金』……国家が国家であることを認めてもらつたためのもの。『人権』を買うという行為。それを疎かにはできませんでした」

結果として課されたのが凄まじいまでの重税であつたという。

その日を食べるための食料を買う金さえも残らないほどの重税。しかし払わねば人でいられなくなる。故に誰もが耐えることを選んできた。

「かつてはこの街に限らず、あらゆる街が活気に満ちていました。月に数日だけ鉾山に出ている男たちが帰ってくればその帰還を祝い、広場では市場が開かれて。……しかし今や、そのどちらもありません。あの広場にも若い男はいなかったでしょう？」

思い返す。確かにあの広場にいたのは老人と女性、そして子供だけだ。目の前の「先生」はまだ老人という年齢ではなさそうであるが、それでも若くはない。

ならば若い男たちはどうしているのか。それに気付いたウタが呟くように言う。

「まさか、ずっと」

「はい。かつてほどではないにせよ、僅かであれまだ採れます。故に男たちは休みもななく働き続けていると……」

「……酷エな」

ルフィが眉を顰める。「先生」は頷くと、それでも、と言葉を紡いだ。

「それでも非加盟国となるよりは遥かにマシではあると自分達を慰めていました。しかし状況は悪くなるばかりで」

「前に来た時はそんなこと……少しも」

ウタが言う。彼女もルフィも一度この国に訪れたことがあった。その時は王宮のあ

る島に訪れたただけであつたが、それなりに活気があつたように思つたのだ。

この「先生」の口調ではこの窮状は昨日今日に始まつた話ではない。ならば二人が訪れた時にはすでにその兆候があつたはずなのだが。

「見せられません。それは「弱み」ですから」

そんなウタに対し、苦笑と共に「先生」は言う。

「この国は豊かであるからこそ、海軍基地を近くに置くということをしてもらえた。豊かであるからこそ、世界政府内でも一定の発言権があつた。そしてその「豊かさ」の根拠が資源です。それが枯渇しつつあるなど他国に見せられるはずがありません」

要は単純な構図であるのだ。貴重な資源が多く採れる国。その価値は世界政府にとつても非常に高く、だからこそ守るために近くに海軍を配置した。

それはつまり、価値がなくなれば見捨てられるということ。

だからこそこの国はそれを隠していたのだ。何の問題もなく国が回っているように見えるようにと。

「お二方がかつて訪れた時に見たのは虚像です。……世界政府も一枚岩ではありません。平等を謳う円卓の会議——「世界会議」。しかしその現実には平等とは程遠い。その背景に力がなければ発言さえもできないのが国同士の関係であり、世界政府という組織です」

ああ、そうかとウタはそこでようやく理解が追いついた。だからこそその「天上金」を捻出するための重税でありそれによる国民の困窮なのだ。

神たる存在「天竜人」に支払うことが義務となつてゐる巨額の金。それを払えなくなつた時、この国は加盟国ではなくなつてしまふ。

かつては裕福な国であつたこの国は故にその支払いも滞りなく、そしてそれこそが国としての「力」の証明であつたのだ。だからこそ海軍基地も近くに設置されたし、おそらくは世界政府内でも相応の立場と権勢を誇つてゐたのだろう。周辺の国々に対しても相応の力を發揮してゐたはずだ。

だがその立場を形作つてゐた根拠が現状では失われつつある。その中でこの国の王が選んだのは延命だった。現状を隠し、世界に健在をアピールする。だがその代償としてこの国の民は苦しむことになつてゐる。

「だからあんなことを」

思ひ出すのは「先生」が壇上で語つてゐた言葉。

——立ち上がろう。そして抗おう。

耐えるだけでは何も変わらない。

それがこの人の語つてゐたことであつた。

「待つだけでは取り返しをつかぬことになりませぬ。言葉が強くなりましたが、ああ

「いう場で理性的に語っても誰にも届きません」

「そう言うのと、申し訳ありません、と『先生』はもう一度頭を下げた。

「彼らの心を動かすには何か『象徴』が必要でした。故に勝手ながらお二人の名を」

「彼らを苦しめる根本は『天上金』だ。だがその根本にはこの世界の神がいる。正面から『天竜人』に抗った二人の名を『先生』は利用した。

ウタが吐息を零す。理解はした。だがまだ納得はできていない。

「自分たちの名前が使われたことではない。そんなことはこの際どうでもいい。問題は彼らがしようとしていることだ。

「だって、ウタは知っている。」

「今の彼らがやろうとしていること。それは——」

「……難しい話はわからねエ」

腕を組み、いつになく真剣な表情で呟いたのはルフィだ。

「国がどうかよ。おれにはわからねエ」

「……そう、ですか。しかし」

「——戦うのか？」

ウタは思わずルフィの顔を見た。そしてその表情を見、彼もまた同じことを思い出していることを確信する。

それは砂の国の物語。生涯の仲間たるとある王女と共に戦った記憶だ。
「教えてくれ。もしそうなら、おれはおっさんたちを止める」

言葉は短かったが、そこには重い覚悟がこもっている。それはあの砂の国での戦いが彼に叩きつけた現実の重さを示していた。

最後こそ笑顔になれたし、あの砂の国は現在驚異的な速度で復興しつつあるという。だが全てを拾い上げることができたわけではない。何かが違えば更なる悲劇が起こっていただろう。

失われたものがあつた。傷ついたものもあつた。誰もが国を想つた戦いは、しかし国を想う者同士で争つたということでもある。誰もが同じように国を愛していたのに、それでも傷つけ合うことになつたのだ。

あの戦いを経てルフィとウタは「新時代の英雄」と呼ばれるようになった。しかし同時に苦い現実を知つた戦いでもあつたのだ。

救えなかつたものは、確かにあつたのだから。

故にこそルフィはそれを見過ごせなかつた。あの戦いを知っているからこそ、何もしないわけにはいかなかつたのだ。

「——これはおそろく、戦いと呼ぶべきものでしょう」

対し、「先生」は迷ふことなくそう応じた。ルフィが眉を顰める。だが彼が何かを言

う前に「先生」は言葉を紡いだ。

「しかし我々に刃を持つて戦う術はありません。故に対話を。言葉と想い、そして道理を武器として我々は戦うのです」

ルフィの表情が僅かに変化した。「先生」は言葉を続ける。

「生きるために戦うのです。……最後の手段としての刃を持った戦いはあるでしょう。しかしそれは本当に最後の手段です。自分が生きるために他者を殺すのでは道理が違
う」

それは理想論であった。言葉だけでどうにかなるなら世界はもつと優しいし、彼らは苦しんではいないだろう。

しかし彼らはその選択をした。それでも理想を選んだのだ。

「どうにかなるのか?」

「わかりません。ただ希望はあります。数日後にとある王国の要人と話をする時間を持ちました。それを足がかりにできればと」

非常に理性的、そして論理的な動きであった。二人が訪れた時に演説していた時とは全く違う。

「……お話はわかりました。でも、一つだけ」

しかし、だからこそウタにはわからない部分があった。ここまで論理的に状況を考え

て動いているのだ。ならばそれで十分ではないのか。

「どうして私たちの名前を」

彼は言ったのだ。名を使うことを許して欲しい——そんなことを。だがその理由がわからない。ルフィとウタの名が絡む要素がないように思うのだが。

「身勝手な話で申し訳ありません。しかし人が立ち上がるにはその背中を押してくれる何か、或いはその手を引いてくれる何かが必要です。お二人がまさしくそうでした」

「おれたちが？」

「“天竜人”に抗い、そして今も戦い続けているあなたたちは“希望”なのです」

希望、とウタが眩きを漏らした。“先生”が頷きを返す。

「この国に生きる者は百年以上の長きに渡り、国の言う通りに生きてきました。そうすれば豊かな生活ができたのだから逆らう理由もありません。当たり前の話です。しかし今や国の言う通りにしてもかつての生活は戻らない。けれど長く従い続けてきた人間という者はそう簡単に反旗を翻せない。人は弱い。どうしても今を変えることに抵抗を感じてしまう」

かつてと今の状況が変わったことなど誰もが理解しているのだ。その理解度に差はあれど、今のままではいけないことはわかっていた。

だがそこから先へ進めない。当たり前だ。ずっと『今まで通り』で生きてきたし、そ

れでどうにかなっていたのだから。故に心のどこかで感じてしまう。

——“今”を続けければ、きつと。

根拠もなく、そんなことを考えてしまうのだ。

「現実には“天竜人”という絶対的なルールに逆らった者がいる。戦い続けている者がいる。それは間違いなく“希望”であり“救い”なのです。我々にとつては」

だからこそ二人を救世主と呼ぶのだと“先生”は語る。

「だからどうか。縋ることをお許しください」

そう言って、“先生”は頭を下げる。

覚悟を感じるその言葉に対し。

「わかった」

頷いたのは、ルフィだった。



誰もが寝静まる夜。人の目が失われるその時間に、海岸にいくつかの影があった。

まるで向かい合うような彼らの片方は四人だ。男が二人と女が二人。しかも男の片方は魚人であった。彼らの背後には海岸に引き上げられた小舟がある。これにここきたばかりということであろう。

「感謝を」

対し、そんな四人を迎えたのは一人の男であった。大きな体躯を持つ男である。服の上からもわかる鍛え上げられた肉体と鋭い瞳が彼が戦士であることを何よりも示していた。

その男——この国において「將軍」と呼ばれる人物が差し出した手を取ったのは、ゴーグル付きのシルクハットを被った青年だ。革命軍のNo. 2たる青年はその手を握り返すと、頷きを返す。

「それはこちらもだ。おれたちを頼ってくれて感謝してる」

世間一般において「革命軍」とは「世界最悪の犯罪者」が率いる組織だ。その行いに彼らは「正義」があるとして戦っているが、犠牲者もいるというのも事実。故に諸手を上げて歓迎されるということはほとんどない。

特に加盟国にとつては明確に敵とも言える存在であるのだ。「天竜人」を排し、世界政府の打倒を目指す彼らは世界政府側の国にとつては厄介な存在でしかないのだから。「身勝手なこと」は承知だ。だが手を貸して欲しい。我々では沈みゆくこの国を救うこと

は最早不可能だ」

だがこの「將軍」はそれを理解していてなお彼らとコンタクトをとった。最早この国を救うにはそれしかないと思じたが故にである。

「状況についてはある程度聞いてるが……」

手を離しながらサボが言う。頷きを返しつつ、「將軍」は言葉を紡いだ。

「既に民の間で不満は爆発寸前だ。時間をかければかけるほど悲惨なことになる」

「内乱が起るといふことだな？」

問いかけたのは魚人の男——ハックだ。実際「革命軍」はそうした形での戦争に手を貸すことも多い。それは民が選んだことではあるが、現実として悲惨なことになるのは間違いない。

国を構成する民が国家の在り方を否定し、そして国はそんな国民を否定する。それが内乱だ。そこに榮譽などなく、どちらが勝利しようとその先に待っているのは地獄である。

「難しいことは重々承知。しかしどうにか無血での決着を目指したい。……今の王は確かに間違えた。だが流血を選んでしまえばそれが当たり前の選択肢となってしまう。それは未来において間違いなく重荷になる」

「そうだな。もし王を殺すことで排除しちまったら次の指導者もいずれ同じことにな

る」

サボが領きを返す。要は選択肢の問題なのだ。

人は前例というものをどうしても意識する。当たり前だ。人の歴史とは継承の歴史であり積み重ねの歴史でもあるのだから当たり前とも言えるだろう。故に一度とつた選択肢というものは選びやすくなるのだ。

王を殺し、その王位を篡奪する。それは古今東西数え切れないほどに起こってきた現象だ。しかしそうして王位を奪った者はまた新たな篡奪者に殺され、奪われる。それもまた摂理であり道理だ。

「だが容易い道ではないぞ。我々が力を貸した国々も初めから内乱を起こそうとして争うしたわけではない。むしろ逆だ。争いを避けようとして避けられなかった——そんな現実を何度も何度も見てきた」

ハックは言う。「革命軍」は戦争狂の集団ではない。戦わずして済むならばそれが最善だしその方法を最初は模索する。事実そうして上手くいった事例もあるのだ。

しかしそうならなかった場合の方が遥かに多いのもまた事実である。それほどまでに今を変えるという行為は難しいのだ。

「容易くないのは重々承知。しかし未来を諦めたくはないのだ」

この国の軍隊を預かる立場である「将軍」は言う。

——諦めない。

だからこそこうしてこの場所に立っているのだと。

「覚悟はあるのか？」

故にサボは問いかけた。それは確認の意味もあつただらう。

そして「將軍」は躊躇なく肯定する。

「無論だ。——万一の時は、この首を持って決着とする」

それがこの男の矜持であつた。その覚悟に対し、サボもまた表情を引き締める。

「そうならねエようにおれたちが来たんだ」

その言葉に頷きを返す「將軍」。そして彼はサボたちへと言葉を紡いだ。

「実は民の中にも協力者がいる。その人物と極秘裏に話をする場を設けた。……是非とも参加してほしい」

「勿論だ」

頷きを返すサボ。そして彼ら「革命軍」は「將軍」の先導に従つて島の中へと入っていく。

役者は既に揃いつつある。様々な思惑を抱えながら、この国の未来のために。

そこで何が待つのかを……まだ誰も、知らなかつた。



海軍基地。渦中の国の近くに設置されたその基地の会議室に彼らはいた。

「本当、なんですか」

声を上げたのはたしぎ中尉だ。あの「金獅子」事件で敵本拠地に乗り込んだ英雄たちの一人であり、同じく名を上げたスモーカー少将の副官である。

彼女の他にもスモーカーが率いる部隊の海兵たちが集まっている。彼らは皆一様に動揺していた。

「本当だ。CPが姿を確認した」

そしてその会議室の一番奥。そこで葉巻の煙を揺らしながら応じるのはスモーカーだ。

「どうするんですか？」

「目の前に指名手配犯がいる。なら海兵がすることは一つだ」

当然のように言うスモーカーに対し、たしぎも他の海兵たちにも動揺が広がった。

かつて「新時代の英雄」と謳われ、海軍の新世代その象徴でもあった二人。彼らが「天竜人」に反逆し、大罪人となったことは知っている。

だが、理解はできていても納得していない者が大半だ。

「今すぐに動くわけじゃねエ。準備もある。……今回については待機も認める。考えておけ」

言い切ると、スモーカーは部下たちを置き去りにして部屋を出た。白煙を纏いながら、彼は廊下を歩いていく。

「ケムリン！」

「スモーカーさん！」

不意に自身を呼ぶ声が聞こえた。反射的に振り返る。だがそこには誰もいない。かつての記憶。共に戦った二人のことをスモーカーはずっと引きずっている。

「……クソッ」

吐き捨てるような呟きは、誰に向けられたものなのか。

今の自分自身か、海軍か、世界政府か。

或いはもっと、別の何か。

——この世界そのものへと、向けたものだったのだろうか。

“世界の灯火” ③

実を言うと、ルフィとウタがこの国でやるべきことはない。できることがないというべきだろうか。

あの“先生”が考えていた計画では二人の名を民衆の背を押すために利用していた。しかしそれだけだ。二人に何かをさせようなどとは考えていなかったし、そもそも二人がこの国を訪れたのは偶然である。何かをさせようなどとは考えてもいなかっただろう。

そして実際に二人を目の当たりにしても彼は方針を変えなかった。二人に対して何かを求めることもなく、むしろ名を利用した代わりに必要なものを用意するとまで言ったのだ。

それについては二人も固辞した。この国の状況を考えた時何かをもらうことなどできなかつたのだ。

故に二人はもうこの国を出ても良かった。いやむしろそうするべきなのだろう。こ

こは海軍基地も近い。いつ二人の存在を追って海軍が現れるかはわからないのだ。

しかし、二人は残ることを選んだ。『先生』の言う話し合いの場に立ち会うことを望んだのだ。

『よろしいのですか？』

その提案をした時、『先生』は非常に驚いていた。考えてもいなかったというような反応であった。

邪魔をする気はないし、本当にただ立ち会うだけだ。

意味があるかはわからない。だが見届けたかった。彼の言う、武器を用いない戦い。それを実際にこの目で見たかった。

「……なあ、ウタ。覚えてるか」

広場の端。人目に入らないようにしたその場所に座り込んでいたルフィは、隣に座るウタへと声をかけた。広場に人影はない。曰くこの広場はかつては多くの人が行き交い、定期的に開かれる市にとって大いに栄えていたという。

しかし今や見る影もない。地面に残る跡や広場の隅で雨風に打たれながら放置されている資材がかつての姿の名残として残っているだけだ。

「なんのこゝろ？」

首を傾げるウタ。彼女もこの国に来てからずっと思い悩んでいるようであった。お

そらく自分と同じ理由なのだろうとルフィは思っている。

「モモンガのおっちゃん、の船にいた時に行った国だ」

「……忘れるわけない」

モモンガの船で海兵としての基礎を学んだ時、二人はいくつもの国を訪れた。だがこの状況でわざわざ話題にする国など一つしかない。

その国もまた苦しんでいた国だ。だがそれはアラバスタでクロコダイルがそうであつたような、明確な「悪」があつてのことではなかつた。敵を倒して解決するような話ではなかつたのだ。

それでも当時の二人は助けを求める声に応えたいと思つた。だが結局、できたことはほとんどない。

「強くなることは必要だ。だが、刃を交えることだけが戦いではない」

思いつくのは、尊敬できる上官であり海兵である人の言葉。

彼は助けを求める人々のため、「交渉」という手段を持つて戦つた。そうして一つの国を救つたのである。

「モモンガのおっちゃんならどうしたんだろうな」

あの時、モモンガは言つたのだ。

「いずれ同じ戦いをするようになる日は必ず来る」

海兵時代には終ぞ訪れることはなかった。「悪」を倒すことで解決できる戦いばかりだったのだ。それでどうにかなってきたし、彼の言う『いずれ』はずっと先の話だと思っていた。

しかし、今。二人は明確な敵を倒せば終わるような、そんな単純ではない状況を目の当たりにしている。この国の民は明確な「悪」を倒す戦いをするわけではなく、生きるために今を変えるための戦いをしているのだ。

そしてこんな状況を見た時、あの先達はどうしただろうか。

「あの時みたい……この国を助けるために戦うと思う」

そんな彼女の言葉に、だろうな、とルフィも呟く。

きつとそれは刃を持つ戦いではないし、明確な敵を討つ戦いでもない。言葉を用い、信頼を重ね、手探りで話を進めていくという途方もない戦いだ。

そしてそれは今の二人にはその第一歩さえもわからない戦い方でもある。

「力になりたいけど」

呟くようなウタの言葉。それはルフィも同じ想いであった。

自分たちのことでさえも精一杯な現状である。正直、他者のために何かをする余裕などない。だがこの国の者たちと関わってしまった。事情を知ってしまった。故に割り切ることができないでいる。

しかし、それは仕方のないことだろう。

ここで割り切ることができるのであれば、彼らはきつと“英雄”になどなっていないのだから。

だが手段がわからない。故にこうして二人は立ち止まり、座り込んでいるのだから。

「あの」

そんな風に二人で俯き、寄り添うようにしていたところへ声がかかった。

顔を上げる。少し甘い匂いが二人の鼻腔をくすぐった。

「その、よろしければ」

そこにいたのは年若い女性であった。その女性の手には小さな包みがあり、立ち上る湯気と共にそこから少し甘い匂いが漂ってきている。

「ありがとうございます」

二人は礼を言いつつそれを受け取る。いえ、と女性は首を振った。

「この街にはもう何もないので。……その、少しでもお礼を」

「お礼って……私たちは何も」

目の前で申し訳なさそうに言う女性に対し、ウタが困惑した様子で言う。そんなことありません、と女性は言葉を紡いだ。

「“先生”から聞きました。あなた方の名前を使わせてくださると。……苦しいのに、

辛いのに、どうにかしたいのに、それでも私たちは自分の足で立ち上がることさえできません。そんな弱虫の身勝手をあなた方は許してくださいました」

自嘲するように——いや、実際に自らを嘲っているのだろう。そんな笑みを女性は浮かべた。そこには諦観があり、絶望があり、そして悲痛がある。

「身勝手にあなた方に縋った私たちをあなた方は怒ってもいいはずですよ。そうするのが普通です。なのに受け入れてくれた。そして……その上で、こうして悩んでくださっている。その優しさが嬉しいんです。そんなもの、私たちには過ぎたものなのに」

ウタは何か言葉を返そうと何度か口を開きかけたが、何も言えなかった。その隣に座っているルフィが手の中の包みを開け、その中身を口にします。

「……美味しいな」

それは小さな芋であった。ただ焼かれただけのものであったが、味付けなど必要ない甘さと温かさがそこにはある。

いつかの遠い記憶をルフィは思い出した。四人の家族。盃を交わし、四人で故郷の山を駆け回っていた日々のことを。

そんな日々の中、似たような味のものを分け合ったことがある。

「甘いでしょう？」 それはこの国で作られている芋なんです、小さくて売り物にもならないようなものは子供にとってのおやつなんです。お腹が空いたって思ったら余っ

た小さな芋を貰いに行つて、落ち葉を集めてみんなで焚き火をして……」

とこか遠い記憶を思い出すように言う女性。それはきつと、彼女にとって大切な記憶なのだろう。

「楽しかったな……あの頃はこんな風になるなんて少しも思わなかった。今の国王様だつて、きつと……」

その言葉に、ルフィが反応を示した。国王——それはおそらく、この状況における鍵だ。

「どんな奴なんだ？ 国王つてのは」

「今はわかりません。もうずっと会っていないので。……ただ、子供の頃は優しい人でした。王子様なのに私たちと一緒に泥だらけになって遊んで」

「国の王子と親しかったんですか？」

驚いた様子のウタ。ふふ、と女性は小さく笑った。

「この国は昔からそれがお受けの慣習なんです。王子だろうと王女だろうと一定の年齢になるまでは国民の中に混じつて暮らすんですよ。それこそ“先生”の下で一緒に学んでいました」

そんな彼女の言葉に、二人は驚きを隠せなかった。聞き及んだ話では重税を課し、国をこんな状況に追い込んだ人物という印象を受けたのだが。

だがすぐに思い直す。彼が語ったのはあくまで国の状況についてであり、その変革。二人に対して国王については何も語っていないのだ。

「一緒に焚き火を囲みながら、色んな将来を語り合いました。良い国にしようって」
どうしてでしょうね、と女性は言う。

「未来は明るかったはずなのに。彼が国王になつてから税金が上がって、生活が苦しくなつていったのも事実で」

そう語る女性の表情は複雑であつた。かつて語り合つたのであろう未来。それはきつと、こんな形ではなかつたはずなのだ。

「……………」

無言のままルフィは残りの芋を口にした。欠片も残さないようにと。

難しい話はわからない。資源のこととか、政治のことであるとか、*“先生”*が語つたことについても全てを理解できていくわけではないのが現実だ。

だがこの目で見えているものだけは間違えない。実際に苦しむ者がいて、その上でどうにかしようとしている者がいる。そのために自分たちの名前が必要ならそれは構わないと、そんな風に思ったことは確かだ。しかしそれ以上の何かについては何もわからない。

「その、身勝手に贅沢な願いなんですけど。……上手くいって欲しいです。誰も傷つか

ずに、どうか」

それが理想論であることはわかりきっている。だが二人は否定などできない。

「私たちもそれを願っています」

故にこそ、ウタもそう言うしかなかった。

女性が小さく微笑む。ありがとうございます、とその唇が動いていた。

息の詰まりそうな感覚。見上げた空は曇り空。今にも降り出しそうなその空模様は、一体誰の心を映しているのだろうか。

女性は一礼すると、その場から去っていった。無言で二人は無人の広場を眺めている。

そうしてどれくらいの時間を過ごしたのだろう。不意に人の気配を感じた。

「——こちらにおられましたか」

杖をついた男性——「先生」の声が聞こえた。見れば、こちらへと一礼する彼の姿がある。

だがそれだけではない。彼の後ろに見覚えのない人影が二つもあるのだ。片方は体格のいい厳しい表情をした男性であり、もう片方はゴーグルを付けたシルクハットを深くに被った男性だ。

体格でいえばシルクハットの男の方が小さい。だが二人にはすぐにわかった。シル

クハットの男は凄まじい実力者だ。その力の底が見えない。

知らず警戒する二人。しかしそれには気付かぬ先生は振り返りながらその二人を紹介する。

「ああ、こちらが昨日お話ししていた方です。この国の軍を預かる『將軍』の地位にある方でして」

「話は聞いております。此度は心よりの感謝を」

その見た目通りとも言える重い声を放つ『將軍』。だが彼の言葉には確かに真摯さがこもっていた。頭を下げる所作についても非常に厳格で堂に入っている。

だが二人の意識はその隣にいる青年へと向けられていた。それは最初は警戒であったが、すぐに違和感に変わる。

何故か覚えがあつたのだ。その姿に。

会つたことなどない……はず、なのに。

「……………え……………」

眩きを漏らしたのは、どちらであつたのか。

——そんなはずがない。

そんな言葉が二人の脳裏を何度も何度も駆け巡る。

だつて当たり前だ。彼はあの日、あの時に。

「私が紹介しましょう。私の勝手な一存ですが、今回協力を要請し応じて頂きました」
視線に気付き、「將軍」が自身の隣にいる人物の紹介を始める。話を向けられた青年は小さく頭を下げた。

その時に彼はシルクハットを脱いだ。そこで見えた顔。それで二人は確信する。

「彼は『革命軍』の——」

だがその言葉が最後まで紡がれることはなかった。

何故、どうして。

そんなことばかりが脳裏に浮かぶ中、吐息のような言葉が漏れる。

「……サボ……?」

呆然とした声であった。当たり前だ。それは失ってしまったはずの人であったのだから。

思い出すのは、幼き日々の記憶。

故郷の山——コルボ山で駆け抜けた記憶。

失ってしまったはずの人。

もう二度と戻らぬはずの人。

「——サボ!!」

ルフィとウタ。二人にとって大切な家族であり兄。

誰よりも“自由”を求め——そして、この世を去つたはずの人がそこにいた。



元々、スモーカーという男はその風貌から近寄り難い雰囲気がある。気難しい表情をしていることも多いし、お世辞にも愛想がいいともいえないのが余計に拍車をかけていた。

だが実際に彼の下で働き始めると印象が変わる。厳しくはあるが部下想いであるし、筋を通す生き方をする男だ。故にそれなりに長い付き合いにある部下は彼を恐れたりはしないし、副官であるたしぎなどはその最たる例だ。

だがそんな彼らでさえも今のスモーカーへは声をかけられなかった。目を閉じ、椅子に全身を預けるようにして座り込む姿。眉間に皺を寄せ、その手には彼の得物である十手を握りしめている。

まるで爆発寸前の火山のようであった。しかしその爆発の仕方の予想ができない。何かを堪えるような、抱え込むような、それでいて捨て去ろうとしているような。彼が

何を考えているのかを周囲の者たちは誰も推し量れないでいる。

一定の空間ができている状態。そこへ一人の海兵が歩み寄る。

「——ここにいたか」

声をかけたのはヴェルゴであった。彼の声を聞き、ゆつくりとスモーカーが目を開ける。座った状態の彼は自然とヴェルゴの方を見上げる格好になる。

スモーカーは特に意図したわけではないのだろうが、凄まじいまでの威圧感を伴う視線であった。若い海兵であれば竦み上がるであろうそれを正面から受け、しかしヴェルゴの方は特に気にした様子もない。

「少し状況が変わった。キミはどちらがいい？」

「どちら、つてのは」

「例の『アレ』は本日中に届く予定だった。その到着を待ち、作戦の最終確認の上で動く予定だったが……状況が変わった」

ふう、と息を吐くヴェルゴ。視線で先を促すスモーカーに対し、彼は言葉を続けた。

「あちらから要請が入った。不穏分子の逮捕に協力して欲しいと」

「……今更の話だな」

思わず呟いてしまう。あの国が不安定なのは今に始まった話ではない。現状に対して抗議する運動や陳情も既に起こっており、武力衝突こそ起こっていないだけで一触即

発な状況ではあったのだ。

状況としてはアラバスタと似ているかもしれないと密かにスモーカーは思っていた。正確にはああなってしまう直前。現行の体制ではどうにもならないことに対する不満と不安が爆発する寸前といったところか。

そんな国で今更不穏分子がどうなどと。あまりにも悠長な話だ。

「CPからそういった情報は来ていたが……さて、誰がその情報を国の方へ伝えたのか」この国を訪れている「大逆人」ルフィとウタ。その二人の動向を監視しているCPからは併せてこの国の状況についても情報の共有がされていた。海軍としては海賊を始めとする無法者の相手が基本であり、国政に関わることはないがCPは違う。沈みつつあるとはいえ加盟国の一角だ。不穏な情報があれば提供するのは当たり前といえは当たり前か。

「どっちってのはつまり」

『『アレ』を受け取りに行くか、それとも要請に従って現場に行くかだ。……例の二人は混乱が起こればそれに紛れて逃げる可能性もある。現場で対応できるようにした方がいい』

一瞬、スモーカーは目を閉じた。だが彼の中で既に腹は決まっている。

「現地にはおれたちが行く」

「……いいのか？」

「『アレ』の受け取りは元々そっちの任務だろう」

言いつつ、スモーカーは立ち上がった。十手を背負い、ヴェルゴと向き合う形になる。「あいつらはおれが捕まえる」

その言葉には重い覚悟が込められていた。それに対し、ヴェルゴも頷きを返す。

「こちらも受け取り次第全速力で現場へ向かう。あの二人は油断していい相手ではない。気をつけてくれ」

そう言い残すと、ヴェルゴはすぐに自分の部下たちへと指示を出すために動き出した。その背を見送り、スモーカーは呟く。

「……ああ。よく知ってる」

——嫌ってほかに。

その言葉はしかし、音にはならない。心の内側だけで響いている。

「スモーカーさん」

そんな彼の下へ、彼の副官であるたしぎが歩み寄ってきた。その背後には彼が率いる部隊の海兵たちの姿がある。

誰一人として欠けてはいなかった。スモーカーはそんな彼らを一瞥すると、聞いた通りだ、と言葉を紡ぐ。

「任務は不穩分子逮捕の援護だ。だがわかつていいるだろうがあの国には例の二人がいいる。……はつきり言おう。黙つてるようなタマジヤねエ。絶対に出てくる」

いいんだな、とスモーカーは視線で問いかけた。はい、とたしぎは敬礼と共に応じる。他の者たちも一斉にこちらへと敬礼を返した。

スモーカーは一度目を閉じる。そして、出るぞ、と言葉を紡いだ。
「腹を括れ」

必要以上の言葉は口にしなかつた。それはきつと、彼らへの侮辱であつたから。

友人であつた者もいる。憧れであつた者もいる。きつと多くの海兵があゝの二人に未来を見ていた。

そんな者たちへ銃口を向ける。それを決意した覚悟を踏み躪ることなどできやしない。
い。

しかし、白煙を揺らしながらスモーカーは内心で一人覚悟を決めていた。

(おれの手で)

それは一体、どんな想いからくるものなのだろう。

ただ、彼は往く。

海軍本部少将、
“白狐のスモーカー”。

海賊たちを震え上がらせる男。
“英雄”の一角たる男が、
“墮ちた英雄”と相対す

る。

その戦いに誇りは。

果たして、あるのだろうか——……



十年という月日は長い。ルフィもウタも成長したし、その間に多くの経験をした。その風貌も変わっている。

だがそれでも変わらない部分は確かにある。二人の幼い頃しか知らない者でも今の二人を見ればきつと気付く。どうしたって消えない面影というものは存在するのだ。

故にこそ、目の前にいる人物がかつて失った兄の成長した姿であると二人は直感したのだ。そこに理屈はない。だが二人の目が、心が、魂がそうだと告げていた。

「名前を知られてるとは光栄だな」

違和感。

こちら側と向こう側で、どうしようもないほどの温度差を感じた。

「元海兵のそつちにしてみれば警戒するのも当然だろうが、今は敵対の意思はない。むしろ逆だ」

二人の中に困惑が広がる。

——目の前の男は、誰だ？

「まさかこんなところで会えるとは思ってなかったが……会えて嬉しい」

この、自分たちの知る表情を浮かべる男は。

それでいて、自分たちを知らない男は。

「初めましてだな。『麦わらのルフィ』、『歌姫』。おれはサボ。革命軍の参謀総長だ」

そう言つて軽く頭を下げる男は、確かに『兄』の名を名乗つた。

わけがわからない。

「サボ、だよね……?」

震える声で呟いたのはウタだ。その声を聞き、ルフィも思わず声を上げる。

「何をふざけてんだよサボ!! おれだよ! ルフィだ! 初めましてじゃねエだろ!」

普段の彼を知る者であればその声色に驚いたかもしれない。ひび割れるような声であつた。

受け入れられない、認められない現実。それを前にして駄々を捏ねているかのよう

「誰かと勘違いしてねエか？」

だが、目の前の男は——「サボ」と名乗った男は、困惑した表情を浮かべている。

「——ッ」

それが演技ではないとわかった。わかってしまったからこそ、二人はそれ以上何も言えなくなってしまう。

黙り込んでしまう二人。何が起こっているのかわからない。ただでさえ張り詰めた精神に対し、じわじわと傷が走っていく。

「あの……お知り合いだったのですか？」

様子を見守っていた「先生」が遠慮がちに問うてくる。いや、と否定するように首を振ったのはサボだ。

「直接会ったことはない、はずだ」

それはきつと、彼の本心だ。むしろ困惑しているのは彼の方だろうと二人は思う。本当に覚えがないのであれば彼の反応は当たり前だ。

だが、だったら彼は何者なのだ？

革命軍の参謀総長——そんな肩書きはどうでもいい。それよりも大切なこと。あの日失ってしまったはずの人と同じ雰囲気纏うこの人は何者だというのか。

「……すまないが、話を進めさせて欲しい。時間が惜しい」

停滞する空気の中、そう切り出したのは「將軍」であつた。彼の言葉に対し、ああ、と頷いたのはサボだ。彼はこちらへも視線を向けてくる。

「そつちもいいか？」

「……う、うん」

反射的に頷くウタ。ルフィは未だ動けないでいた。

——どう見ても、彼はサボだ。

なのに本人は違うという。じゃあなんだ？ 一体何が起こっている？

目の前の光景は、本当に現実のことなのか？

「——」

言葉もなく立ち竦むその姿は、「英雄」と呼ばれた青年の姿ではなく。まるで、置き去りにされた子供のようである。

「——大變だよサボくん！」

そんな彼らの体を強制的に動かしたのは突如響いた女性の声であつた。こちらへと走り寄ってくるのは一人の帽子を被つた女性である。随分と慌てた様子であつた。

「どうしたコアラ？」

サボがそんな女性——コアラに対して言葉を紡ぐ。その表情は真剣だ。

「この街に大勢の兵が向かってきてるみたい！ 海軍の姿も！ 今はハックさんとイルが見張ってくれてる！」

その言葉に、その場の全員が表情を変えた。

「……まずいな」

呟いたのは「將軍」だ。彼はすぐさま「先生」へと声をかける。

「身を隠そう。ここに彼らがいるのを見られるのはまずい」

「ええ。——すみません皆様、こちらへ」

そして「先生」が杖をつきながらこちらを先導する。サボはコアラへと指示を出した。

「コアラ、万一のことを考えて外に連絡を。ハックとイルとは密に連携してくれ」

「うん！」

そしてコアラは逆方向へと駆け出していく。そしてルフィとウタは「先生」に先導されるまま、建物の中へと向かって歩き出す。

未だ思考はまとまらないままだ。だが動かなければ。

ウタの手を握る。互いに決して離さないように、強く。

——まるでそれが、この世に残った唯一の縁であるかのように。



物事というのはどれだけ想定しようが完璧とはいかない。それはもう仕方がないことだ。人間が完全な存在ではなく、この世界の全てを掌握できない以上不都合なことは必ず起こる。

今回の件はまさしくそうであつた。「先生」と「將軍」。その二人が主体となつて動いていた計画は今日の話し合いを持つて具体的な動きとなるはずだつたのだ。リスクの想定もしていたし気を配つてもいた。しかし世の中というのはどうにもままならないものである。

その具体的な話をする前にこうして脅威が迫つてきている。

『——この街が反乱を企てているという通報があつた!!』

窓越しに聞こえてくるのはそんな若い男の声であつた。兵士たちの先頭に立つその男は兵士たちを使つて住民たちを広場へと集めたのだ。

当然というべきか、集められたのは老人と女子供ばかり。若い男はいない。彼らは皆

不安そうな表情で寄り添うようにして座り込んでいる。

「……あれは？」

問いかけたのはサボだ。彼は窓から見える広場の光景に視線を向けている。

ルフィたちがいるのは街の倉庫、その屋根裏ともいべき場所であった。広いスペースではないその場所に五人の人間が集まっている。

倉庫の中には兵士たちも踏み込んできたが、この屋根裏の存在には気付かなかつたらしい。誰もいないことを確認するとすぐに出て行った。

そしてそんなサボの問いに答えるのは「先生」である。

「『国務卿』です。国王様の秘書官とでもいべきでしょうか。国王様の学友で腹心の部下でもあります」

「中々の大物だな」

「若いが優秀な人間ではある。ただ少々、その若さ故の短慮が見られる男ではあるが……」

サボの言葉に対して頷くのは「將軍」だ。彼もまた窓の側から状況を眺めつつ見守っている。

状況はあまり良くはなかった。話し合いの前にこの状況だ。これでは次の手を打つにしても動き難い。そもそもこの場の者たちの関係さえも確定はしていないのだ。

偶然か、或いは狙つてのことか。判断はできない状況である。

「ただ見た目と違つて冷静ではあるみたいだな。住民を集める時も手荒なことはしてねエ」

サボが状況を分析する。そう、兵士たちは特に乱暴な手段を取ることをしていなかった。彼らは武器を持っているが暴力的に住民を集めたわけではなく、あくまで冷静かつ穏便に住民たちを集めていたのだ。

故にこそ住民たちも従つたと言える。手荒にされれば反発もするが、あくまで表面上は穏便であるなら人は抵抗しにくいものだ。

だがその状況こそが厄介だ。わけもわからぬままただ従う——その時点で向こうに主導権を握られている。

「どこからか情報が漏れたか」

「完全に情報を遮断することは不可能です。……あちらが上手でした」

この計画における主導者である「將軍」と「先生」の会話だ。口調こそ冷静であるが、そこには焦りのようなものが滲んでいる。

『隠し立ては無意味だ!! 首謀者を出せ!!』

先頭に立つ「国務卿」が声を張り上げる。恫喝するような声色だが、そこには演技の色が感じられた。おそらくあれは何が効果的かをわかつてやっている。

「……………」

ルフィもウタも状況を見守るしかなかった。そもそもこの国のことについてもほとんど知らないし、この場にだって本来いないはずの存在だ。何をすべきなのか——いや、自分達が何を求めてここにいいのかさえもわかっていない。

故にこそ立ち竦んだまま、ただ状況に置き去りにされている。

——どうしたら。

肌感覚、とでもいうべきか。

ルフィもウタもまだ二十歳にもならないような若者である。だがこの二人はその年齢からすると想像できないほどの修羅場を乗り越えてきているのだ。

故にわかる。わかってしまう。

今この瞬間が分岐点であることを。ここで間違えれば悲劇が待っているという現実を。

だがそれでも、彼らは動けない。

『出せないというのであれば、出したくなるようにしてやろう!!』

銃声が響き、その場の全員が表情を変えた。“国務卿”が空に向かって一発の弾丸を放ったのだ。

集められた者たちが身を寄せ合うようにして後ずさる。中には祈るように手を合わ

せる者もいた。

「……やはり、優秀だ」

ポツリ、と溢すように呟いたのは「先生」出会った。

「こちらに時間を与えないつもりでしょう。誰か一人でも撃たれば、その瞬間にこちらが終わることを理解している」

まだこれからであったのだ。方針も行動もまだ始まっていない。スタートラインにつくための話し合いが今日この場で行われるはずだった。

何もかもがこれからのこと。その出鼻を挫かれてしまった。

「止むを得ない。ここは私が」

「いや。あなたが出れば混乱します」

腰の剣の柄に手を当てる「將軍」に対し、「先生」は言う。そして彼は一度息を吐くと何かを覚悟するように杖を握る手に力を込めた。

「……首謀者を出せというのであれば、その言葉通りに」

そして一歩、一歩と歩き出す「先生」。彼は唇を引き結ぶ「將軍」に対して言葉を紡いだ。

「後をお任せします。どうか彼らを」

「——必ず」

絞り出すような言葉であつた。サボもまたそんな彼に厳しい表情で視線を向け、言葉を紡ぐ。

「どうなるかはわかつてるのか?」

「まあ、死刑でしょう。この場で殺されることはないでしょうが……」

まるで他人事のように言う「先生」。なつ、と喘ぐような声を漏らしたのはウタだ。

「そんな、どうして」

「これが責任というものです。……この後、広場に注目が集まるでしょう。どうかお逃げください。お二人の名を勝手に利用した挙句このようなことになり、申し訳ありません」

カタン、という乾いた音と共に屋根裏から倉庫内へ降りるための簡易な階段が出現した。そちらに一度視線を向けると、「先生」はこちらに背を向けたまま言葉を紡ぐ。

「ですが、一つだけ。私はあなたたちの名前を利用した。しかし同時に、私は確かにあなたたちに救われていました。『神』へと抗うその姿は確かに私の救いであつたのです。それだけは嘘偽りのない事実です。……身勝手な、話ですが」

そして、「先生」が階段を降りようと再び歩を進め始めた。

その先に待つのは断頭台だ。だが己が始めたことのケジメとして彼は歩みを進めるのだ。

そこにどんな理由があつたのかを二人は知らない。きつと何かがあつたのだ。彼に抗う選択をさせた何かが。

邪魔をするべきではないのかもしれない。これは彼の覚悟であり誇りだ。そこにも知らない者が手を出すべきではないのかもしれない。

だが、それでも。

「駄目です」

「駄目だ」

その二人は、ほとんど同時にその手を掴んでいた。

事情なんて知らない。理由も知らない。何が真実で、何が事実で、何が現実なのかわからない。

だが、それでも。

ここで行かせてしまうことを、彼らは良しとしなかつた。

——だって、そうだろう？

たとえば、逃亡者になろうとも。

たとえば、大罪人と呼ばれようとも。

ルフィとウタ。フーシヤ村で育った二人は、
今でもまだ、『海兵』なのだから。



先頭で声を上げる『国務卿』の背に、スモーカーは静かに視線を向けていた。言葉も態度も乱暴だがあれはパフォーマンズだ。事実、ここに来る道中においても彼の説明は理路整然としたものであり、多少の感情が籠っていたがそれが許容範囲のものであった。

年若い男であるが、国において相応の立場にあるだけはある。首謀者を出せというのも暗にそうすれば他は見逃すと告げているのだ。

(金のある国……いや、あつた国だからこそか)

スモーカーは海兵として多くの国を見てきた。その中で思うのは『教育』の存在だ。富める国というのは総じて教育のレベルが高い。これは頭脳レベルというわけではなく、基礎的な部分の教育が一般の国民に広く行われているということだ。

故にこそ「國務卿」を含めて理性的な行動をする人間が多い。それは間違いない。としての長所ではあるのだろう。……生かすことができるのであれば、だが。

「スモーカーさん」

彼の副官であるたしぎが声をかけてくる。彼女の表情には緊張が宿っていた。彼女だけではない。他の海兵たちもだ。

「無茶はしねエという話だ。……それに首謀者についても既にわかつてる。これはパフォーマンスだ」

住民たちや他の海兵、「國務卿」が連れて来たこの国の兵士たちに聞こえないように言葉を紡ぐ。

そう、既に「國務卿」は首謀者についての情報を得ているのだ。CPからの情報もあるが、住民からの密告もあったという。そして看過できないとして動いた。

この辺りは仕方がないこともある。人が多くなればどうしても情報も漏れる可能性が上がるし、特に革命や反乱といったものはその主体が一般市民だ。専門的な訓練を受けていない以上情報を隠すにも限度がある。

「だが準備はしておけ。万一の時は介入する」

「——はい」

この街に入る際、「國務卿」からはできるだけ手を出さないで欲しいと釘を刺されて

いる。海軍に協力を要請したのは不測の事態、それこそ住民たちが暴れたり何か想定外の事態が発生した場合の対処のためだ。

そして事実、海軍側は「麦わら」と「歌姫」という不測の事態を起こしかねない存在がいることを把握している。断るわけがなかった。

「――反乱なんて、そんなことを私たちが考えるはずがありません」

状況に思考を巡らせていたスモーカーの耳にそんな声が届いた。見れば一人の女性が目立ち上がり、他の住民たちを庇うようにして前に出てきている。

若い女性であった。「国務卿」と同じくらいに見える。

「そんなことはわかっている。貴様らに自ら考えて立ち上がるような気概はない」

対し、吐き捨てるように「国務卿」はそう言葉を紡いだ。

「だから首謀者を出せと言っている」

言うのと、「国務卿」はその銃を女性へと向けた。びくりと女性の体が震える。

「誰かの言葉に従うことしかできない。それでいて必要なことはしないのがお前らだ。

……大人しく従え」

周囲の者たちが息を呑んだ。だが女性は体を震わせこそしたが唇を引き結び、その場に留まっている。

小さな舌打ちの音が響く。

「……遅エんだよ、そういうのは」

その眩きが聞こえた者はほとんどいなかっただろう。だがその声の主はすぐさま声を張り上げる。

「痛みがなければわからないのであればその通りにしてやろう！」

怒鳴るような声ではなかったが、響く声であった。その指が引き金にかかる。

だが女性は目を逸らさなかった。そして、引き金が――

――広場に面した倉庫の扉が、ゆっくりと開いた。

弾かれたように誰もがそちらの方を見た。地面を踏み締めるような、小さな音が響く。

「……ああ……」

その声を漏らしたのは住民だ。そこには安堵の感情が込められている。

「“救世主”様……！」

祈るようにして手を組み始める住民たち。その中を一人の青年が歩いてくる。

麦わら帽子に、汚れたコート。背負った“正義”の文字もまた汚れてしまっている。

だがそれでも、その青年が放つ存在感はこの場の全てを圧倒していた。

「…………どうして」

呟いたのは女性だ。その声により、自分を取り戻した“国務卿”がその青年へと銃口を向ける。

「何だお前は!?!」

その言葉には困惑が混じっていた。当たり前だろう。彼が想定していた首謀者はこんな青年ではない。彼にとっては恩師とも言えるはずの人物であったのだから。

青年は答えない。ゆつくりとこちらへと歩みを進める。

「退け」

応じるように前に出たのはスモーカーだ。彼は“国務卿”に対してそう言い放つと、青年の方へと足を踏み出す。

「……………」

青年の瞳がこちらを捉えた。その瞳を見た瞬間、スモーカーは理解する。

(わかっていたことだ)

こうなることは。こうなってしまうことは。

覚悟していたことであるはずだった。

「何故出てきた。この国とテメエは関係ねエはずだ」

十手を握り締め、青年へと向ける。

対し、青年は拳を握る。

「飯をもらったからな」

その一言。たった一言が海兵たちを動揺させた。

嗚呼、そうだ。それがこの青年なのだ。

海軍が誇った「新時代の英雄」。その在り方であるのだと。

誰もが——思い出してしまった。

小さな舌打ちをスモーカーが漏らす。その表情はいつも以上に厳しいものであった。

「お前が首謀者なんだな!？」

スモーカーに言われ、少し後ろに退いていた「國務卿」が声を上げた。その声には動揺がある。当たり前だろう。こんな状況は想定していなかったに違いない。

だが、青年はその言葉に応じなかった。「國務卿」の方を一瞥しただけで、スモーカーへとすぐに視線を戻す。

「状況を見れば一目瞭然だ」

吐き捨てるようにスモーカーが言う。住民たちを庇うように立つ青年。その背に對し、祈るような、縋るような想いを向ける者たち。

——「救世主」と、彼らは青年のことをそう呼んだ。

そしてこの場に現れた「救世主」はそんな彼らを守るように立っている。

ここにあるのは事実。たとえそれが真実ではなかったとしても、ここにある事実を受け入れるしかないのだ。

「……大馬鹿野郎が」

苦々しい呟き。そして。

鈍く、重い音が響いた。

遅れるように、衝撃が空を駆ける。

ぶつかり合ったのは拳と十手。そこでようやくその現実が確定する。

大事件を起こし、逃亡中の「大逆人」。

かつて「英雄」と呼ばれた男——「麦わらのルフィ」。

彼に新たな罪状が加わったのは、この瞬間であつただろう。

最初に間違えたのは、誰なのだろうか。

或いは、間違えてなどいなかったのか。

ただ、かつての「英雄」は戦うことを選んだ。

それは、きつと。

——それが彼の、「正義」であつたから。

“世界の灯火” ④

遠い記憶。朧気になりつつある記憶の中、絶対に忘れないことがある。

“この帽子をお前に預ける”

生涯において最も尊敬する男の言葉と共に預かったもの。

“ウタを、守ってやってくれ”

たった一つの約束であり、後悔であり——罪。

去っていく彼らの背中を、今でも覚えていて。今にも消えてしまいたいようなほどに儂いその背中を、まっすぐに見ることはできなかった。

“シャンクスは私を……捨てたんだね”

あの日の背中もまた、消え入りそうなほどに儂かった。

だから絶対に離さないと決めたのだ。もういなくならないで欲しかったから。

身勝手で浅ましい願いと誓い。それを抱えて今日まで歩いてきた。それは彼の内に秘められたものであり、誰にも見せぬ心の底。

そしてだからこそ、目の前の手を掴んだのだろう。

——その背中が、あの日と重なって見えたから。

「手を……離してください」

二人が同時に握った腕に視線を向け、
“先生”が言う。

「これは私の責任です。こうすることでしたか」

「死ぬことは責任なんかじゃねえ」

言い切るルフィ。ウタもまた頷いていた。

「私はこの国のこととか、状況とか。何も知りません。でも駄目です。その選択は間違ってる」

「しかしこうしなければ住民の誰かが。私が焚き付けたのです。ならば私がその責任を」

「——なあ、おっさん」

言葉を遮り、ルフィは言った。手を離し、彼は麦わら帽子を被り直す。

「おれたちの名前を使ったんだよな？」

その言葉の意味を理解したのだろう。
“先生”が表情を変えた。

「それは私たちが身勝手にやったことです！ あなたたちは無関係だ！」

「そんなことねエよ。……飯も貰ったしな」

思い出すのは、甘い小さな芋の味。

日々の暮らしさえも苦しいはずのあの女性は、それでも二人にそれを分けてくれたのだ。
だ。

——ならばもう、無関係でもなんでもない。

飢えているはずなのに、それでも差し出してくれた人に背を向けることはできないから。

そうしてしまつたら、致命的な何かを踏み外すことになる。

「それによ、おっさんがいなくなつたら多分酷エことになるんだろ？」

「……それは……」

言い淀む『先生』のその態度で確信した。致命的ではないかもしれないが、酷いことになるのは間違いないのだと。

「——反逆者の拘束、そして処刑つてのは国にとつては必要だがリスクのある行為だ」

言葉を紡いだのはサボであった。腕を組み、厳しい表情のまま言葉を紡ぐ。

「勿論放置はできねエ。それは一番の悪手だ。それが悪法であろうと法は法。それを定めた側がそのルールを守らせられねエようじや国の維持もできねエからな」

それはまさしく今ルフィとウタが追われている理由そのものである。

法律という名のルールを定めたのは国家であり政府だ。それは国家を運営していくために守らなければならないルールであり、それがあからこそ秩序を保てる。逆に言えばそれが守られないというのは秩序の崩壊を意味するのだ。

——「悪法も法」。そう言つて処刑されたのは誰だったか。

人の作る法である以上どうしても穴はできる。想定外のことも起きる。だがそれも定めたルールである以上、例外は作つてはならない。一つの例外は必ず次の例外を生み出してしまふ。その先に待つのは国家の崩壊だ。

「相手が海賊ならそういうことは気にする必要もねエだろうが、反乱は違う。……クーデターだったり権力闘争だつてならいいさ。負けた方が死ぬだけだ。だが今回みたいに国の人間が苦しみから立ち上がった場合は話が違う。それを処刑しちまったらどうなると思う？」

誰もがサボに視線を向け、その言葉を待つ。ただ「先生」と「將軍」はサボの言つてゐることの意味がわかつてゐるのだろう。苦い表情をしている。

「——『次は自分だ』と、国民がそう思い始める」

そうなれば地獄だと、重い言葉と共にサボは語る。

「命の危機を感じれば否が応でも人間は動き出す。国に殺される——そう思い込んでしまった反乱は地獄だ。そこに和解はない。妥協は死だと思ひ込んでしまふ。何せ実際に

殺された人間がいるんだからな」

「しかし、この状況を収めなければ多くの犠牲が出かねない状況です」

「だがあんたがいなくなったらあの広場の人間を誰が導くんだ？ 指導者がいなくなつた反乱なんてのはただの烏合の衆だぞ」

その言葉を受け、“先生”は“將軍”を見た。その姿を見て、無理だな、とサボは言う。

「あんたは国の側の人間だ。その内心はともかく表向きの立場を考えればこの国の人間を束ねるのは難しい。……先導者を失つたばかり、自分たちも殺されるかもしれないと思つてる奴らの前に国の要職にある奴が出てきても反発されるだけだ」

冷静な分析と言葉であつた。サボは現状においては明確に第三者である。故にこそ状況についての確に分析できるのだらう。“革命軍”としての経験もあるに違いない。

黙り込む“先生”と“將軍”。その二人に視線を向けながら、サボはシルクハットを被り直す。

「……大抵の国はそうなつてからおれたちを呼ぶんだ」

「どういふこと……？」

疑問の声を上げたのはウタであつた。彼女は既に“先生”から手を離しており、ルフィと並び立つようにして立っている。

その疑問に対し、サボは頷きつつも応じる。

「犠牲者が出て武器を取つてその結果として何人も死んで。その理由が生きたためだったならそれはより凄惨になる。妥協点なんて考えてねエからな。そうなると応じる側の国も退けねエ。……アラバスタがそうだっただろ？ クロコダイルが裏で糸を引いていたなんてわかりやすい。『悪』がいたからどうにか踏み止まれたが、もしそうでなかったらどうなったかはわかるはずだ」

二人が『新時代の英雄』と謳われるきつかけとなつた戦い。あれもまた生きるためが始まりであつたのだ。

「今回はそうなる前に話が来た。おれたちは何も戦争狂じゃねエ。話し合いで決着が着けられるならそうしたいんだ」

だが難しい、とサボは言う。

「自分の国の軍だけじゃなく海軍まで連れて来てる。この状況で何もなしに決着は無理だ。だがここを乗り切らねエとその先を考えることもできねエ」

既に相手の方は何かしらの情報を得ているはずだ、とサボは言う。

「ピンポイントにこの街に来たつてことはそういうことだ。だが——」

「——教えてくれ」

ずっと黙っていたルフィが言葉を紡いだ。彼は『正義』のコートを取り出すと、それ

を羽織る。

汚れたコートと僅かに燻んだ文字。しかしその文字はこの場の者たちにとってはあまりにも眩しく見えた。

「おれが出ればどうなるんだ？」

「……状況が切り替わる」

あくまで冷静にサボはルフィの疑問に答える。

「向こうが求めているのは首謀者であり、この街の住民が旗印にして縋っているのは『麦わら』と『歌姫』だ。そんな状況で出て行けばまず間違はなく向こうは首謀者が『麦わら』だと判断する。そこに真実はないが、目の前にある事実の方が意味は大きい」

真実、『麦わらのルフィ』がこの騒動を取り仕切っていると思っっている者はいないだろう。名前を利用された程度の認識だ。『名前を利用されている』という事実については後で何かしらの動きがあったかもしれないがそこまでの影響はなかっただろう。

だがそこへ『本物』が現れれば話は別。旗印そのものが出現した以上、それが首謀者であると判断するのは当たり前前のことでもある。

そして本人がそれを否定しなければ――

「駄目です!!」

声を張り上げたのは『先生』だった。彼は縋り付くようにルフィの服を掴む。

「身勝手に名を利用して！ 継りついて！ 崇めて！ そうして巻き込んでおきながら救われるなど！ そうまでされる価値は我々にはないはずです！」

「さつきも言っただろ」

自分の手を掴む手を優しく解きながら、ルフィは言う。

「美味エ芋を貰ったんだ」

それに、とルフィは言う。

「元々追われてる。理由が増えるだけだ」

そしてルフィが階段を降りて行こうとする。そんな彼に対し、ルフィ、とウタが声をかけた。

「私も一緒に」

「……いや、ウタは待つてくれ」

ウタの体が震えていることにルフィは気付いていた。彼女の強さについてはルフィ自身がよく知っている。だが駄目だ。今の彼女を戦いの場に出すわけにはいかない。

「多分だけだよ、ウタの姿が見えねエ方が向こうも警戒すると思う」

彼女を押し留めるために咄嗟に発した言葉であったが、的を得ているような気がした。海兵たちを率いているのはスモーカーだ。彼はウタの持つ“ウタウタ”の能力を知っている。ならば姿を晒すよりも姿が見えない方が彼は警戒するし、他の海兵たちも

動き辛いはずだ。

「でも……」

「大丈夫だ」

ルフィのその返答に唇を噛み締めるウタ。やはりその体は震えていた。その彼女の手を一度、ルフィは握り締める。

「……」
まるで祈るような仕草。互いの手で形作られたそれはしかし、祈りではなく誓いだろう。

手を離し、階段を降りて行くルフィ。その背を見送るウタの思い詰めたような表情に彼は気付かない。

ただ思うのは、彼が掲げた「正義」のこと。

——「大切な人が笑える正義」。

その大切な人が誰であるかなど、今更確認する必要もない。ただ、思うのだ。

「……」

軋む音と共に扉が開き、無数の視線がルフィへと集中する。

その視線を受け止めながら、それでも揺らぐことなく彼は歩いていく。

「……ああ……」

「救世主様……！」

継るような声。祈るような言葉。

その全てを受け止めながらも思うのだ。

——ここで何もしなかったら。

ウタは、おれは、笑っていられるか？

はつきり言つてルフィもウタもこの国については巻き込まれたただけだ。思い入れがあるわけでもないし、海軍にいた頃ならばともかく自分たちのことで精一杯な今は自分たちにできることなどない。

だが、食べる物を貰った。

そして、彼らはこちらを「悪」だと断じなかった。

「……どうして」

呆然とした眩きは芋をくれたあの女性のものだ。

何かを言おうと口を開くルフィ。だがその前に別の声が割って入った。

「なんだお前は!?!」

なんなのだろうか、とルフィは思う。

目的の一つ。願いも一つ。ただ、ウタに笑っていて欲しいだけ。

けれどたったそれだけのことが——難しい。

「何故出てきた。この国とテメエは関係ないはずだ」

思考に沈んでいる間に出てきていたスモーカーが問う。そちらに視線を向ける。どう答えるべきか、一瞬だけ迷った。拳を見つめる。そこにはまだ、あの温かい芋の感覚が残っていた。

「飯をもらったからな」

その言葉は自然と口から出ていた。それはルフィがここに立つ理由として十全なもの。

——そうだな。

内心で呟く。そうだ、それでいい。

それを違えてしまえば、きっと致命的な何かを踏み外す。

だからこそ彼はここに立っている。

大切な人の笑顔を守るために。

食べ物くれた人たちを守るために。

——かつての友と、戦うのだ。



「——これが『英雄』か」

残された者たちの中、サボが呟いた。彼は帽子を被り直すと、立ち尽くすようにしているウタへと声をかける。

「船はどこに停めてある?」

「え……?」

呆けた声を出すウタ。サボは電伝虫を取り出しながら言葉を紡いだ。

「『麦わら』が表に出た時点で状況は変わった。正直な話をすると、これ以上この国にはいねエ方がいい」

参謀総長。それは決して飾りの称号ではない。既に彼の中では状況の把握と並行して次にすべき行動について思考が巡りつつある。

「タイムミングを見ておれたちが援護する。この島から逃げろ」

「どうして……?」

ウタが問う。サボは息を吐くと言葉を紡いだ。

「元々おれたちはあんたたちを探してたんだ。もつと落ち着いた状況で話をしたかったが、そんなことをしている暇もねエから後回しだ。とにかく危害を加えるつもりもねエ

し敵対の意志もねエ。それは信じてくれ」

直後、サボの持つ小型電伝虫が繋がった。向こうからは女性の声が聞こえてくる。

『サボくん？ これどういう状況？』

「見ての通り緊急事態だ。色々と作戦を変更するが、まず第一目標として『麦わら』と『歌姫』をこの国から逃すことが最優先だ」

私たちを、とウタの口から疑問の言葉が漏れた。サボがこちらへと視線を向ける。

「『麦わら』が前に出て海軍と衝突した時点であんたたちがこの国に対してできることはもう終わってる。むしろいねエ方がいい。革命の首謀者がいなくなれば表面上はこの状況に一定の決着が着く。……海軍は何がなんでも捕まえようとするだろうが、それはおれたちにとっても都合が悪い。だから援護する」

『そこに『歌姫』がいるの？』

「ああ。……ハックはいるか？」

『反対側で見張ってるよ。ただイルの電伝虫で連絡は繋げてる』

「よし。コアラはこの後沖で待機してる仲間に連絡を。場合によっては海軍と一戦することも想定するように伝えてくれ。ハックは港へ向かい、軍艦の動きを止めてくれ。破壊はしなくていい。すぐに動けないようにすれば大丈夫だ」

言い切るとサボは再びウタへと視線を向ける。

「船の場所はどこだ？」

「……街外れに。岩に隠す形で」

そして指で方向を示す。なるほど、とサボは頷いた。

「そつちはおれが援護する。イル、聞こえてるか？」

『——はい』

「アレは持つてるな？ おれの方で合図をするからその時は連携してくれ。荒事にはなるが戦闘が目的じゃねエ。あくまで二人を逃すことが最優先だ」

聞き覚えのある名前に思わずウタは眉を顰める。頼んだぞ、とサボは最後にそう言う
と電伝虫を切った。

「さつきも言ったが敵対の意思はねエ。できれば話をしたかつたくらいだ。……上手くいくかはわからねエが、もし上手くいってそのことを恩に感じてくれるなら——」

サボがウタの方へと何かを投げ渡してきた。受け取ったそれは——“永遠指針”。

「——そこで話をさせてくれ。船を走らせて一日もあれば着く無人島だ」

受け取ったそれは、特定の島を示し続けるものであった。それを見つめるウタに対し、ただ、とサボは眩く。

「それもここからの状況次第だ。おれたちは顔を見られねエ方がいい。あんたたちもだ」

声をかけられたのは「先生」と「將軍」である。彼らもまた固唾を飲んで状況を見守っていた。

「首謀者として『麦わらのルフィ』が前に出たのにあんたたちが出ちまえば意味が変わる。あの献身が無意味になってしまう。あんたたちが必要なのはこの後だ」

故にここは我慢だ、とそうサボが二人に語るのを横目に見ながら、ウタは自身の手を握る。

「……ルフィ」

震えるこの体に、彼は気付いていた。戦えなくなっていることにも彼は気付いている。

——違うと、そう思いたい。

でも、どうしても足が動かない。

背中を向けて歩いてく彼を引き止めたかった。行かないでと言いたかった。置いて、行かないでと。

でもできない。それはきつと、彼の生き方を汚すことになるから。

夢も未来も奪っておいて、これ以上彼から奪うことなど許されないので。

「……………ッ」

自分が、憎い。

何もできない自分が。

あの背中を見送るしかない自分が。

私は、何なのだろう？

何が、したかったのだろう？

いや、違う。

——何が、できるのだろう？



世界に名を知られる二人。『麦わらのルフィ』と『白猫のスモーカー』。

彼のアラバスタ王国の事件において活躍し、その後いくつもの大きな事件に関わることになる。『麦わらのルフィ』については『歌姫』と共に海軍と世界政府の方針からある種の象徴とされ、世界中にその名が喧伝されておりある意味親しみのある『英雄』としての認識が強い。正しく『弱者の味方』であるのだ。

それに対し、スモーカーはその気質もあつてか二人のように表に出ることは少ない。

だが彼に救われた、助けられた市民は確かに多く人氣の高い人物であることも確かだ。

……共に、か弱き市民にとつては「希望」であつた。

この苦しい時代においても、正しく「正義」はあるのだと。そう思わせてくれていたはずだったのに。

どうして、この二人が。

「ギア、2」

その体から突如、蒸気が噴き出した。「墮ちた英雄」がその本領を發揮する。

海軍の中でも上位にいる実力者同士の戦闘。そんなものを間の当たりにする機会などままないだろう。だが今回のようにたとえそれを目撃することができたとしても、それを目で追うことができる者が何人いるというのか。

「『ゴムゴムの』——」

その姿はまるで消えたようにしか見えなかつただろう。目にも止まらぬどころではない。文字通りにその視界から消失するほどの移動速度。

戦闘について訓練を受けている海兵や国の兵士たちでさえ、その姿を追い切れたのは数名だろう。対応できるとなるといえるかいなか。

伊達や酔狂で「英雄」などと呼ばれているわけではないのだ。その年齢からは想像できないほどの戦闘能力を「麦わらのルフィ」は有している。

「——J E T銃弾”!!」

だが彼が相對するのは「白猫のスモーカー」。彼はしっかりとその姿を捉えている。ルファイが踏み込みながら現れたのはスモーカーの左側。右手に十手を持つスモーカーは放たれる一撃を十手で防ぐ余裕はない。

故に彼は足に力を込め、姿勢を低くした。そのまま左の肩で受ける構え。

鈍い音が響く。スモーカーがその左肩に「武装色の覇氣」を纏わせ、ルファイの一撃を防いだのだ。

そのまま彼は身を捻り、かち上げるような肘打ちを放つ。だがそれは一手早く後方に退いていたルファイの避けられた。

僅かに空いた距離。二人の視線が交錯する。

「”ゴムゴムの”——」

「”ホワイト”——」

ルファイは左手を掌底として前に構え、スモーカーは身を捻り左の拳を構えた。

「——J E T銃”!!」

「——ブロー”!!」

拳と拳の激突とは思えない、凄まじい轟音が響き渡った。衝撃で二人が後方へと地面を削りながら後退する。

だが即座に二人は前へ出た突き出されたスモーカーの十手を紙一重で避け、ルフィが右の拳を伸ばす。だが直撃の瞬間にスモーカーは自身の体を白煙に変え、その一撃を避ける。

実体を捉える力でもある「武装色の覇気」。だがそれはあくまで当たればという話であり、その覇気を纏った一撃を当てられなければ意味がないのだ。

だがその条件でいうならスモーカーの側も同じである。ルフィの「ゴムゴム」に打撃は通用しない。故に必然「武装色の覇気」を纏うか、先端に海楼石を仕込んだ十手による攻撃でしか有効打にはならない。

「!!」

互いに至近距離。十手を中心に攻撃を組み立てるスモーカーに対し、それを受けながら更に距離を詰めるルフィ。

十手の先端には海楼石が仕込まれている。だが十手全体がそうではない。ならば受ける際も海楼石がない場所を受ければいいのだ。

互いに長い付き合いである。その手の内は把握しているし、何ができるかもわかつている。

故の超接近戦。距離が空いた状態での「ゴムゴム」と「モクモク」の厄介さは互いに把握している。故にその能力を使いつつ、近接戦での体術勝負を二人は選択したの

だ。

十手を拳で弾きつつ距離を詰め、拳を放つルフィ。対しスモーカーはそれには付き合わない。僅かに距離を空けるように後退、あるいは横手へと移動しつつあくまで十手のリーチの有利を活かそうとする。

「捉えたぞー！」

「させねエー！」

スモーカーがその左腕を白煙化してルフィの右足を拘束し、十手を突き出す。だがルフィは大きく身を退け反らせてそれを避け、さらに左足を蹴り上げる。

スモーカーの体が裂かれたように分かれた。ルフィが更に身を捻ると拘束が解ける。そして。

「——ッ!?!」

咄嗟に互いが放った拳が正確に互いを捉えた。ルフィの腹とスモーカーの左頬にそれぞれの一撃が入る。

衝撃により吹き飛ぶ二人。互いに近くの建物に激突し、轟音を響かせる。

「〃救世主〃様！」

「スモーカーさん！」

周囲から悲鳴が上がった。だが呼ばれた二人はそれらに応じることなく瓦礫を吹き

飛ばしながら再び向かい合う。

「ゴムゴムのJET銃乱打!!」

先手を打ったのはルフィだった。まるで手が増えたかのようにも見える乱打。対し、スモーカーはその範囲に逃れるのではなく前に出る。

数発の拳が彼に直撃した。だが彼は自分の体に当たった拳を白煙とした体で絡めとる。

「くっ……!」

「ッ、焦ったな!」　「ホワイト・スネーク!」

ルフィの体に巨大な白煙の蛇が噛み付く。覇気を纏うそれは容易く抜けられるものではない。

動きの止まったルフィ。そこへ渾身の十手による突きが叩き込まれた。

衝撃によって弾かれたように吹き飛ぶルフィ。地面を転がる彼は思わず空気を吐き出した。

「ぐ、ゲホッ」

だが気を抜いている暇はない。スモーカーがその隙を逃すはずがないのだ。距離を詰め、その十手を振るうスモーカー。それを咄嗟に受けるルフィ。

「——ッ」

だが、焦りが生んだミスか。それとも別の要因か。その両腕で十手を捌いた際に何度かその先端に触れてしまった。足から力が抜け、ルフィが膝をつく。

「おおッ!!」

「ぐっ!?!」

そこへスモーカーの左拳が叩き込まれた。思い切り頭部へと叩き込まれた一撃により、ルフィの体が吹き飛ぶ。

追撃に動くスモーカー。だがそのまるで衝突するような勢いでルフィがその懐へと飛び込んできた。

咄嗟の十手は避けられた。ほぼゼロ距離からルフィがその一撃を叩き込む。

「ツイン!!」

スモーカーの防御は間に合わない。風を切る一撃が彼へと叩き込まれた。

「JET銃!!」

スモーカーの体が吹き飛び、瓦礫へと叩き込まれた。ルフィは口元の血を拭い、そんなスモーカーの方を見据えている。

互いに手の内を知るが故の拮抗だ。しかし、拮抗しているからといって互いに無傷というわけではない。実力が拮抗しているのであればそれは削り合いになるのが道理だ。

しかし誰も二人の戦いへ介入できない。次元が違い過ぎて何もできないのだ。

いつしか、誰もが声を失っていた。これが「英雄」の戦い。世界の希望たる者たちの戦いなのだ。

どうして、と。そんな風に呟いたのは誰だったのだろう。

ただ、その疑問の答えを知る者はどこにもいない。

誰も望んでないなかったはずの戦いが起こった理由など、余人にわかるはずがないのだから。



「……フー……」

ルフィとスモーカーが互いに息を切らしながら向かい合う。それなりの数の攻撃を互いに当てているのだが、致命傷には届いていない。正しく削り合いだ。

ズキリ、とルフィの頭に痛みが走る。最近たまに起こることだ。

「……チツ。相変わらずだ」

呆れと、怒りと、嘆きと——多くの感情を乗せたスモーカーの呟き。彼は葉巻を啜え

直すと、ルフィの方へと視線を向ける。

「確認するぞ。……無理なんだな？」

「……ああ」

頷きを返す。その体から噴き出していた蒸気が消えていく。時間切れだ。

ルフィは右の拳を地面へと突き立てた。再び彼の体から蒸気が噴き出し始める。

「それじゃあ、笑えねえんだ」

誰が、なのか。きつとそれは口にしなければ伝わった。

だからこそ、スモーカーが大きいため息を溢す。

「わかった。これ以上は何も言わねえよ」

直後、スモーカーが地面を蹴った。対しルフィは左の掌底を前に出し、受ける構え。

そう——この戦いで、初めてルフィは足を止めた。迎え撃つためにその場に留まった

のだ。

何も間違いではない。通常の戦闘であるならば流れのうちにそうなることはある。

だが、これは一対一の決闘ではなく。

この戦場において、“麦わらのルフィ”は孤立無縁なのだ。

響いたのは、小さな銃声。

その音の元は“麦わらのルフィ”が庇った街の住民たちの中からであった。横手か

ら飛び込んでくる弾丸は、ルフィ目掛けて宙を突き進む。

そしてその弾丸がルフィの右足へと着弾する。瞬間、彼の体から鈍い痛みと共に力が抜けた。

「!?!」

本来ルフィに銃弾は通用しない。覇気を纏った弾丸であるのならともかく、普通の弾丸は「ゴムゴム」の能力の前には無効化されてしまうのだ。

故にこれは普通の弾丸ではない。これは——海楼石の弾丸。

疑問を浮かべる余裕はない。膝を折ったルフィの下にスモーカーが迫り来る。こちらを吹き飛ばすような勢いで、彼の握る十手が薙ぎ払うように振るわれた。

その時、ルフィの視界に入ったのは。

——紅と白の髪。

まるで、時が止まったかのように。

世界から、音と色が消え去った。

何故、どうして。

音にならぬ声が、「英雄」の口から零れ落ちる。

鈍く、そして乾いた音が響いた。
血の混じった何かが、宙を舞う。

世界に音が、色が戻り始める。そして全ての者たちは目撃した。
誰も割って入れぬ戦い。しかし彼女はそこへ割って入ったのだ。

「ウタ!!」

自身を庇い、スモーカーの渾身の一撃を受けたのは。

——青年が、誰よりも守りたかった人だった。

“世界の灯火” ⑤

未来が、見えたのだ。

その瞬間が、見えてしまったのだ。

「駄目」

だから駆け出した。その背に向かって走り出したのだ。

地面を蹴った。息を切らして全力で。

視界の中には、彼の姿しかなかった。

抱きしめるように。

庇うように。

頭を貫くような痛み。

焼けるような感覚。

けれど、同時に。

——こちらを抱き締める、優しい腕。

吐息を零す。嗚呼、そうだ。

この優しい手が、好きなのだ。

私を守ってくれる——いつも守ってくれていた、この手が、だから。

だから、今度は。

私が、あなたを。



ウタを受け止めた衝撃のまま地面に投げ出されるルフィ。力が抜けた状態でも歯を食い縛り、彼はウタを抱え込んでいた。

ウタを抱える右手に温かな感触を覚える。血だ。スモーカーの放った渾身の薙ぎ払いはウタへと直撃し、彼女のヘッドフォンを粉碎しながら彼女に深刻なダメージを与えていた。

「ウタ!!」

声をかける。僅かに反応があったが応じる声がない。何度か地面をバウンドし、そこで力が入るようになっていくことに気付く。

今の衝撃で弾丸が抜けたのか。くそつ、と呟きながらルフィは視線を前に向けた。

「――」

呆然とした表情を浮かべているスモーカー。だが彼はこちらの視線に気付くと、何かを振り切るように白煙を周囲展開した。

ここで止まるような男ではない。当たり前だ。ここで躊躇するような覚悟はしていないだろう。

ルフィもまた、ウタを抱えた状態でスモーカーを睨み据える。だが状況は間違いなく不利。

どうするか――と、そう思ったところで。

――何かが、幾つも広場に着弾した。

直後、凄まじい爆発音と共に周囲に煙幕が広がっていく。

「何だ!？」

声を上げるスモーカーの姿も煙幕の向こうにかき消えた。何が起こったのかわからない中、背後からの気配にルフィが振り返る。

飛び込んできたのは人であった。宙を舞うその人影はルフィたちのいる場所から少

し離れた場所を通過し、煙幕の中へと消えていく。地面に落ちる鈍い音が響いた。

何だというのだ。混乱しながらも立ち上がるルフィ。しかし状況は彼の理解を待つなどくれない。

「ッ、くそー！」

隣へ背後から何かが飛び込んでくる。ウタを抱えながら咄嗟に蹴りを放つルフィ。疲労とダメージ、状況の把握さえも覚束ない状況。それらのせいで随分と鈍い蹴りであったが、普通の人間であれば受け止めることなどできない一撃であったのは確かだ。

「お逃げください!!」

しかし、飛び込んできた影はそれを受け止めた。

何者かはわからない。だがその人物はローブの中から何かを取り出すと、それを周囲にばら撒いた。

——無数の銃声が響き、周囲から悲鳴と怒号が響き渡る。

「銃声!?!」

「何だ誰が撃った!?!」

「発砲の許可は出てないぞ?!」

住民たちも海軍も国軍も、煙幕の中で響き渡る銃声に混乱し始める。ルフィもまた身構える中、そのローブの人物が言葉を紡いだ。

「『音貝』です！ 銃声を記録したのですが、そう長くは攪乱できません！ どうかお逃げください!!」

早く、とまるで懇願するように言う謎の人物。その声で女性だとわかった。

状況は未だ不明。このローブの人物が誰かもわからない。だが動かなければならないと、ルフィは駆け出す。

「待てルフィ!!」

煙幕の向こうからスモーカーが吠える声が聞こえた。その声には様々な感情が込められていて。

しかしルフィは立ち止まらない。立ち止まることなどできるわけがない。

「——!」

背を向け、一心不乱にルフィは駆け出した。その腕の中にいる大切な人は瞳を閉じ、力無くこちらへと身を預けている。

今すぐ立ち止まり、声をかけたかった。

だが、駄目だ。そんなことをしている暇もないし、それで彼女が良くなるわけではない。

「ウタ……!」

まるで、迷子の子供が泣くのを堪えているかのような。

暗闇の中で誰かを探す子供のような。

だがそれでも、彼の足は止まらない。

止まってはならないと、彼の本能が告げていた。



イルという女性は、自我というものがわからない。

自分で何かを選ぶことが苦手だ。いや違う。選び方がわからないというべきか。

物心ついた時にはもう、自由意志というものを持たないことを求められていた。望ま

れたことを望まれた通りに。そうやって生きてきたのだ。

命を拾うことになり、“革命軍”に入ったのも成り行きだ。

“世界を見て回れ”

かつて言われたことのあるその言葉を実践しようとしただけ。どこまで行こうと誰かの言葉に縋りながら、自分の言葉を持たぬのがここにいる女であったのだ。

故に彼女が動いた時、その事実が一番に驚いていたのは彼女自身であった。

彼女を奴隷の身分から救い出してくれた“金獅子”。孫を名乗ることを許してくれたその人を打ち倒した“麦わら”について思うところがあるが、結末については海賊の習いだとも理解している。祖父は敗北した。それに対して外の人間が何かを言うのは彼への侮辱であり、彼女にそんなことができるわけがなかったのだ。

そして“英雄”と“白猫”の戦いについてイルが何かをできるような余地はなかった。そもその基礎的な戦闘能力が違う。割つて入ったところで邪魔になるだけだ。

故に待っていた。広場全体を俯瞰できる場所で指揮官であるサボの指示を待ち、行動するのが彼女の任務であつたからだ。

(……私は)

だがそこへ想定外のことはいくつもいくつも重なることになる。

住民たちの中に紛れていた、おそらくは政府の諜報員であろう男の放った弾丸による戦闘への介入。それによって傾く天秤。その一瞬の出来事に対して何かをできる余裕などなかった。そう、なかったはずなのだ。

——“未来”が視えでもしない限り。

だがそこへ“歌姫”は割り込んだ。憧れであり救いであつた“歌姫”のその行動をイルは呆然と見ていた。聞こえてきたのは鈍い音。見えたのは鮮血。

気付いた時、彼女は広場へと飛び込んでいた。

その視線の先にいたのは、*“麦わら”*へ銃弾を放った男。

一瞬であった。その手に持っていた銃を斬り飛ばし、返す刀でその身を斬った。その勢いのままその男は宙を舞ったのだ。

その時の感情をなんと呼ぶのかを、イルは知らなかった。

それを*“怒り”*と呼ぶのだと、彼女は誰からも教わらなかったから。

「どうかお逃げください!!」

周囲にばら撒いたのは*“音貝”*だ。銃声を記録したそれはこの煙幕の中において海兵たちを混乱させるに十分な効果を発揮する。

考えれば単純なことであるのだが、そもそもこんな手段を海軍は想定していないであろう。今の彼らは煙幕と併せて突然の襲撃が起こったのだと考えているはずだ。

しかしそれでも彼らは無闇に撃つことはできない。同士討ちの可能性があるし、それに周囲にはこの国の兵もいれば国民もいる。敵の姿は確認できず、更に言えば周囲の味方の姿だけは見えている。この状況で躊躇なく銃を撃てる者はそうはいない。

イルはこれを想定していたわけではない。この状況に至ったのは偶然である。咄嗟の行動が彼女の側へ天秤を傾けさせたのだ。故に褒めるべきはこの戦い方を考案し、準

備をさせていたサボの方だろう。しかし今、イルの方へサボからのアクションがない。
(勝手に動いてしまいましたが、サボ様は……)

当初の予定ではサボの合図に併せてイルが攪乱を行うというものであったが、先走ってしまった。しかしそれで足を止めるような人物でないことをイルは短い間の付き合
いで知っている。だがそのサボの姿がない。

ハックは別任務で動いているし、つい先程まで一緒にいたコアラは沖で待機している
“革命軍”の部隊へと連絡を入れるために少し離れている。

どう動くべきか、と迷う。とりあえず二人は動いた。ならば後を追わせないようにす
るべきなのだろうが、この状況から次にどうするべきかがイルにはわからない。

自分も退くべきなのだろうか、それともサボとの合流を――

「――ッ!!」

しかし、その判断をする前に状況が動いた。煙幕の中、一直線に二人の方へ向かう気
配がある。

響き渡るのは金属音だ。イルの二刀が十手によって防がれた音である。

「誰だ!？」

息を切らしながらもそう吠えるのは“白狐のスモーカー”だ。格でいうのであれば
イルは敵わない相手である。だが今のスモーカーは負傷し消耗した状態だ。

足止めなら可能と、一合のやり取りでイルは判断した。少し距離を空け、二刀を構え直す。

「——答えるつもりはねエようだな！」

だが、その一瞬の間隙にスモーカーは距離を詰めてきた。刃のない十手でありながら、しかしまともに受けければ身体を貫かれてしまいそうな突きがこちらを狙う。

身を捻ることで避けるが、僅かに脇腹を掠めた。しかし距離が詰まった。イルはそこへ斬り上げの一撃を放つ。

スモーカーは自身の体を白煙にし、その斬撃を避けた。再びの金属音。

煙幕によって視界が奪われ、周囲で響く銃声によって混乱する広場。その一角でその二人はぶつかり合う。

(……サボ様)

その最中、イルは指揮官のことを思い浮かべる。指示をくれるはずの人のことを。

この状況の先が今の彼女にはどうしてもわからないのだ。今までの生き方、歩んできた道、在り方をいきなり変えることなどできない。彼女にはまだ道を示してくれる『誰か』が必要だった。

今の彼女にとつてそれは「革命軍」だ。故にこそサボの指揮下でその指示の通りに動いていたのだが、肝心のサボの動きがない。

(時間を)

故に彼女は停滞を選択した。

良く言えば待つ、という行為。悪く言えば先送り。

だが悩む時間もない。決めたならばその通りに動くだけである。

混乱が伝播する。状況は以前、先行き不明なままであった。



まるで、頭が割れるようであった。

「……………ッ！」

壁に寄りかかり、サボは自身の頭を抑える。倉庫から「歌姫」が飛び出した時、サボもまた慌てて飛び出すことになった。倉庫に残る二人には待機と『この後』について言
い渡し、「革命軍」にとつても重要人物である「歌姫」を追ったのだ。

だが残る二人への指示や「歌姫」の飛び出しに対してワンテンポ遅れたことなどせいで彼女を止めることはできなかつた。目に飛び込んできたのは「歌姫」が「麦わら

“を庇い、二人ともが宙を舞う姿であった。

その時、サボの視界に入ったのは砕かれたヘッドフォンであった。“歌姫”の象徴とも言えるそれはかつては“ヒーロー”の証でもあったのだ。故に見覚えがあった。

……そう、そのはずだ。

だから知っていた、それだけのはずなのに。

“助けてサボ！——が！私を庇って！”

ノイズのかかった声と、顔の見えない幼き『誰か』の姿。

知らない記憶。知るはずのない記憶。

「……………ッ、この煙幕は……………イルか……………」

割れるような痛みを堪えながら、どうにかサボは状況を把握しようと視線を広場に向ける。既に広場を覆うほどの煙幕が立ち込めており、中からは無数の銃声が聞こえてきていた。

元々想定していた策の一つではある。煙幕と音具による無数の銃声で場を混乱させ、撤退の時間を稼ぐというものだ。元々から“革命軍”では用いられていた手段ではあるし、本来は自分たちが見つかった場合に用いるはずだった手段だ。

(動いてくれたか)

大きく深呼吸をしながらサボは思う。イルという女性はその戦闘能力と性格、性質が

非常にちぐはぐな人物だ。並の海賊や海兵では相手にならない程の力を持つているというのに、相手を傷つけることを本能的に拒否するせいでどんな相手でも千日手のようになる。また自己肯定感があまりにも低く、自分から動くということができない。しいではなく、できないのである。

どうにも噛み合わないのだ。普通は力を得ればそれが自信となる。更に言えばそもそも力を得ようとする事と自体が主体的な行為であるはず。なのにその全てが彼女にはない。

出会つてからの時間でいうなら非常に短いものであるが、そういった彼女の性質についてサボたちは早々に把握した。何かがある、と最初に勘付いたコアラのおかげでもあるが。

そんな彼女が自主的に動いたことはサボにとって予想外であった。だがこれは嬉しい誤算だ。こちらは数が少ない。故にこうして攪乱を行う意味は大きい。

(状況を整理しろ)

痛む頭を押さえながらサボは思考を動かそうとする。状況は既に動き出しているのだ。それはつまり時間との勝負ということであり、サボもまたいつまでも止まっている場合ではない。

(二人は既に逃げた。海軍は混乱してる。優先すべきはあの二人を逃がし切る事)

本来なら自分たち「革命軍」で保護したいところであるが、それは現状では難しいだろうとサボは判断した。こちらに彼らに対する害意はないが彼らは元々自分たちと対立する組織にいた人間だ。そう簡単に信用してはくれないだろう。

だからこそ落ち着いて話をしたいと思つたのだが、この状況では難しい。ならばとあえず離脱させることを優先すべきだ。その結果として少しでも信用してくれたならば話是可以。悠長かもしれないがこれが最善であるだろう。

まとまりつつある思考。しかし。

“サボ、——は大丈夫だ。——が側で見てる。……くそ、目を離すんじゃない”

再び、覚えのない声が脳裏に響いた。ぼんやりと見えたのは小さな子供の姿。

——あれは、誰だ？

この覚えのない声は、一体何だというのだ？

それらを切り捨てるように大きく息を吐く。だが、一際強い頭痛と共に。

“お前ら知ってるか？”

大きく、心臓が跳ねる音。

“盃を交わすと——”

見えたのは、三人の幼い子供。

顔はわからない。誰かもわからない。だがどうしようもなく心が揺さぶられる。

「……………ッ、何、なんだ……………!?!」

サボは幼い頃の記憶を失っている。名前さえも忘れた状態でドラゴンたちに拾われてからも過去の記憶は戻らなかった。

ならばこれは、その失った記憶なのだろうか？

自分自身さえも知らない『サボ』という幼い少年の記憶だというのだろうか？

わからない。わからないことばかりだ。

ただ、彼は。

「……………守らねエ、と……………」

絞り出すように、そう呟いた。

それは、『革命軍参謀総長』としての言葉か。

或いは、失った『過去の自分』の言葉であったのか。

彼には、判断がつかなかった。



ウタを抱えながら、ルフィは息を切らして全力で走っていた。

スモーカーとの戦いによってついた傷も痛む。だがそれよりも腕の中で気を失っているウタの方が問題だった。

「……ウタ……！」

自分からこんな声が出るのかと、そう思ってしまうほどに弱い声であった。

失敗した——そんな言葉がずっとルフィの頭の中を回り続けている。守ると誓った人。ずっと一緒だと約束した相手。

傷つけさせないと、あの日は彼は誓ったのだ。

たとえ全てを敵に回すことになろうとも、絶対に。

「起きてくれよウタ……！」

目を閉じる彼女の頭からは血が流れ続けている。掌で押さえているが、だからこそわかるのだ。

足を止めて手当をした方がいいのか、と考える。だが今のルフィは何も持っていない。全て船の上だ。

“ちゃんと覚えなきや駄目だよルフィ”

ふと、そんな彼女の言葉を思い出した。

まだ正式に海兵になって間もない頃。ルフィとウタは他の新兵たちと一緒に様々な訓練を受けた。その中には座学もあったのだが、どうしてもルフィは苦手だった。航海術や簡単な医術など、必要なことはわかるのだがどうにも肌に合わなかったのだ。

彼自身が体験型というか、自ら体を動かすことが得意であつたというのもある。そして何よりも。

「ウタがいるじゃねエか」

いつだつて隣に彼女がいた。だからずっと頼っていたのだ。

ルフィは自分が何もかもができるような人間ではないと思つている。誰かを頼ることは恥ではないと思うし、実際に『一人では生きていけない』と公言しているくらいだ。

海軍にいた頃はそれで良かった。海軍とは組織だ。組織とは各々が果たすべき役割を分担することで機能する。ルフィができないことができる者がいたし、逆にその者にはできないことをルフィがやってきた。そうして彼らは歩んできたのだ。

しかし今はその全てがない。かつて彼の周囲の者たちが持つていた能力こそ、今の彼には必要な者だった。

「……………」

強く、強く奥歯を噛み締める。応急手当ての道具なら船にはある。しかし上手くできるのか。彼女を傷つけてしまうことにならないだろうか。

不安。それは彼が普段あまり感じない感情だ。何とかなるといつも思っていたから。だが、今は違う。

何とかなるでは駄目だ。

——何とかしなければならぬのだ。

「——着いた」

息を切らしながら、ルフィはその場所に辿り着いた。岩場に隠すようにして停められた船。ここまで二人を運んでくれた船だ。

しかし気付く。船の側に誰かがいる。感じる気配は一つだけだ。

——考える時間はない。ルフィは足を止めないまま船の方へと駆け抜けていく。

一撃で終わらせる。そう判断して踏み込んだルフィの目の前で人影もこちらに気付いた。その人影——女性は、両手を挙げてこちらへ言葉を紡いだ。

「待つて！ 私に敵じゃない！」

ギリギリでルフィが止まった。そこで気付く。彼女はあの時、サボを呼びにきた女性だ。オレンジの髪の毛のショートヘアに、ゴーグルをつけたキャスケットを被っている。

数秒前までのルフィは全力で彼女を排除しようとしていた。それがわからないわけでもないだろうに、彼女は一步も退いていない。

「手当を！」

ルフィが何かを言う前に彼女は後ろの船を示しながらそう叫んだ。その表情と言葉に嘘はなく、ただ必死さが滲んでいる。

何が嘘で何が真実か。それを全て読み取れることはルフィにはできない。だがその必死さだけは確かに伝わってきた。

「ごめんなさい。少し船の中を見させてもらったの」

船の甲板に上がり、即席でルフィのコートを敷いた上にウタを寝かせるルフィに彼女は言う。その手の中には船内に置いていた救急箱があった。

「まず血を止めるね。支えてあげて」

そして彼女の指示を聞きながらルフィはウタに対して応急処置を施していく。とはいっても処置を行ったのはほとんどが女性であり、ルフィはウタの体を支えながらその指示通りに動くばかりであったのだが。

「私はコアア。私も『革命軍』の一員なんだ」

傷口を洗い、傷の状態を確認しながら女性——コアア。

「私たちはあなたたちと敵対するつもりはないの。本当はそういう話はサボくんがするんだらうけど、この状況だとできないし」

言いながらのコアアの処置により、ウタの出血が止まった。思わず安堵の息を溢すルフィに対し、彼女も頷く。

「良かった、見た目ほど傷は深くないみたい。でも頭の傷だからしばらくは安静にしておかないと。……私も医者じゃないから、見立てが正しいかは保証できないんだけど」
「そんなことねエ。——ありがとう」

包帯を巻き始める彼女に対し、ルフィはそう言って頭を下げる。ウタを支える手は力強く見えるのに、どうしようもなく儂くも見えた。

そんな彼に対し、どういたしまして、と告げるとコアラは立ち上がり船を降りる。そして言葉を紡いだ。

「とにかく今は逃げて。この国のことは私たちが何とかするから」

その言葉に対してルフィは何かを言おうとしてできなかった。今の自分にこの国でできることは残っていないだろう。何よりウタの身が心配だ。

優先順位、というものがある。今のルフィにとって何よりも優先されるのはウタだ。彼自身がそう決めたのだし、そうなってしまうている。

だが割り切れることではない。モンキー・D・ルフィという青年は海兵だったのだ。苦しんでいる者がいる場所にそう簡単に背を向けることができない。

そんなルフィの表情に気付いたのだろう。コアラは微笑と共に言葉を紡いだ。

「大丈夫」

そう言うと、彼女は背を向けて走り出そうとする。その彼女の背中に、思わずルフィ

は声をかけていた。

「ありがとう！」

それに対し、気にしないで、とコアアラが応じる。

「私は、私がやりたいようにやっただけだから」

そして彼女は駆け出して行った。その背を見送り、ルフィは一度大きく深呼吸をする。

いつまでも止まってはられない。帆を張り、ウタを船内へと運び込み、ルフィは海へと彼らの船を進ませる。

——遠くで、大きな音が聞こえた。

振り返ろうとしたルフィはそれを堪える。今の彼にできることはない。そう、思ってしまったから。



煙幕が徐々に晴れていく中、スモーカーは息を切らして広場に立っていた。その体に

はいくつもの傷があるが、これは全てルフィとの戦闘によってできたものだ。正体不明の剣士による傷は一つもない。

「……舐めた真似を」

吐き捨てるように呟く。スモーカーとてわざと攻撃を受ける気などない。だがそもそもあの剣士はこちらを斬るつもりがなかった。最初は気付かなかったが、何度かぶつかり合えば嫌でもわかる。

剣筋は鋭い。だが殺意はない。どうにもちぐはぐであったように思う。

今思えば時間稼ぎが目的だったのだろう。眼前の光景がそれを示している。

——打ち砕かれ、まるで爆弾でも落ちたかのように荒れ果てた石造りの広場。

たった一人の正体不明の男がやってのけたそれが、この戦いを終わらせたのだ。

「ご無事ですかスモーカーさん！」

広場の惨状へと視線を向けていたスモーカーの側へと、彼の副官であるたしぎが駆け寄ってくる。

「おれは大丈夫だ。負傷者は？」

「混乱の中で負傷者は出ましたが重傷者はいません。民間人も確認中ですが今のところは」

「そうか」

流石に訓練された海兵である。煙幕によつて視界を奪われ、周囲で無数の銃声が鳴り響く中でもパニックにはならなかったようだ。

スモーカーは広場の一角へ視線を向ける。そこに転がっているのは「音貝」であった。

「銃声を記録するというのはその、あまり考えたことが」

「敵を殺すことが目的ならこんなことをする必要はねエ。普通に撃てばいいだけだ。つまりそうするつもりがなかったってことだ」

ふん、と鼻を鳴らすスモーカー。ルフィはともかく、その後から出て来た者たちはこの場の誰かをできるだけ傷つけないようににしたかったのだろう。

何者かはわからない。だがスモーカーは一瞬だけ見えた金髪の男に見覚えがある気がした。

(海賊じゃねエようだが)

つい先程の話だ。謎の二刀流剣士とスモーカー戦っていた途中で、突然凄まじい衝撃音が響いたのだ。思わず反応した瞬間に剣士は再び煙幕を周囲に展開し、スモーカーから離れようとした。

その剣士を追うために前に出たスモーカーは、煙幕の隙間からその男を目撃したのだ。

ゴーグルをつけたシルクハットを被った金髪の男。その男はしゃがみ込み、地面に両手の拳を当てていた。

何をしているのか、などと考える暇はなかった。スモーカーが判断を下す前にその男は行動を起こしていたのだ。

一瞬。ほんの一瞬だけ視線が交錯し。

——地面を揺らすような、凄まじい衝撃が駆け抜けた。

思わず後方へと飛び退いたスモーカーは、そうして謎の剣士と男を取り逃してしまった。

「……………」

ふう、と息を吐くスモーカー。葉巻の煙も同時に吐き出され、宙で揺れる。

「準備をしろ」

ゆっくりと歩き出しながらスモーカーは言う。だが彼の足が向かうのは港の方角ではなかった。

「あいつらはこの国を出るはずだ。今ならまだ探せば追いつける可能性がある」

言うと共に、スモーカーは地面に落ちている『それ』を拾い上げる。

それは、左耳の部分が砕けたヘッドフォンであった。スモーカー自身が砕いた、かつて戦友であった女性の持ち物である。

「……………」

乱暴というわけではなく、かといって慎重に扱うわけでもなく。当たり前のようにそれを手に取ったスモーカーは無言で見つめていた。

そんな彼の胸中を慮ることはできない。故にたしきも言葉を探していたのだが、そんなスモーカーの下へ別の海兵が走り寄ってきた。

「スモーカー少将！ ヴェルゴ中将より入電です！」

視線でこちらへ来るようにスモーカーはその海兵に合図する。そうしてからたしきへ視線を送ると、彼女も駆け出して行った。出港の準備のためだ。

それを見送り、受話器をスモーカーは受け取る。

「——スモーカーだ」

『簡単にだが報告は聞いている。……遅くなつてすまない』

「あんたが謝ることじゃねエ。おれのミスだ」

通話相手のヴェルゴへとスモーカーはそう応じる。取り逃したことはスモーカーのミスだ。彼は彼の役目を果たしたに過ぎない。

『いやそうでもない。こちらでも少し想定外のことがあったためそちらに着くまで時間がかかる』

「何があつた？」

『受け取った少し後に海賊船と会敵した。』リトル海賊団』だ』

「……あまり覚えのねエ海賊だな」

眉を顰めるスモーカー。ただ全く聞いたことがない名前ではない。どこで聞いたのか、と自身の記憶を探る彼にヴェルゴが続ける。

『キミにとつて馴染みがないのも仕方がない。』新世界』の海賊だ。……更に言えば、

『白ひげ』の傘下でもある』

「——『白ひげ』の?」

思わず問い返してしまう。生きる伝説、『白ひげ』。彼の『海賊王』とも渡り合った、嘘か真か世界を滅ぼす力を持つとされる男。

その男が率いる海賊団の影響力は絶大だ。しかし『白ひげ』の主なナワバリは『新世界』のはず。何故こんなところに傘下の海賊、それも本来は『新世界』にいるような者たちが。

「……例のニュースは本当だったってことか」

先日世界へ流れたニュースだ。最初に動き出した『赤髪のシャンクス』に続いて動きを見せた『百獣のカイドウ』と『ビッグ・マム』。そして『白ひげ』も動き出し、『四皇』が同時に全て動き出すという未曾有の事態になったというものである。

だが『白ひげ』だけは他とは違ってガセではないかという見方があった。動く理由

がないだろうという考えである。そして事実、他の「四皇」と比べるとその動きが表に出てこなかったのだ。

しかしそれは目に見えていなかったただけであつたということだろう。わざわざ傘下の海賊団が「新世界」からこんなところに来ているという事実。偶然とは思えない。

『こちらも見逃すわけにもいかなかったが、向こうが手早く退いたために取り逃した。ただ気になることがある』

「何があつた？」

『私自身は確認していない。だが部下から報告があつた。——「火拳」が乗つていた』

流石のスモーカーもすぐには言葉を紡げなかつた。「白ひげ海賊団」の二番隊長、

「火拳のエース」といえば誰もが名を知る海賊だ。まだ年若い身でありながら「四皇」の最高幹部に相応しい実力を有する怪物。

ただ、「火拳」については元々前半の海で目撃証言があつた海賊でもある。だがそれは単独行動であつたはずだ。

「……どうなつてやがる」

『狙いはあの二人か、それとも別か。……我々も急いでそちらに戻る。だがすぐには戻れない』

「わかつている。——おれたちはあの二人を追う」

言い切ると、スモーカーは受話器を置いた。そして彼は広場を振り返る。

海兵とこの国の兵士たちが住民たちの様子を確認しているところであった。今のところ多少の怪我人はいるが重傷者はおらず、大きな混乱もない。

スモーカーたちを率いていた「国務卿」は呆然とした様子で座り込んでいた。
(追うにしても何人かは残した方がいいだろうな)

この国の状況は未だ不安定なままだ。それを捨て置くことなどできないし、この荒れた広場についても放置はできない。

スモーカーは近くの海兵に目で合図をし、呼び寄せる。そして指示を出そうとしたところで。

「——これは一体どういうことか!!」

広場に、凄まじい声量による一括が響き渡った。スモーカーがそちらへと視線を向ける。そこにいたのは一人の大柄な初老の男だ。おそらく彼が声を上げたのだろう。

その隣には小柄な杖をついた男性がいる。その二人の姿を見て、住民たちや兵士たちの空気が変わった。

葉巻の煙を吐き出しながら、スモーカーはその二人を見つめている。

——この事態の終わりを、予感した。



「この惨状はどういうことか、ご説明頂きたい。——『国務卿』殿」

大柄な男性はこの国の軍隊を預かる『將軍』であるらしい。その隣にいる男性は『先生』と呼ばれ、この辺りのまとめ役のようなことをしている人物であるとのことだ。その二人は座り込んでいた『国務卿』のところまで歩み寄り、そう言葉を紡いでいる。

住民たちは縦るような目で彼らを見ているし、兵士たちは居心地悪そうにしている。何とも重い空気だ。

ちなみにスモーカーにこのことを告げたのは負傷したCPの諜報員だ。彼は住民たちに紛れ込み、この国の状況をずつと探っていたらしい。おそらく『国務卿』が動いたのもこの諜報員からの情報によるものなのだろう、とスモーカーは内心で思った。

ちなみにスモーカーは知らないがルフィに海楼石の弾丸を撃ち込んだのはこの諜報

員であるし、その後イルによって吹き飛ばされた後少しの間気を失っていたらしい。色々と言いたいこともあるが負傷している相手である。部下たちに諜報員の手当ての指示を出すと、スモーカーもまたその三人のところに歩み寄る。

「――『麦わらのルフィ』が現れた」

項垂れた状態の『国務卿』は『將軍』と『先生』が眼前に来て顔も上げないままだ。故にスモーカーが状況を告げる。

「……貴殿は？」

腹に響く声であった。『將軍』のその問いに対し、スモーカーは頷いて応じる。

「海軍本部少将、スモーカーだ。……この広場については『麦わらのルフィ』と正体不明の襲撃者とおれたちの戦闘によるものだ」

簡潔に状況を説明する。成程、と『將軍』は頷いた。

「して、その者たちは？」

「現在逃亡中だ。これからおれたちで追撃する。……ここにも何人かは残すつもりだが」

チラリと慌ただしく駆け回っている部下たちへとスモーカーは視線を送る。承知した、と『將軍』が頷いた。

「つまりこの事態はその『麦わら』が起こしたということか？」

「……確証はないが」

問いに対し、スモーカーは曖昧に頷く。状況証拠だけで言えば「麦わらのルフィ」が住民たちを扇動し、この事態に至ったというのが正しい味方だ。住民たちは彼を「救世主」と呼び、そして彼はそんな住民たちを守るためにわざわざその身を晒したのだから。

そう、目の前にあつた事実から考えればそれが正しい。しかしどうしてもスモーカーは納得できない。彼をよく知っているからこそ、『こういうこと』をする人間ではないと知っているのだ。

「——何が、確証だ」

不意に、吐き捨てるような声が聞こえた。

「どこまで……どこまでお前らは!!」

続いて、怒鳴り散らすような声。

その声の主は、先程まで項垂れていた「國務卿」であつた。彼は顔を上げ、憤怒に染まった瞳で「將軍」と「先生」を睨み据えている。

そんな彼に対し、スモーカーと向き合っていた「將軍」が言葉を紡ぐ。

「『国務卿』殿、冷静に」

「何を白々しい!! お前の隣にいる奴が黒幕だろうが!! 調べはついてんだよ!! 何が麦わらのルフィ」だ!! こいつらをまとめてたのはあんただろうが!!」

立ち上がり、「先生」に掴み掛かろうとする『国務卿』。それを間に割って入ること
で『將軍』が止めた。

「言葉には気をつけた方がいい。あなたの立場で確証のないことを語るべきではない」
「確証!? 何が確証だ!! そいつがおれたちを恨んでることなんざこの国中の人間が知ってるだろうが!!」

腕で遮られた『国務卿』が『將軍』へと怒鳴りつける。スモーカーはただ黙し、状況を見守っていた。他の海兵たちも兵士たちも、住民たちでさえも何も言えずに黙り込んでいる。

「そいつの息子は!! あいつは『天竜人』に殺された!! だからおれたちを恨んでんだろうが!! この国を!! 世界政府を!! だからこいつらを扇動して国を潰そうとしたんだろうが!!」

スモーカーの眉が跳ねた。しかし、その荒れ狂う言葉の嵐を叩きつけられている『先生』は黙したままだ。

「だから祭り上げたんだろ!? そりゃそうだ!! あんたにとつちや『救世主』だ!! 自

分にできなかったことをやってのけた「英雄」様だからな!!」

「——『国務卿』殿」

怒鳴り散らす「国務卿」の肩を掴む「將軍」。その言葉には重い響きが込められていた。

「それ以上はあなたの品位も損ねることになりますぞ」

「品位!?! そんなもんでこの国を守るか!?! 何もわかつてないのはお前もだ!!」

ふざけんよ、と「国務卿」は「將軍」へと怒鳴りつける。

「生活が苦しいだの!! 兵士の家族がどうだのと!! 毎日毎日国王に向かって偉そうにほざきやがって!! 今のこの国の窮状を作ったのはお前らだろうが!!」

そこで一度、「国務卿」は言葉を切った。スモーカーは黙したまま方が一に備えているし、「將軍」も「先生」も彼の言葉を待っている。住民たちもまた彼へと注目していた。

息を切らす「国務卿」は一度大きく深呼吸をした。そして右手で頭を抱えるようにしながら、吐き捨てるように言葉を続ける。

「……資源がなくなるなんてのはな、先王の時からわかつてたんだよ」

まるで今にも泣きそうな声であった。誰もが彼へと視線を送り、言葉を待っている。「この国は資源があつたから発展してきたし豊かだった。それがなくなればどうなる？」

冗談ではなく、国が減じる。なんならもつと酷いことになる。だから先王は資金がある内に色んな事業を始めた。……どれもこれも失敗したがな」

当たり前の話だ、と自嘲するように「国務卿」は言う。

「資源が尽きることを知ってんのは一部の人間だけだ。知らないから危機感なんてあるわけがないし、新規事業なんてのはいきなり儲かるもんじやない。案の定事業は失敗だ。当たり前だな。目の前に鉱山つて儲かる働き口があるのに、成功するかどうかもわからないような場所でも働きたい奴がいるかって話だ。……残ったのは負債だけを抱えて失敗した事業の山。その処理で金がなくなり、そこへ追い打ちのような資源の枯渇だ」

笑わせんなよ、と「国務卿」は言う。

「税金が重い？ 生活が苦しい？——そうならないようにしようとした全てを否定したのはお前ら自身だろうが!! 挙げ句「救世主」だど!!? どこまで愚かなんだ!!」

成程、とスモーカーはそこで得心がいった。

この場で住民たちを前に「国務卿」は言っていたのだ。

「貴様らに自ら考えて立ち上がるような気概はない」

軽蔑するように。

「誰かの言葉に従うことしかできない。それでいて必要なことはしないのがお前ら

だ”

吐き捨てるように。

その時点で彼はきつと、この国の者たちを『そういうもの』だと受け入れていたのだ。「継ることしかできないなら何故国王へ!! おれたちの王に継らない!? 誰よりもお前らを救おうとしたのは国王だ!! それを悪王だど!? 先王の方がよかつただど!? ふざけんのも大概にしやがれ!!」

それは怒りの発露であつた。この場にいる住民たちを、彼が言う『何もしなかつた者たち』を糾弾する言葉。

「……それが事実であるというならば。その事情を表に出せば」

「あんたやっぱり政治は駄目なんだな。国王の言う通りだ」

その怒りの発露に対して言葉を紡いだのは「將軍」だ。しかし、そんな彼に対して軽蔑するように「國務卿」は言う。

「出せるわけないだろ。資源がなくなるなんて情報を大々的に広げたらこの国は本格的に終わってしまう。他の国や世界政府からしたら金もまともに稼げなくなった国なんざいい狩場だ。国なんてのは足元見られた時点で終わりなんだよ。だからそうなる前に別の稼ぎ口を見つけないきやならなかつた」

全部ご破算だよ、と「國務卿」は言う。

「この場に海軍がいるってことはこの国の状況を世界政府に完全に知られたってことだ。そうなりや金の借り入れもできなくなるだろう。先の見えない国相手に優しくしてくれる国はない。泥舟つてのは見捨てるのが正しい選択だ。おれだつてそうするさ。……詰んだんだよ、もう」

ちくしよう、と呟き、「國務卿」が座り込む。空気が重い。誰もが言葉を発せぬまま、座り込んだ彼を見つめている。

皆混乱していた。当たり前だ。『悪いのは国王であり国』、『今の状況を変えるためには革命しかない』と、そんな風に誰もが考えていたのだ。しかし今「國務卿」が暴露したのはそんな単純な話で決着がつくようなことではないという真実である。

そんな空気を察したのだろう。自嘲するような笑みと共に、大体、と「國務卿」が言葉零す。

「なんでこんなに若いおれみたいなのが「國務卿」なんてやってると思ってるんだ？ どのいつもこいつも逃げたからだよ。事業失敗して負債だけを残した奴らは全員逃げたんだ。他国かあの世かは知らないがな。どうでもいい」

目の前の現実が、文字通り「反転」してしまった。

彼らは思っていたのだ。この目の前にいる男は、「國務卿」は自分達を苦しめる国王の部下で。それをどうにかできれば明るい明日が来るのだと。

だがそれは真実ではなかった。目の前の男は彼が言う『詰んだ』状況でもどうにかしようとしていた、むしろ足掻いていた側の人間。苦しんでいた側の人間であり、そしてそれは国王もまた同じだったのだろう。

——足場が、揺らぐ。

自分達の理由。立ち上がった根拠。その全てが根本から覆されていく。

住民も、兵士たちも。知らずその場に座り込む者たちも現れ始めた。それはきつと、現実を理解した者たちからだった。

感情は伝播する。

重苦しいその感情を——人は、『絶望』と呼ぶのではなかったか。

「まだだ」

だが、一人だけ。

杖をつく、その男だけがまだ立っていた。

「我々はまだ生きている。……すまなかつた。あの子の友人であつたキミたちを、もつと信じるべきだったのだろう」

言葉を紡いだのは「先生」だ。誰もがるで縋るようにその姿を見つめている。

だが一人。憎悪さえも籠った瞳を向ける男がいた。

「そんな言葉になんの意味がある!？」

「——まだ生きている」

その怒声に対し、“先生”はあくまでその言葉を繰り返した。

「キミの言うように遅いのかもしれない。だがまだ我々は生きている。ならばまだ何もかもを投げ出し、諦めるのは早いだろう」

張り上げるような声ではなく、静かな口調。問いかけるようなその言葉が、周囲へと伝播する。

「私を含め、我々はようやくキミたちの——陛下の想いを知った。ならば次は大丈夫だ。苦しいかもしれない。辛いかもしれない。報われないかもしれない。だがそれでも、並んで同じ方角を向くことはできる」

「もう無理だ。時間が無い」

「時間はある。……我々はそれを貰ったのだ」

誰からなのかは、きつと口にする必要はなかった。

もつと酷い結末もあり得たこの事態。それがこの国の民に死傷者が出ない形で収まったのは間違いなく『首謀者』のおかげだろう。

「どこまでも浅ましい理解であるのだろう。だが我々はどうしようもなく間違える前に

こうして向き合えた。ならばそうすることがきつと、あの献身への報いであるはずだ」
その言葉の意味がわかる者はそう多くないだろう。彼がいうどうしようもない間違
い——それはあの「英雄」によって止められた、自己犠牲の果てに起こっていたであ
らう一つの悲劇。

だがそうはならなかった。だからこそ彼はここで立っている。

「いいのかよ。あんたは、それで」

俯き、その言葉を紡ぐ「国務卿」。対し、「先生」が頷く。

「それがきつと、我々の償いであり責務だ」

「そうじゃない」

そうじゃないだろう、と首を振って「国務卿」は言う。

「あいつのことは。あんたの息子のことはいいのか？ 恨んでるんじゃないのか？」

「恨むものか。あの子が愛した国だ。……だから私はこうしている」

それがきつと、彼が立ち上がろうとした理由なのだ。そこには復讐の意味も憎悪の感
情もない。正しく想う気持ちだけがある。

何かを言おうとした「国務卿」が、終ぞ何も言えずに項垂れる。それをしばらく見つ
めていた「先生」であったが、彼は一度目を閉じると成り行きを見守っていたスモー
カーの方へと振り返った。

「少将殿。今回の件については」

「——おれたちは国の政治に介入するつもりはない。革命についての沙汰はその国の法で決着をつけるべきだろう」

言い切る。そもそも海軍はあくまで軍隊であり、政治家ではない。組織として国への影響力はあるがそれを積極的に使うことはできるだけ避けているし、そうするべきだろう。

「だが首謀者である『麦わらのルフィ』については別だ。後日調査はさせてもらおう」

「……ええ」

頷く『先生』。その瞳に宿る強い意志を受け、スモーカーは小さく息を吐いた。

実際に起こっていたこと、起ころうとしていたことの想像はできる。そしてそれはきつと真実であるが、しかし証拠がないのもまた現実。そして何より、スモーカーの中にある『何か』がそれを真実とすることを是とした。

それは、『情』であつたのだろうか。

それとも、世界を敵に回しながらもその在り方を曲げず、『正義』を背負った彼への『敬意』であつたのだろうか。スモーカー自身にもわからなかった。

「おれたちは今回の件の首謀者を追う」

改めての宣言。それが一つの決着となる。

そこへ。

「スモーカーさん！ 報告が！」

こちらへと走り寄ってくる海兵——たしぎの声がした。スモーカーはそちらへ視線を向けると、たしぎの方へと歩いていく。

その、背中に。

「——我々は、いつか罰を受けるのでしよう」

まるで懺悔のような、そんな言葉が聞こえた。

スモーカーは足を止めない。その言葉は、聞こえなかったことにした。

「準備は終わったか？」

「それが何故か船底から舵が破壊されています……！ 出港できません！」

「なんだと？」

どういふことだ、とスモーカーは問う。

「船には見張りもいたはずだろう」

「それが誰も気付かないうちに破壊されていたようで……」

慌てた様子なたしぎ。ルフィたちかと思つたが、すぐに違うと思ひ直す。そんなことをする余裕はなかつただろう。

ならばあの正体不明の襲撃者たちがやったというのが妥当か。だがどうやって？

(想定よりも厄介な奴らのようだな)

手段は不明。だが目の前に実績があるなら受け入れるしかない。

これだけのことができる者たちとなると限られてくる。スモーカーの予想が正しいのであれば、あの二人を助ける行動を取ったのも理解できるのだ。

「基地へ連絡を入れる。こちらに代わりの軍艦を回すように言え。同時に周辺の搜索だ。そう遠くには行ってねエだろう」

「は、はい！」

そしてたしぎが走り出す。それを見送り、スモーカーはふと広場を見た。

「……………」

今更ながら、戦いの傷が痛む。鍛錬で戦うことはあつたが、本気でやり合つたことはなかつた。まさかこんな形で戦うことになるとは。

互いにまだ戦える状況であつた。決着は着いていない。そしてあの二人が賞金首である以上、対峙すればスモーカーは再び戦うことになるだろう。それが海兵というものであるのだから当然だ。

ただ、やはり。

気分がいいものではないのは、確かだ。

「馬鹿野郎が」

呟いたその言葉に込められた感情は、どんなものであったのだろうか。



何を間違えたのだろうか。

あの国に残り、見届けることを選んだことか？

それとも、あの国を訪れたことか？

いや、もしくは。

——見捨てなかつたことか？

「違う」

とてつもない自己嫌悪と無力感の中、青年が呟いた。

選択は間違つていない。だってそうなのだ。自分の望みは彼女の“笑顔”であり、幸せになって欲しいというそれだけのもの。しかしだからこそあの選択をしたのだ。

見届けて、早々に離れたとして。

彼らを見捨て、背を向けたとして。

きっとその後、彼女は笑えなくなってしまふ。

だから間違いないじゃない。そうだ、選択は間違っていない。ならば何を間違えた——いや、違う。

——何が、悪かった？

一体誰が。

一体何が。

彼女を。

誰よりも大切な人を、傷つけた？

「……おれが、弱いからだ」

あの時、彼女が——ウタが来ていることに気付いていれば。

あの時、こちらを狙う銃口に気付いていれば。

——あの戦場の全てを、把握していれば。

傷つけることはなかった。守れたはずだ。

こんなことには、ならなかったはずだから。

「今のおれじゃ足りねえ」

海を往く船の上。『英雄』と呼ばれた青年は渴望する。

全てを把握する力。何も見落とさない力。戦場の全てを把握し、絶対に傷つけない

めに。

手本ならある。『神』を名乗り、恐怖で空島を支配していた怪物。あの男はその『見聞色の覇気』で島全体を把握していた。

不可能ではないのだ。全てを把握し、知覚し、そして。

——『未来』さえも。

この力の先にはそれがある。それを掴むことができるなら。きつともう、彼女を傷つけることはないはずだ。

「——」
かつて『英雄』と呼ばれた青年は、力を求める。

それは大切な人を守るため。そのために彼は限界さえも超えようとしていた。その先に待つのは、祝福か。

或いは、破滅か。

ただきつと、彼はこの時に決めたのだろう。

——自分の命の、使い方を。

ずつと一緒に”

海軍本部の食堂。その隅にその人物はいた。とてつもなく広いその場所は時間帯によつてはそれでも座れなくなるくらいには混雑するのだが、ピークを過ぎた今は大分人も減っている。そんな中で彼女は頭を悩ませていた。

彼女の今の悩みは広報についてだ。彼女はいつも忙しい。今や世界中に名を知られた「歌姫」となれば当たり前だろう。次が次へと何かしらの仕事が舞い込んで来る。投げたい、逃げ出したい、とにかく何も考えずに——と思つたところで、彼女は顔を上げた。

「……あ、今なにかいい感じ」

呟くと、彼女——ウタは目の前に広げていた紙を裏返した。裏紙部分は真っ白である。そこへウタは鼻歌混じりに何かを書いていく。

「♪ いや、ちよつと違うかな——」

紡がれていくのは音符のダンスだ。鼻歌を交え、ウタは新たな曲を紡ぎ上げていく。どれぐらいそうしていたのだろうか。書き上がったものを前に、ウタは満面の笑顔で浮かべていた。

「できた！」

これ以上ないくらいに満足そうである。うんうんと頷き、彼女は自分の紡ぎ上げた『新曲』へと改めて視線を送る。

「後でオリンに相談して弾いて貰おうかな？　そこで色々修正して、それから歌詞を考えて……あ、その前にルフィに聞いて貰わないと」

「ん？　呼んだか？」

名を呼んだ瞬間、机の対面に一人の青年が座った。麦わら帽子を被ったその青年——モンキー・D・ルフィはその両手に大量の食事を抱えている。

「あ、ルフィ。センゴクさんの方はもう終わったの？」

「おう」

軽い調子で応じるルフィは机の上に大量の食事を置いていく。ルフィは今朝からの海軍本部の元帥——即ち最高指揮官であるセンゴクに呼び出されていたのだ。ちなみに心当たりについては『多過ぎてわからない』ので追及する意味はない。

「結局どの件についての説教だったの？」

「それがよ、説教じゃなかったんだよ。じじよーちよーしゅ？ とか言われた」
「事情聴取？」

「あのカジノのことについて色々聞かれたんだ」

ああ、とウタは得心がいった。つい先日、ルフィとウタはとある場所で大きな戦いを経験したのだ。彼が言っているのはその件である。

巨大黄金船「グラン・テゾーロ」。世界最大のカジノを有する最早島というべきその場所へ二人は招待され、そこでその船の主人であり「怪物」とも称される男——ギルド・テゾーロと紆余曲折を経て激突したのだ。

世界の通貨の20%を持つとまで謳われるテゾーロの失脚と「グラン・テゾーロ」の事実上の崩壊は世界に大きな影響を与えた。あの「王下七武海」が一角、クロコダイルの野望を打ち砕いた「英雄」がそう時を置かずにやってのけたこの大事件は瞬く間に世界中に広がっていた。今や二人の名を知らぬ方が珍しいレベルである。

「後でウタにも聞くって言ってたぞ」

「ふーん」

あの件についてはウタも色々と思うところはある。だが終わったことだ。テゾーロを筆頭とした「グラン・テゾーロ」の首脳たちについては取り逃してしまったことが悔やまれるが、それは今後の海軍に任せるしかないだろう。

「何を聞かれたの？」

「あの中がどうだったとか、誰がいたかとかそんな感じだ。ああ、一応あいつらと共闘したことについてはちよつと怒られたな」

「……まあ、それはしようがないかもね」

ウタも頷く。状況が状況であつたが故、そして“中立”という建前からあの場に言わた者たちと二人は共闘することになった。中でも今世間を騒がせる“最悪の世代”と結果的にあるが共闘せざるを得なかつたのは色々と思うところはある。

まあ世間的な発表に彼ら——キッドとローの活躍については書かれていないし、事情についてはセンゴクも把握しているので怒るといつても注意程度だろうが。

「それよりウタ、おれを呼んでなかつたか？」

「うん？——あつ、そうそう。見てルフィ」

ウタが机の上にある紙を指し示す。ルフィが食事を止め、そちらへ視線を向けた。

「新曲ができたの！」

まるで宝物を自慢するかのよう言うウタ。おお、とルフィの顔にも笑みが浮かんだ。
だ。

「やっぱり凄エなウタは。すぐに聴けるのか？」

「まだ試作というか、ホントに今さつき浮かんだだけだから歌詞とか色んな調整もまだ

なの。……できたら一番に聞いてくれる？」

「当たり前だろ」

笑みを浮かべて言うルフィに対し、ウタも笑顔で返す。そして彼女がその紙を持ち上げた時、ルフィの目にその裏面——いや、元々表であった側が目に入った。

「なアウタ、そつちのは何だ？」

「え？……あ、忘れてた」

言われてから紙を裏返したウタが眉を顰める。音符の描かれた面とは逆、本来の表面にあったのはいくつものデザイン案であった。

今や世界中に「歌姫」として名を広めるウタの役割はその広報活動を通して海軍をアピールすることにある。どうしても秩序側であり取り締まりを行う側である海軍は恐れられることが多く、市民との距離が遠くなることも多い。故に広報活動を行うことでその距離を縮めようとしているのだが、その中でもウタの人気と認知度はその隣に立つルフィと併せて抜群であるために前面に押し出される頻度も多いのだ。

今や「新時代の英雄」とまで謳われる二人。憧れさえも抱かれる二人のグッズは人氣も高く、だからこそ海軍の広報部も気合を入れているのだが——

「……どれがいいか、って言われてもね……」

腕を組み、頭を悩ませるウタ。そもそも彼女がここにいたのは自身のこの仕事を片付

けるためであったのだ。

机の上に広がっているのは様々なデザインへのヘッドフォンであった。普段からウタが着けているそれを基礎として様々な色や装飾によって彩られ、かなりの種類のデザイン案がその紙には載せられている。

海軍が誇る「歌姫」の人気は凄まじい。そのグッズとなれば売り上げも抜群だ。故にこそライブの度に様々なグッズ展開を広報部が考えるのだが、その中でもヘッドフォンは人気の品であった。故に広報部も力を入れており、節目のタイミングではこうして凄まじい気合の入ったデザイン案を用意してくる。彼らもある意味必死だ。

そして最終的にウタがそんなデザイン案の中からいくつかを選び、実際のライブでも着けることになるわけだが……。

「……どれもいいデザインだから毎回困るんだよね」

首を傾げ、悩むウタ。そう、それがわかるからこそ悩むのである。

広報部の本気とまで言われるくらいに気合の入ったデザイン案。何なら全員が独自にデザインしてコンペのようになってさえいるそれらは毎回どれも素晴らしく、だからこそウタを悩ませる。どうせなら全部とも思うのだが、流石にそれは時間も予算もない。だから選ぶしかないのだが、どうしても即決はできない。

「相変わらず凄エなア」

反対側から覗き込むルフィも感心しながらデザイン案を眺めている。彼にとつてもデザイン案の山は見慣れた光景ではあるのだが、毎回彼は楽しそうに眺めていたりする。曰く『面白い』のだから。

「スパツと決められたらいいんだけどね……」

机に突っ伏してしまふウタ。そう、だから彼女はこんなにも悩んでいるのだ。

出ているデザインはどれも素晴らしく、甲乙つけ難い。故に好みの問題となるのだが、だからこそ決められないのだ。どうしてもこのデザインの向こうに広報部の皆の顔が浮かんでしまふ。

どれかを選び、どれかを切り捨てる。作曲する時は簡単にできるのに、こういう形での選択がどうにも苦手であつた。

「ふーん」

こちらの気持ちを知つてか知らずか、そんな風に応じるルフィ。ウタは突っ伏した状態で顔だけ上げると、ルフィは、と問いかけた。

「どれがいいと思つて？」

「そうだな——」

食べていたものを飲み込みつつ、ルフィが机の上に視線を向ける。その瞳は紙面を一巡すると、そのまま彼は迷いなく一点を指差した。

「——これだ」

「……一番シンプルなの選んだね」

ルフィが指し示したのは一番端に書かれたシンプルなヘッドフォンであった。装飾もほとんどなく、『UTA』の文字が耳当て部分に描かれているだけ。その色合いがウタとは逆の形でメタリックな紅白になっているくらいか。

他のものに比べると随分と大人しい。良く言えばシンプル、悪く言えば地味なデザインだ。

「どうしてこれなの？」

思わずウタも問いかけていた。彼とは長い付き合いであるが、時々こうしてわからないことがある。

「昔ウタが着けてた奴に一番似てるだろ？」

そしてその問いに、ルフィは当たり前のように答えた。

彼が言う昔。それはあのフーシャ村にいた頃のことだろうか。確かに昔はヘッドフォンはシンプルなものを着けていた。広報活動に関わるようになってから様々なデザインのものを着けるようになり、やはり人目を引くデザインのものを着ける機会が多くなったのも事実だ。

プライベートではシンプルな物を着けるが、それでもライブ前だとその宣伝も兼ねて

新デザインのものを着けることも多い。

(……最後に着けたのっていつだったっけ)

あの、自分にとっては当たり前前のようにあったヘッドフォン。それを最期に身に着けたのはいつだったか。

「色んなのを見るのも楽しいけどよ。やっぱりウタのヘッドフォンはあれが一番だ」

「……そっか」

実を言うと、あのヘッドフォンには思うところがある。あれは「赤髪」がくれたものであったから。

……けれど、そうだ。

彼がそう、言ってくれるのなら。

「よし決めた。これにする」

「いいのか？」

「うん、いいの」

ルフィの問いかけに対し、ウタは頷きを返す。

「これがいいって、思ったの」

だって。

——あなたがいいって、言ってくれたから。

その言葉は口にしなかった。ただ、一つだけ。

仕事ではなく、プライベート。麦わら帽子の彼の隣を歩く時。

その「歌姫」は、そのヘッドフォンを身につけるようになる。

……そう、それは。

あの事件が起こった日もそうであった。当たり前のように彼が選んだものを、彼女は身につけていた。

そしてそれが、唯一持ち出せたものでもあったのだ。



雨の音が聞こえる。荒れた天気というのは厄介だ。余計な情報が多くなり、それがノイズになってしまう。

雨の音だけではない。雷の音。大地の音。獣の声。荒れ狂う海の叫び。

まるで五感に叩きつけるようなそれらを受けながら、その青年——ルフィは黙して地面に座り込んでいた。

薄らと目を開け、しかし、見ていながらも見ていない状態。彼は極限とも言える集中状態にある。

彼と彼女がいるのは海沿いにある洞窟であつた。そこは海から入り込める天然の洞窟であり、ルフィはその中へ船を停めて嵐が止むのを待っている状態だ。こんな状況になつたのには勿論理由がある。

眠り続けるウタを船内に運び込んだところで、ルフィは彼女が持っていた「永遠指針」に気付いた。何故こんなものを彼女が持っているのかは疑問であつたが、それを考える前に事態が大きく変わってしまう。

——大時化。

偉大なる航路は異常な天候に支配された海である。嵐など日常的であるが、その中でも今回は普段よりも明らかに規模が大きかつた。二人の船はそもそも長い距離を往くことを想定していない小舟だ。どこかで嵐をやり過ぎす必要があつた。

考えている時間などない。ウタの持っていた「永遠指針」に従い船を走らせ、ルフィは濡れになりながらどうにかその島に辿り着いた。ウタはまだ目覚めていない。全ての決断をルフィがしなければならなかつた。

ルフィは偶然見つけた洞窟内へと船を走らせた。入り口から少し進んだ場所に船を

停め、揺れる船からウタを布団と共に降ろす。火を起こし、ようやくそこで息を吐くことができた。全身がずぶ濡れだが、それより前にやるべきことがある。

「……………ッ」

ズキリと、頭が痛んだ。こうも続けば嫌でもわかる。体が悲鳴を上げているのだ。この先は危険だと、本能が告げている。

だが、ルフイは止まらない。

ここで立ち止まるような男なら、そもそも彼は今ここにいないのだから。

「感情は大事だよオ、大佐。それは確かに力をくれるからねエ。しかし振り回されちゃいけない。それはむしろ力を損ねちまうよ」

かつて指導を受けたことがある。それは本格的なものではなく、道中でちよつとしたアドバイスを貰うことになっただけのことではあった。

しかし、その指導は決して手を抜いたものではなく、あの頃の自分に必要なことをちゃんと教えてくれたのだ。

「周囲の把握は大事だ。目の前の相手だけに視線を向けていると思わぬところで足を救われるぞ。真剣であることも必死であることも大事だが、盲目的になるのは最悪だ

”

あの頃も今もまだまだ未熟なままだと思いき知らされる。ちゃんと教えてもらって

た。過たないように導いてくれていたのに。

己の力を過信したから。だから、間違えてしまった。

“何を以て勝利か。何を以て敗北か。まずはそれを間違えんことじゃア。……わたしらにとつての勝利とはか弱き市民を守ること。戦いはそのための手段の一つに過ぎん。それは目的ではないからのう”

次はもう、間違えない。

何が自分にとつての勝利であり、何が自分にとつての敗北なのか。それをもう一度自分の中で再定義する。

“我々は様々な理由を掲げて戦う。正義のため、か弱き市民のため、悪を許さぬため——本当に様々だ。しかしその根本、始まりにあるのはそう大層なものではない。誰だつて始まりの理由はささやかなものだ。……お前には無用な助言かもしれんが、忘れんようにな。お前が今ここにいる理由を、決して”

忘れるものか。

忘れて、たまるものか。

どんな時だつてそれだけは見失わなかつた。抱え続けてきた。

だから、絶対。

世界が、揺らぐ。

才能が、開花する。

それはきつと世界をも変え得る才覚であった。だがそこには危うさも同時に存在する。

世界を変える力ということは、即ち。

——世界を滅ぼす力ということでも、あるのだから。

雨の雫、その一粒一粒さえも感じ取れる。

島に住まう全ての生物、その感情が流れ込んでくる。

大気の流れはまるで、激情を叩きつけられているかのようだ。

ありとあらゆる全てを感じた。ある種の全能感さえも覚える中で、しかし思う。

これでは駄目だ。このままでは破綻すると。

この先に待つのは、破滅しかない。

“大切なのは選択じゃ”

ふと、脳裏にそんな言葉が響いた。直後、視界が揺らぐ。

“何を考えるにおいても選択というものは常に付き纏う。のうルフイ、お前は歩く時に何を考えておる？ 右足を出す速さを考えておるか？”

左足。視界。両腕。ただ歩くだけで膨大な選択を人間は強いられている。だがそれを意識することはない。必要のない情報を切り捨て、意識をせずに選択を終えているのが人間なのだ。

何故そんなことができるのか。その理由は単純である。

“必要なものを必要なだけ見聞きする。それがコツじや。……存外、無駄な情報というものは多いからの”

必要なものを、必要なだけ。

この島の全てを。だがそれは支配ではない。把握だ。何がいるのか、何があるのか。それを彼は自身の中へと受け入れようとしている。

秘められていた才覚が、花開いていく。

鍛え上げられ、研ぎ澄まされ。しかし蓋をされていたその才能が。

誰も知らぬその場所で、大輪の花を咲かせようとしていた。

“今はわからんかもしれないが。……まあ、覚えておけ”

それは一つの時代を終わらせたかもしれないほどの才覚。

だが多くの因果が、運命がそれを許さず。

——かくして、“新時代の申し子”が産声を上げる。

その事実を未だ誰も知らぬまま。

それはきつと、彼自身でさえも知らぬこと。

おそらく、この瞬間だったのだろう。

世界が変わる、その始まりは。



それはまだ、世界を知らぬ頃の遠い記憶。

幼き二人。『正義』も『悪』も、言葉としてしか知らなかった頃の記憶。

鐘の音が響いていた。そこで行われていたのは結婚式だ。数多の祝福。数え切れぬ笑顔。その中心にいる男女に対し、誰もがその未来に幸せがあることを願う時間。

それを遠くから眺めながら感嘆の吐息を漏らすのはウタだ。

「……………綺麗……………」

思わず溢れてしまったかのようなその眩きは、だからこそ本心であるのだろう。

視線の先には純白のドレスを纏う花嫁とその手を引く新郎だ。共に満面の笑顔を浮かべ、周囲からの祝福を一身に浴びている。

「私もあんなドレス着たいな……」

「着ればいいんじゃないか?」

頬に手を当ててうつとりするウタに対し、その隣にいたルフィが首を傾げながらその言葉を紡ぐ。テンションが非常に高いウタと違い、彼は幾分冷静だ。物珍しい光景を楽しんでこそいるがそれだけである。

そんなルフィの姿を見、はあ、とこれみよがしにウタがため息を溢す。

「バカね……あのドレスは結婚式で着るものなの。何も無い時に着るものじゃないのよ」

「何でだ? 着たいなら着ればいいじゃないか」

首を傾げるルフィと、そんなルフィに対して半目を向けるウタ。もしかして、とウタはルフィに対して言葉を紡いだ。

「あんた結婚が何か知らないんじゃないの?」

「む、それは知ってるぞ」

「じゃあ結婚って何?」

え、と問われたルフィは腕を組んで考え込む。思い浮かべるのは彼が生まれ育ったフーシャ村の光景だ。

「夫婦、つてのになるんじゃないのか?」

「間違つてないけど違う」

冷静なウタのコメントであつた。だがまあ、確かに間違つていないといえぱそうである。他人同士が結婚を経て夫婦になる——それは紛れもない事実だ。しかしウタが言いたいのはそういうことではない。そういう意味での『違う』だ。

「そうじゃなくて。夫婦になるっていうのはどういうことか、つて聞いているの」

「んん……？　一緒にいる、とかか？」

言いつつ、何か違う、とルフィは思った。だつてそれでは。

「別に結婚してなくても一緒にいることはあるでしょ？」

ウタの言う通りである。別にそれは結婚しなればならないということではないのだ。それこそルフィとウタは実質一日中一緒に遊び回っているわけであるし、マキノや村長などと共にいることも多い。

「やっぱりわかんねエ」

「あんたはやっぱりお子様ね」

ふふん、と口元に手を当てて言うウタ。なんだと、とルフィが唇を尖らせる。

「誰が子供だ」

「結婚の意味もわからないなんてお子様じゃない」

「何を！」

いつも通りといえはいつも通りのやりとり。そこへ一つの影が歩み寄ってきた。

「——面白い話をしているな」

穏やかな声。二人が声のした方へと視線を向けると、そこにいたのは一人の麦わら帽子を被った赤髪の男であった。

「シャンクス！」

二人でその人物の名前を呼ぶ。ああ、と彼は頷いた。

「どこに行ったのかと思っただらここにいたのか。……それで、何の話をしていたんだ？」

「ルフィがまだまだ子供だつて話よ」

「それはまた今更の話だな」

「何だとシャンクス！」

シャンクスに飛びつくルフィ。とはいえそれはどこかじゃれつくような動きだ。それをシャンクスもわかっているのだろう。片手で簡単に制してしまう。

「そうやってすぐに噛み付くのがガキだつていうんだ。……結婚式を見たのか」

片手で抑えられ、不服そうではあるが大人しくなったルフィから視線を外したシャンクスは二人の見ていた結婚式へと視線を向ける。そんな彼に対し、そうだ、とルフィが

思い付いたように言葉を紡いだ。

「なあシャンクス、結婚って何だ？」

「……それはまた奥の深い質問だ」

笑みを浮かべて言うシャンクス。彼はウタへと視線を向けた。

「ウタはどう思う？」

「え、それは……その、あ……い……二人が、一生一緒にいることで」

「声が小せエぞ？」

途中で照れて小声になったウタに対し、悪気のない様子で言うルフィ。ウタがそんなルフィを一度睨んだ。

そんな幼い二人の姿を微笑を浮かべて眺めながら、そうだな、とシャンクスは頷く。

「それも間違っちゃいけない。ウタの言うように『一緒にいたい』って気持ちがあるからこそ結婚に至るのはおかしいことではないからな」

「でも結婚しなくても一緒にいればいいんじゃないか？ しなくちゃ駄目だってわけでもねエだろ？」

ルフィの疑問。そうだな、とシャンクスは彼に視線を向けながら頷いた。

「お前の言う通りだ。だがそう単純に割り切れるものでもない。……あれは一つの『誓い』であり、『約束』なんだ」

「『誓い』?」

「『約束』?」

幼い二人の疑問の声。ああ、とシャンクスは二人に視線を向けながら言葉を続けた。「他人の気持ちなんてのは推し量ることはできても完全に理解することなんてできない。それができるなら世界は既に平和だろう。だから言葉にするし、形にする。結婚するのはその一つの形だ」

——あなたと一緒にいたい。或いは、一緒にいよう。

それを誓い、約束するための儀式。

「お前たちもいつかわかる日が来る。……そういうものが、大人の世界では必要なんだ」
それは、遠い日の記憶。

あの日の彼が言っていたことは、即ちこういうことでもあるのだ。

——言葉にしなければ、形にしなければ伝わらない。

それを少年は、青年となつた後に理解することになる。

あの日起きてしまった、最悪の悲劇によって。



頭を貫くような痛みによつて目が覚めた。どうやら意識を失っていたらしい。

「……………ッ」

どれぐらい意識が途切れていたのか。感覚で言えば数分だろうか。

島全体を把握するために用いた「見聞色の覇気」。その負担は凄まじいものであった。「覇気」は有用な力であるが無限に使える力ではない。どうしたつて消耗するし使い過ぎれば意識を失う。

いきなり全てをやるうとしたせいで一気に消耗したのだろう。だが感覚は掴んだ。後は慣れと練度。数をこなすしかない。

「……………約束、したのにな」

ふとルフィは呟く。随分と懐かしい記憶だった。まだウタが「赤髪海賊団の音楽家」であった頃。海兵になることなど夢にも思っていなかった頃の記憶だ。

——「誓い」と、「約束」。

言葉だけでは駄目なことがあると教えてくれたあの時の彼の表情を、ルフィは思い出せない。

どんな表情をしていたのだろう。どんな想いをしていたのだろう。

未だ彼のことはわからないことばかりだ。
ただ、思うのは。

「こんなことになってから……わかるんだな」

あの時の言葉の意味を。

ようやく、理解できた気がする。

それは――

「……………ッ、う……………」

聞こえたのは小さな呻き声。弾かれたようにルフィは振り返る。

――ゆつくりと、ウタが身を起こしていた。

痛むのだろうか。頭を軽く押さえながら上体を起こしながら何度も目を瞬かせている。

「ウタ」

思わず声が漏れた。びっくりとウタが体を震わせる。

「……………あ……………、ルフィ……………」

安堵のこもった声のルフィとは対照的に、ウタのそれは酷く弱々しい。大丈夫か、と

思わず手を伸ばしたルフィに対し、ウタは自分の体を抱きしめるようにして身を縮める。

それはまるで、何かに怯えているかのようである。

「——ごめんなさい」

紡がれた言葉は。

「ごめん、なさい」

その姿は。

「み、見えたの。ルフィが。私、だから」

今にも、壊れてしまいそうで。

「いつ、ツ……!?!」

不意にウタの表情が歪んだ。頭の傷が痛むのだろう。反射的にその傷を抑えようとした彼女はしかし、そこで気付いた。

——ヘッドフォンがない。

何かを探すように手を動かし、自身の頭の近くを探る。そこで彼女は自分の状況を理解したのだろう。

あの事態の中で持ち出せた物などほとんどなかった。あんなことになるなど想像もしていなかったから当たり前だ。その結果として彼らは自分たちの部屋に多くの物を

置き去りにしてきたが、おそらくそれらは全て捨てられてしまっているだろう。残す意味はないのだから。

故にあのヘッドフォンは数少ない持ち出すことのできたものであり——大切なものであった。

「……………あ……………」

青年は知らない。あのヘッドフォンが彼女にとつてどういう意味があったのかを。

大切な人が選んだものだという——彼女にとつて、「歌姫」にとつて大きな意味を持つものだったことを、彼は知らない。

だが、知らなかったとしても。

「——ウター！」

それでも、彼はモンキー・D・ルフィであった。

ウタと共に在り続けた、彼女のために生きることを決めた男であったのだ。

二つの影が、洞窟で重なる。

互いの息遣いも鼓動の音も聞こえるほどの距離。それはまるで、互いの存在を確かめるかのようで。

相手を抱き締めた彼と、その胸の内で声を殺して泣く彼女。

涙の理由は一つではない。数え切れないほどだ。

どうして、こんなことに。

どうして、自分たちは。

「私が」

涙の混じった声。

「私が、ルフィと一緒にいなかったら」

それはきつと、彼女の中からはどうしても消えなかったこと。

「私が、ルフィと」

何度彼が否定しようとも。それでも、どうしても消せなかったこと。

「——出会わなかったら」

あの時。あの東の海の小さな村で出会わなければ。

もつと違う未来が、あつたのだろうか。

「おい、ウタ」

彼女を抱く手に力がこもった。細い体だ。弱々しい体だ。

いつの間にか、彼の方が大きな体になっていた。

「やだ。……やだよ」

だが、彼が言葉を続ける前に彼女がそんな言葉を紡いだ。

「後悔、したくない」

思わず彼は言葉を止める。

「出会えたことを、後悔したくない」

それは感情の奔流であつたのだろう。涙と共に紡がれる言葉は、だからこそ何よりもその想いを宿していた。

「大好き」

まるで縫うような。

「あなたが好き」

祈るような。

「ずっと、ずっと前から」

捧げるような——たった一つの。

「愛してる」

まるで世界に二人ぼっちになったかのような感覚。彼と彼女だけの世界。

——嗚呼、そうか。

こんな当たり前のことさえも、言葉にしなければわからなかった。

ずっと側にいたのに、彼女の気持ちをわかっていなかった。

同じだったのに。

ずっと、ずっと。

ウタのことを、想っていたのに。

「ウタ」

なあ、シヤンクス。

おれ、ようやくわかった。

「結婚しよう」

あの時、シヤンクスが言っていたこと。

——“誓い”と、“約束”。

言葉にすることの意味と理由。それはきつと。

「おれも、ウタが好きだ」

、そうしなければ伝わらないから。届かないから。だから——形にするのだ。

「だから」

手を離し、右手の小指を差し出した。

それは「約束」の儀式であり。

「ずっと一緒に」

その言葉は「誓い」であった。

「うん。——うん……ッ」

大粒の涙を流しながら頷く彼女が、その右手を差し出す。

それはかつて見たような、数多の祝福の中で行われるものではないけれど。それでも

これが、二人にとつての契りであった。

誰も知らぬ場所です。たった二人で。

——けれど。

そんなことは、どうでもよかつたのだ。

きつとこの「誓い」を、何度も何度も繰り返すのだろう。

交わした「約束」を、何度も何度も繰り返すのだろう。

でもきつとそれで良いのだ。そうして進んでいくのだから。

失ったものは多くあり、得たものは少ない。

けれど、大切なものを見つけることができた。

それは得たものではないのだろう。ずっと自分の中にあつたのだから。ただ見えなくなっていただけだ。

だからもう、見失わないために。

この「誓い」と「約束」を抱いて、歩いていくのだ。

——「ずっと一緒に」。

.....。

.....。

.....。

巨大な『何か』が島へと上陸した。その気配を察知し、“墮ちた英雄”は島を出る。
「——行くう」

嵐の中を彼らは行く。今の彼らにとって、世界の大部分は敵であるが故に。
そしてだからこそ、その擦れ違いが起こってしまった。

「とんでもねえ嵐だな」

嵐の中を突き進み、その島に辿り着いたのは巨大な船であった。偉大なる航路の異常気象はある種日常的とも言える現象であるが、だからといって無視して良いものではない。上手く付き合うことが必要だった。

故に島を発見した段階でこの嵐が収まることをその島で待つことは早々に決まった。そうして上陸したわけであるが、そんな船の甲板には全身を雨水で濡らしながら呟く一人の青年がいる。

オレンジ色のテンガロンハットを被った青年だ。まだ年若いその青年はしかし、張り詰めた空気を纏っていた。

「……どこにいるんだ」

情報によればこの近くにいる可能性が高い。故にここまで来たのだ。だがどうしても見つからない。

彼が探しているのは今や世界中の話題になっている二人だ。大切な妹と弟。何を置いても見つけなければならなかった。

「ルフィ、ウタ」

焦りを滲ませたその言葉を紡ぐのは、二十歳という若さでありながら世界に名を知られる海賊。

背に負うは「四皇」が一角、「白ひげ」のシンボル。

白ひげ海賊団二番隊長、「火拳のエース」。

「無事でいてくれ」

祈るような言葉は、叩きつけるような嵐の音で掻き消される。

そこにいたのは世界に名を轟かせる海賊ではなく。

——一人の、「兄」であった。

逃亡海兵 Water Seven

逃亡海兵 Water Seven ①

プロローグ ①

その嵐は数日の間続いた。船が沈むほどのものではないし、無理をすれば海を渡ることも可能であっただろう。だが無用なリスクを負う意味はない。故に彼らはその無人島で数日を過ごした。

本音を言えば嵐だろうが何だろうが無視して突き進みたい。それぐらい彼は焦っていたし、もどかしさを感じていた。しかしできない。彼の背には「誇り」と「責任」があるのだ。

青年——ポートガス・D・エースは腕を組み、遥か遠くの水平線を見据えていた。想うのは彼にとつての家族である。

知らず、凄まじい威圧感を纏ってしまっているエース。彼自身は無自覚なその気配により、仲間であるはずの者たちも声をかけられない。

——不意に影が差した。反射的にエースが空を見上げる。

「エースくん、いつでも出航できるぞ」

まるで降り注ぐような声であつた。そこにいたのは、あまりにも巨大な“人”だ。

この世界には“巨人族”という巨大な人ともいうべき者たちがいる。だがそんな彼らよりも更に巨大な体軀をその男は持つていた。初めて見る者はおそらく自身の目を疑うであろうほどの巨大な“人”である彼はエースの友人であり、“白ひげ”傘下の海賊である。

名を、リトルオーズJr.。

かつて悪党たちの国を築いたと謳われる“国引きオーズ”の子孫であり、巨人族の常識さえも超える体軀を持つ人物だ。その人物に対し、エースも頷いて応じる。

「ああ。ありがとうオーズ」

「いいんだ。エースくんの助けになるならオイダも嬉しい」

オーズとの会話でエースの雰囲気は少しだけ柔らかくなる。数名がそんなエースを見てホッと胸を撫で下ろしていた。

彼が悪い人間ではないことは“白ひげ”傘下の海賊であれば誰もが知っている。だが同時にその恐ろしさも知っているのだ。

——“白ひげ海賊団”二番隊隊長、“火拳のエース”。

弱冠二十歳という若さでありながら「四皇」の最高幹部、その一角にある本物の怪物だ。「七武海」に勧誘されたことや敵対する多くの海賊たちを沈めてきた事実からその実力は折り紙つき。その彼が本気で怒った時、止められる者はこの場にはいないだろう。

「それでこの先はどうするつもりだ、エース？」

いや、一人だけいた。

現れたのは結い上げた黒髪を持ち、和装を纏った男であった。名をイゾウ。彼もまた「白ひげ海賊団」の隊長だ。その実力は確かであり、彼もまた世に名を知られた海賊であった。

「……………」

イゾウの問いかけに対し、エースは即座には答えられない。どうするべきかを彼は決めたか考えていたのだ。

実は彼ら「白ひげ海賊団」は少し前に内部で大きな事件を起こしている。それは「仲間殺し」と呼ばれるものであり、絶対に許されない行為だ。無法者たる海賊であるが、だからこそ「仁義」というものは大切にしなければならぬ。

その大事件を引き起こした者の名は「黒ひげ」マーシャル・D・ティーチ。エースが隊長を務める二番隊に所属していた男であった。そして責任と怒りから彼を追い、エー

スは単独で偉大なる航路その前半の海を逆走するようにして渡っていた。

しかし、そんな彼の下へ一報が入る。

——「麦わらのルフィ」と「歌姫」ウタによる、「天竜人」暴行事件。

文字通り世界を揺るがした大事件。その当事者である二人はエースにとって大切な「家族」であった。進んだ道こそ真逆であったが、それでも切り捨てられるものではなく。ずっと想い続けていた相手であったのだ。

葛藤があつた。苦悩があつた。身が裂かれるような痛みがあつた。

こんな自分を受け入れてくれた「オヤジ」とその息子たち。それを傷つけた「黒ひげ」をエースは許すことができない。だからこそ制止を振り切つてその後を追つたのだ。

しかし、あの二人はエースにとって大切な妹と弟で。

「水臭エことを言つてじゃねエ」

電伝虫での通話。その向こうにいる人は、やはり「オヤジ」だった。

「オメエの家族だつてんならおれの家族だ。助けてエつてんならそうしろ。手を貸してやる」

義理がどうだとか、「黒ひげ」のことだとか。何一つ言わずに。

「くだらねエことで悩んでんじゃねエぞ、エース」

その男は——大海賊“白ひげ”は、ちっぽけな自分の抱えた悩みを吹き飛ばしてくれた。

そこからの動きはスムーズであったと言える。真つ先に“赤髪”が動いたということもあり、“新世界”の情勢は不安定だ。“白ひげ”は非加盟国を中心に多くのナワバリを抱える身でもある。ナワバリということは責任も発生するということ。それを捨て置くことはできない。

更に言うとその『名』があまりにも強大過ぎる。“白ひげ”が大々的に動いたとなれば文字通り世界が割れかねないのだ。既に他の“四皇”も動き出している状況でそれはもう收拾がつかなくなってしまう。軽々に動くことはできない。

故に傘下の海賊である『リトル海賊団』が“新世界”からエースを追ってここへ来ることになった。エースと親交があり、仲も良いリトルオーズJr.自身の名乗り出たというのもある。

“オイダたちが行く！ 待つでてぐれエースぐん！”

電伝虫越しのその言葉は、エースにとつてとてつもなく心強い言葉であった。

“おれも行く。……おれにも弟がいるんでな。勝手な話だが、他人事に思えねエ”
そして“白ひげ”の隊長の一人であるイゾウも同行しここにいます。他にもかつてエースが率いた『スピード海賊団』の仲間たちも合流していた。

最早一つの巨大な勢力である。偉大なる航路前半の海賊たちではとても太刀打ちできないほどに強大な力を持つ一団であった。

「ここらは海軍の……というより世界政府の影響力が強い。一度落ち着いて方針を確認するべきだ」

何も言えないでいるエースに対し、イゾウがそんな言葉を紡ぐ。彼は焦るエースを幾度となく宥めてきた。そんな彼に救われている自分をエースは自覚している。

刻一刻と状況が変わるほどに荒れた情勢。聞けば「白ひげ」傘下の海賊が「ビッグ・マム」傘下の海賊と小競り合いを起こしたという。傘下同士とはいえ「四皇」勢力同士の小競り合いなど通常そうは起こらない出来事だ。如何に今の状況が異常であるかが窺い知れる。

「当たり前だが海軍の方が数の上でも情報の面でも有利だ。それを上回るには効率的に動くしかない。……お前はあの二人の兄なんだろう？ 予測は難しいか？」

「……兄といつてもな」

イゾウの問いに対し、大きく吐息を溢しながらエースは首を左右に振った。長い間共にいたが、それでもあの島の中だけだ。今の二人については正直知らないことも多い。

自分は海賊で、あの二人は海兵だ。そうなつてから過ごした時間に何があつたのかをエースは知らないし、逆に向こうの二人も知らないだろう。その状況で予想するという

のは難しい。

それに、そもそもの話として。

「昔から目を離すと何しでかすかわからなかったからな。予想はできねエ」

「……最初に聞いた時は衝撃だったが、それを聞くとやっぱりお前の兄弟なんだな」

「どういう意味だ？」

「言葉通りだ」

言いつつ、しかし、とイゾウは息を吐く。

「この辺りは国も島も多い。ある程度絞ってかからねエと駄目なのも事実だぞ」

じわり、と足元から何かが這い上がってくるような感覚。それが焦りだと理解するのに時間はかからない。

それを振り払うように、努めて冷静に。あの二人の行動を考える。

(あいつらならどうする?)

いつも自分とサボの後ろをついてきていた二人。無茶ばかりして怪我も多いルフィと、彼に比べるといくらか落ち着いてはいたがそれでもすぐに熱くなるウタ。後ろをついてきていたはずなのにいつの間にかトラブルを引き連れて自分とサボを巻き込むなど日常であった。

——そうだ、そういう奴らなのだ。

明るくトラブルばかりを呼び込んで。それでもめげなくて。平気でこちらを巻き込んで。

そんな日々が、楽しかった。

あの毎日が、救いだった。

ポートガス・D・エースにとって、あの日々は――

「エース！ 船がこっちに向かって来てる！」

張り上げられた声により、思考が打ち切られた。どうした、という言葉と共にそちらを見ると、こちらに一人の男が走り寄ってくる。

彼の名はデユース。エースが海に出た後にとある島で出会った最初の仲間だ。今回の事件が起こる前からエースの家族について知っている数少ない人物でもある。

「海軍か？」

「いや違う……と思う。マークもねえし、一隻だけだ。それに甲板で白旗掲げてる奴がいる」

「白旗？」

イズウが眉を顰めた。オーズも首を傾げている。

「騙し討ちかとも思ったが、こんなに見晴らしもいと船も隠せねエからな。それはねエと思う」

「商船か何かか？ オーズの船を見て早めに降伏したとか」

「穩健派である。『白ひげ』傘下とはいえ海賊である。最初から逆らわないという方針に出るのはおかしいことではないだろう。」

「嵐で逸れただか？」

「かもしれないエな」

「オーズの言葉にエースも頷く。商船であるなら普通数隻、多い場合は二桁を超える船によつて船団を構成するのが普通だ。この時代の海を渡る上では当たり前前のリスク対策であるが、それも万能ではない。先日の嵐のような状況では逸れてしまうこともあるだろう。」

「助ける義理はねエが襲う理由もねエ。追い返せばいいんじやねエのか？ この辺は島も多い。わざわざ海賊がいる島に停まる理由もねエだろ」

「いやそれが商船でもねエようだ。白旗を掲げてるんだが、その隣でこつちにメッセーヂを送つてきてる」

「メッセーヂ？」

「エースが問う。その場の全員がデユースへと視線を送った。」

「ああ。内容はこんな感じだ。——『話をしたい』」

「……命を助けてくれつつることか？ 別に命を取る気なんざ——」

「——『我々は革命軍だ』」

遮るようにして、デユースがその言葉を吐いた。瞬間、エースの視線が鋭くなる。

——『革命軍』。

その存在や思想については知っているが、エース自身には特に関係はないし繋がりはない。その『組織』に対しては特に何かを思うことはなかった。

だが、そのリーダー。『革命家』と呼ばれる男については別。

何故なら、その男は。

「わかった。話をしよう」

自分たちは皆、親というものに随分と苦労させられている。自分も、サボも、ウタも、そして——ルフィも。

彼自身は気にもしていなかったことだ。そしてそれは本心だということもわかってる。だからこれはエースのエゴだ。

「——おれも聞きてエースがある」

エースの弟であるモンキー・D・ルフィの父。

その男を人はこう呼ぶのだ。

——“世界最悪の犯罪者”、と。



相手方——“革命軍”は船を少し離れた場所に停めた。そして設けられた話し合いの場は両方の船からちようど等距離になる場所となる。

これにはお互いのお互いに対する信頼度が表れていた。“白ひげ”と“革命軍”は世界政府から見れば共に無法者たちの集団であるが、そのスタンスが大きく違う。前者は積極的に世界政府と争う意識はなく、それに対して後者は世界政府と真つ向から対立する組織だ。あくまで海の上にある集団とその活躍が主に地面の上になる部分でも違っている。

故に本来、戦いになるような間柄ではなかった。事情がなければ互いにそれなりの距離を置く相手だ。故にこういった形で向かい合うことは珍しい。

この話し合いは互いに四人ずつの選出で行われた。エース、イゾウ、オーズ、デューズの四人に対し、相手は魚人の男を先頭に何故か侍女服を着た二本の刀を差した女性

と、分厚いローブを羽織った男が二人である。

「対話の申し出を受けてくれたこと、感謝する」

魚人の男性がそう言うて頭を下げた。随分と綺麗な所作だ。その雰囲気から察するに相応の実力を有していることがわかる。

(どことなくジンベエに似てるな)

かつて自分とギリギリまで戦った人物——「海峡のジンベエ」。『七武海』の一角でもある彼と、目の前の男はどことなく雰囲気似ているような気がした。

「私はハック。話は主に私がさせて頂こう。本来なら我々の指揮官がすべきなのだろうが、現在体調が思わしくない」

「誰でも構わねえよ」

言いつつ、一歩前に出たのはエースだ。ハックがそんなエースに視線を向ける。

「貴殿がエース殿か」

頷くと、ハックはいきなり右手を差し出してきた。その表情は変わらず真剣だが、少しだけ雰囲気柔らかくなっている。

「我が友ジンベエより話は聞いている。会えて光栄だ」

「……どんな話をしてたんだ？」

「気持ちのいい若者がいると」

小さく息を吐く。それだけで少し警戒が薄れてしまった自分に対し、単純なものだとエースは笑った。

「昔殺されかけたけどな」

「それはお互い様と聞いているが」

「……あいつの友達つてのは嘘じゃねエようだ」

軽く握手を交わす。互いに小さく笑みを交わし合い、そして向かい合う。

再び双方の視線が交わった時、その表情は真剣だった。殴り合い、殺し合う場ではない。だがこの二人の言葉次第で誰かが死にかねないのだ。それは間違いなく、一つの戦いだ。

「私は交渉というものがあまり得意ではない。故に単刀直入に言おう。——お互いの不戦、不干渉を求めたい」

真つ直ぐな言葉であった。その言葉からも態度からも視線からも真摯さが伝わってくる。

故にエースもまた改めて心を定めた。この男に対し、不実であることは許されない。

「それはおれたちが戦う可能性があるってことか？」

「目的を同じとし、しかしその行動原理が違えばそういうこともあり得るだろう。——

我々の目的は『麦わらのルフィ』と『歌姫』の保護だ」

エースの眉が跳ねた。僅かに空気が震える。反射的に身を浮かそうとしたオーズを、エースは振り返らぬまま右手を出すことで制止した。

「大丈夫だ、オーズ」

無言のままオーズが浮かしかけた身を戻す。ハックの背後に控えている男二人が安堵の吐息を漏らすのが見えた。対し、侍女服の女性はむしる警戒度を上げている。

それらを一瞥し、エースは改めてハックを見据える。

「『保護』、か」

「彼らは『天竜人』に逆らい、その結果として世界から追われるようになった。そんな彼らを我々『革命軍』は見捨てることをよしとしない」

「あいつらは海兵だ。お前らの敵だろうか？」

「昨日と今日が同じとは限らない。……彼らがどう思うかはわからないが」

どこまでも真摯で、愚直な言葉であった。だからこそわかる。彼が——ハックが悪意を持つていないことは。

きつと本気で『保護』と考えているのだ。そしてそれは『革命軍』の在り方を考えるのであれば当然の動きだろう。彼らの目的や行動を考えた時、真正面から『天竜人』に逆らった二人を見捨ててしまえば『革命軍』はその存在意義を失いかねない。

だが、どうしても思ってしまう。

——何も知らないくせに、と。

そんな、風に。

「貴殿らも目的は同じだろう?」

「……だったら?」

「協力を、と言いたいところではあるが互いのやり方がある。故の不戦、不干渉だ」

成程、とエースは思った。協力ができるのであれば最適であるがそうは上手くいかない。元々の組織の在り方が違う以上、どこかでぶつかる可能性は高い。ならば最初から互いに不戦、不干渉を約束するのは間違っていないだろう。

「……まあ、悪くねエ話ではある。余計な敵を増やす必要はねエ」

背後に控えていたイズウがそんなことを口にした。だが彼は振り返ったエースに対し、その上で、と言葉を紡ぐ。

「お前が決めるエース」

「エースぐんの決めだことなら文句はねエ」

「おれたちはお前の助けになるためにここにいるんだ」

続いてオーズとデューズがそう言葉を紡いだ。そんな彼らに対して頷きを返すと、エースは改めてハックの方へと向き直る。

「提案の意味はわかった。だがその前に一つ確認させてくれ」

「私に答えられることであれば」

「難しい話じゃねエ。——あいつらの『保護』とやらを決めたのは、お前らのリーダーか？」

——周囲の温度が下がった。

重苦しい空気。思わず控えていた『革命軍』の者たちが身構えてしまうほどの圧力。

「……エース」

呟いたのはデューズだ。長い付き合いである彼は理解したのだろう。エースの問いの意味を。

ハックもその圧を感じながら、しかし表面上は動じた様子もなく言葉を続けている。

「無論だ。……既に貴殿らも知っているだろう？ 『麦わらのルフィ』は我々のリー

ダー、ドラゴン殿の息子だ」

「息子、か」

ふと、エースの脳裏にありし日の記憶が蘇る。

「父ちゃんか……顔も知らねエからなア。それよりもエースたちがいてくれる方がおれは嬉しい」

父のことについての話。あの時、ルフィは当たり前のようにそう言っていた。何も悲しくないことであるかのように。

“ジャンクスは嫌い”

ウタは拳を握り締め、そう言葉を紡いだ。父親であったはずの人に捨てられたのだと語った彼女は、深い絶望を抱え込んでいたのだ。

(ロクでもねエ父親ばかりだ)

自分達義兄弟にとつて親という存在は一つの枷であり重荷であった。その存在に人生を狂わされ、苦しむことはあつても。

——救われたことは、なかった。

「話はわかった」

一度大きく息を吐くエース。そして彼はその上で、と言葉を紡いだ。

「不戦と不干渉については約束する。邪魔をしねエなら、つて条件付きでだが。……話は終わりだな?」

ハックへ背を向けるエース。その背に対し、感謝する、とハックは告げた。

互いに腹に何かを抱えていることは察している。だがそれを無理矢理に聞き出す意味はないし、不用意に踏み込んで敵対関係になる方が厄介だ。

張り詰めた空気の中、こうして会談は終わりを迎えた。両方の代表がそれぞれの船へと戻っていく。

一見すると穏やかに終わった会談だ。互いの不戦と不干渉を約束し、揉めることもな

く終わった。しかし誰も馬鹿正直に無事に終わったと受け取ってははいないだろう。目的は同じ。しかし協力はできない。ならばもう、答えは一つしかないのだから。



リトル海賊団の船に向かう途中、エースはしばらく無言であった。先頭を歩く彼に対し、声をかけたのはデューズだ。

「敵対しねエってのは賛成だが、協力はしなくてもいいのか？」
「無理だな」

足を止め、振り返ったエースが言う。その表情には苛立ちのようなものが浮かんでいた。
た。

「そうか？ あのおっさんも悪い奴じゃねエと思ったが」

長い付き合いなのだ。エースの考えについてある程度デューズも把握している。だが察したことが当たっているとは限らないし、だからこそ言葉にすることは行き違いを避けるためにも重要だ。それに言葉として吐き出すことで冷静になれることもある。

それをわかつているからこそ、イゾウとオースも足を止めて二人の会話に口を出さずに見守っていた。

「そうだな。悪意は感じなかった。だが駄目だ。あいつらのバックにいる奴が信用できねえ」

「体調不良って話の指揮官か？」

「そんな奴はどうでもいい。——ドラゴンだ」

まるで吐き捨てるようにその名を呼ぶエース。デュースもやはりか、と納得した。

「何が息子だ。何を今更」

エースの苛立ち、その理由がこれであった。ルフィの実の父親である「革命家」ドラゴン。その存在と振る舞いはエースにとって到底受け入れられないものであったのだ。

吐き捨てるようなその言葉に顔を見合わせる三人。張り詰めた空気が流れ始める。だがその空気を変えるためにイゾウが話題の切り替えを図った。しかし、と彼は言葉を紡ぐ。

「あの『金獅子』を倒した『英雄』がまさか『革命家の息子』と『赤髪の娘』で、しかもお前の義兄弟だつて話を聞いた時には流石に驚いたぞ。お前の弟と妹はどういう星の下に生きてるんだ？」

「弟の方はガープの孫でもあるんだろ？ ガープとドラゴンが親子関係つてのも衝撃な

んだが」

「……ガープ」

イズウに続いてデユースが腕を組んで言い、そしてガープの名を聞いたオーズが嫌そうな顔をした。彼も昔、一度「白ひげ」と共にいた時にガープとぶつかったことがあるのだ。その話についてはこの場の全員が知っている。

「あのジジイのことはいい。無茶苦茶だったがなんだかんだおれたたちのことを気にしてたのはわかるしな。……『海兵になれ』、つて散々言われたよ。誰がなるかって話だが」その事情についてデユースは察している。彼自身が明確に言葉にしたがらないから敢えて踏み込んでいないが、そこには彼の出生が絡んでいるのだろう。

だってそうだ。彼は「あの男」の息子である。

そうである以上、海軍になど入れるわけがない。

「『東の海』の片隅の島がおれたたちの全てだった。四人で力合わせて色々やって生きてきて。……一人はいなくなっちゃったけど、どうにかおれたちはそれぞれの方法で海へ出た」

「それで海賊と海軍か」

「互いに納得してのことだ。大つぴらに会うことはできなくなったが、それは仕方ねエ。楽しくやってるみてエだし、別にそれなら良かったんだ」

近くにある岩へと手を伸ばすエース。静かに岩の表面に触れたその手からは、僅かに炎が揺らいでいる。

「いつか戦うことになるかもしれないねエが、その時は互いに全力でやり合うつもりだった。……そうだな。もしそれで捕まって監獄にぶち込まれるんなら、おれは納得してたと思う」

それほどまでに大切な相手なのか、とデューズは思った。その存在について聞いてはいたが、これほどとは。

エースという男は情に厚く、そして深い男である。身内と定めた相手を決して見捨てることができない。それは「白ひげ」と対峙した時もそうだった。彼は自分が逃げないことで自分達を逃がそうとしたのだから。

そしてだからこそ時にその情が彼自身を焼くことになる。彼の生き方は不器用で、そしてあまりにも利他的であるように見えた。

「——くそッ」

揺らめく炎は彼の感情を表しているようであった。そんな彼に対して言葉を紡いだのはイゾウだ。

「エース。一人で背負い込むな」

その表情は真剣だ。振り返ったエースに対し、イゾウは言葉を続ける。

「オヤジが言っただろう？ お前の家族ならおれたちにとつても家族だ」

「背負い込むのはお前の悪い癖だ」

「エースくん、オイダたちを頼ってくれ」

不器用で、真つ直ぐで、それでいて生き急ぐ男。それがポートガス・D・エースである。と彼らは知っている。だから支えるためにここへ来たのだ。

一瞬、エースは驚いた表情を浮かべた。だがすぐに笑みを浮かべ、ああ、と彼は頷く。「頼りにしてる」

「昔に比べると素直になったな」

「うるせエ」

ある意味いつも通りの雰囲気に戻るエース。そんな彼に対し、それで、と問いかけるのはデューズだ。

「この先の方針はどうするんだ？ この辺りは島も多い。一つずつ探すのはいくらなんでも無茶だろ」

それは「革命軍」との会談の前から話をしてきた部分であった。この辺りは国も島も多く、多くの勢力が入り乱れている。探すには今まで通りとはいかなかった。

エースも考えてはいたのだろう。頷きと共に言葉を紡いだ。

「分かれるべきだろう」

「……まあ、それが妥当だな」

イズウが頷く。この辺りは予想通りだ。この状況ではまず情報集めから行わなければならぬ。おおよその進路を追いかけているが、その確証さえもないのだ。

「まずは情報だ。あいつらはとにかく目立つからな。人目がある場所にいるなら確実に話題に上がる」

確信のこもった言葉であった。まさか追われている状況でそんなことを、とデュースは思うがすぐに思い直す。既にいくつもニュースになっているのだ。エースの言うことはきつと正しい。

「その上で主に非加盟国を中心に回って欲しい」

「非加盟国?」

首を傾げるのはオーズだ。エースは頷く。

「あいつらは追われてる状況だ。加盟国には手配書が回ってる上に海軍含めて正規の軍隊がいる可能性が高い。そうなりやどうしても加盟国には行き辛い……はずだ」

「なんだよ、自信がなさそうだな?」

「常識で考えりやそうなんだが、あいつらの場合常識で考えてもいいのかがわからねエ」腕を組んで頭を傾げるエース。なんとというか、*“兄”*として苦労したのであろうことを少しだけ察した。

「まあおれたちが堂々と加盟国に入るのも難しいだろう」

イゾウが頷く。その彼に対し、ただ、とエースは言葉を紡いだ。

「おれとデューズは別行動する」

「おれも？」

「ああ。……さつきも言っただろ。あいつらは目立つ。だつたらこの辺りで一番人の出入りがある場所に行くべきだ」

人の出入りがある場所と言われ、デューズの脳裏に一つの都市の名が浮かぶ。それを察したエースが言葉を続けた。

「あそこは加盟国側だ。『司法の島』にも近い以上、大勢で行くべきじゃねエ」

「よくわがらねエけど、エースくんは離れるんだな？」

オーズが首を傾げた。そんな彼に対し、エースは頷く。

「オーズたちの方で見つけたらおれの名前を出してくれ。そうすりゃ話くらいはできるはずだ。電伝虫を繋いでくれてもいい。おれとデューズは——」

そして、エースはその島の名を口にした。

大きく運命が動くことになる、その島の名を。

「——ウォーターセブンへ行く」



反政府組織たる“革命軍”の船にはマークがない。彼らの象徴であり主張が翻る場所は基本的に陸上なのだから、海で掲げる必要はないのである。

故に外見からは“革命軍”の船であることはわかり辛い。エースたちが最初気付かなかったように、傍目からは商船団から逸れた船と思われることの方が多いくらいだ。

そんな船の医務室に彼——サボはいた。まるで自らを責め苛むような頭痛はようやく治まり、どうにか本調子に近付いてきている。

彼は仲間であるコアラからハックが行った対談の顛末についての報告を受けていた。話を全て聞き終えた彼は真剣な表情で頷く。

「急いだがいいな」

元より時間をかけるつもりなどなかったが、急ぐ理由が増えた。そんな彼の様子にベッドの横に座っていたコアラが首を傾げる。

「ええと……？」

「不戦と不干渉。『白ひげ』は海賊ではあるが義理堅い。こっちが邪魔しない限りは何

もして来ねエだろうが、そもそもそれは無理な話だ」

ベッドから降り、立ち上がる。コアラがそんなサボを制止しようと手を伸ばした。

「ダメだよサボくん。寝てなきや」

「十分休んだよ。……それに、ここからが正念場だ」

まるで自分に言い聞かせるようにサボは呟く。

そう、口頭とはいえ約束はした。そして約束した以上それを違えることはないだろう。だが「火拳のエース」はこうも言っていたという。

「邪魔をしねエなら、つて条件付きだが」

そしてそれは不可能だ。お互いの目的が同じであり、そして協力的体制を築けない以上どこかで必ずぶつかることになる。そしてそれは間違いなく『邪魔』と呼ばれるものであるだろう。

正直「白ひげ」とぶつかることは避けたい。だがこの状況において安全策など取っていられないのも事実だ。「革命軍」の立場と思想上、あの二人を保護できないのは痛い。

(まだ近くにいるはずだ)

本来合流するはずだった島に「白ひげ」の一派が上陸している以上、あの二人はもうこの島にはいないだろう。だが遠くにも行っていないはずだ。

厄介なのはこの辺りは島も国も多く、そして国についても加盟国と非加盟国が入り乱れているということだ。行動を絞るのは難しい。

ならばやるべきことは一つ。

「コアラ」

「何、サボくん？」

「ハックたちを呼んでくれ。今後の方針について話をする」

「……はい」

どことなく不満そうなコアラはそのまま部屋を出て行く。そんな彼女に首を傾げながら、サボは思考を巡らせ始める。

絞れない以上数で探すしかない。とはいえ二人の行動原理は読めない。あの二人の人格についてサボたちが知らない以上、その行動について読めるはずもないのだから仕方がないのだが。

「とりあえずいくつかに分かれて潜入するしかねエな」

この近辺の地図を思い浮かべながらサボは思考を巡らせる。この辺りはある島の影響もあつて島同士の交流が盛んだ。そうなると人の出入りも多くなるし、人の出入りが多くなれば紛れることもできる。

きつとあの二人もそれを考えるだろう。そしてこの辺りにおいて人の流れの中心と

なっている島は。

「……ウォーターセブン」

世界最大の造船都市。『水の都』ウォーターセブン。その造船技術については『革命軍』も世話になっているほどだ。

多くの人が常に出入りするあの島ならば、相応の情報も集まるはず。あの二人についても目撃情報を得られるかもしれない。

「——よし」

方針は決まった。ならば後は動くだけ。

小さな頭痛を抱えながら、『革命軍』のNo. 2は歩き出す。

偉大なる航路にあるその島に、数多の強者が集い始める。

示し合わせたわけではない。まるで導かれるように集う様を、きっと人はこう呼ぶのだ。

——運命、と。

逃亡海兵Water Seven②

プロローグ②

聖地、マリージョア。

この世界の“神”が座すその場所には、世界最高権力と称される者たちがいる。

——“五老星”。

事実上世界政府を取り仕切る“天竜人”たちだ。絶大なる権力を誇る彼らはだからこそ相応の責任があることを知っている。世界の均衡を保つため、やるべきことは数多いのだ。それ故かどうしても彼らの表情は硬いものになりやすい。

そんな彼らの最近の悩みは荒れ始めたこの世界そのものであり、そのきっかけとなった二人の若者のことであつた。

「……いつそ表舞台から消えてくれるのであれば、やりようはあるのだが」

その場に座す五人の老人たち。そのうち一人が呟くようにそんなことを言う。彼の視線の先にある机の上に置かれているのは一枚の写真であつた。

それは“新聞王”モルガンズが率いる『世界経済新聞社』から届けられた写真だ。そ

ここに写っているのは座り込む民衆たちとそれを庇う一人の麦わら帽子の青年。そしてそんな青年と対峙する海兵の姿であった。

つい先日に取りこり、結果として大きくは報道されなかったとある国での出来事を捉えた写真だ。

「この状況へと至った背景については理解したが……全く、あの二人はどういう星の下に生まれてきたというのか」

思わずそんな言葉が溢れてしまう。だが仕方がないだろう。そもそもその生まれからしてかなり特殊だというのに、次から次へと事件を引き起こすわ引き寄せるわ。普通の人間が一生に一度遭遇するかもしれないかという修羅場を月単位で引き起こすのだからとんでもない。

実を言うとはほんの一部の声ではあるが、あの二人の活躍について世界政府と海軍の『やらせ』だという声も当初はあった。まあ気持ちはわかる。まだ将校になる前の段階で一億近い懸賞金のかかった海軍の裏切り者を討伐することをきっかけに表舞台に出てきた二人。それだけでなく前の話題が消える前に次の話題を提供するのだからそこに裏があることを疑わない方がおかしい。

だが真実というのはいつとも意外なものだ。まさか、ということはいくらでも起こる。世界政府や海軍がああ二人を祭り上げた？ それは間違いだ。あの二人の活躍にその

二つの組織が『乗った』というのが正しい。

そしてそれは正しい判断であった。問題こそ起こしまくるがそれでも彼らは民衆の味方であり、厳しい視線を向けられやすい秩序の存在たる海軍と世界政府にとって二人がもたらす影響は大きいものであったのだ。

願わくば、ずっとそうであって欲しいものであったのだが。

「モルガンズはこれを世に出さないことについて謝礼を要求しているようだ」

「奴の思惑に乗ることについて思うところはあがあるが仕方ないだろう。……しかし、どんな立場になっても大人しくできないようだ」

海兵時代の二人の写真。満面の笑みを浮かべるそれを手に取りながら呟く。

「たった二人。しかしその二人に随分と掻き回されている」

「既に『四皇』と『革命軍』が動き出し、感化されるようにいくつかの加盟国でも不穏な動きがある」

「影響力というのは厄介だな。目に見えないが故にどうしても見積もりが難しい。……とはいえ、たった二人なのも事実。侮るつもりはないが実際以上の評価をするわけにもいかん」

追い込んでいるのは間違いない。たった二人なのだ。手を貸す者もいるだろうがそれでも秩序たる世界政府に逆らったという事実は大きい。更に言えば二人ともまだ年

若いのだ。いつまでも万全の状態でいられるはずがない。

世界政府における最大の力とは「組織」であり「数」だ。だからこそ秩序を保ち続けてきた。多くの危機があつたがそれを全て乗り越えてきたのだ。

たった二人で抗い切れるほど、世界政府は脆くない。

「今後の予想は……成程、『エニエス・ロビー』に近付いているな」

「シャボンディ諸島から逃げ出し、世界政府から逃げた果てに『政府の玄関』に近付くとは」

「位置関係上致し方ない話だが。ふむ、そうだな。——あそこにはCP9がいる」

覚悟を込めた言葉であつた。世界政府最高権力「五老星」——彼らは何も血に飢えた獣ではない。無用な血が流れないならそれに越したことはないのである。

だが同時に彼らは為政者だ。それが無用なものではなく、必要なものであり。

その血が世界の均衡を保つために必要であるならば——躊躇わない。

「上手くいったとしてその後待つのは『赤髪』と『革命軍』、両方との正面衝突か」

「元より敵同士だ。……それよりもあの二人の存在そのものにリスクがある」

「『ゴムゴム』と『ウタウタ』——だがそれは負わねばならないリスクだ。むしろこれ

以上放置する方が危険ですらある」

「どちらにせよリスクであることに違いはないならば、より世界のためになる決断をす

るべきだろう」

既にあの二人に対しては追撃部隊を組織し、新兵器の運用についても許可を出した状態である。だが物事というのはいくつも策を用意しておいて然るべきだ。そしてそのための駒があるならば利用しない手はない。

「……かつては救うために『金獅子』の本拠へとCP9が突入したというのに、今度は抹殺とは」

呟くように一人が言う。

存在しない諜報機関、CP9。その中の数名はまだ記憶に新しい『金獅子』との戦いにおいても活躍した。公式の記録には残っていないが、その中でもあの二人とは共闘していたのだ。

それがまさか、今度はあの二人の命を狙うことになるとは。

「ままならん」

その呟きは、この場の全員の内心を代弁していた。

こんな未来を望んだ者などいなかったのだ。しかし現実がこうなってしまった以上、どうしようもないのも事実。

ならば今は、目の前の現実に対して対応していくしかない。

——『闇の正義』が、動き出す。

その標的は、*“墮ちた英雄”*。
 かつての戦友同士が、激突しようとしていた。



電伝虫の受話器を置き、海兵——ヴェルゴ中將は腕を組んで考え込む仕草を取った。サングラスのせいで目が隠れている彼の思考は読みにくい。黙っているとその容姿も相まって威圧感がある。

だが普段の紳士的な彼の振る舞いと人格を知る部下たちは彼を恐れたりしない。現に今回の追撃部隊における副官である海兵があつた、とヴェルゴへと声をかけた。

「次の我々の進路は、つまり」

「ああ。聞いた通りだ。我々は*“エニエス・ロビー”*に向かい、現地の戦力と協力する」
 夜のない島にして*“司法の島”*、*“エニエス・ロビー”*。*“政府の玄関”*とも呼ばれるその場所は世界政府にとって非常に重要な場所だ。それ故に相応の戦力が常に常駐している。場合によっては*“正義の門”*を通じて海軍の艦隊が押し寄せることも可能

だ。

現地の戦力とはその場所に常駐する者たちのことだ。『エニエス・ロビー』は世界政府直轄の地であるため指揮系統が海軍とは違う。今回の上からの指示はつまり、本来は別の機関同士で協力しろというものだ。

「世界政府も本腰を入れる気になったということだ。……焦る理由もわかるが」

そう言葉を紡ぐヴェルゴの視線の先、机の上には一枚の写真があつた。その写真に写し出されていたのは先日訪れた国で起こつたとある戦い的一幕。

民衆を庇うように立つ『堕ちた英雄』と、そんな彼に相對する海軍の姿だ。

「行く先々でよくもここまで何かを起こすものだ」

小さくヴェルゴは苦笑を浮かべる。おそらく世界政府が背中を押されたのがこの写真だ。先日の記事のこともあり、ただでさえ荒れていた世論が徐々にあの二人の方へと傾きつつある。そこに事情があるとはいえ『海軍から民衆を守る』『麦わらのルフィ』』などという写真が出回ればどうなるか。

世界は荒れるだろう。人の声というのは馬鹿にできないものだ。『支持』というものは時に世界を変えてしまう。現状の維持を願う世界政府にとって、あの二人は爆弾そのものだ。

「まあ、それはいい」

微妙な表情をしている副官の意識を切り替えるようにヴェルゴは言った。そして彼は言葉を続ける。

「他の者たちへ進路のことを伝えてくれ。このまま『エニエス・ロビー』へ向かう」「はっ！」

そして副官が部屋を出ていった。それを見送り、ヴェルゴは思う。

（さて……CP9か。流石にあの二人も辛い相手だろう）

表向きは存在しない諜報機関CP9。それは一定以上の地位にある者にとつては公然の秘密とも言える事実だ。『闇の正義』を掲げる暗殺者たちが相手となれば、流石の『英雄』もそう容易くは生き残れないだろう。

どうしたものか、とヴェルゴは思う。ここから先の自分の打つべき手は……
しばらくの間ヴェルゴは、自身の打つべき手について思考を巡らせていた。
そして思い立ったように、電伝虫の受話器をとる。

「……………」

盗聴防止の白電伝虫が起動していることを確認し、ヴェルゴは言葉を紡ぐ。

「……私だ」

指揮官たる部屋の中から、どこかへと繋げられた電話。

それが誰に対してのものであったのか。

——公式の記録には、残っていない。



「クワハハハハハ！ 最高だ！ こうでなくちゃいけねエ！」

酷く楽しそうな笑い声が響いている。声の主は世界に知られた「新聞王」だ。彼は世界を揺るがした「天竜人殴打事件」が起こってからずっと上機嫌である。

「民衆を背に立つ「堕ちた英雄」！ そしてそんな男と民衆へと銃を向ける海軍！ 最早この写真は芸術だ！ 現地の社員には特別ボーナスを出すぞ!!」

アホウドリの姿をしたその男——モルガンズが手に持っているのは一枚の写真だ。そこに写されている光景はまさしく彼が語った通りのものである。

向かい合우는「金獅子」が引き起こした戦争における「英雄」二人。その事実そのものはおかしな話ではない。片方の「英雄」は今や堕ちてしまったのだから。

故に問題はそこではなく、それぞれが背負うものだ。片方は民衆を背負い、片方は武装した海兵を背負う。最早どちらが悪なのかわからない光景であった。

「凄い写真ですよ。背景を聞けば納得するんですけど、これだけ見ると何が『正義』なのかわからなくなります。……頼まれていた資料です」

両手に抱えた資料をモルガンズの机の上に置きながら一人の若い青年がそんなことを言う。モルガンズに頼まれていた資料を持ってきたのだ。新入りと言つてもいい彼にとつては雑用も仕事である。

「おお、ありがとう。……これだから現実つてのは面白エのさ。『人が空想できる全ての出来事は起こりうる現実である』——いい言葉だ」

この写真が撮影された事件が起こった国は情勢が不安定ということもあり、モルガンズ率いる『世界経済新聞社』からも数名記者が入り込んでいた。いつか大きな事件が起こるといふ予想からのものであつたが、そこに飛び込んできたのがこの一件である。

自分達の境遇の改善の訴えからの反乱、そして革命。それが彼の国で起こるであろうこととして予想されていたことであつた。頻繁に起こることではないが珍しいことでもない。ネタにするにしても一つパンチが足りないかもしれないとモルガンズは当初語っていたくらいだ。

だがその予想は全て吹き飛んだ。まさかまさかの展開の連続である。この写真もそうであるし、結果としていつ爆発してもおかしくなかつた国が武力衝突の前に踏みとどまるとは思わなかつた。それもたつた二人の人間をきつかけにして。

「旦那たちは行く先々で騒ぎを起こしてくれ！ いやア、最高だな！」
「でも記事にはしないんですよね」

笑うモルガンズに対し、首を傾げる青年。そう、そうなのだ。この写真とその背景については現地の記者たちが調べ、詳細な情報についても掴んでいた。しかしこれを彼は記事にしないと判断したのである。

どう考えても売れる記事だ。なのにどうして、という疑問は青年以外も抱いていた。しかし青年とは違つてモルガンズと長い付き合いがある先輩たちは「まあ社長が言つてんだし」と納得していた。だがどうにも青年は腑に落ちない。

そんな疑問を抱く青年に対し、そりやそうさ、とモルガンズは楽しそうに言う。

「こいつは最高のネタだがタイミングが良くねエ。ここでこんな写真を公表してみろ。世論は一気に旦那たちに傾いちゃう」

「それが何か問題が……？」

「——誰も踊らなくなつちまうだろう？」

その言葉を発した時の笑みは、先ほどまでのものとは全く違つていた。言葉では表現しきれない、庄のようなものがある。

「海軍は『正義』、世界政府は『秩序』、天竜人は『神』、海賊は『悪』、革命軍は『悪』、加盟国は『正義』、非加盟国は『悪』——それが世界のルールだ。それを疑う奴は

いねエだろう?」

「それは……まあ」

青年が頷く。人にそれぞれ事情があるようにそれぞれの組織、立場、在り方にも事情がある。故にそう簡単に割り切れるものではないのだが、世間一般の認識としては今挙げた要素は間違っていない。

「そこに旦那たちだ。旦那たちはどの概念に該当すると思う?」

「それは……『悪』なんじゃ」

「だが元は『正義』である海兵で、そしてついこの間『悪』である海賊を倒し民衆を守るなんてことをやってのけた。だから世間はわからねエのさ。あの二人は『正義』なのか『悪』なのか。そしてわからねエからこそ誰もが注目する」

わからぬ、というのは人の興味を惹くのだ。目に見えて明白であることを人は好むが、明白であるということは考察の余地がないことである。考える余地があるからこそ人は足を止め、その思考を動かす。

「そこにこの写真を公表してみる。その不確定が不確定じゃなくなつちまう。前にも言っただろう? 記事をちゃんと読める読者なんてそう多くはねエのさ。この写真を見た瞬間、こう思う奴が大半だ。——『ああやつぱり、この人たちこそが『正義』なのだ』つてな」

まだ早エ、とモルガンズは言う。

「まだまだ世界は荒れるんだ。その中心にいる奴を勝手に定義付けしちまうことほど、興が削がれることもねエだろう？」

クワハハハ、と笑うモルガンズ。そうだ、まだ早い。いずれはあの二人も何かしらの『芯』を定めはするだろう。しかしそれまでは不明確でいてくれた方がいい。

その身柄を狙う者は数多く、そのあり方に影響を受ける者も数多い。まだこの先がどう転ぶのかはモルガンズさえもわからないのである。

誰の手に落ちるのか。或いは組みするのか。或いは——自ら立ち上がるのか。

その果てに『正義』と呼ばれる存在に至るのか、或いは『悪』と呼ばれる存在に至るのか。

その『不確定』こそが人を踊らせる。だからモルガンズは記事にすることを今は見送ったのだ。

「さて、追い詰められると人間つてのはその行動が単調になるもんだ。あの二人の次の進路はどうなるか」

切り替えるように言い、モルガンズは青年が持ってきた資料を広げた。それはあの二人が現れた国の周辺の海域である。

密集しているわけではないが、元々多くの国と島がある海域だ。だからこそ発展して

いる場所であるし、世界政府も重要な地域と認識している。

「確実に何かを起こす。だがどこに行くかだな」

モルガンズは親しいというわけではないがあの二人ともそれなりに交流があった。しかしあの二人の人格を把握していてもその行動を読むことができた試しがない。ジャーナリストとしての経験から予測しようとしても、あの二人の次の行動は読めなかった。

「……地道に行くか」

しばらく考えた後、モルガンズは呟いた。そして青年に対して言葉を紡ぐ。

「この辺りには提携してる新聞社がいくつかあったな？」

「ええと、はい。一番大きいのはウォーターセブンですね」

「——よし、近くの記者を総動員しろ。まず間違はなくこの近辺で何かが起こる」

その言葉を受け、青年がモルガンズからの指示を他へ伝えるためにこの場を離れた。それを見送りながら、モルガンズはポツリと呟く。

「……待つてただけつてのも、芸がねエか？」

その思いつきのような呟きは。

しかし、意外と良いアイデアであるように思えた。



一人の男の下に連絡が入った。電話の主は彼を拾ってくれた男だ。

正直、「新聞王」などと呼ばれるあの男を以前の彼は嫌っていた。あまりにも勝手気ままに生きるその姿に対し、怒りさえ抱いていたくらいだ。

きつとそれは嫉妬と呼ばれるものであったのだらうと今の彼は思う。何故なら、彼自身はどうしようもなく多くのもに縛られてしまっていたからだ。

『傷は癒えたか!? 早速だが働いてもらおうぞ! まずは——』
向こう側の相手は上機嫌であった。楽しそうな男だな、と彼は思う。

楽しいなんて、最後に思ったのはいつだったのだろうか?

「……ええ、わかりました」

『よろしく頼むぞ! クワハハハ!』

そうして通話が終わる。彼は受話器を置くと、一度息を吐いた。

——ズキリ、と。小さな痛みが頬に走る。傷は癒えたはずなのに、時折こうして頬に痛みが走るのだ。

「……チッ」

小さな舌打ち。彼は立ち上がると、部屋の中を見回した。最低限のものしか置いていない部屋だ。元々物欲もなく、執着心も薄い。自分の持ち物らしい持ち物などほとんどなかった。

ふと、その視線が部屋の隅に置かれた物を捉えた。

半分が砕かれた仮面。

それは彼にとって、一つの象徴である。

仮面を手に取り、近くにあつた鏡へと視線を送る。顔の半分しか隠せない仮面。それは半端者である自分には実に似合っているように思えた。

「——『麦わらのルフィ』」

その呟きに込められた感情は、どんなものであつたのだろう。

ただ彼はかつて纏っていた白いスーツではなく、くたびれたコートを身に纏う。

秩序から追われるようになったのは、何も二人だけではない。あの日の事件は多くの者たちの人生を狂わせたのだ。

そして彼もまた、そんな人間のうちの一人であつた。

様々な思惑と因縁が交錯する。

交わるその都市の名は——『水の都』ウォーターセブン。

逃亡海兵 Water Seven ③

プロローグ ③

偉大なる航路を往くのは一つの船団であつた。複数の商会が島同士の交易を行う際によく行かう手法であり、場合によっては海軍の軍艦が護衛につくこともある。ただ今回の場合は海軍の軍艦ではなく、商会が手配した傭兵やお抱えの私兵たちによる護衛船団があつた。

この海を渡ることは想像以上にリスクが高い。ただでさえ危険な海だというのに海賊という無法者までいるのだ。島同士、国同士の交易のハードルは非常に高いのも道理である。

だがそこに商機を見出すのもまた商人という生き物だ。かつては個人として活動することの多かつた彼らは徒党を組み、多くのグループを形成した。数というのはいつの時代においても大きな力である。そうして安全を確保し、幾つもの国を繋ぐ航路を開拓したのだ。

実績ができれば続く者も増えてくる。当初は商人たちと一部の国で始まったその取り組みは世界政府も巻き込み、今や世界のスタンダードだ。国と国を繋ぐ交易は今や一つの船団を形成して行うのが当たり前である。『大海賊時代』と呼ばれる今の時代、この手法をとらない者はいないと言つてもいいくらいであり、そうでない場合も近くの島へ渡る時くらいだろう。

そして商人というのはどこまでも貪欲な生き物でもある。彼らは物以外の商売を考へてついた。それが『旅行』であり、『人を運ぶ』というサービスだ。物を運ぶついでに人を運ぶ。この時代においても商人というのは実に逞しかった。

「……はあ……」

何度目のため息だろうか。数えているわけではないが、既に百を超えてしまっているような気がする。

ため息を溢すのは、金髪の若い女性であった。名をオリン。様々な事情によつて世界に名を知られる若い海兵である。しかし今の彼女は『正義』の刻まれたコートを羽織つておらず、完全に私服だ。本人は自覚がないがかつちりと着込んだ服装であり、露出はほとんどない。

そんな彼女へ、背後から声をかける姿がある。

「ため息を吐くと幸せが逃げるそうだ」

小さな苦笑を浮かべてそんなことを言うのは、朱色のミディアムヘアの女性であった。こちらも随分と若い。こちらの女性は半袖にショートパンツという出立ちであり、オリンとは対照的とも言える格好である。

「イスカ大尉」

その女性の名はイスカという。海軍本部の大尉であり、“釘打ちのイスカ”と呼ばれる武闘派海兵だ。まだ年若い身でありながらその実力は確かであり、オリンが以前所属していた部隊でも何度となく任務を共にしたことがある。

今や世界を敵に回してしまったかつての上司である人物のうちの一人とオリン。スモーカー少将の副官であるたしぎと共に四人で交流を持つ間柄であった。

「任務が憂鬱か？」

こちらの隣に立ちながら言うイスカ。こちらを気遣うようなその言葉に対し、オリンは小さく頷く。

「少しだけ。……元いた部隊でやっていたことに比べると、随分穏やかなはずなんですけど」

「まあそれはそうだろうが……」

イスカもそれには思い当たることがあるのだろう。苦笑と共に同意を返してきた。彼女もまたあの二人の引き起こすトラブルについては経験済みなのだから当たり前か

もしれないが。

数秒、沈黙が流れる。互いに並んで視線を水平線へと向けていた。

「コートを着ないのも、そのため息と同じ理由か？」

不意にイスカがそんなことを口にした。オリンは即答せず、一度目を閉じた。

将校以上の階級になると着用を許されるのが「正義」の文字が背中に刻まれたコートだ。それは一つの象徴であり、それを着ることを目標にする海兵も大勢いる。

イスカとオリンは共に大尉の階級にある。それはコートを着ることを許される立場であるが、今の二人はコートを着ていない。下手に目立たないためであるし、必要がないからだ。故に周囲からは若い女性二人の旅行客くらいにしか思われていないだろう。

「どう、でしようか」

最後にあのコートを着たのはいつだったのだろうか、そんなことをオリンは思う。

……わかつている。あの日だ。あの人たちを海へと送り出した日。世界の全てが反転してしまつた日から、あのコートを着れなくなった。

——オリンの「正義」は、その姿を眩ましてしまつたのだ。

「必要なかつたのもあります。私の任務はメルヴィユの管理と開拓でしたし」

彼の「金獅子のシキ」が引き起こした戦争の結果としてマリルフオードの近くへと落ちた島、メルヴィユ。成り行きを考えると当然であるがその島はそもそもから存在す

ら知られておらず、更に言うに長い間シキの支配下にあつたために国と呼べるものさえも存在しなかつた。

だがその島には強力な力を持つ猛獣が多数存在していたし、数はそう多くないが原住民もいた。

文字通り降つて湧いてきた未開の地。そこにどんな資源が、利益があるのか——加盟国は様々な反応を見せた。そこに危惧を抱いたのが“五老星”である。新たな土地を求めて争うことを嫌い、大きな動きが出る前にその管理を海軍本部に任せる決定を下した。

海軍とは強大な力を持つ組織であるが世界政府の一機関でもある。危険な猛獣のいる島であること、マリolfオードの近くに落ちた島であるということを考えるとそれが妥協点としては最適であつた。

そして様々な取り決めがなされ、今ではメルヴィユの住民がマリolfオードへ訪れる機会も増えている。当初はオリolfも個人的に訪れることはあつても任務として関わることはなかつた。しかしあの大事件が起こり、“神への大逆人”となつた二人の副官であつた彼女の立場は複雑なものになつてしまふ。

彼女自身に罪はない。だがそんな『事実』だけで納得できるのであれば世界はもつと単純だ。そしてそうした様々な思惑の結果が“メルヴィユの管理官”という役職で

あった。

「管理官といつても住民の方と一緒にになって色々なことをするだけでしたが」

「だが随分と発展したと聞いていますぞ」

「私の力なんて本当に僅かですよ。……皆さんが頑張ったからです」

オリンはこう言っているが、最初にメルヴィユの原住民と接触した海兵の一人であるという事実はかなり意味のあるものであった。海軍が味方とは知っていても彼女以外の管理官は見知らぬ人間ばかりだ。必然住民たちはオリンを頼りにするし、他の管理官たちもオリンに仲介を頼むようになる。

そのため当初は地獄のような忙しさであった。朝から晩まであちこちを走り回り、夜には泥のように眠る。だがそれが救いであったのも事実だ。時間があればどうしても考えてしまうから。

「ようやく目処が立ってきたところでこの任務なので少し……思うところはありますが」

そして他の管理官と住民たちの間の信頼関係も構築され、海軍という組織に対しても好意的になった頃。彼女に一つの任務が命じられた。

「お前に特使を任せたい」

現在の直属の上司である海軍本部元帥、センゴクはそう告げた。そうして託されたの

は一通の嚴重に封のされた手紙である。

託された際に聞き及んだ内容が事実であるならば、手紙の内容そのものに特異なものはない。当たり前前の提案であつた。だがそれをオリンという海兵に任せたことに意味がある。

「……私は政治というものが得意ではない。だがそれでもお前がこの任務を与えられた理由は察することができる」

腕を組んで言うイスカ。だがそれは当たり前前だ。誰もが『察することができるから、オリンがこの任務についたのだから。』

こちらに気を遣つているイスカに対し、オリンは小さく笑みを返す。

「世論が割れている今、海軍としてはメツセージを出したいはず。秩序を守る立場である海軍としての『正義』に揺らぎはないのだと、そんな言葉を」

言うのは簡単だが、実現は難しい。だからわかりやすい行動で示すことにした。そしてそれを実行する役目を与えられたのがオリンである。

「しかしただ言葉を発しただけでは反発を受けます。だから実際に行動して伝えるんです」

「そのために必要なのが、あの二人の『副官』であつたお前だど？」

「実際はわかりませんが……客観的に見て、誰よりもあの二人の側にいた人間が世界政

府と海軍の下で従順に従っているという事実は意味を持ちます」

結局のところ、世論が割れている理由は酷く単純なものなのだ。

——「天竜人」に愛する者を奪われそうになり、逆らった。その事実は「悪」なのか？

元々良くは思われていないのが「天竜人」という存在である。そこにこんな事件が起こり、そしてそれが個人に留まらないとなればその感情は伝播していく。

海軍としても非常に難しい状況ではあった。世界政府の一機関であり、大将に至っては「天竜人」の直属でもある。故にあの二人のことを「悪」と断ずるのは既定路線だ。しかしその示し方が問題になる。下手に堂々と宣言でもすれば余計な反感を買うことになるだろう。

故に言葉ではなく行動で。それが海軍の選んだ手段であった。

「まるで生贄だな」

「言い得て妙ですね」

憤りさえ感じさせる眩きのイスカに対し、小さく笑って応じるオリン。いいのか、とイスカはオリンに対して言葉を紡いだ。

「お前の「正義」はそれを許すのか？」

「許すも何も」

微笑。オリンは水平線へと視線を向ける。

「ここで辞める程度の覚悟なら、私はあの日に海軍から抜けています」

あの日、と言うのがどの日のことであるのか。イスカにもそれはわかった。彼女は一度息を吐くと、まるで独白のように言葉を紡ぐ。

「私は、ずっと迷っている」

オリンがこの特使という任務を与えられたのを聞きつけ、同行を願ったのはイスカだ。その理由については聞いていない。だが心強いのは確かである。

優しさなのだろうとオリンは思っていた。真面目で、実直で、そしてとても優しい。それがイスカという海兵であると知っているから。

「海賊によって家族を失う子供を増やしたくない。そのために海兵になった。それを間違いだとは思っていない。事実そうして救えたものはいくつもある。だが……どうしても割り切れない」

イスカが自分の右手へと視線を送る。手袋の下から覗くのは火傷の跡だ。それがきつと彼女の理由なのだろう。

「ままならんな、世界というのは」

正義か、悪か。

良いか、悪いか。

そんなことで割り切ることができたなら、世界はどれほど美しいものなのだろう。そんなことを……ふと、思う。

二人で並び、無言で海を眺める。

海というのは平等だ。誰にとつても。

誰にとつても優しく、同時に厳しい。

知らず、両手を合わせてしまう。

(どうか)

この海のどこかにいるはずの、あの人たちが。

無事で、ありますように……

「すみません」

祈りを捧げ、手を解いた時であった。この商船の船員が声をかけてきたのだ。

筋骨隆々、という表現が的確に思える男であった。海兵の中に紛れていても違和感はないだろう。元々海の間人は必然的に体格が良くなっていくが、他の船員と比べてもその男の体格は随分といい。

「オリン様でございますね」

「は」

頷きを返す。無骨な雰囲気その男は丁寧言葉紡いだ。

「どうかこちらへ」

ただ、丁寧でありながら有無を言わさぬ口調であった。オリンはイスカと顔を見合わせる、頷きを返す。

何かあったのだろうか——そんな疑問は、数分後に解決することになる。

.....。

.....。

.....。

今回の商船団におけるリーダー役を務める商会。その長は元海兵の女性であるといっていた。その経緯もあつて海軍の取引の一端を担い、規模を大きくしたのだとも。

海兵としては名の通った人物ではなかったが、商人としての彼女はそれなりに名の

通った人物だ。共に商會を立ち上げたというこちらも元海兵の男と共にこの海を渡っているのだから並の人物であるはずがない。

そして商人というのは規律について嚴格だ。勘違いされやすいが彼らは何よりもルールを重んじる。何故ならルールを破るとそれが弱みになり、そしてそれは商売に影響するからだ。だからこそ『ルールの穴をつく』などという言葉が彼らに対しては使われるわけではあるが。

まあ、それはともかく。

規律について嚴格であるということは、逆に言えば彼らが定めるルールの内にいる間であれば揉めることがないということである。だが逆に言えばルールを逸脱した際に揉めるということでもある。

「あ、お姉ちゃんー！」

「クオツ！」

——今回のように。

「……………」

頭を抱え、その場に膝をつきたくなくなるのをオリンは堪えた。その隣ではイスカが状況を察したのかなんとも言えない表情をしている。

そこにいたのは一人の赤毛の少女と巨大な黄色い体毛の鳥であった。少女は立った

状態でこちらに手を振っており、その隣で鳥の方は大人しく座っている。

シャオとビリー。『金獅子のシキ』がかつて支配していた島、メルヴィユに住む少女と鳥である。あの戦いの中でオリンたちが最初に出会った原住民であり、ビリーについてはあの戦いにおいて自分たちを助けてくれたという経過もあった。

メルヴィユの管理官であるオリンとは毎日顔を合わせる相手でもある。そしてだからこそ、ここにいる理由がわからない。彼女たちはメルヴィユにいるはずなのだ。

「どうしてここに……？」

「追いかけてきたの！」

こちらへ走り寄ってきたシャオが満面の笑みで言い、何とも言えない表情を浮かべるオリン。その隣でイスカは肩に入れていた力を抜くと黙り込んだ。こちらに任せるつもりなのだろう。まあ当たり前だ。彼女はシャオと面識がない。

どうしたものか、と思うオリン。そこへ一つの声がかかる。

「——確認は取れたみたいだね」

近くにいた数名の船員たち——おそらく作業員だ——に右手で散るように合図をしながらそう言葉を紡いだのは一人の女性であった。合図を受けて男たちが一礼と共に立ち去っていく、オリンたちを案内した巨漢の男性だけがこの場に残る。

その女性は特徴的な容姿をしていた。ウェーブを描く褐色の髪は顔の左半分を覆つ

ており、窺える右目は鋭い光を宿している。口に啞えた煙管からは揺らめく煙が漏れており、また、オリンの見立てが間違っていないければローブに隠れた左腕の部分に膨らみがない。おそらく隻腕なのだろう。

雰囲気でわかる。話にしか聞いていないが、この女性がこの商会の長でありこの船団の責任者だ。

「この子があんたの名前を出したから呼んだんだ。倉庫の隅に隠れてたのを見つけてね」

「……………」

女性の背後に控えるように立っていた巨漢の男が一礼した。おそらく見つけたのは彼だと言うことなのだろう。

「密航者つてのはこの手の航海には付き物だ。とはいえ許されることじゃない。見つけた以上罰を与えるなり海に突き落とすなりなかったことにするなり……まあ、相応の対処は必要だ」

「それは」

「それがルールさ。私が定めたこの航海における規律。あんたのことは知ってるよ？」

あの「金獅子」が起こした戦争の「英雄」が一人。そんな人間なら船上における規律の重要性は知ってるだろう？」

こちらを貫くような視線であった。だが彼女の言うことは正しい。海の上の船内というのとは一つの隔離空間だ。そして帆船というのとは多くの者たちの連携によつて成り立っている。規律を乱す者がいれば沈んでしまう可能性さえもあるほどに。

密航者というのはその規律を乱す最たるものだ。船員が把握していない船上の人間などトラブルしか起こらない。

「ただまあ、あなたの連れだつてんなら話は別さ。この子の年齢を考えると保護者つてのが必要だからね」

言いつつ、女性がシャオと視線を合わせるようにしてしゃがみ込む。お嬢ちゃん、と心なしか穏やかな口調で女性が言葉紡いだ。

「この際どうやって乗り込んだかについては後回しだ。ただ、この船に乗るにはお金が必要なんだ。お金は持っているかい？」

「あの」

言いかけたオリンを女性が右手で制した。えっと、とシャオが肩から下げていた小さな鞆の中を漁る。

「お手伝いして貯めたの」

シャオが両手でお金を差し出す。だがそれは正しくお小遣いという程度のものでとても足りない額であった。

それを一度見つめた女性は、その後シャオの目の方へと視線を向ける。そして小さく笑みを浮かべた。

「次からは乗る前にちゃんと払うんだよ?」

そう言うと、女性は二枚の硬貨を手に取った。百ベリ硬貨を二枚。それらを指で挟むようにして受け取ると、しゃがみ込んでいた状態からゆつくりと立ち上がる。

「それがルールだ。わかったね、お嬢ちゃん?」

「うん!」

「クオツ!」

どうやらそれが決着となったようだった。それを見てとると、女性はオリンとイスカの方へと視線を向ける。

「狭いかもしいれないがあんたたちの部屋で過ごしてもらおうよ。その大きな鳥については別に場所を用意する。衛生面のこともあるしね」

「すみません」

頭を下げるオリンとイスカ。本来密航者というのはどういう扱いを受けてもおかしくないような存在である。それをまさか、こうまで穏便に済ませてくれるとは。

「あの、お金は」

「もらったからもういいよ。ああ、食事については別料金だけだね」

その言葉に対し、もう一度頭を下げるオリン。女性は言葉を続けた。

「“十人の英雄”のうちの一人と“釘打ち”に恩を売れるなら悪くないさ。……それに、これは個人的な話だけどね。こういう無謀というか無鉄砲というか、そういう子供を見ると思い出す。私たちはそういう子供に命を救われたんだ」

その時の瞳は、とても柔らかい光を宿していた。だがそれも一瞬のことだ。

「まあでも、保護者ならちゃんと教育しておかないとね。その子が将来恥をかくだけだ」
そんな言葉を残し、女性が男と共に立ち去っていく。それを見送り、もう一度オリンは頭を下げた。そうして見送った後に彼女はシャオの方へと向き直る。

「シャオ、どうしてこんなこと」

「だって」

小さな手を握り締め、シャオが言った。

「——お姉ちゃんも帰って来なくなるって」

咄嗟に言葉を返せなかった。お姉ちゃんも——彼女が言う、先に帰ってこなくなってしまう人たちが誰であるかなど確認する必要はない。

そんなことはない、と言おうとしてオリンは言えなかった。何かを言わなければなら

ないのに、言葉が出てこない。

数秒、そんな時間が流れた。そこへ。

「はじめまして」

見かねたイスカが助け舟を出してくれた。彼女はしやがみ込むと、シャオの方へとその手を差し出す。

「私はイスカ。海兵だ。船に潜り込むとは大胆なことをする」

「はじめまして！ 私はシャオ！ こっちはビリー！」

「クオツ！」

イスカに対し、元氣よく応じるシャオとビリー。その一人と一羽に対し、呆れたように言葉を紡いだ。

「勇気は認めるが、それは一歩間違えると無謀だ。あまり無茶をするなよ」

どこぞの体を炎に変化させる男が聞けば「どの口が」と言いそうな台詞を口にするイスカ。そんな光景をぼんやりと見つめながら、オリンはシャオの言葉を反芻する。

「お姉ちゃんも帰ってこなくなるって」

それは確かに選択肢の一つであった。何ならそれを勧められたくらいなのだ。

この任務を任された時、センゴク元帥は彼女にこう告げたのだから。

「私は個人の選択を尊重したい。お前はまだ若いんだ。ここで人生を決めるのは早

いのではないか？”

それはきつと、海軍本部元帥としての言葉ではないのだろう。しかし部下の未来を想う言葉ではあつた。

自分の役目。やるべきこと。やりたいこと。できること。

何よりも——”正義”。

その全てを見失いつつある自分が、海軍という組織に居続ける意味は何だというのだろうか？

まるで暗闇の中にいるかのようだ。

一寸先も見えない闇。かつてはこの暗闇を照らしてくれた人たちがいたのに——

……

「もし、お嬢さん」

底なしの闇へと落ちかけた思考が、その声によって引き戻された。見れば一人の男性が遠慮がちに声をかけていたところであつた。

ローブに包まれた体格はわかりにくいが随分としっかりしている。だが威圧感はない。何より——

(目が……)

その男性は目が見えていないようであった。両の瞳に光はなく、更に額から頬にかけてバツを描くように傷が走っている。白杖を持っていることから見ええないことは間違いないのだろう。

「あ、はい。どうされましたか？」

反射的にそう応じたのはある種の職業病だろう。そんなオリンに対し、いやア、とその男性は申し訳なさそうに言う。

「甲板に上がりてエンですが、迷ってしまつたようで」

「ああ、成程。ややこしいですもんね。あつちの——あ、えっと、右手失礼しますね」

当たり前のように方向を示そうとして、相手が盲目であることに思い至る。一声をかけるとともに優しくその男性の右手を取る。

「あちらの方向に階段があるので、それを上がっていけば甲板につきますよ。あの、よろしければ同行しましょうか？」

「いやいや、そこまで手を煩わせるわけにはいきやせん。ありがとうございます、お嬢さん」

そう言つてこちらの提案を遠慮する男性。彼がこう言つた以上、無理に同行するわけにもいかないだろう。

「お気をつけて」

「ええ、ありがとうございます」

そして男性が背を向けて歩き出す。だが男性はふとこちらを振り返った。

「いやしかし、珍しい生き物もいるもんだ。世界にはそんな鳥がいるんですねエ」

世間話のように言い残し、男は立ち去って行った。

——違和感。

ただの会話だけを考えればそうおかしいことではない。誰でもビリーを見ればまず驚く。巨大な鳥というものは確かに存在するが、そうそうお目にかかるものではないのだから当たり前だ。

だからそうではなく、もっと別の何か。もっと根本的な何かだ。

だがその違和感を突き止める前にシャオが声を上げた。

「お姉ちゃんたちはどこへ行くの？」

「え……えつと、ウォーターセブンっていう場所よ。『水の都』なんて呼ばれてるんだけど」

「あ、その名前知ってる！ お船を作つてるところだ！」

「よく知っているな」

「勉強してるから！」

ふふん、と胸を張るシャオ。偉いぞ、とシャオの頭を撫でるイスカはそんなシャオの後ろにいるビリーの方へと視線を向ける。

「しかし大きいな……。噂には聞いていたが」

「あ、気をつけてください大尉。大分コントロールできるようになったんですが、ビリーは興奮すると周囲に電撃を撒きますので」

「……メルヴィユというのはどんな島なんだ」

慌てて手を引きながら言うイスカ。そんな彼女を見て大丈夫だよ、とシャオが言いながらビリーに抱きつく。ビリーもまた嬉しそうな声を上げていた。

そんな光景を見つめるオリン。そこで彼女は違和感に気付いた。

(どうして……鳥って)

あの男性に案内していた際、少し離れた場所にビリーはいた。目が見えていれば一発でわかるだろうが、彼は見えていない。

何なら数分に満たないあの時間、ビリーは声さえ上げていなかったはず。ならば何故。

(何者?)

思い返すと、妙に雰囲気のある男であった。腰は低いと同時に芯のようなものを感じたのだ。

あの感覚は、そう。

まるで、かつての上官二人が纏っていた雰囲気に近いような――



足音が響く。階段を上がるその足取りに淀みはなく、踏み締めるようにしてその男は階段を昇っていく。

「あれが『十人の英雄』の一人……随分と迷っておられるようで」
眩きは虚空へと消えていく。その言葉を聞く者は誰もいない。

「しかし芯のある声でもあった。……会ってみたいもんですねエ、あのお嬢さんが慕う二人にも」

規則正しい音が響く。だが不意に、その音が途絶えた。

「――しかし」

その眩きに込められていた感情は。

きつと、一言では説明できない。

「どうにもこの世界ってのは、ままならねエもんだ」

それは、誰に向けられた言葉だったのだろう。

海の上を、その船団は往く。向かう先は“水の都”ウォーターセブン。

数多の想いと共に。世界の荒波を、進んで往くのだ。

逃亡海兵 Water Seven ④

プロローグ④

海というのは非常に広い世界だ。わかっていたことであるのだが、今になって余計にそう思うようになった。

どこまでも広がる水平線を見ていると、まるで世界から自分たちが切り離されてしまったかのように感じる。かつては海の広さに感動し、喜んでいたというのに。今はこの広さが恐ろしく感じる。

ウタは今、後方を見張る位置に座り込んでいた。両手で双眼鏡を持ち、水平線を見つめている。影一つないこの海は一見穏やかだ。しかしいつその表情を変えるかわからない。

故に常に警戒の意識を持って海を見つめる彼女に対し、船を操るルフィが声をかける。

「ウタ、少し寝た方がいいぞ」

「ううん、大丈夫」

振り返らぬままウタはそう応じた。今の彼女の役割は後方の海の警戒だ。追われている立場であるということ、偉大なる航路という異常な海にということ、一つ間違えれば簡単に沈んでしまうような船であるということ。

そして何より—— たった二人であるということ。

そんな状況において、休める時間というのはあまりに少ない。二人は常に何かしらの役目を追わなければならなかった。

通常、船というのは複数人の手による連携によって航行する。規模が大きくなればそれに比例して必要な人数も多くなり、軍艦ともなれば数百人規模で運用するのが基本だ。

今の二人の船は小型の船であり、航行するだけならば一人でも不可能ではない。しかしここは偉大なる航路。船を動かすことに集中し、周囲への警戒を怠ることにでもなれば即座に沈みかねないほどに危険な海だ。故に二人は航行中、片方が船を操作し片方が周囲への警戒を行うという役割分担をしていた。

「無理すんなよ」

「ルフィもね」

問いかけるルフィの声はいつもの通りであるが、声そのものに張りが無いように感じ

た。長い付き合いだ。普段と違う部分があればすぐにわかってしまう。

だが、今それを指摘しても状況は好転しない。それにルフィがそう振る舞うのであれば尊重したかった。命懸けで自分を守ってくれている彼の想いを無碍にしたくなかったのだ。

「……………」

だがウタもまた体調は良くない。体が重く、思考が鈍くなっているのを感じる。目を追うごとにその体は確実に疲労とダメージを蓄積しているのだ。それはきつとルフィも変わらない。

徐々にはあるが、確実に追い込まれている現状。どうしようもない現実が二人へと襲いかかっている。

——一体、いつまで。

そんな言葉が何度も何度も脳裏を過ぎる。そしてその度にそれを振り払うのだ。

「……………ずっと一緒に」

それが約束であり、誓いであって。

彼が約束してくれたことであるのだから。ならばそれを信じ、抱え、決して諦めないことしかウタにはできない。

再び海へと視線を向ける。広がるのは水平線だけだ。

島はいつ見えるだろうか？

そこでは追われることはないだろうか？

敵は——いないだろうか？

「……………」

わかつている。全て戯言だ。

訪れる島が加盟国ならその島において自分たちは賞金首、犯罪者だ。非加盟国であつたとしても元は海兵であつた自分たちに好意的な島は少ないだろう。

そして追撃が終わることはない。賞金首になつてしまった自分たちのために追撃部隊まで組織されているのだ。この世界の「神」に逆らつた自分たちを世界政府は許すことはないだろう。

そして敵。そんなもの、全てが今更だ。

——世界を、敵に回す。

あの日、二人がやつたのはそういうことだ。

「……………どうしたらいいのかな」

右手の小指へと視線を向ける。絶対に忘れることのない、「約束」の感触は今でも残っている。

まるで継るようにその小指を自身の唇へ当てた。

（お願いします）

何へと祈るのか。何を祈るのか。何一つわからないままに、彼女は祈る。

だって、そうだろう？

それぐらいしか——できることなんて、ないのだから。

「……………」

どれくらい祈っていたのか。目を開け、ウタは改めて水平線を見る。そこに違和感を感じた。

反射的に双眼鏡を覗き込み、水平線を見つめる。数秒、位置を確認し——

「ルフィー！」

「——どうした」

呼びかけた時、既にルフィはウタの隣へと移動してきていた。そのルフィに対し、双眼鏡を渡す。数秒後、ルフィもまた『それ』を見つけたようであった。

「こつちに向かつてきてるみてエだな」

「何かに追われてるみたいだけど……」

はつきりとは見えなかったが、何かがかなりの速度でこつちに向かつてきているのが見えた。

「どうするルフィー？」

「逃げるのは無理そうだな」

双眼鏡を覗き込みながら言うルフィ。彼は双眼鏡をウタへ渡すと、よし、と頷いた。
「——ちよつと行つてくる」

肉眼でも徐々に捉えられるくらいの大きさになりつつある水平線の『何か』を見据えながら彼は言う。そしてルフィは麦わら帽子を脱ぐと、それをウタへと被せた。

直後、その体が宙へと躍り出る。

「気をつけて」

その声は届いたのだろうか。

返事の声もないままに、その青年は宙を駆けて行く。



その男の名は、ザンバイという。

彼らの制服といつてもいい一家共通の衣装——ゴーグルとまるでオーバーオールのような銅丸鎧を身に纏った男だ。彼の他にも周囲には似たような服装の者が大勢いる。

彼らは「フランキー一家」という。「水の都」と評される「ウォーターセブン」に居を構える者たちであり、名目上は船舶解体業者を名乗る集団だ。

「踏ん張れソドム！ ゴモラ！ 追いつかれちまうぞ！」

ザンバイが声を張り上げる先には巨大な馬のような生物がいた。『キングブル』という水陸両生の魚であり、ウォーターセブンにおいては最早欠かせない存在でもある『ヤガラブル』の一種だ。ソドムとゴモラという名を持つその兄弟はフランキー一家が載る大きな船のようなものを必死で引いている。

キングの名を持つだけはある、彼らは巨大だ。大抵の海獣はむしろ蹴散らしてしまえる。しかし今の彼らは文字通り必死で迫るものから逃げてきていた。

「駄目だ全然効いてねエ！」

「小型の海王類なら仕留められる砲弾だぞ！」

「鱗が硬過ぎる！」

聞こえてくるのは砲撃の音と多くの悲鳴。そう、今の彼らは追われている身であった。

追ってきているのは巨大な海獣である。俗に海王類と呼ばれる生物が存在するが、彼らの大きさや種類は様々だ。それこそ危険度も個体によって大きく違う。

そんな彼らを追ってきている海王類はまさしく危険度で言えば間違いない最上位。

見た目こそ巨大なウツボのようであるが、その全身が強靱な鱗に覆われており、その口元に見える牙は下手な刃物より遥かに鋭い。あんなもので噛み付かれては人間などとたまりもないだろう。

「アニキがいねエ時に限って……!」

周囲の声を聞きながらザンバイは拳を握り締める。今回の仕事について、棟梁であり『アニキ』と彼らが慕う男は来ていなかった。別の仕事があつたためだ。とはいえ今回の仕事はそう難しいものではないし、事実今は仕事を終えて帰ってくる途中であつただ。

だが、順調であつたのはそこまでだった。のんびりと帰途についていた途中、不意にソドムとゴモラが何かの気配を察知した。何事かと思う暇もない。そこで現れたのがあの怪物だ。

「どうするザンバイ!? 島までまだあるぞ!」

「逃げるしかねエだろう! 倒せるような相手じゃねエ!」

言いつつ、ザンバイは何かないかと思考を巡らせていた。明確に定まっているわけではないが彼は一家において他の者たちを束ねる立場に立つことが多い。命じられたわけではないし決めたわけでもないが、自然とそうなっているのだ。おそらくリーダーとしての資質があることを自然と周囲もわかっていたのだろう。

だが、リーダーシップでは乗り切れないことなどいくらでもある。現に今がそうであつた。

(アニキがいてくれたら……!)

文字通りの社会の底辺。夢を抱くも敗れ果て、落ちぶれるところまで落ちてしまった者たち。今日食べることさえもままならない、どうしようもない自分たちを救つてくれた人。

あの人がいいたら、きつと何とかなるはずだ。だが今は――

「ザンバイ！ 船だ！ 船があるぞ！」

「なっ……!?!」

思考が引き戻される。一人が指差した方向を見ると、確かに小さな船が波間を漂つていた。

丁度進路上だ。このままではぶつかるし、あの小さな船では最悪の場合引つ張つてきた海王類に轢き潰されかねない。

「どうする!?!」

「どうするも何も……どうしようもねエ！ 助けてる暇なんて――」

焦つた声色での問いに対し、こちらもまた焦つた声色で返すザンバイ。その彼の視界に『それ』が映つたのは、きつと偶然だつた。

認識できたのは白いコートだ。見覚えのあるそれが、ザンバイの視界を一瞬で駆け抜けていく。

いや、ザンバイだけではない。この場の全員が一瞬、その姿を捉えたのだ。

どうしてだろう。目で追えるような速度ではないはずだったのに。思わず人の目を引き寄せてしまう『何か』があつたのだろうか。

だが、疑問を抱く時間もない。次の瞬間には一つの結果が示された。

「ゴオッ!？」

短く、しかしだからこそ明確な苦悶の叫びであつた。

まるで張り飛ばされるようにその顔面を打ち抜かれた海王類が上げた声であるということを理解するのに、数秒の時間が必要だった。

誰もがその怪物を見ていた。大量の砲弾を受けてもびくともしなかつた巨大な体躯。それが完全にのけ反っている。

「――」

まるでゆっくりと歩く時の足音。それほど静かな音と共に、その青年が降り立った。

黒髪に、薄汚れた白のコート。その背に刻まれた「正義」の文字が異様な存在感を

放っている。

「誰」

「海兵」

「何が」

反射的な幾つもの眩きはしかし、すぐにかき消される。

「ゴオオオオツ!!」

のけぞった体軀を戻しながら、大気を震わせる叫びを上げる海王類。その瞳は殺意に満ちており、ザンバイたちは反射的に身を竦ませる。

だが最早、その海王類は彼らを見ていなかった。その視線の先にいるのは青年だけだ。

「『ゴムゴムの』——」

そして、青年が応じるように甲板を蹴る。宙に浮く体。吸い寄せられるようにその姿にこの場の全員の視線が吸い寄せられる。

いつの間にか、彼らのうちにあつた焦りも恐怖も消えていた。あつたのは——

「——『バズーカ』!!」

鈍く、重い音が響いた。大気を震わせる轟音。しかし、海王類の悲鳴はない。

だがゆつくりとその体軀が倒れていく。悲鳴を上げることさえもできなかったのだ。

「う、お」

何が起こったのか。彼が何者なのか。正直、理解できている者はいないだろう。だが、わかったことが一つある。

——命を、救われた。

「「ウオオオオオオオオッ!!」」

その叫びはどんな感情からのものなのだろう。助かったという安堵からか、それとも今日の前で見た常識の枠を超えた光景に対する興奮か。

「……………」

ゆっくりと青年が甲板へと降り立った。変わらず音は静かだ。背に負った『正義』の文字が、普段は鬱陶しいと感じるのに今日だけはとてつもなく頼りになった。

「な、なあ。 あんた」

青年へ声をかけようとするザンバイ。そこへ声が響く。

「ご、お、オオッ!!」

それは『王』の名を持つ生物の誇りか。力を振り絞るようにしてその海王類が起き上がり、青年を睨みつける。

対し、青年は。

「——お前とは戦うだけ無駄だ」

一言。呟くような声と共に視線を向ける。
瞬間。

絶大なる「何か」が、宙を駆け抜けた。

その「何か」を向けられたわけではない。ただ近くにいただけだというのに、ザンバイたちは全身に泡立つような悪寒を感じた。

「……………ぐ、オ……………」

その『王』は一瞬だけ「何か」を堪えた。しかしすぐにその身を翻し、海の中へと潜っていく。

青年が息を吐いた。周囲を駆けていた「何か」の気配が霧散する。

「……………」

別に示し合わせたわけではない。だが自然と、誰もがその場に膝をついていた。理屈ではない。ただ本能がそうさせたのだ。

きつと、それを。

——「霸王」の資質と、人は呼ぶのだ。



「——あなたは命の恩人だ！　どうか礼をさせて欲しい！」

膝をつき、ザンバイと名乗った男がそう言つて頭を下げた。彼だけではなく、その背後には似たような格好をした者たちが同じように膝をついて頭を下げている。

麦わら帽子とローブで姿を隠すようにしたウタを背後に庇うようにしながら、ルフィは彼らに対してどう対応するべきかを考えていた。さっさと立ち去るつもりでルフィは言葉もそこそこに船に戻つたのだが、それを追いかけてきたのだ。そしてどうしてもと言われ、こうして甲板に上がってきている。

「礼つて言われてもなア……あのままだとおれたちも巻き込まれそうだったからこうしただけだぞ」

「そうであっても命を救われたのは変わらねエ！　恩人に礼の一つもなく帰したとあつちやフランキー一家の名折れだ！」

これである。海兵時代にどうしても礼を、と言われる機会は多かつたしこういうシチュエーションについても割と経験豊富だ。しかしかつてのように軽々に礼を受ける

ことはできない。

頭を掻くルフィ。その彼に対し、ザンバイとは別の男が言葉を紡いだ。

「おれたちはウオーターセブンに帰るところなんですが、もし目指すところがあるならそこまで送ります」

「……目指すところってのはねエんだけど」

逃亡中の身だから当たり前だが、目的地があるわけではなかった。

チラリとルフィはウタの方へと視線を向ける。彼女もまた迷った表情を浮かべた上で。

「……どこか島に寄らなくちゃいけないのも……確かだし」

そう、呟くように言った。

「わかった」

その彼女に対し、頷きを返すルフィ。そのままザンバイたちの方を向き直ると、じゃあ、と彼は言葉を紡いだ。

「そのウオーターセブンってところに行くよ」

「本当ですか!?! よしおめエら準備しろ!」

「「おう!!」」

羽起きるようになって立ち上がり、バタバタとザンバイたちが動き始める。その中の一

人がこちらへと言葉をついだ。

「船は鎖で繋いで曳航するんで、ゆっくりしてもらえたら」

そしてその男もバタバタと足音を響かせて中へと走っていく。その光景を見送りながらルフィはウタへと問いかける。

「ウオーターセブン、ってウタは知ってるのか？」

「うん。行ったことはないけど……」

「どんなどこなんだ？」

「世界政府御用達の造船会社がある島……だったはず」

思わずルフィは眉を顰めた。そして、小さく息を吐く。

それ以上は何も言わなかった。寄り添うようにして二人は海を見つめている。

こうして、“堕ちた英雄”たちは“水の都”を訪れることになる。

それが幸であったのか、或いは不幸であったのか。

今はまだ、誰もわからないままである。

逃亡海兵Water Seven ⑤

第一話 フランキー一家

海の上を往くのはキングブル二頭が引く一隻の船であった。島が近づいているためか天候も穏やかであり、一見すると周囲に危険はないように見える。

「ソドム、ゴモラ。急ぐ必要はねエぞ。おれたちも周りは見てるから安全に行こう」
船を引くキングブル、ソドムとゴモラへとそんな風に声をかけるのはザンバイだ。彼だけではなくフランキー一家の者たちは周囲に対してかなり注意を払っている。

警戒し過ぎではないかとも思うが、つい先程まであの化け物のような海王類に追われていたのだ。それも仕方ないのかもしれない。

「この辺にはあんなのが出るのか？」

甲板の中央、まるで家のようなブリツジの壁に背を預けて座り込んでいるルフイが思いついたように声を上げた。彼の隣ではウタが膝を抱え、寄り添うように座っている。

「いや、初めて見ます。この辺りの海はちよつと理由があつて普通は穏やかなんですが、あんなのが出るなんて聞いたことがねエ」

応じたのはザンバイだ。敬語の混じつた妙な口調で喋っているが、その姿勢からはできただけ丁寧な話そうとしているのを感じる。ルフィに対して相応の敬意を抱いているのだろう。その理由はあの時見せた「覇気」故か。

「理由？」

「多分もうちよつとでわかる。……しかし、本当に助かりましたよ「麦わら」さん」

何度目かわからない礼の言葉。いいよ、とルフィは小さく笑つた。

「気にすんな」

彼の中ではもう終わった話であるのだ。だから本心からの言葉であるのだが、このフランク一家というのは妙なところで義理堅い。ザンバイだけでなく他の者たちからも何度も礼を言われっぱなしだ。

まあ、敵視されるよりは遥かにいい。警戒心は残しているが、ルフィの中で彼らは『気をつける』程度の認識が変わっていた。

「いやしかし凄エ話だ。あんなバケモンを素手でぶん殴つて黙らせちまうんだから」

そんな言葉を紡ぐのは別の男だ。その言葉には純粹な尊敬の念が宿っている。彼らにしてみると、大砲さえも効かないあの海王類相手に素手であそこまでやってのける人

間がいるという事実が衝撃だったのだろう。

「あれぐらいならできる奴は他にもいるぞ。おれより強エ奴もいる」

「『麦わら』さんより強いってどんなだ?」

「そりゃあれだ、島沈めるとか」

「流石にそれはねエだろ」

ルフィの言葉を受け、わいのわいのと言い始めるフランキー一家。目の前にいるのは世界政府から追われる賞金首だというのに随分と無警戒なものである。命の恩人というのが先に来ているのもあるのかもしれない。

「でもその、まさかこんなところにお二人がいるとは」

「……………」

その言葉には沈黙で返した。ルフィのコートの裾を掴むウタの手にも少しだけ力が籠る。

——やはりというべきか、ルフィとウタの正体はすぐにバレることになった。

元々世界中に名を知られ、顔を知られた二人である。気付かれてしまうのも道理だ。実際指摘された時もルフィたちは警戒したのだが、フランキー一家たちはその態度も言動も、何一つ彼らを責めるようなことはしなかった。

いや、むしろ。

「凄エ人に助けられたんだな」

眩くように一人が言ったその言葉が、ルフィの頭にはずつと残っている。

「ああいや、気を悪くしないでくれ。責めるつもりなんてねエんです。……ここら辺は近くに「エニエス・ロビー」もあるし、近寄りたくねエんじやねエかと」

不夜島、「エニエス・ロビー」。「司法の島」や「政府の玄関」など数々の呼び名を持つその島は世界政府にとっての重要拠点だ。そこには数多の戦力が集っており、海賊を始め数多の無法者が恐れる場所でもある。

今の二人は追われる身だ。そんな場所には絶対に近付きたくないはずなのだが。

「……進路を選べる余裕なんて、なかったから」

ポツリ、とまるで溢すように呟いたのはウタだ。彼女の言う通りである。この逃避行、ルフィもウタも必死で逃げてきただけだ。その結果としてここに辿り着いただけに過ぎない。

シャボンディ諸島から逃げ、海軍本部から逃げ、そうして辿り着いた場所は「司法の島」の近く。

——何とも、ままらないものである。

「あー……」

ザンバイが言葉を探して宙へ視線を彷徨わせる。そんな彼に対し、ごめんなさい、と

ウタが眩く。

「気にしないで——」

!!

その声を掻き消すように、甲高い音が響き渡った。反射的にルフィもウタも立ち上がり、周囲へと視線を送る。

何の音だろうか。何かしらの危険が迫っているのか？ 海賊船でも現れたのか？
いくつもの思考が浮かんでは消え、同時に意識が切り替わる。

だが、しかし。

「おお、ここまで来たら安心だな。ソドム、ゴモラ。ちよつとストップだ」

最大限まで警戒心を高める二人とは正反対。まるで日常的一幕であるかのような反応を見せるザンバイが、合図と共に手綱を引いた。その指示に従い、二頭のキングブルが停止する。

ルフィもウタも眉を顰めた。何だと言うのか。

「ッ、また」

ウタが眩く。再びの甲高い音。それもさつきより随分近い。

何なのだと思う二人の目に、それが飛び込んでくる。

——それは、鋼鉄の列車であつた。

当たり前のように海を駆けるそれが、眼前の海を駆け抜けていく。

その列車の名は、“パツフィング・トム”。

ウォーターセブンが誇る、“海列車”だ。



その都市を人は“水の都”と呼ぶ。そこに込められた意味は多くあるのだろう。『水』と言うものと都市、そして人が関わることは数多い。

だが誰もがその都市を一目見た瞬間にその異名の意味を理解することになるのは間違いない。それほどまでにその都市は美しく、そして力強いのだ。

「……綺麗」

視界に入ったその都市を見て呟いたのはウタだ。彼女が思わず呟いてしまうほどに美しい都市がそこにはある。

まず目につくのは巨大な噴水だ。都市の中央にあるその巨大な噴水からは噴き出すようにして大量の水が流れており、おそらく都市内を通ってその水が海へと流れ込んでくる。

その威容は正しく「水の都」。その呼び名に偽りはない。

「でっけー噴水だ」

ルフィもまた自身の興奮を隠しきれない様子で声を上げていた。だが噴水だけではない。未だ島とは距離があるというのに、ここまでその活気が伝わってくるのだ。

世界政府御用達の造船会社を持つ都市。その看板に偽り無しである。

「なあ、アレが入り口か？」

とある場所を指差しながらルフィが言う。『ブルー駅』と書かれた場所だ。それを見てザンバイが首を横に振る。

「あれは海列車の駅です。明確な入り口ってのはねエが、まあ船が入れるならどこでも入り口ですよ」

「ウオーターセブンはいくつもの造船ドックがある都市なんですよ。船なんてのは色々なのがあるんで、大通りの水路は大型の船も通れます」

「一番ドツクなんかガレオン造ってそのまま浮かべるもんなア」

わいのわいのと口々に言うフランキー一家。その口調は誇らしげで、彼らなりにこのウォーターセブンを愛しているのが伝わってくる。

「まあ中に入るのはちよつと待つて欲しい。おれたちのアジトは北東にあるから、中を通るより外を回った方が早い」

言いつつザンバイたちが二頭のキングブルへと指示を出す。それをぼんやりと二人は見つめていたが、そんな二人へザンバイが声をかける。

「ウォーターセブンは初めてですか？」

「おう」

「機会はあつたんだけど、色々あつて流れてしまつて……」

ルフィは都市の名前にすら心当たりがなかったし、ウタの方はライブの巡回で訪れる予定があつたが流れてしまったという過去がある。ちなみに流れた理由は向かう途中で部隊ごとトラブルに巻き込まれたためであつたりする。その時は文字通りしつちやかめつちやかな事態になつた。

「そうだったか？」

「覚えてないの？」

首を傾げるルフィに呆れた様子で返すウタ。少しだけ彼女の声にも張りが戻つて来

ている。

「あの時も大変だったでしょ」

「……どれの話だ？」

本気でわからないルフィ。そんなルフィの様子を見て全く、とウタは息を吐いた。

「——」

小さく、ルフィの口元に笑みが浮かぶ。

長い付き合いだ。互いの調子などすぐにわかる。ウタがずっと精神的に沈んだ状態であったことをルフィはわかつていた。

だが今の彼女はこの逃避行が始まってから久し振りに見る姿をしている。

——まだ、本調子には程遠い。

だが、それでも。少しだけでも前を向けているのなら——

「どうしたの？」

「何でもねエ」

怪訝そうな表情を浮かべるウタに、ルフィは首を振って応じる。

この苦しい状況に変わりは無い。今は偶然手助けしてくれる者が出てきただけだ。だが、それでも。苦しく、辛い状況でも。

きつと、それだけではない。

彼女が笑っていられる未来が、きつとどこかにある。だからそれを見つけるのだ。

——それが、彼にとつての「正義」だから。

「……どこか痛いとか？」

「いや大丈夫だよ」

右手の掌でこちらの頬に触れるウタに対してそう応じる。じゃあ、とウタは言った。

「変なもの食べたとか？」

「そーいやまともなものはあんまり食つてねエな。……肉が食いてエ」

思い出したように呟くルフィ。思い切り大好きな肉を食ったことなど、いつ以来だろうか。

「肉が食べたいんスか？」

「多分今日宴会だから食べれますよ」

「金も入ったしな」

そんなルフィの呟きを聞きつけ、近くにいた男たちがそんな言葉を口にする。ホントか、とルフィが言ったところで。

「お、見えてきた」

そんなことを口にしたのはザンバイだ。彼は振り返ると、前方を指差しながら言葉を紡ぐ。

「アレがおれたちのアジト、フランキーハウスだ！」

示された方を見る。そしてルフイとウタは同時に眉を顰めた。

開けた場所であった。周囲には背の低い草木しかなく、建物らしい建物は一つしかない。だがその建物の存在感が異様であった。

三日月と思しき飾りが屋根には取り付けられ、建物の側面からは何に使うのかわからない謎のアームが飛び出している。何というか、非常にごちゃごちゃとした建物であった。堂々と玄関には『FRANKY HOUSE』の看板が掲げられている。

かつて二人は「ジャヤ」という島を訪れたことがある。そこで半分だけの家に城を描いたベニヤ板を貼り付けた家を見たことがあるが……。

「……何か、心配になってきた」

ウタの呟き。その頭に右手を軽く載せながらルフイもまたその家を見据える。

なんだかんだで多くの島を訪れ、多くの暮らしを見てきた二人だ。奇抜な建物は幾つも見てきたし、驚くような文化にも触れてきた。だからわかる。これはこの都市の文化がどうかか利便性がどうかかそういうのではない。単純に建てた人間の趣味とセンスだ。

そして大体、こういう尖ったセンスを持つ人間は——癖が強い。

「ちよつと待っててください」

二人へそう告げると、ザンバイは周囲に指示を出しながら船を停止させる。手際もよく、全体的に慣れた様子だ。おそらくこういうことは日常的にやっているのだろう。

船が無事に岸へと繋がれ、フランキー一家の者たちがソドムとゴモラの装備を外し始める。それを横目に見つつ、ルフィとウタも地面へと降り立った。

「……………」

柔らかな地面の感触を確かめるようにルフィは地面を踏み締める。海の上が嫌いなわけでは勿論ないが、やはり地に足がつく地面の上というのは安心感があった。

そして二人がそんな風に周囲を確認する中、ザンバイが建物の方へと声を上げる。

「アニキ!! 今戻りました!!」

直後、声が響く。

「遅かったじゃねエか」

音を立て、建物の扉が開いた。そこから現れたのは一人の男——いや、変態だ。

青い髪のリーゼントに、上半身にはアロハシャツ。何故かその両腕は上腕部分が膨れており、所謂一般的な体型とはかけ離れている。

——そして何故か、海パンであった。

「ああん? 誰だおめエら?」

ウオーターセブンの裏の顔、船舶解体業者フランキー一家の棟梁。

これが、フランキーとの出会いであった。



フランキー一家の拠点であるその家の中は思ったよりも広かった。数十人近くいる構成員たちが全員中に入っても手狭には感じないくらいである。

その大きな広間の一角。胡座で座り込んだフランキーと向かい合うようにルフィとウタは座っていた。その少し前にはザンバイが正座で座り込み、今回の事情について説明している。

巨大な海王類に追われていたこと、あのままでは全滅もありえたこと、そこに偶然ルフィが現れたお陰で助かったこと。

フランキーはザンバイの説明に対し、腕を組みながら黙して聞いていた。

そして一通りの説明をザンバイが終えるとフランキー腕を解き、頷いた。

「成程なア……つまり、お兄ちゃんたちがうちの子どもを助けてくれたってわけだ」

「偶然だけだな」

ルフィが応じる。そうであつてもだ、とフランキーは言葉を紡いだ。

「助けてもらったのは事実だ。礼を言うぜ」

そう言うのと、両手をついてフランキーは頭を下げた。アニキ、とザンバイが驚いた声を上げるがフランキーは静かに告げる。

「うちの子分を助けてもらったんだ。棟梁のおれが礼を尽くさねエのは仁義に反する」
「気にすんな」

対し、ルフィはそう返した。ザンバイに対するものと同じだ。それを見てとり、あの、とザンバイがフランキーへと言葉を紡ぐ。

「その、お二人に礼をしたくて」

「……その意味をわかつてんのか？」

一瞬、ルフィの瞳に警戒の色が宿った。フランキーの視線がルフィとウタの二人を捉える。

フランキーは二人が何者であるかをわかっているのだ。故にこそそのリスクも理解しているのだろう。賞金首を匿うようなことをすればフランキー一家も罪に問われる。それが“天竜人”を害した大犯罪者であると言うのならば尚更だ。

一瞬、ザンバイは言葉に詰まった。だがそれを振り払うように彼は言葉を紡ぐ。

「わ、わかっています！ アニキに迷惑をかけるつてことも！ けどここで何の礼もなく

帰しちゃったらフランキー一家の名折れじゃないですか!」

「そ、そうツスよ! おれら本気で死ぬかもしれなかったんす!」

「お願いだアニキー!」

そして彼に続き、次々とフランキー一家の男たちが頭を下げる。そんな姿を見、フランキーは小さく口元に笑みを浮かべた。

彼が纏う空気が少し穏やかになる。喜んでいるようにさえルフィは感じた。

「礼を尽くす、つつつただろうが」

そう言うと、フランキーはルフィとウタへと視線を向けた。その視線に敵意はなく、正面から彼は言葉紡ぐ。

「聞いての通りだ。……おめエらがこの島にいる限り、全力でサポートする。それがおれたちからの礼だと思ってくれ」

言い切るとフランキーは立ち上がった。そのまま、ザンバイ、と頭を上げた彼の子分の名を呼ぶ。

「アレは?」

「あ、持ってきてきます!」

そして慌ててザンバイが走っていく。それを一瞥し、ルフィがフランキーへと問いかける。

「いいのか?」

「二度も言わせるな」

口調こそ乱暴だが、そこには真摯さがあつた。ありがとう、と隣のウタが呟くような言葉と共に頭を下げる。ルフィもまた頭を下げた。

このウォーターセブンは世界政府御用達の造船都市。そこで二人が出歩き、見つかればすぐさま海軍が押し寄せてくるだろう。宿を取ることさえも難しいことは想像に難くない。それをここに居る彼らが匿ってくれるというのなら助かるのも事実だ。

「礼を言つてんのはこつちだ」

呆れた様子のフランキー。そのまま彼は走つていったザンバイを追つて歩いていく。

——「水の都」、ウォーターセブン。

ルフィとウタ。世界を敵に回した二人がその島で過ごす場所が決まった瞬間であつた。



深夜。既に陽は完全に落ち、世界が寝静まっている。日中の騒がしい間は聞こえなかった波の音が風に乗ってここまで届いている。

フランキーハウスの大広間では大勢が床に転がって眠り込んでいた。周囲は散らかったままであり、宴会の後であつたということが一目でわかる。

「……………」

ルフィはその大広間の隅でぼんやりとその光景を眺めていた。彼の隣ではウタが目を閉じ、静かな寝息を立てている。全身を預けるような格好であるが、普段とは違って寝苦しそうな雰囲気はない。深い眠りに入っていた。

おそらく安心感からくるものだろう。船の上では周囲への警戒もあつてどうしても眠りが浅くなっていた。それだけではない。いつ追手が来るかという緊張は二人の精神を徐々に追い詰めていたのだ。

だがここは見知らぬ土地であり、フランキー一家についてもどこまで信用していいかはわからない。故に当初はルフィもウタも気を張っていたのだ。

しかし、そんな警戒を解く出来事が起こった。

「あの……ちよつと、いいですか？」

宴会の準備中、休んでいてくれたと言われた二人は動き回るフランキー一家をぼんやりと眺めていた。そこに恐る恐るといった様子で一人が歩み寄ってきたのだ。

敵意は感じなかった。ただその手に大事そうに何かを持っており、その男は躊躇いがちに言葉を紡いだのだ。

“う、ウタ様。サイン……その、貰えねエですか？”

彼がその手に持っていたのはウタのTDだった。驚いて固まるウタと、状況が一瞬理解できずにこちらでも停止するルフィ。瞬間、周囲の者たちからも声上がる。

“あつてメエ抜け駆け！”

“お、おれもおれも！ 限定版があるんだ！”

“おれはルフィさんのサインが欲しい！”

次々とこちらへと寄ってくる強面たち。その光景を見たウタは何を思ったのだろうか。ただ彼女は丁寧な彼らの求めに応じた。それはかつてルフィが傍らでよく見た光景である。多くのファンが彼女の前に列を作り、側にいるルフィへも時折人が寄ってくる。

誰もが笑顔であり、暖かい光景だった。もう随分と前のことのように思える。

「……「関係ねエ」、か」

ポツリとルフィが呟く。フランキー一家へ対し、ウタは一つの疑問を口にした。それに対する答えがこれだったのだ。

——賞金首となった自分の歌を、どうして。

それに対し、彼らは当たり前のようにそう答えてくれた。

自分達を肯定してくれた人はいる。だがそれはかつての部下とその関係者であったり、「救世主」と呼ぶ者たちであつたりとその理由に納得がいくものであつた。しかし彼らは違う。純粹にファンだと答えたのだ。

その事実を、どう受け止めるべきなのだろう。

自分達は今、どういう存在なのだろう。

考えれば考えるほどわからない。そこへ一つの声が届く。

「眠らねエのか？」

そんな声と共に歩いてきたのはフランキーだった。彼はこちらの返事を待たず、少し間を空けた位置へ腰を下ろす。

「まあ気持ちわかるがな。今日いきなり会つた人間を信用しろつても無理な話だ」

コーラを片手にそんなことを言うフランキー。彼はこちらに二本持っていたコーラの瓶のうちの一つを投げ渡してきた。

受け止めるルフィ。冷たい感触が掌に広がる。

「だがうちの子分共におめエらを騙せるような器用さはねエ。……棟梁のおれとしちゃア困つたもんだが、そこだけは保証できる」

言うのと、フランキーは立ち上がり外へと出て行つた。扉の閉まる音が響く。

ルフィは渡された右手のコーラの瓶を見つめる。……ジュースなんて、随分久し振りだ。

小さな音と共に、その蓋が外れる。口に含んだ炭酸の味は懐かしく。

「……美味エ……」

まるで、体に染み込むようであった。

……。

……。

……。

夜の海風は冷たい。それを一身に浴びながら、フランキーは呟く。

「……どういふ因果だつてんだ」

思うのは客人として受け入れた二人のことだ。子分たちの命を救ってくれた恩人だ。というのであれば、その礼をするのは当たり前。そこにフランキーは異論はない。

あるとすれば——あの二人の背景に対してだ。

特にあの、モンキー・D・ルフィ。

彼が今やっていることは、かつてフランキーができなかったことでもある。大切な人を連れて行かれそうになり、全てを捨てて取り戻した。そして今もお、守り続けている。

そこに憧れのような感情がなかったといえれば、嘘になる。

「なア、トムさん。おれア……」

そこから先の言葉は、続かない。

ただ、どこか遠くで。

——海列車の汽笛の音が、聞こえた気がした。

逃亡海兵Water Seven⑥

第二話 ウォーターセブン

陽が登り始めて少し経つ頃になると、大広間に寝転がっていた者たちが少しずつ起き始めた。その気配を察知したルフィもまた目を開ける。

眠れた時間は……二時間くらいだろうか。眠りの中でも常に周囲へ気を張っているのもあり、少し頭が重い。

「おー……朝かー……」

「頭痛エ……呑み過ぎた……」

「海飛び込んで来い」

「溺れちまうよ」

のそのそと起き上がるフランキー一家たち。その声に反応したのか、ウタもまた目を覚ました。ゆっくりと目を開けた彼女は、何かを確かめるように毛布の下でずつとル

フィの手を握っていた手に力を込める。

「おはよう、ウタ」

「うん。おはよう」

ウタの言葉の中に深い安堵を感じた。立てるか、というルフィの問いに対しウタも頷く。

先にルフィが立ち上がり、繋いでいた右手でウタを引き上げる。

「ありがとう」

小さく礼を言うウタ。そして彼女は動き出しているフランキー一家を眺めると、呟くように言葉を紡いだ。

「少し意外かも」

「何がだ？」

「もつと適当なのかなって」

棟梁を名乗るフランキーを筆頭に彼らは全体的に粗雑である。それこそ海軍という規律が全ての組織にいたウタからすると随分と緩いように思えたのだ。

事実、朝起きてからの動きは決して褒められたものではない。全体的にぼんやりしているし、効率も悪そうだ。しかし不思議なのはそんな雰囲気でも根本部分に芯があるのを感じる。

口で何を言おうが、行動がどうであろうが。この『フランキー一家』というのは決して無秩序ではないのだ。

ぼんやりと彼らの朝の支度を眺める二人。その最中で。

「……あいつら、元気にしてるかな」

思わず、といった調子でルフィが呟いた。『あいつら』が誰であるかなど確認の必要もない。二人の部下であり、大切な仲間であつた者たちのことだ。

そのうちの一人とは偶然から再会し、簡単に話を聞くことはできた。彼によると全員が海軍に残ることを選択したのだという。ただバラバラの部隊に飛ばされることになり、その後のことは伝え聞く程度にしかわからないのだと言つていた。

——ただ一人、二人の副官であつた人物を除いて。

「……………」

何かを言いかけたウタはしかし、唇を引き結ぶ。彼らを——仲間をそんな状況へ追い込んだのは自分なのだと己を責めているのだ。

言葉にしなくてもそれくらいのことにはわかる。わかるからこそ、ルフィはウタの頭に片手を乗せた。

「大丈夫だ」

それは誰に向けた言葉であるのか、彼自身もわかつていない。ただそう言わなければ

ならないと思つたのだ。

暗く、重い空気が二人の間で形成される。どこまでも落ちていくような感覚は、しかし。

—
!!

突如鳴り響いた軽快な音楽によつて吹き飛ばされた。思わず眉を顰めるルフィとウタ。それとは対照的にフランキー一家が弾かれるように一方向へと視線を向ける。

つい先程まで気怠そうな雰囲気纏つていたくせに、一瞬でその意識が切り替わっている。

「へい、野郎ども。おれの名を呼んだのか？」

何かがあった。いつの間に用意したのか白い幕が垂らされており、その向こうで軽快にリズムを刻む影がある。

「うおー！ アニキー！」

「待つてましたー！」

「おはようございますアニキー！」

一気にテンションを上げていくフランキー一家と、完全に置いて行かれているルフィ

とウタ。とてつもない温度差があった。

「この島一のスーパーマン男！」

「ウォーターセブンの裏の顔！」

「誰より頼れる最強の男！」

合の手なのか何なのか。フランキー一家から声上がる。

「アウー！ そうだおれは人呼んで！ ワアオ！」

音を立て、白い幕が取り払われる。何を見せられているんだろう、と二人の心がシンクロした。

「フランキー！！」

両腕を高く上げ、体を斜めに傾けた謎のポーズを決めるフランキー。朝イチから見せられるにはあまりにも濃いパフォーマンスであった。

フランキー一家から歓声上がる。それを見て満足したのか、よう、とフランキーが二人の方へ歩み寄りながら言葉を紡いだ。

「昨日は眠れたか？」

「ああ、まあ」

「煮え切らねエなア。それじゃア今日の大勝負には勝てねエぞ?」

いきなりあんなもん見せられたら当たり前である。いや眠気は飛んだが。

「大勝負つて?」

「ああ、言つてなかつたか?」

「はいアニキ、お茶だわいな」

そうして話し始めようとしたフランキーに横から湯呑みを差し出したのは、モズという女性であつた。

「どうぞだわいな」

続き、キウイという女性がルフイとウタの二人へと湯呑みを渡して来る。彼女たちは「スクエアシスターズ」というらしく、このフランキー一家において唯一の女性だ。

「ありがとう」

二人で礼を言いながら受け取る。フランキーも受け取ると、彼は近くのソファアに腰掛けながら改めて言葉を紡ぎ始めた。

「おお、助かる。いやな、おれは……熱ッああッ!」

慎重に湯呑みに口を近付けていたフランキーであつたが、やはり熱かつたらしい。叫び声と共に彼はソファアごとひっくり返る。やたらと大きな音も一緒だ。

「いや落ち着けよ」

思わずツツコミを入れるルフィ。フランキーは起き上がりながらいいや、と首を振った。

「噂で聞いてたのとは随分違うなアお兄ちゃん。もつと豪快で騒がしい奴だつて話だったが」

「……………」

「別に責めてるわけじゃねエ。噂つてのは当てにならねエもんだと思っただけだ」

肩を竦めるフランキー。そして彼は特に気にした風もなく言葉を続ける。

「おめエらは有名人だからなア。色々とは話は聞いている。海軍の歴史上有数の問題児だとか、関われば必要以上に事が大きくなるとかな」

有数であつて唯一ではない辺りに含みを感じる。ついでに言うなら二人にはその枠に入る人物の顔が浮かんでいた。間違はなくルフィの祖父はそこへ該当する。

思わず二人の脳裏に過去のトラウマ修行の光景が浮かび、少し身震いした。そこへ別の声が届く。

「おれたちも似たようなもんじゃねエか？」

「まあ好かれてはねエよな」

「間違いねエな」

フランキー一家が笑い声を上げる。薄々感じてはいたが、どうもこのフランキー一家

というのは真つ当に商売をしている集団というわけではないらしい。犯罪者というわけでもないところを見ると、所謂アウトロー、或いは不良とでもいうべきなのだろうか。「まあうちもお行儀のいい集団じゃねエ。……話を戻すが、今の時代に金を稼ぐ手段は色々ある」

「色々？」

思わず問うのはウタだ。難しい話じゃねエ、とフランキーは片手を上げる。その側に来たのはキウイであった。彼女の手にはアタッシユケースがある。

「賞金稼ぎつてのもおれたちの生業の一つでな。この街に来た無法者どもを捕まえて海軍から賞金を貰うのさ。その後そいつらの乗ってきた船を解体してその資材を売り捌く。そうすりゃ一石二鳥だ」

「へエ……」

素直にルフィが感心する。狙われた方からすれば性質の悪い話であるが、非常に理に適っている方法だ。

だが、ルフィとは違ってウタはフランキーの言葉を聞いて警戒心を抱いた。一歩足を引き、ルフィの側へと身を寄せる。そんな彼女を見て、ああ、とフランキーが言葉を紡いだ。

「安心しなお姉ちゃん。おめエらは恩人だ。手を出すつもりはねエよ」

「そっか」

安心した、とフランキーの言葉を聞いて言うのはルフィだ。

「今更戦いたくなんてねエからな」

その時の彼の姿を、フランキー一家の者たちは決して忘れないだろう。

酷く平坦な言葉であり、感情も込められていない声であった。何なら口元には笑みすら

浮かんでおり、一見すれば冗談の類のように思えただろう。

だが、この場の全員がそれを冗談とは受け取れなかった。

——この人は、やる。

敵対の意思を見せた瞬間、きつと何の躊躇もなく、「英雄」と謳われたその力が周囲の全てを飲み込むだろう。そう思わせるだけの圧が彼にはあった。

「――」

フランキー一家は息を呑み、沈黙している。先程までの明るい雰囲気は嘘のようであつた。

「ウハハ、そりやお互い様だ」

だが、一人だけ。この場において彼を正面から見据える男がいる。フランキーだけは動じた様子もなく、冗談に対して冗談で返していた。

空気が和らいでいく。そんな中、フランキーが立ち上がりながらキウイの手にある

スーツケースを受け取った。

「この中にはその懸賞金が入ってるんだが、これじゃ足りなくてなア」

「何か欲しいものでもあんのか？」

「おうよ。だから今からこの金を増やす」

笑みを浮かべ、フランキーがアタツシユケースを軽く叩く。ルフィとウタがほぼ同時に首を傾げた。どうやって増やすつもりなのだろうか。

「そりやおめエ、一攫千金つつたら手段は一つ」

対し、フランキーは笑みを崩さず言葉が続ける。

「——ギャンブルだ」



船というものは現代において非常に重要な存在であると言える。一度に運べる量は物資も人も多く、非常に効率的。島と島を繋ぐ上でこれ以上の手段を人は想像できないだろう。

だが今は大海賊時代。ただでさえ危険な偉大なる航路に海賊という無法者が蔓延る時代だ。故に船は一隻のみで航行することはほとんどなく、複数の船による船団を形成する事が基本となる。それは防衛という観点においては間違いなく良い手段であるのだが、一つ弱点があった。

——島への入港時の混乱である。

「手早く済ませろ！　まずは荷物を下ろすことを最優先だ！」

「入港前に確認した分だけをまず降ろせ！　ぐずぐずしていると日が暮れるぞ！」

「倉庫が埋まつてる!?　他のところはねエのか!？」

「時間が押してるんだ！　立ち止まつてるんじゃないやねエ！」

「テメエ邪魔だ！　さっさと次行け！」

「喧嘩は後にしろ！　邪魔するんならおれがまとめて海に沈めてやるぞ！」

野太い怒号のような声が響き渡っている。だがそれは言葉の中身ほどに険悪な雰囲気というわけではないのが面白い。口は悪いが悪感情はないからだろう。

理想論を語るのであれば、冷静に穏やかに物事を進めることができるのなら最上ではある。だが現実の問題としてそれは難しい。だからこそその現状だ。

「すーいー！」

「クオツ！」

屈強な男たちが怒号と共に荷物を下ろし、そしてその隙間で交渉をする者がいる。港へ商船団が入港するというのはいっただって戦争のような光景を見せるものだ。ある意味恒例行事とも呼べるそれは海に関わる者であれば見慣れたものであるのだが、この場にいる少女——にとつてはそうではない。彼女にとつての世界は故郷の島とマリルフォードだけなのだ。見るもの全てが発見であり新鮮なのである。

その隣にいる大きな鳥——ピリ—も興味深そうにその光景を見つめている。人よりも猛獣の方が多し島にいた彼にとつて、これほどまでに人が集まる光景は珍しいのかもしれない。

「相変わらず船の入港というのは一種の祭りだな」

腕を組み、そんなことを言うのはイスカである。赤毛の女海兵にとつてこれは見慣れた光景であった。海兵として多くの国を訪れた彼女にとつて、港の喧騒とそこで起こるトラブルというのはある種の日常である。

「けれど、やつぱりちゃんも統率が取れていますね。大きなトラブルもなさそうです」

そしてこちらも同じく見慣れた光景に対して言葉を溢すのはオリンだ。そう、出てくる言葉こそ荒っぽいのがトラブルらしいトラブルがない。船団といつても複数の商會が集まって形成されている以上、所属する組織が違う。そして組織が違えば方針も違うし手段も変わる。事前にいくら打ち合わせをしようとそういった部分からぶつかること

は多いのだ。

だが現状、衝突らしい衝突は起こっていないようであった。これは事前の準備が良かったというのもあるだろうが、それ以上に差配しているトップの手腕による部分が大きいだろう。

「結構若そうに見えたんですけど、やっぱり商会の長をやるだけはあるんでしょうね」

「元海兵と聞いたが、その部分もあるのだろうか」

「どうなんでしよう?」

オリンとイスカが思い浮かべているのは隻腕の女商人だ。纏う雰囲気には圧があるせいでわかりにくいだが、そこまで年齢を重ねているようにも見えなかった。それがここまで見事に船団の入港を取り仕切っているというのも凄まじい話である。

「ねー! あの大きいの何かな?」

そんな二人に対し、シャオが一方を示しながら声を上げた。そちらを見ると、数人がかかりで大きな木箱をいくつも運んでいる光景が目に入る。

「確かに大きいな」

「何でしょう?」

二人してシャオと共に首を傾げる。次々と運び出されたそれらはとある一角へ続々と運び込まれているのだが、その一角では複数の商人たちが資料を手に何やら話し込ん

でいる。どうやらかなり重要なものであるようだが。

「——あれは香辛料さ」

ふと、そんな声が届いた。振り返ると、そこには煙管を啜えた隻腕の女商人がいる。彼女は一度煙を吐き出すと、シャオの方へと視線を向ける。

「船旅はどうだった、お嬢ちゃん？」

「楽しかった！」

「クオツ！」

満面の笑顔で応じるシャオと、続くように声を上げるピリー。そうかい、と女商人も笑った。

「そう言つて貰えるならアタシたちも嬉しいよ。次も是非うちの船に乗つて欲しいね」

「いいの？」

「勿論さ。その時はその保護者さんも一緒に、ちゃんとした手順を踏んで乗るといい」
微笑と共にそう言うと、女商人は一度シャオの頭を軽く撫でた。その瞳に何かを懐かしむような感情が浮かぶが、それに気付ける者は誰もいない。

「世界つてのは広いんだ。お嬢ちゃんが驚くような光景はいくらでもある」

「本当？」

「勿論さ。……お嬢ちゃんはまだ若い。これからもっと多くのことを見て、学ぶことが

できる。それはお嬢ちゃんのような子供の特権だよ」

そして女商人がふと空を見上げた。未だ太陽は天上に向かって昇りつつある時間だというのに、随分と日差しが強い。

「今日は日差しが強そうだね。お嬢ちゃんは帽子をした方が良くないかい？ 安くしておくよ」

氣遣い半分、商売半分。実に商人らしい言葉であつた。オリンもまた空を見上げる。雲一つない青空だ。確かにこの感じだと日中は強い日差しに晒されそうであり、帽子の一つでもあつた方がいいかもしれない。

「確かにあつた方がいいかもしれないな。日差しというのは馬鹿にできない」

イスカも同意する。海兵である二人にとっては日差しなど慣れたものであるのだが、シャオはまだ子供である。氣を付けておいて損はない。

「帽子なら持つてるよ。えつとね——」

だが、オリンたちが次の言葉を発する前にシャオがそんなことを口にした。そのまま彼女が下げている小さな鞆を漁り始める。

「——これ！」

そして彼女はその帽子を取り出した。それはイスカやオリン、そして元海兵である女商人には見慣れたもの——海兵帽であつた。

「……余計なお世話だったようだね」

小さな笑みと共に言う女商人。ありがとうございます、と言ったのはオリンだ。

「色々ご迷惑を」

「構わないさ。そう思うなら周囲に宣伝しておいてくれればいい。ウチの商會をね」

「はい。勿論です」

「……生真面目だねエ」

器用に煙で作った輪っかを吐き出しながら言う女商人。そのまま彼女はそうそう、と思ひ出したように言葉を紡いだ。

「アタシたちは積荷を下ろしたら明日にでも『エニエス・ロビー』に向かうよ」

「早いな」

驚いた様子で言うのはイスカだ。通常、交易のことを考えるなら一週間くらいは停泊するものだと思うのだが、荷物を下ろしてすぐ出発とは碌な商談もできないだろうに。

それは承知の上なのだろう。女商人は肩を竦める。

「忙しい身なものもあるけど、それ以上に時期がね。……『アクア・ラグナ』って知ってるかい？」

「『アクア・ラグナ』？」

帽子を被りながら首を傾げたのはシャオだ。女商人は頷き、言葉を続ける。

「毎年この周辺で起こる高潮さ。街一つ飲み込むほどの規模だからねエ……船なんてひとたまりもない。それが来る前に『エニス・ロビー』に移動して、過ぎ去り次第戻ってくる。本格的な商談はその時だ。あの荷物の中には『アクア・ラグナ』を見越した物資も積んであるからね。何がどれだけ必要なのか、ことが起こってからの方がわかりやすい」

高潮、とシャオが呟く。彼女にはイマイチ想像ができていないのだろう。だがイスカやオリンには何となくわかる。街一つ飲み込むほどの高潮——それはもう災害と呼べるものだろう。そんなものが定期的に来るとは、見た目ではわからない悩みを抱えているようである。

「この島で役目を終えたその後はどうするつもりだい？ 乗る気があるなら部屋は空けておくよ」

「ええと……ここでの任務の結果次第などころがありまして」

「そうかい。まあ、乗る気があるならいつでも言いな」

そう言うと、女商人は背を向けて歩き出した。そしてすぐに彼女の手が空くの待っていたらしいウォーターセブンの商人たちに囲まれてしまう。やはり一商会のトップともなれば忙しいのだろう。

——『水の都』ウォーターセブン。

美しく、莊嚴とも言える産業都市。だがそれは裏を返せば水害の危険を常に抱えている。高潮はこの地域特有のものであるのだろうが、だからこそそのリスクでもあるのだろう。

「ありがとうお姉さん！」

「クオッ！」

そして女商人へと手を振るシャオとピリー。それに対し、女商人も片手を上げて応じた。強制的に降ろされてもおかしくなかったシャオとピリーを船に乗せてくれた上、なんだかんだと気にしてくれていた人物である。シャオもかなり懐いていた。

女商人はこちらを見ていないが、イスカとオリンもその背中に向かって軽く頭を下げた。そうしてから背後に広がる都市の方へと視線を向けた。

「とりあえず一番ドックを目指しましょう。連絡は本部からされているはずなんですが、到着については時間が不明確だったのもあるので」

ウォーターセブンの地図を取り出しながらオリンが言う。彼女たちが特使として訪れることについては連絡が入っているはずだが、船旅である以上正確な時間は不明確だ。大体の日は予測できても正確な時間の設定は難しい。故にこういう場合は細かな時間を到着してから決めることが基本となる。

実際、当初の予定よりも到着が数日遅れている。偉大なる航路というのはどれだけ綿

密な計画を立てようとそれを嘲笑うようなことが起こる海だ。それ故、時間というものには余裕を持つことが求められる。

「一番ドツクとなると……ヤガラブルを使う方がいいな。『貸しブル屋』を探そう」
「ヤガラブル？」

地図を覗き込みながら言うイスカに対し、シャオが首を傾げる。三人と一羽は歩き出しながら、イスカがシャオへと言葉を紡ぐ。

「この辺りには『ヤガラ』という頭を出して泳ぐ魚がいるんだ。『水の都』というだけあつてこの島は水路が多い。そこを移動するための手段として用いられている。……ああ、丁度あそこを泳いでいるのがそれだ」

言いつつ、イスカが一方向を指し示す。そこでは港で降ろされた荷物を背負つて水の上を往く馬のような姿をした魚がいくつもいた。その背には彼らを操る乗り手もあり、頻繁に行き交っている。

「すごい！ お魚さんの船だ！」

「クオツ」

「詳しいですね」

三者三様の反応である。イスカが頷きながら言葉を紡いだ。

「何度かここへは来たことがある。それこそゼファー先生の訓練でも立ち寄ったぞ」

「長期航海訓練ですか」

「オリンはここへは？」

「機会はあつたんですが、色々あつて結局」

「成程」

頷くイスカ。そのまま彼女たちが歩いていくと、『貸しブル屋』の看板を掲げた店に辿り着いた。どうやらこの都市の構造上、道路を歩くと『貸しブル屋』に辿り着くようになつているらしい。

上手くできたシステムだと、そんなことを大人二人が思ったところで。

「ヤガラくださいー！」

「クオッ！」

何の躊躇もなく突撃していく一人と一羽。慌ててイスカとオリンがそれを追いかけていく。

二人の海兵と一人の少女、そして一羽の鳥。

ある種奇妙な組み合わせが、『水の都』へと足を踏み入れる。



「今日はお客さんが多いね。二人かい？」

訪れた客に対し、『貸しブル屋』の店長がそう声をかける。現れたのはローブを目深に被った二人組の男であった。

「ああ、頼む」

片方の男が頭にかかったローブを外し、金を出す。目元の部分を黒いマスクで隠した男であった。

どこかで見たような——そんな感覚を覚えながら店長は金を受け取った。そのままブルに背負わせるための小舟を用意する。

「ウオーターセブンは初めてかい？」

「いや、一度来たことがある」

「なら勝手はわかるか。さてどいつがいいか」

生簀の方を見る店長。二人の男のうち、ローブを目深に被った男がそちらへと近付いた。瞬間。

「三ー！」

一匹のブルがその男の顔を舐め上げた。それによってローブが外れる。現れたのは

年若い、そばかすのある青年の顔だ。

「うお、こいつ」

「ははは、気に入られたな。そいつにしよう」

顔を拭い、ローブを被り直す青年に対して笑いかける店長。マスクの男も笑っていた。

準備を終え、〃ヤガラブル〃に乗り込む二人。その二人に対して店長が手を振る。

「行つてらっしゃい」

「ああ、ありがとう」

そのまま二人は店長に礼を言うと言つて街の方へと出ていった。

頷きと共に二人を送り出す店長。だが少し、あの二人について引つかかる部分が彼にはあった。

「どこかで見た気がするんだがなア……？」

だが、あのような二人は知り合いにいないはずだ。ならばどこで見たのだろうか。

気のせいだろうか、と思いつつながら再び椅子に座ると店長は読みかけていた新聞を手を取った。しかし読み始める前に次の客が現れる。

「あの一」

「はいよ、いらつしやい」

大きな船が着いたということや、海列車で行ける島で大きな祭が行われていることもあつて次々と客が来る。故に店長の頭から先ほどの客のことはひとまず消えてしまつた。

それは平和な光景だ。いつも通りの、何もおかしなことのない光景。

巨大な高潮たる「アクア・ラグナ」は脅威であるが、彼らにとつては慣れたもの。畏れはするし警戒もするが、必要以上の感情を抱くことはない。

だが、そんな日常の中で確実に。

——非日常の足音が、迫っていた。

逃亡海兵Water Seven⑦

第三話 久し振り

海軍が誇る「英雄」といえば多くの名が上がるだろう。それこそ今や「生ける伝説」とも謳われるモンキー・D・ガープは「伝説の海兵」というあまりにもシンプルな呼び方をされている。

だが今の市民にとつての「英雄」といえば二人の名と顔が浮かぶだろう。

——「堕ちた英雄」。

未だ二十歳という年齢にさえ至らない程の若さでありながら、かつての「四皇」の一角を討ち取った「麦わらのルフィ」。

その青年と共に数多の功績を上げ、そして文字通り戦争を歌声で終わらせた「歌姫」ウタ。

あまりにも痛烈で、眩しいその存在を人々は決して忘れないだろう。堕ちたとも言わ

れるが、その理由もまた人々の耳目を集めるのだから当たり前だ。

この世界の秩序は、彼らを「堕ちた」と表現した。

だが本当にそうなのだろうか？

愛する人を守りたかった。

そのためには、全てに背を向けるしかなかった。

その結果、積み上げた全てを失ったのは事実である。今や彼らは賞金首だ。定められたルールにおいて彼らは罪人であることに間違いない。

だがそれでも、人々はそれをただ受け入れることができなかった。

そしてだからこそ、世界は忘れない。

忘れることができない。

その在り方はきつと、いつか見た夢物語の体現でもあるのだから。

故に人々はその姿を心に留め置く。そんな二人が生きていることを覚えているのだ。

それはきつと、ある種の救いであつただろう。だからこそ手を差し伸べる者が確かにいたのだから。

だが、追われる立場の者がその存在を常に意識されることは決して良いことばかりではない。

むしろそれは——あまりにも大きなデメリットだ。

「窮屈」

思わず、といった様子で呟いたのはルフイだ。今の彼は全身を隠すようなローブに加え、特徴的な仮面を着けている。外見から中身を想像することはできないだろう。

隣にいるウタも同様だ。彼女も口にこそ出していないが動き辛そうにしていた。

「文句を言うんじゃないやねエ。今のお前らが顔を晒して街を歩いてみる。一発で通報される」

そんなルフイに対してそう言葉を紡ぐのはフランキーである。彼もまた全身を覆うローブと特徴的な仮面をつけていた。仮面のせいで表情は見えないのだが、その仕草で呆れた表情をしているのが見て取れる。

「でもこの格好の方が目立つんじゃない」

仮面の位置を調整しながら言うのはウタだ。ルフイもそうだが、彼女もまたローブで体を覆われた上に仮面をつけると男女どちらかさえもわからない状態になっている。

「それについては大丈夫だ。あー……なんだった?」

「サン・ファルド」で仮装カーニバルをやってるんだわいな」

「その影響でウォーターセブンでも仮装して街を歩いている奴が多いんだわいな」

首を傾げるフランキーに対し、モズとキウイが捕捉する。それだ、とフランキーが指

を鳴らした。だが二人にはそれでは伝わらない。

「『サン・ファルド』？」

「『海列車』で行ける街の一つだわいな」

「見た目よりも距離が近いから祭があればすぐにその影響が出るんだわいな」

「へー」

素直に感心するルフィ。海の上を走る列車——それは想像以上の影響力と存在感を持つているらしい。

「でもお祭の影響が別の島にも、って凄いとと思うんだけど……昔からそうなの？」

思わずウタが問う。おそらくそれは当然の疑問だ。

島と島を繋ぐのは基本的に船以外に存在しない。通信手段としての電伝虫はあるが距離の限界があるし、音声だけで伝え切るとは難しいのだ。故にこそ他国の情勢を知る上で『新聞』というものが重要となっている。

そしてそれは文化も同じだ。『祭』とはその規模や目的、手段は多岐に渡るが言ってみれば『文化』であり『慣習』、そして『価値観』である。故にこそ島や国を飛び越えて広がることは難しい。

だが、『海列車』というものはその困難を解決し得る手段であるということだろう。

「いやそんなことはねエ。何なら昔のウォーターセブンは孤立してたくらいだ」

肩を竦めるフランキー。そのまま彼は言葉が続ける。

「積み込める物資の量って点ならそりゃ船の方が上だ。だから島同士の交易も単純な量で言うなら今でも船が基本だ。だがそもそも『海列車』と船じゃ役割が違うのさ」

「役割？」

「船の利点はその積載量もだが、最大の利点はそこじゃねエ。『自由度』だ」

「——『自由』」

呟いたルフイのその一言。たった一言に含まれた何かに気付いたのは、きつと一人だけだろう。

「島と島を繋ぐつつつたが、その島がどこであるかは決まってねエのが船だ。『こつちの岸からあつちの岸まで届けてやろう』——そういう約束で船は生まれる。だが『こつち』と『あつち』は時と場合で変化する」

島と島、或いは岸と岸、港と港。それを繋ぐのが船であるが、その航路は基本的な道筋こそあれど自由だ。それはメリットではある。危険を避けるという点において臨機応変な対応ができることは大きな意味があるのだ。

「商人共の船なら『どこへでも行ける』つてのは大きな意味がある。だが交易つてのは基本的に決まった島同士で行うものの方が絶対的に多い。そこで『海列車』だ」

「……そっか。レールの上を走るから決まった場所にしか行けないけど、逆に言えば決

まったところには行けるようになってるんだ」

「おうお姉ちゃん、飲み込みがいいな」

ウタの頷きに対して笑い声を上げるフランキー。『海列車』について語る彼はとても楽しそうだ。

『『自由』の代わりに『時間』と『確実性』を得たのが『海列車』だ。その恩恵は計り知れぬエ。それこそ『エニエス・ロビー』に行くのも数時間だぞ』

「数時間で、つて」

思わず驚いたのはウタだ。船で行くとなると数時間ではまず不可能だ。船というのは帆を張って海を往く。風の影響もあるし、更に言うならここは偉大なる航路だ。真つ直ぐ進むことも難しい。

それを数時間で。『海列車』というのはどれだけ凄まじいのか。

「凄エだろ？ だから『海列車』で繋がった島で大きな祭でもありや他の島にすぐに波及する。そうなりやその島だけじゃねエ、他の島も盛り上がって活気が出る。この周辺の島に活気があるのは『海列車』の存在がでけエのさ」

簡単に行き来ができるということは、人と物資が循環するということだ。島という閉じた経済圏が外に広がることの意味は大きい。それこそ食糧一つとっても需要が広がり、消費者もまた多くの選択肢を得ることができる。

経済圏が広がるということは金が巡るといふことであり、『金を使って金を稼ぐ』という商売の大原則、その規模が大きくなることを意味する。それは多くの恩恵をもたらすだろう。

「海の上を走る列車っていうだけでも凄いのに」

「よくわかんねエけど凄エんだな」

メリットを理解しているウタと、とりあえず凄いのだということだけを把握したルフィ。二人の反応の違いに性格が表れている。

「一時は滅ぶしかねエなんて誰もが思ったこの島を甦らせたのが『海列車』だ。そしてそれは——」

仮面を外すフランキー。その時の彼の表情は、とても誇らしげで。

「——『海列車』を生み出した、『トム』という偉大な船大工のお陰なんだ」



フランキーの言う通り、ウォーターセブンの街並みの中にはあちこちで仮装した姿の

者たちが見られた。普通の服装をした人間の中に仮面をした者や、それこそルフィたちのように全身を覆うような仮装をする者がいるのは中々に珍しい光景である。

「……水路が道路になつてゐるんだ」

「あの馬？　みてエなのは何だ？」

「ブル」ですよ。『麦わら』さん。うちのソドムとゴモラも同じ種類ツス」

「あいつらに比べたら小さくねエか？」

「あいつらは『キングブル』ってデカイ種類なんスよ。『ヤガラブル』って呼ばれてるあれが基本的なサイズですね。結構力も強くて、大人二、三人ぐらいなら苦にもしねエツス」

「へエ」

ルフィの疑問に対して答えるのはザンバイだ。リーダー格であり、最初にルフィたちと接触した上で主に関わったということもあってか二人の世話役のようになっていた。『水の都』と評されるウォーターセブンは少々独特な島だ。二人にとっては目に入るもの全てが珍しい。

そしてその二人を含む一行はまるで仮装行列のような様相を呈していた。

フランキーを先頭に、モズとキウイこと『スクエア・シスターズ』。そして全身を覆うような仮装をしたルフィとウタに、こちらは仮面はせずフランキー一家のいつもの服

装の上からローブを着たザンバイ。そして最後尾には同じくフランキー一家の男衆が三人ほど。

最初は全員で行くつもりだったというが、あまりにも大所帯に過ぎるし目立ち過ぎるという事でこのメンバーとなった。だが、それでも道行く人々から妙に視線を感じるのは気のせいではないだろう。

「……なんか目立ってない？」

「そりやおれ様は有名人だからな。道行く庶民共からすりや眩しくて仕方ねえんだらうよ」

「いやお前仮装してんじやねえか」

「馬鹿、おれぐらいになりや仮面してても隠しきれねえのよ」

「それ仮面の意味あんのか？」

彼自身の人柄か、それとも野性の本能故か。ルフィはフランキーに対して若干警戒を緩めていた。フランキーも必要以上に距離を詰めようとはしておらず、互いに一定の距離感を保っている。一見すれば気安いが、互いに明確な一線を引いていることがウタにはわかった。

そしてそれを本能というか天然でやってのけるルフィとは違い、ウタの方は未だフランキー一家との距離感を掴みかねていた。自分のファンだと言ってくれたのは嬉しい

し、それが嘘ではないことはわかる。だがどうしても警戒してしまうし踏み込めない。

——ファンであることと、味方であることは違う。

彼らを心の底から信じるには、この僅かな期間で見えてきた『現実』はあまりにも重過ぎた。

「……どうした？」

無意識のうちにルフィの手を握る手に力が入っていたらしい。ルフィが繋いだ手を優しく握り返し、首を傾げていた。仮面のせいで顔が見えないが、その顔にはきつと心配の色が宿っているのだろう。

「ううん」

対し、ウタは首を横に振って応じる。そして今度は無意識ではなく明確な意思を持つてその手に力を込めた。

——その温かさだけが、唯一の寄る辺だ。

置かれた立場と現実。顔を隠さねば街さえも歩けぬという、どうしようもない事実。その全てを一瞬だけでも忘れられる。

この人が、いれば。

いて、くれるなら。

きつと、私は——……

「着いたぞ」

沈みゆく意識が、その言葉によって引き戻された。視線を上げる。

……思わず、眉が寄つたのを感じた。

「カジノ？」

ルフイの声にもどこか嫌そうな響きがある。ああ、と頷いたのはフランキーだ。

「ここで金を増やす」

仮面の奥では物凄くいい笑顔をしているのだろうか、とそんなことをウタは思った。ギャンブルで金を増やすと彼は言っていたが、カジノとは。

いや、普通に考えれば加盟国の合法的なギャンブルとなるとそれが普通なのだろうが。

「何だおめエら、乗り気じゃねエようだな」

「カジノはなー……」

「あんまりいい思い出が……」

二人して渋る言葉を吐く。元々秩序側の存在たる海軍に属していた二人にとって、賭場というのはトラブルが多い場所であるため良い印象はない。合法であろうと非合法であろうとそこで直接的に大きな金が動く以上仕方がないのだが。

しかしこの二人にとっては実際の経験の部分が大きい。それは主に二つ。一つは元

「王下七武海」たるクロコダイルが経営していたカジノの存在だ。直接的にそこへ何かがあったわけではないが——地下で酷い目には遭ったが——秘密結社BWの資金源の一つでもあったという時点で良い印象はない。

もう一つは「グラン・テゾーロ」である。これはもう直接的に被害があったのだから間違いない。カジノごとこちらを騙しに来たわけだから良い印象など抱けるわけがない。

「まあギャンブルそのものを全面的に肯定する奴なんていねエだろ」

「……意外な発言」

先頭を歩くフランキーが言ったその言葉に対し、ウタは少し驚いた表情を浮かべる。当たり前だ、とフランキーは片手を上げて言葉を紡いだ。

「儲ける奴がいりゃ損する奴もいる。ついでに言や永遠に勝ち続ける奴なんてもいやしねエ。このおれでさえな」

「この間も負けたばかりだわいな」

「トータルでも負けの方が多いわいな」

冷静な「スクエア・シスターズ」のツツコミが入るが、フランキーは華麗にスルー。そのまま彼はカジノの扉を開けた。

——瞬間、爆発的な音が響き渡った。

「うわ」

思わずウタは耳を押さえた。響き渡る無数の爆音と声。あまりにも正と負の活気が満ち溢れたその場所は、ウタの体を震わせる。

「……………」

対し、微動だにしないのはルフィであった。彼は一度視界に入る範囲を大きく見回す。仮面の奥であるため余人には窺えないが、その視線は冷たく、圧のあるものであった。

一瞬だけ鋭くなるルフィの気配はしかし、数秒後には霧散していく。ここに脅威はないと判断したのでろう。

「おいおめエら、何を突っ立ってる？ さっさと来い」

そんな二人に対し、フランキーがそう言葉を紡いだ。そのまま彼が歩を進めると、綺麗な格好をした男性が歩いてきた。

「これはこれはフランキー様。いつもご鼻屑に」

仮面の上にローブで仮装しているのに一発でバレていた。何のための変装なのだろうか。

「おう、これを全部チップに替えてくれ」

「畏まりました。すぐにでも」

フランキーがアタッシュケースを預けると、その男性はすぐにカウンターの奥へと入っていった。その光景を見ていた二人に対し、ザンバイが補足の説明をする。

「ここでは現金賭けはできねえんですよ。チップに替えてやるんです」

成程、とウタは頷いた。カジノは場所によつては現金そのままでもやり取りする場所もあるが、どうしても見栄えが良くないしトラブルも発生しやすくなる。一度チップという内部でしか通用しない通貨へ変えることはそういつたトラブルを避ける意味があるのだ。

そして数分後、大量のチップの入った箱を抱えて先程の男性がやってきた。整然と並べられ、数の確認がしやすいようになっているところに細かな気遣いを感じられる。

「ご確認を」

「おう。……ああ、チップ入れをもう二つくれ。小さめのいい」

「はい。——どうぞ」

テキパキと動く男性がすぐに要求されたものを持ち出すと、フランキーがそこへ複数のチップを入れていく。そのまま彼はその二つのチップ入れをルフィとウタへと手渡ししてきた。

「折角来たんだ。遊んでけ」

「え、でも」

「おめエらがうちの子分共を助けたからある金だ。受け取りな」

そう言われると拒否するのも、と思つてしまふほどには二人の性根は善良である。差し出されたそれを受け取ると、フランキーがザンバイの方へと視線を向けた。

「ザンバイ、こいつらに色々教えてやれ。——おれは勝負に出る」

「わかりました!」

「よし行くぞおめエら!」

「フランキー様!」 走るのをお止めください!」

制止の声を無視して駆け出していくフランキーたち。残されたルフイとウタがザンバイへ視線を向けると、ああ、と彼は頷いた。

「アニキは『ヤガラブルレース』に行つたんですよ」

「何だそれ?」

「さつき『ブル』は見たでしょ? アレでやるレースの勝敗に賭けるんです。当たればデカいから金を増やすにはうってつけなんですよ」

「ふーん」

あの『ブル』という生物自体初めて見るのもあつて、イマイチピンとこない二人。ただ少しだけ思うところがあり、ウタはザンバイへ問いかける。

「ちなみにそれ、勝つたことはあるの?」

「……………」

露骨に目を逸らすザンバイ。ああ、と二人は色々とそこで察した。

「ま、まあとにかくお二人とも。何のゲームをしますか？ 色々ありますよ」

そしてこの露骨な話題逸らしである。まあ致し方ないだろう。

「どんなのがあるんだ？」

「普通のカジノにあるのは一通り。ただここは奥のレース場がメインなんで、他のゲームは本当に遊び程度なんですけど」

確かに見たところ周囲から窺える雰囲気は熱こそあるが熱狂と呼ぶほどではない。ウタの知るカジノの雰囲気と比べると落ち着きさえ感じる。

おそらく、正しい意味で『遊び場』なのだろう。

——ただ。

『メインレースは一時間後！ しかしレースは何も一つではありません！ 奮って御参加ください！』

聞こえてくる宣伝の声と、奥の方——おそらく非常に広い空間がある——から伝わってくる熱気。『見聞色の覇気』を使うまでもない。おそらくあそこは別世界だ。

入つてすぐの位置はあくまで遊興のための場所とし、奥に本命のギャンブルを用意する。よくできた構造であると言えるだろう。

まあ、自分達には縁のないことだ。

「そういうウタ、お前確かやったことねエだろ」

「あ、そういうえば……そうかも」

かつて存在した世界最大のカジノ、*グラン・テゾーロ*。そこに*アラバスタ*の英雄”として招待された二人であるが、ウタはそこでライブを行うということもあつてカジノを楽しむ時間がなかったのだ。本来ならばイベント後に遊ぶ時間を持てたはずであるのだが、そこで起こった大事件によつて結局彼女は遊んでいない。

ちなみにルフィはある海賊二人と張り合つて様々なゲームで勝負を繰り広げていたりする。何回『格下』という発言が飛び出したのかは最早数え切れないほどだ。

「じゃあ簡単なのが良いですかね。ええと——」

その、直後であつた。

目で追うことができたのはウタだけだつただろう。それでも辛うじてだ。僅かな油断があつたことも確かであるし、想定の外であつたことも理由である。

だがそれ以上に、彼の——ルフィの動きが早かつた。

引き寄せられ、左腕で隠すように胸元へと抱え込まれる。硬い胸板の感触を覚えたその瞬間、床へチップがバラ撒かれる。

「何だお前」

口調は静か。しかし、圧が違う。その言葉を向けられたわけではないのに、ザンバイは溢すような悲鳴を上げていた。

その周囲だけ氷点下になったのではないかと錯覚してしまいそうになる。周囲に漂っていた熱気の全てが消えていた。

「私が何か、か」

対し、その男はまるで吐き捨てるようにそう言った。酷く冷めた目をした男である。

その男はルフイの左拳が顎に触れるギリギリの位置にあるというのに、表面上は動じた様子がない。

「何なのだろうな」

ため息と共に言ったその言葉の意味はわからない。だが次のアクションを誰かが起こす前に別の第三者が走り寄ってきた。

「どうなさいましたかお客様!」

先程フランキーにチップを用意した男性であった。ルフイが何かを言う前に、いえ、と冷たい瞳の男が首を振る。

「こちらのご婦人に私がぶつかってしまい。——申し訳ありません」

そう言つて男が頭を下げる。そのまま膝を床につけると、彼はチップを拾い始めた。

「お客様、私が」

「いや私の不注意だ。本当に申し訳ない」

手早くチップを集め、こちらに手渡してくる男。そして男はもう一度頭を下げると、そのまま背を向けて立ち去っていった。職員である男また、一礼して立ち去っていく。男の背を睨みつけるようにして見据えるルフィ。あの、と恐る恐るといった調子で声をかけたのはザンバイだ。

「大丈夫ですか……?」

「……ああ。あいつはああ言ってたけど、ぶつかってなんかねエ」

ふう、と息を吐くルフィ。少しだけルフィの纏う雰囲気は緩くなる。

「えっ、じゃあなんで……?」

「変な奴だった」

その一言がルフィの感じた全てであったのだろう。ウタもそうだ。彼女もまたあの男には違和感を感じていた。

だがその違和感の中身を説明できない。何なのだろうか、この違和感は。

「……え」

そこでウタは『それ』に気付いた。

あの男に手渡されたチップ入れ。そこに一枚の紙が差し込まれている。まるで隠すように。

その紙を広げる。書き込まれていた文章は短い。一瞥すれば読める程度だ。だが、そこには。

「ルフィ」

紙を手渡す。その、瞬間に。

「ウタ」

彼の纏う雰囲気、変わった。

だってそうだ。当たり前だ。だってそこに書かれていたのは、おそらくホテルの名とその部屋番号と思しき簡単な一文。

そして。

——「堕ちた英雄」の、フルネーム。

ルフィとウタの、名前であったのだから。

「ここに書いてある場所ってわかるか？」

何が起こっているかわかっていない様子のザンバイへとルフィが問いかける。ええと、とザンバイが頷いた。

「ここからは近い場所にあるホテルですね……。ただ、安いホテルのはずツスけど」

「そつか。悪いけど、案内してくれ」

「そりゃ構いませんけど」

ザンバイへと場所の案内を依頼するルフィ。そして彼はその手をウタへと差し出した。

「行こう、ウタ」

「うん、ルフィ」

その手を取り、まるで互いの存在を確かめるかのように握り締める。

……大丈夫。

きつと、大丈夫だ。

彼が一緒なら、きつと。

何が、あつても。



その場所は、ザンバイが言っていた通り決して高級な場所とは言えなかった。建物も古く、立地も良くない。営業終了の予定もあるほどだという話だ。

そんなホテルの一角にその部屋はあった。ノックをしようとした瞬間、内部から声が

響く。

「入れ。鍵は開いている」

静かな声であつた。応じるようにして扉を開けたのはルフィである。それに続き、ウタも追つて部屋へと入る。

案内してくれたザンバイにはロビーで待つてもらふことにした。何が待っているかわからないし、位置の把握は「見聞色の覇気」で行っている。何かあつても対応できるはずだ。

「大胆だな」

中にいたのはカジノで出会つた男であつた。煙草を啜えているが火は点いていない。正しく啜えているだけだ。

この部屋にあるのは一つの机と二つの椅子。そしてベッドだけであつた。

……いや、もう一つ。

机の上に置かれた電伝虫が、異様な雰囲気を放っている。

「呼び出したのはお前だろ」

部屋の中を一瞥し、男を正面に見据えながらルフィが言う。殺意にも似た圧を放つ彼を前にし、そう睨むな、と男は言つた。

「上司の命令だ」

「……上司?」

思わず問いかけたウタには何も言わず、男は机の上に置かれた電伝虫を操作した。そうはいっても受話器部分を指で叩き、先方に音を伝えたくらいであるのだが。

僅かなノイズの音が響く。既に繋がっていたらしい。

相手は誰か。心当たりは――

『クワハハハハハハ!!』

響いたのは、聞き覚えのある笑い声。その声の主は酷く楽しそうな声で言葉を続けた。

『久し振りだな!! 生きてるようで何よりだ!!』

その声の主は、この海の情報全てを牛耳る男。人々は彼を数多の感情を込めてこう呼んでいる。

――『新聞王』、モルガンズ。

ルフィとウタ。『海軍の英雄』たる二人も多くの関わりを持った相手である。

自分達の置かれている状況、立場、そして世界の情勢。

理解していると思っていた。その上で逃げるしかないのだと、そう思っていた。

しかし、理解できていなかったのだ。

知ることになったのは、命の価値。

ルフィとウタ。たった二人の、あまりにも重過ぎる価値について。突きつけるような事実。それを世界はきつとこう呼ぶのだろう。

——“現実”、と。

逃亡海兵 Water Seven ⑧

第四話 命の価値 前編

共に世間において名を知られた存在である「新時代の英雄」と「新聞王」。その付き合いの始まりはあまり知られていないが実はかなり古いものである。

最初の出会いは互いにそこまで大きな関心を向けることはなかった。何せ十年近く前の話だ。未だ幼きルフィとウタとモルガンズが出会ったのは多くの偶然からなるものであったのだから。

約十年前。元海軍大将「黒腕のゼファー」率いる新兵教育のための艦隊が彼らの故郷たるフーシヤ村を訪れ、そこで大きな事件が起こった。巻き込まれたルフィとウタの二人は結果的に大きな働きをし、多くの命を救うことになる。事件解決後にその件について取材をしたのがモルガンズであり、当時の幼き二人と簡単な会話を交わしたことが出会いであったのだ。

この時は互いにそれだけの繋がりで終わり、そこから二人が海軍へ入隊するまでは音沙汰はなかった。“大海賊時代”という荒れた時代だ。次から次へと事件が起こり、ニュースが広がる。その中で知らず頭の隅に追いやられ、思い出すこともなくなっていく。

——だが、その記憶を呼び覚ます事件が起こる。

その事件は“デッドエンド事件”と呼ばれる、とある海賊が引き起こしたものであった。

元海軍将校でありながらも海賊として名を上げ、“海軍最大の汚点”とまで評された男。その男が裏で糸を引いて開催された海賊たちによるレース——“デッドエンドレース”。その情報を掴んだ海軍は当時無名の海兵をそこへ潜入させた。

実際に起こったことについての詳細はここでは伏せておく。ただ結果として、“海軍最大の汚点”は後に“新時代の英雄”と呼ばれることになる海兵によって討ち取られたのだ。

その事件を真つ先に報じたのが何を隠そうモルガンズの“世界経済新聞社”である。そこで久しぶりの再会を果たすわけであるが、そこから幾度となく顔を合わせるようになる。

海軍としても広告塔たるウタの宣伝に“世界経済新聞社”を活用したかったし、モル

ガンズもそれには乗り気であった。だが何よりもこの二人は行く先々で事件が起こる。そのうちモルガンズは二人が派遣された場所へ記者を送り込むようになり、状況によっては自分自身が現地入りするようになった。二人の活躍を「世界経済新聞社」が真っ先に報じることが多かったのはそういう事情からである。

そしてこの両者の関係であるが、何とも言い難いものであった。

敵意があるわけではない。だが信頼はないし、友人というわけでは決してない。しかし奇妙なところで信用はあったのだ。

ルフィとウタはモルガンズが掴んだ情報について一定の信用をしていたし、モルガンズはモルガンズで二人が関わる以上何かが起こるといふ信用があった。

奇妙な関係だ。だがそれはあくまで海軍という組織に所属していたからこそでもある。

明確に世界の秩序の敵となったルフィとウタ。

黒い噂は数あれど、その秩序において一定以上の地位を持つモルガンズ。

かつてとは状況が大きく違う。何ならモルガンズにとつては接触することがリスクになるはずだ。だといふのに彼は電伝虫越しではあるがこうして接触してきた。

そこにどんな意図があるのか。今の二人には掴み切れない。

だが、二人が知る中で彼以上に世界の情勢について把握している人間というのもない

い。

息苦しく、空気が重い感覚。常にまとわりつく、粘ついた圧迫感。二人が置かれた状況、最早本人たちでさえも理解していない状況に変化をもたらせる可能性がある。

誰よりも世界から注目される二人と、それを世界に届ける力を持つ男。だがその会談は誰も知らぬ場所で行われている。

——いや、きつと。

行われたという事実さえ、誰も知らぬままなのだろう。

これが、一つの分岐点であつたというのに。

「座るといい」

火の点いていない煙草を啜えた男——ルフィとウタをここへ誘つた男が並べた二つの椅子を指し示した。彼自身はベッドに腰掛けている。

一瞬の逡巡。だが次の動きは早かつた。ルフィが先に椅子へと音を立てて座り、続いてウタが静かにその隣の椅子へと着席する。その姿を見、男は少し驚いた様子で言葉を紡いだ。

「渋るようなら罨じゃないとも言つて促すつもりだったが」

『クワハハハ！　ここで足を止めるような奴じゃねエさ！』

男の言葉に対し、電話の向こうからそんな声が聞こえてきた。いつもテンションの高い男だが、今回はいつもよりもテンションが高いように思える。

『まあ、安心したのも確かだ。まだ折れちやいねエようだな?』

「……………ッ」

ウタが小さく震えた。膝の上に乗せた彼女の手が硬く握り締められる。

「——」

そこへ、優しく手を重ねたのがルフイであった。彼は彼女が折れたその瞬間を見ているのだ。故にこそ「正義」を掲げ、戦い抜くと決めたのだから。

だがそれを語る意味も必要もない。故に安心させるためにウタの手を握ったのだ。

——ここにいます。

自分は隣にいます、それを伝えるために。

「モル——」

「——名前は出すな」

電話の向こうの相手を呼ぼうとした瞬間、遮られた。男がこちらを見据えながら言葉を紡ぐ。

「この周囲から人払いはしている。まず会話は漏れないだろう。だが電伝虫には盗聴という手段がある。そのリスクは減らしたい。……盗聴防止の電伝虫があるが、アレは貴

重だ。こんな場所には持つて来れない」

『その場にいる人間が誰であるのか、つて証拠がなけりや存外どうとでも言い訳が効くもんなのさ。旦那方も周囲に迷惑をかけたくはねエだろう?』

周囲、という言葉から浮かぶのはフランキー一家だ。彼らに迷惑はかけたくない。

「わかった」

『実に結構だ! さあ楽しい楽しい長電話といこう!』

この演劇じみた言い回しは盗聴に対するカモフラージュなのだろうか。……いや、おそらく素なのだろう。多分。

ルフィは一度息を吐いた。本来、彼はこういつた交渉じみた状況が得意ではない。基本的にウタや副官であったオリン、他には作戦を共にした海兵——それこそモモンガやスモーカーなどに任せてきたというのが実情だ。

だがこの場でウタを前面に出すことを彼はしたくなかった。故に心を決め、彼自身が言葉を紡ぐことを決める。

「おれたちがここにいてどうしてわかった?」

拳によるものではない戦い方について、かつてルフィとウタはモモンガ中將から学んだことがある。いつか必要になる戦い方だと言われ、そして実際それが必要な場所になつて訪れることになつたのだ。

——終ぞ、あの国に対して何もできなかつたとルフィは思っている。

いつか来ると言われていたのに、かつてのあの尊敬する海兵のような戦い方ができなかつたのだ。

故に決めた。未熟であろうと、苦手であろうと。やるしかないのであるならば。

今この瞬間からであつても学び、実践するしかない。

『優秀な社員のお陰だ。といつても偶然だがな』

「ニユース・クーがウオーターセブンへ向かう途中の姿を目視した。例の一家と一緒にいるところをな」

二人の回答はあっさりとしたものであつた。そこで思い出す。フランキー一家と共に海に行く途中、確かにカモメの群れを見たのだ。こちらの頭上を進んで行つたあの一団の中に、ニユース・クーがいたということか。

「そうか」

頷く。同時、ルフィはこうも思う。

——把握するべきは人だけではないということか、と。

「……………」

天井を一瞥するルフィ。眉間に皺の寄つた彼が何を考へているのかは、隣にいるウタにもわからなかつた。

『おれは神なんざ信じちやいねエが、この偶然には感謝している。それでも祈りはしねエがな!』

相変わらずの軽快な口調。この場の主導権を握るためか、それともこちらの警戒心を少しでも削ぐためか。おそらく両方だろう。

はつきり言つて、こういう分野でモルガンズと相対するのはあまりにも分が悪いように思える。故にルフィとしては珍しく慎重な心持ちであった。

「戦闘と政治は戦い方が違うとはいうが、基本的なことは変わらない。武器が何であるかの違いだけだ。——どちらが主導権を握るか。結局それに終始する」

とある日の記憶。当時自分たちに拳以外の戦い方を教えてくれた人が語っていたことを思い出す。

思い出すのだ。過去の記憶を、教えを、戦いを。
歩んできた道の中に、きつと答えはあるのだから。

「どうしておれたちを呼んだんだ?」

出来得る限り冷静に、そして同時に情報を探る。何度も見てきたやり方だ。

そう、これは彼女の——ウタの模倣。

『質問の意図が不明確だなア、旦那』

「わざわざこうして話をする意味はねエだろ」

こちらを揶揄うような言葉に対し、ルフィが重い口調で言葉を返す。だが彼の疑問は当然のものであったのだ。

見かけたのであれば海軍に通報でもすればいい。リスク、とベッドに腰掛けた男が言ったが、そもそもこうして接触するリスクが大きいはずなのだから

『見解の相違だな。まずはそこを正していこう』

モルガンズの余裕は崩れない。彼は楽しそうに言葉が続ける。

『対話において必要なのは互いの前提知識、或いは認識、もしくは見解といってもいいか？ それが互いの間でどうなっているかを把握しておくことだ。一番理想なのは互いの認識が一致した状態だな。共通認識って言葉は響きが軽いが、これ以上重要なものもねエ』

互いに別個の人格を持つ人間である以上、どうしても認識に違いは出る。それを擦り合わせることは最低限必要な行為であった。

『例を出そう。今おれの目の前にあるのは林檎だが、どんなものをイメージする？』
「普通の林檎じゃねエのか？」

『思い浮かべた普通の林檎ってのは何色だ？ 赤か？ 青か？ それとも旦那が見たこともねエような色をした何かか？』

ルフィの眉が僅かに動く。受話器の向こうから小さな音が聞こえた。それは林檎を

モルガンズが齧った音だろう。

『これが認識の齟齬だ。これを正さずにする会話は誤解を生む。それは避けるべきだろう？』

逆に言えば、この認識の齟齬というものを正さなければ意図的に誤解を生むことができる。そしてそれはモルガンズが読者を煽る手口の一つでもあった。

拳ではなく、言葉。いや言葉だけではない。『情報』という概念を武器にする男。

それこそが、『新聞王』モルガンズの真骨頂だ。

『さて、見解という概念について相互理解を持てたところで話を進めよう。おれが旦那方と話をする意味がねエだど？——ナンセンス！ ジャーナリストつてもんをわかってねエな！』

ふう、というため息を吐く音が聞こえた。煙草を啜えた男のものだ。そこには呆れのような感情が宿っている。

『おれたちは集めた情報によつて記事を書き、それを読者に届けることが至上の役目だ。そこに少しばかり私的な見解が入っちゃうのはまあ、ご愛嬌だ。あくまで私見だからな』

その私見で世界を踊らせる男が言う。そもそも、と彼は言葉を続けた。

『確かに通報は善良な市民の義務だ。それによつて報酬を得ることもできる。だがそれ

をビジネスと考へた場合、おれたちにとつては実入りが悪いのさ。旦那方を売つたところで得られるのは端金だけ。代わりに失うのは信頼だ。ついでに言うなら余計な恨みも買うことになつちまう。割に合わねエなア』

「恨み？」

呟いたのはウタであつた。そこからか、と呟いたのは我関せずの態度を取つていた煙草を啜えた男である。

「社長。どうやら彼らは自分たちの価値をわかつていないようで」

『それは仕方ねエ話だ。どれだけ見事なダイヤモンドも自分自身では価値なんざわからねエ。価値をつけるのはいつだつて他人だからな』

モルガンズの笑い声が響く。そして、さて、と彼は言葉が続けた。

『その価値つてのがおれがこうして話をしてる理由だ。おれは旦那方に価値を見た。わかりやすくいいだろう？』

確かにわかりやすい話であつた。だがその『価値』が二人にはわからない。わからないままに、彼らはここまで来てしまつたのだ。

——最早その存在は、人の命さえも左右するほどだというのに。

『さあ、ようやく本題だ。——話をしよう。互いにとって有意義になると幸いだ』

そして、“新聞王”が言葉を紡ぐ。音声だけだというのに、眼前に椅子に座るその姿が見えるかのようだ。

『聞きたいことはいくらでもあるが、まずはこちらから情報を提供しよう。——まずは“世界政府”。旦那方の古巣についてだ』

今の世界の在り方を、おそらく誰よりも世界を知る男が語り始める。

それは、霧の中を歩む二人にとっての光となるのだろうか。



不夜島、“エニエス・ロビー”。

そこは世界政府中枢に繋がる“政府の玄関”と呼ばれる場所であり、世界政府が直轄管理を行うが故に“司法の島”としての呼び名を持つ。

世界政府の創設と共に生まれたその島は八百年もの長きに渡って侵入者も脱走者もないという鉄壁の施設だ。ここへ連行された犯罪者は名ばかりの裁判を経て海底監

獄 “インペルダウン” へと連行される。

権威という意味でも実際という意味でも重要な施設であるわけだが、それ故に相応の戦力が常設されていた。数にして一万の混成部隊——いや、軍隊である。万が一の襲撃時にはこの戦力が迎撃にあたるのが想定されていた。

だが、真の守護者は彼らではない。

——世界政府直下暗躍諜報機関、サイファーポール No. 9。

その存在と役割故に一般市民には知られておらず、それどころか世界政府内の人間でさえも知らない者が多い存在。

彼らが掲げるのは “闇の正義”。非協力的な市民に対する『暗殺』を許可されており、故にこそ彼らは公式の記録においては存在しないのだ。

ここ “エニエス・ロビー” はそんな CP9 の拠点でもある。故にこの地の守りは盤石なのだ。

そしてそんな場所へ軍艦が商船団と共に訪れていた。通常、軍艦が正面からここへ来る場合はその多くが罪人の誤送によるものであるのだが、今回は違うらしい。

何やら聞くところによると、特別な任務を受けた者たちであるということだ。

そう、例えば。

—— “墮ちた英雄” の追撃部隊などという、通常では編成されていない部隊である。

「お会いできて光栄だ、長官殿」

海軍本部中將にして追撃部隊の指揮官たるヴェルゴは眼前の男性へと敬礼しながら
そう言葉を紡いだ。彼の後ろでは副官の海兵もまた敬礼をしている。

「（ちらり）そ。噂は聞いてる」

対し、眼前の特徴的なマスクをした男は敬礼ではなく軽い一礼を返した。そのまま右
手を差し出してくる。

海軍と世界政府。根本は同じでありながらも在り方が違うことがよくわかる光景だ。

「そちらの言う噂とは怖いな」

「後ろ暗いことがなければ怖がる必要はねエだろう？」

握手を交わしながらヴェルゴとマスクの男——CP9長官スパンダム。暗にピリつ
いた空気が漂っているが、それは海軍とCPという組織間の関係上ある程度致し方ない
ものであった。

張り詰めた空気。だがそれはその場に居合わせた第三者によつて霧散することにな
る。

「チャッパー。長官は調べても何も出なかったからとりあえずそれっぽいこと言つて
だけなんだな——」

「やめろフクロウ。……まあ、綺麗過ぎて逆に怪しいくらいだが」

何故か文字通り口にチャックが付いた男と、額にサングラスをかけた男であった。ヴェルゴがそちらへと言葉を紡ぐ。

「それは私のことかね？」

「悪く思うなよ中将さん。これはある意味習い性みたいなものだ。この『司法の島』に怪しい奴を入れるわけにはいかねエからなア」

笑みと共にサングラスを額にかけた男——ジャブラが立ち上がりながら言う。その視線はこの場にいる海兵二人を探るような色を宿していた。

「海兵つてだけで無条件に信じるわけにもいかねエのはわかるだろう？」

その言葉に対し、眉を顰めたのはヴェルゴの後ろに控えていた副官であった。そんな彼に対し、ジャブラが笑みと共に言葉を紡ぐ。

「『南の海』第43支部からの叩き上げで本部に招集されて今は大尉の階級にある。立派なものだ。追撃部隊の副官つてだけの格は十分ある」

「中隊規模の部隊を率いて潜伏中の海賊を捕えた功績で本部招集された。チャパパー」

びくり、と副官が体を震わせた。それは彼の来歴だ。隠していることではないし、調べればわかることではある。だが彼らがここに来到ることになったのはいくつもの偶然

の流れからだ。調べる時間などなかったはず。

「彼らは諜報機関CP9。この程度は朝飯前ということだろう」

こちらの思考を呼んだように言うのはヴェルゴだ。そしてそんなヴェルゴに対してはジャブラが肩を竦める。

「そっちの方はとんでもなく優秀で誠実で理想的な海兵って情報しかなかったが」

「それはありがたいな。CP9に理想的な海兵と保証されるなど、これ以上のものはない」

「……まあ、別にいい。殺し合おうってんじゃねエ」

ジャブラが肩を竦める。それで話は終わったと判断したヴェルゴはスパンダムの方へと改めて視線を向けた。

「先に連絡させて頂いた通り、少しの間厄介になりたい」

「ああ、構わねエさ」

ここへ着く前に事前に話は通していたことだ。スパンダムも文句は言わず承諾する。故にここまでは既定路線。問題はこの後だ。

「だが中将。宿を貸す代わりに一つ協力して欲しいことがある」

「協力？」

「ああ、そうだ。思ったよりも時間がかかっている案件があつてな。——つて熱イ!？」

コーヒー溢した!」

先程まではクールな雰囲気だったのはどこへやら。食器の割れる音と共に騒ぎ始めるスパンダム。

「畜生、ああそう難しい話じゃねエ。実はな——」

「——よよいっ!! お届け物でエ長官!!」

なんとも間が悪いというか、スパンダムが喋ろうとした瞬間に扉を開けて誰かが入ってきた。広がるような長い髪をした男である。まるで歌舞伎役者のようなメイクをしており、その立ち振る舞いも仰々しい。

「あん? 届け物?」

「よよいっ! こちらでエ!」

その男の名はクマドリという。口調も立ち振る舞いも大袈裟であるが、彼も歴としたCP9の諜報員の一人だ。

そのクマドリが差し出したのは嚴重に鍵のかけられた小さな箱であった。スパンダムの表情が変わる。

「ようやく届いたか!!」

その表情は文字通りの喜色満面であった。長官、とそんなスパンダムへ声をかけたのはジャブラだ。

「そいつは？」

「おれには色々と伝手があつてなア……ウオーターセブンに行く前に届いて何よりだ」

いまいち答えになつていないが、ジャブラはそれ以上の追求はやめたようであつた。肩を竦めて息を吐く。

だが、スパンダムが口にした言葉に反応したのはヴェルゴだ。

「ウオーターセブンへ？ 確か『アクア・ラグナ』という高波が来ると聞いたが」

「来る前に行くのさ」

笑みと共に言うスパンダム。彼は箱を片手に持ちながらヴェルゴの方へと視線を向けた。

「『五老星』から勅命が下つた。おれたちはとある長期任務の途中なんだが、それを完了させろつてな。『多少』は手荒なことも許される」

「『五老星』……!？」

副官が驚きの声を上げる。彼にしてみれば、世界政府の最高権力たる『五老星』というのは雲の上の存在だ。その名が平然と出てくることは予想外であつたのだろう。

そんな彼の反応に気をよくしたのか、上機嫌でスパンダムは語る。

「おれたちはCP9だ。世界政府の信頼も厚い諜報機関。こんなことは日常だ」

「……機密ではないのかね？」

ヴェルゴの問いかけ。それに対し、普通はな、とスパンダムは告げる。

「だがおれは優しいんだ。お前らにも協力させてやる。追撃部隊というが、結局大した成果を上げてねえんだらう?」

「なっ……!」

「耳が痛い話だ」

気色ばんだ副官を制するように言うヴェルゴ。彼はそのままスパンダムへと問いかける。

「名誉挽回の機会を貰えることはありがたいが、具体的には何を?」

「人手が足りなくてなア。何、少しばかり戦力を貸してくれればいい」

答えているように答えていないスパンダム。そんな彼とヴェルゴの視線がぶつかる。だがそれも数秒だ。

「承知した。ただ一つ、確認させて欲しい」

「何だ?」

「——それは『正義』のための行いかね?」

「当たり前だろう」

呆れた様子で頷くスパンダム。彼は肩を竦め、言い切った。

「おれたちこそが——『正義』だ」

ある種不遜とも言える彼の態度。そんな彼に対し、ヴェルゴは。

「承知した」

一言、そう返答した。

嵐が来る。それは数多の思惑を孕みながら、徐々にその歩みを進めている。

その果てに何かがあるのかはわからない。ただ、わかることは。

——何かが起こるといふ、確信だけだ。

逃亡海兵Warer Seven ⑨

第四話 命の価値 中編

『まあ古巣ついても実感はねエだろうがな。そもそも“世界政府”つて括りがあまりにも抽象的で範囲が広過ぎる』

ホテルの一角。そこに響くのは“新聞王”の声だ。彼の語りは聞き取り易く、その本質が文字だけではないことがよくわかる。

『さてここで互いの認識の擦り合わせといこう。“世界政府”つてのは何だ?』
「……何、つて」

ルフィは考え込む。新兵よりも更に前、正式入隊前に学んだことである。正直苦手な分野であるが、どうにか過去の記憶を引っ張り出そうとする。

そんな彼を見かねたわけではないだろうが、その問いに答えたのはウタであった。

「加盟国で構成される国際組織でしょ」

『エクセレント！ ご婦人はよく勉強しているな！』

拍手の音まで聞こえてきた。何となく馬鹿にされている気がする。

『だがその回答はあくまで教科書通りのものに過ぎねエ。今この場で必要なのは実際として——言い換えるなら現実としての“世界政府”って組織の在り方についてだ』

「現実？」

『旦那とご婦人が見聞きしてきたものと言えればわかりやすいか？ 理想と現実が違うのは個人だけじゃねエ、組織も同じだ。“世界政府”ってのは国際連合統治機構とでも言うべき組織だが、その実態はそう単純なものでもねエのさ』

難しい言葉が出て来始めた。ルフイは既に頭が熱を帯び始めているのだが、どうにか堪える。

あとどうでもいいが、モルガンズの『ご婦人』なんて言い方は初めて聞いた。彼はウタについていつも“歌姫”と呼んでいたので違和感が凄い。

『長々と政治のお勉強をしたいわけじゃねエ。だからここは単純に言い切っちゃおうが、“世界政府”ってのはその性質上統一した意識を持つのが本来難しい組織だ』

考えてもみる、とモルガンズは言う。

『世界中に点在する加盟国が170以上も集まって作った組織？ そんなもんどどうやって意思の統一を図るってんだ。文化が違う、気候が違う、歴史が違う、立場が違う。人

間なんてのは環境一つでその意思が大きく変わる生き物だ。本来まとまるわけがねエ」
 「けど『世界政府』が決めたって言葉はよく聞かぞ」

意思統一が難しいというが、基本的にその手のことに興味を持たないルフィでもそんな言葉を聞いた覚えがあるくらいには『世界政府』というものは一定の意思を示している組織だ。彼らが在籍していた海軍も『世界政府』の決定の下で動く場合も多いし、とてもじゃないが意思統一の難しい組織には思えない。

だがそれをモルガンズは否定する。

『そいつを決めてんのは加盟国じゃなくて『天竜人』さ。正確には『五老星』だろうがな』

「……『天竜人』」

ルフィの右手にあの日の感触が蘇る。全てが反転した日。この拳を振るったことに後悔はないし、これからもしないだろう。その確信がある。だが思うところがないわけではない。その重さについてはルフィも理解しているのだ。

その『天竜人』が『世界政府』の意思決定を行なっているというのか。

『『世界政府』が単純な連合組織じゃねエのはそこだ。国家同士の連合組織なんてのは世界中にいくつももあるが、実際的な内情はともかく明確に上に立つ存在を据えている例は珍しい』

その珍しい例が世界で最も大きな連合組織だというのだから妙な話である。だが確かに「世界政府」とはそう言われると特異な組織であった。170以上の加盟国が集まって組織され、彼らが集まって物事を決定する「世界会議」も開催される。円卓という形でそれぞれの立場が対等であるということを示してすらいるのだ。

だというのに、「天竜人」という明確に加盟国の上に位置する存在がいる。そしてそこに異議を申し立てることは許されない。

『始まりの王たちの子孫、「天竜人」。それを明確に上に据えてる経緯についてはどうでもいい。今重要なのは「世界政府」ってのはそういう組織であるってことだ』

「どういうことだ? 「天竜人」が色々決めてるってのはわかったけどよ」

『「世界政府」の決定には二種類あるってことだ、旦那』

ようやく本題に至ったのだろう。モルガンズの口調に熱が入る。

『基本的の下される「世界政府」としての決定は「五老星」によるものばかりだろう。明確になっている場合もそうじゃねエ場合もあるが、概ねそうだと見ていい。この辺はまあ、どっちであるか何となく癖というか感覚でわかる』

こういうところは情報の最前線を行く男の面目躍如というところか。常に物事の裏を推測することもまた彼のような者にとってはある種の癖であり、だからこそその肌感覚で察知するのだろう。

『旦那方を賞金首にし、海軍の追撃を決定したのは間違いなく“五老星”の判断だ。そう断定した理由は単純だな。動きが早過ぎる。まあ面子を潰されて何もしねエのは対外的にも良くねエからなア。その決定も理解はできる』

確かに追撃部隊の編成と動きは早いとは二人も思っていた。その裏には“五老星”がいたということか。

『だがここで疑問が一つ生まれる。——加盟国はどう考えているか、だ』
「どうって」

ウタが呟くように声を漏らした。理由はあれど“天竜人”に逆らったのだ。答えな
ど決まっていると思うのだが。

だが、モルガンズはそれを否定した。

『答えはおれにもわからねエ。何故なら——』

楽しそうな声。電伝虫の向こう側にいるというのに、両手を広げている姿が見えるようであった。

『——未だにどの加盟国も、明確な態度を示してねエからだ』



いくつもの話し声が響くレストラン。時間でいうと昼になる前だというのに随分と賑やかだ。人気の店であるのだろう。

そんな店の一番奥にその男女はいた。一見するとカップルのようにも見える二人だが、その居住いには隙がない。見る者が見ればただの観光客でないとわかるだろう。

その二人は食事をしつつ言葉を交わし合っている。賑やかな店内だ。その声が聞こえるのはお互いのみ。

「態度を示してないってどういうこと？」

問いかけたのは女性——コアラであった。彼女は料理を食べ終えてフォークを置きつつ、対面の男性へと問いかけている。

「言葉通りだ。どの国も沈黙してる」

対し、応じたのは金髪の男——サボだ。彼は既に食事を終えており、窓から警戒するように外を見つめながら言葉を紡いでいた。

「国によって事情は違うだろうが、一番大きな理由は海軍の存在だ。世界政府は“天竜人”を頂点とした加盟国の連合ともいうべき組織だが、海軍は加盟国の兵士によって構成される軍隊じゃねえ」

「うん、そうだね。海軍はあくまで世界政府直下の軍隊であつて加盟国とは直接的な繋がりはないし」

「加盟国の有力な軍人が加入したり要請があれば部隊を派遣したりつて繋がりはあるが、基本的に海軍は加盟国の主権を尊重してる。加盟国は基本的にそれぞれの国で国防のための軍隊を持つてるからな」

故に海軍は加盟国からの干渉をある程度無視できる立場にあるとサボは言う。世界政府を構成するのは加盟国だが、海軍を構成するのはその加盟国の軍隊ではないからだ。

「だから今回の件では海軍が追撃部隊を組織する形で動いたし、加盟国はその動きがあるから沈黙してる。世界政府——というより“天竜人”に逆らつた存在について加盟国は肯定の立場に立つことはねエが、逆に言えば積極的に動く必要もねエ。海軍が動いてるなら任せるつて言い訳も立つしな」

「……それでいいの？ 色々言われそうだけど」

コアラが首を傾げる。加盟国というのはその内心はどうあれ世界政府を維持する立場にあるはずだ。それが今回の渦中にある二人について積極的な動きを見せないというのはどういうことだろうか。

「そこに絡んでくるのが政治だ。あの二人は世間的に人気もあつたし知名度も高かつ

た。例の“金獅子”の事件の後、海軍への志願者も爆発的に増えたくらいだ。……あの事件で全部吹き飛んだけどな」

公式の発表こそないが、“革命軍”が掴んでいる情報ではそれが海軍の現状であった。あの事件の後にその勢いを利用して“世界徴兵”なるものを行う予定であったというが、その全てがああ的事件によつて吹き飛んだのだ。志願者たちは一斉に取り下げたし、それどころか現役の海兵たちの中からも決して少なくない離脱者が出る始末である。

最近海軍——というより世界政府の動きが活発なのはそれを誤魔化すためもあるのだらうとサボたち“革命軍”の幹部たちは睨んでいる。有力な海兵たちが動き回り、各地で活発になりつつある海賊たちをまるで見せつけるように撃破、捕縛しているのだ。それはおそらく海軍の健在をアピールする狙いがあったてのことだらう。

「加盟国はあくまでそれぞれが別の独立国家だ。世界政府のことは勿論考えてはいるだろうが、その優先順位は自国より劣る。わざわざハイリスクな存在に手を出すことはしねえよ」

ルフィとウタ。その存在は加盟国にとつて非常にデリケートで扱い難い存在だ。“天竜人”に正面から逆らつた彼らは敵であるが、“英雄”として秩序を守つてきたという実績と知名度故に加盟国の者たちからの人気は高い。そこへ表立って彼らに対して

否定の言葉でも宣言しようものなら自国の国民の反発を招きかねない。

無論、加盟国の国民たちも馬鹿ではない。それがルールであり法であることは理解している。だが理解と納得は別だ。表立っての不満が出ることはあまりないだろうが、内心ではずっとその不満と不信が燻り続ける。そうなれば厄介だ。一度そうした負の感情を国民から持たれてしまうと、国がやること全てを悪し様に見られ始めてしまう。

「だから自国のことを考えるなら沈黙が最適解だ。それならある程度納得はさせられる。他にも理由はあがるが、まあ加盟国は向こうから寄ってこね工限り動かねエだろう。そういう意味では加盟国に潜り込むのが一番あの二人にとっては安全かもしれねエ。正体を隠せるなら、って条件はあるけどな」

加盟国にとっては目を瞑りたい相手である。あの二人自身も追われていることは自覚しているのだから、そこである種の妥協が成立するのだ。

無鉄砲に見えるが、その裏側に深い思慮がある——それが“革命軍”が二人に対しての評価であった。特にルフィの父親である“革命家”ドラゴンの印象があるせいで余計にその辺りの評価が高くなっている部分がある。

割と致命的なすれ違いというか勘違いであるのだが、残念ながらそれを正せる者はいない。

「だとしたら、このウォーターセブンのどこかにいるかもしれない？」

首を傾げながらコアラが言う。情報が集まる可能性が高いことを考えてウォーターセブンへ来たわけであるが、先ほどのサボの理屈というならそもそもから本人たちがここにいる可能性が高いということだ。

「それなら話は早エな。あの国じゃ大して話も——」

瞬間、サボの頭に強い痛みが走った。思わず顔を顰めるが、それも一瞬だ。痛みもすぐに引いてく。

「サボくん？」

だが、目の前にいるコアラはその一瞬も見逃さない。そんな彼女へ大丈夫だ、とサボは応じる。

「また体調が？」

「いや。……それより、イルはどうした？」

話を逸らすため、強引にこの場にはいない女性の名をサボが上げる。コアラは少し不満そうな顔を浮かべたが、サボの意図を察して言葉を紡いだ。

「街の地形を頭に入れてくるって」

「……朝もそう言ってなかったか？」

「うん。だからそれからずっと。さっきも連絡したんだけど、『任務を続行します』って」
このウォーターセブンの中へ「革命軍」から潜入したのはたったの三人である。大

所帯では目立つし、そもそもどこにいるかもわからない。故に別れる必要があったからだ。

サボ、コアラ、そしてイル。この三名がウォーターセブンへと入った三人だ。魚人であるハックなどはどうしても目立ってしまうためバックアップに回っているし、他の構成員たちも周囲の島へ潜入して情報収集をしている。

そもそもこの辺りは「エニエス・ロビー」に近いこともあつて海軍の影響力が強い。あまり大所帯で動かない方がいいのだ。故の少数行動であるのだが。

「働き過ぎだから止めようとしたんだけど……ほら、無理に止めると」

「……ああ」

コップを握る手に少し力を込めて言うコアラと、そんな彼女に対して頷きを返すサボ。脳裏に浮かぶのは少し前のある出来事だ。

あの「金獅子」が引き起こした事件の後、サボたちは偶然から彼女を拾い上げた。意識を取り戻した当初は負傷もあつて動けずにいたのだが、ある程度動けるようになった彼女は働くことを希望したのだ。怪我人という思いもあつたが、「革命軍」も人手不足である。力を借りることにした。

そして実際、彼女は非常に優秀であつた。手慣れ過ぎていと言つていいほど完璧に雑用をこなしてくれたし、その姿を見て「革命軍」のメンバーも警戒を緩めたくらい

だ。

しかし、生死の狭間を彷徨うような重傷から復帰した直後である。やはり無理が出ってしまった。だが、その時に彼女は――

“申し訳ありません。すぐに戻ります”

明らかに無理をしていた。だがそれを隠し、そう言つてのけたのだ。

遠慮であるとか強がりであるとか、そういうものではなかった。そこにあつたのは義務感であり恐怖であり、そして彼女の過去だ。

そんな彼女の背景に気付くことができたのはコアラだけであつた。イルのそんな姿にかつての自分を見たのである。

「イルは多分だけど、治らないと思う。治す、つて言い方は傲慢かもしれないけど」

「健全とは言えねエ状態だ。治すつてのは正しいんじやねエのか？」

「でもね、サボくん。イルにとつてはあれはきつと人生そのものなんだよ」

諭すような言い回しであつたが、重みがあつた。何かを確認するようにコアラは自分の右手を見つめている。

「そういう生き方しかできないし、知らないの。それ以外の生き方――在り方は許されない。きつとイルはそういう生き方をしてきたんだと思う」

かつて彼女自身もそうであつたからこそ分かることなのだろう。コアラという人間

が今「革命軍」にいる理由もそこにある。

「間違つてるともおかしいとも思わないし思えないの。……後からその生き方が間違つていたつてわかつたとしても、それでもどうしても心の奥に残つてしまう。その生き方を誇つているわけでもないのに」

過去とはそういうものだ。消し去ることはできないし、拭い去ることもできない。どれだけ否定しようとも、拒絶しようとも。そこにあつた事実だけは必ず残つてしまふのだ。

「お前もそうなのか？」

思わず口をついて出た言葉だつた。真剣な表情のサボに対し、コアラは小さく手を握つて苦笑を浮かべる。

「違つて、そう思いたいかな？」

やはりその言葉は重く、そして生々しい。

沈黙が降りる。周囲の話し声だけがぼんやりと二人の耳へと入ってくる。
そんな中。

「——生まれれてきても、良かったのかな」

まるで器から溢れたような言葉であつた。えつ、とその呟きを耳にしたコアラが目を見丸くする。だが驚いたのはサボ自身だ。

「いや……何でもねエ。ふと、何か。そんなことを何処かで」

靄のかかったような感覚。頭の奥に何かがある。

「もしかして記憶が戻ったの?」

コアラの問いかけ。そこには期待と少しの恐れがあつた。そんな彼女に対し、いや、とサボは首を振る。

「思い出せねエ。けど、そうだな、よくわからねエけど」

呟く。失った記憶。思い出せない過去の中でかつて自分はその言葉を聞いたのかもしれない。

もしそうであるならば、その時自分はどう思つたのだろう。その言葉を口にした人物へ、何と言つたのだろう。

ただ、言えるのは。

「自分が何のために生きてるのかとか、生まれてきたのかと……そんなことを考える前に。生まれてきたことの是非を考えるような状況なんてのは」

何のために生きるのか、生まれてきたのか。そんな目的を探すことがある意味で“人生”と呼べるものなのだろう。今のサボは過去の記憶がないが、その目的は見つけている。そのために生きている。

だが先程の言葉はそこへ至る以前のものだ。そもそもこの世に生を受けたという事

実に対する疑問である。

そんなことを考えること。考えてしまうということ。

それは、きつと。

「——辛エだろうな。想像もできねエくらいに」

そんな風に、思うのだ。



世界情勢というものに対し、モルガンズほど精通している人物はいないだろう。ただの事実として二人もそれは認識している。故にこそその言葉には重みがあるように思えた。

『これは政治的な話だ。世界政府とはいうがそれは国家の集合体であり、それぞれに思惑があれば事情もある。結局のところ自国が最優先なのさ。当たり前つちや当たり前だがな。自国よりも他国を優先するような王、或いはリーダーがその国の人間からはどう見えるかって話だ』

君主制であろうと共和制であろうと、どんな形態の国家であってもそれは同じだ。自国の民を飢えさせながら他国の民を肥えさせるような指導者というのはいつの時代も否定される。

『そういう意味で旦那方は劇薬だ。世界政府のルール上では敵であることは間違いない。だがそれを口にするにはリスクがある。旦那方は今世界中で人気者だから』

「どういふことだ？」

ルフィの問いかけ。それに対し、電伝虫の向こうでモルガンズが笑ったのがわかった。

『言葉通りさ！ 想像してみろ！ 800年だ！ “天竜人”に逆らった人間は歴史上には数多い！ だがその全てが悲惨な末路を辿った！ しかしだからこそ憧れるのさ！ 絶対に逆らってはならない存在！ 何をされようと首を垂れるしかない存在に逆らい！ そして逃げ延びようとするかつての英雄に夢を見る!! 自分たちには選べなかつたその生き方を仰ぎ見るのさ！』

地位も!! 名誉も!! 積み上げた全てを捨て去って!! 何もかもを敵に回すと知っていて!! それでも迷わずその未来を選んだ存在にな!! 泣ける話だ感動するぜ!!』

酷く楽しそうに笑うモルガンズ。ルフィが何かを言いかけるが、その前に畳み掛ける

ように彼は言葉を続ける。

『旦那方に民衆は夢を見ているのさ!! 神に逆らうその生き様に憧れるんだ!! そう憧れだ!! だからこそ熱を持つ!!』

子供を殺された親がいる!! 恋人を連れ去られた者がいる!! 親を奪われた子供がいる!! 人生を踏み躪られた奴がいる!! その誰もが抗えなかつた己を呪っている!! 恨んでいる!! 憎んでいる!! クワハハハ!! まるでこの世の地獄だなア!! だが地獄には救いがあるもんだ!! どんな国でも共通するお伽話さ!! どれだけ過酷な地獄だろうと必ず救いはあるつてなア!!』

モルガンズの言う通り、それはある種不思議な現象であつた。地獄の定義については様々であるが、一つ共通することがある。それが『救い』だ。どんな形をしたものであれ、それは必ず地獄という概念と共に語られている。

『——その“救い”がここにいる。一般市民にとつてはあまりにも眩し過ぎるだろうよ』

ほんの少し。そう、ほんの一瞬だけ。

その言葉に、モルガンズの本心が見えた気がした。

『いや羨ましいな! 世界中から好かれて万一殺されでもしたら下手人は世界の敵だ! そりや加盟国にとつちや劇薬も劇薬! しかも自分を蝕むタイプだな! いやア』

怖エ怖エ!』

だがすぐにモルガンズはいつもの調子に戻ると、そのまま彼は言葉を続けた。

『まアそういうわけだ。加盟国にしてみりや旦那方は出来れば関わりたくねエ相手なのさ。懸賞金も個人にしてみりや高額だが、国家にとつちや端金だ。その上直接の下手人になつちまつたら余計な恨みを方々から買うことになる。内からも外からも。割に合わねエ』

「でも、私たちは」

拳を握り、その言葉を紡いだのはウタだ。彼女は何かを探すように視線を彷徨わせ、次の言葉を探す。だが見つからず、口を閉じてしまった。

そんな彼女の言葉を拾うようにして言葉を紡ぐのはモルガンズだ。

『そう、"悪"だ。少なくとも世界政府はそう定義した。加盟国にも建前つてもんがある。割に合わなからうが、見つけちまつた以上対処はするだろう。そういう視点で見るとなら危険かもしれねエな』

世界政府を——“天竜人”を敵に回すとはそういうことだ。その枠組みに属している以上、内心はどうあれそのルールに従うことになる。故に加盟国は二人を見つけ次第対処しなければならぬ立場にあるのだ。

『この辺の曖昧さを早々に潰したのは流石に世界政府と海軍だな。追撃部隊を即座に組

織したおかげでそのスタンスを明確にした。まあ、その規模については言いてエことがあるが」

「……追撃部隊」

あのヴェルゴ中将率いる部隊のことだろう。彼らの存在は二人にとって自身の立場を自覚させる上で大きな意味があつた。二人はこう思つたのだ。

嗚呼、そうか。

もう海軍は——かつての同胞たちは、戦友たちは敵になつたのだ、と。

「……加盟国が敵だつていうのはわかつた」

確認の言葉をルフィは口にする。彼らは海軍という立場上、関わるのは加盟国ばかりだ。その全てが敵になるというのは少しばかり思うところがある。

だがそれを嘆くのは後だ。現実として目の前に広がっていることを、自分はあまりにも知らなさ過ぎる。それが分かる程度にはモンキー・D・ルフィも世界を見てきているのだ。

「このウォーターセブンからも出ていくべきなんだろうな」

『長居はしねエ方がいいだろうな。そこは政府の人間の出入りも多い』

「そうか、わかつた」

元々長い時間を過ごすつもりはなかつたが、そこにこうして裏付けがあるなら動く時

の気持ちも楽だ。

ルフィもウタも無自覚であるが、二人とも心のどこかで今いる場所から動かない理由を探し始めている。そこには疲労が影響しているのだろう。いつ追手が来るかわからない、気が休まらない状況で海上にいるのは非常に精神を消耗する。

そう、精神である。肉体と違い、精神の疲労というものは見え辛い。それを自覚した時には大抵が手遅れなのが最悪だ。

ルフィとウタの場合本人たちがその性格上精神的に頑強であり、そして今までどんな逆境であれど乗り越えてきたという事実がこの場合は悪い方向へと傾いていた。彼ら自身が『限界』というものを把握していないのだ。

海軍にいた頃であれば誰かが気付いたであろう。だが今の彼らには満足な協力者もなく、そして互いが互いを想うが故に無意識のうちに無理をしまっていた。

——破綻の足音は徐々に迫りつつある。

この問答でそれに気付けた者がいないのは、不運と言えるのだろうか。

『ま、加盟国としちゃ下手に動けば自分たちがリスクを全部背負うことになる。だからこそその沈黙だ』

モルガンズが最初に告げた言葉にようやくここで帰結する。どうということだ、というルフィの問いにモルガンズはどこかつまらなさそうに答えた。

『政治さ。例えばある国が、奴らは悪い奴らだ、捕まえよう』とでも言ったとする。そうなりや他の国はこう言うのさ。『素晴らしい。力をお貸しします』ってな。これは要するに『言ったからにはお前がやれ』って意味だ。国の発言つてのは重い責任がある』

言い回しは俗っぽいが、ある種これは真理である。やるべきだと言い出したならば率先してやれとなるのは目に見えており、更に言えば他の賛同した国はそんな国を形だけでも支援すれば体裁は保てる。政治というのは実に厄介だ。

そしてそんな形で矢面に立った国の利益などほとんどない。最悪の貧乏くじである。『つまりまあ、加盟国が積極的に動くことは現状ねえだろう。藪をつついて蛇が出るなんてことにならねえ限りはな』

「藪?..」

『余計なことをしなけりやいってことだよ、旦那。これは純粹なアドバイスだ』
ふう、と息を吐くモルガンズ。彼はそのまま言葉が続けた。

『ま、『世界政府』についてはこんなもんだ。だが『世界政府』なんて言ってるがこの世界にあるのはそれが全てじゃねえ。当然だがその影響の及ばねえ連中もいる』

小さく震えたのは、ウタの体だ。彼女はモルガンズが何を言おうとしているのかがわかったのだろう。

世界政府と海軍、そこに属さない勢力。思い浮かぶものはいくつもある。

『世界ってのはいつも複雑だ。そしてこの盤面で世界政府と歩調を合わせず、それでいて旦那方に関わろうとする勢力はいくつかあるが……まずはこいつだろう』

ルフィもまたウタの手を握った。背中に回している麦わら帽子が酷く重い。まるで何かを——訴えるように。

『——“赤髪のシャンクス”』

その名前は、まるで。

不吉な調べのようだった。

逃亡海兵 Water Seven ⑩

第四話 命の価値 後編

娯楽や嗜好といったものは余裕があるからこそ生まれると、そんな風に語った学者がいた。

何故かその言葉だけを覚えているのだが、その学者が誰であったのか、どこで聞いたのかは思い出せない。

ただ、このウォーターセブンを見るとその言は的を得ているように思える。この場所には活気があり、余裕があり、文化があり、そして娯楽と嗜好品が溢れていた。

配属先や任務の内容によっても異なるが、海兵というのは総じて多くの国に関わることになる立場だ。特に階級の低い頃は様々な場所に派遣されるし、その先で結果として多くの経験を積むことになる。

それはここにいるオリンもイスカも変わらないことであった。片や『新時代の英雄』と謳われた海兵二人にとって最初の部下とでもいえるべき人物であり、片や若くして海

軍將校になり部隊を率い、今や「火拳」の名を持つ海賊と幾度となくやり合った人物である。必然、多くの国を見ることになった。

百聞は一見に如かず——それはオリンのまだ若い人生において確信を持つて語れることである。そして実際に目にするこの島は今まで訪れた場所と比べても豊かであるように思えた。

……色々あつてついでにきた少女が、思わず目移りしてしまいうくらいに。

「ありがとうおじさん！」

人通りも増え、多くの人が行き交うようになつた。そうなるとその人々を相手に商売をしようとする者も増えてくる。この街は「海列車」の影響もあつて観光客も多く、それらを相手にした店も少なくない。

オリンとイスカは任務でウオーターセブンを訪れているのだが、隠れてついでにきたシヤオとビリーは違う。彼らは半ばというか九割くらいは観光気分であつた。

元々メルヴィユという島とマリンフォードしか知らない少女と鳥だ。目に入るもの全てが珍しいのか、あちこちに視線を送っていた。その中で見つけたのが『水水あめ』である。ヤガラブルからビリーと共に飛び出した彼女は突撃するように水路の端にあつたその屋台へ飛び込み、そこで見覚えのある人物と再会したのだ。

「どういたしましてできア、お嬢さん。そちらの鳥さんには……こつちの水水肉が良いかもしれないねエ」

「クオツ！」

シャオの言葉に対し、笑みと共にそう答えながら『水水肉』をビリーへ差し出す一人の男性。短い髪その男は、名をイツシヨウという。

オリンたち一行が乗っていた商船は決して小さな船ではないが、長い船旅だ。時間が過ぎれば乗客同士は自然と顔見知りになる。更に言えば船の上とは意外と退屈な時間も多し。イツシヨウはそんな中で軽く世間話をするようになった相手だ。

様々な島を渡ってきたという彼が語る他の国の話はシャオの興味を引き、そこに連なってオリンとイスカも話をする機会が多かった。船を降りる時に縁があればと言っていたのだが、まさかこんな形でこうも早く会うことになるとは。

「すみません。お代は支払います」

「あア、良いんですよお嬢さん。お気になさらず」

シャオたちに追いつき、財布を取り出そうとするオリンに対してイツシヨウはそう言つて首を左右に振つた。こうも丁寧に返されるとこれ以上食いだげるのも失礼に思える。

「すまない。好意に甘えてしまうな」

オリンの隣では恐縮するようにイスカもそう言って頭を下げた。イツシヨウが頷きを返してくる。

「良いんです、子供つてのは笑顔が一番ですよ」

邪気のない言葉と表情であった。そのまま彼は近くで美味しそうに肉を口に行っているビリーに軽く触れようとする。瞬間。

「――！」

止める暇などなかった。食事に集中していたビリーが死角から撫でられたことに反応し、その特異な体質でもある電撃を放ったのだ。

常人ならば一瞬で意識を刈り取られるような威力の電撃。だが、しかし。

「ほう……これはこれは、珍しい生き物もいたもんだ」

その電撃を全身で浴びながら、イツシヨウは微動だにしなかった。それどころか何事もなかったかのように笑っている。

「ああいや、すいやせんねエ。驚かせたようです」

「……クオ……」

ある程度コントロールできるようになったとはいえ、それでもビリーの電撃の制御は完璧ではない。こういう事故はたまにある。その度に彼は意気消沈とするのだが、今回はどこか呆然とした様子でイツシヨウを見ていた。

問答無用の強力な電撃である。不意に喰らえば屈強な海兵でもダメージを受けるし、オリンも何度か喰らって意識を飛ばしたことがあるくらいだ。だというのに、この男は。

まるで何もなかった——いや、このくらいはただじやれただけかのように。

「おじさん凄い！」

得体の知れない相手に対し、思わず生まれてしまった警戒心。おそらく隣のイスカも同じであっただろうそれをシャオのその言葉が振り払った。慌ててオリンは頭を下げる。

「申し訳ありません！ その、お身体は」

「大丈夫ですよ。こう見えて頑丈なもんでねエ」

頑丈の一言で片付けて良いのだろうか。だが本人が言う以上大丈夫なのだろう。多分。

「ビリーの電撃凄いの。空を飛んでた時に私も気を失ったことあるし」

「ちよつと待ちなさい。それは初めて聞いたんだけど」

そして疑問はシャオのそのセリフによって掻き消えた。あつ、とシャオが慌てて口を塞ぐ。そんな彼女に対し、はあ、とオリンは息を吐いた。

「あなたの安全をあなたのお母さんから任されてるんだから、無茶はしないで」

「…………ごめんなさい」

「…………クオツ」

反省する一人と一羽。どことなくシユールだった。

そんな彼女たちを横目に、すまない、とイスカがイツシヨウの方へと向き直る。

「体は本当に大丈夫か？」

「ええ、お気遣いなく」

気を遣わせないようにという配慮だろう。力瘤を作るようなポーズを見せるイツシヨウ。その動きからは確かに何の異常も見られない。

それはそれでどうなのだとオリンもイスカも思うのだが、詮索するようなことではないのも確かである。だがどうしても態度に出てしまったのだろう。ああ、とイツシヨウが朗らかに笑う。

「こんなご時世です。自分の身くらい自分で守れねエようでは、他の島にも満足には行けねエでしょう？」

「それは…………」

否定しようとしたイスカはしかし、そこから先の言葉を紡げなかった。彼女も理解しているのだ。この“大海賊時代”とも呼ばれる時代、海という領域の危険度は非常に高い。ただでさえ自然という敵と戦うのに、海賊を筆頭とした無法者まで蔓延っているの

だからその危険度は凄まじい。

彼の“海賊王”の処刑から二十年近い時間が過ぎたというのに、未だ状況は変わらな
い。むしろ悪化しているかのようにはさ感じている者も多いくらいだ。海軍も場当た
りの対応以上のことはできず、現状維持が精一杯というのが現実である。

——だが、それでも希望はあったのだ。

誰もがあの日にこの時代の終焉、その希望を見た。“大海賊時代”が始まってから生
まれた二人の“英雄”に夢を見たのだ。きつと彼らがこの時代の先にある“新時代”
を見せてくれるのだと。そのために戦うのだと。戦うことが——できるのだと。

（海軍を去った人達を、私は否定できない）

言葉を詰まらせてしまったイスカの背を見つめるオリンもまた言葉がない。あの時、
あの戦場にいたオリン自身があの二人に希望を抱いたのだ。最も近くにいたからこそ、
その姿はあまりにも眩しく見えた。

ある種の崇拜と、そう言ってもいいのかもしれない。

あの“英雄”たちと共に戦えるならば、どんな地獄だろうと共に征くと。その果てに
きつと“新時代”という“平和”が——あの人の掲げた“正義”があると、そう思った
のだから。

故にこそあの事件が起こり、全てが反転した時に失望した者たちを責めることはでき

ない。この世界の仕組み——“世界政府”と“天竜人”に対して絶望するにはあまりにも十分過ぎる理由だったのだから。

それでもオリンやイスカは海軍に残ることを選択した。イスカの理由はわからない。だがオリンは——

「——まあ、自分の身を自分で守ればいい程度で済んでるのは皆さんのお陰です」

小さな笑みと共にイツシヨウが告げた言葉に、オリンもイスカも目を見開いた。そんな自分たちに気付いているのかいないのか、彼は光を失った瞳を道ゆく人々へと向けて言葉を紡ぐ。

「人間つてのは弱エもんだ。自分の身を守るだけで精一杯な状態だと、隣にいる誰かに目を向けることなんざできやしねエんです。しかし、少なくともこの島はそうじゃねエでしょう？ これは間違いなく皆さんが作ったもんだ」

イツシヨウは言う。この島の活気は、海軍という存在が作ったものであるのだと。

「この時代に隣人を気遣えるだけの余裕を持てる——それは何よりも得難い成果だ。そしてそれを当たり前と思える国があるというのは素晴らしい。全てとはいかぬエでしょう。しかし0と1は違う」

暖かなものが、胸の内から込み上げてきた。

こんな言葉をまさか、こんなところで貰うことができるとは。

「色々と言われているているんでしようがねエ……ええ、私は少なくとも皆さんを尊敬し、感謝していますよ」

誇りを持つている、つもりだった。

海兵という在り方に、「正義」を掲げて戦うことに。背中に回した市民になんと言われようと、どれだけの理不尽があろうと。それでも言い続けるのだと誓ったはずだった。

だがやはり所詮は一個の人間だ。どうしたって精神も肉体も疲弊する。

しかしその疲弊も、たった一つの言葉で。

「お姉ちゃん？」

こちらを呼ぶ声。見れば、シャオが不思議そうな顔でこちらを見上げていた。オリンはしゃがみ込み、そんなシャオと視線を合わせる。そしてオリンが何かを言う前に、その少女は言葉を紡いだ。

「大丈夫？」

それは純粹な気遣いであった。だがオリンは一瞬呆気に取られてしまう。イスカもまた驚いている気配が伝わってきた。

だが同時に理解する。これこそがイツシヨウが言っていたことなのだ。

自分自身のこととで精一杯の人間に他者を気遣う余裕などない。それができる人間が

いたとしても、人はそういう存在を聖者と呼ぶ。それは即ち特別であるということの証左なのだ。

だがここにいる少女は聖者ではなく、ごく普通の幼き子供だ。そしてイツシヨウとは違い、自分の身を自分で守ることさえも難しいような存在。そんな彼女がこちらを氣遣う言葉を口にした。それが意味することは一つしかない。

「うん、大丈夫。ありがとう」

その頭を軽く撫でる。シャオが笑った。

この笑顔がここにあるということ。それがきつと海軍の成果の一つなのだろうと、そう思った。

「優しいお嬢さんだ」

イツシヨウが立ち上がる。彼はもう一度ビリーを軽く撫でると、こちらへ一礼した。

「しばらくここには滞在するつもりです。また会うこともありません」

「バイバイおじさん！」

「クオツ！」

シャオとビリーが元気よく片手と片翼を上げる。それに対し、イツシヨウもまた片手を上げた。

そうして立ち去って行こうとするイツシヨウ。そんな彼に対し、イスカが反射的に言

葉を紡ぐ。

「——ありがとう」

その時の背中はどこか頼りないように見えた。毅然とした態度を保ち、海兵として模範となるような振る舞いをする普段の彼女からは想像できないような弱いもの。

「これは妙なことを」

そんな彼女に気付いているのか、いないのか。

イツシヨウはただ、当たり前のように言葉を紡ぐ。

「礼を言うのはこっちだ」

そして彼は立ち去って行く。その姿を見送ると、ふう、と何かを切り替えるようにイスカが大きく息を吐いた。

「私たちも行こう。まだ時間に余裕はあると思うが」

「はい。人通りも多くなつて来ましたし、混み合わないうちに」

「どこに行くの？」

イスカとオリンの互いの認識確認の言葉に対し、シャオが首を傾げながら問いかけてくる。そういえば、とイスカが腕を組みながら言葉を紡いだ。

「言っていないかったか。私たちのお仕事だ」

「お仕事？」

「ああ。正確にはオリン大尉の任務だが」

イスカがオリンの名前を出したことで、シャオがオリンの方へと視線を向ける。オリンが頷きを返した。

「この市長さんに一つお願いをしに行くのよ」

「お願い？」

「そう。——私たち海軍がここに駐屯することを、お願いするの」

お願いというが、これは事実上有無を言わせぬ決定に近いということを知っている。だが彼女は海兵であり軍人だ。上の命令には従わなければならない。

ただこの案についてはオリン自身も納得の部分がある。これから先、更に荒れていく世界を前にして海軍が取れる手段の一つであるのだから。

（守るために）

そして今、漠然とした理由に輪郭ができたような気がする。それはきつと、イツシヨウの——彼のくれた言葉のおかげだ。

——隣人を気遣える余裕を。

それを持つていてくれているこのウォーターセブンという場所を守るために。

日常とは変化のないものだという。だがそれは数多の努力と献身によってようやく保たれるものだ。

そしてその努力と献身をするのが海軍という存在であり、それを期待されている。ならば、きつと。

それを為すことが己の役目であるのだろうか。

あの人たちの「正義」を守ることなのだろうか。

そんな風に、思うのだ。



ある意味、『海賊』という存在は今の時代を象徴するものであるだろう。その海賊たちの王と呼ばれた男の最期の言葉、その宣言が今の時代を創り上げたのだから。

この世界に存在する不幸、その全てが海賊によるものであるとは言わない。しかし「悪」といえば海賊であるし、「脅威」といえば海賊であると多くのか弱き市民は思うだろう。

そこには男女も貧富も年齢さえも関係ない。あえて言うならば運だろうか。その存在に襲われる可能性という「恐怖」を罪なき人々は常に抱えている。

だが海賊と一口に言っても様々だ。その勢力の大きさも在り方も一言で定義することは難しい。彼らを定義する上で共通するのは『無法者』というその一点のみであろう。彼らはこの世界の秩序たる世界政府のルールに従わない存在であるのだから。

そしてその海賊の中でも一線を画する存在がある。俗に『四皇』と呼ばれている海賊たちだ。

——『白ひげ』、『赤髪』、『百獣』、『ビッグ・マム』。

偉大なる航路後半の海、俗に『新世界』と呼ばれるその海に皇帝の如く君臨するその存在は最早ただの無法者とは呼べぬほどに強大だ。何故なら彼らの縄張りにおいては彼らこそが『法』であり、それは即ちそれを矯正できるだけの力を持つということであるが故に。

そして何の因果なのだろうか。その一角たる『赤髪』は海軍の『新時代の英雄』の父である。

ウタとシャンクス。決して短くはない時間を親子として過ごした二人はしかし、とある日から決定的な断絶を迎えた。それだけならばそれでもいい。

未練はあれど、想いはあれど。最早互いの道が交わることはないのだと、わかり合うことなどないと思っていたのだから。

(どっしりして)

あの日、追撃部隊を名乗ったヴェルゴ中將から渡された新聞に書かれていたことを思い出す。

——「歌姫」は「赤髪」の娘である。

言つてしまえばただの事実。だがその事実が彼女の積み上げてきたものを奪うことになる。

海軍で過ごしてきた日々は。「歌姫」と呼ばれ、戦い抜いてきた日々は。

置き去りにしたはずの過去に、こうも容易く否定される程度のものでしかなかったのだと。

そう、受け入れるしかなかった。

今やウタは「赤髪の娘」であり、ルフイは「世界最悪の犯罪者の息子」だ。今や彼らの存在には必ずその枕詞がつくようになってしまった。

無論、個人としての彼らを見てくれる者はいる。部下であつた彼がそうであつたように。

だが一つ前に訪れた国のように今の彼らをウタとルフイというただの人間として見るのではない場所の方が多いのだろう。それを悪だと断ずるつもりはない。彼らとて必死なのだ。個人としての二人を知らない以上、その枕詞に重きを置くのは当たり前のことである。

そして世界には二人の人格を知らぬ者の方が多いのだ。それは即ち、二人を見る者はそのほとんどがその名の前に付けられた枕詞にまず目を向けるということである。

「——」
自分の手を握ってくれているルフィの手に、もう片方の手を重ねる。まるで纏るようにしてウタはその手を包み込んだ。

——遠く、喧騒の声が聞こえる。

中身はわからない。ただこの島には人の営みがあり、活気がある。ある種の平和がここにはあるのだ。

しかし今の自分たちはそこに混ざることにはできない。仮面を着け、正体を隠し、人目を避けるようにしてでしか街を歩くことさえできないのだ。

世界に人は溢れていて、そこには笑顔も喜びもあるというのに。

——その全てから、置き去りにされているかのようにだった。

「シヤンクスか」

沈んでいく意識を引き上げたのは、ルフィのその一言だった。こちらの手を優しく握り返す彼は、仮面の奥から真っ直ぐに電伝虫を見据えている。

その言葉に込められた感情は、どんなものであったのだろう。

『ああ、そうだ。今の世界情勢を語る上で海賊の存在は無視できねエ』

モルガンズの口調は変わらない。だが音に親しいウタにはその微妙な変化がわかった。

少しだけその声のテンションが上がっている。おそらくここからが彼にとつての本題なのだろう。

『他の勢力として “革命軍” だの非加盟国だのもあるが、前者は理由がはつきりして、し後は纏めて語ることもなんぞ不可能だ。比較的安定してる加盟国でさえ一括りにできねエ以上、非加盟国なんぞ論じるだけ無駄だ。ありきたりな言葉だが、場合によりけりって奴だな』

つまらなさそうに言い切るモルガンズ。彼は話を戻そう、と言葉を紡いだ。

『ご婦人の出自については長らく詳細が不明だった。ウチもそうだが世界中の新聞社が探ったつてのに何も出てこねエ。何かあるのかもしれないねエし、逆に何も無いから出てこねエのか。そうして時間ばかりが過ぎてつたつてのが実情だ。出費に対して成果が出ねエつてのは中々堪えたがなア』

「……そんなことをしてたのか」

『そりやおれたちはジャーナリストだからな。 “正義の味方” である旦那方とは違う』

クワハハハ、と笑うモルガンズ。そんな彼の言葉を聞くと、こういうところだ、とウタは思う。この男がどうにも信頼できないその理由。根本的な部分でその考え方が違

うのだ。

だがそれを形容する言葉を見つけるには、ウタもルフィも若過ぎた。

『まあ、世界政府としてもこれは絶対に隠したいことだったんだろうさ。ようやく公表できる下地が整ったところでこの事件ってのはまあ、間が悪いが』

その公表をした男が何を言うか——一連の情報が世界に撒かれた経緯を知る者ならそう叫んだだろうが、残念ながら二人はそれを知らない。

『さて少々脱線したが、この情報が世界に届いたその瞬間に真つ先に動いたのが“赤髪”だ。これは流れた情報が真実であることを“赤髪”が証明した形になる。情報が嘘だつてんなら動く理由がねエからな。それこそ“何を馬鹿なことを”の一言で終わりで。』

——だが、そうはならなかった。世界は“赤髪”の娘であることを確信したんだ』

彼の“赤髪”の動きこそが現在の各勢力の動きを決定付けた要因だ。もし彼が動かなかった場合、ウタの素性については誤情報と世間では判断された可能性が高い。海賊嫌いを自称し、実際に海賊相手に高い成果を挙げている人物の父親が“四皇”の一角であるなど信じる方が無茶だ。

そうなっていた場合、主にルフィが各勢力から狙われるようになるのだろうが彼と繋がっているのは“革命軍”だ。海賊たちとは本来関係のない勢力であるため、海賊たち

は特に反応を示さない可能性が高い。かつて二人にやられた者たちがこれを好機として復讐に動く可能性はあつたが、それでも「四皇」の勢力が動くなどということにはならなかつただろう。

『結局のところ「天竜人」を海兵がぶん殴つたのは大事件だが内輪揉めだ。その混乱した隙をつくことはあるだろうが、わざわざ旦那方を狙う意味もねえ。「革命軍」相手に喧嘩売つたところで海賊に利益なんざねえからな』

海賊とは無法者であるが災害ではない。彼らには彼らなりの損得勘定がある。それを考えた時、確かにわざわざ「革命軍」に喧嘩を売る理由はないのだ。

『だが事を起こしたのは「赤髪の娘」であり、そして「赤髪」がその身柄を押さえようと動き出したという事実が生まれれば話は変わる。単刀直入に言おう。——「赤髪の娘」を手に入れれば、「四皇」と交渉のテーブルに立てるのさ!』

ウタの体が震えた。どうして、とその口から言葉が溢れる。

自分を捨てた人。置いて行つた人。憎悪さえ抱いた人なのに。

見えない手が、背後から己を掴んでいる。

それは小さな手。まだあの裏切りを知らぬ頃の自分自身の手だ。

「またね、私」

嗚呼、そうか。

あれは——こういう意味だったのか。

『敵対する他の“四皇”にしてみりや大チャンスだ！ 人間一人捕まえれば有利に立てる！ 海賊つてのは無法者だ！ 今更それを卑怯だなんだと言う奴はいねえだろう！』

モルガンズはその立場上、多くの海賊と言葉を交わす機会がある。何なら“ビッグ・マム”のお茶会にゲストとして呼ばれるくらいだ。

そんな風にも実際の姿を知ること、彼の言葉には実感がこもっている。

『勿論、無法者といつても何でもしていいわけじゃアねエ。法とは奴ら自身であり、ルールとは奴らそのものだ。“四皇”つてのはそういう存在だが、だからこそ自ら定めたルールだけは絶対に守るのさ。だが敵相手なら別。わかりやすい話だ』

伊達や酔狂で“皇”などと呼ばれるわけではない。その中身の是非はともかく、“四皇”の領域内では彼らが定めたルールがあり法があるのだから。それを守り、守らせる力があるからこそ“皇”である。

しかしその領域外となる敵なら話は別。建前上のルールはあれど、根本的にはルール無用だ。

『狙われる理由はわかったはずだ。おれ個人としては他はともかく“白ひげ”が動いてるつてのがイマイチ腹落ちしてねえんだが、何か思惑があるんだろう。どこかで“白ひげ”と“赤髪”の利害がぶつかりでもしたか？』

「……『白ひげ』」

ポツリとルフィが呟く。その名を聞いてウタもまたとある人物のことを思い出した。

——ポートガス・D・エース。

二人にとつての義兄であり、家族であり。間違ひなく信頼できる人。

彼が動いていると思うのは、身勝手だろうか。

『ま、それはいい。問題は『赤髪』だ。世間の見方としてはシンプルに娘の保護を目的にしてるってのが大方の見方だな』

「……今更、何を」

思わず呟いた言葉。モルガンズの笑い声が響く。

『クワハハハ！ ごもつともだなご婦人！ だがおれはここにもう一つの可能性を見たい！』

「もう一つ？」

『ああそうだ！ もしかしたら程度だったが、ご婦人の反応からすればありえるかもしれないねエ！』

ドクン、と。心臓が一度、大きく跳ねた。

まるでそれは、警告のよう。

『そう、今更！ 正しく今更だ！ 何故動いたのか！ 何故今まで放置していたのか！

自分の娘が海兵になつてゐるなんざ「赤髪」にしてみりや傘下への裏切りだつてのに
！」

制止の言葉は紡げなかつた。ただ、モルガンズの言葉を待つてゐる自分がいた。

『元海兵の「天竜人」に逆らつた娘なんざ己にとつてどうしようもなく不利になる存在だ！ だが「赤髪」は仁義を通す男！ だからこそ娘を守るためと誰もが考えたが――

――果たして誰が！ それを「赤髪」から聞いたつてんだ!? ああ、そうだ！』

そしてモルガンズは口にする。

その、あまりにも残酷な可能性を。

『――自分にとつて不利になる存在、娘という枷を外す。それが「赤髪」の目的だとしてらう？』

僅かさえも、脳裏を過ぎることのなかつた事を。

嗚呼、でも、そうか。

どうして、考えなかつたのだろう。

――私は、あの人に捨てられたのに。



空気が酷く重い。カタカタと、小さく震えているのはウタだ。

——「赤髪のシャンクス」の目的は、ウタの抹殺。

己にとつて枷となるその存在を排除することだとモルガンズは語った。それはウタにとつてはあまりにも重く、残酷な言葉だ。

彼女の苦しみを誰よりも知っているのはきつと、その隣にいる青年で。

だからこそ、彼は——

『リスクになるんなら切り捨てるつてのは当たり前だ。『四皇』つてのは世界政府の秩序の外にいるが、逆に自分たちで秩序を保ち、作る存在でもある。非情な判断も——』
「——するわけねエだろ!!」

モルガンズの言葉を遮り、叫んだのはルフィだった。彼はウタの手を握る自分自身の手に力を込め、まるで怒鳴るように言葉を紡ぐ。

「シャンクスがそんなことするわけねエ!!」

数秒、沈黙が流れた。モルガンズも電話の向こうで沈黙している。

「ルフィ……?」

思わずといった調子で問いかけてきたのはウタだ。ルフィは一度大きく震わせ、い

や、と首を振る。

「……………」

そして何かを言おうとして、ルフィは何も言えなかった。だが確信があるし信頼がある。シャンクスがそんな事をするはずがないと。

だがそれを上手く言葉にする術を持っていなかった。故に無言でウタの手を握り返す。

『ふーむ……何かを知ってるのか、旦那？』

「知らねエ」

『——今はそういうことにしておこうか。十分だ』

その言葉の裏にあるものについてはルフィにも察しがついた。これはつまりこういうことだ。

——「わかった、勝手に調べる」。

それをわざわざ口にしないのは配慮か、それとも言質を取らせないためか。この土俵で戦うにはあまりにもルフィは分が悪かった。

『ま、おれも旦那方を怒らせてエわけじゃねエ。さっきのもそういう可能性があるってものに過ぎねエのさ』

どこまで本気で言っているのかは不明だが、とりあえず今は受け入れるしかないだろ

う。そこを突いても意味がないのはルフィもわかる。

『だがな、旦那。想定つてのは大事だ。起きた事象から可能性を考え、或いは起きる前に想定するのもおれたちの本分だが、それは本来誰だつてそうなのさ。特に旦那方は立場が立場だ。考え得る全てを想定しておいた方がいい』

「……まあ、わかつた」

頷く。モルガンズの言うことにも一理があるように思えたのだ。そう思わされているといっただけなのかもしれないが。

『今わかつてるのは“赤髪”が動き、その結果として諸勢力が動き出したつて事実だけだ。その裏側の思惑は推測に過ぎねえ。それは他の連中についてもだ。“革命軍”なんかはわざわざ口にする必要もねえくらいわかりやすい理由で動いてるとおれは踏んでるが、もしかしたら裏があるかもしれないねえからな』

人の心というのは最も見ることができない場所である。故に推測するしかないし、そして同時に信じるしかない。

だがここで言うところの信じるとは信頼とは限らないのが厄介だ。

『おれからのアドバイスは一つ。——近付いてくる奴を信用しねえ方がいい。そこには必ず思惑があるが、それが旦那方のためになるかどうかは別の話だ。その思惑において優先されるのは自己の利益だからな』

「お前はどうかんだ？」

『逆に聞こうか旦那。おれに思惑がねエとでも？』

今更のことであつた。この男に思惑がないということはある得ない。今この場の長い対話も決して好意だけで行つてゐるわけではないだろう。

『とはいえ、おれの思惑なんざ可愛いもんさ。おれはただ見たいだけだ。旦那方の歩く未来を、この世界を。おれはあくまでジャーナリストだからな』

どこまで本気であるかわからない言葉を吐くモルガンズ。そのまま彼はなア、とが二人へと問いかけた。

『——これから先、どうするつもりだ？』

きつとモルガンズはそれを問うためにこの場を設けたのだろう。故にその裏にどんな思惑があるかと答えを返すことが誠意であることはわかつていた。

しかし、ルフィもウタも答えを持ち合わせていない。

これから先。この後の未来。それを想像できないのだ。

「ウタを守る」

故にこそ、ルフィはそう答えた。それが彼の誓いであつたから。

「……………」

対し、ウタは答えられなかつた。今の彼女に、答えはなかつたから。

『そいつは素晴らしい。実に結構だ』

モルガンズのその言葉に込められていたのは、満足という感情であった。ジャーナリストを名乗るこの男は、今の答えの一体何に満足したのだろうか。

『美しい話だ。そこには人を惹きつける魅力がある。だが致命的なことに気付いてねえな』

「致命的なこと？」

眉を顰めるルフィ。ああ、と応じるモルガンズの声は少しだけ低い。

『なア、旦那方。あんたたちは今世界中から耳目を集める存在だ。だからおれもこうしているし、あらゆる勢力が各々の考えで動きを見せている。その命には大いなる価値があると判断したんだ。だがな、旦那方。あんたたちに最も影響を受けたのは民衆さ。その価値を誰よりも知っているのはそいつらだ』

人の命には平等に価値があるという考えがある。しかし現実としてそれが適用される場面は少ない。価値はある、だがその値段が違うなんてことは日常茶飯事だ。

そしてルフィとウタという存在は今や世界中から注目を浴びている。それは多くの者が価値を見出したからこそだ。

価値があるからこそ世界が荒れたのか、世界が荒れたからこそ価値があるとされたのか。今やその根拠についてはどうでもいい。必要なのはその事実のみである。

『さつきも少し触れたがな。民衆つてのは力がねエからこそ誰かに願いを託し、祈り、そして耐える。そうして生きてきた連中は旦那方にも願いを、祈りを託していただろう。それが全部ひっくり返ったんだ。その絶望は計り知れねエ』

期待と憧憬。ルフィもウタも最早数え切れないほどのそれを受け続けてきた存在だ。故に論理ではなく実感としてその存在を知っている。

だが、そうだ。確かに彼らはそれを裏切った。裏切つて……しまったのだ。

そこに後悔はない。だが思うところがないわけでもないのもまた事実だ。

『その理由は美しい。だがまア、それだけといえればそれだけだ。そこに一雫の感情を抱くことはあれど、それが実を結ぶことはねエ。"神"に抗うつてことはそれだけの意味がある』

それは個人の感情によるものであり、見方によつては非常にささやかなものだ。大切な人を守りたいという、共にありたいというただそれだけの。

『だがその苦境にありながら、それでも誰かのために戦った奴らがいる。自分たちの方が助けを求めている然るべきなのに、それでも小さな声に手を差し伸べた奴らがいただ』

消えゆくはずであった灯火。世界という絶対的な存在を前にすぐにも潰えるはずであったその存在はしかし、消えるどころかその火で助けを求める者を照らしたのだ。

『その姿はあまりにも眩しいもんだらう。それは御伽話だけで許される物語だ。いや、御伽話でさえも許されねえような出来事だ。それを見せちまったんだよ。だから勘違いしちまった。自分たちにもできるんじゃないやねエかとな』

薄々気づいていたことではあった。訪れた国で見せつけられた事実なのだ。

——「麦わらのルフィ」と「歌姫」。

この世界の「神」に抗ったその存在は人々に一つの道を指し示した。示して……しまったのだ。

か弱き人々が武器を取ろうと思うその理由になつてしまふほどに。

彼らの存在は、一つの「救い」になつてしまつたのだから。

『だから誰もが武器を取り、戦う道を選ぶだらう。旦那方を理由にして。それを願ひとして。そうやって進もうとするだらう。それを身勝手と思うか？ 他人を道標にすることを？ だが人間なんてのはそんなもんだ！』

響き渡るのは「新聞王」の笑い声。まるで押し潰そうとするかのようにこちらへと降り注いでくる。

『「あの人たちのように」』

眩くようなその言葉はしかし、重く、鋭い。

『おれも、わたしも、自分も、己も!! 誰もがそうやって立ち上がるのさ!! その背中に

続こうと走り出すんだ!! こんな時代だ!! 誰もが燻るものを持っている!! そこに火をつけたのは旦那方だ!! “海賊王”はその死と共に時代を変えた!! そして今、その時代がまた変わろうとしている!! その幕を上げたのは旦那方のさ!!”

そのような意図など二人にはなかった。だが人々は受け取ってしまったのだ。“英雄”と呼ばれた男が見せた、その眩しいばかりの熱を。強さを。

——“神”に逆らつても守りたかった、その想いを。
そのあまりにも強烈な火は、自分にもできるかもしれないと人々に思わせてしまった。

『最早後戻りなんざできやしねエ!! だから見せてくれよ旦那方!! かつておれに言っただろう!』

民衆はその熱を抱えて走り出す。その果てにあるのが滅びであろうと、その熱を捨て去ってしまうよりは良いのだと、その熱と共に戦うのだと——そんな風に叫びながら。嗚呼、何と残酷な現実なのだろう。

『——“新時代”を、つてなア!!』

それは決して、望んだ未来などではなかったというのに。

最早時代は止まらない。その始まりを告げたのは、とある男の拳であったのだ。大切な人を守るためのその拳は、あまりにも多くの人々の背を押してしまった。

「――！」

激しい破砕音が響く。男の拳が電伝虫を載せたテーブルを叩き割った音だ。

「ふざけんな!!」

その叫びには怒りが込められている。だが同時に、どこかその姿は。

「そんなもんは『新時代』じゃねエ!!」

電伝虫の通話は既に途切れており、その言葉は『新聞王』へは届かない。

それはまるで、彼らの想いが世界へと届かぬ現状そのものよう。

かつての誓いが――消えていくようで。

「…………ルフィ」

立ち上がっている彼の背に、ウタが継るようにしてその手を回す。その体は震えていた。

「…………くそ…………」

その呟きもまた、弱々しい。

確かめるようにして重ねられた右手だけが、唯一の寄る辺であった。

突きつけられたのは、どうしようもない現実。

嵐の中で揺られる小舟のような二人には変えられない、この世界の正しい“今”だ。望んでなどいない。かつて守ると決めた者たちが武器を手に戦うことなど、望んだはずがなかった。

しかし“新聞王”は言ったのだ。それが現実であるのだと。

その引き金を引いたのは——お前たちだと。

だが、彼らは気付くだろうか？

世界は彼らを見て動きを決めた。ならばまた、彼らを見て動きを決める余地がある。

一度引いた引き金が原因ならば、次の引き金で変えればいいのだと。

蠢くように、唸るように動き始める時代。その中心にいる二人がかつて掲げた誓いがあつた。

もう一度、彼らはそれを掲げることができのだろうか。

そう、あの日の願いを。

——“新時代”を。

逃亡海兵Water Seven ⑪

第五話 胸の内に、宿る熱

「一つだけ言っておくが、あくまであれはうちの社長の言葉だ」

電伝虫での通話を終えた二人に対し、立ち上がりながら男は言った。彼は床に落ちた電伝虫を拾い上げ、言葉を紡ぐ。

「全てを見通せる人間などこの世に存在しない以上、あくまで社長は社長の見えているものでしか話ができない。それは誰であつても同じだ」

どこか呆れたような口調言い切る男。そのまま彼は二人の方へと分厚い封筒を差し出した。押し付けるようにしてウタへと手渡す。

「取材料だ」

「え、でも……」

「受け取っておけ。金に罪はない上に、お前たちには必要なものだ。手段を選べる状況ではないのに選ぼうとすれば、待っているのは破滅だぞ」

ルフィとウタは一度顔を見合わせる。受け取りたくはないが、お金が必要なのも事実だ。買い物一つするにも苦労がある今の状況、そもそも買い物をするための金を稼ぐ手段さえもないという現実。差し出された金に魅力を感じるのも事実だ。

手段を選べる状況ではないだろう——暗に目の前の男はそう言っていた。だがウタの手の中にあるそれを手に取り、男の方へと差し出す。

「いらねエ」

「……強情だな」

ふう、と小さく息を吐く男。ルフィが突き出した封筒を受け取り、彼は言葉を紡ぐ。「意地を張るのも結構だが、自分の立場は理解しているのか？」

「……………」

返答は無言であった。男はもう一度息を吐き、扉の方を指し示す。

「ではお別れだ。お互いに生きていたのであれば、どこかでまた会うかもしれないが」「おれたちが死ぬってことか？」

「どちらもだ。この時代、明日が絶対に来るといふ保証などない。お前たちはそれを知っているだろうか？」

海兵として最前線で戦い続けてきたのがルフィとウタという存在だ。その二人は確かに実感として今の時代の過酷さを知っている。

海賊を筆頭とした無法者たちだけではない。自然災害や戦争、病など人間にとつての脅威はこの世界に溢れている。その全てから逃れられる保証など誰にもできるものではない。

「まあ、可能性だけの話をしても意味はない。次があるなら今度は正当な形での話をさせて欲しいところだ」

「……遠慮したい、けど」

弱々しくも拒絶の言葉を告げるウタ。そんな彼女に対し、いいのか、と男は問う。

「今日は社長が好き勝手に論理をぶつけたただけだ。お前たちは何の主張もしていないし、何の論理も示していないだろう？ それでいいのか？」

「どういう意味だ」

「言葉通りの意味だ。譲れないものがあるからあの事件を引き起こし、そして今の立場にいる。そうではないのか、『麦わらのルフィ』？」

記者というにはあまりにも冷たい目をした男。射抜くようなその瞳をルフィは正面から受け止める。

「おれはウタを守りてエだけだ」

一歩前に踏み込んだルフィは、庇うようにウタをその体で覆い隠す。そんな光景をどこかつまらなさそうに見ている男は啞えた火の点いていない煙草を右手で持つと、その

手をルフィへと突きつける。

「どうやって? 向かってくる全てを殴り飛ばすのか? あの事件で『天竜人』とその護衛を殴り飛ばしたように?」

空気が変わる。

向かい合う両者の間で、見えない火花が散っているかのようであった。

「その果てに何がある? 何を求める? 社長の言う『どうするつもり』とはそういう意味だ。お前たちはこの先の未来に何を望むんだ?」

その問いに対する答えを、ルフィもウタも持つてはいなかった。当たり前だ。目の前の現実と向き合い、戦うことに必死で、それ以上のことを考えることなどできなかったのだから。

だが世界とは常に容赦がない。個人の事情を押し量つてなどくれないし、問題というのは常に畳み掛けるようにしてやってくる。今までだってそうではあったのだ。ただ、二人が中心の出来事でありながら二人の下にその話が届かなかったというだけで。

しかし今、二人は知ってしまった。今この世界で起きている現実について。自分たちが引き起こした事件がどれだけの影響を与えているのかについてを。

「どうする、って」

ウタの口から溢れる言葉も弱々しい。彼女もルフィもその本質は誠実だ。故にこそ

知ってしまった現実に対してこうも悩んでしまう。

「いつそのこと、知ったことかと叫べたならば。」

「関係ないと、知らないよ。お前たちが勝手にやったことだろうと。」

「そんな風に叫べたら、もつとずっと楽だったのかもしれない。」

「どうしたらいい、」

「だがそれは仮定とすることさえ無意味なことだ。もしそれができるのであれば、そもそも彼らは『英雄』などとは呼ばれていない。」

「か弱き人々の声を聞き、その盾となり、矛となり。或いは隣人として、友として。」

「誰かを『想う』ことができるからこそ、人は彼らを『英雄』と呼んだのだから。」

「知ったことか」

「世間では『麦わらのルフィ』とも呼ばれる男に対し、その男は——記者を名乗る男は言う。」

「『『麦わらのルフィ』。お前はあの日、拳を振るったことを後悔しているか?』
「するわけねえだろ」

「即答であった。それは絶対に変わらない真理である。モンキー・D・ルフィはあの日、拳を振るったことを後悔していない。今後もすることはないだろう。」

「その答えには迷いがなかった。ならば、と男は言う。」

「それが答えではないのか？」

あの日、拳を振るったことが全ての始まりだ。それはもう覆しようがないことである。

その始まりから多くのことが起こり、そして今に至る。だがその始まりについて後悔がないのであれば、結局は同じなのだ。

「もしも同じことが起こった時、お前は どうする？ やり方を変えるか？」

「変えねえよ」

小さく、男が笑った。

「ならば他人に何かを言えるようなことではない」

その言葉にはどこか穏やかな感情が込められているようにルフィは感じた。

早く行け、と扉を示す男。ルフィとウタは一度顔を見合わせると、そのまま部屋を出て行くこうとする。その背中に。

「ああ、一つ。これは個人的な感想だが」

こちらに背を向けたまま、男が告げた。

「“天竜人”は私も嫌いだ」

それがどういう意味を込めての言葉であったのか。

ルフィもウタも、わからなかった。

無言のまま、その男はホテルの中を歩いていった。周囲にさりげなく視線を送り、誰も見ていないのを確認する。

階段を登り、変わらず周囲の確認を怠らず。それでいて傍目からは違和感のないように。

明らかに素人の動きではなかった。だがそれを指摘できる者はこの場にはいない。故に彼は当たり前前のようにその部屋の前へと辿り着く。

「……………」

ドアノブに手をかけた瞬間、男の眉が僅かに寄った。だが何も言わぬまま、男はその扉を開けて中へと入る。

直後、よく通る声はその室内に響いた。

「無事のご帰還で何よりだな、共犯者！」

そこにいたのは文字通りの鳥人間である。コーヒーの香りと湯気を発するカップを片手に部屋の奥にある椅子に座り込んでいた。

彼の名はモルガンズ。『新聞王』とまで謳われる、世界最大の新聞紙社『世界経済新聞社』の社長だ。

「お疲れ様です」

そしてその社長の隣には年若い青年と少年の間とでもいべき若さの男がいる。ここへ来る時、新人の記者だとモルガンズから紹介された人物だ。

「ああ。……どこかのジャーナリストが煽らなければ、命の危機を感じるようなことにはならなかったはずだが」

その記者に対して頷きを返すと、男はモルガンズの方へと視線を向けた。しかし射抜くような彼の視線に対し、特に堪えた様子もなくモルガンズは肩を竦める。

「怒りつてのはそいつの本性だ。何に対して怒るのかを把握するのは記者として必須の技能だぜ？」

「ならせめて自分で目の前に立ってくれ」

「クワハハハ！ 殺されちまうだろ！」

自覚あったのかよ、という顔をする男。モルガンズは笑みを浮かべたまま、それで、と

とりあえず、この新人はある程度真つ当な感性を持つているのは喜ぶべきかと男は思う。

「社長の主義はどうでもいい」

ただまあ、新人にさえそう思わせるモルガンズはある意味正直者なのかもしれない。これもまた、『ものは言いよう』である。

話を切り替えるように言った男は、そのまま真つ直ぐにモルガンズを見つめる。

「聞きたいことがある」

「ほう、何だ？ 答えられる範囲で答えてやろう」

「随分大袈裟な表現だったが、あそこまで煽る必要はあつたのか？」

これは男にとつて純粹な疑問であつた。モルガンズが話した内容に間違いはない。確かに世界の今の流れを作つたのはあの二人だ。しかしその表現は些か過大なものであつたと男は感じている。

「最初に言つたはずだがなア……『少々の私見が入るのは仕方ねエ』ってな」

「私見か」

「そう、私見だ。おれはどこぞの“神”とやらとは違つて俯瞰的に全てが見えるわけじゃねエからなア。見えねエ部分は私見という名の想像で補うしかねエのさ」

肩を竦めるモルガンズ。わざわざ“神”という言葉をこの場で出す辺りに彼の性格

が窺える。

「あの……私見、とは？」

呆れたといった調子でため息を溢す男と、笑みを浮かべるモルガンズ。その二人に対して恐る恐るといった調子で手を挙げながらそう言葉を紡いだのは新人の記者であった。そんな彼の疑問を受け、モルガンズが男の方へと視線を送る。その目はどこか楽しそうだ。

対し、男は一度目を閉じると言葉を紡ぎ始める。

「社長の言葉は大枠では間違っていない。あの二人が引き起こした事件が今の不安定な情勢を生み出したという見方はできるからだ。だが全てあの二人が原因であると断じるのはあまりにも無茶だろう」

「ほほう、あの二人を庇うような言い回しだな？」

「客観的な事実だ。確かにあの二人は背を押しただろう。事実、実際に民衆が立ち上がった国と衝突するという状況も少なくない」

あの事件が起こってから決して長い時間が過ぎたわけではない。だが既にいくつかの国で男が言うような民衆による反乱が起き始めていた。

ただ現時点では小規模なものばかりであり、それこそ“アラバスタ王国”で起こったような大規模な内乱とはなっていない。

「そうですね？ 先輩方も何人か現地入りしていると聞いていますし……」

「我が社の社員は勇気があつて実に結構だ。誇らしいな！」

クワハハハ、と笑うモルガンズ。まあ社長自身がこうして現地に姿を現すような新聞社だ。記者も割と大概な人間が多い。

「——早過ぎる」

そしてそんなモルガンズを無視しつつ、男は言葉を紡いだ。

「突発的な暴動だというならわかる。それは感情の発露だ。だがそれは所詮暴動であり、正しく構築された国家秩序の前には容易く鎮圧されるものに過ぎない。だが、そうではないものが多過ぎる」

「ニトメニア公国、トゥーラント王国、ゼリス連合、ガリア共和国……すぐに思い浮かぶだけでもやけに大規模な衝突が起こってる場所が多いな。こりゃ暴動じゃねエ、反乱だ」

鋭い視線と共にモルガンズが言う。こうしてすぐに名前がである辺りは流石であると言えるが、同時にこうも言える。

（やはり、わかつた上で）

モルガンズがああ二人に告げた情報には偽りは無い。彼の言う私見の部分はあくまで憶測であるし、実際に起こっている動きについても嘘はないのだろう。

だが全てを話したわけでもない。つまりはそういうことだ。

「え、えつと……」

「国家というのは必ず軍隊を筆頭とした戦力を有している。それは国家の秩序を守るためのものだ。基本的に外敵に向けてその暴力は発揮されるが、場合によつては国民に対しても行使される」

その行使の仕方は国の政治体制にもよるのだが、結局のところ国家は究極まで突き詰めていけば個人の集合体だ。だが個人というのは全員が同じことを考えることができず、異なるわけでもない。どうしたつてその枠組みから外れる者が出てくる。

所謂警察というのは一番わかりやすい国民に対する力を持つ組織だろう。犯罪者という国家が定めたルールという枠組みから外れた者を逮捕し、罰を与える。それは全て秩序を守るために行うものだ。

「個人でやる犯罪つてのはまあ、どこまで行こうが個人の範疇だ。だがそれが集団になると集団を形成するだけの大義が必要になる。それこそ賃上げ要求だとかな」

経営者でもあるモルガンズにしてみればそれが一番身近なものだろう。だがそれならあくまで一時的なものであり、話し合いという席に立つ予定があつての行動だ。問題は反乱、或いは革命と呼ばれる行為である。

「そこらの人間一人が国に不平不満を漏らしたところで放つておけばいい。だがな、そ

れが集団になると厄介だ。人間つてのは環境に影響されやすい。自分と同じ意見ばかりの奴らが大勢集まると、不思議と過激な方向へ進むのさ」

「デモや抗議活動程度ならまだある話だ。だがそこに武器を持ち出すと国も黙つてはいられない。それを許してしまうと続く人間が必ず現れるからだ」

そうなればその国は内乱状態に陥つてしまう可能性が高くなる。事実、それを始まりとして国が滅ぶといったことは何度もあつた。

最近では裏で「革命軍」が手を引いている場合もあるというが、全てではないだろう。「成程……でも、あの二人がその機運を作つたということなのでは？」

「あの二人の影響が全くないとは言わない。だが、既にできていた機運がある上で最後の一押しをしたのがあの二人であり、あの事件だというのが正しい見方だろう」

「……あ、早過ぎるつていうのはそういうことですか!？」

年若い記者がそこに思い至つたらしい。年齢の割に思つたよりも頭が回る、と男は彼に対する評価を改める。

「あの二人の事件によつて世界政府、或いは自国に対して不信感なり悪意なりを持ったにしては動きが早過ぎると! そういうことですね!」

「エクセレント! いや連れてきた甲斐があつたな!」

楽しそうに両手を打ち合わせるモルガンス。鳥の姿だというのに、実に器用な仕草で

あつた。

「社長が仰つていた場所ではその規模から考えて武装した反乱、或いは革命のための組織が動いていたはず……つまり、前から準備をしていたつてことですね？」

「その通り。武器も人もいきなりある日突然生えるもんじゃねエ。反乱も革命もその始まりには綿密な計画と準備が必要なのだ」

逆に言えばそれができていない場所で起こつたものは所謂『暴動』と呼ばれるものであり、一時的なもので終わるだろう。計画性も事前準備もないため簡単に制圧されてしまふのだ。

「あれ？　でも、それだとあの二人が背中を押ししたわけではないのではないですか？　関係なく準備をしていたんですよね？」

「だから最後の一押しなのさ。面白エもんでなア、反乱も革命も冷静かつ冷徹な頭脳で事前の計画を進めなきゃならねエ。しかしそれだけで絶対に成功しねエ、なんて不思議な性質を持つてやがる」

笑みと共に言うモルガンズに対し、年若い貴社の方はいまいち得心がいつていないように首を傾げている。この辺りは若さ故か。

「反乱と革命に必要なのは熱と大義だ」

男は一言で言い切る。その目で何度も見てきたものだ。……その末路についても。

「準備は整っていたんだろう。だが、最後に必要な熱と大義が足りなかった。そこであの事件だ。連中はこう叫ぶのだろう。——あの二人に続け、武器を取って戦うのだ」

肩を竦めて言う男。その言葉はどことなく皮肉気だ。

まるで、どこかで見えたことがあるかのような。

「だから傍目から見れば背中を押したというの間違ってはいない。だが、元々準備していた奴らがこれ幸いと大義に利用したことまで責任を問うのはあまりにも非合理だ」

「それもまた私見だろう?」

ふふん、と鼻を鳴らして言うモルガンズ。彼を一瞥し、男は口に啞えた煙草を右手の指で挟む。

「とはいえ、影響を与えたのも事実だ。だがあの二人に影響を受けて初めて動き出すような奴は一部の暴動程度で終わる。そこから反乱や革命に繋がる可能性は限りなく低いだろう」

「そうなんですか? 時間をかけて準備して、ってなりそうですか」

「熱つてのは時間経過と共に消えちまうもんさ。あの二人を見て自分もと思ったところで、本気でやるなら待っているのは年単位の地道な準備期間だ。秘密裏に武器を揃え、賛同者を集め、それらの情報を秘匿する。浮ついた動機で始めたものなんざどこかで破綻するに決まってる。今まで何もしなかつた奴らが熱に浮かされて動いたところで、熱

が引いたらそのまま放り出すのがオチだ」

地道な作業を続けるというのは想像以上に体力と気力を消耗する。それが反乱や革命ともなれば尚更だ。露見すれば処刑されるのは間違いないその行動を徹底的に最後までやり遂げる——それは、鋼の意志と絶対的な理由を必要とする一つの事業である。熱に浮かされた程度の人間にやれることではない。

「事実、暴動程度の国と大規模な武力衝突が起こった国を比べればその状態が大きく違う。前者はまあ、比較的裕福なのさ。左団扇とはいかぬだろうが、毎日飯を食える程度にはやっていける国がほとんどだ。衣食住——これが揃ってる国ってことだな。こういう国は多少の揉め事はあるうと決定的なことにはならぬエ。腹が満ちてれば人間何とか耐えられるもんだからな。

だが後者は違う。そこは最早、立ち上がらぬエと死が見えてる状況だ。だからこそ耐える。立ち上がるその瞬間まで。そこには冷徹なまでの意志がある。だが、熱を殺して冷徹に準備をしただけでは立ち上がれぬエ。立ち上がるための熱がねエからだ。冷徹に、冷静に準備したからこそその後起こる事象について考えちまうのさ。ジレンマだなア」

これは古今東西変わらないことである。現状の打破のために立ち上がると言えば聞こえがいいが、それを完遂するには相応の準備が必要になる。そしてそれができるだけ

の冷静さがあるのであれば、その先に待つ現実を見てしまう。

故にこそ「革命軍」という組織があるわけではあるが……まあ、それは別の話だ。

「そこに熱を与えたのがあの二人だということですか。だから背中を押した、と」

「正確には勝手に感化されて勝手に走り出しただけだ」

呆れた口調の男。その彼の言葉に被せるように、だが、とモルガンズは言う。

「既に動き出しちまった連中は自分の大義で動いている。そいつらはもう止まらねエ。だがそこまで行き着けてねエ奴らは？ あれ熱を受けた奴らは本当に何もかもを諦めるのか？」

モルガンズの雰囲気が変わった。そこにあつたのは陽気な新聞社の社長ではなく、新聞王と呼ばれる裏社会にも名を轟かせる男の姿だ。

「奴らは待つてるのさ。だからおれは聞いたんだ。——どうするつもりだ、ってな」

あの対話におけるこの男の意図が、ここでようやく二人にもわかった。話は単純なのだ。既に動き出した者たちについて興味がないわけではないだろう。だがそれよりもっと多い、潜在的なものについてモルガンズは注目しているのだ。

革命を、反乱を起こすために立ち上がる——そこまでの熱を持ってない者たち。あの二人を見て、熱を受けた者たちを。胸の奥に燦るものを持つている者たちこそをモルガンズは見ているのだ。

「世界政府が誕生して800年。どこもかしこも怨嗟の声に満ちてやがる。世界政府は一定の秩序を保ってきたが、同時に多くの恨みを買って過ぎた。だがあの巨大な組織に対し、何かをできる奴なんざいねエ。いや、いねエはずだった」

現れたのさ、とモルガンズが語る。

「新たな可能性を見せてくれるかもしれないねエ奴らが。この時代の先へ連れて行ってくれるかもしれないねエ奴らが。ああ、そうだ。断言しよう」

笑み。壮絶なまでの喜悦をその顔に貼り付けて。

その男は、そう告げる。

「——あの二人の道行きで、世界は変わる!!」



今や世界中から注目を受ける立場になった二人。ルフィとウタ。本人たちはようやく世界の情勢について触れるに至ったが、どこまでを実感として感じているだろうか。

その道行きは最早世界へと影響を与えるほどであるというのに、しかし、二人には未だ目指す未来が見えぬままだ。

逃げて、逃げて、逃げ続けて。

果たして、どこへ行くべきなのだろうか。

「……悪い。誰に会ったかは言えねエ」

自分達を待つていてくれたザンバイに対し、ルフィは開口一番にそう告げた。これについては出てくる前にウタと話し合ったことだ。ここであったことは秘密にするべきだろうという。

「いや、それはいいですけど。大丈夫なんで？」

「……大丈夫だ」

自分でも声が入っていないことはわかったが、そう言うしかなかった。ただ話をしたただけだというのに、随分と疲労感がある。

世界の情勢、自分達の立場。そして何より。

——全ての引き金を、自分達が引いたのだと。

そう言われたことが、ずっと重くのしかかっている。

「とりあえず戻りましょう。こっちツス」

ザンバイが一方方向を指し示し、その誘導に従って二人もついていく。その背中を見た瞬間。

「近付いてくる奴を信用しねエ方がいい」

モルガンズという言葉が脳裏を過った。フランキー一家は善人というわけではないと思うが、どうしようもない悪人というわけでもないように思う。

心を許しかけていたところに対し、急なブレーキをかけられた気分だった。

「メインレースは終わってる時間なんで、アニキが今頃大勝ちしてるはず」

「もうそんな時間なのか」

こちらの雰囲気を感じてか、気を紛らわせるようにザンバイが話しかけてくれる。それに応じながら、同時に彼を——彼らを疑っている自分がいることに気付いた。

——瞬間。

ルフィも、ウタも。どうしようもない孤独感を感じてしまう。

一人ぼつちは嫌だ。それはルフィとウタに共通する『嫌いなもの』である。だからこそ海軍という場所は居心地が良かった。そこには大勢の仲間がいたからだ。

だがその全てを失ってしまった。今や二人ぼつちで逃げ続ける日々だ。匿ってくれている彼らでさえも思わず疑ってしまうほどに周囲が敵だらけなのだ。理解させられ

どうして、こうなったのだろう。

守りたかった。一緒にいたかった。

ただ、それだけだったのに――

「あ、アニキ!! どうしたんですか!？」

思考の渦からその叫び声によって強制的に引き戻される。見れば、いつの間にかカジノに戻って来ていた。どうやらそれに気付かないくらい思考に没頭していたらしい。

何かあったのか、とルフィとウタはザンバイが駆け寄った方を見る。

「……何だあれ」

思わずルフィが呟く。そこにいた……というより、あったのは三人の成人男性が膝を抱えて座り込んでいる光景だ。彼らの周囲には何やらチケットのような紙が大量にばら撒かれている。

「おお、ザンバイか……ああ、駄目だ。今週のおれはもう駄目だ」

自慢のリーゼントも萎んだように垂れ下がっているフランキー。アニキー、と周囲のフランキー一家の者たちも呼びかけている。

「読み違いやしたねエ……最後の最後、あの直線が……!」

その隣には、おそらく盲目なのだろう両目を閉じた短い黒髪の男が悔しそうに歯噛みしていた。いやもうなんというか、これ以上ないくらいに悔しそうである。

「畜生……！ 何故買わなかった……！ 買えただろうが……！」

そして盲目の男の反対側には、額にゴーグルを着けた青い作業衣の男だ。その男は何度も床を悔しそうに叩いている。

……なんとなくであるが、何があつたのかがわかつた気がする。

「どうしたんだ、フランキー？」

とはいえ、黙つて見えても仕方ない。ルフィはウタと共にどこからか取り出したギターで哀愁の漂う曲を弾き始めたフランキーへと声をかける。

「おお、お前ら。みっともねエ所を見せちまつてるなア」

フランキーがこちらを見上げる。垂れ下がったリーゼントがどことなくシユールだ。

「へへ、どうやらおれはもう駄目らしい」

「……どうしたの？」

ウタの声にも若干の呆れが混じっている。先程までの重い空気が嘘のようだった。

「……フツ」

顔を背けるフランキー。そんな彼に変わつてこちらに歩み寄つてきたスクエア・シスターズの二人が言葉を紡いだ。

「大負けだわいな」

「惨敗で無一文だわいな」

「馬鹿言うんじゃねエよ！」

モズとキウイの言葉に対して秒で反応するフランキー。そのまま床に座っていた二人の成人男性も立ち上がりながら言葉を紡ぐ。

「しかし、負けは負けだ。かくなる上は——次の勝負で取り返しやしよう」

「ああ、そうだな。今日の分全部取り返してやる」

何というか、駄目な光景を見ている気がする。色んな意味で。

「へっ、おれだけ乗り遅れるわけにもいかねエな」

そして続いて立ち上がるフランキー。並び立つ三人の男の背中を、何とも言えない表情でルフィとウタは見つめていた。

「なあ、ウタ」

「うん、ルフィ」

先程までの悩みは何一つ解決していない。だというのに。

……少しだけ、気持ちが悪くなったような気がした。

逃亡海兵 Water Seven ⑫

第六話 かつて見た、“熱狂”というもの

W7にあるカジノはスタンダードなものであるが、一つだけ特色がある。それがこの周辺に生息する生物 “ブル” によるレース—— “ヤガラブルレース” だ。

ヤガラレースやブルレースなど色々な呼ばれ方をしていてそのルールは至極単純であり、レースごとに指定されたチエックポイントを順番に通過した上でスタート地点であるカジノのレース場に戻り、ゴールするというものだ。ギャンブルとしてはどのブルが勝つかを賭けるという形になる。

この手の動物によるレースをギャンブルとすること自体は世界中で見られるものだ。単純に馬を用いた競争が最もメジャーだろうが、ウオーターセブンのようにその地域特有の生物を用いたレースも数多く見ることができている。ギャンブルとはせず、純粋なスポーツとしている国や地域も多い。

有名なのは西の海にあるとある大国で行われている “戦車レース” だろうか。車輪

のついた籠のような形をした乗り物に「騎手」と呼ばれる者が騎乗し、それを複数の馬によって引かせて競い合う。チーム戦もあれば個人戦もあるその競技はギャンブルの要素を兼ねつつスポーツとしても高い地位を得ていた。スター騎手は国民の誰もが名前を知るほどの人気者になるといえばその規模がわかるだろうか。

ウォーターセブンの「ヤガラブルレース」にはそこまでの規模はない。だが娯楽としては一定の地位を得ているし、市民からの理解もある。これについてはこのウォーターセブンという都市に活気があるということ、そして悪いイメージを持たれないようにと運営側が努力を続けてきた結果だろう。実際、スタート地点兼ゴール地点であるレース場には様々な者たちが集まっており、全体的に雰囲気明るい。

——まあ、とはいえ。

『次が本日の最終レースです!! 皆様への感謝として最終レースの払戻率は90%に設定しております!! 奮ってご参加ください!!』

「「ウォオオオオオオオオオオオツツ!!」」

ギャンブルはギャンブルであり、直接的に金が動く以上はどうしても熱が入る。あまりの熱気に気温はそこまで高くないのに汗が出そうであった。

「前に行ったところより凄エなア」

「あそこも熱気はあつたけど、もう少し上品な感じがあつたよね」

そしてその熱気についていけないルフィとウタ。二人が思い浮かべるのはかつて訪れた世界最大のカジノを有する「グラン・テゾーロ」だ。あそこもギャンブルに対する熱気が凄かったが、ここまで強くなかった気がする。とうるかここが少し怖い。

「あつちは全体的に活気はあるけどここまでじゃないし……このレースが特殊なのかも」

ウタが背後を振り返り、スタンダードな設備が整ったカジノの方を見る。そちらにも大勢の人間がおり活気もあるのだが、彼女の言う通りこちらほどの熱はない。普通といえば普通の活気なのだ。

……やはりこつちが特殊なのだろう。多分。そう思いたい。

「で、フランキー。おめエはどう見る？」

「最終レースは今日レース走って負けた奴がもう一回走るレースだ。セオリーでいくんなら早めのレースに出てた奴が疲労も抜けてるはずだがなア……」

「コースにもよるはずでしょう。最終レースはどんなコースなんです？」

そして膝を抱えていた男三人は立ち上がったと思っただけでその場に円の形になるように座り込んでいた。その中心には新聞らしきものがあり、そこに載っている情報を見ている。

「コースはスタンダードだな。第七と同じでチェックポイント二つだ。だが時間を考え

れば水路も混み始める。そこも考慮しなきゃならねエ」

「第一と第二から一頭ずつ……だが、こいつら両方とも全力で競り合って二着か。こりや疲労は抜けてねエだろ」

「ブルの様子を見て判断するのは？」

「よつぽどじゃねエ限りわからねエな。疲れてるから落ち着いてんのか、余裕があるから落ち着いてるのかもわからねエ」

真剣な表情で話し合っている三人だが、内容はギャンプルについてである。その光景を見て何とも言えない表情をするルフィとウタであったが、そんな二人が持っているチップの入った容器を見たフランキーが声を上げる。

「なんだおめエら、チップ残ってんのか」

「ん、ああ」

モルガンズとの対話のせいで使っていないなかったのだ。だがそれを言うのもと思って曖昧に頷く二人に対し、フランキーが笑みを浮かべる。

「やるじゃねエか。見たとこプラマイゼロってとこだろ？」

使っていないから当たり前であるが、確かにプラスマイナスゼロである。

「新しい子分か、フランキー？」

「ウチの客分だ。子分共が世話になったんでな。しばらくはウチにいる」

「ほー」

ゴートルを着けた青い作業衣の男が葉巻を啜えながらフランキーの言葉に頷く。そのまま彼は立ち上がって一礼した。

「おれは『ガレーラ・カンパニー』で船大工をしてるパウリーだ。よろしく頼む」
「船大工なのか」

パウリーの言葉に対し、ルファイが反応する。思い浮かぶのはここまで二人を運んできたあの小舟だ。本来長距離航海を想定していない船でここまで来たあの船はかなりのダメージを抱え込んでいる。今後のことを考えると、何とかしなければならなかった。

「ああ。もし船の相談があるなら何でも言え。請け負うぜ。——このレースの後でな」
格好いいのか悪いのか。悪い人間ではないのだろうか、どうにも決まっていない。

まあ、とはいえ挨拶をされたのならば返さなければならぬ。ルファイは反射的に言葉を返す。

「わかった。おれはル——」

「——ルーシーね。私はアト」

だが、最後まで言い切る前にウタが割って入った。ルファイもハツとなる。

ルファイとウタ。広く知られたこの名前はあまり表に出すべきではない。わかつていたはずなのに、ここの妙な空気のせいで少し警戒が薄れていた。ルファイは改めて気を引

き締め直す。

ルーシーとアト。その偽名は咄嗟に出たものなのだろう。思いつきで口にした感じが強い。

「その仮面と仮装からするに観光か？ どっかで祭をやってるって聞いたが」「えっと、まあ」

「おれは興味ねエが、まあ楽しんでいってくれ。『海列車』には乗ったか？」「いや、まだだ」

ルフィが首を横に振る。勿体ねエな、とパウリーが笑った。

「あれはウオーターセブンの誇りだ。是非乗ってくれ」

笑顔と共に語るパウリー。フランキーもそうであったが、『海列車』というのはこのウオーターセブンの住民たちにとってかなり大きな意味を持っているらしい。

「わかった」

領きを返すルフィ。その彼に何かを言いかけたパウリーだったが、レース場へ届いた放送によって掻き消される。

『レース参加のブルたちが入場します。投票締め切りは30分後です』

ワツ、と周囲が沸いた。パウリーもまた反応し、すぐさま駆けていく。

「悪いな！」

そしてフランキーともう一人、盲目の男を引き連れて入場するブルたちを見ようとする観客たちに紛れ込んでいく。随分と俊敏な動きだった。

「……やってみようかな」

熱に当てられてしまったのだろうか。ポツリとウタがそんなことを呟いた。そうだな、とルフィも頷く。

「フランキーがくれたのもあるし」

二人が持っている容器に入ったチップ。使う前にモルガンズとの対話があったせいで持て余していたのだが、折角の好意で貰ったのだ。使わないのも良くない気がする。

だが、ルールがわからない。二人して首を傾げていると、*“スクエア・シスターズ”*の二人とザンバイが歩み寄ってきた。

「あ、お二人も参加しますか?」

「うん。でもルールがわからなくて」

「簡単だわいな」

ウタの言葉に対して応じたのはモズだ。彼女は少し離れた場所にある巨大な映像電伝虫を指で示しながら言葉を紡ぐ。

「*“ヤガラブルレース”*は町中を走るレースなんだわいな。レースごとに決められたチェックポイントがあつて、そこを正しい順番で通過してここへ帰ってくる。その順番

を当てるんだわいな」

「当て方にも色々あるけど、初心者なら単純に一着になりそうなのを探すのが一番だわいな」

「ふむふむ」

頷く二人に対し、ザンバイが横手から一枚の紙を差し出してきた。そこにはいくつかの番号とブルたちの写真、おそらくそれを操る者たちの写真が載っている。

「とりあえずこれがこの後のレースに出る奴らの簡単な情報ツス。アニキたちが持った新聞とかだともっと色々情報が載ってるんスけど、見方もわからねエと思うんで」

「どこまで信用していいかもわからないからいらないわいな」

「さつきも丸呑みして完敗だわいな」

肩を竦める「スクエア・シスターズ」。そしてルフィとウタは渡された紙を見るのだが、正直よくわからない。わかるのはそれぞれの名前と番号くらいだ。

「……わからねエな」

眉を顰めるルフィ。麦わらさん、とザンバイが言葉を紡いだ。

「なら『ブル』を直接を見て決めたらどうです?」

「見れるのか?」

「さつき入場って言ってたんで出てくるはず——あ、出た」

ザンバイの指差す方向。巨大なスクリーンに電伝虫がその映像を投影した。少し画像が荒いが、そこに映っているのは順番にゲートから出てくる「ブル」たちだ。

背中の鞍に乗る者たちの誘導に従い、思い思いに「ブル」たちが泳いでいる。その動きも様々で、暴れているかのように思えるくらい元気なものあれば逆にあまり動かさずジツとしている「ブル」もいる。

「騎手の付けてるゼツケンがその番号ツス。勝ちそうなのを選んで紙に書いて出せば大丈夫ですよ」

「ふーん」

改めて画面を見るルフィ。だが画面越しであるからかイマイチピンと来ない。

「直接見た方がいいかも」

ウタも同じ考えに至ったらしい。ああ、とザンバイが頷いた。

「じゃあこつちへ。ちよつと距離ありますけど——うおつ」

そうして歩き出したザンバイが、一人の男とぶつかった。そのまま彼が尻餅をつく。

「おお、すまんのう」

ザンバイは決して貧弱な体格をしているわけではない。賞金稼ぎを副業としているだけはあり、相応の鍛え方している。

だというのに、その彼が当たり負けていた。

不意のことであつたというのもあるだろう。だがそれは相手も条件は同じ。つまりザンバイと相手では根本的な部分で肉体的な強さが違うのだ。

だが、それよりも。

「……………」

ルフィもウタも、衝撃で言葉を発することができないでいた。人間、想定外のものを目にするのと動きが止まるものである。

その人物には一つの特徴があつた。——鼻である。

そう、鼻。人体のパーツというのは千差万別だ。故に外見的特徴を有しない者など理屈場存在しない。そうでなければそもそもその人の顔を判別などできないだろう。

だが、その特徴といつても限界がある。

そして目の前の人物は、明らかにその限界を突破していた。

「——ウソップ?」

それはかつて共に戦い、道を違え、しかし妙な縁を繋ぎ続ける海賊の名前だつた。だが、しかし。

「すまんのう、よそ見しておつた」

様子がおかしい。



あまりにも長すぎる鼻。そんな特徴を持つ人物など一人しか知らない。

その青年の名はウソップ。かつてルフィとウタが訪れたとある島で暮らしていた青年であり、「勇敢なる海の戦士」になることを夢見ていた人物だ。

中々に愉快な人物であったが、同時に彼は既に「勇敢なる海の戦士」であった。「百計のクロ」という海賊の策略によって村が襲われかけたのを守りきり、そしてその全てを公表せず胸の内にしまい込んだのだ。村で暮らす者たちに無用な恐怖を与える必要はない——そう言った彼は正しく、誇り高き「勇敢なる海の戦士」であった。

当初はとある事情からウタとは衝突したのだが、実際の戦いや傷だらけになりながら全て抱え込むと決めた彼の姿を見て和解することになる。

「一緒に来いよ、ウソップ」

そんな彼をルフィが海軍に誘ったのはきつと必然だったのだろう。「勇敢なる海の戦士」——その目標は海賊ではなく、海兵であつても達成できるではないかとウタも説得した。

「誘ってくれんのは嬉しいけどよ。おれはやっぱ海賊になりてエんだ」

だが、彼はそう言つて手を取らなかつた。『赤髪海賊団』の狙撃手の息子。海賊を父に持つ男のスタンスはウタとは真逆であつたのだ。

海賊の父を恨み、憎んでいた彼女と。

海賊の父を尊敬し、憧れていた彼。

一度は交わつたその道が分かれたのはきつと、運命でもあつたのだろう。だが一度繫いだ縁というのは中々切れないものらしい。幾度となく彼らは顔を合わせることになつた。

その彼の一番の特徴はその長い鼻である。一目見たら絶対に忘れないその鼻を持つ人間など二人もいないと思つたが――

「痛エなコラー！」

「だから謝つとるじやろう」

「落ち着くわいな」

「余所見してたのはお互い様だわいな」

ザンバイの抗議に対し、その男は冷静に応じている。その口調でようやくルフイとウタも目の前の男がウソップではないことに気付いた。

「ね、ルフ……ルーシー。鼻が四角い」

「本当だ。ウソツプじゃねエな」

はー、と何故か感心したような雰囲気の二人。つい先程までの重い空気が一連の流れで消えてしまっているのはいいことなのかどうなのか。

そしてそんな二人に気付いた男がこちらに歩み寄ってくる。

「そのウソツプという者は知らんが、ワシは『ガレーラ・カンパニー』で船大工をしておるカクじゃ」

見た目の年齢は若いのに、その口調は歳を重ねた老人のようだ。その物腰からもあの青年ではないことがよくわかる。

いやしかし本当に鼻が……と二人の視線がカクと名乗った男に向く。仮面のおかげでその視線には気付かれていないのは幸いなだろう。きつと。

「どうもフランキー一家とは毛色が違うようじゃのう」

「ウチの客分だわいな」

「ほう。それは珍しい」

キウイの言葉に頷くカク。その彼に対し、ルファイが言葉を紡いだ。

「お前おっさんか？」

「ワシヤ23じゃ」

「話し方がお爺さんみたい」

「ワハハハ、よう言われるわい」

笑い声を上げるカク。その彼は丁度ええわい、と言葉を紡いだ。

「お前たちがおるということはフランキーもおるじやろう？ どこにおるんじや？」

「アニキに何か用か？」

「お前らが持つてきた資材の買取査定が終わったので。人探しのついでに寄るつもりじゃったが、手間が省けたわい」

言うど、カクは一枚の紙を取り出した。それを見たザンバイがあー、と納得する。ルフィたちは知らないが、それはフランキー一家が解体した船の資材を「ガレーラ・カンパニー」が買取査定した書類だ。後はここにサインすれば契約が成立する。

「人探し？」

「今日は休みなんじやが、ちと所要ができてな。パウリーの奴ならここにおると思っただんじやが」

「パウリーって、さっきのゴージュルの人？」

思わずウタが声を上げる。おお、とカクが笑みを浮かべた。

「やはりここにおったか。どこにおるかはおはわかるか？」

「あっちの方だわいな」

「すまんのう」

「おれらも行く。アニキもいるだろうし」

そして大人数での移動を開始する。周囲には大勢の人間がおり、その中を縫うようにして進んでいく。

「客分とは何があつたんじゃ？」

「お二人はおれたちを海王類から助けてくれたんだよ」

「それはまた凄いのう。ここへは観光で？」

「まあ……一応」

「大歓迎と言いたいところじゃが、少しタイムリングが悪いのう。今は『アクア・ラグナ』が来る時期じゃ」

「『アクア・ラグナ』？」

聞き慣れない単語を耳にしたウタが聞き返す。ああ、とカクが頷いたところで目的の人物たちが見えてきた。

「お、カクじゃねエか」

あちらもこちらに気付いたらしい。パウリーがカクの姿を見て反応する。

「なんだよ、お前もやりにきたのか？」

「ワシはギャンブルはせん。お前を探しに来たんじゃ」

「おれを？ 何かトラブルか？」

「いやそうではない。アイスバーグさんが呼んでおつてな。届け物ついでに探しに来た」

「アイスバーグさんが？」

パウリーが首を傾げる。まあ、とカクが肩を竦めた。

「そこまで急いではおらんようじゃ。今日中に顔を出すように伝えてくれと申うておつたぞ」

「わかつた。このレースが終わつたら向かう」

「相変わらず好きじゃのう」

「勝つたら奢つてやるよ」

「勝てたらの」

職場の同僚らしい気安い会話。その隣ではフランキーがザンバイたちに声をかけている。

「おお、ザンバイ。やはり今週のおれは駄目なようだ」

「えエ!? どうしたんですかアニキ！」

「——金がねエ。全部消えた」

「えー……」

流石のザンバイも反応に困っていた。なんとというか大分フランキーという男のこと

がわかつてきた気がすると、そんなことを二人は思っていたりする。「これ使うか、フランキー」

そんなフランキーの姿を見て、自分が持つているチップを手渡そうとするルフィ。元々彼から貰ったものである。故にルフィとしても自然な流れであつたのだが、フランキーは馬鹿野郎、とその右掌を前に出して首を振る。

「そいつはお前らに渡したもんだ。お前らが使え」

「でも、お金ないって」

「そりやおれの事情だ。客分に気を使わせるわけにもいかねエだろう」

ルフィとウタが顔を見合わせる。妙なところで筋を通そうとする男だ。だから慕われているのかもしれないが。

「だが現実どうするんです？ 金がねえんじや勝負することすらできやしねエでしょう」

そう言ったのは盲目の男だ。フランキーが腕を組み、うーんと唸る。

「どうするかねエ……」

「言つとくがおれは貸さねエぞフランキー」

パウリーが釘を刺しにかかる。対し、盲目の男が自身を指差しながらフランキーに提案した。

「お貸ししやしようか？　このルールを教えてもらった恩もあるんで」

「馬鹿！　水臭エこと言うんじゃねエよ。おれはダチからは金を借りねエのさ」

「ダチ、ですかい」

「おうよ。共に大勝負を潜り抜けた仲だろうが」

親指を立てて言うフランキー。その結果が先ほどの体育座りであると考えると何とも言えない。

「嬉しい話ですねエ……。この年で新しい友人ができるとは」

笑みを浮かべる盲目の男性。ある意味いい話ではあるのだが、その友情がギャンブルによつて構築されたと考えるところがある。

「それなら丁度良かったかのう。ほれ」

「あん？　なんだこれ？」

「持ち込んできた資材の査定額じゃ。サインをしてくれればええわい」

「てことは金か！　助かったぜガレーラ！」

受け取った査定用紙を見て声を上げるフランキー。そのまま彼は近くにいたスタッフに声をかける。

「おいこれをチップに変えてくれ！」

「え、いえフランキー様。当店は基本的に現金を……」

ギヤーギヤーと騒ぎ始めるフランキー。それを横目にルフィとウタはレース場へと視線を向けた。

スタートラインとされる場所には一列のゲートが並んでおり、その奥で“ブル”たちが思い思いに過ごしていた。動き回るもの、微動だにしないもの、一定のリズムで緩やかに動くもの。

周囲が随分騒がしいのだが、“ブル”たちも落ち着いたものである。慣れているものもあるし、そもそも人間の生活に密接した生物であることも大きいのだろう。

「色々いるなア」

その光景を見ながらポツリと呟くのはルフィだ。彼は常に展開している“見聞色の覇気”によって常に周囲の感情を把握している。思考が読めるわけではないが、その方向性についてなんとなくであるが把握できるのだ。

この場所はあちこちから熱を持った感情が押し寄せてくる。まるで津波のようだ。高まり、弾け、引き、そして再び高まる。そこには様々な感情が込められているがしかし、敵意は感じない。

この感覚にルフィは覚えがあった。人々の熱狂。多くの感情の発露。叩きつけるような感情の本流。それをルフィは何度も見てきた。

「本当だね」

この隣にいる「歌姫」のライブで。いや、少し違う。彼女が作っていた熱はもつと凄かった。何度も、何度も。様々な場所で見続けてきたのだ。

歌う、彼女の姿が好きだった。

彼女の歌が、大切だった。

その在り方を、守ると決めた。

——何が、あろうとも。

例え自分が、どうなろうとも。

「……………」

ほとんど衝動的な行動だった。ルフィがウタの頭を軽く撫でる。仮装のフード越しであったが、そこに確かに彼女がいることがわかった。

「えっ、何?」

困惑する様子の子のウタ。対し、ルフィは手を離さないまま応じる。

「なんでもねエ」

嗚呼、けれど。

本当に、何度目なのだろうか。

かつて持っていたもの。目にしていたもの。そこにあったものを。

失ったのだと。失ってしまったのだと——そう、突きつけられるのは。

これが、世界に抗うということ。

これが、"神"に逆らうということ。

あまりにも残酷で、どうしようもない現実。

どうにかしたいと思つても、拳ではどうにもできない。そういう問題ではないのだ。それが現実であり、覆せない事実だと。ただ、それだけのことなのに。

——その事実が、何よりも重かつた。



地形を頭に入れるというのは己の役割であると同時に彼女の内に残る恩人の言葉からくるものであつた。

大海賊"金獅子"が孫娘と呼んだ彼女に告げた言葉。

——"世界を見て回れ"。

その真意はわからない。だが愚直にも彼女はそれを実行しようとしていた。訪れた場所を隅々まで見て周り、地形を頭に叩き込む。"革命軍"は世界政府と敵対関係にあ

る組織だ。故に基本的な行動は隠密行動になるため、彼女の行動は決して無駄ではない。

これが「金獅子」の望んだ形であるかどうかというときと違う。だが彼女にはこういうやり方しか思いつかなかつた。

「……あれは」

ただ、一つわかっていることがある。生の情報を得る最良の方法はいつだって現場に行くことだ。実際にその目で見たものというのは非常に重要な情報になる。

そして今、彼女はその光景を目撃していた。

「あの海兵は……」

あのメルヴィユでの戦いで、自分に銃弾を叩き込んだ海兵。あれが戦争であつた以上、特に思うところはない。傷も今更のことだ。

だから個人的な感情としてではなく、何故あの海兵がここにいるのかという方が重要だ。

そう——「ガレーラ・カンパニー」の中核、一番ドツクの正面に。

しかも彼女がもう一人の海兵と共に向かい合っている相手はこのウォーターセブンの市長であり、「ガレーラ・カンパニー」の社長だ。

「……………」

雰囲気から察するに、どこことなく物々しい。故に彼女はフードを被り直し、不審がられないように通りすがりを装ってゆつくりと彼らの側へと歩み寄る。

自分たちに何も関係がないならそれでいい。だがこのウォーターセブンは普段海軍が立ち寄ることはあってもそれは補給のためだけだ。それがわざわざ都市の責任者と話をしているという事実を無視してしまうのはよくない気がしたのだ。

一番ドツクというのは常に人だかりができてくるような場所だ。故に紛れ込むのは難しくくない。大勢の職人が何やら奥で騒いでいたが、逆に紛れ込む上では注意が逸れてありがたい話であった。

そうして近付いたイルは何事かを話している彼らの話し声に聞き耳を立てる。その時、耳に飛び込んできたのは二人のこんな会話であった。

「一応確認しよう。認識の違いがあつちやならねエからな」

「はい。私が特使として受けた任務は一点のみです」

ウォーターセブン市長、アイスバーグ。その問いに対し、金髪の海兵が応じる。

「——ウォーターセブンに海軍支部を設置する旨を伝えよ、と」

断定されたその情報は本来、聞けば不快に思うものであつただろう。それは加盟国としての主権を侵害する宣言だ。提案であるならともかく、決定したことをただ告げるようなその言葉はあまりにも高圧的だ。

だがそれでも言い切ったのは彼女が海兵であつたからだろう。海兵とは、軍人とはそういうものだ。

沈黙が流れた。次の言葉を誰も待っている。

「
アイスバーグが言葉を紡ごうと口を開く。

——きつと、確定したのはこの瞬間だつたのだろう。

後の世において『W7事件』と呼ばれる、しかし謎多き事件が起こつたのは。

風が吹く。不吉な匂いを携えたそれはウォーターセブン特有の自然現象、
“アクア・ラグナ”の前触れか。

或いは——血が流れる、予兆だつたのだろうか。

逃亡海兵 Water Seven ⑬

第七話 ビギナーズ・ラック？

ウォーターセブンを世界有数の造船都市たらしめる大会社——ガレーラ・カンパニー。とある男が当時存在した七つの会社をその手腕とカリスマで纏め上げること
で立ち上がり、今や世界政府御用達の地位にある。

海賊にも臆することなく、己の腕に誇りを持つ職人たち。彼らはウォーターセブンの
住民たちにとって何よりの誇りであり、そしてそんな職人たちを束ねる男には絶大なる
敬意と信頼を寄せている。

その男の名は——アイスバーク。

ウォーターセブンの市長であり、彼自身もまた卓越した技術を持つ職人だ。

……とまあ、経歴だけを見るとどれだけの威厳と威圧感を持つ大男であるのだろうか
と想像するだろう。或いは力強い政治家だろうか。

「ンマー、よく来た」

だが、現れた男はそういった想像からは外れた容姿をしていた。いや、どこぞの海。パ。ン男のような変態的な格好をしているというわけではない。

政治家然としたスーツというわけではなく、かといって作業衣というわけでもなく。少しラフな雰囲気、しかしきつちりとした品位の感じられる背格好だ。

「海軍本部大尉、オリンです」

「同じく海軍本部大尉、イスカです」

ある意味でこの都市の“王”であるそんな男に対し、敬礼と共にそう返したのはオリンとイスカであった。相手は民間人であるが、今回は任務という形で二人はここへ来ている。故にこれが海兵としての礼儀であった。

「固くなるな、つてのも無理だろうな。事前に話はある程度聞いているが」

「はい。——こちらを」

アイスバーグに対し、オリンが大きな封筒を手渡す。嚴重に封のされたそれには海軍本部が正式に発行していることを示す印が押されていた。

「海軍本部は本気だということか」

「私はあくまで特使という任務を受けてここにいます。決定権はありません」

「とてもそうは見えねエが」

封筒を一瞥し、アイスバーグが言う。すると突如、小さな鳴き声が聞こえた。

「……ネズミ？」

思わず呟いたのはイスカであった。アイスバーグの胸元のポケットから小さなネズミが顔を出したのだ。

「ん、ああ。こいつはさつき拾った。名前は……そうだな、『テイラノサウルス』。餌とカゴを用意せねば」

「手配済みですアイスバーグさん」

名付けたネズミを撫でながら背後を振り返ったアイスバーグに、一步下がった位置に控えていた秘書が応じる。眼鏡をかけた美女だ。

「ンマー！ 流石だなカリファ」

「恐れ入ります」

どうやらこの秘書はカリファというらしい。その女性が眼鏡の位置を指で直しつつ、何かを言おうとした瞬間。

「ぎゃー!!」

「クオツ！」

「駄目ビリー！ めっ！」

少し離れた場所で、いくつかの悲鳴が上がった。見れば、巨大な鳥に触れた大男がそ

の鳥の発する電撃を浴びており、更にその鳥の方を海兵帽を被った幼女が叱っているという光景だった。

傍目から見ると意味がわからない光景であるが、実際に見えている光景がこうなのだから仕方がない。

「……アレはそちらの?」

「も、申し訳ありません」

確認するようなカリファの言葉に、オリンが頭を下げる。ここに着いた時にシャオとビリーがドックの中の光景に大いに興味を抱き、それに気付いたアイスバーグが見学を許可したのだ。危ないので離れた位置でと言い含めたのだが、いつの間にか触れ合うような距離にいたらしい。

ちなみに電撃を受けたのはアイスバーグから一人と一羽を任せると言われた、マイルストーンという一番ドックの職長の一人である。野太い雄叫びのような声が上がっていた。

「気にしなくていい。あの程度で倒れるほどの職長は柔じゃねエ」

普通の人間なら一瞬で意識が飛ぶほどの威力の電撃をビリーは放つ。心配するオリンたちだが、アイスバーグは軽く肩を竦めるだけだ。その態度には信頼が宿っている。

そして事実、直撃を喰らった男はピンピンしながら立っていた。

「大した電力だな！」

「最近の鳥は電撃を放つのか」

「この電気何かに使えたりしねエか？」

「マイルストーンさん、大丈夫なんですか？」

「おう大丈夫だ！」

「おじさんすごい！」

「クオツ！」

「……おじさんか」

一瞬でシャオとビリーは囲まれ、そして馴染んでいた。子供というのは凄いものだ。馴染ませる職人たちも凄いと思うが。

「すまない、迷惑を」

「この程度は迷惑にもならねエき。——こいつに比べればな」

頭を下げるイスカに対し、手に持った封筒を軽く振りアイスバーグは言う。口調こそ柔らかだが、その瞳は真剣そのものだ。

「重々承知しています」

「承知の上で、つてことか」

「そうでなければこの場にはいません」

腹を探り合うようなやり取りであるが、オリンは自分が押されていることを自覚していた。相手は一都市の市長であり、大会社の社長だ。その人生経験があまりにも違う。オリンもまたあの「英雄」たちの背を追って戦ってきた海兵である。だが彼女にとつての経験の多くは戦場でのものだ。こういった、所謂政治の場はあまり慣れていない。

だが今の彼女には頼れる指揮官たちは——あの背中はないのだ。ならば腹を括つてやるしかない。

「……お互い、貧乏くじだな」

溢れたような呟きは聞こえなかった。だがそれを追求する前に、アイスバーグが告げる。

「一応確認しよう。認識の違いがあつちやならねエからな」

「はい。私が特使として受けた任務は一点のみです」

気分が重い。何故自分が、と思つてしまう。

だつてこれは。この宣言は。

「——ウォーターセブンに海軍支部を設置する旨を伝えよ、と」

加盟国たる彼らに、日々を懸命に生きる彼らに対して「不自由」を強いることと同義だ。

……そう、*“不自由”*。

それはオリンが敬愛し、何よりも信じた上官たちが嫌ったもの。

逃げて、投げ捨て、泥に塗れ、そして出会った。

前を見て、懂れて、信じて、そして夢を見た。

その果てが……こんな形になるなんて。

——本当に *“不自由”*なのは、誰なのだろうか。



ビギナーズ・ラック、というものがある。

一言で説明するならば、定石も何も知らない初心者が往々にして得る幸運のことだ。特にギャンブルでよく使われる言葉であり、実際によく見られる……と感ずることの多い光景である。

そう、感じるだけだ。全ての初心者が幸運に見舞われるわけではないし、むしろほとんどの初心者が運に見放されることになる。定石であったり知識であったりというものは決して無駄なものではない。それは勝利を手繰り寄せるためには絶対に必要なも

のであり、それを持たぬ初心者というものは初めから不利なのだから。

だが、それでも何かが噛み合うことがある。

いくつもの偶然が噛み合い、まるで導かれたかのように初心者が勝利するという現象。その不可思議な現象を人はビギナーズ・ラックと呼ぶのだ。

しかし、大抵の事象は後からならば納得のいく説明をつけられるものである。後出しジャンケンと言われるが、それでもそういった分析は大事だ。その積み重ねが進歩であり、科学であるのだから。

そういう意味では、彼らの勝利は偶然ではなく必然であったのだろう。

彼らはギャンブルを知らず、定石を知らない。故に通常ならば選ぶことを躊躇する選択肢を選ぶことができる。

彼らはギャンブルを知らず、しかし見る目は持っていた。だからこそ見つけることができたのだ。

——会場の隅で牙を研ぐ、誰にも見つけてもらえない者たちを。

「あそこにいる奴はどうだ？」

レース場の隅。壁際で眠るように沈黙しているブルを指差しながら言うのはルフィだ。そんな彼の隣にいるウタもまた同じ方向を見ている。

「あ、やつぱり気になる?」

勝てそうなブルを探す——あまりにも抽象的な目的の下で会場を見ていたルフィとウタは、会場の隅にいるその一頭と一人を見つけた。

大勢の観客が声援を送るレース参加者たるブルとその騎手。しかし会場の隅にいる彼らを見ている者はほとんどいらないように思える。まるで脇役のように会場の隅にいるのだから目につかないだけかもしれないが。

「どう思う?」

ウタのそんな問いかけを受け、ルフィはもう一度そのコンビを見た。ほとんど身動きもせず、壁に寄りかかるようにしているそのヤガラブルと騎手。

一見すればやる気がないかのように見えるその者たち。だが、感じる。

「……強エな」

「うん。だよね」

まるで抜き身のナイフのような、鋭い感覚。だがそれは周囲に見せびらかすようなものではなく、体の中に抱え込むようにして隠されたものだ。

ルフィの言う強いとは力ではない。その意志だ。彼らから感じる気配は、このレースに参加する誰よりも鋭い。

「四番か」

騎手のゼッケンを見てルフィが呟く。どうせよくわからないのだ。あのコンビに賭けてみてもいいかもしれない。

賭け方はどうしたらいいのか、それを聞こうと振り返ったルフィとウタに横手から声がかかる。

「——ああ、すいやせん」

気配を、感じなかった。いや、まるで突然出現したかのようにさえ感じられた。

今のルフィは常に“見聞色の覇氣”を展開し、周囲を把握している。故に彼らに近付く者がいればすぐに察知できるはずだった。とはいえ悪意や敵意がないなら気にしない。一定以上の距離まで来た相手を意識に留め、警戒するだけだ。

だが、この男は違う。

意識の隙間。そこを縫うようにして接近してきたのだ。

何者か。一気に警戒心を高めるルフィに対し、その男はそんなルフィに気付いていない様子で言葉を紡ぐ。

「ええと、ルーシーさんとアトさん……でしたか？ 私はイツショウといいます」

そう言つて一札するイツショウ。実はルフィも気にはなっていたのだ。フランキー

の隣で膝を抱えていたこの男のことが。

一見すればフランキーやパウリーと一緒にふざけているのか真剣なのかわからないやり取りをしていただけの男。だがルフイにはわかる。その歩き方、雰囲気、そして隙のなさ。

まるでこれは、あの『三大将』のような……

「私たちの……名前」

ウタが呟く。咄嗟に名乗った相手はパウリーであり、その時イツシヨウは少し離れた場所にいた。普段ならギリギリ聞こえる距離であるかもしれないが、ここは大勢の人間の熱が溢れる場所である。周囲で響く様々な音は隣にいる人間の声さえも満足に拾えないくらいに騒がしい場所だ。

それを聞いていた——自然、二人の意識に警戒が宿る。だがイツシヨウは依然そんな警戒など気付いてもいないかのように首を振る。

「ああ、すいやせん。耳がいいもので。ご不快に思われたなら謝りましょう」

「いや、謝つてもらう必要はないけど……」

「……名前聞かれただけだしな」

とぼけているのか、それとも本心か。礼儀正しい態度を崩さないイツシヨウ。ありがとうございます、と彼は一礼した。

「そして不躰ですが、一つ番号を見てほしいヤガラがいます」

「番号?」

「ええ。良さそうなものを見つけたんですが、目がこの通りなものでねエ」

やはり、悪意や敵意はない。恐縮した様子の彼に対し、わかった、とルフィが頷く。

「どいつだ?」

「あちらの……あの、壁に寄りかかるようにしているヤガラです」

「……四番だ」

ポツリとウタが呟く。それはつい先程、ルフィとウタが注目していたブルだ。そのブルは先程から変わららず、まるで石にでもなったかのように動かない。

「四番、成程。ありがとうございます」

「おっさんもあいつを?」

「も、ということはお二人もですか?」

「ああ。レースとかはよくわかんねエけど」

「……けど?」

イツシヨウの問いかけ。対し、ルフィはそのブルに視線を向けながら言葉を紡ぐ。

「あいつは強エ」

そしてそんな彼に対し、小さな笑みと共にイツシヨウは頷く。

「そうですか。——どうも、気が合うようで」



結論から言うと、イツシヨウから賭け方を教えて貰った二人は持っているチップ全てを四番のブルに賭けることにした。豪快ですなエ、とイツシヨウが笑っていたのを覚えていた。

対し、フランキーとパウリーは渋い表情をした。曰く。

「確かに実績がある奴なんだが、二レース前で物凄エ追い比べしてた奴だからなア。

流石にそれは疲れてんじやねエか？」

「これが平等条件ならおれも買うが、流石にな」

定石を知り、経験を積んでいる二人であるからこそルフィたちの判断に対して首を傾げたのだろう。実際、彼らの言うことは道理に合っている。

最終レースは一日のレースで実際に出走し、そして一着以外になつた者が参加するレースだ。本来はギャンブルという性質上もあつて可能な限り平等かつ公平になるヤガラレースであるが、最終レースだけは違う。ここには疲労度という点で明確な差があ

るのだ。

よく考えたシステムだと告げたのは誰であったか。最後に結果にブレが出るレースを用意してガス抜きを図る。ギャンブルの必勝法は運営側になることとはよく言ったもの。実際、賭け金の総額の90%を分配する形で払い戻す——それはつまり、最初から10%負けているのと同じ意味だ。運営側の懐が痛まない以上、最後にイベント寄りのレースを開催することで意識を逸らすのは実に有効である。

まあ、とはいえ。

理屈はあくまで理屈。結局のところ、結果が出るまでわからないのもまた事実。

『さあ最後の直線!! 追い上げてくる!! 追い上げてくる!!』

大歓声が響き、人々の熱狂が最高潮に達している。

『先頭は二頭!! 七番と一六番!! マッチレースになるのか!?!』

共に上位人気の二頭だ。ルフィたちが賭けた四番はブービー人気である。

『さあ後——』

百、と言いかけた実況も、観客も。

一瞬、言葉を失った。

「後ろから来てるぞ!?!」

誰が叫んだのか。それは困惑の混じった叫びであった。

困惑ということは即ち、想定外の出来事が起こっているということ。

『——四番だ!! インコースを貫くように上がってきた!!』

ブービー人気ということは、誰も見向きもしなかったということ。そして大波乱とはその見向きもされなかった者が起こすものだ。

「嘘だろ!?!」

「ずっと一番後ろにいたじゃねエか!?!」

「待て待て待て待て!!」

湧き出すようなそれは困惑の声だ。だが、彼らは気付いただろうか。

——実力はある。

様々な理由をつけて勝てないと評価をしていたが、その一点は共通していたのだというように。

『止まらない!! 止まらない!! 並ぶ——いや並ばない!! 一瞬で置き去りにした!!』

悲鳴と怒号、そして歓声。数多の感情が交錯する中で。

『今ゴール!! なんと!! なんと!! これは大波乱!! 大波乱です!!』

変わらず、四番のヤガラブルは静かであった。勝利に興奮するわけでもなく、ゆっくりと速度を落としていく。

だが、どこか。ゆっくりと水の上を進むその姿は。

——誇りに満ちているようにも、見えた。



勝利である。ブービー人気の一点買いの的中。記録的な勝利となったと言えるだろう。実際、ルフィとウタの二人に払い戻されたチップはあまりにも巨額であったため特製のチップを渡された。本来客引きのために飾られているものを急遽用意したというのだから中々に異常事態である。本人たちに自覚はないが。

「一枚になったな」

「だね」

「いやその一枚が凄エんですけど。いくらになるんスカそれ」

「しばらく遊んで暮らせる額だわいな」

「持つてる人初めて見たわいな」

だが、ギャンブルである。勝つ者もいれば負ける者も勿論いる。

「……………」

まるで廃人になつたかのように椅子の上で項垂れているパウリーと、何とも言えない表情でそれを見つめているカク。ガレーラ・カンパニーの誇る職長としての威厳は皆無であつた。

「今となつちや賭けれなかつたのは運が良かったと言ふべきかもしれねエな」

「駄目だつたんですか？」

「ケチ臭エだろ？ 現金じゃねエと駄目だよ」

そして光と影とでもいふべき両極端なその二つを見ながら言ふフランキーとイツシヨウ。ギャンブルというものの本質がこの空間に詰まっているかのようだった。

大当たりしたもの、大外れしたもの、見ていただけのもの、賭け損ねた者、そして結果として多少の勝ち負けとなつた者——実に千差万別だ。

「おめエは勝つたんじゃねエのか？」

「一応、最後は。ただそれ以前を考えると良くて少しのプラス程度でありやしよう」

「少額しか賭けなかつたのか？ 勿体ねエな」

「いえいえ、お二人のような豪快な真似はできやせん」

ちなみにフランキーが持ち込んだ金は結局全部吹き飛んでいたりする。まあ、惨敗した後は何もしていないのだから当たり前だが。

「そーいえば、何か買いたいものでもあつたの？」

ふと、思いついたようにウタが近くのザンバイとスクエア・シスターズの二人に問いかける。ああ、と頷いたのはザンバイだ。

「アニキが欲しがってるものがあるんだ。けど高くてなア」

「そんなに高いの？」

「貯めて買うとなると十年以上かかるか？」

「十年で済めばむしろ早いわいな」

「そもそもコツコツとか無理だわいな」

ザンバイの問いかけに肩を竦めるスクエア・シスターズ。その顔は笑っているのだが、それは笑顔で言うことなのだろうか。

「まあ、そのうち何とかなる。アニキがいるからな」

「その通りだわいな」

「うんうん」

「……そうなんだ」

ギャンブルで一発を狙わなければ買えないようなものとは何だろうかとウタは興味を抱くが、聞いても良いかを迷った時には機会を逸している。かつての彼女であれば流れて聞けただろうに、どうにも一步が踏み出せなくなる時があった。

それは何が原因なのか。……いや、わかつている。わかつてはいるのだ。

ただ、わかった上でどうしようもないだけで。

「欲しいものか」

そしてそんなウタの隣でジツ、と自分の手の中にある一枚のチップを見つめるルフィ。そして彼が何かを言おうとした瞬間、横手から遮るように声がかかった。

「——いらねエぞ」

フランキーだ。こちらへと歩み寄るその顔には呆れが混じっていた。

「さっきも言ったがそれはおめエらに渡したもんだ。それで勝ったのはおめエらが勝負した結果であり、おれは関係ねエ。それをどうするかは自由だが、妙な恩を感じて他人に渡す必要はねエよ。自分たちのために使え」

全く、と肩を竦めるフランキー。完全に内心を見透かされたルフィは、そうか、と頷く。

「ありがとう、フランキー」

「何の礼だ何の」

照れ隠し………と思ったが、どうだろうか。素なのかもしれない。よくわからない男である。

「けど使うにしてもなア。何か欲しいものあるか？」

「………うーん」

欲しいものと言われ、ウタの脳裏にはすぐさまルフィの顔が浮かぶが強引に掻き消した。そういうことじゃない。お金で買えるもののお話だ。

だがいざ言われてみると浮かばない。元々物欲もあまりないタイプであるし、あの事件の後はそのようなことを考える余裕がなかったのもある。その日を生きるのに必死で、目の前にあるものだけでどうにかしてきたからこそ今の今なのだから。

二人して悩む。いざ欲しいものと言われると案外難しいものだ。

「使い道に迷ってんならまずあの船をどうにかしたらどうだ？」

そんな二人を見かねたのか、フランキーがそう提案してきた。船、と同時に言葉を返した二人にフランキーが頷いて応じる。

「ここに腰を落ち着けるってわけでもねえんだろ？ だったらあの船を修理なり改修なりした方が良いんじゃないやねエか？」

フランキーが言う船とは二人が乗ってきたあの小舟のことだ。偉大なる航路という過酷な海を渡ってきたあの船は随分と働いてくれた。本来これほどの長距離航行を想定していないというのに、未だ決定的な破損が起きていないのはある意味奇跡である。

「何じゃ、船の調子が悪いのか？」

そこへ入ってきたのがカクであった。視線を向けると、すまんのう、と彼は片手を軽く上げて謝意を示す。

「船の話が聞こえたもので。どこか故障しておるのか？」

「故障はしてない……と思うけど」

「そりや見えねエだけだ。船の故障つてのは表に出る時は大体致命傷になる。悪いことは言わねエからこいつらに任せた方がいい」

親指でカクの方を示しながら言うフランキー。確信を持って語るその口調は彼もまたその道の知識がある者であることを示していた。

思わずルフィとウタがフランキーへと視線を送る。それに気付いたフランキーが肩を竦めた。

「おれは解体屋だからな。ただの経験則だ」

それが真実であるかどうかはわからない。だがそれ以上は追求しても何も言わないだろうし、意味がないことはわかる。

「そうか、わかった。ありがとうフランキー」

「礼を言われることじゃねエ。——ザンバイ、こいつらを案内してやれ。ついでにこれ持って金を受け取っとけ」

「え、アニキは？」

「おれは帰る」

フランキーがザンバイへ紙を手渡すと、そのままレース場を出て行くこうとするフラン

キー。その後をスクエア・シスターズが追いかけていく。

「待つわいな」

「ウチらも行くわいな」

そんな彼らを見送りながら、少し思う。フランキーは船というものに対して思うところがあるのだろうか。いつもの陽気な雰囲気少し陰っていた。気のせいなのかもしれないが。

「ふむ。では行くとしよう……と言いたいところじゃが、まずは船を見てみないことは話ができんのう」

「じゃあフランキーのどこに行くか？」

「ワハハ、それでは二度手間じゃろう。——おいパウリー、いい加減起きんか」

魂が抜けていた状態であった同僚の背を叩くカク。ハッ、とパウリーが正気を取り戻した。

彼は周囲を確認するように見回し、そして。

「——夢か」

「残念ながら現実じゃ」

一瞬で打ち砕かれた。ちくしよう、と呟くパウリーにカクが言葉を紡ぐ。

「本社に戻るんじゃないろう？ 悪いが客を案内してやってくれんか。ワシはこれから船を

見に行く」

「船の修繕か？ 状態は？」

先程までの魂が抜けた顔はどこへやら。一瞬で職人の顔になったパウリーの問いに對し、カクが首を振る。

「わからん。場合によつては乗り換えも有り得るかもしれんかう」

「了解した」

椅子から立ち上がるパウリー。そのまま彼は二人の方へと一礼する。

「船の相談だな？ なら話は一番ドックだ。おれが案内しよう」

つい先程までギャンブルに負けて魂の抜けていた男とは思えない、堂々とした立ち振る舞い。そこにいたのは確かに一人の職人であった。

「ワシは船の方を見てくる。一番ドックで少し待つておれ」

言うのと、カクがカジノを出て行く。その背を見送るが、どこでふとウタが気付く。

「……あれ？」

イツショウ、と名乗ったあの盲目の男がいない。いつの間に姿を消している。

最終のレースが終わったことで、周囲の観客たちは徐々に帰り支度を始めている状態だ。その流れのまま立ち去ったのだろうか。

「どうした？」

問いかける声はルフィのものだ。その彼に対し、何でもないとウタは返す。まあいいならいいでいいだろう。問題は船の方だ。

目指す先は造船島とも呼ばれるこのウォーターセブンの中核、*ガレーラ・カンパニー*の中心たる一番ドック。そこは造船のエキスパートが揃う場所だ。

自分達をここまで運んでくれたあの小さな船。これからを考えた場合、確かにあの船を今のままで運用し続けるのは危険だ。故にフランキーの提案は正しいし、決定的なことが起こる前にこうした機会を持てたのは幸運なのだろう。

ただ、とウタは思う。

(いつまで?)

そう、いつまで。

未来。これから。この先。

何も見えないこの道を、いつまで。

そして、何よりも。

——私たちは、一体。

どこまで行けば、良いのだろうか。

どこに行けば、良いのだろうか。

そんな疑問が、頭から離れなかった。



フランキーハウスはその奇抜な外見故に非常に目立つ。立地についても広い場所にポツンと建っているということもあり、遠目からでも一目でわかるくらいだ。

「……相変わらずじゃのう」

そんなフランキーハウスを一瞥し、カクは周囲を見回す。目的の船はどこかと思つたところで、海岸に繋がれている一隻の小さな船を見かけた。

あれか、と思うと同時に、小さい、という感想が最初に浮かぶ。いくらなんでもこの船で偉大なる航路を渡っていくのは無茶ではないだろうか。

「失礼」

船の上に飛び乗ると、僅かに足元が軋んだ。肌感覚でわかる。これはフランキーの言う通り、見えないところに相応のダメージがある。

「マスト……は大丈夫そうじゃが、補強した方がええのう」

見れば見るほどに長距離航行に向かない船であるということが伝わってくる。彼らがどこから来たのかはわからないが、隣の島程度の距離ではないだろう。

何者なのだろうか——そんな疑問が浮かんだカクの目に、それが映り込んだ。

嵌め込まれた窓の向こう。その奥にかけられた一着のコートだ。

「——あれは」

それに彼は見覚えがある。ある意味でとても馴染みがあるものだ。

薄汚れた白いロングコート。その背にはとある文字が刻まれている。

たったの二文字。しかしその二文字はそれを纏う者にとっては何よりも重い二文字だ。

だからこそわからない。何故ここにあのコートが——

「まさか」

疑問から、確信へ。

「……………」

一度閉じ、開いた青年の瞳には冷たい色が宿っていた。そこにいたのは、ガレーラ・カンパニー。大工職職長ではなく。

——もう一つの、闇の中にある立ち姿だ。

ビギナーズ・ラック、というものがある。

だが、禍福は糾える縄の如しという言葉もある。

幸運が訪れたのであれば、不運もまた訪れる。だが事象には常に原因がある。幸運も不運もそこに至る過程が必ずあるものだ。

あの場での幸運がなければ、船の話が出ることはなかっただろう。この場を船大工であつた彼が訪れることはなかったかもしれない。いや、そもそもあの場に行かなければ出会うことさえなかっただろう。

しかし実際には訪れたあの場所で偶然に出会い、幸運があり、それらの過程を経た結果として今に至つた。

ならば、あの時に得た幸運は。

——本当に、幸運であつたのだろうか？

逃亡海兵Water Seven⑭

第八話 ままならぬ世界

海軍は基本的に支部という形で加盟国の近隣に基地を設置している。これには多くの理由があり、例えば一国内に支部を設置するよりも複数の国を見ることができる位置に支部を設置することで効率化を図るためなどといったものだ。

無論、全てがそうであるというわけではない。例えばかつて“白獵のスモーカー”が身を置いていたログタウンは偉大なる航路への玄関口であると共に“海賊王”を処刑した街という重要性から彼を筆頭とした戦力を常駐させていた。

つまりケース・バイ・ケースではある。だが実際に見てみると、加盟国内に海軍が駐屯している国は非常に少ないのも事実だ。例えば加盟国の中でも非常に重要な位置にあるアラバスタ王国には海軍の戦力は駐屯していない。これは彼の国が“国王軍”という戦力を有していることと、何よりも加盟国としての主権を世界政府が尊重している

ためだ。

そう、尊重。相手を重んじ、尊ぶ。実に便利な言葉だと思うのはこの場で向かい合う海兵と市長の共通する認識だ。

ままならないと思っているのもきつと同じ。だが、だからといって情で政治はできない。

「カリファ、人払いを」

「はい」

アイスバーグが秘書のカリファへと告げると、すぐさま彼女が動き出した。アイスバーグは人望厚い人間だ。彼が表に出るとどうしても人が集まってくる。公開しながらできる話であるならばともかく、今からする話は余人に聞かせるべきではない。

「こつちへ来てくれ。あまり時間は取れないが」

「申し訳ありません」

オリンが頭を下げ、イスカと共にアイスバーグへついて行く。そんな彼女たちの下へシャオがビリーと共に走り寄ってきた。

「お姉ちゃんどこいくの?」

「クオツ」

一人と一羽。あのメルヴィユしか知らぬ身である彼女たちにとってこのウォーター

セブンは珍しい物の宝庫なのだろう。その目は輝きつばなしだ。

そんなシャオの目線に合わせるようにしやがみ込み、オリンは言葉を紡ぐ。

「ちよつとお話をね。もう少しだけ待っててくれる？」

「うん！」

「クオツ！」

元氣一杯の返答。そんな姿を見て、少しだけこちらにも元氣が出てきた気がする。

「私が見ておこう」

そしてオリンに対してそんなことを言うのはイスカだ。ここに来る途中までは正義のコートを羽織つていなかった彼女はここに着いた時からそれを羽織っている。そんな彼女はシャオとビリーを軽く撫でながら言葉を紡いだ。

「私の任務はここに来るまでの護衛だ。特使としての任務はそちらのものであり、私の領分ではない」

それに、とイスカは言った。どこか申し訳なきそうな色をその瞳に宿しながら。

「私がいけない方が話せることもあるだろう？」

「……了解しました」

氣遣いと、押し付けるような形になってしまうことへの負い目。

真面目な人だと思った。……だからこそ、こんな貧乏くじの立場である護衛任務を率

先して引き受けてくれたのだろう。

「こつちだ」

シャオたちとの会話を待つていてくれたアイスバーグが区切りと見て声をかけてきた。彼が示す先にあるのは簡易なテントである。

示されるままに中へ入る。中は見た目よりも広く、大きな机と幾つもの机が置かれていた。周囲に置かれた工具や机の上の設計図と思しき図面から推察するにここは簡易の詰所らしい。

「少々散らかっているが容赦してくれ」

「いえ」

そして促されるままに着席する。大きな机を挟み、オリンとアイスバーグが向かい合う。

「――まず一つ目だ」

空気が僅かに張り詰めた。ウオーターセブン市長にして「ガレーラ・カンパニー」社長。一つの都市の「王」たる存在がオリンを真正面から見据えている。

「言っていることは理解した。確かにこのウオーターセブンには明確な戦力が存在しねエ。あるとしても精々が警察程度だ。だからこそその穴を海軍が埋めるつてのはまあ、筋が通っている」

淡々とした口調。アイスバーグが述べたことは今回海軍が持ってきた案における建前上の理由だ。

ウォーターセブンは世界政府御用達の造船会社を抱える都市であるが、その規模に対して防衛のための軍隊を有していない。だがそれは様々な理由があつてのことであるし、少なくとも現在に至るまでそれで不都合が起つたことはない。

「だが、何故今だ？」

故にこれは当然の疑問であつた。そう、何故今なのか。

「タイミングなんざいくらでもあつたはずだ。このウォーターセブんに海列車ができた時でもいい。経済が上向き始めた時でもいい。造船会社が合併し、ガレーラ・カンパニーができた時でもいい。——世界政府が「ガレーラ・カンパニー」を指定業者とした時でもいい」

このウォーターセブンが歩んだ道程、その全てに関わつていた男は言う。それをやるのであればタイミングなどいくらでも合つたはずだと。

だが、世界政府も海軍もその全てをスルーしていた。その果てに今だ。どうしてもアイスバーグにはそこが引つかかつていた。

「タイミングは今しかない……そう、判断しております」

対し、気圧されながらもオリンはそう言葉を紡いだ。そんな彼女に対し、アイスバー

グが眉を擧める。

「彼にしてみれば意図が掴めないことであろう。当たり前だ。これは世界政府についての都合がいいタイミングなのだから。」

「今しかない……？」

腕を組み、思考を始めるアイスバーグ。彼は聡明な政治家であり経営者だ。故に根本的な部分で見落としていることがある。

政治家と経営者——或いは商人。彼らには一つの共通することがある。それは建前上であろうと表面上であろうと不公平であろうと、『Win—Winの關係』を前面に押し出して行動することだ。こちらが得をしてお前は損をしろというのは交渉を主な役目とする彼らが決して口にしてはならないことである。

そして勘違いしやすいが、『Win—Winの關係』とは平等とイコールではない。どちらかが利益を得られるようにという考え方である以上、片方が10の利益を得てもう片方が1の利益であったとしても成立する。ビジネスとはそういうものだ。

ただ、本当にそれが利益であるのかどうかを見極めることのできる目がないと後々悲惨なことになることも多いのだが……それは置いておこう。

まあ、要するにだ。

そういう世界で生きてきたアイスバーグという男にとって、今回の世界政府の考えを

即座に読み取るのは難しかった。彼らの思考にあるのは自らの利益を第一とした思考であり、相手の利益に対する提案がないからである。

「……成程な。そういうことか」

だが、やはりアイスバーグという男は優れた能力を持つ人物だ。思考を整理することでそこに到達したらしい。彼は呆れた調子で言葉を紡ぐ。

「世界政府がやらかしたことの後始末におれたちを巻き込むつもりか？」

「……これは双方にとつて利益があることと考えています」

「表面上はな」

ふう、と一度息を吐くアイスバーグ。胸元のテイラノサウルスと名付けられたネズミが小さく鳴いた。

「ここがどういう都市であり、何を以て生計を立てているかはわかるか？」

「造船都市であり、観光都市。この辺りの経済の中心の一つです」

「そうだ。だがこの時代、客を選べるはずもねエ」

相手がオリンという海兵であるからこそアイスバーグは直接的な話し方をしない。それは黙認されていることであるからだ。

この問答についてはオリンも想定していた。故に澁みなく応じる。

「今後は海軍が駐留することにより、安全を保証できるものと考えております」

「……成程、それは助かる」

このやり取りによって、その話題については終了した。どちらも直接的には触れられない話題だ。故に押し流すしかない。グレーはグレーのままに、である。

数秒の沈黙。張り詰めた空気の中、アイスバーグが次の言葉を紡ぐ。

「——納得がいかねエのは、何故ここが選ばれたのかだ」

意図はわかる、とアイスバーグが言葉が続ける。

「例の事件の影響でどこもかしこも不安定だ。ここでも一部で議論が起こっている。聞くとところによれば、どこぞの国では反乱まで起こっているらしいな。なら頭を抑えるのはそちらからじゃねエのか？」

アイスバーグは暗に『ウォーターセブンは問題ない』と言っている。確かにオリンが見てきたこの都市は活気があり、世間と比べると随分と安定しているように見える。ここで反乱の類など起きることはないだろう。

だが、だからこそ選ばれたのだ。

ここに何の問題もないからこそ。

「世界政府の決定です」

彼女は軍人だ。故にこそこそ答える。それはある種の拒絶であり、答えられないという回答だった。

オリンはここが選ばれた理由について明確な答えを教えられていない。だが、その意図を察することはできる。そしてそれはきつと間違いではない。

安定しているから選ばない——違う。

安定しているからこそ、一定の成果を上げられる確信があるからこそ選ばれたのだ。

「……………そうか」

やはりアイスバーグという男は頭が切れる。たった一言である程度を察したらしい。

「全く」

それがどういう感情からの眩きなのか。

オリンには、わからないままだった。

……………。

……………。

……………。

——いずれにせよ、この場での回答はできない。

それがアイスバーグの結論であった。当たり前だろう。事実上の“王”であるとはいえ、彼は市民から選ばれた代表だ。彼一人で決めていいこととそうでないことの線引きがある。

「カリファ」

「——こちらに」

呼べば即座に現れる秘書。相変わらず優秀だと思つたと同時に、彼女に一枚の紙を渡す。

「これは……」

「読んでおいてくれ。それと緊急で議員たちの招集を。有力者も集まれるだけ集めてくれ」

肩を回し、固まつた筋肉をほぐしながら言うアイスバーグ。あのような張り詰めた対話は久し振りの気がする。

「しかしこの後にご予定が」

「悪いがキャンセルだ。今日の夜までに話を終わらせる必要がある」
「わかりました」

何故、とかどうして、といったことは聞いてこない。実によくできた秘書だとアイスバーグは思う。有能な人材がいるというのはありがたいことだ。

「しかしアイスバーグさん、これは……」

「発表は明日らしい。報道される前に意思の統一を図る必要がある」

厄介なのはここだとアイスバーグは思う。オリンがここへ到着し、アイスバーグと会談の場を持った段階であちら側は動き出している。要するに、最初からこれは既定路線であるということだ。実に手回しのいいことである。

ここで明確な反対の意思でもぶつければ間違いなく厄介事になる。外堀は完全に埋められてしまっているのだ。ならば後は如何に有利な条件で受け入れるかに注力した方がいい。

「急いでくれ。だが慎重にな」

「勿論です」

そしてすぐに動き出すカリファ。その背を見送り、アイスバーグは先程の海兵について思い浮かべた。陰がある印象であったが、それでも言い難いことをはつきりと言い切れるだけの度胸がある優秀な海兵だ。そしておそらく、あの手の人間はこういった腹芸は得意ではないだろう。正直、特使という任務に向いているとは思えなかった。

だが、それでも海軍と世界政府は彼女を派遣することを決定した。その理由はおそらく彼女の持つ知名度故だろう。

今や“堕ちた英雄”として世界の——否、“神”の敵となった二人。その元部下の一人であり、数多の戦いを最も近くで見続けてきた海兵のうちの一人。

彼女が海兵のままにいるという、その事実を体外的にアピールする意味は大きい。故に彼女はここへ来たのだ。

(試金石になれと言われているおれたちと、下手をすれば内部からも外部からも批判を浴びる立場になりかねないあの海兵……どちらも貧乏くじだな)

嫌なものだ、とアイスバーグは息を吐く。だが自分は市長なのだ。できることをやるしかない。

覚悟を決め、歩き出すアイスバーグ。その中でふと気になったことがあった。

あの海兵たちが来た時からずっとあった違和感。それは。

「……あの海兵」

——「正義」のコートを、着ていなかった。



派閥だとか、政治だとか。自分はそういうものが苦手だとイスカは思っている。

海軍は巨大な組織だ。そして組織というのは巨大になればなるほどに様々な人間が

集まり、そうした結果発生するのが組織の力学だ。個人でできることには限界があり、そして海軍という軍隊である以上部隊単位での行動が基本となる。そうなれば部隊を動かすだけの理由と筋というものが必要になるのだ。

それを円滑に進めるためのものが派閥であり政治と言えるだろう。徹底的な現場主義である海軍だが、だからこそ実力と肩書き、実績が重要視される。無理を通すには地位が必要だと言ったのはどこの将官だっただろうか。

その辺りのことがイスカは不得手だ。彼女の実績を考えると出世が遅いのはそれが理由だろう。

「どうにも真つ直ぐ過ぎる。もう少し搦め手というものを学んだ方がいい」

世話になった恩師とも言える教官に久し振りに会った時、そんなことを言われたのを覚えていた。だが無理だ。その搦め手というものを実践した結果起こった事件。あの事件で自分の「正義」が揺らぐことになってしまった。

本当に……ままならない。

「……「正義」、か」

話し合いが終わって出てきたオリンを遠目に見ながら、イスカはポツリと呟く。彼女は羽織っていた「正義」のコートを脱ぐと、丁寧に畳んで鞆の中へと仕舞い込んだ。このコートが随分重く感じるようになったのはいつからだろう。

昔はもつと単純であつたはずの言葉だ。それがいつの間にかとても難しいものになつてしまつたような気がする。

イスカが海兵になつた理由は彼女の過去だ。家族を、友を、日常を海賊によつて奪われた。その時の全てを灰にしよつとすると燃え盛る炎の記憶は今も尚彼女を責め苛み、時折叫び出したくなるほどの衝撃として残り続けている。

だが同時に、その記憶こそが彼女を立ち上がらせている原動力でもあるのだ。

——自分と同じような想いをする者が、これ以上生まれないように。

——悪い奴は全員捕まえてやる。

それは若さ故の無鉄砲さと、しかしだからこそ純粋な夢であつた。彼女の「正義」は正しく「義」によるものであつたのだ。

だがあの日。シャボンディ諸島でその「正義」が揺らぐ事件が起こる。

全てを奪つたあの炎は——彼女の手を焼き、全てを奪つたその火は「正義」を背負う者が起こしたものであつた。海賊という「悪」を討つために、その「正義」が全てを燃やし尽くしたのだ。

叩きつけるような真実と現実。その最中、確かにあつた芯が揺らぐ。

誓い、掲げたもの。

自分が海兵である理由。

折れず、揺るがないと信じていたその始まりが……揺らいでしまった。

(ままならないな)

内心で呟きながら、だがそれでもと思う。

——あの日、彼の手を取らなかつた。

差し伸べられた手。優しく、しかしどこまでも臆病なあの手をイスカは取らなかつたのだ。

どうしてなのだろう。

わからない。ずっとわからないままだ。

だから、きつと。

その答えを得るために、イスカという海兵は戦っている。

「お待たせしました」

「お帰りなさい!」

「クオツ!」

こちらへと歩み寄ると共に軽く頭を下げたオリンへ、シャオとビリーが元気よく応じる。この子達はいつも元気だな、と小さくイスカは笑った。

そして彼女はオリンに対して敬礼をすると、言葉を紡いだ。

「任務だ。謝るようなことではない。……それで、結果は?」

「やはり結論はすぐに出すことはできないと。今日の夜10時に改めて会談します」
敬礼を返しながらオリンが言う。その言葉を聞き、想定の通りだな、とイスカは頷いた。

「だが事実上決まったことだろうか？」

「筋道は必要です。予定調和であろうと何であろうと、自分たちで決めたという形を取ることは重要ですから」

「……そういうものか？」

「そういうものです。……おそらく」

微妙に自信がなさそうなオリンであるが、それでも彼女は自分よりもこういう政治的な部分には詳しい。例の二人のフォローのために身につけたという話だが、やはり正しく学ぶことは重要なだろう。

自分も学ぶべきなのだろうか——そんなことを思ったところで。

「——あつ」

可愛らしい、どこか気の抜けた音が響いた。シャオが少し顔を赤くしてお腹を押さえている。

「そういえば、ちゃんとした食事はしていなかったな」

そんな彼女に微笑みかけながらイスカは言う。ここに来る途中でこの三人と一羽は

どこかの店で落ち着いて食事ということをしていなかった。見るもの全てが珍しいシャオにとつてはどこかで落ち着いて食事をするより、食べ歩きをしながら街を見る方が良さそうであつたからだ。

だがその分動き回つたし、食べ歩きというのは意外と量を食べられない。育ち盛りの少女である。体が食事を要求しているのは領けた。

「任務も一段落ついたし、何か食べよつか？」

「うん！」

オリンの言葉に頷くシャオ。その直後。

——！
壮大な腹の音が鳴り響いた。道行く通行人までもが思わずこちらへと視線を向けてくるほどだ。イスカやオリン、シャオもまたその音の主の方へと反射的に視線を向ける。

シャオのそれとは比べ物にならない、腹に響く音であつた。……いや、本当に腹の音か？

「クオツ……」

どこか恥ずかしそうに鳴く音の主——ビリー。妙なところで恥じらいを持つのだな、とどうでもいいことをイスカは思う。

「ビリーもお腹空いた？」

「クオツ」

「私とおんなじだ」

元氣な一人と一羽である。仕方がない、とイスカも頷いた。

だが、そこで彼女にしては珍しいミスをすることになる。

「では行こうか。何か食べたいものは——」

「——おっと」

意識が完全に一人と一羽に向いていたからだろう。視線を向けないままに歩き出していた。横手に歩き出した彼女と、丁度道を歩いていたロープ姿の観光客と思しき二人組の片方がぶつかってしまう。

とはいえ、掠めるような形だ。衝突したわけではない。

「すまない。不注意だった」

慌てて謝罪をするイスカ。今のは完全にこちらが悪い。対し、相手は。

「いや気……に……」

何故か言葉を途切れさせた。顔を上げるイスカ。飛び込んできた光景に彼女は目を見開く。

「……………はっ？」

——それを偶然と呼ぶには、あまりにも。

「なんで」

「お前」

あまりにも——悪戯が過ぎるのではないだろうか。

「エース!?!」

「イスカ!?!」

数多の因縁が絡み合う二人。海兵と海賊という言葉では語り切れない縁を持つ二人。決して交わらない道を歩いていた。海兵と海賊、その存在は平行線だ。手を取り合うことなどあり得ないしあつてはならない。

だが、一度だけ。

そう、一度だけ。

あつたのだ。その瞬間が。

その手が繋がることは、なかつたけれど——

「——ツ!!」

まるでそれは、あの日々の再来のようで。

海賊を追う海兵と、海兵を迎え撃つ海賊。二人の戦い日々からそう時間は経っていない。記憶にもまだまだ新しい。

だと、いうのに。

何故だろう。

どうしようもなく——懐かしかった。

逃亡海兵Water Seven⑮

第九話 あの日、私は

人は微塵も想定していない状況に直面した時、文字通り『停止』する。これはもう個人の資質がどうということではなく、人間という生物として避けようがないことだ。

その目で見、認識し、思考し、そして行動するのが人間である。故に想定外の事態を前にした時はまず認識に全神経を集中させることになり、故にその他の行動全てが一瞬であるが停止するのだ。

だからこそ予測という形で心構えをし、可能な限りそれを避ける。『見聞色の覇氣』の到達点たる『未来視』などはある種その究極系かもしれない。

そしてその停止の後に来るのは『反射』だ。それは体に染み込んだ経験と感覚から来る行動。

「——ッ!!」

そしてこの二人——エースとイスカは正しく停止から復帰し、反射に至っていた。
——距離を取る。

おそらくそれは共に共通した反射行動であつただろう。二人の肉体はその行動を實行しようとしていた。

「——」
だが、動かない。

エースもイスカも反射による行動を己の意志で振じ伏せている。

何故だろうか。いや、理由などわかっている。

——ここで離れてしまつたら。

きっと、決定的に何かを逃す気がしていた。

その何かを二人は知らない。わからない。理解できない。

だが、感情などそんなものだ。だからこそ人間というのは難しいのだから。

「……久し振りだな」

迷うように言葉を紡いだのはエースであつた。手を伸ばせば触れ合える距離。かつて追い、追われた者同士が向かい合う。

「そうだな。シャボンディ諸島の……あの時以来だ」

そんなエースの言葉に対し、イスカが応じる。それほど時間は経っていないはずなの

に、随分と昔のここのように思えた。

「話は聞いているぞ、エース。……白ひげの傘下に入ったそうだな」

白ひげ海賊団二番隊長、*“火拳のエース”*。

その海賊の名を知らない者はいないだろう。懸賞金5億を超える超大物海賊にして、未だ20の若さでありながら*“四皇”*の幹部に名を連ねる怪物。

随分と遠い場所に行ってしまったと、そんなことをイスカは思った。そして事実、かつて追いかけていた時とは随分変わったようだ。

「知ってたのか」

「知らないはずがないだろう」

何をとぼけたことを、とイスカは息を吐く。そして。

「……………」

数秒の沈黙。互いに言葉はあるはずなのに、しかし、口にできない。

「イスカ」

「エース」

互いの名を呼び合う。それだけでお互いに理解してしまった。

今の二人が、どこにいるのかを。

(いい場所なんだな)

明るい調子でありながら、しかし常にどこか昏い影のようなものを纏っていたのがイスカの知るエースだ。だが今の彼は随分と変わったように思える。

彼を変えたのはきつと、「白ひげ」なのだろう。

……少しだけ、彼の大海賊に嫉妬した。

——私は、彼の隣に立つことを選べなかつたから。

差し伸べた手も、差し伸べられた手も。

お互いが、取らなかつたから。

「悪いが——」

「わかっているはずだ、エース」

やっぱりいい奴だと、そんなことを思う。

「お前は海賊だ。それも白ひげ海賊団の隊長。大悪党だ」

確認するように言うイスカ。それだけでエースも察したらしい。

「そんな『悪』を捕まえるために、私は」

鞆からコートを取り出す。まるで翼の如く広がるコート。その背に刻まれているの

は、「正義」の文字だ。

「私は、海兵になつたんだ」

それは決別の言葉ではない。ただの確認の言葉であり。

——己への、宣誓だ。

「海兵、か。お前は海兵であろうとするんだな」

そんな顔をするな、エース。

「そうか。……いや、そうだったな」

お前らしくもない。

「知っているだろう?」

「昔からな」

あの日々が随分昔のことだと感じていたのは、自分だけではなかったらしい。

嗚呼、ならば。

それでいいだろう。

それが、私たちの関係だ。

「イスカ大尉だ。海賊、〃火拳のエース〃」

腰の剣の柄に手をかける。この刃が、彼女にとっての誇りであった。

そしてそれはきつと、これからも。

「——逮捕する」

それは、二人が初めて出会った時と同じ言葉。

小さく、「火拳のエース」が笑った。

「鳥みてエな名前だな」

あの日のようでありながら、しかし、少し違うやり取り。

——それが合図だ。

「——ッ！」

大気ごと貫くような、超高速の突き。震えるような振動が音となり、周囲に伝播する。

「そんなもんでおれを斬れるかな？」

対し、蜃気楼の如く自身の体を揺らめかせる。放たれた熱気が目に見えぬ圧力となつ

て周囲を揺らす。

まるで、何かを思い出すかのように。

まるで、何かを取り戻すかのように。

——海兵と海賊の戦いが、始まった。



熱を纏う、突き抜けるような風。たった一人の人間が引き起こしたそれをオリンは正面から受け止める。

ただならぬ雰囲気であることは早々に察した。だがまさかあの男が“火拳のエース”であるとは。

「な、なんだ!？」

「おい今“火拳”って……」

「嘘だろ……?」

周囲にざわめきと共に動揺が広がっていく。時間がない。このまま何もせずいたら混乱が加速していくだけだ。

「イスカ大尉!!」

声を張り上げ、“火拳”と向かい合う海兵の名を呼ぶ。よく通る声だ。周囲の者たちの視線がオリンの方へ向く。

「すまない!! その子達を頼む!!」

声と共に大気が揺れた。豪速の突き。まるで雨のようなそれを“火拳”は後退して

避け、距離を取ろうとする。それをイスカがさせじと踏み込んでいく。

——足に、何かが触れた。

視線を向ける。シャオが不安そうな顔でこちらを見上げていた。

「避難してください!!」

その顔を見た瞬間、覚悟は決まった。声を張り上げ、周囲の市民たちへと指示を出す。

「海賊が現れました!! 我々が対処します!! 速やかに避難を!!」

「……………ッ」

海賊、という言葉に反応したシャオがオリンのズボンを握る力が強くなる。海賊という存在は彼女にとって恐怖の象徴だ。

あのメルヴィユを支配していた大海賊、"金獅子のシキ"。あの男の支配する島において文字通りシャオたちは籠の中の鳥であったのだ。そんな彼女にとって、海賊という存在に良い印象を抱けるはずもない。

まずはこの子の安全を——緊急連絡用の電伝虫を取り出しながら周囲へと視線を向けるオリン。その彼女に対して後方から声が届く。

「どうした!？」

オリンにとつての背後側、一番ドックから複数の男たちが走り寄ってきた。背格好からするに"ガレーラ・カンパニー"の職人たちだろう。先頭を走るのは体格のいい大男

と、妙な寝癖をつけた眼鏡の男である。

「海賊です！ 対処は我々が！ どうかこの子を！」

「海賊だア!? だつたらおれたちが——」

「——相手は『四皇』の幹部です!!」

職人たちが息を呑んだ。それほどまでに今オリンが告げた言葉の意味は大きい。

偉大なる航路、後半の海。俗に『新世界』と呼ばれるその海にまるで皇帝が如く君臨する海賊たち。絶大なる力と影響力を持つ四人の海賊を、俗に『四皇』と呼ぶ。

その力は強大であり、場合によつては一国をも滅ぼし得る。その幹部ともなれば最早人間の領域を逸脱していると言つても過言ではない。

「どうか」

職人たちを見据えるオリンの目。それを受け、百戦錬磨の職人たちでさえも気圧される。圧があるとか、強い瞳だとか、殺気だとか。そういう話ではない。

——覚悟。

そこには確かに、『英雄』の部下として戦い抜いてきた海兵の誇りがあつたのだ。

「お願いします」

念を押すように言うと、オリンはシャオの頭を軽く撫でた。

——ごめんね。

小さなその言葉と共に、ズボンを握っている手を優しく解く。その瞳は揺れていた。

そして彼女は走り出す。腰の短銃を抜き、取り出していた電伝虫を起動した。これは今回の任務に出る際に渡されたものだ。小型であり、通話機能はない。ただし迅速に周圉へ救援要請の信号が出る。

この近辺にいる海軍への連絡はこれで済んだ。だがすぐには到着できるはずもないし、今この場へ駆けつけることなど不可能だろう。ならば対処は二人でやるしかない。

——ただ、はつきり言おう。勝ち目などない。

たった二人の海兵が立ち向かうには、“火拳”の存在は強大に過ぎるのだ。

イスカの実力についてオリンはよく知っている。“釘打ち”とまで呼ばれる彼女は自分とは比べ物にならないほどの実力者だ。だがオリンは“英雄”の部下として数多の戦いを通し、人の理を超えるような力を持つ怪物たちを多く見てきた。

その経験が告げている。あの“火拳”という海賊はたった二人で向こうに回してもいいような相手ではないと。

しかし、ここで退くという選択肢はなかった。

何故なら、オリンは先程アイスバーグへとこう告げたのだ。

“ 今後は海軍が駐留することにより、安全を保証できるものと考えております”
それはある種の建前だ。しかしそれを理由として提示した以上、海軍にはそれを遂行する義務がある。

イスカがどう考えているのかわからない。だが彼女の判断は正しい。ここで海賊を見逃してしまえば、海軍は約束さえも守れない立場となる。

故に戦う。その結末を理解していても。

そうするしか……ないのだ。

「イスカ大尉!!」

銃口を “火拳” に向けると共に、オリンがその名を呼ぶ。

直後。

巨大な炎の壁が、出現した。



自然系の能力者はある種『無敵』と勘違いされるほどの力を有している。その呼び方

は様々だ。

曰く、歩く災害。

曰く、人の形をした脅威。

曰く——バケモノ。

人としての形さえも歪めるその在り方は、確かに余人にとつては異質なものとして映るだろう。

——「悪魔の実」。

誰が最初にそう呼んだのか。それを食べた者は正しく「悪魔」の如き力を手に入れることになる。

暴力的で、絶対的な力を。

巨大な炎が、周囲に熱気を撒き散らしている。

エースが展開したのは巨大な炎の壁だ。彼の技には円形に一定範囲内を囲む「炎上綱」などがあるが、今回は正面方向のみに直線の壁を展開している。

こちら側と向こう側を分断する炎。凄まじい規模の炎であるが、彼にとつては特別なものではない。この程度のものなら容易く展開できる辺り、その能力の規模が窺える。

「おいエース！」

炎の向こう側にいるはずの海兵を見つめていたエースに対し、声がかけられた。応じる形で振り返る。そこにいたのはエースが最初に出会った仲間であるデューズであった。

「デューズ。お前どこ行ってたんだ」

イスカとエースの問答が始まった時、彼はいつの間にかいなくなっていた。どこに行っていたというのか。

「馬鹿！ ルート探してたんだよ！ さっさと退くぞ！」

「退く、つてお前」

「お前ここに何しにきたのかわかってるか!？」

思わず眉を跳ね上げたエースに対し、デューズが怒鳴るようにして言葉を紡ぐ。

「戦つてる場合じゃねエだろ！ 家族を探すんだろうが！」

反論のできない言葉であった。まだ行方の手がかりさえも掴めていない、大切な家族。あの二人を見つげるためにここにいるのだ。

「……そうだな——」

そして、一度炎の壁の方へ視線を向けたその瞬間。

——風が吹いた。

それは強固な意志を纏う、貫くような風。

炎の壁を引き裂くように。

一人の海兵が、一直線にエースに迫る。

「逃さん」

眩くような言葉。だが確かにその声はエースに届いた。

炎はこの海兵にとって——イスカにとって恐怖そのものはずだ。なのに何故。

だが逡巡の時間もない。いつも通り受け流そうとするエースはしかし、*“それ”*に気付く。

金属同士が衝突したような、鈍い音が響いた。

炎の肉体を持つエースに対しては、通常の手段では触れることさえ許されない。その流体と化した体へ傷をつけるには*“覇気”*を用いるしかないのだ。

一応、その特性によっていくつか例外はあるが……まあ、今は置いておこう。結論から言うならば、エースに触れるには一つしか手段はないということだ。

そして海軍本部大尉、*“釘打ちのイスカ”*。彼女はその手段である*“武装色の覇気”*を習得していた。

「イスカ、お前」

「驚くことじゃないだろう?」

イスカの剣を弾くエース。鈍い音と共にイスカが後退し、距離を取った。

「——お前に触れるには、こうするしかなかった」

その言葉は、どんな感情で紡がれた言葉なのだろう。

何かを言おうとして、しかし言えないエース。だが時は待つてくれない。

「……………ッ!」

もう一人、炎の壁を突破してきた者がいた。だがイスカのようなスマートな手段ではなく、イスカが穿った場所を無理矢理突破してきた女海兵が銃口をデューズの方へ向ける。

イスカとは違い、「正義」のコートを着ていないが彼女もまた海兵なのだろう。デューズ、とエースが自身の相棒の名を呼んだ。

「退けそうか?」

「わかつてることを聞くなよ」

厄介だな、と呟くデューズ。そうして彼もまた自身の得物を取り出した。

激突する——そう、四人が確信した瞬間。

——小さな、何かが地面に落ちた音と共に。

閃光と轟音が、周囲を支配した。



一番ドツクから少し離れた路地裏。建物と建物の中に形成されたそこは薄暗く、そして廃棄物から少しの刺激臭が漂っていた。

「一番ドツクで火事らしいぞ！」

「海賊が出たって！」

路地から覗くことのできる大通りからはそんな声が届いている。結構な距離があるというのに聞こえてくる辺り、相当な混乱になっているようだ。

そんな光景を遠目に見ながら、エースとデューズという彼らの言う『海賊』である二人はここへ自分たちを呼び込んだ人物へと言葉を紡ぐ。

「先に礼は言っておく。……ありがとう」

「ああ。正直助かった」

視線の先にいるのは一人の女性であった。二人にとっては顔だけは知っている程度の相手だが、その立場という意味で一定の理解ができる相手。

「いえ。ただ、気にしていただけるのであれば一つお話をさせていたただきたいですけど」
「……ちやつかりしてんなア」

デュースが呆れたように言葉を紡ぐ。女性——コアラと名乗った“革命軍”の一員は人差し指を立てて小さく微笑む。

「まあ、助かったのは事実だ。話程度なら構いやしねエが」

「ありがとうございます」

「だが、一つ教えてくれ」

歩き出そうとするコアラに対し、エースが問いかける。

「不干渉って話じゃなかったか？」

「うちの指揮官の判断です。話をしたいというのも」

ああ、とエースの隣でデュースが納得した。この間の話し合いの際、体調不良でいなかったという奴のことだろう。そいつの判断ということだ。

だが、疑問が浮かぶ。話し合いは終わったはずであるし、今更何を話す必要があると
いうのか。

「ではこちらへ」

先導するコアアラに二人でついていく。背後から聞こえてくる騒ぎに対し、背を向けるようにして。

「なア、エース」

その最中、隣を歩くデューズが呼びかけてきた。

「何だよ？」

「良かったな」

何のことかなど確認する必要はない。ふざけんな、と呆れた調子でエースは言う。

「厄介な奴が戻ってきたんだぞ。何が良いつてんだ」

対し、デューズは笑みを浮かべたままだ。

「そういうことにしといてやるよ」

いや、笑みなどという上等なものではない。ニヤニヤと、こちらを揶揄うようなものだ。

「……………」

無性に腹が立った。故に。

「痛エ!？」

とりあえず蹴りを入れた。

「何すんだエース！」

「そのリーダーってのはどんな奴なんだ？」

相棒の抗議を無視し、前を歩くコアラへと問いかける。コアラは振り返りつつ腕を組み、うーん、と唸る。

「……要件人間？」

そして絞り出した回答に対し、何だそりや、とエースとデュースは二人して応じる。何となく伝わるが、同時に伝わらないという絶妙な言葉であった。

「よくわからねエが、そいつの名前は？」

肩を竦めるデュースの問い。それに対してコアラが答える。

「サボ。私たち『革命軍』の参謀総長」

「……No. 2とは大物だな」

流星に驚いた様子のデュース。その彼はふと隣の人物の目つきが変わったことに気付いた。

「どうした、エース」

「何でもねエ。……さっさと行こう」

コアラの後を追うエース。彼は一瞬だけざわついた心を落ち着けていた。

(……ありえねエ話だな)

そのリーダーの名前が偶然、かつて失ってしまった家族と同じだけなはずだ。だって彼は失われた。

あの日に失ってしまった家族なのだから。

だが、何の因果だろう。

こんな場所で、その名前を聞くことになるなんて。



消火のために職人たちが走り回り、消防の者たちも駆けつけてきている。だが幸いというべきか、負傷者はなし。

いや、一名が少しの火傷を負った。だが海兵であるならばこの程度の怪我は日常である。

そして「火拳のエース」を向こうに回してこの程度の被害で済んだというのはある種奇跡と言ってもいい戦果だ。

「――助けられたな」

消火の指示を出し終えたアイスバーグが、近くに立っていた二人の海兵へと声をかけた。彼の視線の先にある巨大な炎の壁は消火活動によりその勢いを殺しつつあるが、それでももう少し時間がかかるだろう。

「これが我々の役割です」

対し、敬礼しながら応じたのはオリンだ。唯一の負傷者でもある彼女は応急処置として火傷の手当てを受けている。とはいえ軽傷ではあるが。

「成程。例の提案もこれなら真実味が出る。……これは最早災害だ。それを起こせる個人というのも恐ろしいが、それを撃退できる力が存在するというのは安心になる」

アイスバーグが言うのは例の提案という名の決定のことだろう。炎を見つめていた視線を外し、二人の海兵へとアイスバーグは改めて視線を向ける。

「安心は余裕となり、余裕は豊かさに繋がる。……思うところがねエ訳じゃねエが、そう考えるなら悪い話じゃねエ」

余裕、という言葉はつい先ほどにも聞いた言葉だ。隣人を気遣える余裕を持てる——それこそが最大の成果であるのだと。

「まあ、悪い話にはならねエだろう。だが奴らの目的は気になるな。海賊のすることである以上、合理的に考えろって方が無茶なかもしれねエが」

「奴らについてはこの後捜索を開始します。ご協力をお願いすることになると思います

が……」

「勿論だ」

イスカの言葉に対してアイスバーグが頷く。では、とイスカが敬礼すると駆け出していった。それを見送り、オリンも言葉を紡ぐ。

「私も本部へ報告をした後に捜索に参加します。緊急の連絡は入れましたが、応援要請も含めてしなければならぬことが多くあるので。……申し訳ありませんが、こちらへ相応の規模の部隊が来ることになると思います」

「この状況じゃ仕方ねエだろう。承知した」

アイスバーグの了承に対し、はい、と敬礼と共に応じるオリン。そんな彼女の下へ一人と一羽が駆け込んでくる。

「お姉ちゃん！」

「クオツ！」

シャオとビリーだ。飛びつくように抱きつくシャオを受け止め、そして続いて突進してくるビリー。咄嗟にシャオを抱き締め、ビリーの突進を受け止めた。

中々の重さの衝撃が腕に伝わってくる。それでも倒れないのは流石に鍛えた軍人故か。

「大丈夫!? 怪我してる!」

「クオツ、クオツ！」

「うん、大丈夫。これぐらいは平気だから」

安心させるには笑顔が一番だ。故にオリンは笑顔を作った。不安そうなシャオの表情が少しだけ明るくなる。

そしてオリンだけではなく、アイスバグの下へも走り寄ってくる影がある。

「何があつたんですか!？」

「パウリー」

青い作業衣を着、ゴーグルを着けた男であつた。その人物は広がっている光景に対して焦っているように見える。

「悪いな。休みだつてのに」

「いやそれはいいんですけど、一体何が」

「ああ、それは——」

立ち振る舞いというか雰囲気的に「ガレーラ・カンパニー」でも上位の役職にいる人物なのだろう。その人物とアイスバグの会話を横目に、オリンはシャオから手を離す。

「ごめんなさい、シャオ。私たちはお仕事が入ってしまった」

「……うん。わかつてるよ」

「ありがとう」

シャオは幼いが聡明な少女だ。故にただならぬ事態が起こっていることはわかっているのだろう。

「でも、どうしようかな」

そう、問題はそれである。今からオリンはあちこちを駆け回ることになるだろう。だが、その間にこの一人と一羽をどうするかだ。

どこか安全な場所だと思つたが、“火拳”が潜伏する状況で完全に安全な場所などないだろう。ならばどうしたら良いのか。

アイスバーグたちに協力を頼めるだろうか——そう思つた時だつた。

「ビリー?」

いつからか、ジツ、と一定の方向をビリーが見つめていた。シャオの呼びかけにも応じず、まるで置物にでもなつたかのように。

「どうしたの?」

それが合図であつたというわけではないだろう。だが、彼が動いたのはその瞬間だつた。

不恰な動きであつた。普段の彼の飛行は自由でありとても綺麗だ。人を乗せて飛べるということはそれだけの技術があるということの証左である。

だがこの時の彼は違う。

「クオッ！」

地面を蹴りながら翼を羽ばたかせ、文字通り必死に一方向へと突き進んでいた。

向かう先にいるのは——仮面と衣装で仮装した二人の人間だ。

「危ない！」

駆け出すのがワントンポ遅れた。止まりなさい、という言葉が続いて吐き出される。だが間に合わない。

大人の場合によつては複数人乗せても飛ぶことのできるビリーは見た目からは想像できないほどの筋肉の塊だ。故に相応の重さがあるし、そこに速度が乗ればその体当たりは凄まじい威力を発揮する。

普通の人なら良くて骨折、悪くて——

「クオッ！」

その鳴き声には、涙が混じっているように思えた。

激突する。しかし。

「……もしかしてお前、ビリーか？」

その仮面の人物は、そのビリーの突進を正面から受け止めた。それもオリンのように堪える形ではない。一步も引くことなく、当たり前のように止めてしまったのだ。

「クオツ！」

直後、ビリーの体から電撃が放たれた。電気特有の音と共に衝撃が周囲に伝播する。普通の人間ならば一発で気絶するほどの電撃。

「あ」

だが、仮面の人物は動じた様子もなかった。代わりに衝撃のせいとその仮面が地面に落ちる。

「——え？」

その青年の顔に、オリンは見覚えがあつた。

「……なんで……」

呆然とした眩き。その視線の向こうでは慌てて「彼」が仮面を着け直している。

隣にいるシャオも呆然としているようだった。当たり前だろう。彼女も幼いながら、彼らがどうなっているのかを知っている。

だが今のオリンにそれを氣遣う余裕はない。どうして。何故。

だって、あなたは。あなたたちは。

あなたたちを、私は。

——あの日、見送ることしか。

まともらぬ思考。だが現実は変わらない。
その再会は、果たして幸福か。
或いは……別、何かか。

逃亡海兵 Water Seven ⑬

第十話 目的と理由

その人間たちのことが、大好きだった。

優しく、強くて、苦しんでいた自分たちを助けてくれた人。この体質のせいで他者から遠巻きにされてばかりの自分に対し、何の躊躇もなく触れてくる彼の存在はとて……とても、嬉しかった。

力の制御の仕方を教えてくれた。

美味しいご飯をくれた。

優しい顔で、笑ってくれた。

大好きだった。

大好きだった。

大切だった。

でもある日、彼らはいなくなつた。話す言葉の全てが理解できるわけではない。でも

何となく雰囲気で理解できる。

いつも自分と一緒にいてくれる少女——シャオと呼ばれている彼女もまた落ち込んでいた。ここまですればわかってしまう。

どこかへ行つてしまったあの人たちは。

もう、帰つてこないのだと。

毎日のご飯は変わらない。

優しく撫でてくれる手も変わらない。

でも、あの人たちだけがいない。

“一緒に行くかう”

ある日、少女がそう告げた。どこへ行くのか、何をしに行くのか。そんなもの言われなくてもわかっている。

あの人たちを探しに行くのだ。そうだ。そうしよう。そうすべきなんだ。

見つけてくれて、手を差し伸べてくれたのがあの人たちだった。

だったら今度はこっちの番だ。どこへ行つたかは知らない。わからない。でも見つけるんだ。

あの日貰つたものを、返すために。



黄色い体毛を持つ巨大な鳥。その姿には見覚えがある。

彼の「金獅子」が引き起こした戦争において戦場となつた浮島、メルヴィユ。そこで出会つた特異な体質を持つ巨鳥だ。一人どころか二人程度ならば余裕で乗せて飛ぶことができる彼はあの戦いにおいても活躍した。

「どうして……？」

思わず言葉を溢したのはウタだ。彼女はルフィにじゃれつくようにしているビリーを呆然と見つめるしかない。あまりにも想定外の存在の出現に、脳が追いついていなかった。

「でけエ鳥ツスね……あの、ペットかなんかで？」

「いや、友達だ」

ビリーの出現に驚いているザンバイの問いに対し、ルフィがそう応じる。

友達。ああそうだ友達だ。

彼は、私たちの。

「クオツ」

ビリーが一鳴きすると共にこちらへと歩み寄ってきた。そして差し出すようにして首を前に出してくる。

仮面を着け、身を隠す衣装を身につけていても。

それでも、彼にはわかるらしい。

「久しぶりだね、ビリー」

「——クオツ」

その首筋を優しく撫でる。聞こえてきた声に涙が混じっているように感じたのは、気のせいだろうか。

「お兄ちゃん!!」

そして、もう一人。文字通り突撃するように飛びついてきた影があった。

小さな体。それは一直線にルフィの下に向かっていく。

「お前——」

シャオ、と彼がその少女の名前を呼んだのと同時にルフィと少女が接触する。ルフィがシャオを受け止めた格好だ。

「会いたかった！ 会い、たかった……！」

ルフィの体を精一杯抱きしめるシャオ。その手からは絶対に離さないという意味が伝わってくる。

「シャオまで」

思わず呟いたウタ。そこでふと視線を横に向けた彼女の視界にその人物が映り込む。

呆然とした表情でこちらを見ている一人の女性。見覚えのあるその姿を見て妙な納得を得た。シャオとビリーがここにいる理由は彼女か。どういう経緯かはわからないが、彼女がいるならば納得もいく。

「
」
目が、合った。

そこにいたのは、かつての部下であり。

自分達を、あのシャボンディ諸島から送り出してくれた人。
置き去りにしてしまった人が、そこにいた。



——銃を向けるべきなのだろうかと、他人事のように思った。

自分は海兵であり、そう在ることを決めたから未だに海兵のままここにいます。コートを着ることができなくなった半端者であるが、それでも義務は果たさなければならぬ。

だが、できなかった。できるはずがなかった。

家族から逃げ出したという理由だけで銃を取った半端者。そんな人間に道を示してくれたのがこの人たちなのだ。

銃など向けられる、わけがない。

「……………」

咄嗟に言葉が出そうになるのをどうにか堪えた。ここで言葉を紡いでしまえば自分 は行動しなければならぬ。それがわかるくらいに理性はあつた

それに今の状況もだ。ただでさえ海賊との戦闘が起こり、混乱している現状で更なる問題を引き込むわけにはいかぬという計算が浮かんでしまった。

(背を向けよう)

幸いなのはシャオとビリーについてだろう。あの二人の側にいるならきつと大丈夫。任せてもいい。

冷静に考えるならば穴だらけの論理なのだが、そこに気付けるほどの余裕が彼女にはなかった。

——出会わなかった。それでいい。

それで、いいはず。

自分自身へと言い聞かせるようなその言葉を内心で何度も呟き、背を向けようとして。

「オリン」

できなかつた。

「……………ッ」

背を向けたく、なかつた。

これが海兵として、してはならぬことであると知っていても。

それでも、私は。

「お久し振り、です」

そう、言ってしまった。

後悔すると、わかっていたのに。



沈黙が周囲を支配する。眼前、少し離れた場所で銃を下げた女性は何かを堪えるような表情でこちらを見ていた。

彼女が海兵を辞めなかったことはかつての部下から聞いている。そしてそれだと思つてもいた。彼女自身が残る意思を持つて残ったのであれば、それでいいと。

彼女に対して二人が持つ感情は感謝、これに尽きる。あの状況において自らを顧みず、海に送り出してくれた彼女。その後起こり得た可能性を考えるならば彼女の行為はあまりにもリスクが大きく、それでも彼女はその献身を示してくれたことには感謝しかない。

「知り合いですか?」

「……うん」

ザンバイの問いかけに対し、ウタは頷きを返す。続いて部下という単語が出そうになつたところで彼女は言葉を止めた。

今の自分達は最早海兵ではなく、そして彼女は海兵のまま。部隊における部隊長二人とその副官であつた彼女という関係はとつくに破綻している。だが、だからと言つて

敵とは言いたくなかった。

甘えなのだと思う。賞金首と海兵。『神』に逆らった存在と『神』に従う存在。それは相容れぬはずであり、この場で銃口を向けられて然るべきなのだ。

でも、そう言いたくなかった。だって、彼女は。

あの日、命を懸けて自分達を——……

「友達だ」

迷うウタとは違い、当然のようにルフィがそう言った。その時の声に僅かな揺れを感じ取ることができたのは、ウタと彼の長い付き合い故だろうか。

「うん、そう。——友達」

視線の先にいるオリンの体が震えた。その顔は今にも泣き出しそうなほどに弱々しい。

あの顔にウタは見覚えがある。あれはそう、彼女が初めて自分達の部下として配属された時の任務。そこで歌う自分を見る彼女の表情があんな風だった。

「この子達も、ね」

オリンの表情には気付かぬ振りをして、ウタはしゃがみ込見ながらルフィに抱きついているシャオの頭を撫でる。彼女の瞳からは大粒の涙が溢れていた。

「……お姉ちゃん……？」

「うん。そうだよ」

「――！」

まるで突撃である。勢いよく抱きついてきたシャオを受け止め、その背中を撫でる。声を上げず、彼女は泣いていた。

そして再びオリンの方へと視線を向ける。互いに言葉を探している状態だ。だが、何を口にすればいいのか。

あの頃は、こんなことで悩むことなどなかったのに――

「クワハハハハ!! 大騒ぎだな!!」

そんな空気を切り裂くように、大きな笑い声が響き渡った。その場の者たちのほとんどの視線がそちらへ向く。

一言でいうならば、鳥人間というべきか。二足歩行の鳥人間がスーツをばっちり着ているというのに妙に様になっている。

予想外の人物の登場にウタは驚く。電話越しで話をしていたくらいだ。別の場所にいるのだと思っていたのだが。

「……モルガンズ」

そんなウタの隣で呟いたのはルフィであった。だがその声に動揺はない。警戒心こそ宿っているが、この場に彼が現れたことに対して驚きがないようだ。

そして後方から二人の男が歩いてくる。一人はまだ若い、ウタたちとも年齢が変わらなさそうな青年であり、もう一人は――

「ここで騒がれる方が厄介だろう？ 大人しくしておけ」

――あの時、自分達とモルガンズを引き合わせた男であった。
「礼は必要ない。貸しだと思え」

一瞥と共に言い切ると、男はモルガンズの方へと歩いていく。その隣の青年が小さくこちらへと頭を下げた。

「こいつは事故じゃねエなア……？ 海賊が暴れたと見た！」

「あなたのことです。知っていてここに来たんでしょう？」

何とも露骨な言葉に対して応じたのはオリンだった。彼女は一瞬だけこちらへと視線を向けてくる。

その瞳に宿る感情と想い。それはあまりにも複雑で。

とても、一言では表現できない。

「これはこれはご婦人、妙なところで会うもんだ。観光か？」

「答える義務がありますか？」

「冷たいねエ……仲良くしようぜ？ おれたちはあんた方と喧嘩するつもりはねえんだ」

「……どの口が」

モルガンズとオリンのやり取り。普段からルフィとウタという彼の標的にされやすい二人の側にいるということもあり、オリンとモルガンズもある種顔見知りの関係だ。その扱いや対応についても手慣れたものである。

まあ、彼女の場合は初めからマスコミ対応についてはどこか慣れた部分があったのだが。

「大尉殿はうちの客だ。営業妨害は止めてもらおうか」

「おお、Mr. アイスバーグ。久し振りだ。この間の進水式以来か？」

「何をしにきた？」

「何をも何も、おれはジャーナリストだ。事件が起これば顔を出すさ」

そしてオリンの隣に一人の男性が歩み寄ってきた。察するにアイスバーグというらしいが……。

「——悪いな。随分と大きなトラブルがあったらしい」

だが、彼らの会話を聞くことができたのもそこまでだった。パウリーがこちらへと走り寄ってきたのだ。

「何があつたの？」

「どうもとんでもねエ海賊が暴れたらしい。幸い被害はそこまでだが、これからうちも協力した上でその海賊の搜索を開始する。ここまで来てもらつておいて悪いんだが……」

声に焦りのようなものを含んでパウリーが言う。おいおい、と声を上げたのはザンバイだ。

「うちの客人をここまで歩かせといてそりやねエだろ」

「だから悪いと思つてる。すまねエ」

頭を下げてくるパウリー。こつとも真摯に頭を下げられると責めるのも憚られる。まあ、元よりそんなつもりはなかつたが。

「わかつた」

「すまねエ。フランキーのどこにいるんだろ？　後で話ができる人間を向かわせる。カクの奴もまだ帰つてきてねエしな」

そしてパウリーはもう一度頭を下げると、慌ただしく駆け出して行つた。その姿を見送つた後、どうします、と問いかけてきたのはザンバイだ。

「どこか行きてエところがあるんなら案内しますけど……」

「いや、いいよ。それより」

ルファイがシャオの方へと視線を向ける。しゃがみ込んでいたウタへ抱きついて泣いていた彼女は今は泣き止んでいるが、しっかりとウタの体を抱き締めていた。抱きつかれているウタ自身も思うが、これは離れてくれそうにない。

「確かお友達、なんスよね？」

「うん。大事な友達」

シャオがこちらの服を握る手の力が強くなった。それを見て何かを察したのか、あー、とザンバイが声を漏らす。

「じゃあ、うちに来ますか？ いや、その子がいいならなんスけど」

「シャオ、どうだ？」

「……行く」

声は小さいが、明確な回答だった。わかった、とルファイがシャオの頭を撫でる。

「ビリーもだな」

「クオツ！」

ルファイの言葉を受け、嬉しそうに体を擦り寄せるビリー。その体をルファイが撫でると、彼は嬉しそうに鳴いた。

「あとはオリンに伝えて——」

シャオとビリーの保護者はおそらくオリンなのだろう。故に彼女へ伝えなければと

思ったのだが、そこでオリンと視線が合った。

——小さな、一礼。

それだけで伝わる。伝わるだけの信頼はまだ、そこにあった。

「行くう」

それは隣のルフィも同じだったらしい。一つ頷くと、ウタたちは新たに加わった一人と一羽を連れて歩き出す。

ただ、その途中。

「……………」

ウタもルフィも、ある一方向へと視線を向ける。

未だ残る火。消火活動が行われているが存在感を放つその火は、パウリーの言う『とんでもない海賊』とやらがやったのだろう。

あの規模の炎。やった海賊は余程の武器を持っていたのか、或いは能力者か。ただ、巨大な火を発生させる能力者の存在に二人は心当たりがある。

——まさか。

そんなはずがない、と思う。

大海賊、〃白ひげ〃が動いているなどという話を聞いてしまったせいだろう。あの義兄がここにいるわけがないのだ。

それに、もしいたとしても。

——助けて欲しいなどと、言えるわけがないのだから。



そこは無数の残骸と呼ぶべきものが転がる場所であつた。文字通りの瓦礫の山。船に関係するものが多いのはこの島の特性故だろうか。

この場所を住民達は『廃船島』と呼ぶのだという。ここに来る途中で教えられた。

「基本的に住民もあまり近づかねエらしい。話をするにはもってこいだ」

案内されたそこにいたのは、一人の男であつた。年齢のほどはエースと変わらないぐらいだろうか。思ったよりも若いその見た目にデュースが驚く。

「あんたが革命軍の参謀総長か」

「そう言うあんたはマスクド・デュースだな？」

自身の名を知られているという事実に、デュースは少し警戒心を抱く。それに気付いたのだらう。眼前の男は帽子を被り直しながら言葉を紡いだ。

「そう警戒しないでくれ。あの『火拳』の相棒を知らねエ方がおかしいだろ？」

イマイチ自覚が薄いのが、デユースは白ひげ海賊団二番隊隊長、『火拳のエース』がつて率いた海賊団のNo. 2であり今も彼が信頼を寄せる相手である。周囲からすればその名は十分警戒するに値する。

「そりゃ光栄だ。おれみてエな奴が『革命軍』にまで名前を知られてるとは」
「控え目だな」

小さく男が笑った。そして彼は一つ咳払いをすると、真剣な表情を紡ぐ。

「では、改めて。おれは『革命軍』参謀総長の——」

「——サボだろ」

遮るようにその名前を呼んだのは、男の姿を見てからずっと黙っていたエースであった。どこか乾いた——否、無理矢理感情を抑え込むようなエースのその声色にデユースも

違和感を覚える。

「コアラが？」

「うん。名前だけは」

彼の問いに、サボの後ろに控えていたコアラが応じた。成程、とサボが頷く。

「名前を知るのは対話の第一歩だ。初めまして、『火拳のエース』」

「……初めまして、ね」

相変わらずの乾いた声。普段の彼らしくない言葉にデューズも少し困惑する。

「単刀直入に言うが、話がしたい」

だが、そもそも普段のエースを知らないであろうサボは気付かないのだろう。そのまま真剣な表情でこちらを見ていた。

「あの場を離れる手助けをしてくれたのは感謝するが、何を話すんだ？ 互いの不干渉については約束したつもりだったが」

「目的についてだ」

その言葉に眉を顰めるデューズと、僅かに気配が殺気立つエース。

だが、落ち着いてくれと相棒に内心で祈るデューズの心境に気付くことなくサボは言葉が続けた。

「海賊つてのも色々だ。奪うことしか考えてねエ奴、生きるために仕方がねエ奴、何か目的を持って海に出た奴」

あの“海賊王” 処刑の日から二十年近い年月が流れている。当初は“ひとつなぎの大秘宝”を手に入れるために海に出た者も多かったが、昨今ではその事情も様々だ。

誰もが夢と浪漫に向かつて生きられるわけではない。現実だけを見て海に出た者だつて大勢いる。

「だがまあ、海賊になった理由なんてのはどうでもいい。重要なのは話ができるかどうかだ」

「話ねエ……」

「そうだ。『白ひげ』は話ができる相手だとおれたちは考えている」

ピクリと、エースの眉が動いたのをデューズが察した。近くに爆弾があるような感覚を覚えながらも、あくまで冷静にデューズは言葉を紡ぐ。

「話つてのはなんだ？ まさか手を組もうつてか？」

「まさか。できても精々が互いの不可侵を約束する程度だろ。お互いの在り方が全く違う」

「そりやそうだ。海賊と『革命軍』じゃ向いてる方向が違い過ぎる」

「——だからわからねエ。何故あの二人を追う？」

その視線の鋭さが増した。これが世界政府を敵に回す『革命軍』のNo. 2の圧力かと、どうでもいいことをデューズは思う。

決して気配が弱いわけではない。だが彼は普段あの白ひげ海賊団の一員として過ごしているのだ。最早同じ人間なのかどうかさえも怪しい奴など数え切れないほどに見てきている。今更気圧されるようなことはなかった。

「目的を聞きたいってんなら、まずはそっちから話すのが筋じゃねエか？」

「……まあ、一理あるな。だがおれたちの理由は単純だ。あの二人を『革命軍』に引き入れたい」

予想通りの回答ではある。というより、それ以外の回答が出てきたら驚くところだ。「理由も単純だ。今のあの二人は反『天竜人』の象徴とでもいえるべき存在になりつつある。おれたちのコントロール外でいくつも暴動が起こっているくらいだ。全てってわけじゃねえだろうが……」

「それを取り込みたいってわけか」

「同時に保護もしたい。あの二人が害されるのは避けたいからな」

思ったよりも冷徹な男だ、とデユースは思う。端的であるがその言葉は力強く、迷いが無い。まあ、情だけで世界政府を相手に戦うことなど不可能だろうが。

「その考えは」

そこで、ずっと黙っていたエースが口を開いた。その口調はいつもより重く、深い。「お前らのリーダーの考えか？」

「いや、おれが提案した」

「——そうか」

帽子を被り直すエース。彼がどんな表情をしているのか、帽子に隠されてわからなくなってしまう。

大丈夫か、と内心でデューズが思ったその刹那。

——デューズの背筋に、強烈な悪寒が走った。

それは本能的なものだろう。そして同時にこの場では彼しか感じなかったものでもある。エースと長い付き合いである彼は今の相棒の状態を察したのだ。

爆発寸前の火山——本能が危険を訴えてくる。

これは、まずい。

「話はわかったが、その辺は正直予想できる範囲だ。だから疑問がある」

「答えられる範囲なら答えるが」

その爆発を避けようと、デューズはサボとの会話を続ける。眼前のサボとその後ろに控えているコアラはエースの様子に気付いていない。最悪だ。

「おれは直接会ったことがねエから予測だが、あの二人がすんなりそつちに合流するか？」

「それはお互い様だと思うが……まア、そうだな。その場合は——」

正直、これを避けるのは不可能だったと後にデューズは語る。

結局のところ、遅いか早いかだけの違いしかなくて——

「——縁がなかった、って奴だな」

何か割れるような、異質な音を聞いた気がした。

サボの表情が変わる。だが彼が何か動きを見せる前に、足元の木の板を踏み砕きながらその男が前に出る。

「いつまでフザけてるつもりだ」

その体から溢れるように、噴き出すように揺れる炎。

まるで彼の感情を投影しているかのようなその炎が、周囲へと伝播する。

「おいエース——」

制止は間に合わなかった。最短距離をその炎は突き進む。

早いわけではない。むしろその歩みはゆっくりとしたものだ。だがそこに割って入る者などいかなかった。

「目的だと？ 何を——何を言ってるやがる!!」

まるで吠えるように炎が舞う。伸ばされたエースの腕。それをサボが掴み返す。

一瞬の拮抗。だがそんなものは些細なものだと言わんばかりにエースが吠える。

「ルフイは!! ウタは!! 弟だ!! 妹だ!! 家族だ!! フザけてんじゃねエぞサボ!!」

「……家族？ それは——」

「おれたちの家族だろうが!! それ以外に理由なんて必要ねエだろ!!」
拳が振り抜かれた。鈍い音が響き渡る。

「サボくん!」

「大丈夫だ! 下がってろ!」

振り抜かれたエースの拳を、サボはしかししつかりと腕でガードしていた。その衝撃に逆らうことなく、彼は少し後方へと引き下がっている。

「……話し合いのつもりだったんだがな」

そしてサボが構えを取った。そんな彼に対し、エースが足下にあつた鉄パイプを放り投げる。

それを咄嗟に掴むサボ。その姿を確認すると、エースはその腕に炎を纏う。

「お前の武器だろ」

「……さつきから何を」

「こつちの台詞だ」

両者が睨み合う。そして。

——凄まじい衝撃が、空を切り裂いた。



曰く、三流のゴシップ誌。

曰く、世界で最も広く流通する情報誌。

曰く、第四の権力。

世界経済新聞の呼び名は様々であり、その中身の受け取り方についても様々である。だがそれは裏を返せばそれだけ様々な解釈ができる人間の手に渡っているということでもある。

情報はその受け取る側の能力も必要だとは、どこの誰の言葉だろうか。目の前の男かもしれないと、そんなことをオリンは思う。

「クワハハハ！ 色々と大変そうだなア、Mr. アイスバーグ！」

「そう思うなら帰れ」

「そりやできねエ相談だ！」

モルガンズとアイスバーグ。ある意味において世界の上位の立場にある二人の会話は一見すると気安いが、その言葉の裏には様々なものが含まれている。自分にはとても

全ては推し量れないほどに。

「それで？ ジャーナリストが欲しがる情報なんてねエと思うが。海賊が暴れて大尉殿たちが撃退した。今からその捜索に入る。それだけだ」

「んん、まあ『火拳』については記事にするさ。つってもパンチが少々弱エがなあ」

クワハハハ、と笑うモルガンズ。本当に性質の悪い男だと思う。

「そこまでわかつてるんなら十分だろう」

「いやいや、そいつはおまけさ。——なあ、ご婦人？」

モルガンズの視線がオリンの方を向く。何がです、とオリンは正面から視線を返した。

「私は忙しいのですが」

「そりやあそうだろうとも。——何せ元帥直々の特使様だ」

表情に出さなかつた自分を褒めたい。甲高い口笛の音が響いた。

「流石だなご婦人。実に冷静だ」

「……褒められていると受け取っても？」

「勿論だ！ おれは嘘を吐かねエからな！」

——どの口が。

隣のアイスバーグと、心が通じ合ったような気がした。

「まあ安心しろご婦人。別に記事にするつもりはねエ。意味もねエからな」

「どういうことだ?」

「簡単な話だ、Mr. アイスバーグ。この情報はどの道表に出る話であり、それを先に暴露したところで大したスクープにもならねエ。事件でもなんでもねエからな。そんな情報を先出して政府に睨まれるデメリットの方が大きい」

肩を竦めるモルガンズ。その彼に、では、と問いかけるのはオリンだ。

「あなたは何をしにここにへ?」

「ジャーナリストに何をしにという問いかけはナンセンスだ。何かがあるかもしれないからここに居るのさ。だがまあ、今回に限っては少し違う」

その瞳がオリンを捉える。それはまるで、こちらを射抜くかのようで。

「——ご婦人は知っているだろう?」

まさか、とオリンの背筋に悪寒が走った。先程見かけた彼らを、この男は——

「大変だ!! 廃船島で火災が!!」

そして、それを切り裂くような声が割り込んできた。息を切らしながら叫んだのは一人の男だ。背格好からしてこの街の住民か。

周囲が俄に慌ただしくなる。それを横目で見ながら、心底楽しそうに男は笑う。

「クワハハハ！ 次から次へと飽きないもんだ！」

その男だけが、楽しそうに笑っている。

ただ一人、傍観者であるかのよう。

だが、誰もこの時は知らなかった。

——これはまだ、始まりでしかなかったことを。

逃亡海兵Water Seven⑰

第十一話 かつてそこにあつたもの

向けられているのは複数の銃口だ。取り囲むようにしてこちらへ向けられたそれらを一瞥し、マスクド・デュースは一度息を吐いた。

「やめとけよ」

近くにあつた船の残骸へと腰掛けながらデュースは言う。コアラという女性を筆頭にこの周囲に身を潜めていた「革命軍」の構成員と思しき者たちが銃口を向けてきているのだ。

「海賊相手には死すら脅しにならねエ。銃向けられる程度のこととは日常だ」

「「火拳」を止めて」

肩を竦めるデュースに対し、硬い声でそう言葉を紡いだのはコアラである。デュースは彼女へ視線を送った後、凄まじい轟音と衝撃を撒き散らしながら戦う二人の男の方へと視線を向ける。

大海賊「白ひげ」の二番隊長、「火拳のエース」。

その実力の凄まじさを誰よりも知る人間のうちの一人こそがデユースだ。そして同時にその気質を知り抜いている彼はだからこそコアラの要求が不可能であることを知っている。

「そいつは無理だな。ああなつたら止められねエ。……一応警告しとくが、撃つのは止めておいた方がいいぞ。その瞬間に後戻りはできなくなる。お互いにな」

幾つもの銃口を向けられながらもデユースはあくまで冷静だ。しかし、表面上は余裕な彼も内心はそうはいかない。

（ああくそ、あの馬鹿……！　「革命軍」と戦争する気かよ!?）

相対する「革命軍」たちに告げた言葉に嘘はない。ああなってしまったエースを止める方法をデユースは知らないのだ。何せエースという男はあの白ひげを前にしても退かなかつた男なのだから。

その理由について、デユースは確信に近いある仮説を持っている。ポートガス・D・エース。彼は今の時代を創つたあの男の――

「先に手を出したのは貴様らだろう！」

声を上げたのは銃を構える者たちのうちの一人であつた。右手側の男を正面に見据える形にデユースは座り直し、素直に頷く。

「それはごもつともだ。だが忘れてねエか？ おれたちは海賊だぞ」

そう、海賊。無法者。やりたいように生き、やりたいように死んでいく嫌われ者。それが自分たちだ。

「海賊を相手に道理を説くのはまあ、正直お薦めできねエな」

「貴様……！」

男のみならず、他の者たちの視線が鋭くなる。唯一、コアラだけが難しい表情をしていた。

(さて、どう逸らすか)

正直、デユースに彼らとやり合う意思はない。なんなら今すぐエースをぶん殴って逃げたいくらいだ。できないだけである。

故に次善の方法を模索する。理想は向こうがひと段落ついたところで撤退だろうか。

(永遠に時間を稼ぐ必要はねエ。そう時間も経たずにその時は来るはずだ)

これだけ暴れているのだ。人目を引かないはずがない。故にそれまで決定的な衝突をしないようにすることが最善だろう。

思考が確定すれば後はやるだけだ。……エースと共にいると毎回こんなことばかりな気がする、とどうでもいいことをデユースは思う。

「どうもそちらの参謀総長さんはエースの地雷を踏んだらしい」

「地雷って……どういふこと？」

「さアな。推察はできるが確証はねエ。だが、その前にそちらの疑問にも答えておこう。——今回、おれたちがあの二人を追っているのはエースの家族だからだ」

家族という言葉に「革命軍」たちの間で困惑が広がった。それはそうだろうと思う。この話を聞いた時、白ひげ海賊団でさえも困惑するしかなかったのだから。

「『火拳』がドラゴンさんの子供だとしても？ それに『歌姫』は『赤髪』の娘のはず」「血は繋がってねエんだと。おれも何もかもを聞いたわけじゃねエが、子供の頃の結構な時間を同じ場所で過ごしたそうさ。そこで盃を交わしたらしい。義理の兄弟だってな」

どんな魔境だと呆れる話である。「火拳」に「麦わら」に「歌姫」。その怪物たちが同じ場所で過ごし、家族として過ごしていたなどと。

しかもエースは東の海の出身だ。……『最弱の海』の名が聞いて呆れる。

「おれたち白ひげ海賊団は家族を何よりも大切にしている。だからここまで来た。あいつの家族を助けるために」

これは嘘偽りのない本音だ。必死に頭を下げるエースに対し、だからこそ彼らは手を貸すと決めたのだから。

「ただ、その中で一つ気になることがある。ここに来る途中、あいつは言っていた。兄二

人と弟一人、妹一人。そういう兄弟だったと」

——嗚呼、そうか。

自分で言葉にして、ようやくデユースもそこへと思い至った。

(だから……お前は)

許せなかったのか。

大切な家族だからこそ。

どうしても、我慢ができなかった。

「なア、教えてくれ」

コアラの方へと向き直りながら、デユースは問う。

「——あいつは何者だ？」



自分で自分がわからなくなるような感覚だった。

右の拳。そのまま内へと身を捻って体当たり。それを横に避けると、追いかけるよう

にして回し蹴り。そしてそれをわかっていたように鉄パイプで受け止める自分。

……昔から不思議に思っていたことがある。

力をつけるために“革命軍”で様々な武器の訓練をしたが、最も手に馴染むのは本来武器ではない鉄パイプだった。それもどこにでもあるような、誰にでも手にできるようなもの。

戦い方は体が覚えていた。荒つぼくて非効率、しかしこと生き残るための戦い方としては正しいとある人物には評される。

失った記憶。ドラゴンに拾われる前の自分が何者であったのか。きつとここに答えがある。

——サボという存在は、どんな人物だったのか。

——彼の人生は、どんな色をしていたのだろうか。

わからない。思い出せない。

ただ、それでもいいと思っていた。“革命軍”の一員として生きることには後悔はないし、この先もすることはないだろう。過去がどうであれ、今が大切なのだと。

「どうしたサボ?! その程度か!」

だが、眼前。炎を纏う男はこちらを睨み据えながら激情をぶつけてくる。

——彼は知っているのだろうか?

今のサボになる前の、かつての「サボ」を。

「遅エ!!」

迷いが致命的な隙になった。ガラ空きになった胴。そこへ「火拳」の全力の拳が叩き込まれそうになる。

避ける暇はない。せめて少しでもダメージを減らそうと後方へ——そう判断した思考とは真逆。

——体は、勝手に踏み込んでいた。

鈍い感触は二つ。一つは自分の腹。もう一つは。

全力で振り上げた、右足だ。

「!!」

拳を腹で受ける代わりに、相手の腹へ蹴りを叩き込む。ほぼ同時の一撃。痛み分け。衝撃で互いに後方へと弾かれる。ごほ、という音と共に血の混じった空気が漏れた。

(今の、は)

思考を肉体が完全に無視した。そうではないと、この体が訴えているかのようで。

「……………ツ」

ズキリと、頭に痛みが走った。最近よく起こる頭痛だ。

「おー、今日はサボの勝ち越しだね。26—24。ルフィは相変わらず全敗だけど」

幼い少女の声。聞き覚えのある声。——誰の声だ？

“くつそー！ おれが十歳になったらお前らブツ倒してやるからな！”

幼い少年の声。こちらにも聞き覚えがある。——誰の声だ？

“その時やおれたちは13だ。相変わらず馬鹿だな”

そしてもう一人。こちらもまた、聞き覚えのある声。

誰——いや、わかる。これは。

“お前もそう思うだろ？”

今、目の前にいる男の。

“サボ”

あの男の——幼き頃の顔。

何なんだ、これは。

わからない。けれど、わからないで済ませてはいけないような気がする。

——そこに、いるのか？

かつての自分。失ってしまった過去。

お前は、“サボ”は。

その場所に……いたのか？

「縁が、ねエだと?」

眩くようなその言葉が、意識を現実へと引き戻した。

肌を焼くような熱気。吹き抜ける風は熱を纏い、それだけで生命としての本能が危険を訴えてくる。

原始より火とは人類と共にあった。人はその熱と輝きを利用し、同時に恐れも抱きながら歩んできたのだ。

「フザけてんじゃねエ!!」

一際、その炎の勢いが増す。巨大な火柱の如く噴き上がるその炎は、まるで彼の激情を表しているかのようで。

それだけの感情を向けられるほどの過去がそこにあったのかと、そんなことを思う。

「『竜の鉤爪』」

冷静な思考は退くことを勧めていた。そしてそれはきつと正しい。

でも、違うと思ったのだ。

ここにいる自分か、或いは失ってしまった『サボ』がそう言っているのか。

退いてはいけないと。進まなければと。そうでなければ。

——大切なものを失うと、本能が告げていた。

炎が「火拳」の右腕に収束し、更に拳へと集まっていく。超高温のその右の拳は、煌めくように輝いていて。

まるで太陽のようだ、と。

そんなことを、少し思った。

「「火拳」!!」

そして、その代名詞たる技が放たれる。人間一人どころか船でさえも容易に沈めうる力がサボへと迫る。

対し、サボは前に出た。冷静な思考を全て黙らせ、胸の内の衝動に身を任せて前へ出る。

そして、次の瞬間に。

太陽のような輝きを放つ炎が、周囲の全てを飲み込んだ。



なア、サボ。あれから色々なことがあったんだ。

お前がいなくなつてからも、ルフィとウタと一緒に海に出る未来を想像して過ごしてた。毎日が薔薇色つてわけじゃねエが、悪くない日々だったと思う。

あの日から七年経つて、ルフィとウタに見送られて海へ出て、流れ着いた島で遭難して。そこで「メラメラの実」を食つちまつた。何が起こるかわからねエもんだよな。

それで、その時にデューズつて仲間にも出会つたんだ。あいつ、名前は捨てたなんて言うからおれが考えたんだぞ？ その時から少しずつ仲間も増えて「スピード海賊団」を立ち上げて……結構なお尋ね者になつちまつた。まア、約束通りだ。強くなつて海賊になる、つて約束のな。後悔なんて勿論ねエし、むしろこの程度じゃ足りねエとすら思つてた。

ただ、ルフィとウタは海賊にはならなかつたんだ。最初は驚いたが……まア、ルフィらしいと思う。別にいいさ。海賊だろうが海兵だろうが、あいつらがちゃんど笑つてられるんならな。……「七武海」をぶつ飛ばしたつて聞いた時は流石に驚いたが、おれたちの弟と妹だ。それぐらいはやるだろう。

おれの方は妙な海兵——イスカつてんだが、そいつに何度も追われたりしながら旅をしてよ。そのイスカが「七武海」への推薦を持つてきた時は流石に驚いた。……なる

気なんてなかったが、その時にも色々あった。

彷徨うような生き方だったと思う。がむしやらに突き進んでた。そして——出会う
たんだ。

この背中の誇りに。出会うことができた。

ようやく、見つけることができたんだ。

——なア、サボ。

話してエことが、いっぱいあるんだ。

ルフィもウタもあると思う。でもその前にあいつらを助けなきゃならねエ。このフ
ザけた世界の仕組みのせいで苦しんでるあいつらを、おれは助けたいんだ。

だってあいつらは、おれの「家族」だ。

生きていて欲しいと——そう、言ってくれたんだ。

おれだってそうだ。あいつらに生きていて欲しい。幸せに……なって欲しい。

おれなんかと違って、光の道を歩いてきたあいつらには。歩けるはずだったあいつら
には、そうなって欲しかった。

お前だってそうだろ、サボ？

だってお前は、おれにとつて最初の「絆」だ。この「絆」が宝だと言ったのはお前
じゃねエか。

だから。

——だから。

「縁が、ねエだど？」

お前が、そんなことを言うなよ。

あつたじやねエか。恵まれた生活じゃなかったかもしれないねエ。クソつたれなゴミ山での生活は、きつと他人から見れば碌でもねエんだろう。

それでもおれは——幸せだった。

お前らが、“家族”でいてくれたから。

おれは、あの日々を。

「フザけてんじやねエ!!」

だから、否定はさせねエ。お前にも何かがあつたんだろう。おれが知らない道を歩いてきたんだろう。それはいい。元々そのつもりだったからな。お前が海賊じゃねエことも、生きていたくせに黙つてたこともどうでもいい。そうなる理由があつたんだろ。

だが、それだけは許せねエ。

おれたちの間に確かにあつたものを。あの日々を否定することだけは。

絶対に——許さない。

「“火拳”!!」

——なア、サボ。

話してエことが、いつばいあるんだ。

でも、その前に。

一発、全力で殴らせてもらう。

話は……それからだ。



「消火を急げ!!」

「周囲に気をつける! 街までは来ねエと思うが住民たちも伝えるんだ!」

「まだ近くにいるかもしれない! 気をつける!」

大騒ぎの聲が聞こえてくる。路地裏の奥からその声を聞いていた二人の海賊のうち、マスクをした方がその声のする方へと視線を向ける。

「ありやイスカじゃねエか。既にこの奴らを掌握してんのかよ」

視線の先、おそらく“ガレーラ・カンパニー”の職人たちが動き回る中で“正義”の

コートを纏う海兵がいる。彼女は一步引いた位置におり、その上で声を張り上げていた。

「消火についてはそちらに任せたい！ 私は下手人を探す！ まだ近くにいるはずだ！」

『クルツポー。ならそちらにも手を貸す。何人かうちの社員を連れていくといい』

「ありがとう。ではすまないがここは任せたい」

……なんか鳩を肩に乗せた男がいる。気のせいじゃなければ、鳩が喋っていたような。

「長居はできねエな。……なア、エース」

「……………」

振り返る。すると、相棒たる男は壁に寄りかかって黙り込んでいた。その彼に対して呆れた様子でデユースが問う。

「反省してるのか？」

「いやそれは別に」

「しろよ！ 危うく殺されるとこだったんだぞ！」

「お前なら大丈夫だろ？」

「信頼は嬉しいがそれはそれ、これはこれだ馬鹿野郎」

つたく、とため息を溢すデユース。彼の視線の先にいるエースは左の頬に応急処置と

して治療が施されており、大きく腫れ上がっていた。

「オヤジ以来じゃねエか？　そうして顔面をぶん殴られるのなんざ」

「昔の話だが、サボはおれとの勝負はほぼ互角だった」

「化け物しかいねエのかお前の義兄弟には」

五億を超える賞金首であるエースの実力はデュースもよく知り抜いている。幼少期であるとはいえ、その彼と互角であったとはどんな化け物だ。

そして実際、あの「火拳」の炎を突き破って肉薄し、それに反応したエースと相打ちの形で互いの顔面を殴り飛ばすところにまで持つていったその実力は本物だ。遠目に見ていたが、「火拳」を前にして一切退かずにむしろ全力で前へと踏み込んだ胆力は異常である。

「……………」

エースの表情は優れない。それもそうだろう。相打ちとなり、吹き飛んだ二人。そして立ち上がるうとした彼らのところにデュースが予想していたものが来たのだ。

——即ち、暴れる賊を排除しようとする者たちである。

撃ち込まれたのは無数の砲弾であった。主にエースを狙ったものであったが、数が数だ。「革命軍」もデュースも対処を迫られる。

とはいえ、エースもデュースも無法者たる海賊である。大砲の砲門を向けられること

など珍しくないし、何なら寝ている時に囲まれて砲撃に晒されたこともあるくらいだ。それに比べれば今回は対処もそう難しくなかった。

砲撃の音と共に前に出たのはエースだ。彼は即座に手を振るうと、巨大な炎の壁を出現させた。

文字通りの壁。向こうとこちらを断絶するそれにあたった砲弾は熱で溶け、爆発する。そして同時にその炎は目眩しにもなった。その隙にその場を離れ、今に至る。

(イスカといい「革命軍」といい、不完全燃焼だな)

どちらも横槍を入れて決着も曖昧になっている。いやそもそも戦うなという話だが、前者は向こうから喧嘩を売ってきたから仕方がない。海賊だからという理由もあるが。

「とりあえずさっさと移動するぞ。宿は多分……手が回ってるかなこれは」

いつの間に掌握したのやら、「ガレーラ・カンパニー」の職人たちを指揮しているのはイスカだ。この職人たちが海賊相手でも引かない強者揃いであることは有名である。それを纏めているとなると正直厄介な相手だ。

そもそも真つ直ぐ過ぎてあしらうような形になることが多かったイスカだが、彼女自身の実力も相当なものである。いつの間になら「武装色の覇気」まで習得しているし、まあ厄介な存在になったものだ。

「さて、どこに身を隠すかね」

敢えて聞かせるために呟いているのだが、エースの反応はない。聞こえているのか、いないのか。

全く、とデュースは息を吐いた。そしてあのコアラという女性から聞いた情報を口にする。

「——記憶喪失、だそうだ」

えつ、とエースが顔を上げた。デュースはそんな彼に対して頷きを返す。

あの時、何者かという問いをデュースは口にした。それに対し、コアラは言ったのだ。革命軍参謀総長たる彼。彼はかつてドラゴンに拾われたが、それ以前の記憶がないと。

そしてその上で彼女は言ったのだ。

「サボくんは私たちの大切な仲間。それだけは確か」

その言葉に不安が混じっていることはデュースにも伝わってきた。故に彼も頷いたのだ。

「それを否定するつもりはねえ」

だが同時に腑に落ちたことでもある。

エースとの間に発生した、噛み合わない感情。それはきつと。

「……そうか」

眩いた彼は、どんな気持ちなのだろう。

そこに踏み入るべきではないと思った。 “家族” というもの。それを捨てて海賊になり、名前さえも捨ててしまったのがデューズであるのだから。

ただ、まあ。

「感傷に浸ってる場合じゃねエだろ。さっさと行くぞ」

それでも、かつて彼を船長と仰いだ時から変わらないことがある。

彼を支え、共に海を往く。それだけは、ずっと変わらないのだから。



真つ黒な闇の中にいた。右手には鉄パイプがあり、背格好も “革命軍参謀総長サボ” のいつもの格好そのものだ。だが、何故だろう。帽子だけがない。

だがそれはいい。ここはどこだろうか。早く “革命軍” の皆と合流しないと。

(光……?)

ぼんやりと、遠くで何か光っていた。ゆつくりとそちらに歩み寄る。そこにあつたのは小さな机と。

「——おれ？」

幼き頃の、自分自身の姿であつた。

机に向かい、何かを書いているその背中。どういふことがわからず混乱してしまう。

“——また兄弟四人、どこかで会おう”

不意に脳裏に響く声。これは……自分の声か。

“広くて自由な海のどこかで、いつか必ず！”

込められていたのは、決意と覚悟。

“長男二人に妹一人と弟一人。変だけどここの絆はおれの宝だ”

そして誇りであり……僅かな、寂寥。

“ウタの奴は寂しがり屋だし、ルフィもまだまだ弱くて泣き虫だけど”

自身の頬を、温かい何か伝った。

“おれ達の妹と弟だ。——よろしく頼む”

嗚呼、そうだ。そうだった。

何故、忘れていた。どうして、思い出せなかった。

大切だったのに。誇りであったのに。

——幸せ、だったのに。

あの日々が、何よりの——

「すまねエ」

目を覆う。溢れてくるものが止まらない。

「おれは」

何ということをしてしまったのか。

あの日の「サボ」を置き去りにして、何を。

「いいよ」

こちらに背を向けていた「サボ」が、振り返った。

「あいつらだつて多分、許してくれるさ」

椅子を降り、こちらを見上げる「サボ」。

かつての自分は、笑っていた。

「それにまだ、何も終わってねエだろ？ だつたら謝るのは早エし、それに今のお前だからできたこともできることもあるはずだ。そうだろ？」

そうだ。その通りだ。記憶は失っていたが、「革命軍」の一員として生きてきたから

こそできたことがある。

今のサボを否定することはできない。目の前の「サボ」と今のサボ。どちらも自分なのだから。

「頼んだぞ」

そして「サボ」が机の上の帽子を手に取り、こちらに差し出してきた。

「——ああ」

その帽子を受け取り、しっかりと被る。

「世話の焼ける妹と弟だな」

「全くだな」

過去と今。二つの自分が笑い合う。

「けど、大切な家族だ」

そうだ。理由なんてそれでよかつたじゃないか。

エースは正しい。

——「家族だから」。

あの二人を助ける理由なんて、それで良いのだから。

「頑張れよ」

「おう」

過去と今がようやく重なる。

そこにいたのは、「革命軍」のNo. 2である男であり。

妹と弟を想う、兄でもあった。

置き去りにした過去も、その後積み上げてきた今もどちらも大切なもの。
故にその両方を背負い、彼は進む。

——絶対に、失わないために。

逃亡海兵Water Seven ⑱

第十二話 水の都に迫るモノ

「くそ!! どうなってる!!」

室内に怒声が響き渡る。荒々しいその怒鳴り声と共に机を叩くのは顔の一部をマスクで覆った男だ。名をスパンダムという。CP9の長官であり、ここ〃エニエス・ロビー〃の責任者の一人である。

部下からの報告を受けて喚くそんな姿を見、忙しい男だ、と少し離れた場所にあるソファアーに座るヴェルゴは内心で呟いた。

「計画の決行前に次から次へと……! おれが何をしたってんだ!?!」

何もしていやしない。だが世界というのには彼だけの存在で回っているわけではないというだけだ。周囲の動きが結果として彼の計画に干渉したというだけである。

「海軍をW7に常駐させるだ……!?! そんなことをされちまったら手を出せなくなるじゃねエか!」

荒れているスパンダムの様子を眺めながら、ヴェルゴもまた思考を巡らせる。実際、先ほどもたらされた情報についてはヴェルゴも全く聞いていない話であったのだ。

——海軍を“ウォーターセブン”に常駐させる。

これにはいくつもの意味が込められている。メリットもデメリットもあるが、海軍の上層部はデメリットを受け入れてでもメリットを取りに行つたのだろう。そこに意味があると判断したのだ。

「長官はまア、ともかくとしてだ。海兵であるあんたはこの動きをどう見る」

対面のソファアに座る人物——ジャブラが問いかけてきた。その目には若干の疑心が宿っている。

「先程も言ったが、私は何も知らなかった。それは信じてもらいたい」

「……まア、それを今言つても仕方ねエ。知つてて黙つてる理由もねエだろう。だから聞きたいのは海兵として海軍の動きをどう見るかだ」

「ふむ。……まず、個人的な印象ではあるが。これはセンゴク元帥の案な気がするな」

攻めるのではなく守りを重視し、更にいきなり全体に推し進めるのではなく“ウォーターセブン”という世界政府に協力的であり、駐屯の理由も作りやすい場所を選んだところからも想像できることだ。実験的な試みとしてワンクッションを入れるのは基本的に穏健派であるあの人らしい案だと思う。

「あの『水の都』が選ばれた理由も腑に落ちる部分が多い。『エニエス・ロビー』とも近く、表向きは存在しない機関であるがキミたちCP9もいる。実際に海賊に襲われたとしても増援の派兵は容易く、そして『ガレーラ・カンパニー』は世界政府御用達の造船会社だ。これからのことを考えるなら自分たちの手足である軍艦の製造ができる拠点は何としても守りたいだろう」

「だから世界政府も納得したってことか」

「あくまで実験的に一都市のみで先んじて行うということもあるだろう。その上で『ウォーターセブン』に対して頭越しではなく特使を送るという形で最大限の配慮もしている。事実上は決定事項であったとしても、手順を踏むという形式を取るだけで話というのは進めやすくなるものだ」

要するに礼儀、礼節の話である。人間というのは頭ごなしに言われるとどうしたって反発する生き物だ。故に手順を踏み、配慮している姿を見せることは重要である。事実上反対などできない決定であっても、筋を通すだけで相手の態度は軟化するものだ。

それにヴェルゴはよく知らない人物であるが、あの都市の市長はアイスバーグという経営者としても政治家としても傑物とされる人物だ。彼ならばその意図も汲み取れるだろうし、無意味な反抗もしないだろう。おそらくその辺りも織り込み済みだ。

「更に言うなら、それほどの重要な場所でありながら常駐する戦力がないのも理由の補

強になる。この時勢だ。市民を守る力はある方がいい」

「あそこには海賊だろうとものともしねエ船大工共がいるって話だが？」

「あくまで船大工だ。彼らが戦う状況というのは健全ではない。平時であるならともかく」

「まあ、そりやそうか」

今まで放置しておいて何をという話であるが、あの事件から世界情勢の不安定さは一気に増してしまった。情勢が変われば対応も変わる。欺瞞であろうと何であろうと、海軍の上層部はやると決めたのだろう。

「他にもメリットはある。海兵が常駐するということは海賊を筆頭とした脅威に対して一定の示威効果を望むことができるだろう。海賊というのは存外知恵が回る。ずる賢いと言うべきか？　そういう連中はわざわざ危険な島に正面から乗り込もうとはしないや」

「安全の保証ができるってことか」

「海軍が提供できる最大のメリットがそれだ。その上で経済効果も見込める。立ち寄るのではなく常駐するのであれば海兵達は都市内で金を使う。その金は海軍からの給与だ。単純に外から金が入ってくることになるのだから住民たちにとっては利益になる」

人である以上食わなければならないし物を消費する。それを全ていちいち基地から

持つてくることなど非効率だ。ならば都市内から調達するのが一番となるのは自然の成り行きである。

そしてそうなれば住民たちと海兵たちの間でも交流が生まれるだろう。そこで需要と供給が成り立つことは間違いなくメリットだ。

「だが、外の間人が来るってことはトラブルも生むぞ?」

「そこがデメリットだな。だがそこは責任者と派遣された海兵の質の問題だ。その人選をしくじるようなことはないだろう。何せ試金石だ。万全の準備を整えるだろうな」

「……それだけを聞いてるとメリットしかねえな」

「そういう話し方をしていいるからな。おそらく特使はこういう話を向こうでしている」

相手にとってメリットとなる話をするのは基本だ。交渉というのは相手に悪くないと思わせれば勝ちである。

そもそも事実上の決定事項なのだ。ならば如何に受け入れてもらいやすくするかが特使の役目である。その点は弁えているだろう。

「——だが無論、メリットばかりではないのも道理だ」

そして世の中良いことばかりということはありません。全ての事象は表裏一体だ。変化があれば良い方に転がるものもあるし、逆に悪い方へと転がることもある。

「一つは顧客の減少。世界に名を轟かせる造船都市だ。その名を頼りに多くの客が訪れ

ている。合法非合法問わずにな」

「海軍が居座るつてんなら非合法的な連中は寄り付かぬエだろうな」

「そういうことだ。単純に売上の減少が予想されることはデメリットだろう」

とはいえ、合法的な顧客とは違い海賊を筆頭とする非合法的客は大小様々なトラブルを引き起こす。それらを許容して売上をとるか、そもそも排除するのか。どちらを取るのかという話ただけではあるが。

「そして海兵である私が言うのもなんだが……やはり私たちは市民に対して威圧感を与えてしまう。目に見えないストレスというのは厄介だ。街を海兵が歩いているだけで一種の強迫観念に晒される者は事実、存在する」

「監視されてると思うわけか」

「結局のところ海軍というのは世界政府の暴力装置であつて加盟国にとっての防衛装置ではない。この二つの意味は近いようで大きく違う」

指揮系統の問題なのだ。海軍は確かに加盟国を守る役目を負っているが、その命令を下すのは世界政府である。この差異は大きい。

加盟国側に海軍の指揮権は存在しないのだ。この意味が理解できる者にとっては海軍など鬱陶しいだけでもあるだろう。

「清く正しく、誰からも後ろ指を指されない生き方ができる人間などいないさ。我々か

ら見たら大したことがない瑕疵であっても、当人からすれば重大なものであったりする。そういった話はキミたちの方が詳しいだろう?」

「あなたにもあるのか?」

「勿論だとも。反省と後悔ばかりの毎日だ」

一瞬だけ張り詰める空気。だがそれもすぐに霧散し、で、とジャブラがソファーに大きくもたれかかりながら言葉を紡ぐ。

「総合的にはどう見る?」

「海軍としては良い一手だ。キミたち——いや、長官殿にとってはどうではないかもしれないが」

「——その通りだ!!」

視線を向けられ、吠えたのはスパンダムだ。彼は腹立たしそうに頭を掻きながら言葉を紡ぐ。

「五年だぞ?! それだけの時間をかけたんだ! それを諦めろつてのか!?!」

「だが海軍の駐屯が決定した後には万一のことが起こればCPと海軍の間で軋轢が生じる。それは望むところではないだろう?」

「ぐぬ……!」

唸り声を上げるスパンダム。今でこそイラついていて余裕がないが、実は最初にもた

らされた情報を聞いた時はむしろ真逆の反応を示していた。

——「麦わら」と「歌姫」の船を確認した。

もたらされたその情報は端的であったが、彼にとつては福音だったのだ。元々遂行していた任務にボーナスが付く、と喜んでいた姿をヴェルゴもジャブラも目の当たりにしている。そして事実、確認をとつた彼に下された命は予想を裏切らないものであったのだ。

闇の諜報機関、CP9。その名を考えれば彼らに下された命は至極シンプルでもある。

だが、それも長くは続かなかつた。続いてもたらされた情報のせいだ。

——海軍が「ウォーターセブン」へ部隊を常駐させる旨を伝えにきた。

諜報機関たるCPでさえも掴んでいなかった情報だ。それだけ徹底して情報統制がかけられていたのか、或いは一部の人間のみが発案によつて強行された案であつたのか。ヴェルゴやジャブラは何となく後者である気がしているのだが、そんなことはどうでもいい。

聞いてねエぞ、と叫んだのはスパンダムだ。彼の遂行しようとしている計画において海軍は邪魔な存在である。故にこそヴェルゴへと協力を持ちかけて巻き込もうとしたくらいなのだから。

だが事態はそれで終わらない。つい先程もたらされたのがこの情報だ。

——“火拳”が現れ、特使として派遣された海兵と衝突。撃退し、その後現地民の協力を受けつつ搜索を開始。同時に周辺の海軍へ緊急の応援要請が海兵たちより出された。

彼の“白ひげ”の二番隊長。あまりにもあまりな大物だ。そんな人物が現れては海軍も対応するしかないし、勿論“エニエス・ロビー”にもその要請は届いている。現状はスパンダムが止めているが、何もしないわけにはいかないだろう。

邪魔なはずの海軍が続々と集まってくる状況。計画の実行はもう少し先——撤退のことを考えて“アクア・ラグナ”が過ぎた後と考えていたのだが、そうも言っていられなくなったというわけである。

「何事も予定通りとはいかないものだ。いずれにせよ急いで計画に修正を加えるべきではないかね？」

「そんなことはわかってる！ 偉そうに言うんじゃねえ！」

「これは失礼」

肩を疎めるヴェルゴ。それとほぼ同時に部屋の扉がノックされた。

「誰だ!？」

苛立ちを隠さず、怒鳴るように言うスパンダム。扉の向こうからはヴェルゴにとって

聞き慣れた声が響いてきた。

『——申し訳ありません！ ヴェルゴ中將はおられますか！ 準備が整いました！』
声の主はヴェルゴの副官であった。一つの頷きと共にヴェルゴが立ち上がる。

「苦勞」

扉の向こうに聞こえるよう、気持ち大きめの声を出すヴェルゴ。その背に対し、おい、とスパンダムが言葉を紡いだ。

「準備つてのは何だ？」

「勿論、応援要請に答えて、ウオーターセブンへ向かう準備だ」

当然のように言い切るヴェルゴ。はア、とスパンダムが声を荒げた。

「待てよ！ おれの計画への協力はどうする!？」

「その要請に答えたいところではあるが、こちらの立場も慮つて欲しいところだ。私たちは海兵であり、悪の排除が任務である。その責務を果たすために同胞が応援を要請しており、そして向かうことができるのであれば無視はできない」

「だが！」

「——それに長官殿。我々がここ、エニエス・ロビーにいることは定時連絡で本部も知っている。それが応援要請を無視したとなると当然理由を問われる。その際に長官殿は知らぬ存ぜぬとはいかないのではないかね？」

ヴェルゴの澱みない言葉にぐぬ、とスパンダムが言葉を詰まらせた。ここの責任者の一人であるスパンダムの立場を考えると、応援要請を受けたヴェルゴたちをむしろ積極的に送り出さなければならぬ立場なのだ。それを引き止めたとあればその理由の追求と場合によっては責任問題になりかねない。

だがスパンダムも簡単には諦められない。彼には彼の予定というものがある。

「だがお前はおれの計画を……!」

「口は硬い方だ。信じて欲しいとしか言えんがね」

肩を疎めるヴェルゴ。そこで彼は不意にゆつくりとスパンダムの側へと歩み寄り始めた。

スパンダムもジャブラも疑問を浮かべるように眉を顰める。そんな中で歩みを進めるヴェルゴはスパンダムに並び立つような立ち位置まで来ると、窓から空を見上げる格好を取る。

「……何だ?」

「いや、私としては長官殿がそう焦る理由がわからなくてね」

「あア?」

「これはむしろチャンスだと、個人的にはそう思うのだが」

スパンダムが訝しむ表情を浮かべる。その彼に対し、囁くようにヴェルゴは告げた。

その内容が聞こえたのは、ヴェルゴを除けば二人だけだ。スパンダムと諜報員としての耳を持つジャブラ。だがその表情は対照的である。

徐々に笑みを浮かべていくスパンダムと。

眉を寄せ、険しい表情をするジャブラ。

その違いが、二人の性質の違いを表しているかのようであった。

「……どうかね？」

「……悪くねエな。いや、むしろありがた。それなら海軍に恩も売れる」

「ならばよかった」

そんな表情に気付いているのかいないのか、ヴェルゴが小さな笑みを浮かべる。そのままでは、と彼はスパンダムに敬礼をした。

「互いの武運を祈ろう」

「ああ、全くだ」

そして部屋を出ようとするヴェルゴ。その背に対し、ジャブラが何かを言おうとして——終ぞ、何も言わなかった。

扉を開け、ヴェルゴが部屋を出る。待っていた副官が敬礼するのに応じつつ、彼は言葉紡いだ。

「では向かおうか。『海列車』で急行する」

その表情も物腰も、いつも通り変わらない。

そう、あまりにもいつも通り。

——まるで、何かを演じているかのように。



基本的に『ウォーター・セブン』というのは平和な島である。故に住民たちが大騒ぎをすることなど少ないのだが、今日はどうも風向きが違うようだ。

いや、実際に強い風が吹いているのもある。実際。

「あつー！」

「おつと」

シャオの被っていた海兵帽が飛ばされたのを、ルフィがその反射神経で軽くキャッチした。ありがとう、とルフィから海兵帽を受け取りながらシャオが笑う。そんな彼女は今、ウタと手を繋いで歩いている。

「ね、シャオ。その帽子って」

シャオの右手を優しく左手で握りながらウタが言う。それは何の変哲もない海兵帽だ。何なら一般市民でも簡単に手に入れられるようなものである。だがこの帽子は少々毛色が違うのだ。

「うん、お兄ちゃんに貰ったものだよ？」

いつだったか。メルヴィユを訪れた際にルフィがシャオに渡したのだ。彼の部屋でずっと眠っていた帽子であり、そのまま舞い続けるくらいならと言って。

随分と気に入ったらしく、その時から愛用する姿を幾度となく見ている。だが、少し。(……いいな)

いつも着けていたヘッドフォンを失ってしまったからだろうか。どうも頭に違和感を抱えている。その上でルフィの帽子。正直羨ましかった。

だがそれは内心で留めておく。そっか、とウタは言葉を紡いだ。

「大事にしてるんだね」

「うん！」

笑顔で頷くシャオ。彼女は本当に大切にしているのだろう。ならばそれでいい。

ちなみにルフィの方はひたすらにビリーがじゃれついていた。ちよくちよく電撃が漏れているのだが、彼には全くと言っていいほど影響がない。それが嬉しいのか余計に

ビリーがじゃれつくという悪循環である。

……ちなみにザンバイが巻き込まれる形で電撃を一発貫つていたりする。流石に焦ったのだが、思ったよりも頑丈だったらしい。すぐに起き上がった。ノーダメージとはいかないのか今は距離を取っているが。

「なんか騒がしいなア」

周囲を見ながらルフィが呟く。どうも市民たちが心なしか忙しないように見えるのだ。活気があるとも言えるのかもしれないが、それとは少し違う何かを感じる。

感覚的な問題だ。どことなくぼたついているというか、義務に追われているかのよう
な。

「ああ、そりや ヲアクア・ラグナ」のせいツスね」

そして首を傾げるルフィに対してそう言葉を紡いだのはザンバイだ。さつきも聞いたけど、とウタが言葉を紡ぐ。

「それって何なの？」

「一言でいうなら季節性の高潮ですね。この時期になると来るんすよ。予報じゃ明日か明後日くらいがピークだって話ですし、その準備でバタついてるんす」

「そんなに凄エのか？」

「そりやもう。多分お二人の想像している何十倍も凄いですよ」

どんな規模だ。ウタもルフィも若いながら様々な島を訪れている。その中でとんでもない自然現象に出会うことも多かった。そんな二人が想像するものの何十倍とは。

流星にそれは誇張し過ぎだろう——そんな風に思うウタの手を、不意にシャオが引つ張ってきた。

「どうしたの？」

「見てお姉ちゃん！ 水の中に街があるよ！」

「——嘘」

シャオが指差した先の光景を見て、思わずウタが呟く。人々が「ブル」に乗って行き交う水路。その水底に街並みが見えるのだ。

「凄エな。水の中に住むのか？」

「おれらには無理ツスよ」

ルフィの言葉に対し、いやいや、と手を振りながら言うザンバイ。水の中で暮らすことのできる者たち——魚人や人魚に、ウタもルフィも縁がある。『七武海』の一角であるジンベエがそうだし、魚人島でとある事件によって縁を繋いだ者たちもそうだ。

——しらはしは元気だろうか、とそんなことをウタは思った。

いつか地上を案内すると約束した相手。その約束はもう……果たせそうにない。

「正確には地盤が沈んでいつてるとか何とか。この街も昔の建物の屋上に建ててるんで

すよ」

「その原因がその『アクア・ラグナ』？」

「そう聞いているッス」

「つまり不思議波か」

ある意味いつも通りのルフイは置いておいて、成程とウタは頷く。水の都といえどもこえがいいが、これほどまでに街中を水路が覆っているということはそれだけ水害に弱いということでもある。何事も良いことばかりとはいかないということだろう。

「あの人は何してるの？」

そんな中、シャオが建物の前で何やら作業をしている男性を指しながら問うてくる。何やらロープのようなものを持ち、トンカチでそれを扉の隙間に打ち込んでいるようだ。

「ああ、ありや麻を隙間に詰めてるんだ。この後避難するつもりなんだろうな」

「麻？」

「ああしとくと水の侵食を抑えられるんだ。やつとかねエと家の中が水で全部ダメになっちゃう」

「へー」

わかっているのかいないのか、ザンバイの言葉に頷くシャオ。ザンバイは頭を掻きつ

つ、おれらも、と言葉を続けた。

「そろそろ備えねエと。お二人の船も倉庫に預けとけねエと持つてかれちまいますし」
「大変だなア」

「慣れたもんですから」

実際、慣れたものなのだろう。気負った様子もなく笑うザンバイから視線を外し、改めて街を眺めるウタ。今の話を聞いてから改めて街を眺めると、成程確かに備えと思いき行動をしている者が何人もいる。

食料を買い込んでいる者。荷物を運び出している者。その誰もが手慣れた様子だ。これがこの都市における暮らしなのだろう。そこには正しく、*“生活”*の光景が広がっていた。

「……………」

そんな中、ルフィが何故か後方をじつと見つめているのに気付いた。どうしたの、とウタはそんな彼に問いかける。

「何かあった？」

「…………いや、何でもねエ」

首を左右に振るルフィ。そんな彼に疑問を浮かべつつも、ウタはそれ以上は追求しないことにした。彼が何も言わないということはその必要がないと判断したということ

だ。それを疑うつもりはない。

強い風が吹く街を、四人と一羽の奇妙な集団が歩いていく。だが街には仮装した者が多くおり、違和感はない。

「……………」

——そしてそれは、その集団から一定の距離を置いて歩く一人の女性についてもだ。

不自然なほどに音もなく、気配も薄い。店への呼び込みを行なっている者も彼女にはまるで気付いていないかのように声をかけない。

その在り方は、彼女の歩んできた人生によるものだろう。——そこに『いる』ことを、意識させないことが彼女の義務であったが故に身に付けた在り方だ。

その技術は、かつて彼女が学んだものだろう。——“毒蛇”と呼ばれた暗殺者から教えられた、『紛れる』ための技術だ。

喧騒の中、一人の女性が歩いていく。

その目的は……果たして。



巨大な高潮であるという、*「アクア・ラグナ」*。街を飲み込むほどとは凄まじい話である。街が沈んでいるように見えるのは水位の上昇ではなく地盤沈下によるものらしいが、それはまあ重要などころではない。

問題なのはこの *「フランキーハウス」* とかいう建物だ。何度見ても奇抜なデザインであるのだが……これ本当に大丈夫かとルフィとウタの二人は思い始めている。

何というか、全体的に不安定なのだ。色んな意味で。故に不安を感じてしまう。

「すごいーいー！ 変なお家ー！」

「クオツ！」

一名と一羽はそうでもないようだが。

「あん？ 随分と早かったじゃねエか」

そして外で何やら作業をしていたフランキーがこちらに気付いて声を上げる。ルフィもウタも仮装の衣装を脱ぎながらフランキーへと歩み寄った。

「子どもから聞いたぜ？ ガレーラの奴が船を見て行つたらしいな。それで？ どうするんだ？」

「ああ、なんか後になった」

「……どういうことだ？」

ルフィの言葉に眉を顰めるフランキー。そんな彼に説明の言葉を紡いだのはザンバ
イだ。

「なんかどえらい海賊が出たとかで。後からこつちに人を寄越すと」

「なんだそりゃ」

ザンバイの言葉に肩を竦めるフランキー。彼はまア、と言葉を続ける。

「どの道『アクア・ラグナ』が過ぎてからだろ。急ごうにも急げねエわな」

「なんか凄エらしいなそれ」

「おれたちにしてみりゃ慣れたもんだが、おめエらみたいに外から来た奴にすれば驚く
だろうな」

笑いながら言うフランキー。そのまま彼はそれで、とウタと手を繋いでいるシャオと
ルフィにじやれついているビリーへと順番に視線を向ける。

「そいつらは何だ？」

「ああ——」

「お姉ちゃん」

口を開こうとするルフィを遮るように、シャオがウタの手を引いた。どうしたの、と

問いかけるウタに対し、フランキーを指差すシャオ。
そして。

「――変態さんがいる！」

とても素直な言葉を口にした。

「おいおい褒めるなよ。照れるじゃねエか」

そして満更でもない様子で笑顔を浮かべるフランキー。致命的に空気が狂った気がした。

「良い目を持つてる奴は嫌いじゃねエ。名前は？」

「私はシャオ！ こっちはビリー！」

「クオツ！」

「おれはフランキーだ。いやしかしでけエ鳥――」

「あっ」

思わず声を上げたウタに気付かぬままビリーに触れるフランキー。そして直後、予想通りの光景が目の前に広がった。

「ウオオオオオオツ!!」

「アニキー!!」

放たれた電撃を受けるフランキーと声を上げるザンバイ。

「ダメだよビリー！　メツ！」

「……クオツ」

そしてシャオに叱られ、シユンとするビリー。そんな光景を見て何故か体から白い煙を立ち上らせているフランキーが頷く。

「いや驚いた。何だその鳥？」

「友達！」

「クオツ！」

「……まあ何でもいいか」

全体的にマイペースなシャオにフランキーでさえも押されているという不思議な光景。アウトローを自称する彼でも子供には甘いのだろうか。

と、そこでウタはまた振り返るように背後の一方向を見つめるルフィに気付いた。

「ルフィ？」

思わず声をかける。すると。

「——ちよつと行つてくる」

「えっ」

「あん？」

説明もないまま、ルフィがその場から高速で移動した。

海軍において広く伝えられている体技、「六式」。そのうちの一つである「剃」だ。常人には文字通り消えたように見えるほどの速度で移動する技術。

事実、シャオは反応できていない。対し、完全に捕捉できているわけではないのだから反応はしているフランキーは流石というべきか。

そしてウタはその動きを追うことができる。全力のルフィに追いつくことは難しいが、それでも目で追うことができるくらいには彼女もまた「超人」だ。

そしてその視線の先。ルフィの到達した場所には――

――
見覚えのある、しかしここにいるはずのない人物がいた。



どうしたらいいのかわからないという状況が、イルは苦手であった。

――求められたことを、求められたように。

それが彼女に許された人生であった。それ以外のことは考えてはならない。そうし

て彼女の人格と人生が形作られていったのだ。

そしてだからこそ、かつて祖父が願ったように生きている。

“世界を見て回れ”

閉ざされた場所で生きてきたイルに、あの人はそう望んだ。望まれ、求められたならばそう生きていくのがイルの在り方だ。

……きつと、イルのそういう性分を理解していたのだろう。彼女を“人”と定め、正面から見据えてくれた数少ない存在であるあの大海賊は。だから彼女が生きていけるようにあんなことを口にしたのだ。

ただ、とイルは思う。

世界を見て、生きていつて。

その果てに、何があるのだろう。

何を、したらいいのだろう。

それがわからないまま、あの日からずっと目的もなく心が彷徨っている。

何をしたいのか、やるべきなのかがずっとわからないという意味ではとりあえずの役割を持てる“革命軍”は彼女にとって居心地が良かった。自身に明確に指示を出してくれる彼らはイルにとつてはとてもありがたい存在だ。

この姿勢は良くないのだろうとは思う。自ら考え、行動する。それができるようにな

ることを、きっとあの人は願ったのだと思うから。

だが、長年染みついた生き方はそう簡単には変わらない。最早それは呪いの如く彼女を蝕むモノなのだから。

まあ、とはいえ、だ。

不測の事態というのは常に発生する。その時には個々の判断が問われるのもまた世の常だ。

そう、例えば。

——“革命軍”の最優先目標である“麦わら”と“歌姫”を見つけてしまった場合など、だ。

元々は見覚えのある海兵の動向を遠目に見張っていただけだ。“火拳”が現れたことにも驚いたが、その後の光景に更に驚かされることになる。

仮面を着け、仮装した者たち。その仮面が偶然から外れたのだ。そして現れた顔にはイルも驚いた。

そこにいたのは、イルにとって大恩ある人物を討った男。忘れるはずなどない顔であった。

モンキー・D・ルフィ。

あの大海賊、“金獅子”を討った“新時代の英雄”と呼ばれた男。

(……繋がらない)

彼に対して思うところが無いと言えば、きつと嘘になるだろう。だが今の彼女は「革命軍」であり、彼らとは敵対関係にない。それにそもそも個人でどうにかできる相手ではないのだ。

故に先程からサボたち「革命軍」の電伝虫へ連絡しようとしているのだが繋がらない。何かトラブルがあったのだろうか。

どうしよう、という思考が浮かぶ。

こういうのは本当に苦手だ。だから付かず離れずで後をつけ、判断もできないままこんなところまで来てしまった。あの妙な建物以外に家屋のないこの辺りは隠れられるようなものも少ない。今は少し距離を空けて身を伏せているのだが、それだっていつまでもこのままではいられないだろう。

だからどうするべきかの指示を仰ぎたいのだが、その連絡が繋がらない。(とりあえず今は動かさずに見ておいて……)

消極的とも取れる判断だが、間違った判断ではなかった。

——相手が「麦わら」でなかったならば、であったが。

「!?!」

その動きに、イルは反応できなかつた。油断もあつたし目を離していたということも

ある。だがそれ以上に目の前の男の速度があまりにも早過ぎた。

仰向けの状態になり、腕を抑えられてしまう。眼前にあったのは「麦わら」の顔だ。

「…………お前」

眼前の男がこちらの顔を見て眉を顰めた。覚悟を決める。彼にとって自分は「金獅子」の一味だ。好意的な感情を抱くことはないだろう。

だが、相手はイルの予想とは全く違う反応を返してきた。

「あの時助けてくれた奴か！」

「……………えっ?」

完全に想定外のその言葉に、間拔けな声を溢すイル。

そしてそんな二人の方へと、奇妙な建物の方からこちらへと走り寄ってくる影がある。

かつて敵同士であり、殺し合った者たち。しかし今の互いの立場はあの時とは大きく違う。

この予期せぬ再会がどんな形で影響を及ぼすのか。

——今はまだ、誰もわからない。

逃亡海兵 Water Seven ⑱

第十三話　　そうして、夜が明けてゆく

置いて行かずに。

一緒に行こう、って。

あなたはそう言っ、手を差し伸べてくれて。

——それが、私にとっては何よりの…… “救い” だった。



……自分はどうしてここにいるのだろうか。それが素直なイルの気持ちであった。

あの後、駆け寄ってきたウタたちとも遭遇した。当然のようにウタからは警戒されたのだが、ルフィの言葉によってとりあえずという形で収まることになる。

“この間の島で助けてくれた奴だ”

ルフィがイルを指して言った言葉である。これに一番困惑したのはイル自身だ。だが確かに少し前に海軍と彼が激突した際、介入する形でその撤退を手助けしたのも事実である。

何か裏があるのだろうかと勘繰ってしまいうのも仕方がないだろう。だが当の本人は。

“あの時はありがとう”

真っ直ぐにそう言い切ってきたのである。そうなるというものはそういうものとして受け取るしかないように思えるし、ウタもまた多少の警戒心を残しつつも受け入れることにしたようだった。

そしてそのまま招き入れられ、流されに流されて今に至る。……どうしてこうなったのだろうか。

「それでおめエはどうしたんだ？ 相手は“七武海”だったんだろ？」

「関係ねエよ。ぶっ飛ばしただけだ」

「いやそんな簡単な話じゃないと思うわいな」

「相手が悪過ぎるわいな」

部屋の中央で話をしているのは「麦わらのルフィ」だ。その対面でコーラを煽っているのがフランキーと名乗ったこの主人であり頭目であるという人物である。

その隣で飲んでるのが「スクエア・シスターズ」を名乗る二人の女性。モズとキウイというらしい。

この「フランキー一家」というのは最初に受けた印象の通り、真つ当な集団というわけではないらしい。賞金稼ぎと解体屋を生業とするアウトロー集団とのことだ。

犯罪集団というわけではないが、万人に受け入れられる立場というわけでもない。

……元海賊である自分が言うのも滑稽な話だが。

「で、その王女様の演説の場におめエらもいたのか」

「おう。なんかバツジみたいなの貰ったぞ」

「それ勲章だわいな」

「勲章をバツジみたいなの呼ばわりする人初めて見たわいな」

そしてそんな彼らの拠点たるフランキーハウスの大広間。その隅でできるだけ目立たないようにイルは座り込んでいた。ぼんやりと彼らの動向を観察しているのだが、逆に言うとなれぐらしいかすることがないだけでもある。

つい先程まで彼らは宴会をしていた。その中心にいたのが「麦わらのルフィ」とフ

ランキーであり、イルはそれを外から眺めていたのだ。そして夜も深くなつた頃には宴会も自然と終わり、何人かは床に転がって眠っているような状況になつていった。

居心地は悪くなかつた、と思う。隅でじつとしていても邪険にされることもなく、声をかけてくれる人もいて。拙い受け答えでも不愉快そうな顔は微塵もされなくて。

不思議な空間だつた。かつて奴隸であつた頃に見た光景とも、*“金獅子”*の下で見た光景とも違う奇妙な感覚。

まるで歪な歯車が偶然噛み合っているかのような、そんな印象を受ける場所。

とまあ、ある意味穏やかな時間であるのだが――

(……どうしよう)

イルの内心は穏やかとは言いつれない状況であつた。今の彼女は*“革命軍”*の一員だ。その最優先目標である*“麦わら”*と*“歌姫”*の居場所を確認した以上、他の者へ連絡をしなければならぬ。つい先程までは向こうには繋がらなかつたのだが、時間も経つた。定時連絡も含めて連絡を試すべきだろう。

だが、今の彼女はそれができないでいた。

人目があるから、というのが理由の一つ。特に*“麦わら”*はこちらに視線を向けていないが常に周囲を警戒していることが見て取れた。その表情は普通のものであるが、放つ気配に鋭いものを感じる。不用意なことはしたくなかつた。

そしてもう一つ。どちらかというところの方が大きい。

「……………」

イルは自身のポケット一つの音具を取り出した。それはありふれたものであり、しかし彼女にとつては唯一と言つていいほどに大切な持ち物だ。

かつて「歌姫」と呼ばれ、今や「神への大逆人」と呼ばれる人の歌が収められたもの。

この歌声の主の姿を改めて見た今、どうしても「革命軍」へと連絡することを躊躇つてしまっている自分がいた。彼女がそれを望んでいるとはとても思えなかったのだ。

自分自身の役割と、イルが抱えるものとしては珍しい私情という感情。その二つのせめぎ合い。それが他の「革命軍」への連絡を躊躇う理由だった。

まるで祈るようにその音具を両手で包み込むイル。その手つきはとても優しく――

「――その音具、私の？」

考えに耽っていたからだろう。その人が近付いて来ていることに気付かなかった。

「……………ウタ様」

「前にも様付けで呼んでたね。……………いいよ、そんな風と呼ばれるような立場じゃないから」

はい、という言葉と共にウタがカップを差し出してきた。暖かな液体――匂いからし

てココアだろうか。

「ありがとうございます」

受け取りつつ、イルが頭を下げる。そんなイルへウタは首を横に振って応じた。

「それは私が言うべき言葉。助けてくれたんでしょ？……ありがとうございます」

その言葉にイルは少し俯いてしまう。あれは咄嗟の行動だったのだ。『麦わら』と『白猫』の間に割って入った彼女の姿を目撃し、更にその頭部に十手が吸い込まれるように叩き込まれた瞬間、イルの体は勝手に動いていた。

結果としては良かった。彼女たちを逃がすことができたし、あの場を納めることもできたのだから。しかし未だにイルはどのようにして自分があんなことをしたのか、自分のことだということに理解できないでいる。

いや、本当はわかっているのだ。どうしても信じられないだけで。

——イルという存在に、あのような激情があることを。

自分は、知らなかったから。

「本当はすぐに言うべきだったんだけど。……ごめんね。色々と思うことがあって」

隣へと腰を下ろしながらウタが言う。そんな彼女に対し、イルは絞り出すように言葉を紡いだ。

「いえ……私は、あなたを」

刺してしまった、という言葉が出てしまう前に飲み込む。それは言っではいけない気がしたのだ。

「……………」

互いに無言。少しの距離を空け、並んで座り込んでいる光景は側から見ればどのような感じるだろうか。

そんな中で何うようにイルはウタを見た。湯気が立ち昇るカップを抱える彼女は、ぼんやりと広間の中心を眺めている。その視線の先にいるのは「麦わら」だ。

彼を見つめるその瞳は優しく、愛おしげで。……同時に、どこか怯えるような色も宿っているような気がした。

何か、見てはいけないものを——触れてはいけないものに触れてしまったような気になり、イルは視線を逸らした。そのまま何かないかと言葉を探す。

だが元来彼女は他者との交流という点についてあまりにも経験が不足している。こういう時、咄嗟に上手い言葉が出てこないのだ。

故に過去の経験を探る。かつて「金獅子」の下に集った「七宝剣」——彼らの姿を思い浮かべて。

「お主は何故親分に仕えておる?」

浮かんだのは、「毒蛇」と呼ばれた女性のそんな問いかけの言葉であった。彼女に

とつては世間話のついでにちよつとした疑問を解消しようとしたもの。

それは彼女なりのコミュニケーションの取り方だったのだろう。あの時は上手く答えられなかったが……。

「その、ウタ様は……」

口にしたのは反射的なものであった。何かを言わなければ、という謎の強迫観念に追い立てられるようにイルはその言葉を口にする。

「どうして、海軍に？」

それはイルにとつて切実な問いというわけではない。沈黙は良くないのではないかという考えから出た、一種の世間話だ。過去にされたことのある問いを口にしただけ。

「――」

だが、ウタには少々予想外の問いであつたらしい。驚いた表情を浮かべた後、そうだね、と目を伏せながら確認するように呟いた。

「インタビューとかでは『正義感』とか『泣いている人を助けたい』とか、そんな風に答えてたかな？ 模範的で優等生な回答だね」

小さく微笑むウタ。その笑みの意味はなんだろうか。

「広報つていう立場もあつたからね。嘘でもなかつたし。海賊が嫌いなのも本当で、泣いている誰かのために何かできることをつていう気持ちも本当だった。うん、嘘じゃな

「い」

何かを思い出すかのように言葉を紡ぐウタ。その意識の半分はイルへと向いているが、もう半分は彼女自身に向けられていた。

「実際にやりがいがあったし、歌うことで喜んで貰えることは嬉しかった。大勢の友達も信頼できる人も増えて、苦しいことも辛いことも多かったけど、それでも……うん。でも、そうだね。それは全部なった後の話。私が海兵になったのは——」

カップを抱える手に力が籠った。制止するべきかをイルは迷うが、その決断をする前にウタが口を開く。

「——一緒に海兵になろうって、ルフィが言ってくれたの」

たった一言。だけど、それがきくと彼女の始まりであり根幹なのだろう。

それがわかるくらいには、その言葉に込められた想いは深かった。

「だから、私は……」

その先の言葉を、ウタは口にしなかった。イルもそれ以上は何も言わず、小さく頷く。しばらくの沈黙。だがそれは重苦しいものではなく、時間がゆっくりと流れるような、どこか穏やかな時間。

だがそれも長くは続かなかった。一人の少女がふらつきながら歩いて来たのだ。

「…………お姉ちゃん…………」

確かシャオといったか。その少女は見るからに眠そうで、目を何度も擦りながらウタの方へと歩いてくる。

「シャオ、眠い？」

「……………ん……………」

駄目そうだな、とイルはぼんやりとそんなことを思った。時間も既に深夜だ。眠くなるのも自然だろう。

「じゃあ、お布団のあるところに行こっか。——ビリー」

「クオツ」

ウタが呼びかけると、*「麦わら」*の側でのびのびと過ごしていた巨大な鳥が駆け寄ってきた。

「一緒に来てくれる？」

「クオツ！」

ビシツ、と器用に羽を操って敬礼じみた動きをするビリー。…………不思議な鳥だ。

その様子に満足そうに頷くと、ウタは立ち上がってシャオの手を握ってみせる。そしてイルの方へと視線を向けると。

「ごめんね」

一言、そんな言葉を紡いだ。

「いえ……」

上手い言葉を返せないでいる自分から視線を外し、ウタはシャオを連れて広間を出ていく。その背を見送りながら、イルは何度目かもわからない疑問を浮かべた。

——どうしたら、いいのだろう。

その疑問の答えは、未だ得られそうになかった。



「じゃあ、ビリー。シャオをちゃんと見ておいてね」

「クオツ」

小声で指示を出すと、布団に入った瞬間に眠ってしまったシャオの側に控えるビリーもまた小声で応じてくれる。彼の器用な敬礼に対し、ウタもまた敬礼を返した。

そのまま扉を閉め、ウタは一度伸びをする。先程はイル相手にらしくないことを口に

してしまった。自覚のないうちに疲労が溜まっていくのだろうか。

——ルフィに誘われて海兵になった。

それがウタの海兵としての始まりだ。多くのことがあったが、そこだけは変わらな
い。あの日、置いて行くこともできたはずの自分の手を引いて連れ出してくれたのが彼
なのだ。

だからずっと必死だった。隣にいられるように、一緒にいられるように。ずっとずつ
と、ウタは必死に走ってきたのだ。

けれど。

その果てに辿り着いた「歌姫」という名前が、彼を大罪人に引き摺り落とすことにな
ってしまった。

あの日々は何だったのだろうか。積み上げてきたもの、築き上げてきたもの。その全て
がたった一つの「悪意」によって一瞬で奪われた。

いや、「悪意」ですらなかったのかもしれない。

きつとあれは、あの存在にとっては「当然」であったのだ。息をすることと同じ意味
の摂理。故にあの事件は——

「……………ッ」

自身の体を抱くようにして身を縮める。あの日の恐怖が蘇り、体が震えてしまう。

どうしようもないほどの理不尽。世界全てが反転した瞬間。そして自身の出自。何もかもが「ウタ」という存在を責め立てているかのようで。

巻き込んでしまった。

地獄へ彼を引き摺り込んでしまった。

あの日繋いだ手が、彼にとって呪いになってしまったのだ。

「……やだ……」

でも、それでも。

「……一緒にいたい……」

その先に待つのがどれほどの地獄であろうと。

それでも、一緒にいたいのだ。

——それが、「ウタ」ととっての全てだから。

浅ましい願いだろう。でももう、彼しか残っていないのだ。

最早両の足で立つことがやっとの女には。何もかもを失ってしまったたった一人の女には。

もう、彼しか。

あの日繋いでくれた縁しか、もう——

「——ウタと一緒なら、どこだろうと楽しいに決まってる」

耳に飛び込んできたのは、そんな声であった。広間へと続く廊下の途中でウタの足が止まってしまふ。

「……おれはおめエらがどうしてエのか、って聞いたんだがな」

相手の声はフランキーか。その声には呆れが混じっている。

「行き先は決まってるねエからな。まア、こういうのも良いだろ」

「今時海賊でも目的地くらいは決めてるんじゃないやねエのか？」

「そうかもな」

声だけしか聞こえない状況。ウタは壁に背を預け、耳を澄ませる。誰よりも大切な彼の声は、いつもと変わらない気がした。

「思ったより呑気だなア……。もっと悲壮感あるもんかと思ってたぜ。あっちの方は色々ギリギリみてるエだが」

「仕方ねエよ」

何が仕方ないのだろう。それは失望からくるものなのだろうか。或いは、落胆？

「誰だっけしんどい時くらいあるだろ。それが今なだけだ」

嗚呼、違う。これはそんなのじゃない。

「けど、ウタは強エからな。多分大丈夫だ」

「そうかねエ。部外者のおれが言うもんでもねエと思うが、あっちのお姉ちゃんはそこまで強くは見えねエぞ?」

「なら一緒にいるさ。そうするって決めたんだ」

頬を、熱いものが伝う。

「ずっとそうだった。だからこれからもだ。色々大変なこともあるけど、それはそれだ」
「強エな、おめエは」

フランキーの言う通りだ。ルフィは強過ぎる。

あまりにも——眩し過ぎる。

「そんなことねエ。おれが本当に強エなら」

何かを堪えるような間。そして。

「——ウタを、泣かせずに済んだはずだ」

泣くな。泣くな。泣くんじやない。

「あんな風に、苦しまなくてよかったはずなんだ」

止まれ、涙。

じゃないと、私は。

どうしようもなく、私を嫌いになる。

「強く、なりてエ」

あなたは強いよ。

「もつと、強く」

私なんかより、ずっと。

「ウタを、守れるくらいに」

いつも、守っていてくれた。今も守ってくれている。

「——ウタが、笑っていられるように」

どこまで私は弱いのだろう。

この涙は彼のその誓いを踏み躪るものなのに。なのに、涙が止まらない。

声を殺し、身を抱え、涙を溢す。

そんなことしかできない自分が、あまりにも。

あまりにも——……

……。

.....
.....

「離すなよ」

酒を一気に飲み干しながら、フランキーが言う。

「どんなことがあるうと、絶対に手を離すな」

その瞳は真剣だった。ルフィは頷く。

「——当たり前だろ」

その言葉に満足したのか、フランキーが小さく笑った。

「なら、いい」

夜も深い時間。誰もが寝静まる時間に交わされた会話は、おそらく表に出ることのない物語だ。

だがそれでも、そこには確かに誓いがあった。想いがあった。意志があった。

故にこそ彼らは、その夜を駆け抜けたのだ。

それでも、と。

握ったその手を、離さぬために。



夜も更け、街が眠りにつき始める時間。普段ならば眠りにつくはずの「ガレーラ・カンパニー」にはしかし、大勢の職人たちが集まっていた。

だが普段から肉体労働に励み、尋常ならざる体力を持つ彼らも疲れが滲んでいる。そんな状況を見て声を上げたのはアイスバーグだ。

「今日のところは解散だ。今パウリーたちが増援の出迎えにステーションに行ってる。この後の捜索はあっちに任せて今日は帰って休め」

大声というわけではないのだが、よく通る声であった。こういうところは流石に大会社の社長というべきだろうか。声に張りがあり、強さがある。

そんな彼の言う海軍の増援が到着したという報告は少し前のものだ。それを受けて「ガレーラ・カンパニー」の代表としてのパウリーと、現地で状況を把握している海兵であるイスカがその出迎えに向かったのも少し前。今頃は駅で受け入れをしているだ

ろう。

そんなアイスバーグの言葉を受け、作業衣を着た社員たちが顔を見合わせる。そこには少しの困惑があった。

「しかしアイスバーグさん。足取りは掴めてませんし、廃船島で『火拳』と戦ってた連中の正体もわからないままです」

そんな中で代表するように声を上げたのはルルという船大工だ。一番ドツクの職長の一人であり、眼鏡をかけた坊主頭の男性なのだが……何故か謎の寝癖が一方向に飛び出している。一度見たのだが、寝癖を抑えると別のところから飛び出すという不思議な現象が起こっていた。不思議な体質である。

そんな職長である彼が問いを発したのは立場もあつてのことだろう。こうしてしっかりとした上下関係ができているのは流石に音に聞こえた『ガレーラ・カンパニー』か。

「これ以上は海軍と警察の仕事だ。市民としての義務という観点からはともかく、『ガレーラ・カンパニー』としての仕事にこれ以上は含まれていない」

冷静な言葉であつた。だがアイスバーグの言う通りなのだ。『火拳』という強大な海賊の捜索に加え、正体不明のその『火拳』と何かしらの理由があつて衝突していた複数人からなる集団。都市の安全を考えるならば放置はできないが故に『ガレーラ・カン

「パニー」の職人たちが動いていたわけだが、それにはこの場に海兵がたった二人しかいなかったが故だ。

海賊の相手は海軍の仕事である。その海軍が到着した以上、善良なる一般市民たる彼らは無理にそれに関わらない方がいいのも道理であった。

「決着が着いてねエ状態で終わりと言われても中々納得は難しいだろう。気持ちはわかる。だがおれたちの本来の役目を考えろ。それに予報じや明日に「アクア・ラグナ」が来る。そつちの対応も必要だ。何もかもに手を出して全部中途半端になるのが一番最悪なのはわかるだろう？」

再び、職人たちが顔を見合わせる。徐々にであるが、納得の気持ち広がっていくようだった。

そこへ最後の後押しとなるよう、アイスバーグが言葉を紡ぐ。

「それに今後は海軍とも協力していくんだ。お手並み拝見といこうじゃねエか。――
なア、大尉殿？」

突然話を振られ、近くに控えていたオリンは言葉に詰まった。だがどうにか言葉を絞り出す。

「はい。……最善を尽くします」

周囲から小さな笑い声が溢れた。オリンとイスカは一日中職人たちと共に島中を走

り回っていたのだ。率先して動いていた彼女たちに対し、職人たちも一定の信頼を置いている。この笑いは嘲笑ではなく安心からくるものだろう。

「まあ、アイスバーグさんが言うなら。この後は海兵さんたちに任せましょう」

ある種予定調和でもあったのだろう。代表してルルが応じる言葉を紡ぐ。最初は海軍という呼び方をしていた彼がわざわざ『海兵さん』と呼んだところに、この島を訪れた二人の海兵に対する信頼が滲んでいた。

「明日も早いしな」

「とりあえず消灯確認か」

「他のところにいる奴らにも連絡しねエと」

職人たちからも次々と声が上がリ、徐々に彼らが動き始める。そのほとんどが本社の建物から出ていく動きをしており、おそらく各々の家に帰るのだろうことは容易に想像できた。

そんな光景を眺めながら、礼として敬礼をするオリン。一般市民たる彼らがこんな時間まで海賊を追うために動いてくれたのだ。彼らが二人の海兵に一定の敬意を持っているのと同じように、オリンもまた彼らに多大な敬意と感謝を抱いていた。

そしてある程度の人員が立ち去った後、アイスバーグがオリンへと言葉を紡ぐ。

「すまん。ダシに使った」

「いえ」

アイスバーグの言葉に首を振って応じる。気にするようなことではない。彼の言う通り本来は自分たちの役目なのだから。

領きを返してくるアイスバーグ。彼はそのまま言葉を紡いだ。

「さて、お互いさつさと休みたいところだがそうもいかん。明日のことだ」

「発表のことについてですね」

「そうだ。どうにか調整は終わった。幸いにも反対意見はなかったのは何よりだな。腹に色々と抱えてる奴はいるだろうが……まあ、“火拳”なんて脅威が現実に現れた以上仕方ねエだろう」

雨降って地固まる……とは少し違うかもしれない。そもそも降らない方が良かったのだから。

だが、あの海賊の存在が現実の脅威を訴えるという形で話を進めやすくなったのも事実だ。最善ではないが次善であるとして受け入れるべきだろう。喜ぶわけにはいかないが。

「“世経”とも調整できたのは幸運だったな。後は……そうだな、共同の会見の内容について詰めたい。徹夜になるが構わないか？」

「はい。私は問題ありません」

むしろオリンは民間人であるアイスバーグに無理を強いる立場なのだ。不満など口
にできるわけがない。

「よし。じゃあこつちに来てくれ。——カリファ」

「——資料はこちらに」

「ンマー！ 流石だな」

「いえ」

少し離れた場所に控えていたカリファが、名を呼ばれた瞬間にアイスバーグの求める
ものを差し出してくる。……途中で何度も思ったが、あまりにも優秀過ぎないだろうか
？

「……………」

そんなカリファがチラリとこちらへ視線を送ってきた。ただ視線が向いただけ——
ではない何かを僅かに感じる。

オリンの中にある本能。いや、経験からくる何か——

「その会議室を使おう。少し散らかってるが、気にしないでくれ」

「はい」

だが、アイスバーグの言葉によってオリンはその思考を打ち切る。そしてオリンが彼
の後をついていく途中で、アイスバーグはカリファへと指示を出した。

「ああ、そうだ。悪いがカリファ、社員たちに指示を出しておいてくれ。搜索は終了し、明日に備えろとな。それが終わったらお前も帰って休むといい。疲れてるだろう?」

「……明日の会見については?」

「朝に改めて打ち合わせをする。内容については大尉殿と詰めておくから明日の朝に確認してくれ」

「承知しました」

礼儀正しく一礼するカリファ。そのまま彼女は子電伝虫を取り出し、二人から離れて歩き出していく。こんな時間だというのに疲れが微塵も見えなかった。

「できるだけ手短にいこう」

そんな彼女を見送り、会議室の扉を開けながら言うアイスバーグ。その背に対し、はい、と応じる言葉をオリンが返す。

難しいことなどない。オリンは特使としての役目を果たし、アイスバーグは市長としての役目を果たす。

既にシナリオも出来上がっている。何故か非常に協力的だったモルガンズたち“世界経済新聞社”の者たちも記者会見では協力してくれるというし、議員を始めとする有力者たちも表向きはとても協力的だ。

(任務は無事に完了する)

その後はどうしようかと、ふと思った。

浮かんだのは、誰よりも尊敬する人たちの背中。

あの日、見送るしかなかった背中。

今も抱える、後悔そのもの。

(いっそ、何もかもを)

何度も浮かんで、何度も切り捨てたことを思い浮かべる。

その選択を選ぶには、あまりにも。

あまりにも、己の力が足りなくて。

そして何より、どうしようもなく“大人”になってしまっていたのだ。

なればこそ、世界に抗い続ける勇気など……持てなかった。

でも、いつか。

また、あの人たちの背中を見ながら。

ようやく好きになることのできた、音楽を。

そんな願いくらいならば、許されるだろうか。

そう、思った。

——だが、世界とは常に予定通りとはいかぬのが常である。

結論から言うならば、彼女の任務は予定通りには完了しなかった。それどころか事態は更なる混迷へと落ちていくことになる。

本来の予定であれば、翌日の新聞の見出しはこうなるはずだった。

『市民の安全を守ることを第一とし、海軍は加盟国へ部隊を駐屯させることを決定。その第一歩をウォーターセブンで踏み出す』。

そして実際の当事者として記者会見を開き、シナリオ通りの問答を行う。記者会見を操作するのはモルガンズ率いる「世界経済新聞社」だ。影響力の強い彼らが大きな声で質問を飛ばし、会見の流れを誘導する。そして会見が終わった後は打ち合わせ済みの議員たちや有力者たちにも発言をしてもらう。

そこではいくつかの懸念点について触れてもらい、それに対して答えを示す。これはアイスバーグの提案による一種のガス抜きだ。今後も努力が必要であることを示しつつ、しかし前向きに行うと宣言するというもの。

人間とは不思議なもので、メリットばかりを口にされると疑ってしまう。故に適度にデメリットも提示する必要があるのだ。だがそのデメリットは解消可能であると同時に示すことにより、デメリットに対する不安は持たせないよう配慮する。そうすることで全体の流れとして受け入れる方向へと持っていく。

正しくこれは政治と呼ばれる手法だ。絵を描いた人間たちの素養と能力がなせる一種の技術だろう。

だが——そうはならなかった。

描いたものは、誰も予想しなかった悲劇によって踏み躪られる。

翌日の新聞に踊った文句は、酷く簡潔であつた。

アイスバーグ市長、暗殺未遂。犯人は不明。犯行時刻は不明。

被害者は二名。共に意識不明の重体であり、特に複数の弾丸を身に受けた海兵は予断を許さない状況にある。

その海兵の名は、オリン大尉。

——“金獅子事変”における、英雄の一人である。

逃亡海兵Water Seven②

第十四話 水の都の一番長い日①

懐かしい、場所だった。

海に見える崖の上。背の低い雑草が多い茂る、のどかな場所。

この場所をウタは生涯忘れることはないだろう。

ここは、この場所は。

かつて彼と、一つの誓いを交わした場所だから。

『久し振りだね、私』

その思い出深き場所に座り込んでいた少女が小さく笑った。その声には僅かに呆れの感情が込められている。

『またね、とは言っただけ。随分早いね』

それに、と少女が立ち上がりながら言葉を紡ぐ。

『酷い顔』

否定できない言葉だった。今の自分はきつと、本当に酷い顔をしているのだろう。

——けれど、仕方がないではないか。

こんなことになるなんて。こんな未来が待っているなんて。

想像も——していなかったのだから。

「……強くなれた、って。なることはできたはずだ、って」

幼い少女から目を逸らし、海の方へと視線を向ける。

沈んでいく夕日。何度も見た光景。

その、見慣れたはずの光景を前にして……どうしようもなく、胸が締め付けられる感覚を覚えてしまう。

「そう、思っただけどね」

『違っただね？』

「うん。勘違いだった」

自嘲の笑みと共にそう口にする。

彼に並ぶため、共に在るために積み上げてきたつもりだった。だが現実はどうだ？

その積み上げたものが彼を正道から引きずり落とすことになり、それどころか積み上げたと思っていたものは全てが虚像であった。

世に“神”と呼ばれる存在の、ほんの気まぐれ。それだけで崩れてしまう程度のものであったのだ。

今まで歩んできた道は、信じたものは。

ほんの……その、程度の。

「……私はどこまで行っても、“シャンクスの娘”で」

目の前にいる“わたし”。文字通りの“赤髪の娘”にして“赤髪海賊団の音楽家”に対し、右手で顔の半分を覆いながらウタは言う。

「捨てられたのに、置き去りにされたのに。だから私も捨てたはずだったのに」

いつか決着は着けなければならぬとは思っていた。彼に海軍に入ろうと誘われた時、彼はこう言ったのだ。

“シャンクスを捕まえよう”

きっと彼は気付いていたのだろう。その存在があまりにも大きく、だからこそ進めなくなっていたことに。

忘れようとしたけど、できなくて。

憎悪を募らせながらも、ずっと疑問は消えなくて。

ウタという存在にとって、“赤髪のシャンクス”という海賊はあまりにも大き過ぎたのだ。

「結局私は、あの日から一步も進めてない」

あの日の背中。自分よりも小さいはずなのに、それでもずっと大きかったあの背中に助けられたあの日から。

——モンキー・D・ルフィに、優しい彼に縋ったあの瞬間から。

結局、たったの一步さえも歩めていなかった。

そんなことさえ、気付いていなかったのだ。この愚か者は。

「立ち上がらなくちゃいけないのもわかってる。このままじゃ駄目だっていうこともわかってる。でも、私は」

拳を握る。だがその力は儂く、弱々しい。

その姿が、今の「ウタ」という存在の力そのものを示しているようだった。

『怖いんだね』

くるりと、こちらに背を向けるように体を反転させる「わたし」。その表情が見えなくなる。

『わかるよ。全てが否定されて、二人ぼっちになって。逃げ続けるしかなくて』

逃げる相手は世界政府であり海軍だ。そしてその強さと恐ろしさを、ウタは所属していたからこそよく知っている。

この逃亡の果てに待つ未来も、また。

『それを避けるために立ち上がったとしても、もう一度失うかもしれない。そうだね、今度は——』

振り返った“わたし”の表情は。

こちらを、憐れむように。

『——ルフィを、失うかもしれない』

呼吸が止まった。耳が痛いほどに高鳴る心臓の音。それはまるで自身を責め立てるかのよう響いている。

想像しなかったわけではない。その可能性は何度も何度も脳裏を過った。その度に否定して振り払って、“なかったこと”にしてきただけ。

『逃げるの?』

突き刺すような言葉。内面を抉るようなそれは、起こり得る可能性を——否、このままでは確実に目の当たりにすることになる現実を示している。

『逃げて、逃げて、逃げて』

肺が痛い。頭が痛い。運動をしたわけではないのに、息が荒い。

「……………ッ!」

両の耳を両手で塞ぐ。だが無意味だ。『わたし』の声は自分自身の内側から響くもの。耳を塞いだところで拒絶できるようなものではない。

だがそれでも、そうするしかなくて。

『今度こそ、何もかもを失うつもり？』

突き立てられる剣のように鋭いその言葉は、酷く冷たい。

『それが、あなたの選択？』

わかっている。わかっているのだそんなことは。

でも、ならばどうしろというのだ？

過去を振り払うように進んできた。『正義』を背負い、一人でも多くの人を助けよう

として。そうしてどうにか生きてきた。戦ってきたのだ。

——『平和を届ける正義』。

それは決して生半可な覚悟で背負ったものではない。この世界には辛いことや苦しいことが溢れている。でもそれでも、諦めて欲しくなかったのだ。

私が、ウタが、たった一人の男の子に救われたように。

助けを求める誰かに、あの日彼に貰ったものを少しでも分け与えることができたらと。

それができれば……どんなに良いだろうか。

そうやって、進んできたのに。

『ブーシャ村のルフィとウタ』
びくり、と。

体が、大きく震えた。

『“私”が届ける平和の果てにあったもの。あなたの夢。約束の場所』
目を開けたのは、間違いだった。

視線の先。“わたし”の向こうにいるのは――

「ルフィ!!」

生気のない顔で座り込むルフィ。その身は傷だらけで、血に塗れていた。

『ねえ、“私”?』

足をもつれさせながら駆け寄る。応じる言葉を発する時間さえも惜しみ、彼の下へ。

――“わたし”の隣を通った瞬間に聞こえた声は。

どこまでも、冷たかった。

『それは起こり得る未来。ルフィがいる? ううん、それは違う』

頬に触れる。冷たい感触が伝わってきた。

わかる。わかってしまう。

これは、もう――

『わかってるんでしょ?』

背後、言葉を紡ぐ“わたし”はどんな顔をしているのだろうか。

どんな目で、こちらを見ているのだろうか。

『“私”が死ぬことも、賞金首になったことも、シャンクスの娘であることも。結局のところはどうでもいいの。そんなものは最悪じゃない』

息が苦しい。胸が痛い。何かに殴りつけられているかのような感覚が襲ってくる。

『ルフィがいなくなることが、あなたにとっての最悪。違う?』

それは当たり前前のことだ。ルフィがいなくなること。それだけは受け入れられない。

だが、想いというのは力にはなるがそれだけでは何一つ実現できない。それを原動力とし、実現する別の力が必要だ。

そしてわかってもいる。力とは何かを、わかっているのだ。

けれど、できるのだろうか?

『できるよ。あなたはその力を持つてる』

振り返る。そこにいた“わたし”は、小さく笑っていた。
いや——待て。

おかしい。何故、“わたし”は。

ルフィのこの姿を見て……笑っている？

「あなたは、何？」

絞り出すような言葉。無意識に背後のルフィを庇う立ち姿を取っているのは、本能がその存在の正体を嗅ぎ取っていたからだろうか。

対し、“わたし”は笑みを深くする。

『あなたは知っているはず。わたしは——』



「——ッ！」

飛び起きるように目を覚ました。全身が汗に塗れ、少し不快だ。

「……はッ……はッ……」

何度も荒い呼吸を繰り返す。夢に見たあの光景、彼の姿が脳裏に焼き付いている。

「……………ッ」

「大丈夫か？」

無意識に手を握った瞬間、それを握り返す力と言葉があつた。弾かれたように顔を上げる。

「…………ルフィ…………」

ウタが眠っていた布団、その隣に座っていたらしいルフィの姿があつた。見上げた先にある表情には心配の色が宿っている。

「ちよつと待つてろ。今——」

「——」

その言葉を遮るように、その体へと抱きついた。彼にしては珍しい、少し驚いた反応が返ってくる。

「ウタ？」

「…………ごめん。少しだけ、こうさせて」

トクン、トクンと。

聞こえてくる静かな音が、今ここに彼がいることを教えてくれる。

突然の行動だ。困惑するのが当たり前だろう。しかし、ルフィは。

「……………」

優しく、この体を抱き締めてくれた。

思わず、吐息が溢れる。この優しさが、温もりが。何よりの……支えだった。

「ルフィ」

か細い、吐息のような声で彼の名を呼ぶ。見上げたそこに、こちらを覗き込む顔。

示し合わせたわけではない。けれど。

——当たり前のように、唇が重なった。

永遠のようで、しかして刹那の如く。その時間が過ぎ、ウタは小さく笑う。

心の奥に、温かなものがじわりと広がっていく気がした。

「ふふ……あつ」

何を思ったのか、そんなウタをルフィが強く抱き締めた。予想外の動きであったが、ウタはそれに逆らうことはない。逆らうはずがない。むしろその背に手を回し、強く、強く、その体を抱き締める。

どれぐらいそうしていたのだろうか。ウタ、とルフィがこちらの名を呼ぶ。

「うん。ルフィ」

抱き締め合う互いの顔は見えない。だがそんなことは些細なことだ。

「大丈夫か？」

「うん。ルフィのおかげ」

今ここに、あなたがいること。

ただ、それだけで。

まだこうして、生きていられる。

……不意に、ノックの音が響いた。

同時、扉の向こうから声が聞こえてくる。

「あのー……」

ザンバイの声だ。どうした、とルフィが扉越しに声をかける。

「よかった、起きてたんすね。あの、急いでお知らせしたいことが」

扉越しではあるが、その声に焦りがあることが伝わってくる。

「わかった」

言いつつ、ルフィがこちらから離れた瞬間。

——悪寒が、全身を駆け抜けた。

その警鐘のような響きに根拠はない。だがそれでも、ウタは本能で感じてしまった。立ち上がるルフィの背中。そこに“何か”が重なる。

その「何か」の正体を、ウタは決して考えようとしなかった。
……きつと、それは。

避けようのない、大きな嵐。

水の都の長い一日の、始まりだった。



「——銃弾は二発。結果として命に別状はありませんが……いつ目を覚ますかは保証できません」

会議室。そこには大勢の人間が集まっていた。一番前で説明をしているのは一人の医者だ。緊急事態も緊急事態であるため複数人の医療関係者が「ガレーラ・カンパニー」に急行してきたのだが、とりあえずの目処がついたためにこうして責任者が説明の場を設けているのである。

この場を集まったのはこのウォーターセブンの有力者たちだ。まずは一番ドックの職長たち五人を中心に、残る四つのドックの責任者たちとアイスバーグの秘書であるカ

リファという「ガレーラ・カンパニー」の代表たち。そしてこのウォーターセブンの議会から代表数名に加え、商人ギルドなどの組合組織それぞれの代表たち数名。正しく有力者と呼ばれる者たちだ。

そしてそこに加えて昨晩到着した増援である海軍部隊から代表としてヴェルゴとその副官二名が部屋に通されていた。

実はこれでも絞った人数である。外には十倍ではきかない数の人間が詰めかけてきており、建物の奥にある会議室にもその声が僅かに届くくらいだ。それだけで今回の被害者であるアイスバーグという人物が、どれほどこの都市の人間から慕われているのがよくわかる。

「本当に命に別状はねえんだな？」

代表するように問いかけてきたのはゴーグルを着けた青い作業衣の男だ。張り詰めた彼の問いに、医者は頷いて応じる。

「ええ。発見が早かったのが良かったです。現在、容体は安定しております」

室内に安堵の空気が広がった。事前に簡潔に聞かされていたこととはいえ、こうして明確に言葉にされるとやはり安心感が違う。

だが、その空気も一瞬で切り替わる。

「しかしもう一人は違います。弾丸の摘出は無事に終わりましたが、予断を許さない状

況です。最善を尽くしますが……」

医者 of 口調は重い。医学のプロフェッショナルである彼がここまで言うのだ。相当まずい状況であるということだろう。

「そんなに不味いのか？」

そう言ったのはタイルストーンという大柄な男性だ。はい、と医者は難しい表情で頷く。

「正面から三発、背中から四発。その内の二発が内臓に到達していました。正直なことを申し上げるならば、命があることそのものが……」

重い沈黙が室内を支配する。そんな中、失礼、という言葉と共に前に出てきたのは一人の制服を着た男性であった。それも警察のものである。

「それらの詳細については私の方から説明いたします」

警察組織の責任者だ。その目の下には隈があり、彼もまたずっと身を粉にして今の時間までを過ごしてきたことが伺える。

「ではまず、状況から。カリファさん、お二人が会議室に入られたのを確認したのはあなたですね」

「はい。申し上げた通りです」

普段は毅然とした態度のカリファであるが、今日はどこか弱々しい。それでも受け答

えに動揺を見せないのは彼女の芯の強さ故か。

「その後即座に社員たちに声をかけ、応急処置。これについては他の方からも確認は取れています。」

そして肝心の事件についてです。状況から推測するものになりますが、まず——
警察の男が写真を会議室に備え付けられた黒板へと貼っていく。そこに被害者たちは写っていないが、それでも残された血痕からその凄惨さが窺える。

語られるのは、その夜に何が起こったのか。

あくまで推測であり予測。現場に残された痕跡から導き出されたものだ。

曰く——



事件は深夜に起こったと推察される。本日行われる予定であった記者会見の打ち合わせをアイスバーグ市長とオリン大尉の二人が会議室で行っていたところを何者かが襲撃。二人が使用していたと思しき机が半ばから砕かれており、これは襲撃者に対して

盾として使おうとしたところを破壊されたと推測される。

その後、襲撃者に対しオリン大尉がアイスバーグ市長を庇う立ち位置へ移動。そこへ襲撃者が銃弾を浴びせる。

放たれた弾丸の数は合計八発。連続して放たれたそれをオリン大尉が身を盾にして防ぐが、その内の一発が貫通してアイスバーグ市長の右腕に到達する。だがこちらについては深い傷ではない。

問題は腹部へ当たった一発であり、推測であるがそれを受けてオリン大尉は身を翻し襲撃者に背を向けてアイスバーグ市長を庇う体勢に入った。そこへ背後から三発の弾丸が叩き込まれ、二人は折り重なるようにして床へと倒れ込んだ。

その銃声を聞きつけ、アイスバーグ市長の秘書であるカリファが会議室へ入る。襲撃者の姿は既になく、あったのは血溜まりの中で倒れる二人の姿であった。

——以上が、この場に集まった者たちへ告げられた一連の情報である。

「……礼を言うというのも、おかしな話か」

報告を受け、少しの沈黙の後にそう言葉を紡いだのは議員の男性であった。年齢でいうならば60を超える人物であるが、自身よりも年若いアイスバーグを心から尊敬し、実際選挙においても全面的に支援を行なった人物の一人である。何なら議員の中では

真つ先に支持を表明したくらいだ。

ある意味で政治家らしい言葉を選ぶような言い回し。それに対して応じるのはヴェルゴだ。

「大尉は自身のなすべきことを果たした。……残念ながら、守るべき相手は無傷とはいかなかつたが」

「それは望み過ぎだ。こっちは本当に感謝してる」

ヴェルゴの言葉に対してそう言葉を紡いだのはパウリーだ。周囲の者たちもその意見に同意しているのは雰囲気で見ることができた。

『クルツポー。下手をすればアイスバーグさんが殺されていたかもしれない』

「そうじゃな。銃も部屋の隅に置いておつたという。……それでもアイスバーグさん命を守ってくれたことには感謝しかない」

続いてルツチとカクがそれぞれの言葉を紡ぐ。特にカクの言う通り、オリンの得物である銃は会議室の隅に置かれていた。おそらくは会議をする上で見える形の誠意を示すためにそうしたのでだろうというのが共通の見解だ。

「まさかこんなことになるとはな」

「誰だか知らねエがフザけた真似を……!」

続いてルル、そしてタイルストンの言葉である。それに対し、それについてだが、と

ヴェルゴが言葉を紡いだ。

「この襲撃について心当たりは？」

「……おれたちを疑ってんのか？」

ギロリと、鋭い視線を向けるパウリー。いや、とヴェルゴは首を横に振った。

「気を悪くさせたならばすまない。不勉強で申し訳ないが、我々はこのウォーターセブンについて詳しくないんだ。だから教えを乞いたい」

「……少なくともまずこの島でそんなことをするような奴はおらんじやろうな」

言ったのはカクだ。そんな彼の言葉にはい、と頷くのはカリファである。

「アイスバーグさんは圧倒的な支持を受けて市長になっておりますし、その施作についても順調です。それを考えると……」

「このような強硬手段を取ることはない、か」

ふむ、と腕を組んで頷くヴェルゴ。そのまま彼はならば、と言葉を紡いだ。

「外部犯か」

『それこそ“火拳”ではないのか？』

声を上げたのは鳩を肩に乗せた男、ルッチであった。外部犯——それを考えるならば、つい昨日一番ドックの前で暴れた海賊の姿がどうしても浮かび上がる。

「その“火拳”と廃船島で暴れてたって奴らは？」

「正体もわからねエからな……」

「だが海賊がどうしてアイスバーグさんを」

「海賊の考えることなんてわかるわけねエよ」

一つの言葉が上がれば、次々と言葉が溢れてくる。皆言いたいことも考えていることも色々あるのだ。

俄に騒がしくなる会議室。その空気を切り替えるため、ヴェルゴは一度手を叩いた。その音に反応し、彼へと注目が集まる。

「——推測は大事だが、それで足が止まっては本末転倒だ。相手の目的は不明だが……もしアイスバーグ氏の殺害が目的であると仮定した場合、次がある」

「させねエよ」

即座に答えたのはパウリーだった。無論だ、とヴェルゴは頷く。

「だが対応の仕方というものがある。そのための配置についてだが——」

「本社はワシらが守ろう。建物の構造も熟知しとる」

遮る形で言ったのはカクだった。ヴェルゴは他の者たちへも視線を送るが、この場の全員が彼の案を推しているように見えた。

「民間人に、と言いたいところであるが……承知した」

ヴェルゴは頷きを一つ返す。そうしてから言葉を続けた。

「共に協力していく予定が早まったということにしておこう。だが襲撃者の目的が読めないのも事実だ。他のドックが狙われる可能性もある。よってそちらには我々が警護に入ろう。確か「アクア・ラグナ」の予報も今日であったと記憶しているが」

「ああ。一番ドックはこの状況だから閉じちまうが、他のドックは市民が避難してくるはずだ」

「ならばその警護も兼ねてそちらは我々が対応しよう。市民を守るための部隊と捜索を行う部隊を編成する。『エニエス・ロビー』にも増援を要請しているが、到着は夕方と報告があった。現状は我々で対応するしかない」

「そこまで言ったところでヴェルゴは一度言葉を切った。室内を見回し、特に意見がないのを確認する。」

「無論、これが杞憂で終わるのであればそれが最上ではあるのだが」

「そうなれば一番だな」

ヴェルゴとパウリーの言である。それについてはこの場の全員も同じ思いだろう。そんなことはあり得ないということも含めて。

まあ、とりあえず大筋の流れは決まった。その上でヴェルゴが提案する。

「ではそのことについて市民に知らせるべきではないかね？ 我々としてもその方が動き易くなるのでありがたいのもあるが、何より市民に安心感を与えたい。」

「確かにそうだが……どうやってだ？」

「記者会見を行えば良いのでは？」

パウリーの疑問に応じたのはカリフアだ。ああ、と思い出したようにパウリーが頷く。

「アイスバーグさんがやる予定だった奴か」

「公にメッセージを発するのは市民の不安を取り除く上で一番の手段ではある。本来ならば大尉が出席する予定と聞いているが、この状況だ。私が出ようと思うが……」

「——わかった。おれが出る」

そちらは誰が、という暗の問いかけに応じるパウリー。そのまま立ち上がる彼に、いいのか、とルルが問いかけた。それに対し、葉巻の煙を吐き出しながらパウリーが頷く。

「良いも悪いもねエだろ。——おれたちでやるべきことをやる。そうじゃねエとアイスバーグさんに顔向けできねエ」

それはこの場の全員に共通する想いであっただろう。故に誰も反対せず、各々のやるべきことのために立ち上がる。

「確かにそうだ。アイスバーグさんが目を覚ました時に情けねエことは言えねエからな」

「とりあえず職人たちと市民への連絡じゃな。後は外の記者連中か」

「それは私が。どなたか手を貸していただけるとありがたいのですが」

『おれが行こう』

「パウリー、おれたちは会場の準備に行く。お前は内容について詰めておけ」

そして動き出したならば後は早い。テキパキと動き出す彼らに対し、ヴェルゴが眩く。

「良いチームワークだ」

「当たり前だ」

対し、パウリーは言う。何を当然のことを、と言外に滲ませながら。

「——あの人が築き上げたんだぞ」

水の都の重大事件。後に最も長い日と称されるその一日は。

未だ、始まったばかりである。



記者会見は紛糾するものと思われたが、意外にもスムーズに終了した。主役であるパウリーとヴェルゴの二人が常に冷静であったというのもあるだろう。丁寧かつ簡潔に質問に対して応じていた姿は印象的だったと後に参加した記者たちは語る。

特にパウリーは普段の借金取りから追われたり、露出の多い女性を見ると慌てる姿からは想像できないくらいに落ち着いていた雰囲気で見会に臨んでいた。

ウォーターセブンにおいて「英雄」と呼ぶに相応しい存在であるアイスバーグ。その後継者の筆頭という評価は、おそらくこの日の会見によって定まったとも後に謳われるようになるほどのものであった。

そして記者会見が終われば、記者たちはその情報を持ち帰って分析するのが職務だ。そのやり方は様々であり、本社に戻る者、その場で連絡をする者など多種多様である。

そしてそんな中で一際目立つのが、何故かアホドリの姿をした男を中心とした三人組であった。

「クワハハハ！ 記者会見はどうだったニュービーたち！」

「緊張しました。座って聞いているだけだったんですが……」

「まあ、あんなものだろう」

「ご機嫌に笑う人物——モルガンズの問いかけに対し、応じる方もそれぞれの個性が出

ている。

片方は年若い新人記者。もう片方は火の点いていない煙草を啜えた男だ。

「しかし、ふむ。まア無難な対応だな。犯人は『火拳』、ねエ……」

含みのある言葉であった。その口端には笑みが浮かんでいる。

「あの、何かおかしなことが……?」

「相手は海賊、それも『四皇』の最高幹部だ。『暗殺』なんて大人しい真似をするのかつて疑問が一つ。もう一つは——」

「——メリットがない」

引き継ぐように男が言う。その通りだ、とモルガンズが頷いた。

「公にはしてねエが海賊相手でも『ガレーラ・カンパニー』は商売をしてる。つまりは絶対的な敵対関係ってわけではなく、交渉できる相手ってことだ。その上でMr. アイスバーグと『火拳』の間に『暗殺』って構図が成立する動機が見えねエ」

「それはそうですけど……でも、一番ドック前で暴れましたよね?」

「二見した規模は大したもんだったが、あんなもん『火拳』にとつちや挨拶ですらねエ。並の船なら五、六隻は一撃で沈める化け物だぞ? 怪我人さえろくに出てねエ時点で」

その気は「はねエさ」

肩を竦めるモルガンズ。そう言われてみると、と頭を悩ませる記者に対し、男が補足

するように言葉を紡いだ。

「おそらくそれは会見をしていた連中もわかっている。だがどこの誰か皆目見当がつかない、と告げるよりはある程度明確な相手を想定した方が市民は安心する」

「まア、絶対にねエとは言えねエもある。おれたちが見えてねエ事情があるかもしれねエからな」

「そう……ですよね。海賊が何考えてるかなんてわからないですし」

頷く記者。だがそんな彼に対し、おいおい、とモルガンズは言葉を紡いだ。

「それは違うぞニユービー。何考えてるかわからねエつてのは思考の放棄だ。はつきり言っておくが、海賊つてのは無法者だが人であることは間違いねエ。その本質はおれたちと同じなのさ」

「同じ、ですか？　でも海賊は犯罪者で……」

「その犯罪者の定義は誰が定めたのか、というのが一つ。まアここは掘り下げると収集がつかねエからな。だからここはわかりやすく話をしよう。——損得だ」

損得。それは人が人である限り必ず付き纏う概念だ。それは即ち、人という存在における共通した価値観であることを示している。

「乱暴者で無法者。それが海賊つて存在だが、だからこそ逆に損得について敏感だ。奴らは自分が損することは基本的にしねエと言ってもいい。法の外にいるからこそ利益

と不利益には敏感になるしかねエのさ」

「……たまに読み違える奴もいるが、それはあくまで読み違えだ。それこそここで料金の踏み倒しをしようとしたという奴らがそうだな。奴らは読み違えた結果不利益を得たわけだが、それは結果論だ」

「そいつはわかり易い例だな。踏み倒せるなら間違いなく利益を得られる。だから行動した。その瞬間において損得の計算は成り立ってたわけだ。——ここで勘違いしちゃならねエのは、損得の計算による行動とその結果としてもたらされるものは必ずしもイコールじゃねエってことだ。結果はあくまで結果に過ぎねエからな」

要は前提条件の違いだという話だ。人はどうしても結果を見てその行動の是非を判断するが、そもそも人が行動を起こす際に結果を予測はできても確定はできない。故に起こったことからその動機を推測するとどうしてもズレが生まれるのだ。

「重要なのは何をやったかではなく『どうして』やったのかだ。だからこそその損得だな」
「……『火拳』にはそれがあるぞ？」

「それを調べるのがおれたちジャーナリストの仕事だ」

両手を広げ、笑みと共に言うモルガンズ。そのまま彼は言葉を続けた。

「だがいきなりそう言われてもわからねエだろう？ だから思考方法について一つレクチャーしよう。——そうだな、この事件で誰がメリットを得たのかについて考えてみ

ろ」

「メリット、ですか？」

「利益と言い換えてもいい。良いか、よく覚えておけニュービー。その事象がどんなものであれ、事が起こった以上必ず損得が発生する。それは短期的、長期的な違いこそあるが例外はねエ。誰もが絶対に損するしかねエなんて現象は起こりやしねエのさ」

そしてモルガンズは年若い記者へと指示を出す。

「それを見極めるのに必要なのはいつだって情報だ。まずは量、それから質。——後はわかるな？」

「は、はい！ 聞き込みに行つてきます！」

指示を受け、走り出す記者。実に素直だ。あんな頃があつたかもしれないと一瞬モルガンズは思ったが、それでもねエなと思ひ直した。割と昔から自分は変わつていない気がする。

「いやア、若エつてのは良いことだ。愚直に進めるのは若者の特権だな」

「そんなことはないだろう。誰にだつて権利はある。その行使に躊躇するだけだ」

「それが大人になるつてことだ。悪いもんでもねエが」

クワハハハ、と笑うモルガンズ。そして彼は壁に背を預ける男へと問いかけた。

「ではもう一人のニュービーにはもう少し踏み込んだことを聞こう。どう見る？」

「損得の話でいうならば、この事件で最も得をしたのが誰かなど明白だ」

「ほほう、誰だ？」

ニヤニヤと楽しそうな笑みを浮かべているモルガンズ。そんな彼を一瞥すると、男はため息と共に呟いた。

「——世界政府だ」

何を当たり前のことを、と言いたげに語る男と、その返答を受けて笑みを深くするモルガンズ。男は言葉が続けた。

「この事件をきっかけにこの都市の世論は海軍の受け入れについて前向きになるだろう。一海兵が文字通り体を盾にして市長を庇い、重傷を負った。そこに『そもそも最初から彼女のような海兵がもつと大勢いればこうはならなかった』というような言説でも出回れば一発だ」

「反対意見は押し流されるだろうなア」

「事実が持つ力は大きい。文字通りの命懸けでこの都市の市長を守ったという『事実』は他の要素から目を逸らすには十分過ぎる」

つまらなさそうに言う男。対し、モルガンズは楽しそうだ。

「よくできた良いシナリオだなア。この筋書きを描いた奴は大したもんだ」

「それを調べるのがジャーナリストの仕事だろうか？」

「クワハハハ！ わかつてるじゃねエか！」

笑うモルガンズと、ため息を吐く男。態度こそ真逆だがその二人の考えは一致していた。

だが、これもあくまで推測だ。故にこそ裏を取る。それがジャーナリストという存在なのだから。

「だが世界政府にとつては棚から牡丹餅の可能性もある。『火拳』か、或いは別の勢力がやった可能性は十分あるからな」

「常識的に考えればそうだな。私の言はただの陰謀論だ」

肩を竦める男。いいねエ、とモルガンズは頷く。

「思ったよりも事は大きくなりそうだ。——旦那方が行くところにはいつもこうして嵐が来る！ 素晴らしい！」

実に楽しそうな共犯者を眺め、男は息を吐く。その彼に対し、モルガンズが指示を出した。

「さア、ジャーナリストとしての初仕事だ。相手はわかるな？」

「自説の裏付けか」

「エクセレント！ 話が早くて実に良い！」

賞賛の言葉をスルーし、壁から背を離す男。その背に対し、そういえば、とモルガン

ズが言葉を紡いだ。

「記事を書くんなら名前が必要だな。どうする？」

「……必要になった時に適当に考えればいい」

言うと、男はその場から離れていく。その目標は明確だ。

——海軍。

この事件において、意図的か結果的かは不明だが一番の利益を得ている者たち。彼らを追うことが彼の仕事だ。

気は乗らないが仕方がない。今の男はもう、彼らと同じ側に立つてはいないのだから。

「……無駄な感傷だな」

小さく呟き、男は歩いていく。不自然なほどに足音がしないその歩みの異質さに気付ける者は、この場にはいなかった。

本来、災害こそ起こるが平和であった水の都。そこで起きた大きな事件。人々は勘づいていた。これはまだ序章。始まりに過ぎないのだと。

そして事実、事件は未だ収束していない。

様々な思惑を孕みながら、水の都の時は過ぎていく。平等に、遅滞なく。

時の歩みを止める術は、
“神”すらも持っていないのだから。

逃亡海兵Water Seven

第十五話 水の都の一番長い日②

風が強くなったように感じる。いや、実際にそうなのだろう。確か「アクア・ラグナ」と言っただろうか。巨大な高潮が来ると聞いている。その予兆が既に出始めているということなのだろう。

海に生きる以上、どうしてもその機嫌には敏感になる。本能に訴えかけて来るような感覚は、正しく災害の予兆だ。

「——『アイスバーグ市長暗殺未遂?! 犯人は「火拳のエースか!?!」だつてよ』
風を受けながら考え事をしている海賊——「火拳のエース」に対し、新聞を広げながらそんなことを言うのは相棒であるデューズだ。このウオーターセブンの地元新聞社が発行するそれには『号外』と書かれており、緊急で配られたことがわかる。

「市長は意識不明だが命に別状はなし。だが市長を庇った海兵は重傷で今も予断を許さ

ない状況」

今やこの都市において最悪の敵となつてしまった“火拳のエース”。全く心当たりはない話なのだが、それを主張したところで信じては貰えないだろう。

「寝て起きたらとんでもねエことになつてやがるが……どうする、エース？」

「どうする、つて言つてもな」

エースとデユースの二人がいるのは『裏町』と呼ばれるエリアにある宿泊施設の屋上だ。お尋ね者である彼らはそもそもあまり目立つ場所に宿は取れない。故にこそあまり目立たない、小さな宿泊施設に泊まつていた。ここはその屋上である。

「無実だと訴えれば聞いてくれると思うか？」

「まあ、聞く耳を持つわけがねエな」

エースの言葉に対し、デユースは肩を竦めて応じる。彼らは海賊なのだ。そもそもからして無法者である彼らの弁解にどれほどの意味があるというのか。

「元から追われてるつてもある。向こうにしてみりや理由が一つ増えたぐらいの感覚だろ」

一番ドック前での小競り合いに近いイスカたちとの衝突の結果、エースの存在はこの都市の中に知れ渡つてしまつている。そこに更なる理由が追加されただけというのも間違つてはいない。

「嫌われるのは別に慣れてるが」

世界の嫌われ者である海賊だ。この都市のように真つ当な人間が暮らす場所ではどうしたって疎まれる。

だからそれはどうでもいい。エースの中で引つ掛かっているのはそこではないのだ。

「……が？」

「誰がやったのかは気になるな」

そう、そこだ。この水の都の騒ぎようからしてアイスバーグという男はかなり慕われているのだろう。そんな人物を暗殺しようとした者とは一体何者なのか。

「それにやってもねエことのを罪を叫ばれて黙ってるつてもまア、性に合わねエ」

「……エース。お前さつき仕方ねエみたいなこと言つてなかつたか？」

「言つたのはお前だろ？」

言われ、デュースは先程のやり取りを思い出す。確かにエースは明確な答えを口にしていなかった。

「そういうやそうか。……いや待てエース。お前何するつもりだ？」

「何もしねエよ」

「なんて信用できねエ台詞だ……」

「おい」

気安い会話だ。だがこれが彼らの普段のやり取りであり、やり方でもある。

「それで？ 何をするんだ？」

「いや、だから今は何もしねえよ。オーズたちも呼べねえし」

「まあ、海軍の増援が大勢来てるようだしな……。下手に連絡すれば傍受されるだろうし、そもそもこの状況であいつらを呼んだらどうなることか」

どう考えてもエースが仲間を呼んでウォーターセブンに攻め込もうとしているようにしか見えないだろう。そうしなければ必要な争いを呼ぶことになる。最悪戦争だ。

「正直、とつとと撤退するべきだと思うぞ。お前の弟と妹もここにはいねえだろ」
「どうしてそう思う？」

「一つ所に長居できるような立場じゃねえし、＼アクア・ラグナ＼なんて高潮が来るんなら普通はさっさと島を出るさ。足止めされて周囲にバレるリスクを負う必要もねえ」

デユースの考えは常識的だ。そういう意味では間違いではない。だが実際は奇妙な縁でこのウォーターセブンに件の二人は辿り着き、島から出れるような状況ではなくなっていたりする。物事とは常識的な判断だけでは上手くいかないという良い例だった。……あの二人が色々例外なのかもしれないが。

だが実際のところエースたちは目的の人物たちの足取りを掴めていないのだ。彼らの視点からすれば、このウォーターセブンにあの二人はいないと判断するのも無理から

ぬことであつた。

「……まア、そうかもしれねエが」

だが、エースの言葉は煮え切らない。それはあの「革命軍」のNo. 2のことか。

或いは――

「イスカのことか気になるのはわかるが」

「……なんであいつが出て来るんだ？」

ジロリとこちらを睨むエース。そんな彼に対し、肩を竦める彼の相棒。手慣れた対応であつた。

「違うのか？」

「違う。……まア、顔を見ただけでも良かった。元気そうだったしな」

素直じゃねエなア、という言葉は飲み込んだ。余計なことを言えば焼かれそうだった。

そして何かを考え込む仕草をするエース。そんな彼に対し、デュースが問いかける。

「何か気になることがあるのか？」

「……具体的に言葉にできるわけじゃねエ」

だが、とエースは言う。

「何となく、まだここにいた方がいい気がする」

そんなことを言う彼に対し、とても嫌そうな顔をデューズがする。全力で『嫌だ』という感情が伝わってくるほどの表情だ。

「……勘か？」

「まあ、そうだな。根拠はねエ」

「そうか、勘か。……お前のは当たるんだよなア……」

本能というべきか、第六感というべきか。こういう時のエースの勘は当たるのだ。

「……仕方ねエか」

ポツリと、デューズは呟く。そして彼はエースの隣へと並び、言葉を紡いだ。

「お前が言うんなら付き合うぜ、エース」

「良いのか？」

「今更だ馬鹿野郎」

嫌ではあるが……そう、今更だ。

あの日、この男と出会ってからデューズという男の人生は大きく変わった。

そして誓ったことが、心に決めたことがある。

「お前の相棒だろ、おれは」

この男の歩む道を、その足跡を見届ける。

それが、デューズの決めたことだから。



水の都を駆け巡る情報。その衝撃は等しく、その地にいる者たちへともたらされる。市民たちは勿論のこと、この地を訪れているだけの者にとつてもそれは同様だ。

「この海兵つてのは、昨日聞いた元部下か」

広間の隅。そこで机を挟んで向かい合う幾つかの人影のうちの一つ、フランキーがそう言葉を紡いだ。その対面に座る二人——ルフィとウタが頷く。

「ああ、そうだ」

「……オリン」

険しい表情のルフィと、呆然とした表情のウタ。対象的にも思えるが、その心情はほとんど同一だ。

ずつとついて来てくれた部下であった人であり、友達。

自分の立場が悪くなることなどわかっていただろうに、それでも自分たちを逃すために体を張ってくれた人。

「どうして」

つい昨日に再会したばかりだ。碌に言葉を交わすこともできなかったが、それでも会えて嬉しかった。

その彼女が、どうして。

「色々と書いてあるが、簡潔に言うならアイスバーグを庇つて重傷つてところか。……海兵の鏡だな」

揶揄するようであり、しかしそこには賞賛も込められていて。

音がするほどに強く、ルフィは自分の拳を握り締めた。机の上にある新聞から視線を外し、フランキーへと視線を向ける。

「フラ——」

「やめとけ」

しかし、その名を呼ぶ前に制止された。フランキーは呆れた様子で肩を竦める。

「おめエらの立場を考えろ。乗り込んで何になる?」

「でも」

「今はこの『火拳』つてのが容疑者みてエだが、おめエらが乗り込んだら容疑者はおめエらになるだろうな。それでもいいってんなら止めねエが」

言い切られ、ルフィもウタも言葉を詰まらせる。かつての海兵であった頃ならばとも

かく、今の二人は世界中に手配をかけられた賞金首だ。何も考えずに「ガレーラ・カンパニー」に出向けば、間違いないで追われることになるだろう。

かつての部下が、友達が苦しんでいる時に側に行くことさえもできない。それが今の二人の立場だった。

「それに、あつちはどうする」

言いつつ、フランキーが親指で部屋の一部を示した。そこには「スクエア・シスターズ」の二人とイル、そしてその三人から教わりながらビリーと共に何かの作業をしているシャオの姿がある。

見たところ、あれはノートに何か文字を書いているのだろうか。もしかして勉強かもしれない。そういえば以前、シャオは勉強を頑張っていると言っていた気もする。

「シャオにこのことは？」

「知ったところで何もできねえんだ。言つてねえよ。この海兵が保護者なんだろう？」

ウタの問いに首を振って応じるフランキー。微妙な判断ではあるが、確かにシャオに知らせるにはあまりにも衝撃が大き過ぎる。

「あいつらにも言い含めてる。……まア、ずっと隠しとくわけにもいかねえだろうが」

「そうか。すまねえ」

「おめエが謝ることじゃねえよ」

コーラの入ったジョッキを手に取り、一気に飲み干すフランキー。重い空気が流れる中、それにしても、とフランキーは口を開いた。

「火拳」とは随分な大物だ。何でそんな奴がアイスバーグを狙うのかね？ あいつはまあ、ムカつく奴だが海賊の恨みを買うような奴じゃねエはずだが」

「……エースはそんなことしねエ」

首を捻るフランキーに対し、思わずルフィがそう言葉を紡いだ。フランキーが眉を顰める。

「この海賊を知ってんのか？」

「ああ。——エースはおれたちの兄ちゃんだ」

一瞬、時が止まったようだった。眼前のフランキーは動きを止め。

「……………」

まず、空のジョッキを机の上に置いた。そして腕を組み、首を捻る。

そして一つ頷いた後——

「——はア!?!」

随分遅いリアクションを返してきた。

いきなりの大声に、離れた場所で各々の作業をしていた者たちが一斉にこちらを見る。だがそれには意識を向けないまま、フランキーが言葉を続けた。

「おめエらの兄貴!? 火拳” つつたら——」

だが、言いかけたところでフランキーは言葉を止めた。眉を顰め、改めて言葉を紡ぐ。
「今、『おれたち』つつつたか？」

「血は繋がってねエんだ」

「小さい頃に盃を交わしたの。……色々あつて」

含みのあるウタの言葉。なるほどねエ、とフランキーは頷いた。

「おれたちみてエなもんか」

「かもな」

親分たるフランキーと、子分たるフランキー一家の者たち。彼らにも血の繋がりはないのだろう。だが、確かにそこには絆があるように感じる。確かに似ているのかもしれない。なかつた。

「しかし、海軍で名を上げたおめエらと 火拳” がそんな関係だとは……結構なスキヤンダルなんじゃねエのか？」

「どうだろ。仏のおつちゃんは絶対に周りには言うなつて言つてたけど」

「いやそれ駄目つてことじゃねエか」

大丈夫かよ、とフランキーは呆れた様子だ。だが別に問題ないだろう。今はもう、そんなことで咎められるような立場ではない。

「エースが何でここに居るのかはわからねエ。けど、エースはこんなことしねエよ」

「その根拠は何だ？」

「エースだからな」

それに対する返答は呆れた表情であつた。まあいい、とフランキーは頭を掻いて息を吐く。

「別におれは探偵じゃねエし警察でもねエからな。真相を知りてエわけじゃねエ。……だが、現実としてどうするかが問題だ」

フランキーの視線の先にいるのはシャオだ。難しそうな表情で彼は言葉を続ける。

「今は向こうも混乱してゐるんだろうが、そのうちシャオのことについてここに誰かしら来るだろう。その時にどうするかだ」

シャオ自身の希望と、オリンがこちらを信頼したからこそあの少女はここに居る。おそらく後からオリン自身が迎えに来るつもりだったのだろう。だが、それはできなくなった。

ならば代理で誰かが来る可能性は高い。その時、暗黙のうちに済ませようと思つていた部分をどうするかが問題だ。

「おめエらが顔を出せば間違いなく面倒なことになるが、それだとしてあの海兵がシャオをこんなところに預けたのかって話になる。そうなりや遠からずおめエらの存

在が表に出るだろうよ」

ルフィとウタ、そしてオリンとシャオ。その繋がりがあるからこの状況だ。その一角が崩れた以上、確かにこの場に二人がいることが露見する可能性は高い。

そしてそうなれば、一番の迷惑を被るのはフランキーたちだ。

「……これ以上迷惑をかけるわけには」

言つたのはウタだ。馬鹿野郎、とフランキーは言う。

「今更水臭エことを——」

「アニキ！ 大変です！」

言いかけたフランキーの言葉を遮るようにこちらへと走り寄ってきたのはザンバイだ。どうした、とフランキーが呼びかけると、息を切らしたザンバイが言葉を紡ぐ。

「外に海兵が！」

その言葉に、厳しい表情をする三人。

「……手が早エな」

小さくフランキーが呟いた。そのまま彼はザンバイへ問いかける。

「何人だ？」

「——一人だな」

だが、答えたのはザンバイではなくルフィだった。フランキーが眉を顰める。

「一人だア？ どうしてわかる？」

「ちよつとな」

ルフィの言葉に眉を顰めるフランキー。だが、彼がそれについて思考を動かす前にザンバイが言葉を紡いだ。

「は、はいアニキ。確かに一人です」

その言葉を聞き、一度ルフィの言葉については脇に置いておくことにしたのだろう。フランキーは疑問を口にする。

「何で海兵が一人でここに来るんだよ」

「理由はわからねえんすけど、その、アニキに会いたいと」

「……………いや、何でだ？」

本気で困惑するフランキー。海兵がたった一人でフランキーハウスへ、しかもフランキーに会いに来たという。その意図がわからなかった。

「どうします？」

「どうするつたつてなア……………とりあえず、会うしかねえだろ」

頷くフランキー。そのまま彼はルフィとウタの方へと視線を向けた。

「おめエらはとりあえず隠れとけ」

「え、けど」

「海兵に顔見られたら厄介なことにはかなならねエだろ」

そう言われると反論できない。わかった、とルフィは頷く。

「悪イ、フランキー」

「ごめんなさい」

「だからそういうのは必要ねエよ」

ひらひらと手を振るフランキー。それを見送り、二人は大きなソファアの陰へと姿を隠す。大広間は随分とごちゃついているし物が置いてあるが、二人揃って身を隠せそうなのがここしかなかった。

耳を澄まし、来訪者の声を聞く。ルフィの「見聞色の覇氣」が捉えている気配は一つだけだ。そしてその気配は随分強い。相当な実力者だ。

「——突然すまない。本当はもつと早く来るべきだったのだが」

生真面目そうな声だった。来訪者たる海兵はそこで一度言葉を切ると、凜とした声で言葉を紡ぐ。

「私は海軍本部大尉、イスカだ。——ここに、シャオという少女とビリーという鳥がいると聞いている」

その来訪は、吉となるか凶となるか。

ただ、言えるのは。

——それが、二つ目の事件の予兆であつたということだけだ。

逃亡海兵Water Seven☒

第十六話 水の都の一番長い日③

アイスバーグという人物はこのウォーターセブンの市長であり、*「ガレーラ・カンパニー」*の社長であり、優れた造船技師であり、政治家であり——そして都市中の人間から慕われる人物だ。

そしてだからこそ、その人物を暗殺しようとした者に対して市民は怒りを抱く。そう、それが悪名轟かせる大海賊——*「火拳のエース」*と呼ばれる怪物であるとしても。

恐怖を飲み込み、怒っている。

だが、怒りよりも強い感情がある。

それは——祈り。

彼らの誇りたる男が目覚ますことを、誰もが祈っていた。

……その祈りが、通じたのだろうか。

「——皆さん。静かに、部屋に入ってください」

「ガレーラ・カンパニー」本社。一番ドツクの職長たちが集まるその場所へ、カリファが歩いてくる。

「おい、それは」

「アイスバーグさんが」

その表情に色が戻る。カリファは目に涙を浮かべ、頷いた。

「たった今……意識を取り戻しました」

「本当か!？」

「良かった!」

つい先程まで張り詰めた、今にも爆発しそうな緊張感から一転し、笑みと共に言う男たち。そんな彼らはカリファに言われた通り、静かに部屋へと入っていく。

「アイスバーグさん!」

「……ンマー……心配かけた……」

声に少し力がない。だが思ったよりも大丈夫そうな声に、部屋に入った全員が安堵す

る。

「とにかく命があつて良かった。ゆっくりお休みになつて」

「造船所のことはおれたちに任せてくれ」

「アイスバーグさんが元気になるまでなんとかするぞ!」

パウリー、ルル、そしてタイルストンの言葉である。その後ろではカクとルッチも頷いていた。

そんな彼らの姿を見、アイスバーグが小さく微笑む。

「……頼もしいな」

その眩きを受け、他の者たちも笑みを浮かべる。これなら大丈夫そうだ、と周囲の者たちが思ったところでアイスバーグが口を開いた。

「……昨夜、会議室に侵入してきた犯人だが……」

「それなら捜査中で……一応、『火拳』じゃねエかという話になってますが」
『犯人を見ておられるので?』

パウリーに続き、ルッチが問う。いや、とアイスバーグが首を横に振つた。

「入つて来たのは二人だ。二人とも仮面を被つていたが……片方はおそらく男だ。随分でかい男だった」

「もう一人は?」

「わからぬエ……男と比べれば背が低いようだったが、そちらは何も言わなかったからな」

カクの問いに、思い出すように目を閉じながらアイスバーグは言う。

『男の方は何かを言っていたと?』

「ああ。一言だけだった。——『運がなかったな』、と」

その言葉に、室内の者たちが顔を見合わせる。その言葉の意味がわからなかったのだ。

目的は不明だが、明確な意思を持って暗殺者二名は会議室に侵入したはずだ。だとはいふのに『運がなかった』とは。その言葉の意味することがわからない。

「……大尉殿は?」

そして、アイスバーグは言いにくそうに言葉を紡いだ。一瞬、室内に重い空気が漂う。

「今は別室で。……かなりの重体で、どうなるかは」

「……そうか」

目を閉じ、呟くアイスバーグ。

「悪いことをした」

その言葉に対し、言葉を返せるものはいなかった。その話題を切り替えるように、ルルが言葉を紡ぐ。

「現在、海軍とおれたちで連携して都市内の搜索と市民の避難を進めています。ただ、今のところ足取りは……」

「今夜は、アクア・ラグナ」じゃ。日没までにはどうにか終わらせたいところじゃが」「難しいだろうな」

このウォーターセブンに定期的に襲い来る高潮、アクア・ラグナ。それが来てしまえば他のことに対応する余裕などないことをこの場の全員がよく知っている。故にそれまでに決着をつけたいところだが、相手が相手だ。そう上手くいかないだろう。

「とにかく今は体を治すことを最優先に」

「……ああ、悪いな」

張り詰めていた空気が少し緩んでいく。だが、この場の者のうち何人が気付いただろうか。

——アイスバーグの眉間、そこにずっと小さな皺が刻まれていることに。

その瞳に、僅かに焦りのようなものが宿っていることに。



「——このような形で挨拶で大変申し訳ない」

『それはこちらの台詞だ。申し訳ない』

互いの最初の挨拶は謝罪からであつた。形式的なものではあるのだが、だからこそ重要である。立場のある者同士の話の入りとして形式を踏襲するのは互いの持つ社会性の確認に他ならないからだ。

礼儀を持ち、形式を重んじるだけの理性と常識を持っている。それをお互いがお互いに示すための手順なのである。

「私は海軍本部中将、ヴェルゴです。今回は非常事態との連絡を受けて急行しました。……貴方の身に降りかかった件については心より謝罪させて欲しい。もう少し我々が早く着いていてば、もしかしたらこうはならなかったかもしれない」

部下を連れての“火拳”の搜索の途中、足を止めてヴェルゴは机の上に置いた電伝虫を通してアイスバーグと会話をしていた。現状、ウォーターセブンに急行した海兵たちを束ねる立場である彼はその立場だからこそやらなければならないことがあるのだ。

『謝罪をしたいのはこちらの方だ。……大尉殿には申し訳ないことをした』

「いえ、彼女は海兵です。成すべきことを成したのみ。市民を守るのは我々の責務です」
『しかし……』

「——ならば、彼女には感謝を伝えていただきたい。それが何よりの誉れでしょう」

近くの海兵が吐息を溢した。ヴェルゴの言葉に感じ入る部分があったのだろうか。

『……わかった。そうさせてもらおう』

そしてそれはアイスバーグも同じであつたらしい。少しだけ彼の言葉も柔らかくなつた。

それに一つ頷きを入れて間を取ると、ヴェルゴは実務的な話を切り出す。

「既に聞き及んでおられると思いますが、現在我々は市民の避難と犯人の捜索に当たつています」

『話は聞いている。すまないが頼む』

「それが我々の役目です。しかし、『エニエス・ロビー』から増援が来る予定ですがそれまではどうしても人数上万全とはいきません。そのため一番ドックについてはそちらにお任せしている形になっているのですが……」

正しくは『ガレーラ・カンパニー』の社員——というより幹部が言い出したことであるのだが、そこを配慮してこちらにも不備があるという論調で告げるヴェルゴ。そんな彼に対し、アイスバーグが言葉を返してきた。

『いや、こちらが言い出したことと聞いている。気を遣つてもらつてすまない』

「本来、民間人に頼るのはあまり歓迎したくないことですが」

『今後も協力していく関係だ。その第一歩としよう』

そこまで言い切ったところで、小さな呻き声が受話器越しに聞こえた。失礼、とヴェルゴがそれを察知して言葉を紡ぐ。

「あまり無理をなさらないでください。こちらはお任せを」

『ああ、すまない。……市民を頼む』

「勿論です」

そのやり取りを最後に、二人の通話は終わった。ヴェルゴは立ち上がると、近くにいた副官へ声をかける。

「聞いた通り、期待には応えなければならぬ。状況は？」

「概ね予測通りです。ただ避難については少々難航している部分もあると報告が」

「ある程度は仕方がない。市長の暗殺未遂とほぼ同時に海軍が都市内に入ってきた、となればどうしても不安になるものだ。根気強く当たるしかない」

暗殺未遂が発覚し、大枠での動きが決まった後にヴェルゴはここへ派遣された海兵をいくつかの部隊に分けた。ヴェルゴ率いる追撃部隊の者たちは犯人捜索のために都市全体へとその人員を割り、"エニエス・ロビー"に所属していた海兵については市民の避難と各ドックの警備に当たらせている。

理由は色々あるが、ヴェルゴ率いる追撃部隊は戦闘を想定した装備と人員によって構

成されている。『火拳』ともなれば大物だ。即席の部隊で対応できる相手ではなく、故に彼らが当たることは既定路線だったのだ。

対し、『エニエス・ロビー』に所属する海兵たちはその地理条件からウオーターセブンという都市に対して理解がある。中には住民と顔見知りの海兵もいるだろう。ならば彼らに避難と警備は任せたほうが良いという判断があった。

実を言うと本音では色々理由があるのだが……それはまた、別の話である。

「……風が強いな」

ふと、ヴェルゴはそう呟いた。それに対し、副官の海兵が頷きを返す。

「予報では深夜がピークということでしたが、この分だと幾分早くなる可能性があるかもしれません」

「ならばその前に決着を着けたいところだ。ただでさえ災害級の高潮が来る夜に、どこにいるのかもわからない海賊の存在など市民にとってどれだけの不安であるか」

どこまでも海兵として理想的な言葉だ。周囲で聞いている副官以外の海兵たちできえも感じ入った目でヴェルゴを見ている。

と、そこで電伝虫に着信が入った。副官が受話器を取る。聞こえてきた声は。

『——おれだ、ヴェルゴ中将』

存在しない機関、CP9。『闇の正義』を掲げる者たちを束ねる男のものであった。



海列車の先頭車両。そこにいるのはCP9の構成員とその長官だ。機密性が高い存在であるが故、他の車両とは違い彼らは数人で一つの車両を使用している。

実を言うと、「エニエス・ロビー」にCP9がいることはそこに所属する者たちならば知らない者はいないような公然の秘密だ。故に関係者しか乗っていない海列車で今更という見方もあるのだが……まあ、そういう『形式』も大切なのである。

「長エ話をする必要もねエから簡潔に言うが、おれたちが着くまでそう時間はかからねエ」

通話相手に対し、芝居のかかった口調で言うのはCP9長官スパンダムだ。そんな彼の様子を、この車両にいる他の三人は黙って見つめている。

「すぐに動ける人員をフル動員した。到着次第そっちの指揮下に入れてくれ」

『良いのかね？ 私には外から来た人間だが』

「おれはあくまで諜報畑の人間だからな。今回はそっちに用兵を任せたい。適材適所つ

て奴だ」

わざとらしいスパンダムに対し、どこまでも簡潔に対応するヴェルゴ。その光景を見てジャブラは内心で息を吐く。

(茶番だな)

自分達を含めた増援についても、その増援のほとんどがヴェルゴの指揮下に入ることにも既に打ち合わせ済みだ。昨夜、秘密裏に行われた電伝虫による協議の結果としてそうなった。

故にこれは本人たちのための会話ではなく、ヴェルゴの周囲にいろであろう海兵たちへ伝えるためのものだ。

『人手が足りないと感じていたところだ。感謝する』

「ああ、そう言ってもらえるとありがたいな。状況はどうだ？」

『避難については少々手間取っている部分はあるが基本的に順調だ。だが犯人の足取りについては掴めていない』

「——それについてだが、うちの諜報員が掴んだ情報がある」

待ってましたと言わんばかりのスパンダムの言葉。少々ヴェルゴの言葉に対する回答が早い気がするが……まあ、良いだろう。勘のいい奴が微かな違和感を感じる可能性はあるが、それで何かが変わるわけではない。

『犯人の手がかりかね?』

「かもしれないエな。どうも大層な大罪人がそこにいるらしい」

『……“火拳”ではなく?』

「そうだ。——これ以上は当人に聞いてくれ。どこで情報が他に漏れるかわからねエからな」

『承知した』

そして二、三の言葉を交わし、二人の通話が終了する。受話器を置いたスパンダムは上機嫌だ。

「順調だな。これで海軍に貸しも作れた」

「チャパパー。どういう貸しなんだ、長官?」

そんなスパンダムに対し、そう問いを発したのはフクロウだ。そんな彼に対し、言っ
てなかったか、と笑みと共にスパンダムが言葉を紡ぐ。

「主に二つ。一つは“エニエス・ロビー”の戦力についてだ。これはおれたちの側から
海軍に譲歩した結果でもある。“エニエス・ロビー”の防衛戦力を削って海軍に協力し
てるわけだからな。貸しとするには十分だ」

勿論、本来の職務を考えるならば当然の対応ではある。だがそういった『当然の論理』
だけでは組織は動かないのもまた現実だ。人間が運用する以上、どんな形であれ感情は

絡んでくる。そこをどうにかするの、もまた責任者の役割であるのだが。

今回に関しては送ることは確定事項だ。故にどういう形で今回の増援を送ったことにするのが重要であるという話であり、スパンダムはそれを『増援を海兵が要求した海軍本部はすぐに対応できないため、『エニエス・ロビー』の防衛戦力の一部をスパンダムの判断で送ることにした』という形にしたのだ。

CPと海軍は同じ世界政府の旗下にある組織だが、その性質上互いの領域に干渉し合うことも多くどうしてもぶつかってしまうことが多い。そのため結果として縄張り争いのようなものが頻発している。

それらを飲み込み、CP9長官として事態を収めるために譲歩した——その事実を受けた海軍は一定の借りを受けたと感じるだろう。CP9、というよりスパンダムとしては貸しを作った、という形になる。

「しかし長官、そいつを相手に無視されちまったらどうするんではない？」

「それならそれで構いやしねエキ。恩知らずって事実が残るだけだ」

クマドリの疑問に対してもスパンダムは余裕の笑みを浮かべたままだ。

「それに本命はもう一つの方ってのもある。——例の『大逆人』共の居場所をおれたちが掴んで提供した。それは海軍にとっちゃ大きな借りだ」

偶然からとある諜報員が見つけた情報である。使いようなどいくらかでもあるのだが、

そこを敢えて誠実に海軍へ伝える形を取るのだ。任務を果たしたただけだと言えどもそれまでだが、その内容の重要度を考えれば海軍も礼を言つて終わりとはできないだろう。相応のものを返さなければ今後に関わる。

「ま、貸しなんて言うとは感情論に聞こえるかもな。実際的に言うならこつちから要求ができるようになる、つてとこだ。『おれたちはあの時お前らに力を貸した。だから今度はお前たちが』つてな」

その言葉を聞きながら、しかしジャブラは渋い表情をしていた。今の言い回しはヴェルゴのものとはほとんど同じだということに気付いたからである。

あの時、あの部屋でヴェルゴが語つたこと。それがスパンダムを上機嫌にさせている今回のストーリーの草案だ。

「まず第一に、我々はウォーターセブンに対して戦力を送る大義名分を得ているということが重要だ。長官殿の計画については聞いているが、計画とは不測の事態がつきものだ。CP9の諜報員以外に『こちら側』の戦力を疑われることなく送り込めるのは間違ひなくメリットだろう?」

理路整然と語られた内容。それを受け、スパンダムは徐々に笑みを浮かべ。

「ならばそのメリットを活用すればいい。その上で戦力の運用については海軍へ譲歩する。具体的には指揮権を海軍の誰かに預けることだな。本来牽制し合う間柄であ

るCPと海軍だが、この非常事態を前に協力をそちらが持ちかけたという形にすれば海軍も相応の態度を示すだろう”

ジャブラはその腹の中にあるものが見えず、眉を顰めたのだ。

“そして『彼ら』の存在についてもだ。私たちは彼らを探している。そして彼らがそこにいることをそちらから教えてもらったわけだが、それを公式の形にすればいい。具体的には私の部下がいる前でそちらの諜報員から情報が来るといふ形が一番だろうな。そうすれば私たちが動くタイミングのコントロールもできるし、そちらから情報をもらったという事実を証人付きで確定できる”

企みを知る者にとつては茶番も茶番である。だが内情を知らぬ者にとつてはCP9とその長官が海軍のためにかんりの譲歩と協力をしたと見えるだろう。

“そしてそちらの任務についてだが、いつそのこと強硬手段に出てはどうかね？ 内部にはCP9の諜報員がいると聞いている。ならば大義名分を得て送り込まれる私とそちらの諜報員で状況はある程度コントロールできるはずだ”

それらの提案をした上で、どうかね、とヴェルゴはスパンダムへと告げたのだ。そしてそれを受けたスパンダムは強硬手段に出ることを決定し、起こったのが昨夜の出来事である。

その後、秘密裏に行われた電伝虫による今後の動きについての話し合いでもヴェルゴ

の提案をスパンダムが良い案だとして受け入れていた。その内容についてもジャブラは眉を顰めるしかなかつたわけだが――

「良いのか、長官」

思わず、声に出していた。何がだ、とスパンダムが問いかけてくる。

「五年をかけた任務だ。それをあんな海兵の意見を聞いて動いちゃまって」

「そりゃ確かに完全に信用はできねエが、言ってることは間違つちやいねエからな」

肩を竦めるスパンダム。確かにそうだ、とジャブラは思う。彼は最大限こちらに花を持たせる提案をしてきた。少々過剰な気もするが、そこにおかしな部分はなかつたのだ。

故に無理矢理反対するようなことではないのも事実である。ただ、一つ。

(責任を上手くこつちに押し付けられているような気がするが……)

どうしても疑つてしまう。これは諜報員としての職業病なのかもしれないが。

「まあ、大丈夫だ。心配する必要はねエ」

そして反対に楽観論で語るスパンダム。そんな彼に対し、ジャブラはそれ以上は何も言わなかつた。

だが、彼の中にはもう一つ疑問がある。これは最初に顔を合わせた時からずっと抱えているものだ。

(あいつは本当に海兵か?)

この後に起こる——いや、起こす事件。それについてあの男がスパンダムへと提案したこと。その内容はとても理想的な海兵の口から出るような内容ではなかったのだ。

それは海賊などの無法者とも違う。もっと狡猾で、残酷な思考によつて導かれるもの。

(……用心しておいた方がいいな)

あくまで勘だ。現状おかしな部分は見つかっていないし、提案についても裏があるようには思えなかった。それにあくまで提案だ。採用するかどうかを相手に委ねるからこそ提案という。そこに強制力がない以上、考え過ぎの可能性が高いのもまた事実。

だがどうしても引っかかる。そんな、根拠のない本能からくる感覚。そして、彼はその経験によつて知っているのだ。

——この手の嫌な感覚は、大抵碌でもないことになることを。

思惑が複雑に絡み合い、水の都を覆っていく。

その都市に暮らす者たちは未だ知らない。

まだ、本当の事件は始まってすらいらないことを。

逃亡海兵Water Seven ☒

第十七話 水の都の一番長い日④

——フランキー一家。

解体屋兼賞金稼ぎ。特徴的な格好をしたアウトロー集団であり、フランキーという常に海パン姿の男が率いている。

街から離れた場所に居を構える彼らは騒ぎを起こすことが多く、住民や来訪者とのトラブルが多い。特に海賊を始めとした賞金首を襲い、結果として街に被害が出ることもあった。

狙われれば文字通り根刮ぎ解体される。故に——
(関わらない方がいい、か)

ここに来る途中、イスカが聞き込みをする中で得られたのが以上の情報だ。そして誰もが関わらない方がいいと同時に忠告してきた。

確かに話を聞く限りタチの悪い連中のようだ。実際、少ない時間で漁った記録の中でも様々なトラブルで警察の厄介になっている。

(だが、嫌悪感は感じなかった)

評判は悪いし、実際にそれだけのことをしているのだろう。だがそこには拒絶の感情はなく、どこか温かみすら感じた。

そう、まるで。

——あれでいいのだ、と。

そう、暗に言っているようで。

(だから、ここににいるのか)

人の本質を見る目を持つ者たちだ。あの二人にとってフランキー一家というのは信頼の置ける性質をしている者たちのなのだろう。

……気が重い。だが仕方がない。これは責任であり、自分にしかできないことだ。

だって、私は。

あの場にいることさえ——できなかつたのだ。

だからせめて、友が抱え込もうとしたものを一緒に背負おう。何、今更だ。

——捕らえるべき相手を見逃したことが、二回になるだけ。

「海軍が何の用だ？」

出てきたのはリーゼントに海パンという中々にぶっ飛んだ格好をした男であった。その背後には二人の女性が控えている。

本当に聞いた通りの格好なんだな、とどうでもいいことを思う。

「こちらに私の身内が世話になっていると聞いている」

「身内だア？」

「その身の安全を守ると誓った相手は身内だ。違うか？」

「こちらを警戒する相手——フランキーに対し、そう告げた。瞬間。

「イスカお姉ちゃん！」

「クオツ！」

「シャオ、ビリー」

扉の奥で少女と鳥が声を上げた。その姿が確認できたことにイスカがホツ、と息を溢す。

「元氣そうで良かった。……すまない、これは礼だ。簡単なものだが」

「あ、こりやどうもご丁寧に」

右手に下げていたギフト品をフランキーへ手渡す。思ったよりもまともな対応だった。

「コーラだわいな」

「下の包みはお肉だわいな」

聞き込みの際に聞いたのだが、これが一番と言われたが故だ。控えていた女性たちが受け取り、中へ運んでいく。それを一瞥すると、フランキーが言葉を紡いだ。

「気を遣わせたみてエだな」

「いや、本来ならもつと早く来るべきだったんだ。だが立て込んでいてな。すまない」

「……まあ、そりや察するが」

こちらの状況は理解してくれているらしい。やはりというべきか、見た目と評判通りの男というわけではないようだ。

「あの子には？」

「伝えてねエよ」

「そうか。……感謝する」

頭を下げるイスカ。礼を尽くすべき相手には礼を尽くす。それが彼女の流儀であった。

「……調子狂うぜ」

そんな彼女に対し、フランキーが呟く。そして気を取り直すように、それで、と言葉を紡いだ。

「あいつらを連れて行くのか？」

「元々はそのつもりだった。だが、現状では……」

「まあ、無理だろうな。アイスバーグのことはこつちも聞いている」

思った以上に話のわかる相手だった。意を決したようにイスカは言葉を紡ぐ。

「不躰であることはわかっている。だがどうか、今しばらくあの子達を任せられないだろうか？」

「ああ、別に構わねエよ」

対し、非常に温度差のある返答だった。

「子供一人と鳥一匹程度大したことじゃねエ。……話はそれだけか？」

「ん、いや……」

「なんだよ」

「想像では色々言われると思っていたからな。少し驚いた」

「……状況が状況だろ。おれたちだってこの島で暮らしてんだ。協力ぐらいする」

肩を竦めるフランキー。やはり聞いていたのとは違う——いや、言外に告げられていた通りの男だということなのだろう。

乱暴者の無法者でありトラブルメーカーであることは事実。しかしそれだけではない。アウトローを纏め上げ、住民たちから一定の信頼を寄せられるだけの男だということだ。

「それで？ 律儀にそれを頼みに来ただけってわけじゃねえんだろ」

「律儀も何も当然のことだと思うが。——そうだな、もう一つ」

イスカは視線をフランキーハウスの奥へと向ける。フランキーと話をしている自分を部屋の中で見つけているシャオとピリー、そして数人のおそらく構成員たち。

だがその更に奥。そこに複数の強い気配がある。

——「見聞色の覇気」。

あの日、エースがシャボンデイ諸島で見せた「覇気」という力をイスカは死に物狂いの鍛錬によって習得した。未だその練度については途上ではあるが、その戦闘能力は大尉という階級からすれば破格である。

「——ルフィとウタが、ここにいるのだろうか？」

まるで、空気が凍りついたかのようなようであった。

空間が軋んだのではないかと錯覚するくらいに重い圧力が周囲を支配する。

「……何の話だ？」

「駆け引きは苦手だ」

フランキーの言葉に対し、そう返答を返す。昔からそうだがイスカは駆け引きという

ものが苦手だ。いつだって真っ直ぐに、最短距離を突き進んできた。

ただ、あの日から多くのことを考えるようになったのも事実だ。ただ突き進むだけでは駄目なのだということを理解し、考えるようになった。

ただ、それでも性分は中々変えられないものである。だから考えた上で正面からこへ来たのだ。

「私の友人が教えてくれたんだ」

「友人だア？」

「そうだ、大切な友人だ。……守ることができなかったが」

その言葉でフランキーは察したのだろう。口を閉じる。だが彼は腕を組み、玄関口に立ちはだかるように立ったままだ。

義理堅い男なのだろうと、そんなことを思う。どんな理由で彼らがここにいるのかはわからないが、この男がこうするだけの理由があるのだろう。

——変わらないのだな、と。そんなことを思う。

あんな事件を起こしても。それでも、その本質は変わらぬままなのだろう。

「いいよ、フランキー」

聞こえてきたのは、青年の声だった。おい、という声と共にフランキーが振り返る。そこにいたのは、麦わら帽子を被った青年だ。

(やはりか)

前に会った時と比べ、随分と鋭い気配を纏っている。だがそこにいるのは、確かにあの青年だった。

今や世界政府が「大逆人」と呼ぶ男。

かつては「新時代の英雄」と呼ばれ、人々の希望であったはずの人物。

——「麦わらのルフィ」が、そこにいた。

「……………」

無言のまま、イスカは羽織っていた「正義」のコートを脱ぐ。その様子を見たフランキーが眉を顰めた。

「おい」

「身内を預かって貰った礼をしに来たら、休憩していけと提案された」

いつか上官が似たようなことをしたのを見たことがある。あの時には反発したのだが、今ならわかる。

こういうことは、必要なのだ。

世界は決して、白か黒かだけでは語れないのだから。

「どうだろうか？」

前へ、前へ、ただ真つ直ぐに。それがイスカの性分だ。それを變えることは今更できない。

だが、それだけでは駄目だということをあの日に学んだ。だから、学んだことを無駄にせぬため少しでも。

いつか、きつと。

——手を取るとか、取らないとか。

そんな形とは違う、もう一つの答えを見つげるために。



「魚人島の時以来か」

簡素な椅子に座ると、対面した相手はそう言葉を紡いだ。イスカ大尉——彼女は魚人島の騒動においてルフイとウタに協力してくれたことのある人物である。

元々彼女とはとある任務において偶然共闘することがあり、交流自体はそこからあった。それこそまだ将校になったばかりの時から知り合いである。

魚人島では諸々の事情から交流のある海兵として警備のために派遣されたのだが、やはりどうか当然というべきか、とんでもない大騒動になつてその中で彼女も大立ち回りを演じた。

「はい。その……お久し振りです」

「敬語はいい。……魚人島の時にも同じことを言ったな」

ウタの言葉に対し、イスカが苦笑する。出会った当初はイスカの方が階級が上であったのだが、その後とんでもない勢いで昇格していったせいで追い抜いてしまったのだ。そして久し振りに任務を共にした際、イスカに言われたのだ。

「もうそちらの方が階級は上なんです。敬語は必要ありません」

その言葉に非常にショックを受けたことを覚えている。そして本来なら規範上駄目なのだが、イスカに敬語を止めてくれとウタが頼み込んだという経緯がある。

彼女は歳の近い同性の同僚であり、頼れる先達であり、そして何より……友人である。と、そう思いたかつたから。

「そうか、わかつた」

そしてこちらは割と必死だったというのに、あまりにもあつさりといスカは頷いた。

ウタとイスカの関係とはそんなものだ。ルフィについては……まあ、大体わかるだろう。真面目な彼女によく注意されていた。

「一応言っておくが、お前たちの名前は聞いていない」

僅かに警戒を孕んだ空気の中、イスカが最初にそう切り出した。その瞳は真剣だ。

「なら、どうして」

「——私が一番信頼する人たちと一緒にいる」

ウタの問いに対し、イスカが真っ直ぐに答える。

「シャオとビリーの居場所を聞いた時、彼女はそう言っていた。……生憎、私に心当たりは二人しかない」

「……そうか」

眩いたのはルフィだ。彼は一度息を吐くと、真剣な表情で言葉を紡ぐ。

「オリンは？」

「私は医学は専門外だ。だが……私の経験からしても、正直なところ厳しいと感じている」

空気の圧が増した。だがイスカはそれで臆するようなことはない。

「命があることさえ奇跡とまで医者は言っていた。事実、そうなのだろう。人は脆い生き物だ」

「何とからならねエのか？」

「医者曰く本人次第だそうだ。それはつまり、手は尽くしたということだろう」

「……そんな……」

溢れた悲痛な声。何もできない——その事實は、何よりも重く、辛い。

「すまない」

ポツリと、イスカの唇から眩きが漏れた。

「私が、側にいれば」

「謝ることじゃねエだろ」

麦わら帽子を被り直し、ルフィは言う。

「大丈夫だ」

その笑みに無理が宿っていることはわかった。彼女は仲間だったのだ。共に戦場を駆けた戦友であり、苦労を共にしてきた友である。

モンキー・D・ルフィという青年は仲間というものを何よりも大切にす。そんな彼にとつて何もできない今の状況は何より辛いはずなのだ。

「ルフィ」

その左手を、そつと握る。……こちらの手の方が震えているのが、少し、情けなかった。

「ああ」

返答は短かった。だが、それだけで伝わってくる。

その想いが。苦しみが。

だから、分け合うのだ。……そうあろうと、決めたのだから。

「……本当は、この場で剣を抜くべきなのだろう」

一つの咳払いと共に、イスカがそう言った。

「私は、海兵失格だな」

そして苦笑する。いいのか、と思わずといった調子で言葉を紡いだのは少し離れた場所で見守っていたフランキーだった。

「賞金首を匿うのは重罪なんじゃねエのか？」

「わかっているなら止めろ、と言いたいところだな。ただ、まあ……今の私は海兵を休憩中だ」

「とんでもねエ不良海兵だな」

「不良海兵か。昔の私が聞いたら何と言うだろうな」

苦笑するイスカ。そして彼女は一度目を閉じ、意識を切り替えた。

「失格ついでに言っておくが、私はお前たちを『悪』だと思えない」

イスカの視線が向けられたのはルフィとウタだった。そこに宿る意志は強く、しか

し、揺らぎがある。

「ウタを守るためにルフィが拳を振るった。それだけだろうか？」

「ああ、それだけだ」

「後悔は？」

「ない」

即答であった。ウタの右手を握るルフィの力が強くなる。意識してか、無意識か。きつと後者なのだろう。

思わずウタは俯いてしまう。彼のその言葉が嬉しくて。

……けれど、だからこそ。

自分が——情けなくて。

「なら、その手を離すな」

何かを思い出すように、自身の右手を見つめながら。

「絶対に」

そこに滲んでいるのは、後悔か。

「私は……掴めなかったから」

或いは、もつと別の——

「何か、あつたんですか？」

「昔の話だ。海兵を辞めて賞金稼ぎとして船に乗れと、そんなことを誘ってきた海賊がいた」

ウタの問いに対し、イスカはそう言葉を紡いだ。それはまるで、大切な思い出を語る時のような優しい声色。

「海兵相手にとんでもない提案だと思っただろう？ 昔からそういう奴でな」

「昔から？」

「何度も何度もやり合った相手だったんだ。結局捕まえられなかったが」

私が未熟だった、と笑うイスカ。そしてポツリと、思わずといった調子で彼女はその名を紡ぐ。

「……全く、エースの奴は……」

普段なら聞き逃していたのだろう。だが、その名にウタは覚えもあった。

「エース？」

そしてそれは勿論、ルフィもだ。

「……声に出していたか？」

そして、しまったとでも言いたげな表情をするイスカ。その彼女に対し、ルフィが身を乗り出して問いかける。

「エースって、エースのことか？」

「どのエースなのかはわからないが、私が言っているのは『白ひげ』の——」
 「——兄ちゃんだ」

イスカの言葉を遮り、ルフィが言う。

「エースはおれたちの兄ちゃんだ」

「……………は？」



ポートガス・D・エース。『火拳』の名で知られるその海賊の名は、今や世界中に知れ渡っている。言ってしまうえば大犯罪者だ。

そしてルフィとウタ。共に海軍における『新時代』の象徴であったこの二人はそのエースと義兄弟である。

……とんでもないスキヤンダルだ。ルフィの父が『革命家』ドラゴンであるということ、ウタの父親が『赤髪のシャンクス』であるということ。その情報だけで世界は衝撃を受けたと言うのに、更にこの情報が加わればどうなってしまうのか。

「どういふ星の下に生まれてきたんだ」

話を聞いたイスカは片手で額を押さえながらそう言った。その言葉には呆れが混じっている。

「どうつて言われてもなア」

「いやまあ、出自に關しては本人に罪はない。問題はどう生きるかだからな」

誰を親とするのかを子供は選べない。どこに生まれるかも選べない。ならばそこからどう生きるか——きつと、それが最初の選択だ。

「そういう意味では過剰に反応する方が悪いのだろう。……まあ、驚くこと自体は仕方がないと思うが」

「そりやそうだな。おれも驚いた」

うんうんと頷くフランキー。格好も行動も割と常道から外れているというのに、妙なところで常識的な男であるかどうかでもいいことを思う。

「だが、エースがここにいた理由がようやくわかった。相変わらずだな、あいつも」

その言葉には様々な感情が込められている。思わずウタが言葉を紡いだ。

「相変わらずつて?」

「昔から身内を大切にする奴だった。……海賊に使うべき言葉ではないと思うが、あいつは、いい奴だ。こんなことを言っていると咎められそうだが」

「誰が咎めるんだ？」

「……ああ、成程。お前はエースの弟だな」

ルフィの言葉に対し、小さく笑ってイスカは言う。妙なところで鋭い癖に、妙なところで頓着しない。血は繋がっていないというが、やはり彼らは兄弟だ。重なる部分がある。

「よく似ている」

「そうか？」

「ああ。血が繋がっていなくても、兄弟なんだな」

こんな弟がいて、その隣に妹がいる。ならば彼は命懸けで手を伸ばすだろう。そんな確信に近い思いがあった。

「だが、そうなるとやはり犯人がエースというのは考えにくいな」

ウオーターセブン市長、アイスバーグの暗殺未遂事件。イスカ自身はエースが犯人ではないと考えていた。だがそれは大いに主観が込められたものだ。証拠があったわけでもないし、だから何も言わなかった。

そもそも何故ウオーターセブンにいるのかというのが疑問でもあったのだ。偶然立ち寄ったという見方もできるが、それは多分に希望的な要素が入った見方である。故に保留にしていたのだが……。

「エースじゃねエ」

「私もそう思う。だがそれは感情論だ。それだけでは駄目だと私は知っている」

こうあつて欲しい、という気持ち全てを否定するわけではない。だがそれは目を曇らせる。そして曇った目で見据えた先に待っているのは悲劇だけだ。

かつてのイスカ自身がそうであつた。だからこそ、あんな結末になつてしまったのだと今は思う。

「だから必要なのは真犯人を見つけることだ」

「当てはあんのか？」

「情けない話だが、容疑者すら浮かばないのが現状だ」

フランキーの問いにイスカが首を振る。そもそも“火拳のエース”の名前が出たのは彼が表立つて小競り合いをしたためだ。ここにいるということが確定した存在であり、名の知れた海賊であるという事実。状況的に見当もつかないとは言い難い状況であつたのも背を押している。

無論、これはエースの人となりを知るイスカから見た視点だ。多分にバイアスがかかっているし、エースが犯人である可能性もゼロというわけではない。何せ証拠も何もないのだから。

「動機もわからない。聞けばアイスバーグ市長はこのウォーターセブンにおいて随分と

慕われている人物だ。そんな人物を害したことで何が得られる？」

「海賊だしなア……。得られるもんなんざねエだろ。どこぞに依頼されたってんならともかく」

「少なくともエースはそんな依頼を受けるような奴じゃないとは私は思う。だが……。それこそ強盗であると仮定した場合、それはそれであまりにも不可解だ。金庫のある部屋ではなく、いくつかの図面と資料があるだけの会議室で事件が起こったんだぞ？　そこで争う意味はない」

だからこそわからないのだ。いつそのこと金目の物でも盗まれていたらわかりやすかったが、被害者二名以外には多少荒れた会議室以外に被害はなかった。故にその動機がわからないままであり、故に犯人像が掴めない。

そうなれば次は背景の推測だ。アイスバーグが狙われた理由。それについてもいくつかの仮説が上がっているが、それはそれで疑問が浮かぶ。

「動機から追っていくにしてもこの島の造船会社はアイスバーグ市長が全て纏めたのだろうか？　ならば競争相手という概念がそもそもからして存在しない。ならばそれは理由としては弱いだろう」

「そりやそうだ。てことは別の理由だな」

「ならば政治分野だ。アイスバーグ市長の競合相手になる政治家は？」

「いねエと思うぜ。将来的にはともかく、今のアイスバーグ相手に真つ向から立ち向かう理由がねエ。……今でこそ発展して安定してるように見えるが、こうなったのも最近の話だ。昔はそりや酷エもんだった。それを立て直した奴をどうしようなんざ、それこそそいつの頭がどうかしてる」

肩を竦めるフランキー。考えれば考えるほど不可解なのだ。狙われる理由がわからない。

「……よくわかんねエけど、オリンがどうして狙われたのかがわからねエってことか？」
「というよりはアイスバーグ市長だな。結局のところ彼女は一海兵だ。個人的にはともかく、世間的な重要度も対外的な重要度もそう高くはない」

「そっか」

頷くルフィ。昔はこの手の話をしているとすぐに寝ていた記憶があるが、今の彼は話を聞こうとしている。

変わったものだ、とイスカは思う。それはきつと必要なことだったのだろうかとも。そしてそれは、彼の隣にいる人物のためのもので――

「……あの」

遠慮がちに声を上げたのはウタだった。どうした、とイスカが問うと、ウタが頷く。

「昔センゴクさんに教わったことがあって」

元帥の名がサラツと出てくるのはどうかと思う。

「〃メリットではなく、デメリットを見ることが必要なこともある〃 って」
「……どういう意味だ？」

「えつと、自分にとつて利益になることをしたいのは当たり前なんだけど、人は感情の生き物だから。——〃自分も損をするけど、それ以上に相手が損をする〃 っていう考え方をする人もいるって言われたことがあるの」

イスカもフランキーも眉を顰めた。特にフランキーは顎に手を当て、考え込む。

「つまり暗殺は実行した側もダメージを受けるが、それ以上に相手へのダメージを与えることができるからやったということか？」

「あくまで例えだし、本当かどうかはわからないけど……」

ウタも考えが纏まっているわけではないのだろう。言葉が尻すぼみになっている。

だが、少し盲点であったような気がする。残念ながら具体的な考えは浮かばないが。

「……海軍の駐屯部隊つてのは、誰が来るか決まってるのか？」

不意に、フランキーがそんなことを口にした。いや、とイスカは首を振る。

「アイスバーグ市長は私たちがこのまま残ることを希望してくれていたが、具体的な話はこれからだ。白紙だと言ってもいい」

「駐屯部隊つてことは色々調整が必要だよな？」

「それはそうだろう。それこそアイスバーグ市長とこれから詰めていくはずだった」
「成程な」

険しい表情のフランキー。どうしたんだ、とルフィがフランキーへ問いかける。それに対し、フランキーが口を開いた。

「商売つてのはwin-winが基本だ。それはおれたちみてエなアウトローでも変わらねエ。だが、相手と敵対してる場合は違う。……おれたちの稼業と同じだ。賞金首を捕まえておれたちは儲ける。その時に利益を得るのはおれたちと世界政府であり、賞金首は損しかしねエ」

「どういう——」

「——」
イスカが言いかけたところで、いきなりルフィが立ち上がった。剣呑な雰囲気を感じ、玄関のある方向を睨みつける。

その空気が先程までとは全く違うが故に、他の三人はすぐに言葉を紡げなかった。数秒、時間が流れた。重い口調でルフィが言葉を紡ぐ。

「——大勢が向かってきてる」

それは、まるで。

不吉の調べのようだった。



ウォーターセブンに住む者たちにとって、"アクア・ラグナ"に対する備えは慣れたものだ。それはフランキー一家の者たちも変わらない。

「はい！ 麻ってこれだよね？」

「おお、バツチリだ！ ありがとうよ！」

「どういたしまして！」

傍目から見るととてもなく奇抜なデザインをしたフランキー一家の拠点、フランキーハウス。その家もまた、"アクア・ラグナ"に対してはしっかりと備えをしなければならぬという点では普通の家と変わらない。

家の中では来客の対応を一家の棟梁たるフランキーが客人の二人と共に行っており、その間に一家の他のものたちは備えの準備だ。具体的には隙間に麻を詰めたり壊れた場所の補修や点検である。これを怠ると浸水して中が駄目になるところか、最悪家が消滅する。

その備えのための作業をフランキー一家の男衆がしているわけであるが、シャオとビリーはその手伝いをしていた。中で難しい話をしているのを見て取り、シャオが手伝いを申し出たのだ。

とはいえ危険な作業はさせられない。どうしたものかと思つたところに思いついたのが、自由自在に空を飛ぶビリーによる道具の運搬である。そして実際、ビリーも指示を出しつつ道具を揃えるシャオも大活躍だった。

「しかし助かるぜシャオちゃん、ビリー。今まではいちいち物を取りに行くのに梯子を使わなきゃならなかったからなア」

「キツいつてわけじゃねえんだけど、やっぱ時間かかるしな」

「しかし本当に賢いというか頭いいというか。確かシャオちゃんの故郷にいるんだよな？」

物怖じしないシャオ自身の性質とその明るさ、そして秒でフランキーに気に入られたということもあってフランキー一家はシャオに好意的だ。見た目こそアウトロー集団であるが、彼らは無差別に被害を振り撒くわけではない。自分たちに好意的な相手にはちゃんと好意を返す者たちだ。

「うん。でもビリーは小さい方だよ？」

「マジかよ」

「そうなのかビリー?」

「クオツ!」

「これはそうだって言ってるな」

「いやお前は言葉わからねエだろ」

一人のツツコミを受け、ギャハハ、と明るく笑い声が周囲に響く。実に穏やかな空気だ。

「しかしそのシャオちゃんの故郷が例の島だつてんだから驚きだな」

「ああ、*“金獅子”*の。ありや凄工騒ぎだったな」

世界中へと轟いた*“金獅子”*が引き起こした戦争とその結末。その衝撃は水の都にも届いていたし、相応の衝撃をもたらしていたのだ。

具体的には景気が良かった。フランキー一家も例外ではなく、島全体が大いに盛り上がったのだ。大量の造船依頼が舞い込み、仕事が増えれば金の回りも良くなる。金が回れば活気が出る。シンプルな話であった。

「お二人にはそこで出会ったんだよな?」

ザンバイの問いかけ。うん、とシャオが頷く。

「助けてくれたの。だからお兄ちゃんもお姉ちゃんも大好き。海兵さんはみんな好き。ね、ビリー?」

「クオツ！」

その言葉に、フランキー一家の男たちが顔を見合わせる。彼女の言葉に嘘はないのだろう。実際にあの二人を中心として海軍がシャオたちを“金獅子”の支配から救い出した。故に海軍というのは彼女にとつてはヒーローなのだ。

だが、今。彼女が“お兄ちゃんとお姉ちゃん”と慕う二人はその海軍に追われていく。その現実がわかるからこそ、素直に頷くことができなかつた。

言葉を探す男たち。だが、彼らが言葉を探し当てる前にシャオが遠くから来る人影に気付いた。

「あれ？ 海兵さんだ。たくさんいるよ？」

「……さっきの海兵の姉ちゃんの連れか？」

シャオの言葉を受け、ザンバイが目を細めてシャオと同じ方向へと視線を向ける。

——次の、瞬間。

「失礼」

サングラスをかけた男が、いつの間にか自分たちのすぐ側に立っていた。

「うおっ!？」

「うわ!？」

「だ、誰だ!？」

男たちが反射的に後ろへ飛びながら言葉を飛ばす。そこには動揺がありありと込められていた。当然だろう。いきなりサングラスをかけた男が至近距離に現れたら誰だって驚く。

「ああ、すまない。驚かせてしまったか」

対し、男はどこまでも落ち着いていた。周囲を見回し、問いを発する。

「フランキーという人物はここにいないかね？」

—— 空気が、変わる。

驚き、混乱していたフランキー一家の男たち。その意識が切り替わった。警戒の色をその目に宿し始める。身構える者までいるくらいだ。

「……アニキに何の用だ？」

そんな中で問いを発したのはザンバイだった。剣呑な空気を察してか、ビリーがシャオの側に寄り添うように移動する。それを一瞥し、ザンバイはシャオと男の間へと少しづつ自分の体を移動させていた。

他の者たちも徐々に動き始めている。距離を取りつつ、いつでも対応できるように警戒しつつ、取り囲むような位置を目指して移動している。

「そう警戒しないでくれ。私は海軍本部中將、ヴェルゴだ」

そんな彼らを一瞥し、無抵抗をアピールするかのように両手を上げるヴェルゴ。その背中の向こう、街のある方向からいくつもの人影がこちらへと歩み寄ってくる。

数にして数十。或いは百に届くだろうか。そのほとんどが海軍の制服を着るか、或いは「正義」のコートを纏っていた。

「海兵が何の用だ？」

「協力してくれば穏便に終わる。無論、結果次第だが」

ヴェルゴは変わらず平静なまま。淡々と言葉を紡ぐ。

「『解体屋』フランキー一家棟梁、フランキー。彼には今、とある嫌疑がかかっている。そしてその嫌疑が嫌疑で済まなかった場合、当然だが我々は相応の対処をするつもりだ」

——ゾクリ、と。

この場の全員が、言葉で表現できない感覚を覚えた。

「さて、もう一度言おう」

手を下ろし、その海兵は宣言する。

「——フランキーはどこにいる？」

逃亡海兵 Water Seven ☒

第十八話 水の都の一番長い日⑤

“存分に踊って貰おう”

自身が“王”と定め、仰ぎ見る男はそう言った。

“面白エ見せ物じゃねエか。世界中の注目の的だ”

その言葉の真意はどこにあるのか。口調こそ笑っているが、電伝虫越しであるため表情が読めない。

“火種つてのは多ければ多い方がいい。おれたちに不利益にならねエなら尚更だ”

戦争を煽り、武器を売る。それが“ジョーカー”の商売だ。確かに彼らがその火種の一つになるのであれば利益になるだろう。

だが、疑問があった。伝え聞く彼らの人格は戦争を望んでいない。それでも戦争は起こるものなのか、と。

“フツフツフツ……わかつてねエな、相棒。戦争なんてもんはくだらねエ理由でも起きるもんだ。『あいつが気に入らねエ』なんて理由で起こることもあれば、一発の誤射で始まることもある”

この世界の闇を知る男は語る。戦争などそんなものだ、と。

“中には争う理由を常に探しているようなどうしようもねエ奴もいる。そいつらにしてみれば例の二人は掲げる旗としちや最上級だ。これほど綺麗な大義名分もねエ”
つまりは二人自身の意思など関係ないということだ。何とも残酷な話ではある。

だがこれはある種の真理だ。個人の想いを慮ることは難しい。ましてや伝え聞く手のことであるならば尚更である。そして人間とは往々にして自分の都合のいいように物事を受け取ってしまう。

現役の海兵、それも大佐の地位にあり、更には“英雄”とまで呼ばれている人物が“天竜人”を殴打するという前代未聞の大事件。その背景はきつと単純なものだ。だがその当事者たちの背景を知ればそこに別のものを見出すことができる。

そう、『見出せる』のだ。解釈の余地があるということである。そうなれば自分の都合のいいように解釈する者はどうしたって出てくる。

“理由を確保し、戦う決意をしたら次に必要なのは武器だ。フツフツフツ……おれたちの出番だな”

必要としているなら売りつける。そうして利益を得る。何とシンプルな話であることか。

“だが、目の届かねエ所つてのも具合が悪い。そこでお前に頼みたいことがある”
断るといふ選択肢は初めから存在しなかった。“彼”が望むのであればその通りに任務を遂行する。それがあの日から変わらない何よりも優先される自分自身の“ルール”だ。

しかし、疑問があつた。この役割に不満はないが、不測の事態というのはどうしても訪れるものだ。その場合はどうするべきか。

“あア、その時はその時だ”

答えは実に簡潔だった。つまり、無理矢理にでも生かす必要はないということだ。

“何かをやらかしてくるなら面白エだろうが……それができるかどうか”

どうなることを期待しているのか、とは聞かなかつた。

ただ、自分の役割はこの時に確定することになる。

それが、自分がここにいる理由。

それ以外の理由など、存在しない。



CP9の新入り——そう自己紹介した男は、予定調和とも言うべき情報をこちらへと提供した。

「『麦わら』と『歌姫』は『フランキー一家』って連中のところにいるぜエ」

ネロ、と名乗った男は開口一番にそう告げた。部下たちの間に緊張が走る。件の二人を追うために編成された部隊でこそあるが、実は直接の接触はその部隊長であるヴェルゴ以外は未だ未経験なのだ。

だが、彼らは全員が志願してこの部隊に所属している。志願の理由は様々であるが、文字通り貧乏くじとなる部隊だ。そこへ望んで身を投じるその覚悟は決して軽くはない。

その『覚悟』は、この後に起こることさえも飲み込むほどに強固だ。

「協力に感謝する」

「上の命令だから仕方ないっしょ」

肩を竦めるネロ。その態度は不遜なものであり、規律を重んじるヴェルゴの副官などはその態度に眉を擡めている。とはいえ、彼は世界政府の機関であるCP9に所属する

人間だ。海軍とは指揮系統が違う以上、その態度を注意する根拠がない。あくまで心証の問題なのだから。

「それが一番信頼できる。感情は時に力をくれるが、同時に暴走の危険を常に孕んでいるものだ。任務であるで一線を引き、己を律する。それは何よりも大切だ」

だが、ヴェルゴはそんなネロの態度に対して何もリアクションを返していなかった。いつも通りの、紳士的な彼のままである。

「へエ……聞いてた通りなんだねエ、アンタ」

「私の噂でも流れているのか？」

「理想的な海兵、つてねエ。——だから、この後のことについても日和るようなことはしねエとも」

「これも任務だ」

肩を竦めるヴェルゴ。その表情は変わらずいつも通りのままだ。

「命じられたのであればそれを全力で遂行する。それが海兵という存在だ。そこに私情を挟むべきではない。命令なのだからな」

それは彼の部下たちへ言い聞かせているかのようであった。数人の海兵が己の得物を握る手に力を込める。

そう、命令だ。立案したのはCP9の長官であり、それを上層部が承認した。そして

その実行役の一翼を担うようにと命令を受けたのが今だ。ならばそこに対して何かしらの感情を持つ必要はない。

「成程、理想の海兵だねエ。そりゃ『元英雄』の追撃なんて任務も任せられるわけだ」
「褒め言葉と受け取ろう」

では、とヴェルゴは一つ息を吐いて間を入れた。

「任務を開始しよう。少々時間は早いが、その程度は誤差だ」

無言の肯定が部下たちから帰ってくる。ネロが小さく口笛を吹いた。

「いいねエ。これは期待できるっしょ」

その言葉には応じず、ヴェルゴは歩き出す。

ヴェルゴは海兵としての任務に対し、私情を挟まない。彼が私情を向ける相手はたった一人だけであるからだ。

勿論、彼は機械というわけではない。歴とした人間だ。ただ、明確な優先順位が定まっているだけである。

そしてその優先順位において、件の二人の存在は高くも低くもない。個人としてはどうでもいい存在と言ってもいい。

だが、一つ。

「ああ、気をつけろよ相棒」

ヴェルゴにとって優先順位の最上位にいる男が、最後に言っていたことがある。

“——ああいう手合いは、追い詰め過ぎるととんでもねエことをやるもんだ”

そこまで言わしめるほどのものが、本当にあるのかどうか。

それを、確かめたい。



ヴェルゴという海兵は、紳士的な人物として知られている。

荒くれ者ばかりとされるG—5支部において部下から市民からも尊敬され、信頼される人物だ。故にこそその“理想の海兵”。そしてだからこそ、彼は無用な血が流れることを良しとしない。

「やめておいた方がいい」

故にこの忠告は当然のものであった。対し、フランキー一家の男たちは殺気さえこもった目でこちらを見、更には手に持った大工道具を握り締めている。

だが、彼我の実力差は歴然である。彼らはヴェルゴに触れることさえも不可能である

ことは明白であるし、その気になれば『死んだ』と彼らが気付く前に始末することさえ可能だろう。

しかしそれは本意ではない。何故ならヴェルゴは「理想の海兵」だからだ。少なくとも彼は、そう在ることを自らに課している。

「君たちに対しては何の沙汰も出ていない。話を聞くことはあるかもしれないが、それだけだ」

とはいえ、である。それで話が済むならば世界はもつと単純だ。

人は非合理的な生き物である。どれだけの正論を聞かされようとも、納得がいかなければ受け入れることは難しい。正しいということと納得するということは別物なのだ。

「それだけだア?」

「はいそうですか、と頷くと思つてんのか?」

そしてこのフランキー一家という者たちは合理的な生き方をしていない者たちだ。極悪人というわけではないが、善人というわけではない。そんな彼らがヴェルゴの言葉だけで納得して道を開けることなど、確かに難しいのだろう。

ふう、と一度ヴェルゴは息を吐いた。それが何かの合図だとも思つたのか。

「バカ——」

おそらくこの場におけるリーダー格と思しき男の声。だがその制止の声は届かない。

飛び込んできたのは二人の男だ。その手に大工道具を持ち、地面を蹴ってヴェルゴに對して直進してくる。

「……………」

對し、ヴェルゴはあくまでも冷静にそれらを一瞥する。

素人の動きではない。それなりの修羅場を乗り越えて来た者の動きであった。思い切りがいいし、本来武器ではない大工道具の扱いも中々様になっている。

だが、ここにいるのは海軍本部の中將だ。

——その戦闘能力は、余人の想像するそれを遙かに凌駕する。

鈍く、重い音が連続して響いた。放たれたのが蹴りであったのだらうと、僅かに持ち上がったヴェルゴの右足から想像できるだけ。

ただわかるのは、ヴェルゴへ向かっていった男たちが吹き飛ばされ。

「逃げろ!!」

おそらく自身の背に庇う少女に對して叫んだのだらう。その言葉と共に前に出た男が。

「——!」

くぐもった悲鳴と共に吹き飛び、奇妙な建物の壁に激突して破壊したという事実のみ。

ヒツ、と小さく少女が悲鳴を上げた。失礼、とヴェルゴが小さく頭を下げる。

「——ヴェルゴ中将」

そのまま何かを言いかけたヴェルゴの下へ海兵たちが走り寄ってきた。少女が身を縮め、困惑した顔で周囲を見回している。

「海兵さん……？　なんで……？」

「その子の保護を。後ろの鳥はおそらくその子のペットだ」

「はっ」

ヴェルゴの指示を受け、数人の海兵が動き出す。少女は怯えているが、海兵という存在に対して忌避感があるわけではない。驚きと……どちらかというところ、困惑が強い表情をしていた。

だが、今は少女について意識を向けるよりも重要なことがある。

「オイオイ……こいつはどういうことだ？」

砕かれた壁。その向こうから現れたのは、海パンを履いた一人の男。

今回の目標である男、フランキー——否、カティ・フラムだ。

「失礼。少々乱暴になってしまった」

「うちの可愛い子分に舐めた真似してくれるじゃないの。——どういうつもりだア!!」

怒鳴り声に少女がびくりと体を震わせるのが見えた。だがそちらのフォローはヴェ

ルゴの仕事ではない。

「どういうつもりも何も」

超高速の移動術、*“剃”*。常人には消えたとしか思えぬ速度で移動するその歩法を以て、ヴェルゴはフランキーの眼前へと歩を進める。

「——答えはキミの後ろにある」

ただの右拳によるストレート。

「グ、ア」

鈍い音と、人体とは思えぬ感触をヴェルゴに与えながら。

その体が、建物の中へと叩き込まれる。

「フランキー——」

きつとそれは思わず出た声であったのだろう。聞き覚えのある声だった。

「時間でいえば数日程度ではあるが、随分久し振りのように感じる」

建物の中へと歩を進めながら、ヴェルゴは言う。

中にいるのは数人の男女だ。だがその中で重要なのは今吹き飛ばしたフランキーを除けば二人しかいない。

「また会ったな」

「お前は……！」

こちらの言葉に応じ、麦わら帽子の青年の表情が険しくなる。

当たり前だろう。彼らにとつてヴェルゴは敵だ。最初の遭遇でヴェルゴ自身がそう名乗り、彼らの中でもその定義が定着したのだから。

「名乗りと……ここへ来た理由の説明は必要かね？」

そして変わらず冷静にヴェルゴは告げる。「金獅子」をも撃ち落とした「英雄」を前に、それでも彼は揺らがぬままだ。

ヴェルゴは「麦わら」に対しても「歌姫」に対しても特段の興味はない。

彼らを追うのはそれが任務であり、役目であり、そう望まれたが故である。それ以上の理由はない。

究極的なことを言えば、彼らがどうなろうと知ったことではないというのが本音である。

だが、彼は気付いていない。

あの日、あの浮島での戦い。戦場に響いた、戦いを終わらせた歌声。

——あの「歌声」が、ずっと耳から離れないことに。

彼は、気付いていなかった。



海軍本部中將、ヴェルゴ。

その名は「偉大なる航路」前半の海、俗に「樂園」とも呼ばれる領域において彼の名はそこまで知られているわけではない。

理由は様々だ。まず第一に海軍本部が前半の海の側にあるということ。海軍とは世界の海の遍く領域に秩序を敷くことを目的としているが、それはあくまで理想だ。何事にも限界はある。理想を実現する上で必要な力が足りていないという現実がそこにはあった。

まあ、世界政府が八百年という時間をかけても未だ世界全ての掌握には至らないのだ。それほどまでに世界は広く、そして深いということだろう。

そしてもう一つ。どちらかといえばこちらの影響の方が大きい。

——「四皇」。

まるで海の皇帝であるが如く「偉大なる航路」後半の海、「新世界」とも呼ばれる所に君臨する者たち。そのあまりにも強大な「力」はだからこそ最低限の秩序を保っているというある種の異常な状況を形成している。

そんな怪物たちがいる以上、どうしても話題はそちらのものばかりになってしまふのは自然の道理だ。そんな場所でも海軍が一定以上の成果を挙げていることは評価すべきだろうが、どうしても目劣りしてしまうというのもまた事実。

だが、逆に考えれば。

その異常な海で一つの基地を預かり、秩序を守るために奮闘する海兵が弱卒であるわけがない。

「名乗りと……ここへ来た理由の説明は必要かね？」

あまりにも乱暴。しかし、罪人に対する対応としては少々過激な程度。そんな手段でフランキーハウスへと踏み込んできた男が静かに告げる。

堂々とした立ち振る舞い。背負ったコートが小さく揺れた。

「アニキー！」

「大丈夫だわいな!？」

「くくくッ、効いたぜ……!？」

フランキーハウスは入ってすぐが広間だ。その一番奥へ吹き飛ばされたフランキーに走り寄る「スクエア・シスターズ」と、それに応じるフランキー。派手に吹き飛びこしたが、どうやらフランキーは無事らしい。

ちなみに余談であるが、サイボーグたるフランキーに生半可な打撃など通用しない。

彼が吹き飛び、そして実際にダメージを受けているのはそれほどヴェルゴの一撃が重かったが故だ。

「……ヴェルゴ、中将」

「そうだ。キミたちを追ってここまで来た」

言の葉を溢すようなウタに対し、確認するように応じるヴェルゴ。その向こうで悲鳴のような声が聞こえた。

「お兄ちゃん！ お姉ちゃん！」

海兵たちに囲まれるようにして、少女——シャオがこちらへと呼びかけている。その声を聞き、ヴェルゴが僅かに首を傾げた。

「知り合いかね？」

「シャオをどうするつもりだ」

僅かに右の拳を握りつつ、ルフイが一步前に出る。対し、ヴェルゴは構えないまま応じた。

「どうもしない。彼女は幼子であり、一般人だろうか？ 犯罪者の近くにいますというならば保護するのは当たり前だ」

「ヴェルゴ中将！」

そこへ割って入ったのはイスカだ。その声には焦りと困惑が滲んでいる。

「その子は私の知り合いです！」

「おや、何故キミが——いや、そうか。保護するためにここにいた、と。そういうことか」
その言葉には有無を言わせぬ迫力があつた。イスカが僅かに言葉に詰まらせる。

「何故彼らと同じ場所にいるのかと思つたが、そういうことならば納得だ。……詳細については後だ。下がり給え」

「しかし——」

「——これは命令だ、大尉」

文字通りの、上から押さえつけるような宣告であつた。現状においてイスカはヴェルゴの直接の指揮下にはない。だが、中将と大尉だ。その命令は絶対である。

「我々は我々の役目を果たすためにここへ来た。さて、これもまたルールだ。一応言つておこう」

一歩、ヴェルゴが前に出た。その少し後ろでは銃を構えた海兵たちがこちらを見据えている。

「——キミたちを逮捕する」

簡潔な言葉であつた。異論を挟む余地すらない宣告。

「……………」

ルフィは握り拳を作り、ウタを庇う位置に移動する。それは彼にとって最優先の事柄であり、故にこそ無意識の行動だ。

対し、ウタは自分自身の身を抱くように抱え、身震いする。その姿からは怯えのような感情が読み取れた。

かつての彼女であれば、ルフィの隣に歩み出ただろう。彼と同じように拳を握るか、或いは何かしらの武器を構えていたかもしれない。

いや、それは可能性ではなく確信だ。そうして戦い抜いてきたからこそその「歌姫」であり、「新時代の英雄」の一翼であったのだから。

しかし、今の彼女は。

その拳を握るための「何か」を——かつて持っていたはずの「何か」を、失ってしまっている。

「大丈夫だ、ウタ」

優しい言葉。

「おれが何とかする」

その言葉を嬉しく思うと同時に。

「おれが、守るから」

どうしようもない自己嫌悪を……抱いてしまう。

しかし、それでも彼女は拳を握ることができない。どうしても、それができなかった。

「——何とかする、守る」

そんな二人の姿を見、ヴェルゴが呟く。

「そうやって、『天竜人』を殴るなどという暴挙を働いたのかね?」

「だったら何だ?」

「前にも言ったはずだ。それは決して許されない大罪である」と

あの日、ルフィとウタがヴェルゴと邂逅した時。彼は言ったのだ。

——『天竜人』とは世界政府が定めた絶対的な存在。

——それに反逆するということは世界政府そのものへの反逆と同義だ。

叩きつけるような現実。『もしかしたら』という、僅かに抱いていた希望。それを断ち切るように、ヴェルゴはそう言ったのだ。

空気が軋んだような感覚。

「ヴェルゴ中將」

呼びかけたのはイスカであった。彼女はその表情に苦悩を滲ませ、言葉を紡ぐ。

「どうか」

真面目な海兵である彼女にとってはそれが限界であったのだろう。強く、強く拳を握

り締め、ヴェルゴへと視線を向けている。

だが、普段は真つ直ぐなその瞳は大いに揺らいでいた。ヴェルゴはそれを一瞥し、言葉を紡ぐ。

「不可能だ。彼らはルールを破った。それも世界政府が定めた最も絶対的なルールを、だ。それを見逃すことは秩序そのものを否定するのと同じになる」

視線をルフィとウタへと戻すヴェルゴ。対し、ルフィがそんなヴェルゴを正面から睨みつける。

「おれはウタを守っただけだ」

「それが秩序への反逆だと言っている」

平行線となりそうな問答。それを受け、丁度良い、とヴェルゴは言った。

「一つ、話をしよう。重要な話だ。——秩序とは何なのか。法とは、規律とは何なのか」

それは世界の歪みであり、しかし、世界を保つためのモノ。

「“麦わらのルフィ”。——キミが背負った罪の話だ」

逃亡海兵Water Seven

第十九話 水の都の一番長い日⑥

秩序。それは世界政府が掲げる理念であり、人の営みにおいてとてつもなく重要な概念である。

万人の万人に対する闘争——そんなことを口にしたのは誰であったか。

人は自然状態においては利己的であり、自分の利益のために争い続ける。だがそれは発展など望めない。故に人はルールを定めた。始まりはきつと個人同士のものであったのだろう。

——「私はあなたを傷つけない。だからあなたは私を傷つけないください」。

それを人は「約束」と呼び、「契約」と呼んだ。いつしかそれが個人から集団のものとなっていくが、しかし、人が増えれば「約束」だけでは済まなくなる。故にそれは「約束」から「ルール」となり、そして「法」に至った。

そうしてようやく人は「秩序」を得る。だがそれは一見すると強固なようであり、実際にはあまりにも脆いものだ。「ルール」にして「法」。それがあから「秩序」を保てるわけではない。

それらを守ることを強制できるからこそ、「秩序」があるのだから。

そしてそれは世界政府においても変わらない。定めた「法」を守らせるための力の一端こそが海軍という組織なのだから。

だからこそ、彼の事件はあまりにも重い意味を持つ。

何故ならば。

世界政府が定めた法。その最上位に位置する存在こそが「天竜人」だ。その権限、存在の絶対性が世界政府における象徴として周知されている。

故にこそ、害されることなどあつてはならない。

害されるということは、即ち。

——「秩序」への反逆に、他ならないのだから。

「『天竜人』の是非について論じるつもりはない。それは論ずるべきですらない事だ」張り詰めた空気の中、ゆっくりと言葉を紡ぐのはヴェルゴだ。彼が叩き壊した壁の向こうには数十を超える海兵たちの姿が見えており、迂闊には動けない。

ウタを連れて逃げるだけならば、強行突破でどうにでもできるだろう。だがこの場にいるのは二人だけではない。フランキー一家の者たちやシャオ、ビリーを置いて背を向けて逃げることはできなかつた。

それに逃げるにしてもどこへ逃げるというのか。それがわかっているからこそルフィは動かなかつた。

「天竜人」は絶対である。それがこの世界における第一のルールだ」
ふと、ルフィはある国でぶつかつた元国王の姿を思い出した。

「王様の思い通りにならん奴は死ぬ——これがこの国の全てだ！」
何故だろうか。ヴェルゴの言い草が、あの男のそれに似ていたからか。

「その根拠を定める過去と法もあるが……まア、それはこの際どうでもいい。重要なのは「天竜人」とは象徴であり、その背景に海軍本部「大将」の武力が存在するという事実だ」

これは世界で知られた事実だ。海軍本部最高戦力、大将。彼らは海軍に所属する海兵であると同時に「天竜人」直属の存在でもある。その身に何かがあつた時、大将たちが問答無用で出撃することになるのだ。

あの事件においてもそうであつた。すぐに島を出たため遭遇しなかつたが、シャボンディ諸島に大将の一角たる「黄猿」が急行していたのだ。

「……それが何なんだ」

「わからないかね？ 海軍本部最高戦力。その武力は世界政府が定める秩序の象徴ともいべきものだ。『天竜人』はそれに守られている」

だから何だというのだ、と視線でルフイはヴェルゴへと問いかける。何を言いたいのかがわからないのだ。

それに気付いているのかいないのか。ヴェルゴは調子を変えぬままに言葉を続ける。「秩序、法、ルール。結局のところ、それは言葉だけでも文字だけでも意味はない。それを守らせるための『力』が必要だ。海軍とはその一翼であり、大将とはその最高位に位置する『力』ということになる」

言葉だけで平和になるなら苦労はしない。人は争うのだ。故に法を定めたならばそれを破った者を罰する『力』が必要になる。

海賊などはわかりやすい例だろう。法を破り、秩序を乱し、ルールを顧みない。そんな彼らに法を強制するには『力』しかない。言葉や文章では彼らは止まらないのだ。故に海軍という『力』で海賊を捕らえ、罰を受けさせる。そうすることによって法による秩序を敷く。

まあ、今は『大海賊時代』。手が回っているととはとてもではないが言い難い状況であるのだが。

いずれにせよ、海軍とはそういう存在だ。『法』を守らせる強制力たる『力』。綻びこそあれ、海軍はそうして秩序を保ち続けてきた。

だが、それが揺らぐ出来事が起こる。

「本当にわからないのかね？ キミはその秩序を破壊したのだ」

その視線がルフィを捉えた。周囲の空気が重くなつたように感じる。

「世界政府における根幹とも言えるルール、或いは法。『天竜人』は絶対である——それを正面から文字通りの『力』でキミは打ち砕いた」

その存在に対する好悪はともかくとして、『天竜人』とはある種の象徴だ。侵されるべきではない絶対的な存在であり、何があつてもその身はま守られなければならない。

「それを見た者はこう思っただろう。——『力さえあれば、法など無視しても構わない』」

故に無法者たちは武器を掲げ、欲望のままに動き出した。『英雄』と呼ばれた青年がそれを肯定したからだ。

「そして力なき市民はこう思っただろう。——『天竜人さえ守られないならば、自分達はどうなるのか』」

絶対に守られなければならない存在が個人の暴力によつて害され、そしてその存在を世界政府が罰することができていない。その事実だけを受け取つた時、人は思つてしま

う。

自分たちから奪おうとする暴力から、海軍は自分たちを守ってくれるのか。否、違う。

——海軍に、守れる力は本当にあるのかと。

「安心と信頼があつてこそその秩序だ。悪に対して抗う術を持たぬか弱き市民は故にこそ我々を頼る。『悪』を必ず『正義』が討つと信じているが故に日々を生きることができぬ。だというのに、その『正義』があろうことか秩序の象徴を殴り飛ばすという暴挙に出た。これが無法者であれば話は違つただろう。法の外にいる者がやったことならば理解もできる。だがキミは違う。キミは秩序の側にあり、法を強制させる側だ。だがその存在が自ら法を否定したのだ」

キミがやったこととはそういうことだ、とヴェルゴは言う。

「キミたちは自分たちだけの問題だと思つているのかもしれないがね。最早状況はそんなことでは済まなくなつてゐる」

「——随分な言い様だな」

吐き捨てるような言葉はフランキーのものだった。ゆつくりと立ち上がった彼は、ヴェルゴを睨みつけながら言葉を紡ぐ。

「黙つて聞いてりや、そこのお兄ちゃんが何もかも悪いみてエに言いやがる。悪いのは

「天竜人」だろうか」

「彼らに『悪』という概念は適用されない。それが定められた法だ」

「ハッ、何だそりゃ？ 笑い話にもならねエ。『悪』は『悪』だろ」

「その定義は世界政府がする。そしてその定義において、『悪』とはキミたちだ」

キミたち、にフランキーも含まれているのかどうか。聞いたですつもりはないが、少なくともルフィとウタの二人は含まれていることは間違いない。

「それがキミの『罪』だ、『麦わらのルフィ』。キミが振るつた拳は世界の秩序を揺るがした」

誰よりも大切な人を守るために振るつた拳。ただそれだけだったはずのその拳は。

「世界は変わった。変えてしまったのはキミの拳だ」

文字通り、世界そのものを変えてしまった。

「だからこそ海軍はキミたちに追撃部隊などというものを差し向けた。秩序が崩れ、暴力が溢れようとする世界に歯止めをかけるにはそれしかなかったからだ」

かつて、彼らはこの『大海賊時代』を終わらせる『英雄』だと謳われた。

この先の時代を——『新時代』を見せてくれるはずだと、そんな風に。

「故に世界はキミたちを『悪』と定義した。——理解できたかね？」

だが今や、人々が見た理想は遠い彼方。

世界を守るためにあると思われた拳は、むしろ世界を混迷へ誘ったのだ。

故にルフィは「悪」となった。「正義」を背負い、人々の希望を背負っていたかつての「英雄」は堕ちてしまった。

振るつた拳は、「悪」であつたのだろうか。

大切な人を想う心は、「罪」なのだろうか。

誰もが麦わら帽子の青年の言葉を待っていた。世界そのものを揺るがしたその青年の言葉を。

果たして、その青年は。

「難しいことはわからねエ」

一体、何を語るのか。



いつの間にか、色々なことが難しくなった。

理由なんていつも一つだった。一番大切な人がいて、その人に笑っていて欲しくて。

一緒にいたくて。

約束があった。誓いがあった。覚悟があった。——夢が、あった。

それだけで良いのだ。モンキー・D・ルフィは、それだけで歩いて行けるのだから。

そのはず、だったのに。

「おれはウタと一緒にいてエだけだ」

全ての根底。その青年の在り方における絶対のルール。

ずっと変わらない、彼の想い。

「そのために世界を巻き込んでも構わないと?」

「そんなつもりはねエ」

「つもり、は最早関係ない。キミの気持ちではなく、キミの行動で秩序が揺らいだ。それ

だけが真実だ」

真実。どうしてだろうか。

何一つ、その言葉は響いて来ない。

「おれは、ウタには笑っていて欲しい」

びくりと、自身の後ろでウタが小さく震えたのがわかった。

今の彼女は、どんな表情をしているのだろうか。

……きつと、笑ってはいない。それぐらいはわかる。

故にこそ、拳を握るのだ。

「秩序とかルールとか、よくわからねエけどよ。それでウタが守れんのか？」

「……ルールに則るなら、正式な形で抗議を行うべきだったのだろうな。それが『正しい』手段だ」

「無理だろ」

切り捨てる。その『正しい手段』とやらで守れるならば、こんなことにはなっていない。

「だったらああするしかなかった」

「その結果、こうして追われる立場になったとしても？」

向かい合う二人の気配が、徐々に強くなっていく。

「ああ」

迷いのない回答であった。聞いていた者たちのうちの数名が思わず目を見開くほどに。

それほどまでに、その青年の返答に込められた覚悟は強い。

「なあ、おっさん。教えてくれ」

「何度も質問したのはこちらだ。答えられることは答えよう」

「ウタと一緒にいたいと思うことが、悪いことなのか？」

数秒、或いは数瞬の沈黙。

その果てに、ヴェルゴが口を開く。

「彼女を『天竜人』が欲したその瞬間から、キミの願いは咎められるべきものとなった。

——それが世界政府の定めた『法』だ」

そうか、とルフィは呟く。そして。

「だったら、それでいい」

きつと、この瞬間だったのだ。

「それでもおれは、ウタと一緒にいる」

かつて『英雄』と呼ばれたその青年が。

「守るって決めた。約束した。だから、それでいい」

かつての仲間たちを敵に回す。

その覚悟を、決めたのは。

「確認したい」

バサリと、ヴェルゴがそのコート脱ぎ捨てた。『正義』の文字が刻まれたコートが床

へと落ちる。

「後悔は？」

「ない」

迷いのない即答。例え何度繰り返すことになろうとも、きつとルフィは同じことをしたのだらう。

そんな確信を、誰もが覚えた。

秩序を揺るがし、世界から追われることになろうとも。

その在り方を「悪」と断じられ、糾弾されようとも。

「後悔なんてしねエ。するわけがねエ」

その心の奥底にある芯が揺らがないのなら。

モンキー・D・ルフィが揺らぐことは、決してない。

「おい、麦わら！」

フランキーの呼びかけと共に、ルフィの下へ何かが飛来する。

それは、「正義」の文字が刻まれたコート。

ヴェルゴの言う、秩序を砕いた拳を振るつてからようやく見つけたモノの象徴。

「ありがとう」

「いいってことよ」

そのフランキーもまた、拳を鳴らしながら歩を進める。その顔には笑みがあった。

「そのコートを纏う意味を——いや、忘れてくれ。代わりに一つ、最後に聞きたい」
「何だ？」

コートを纏い、ルフィが構えを取る。

「キミの『正義』は何だ？」

ヴェルゴがその身に『武装色の覇気』を纏っていく。全身を覆うその力は、彼の実力を示していた。

「秩序を揺るがし、『悪』と断じられながら。それでもそのコートを纏い、掲げる『正義』とは？」

誰もが、その青年へ注目していた。

ヴェルゴが床に脱ぎ捨てたコートと比べ、どこか薄汚れたコート。しかし背負った『正義』の文字は力強く。

「——『大切な人が、笑える正義』」

そして、その『英雄』は堂々と。

彼の『ルール』を、『法』を、宣言した。

「キミは本当に、どこまでも迷わないのだな」

初めてヴェルゴが小さく笑った。その笑みの理由は何だろうか。

「わかるとも。私もそうだ。誰かのために拳を握ることの意味と強さを、私もよく知っている」

その言葉の意味を理解できる者はこの場にいない。だがヴェルゴの中で何かの覚悟は定まったらしい。

「では、改めて宣言しよう。——キミたちを逮捕する」

言葉と共に振り抜かれる拳。対し、ルフイの返答もまたその拳であった。

重い金属同士がぶつかったような音が周囲を叩く。凄まじい衝撃が周囲を駆け抜けた。

それが、始まりの合図。

水の都の片隅で、その戦いは始まったのだ。

たった一つの想い。ただそれだけでその青年は世界にさえも牙を向く。

その拳を握り締め。

命を燃やし、どこまでも戦い抜くだろう。

ならば、彼女は？

「……………ルフィ……………」

かつてその青年の隣に立っていたはずの彼女。今はその背を見つめることしかできない彼女は。

彼の想いに報いるために、何をすればいいのだろうか。

その答えは未だ、見つからぬままだ。

逃亡海兵 Water Seven ☒

第二十話 水の都の一番長い日⑦

共に得物は無し。己の五体のみを武器とし、その二つがぶつかり合う。

一人は「神への大逆人」、モンキー・D・ルフィ。

一人はその大逆人を裁くがためにここへ来た海軍本部中將、ヴェルゴ。

大逆人が「正義」のコートを背負い、絶対的正義たる海兵が自らそれを脱ぎ捨てているという現状。それがこの状況を表しているかのようだった。

海兵たちは思うだろう。——何故、彼の「正義」を認めてはいけなのかと。

アウトローたちは思うだろう。——何故、彼は「正義」を脱ぎ捨てて戦っているのかと。

だが、その答えは既に出ている。海兵が語ったことが全てだ。「法」という絶対的なルール。それを根拠に拳を振るい、「悪」を討つのだと彼の海兵は宣言した。

対し、かつて「英雄」と呼ばれた「大逆人」は言ったのだ。

——なら、それでいい。

あまりにも重い、聞く者の心を揺さぶるその告解。

彼は己の“罪”を認めた。その上で“正義”を口にし、背負ったのだ。薄汚れたコート——それはまるで、今の彼の寄つて立つ場所を示しているかのようで。

「……………ッ」

知らず、視線を落とした海兵がいた。それは本能がそうさせたのか。もしくは良か、それとも罪悪感か。

或いは——青年への憧憬故か。

覚悟はしていた。これから起こることについても、今から自分たちがしようとしていくことも。全ての覚悟は終わらせただけだ。だが、いざその現実を前にすれば揺らいでしまう。

“麦わらのルフィ”は“英雄”であり“ヒーロー”であり憧れた。海兵ならば彼の冒険譚とも呼ぶべき戦いを知らぬ者はいないだろう。

“歌姫”とは“英雄”であり“救い”であり憧れた。海兵でなくとも彼女の歌声を知らぬ者はいないだろう。救われた者など数え切れぬ程だろう。

海兵が市民を苦しめるといふ許されざる所業を行なっていた海兵を、正面から正した。

海賊に襲われ、街を追われた者たちを助け、街を取り戻した。

海賊と海兵が繋がり、最早世界からも見捨てられたのだと絶望していた島を解放した。

史上最悪の裏切り者とも呼ばれた元海兵を、その企みごと打ち砕いた。

「……………くそ……………」

また一人、目を逸らした。奇妙な形をした家の壁を粉碎しながら二人の男が飛び出してきたのだ。

響き渡る轟音と衝撃。その戦いは、まるで。

——何かを訴えかけるかのように、聞こえた。

雨を奪われた国。人を想う心を踏みじられた砂の国に、再び雨をもたらしした。

黄金に支配された場所。多くの苦しむ者たちと共に立ち上がり、"自由"を掴んだ。

魚人島の崩壊を防ぎ、彼らを"友"と呼んだ。"麦わら帽子とヘッドフォン"は、共に歩む未来への第一歩になった。

「おおおおおおおッッッ!!」

殴りつけるような雄叫び。そこに込められた覚悟に、知らず、足が後退する。

立つ資格が、あるのか。

あの"正義"の眼前に。今の自分たちは、立つだけのものを示せるのか。

空島はあった。雪の国には桜が咲いた。いつだって笑顔があった。

たくさんの「ありがとう」に、彼らは笑って言ったのだ。

「いいよ」

「どういたしまして」

——「正義」はずっと、そこにあった。

あった、はずなのに。

どうして、こんなことになってしまったのだろう——？

「目を逸らすな!!」

広がる迷い。それを打ち砕くように叫んだのは、この部隊における副官の地位にある海兵であった。

その表情は苦渋に満ちている。だがそれでも、その瞳は戦いから目を離していない。

「覚悟なら決めたはずだ!! 誓ったはずだ!! 言ったはずだ!! 退くならば今だ!!」

「ここへ来る前に問うたはずだ!!」

そうだ。出撃の直前、この場の全員が問いを下された。

これから起こること。「正義」とは呼べぬ行いを前に、引き返す許可を与えられた。

「中将殿の言葉を思い出せ!! 秩序を守るのだ!! 我々の背にはか弱き市民がいるのだ!! 我々以外に誰が彼らの明日を守る!?!」

秩序。そう、秩序だ。

それを守ることこそが海軍の使命であり。

かつての「英雄」たちは、その秩序を揺るがしたのだ。

「同情するなどは言わん!! 迷うなどとも言わん!! だが止まるな!! 最早そんなことをするだけの余裕はない!!」

嗚呼、畜生、くそつたれ。

どうして、こんなにも。

「我らの『正義』の背後には!! 数多のか弱き存在があると自覚せよ!!」

——『正義』というのは、難しい?

「……最早」

呟く言葉に込められていた感情は、あまりにも複雑。

「最早、後戻りはできないのだから」

嗚呼、なんて。

なんて、どうしようもない。

「総員。作戦を開始する」

そして振るわれるのは、『海軍』の“力”。

かつて彼らと共にあったはずのその“力”が、その牙を剥く。

「——“パシフィスタ”を前に。第一、第二中隊は位置につけ」

戦場の形が変化する。

未だ、戦いは始まったばかりだ。



ルフィは退くことができない。彼が背負う位置にはウタがおり、フランキー一家がいる。故に彼は前に出るしかなかった。

対し、ヴェルゴは違う。彼は背後に退くだけのスペースがあり、そしてそれは想定された作戦だ。

故に、この流れは必然であった。

「“JET銃弾”!!」

至近距離から超高速の拳がヴェルゴへと叩き込まれる。左脇腹を狙った一撃だが、そ

れは左肘で受け止められた。やはりというべきか、凄まじい反応速度だ。

相手が強者であることはわかっている。故に最初から全力だ。

「ツイン」!!」

今の拳によつてヴェルゴが後方へ退いたため僅かに間合いが空いた。この距離からヴェルゴがルファイに拳を届かせるには踏み込むしかない。だがその踏み込みの時間をルファイは許容しない。

「J E T銃」!!」

右肩と左脇。正確に撃ち抜かれるはずだったそれを、それぞれの腕でヴェルゴがガードした。同時に背後へと飛んでいたらしく、想像よりも感触が軽い。

だが、ガードされたとはいえ直撃だ。ヴェルゴの背中がフランキーハウスの壁を突き破り、その体が外へと押し出される。

曇り空と強い風。『アクア・ラグナ』が迫る重苦しい空気を感じながら、それを追つてルファイは前に出る。

「ウタを頼む!」

「ルファイ!」

振り返らずに叫んだルファイに、背中から声が飛んだ。だがルファイに応じる余裕はない。

——ヴェルゴは強い。

僅か数合のやり取り。全てを擲つような全力というわけではないが、手加減したというわけではない。並の海賊ならば既に意識を失っているだろう攻勢だ。

海軍本部中将。決して弱い存在ではない。だが想定以上に——強い。

「——これは中々」

こちらを見、呟くヴェルゴ。その上半身全体を覆う「武装色の覇気」は彼の實力の程の明確に表していた。

「おおおおおおおおおおおッッ!!」

まるでそれは、己を奮い立たせるかのような叫び。

おそらく……おそらくであるが、互いに万全な状況で一对一で向かい合う形であればルフィの方が優勢だっただろう。楽勝とはいかないだろうし、場合によっては敗北もあり得る。だがそれでも、彼の「金獅子」をも正面から打ち破ったその實力であれば天秤は勝利へと傾いていたはずだ。

しかしこれは試合ではなく実戦だ。それも対等な条件によるものではない。圧倒的にルフィの方が不利な状況だ。

故にこそルフィは急いでいた。細かな計算があるわけではない。だがその本能が告げている。

——時間は常に、相手の味方だ。

「受けて立とう」

そしてそれをヴェルゴもまた理解している。数も、状況も、肉体と精神のコンディションも。その尽くがヴェルゴたち海軍側に有利な状況だ。

なればこそ、ヴェルゴは余裕を以って迎撃の体勢に入れる。

徹底的なまでに基礎を練り上げた海兵。その強さの根拠がシンプルであればあるほどに、崩すことは難しい。

「『JET銃』!!」

そしてルファイが選択したのは距離をとつての攻勢であった。ヴェルゴは現状徒手空拳であり、遠距離の攻撃手段をほとんど持つていない。『六式』を修めている以上それに類する戦闘術は使えるのだろうか、ある程度の距離があれば対応は可能だ。

ルファイが食べた『ゴムゴムの実』の能力はその肉体がゴムの性質を持つことにある。ゴムとは伸び縮みするものだ。その性質を利用し、一定の距離をとつて拳と蹴撃を叩き込むことをルファイは選択した。

「——」

だが、やはりといふべきかヴェルゴはそれを冷静にガードする。一定以上の距離があればヴェルゴの動きに対応できるルファイと同様、ヴェルゴもまた一定以上の距離という

『間』があればルフィの攻勢に対応できるのだ。

ある種の膠着状態とも言える状況。やはり踏み込むべきか——そう思ったルフィの
“見聞色の覇気”がその気配を察知する。

「撃て!!」

ルフィから見て右手側。緩やかな扇状に広がった海兵たちが一斉に銃口をこちらへと向けていた。

だが号令の声とその引き金が絞られるより、ルフィがそちらに視線を向ける方が早かった。故にそれは不意打ちとはならず、対処のできる動きとなる。

——銃？

疑問は一瞬。ルフィは彼が持つ能力の性質上、普通の銃弾は受け付けない。ルフィに向かつて銃を撃ち、効果のないことに驚く海賊の姿など日常の光景だ。

故にそこで選択肢が浮かぶ。即ち無視するか、それとも避けるかだ。
悠長に迷う時間はない。判断はいつも一瞬だ。

そして、ルフィは——

“一つ、授業をしてやろう”

無視の選択を取ろうとした瞬間、脳裏にその言葉が響いた。

それは、過去の記憶。

彼に戦い方を教えた師の一人である人物の言葉だ。



“海軍の強みは何だと思う?”

それはまだ海兵となって日が浅い頃の記憶。 “全ての海兵を育てた男” とまで評される男との世間話であり、二人の新兵に対する教導であった。

“数、ですか?”

答えたのは未だ少女と呼ぶべき年齢の女性であった。赤と白の髪を揺らしつつ、片手を挙げて答えている。

“正解だ。数つてのはいつの時代も一定の強さを持つ。単純な話、一対一と二対一の戦闘つてのは別物だ”

わかりやすい言葉で言うなら『袋叩き』だろうか。人間は背中に目が付いているわけではないし、思ったよりも視界も思考も狭いものだ。圧倒的な実力差があるならばともかく、多少こちらが優位程度の実力差なら数は何よりも厄介なものとなる。

“海賊つてのは基本的に集団だ。そして状況が白兵戦に移行した場合、どうしても乱戦になりやすい。そうなった時は常に周囲の仲間を意識しろ。いいか、絶対に孤立するな。数ではこっちが基本的に勝っている。なら理屈上は常に数の有利を取れるはずだ”

おそらくこれは彼が数多の若き海兵にかけてきた言葉であるのだろう。戦場において新兵は最も命を落としやすい。未熟であり、そして未熟であるが故に出足が鈍ることで孤立する。そうして命を落とすといった事例のなんと多いことか。

故に海兵としての訓練で最初に教えられることが『孤立しないこと』であつたりする。最低でも二人一組。絶対に単独では行動しないよう徹底するのだ。

その点、ルフィとウタは基本的にこの二人で行動しているためその辺りのルールは自然と守られていたりする。

“まあ、中には例外もいるがな。個人で戦況をひっくり返すような存在だ。それこそ海賊でいうなら『四皇』なんて呼ばれてる連中であり、こっちで言うなら大将つてのがそういう存在だ”

元大将が言うと言得力がある。 “四皇” という単語を聞いたウタが僅かに身構えたが、それには誰も触れなかった。

“そういう相手への対処法は大きく分けて三つ。一つはこちらもそいつに対抗でき

る『個』を前に出し、文字通り上から潰す方法”

“わかりやすいな”

“古い時代にはこの方法で軍隊の勝敗を決めてたつて話もある。とはいえ、最近はそのういつたことも減つたが”

ちなみに余談であるが、今この場にいる二人の若き海兵はその一対一を様々な条件と状況が重なることで繰り返すことになる。特に麦わら帽子の彼などは相手の最高戦力、或いは首魁とでもいふべき相手と一騎討ちを繰り返すのだからある意味時代を逆行していると言えるだろう。

まあ、だからこそ後に“英雄”などと評されるのかもしれないのだが。

“そしてもう一つは数で押し潰す方法だ。生物である以上息はするし飯も食う。無限に動き回れる生物など存在しない以上、いつか必ず限界は来るもんだ”

生物である以上必ず訪れる限界。或いは飽和攻撃とも呼ばれる手段。先に述べた数の論理を用い、少しずつでも削つていくという戦法だ。

ある意味では“バスターコール”はこれに近いのかもしれない。島一つを地図から消すほどの飽和攻撃。その威力は“鬼の跡目”と呼ばれた伝説の海賊をも捕らえたという事実が証明している。

“最後の一つは?”

麦わら帽子を被った青年の問い。ああ、と男が頷く。

「両方を同時にやる。……これが一番確実だ」



明確な論理があつたわけではない。だが「黒腕」と呼ばれたその人物から教えられたことが、ルフィの中には確かに息づいていた。

それは反射的な思考。いや、思考にすらなつていない。いくつもの単語が脳裏に瞬くだけのもの。

だがそれでいい。戦闘中なのだ。悠長に思考などしてられない。いつだって、判断は一瞬なのだから。

「——ッ！」

果たして、ルフィの選択は空へと飛び上がることであつた。秒という時間を置かず銃声が響き、弾丸が空を駆ける。

「良い勘をしている」

そしてそれを待つていたとでもいうかのように、ヴェルゴが迫つてきていた。咄嗟に腕をクロスして防御の体勢を作る。それとほぼ同時に右回し蹴りが叩き込まれた。

痺れるような衝撃が腕を撃ち、宙にあつたその体が地面へと墮ちていく。

轟音と衝撃。とても人が地面に落ちたとは思えない音を響かせながらも、しかし落下そのもののダメージはルフィにはない。打撃に類するものを彼は基本的に受け付けないのだ。

故にこそヴェルゴが「覇気」を用いた。ルフィにダメージを通すために。

そして「覇気」を持たぬ海兵は——
「撃て!!」

再びの号令。ルフィは地面を蹴り、前へと踏み出す。空を駆ける銃弾は彼の下へは到達しない。

だがやはり、そこにはヴェルゴが待ち構えている。

「気付いていると思うが」

拳と拳の激突。互いに衝撃で僅かに後退するが、再び前と踏み込んだ。

両の腕と両の脚。それだけを頼りに相手を討たんと戦っている。

「——あれは海楼石の弾丸だ」

互いの顔にそれぞれの拳が直撃した。一瞬の膠着と拮抗。しかしそれもすぐに終わ

り、二人は後方へと弾かれるようにして飛ばされる。

僅かに舞う血はどちらの——いや、互いのものか。

「構え!!」

「……………!!」

号令の声に反応し、ルフィが視線をそちらに向ける。いくつもの銃口がルフィの方へと向けられていた。

ルフィには基本的に銃が通用しない。だが例外はある。その一つが海楼石だ。

海楼石の弾丸——それはあの事件においてウタに撃ち込まれたモノであり、能力者にとつては致命的な効果をもたらすことになる。

だが海楼石の弾丸はとても貴重なものだ。そう簡単に扱えるものではない。故にヴェルゴの言葉が真実かどうかは怪しい。

しかし、関係ないのだ。

——可能性。

それが本当であつた場合に起こることが、ルフィの足を止めてしまう。

「——」

判断は一瞬だ。ルフィは銃を構える海兵たちの排除を優先する。かつての仲間たちに拳を向けることには思うところはあがるが、それで動きが鈍ることはない。

何を最も優先すべきか。

自分が何をしたいのか。

モンキー・D・ルフィに揺らぎはない。振るつた後、その拳の痛みを感じることもだろう。もしかしたら生涯引き摺るような痛みが残るかもしれない。

だが、それでも。

きつと彼は、それを受け入れる。

受け入れてしまうだけの覚悟を、持ってしまったていた。

拳を握り、最短距離を突き進む。後僅かで届くというところで――

「わかりやすいな」

横手から、衝撃と共にそんな声が聞こえた。

ルフィの体が宙を舞う。上半身を“武装色の覇気”で覆ったヴェルゴがその右肩でルフィの体を吹き飛ばしたのだ。

「ゲホ――」

それは“剃”の速度による体当たり。衝撃により肺から空気が漏れる。

――焦ってしまった。

ルフィは思う。判断を間違えた、と。

僅かに走る頭の痛み。普段よりも重い全身。少しだけズレている体の感覚。

彼は「見聞色の覇氣」により周囲を常に把握している。だが見たところでそれを処理するのはあくまで彼自身だ。万全な状態であり、余裕があるならばともかく今の彼は万全とは程遠い状態にある。

だが何より……孤立していた。

——ウタを守るのは、おれしかいねえんだ。

それは思考の袋小路。悲壮なる覚悟、揺らがぬ意志。美しくも見えるそれはしかし、同時に致命的な破綻の可能性を抱えることになる。

背負った「正義」が、世界にとつては「悪」であつたとしても。

かつての仲間たちが、世界が、自分の「罪」を咎めても。

それでいい、と。

モンキー・D・ルフィは受け入れた。

そしてその結果、彼は——否、『彼ら』は孤立しつつある。

彼らの師たる人物は、それこそを避けるべきだと語つていたというのに。

銃口がこちらを向く。同時、ルフィは気付いた。

背後。そこにあるのはフランキーハウス。

射線上に——ウタがいる。

避けられない。だが受け止めることもできない。

時間が足りない。しかし動かなければ。そうして前に出ようとしたルフィの耳と視界に。

「ウエポンズ左!!」

声と共に、強烈な閃光と爆発が届いた。

着弾したのは銃を構えていた海兵たちの場所だ。黒煙が立ち上り、海兵たちの姿が掻き消される。

「——フランキー」

「オメエはウチの客人だ。それにどうも、あいつらはおれにも用があるようだしよ」

何故か左の手首が外れ、まるで砲門の如き穴を左腕から覗かせているフランキーが言う。

「それに、だ。——ウチの子分に手エ出した落とし前はつけねエとなア!」

その縁はこの島で偶然紡いだものである。

偶然からフランキーの言う子分を助け、その結果として縁を繋いだ。だがその結果としてこの状況になり、ルフィは無意識に彼らもまた守るべき相手と考えていた。

しかし、それは違う。

彼らは庇護されるべき対象ではない。正しく己の足で立ち上がれる力を持っている。

「相手は海軍だ」

「それがどうした？ おれはフランキーだ」

何の回答にもなっていない。普段ならどちらかというところルフィの方が似たような受け答えをして相手を困惑させるのだが、今回は珍しくルフィの方が困惑していた。

馬鹿であるとか考えなしであるとか、色々言われることの多いルフィだが無知ではない何も考えていないわけではない。そして彼は『海軍』という存在の力を知っている。それに逆らう怖さも。

「アニキ！ 準備できたわいな！」

「ウタさんは下がってください！ おれらで守ります！」

「半分は中から援護だ！ もう半分で撃って出るぞ！」

「フランキー一家の力を見せるわいな！」

困惑が、先に来る。

何故、どうして。彼らは。

「馬鹿どもには下がってろって言ったんだがなア。まア、アウトローってのは舐められ
たらしまいだ」

アウトロー。フランキーはそう言うが、きつとそれだけではない。

立ち上がるだけの理由が、彼らにもあるのだ。

「ま、細かい話は後でいい。あいつらをぶん殴ってからだ。どうとでもなる」

黒煙が晴れていく。そこにいたのは、果たして――

「――手間が省けたな」

その姿を目で追えたのは、ルフィだけであつただろう。高速の移動術、*“剃”*。その
速さを追うことは常人には難しい。

ましてや使い手は海軍本部の中将だ。戦える人間であつても追うことは難しい。

一瞬で距離を詰めるヴェルゴ。その狙いはフランキーだ。

轟音と衝撃。フランキーの眼前で、ヴェルゴの拳を左掌で受け止めた者がいる。

姿勢を低く、右肩を前に。ヴェルゴの右拳を受け止めたのと同時に、ルフィはその懐
へとは入り込んでいる。

距離はゼロ。その体勢のまま、ルフィは全力で地面を蹴った。

減り込むようにその右肘がヴェルゴの腹へと突き刺さる。初めての有効打とも言える一撃に、ヴェルゴの肺から空気が溢れた。

「JETスタンプ!!」

そこへ追撃の一撃。その音でようやく、二人以外の時間が動き出した。

「麦わら! ア!」

判断が早かったのはフランキーだ。声を張り上げ、彼もまた駆け出す。

「そいつは任せる! 他は任せる!」

「——おう!」

応じる判断もまた早い。不思議な感覚だった。誰かに『任せる』など——そんなことができるなどと、思っていなかったから。

少しだけ体が軽くなった気がする。その勢いのまま、ヴェルゴに追撃をしようとして。

「舐めて貰っては困る」

ヴェルゴの眩く声は、ルフィにしか届かなかった。同時、視界の端に閃光が走り。

「——アニキ!?!」

閃光に包まれたフランキーが、膝をついた。

まるで爆撃——いや、もっと強力な何かを食らったかのようにその身が焼かれてい
る。

「……………!?!」

思わずルフィはそちらへと視線を向けた。その視界に入ったのは二人の巨大な男の
姿。

見覚えのある姿であった。だがそんなはずはない。あの男が二人もいるはずがない。

かつて「暴君」と呼ばれた海賊にして、「王下七武海」の一角。

——バーソロミュー・くま。

この世に一人しかないはずのその存在が、どうして。

どうして——二人も？

「フランキー!」

腕を伸ばし、膝をついたフランキーを引き寄せる。数秒遅れて、フランキーがいた場
所へ『くま』が口から光線を叩き込んだ。

凄まじい爆発。見覚えのある光景だ。あの光線は。

「ピカピカのおっさんの……………!?!」

「く、ぐつ、なんだありや……………!?!」

意識を取り戻したフランキーが頭を振りながら言う。そのまま彼はルフィに対して言葉を紡いだ。

「すまねエ、助——」

「余所見敵禁だ」

振り抜かれた右足の蹴りを、同じく右足の蹴りでルフィが迎撃する。

鈍い音が響く。一瞬の膠着。その最中、ヴェルゴが口を開いた。

「詳細については機密だ。だが、一つだけ言っておくべきだな」

冷たい、刃物のような声。

「——キミたちに、勝利はない」

海軍の力とは数である。だがそれが全てではない。秩序を保ち、市民を守るために彼らは常に進歩している。

モンキー・D・ルフィは海兵だった。故にこそ、海軍の力をよく知っている。

海軍の力。海の秩序を乱す者を捕らえ、罰するための力が。

——堕ちた“英雄”に、襲いかかる。

逃亡海兵 Water Seven ☒

第二十一話 水の都の一番長い日⑧

少女にとって、海軍とは「ヒーロー」そのものであった。

彼女の故郷たるメルヴィユは、長きに渡って「金獅子」の支配下に置かれていたという過去がある。幼き彼女が生まれた時にはもう、「自由」など存在しなかった。

誰もが俯いていた。

誰もが嘆いていた。

誰もが——諦めていた。

そこに現れたのが、あの人たちだった。

その背に背負った「正義」の文字。

言葉の意味は知っていたけれど、自分には縁のないものだったそれ。

支配は終わった。

貰ったのは、*“自由”* だった。

麦わら帽子を被った、快活に笑う人が大好きだ。

赤と白の髪を靡かせて、綺麗な歌声を響かせる人が大好きだ。

まるで魔法のように様々な音色を奏でる人たちが、大好きだ。

—— *“正義”* を背負ったその背中が、憧れだ。

“私も海兵さんみたいになりたい！”

意味も知らず、わからぬままに。

それでも、憧れのままに口にした。

“おつ、本当か？ いいじゃねエか！”

麦わら帽子のあの人は、笑って頭を撫でてくれた。

“そう言ってくれるのは私も嬉しいけど……”

綺麗な歌声のあの人は、少し困った顔をしていた。

“でも、大変だよ？ シャオはまだ小さいし、色んなものを見てから決めた方がいい

んじゃない？”

“なんだよ、ウタ。おれたちだってゼファーのおっちゃんに似たようなこと言った

じゃねエか”

“あれはルフィだけでしょ。……私はまだ、あの時は何も決めてなかったし”

言い合っているように見えて、けれどそれが彼らなりのじやれ合いであることを少女は知っていた。

いつも綺麗な音色を色んな楽器で奏でてくれるお姉ちゃんは、「犬も喰わない」って笑っていたのを覚えている。

——だめ？

問いかける。すると、お姉ちゃんはしゃがみ込み、こちらに視線を合わせて微笑んだ。
“ううん。嬉しいよ。でもね、シャオ。世界は広いの。色んなものを見て、色んな人に出会って。そうしてから決めてもいいんじゃないかな、って思うの”

——お姉ちゃんもそうだったの？

“私は……うーん、少し違うかな？”

お姉ちゃんがチラリとお兄ちゃんの方を見た。お兄ちゃんは首を傾げている。

“でも、シャオが本当に海軍に入るって決めて頑張るなら応援するよ。——ずっと待ってる”

“おれたちもよ、同じことを言われたことがあるんだ”

待ってる。

昔、お兄ちゃんとお姉ちゃんもそう言われたことがあるのだと、そう言って笑った。

“……あつ”

不意にお兄ちゃんが何かを思い出したように声を上げた。どうしたの、というお姉ちゃんの問いかけに頷いて、お兄ちゃんが笑顔で言う。

“シャオ、ちよつと待つてろ!”

そして、お兄ちゃんが突然走り出してしまった。お姉ちゃんと顔を見合わせて、二人で首を傾げる。

お兄ちゃんを待つ間、色々な話を聞いた。

二人の故郷のお話。海で出会った色々な人のお話。

お姉ちゃんが語る物語はまるで、夢物語で聞いた冒険のようで。憧れて、夢に見て、それでも諦めていたもの。

けれど。

——諦めなくてもいいのだと、そう教えて貰ったことでもあつて。

“悪イ、待たせた!”

どれぐらいの時間が経つたのだろう。色々なお話を聞いている間に、お兄ちゃんが帰ってきた。

“これ、やるよ”

そう言つてお兄ちゃんがくれたのは、海兵さんたちがしている帽子だった。島に来る人たちがしている帽子。

嬉しかった。貰った帽子をすぐに被る。

——どう？

自分でも興奮しているのがわかった。お兄ちゃんとお姉ちゃんは、満面の笑顔で。

“似合ってる！”

そう言つて、笑つてくれた。

まるで夢物語の“ヒーロー”。

困っている人たちを助けてくれる、“正義の味方”。

そんな二人がいなくなったのは、それから少ししてからのことだった。

難しい話はわからない。でも、お母さんが言っていたのだ。

“あの人たちは、もうここには来ないよ”

悲しそうな顔だった。冗談ではないとすぐにわかった。

なんで。どうして。

何度も、何度も繰り返した。けれど答えは返つて来なくて。

その日から、少女にとっての“ヒーロー”たちが少しずつ来なくなっていくた。

優しくて賑やかな、楽器の演奏が上手いお兄ちゃんたちは「しばらく来れなくなった」と言つて姿を見せなくなつた。

怖い顔をした、でも優しい煙のおじさんと眼鏡のお姉ちゃんも来なくなつた。

敵しいけれど、それでも優しいおじさんはお母さんたちに頭を下げていた。「あなたは悪くありません」つて、お母さんたちが言つていた。

来る度にお兄ちゃんとお姉ちゃんを追い回していた、いつも煎餅をくれるお爺ちゃんは優しく頭を撫でてくれたけど、それから来なくなつた。

最後に残つたのは、優しい金色の髪のお姉ちゃんだけ。

“ちよつと遠くへ行かなければならなくなりました”

お姉ちゃんがお母さんにそう言つているのを聞いた時、心の奥がざわついた。

駄目だつて思った。みんないなくなつてしまつて。置いていかれるつて。

——ビリー。

だから、“友達”に声をかけた。

——一緒に行こう。

躊躇いはなかった。

だつて、怖かつたのだ。

何もしないまま。

何も知らないまま。

失つてしまうことが、何よりも——怖かった。

貰った帽子を被つて。

大切な「友達」と一緒に。

少女はそうして、外の世界へ飛び出したのだ。



シヤオには理解ができなかつた。

ルフィとウタは彼女にとって「ヒーロー」であり、海軍もまた彼女にとって「ヒーロー」だ。

あの苦しい支配から救い出してくれたその存在が、彼女は大好きだ。

だから——理解できない。

「なんで」

——どうして、海兵さんたちが？

——どうして、戦っているの？

わからない。わかるはずがない。

彼女にとって、世界の仕組みはあまりにも理不尽であり。

到底、理解できるものではなかったのだ。

「お姉ちゃん！」

それはほとんど反射的な呼びかけだった。赤い髪のお姉ちゃん——船旅で色々なことを教えてくれた『真面目で格好いい海兵さん』に対し、シャオは縋るような声をあげる。

「……………ッ」

対し、呼び掛けられた海兵——イスカは強く唇を引き結び、苦い表情をしていた。何かを言おうとして、しかし何も言えないでいる。

その表情にシャオは見覚えがあった。耐えるような、堪えるような。

それは、かつて母と祖母がしていた顔。

あの「金獅子」の支配の中、大人たちが浮かべていた表情と同じもの。

それは一種の諦めであり。

そして、シャオが受け入れられなくなかったもの。

受け入れてはいけないと——あの人たちに、教えて貰ったもの。

「ビリー!!」

深い考えがあつたわけではない。だが彼女の体は動き出していた。

「クオツ!!」

そして彼女の“友達”もまた、同じことを思っていた。

地面を蹴り、飛びつくように少女は彼の下へ。

「何を——」

こちらに気付いた海兵の一人が声を上げた。だが遅い。その手はもう、彼の体を掴んでいる。

「シヤオ!?!」

海兵さんの声が聞こえた。だがシヤオは振り返らない。ビリーも振り返らない。

空を舞うのは一人と一羽。

あまりにも小さな一人の少女と一羽の鳥が、大切な人のために空を駆ける。

「行こう! ビリー!!」

「クオツ!!」

——強い、風が吹いた。

その風に煽られ、シヤオの帽子が空を舞う。

あの日貰った大切な帽子。少女の宝物。

彼女にとつて、一つの象徴。

「……………ッ！」

一瞬の迷い。だが少女は戻らない。その瞳は前を捉えている。

「オリンお姉ちゃんのところに行こう、ベリーー！」

一番最後までいてくれた、あの人のところへ。

あの人なら、きつと。

——お兄ちゃんとお姉ちゃんを、助けてくれるはずだから。



見覚えのある少女と鳥が空へと舞い上がる姿を、視界の端に捉えた。

シャオとベリーー。強い風が吹き荒れる中を、あの二人が進んでいく。

「余所見をする余裕があるのかね？」

声とその拳が迫り来るのには間はほとんどない。ルフィはそれを体を前に倒すことで

避け、そのまま前蹴りを叩き込む。

その足裏をヴェルゴが左腕で防いだ。

——一瞬の視線の交錯。

言葉はない。その拳がその代わりだ。

「『ストロング右』！」

そして、そんなルフィとヴェルゴがから距離を取ったフランキーが『パシフィスタ』へとその一撃を放つ。鎖によって伸びる拳の一撃は、並の海賊程度なら一撃でノックアウトすることもできる程に重い一撃だ。

だが、相手は海軍が——いや、世界政府が開発した『人間兵器』。

ルフィたちは知らないが、そのカタログスペックは『新世界』にすらも通用するほどの強力だ。

「硬エ……!?! うおっ!」

自身の一撃にびくともしない『パシフィスタ』にフランキーが驚愕するのも一瞬。口から放たれたレーザーをフランキーが横へと大きく飛び退くことで避けた。轟音が響く。地面が抉れるその光景が、今の一撃の凶悪さを物語っていた。

「チツ——」

舌打ちを溢すフランキー。だが彼もまた動きを止める余裕などない。

「なんだこいつ!?!」

「大砲が効かねエ!?!」

「撃て撃て!! 撃ちまくれ!!」

——“パシフィスタ”は、二体いる。

一体がルフィとフランキーの近くににいるならば。そして海軍の目的を考えるならば、もう一体の目標は自明である。

何故ならば。

「ウタ!!」

思わず叫んだルフィの視線の先。フランキー一家の者たちの後ろに“歌姫”はいる。

彼女もまた、海軍にとっての攻撃対象だ。

「お前ら……この……!?!」

フランキーが駆け出した。彼の子分たちがいるというのもあるだろう。だがそれ以外に、彼にも“切り札”がある。

しかし、未だ彼らは無自覚であるのだが。

——現状において、この戦場は既に詰んでいる。

最大戦力たる“麦わらのルフィ”はヴェルゴを相手に釘付けにされ、数においても圧倒的に敗北している。

援軍などどこにもおらず、一発逆転の一手など望むべくもない。

そうなるように、海軍は——ヴェルゴたちは動いたのだ。故にこれは必然の結末。

「どけー！」

ルフィは現状におけるその細部について理解をしているわけではない。だがその本能とでもいうべきものが現状のマズさを訴えていた。

——このままでは。

何もかもが、失われる。

「聞く義理がないな」

そしてヴェルゴがそんなルフィを迎撃する。そこへ横手から銃撃が放たれ、どうしてもルフィはそれらを回避する行動を取らなければならない。それは大きなロスだ。

海楼石の弾丸——それは、踏み込むにはあまりにもリスクが大き過ぎる。

「九割方の確信はあつたが」

弾丸を避けたルフィに追撃の動きを見せながら、ヴェルゴが呟くように言う。

「——『歌姫』の歌声は、失われたか」

その時、ルフィが表情を歪めてしまったことが何よりの証明になる。だがこれは彼が悪いわけではない。その反応はあくまで最後の一割を埋めただけのことだ。

ルフィとウタ。彼らの逃避行は決して長くはない。だがその長くはない時間で彼ら

はいくつかの戦いを経験した。それ自体はいい。彼らの影響力と性格を考えた時、何も
ない方がおかしいと言う者もいるくらいだ。

故に問題はそこではない。その解決方法にある。

——とある島を襲った海賊は、「麦わらのルフィ」にやられたと言った。

——海軍本部少将、「白狐のスモーカー」は「麦わらのルフィ」と一騎打ちを演じ
た。

逃亡者は二人。対し、矢面に立つのは常に一人だったのだ。

追撃のための部隊が編成された時、より厄介なのは「歌姫」の方だとされていた。そ
の歌声は敵対者であろうと獣であろうと魅了する。そして魅了されてしまえば最早彼
女に逆らうことはできなくなるのだ。

故にその対策が最優先とされた。だが現実として、その対策が力を発したことはな
い。

それは、何故か？

何らかの理由で、「歌姫」は歌えなくなっている。

今、この瞬間。この状況においてもその歌声が聴こえないことがその証拠だ。

「あの戦場で聞いた彼女の歌は良いものだった。——残念だ」

ヴェルゴが何かを取り出した。何の変哲もない竹竿だ。だが「武装色の覇気」を纏

うそれは、下手な武器よりも高い殺傷能力を持つ。

ヴェルゴがその竹竿を取り出したのが合図であったのだろうか。ヴェルゴと「パシフィスタ」以外の距離をとっていた海兵たちが動き出した。

「突撃!!」

まるで雷のような号令の音が響いた。

わかる。わかってしまう。

——彼らはウタを警戒していた。その能力を危険視していたのだ。

その脅威がないと判断された以上、最早その足を縛る手段はない。

雪崩れ込むようにして歩を進める海兵たち。——関の声は、彼らが自分自身を奮い立たせるためのものだろうか。

立ち塞がるのは海軍本部中將、ヴェルゴ。——その存在は無視できるものではなく、そしてあまりにも時間が足りない。

進撃するのは人間兵器「パシフィスタ」。——その存在に対し、この場で対処できるのはルフィだけだ。

絶望的な状況。あまりにも背負う者が多過ぎる青年はしかし、この状況を打破するには何もかもが足りなかった。

きつと多くが膝を折るだろう。諦めるだろう。そしてそれを他者が責めることはな

い。仕方がなかったのだと、そう思う者が大半だ。

——だが、彼はモンキー・D・ルフィであった。

彼が諦めることなど——折れることなど、絶対にありえない。

「ギア、4」

それが破綻へと繋がる選択であることを、彼はきつと知っていた。

しかし、そうするしかなかったのだ。

それは、「金獅子」をも打ち破った「英雄」の姿。

両腕と両足を肥大化し、「武装色の覇気」で固めることで固定化したあまりにも歪な姿。

未完成にして不完全。故に何もかもが足りぬ力。

それでも、彼はそれを選んだ。

そうすることしか、できなかった。

「……詰みだな」

海兵のその眩きは。

誰にも……届かない。



とある人物は、モンキー・D・ルフィの「強さ」を『思い切りの良さ』と評した。彼は躊躇わない。やらなければならぬと考えたならば迷わず踏み込むし、そこに迷いをみせることはないのだと。

迷えば弱くなる——そう言ったのは、「海軍の英雄」と呼ばれた老兵だ。

その迷わぬが故の強さは確かにあるのだろう。事実、そうして彼は数多の人間を救ってきた。

だが、迷わぬということは時に弱点にもなる。

例えば、そう。

——そういう選択を取るのだと、相手に確信させる場合だ。

「ギア、4」

それは彼が祖父から「二つのことを同時にやれ」という助言を得て辿り着いた領域。今の彼ができる最高の戦闘術。

ゴムの体を生かし、血流の速度を常人ならば心臓や血管が破裂するほどの速度まで上げることで身体能力を極限まで向上させる戦闘技術——「ギア2」。

同じくゴムの体を生かし、体に息を吹き込むことで一時的に体の一部を巨大化させることで高い破壊力を実現する戦闘技術——「ギア3」。

ある意味では相反するその二つを同時に。そうして彼が考え、実現したのが今の姿だ。

——異形。

彼の「金獅子」をも打ち破ったその姿はしかし、敵対者からはあまりにも歪に映る。

「『ゴムゴムの』——」

この状態になるだけで息が上がっていた。体が悲鳴を上げている。

無茶な方法であることは彼自身が理解していた。だがこうでもしなければ、かつての「四皇」には届かなかつたのだ。

今はどうか。単体としての戦力であるならば「金獅子」には及ばない。だが状況が最悪だ。

——モンキー・D・ルフィがやらなければ。

何もかもが——失われる。

「——『JET巨人の回転弾』!!」

巨大な拳に回転の威力を乗せた一撃。その速度だけでも対応できる者はそうはいないであろう。文字通りの巨大な塊が敵対者を穿つために宙を駆ける。

「『鬼・竹』!!」

渾身の一撃に対し、ヴェルゴの選択は迎撃であった。竹竿を回転させ、『武装色の覇氣』を纏った竹竿に遠心力を乗せる。そのまま彼は全力で竹竿を振り抜いた。

大氣が揺れるほどの衝撃。海兵たちが思わず足を止めてしまうほどの轟音。

拮抗は一瞬。果たして圧倒したのは——ルフィだ。

「——ッ!」

吹き飛ばされるヴェルゴ。だがルフィは追撃はしない。ヴェルゴからは視線を切り、その視線を別の方向へ向ける。

「フランキー!!」

その名を呼んだ瞬間には、既にそこへ到達している。飛び上がるようにして空へと舞い上がり、フランキーを追い詰める『パシフィスタ』ヘルフィはその一撃を叩き込む。

「『ゴムゴムの』——」

誰かが、呟いた。

今にも降り出しそうな分厚い雲の下。異形の青年が天高く巨大な足を持ち上げている。

まるで、これは。

「——『J E T 巨人の斧』!!」

数多の物語に謳われるもの。

誰もが寝物語に聞いたことのあるお伽話。

まるで神の裁きのようなだ、と。

呟いたのは、誰だったのか。

「――！」

人間兵器、「パシフィスタ」。その耐久力は凄まじいものであり、並の海賊や兵器ではまともに傷さえつけられない。

だが、その一撃を放ったのは「英雄」だ。

落ちたと言われようとも。その名を貶められようとも。

新たな時代を創ると信じられたその力に、偽りはない。

「『麦わら』――」

フランキーの呼びかけ。それに応じる時間さえも惜しい。

——ルフィ。

視線の先。フランキー一家の奥にいる彼女の姿。その唇が動いた気がした。

大丈夫だ、ウタ。

絶対に――守るから。

宙を蹴る音さえ、まるで雷鳴の如く。それを聞の声として「異形の英雄」が進撃す

る。

彼の理念はいつも真つ直ぐだ。迷いもなく、惑うこともなく、一直線に突き進む。故にこそ、その結末は必然だった。

——ダメ!!

声が聞こえたわけではなかった。だが、視線の先の彼女はそう叫んでいた。その瞳から溢れたのは、一粒の雫。

泣くなよ、ウタ。

お前を泣かせないために、おれは——

「……………あ」

その脇腹に、鈍い痛みが走ったのと。

まるで何かに奪われたかのように力が抜けたのは、ほとんど同時だった。



その「未来」が見えた理由はわからない。見ようと思つたわけではないし、今の自分にそれが自発的にできないことを彼女は知っていた。

故にそれは、おそらく彼女の本能が見せたもの。

空を駆けたのは、たった一発の弾丸。

だがそれは、あまりにも致命的な一撃。

彼女は知らない。それを撃つたのがヴェルゴの副官という、おそらくこの場にいる海兵の中で最も覚悟を決めた男であることを。

彼は知らない。その弾丸を放つた男は、その一発を放てるようになるためにとつもない時間の研鑽を積んできたということ。

「――崩れたな」

まるで死刑宣告のような、あまりにも無慈悲な海兵の言葉。

動きを止めたルフィ。そこへ踏み込むヴェルゴは口元から血を流しながら、それでも渾身の一撃を叩き込む。

「『鬼・竹』!!」

鈍く、重い音。

決して軽くはない、ある種致命的にすら聞こえる音。

「ルフィ!!」

気付いた時にはもう、走り出していた。

何かができるわけではない。未だに体は震え、拳を握ることもできない。かつてできていたはずのことが何もできなくなっている。

「ちよつ、どこへ!?!」

「ダメだ前に出ちゃ!」

「止まるわいな!」

背後から聞こえてくる声。自分たちによくしてくれたフランキー一家の声。

だが、その声に応じるだけの余裕はない。

「——歌姫」ウタ

そしてそんな声に混じり、無機質な声が聞こえてきた。人間兵器「パシフィスタ」——その最大目標はルフィとウタだ。故にその対象が移動したならば「パシフィスタ」もまたその後を追う。

ヴェルゴの一撃を受け、吹き飛ばされたルフィは地面に倒れ込んでいる。そこへ「パシフィスタ」を引き連れて走り込むなど正気の沙汰ではない。

冷静な頭は止めろと叫んでいる。無意味だと。だが心が叫んでいる。

——ルフィの側に。

結局のところ、ウタにとってはそれが全てで。

その果てにこの歩みが止まることになるのなら、それでも良くて。

「ルフィ!!」

その叫びと、「パシフィスタ」の放った光線が放たれたのはほぼ同時であった。

倒れ伏しながらもどうにか上半身を上げていたルフィ。その彼の下へ飛び込むようにウタは地面を蹴った。

ウタ、と彼が自分の名を呼び。

応じるように、その体を抱き締めた。

閃光と衝撃。ウタが飛びついた勢いそのまま着弾地点より離れたが故、その一撃は不発に終わる。

だがそれは一時凌ぎだ。「パシフィスタ」だけではない。ヴェルゴも、海兵も、数多の彼らにとっての敵がこちらへと迫ってきている。

「ウタ！ お前なんで——」

「もう嫌なの！」

溢れるようなその言葉は。

だからこそ、その心の底にあるものを曝け出す。

「離れたくない！」

失われてしまうのが怖かった。その背中がいなくなってしまうのが怖かった。

私はずっと、臆病な弱虫で。

それでも、失いたくはなかったから。

置いて行かないでと、彼女は言った。

当たり前だろ、と彼は言った。

「——おれは、ここに居るから」

迫るは絶望の気配。状況は最悪。逆転の手段はない。

だがそれでも、彼と彼女は共にいた。

その手を離さず、そこに居る。

ずっと、一緒に。

それが「約束」であり。

二人の「誓い」であるが故に。

「
 まるで久遠のように長く、しかし一瞬の時間。『堕ちた英雄』たちに、人間兵器がその暴威を向ける。

海軍本部大将、『黄猿』のレーザーを再現したそれをまともに食らえば無事では済まない。

故に二人は抗おうとした。その手を繋ぎ、その場から離れようと周囲を見て。

「……………ッ」

そして理解する。ヴェルゴを中心とした海兵たちの包囲網が形成されていた。最前線に『パシフィスタ』を配置し、確実に二人を追い詰めるための布陣を既に海軍は完成させている。

文字通りの袋の鼠。逃げることさえできないはしない。

そして打開のために思考する時間さえも二人にはなかった。

——『パシフィスタ』の口が開き、その砲門が姿を覗かせたのと。

一人の男が姿を現したのは、同時であった。

黒いコートを纏い、ゴーグルの付いた黒いシルクハットを被った男だ。その全力の蹴りが横手から「パシフィスタ」へと叩き込まれる。

鈍い音を立て、「パシフィスタ」の巨大な体躯が宙を舞った。少しの間を置き、その体が地面へと墜落するようにして倒れ込む。

「……サボ……？」

眩いたのはルフィだ。彼としては珍しい呆然としたその口調は、それだけ目の前の出来事に驚愕している事実を示している。

文字通りの最前線。そこへ割り込んできた男は右手に持った鉄パイプを軽く振るい、横へと差し出した。まるで背後にいる二人を守るかのように。

「……………」

時が止まったかのような感覚。誰もが突然の乱入者たる男へ視線を向けている。

「……………キミは……」

問いを発したのはヴェルゴであった。ゆっくりと歩を進め、一定の距離で彼は足を止める。その声色にも佇まいにも油断はない。

無数の銃口が男へと向けられていた。ルフィとウタにもだ。

ありとあらゆる、文字通りの敵意を向けられている状況。しかし、中心にいる男の声

に揺らぎはない。

「おれはサボ」

よく通る声であり、そして庇われる位置の二人にとっては懐かしく感じる声。
「ルフィとウタの兄貴だ」

一筋の涙が、目から溢れた。

たった一言。だがその一言が、この場における救いとなる。

そして男は言葉を紡ぐ。

それは己の肩書きでもなく、思想でもなく、信念でもなく。
理由など先の一言だけで十分なのだと言外に滲ませながら。

口調は軽く。しかし、そこに込められた想いはあまりにも重い。

「――よろしく」

その言葉こそが。

ここに立つ、
“兄”たる男の宣戦布告。

たとえ、世界が敵になろうとも。

——かつて結んだ絆だけは、決して消えはしないのだ。

逃亡海兵Water Seven ☒

第二十二話 水の都の一番長い日⑨

戦場に現れた一人の男。

文字通り、世界を敵に回した二人の“墮ちた英雄”。彼と彼女を守るように立つその男は、己のことを“兄”と語った。

あまりにも想定外の事態にして光景。この状況を想像出来た者など、おそらく乱入者たる男以外にいなかっただろう。

人は想像の外にある光景を目にした時、動きを止める。その全霊を以て状況の把握に努めようとするが故にその肉体が停止するのだ。

だからこそ、言葉を発することができたその海兵はある種特異な存在であったのかも
しれない。

「そちらの二人に血の繋がりとあるという話は初耳だが」

「血は繋がっちゃいねエよ。昔した約束だ」

そして、男は——サボは言う。

「おれたちは盃を交わした。……誓ったんだよ」

まるでそれは己自身に言い聞かせるかのような言葉であった。噛み締めるような、確かめるような。

返答を期待していたわけではないだろう。だが海兵——ヴェルゴはそんなサボに対して頷きを返す。

「成程、得心した」

それは揶揄するわけでもなく、嘲るわけでもない言葉。そこには確かに彼の感情が籠っていた。

「血の繋がりが全てではないことは私も知っている」

それはきつと、その海兵の本心であったのだろう。僅かに眉を顰めるサボに対し、海兵は言葉を続けた。

「そしてならばこそ退かないのだろう。……嗚呼、そうだ。わかるとも」

その眩きは、海兵として多くを見てきたからこそそのものか。

それとも——別の、何かか。

「……サボ」

小さく、こちらの名を呼ぶ声が聞こえた。ウタの声だ。

(嗚呼、そうだな)

その声を懐かしいと、そんな風に思う。

何度も、何度もその歌声は耳にしてきた。あの山の中でもそうであるし、記憶を失った後にも「歌姫」としての歌声は何度も何度も耳にしてきた。

どうして、思い出せなかったのだろうか。

どうして、忘れてしまっていたのだろうか。

大切な——宝物であつたはずなのに。

「……なあ、二人とも」

帽子を被り直す。その先の言葉を紡ぐのには、勇気が必要だつた。

「どれだけ謝つても許されねエと思う。お前らのことを忘れて、おれは……」
詰まりそうになる言葉を、必死に絞り出す。

「だが、それでも」

「——何を言つてんだ」

遮るような言葉は、ルフィと。

「許さないなんて、あるわけない」

ウタの、もので。

「サボはおれたちの兄ちゃんだ」

その声は震えていた。

「助けに来てくれて——ありがとう」

その声には涙が混じっていた。

——相変わらずだな、と。

そんなことを、少し思う。

あの頃もそうだった。

泣き虫で、それでも絶対に譲らない頑固な二人。だからこそ——

何かを確かめるように、サボは一度大きく息を吐いた。

「なア、二人とも。——話してエことが、いっぱいあるんだ」

大切な家族を背負うように、男は歩を進めた。

「だから、話をしよう。何、大丈夫だ」

振り返った男の表情は。

優しい笑顔を、浮かべていた。

「——おれは、兄ちゃんだからな」



張り詰めていく空気。まるで爆発寸前の火山のような、剣呑でありながらどこか静謐させ感じさせるその中心にいるのは二人の男だ。

一人は「兄」を名乗り、世界を敵に回した家族を救いに来た男。

一人は「海兵」として、世界の秩序のためにここに立つ男。

和解はない。それができるのならば、こんなことにはなっていないのだから。

故に激突は——必然だ。

最初に衝撃。そして僅かに遅れて轟音が響く。

サボが振り抜いた鉄パイプ。地を這うかのように低い位置から振り上げられたそれを、ヴェルゴの竹竿が迎撃したのだ。

それは本来、武器と呼ぶにはあまりにも頼りない。しかし「武装色の覇氣」を纏う二人のそれは下手な刃よりも高い殺傷力を有している。

周囲の大気を揺らすかのような衝撃だ。その中心にいる二人にも相応の衝撃が来て

いるだろうに、しかし、二人に揺らぎはなく。

「『竜の』」

先に動いたのはサボであつた。激突と同時に両腕で握っていた鉄パイプのうち、左腕を離して指の形を作る。対し、ヴェルゴはそれに応じる形。

突き出すように伸びるサボの腕。それに対し、ヴェルゴが取つたのは前に進むという選択であつた。

倒れ込むように——否、実際に身を前へと倒したのだ。それにより狙いを外され、サボの手が宙を裂く。そこへ身を一回転させたヴェルゴがその勢いのままに踵落としを叩き込んだ。

「——チッ」

小さな舌打ち。だが行動は迅速だ。サボは突き出した右腕を上挙げ、ヴェルゴの踵落としを受け止める。

凄まじい轟音が響き、サボの足が僅かに地面の中に食い込んだ。

「む」

だが、サボもそれで終わりはいしない。そのまま手首を返し、ヴェルゴの足を掴むと力任せに振り回すようにして投げ飛ばす。

対し、ヴェルゴも堪えることはせずにむしろそれを好機と距離を取つた。空中を蹴る

技術——“月歩”で体勢を整え、地面に着地する。

「この場に現れるだけはあるということか」

確認するようなヴェルゴの言葉。それには応じず、サボは地面を蹴った。

そして——激突。鈍いその音は鉄パイプと竹竿がぶつかる音とは思えないほどに激しい音。

そんな風に双方の激突が大気を揺らし、衝撃を撒き散らすその最中。サボに蹴り飛ばされた“パシフィスタ”がゆっくりと身を起こした。

感情などない人間兵器——その姿を見てサボが眉を顰める。そこに宿る感情は如何なるものか。

「——“革命軍”参謀総長、サボ」

だが、機械にそんな彼の機微など理解できようはずもない。視界に入った相手の名を“パシフィスタ”が告げる。

無機質な声であるが、よく通る声であった。そしてその言葉を聞き、ざわめくのは海兵たちだ。

世界政府を直接打倒するという目的を掲げ、活動する組織——“革命軍”。

既にくつもの国が“革命”の名の下に倒れ、多くの血が流れている。故に世界政府はその首魁たる男を“世界最悪の犯罪者”として賞金首とした。

その「革命軍」における参謀総長とは即ち組織におけるN.O. 2。

つまりは、明確な「敵」だ。

「成程、『革命軍』」

そして一人、冷静にそう告げるのはヴェルゴだ。

「『兄』というよりはよほどわかりやすい話だが」

「どっちも事実だ」

「そうなのだろうな」

鋭い風切り音を響かせながら、ヴェルゴが己の得物を振るう。

「だが一人でどうするつもりかね？ この場に立つだけの力はあるようだが、それでも

所詮は一人きりだ」

「自分で言ったことをもう忘れたのか？」

小さな笑みと共に、サボは言う。

「——おれたちは『革命軍』だ」

直後。

周囲を覆うような白煙と、いくつもの銃声が鳴り響いた。



その光景に、ルフィは見覚えがあった。

このウォーターセブンに来る前の島。そこで“革命軍”である彼らは同じ手段を使ったのだ。

大量の煙幕と無数の銃声。“革命軍”はその方法によつて海軍を翻弄し、二人をあつ島から逃がすことに成功している。

「退くぞ二人とも」

ルフィとウタの下へ、サボが下がってきた。周囲を警戒しつつ、言葉を続ける。

「時間が掛かれば掛かるほど相手にとつて有利に働く。とにかく移動するべきだ」

冷静な言葉だった。その言葉に、かつての彼を思い出して少し安心する。

——嗚呼、そうだ。

サボは、こういう兄だった。

「状況はかなりギリギリだ。このままこの島に留まってもギリ貧にしかならねエ。すぐに島を出るぞ」

「島を出るって」

「まずはお前らの身の安全が第一だ」

言い切るサボ。そんなサボに対し、でも、とウタが声を上げる。

「フランキーたちを置いていくわけには……!」

「あいつらの狙いはお前らだ。……お前らを匿ったことで咎を受けることはあるかもしれないエが……」

サボが表情を険しくしながら言い淀む。駄目だ、とルフィが声を上げた。

「あいつらを置いていけねエ!」

「……立場を考えろ! 今のお前らは助けを求める側なんだぞ!」

不本意であることを滲ませながら、それでもサボは言い切った。彼にとって優先すべきは二人の安否だ。そのために何かを切り捨てる必要があるならばそうするだけの覚悟は持っている。

「とにかく!」

「——させると思うかね?」

だが、サボのその思惑は成就しない。

白煙を切り裂くように、一人の男がサボの下へと突き進んできた。そのまま振り下ろされた竹竿をサボは鉄パイプで受け止める。

「このやり口について報告は受けている。残念だが、二度同じことは通用しないと思っ

てもらいたい」

鈍い音を響かせ、二人が数度己の獲物で打ち合う。そして僅かに距離を取った後、ヴェルゴがポケットから小さな電伝虫を取り出した。

「予定とは少々ズレたが……まあ、『革命軍』ともなれば十分だろう」

眩きと共に、ヴェルゴはボタンを一つ押し込んだ。それが意味することを理解したのはルフィとウタだ。

あれは緊急の連絡時に使用されるボタン。それも文字通りに火急の事態に使われるもの。

「さて、一つ問おう。今この島にどれだけの海兵がいると思う？」

時間は常に、ルフィたちの敵であり。

「想定される敵は『四皇』の最高幹部が一人、『火拳のエース』。故に我々としても最大限の警戒を以て戦力を用意した」

海軍の——ヴェルゴたちの味方だ。

「数というものは雑味のない脅威だ。……キミたちは強い。だが、どこまで凌げる？」
遠くから、声が聞こえる。

それは街の中から発せられるもの。敵意であり、決意であり。

最早数さえもわからない、ルフィたちにとっての『敵』が上げる闘いの声。

——反逆者たちへ、世界政府という「秩序」の力が襲いかかる。



頬に、冷たいものが触れた。

全身を叩くような風は、空を飛んでいるというだけではない。荒れ狂う天候がそうさせているのだ。

「……雨」

小さく、シャオはそう呟いた。それは確認の言葉であり、深い意味はない。

だが、こういうことも大事だと彼女は教えてもらったのだ。考えるだけではなく実際に声を出して確認することは意外と大事なのだと、あの優しい海兵さんは言っていた。

だからこそ、シャオは己の決意を口にする。

「お姉ちゃんのところに行く」

気を緩めれば震えが止まらなくなる。そんな恐怖を抑え込んで。

それでも、少女は己の友達と共に往く。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんを助ける」

繰り返さなければ、挫けてしまいそうだった。

——だって、そうじゃないか。

自分の弱さを知っていて。できることなんて助けを求めることしかなくて。

それでもやるのだと、そう思わなければ。言葉にしなれば。

蹲って、足を止めてしまう。

「クオッ！」

友達——ビリーが大きく鳴いた。強い風の音が響く中でも、その声は力強い。

きつとこちらを安心させるためのだろう。事実、シャオはその存在に安心を覚えて

いる。

一人ぼっちではないということ。

ただそれだけで、前に進む勇気が湧いてくる。

「今度は、私たちが助ける」

何度も、何度も。

少女は、己自身に言い聞かせるようにして繰り返す。

あの日、自分たちを——俯き、耐えることしかできなかったあの島を解放してくれた

あの人たちを。

今度は、自分が助けるのだ。

少しでも。ほんの、少しでも。

それが、少女の憧れたあの人たちにできる恩返しであると思ったから。

「クオツ！」

ビリーが鳴いた。遠く、目的地が見える。

そこは昨日にオリンとイスカの二人と共に訪れた場所。『ガレーラ・カンパニー』の一番ドツクだ。

きつとオリンはあそこにいる。あの人ならきつと、あの二人を助けてくれる。

故に少女たちは空を駆けているのだ。そしておそらく、そう時間もかからない内にたどり着いたであろう。

——何も起こらなければ、の話だが。

「……………えっ」

少女の瞳に飛び込んできたのは、いくつもの閃光。そして轟音であった。

何が起こったのか、少女は最初理解できなかった。数秒の間を置き、とてつもないことが起こったのだとようやく理解できたくらいだ。

突然の爆発。それも一つや二つではない。いくつも連続して起こっている。

「……何……で……」

わからない。何もわからない。それを理解するには少女はあまりにも幼く、同時に知らぬことが多過ぎた。

どうしよう。どうしたらいいのだろう。

理由のわからない焦燥感が彼女を襲う。ピリーも同じだったのだろう。一人と一羽はその場で止まってしまった。

そして、それが駄目だった。

ぐらりと、ピリーの体が傾く。

「ピリー？」

呼びかける。だが、彼は応じてくれない。

「ピリー！」

何か尋常でないことが起こったのだと、少女は悟った。ぬるりとした感触を掌に感じる。

——血。少女の掌に、友達の血がベツタリと付着していた。

「ピリー!!」

少女の呼び声に友は応えない。ただ、静かに落ちていく。

雨が、降り始めた。

それはまるで、彼女たちを追いかけのように降り注ぐ。

そして、そんな彼女たちを見つめる一対の瞳。

「——悪いねエ」

その手に銃を構えた諜報員、CP9の新入りが呟く。

「向こうの邪魔をさせるわけにはいかねエのさ」

遠くで、海列車の到着を知らせる汽笛が鳴った。

それはこの街を襲う脅威に対抗する力の到着を知らせるもの。

——そうであると、島の住民たちは信じている。

逃亡海兵Water Seven ☒

第二十三話 水の都の一番長い日⑩

時はフランキー一家の下へヴェルゴ率いる海軍部隊が到着する少し前まで遡る。

場所は「ガレーラ・カンパニー」本社。腕利きの職人たちが集い、まるで楽器の演奏のように造船の音を響かせるその場所は非常に物々しい雰囲気にも包まれていた。

その最大の理由はウォーターセブンの市長であると共にこの「ガレーラ・カンパニー」の社長でもあるアイスバーグであるだろう。彼の暗殺未遂という大事件を受け、職人たちは自主的にその敬語を買って出たのだ。

本来ならば海軍が担うべき役割であったが職人たちは自分たちがやると主張し、それを海軍側の責任者であるヴェルゴ中將が受け入れた格好だ。

しかし海軍としても何もしないわけにもいかない。故に海軍は本社のある一番ドック以外の警備とこのウォーターセブンのどこかにいる「火拳のエース」の捜索を主な役目として請け負っている。

相手は「四皇」の一角、それも最上位とされる「白ひげ」の二番隊隊長という大幹部だ。故に海軍も慎重になる必要がある。だが今、ウォーターセブンには「アクア・ラグナ」が迫ってきていた。故にどちらかといえば住民たちの警護を中心とした采配とならざるを得ない。

非常にピリついた、どこか重い空気。その中でもこの場所は特別だろう。

——今回の事件の中心にいるアイスバーグがその身を休ませる寝室、その扉の前。

ウォーターセブンが誇る「ガレーラ・カンパニー」第一ドック五人の職長。懸賞金をかけられた海賊であってもものともしない力を持つ五人が扉の前に用意した椅子に座り、絶対の守りを敷いていた。

まるで王様にでもなったようだ——アイスバーグがそんな風に苦笑するほどに厳重かつ強固な警備。その物々しい雰囲気の中、五人の職長たちが言葉を交わし合う。

「……他のドックはどうだ？」

「ああ。避難も特に混乱なく終わったそうさ。海軍も入ってくれてるからな。問題はない」

パウリーの呟くような問いに応じたのはルルだ。そうか、とパウリーはその言葉を聞いて頷きを返す。

その辺りの差配をしたのはパウリー自身だ。アイスバーグが意識を失っている間にその代理として様々な手配をしたのが彼であり、故に今の問いは確認の意味も込められたのだ。

そして事実として現状に問題はない。だが、故にこそ焦りのようなものが浮かんでくる。

「……………」

ふう、と葉巻の煙を吐き出すパウリー。どうにも黙りこくつてしまうと嫌な想像ばかりしてしまう。

アイスバーグという、彼にとつては師匠であり恩人である人物。その身に万一のことが起こってしまったら、と何度も考えてしまうのだ。

『何か考え事か、カク？』

故にルツチがずつと黙り込んでいたカクに対して声をかけたのはパウリーにとつてありがたかつた。会話をしている間は気も紛れるからだ。

「ん、ああ……そうじゃな。ずつと朝から考えておつたんじゃが」

どこか煮え切らない口調のカク。先を促すように他の四人の視線が集まると、彼は言葉を選ぶようにしながら口を開いた。

「どうにもわからんことがあつてのう」

「わからねエってのは？」

首を傾げたのはタイルストンだ。腕組みをしつつ問う彼の言葉は、彼とカクを除く他三名の内心の代弁であるだろうとパウリーは思う。

それを察したわけではないだろう。だが説明足らずだと思ったのか、カクが言い直すようにして口を開いた。

「そもそもどうしてアイスバーグさんが狙われるのか。ワシにはわからん」

「……いや、そりやお前だけじゃねエよ」

そしてカクの言葉に対し、パウリーが煙を吐き出しながら言う。その疑問は彼だけのものではない。パウリーたち職長は勿論のこと、他の職人たちや何なら街の住民も含めて全員が疑問に思っているはずだ。

何故、アイスバーグが——このウォーターセブンの市長にして最高の職人たる彼が何故こんな目に、と。

その疑問は、ずっと誰もが持っている。

「あの人が狙われる意味がわからねエ。それも『白ひげ』の幹部だと？」

強盗の類であるならわかる。相手は海賊だ。そういうこともあるのかもしれない。だが奪われたものは特になかった。だからこそ動機がわからないのだ。

命を狙うには中途半端。強盗だとするならあまりにも杜撰。そして何よりタイ

ミングがおかしい。『アクア・ラグナ』という災害が迫る中でこんな蛮行に及ぶ意味がわからない。

「……本当に海賊がやったのかね」

ポツリと、そんなことを呟いたのはルルだ。パウリーがどうということだ、という意味を込めた視線を向ける。他の者たちも同様だ。対し、ルルも領いて言葉を続けた。

「海賊がやることだから、って一言で片付けるのは容易いが……どうにも腑に落ちねエ」
『だが他に有力な容疑者もないだろう』

ルツチの言葉。それを聞く限り、彼もまた消去法で海賊の仕業であるのだと判断しているようにパウリーは見えた。

実際、『火拳』がやったというのはあくまで消去法的な判断であり、どうにも腹落ちしない気持ちであるのも事実だ。気が逸っていた朝方ならともかく、アイスバーグが目覚まし、更にある程度時間が経った今は少し状況を冷静に見ることができるようになっている。

海賊がやることなのだから考えるだけ無駄——そんな意見もあったし、そうであるのかも切れないとも思う。だがどうにも噛み合わない。勘のようなものであるが、どうしても切り捨てられなかった。

(だがこういうのは経験上、放つとくと碌なことにならねエ)

パウリーは内心で呟く。彼の言う経験とは数え切れないほどの造船経験のことだ。凶面も材質も工程も問題ない。だが違和感がある。そういう時は決まってどこかに綻びがあるのだ。そしてそれを放っておくと、どこかで破綻する。

(……わからぬエことが多過ぎる)

ふう、と息を溢すパウリー。堂々巡りだ。答えに至るにはピースが足りない。そしてそれは他の者も同じだろう。

僅かな沈黙が流れる。そんな中、呟いたのはルルだ。

「おれは案外……世界政府の仕業じゃねエかと思ってる」

「……いきなり何じゃ」

僅かに困惑を滲ませながらカクが問う。いや、とルルは首を振った。

「根拠がないわけじゃない。前々からアイスバーグさんのところに政府から役人が来てただろう？」

『コーギーか』

ルッチが頷く。コーギー——頻繁にウォーターセブンを訪れる世界政府の役人だ。アイスバーグは迷惑そうに毎回対応しているのだが、それでも諦めずに訪問を続けている人物である。

アイスバーグとコーギーの話について中身を知る者は誰もいない。だがあれだけ足

繋く通ってくるのだ。何かがあると想像するのは容易い。

「だがあの腹で暗殺はねエだろ」

コーギーの姿を思い出すパウリー。お世辞にもスマートとは言えない体型のあの男が暗殺などということができるように思えなかった。

そしてそれはルルの方も同じであつたらしい。領きつつ、しかし、と言葉を紡ぐ。

「世界政府だぞ？」

「……どういう意味だ」

「——『CP9』だ」

聞き慣れない名前に眉を顰めた者が自分を含めて三人。少なくとも、パウリーにはそう見えた。

それはルッチとカクの二人だ。対し、タイルストンは——

「おお、ルル。お前もそう思うか？」

「ああ。やっぱりそれしかねエだろう」

何故か自分たちとは違う反応を示していた。腕を組んで何度も領いている。

「……CP9などただの噂話じゃろう？」

「だが奴らは実体のない暗殺集団って話だ。案外馬鹿にできねエかもしれん」

「ああ、おれたちはそう聞いたぞ」

『どこで聞いたんだ?』

タイルストンに対するルッチの問いかけ。そこに若干呆れのニュアンスを感じるのは気のせいではないだろう。多分。

そしてその問いに対し、当然のように応じるのはタイルストンである。

「ああ、この間ブルーノの酒場でココロのばーさんに聞いた」

「噂じゃねエか!」

「思いつ切り与太話じゃな」

『くだらないツポー』

三者三様に呆れた返事をするパウリーたち。うーむ、と噂話を信じる二人が腕を組んだところで。

「少し、よろしいですか?」

アイスバーグが身を休める一室。その扉が開き、秘書のカリファが姿を見せる。ああ、と声を上げたのはパウリーだ。

「すまねエ。うるさかったか?」

「少しはそれもあるけど……それよりも、アイスバーグさんから言伝が」

「なんだ?」

全員が疑問を浮かべる。ええ、とカリファが頷いた。

「——パウリー。あなたに大事な話があると」



張り詰めた空気は嫌いではないと、そんなことをモルガンズは思う。

人は感情の生き物だ。どれほど冷静になろうと努め、振る舞おうとその本質は変わらない。そもそもその『冷静になる』という意味自体、感情を起点とするのだから当たり前だ。

人は合理的であり非合理的だ。だからこそ世界とは面白く、彼の興味を惹きつける。そして彼はその経験から知っていた。

——群集は、ある種の予知能力を持っている。

彼らは“匂い”に敏感だ。それは英雄の匂いかもしれない。大悪党の匂いかもしれない。事件の匂いかもしれない。幸福の、不幸の、商機の、転落の——ありとあらゆる“匂い”を彼らは感じ取る。

故にこそ、島全体を覆うような張り詰めた空気は一つのことをモルガンズに確信させ

る。

そう、即ち。

——今日ここで、『何か』が起こる。

そんな、確信を。

だからこそ彼は、『そこ』にいた。

ウォーターセブンが誇る造船会社“ガレーラ・カンパニー”本社、その一角。本来なら資材を積み上げるための空間にいくつも椅子が乱雑に並べられている。

そこに座るのはほとんどが職人たちであり、それぞれが得物を持って待機していた。時々見回りから帰って来る者があり、入れ替わることも繰り返している。

「——つまり、あの国で起こった紛争は第三者からすればくだらねエとしか言いようがねエことが切欠だったのさ」

そんな中、唯一と言つてもいい部外者が一人いた。鳥人間とでも評すべき容姿をしたその男はある意味世界でも有数の知名度を持つ人物だ。その知名度に比例してか、とても一言では表現できない評判を受ける男はその広間の一角で何やら周囲の職人たちと話し込んでいる。随分と上機嫌だ。

名をモルガンズ。“世界経済新聞社”の社長であり、“新聞王”とも呼ばれる一種の

怪物だ。

「本当なのか？ たかが贈り物の花の種類を間違えただけなんだろう？」

そのモルガنزの近くに座っていた職人の一人が首を傾げながらそんなことを問う。つい先程まで、彼らは部外者であるモルガنزに出ていくようにと告げていた。状況が状況だ。当たり前の判断である。

だが、いつの間にか職人たちは彼の言葉に聞き入って当然のように言葉を交わし合っている。出て行けと言っていた口で何の疑問も抱かずに会話をしているのだ。

「そのたかが、つてのが重要なところだな。いいか、贈り物つてのは文化だ。そして文化って概念ほど難しく、同時にややこしいものも存在しねエ。……恋人に花を送るのにも、鉄板つてもんがあるだろう？」

「あー……確かに」

「え、お前送る相手いんのか？」

「マジか。どこの誰だよ？」

「いつの間に……」

一定の緊張感は保ちつつ、しかしどこか明るさも忘れずに。そんな独特の空気がその一角では形成されている。

「ちなみにうちの新聞には季節の花とその花言葉も載せてるぞ。是非参考にしてくれ

「！」

「商売上手だな」

いくつもの笑い声が漏れる。その光景を冷静に見れる者がいれば、その状況の異様さに気付いただろうか。

アイスバーグの暗殺未遂とも言える大事件。そして想定されている犯人はあの大海賊「白ひげ」の大幹部。とてもじゃないが笑顔を浮かべる余裕などない状況のはずなのだ。しかし、モルガンズの周囲では確かに笑いが溢れていた。

「文化つてのは面白エもんでなア。同じ花でも色が違えば受け取る意味を変える。例えば今回の話では赤と白の花を間違えただけで大問題になっちまった」

「送る側は『親愛』と『潔白』の意味を込めて白い花を贈ったんだよな？」

「その通り！　だが受け取った側は白い花を『死』と受け取った！　宣戦布告だな！」

クワハハハ、と笑うモルガンズ。そう、それが暇潰しにでもモルガンズが話したとある国で起こった紛争、その始まりの物語の要約だ。相手に対し、互いに理解が足りなかった——それ故に起こった悲劇である。

「いやしかし、本当にそんなことで殺し合いにまで発展するのか？　『勘違いでしたすみません』で済みそうなもんだが」

「それで済まねエから面子なのさ。おれたちみてエな庶民ならともかく、貴族だの国王

だのつてのは面子が大事だ。頭を下げるのも軽々にはできねエのさ」

「面子と言われるとまア……：そうなのか」

「確かに『間違えましたすみません』つて、言い換えれば『お前らの文化について知らなかった』つて意味でもあるのか」

「あー……それは受け取り方によつちや普通に喧嘩売つてるように見えるな」

「クワハハハ！ 飲み込みがいいじゃねエか！ 流石は『ガレーラ・カンパニー』の職人たちだな！ 頭が回る！」

手を叩いて賞賛するモルガンズ。それを聞き、職人たちも満更ではなさそうな表情だ。

——モルガンズという男は、言葉を操る一種の“怪物”である。

その本領、最大の力が発揮されるのは新聞という媒体だ。それによつて彼は人を踊らせ、世界に“ビッグ・ニュース”を届けている。

だが、しかし。彼の力とはそれだけではない。

その口から紡がれる言葉にも、“怪物”たる力は確かに宿っているのだ。

別に何か贈り物をしたわけではない。金を払ったわけでもないし、特別な何かをしたわけでもない。しかし気付けば部外者たる彼は集団の中に溶け込んでいる。

ある種最も恐ろしい技術であり能力であるのだろう。相手にそう気付けさせないとい

うことも含めて。

故にこそ、彼は新聞というメディアの「王」と呼ばれるのだから。

「……何をしておられるのですか？」

不意にそんな声がモルガンズの後ろから聞こえてきた。振り返ると、そこにいたのは眼鏡をかけた一人の女性だ。

名をカリファ。アイスバーグの秘書である人物である。

「危険であるため退去をお願いしているはずですが」

「そりやお願いだらう？ 聞くかどうかはこっちの判断だ」

カリファの言葉に対し、肩を竦めるモルガンズ。そんな彼に対し、カリファは眼鏡の位置を指で直しつつ冷静に言葉を紡いだ。

「確かに我々は警察ではありませんので、強制はできません。しかし何かがあった時、あなたの身の安全は保証しかねることはご了承くださいませ」

「それは弁えてるさ。おれのことばは、その辺の看板かなんかだと思ってくれ」

「……看板の割にはよく喋るけどな」

一人の職人の呟きは、二人合わせてスルーした。

「……いいでしょう。ただ、邪魔はしないでください」

「勿論だ。……ああ、アイスバーグ氏はどうだ？」

「意識は戻りましたが、絶対安静です。命に別状はありませんが」
「そりや何よりだ。あのご婦人も報われる」

その言葉に、周囲の職人たちが少し気まずそうな表情で互いを見合わせる。彼らのお膝元たる場所で起こった暗殺未遂。そこで文字通り命懸けでアイスバーグを守った海兵に対し、感謝と申し訳なさを彼らも感じているのだ。

そしてそれはカリファも同じなのだろう。僅かに眉を寄せ、しかし、すぐにいつもの表情に戻る。

「いずれにせよ、警告はしました」

「ああ、ありがたく受け取っておく」

あくまで軽い口調で返すモルガンズ。そんな彼をカリファは数秒見つめていたが、切り替えるようにして一礼すると背を向けて去っていった。

そんなカリファの背を見送り、モルガンズは改めて周囲へ視線を送る。

（普通に考えるなら、ここまで嚴重に待ち構えてるところに襲撃かけるなんざ馬鹿のやることだ。だが……）

まず間違いなく、『何か』は起こる。そんな確信がモルガンズにはあった。

（こういう状況が一番面白エ。やっぱ旦那方は持つてんなア）

今や世界の話題、その中心にいる二人のことを思い浮かべる。このウォーターセブン

で起こっている騒動にあの二人は直接的に関わっていない。だが、どういふ巡り合わせか偶然立ち寄ったこの場所での大騒動だ。

本人たちにしてみれば迷惑極まりないだろう。だが、見ている側としてこれほど興味を惹かれるものもない。

どうなることか——笑みを浮かべるモルガンズだが、不意に彼の持つ電伝虫が鳴る。「おっと、すまねエ。親愛なる社員からの連絡だ」

周囲にその言葉を溢し、モルガンズは職人たちから離れた位置に移動する。そして—

「動いたか？」

『ああ。……始まったぞ』

ヒュウ、と口笛を吹くモルガンズ。

そして、彼が何かを口にしようとした瞬間。

——巨大な爆発音が、その声を掻き消した。



ウオーターセブンを襲う“アクア・ラグナ”は紛うことなき大災害だ。しかし人間というものはたくましい。この島の住民たちはそれをやり過ごす術を覚えている。

「……人の気配がねえな」

周囲を見回しながらそんなことを口にするのはデユースだ。彼らが今歩いているのは裏町と呼ばれるエリアであるのだが、周囲に人の気配がない。

「避難してんだろ。デケエ高潮が来るって話だ」

対し、応じるのはエースだ。帽子を目深に被る彼はデユースの少し先をゆつくりと歩いている。

「街に人氣がなくなるくらい規模ってことか。相変わらず、“偉大なる航路”の天候つてのは底が見えねえ」

周囲を警戒しつつ、しかし人の気配がないが故に言葉もどこか軽い。

二人が歩いているのは水路の横を通る道路だ。昼間は水路にも道路にもそれなりに人がいたというのに、今は見る影もなかった。

そんな周囲から視線を切り、足を止めたデユースが前を歩く男に問う。

「まア、おれたちにとつちゃこの方が都合もいい。……で、どうするんだ？」

「どうするって？」

エースは振り返らない。あのなア、とデューズは言葉を続けた。

「海軍が大勢入ってきたのは見ただろ。あいつらの狙いはおれたちだ。退くなら早い方がいい」

「高潮で荒れた海の中を逃げるってのか？」

「海軍に囲まれた海とどっちが楽かって話だな」

一つ、息を吐く。どっちにせよリスクはあるが、デューズとしてはできる限り早急に島を脱出する方が良くと考えていた。時間は海軍の味方だ。こちらの味方ではない。

「……どうするかな」

エースの言葉には迷いがあつた。あの革命軍のNo. 2との激突からずっとこの調子だ。

「悩むなどは言わねエけどよ——」

言葉を探しつつ、口を開くデューズ。しかしその言葉は途中で止まってしまふ。

カツン、という乾いた音。

視線の先。道の向こうから歩いてくる人影があつた。

「……あれは……」

その男は杖をつき、ゆっくりと道を歩いていた。だが杖の使い方が自身の体を支えるというものとは違う使い方であり、その動きからデューズは察する。

おそらく、盲目か——或いは、視力が極端に弱いか。そんな人物が水路の多いこのウオーターセブンを歩くのは随分と危険だ。

反射的に声を上げようとするデユース。だが、その前に。

「——ああ、これはどうも。いい夜ですねエ」

全身から汗が噴き出す。

本能。或いは勘。社会の裏側とも呼べる領域を生き抜いてきたからこそ備わった第六感が、デユースの中で警鐘を鳴らしていた。

「良くはねエだろう。デケエ高潮が来るって話だ」

「『アクア・ラグナ』。いやはや、人間ってのはちっぽけなもんだ。古代、大自然に神を見たつても理解できる」

エースの言葉に対し、あくまで世間話であるかのような口調で男は語る。

「神、ね」

「おっと、失言でしたかねエ。世界の神といやア、例の連中だ」

「……別に気にすんなよ。それを聞いたらからなんだってわけでもねエ」

言葉は穏やか。だが、空気は重く。

男が、足を止める。

「なア、おっさん。——何者だ？」

エースのその言葉でデューズは理解した。最大限の警戒。そうするだけの圧を、この男が持っていることを。

「名乗るほどの者じゃありません」

男が、杖の柄を強く握る。

見えたのは、煌めくような白刃。

衝撃、音、最後に風。

それが、開戦の合図であった。

逃亡海兵Water Seven ☒ (NEW)

第二十四話 水の都の一番長い日⑩

「——わかりました。任せてください」

覚悟の込められた言葉であつた。その言葉を聞き、ああ、と安心した様子で頼み事をした男は頷く。

「くれぐれも無理をするなよ」

「はい。わかっています」

念を押すのは恩人であり師匠であり尊敬する上司——アイスバーグだ。その言葉に、改めてパウリーは頷きを返す。

「すまん。……こんなもんを背負わせて」

「いえ、おれは頼ってもらえて嬉しいですよ」

アイスバーグには『何か』がある。それはつい先程までの職長たちとの会話でもわかつていたことだ。そしてやはり、『何か』はあつたらしい。

だが――

「……やっぱり、内容については？」

「知らねエ方がいい。……知るべきじゃねエ」

ある意味、アイスバーグのその言葉は裏切りと呼んでもいいのかもしれない。信頼する相手に頼み事をしながら、それでも全てを明かさなないというのだから。

「お前の身を危険に晒しておいて虫が良い話だと思ってる。だが……」

「――水臭いですよ、アイスバーグさん」

迷いと共に、それでも覚悟を込めて告げるアイスバーグの言葉を遮り、パウリーは言う。

「おれアあなたに憧れて船大工になったんだ。どうしようもねエおれを一人前の船大工にして、それだけじゃなくこうして信頼までしてくれてる。……なら、それでいい」

何を迷うのかと、パウリーはむしろそんな風に思っていた。アイスバーグに憧れ、彼の下で様々なことを学んだ。その恩は一生を掛けても返し切れないほどだというのに。

「大船に乗ったつもりで、どーんと任せてください」

自身の胸に拳を当て、パウリーはそう言い切った。そんな姿を見て、アイスバーグは小さく笑みを浮かべる。

「ああ、そうさせて貰おう。……ありがとう」

その言葉に、もう一度力強くパウリーは頷く。そのまま立ち上がると、パウリーは部屋を出て行くこうとする。やるべきことが定まった以上、長居をするべきではない。

「では、これで」

「ああ。……気を付けろ」

「それはアイスバーグさんも——いや、あいつらがいるから大丈夫ですね」

あいつら、とパウリーが呼ぶのは彼の同僚でもある職長たちだ。彼らの実力について、パウリーは誰よりも知っている。故に自分一人が抜けたところで何の心配もない。

「ああ、そうだな。いい部下を持ったもんだ」

「そりゃアイスバーグさんの人徳ですよ」

いつも通りの、軽い口調での会話。それを最後に、パウリーは部屋を出る。

『話は終わったのか?』

「ああ。……悪イが、少し外す。急用ができた。ここを任せてもいいか?」

扉から離れた位置に集まっていた四人のうち、ルツチの問いに対してそう応じる。頷いたのはカクだ。

「まあ、四人も居れば十分じゃろう」

「悪イな」

そして、パウリーは歩を進める。そんな中、思い浮かべるのはアイスバーグの言葉だ。

「なア、パウリー。……お前にだけは言っておこうと思う」

深刻な表情で、アイスバーグは切り出した。

「おれが狙われた理由について……心当たりがある」

流石に驚いた。当初、彼は心当たりはないと言っていたのだから。

どんなものか、とは当然聞いた。だがその問いに対し、アイスバーグは首を横に振る。

「……すまん」

苦渋の表情であつた。そこに込められていた想いは、どれほどのものか。

命を狙われ、それでもなお明かせぬ「何か」。

成功者であり、ある種この都市の王であるアイスバーグが抱える「秘密」。

気にならないかと言えば嘘になる。だがそれ以上に、今は頼られたという事実が嬉しい。

故にこそ、彼は己の役目を果たしに行くのだ。

「パウリーさん？ どこへ？」

「ん？ ああ、ちよつとな」

目的の部屋の前で職人たちに声をかけられた。パウリーは言葉を続ける。

「頼まれごとだ」

「ああ、成程。どうぞ」

「すまねエな」

職人たちはこの「ガレーラ・カンパニー」の至る所で待機している。当然、アイスバーグの私室の前にも何名もの職人たちがいた。

そんな彼らの了承を得、部屋に入る。扉を閉め、パウリーは葉巻の煙を一度静かに吐き出した。

「……よし」

眩き、歩き出す。

目的は、部屋の中央に隠されたアイスバーグの「秘密」。

——その、ダミーだ。



ウォーター・セブンの象徴とも言える存在——「海列車」。荒れ狂う「偉大なる航路」をも突き進むその列車も、「アクア・ラグナ」は越えられない。故にその時期だけはその動きを止めることになる。

だが、人の営みというのは止めることができない。故に海列車もギリギリまでは運行しており、そして今し方到着した海列車が今夜最後の便であった。

統率の取れた動きにより、続々と列車を降りては駅の外へと歩みを進める者たち。

——不夜島、〃エニエス・ロビー〃が抱える戦力。

世界政府が誇る三大機関のうちの一つが抱える戦力が、ここへ集結しつつあった。

「チャパパー。とんでもねエ数だー」

「壮観だねエー！ 良〜イ景色だ！ よよいっ！」

そんな光景を、駅の片隅から見守るいくつかの影。

存在しない諜報機関——CP9。

掲げる〃正義〃の下に殺人さえも行う、世界政府の刃。

「……どうにもスツキリしねエな」

フクロウとクマドリが目に見える光景に対して言葉を溢す側で、ポツリと呟くのはジャブラだ。その瞳には疑心が宿っている。

任務に文句があるわけではない。〃火拳〃という大物、〃叛逆者〃二人の存在、五年をかけた同僚たちによる潜入任務の決着——どれも無視できることではないのだから。故にそこに不満はないし、むしろ強力な力を持つ者と戦える機会については喜びすら感じていくぐらいだ。

だからこそ、問題はそこではない。

(……あの海兵)

海軍本部中將、ヴェルゴ。

調べても裏はなく、品行方正な海兵の鑑としか言いようがない評判しか聞こえてこなかった。CPとは縄張り争いという意味で敵対し易い海兵だというのに、その立ち振る舞いも紳士的。

普通ならそれで終わってもいい。だが、その口から紡がれた言葉にどうも違和感がある。

(海兵つてのは外道を相手にすんのが仕事だ。朱に染まればつてわけじゃねエが、どうしても思考がそつちに引つ張られる)

これは本人の性格や善悪の問題というわけではない。ある種の職業病だ。『正義』を掲げ、秩序を重んじ、弱き者のために戦う。それは即ち敵対者はそのいずれか、或いは全てを否定するということになる。

——『敵を知り、己を知れば百戦危うからず』。

それを口にした者が生きた時代は遙か昔。だが未だその言葉が生き残り、多くの者が参考になっているということはそれだけこの言葉に真理が宿るということを意味している。

（理解の放棄するのは馬鹿のすることだ。海賊の相手をする以上、連中が何をするかについて理解の必要はある。……そこに共感を得ちまった結果、染まっちゃうような馬鹿もいるが）

たまに現れてしまうのだ。理解のみで留めることができず、染まってしまう者が。

（だがどうもそうは見えねエ）

あれは理解からくる言動ではない。いや、理解はしているのだろう。だがその角度が違う。外から理解するのではなく、内側から理解しているかのような。そんな思考の仕方に見えた。

「……どうも……どうも」

息を吐く。きな臭いことばかりであるのは日常だが、こういう鉄火場で不可解なものがあるのはやりにくい。

本来なら、上官である人物にその辺りの舵取りを投げたいところだが――

「グズグズしてんじやねエ！ さっさと動け！ 友軍の援軍だ！ 時間をかければおれたちの仲間が死んじまうぞ!?!」

離れた場所で声を張り上げる人物を一瞥し、また吐息。前半は本音だろうが、後半は

怪しい。今回の作戦に際し、随分と綺麗な青写真を描いているらしい。

正直、戦闘能力は持っている刀を除けば皆無も皆無なのだから、「エニエス・ロビー」で大人しくしておいて欲しいものだが、わざわざそれを進言するほどのこともないのでジャブラは黙っている。

「おい、お前らも行くだ」

そしてその人物——スパンダムがこちらへ視線を向けた。CP9の暗殺者三人が、自身の体に僅かに力を入れる。

空気が、変わる。

それに僅かでも気付けたのは、この場の者たちでも一部の者だけであつただろう。特別な何かをしたわけではない。だが、この一瞬で彼らは「切り替わった」。

世界政府の影なる刃。血を以て秩序を保つ存在に。

「——ターゲットは？」

内容も、動きも。既に列車内で確認済みだ。故にこれはただの儀式。

「変更なしだ」

やることは変わっていないという、そのための確認。

無数の金属音が響き、軍靴の音が響き渡る。

不要な声はなく、各指揮官たちの指示に応じる声だけが響くのみ。

任務は、既に戦闘中であるヴェルゴ中將の援護。

ターゲットは、〃神への大逆人〃二名。彼らを匿った〃フランキー一家〃なるアウトローたち。そして突如現れた、〃革命軍〃のNo. 2。

そこに付随するであろう、世界政府の敵全て。

「……やれやれ」

駅を出たジャブラの頬に、冷たい雫が触れる。

降り注ぐ雨の中。

遠くで、大きな爆発音が聞こえた。



その二人は、確かに強大な力を持っていた。

世界に名を轟かせる〃新時代の英雄〃が一角にして、〃神への大逆人〃となったモン

キー・D・ルフィ。

世界の秩序たる存在である世界政府を真っ向から否定し、打ち倒さんとする組織〃革

命軍”がN.O. 2、参謀総長サボ。

おそらく、一対一で万全の彼らと正面から戦える者はそれだけで名を上げることでも可能だろう。事実、この場において個人として対抗できるのはヴェルゴ中将のみしか海軍側にはいない。

だが、所詮は個人。そして何よりも状況がその強みを潰していた。

「ぐあッ!」

「タマゴ!? クソ、下がれ!」

「フランキーハウスに運び込むんだ!」

遠くからの銃撃。盾を持ち、フランキー一家特製の鎧を装備していても無敵というわけではない。いつかは限界が来る。

相手は海軍。無法者の相手を専門とする集団だ。こういう状況はある種得意でもある。

「ぐあッ!?!」

ザンバイがその右肩を撃ち抜かれ、悲鳴を上げる。声を張り上げながら周囲に指示を出し続ける彼は海軍の目から見てもリーダー格と写っていたのだ。故に優先して狙われた。

「ザンバイ！」

「くそ次々と……！」

彼らフランキー一家はガラクタを集めて即席の防壁を築いている。だがそんなものは気休めだ。それ以上の防壁を想定する海軍の前に、長く持ち堪えることができるものではない。

「……………ッ」

その防壁の奥で、ウタは両手を握り締めながらその状況を見つめていた。

サボの到着により、状況は僅かに押し返すことができている。突然の援軍による混乱と、その援軍の強力な戦闘能力に海軍にも動揺があるのだ。

だが、徐々にそれも落ち着きつつある。この場に現れたのが彼一人であり、そして以前状況が海軍側にとって圧倒的に有利であるという事実。破綻の時は近付いていた。

「籠城つてのは、援軍が来るって前提条件があつてのもんだ。それが無い籠城は必ず落ちる。ついでに言うなら、落ちるまでに時間がかかればかかるほど後が悲惨になるもんだ」

思い返すのは、「全ての海兵を育てた男」と呼ばれた人物による講義の内容だ。あの時はこちらが攻める側であることを前提として話を聞いていたし、実際に自身の縄張り籠城する海賊との戦いでその厄介さと結末についても経験した。

だが、まさか。自分がその籠城側になるとは想像もしていなかった。
 (……このままじゃ)

状況がどんどんまづい方向へ進んでいることをウタは理解している。だが、それを覆す手段を持っていないのもまた事実。

いや——あるにはあるのだ。

ウタの持つ悪魔の実の能力。“ウタウタ”の力によって、この場の全てを制圧する。それができるだけの力が彼女にはあるのだから。

だが、できない。

この戦場にその歌声が響くことはないということを、誰よりも彼女は知っていた。

心に体が。或いは体に心が追いつかない。胸の奥底、腹の奥底。自分自身の深いところから溢れ出す『何か』が、ずっとその身を縛り続けている。

「!!」

絶叫の如き咆哮が、戦場の中で響き渡る。

海軍が“パシフィスタ”——“平和主義者”と呼ぶその人間兵器を、モンキー・D・ル

ファイが完全に沈黙させていた。

その光景に、海兵たちの足が僅かに後退する。だが、ウタは。

「……………ルファイ……………」

その背中を前に、涙が溢れそうになるのを堪えることしかできない。

——どうして、私はあの人の隣にいないのだろう。

何故、こんなところで蹲っているのだろう。

弱いからだ。わかっている。どうしようもなく、ウタという存在が弱いからなのだ。

と。

だから戦えなくなった。だから歌えなくなった。だから“正義”を見失った。

今までの自分が何だったのか。

今までの自分はどやって立っていたのか。

そんなことさえも、わからなくなった。

強い風が吹く。身を裂くような強い風。その風が、一つの“想い”を導いた。

それは、とある少女の“憧憬”。

「……………あ……………」

まるで導かれるように、その帽子がウタの手元へと舞い降りる。

それは、どこにでもある海兵帽であり。

——しかし、一つしかないもの。

“どうするの？”

幼き声。それはあの悪夢で聞いた声。

きつとそれは幻聴であるのだと思う。だが、振り払うことができない。

「……どうしたら……」

いや、違う。

私は——今まで。

どうやって、生きていたのだらう？

どうしようもない袋小路。未だ“歌姫”はその歩みを止めたまま。

だが、世界は彼女を待つてはくれない。

「おい、海兵の奴らが」

不意にフランク一家の者たちが声を上げた。見れば、海兵たちが徐々に後方へと退避を始めている。

何故か、という疑問の回答はすぐにわかった。別の者が声を上げる。

「おい！ 海を見てみろ！」

反射的に海の方へと視線を向ける。空が黒くなり、海が荒れ始めていたのはわかってきた。この後に“アクア・ラグナ”という高潮が来るということも。

だが、そこに広がっていた光景はその想定を大きく上回る。海が、干上がっていた。

全ての海水が——まるで、根刮ぎ吸い上げられてしまったかのような。まるでそれは、この世の終わりであるかのように。

これから来る強大な“何か”の力を、無言で訴えているようだった。

「……こんなの見たことねエ……」

「何が来るんだ……?」

長くこのウォーターセブンで暮らすフランキー一家の者たちでさえ、言葉を失っている。

——異常な何かが、起こっている。

いや——起ころうとしているのか。

……ただ、一人。この状況に勝機を見出す者がいた。

「——チャンスだ」

全てを飲み込む大自然の脅威を前に。

状況が、更に変化する。

逃亡海兵Water Seven ☒ (NEW)

第二十五話 水の都の一番長い日⑫

その光景を勝機と呼んだのは、このウォーターセブンをよく知るこの男であった。

やはり一家を束ねる度量を持つということもあるのだろう。畳み掛けるような危機を前に、それでも彼は思考を止めなかった。

眼前には万全の準備を整えた海軍。対し、こちらは準備不足も甚だしいアウトロー集団。

背後は海。それも「アクア・ラグナ」が迫る、荒れ狂う海。

逃げ場はないと、誰もがそう言うだろう。だが、男には——フランキーには見えていた。

「おい！ おめエー！」

自身の子分たちへ、フランキーが声を張り上げる。

「アニキ！」

「指示を出す！ 急げ！」

同時、彼が示したのはフランキー一家の建物であった。指示、という言葉に困惑の表情を浮かべる一家の子分たち。

こんな状況で何を——その表情は確かにそう訴えていた。彼らにはこの状況で何ができるのかわからなかったのだ。

「ここを離れる！ おれたちには頼れる奴らがいるだろうが！」

「——！！」

フランキーのその言葉で、ようやく彼の意図に思い至つたらしい。わかりました、と彼らが勢いよく応じる。

その姿を見てよし、と頷くフランキー。そんな彼の下ヘルフィとサボが後退してきた。海兵たちが退いたことで彼らにも退がる余裕ができたのだ。

「何か策があるのか？」

問いかけたのはサボだ。その口調には僅かに焦りが滲んでいる。彼も知識としては「アクア・ラグナ」を知っているが、その規模についての実感はなかったのだろう。

街を飲み込むほどの高潮——その予兆が見せる光景は、正しく大自然の無慈悲さを示している。

「策ってほど上等なもんじゃねエ。だがこのままここにいても碌なことにはならねエだ

ろ」

それについてはルフイもサボも同意見であった。ここに留まることは「アクア・ラグナ」に飲み込まれるのと同義だ。何かしらの手を打たなければ。

「……………」

ルフイの視線が後方へ退いていく海兵たちに注がれる。彼らは海兵らしく統制の取れた動きで撤退をしており、後詰の海兵たちも万全の体制でその援護をする構えだ。

強引に突破するのは厳しい。ルフイだけ——いや、ウタを連れての二人だけならばどうにか突破だけはできるかもしれない。しかしフランキーたちを含めると流石に無理がくる。

そんなルフイの視線に気付いたのだろう。フランキーは無理だな、と言葉を紡いだ。

「相手は海軍だ。ここで正面突破を許すほど馬鹿じゃねエだろ」

「同意見だな」

フランキーの言葉にサボが頷く。だがそれをこの場の三人の中で誰よりもそれを把握しているのはルフイだ。海軍という組織の強さを彼はよく知っている。

「じゃあどうするんだ？」

「前が駄目だつてんなら、残ってるのは一つだけだろうよ」

自身の親指でフランキーハウスを示しながら、その男は言う。

「おれたちは『アウトロー』だ。知ってるかい、お兄ちゃんたち？」

雨が降り始め、状況も時を追う毎に悪化していく中で。

ウォーターセブンの『裏の顔』が、不敵に笑った。

「――外の道を往くからこそ、『アウトロー』だ」



前代未聞とも言える、現役の海軍本部大佐による天竜人暴行事件。その知らせを討伐部隊の副官たる彼は本部勤務中に聞かされた。

驚愕と困惑、そして動揺。自分以外の全てがそうであったし、それは当然のことでもある。

だって、誰もが知っていた。信じていた。己よりも年若いあの二人に憧れすら抱いていた。

そしてそれは、この場にいる彼もまた同じ。

『本気なのか』

討伐部隊が編成され、本部を出る時。同期の海兵から問われたことを思い出す。多くのものを堪えて、抱えて、絞り出したような問いかけだった。

——本気だ、と。

ただ一言、そう応じたのを覚えている。

“理由を聞こう”

討伐部隊の現場指揮官であり、一番の貧乏くじを引くことになった人物は最初にそう問いかけてきた。

それに対する答えは、とても明確。

——それが、“法”であるからです。

そしてその返しに対し、相手は一つ、頷いただけだった。

色々な理由があった。部隊に所属していた後輩であるだとか、他人に貧乏くじをわかっていて引かせるのかとか。損をするなら自分がするべきなのではないかとか、本当に色々なことを考えたのだ。

だが、原点に立ち返った時。自分自身の在り方を——海兵としての今までを考えた時。どうしてもこの事件に背を向けることができなかった。

秩序を保ち、か弱き市民を守る。それが海軍の役目。

だが、それを実現する根拠はどこにあるのか。何が“正義”で何が“悪”で何が“強

さ”で何が“弱さ”なのか。思い悩んだ過去において、己は“法”を全ての基盤とそう決めた。

理由があることもわかる。感情は納得する。だが、それは法に反することであるのだ。

そして今まで、感情よりも法を優先してきた。時に冷たいと言われることもあつても、それでもそれこそが公平であり平等であると信じて。

ならば、逃げてはならない。

彼の拳に賞賛の感情を持つていても。

彼女の歌声に感動を覚えていても。

それでも、彼らは“悪”であると世界の“法”は定義した。ならばそれを否定せず、“法”の下に“悪”を討つ。

それ以上のことは、必要ない。

そんな、風に。

——一体何度、言い聞かせなければならぬのだろう。

「後退は完了しました。アクア・ラグナ”が引き次第、次の攻勢に入れます」

こちらへと戻ってきたヴェルゴに対し、副官である海兵は敬礼と共にそう応じた。彼

の後方では部隊の海兵たちが次の作戦行動のための準備を進めている。

「ああ。少々想定外の事態こそあったが」

想定外とは「革命軍」のことである。「火拳」については介入の可能性を考えていたが、流石にそちらは想定していない。

いや、「革命軍」のリーダーとモンキー・D・ルフィの関係からいざれあることは想定していた。しかし、まさかこの場所でも直接的に関わってくるとは。

「『パシフィスタ』についても……」

「あれについてはまだ試作品だ。データさえ取れば上も納得するだろう」

言い淀んだ言葉に対し、ヴェルゴは特に気負った様子もなく応じる。海軍の新戦力となり得る力を誇る新兵器「パシフィスタ」。強力な力を持つそれはしかし、機能停止へと追い込まれてしまった。

まあ、これについては相手が悪いという問題がある。「海賊王」の時代に名を馳せた伝説を打ち破った「英雄」と「革命軍」のNo. 2だ。むしろ相對して一定の戦いができるだけで評価するべきですらある。

「
」
そこで、ヴェルゴが少し妙な動きを見せた。彼は脱ぎ捨てた「正義」のコートを退く際に拾ってきていたのだが、それを羽織ろうとして何故か途中で辞めたのだ。何かを考

え込むようにコートを見つめる瞳は、サングラスのせいで伺えない。

だが、わざわざ指摘することでもない。少し疑問を覚えつつも副官は視線を奥へと向ける。

「……向こうはあの奇妙な建物に逃げ込む算段のようですね」

「この都市に構えている以上、それなりの備えはあるのだろう。だが、こちらからすれば好都合だ」

周囲からはフランキーハウスと呼ばれるその家屋は非常に特殊というか、独特な形をしている。街一つ飲み込むほどと言われる高潮を相手にしても大丈夫なのかと不安にもなるが、このウォーターセブンに建っている建物だ。相応の対策はしているはず。

だが、それはこちらにも想定内だ。むしろ建物内に籠ってくれた方がやりやすい。

「波が引き次第攻勢に入る。準備を」

「はっ」

ヴェルゴの命令に応じた、その瞬間であった。

——空気が軋んだような、撓んだような。

腹の底に、重いものが落ちたような感覚。

何が起こったかなど明白だ。

人は想定外のものを目にした時、一度その動きを止めてしまう。

「誰もが、言葉を失っていた。」

海が干上がってしまったのではないかと思うほどの引き潮。想像はしていた。とてもない何かが来るのだろうか。

だが、これは。

こんなものは、あまりにも。

「……街を飲み込む……？」

嘘を吐け。

街どころか——小さな島なら、丸ごと飲み込めるじゃないか。

それは、大自然の脅威そのもの。

全てを飲み込む、破壊の調べ。

「——退避だ!!」

叫んだのはヴェルゴであった。その言葉に、海兵たちが一斉に動き出す。目の当たりにした「アクア・ラグナ」の脅威はあまりにも巨大過ぎた。この場所にまで届く可能性がある。

後方へと急ぎ退いていく海兵たち。だが、その足が止まる。

「……………なんだよ、あれ」

眩いたのは一人。だが誰もが同じ感想を抱いていた。

迫り来るは、巨大な高波。地平線の向こう。そこには全てを飲み込む大自然の猛威がある。

あんなものに飲み込まれては助かることは不可能だと、一目で理解させるだけの圧倒的な暴威。

しかしそこは歴戦の海兵たちだ。止まっていたのは数秒。即座に動きを取り戻す。だがその速さは先程よりも速くなっていた。実際の脅威を目の当たりにしたことも無関係ではないだろう。

「急げ！ 想定よりも大きいぞー！」

副官が声を張り上げ、退避を促す。

その最中、一人の海兵が叫んだ。

「おい見ろ!! 飛び出してきた!!」

「!?!」

副官が咄嗟に振り返る。そんな彼の視界に映ったのは、想定外の光景。

まるで、立ち向かうかのように。

——二頭の獣が、家屋を突き破って出現していた。



咆哮の如き声を上げ、フランキーハウスを突き破って現れたのは二頭のキングブル——ソドムとゴモラ。その二頭は迷いなく、巨大な高波の方向へ向かっていく。

——即ち、海へと。

「頼むぞソドム！ ゴモラア！」

「アニキを信じろオ！」

「おれたちは泣く子も黙るフランキー一家だ！ 高波如きに怯んでたまるかア！」

それはきつと、自分たちを鼓舞するための言葉なのだろう。……声が少し震えていた。

思えば、この二頭がザンバイたちフランキー一家と共に海王類から逃げていたのと遭遇したのが始まりだった。

「……………めんなさい」

ポツリと、思わずウタの口からそんな言葉が溢れる。

あの時、彼らを助けたことよって縁ができた。助けたというその行為が間違いであったとは思わない。それを否定することは、今までのウタが歩んできた道を否定するのと同じだ。

——だが、その後を間違えた。

彼らの優しさに甘えてしまったことが、間違いだったのだ。

立ち去るべきだった。背を向けるべきだった。

そうしなかった結果、巻き込んでしまったのだから。

「ウタ?」

隣にいるルフィが気遣うようにこちらの名を呼ぶ。普段の彼女ならば気にしないで、と応じるところだが、咄嗟にその言葉が出なかった。

そもそも、だ。こうなってしまったことの始まりが、自身の存在がルフィを巻き込んだことから始まっている。あの日、「天竜人」に見つかつた。それが始まりなのだ。

……いや、わかっている。ウタ自身は悪くはない。倫理としてそうであることはわかっているのだ。

だが、「法」は許さない。そして何より、彼女自身が受け入れられていない。

全てが自分のせいなのだ、彼女は己を責め続けている。

「おい、ウタ——」

「——謝ることじゃねエ」

言葉を紡ごうとしたルフィを遮ったのはフランキーだった。彼は自身の子分たちがソドムとゴモラに指示を出しているのを横目に、ルフィとウタの前に立つ。

「そもそも、何を謝るってんだ？」

「何を、つて」

「ウチの子分共を助けたことか？ その後に仲良く飯食って過ぎしたことか？ それとも何か？ “天竜人”なんて馬鹿をぶん殴ったことか？」

腕を組み、言葉続けるフランキーの表情には僅かに呆れも混じっていた。思わず口を噤んでしまうウタに対し、彼は言葉続ける。

「おれにしてみりや何も間違っちゃいねエと思うがな。一つ目には感謝してるし、だから二つ目があったんだ。三つ目に関しちやそもそもおれたちに関係ねエだろうよ」

「でも……でも、そのせいで」

「生きてりやそういうこともあんだろ」

馬鹿馬鹿しい、と肩を竦めるフランキー。そのまま背を向けると、言い残すように言葉を紡いだ。

「だが、まア……そうだな。悪いと思ってるなら——」

ソドムとゴモラが海へと飛び出した。そのまま、その向きを大きく変更する。

真横へと折れ曲がるようにして軌道を変えた二頭により、それに引かれる形のウタたちには強烈な慣性が働く。思わずよろけてしまったウタを、ルフィがしっかりと支えた。

「——ここを切り抜けようぜ。それでチャラだ」

お互いに、と言い残すフランキー。そのまま彼は声を張り上げ、子分たちへと指示を出す。

「大丈夫だ、ウタ。……ウタは何も悪くねエ」

自身の麦わら帽子をウタに被せながら、ルフィは言う。その言葉が嬉しいと思うと同時に、胸が締め付けられるような痛みを感じた。

優しさが辛いと思ってしまうのは、己が弱いからなのだろうか。

けれど、どうしたらいいのか。どうすべきなのだろうか。

私は、どうやって——

誰もが迫り来る高波を見つめ、走り回る中。

——彼女だけが、未だ迷いの中にいる。



このウォーターセブンの住民であるフランキー一家は「アクア・ラグナ」の脅威を文字通り経験として知っている。故に立ち向かうことなど無謀だと知っているし、そんなことをするつもりはなかった。

「急げ！ 時間がねエ！」

「「アクア・ラグナ」が追いついてきたら終わりだ！」

その声はまるで祈りのようであった。込められた必死の感情がそう思わせてくる。

だが、それも致し方ないだろう。相手は街を飲み込む大災害だ。それを前にして必死にならず、どうするといふのか。

「立ち向かう必要はねエ！ 流れを利用して逃れろ！」

フランキーの檄が飛び、応じるようにソドムとゴモラが進路を変える。彼らがとった進路は「アクア・ラグナ」を横切る形だ。

「踏ん張れソドム！ ゴモラア！」

「オメエらだけが頼りだ！」

「頑張るわいな！」

声を張り上げるフランキー一家の者たち。その中であつて、冷静に状況を見つめてい

るのは数名だ。

(間に合うか?……いや、こいつア……)

一人はフランキー。一家を預かる棟梁の立場故に、彼は心は熱くありながらも頭脳は冷静だ。そしてその冷静な頭脳が、現状の不味さを伝えてきている。

(元々分の悪い賭けだったが……ヤベエな。——間に合わねエ)

現状の「アクア・ラグナ」と二頭の数。それを考えた時、どうしても最後の一步が足りない。その光景が見えている。

即ち——海の藻屑になる未来が。

(何か手はあるか?)

そして、フランキーは状況の打破のために思考を巡らせる。手段、状況、ありとあらゆるものを思案する。

だが、浮かばない。

大自然の猛威に対し、人が持つ力などちっぽけだ。

「チツ——」

だが、諦めてなるものか。そう思い、小さな舌打ちを溢した時だった。

「——間に合わねエな」

こちらに並び立つ位置に来た男——サボが冷静にそう口にした。フランキーがジロ

りとそちらへ視線を向けると、自身の帽子を被り直しながらサボは言う。

「そう睨むな。……むしろ好都合だ」

「あア？ どういうことだ」

「こういうことだ。——ルファイ！」

サボが声を張り上げる。皆がその声に反応して彼らの方を振り返ると、呼ばれた本人であるルファイもまた頷いた。

小さく口元に笑みを浮かべるサボ。彼はそのまま、ゆつくりと前方へと歩いていく。

「いけるな、ルファイ？」

「当たり前だろ」

応じる声に迷いはない。何をする気だ、というフランキーの呼びかけは波の音に掻き消された。

こちらへと迫り来る「アクア・ラグナ」。あまりにも巨大な波故に、文字通り飲み込まんと襲い来るそれに、フランキー一家の者たちが悲鳴を上げる。

そして一瞬。ほんの一瞬、ソドムとゴモラの足が止まった。彼らもまた、迫り来る「アクア・ラグナ」の脅威に恐怖したのだろう。

「大丈夫だ」

だが、それを一瞬だけのこととした者が二人いた。宙へと躍り出た、二人の男だ。

「真つ直ぐ進め。道はある」

安心させるようなサボの言葉。応じる咆哮と共に、二頭が前進する。

波が倒れ、彼らを押し潰さんと「アクア・ラグナ」が襲い来る。誰もがその時確信した。未来を——「終わり」の瞬間を。

「おれが先行する！」

「おう！ 任せた！」

だが、その兄弟は微塵もそんな未来を見ていない。

彼らが見つめる未来は、そんなものではなく。

「『竜の鉤爪』!!」

凄まじい衝撃音が響き渡った。「アクア・ラグナ」へ渾身の一撃が叩き込まれたのだ。

そして見えるのは、声を上げることさえも忘れるような光景。

「『ギア4』!!」

その一撃を追うように、「英雄」がその異形の姿にて拳を構える。

「『JET巨人の——』」

いつの間にか、フランキー一家の者たちの不安が消えていた。

視線の先に踊る、「正義」の一字。普段の彼らにとっては鬱陶しい文字でもあるは

ずのそれが、どうしようもなく心強く。

そこにあることの安心と。

そこにあるが故の安堵を。

確かに、齎してくれていた。

「——攻城砲!!」

その日の光景を、きつと生涯忘れないだろうとこの場に居合わせた者は語る。

襲い来る絶対的な「死」の光景。それを打ち破り、道なき道を創り出した「正義」の姿を。

これが、「新時代の英雄」。

この「大海賊時代」を終わらせると謳われた男であるのだと。

正しく、そうであったのだと。

そう思わせるだけの背中が。

そこには確かに、存在していた。



飲み込まれたと、その場に言われた海兵たちは誰もがそう確信した。 “アクア・ラグナ”——あれほどの規模の高波に飲み込まれて、無事であるはずがない。

終わった、と。そんなことを誰かが呟いた。

それは任務の終わりという意味か。それとももつと別の——海に消えた存在が持っていたモノが潰えたという意味か。

だが、現実として彼らは “アクア・ラグナ” の中へと消えていった。その現実を目の当たりにし、海兵たちの間に緩んだ空気が漂う。

……致し方ないだろう。覚悟は決めていた。しかしそれは逆に言えば覚悟を決めねばならないほどのことであったということでもある。場合によっては自分自身の手でその命を断つ可能性さえ考慮していたのだ。それが終わったと思えば、張り詰めたものが緩むのも仕方がない。

ただ、こんな結末でいいのかという思いはあった。あの “英雄” たちの最後がこんなものでいいのかと。

いや、だが。

これでよかつたのかもしれない。きつと、これで——

そんな中、一人の女海兵がいきなり走り出した。数名がその姿を見咎めるが、彼女が自分たちの部隊の人間ではないことに気付き、制止をせずに見送る形になる。所属も違えば役目も違うのだ。止める理由はないし、止める権限もない。

故に海兵たちは彼女——イスカから意識を外した。その視線は再び海へと向けられる。

「……………」
しかし、一人だけ意識を離さぬ男がいた。彼はサングラスを掛け直しながら思案の表情を浮かべる。

そして。

「……………しまった」

海に向こう、波の狭間。荒れ狂う海の中にそれを見た。

二頭の巨獣が引く一隻の船。そこに乗っているのは——

戦いは、未だ終わらず。

状況は、更なる領域へ。

逃亡海兵Water Seven☒ (NEW)

第二十六話 水の都の一番長い日⑬

「まだだ」

弛緩した空気。海兵たちの間に流れたそれを切り裂くような言葉。発したのはヴェルゴだ。彼は近くにいる副官に対し、言葉を紡ぐ。

「装備の確認を急げ。私は先行する」

「中将殿……?」

「見えなかったか?」

疑問を浮かべる副官に対し、ヴェルゴは言う。

「“キングブル”だったか? 波の向こうにその姿が見えた。彼らはあの波を超え、こ

の場からの離脱を図っている。避けたのか——いや、違うな。文字通り押し通ったか」

その言葉の意味は副官も察したようだ。まさか、と声を上げる。

「あの高波ですよ? あんなものを突破できるなんて」

「では聞くが」

掌を何度か開いては閉じることを繰り返して、得物である竹竿の状況を確認しながらヴェルゴは問う。

「——彼らが『あの程度』で死ぬと思うのかね？」

その問いに対し、否と——『新時代の英雄』と呼ばれた二人はここで潰えたのだと答えることのできた者はいなかった。

それは、ある種の信頼。或いは信仰と呼ばれるもの。

行く先々で奇跡と呼ぶに相応しい偉業を成し遂げ続けてきたあの二人が、こんな形で本当に終わるわけがないと。

そう信じてしまうだけのものを、持っていたのだから。

「了解しました」

そして再び、副官の瞳に覚悟が宿る。終わっていない。そして終わっていないのであれば、やるべきことがあるのだとその瞳が告げていた。

「私は先行し、足止めを行う。——任せた」

そして、返事を聞かぬままにヴェルゴは地面を蹴った。海軍本部中將の脚力であれば、その脚力で常人とは比べ物にならない距離を稼げる。

飛び上がり、建物の屋上に上がるヴェルゴ。その視界にとあるものが映る。

「……………」

このウオーターセブンの中心。そこから立ち上る一筋の煙。

——始まったか、とヴェルゴは呟いた。ああなることは既定路線だ。

(私は私の役目を果たさねばな)

それは、海軍本部中将としてか。

或いは、もつと別の何かか。

その答えを知るのは彼自身のみである。

(……さて、手並みの拝見といこう)

周囲へ視線を送りつつ、ヴェルゴはポケットから小型電伝虫を取り出した。この状況

でかける相手は一人だけだ。

「こちら海軍本部中将、ヴェルゴだ。伝えたいことがある」

『んん？ おいおいどうした中将殿？』

相手の口調は不遜。だが、ヴェルゴはこれを不愉快だとは感じない。

そんなことを感じるほど、相手に思い入れはない。故に簡潔な言葉を紡いだ。

「——目標が動いた」



海を疾走するソドムとゴモラ、二頭の「キングブル」。その二頭に引かれた船の上でサボはフランキー一家に指示を出していた。

「大回りしてもう一度中に入るぞ。海の上においても沈むだけだ」

「お、おうー」

普段の彼らなら突然現れたサボの言葉に素直に従うことはないだろう。だが、「アクア・ラグナ」の高波に文字通り風穴を開けた彼に対し、逆らうことはない。

それを確認し、サボは一度後ろを振り返った。そこには彼の大切な家族がいる。

「ルフィ」

「……大丈夫だ」

座り込んだルフィと、その手当てをするウタだ。かつてのコルボ山ではよく見た光景であるのだが、あの頃とは空気が違う。二人の纏う雰囲気がいまにも重い。

致し方ないことだとサボは思う。自分たちが信じ、所属していた組織が敵になって。

頼れる相手などいなくて。

よく折れなかった——いや、折れないでいてくれた。本当に、心からそう思う。

「……大丈夫だ」

己に言い聞かせるように、小さくサボは呟く。

それは彼が立てた新たな誓い。置き去りにした過去を取り戻した男が己に課した、たった一つの譲れないもの。

「島の中に戻るつてのは賛成だ。この海の中に居続けるのは自殺行為だしな」

そんなサボに対し、フランキーが声をかけてきた。彼の子分へサボが指示を出していることに何も言わないところからも、フランキー自身もまたサボのことを認めているのだとわかる。

「だが中には大勢海兵がいる。結局状況は変わらねエぞ」

「わかっている。……何も策がねエってわけじゃねエ。おれたちはそもそも追われる身だ。こういう状況での対応策はいくつかある」

肩を竦めるサボ。彼の所属する「革命軍」は世界政府に真っ向から抗う組織だ。その立场上、荒事は日常茶飯事である。

「今回は潜水艦を用意してる。……流石にこの人数は想定外だったが、まあなんとかするだろ」

「『革命軍』はそんなもんまで持ってるのか」

「遊びじゃねエからな」

言い切るサボ。そこへ、フランキー一家の者たちから声が上がった。

「もうすぐ岸に着く！　だが水路しか行けねエぞ！」

「十分だ！　中に入ったら合図を探してくれ！　どこかでおれの仲間達が上げてるはずだ！」

「わかった！」

応じる声が上がリ、ソドムとゴモラが進路を変える。『アクア・ラグナ』の影響を受け、ウォーターセブン内の水路も随分と荒れていた。だが二頭ならば問題ない。

「……………」

そうして声を上げるサボを、ジツと見つめるフランキー。そんな彼に対し、サボは応じるように正面に立った。

「わかってる。おれたちと逃げるってことはこの島から出るってことだ。そう簡単に受け入れられねエだろうが、あんたたちの身を守るには現状それしかねエ」

「そりゃわかるさ。理解はする。……納得は別ってだけの話だ」

ふう、と一度息を吐くフランキー。彼は考え込むように腕を組み、言葉を紡いだ。

「おれも一家の棟梁だ。何をすべきかはわかってる。……あいつらを守ってやんのが、おれの役目だ」

「すまねエ」

「謝ることじゃねエ。……さつきあのお姉ちゃんにも言ったが、誰かが悪いって話でもねエだろうよ」

肩を竦めるフランキー。そして一つの間を置き、フランキーが何かを言おうとした瞬間だった。

「——アニキ！ あれを見てくれ！」

動揺の混じった声であった。どうした、とそちらへ視線を向けるフランキー。その表情が僅かに歪む。サボもまた同様だった。

「おい、サボって言ったなお兄ちゃん」

「ああ」

「まさかと思うが狼煙つてのはあれのことか？」

視線の先。水路から見えるのは、街の中心。

そこにあるのはこのウオーターセブンの象徴。気高き職人たちの集う場所。空を染め上げようとでもいうかのように。

巨大な炎が、立ち上がっている。

「おれたちじゃねエ」

険しい表情のまま、サボが言う。

「だが、こいつは……」

言葉を探すサボ。だが上手い言葉が見つからず、彼はそれ以上の言葉を紡がなかった。

叩きつけてくるような状況の変化。誰もが目の前のことを受け入れるだけで精一杯で、その先へ思考を向けることができなかつた。

「あれって、オリンがいた場所だよね……?」

眩いたのはウタだ。その隣に立つルフィも拳を握る。

シャオとビリーと再会し、そして二人の副官であるオリンとも再会した場所。それがどうしてこんなことに。

一体このウォーターセブンで、何が起こっている——?」

「……嫌な胸騒ぎがする」

ポツリとフランキーが眩く。だが彼は一度息を吐くと、彼はサボへと問いかける。

「あんまりグズグズはしてられねエぞ。合図つてのはどれだ?」

「わかつてる。だが——」

——乾いた音と共に、何かが空へと打ち上げられた。

それは空で弾け、一筋の閃光を周囲へと撒き散らす。

「照明弾?」

眩いたのはフランキー一家の誰かだ。別に珍しいものではない。何故こんな街中ではと思うが、それも事情があればあり得ることだ。

故に問題は、その事情が誰のものであるかということ。

打ち上げられた場所は、彼らのいる場所から一番ドックの方角のすぐ近く。街並みの隙間からだ。

「そうか、合図ってアレのことか!」

「よしじゃああつちへ行けばいいんだな!」

「行けソドム! ゴモラア!」

惚けたのは数秒。フランキー一家の者たちが声を上げ、応じるように二頭もまた声を上げる。

だが、彼らが動き出す前にサボがそれを制止した。

「違う! 逆だ! アレはおれたちじゃねエ!」

「えっ、は……?」

「急いでここを離れろ!」

声を張り上げるサボ。フランキー一家の者たちが慌ててソドムとゴモラへ指示を出

す。方向を変え、別のルートへと。

ウオーターセブンは水の都だ。大小様々な水路があり、それが道となっている。普段ならば不便を感じることはないそれであるが、今回は事情が特殊だ。

「ダメだサボさん！ 真つ直ぐ進むか戻るしかねエ！ しばらくはこいつらが進める幅の水路がねエんだ！」

彼らがいる場所は建物が密集し、水路もそこまで広くないエリアであった。普段の生活でウオーターセブンの住民たちが利用する「ヤガラブル」なら問題ない広さの水路も、「キングブル」二頭となれば進めない場合も多い。

「……戻るべきか？」

「馬鹿言え。この状況で海に出たら海の藻屑になるのは時間の問題だ。……進むしかねエよ」

サボの問いに対し、フランキーが応じる。彼のいう通りだ。戻った先には未だヴェルゴたちがいるだろうし、何より戻るということは海に出るということ。一度は越えたいはいえ、「アクア・ラグナ」に何度も挑むのは自殺行為だ。

フランキーが視線を前に向けた。煙を上げる、一番ドックの方角を彼は見つめる。

「行くしかねエな」

ウオーターセブンの水路は複雑に形成されているようでいて、実はその根本的な部分

はシンプルだ。街の中心にある巨大な噴水から出た水がこの島の水路を形成しているという性質上、全ての水路が最終的に中心部へ向かうようになってい

街の中心を目指すいくつもの巨大な水路と、それらを繋ぐようにして張り巡らされた大小様々な無数の水路。それこそがウォーターセブンの仕組み。

故に巨大な水路を進むということは、必然街の中心部へ向かうことになる。

「中心部には行きたくねエが……回り込むのは？」

「できるがもう少し先だな。……そこまで連中が待つてくれるかだが」

サボの問いに対し、フランキーが応じる。そして彼の懸念はおそらく当たりだ。

フランキー一家の下へ訪れた海兵は、どこから来たのか？

このウォーターセブンにいる海兵は、アレが全てか？

その答えが、目の前に広がっている。

「いたぞ!!」

張り上げられた声は、一人の海兵のもの。

眼前、こちらの進行方向に見慣れた制服を纏う無数の人影。

何十——否、何百。或いは千に届くだろうか。打ち上げられた照明弾は、こちらの位置を知らせるためのものだったのだろう。おそらくは諜報機関。いずれかのCPによるものだろうか。

まるで自ら海兵たちへと突撃するような状況。だが、こうするしかない。まだ、何も終わってはいない。

逃げるにしても、戦うにしても。

まだ——始まったばかりだ。



報告を受け、男は上機嫌に鼻歌を鳴らしていた。現状、全てが想定内だ。

「いやア最高だ！ 何もかもが想定内、作戦通り！」

笑い声と共にそう口にするのは、今回の作戦における最高責任者——CP9長官スパンダムだ。周囲の海兵や役人、諜報員たちが慌ただしく動いている中で彼は酷く上機嫌である。

それもそのはず。現在の状況はここに来るまでに想定されていた通りに推移しているのだ。今回の作戦における最高責任者である彼にしてみれば笑いが止まらないだろう。

「色々と配慮も行き届いている。いやア、大した男だ」

「……行き届き過ぎてて気味が悪いが」

近くに立っていたジャブラが小声で呟くが、それが男——スパンダムの耳に入ることはない。

このウォーターセブンでは今現在、いくつもの思惑が同時に動いている。それを全て完遂するために彼らはいくつかの策を立てた。

まず、ヴェルゴ中将率いる追撃部隊は「麦わら」と「歌姫」の確保に動く。これは彼らの役目を考えても妥当な動きだ。だが同時に、そのことをごく一部の人間以外には知らせないようにした。事情を知らない海兵たちはヴェルゴたちが「火拳」の搜索のために動いたと考えただろう。

件の二人のところに着いたとして、当然戦闘になるだろう。そこで捕らえられれば良し。状況が不利になろうともこのウォーターセブンには対「火拳」を想定した戦力が集まっている。その増援も合わせれば、まず確保は可能だろう。

問題は逃走を許した場合だ。相手も馬鹿ではない。正面からの戦いが不利なのはわかっているだろう。故にその場合の対応策も用意していた。

(CPの諜報員で監視網を、か)

暗殺専門のCP9とは別に存在する——というよりは表向きの諜報機関であるCP

の諜報員たちを先んじて町中に配置したのだ。『エニエス・ロビー』から送られて来た者もそうだし、そもそも既にこの島に入り込んでいる諜報員たちもいる。彼らを配置し、島中を見張らせた。

一流の諜報員たちだ。島の住民に溶け込む彼らを看破するのは難しい。何よりそんなことをする余裕もないだろう。

そして、今。

「——長官殿！ 照明弾です！」

「ああ、見えてる」

空に打ち上がった照明弾。それを見た海兵の言葉に、スパンダムは笑みと共に頷く。

「あれが上がったってことは……わかるな？」

「はっ！ 既に各所に連絡を飛ばしております！——『火拳』が現れたと！」

海兵が発したその言葉に、スパンダムの笑みが深くなった。そんな姿を見据えるジャブラの脳裏に浮かぶのは、ヴェルゴの台詞だ。

『標的がああ二人であることはギリギリまで隠した方がいい』

どこまでも合理的に、冷徹に。

あの海兵は、そう告げた。

『考える時間を持たせてしまえば躊躇が生まれる。故にそんな時間を与えず、今日の

前に捕らえるべき罪人がいるという状況に持ち込むべきだ。彼らも海兵だ。そうなれば動くしかない”

要は無理矢理に退けない状況を作るということだ。そうすることで押し潰すように数の暴力を叩きつけるのだという。

悪辣とはいうべきではないのだろう。相手は犯罪者だ。そんなことを考える必要はない。

だからそれはいい。問題は――

「行くぞお前らー!」

スパンダムが声を張り上げる。それを受け、三人のCP9もまた動き出す。

彼らだけではない。このウォーターセブンで住民たちを守るために「エニエス・ロビー」から派遣されてきた海兵たちが、あの照明弾の場所へ集って来るのだ。

「……ふん」

ため息のような吐息と共に、ジャブラは雨に濡れた顔を拭う。そうして一瞬閉じた目を開けると、そこに映るのは荒れ狂う空と海。

――そして、島の中心から上がる煙。

地獄でも顕現したのかというこの光景。それを引き越したのが誰であるのかを、彼は知っている。描かれたシナリオについても。

それについて特別な感情を持つことはない。彼は己の任務を果たすだけだ。これまでも、これからも。

ただ、それだけだ。



最初に伝えられた内容は実にシンプルなものであった。

“エニエス・ロビー”から派遣された海兵たちはウォーターセブンを襲う“アクア・ラグナ”から避難する大勢の市民を補助しつつ、目標の搜索を行なっていた。その目標とは彼の“火拳のエース”。目的は不明だが一番ドック前で騒動を起こし、更にウォーターセブン市長の暗殺未遂を引き起こしたと目される海賊だ。

あの大海賊“白ひげ”の二番隊長。その名に畏れがないといえば嘘になる。だが、自分たちと志を同じくする一人の女海兵が文字通りその身を張って市長を守ったという事実がその畏れを飲み込ませた。

故に士気は決して低くはなかった。海賊という明確な“悪”を相手にするというの

だから尚更だ。

そして、そこへその一報が入る。

——曰く、目標をヴェルゴ中將率いる部隊が発見した。

——曰く、目標との戦闘が開始された。

端的ではあるが、要点は押さえている。故に島中に散っていた他の海兵たちは指揮官の指示の下伝えられた場所へ向かうことになった。

海軍本部の中將ともなれば個人としての戦闘能力も凄まじい。それもヴェルゴ中將といえは“新世界”の基地長だ。あの過酷な海で海兵として戦う彼の力を疑う者はいない。

だが、今回は相手が悪い。かつて“七武海”の一角をも落としてみせた怪物だ。故に海兵たちは迅速に伝えられた場所へ馳せ参じようと歩を進めた。

だが、その過程で別の連絡が入る。

——目標が逃走した。

——協力者と共に二頭の“キングブル”を用いて島内へ侵入。

こちらが第一報。故に各部隊は一度足を止め、目標の位置の知らせを待つ。闇雲に動いてもこの島は広く、無駄足になりかねない。それに、だ。

こういう時の策も、正しく用意はされている。

一筋の照明弾が打ち上がる。

それを受け、海兵たちは己の向かうべき場所を理解した。

司法の島たる「エニエス・ロビー」からここへ来ているのは海兵たちだけではない。政府の役人や諜報員たちも共に来ているし、元よりこの島に潜入しているCPの者たちもいる。その者たちにより、島中に即席の監視網を構築したのだ。

こちら側が持つ最大の優位たる「数」を最大限利用する手段。個人個人では目標には勝てないだろうが、位置を知らせるだけならば個人でも可能だ。

この策を提案したのはヴェルゴ中将だというのが……まあ、それはいいだろう。

問題は、打ち上げられた照明弾の位置が「彼」の率いる部隊の近くであったこと。

俗に「船斬り」。その卓越した剣技により、船すらも斬り裂く使い手。

——海軍本部大佐、Tボーン。

「大佐殿！ 入電です！ この水路を駆け上がってくるとのことですよ！」

部下から伝えられるその言葉を聞き、来たか、とTボーンは呟いた。

知らず、剣の柄を握る手に力が籠る。相手は「四皇」の幹部だ。どうしてもその強大な存在を意識すると力が入る。

だが、それ以上に己を奮い立たせるものがある。

——か弱き市民を守る。

日々を生きる市民の生活を、笑顔を、日常を守るためにTボーンは海兵になった。故に相手がどれほど強大であろうと彼が退くことはない。

「下がっている」

剣を抜き、Tボーンは部下たちを下がらせた。一度目を閉じ、意識を集中させる。

吹き付ける風と雨。荒れ狂う世界の中、その意識がその瞬間を捉えた。

「——曲がった太刀筋大嫌い」

ゴクリ、と周囲の海兵が息を呑んだのがわかった。Tボーンが何をしようとしているかを彼は知っている。だが、同時にそれに確信が持てなかつたのだ。

本当に可能なのか、と。

そしてその若き海兵は、その光景を見ることになる。

「直角飛鳥、ボーン——『大鳥』!!」

空を飛ぶ斬撃。まるで巨大な鳥のような姿をしたその斬撃が、雨と風を切り裂きながら直進する。

凄まじい速度。そしてその進む先にあるは、一つの橋。

水路を跨ぐ形の巨大な橋だ。普段であれば何百という人間が同時に渡れるのである。その橋はその用途故に殊更頑丈に作られている。

それを造るためにどれだけの努力と時間が必要であつただろうか。それを完全に推し量ることはできない。故にTボーンは小さく呟いた。

「すまない」

橋が——落ちる。

食い破るように、斬り裂くように。

瓦礫と化した橋が落下し、水路を塞いだ。

「行くぞ!!」

声と共に、最初に踏み出したのはTボーン。その背に踊る“正義”の文字に続くように、海兵たちもまた前に出る。

——二筋の照明弾が、空を彩る。

その合図の意味は一つ。

ここが——決戦の場だ。



状況が悪い。サボの経験と本能が警鐘を鳴らし続けている。

(最初の計画はもう完全に吹き飛んだな)

元々、こうなることは想定していなかった。海軍が来る前にルフィとウタの二人と会い、可能な限り秘密裏にこの島を脱出するつもりだったのだ。エースについてもどうか連絡を取り、共同戦線を張ればと思っていたのである。

だが、最早穩便に済む状況ではない。最悪の場合、二人だけでも——そんな風にサボが考え始めた時であった。

「——考える時間もくれねエか」

この暴風と雨の中でも響き渡る轟音と、続いて打ち上げられた二つの照明弾。それを見咎めたフランキー一家の者たちが声を上げる。

「なんだ今の音!？」

「どっかの家でも崩れたか!？」

「それよりあの照明弾は!?! これから向かう方向だぞ!?!」

ただでさえ尋常ならざる状況だ。彼らの動揺も致し方ないだろう。それを抑えようとフランキーが何かを言おうとした瞬間、前方でソドムとゴモラに指示を出していたザ

ンバイが声を上げる。

「ヤベエ!! 道が塞がってる!!」

その言葉に、全員が前方へ視線を向けた。そこには確かに、ザンバイの言う通りの光景が広がっている。

自分たちの進む先を塞ぐ瓦礫の山。このままでは時を置かずに激突する。

「橋を落としたか」

冷静に呟いたのはサボだ。その隣では、フランキーが小さく舌打ちを溢す。

「人の街で好き勝手しやがる。海軍つてのは随分乱暴だな」

お前が言うのか、というツツコミを入れてくれる人間は残念ながらない。

「まアそうくるってんなら仕方ねエ。ぶち抜いて強引に——」

「ちよつと待つてくさいアニキ! ありや 船斬り」だ!

ああ、と子分の声に対してフランキーが眉を顰める。自分が声を張り上げた。

「船をステーキみてエにぶつた斬つちまう化け物です! あんな奴がなんで!」

海軍本部大佐、Tポーン。 船斬りの異名を持つ彼はその卓越した剣技で成し遂げ

た結果としてその名前を得た。それは決して虚飾ではない。

そして、そのTポーンが剣を構えた。それに反応できたのは一人だ。

(間に合うか!?)

この状況、サボがああ海兵の立場であるならば狙うべきものは決まっている。即ち——移動手段。

右か、左か。距離と時間が足りない。どちらかを選ぶしかない。

「——ッ！」

そして彼は、選択を間違えた。

サボが選んだのは右側。理由は明確で、Tポーンから見た時僅かにこちらの方が距離が近いからだ。故に割って入る位置へと躍り出たのだ。

だが、相手の選択は違った。

これを読んでいたのか、それとも別の理由か。もう一方へと刃を向けたのである。

——飛ぶ斬撃。

船すらも斬り捨ててる一撃だ。“キングブル”は巨大な生物であり、相応の耐久性も持っている。だが、海王類さえも仕留められるであろうあの一撃を耐えられる道理はない。

しまった、という声を出す暇もない。吸い込まれるようにその斬撃は——

「——！！」

それは叫びであつたのか。或いは咆哮か。

身を震わせるような“力”の込められた咆哮と共に、“正義”の文字を背負つた麦わら帽子が舞い降りる。

硝子が碎けたような音を響かせ、ゆつくりとその青年は舞い降りた。その気配にけおされたのか、ソドムとゴモラもその場に停止する。どの道瓦礫で進めないのだから仕方ないのかもしれないが。

「すまねエ、助かつた。……ルフィ?」

サボが声をかけるが、ルフィは眼前——少し離れた位置に立つ海兵を見据えて微動だにしない。

どれぐらいの沈黙が流れたのか。ルフィは、ただ一言だけを口にした。

「——どいてくれ」